現代日本文學全集
X

杉浦非水装幀

二葉亭四迷集
嵯峨の屋御室集

改造社版

Мартъ — März

28 / 10 **Суббота** **Sonnaben**

Страстной седмицы. Преп. Иларіона и Стефана Преп. Евстраті Печерскаго (*день постный*).

День неприсутств. — Слѣд. неприсутств. дни 30—31 Марта.

倫敦出發

船の何處やらに故障出來その修覆に時間かゝりしとて出帆は大に遅れたり 船の動き出しゝは午後七時四十分頃なりしならん

晝より末永氏來り勘定書を渡さる

現金にて[illegible]の受取り[illegible]

20 pounds pound

外に小切手にて四[illegible]餘

履歴書

東京市本郷區駒込西片町十番地士族

正七位 長谷川辰之助

文久二年十月生

十四年 月廿三日 舊東京外國語學校露語學部ヘ入學ス

備考 同部高級ノ課程ハ文學殊ニ露國文學史ノ講究ヲ宗旨トセリ

十八年九月廿三日 旧東京商業學校露語學第五年生ニ編入

備考 旧東京外國語學校ノ旧東京商業學校ニ合併セシ際ノ事ニ係ル

二葉亭四迷（右上）と嵯峨の屋御室（左下）

上左には二葉亭の絶筆。露都に病を得て歸朝の途次にものせし日記の一部、嵯峨の屋氏の祕藏にかかる未發表の珍籍。右下は履歴書

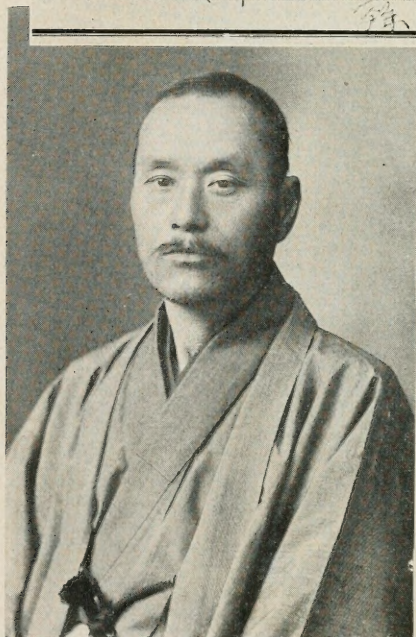
「二葉亭四迷集」目次

卷頭寫眞（照影 筆蹟）

二葉亭を憶ふ……四

創作

浮雲……五
平凡……九一

飜譯

肖像畫……一五〇
うき草……一八四
夢かたり……二六八
親心……二八〇
くされ緣……二九七
酒袋……三二六
四人共產團……三五三
猶太人の浮世……三七九
狂人日記……四〇三
志士の末期……四一六
椋のミハイロ……四二四
おひたち……四二八

雜纂

ひとりごと……四三四
某政治家の「かぐや姬」評……四三七
小按摩……四四一
入露記……四四四
露都雜記……四四八
老の繰言……四五〇
日記斷片……四五三
そゞろ言……四五五

談話

雜談……四五七
余が飜譯の標準……四六〇
エスペラントの話……四六三
小說の題のつけ方……四六五
余が言文一致の由來……四六七
私は懷疑派だ……四六八
予が半生の懺悔……四七一

俳諧

俳諧日錄……四七八

年譜……四九二

「嵯峨の屋御室集目次

巻頭寫眞（照影）
序詞（筆蹟）……四九六
野末の菊……四九七
くされたまご……五二六
婿えらび……五三三
初戀……五四二
年譜……五五五

二葉亭四迷集

二葉亭を懐ふ

（序に代ふ）

二葉亭の訃が傳はつた時、知るも知らざるも巨木倒るゝの感に打たれざるは無かつた。其の巨木が梅や櫻の如き花木であるか、或は松や柏の如き常磐木であるかを知らないものでも、ハンゼイやカアネエションのやうな小さな土器鉢の草花だと思ふものは無かつた。當時はマダ勞農の赤ッ氣のホンノリともしない太平無事な露西亞であつたが、それでも一小說家が露西亞へ行くといふは瓢簞を擔いで花見に出掛ける風流人が寒中山登りでもするやうに危ぶんだらしかつた。二葉亭も亦ゴルキーやアンドレエフの國へ行くに方つてすらも文學の「ブ」の字も口にしなかつた。一新聞社の通信員以上に日本の文壇の大使を氣取る衒氣や野心を爪の垢ほども持合せてゐなかつた。此の非文學主義の是非や非文學的態度の當否は措いて左に右く二葉亭が尋常普通の定木の當てはまらない人物であつたのは二葉亭を餘り能く知らない人にも感知された。

二葉亭は青年時代ゴンチャーロフやドストエフスキーに傾倒して志を文學に立てながら、其の後文學に慊らなくなつたのは文學の避くべからざる遊戲氣分に堪へられなかつたからである。文學は果して二葉亭の信ずる如く遊戲氣分を避けられない乎、假に避けられないとしてもそれ程忌むべきものであらう乎は攻究すべき餘地があるが、それは別問題として文學に對して二葉亭ほど眞劍なのは無い。二葉亭の人生に對するや實驗室に於ける科學者と等しく一々精密なる實驗をして數學的に證明しなければ納得しなかつた。「浮雲」第二篇は即ち其の實驗報告で、當時或る人は恰も地層の斷面を見るやうだと評した。地層の斷面圖か地形の盛上げ圖か、ドチラか知らぬが左に右く定木とコンパスで作られたものであると評したのは當時の二葉亭の作を能く穿つてゐる。『其面影』や『平凡』や後期の作には酸いも甘いも嚙分けた二葉亭の苦勞人振描寫は窺へるが、前期の眞劍な科學者的人生報告は却て見られない。藝術的效果はドチラに軍配を擧げて可なるかは人に由て各々說はあらうが、二葉亭が日本の創作界に確かに開拓しようとした新らしい嚴肅な人生觀照は「浮雲」第二篇以後の晩年の作にも、二葉亭自身の作にだも見られなくなつた。

二葉亭の人及び藝術に就ては人各々見る處があらう。が、初めは哲人を、後には作家を志し、ドチラにも志を得ないで文學に反目、文學にも亦安心を得ないで一[illegible]し、東家西家皆く人生の彷徨者となつたが、最後に終に久戀の舞臺を得て花々しく一と芝居を打つつもりで勇んで露西亞に旅の空を踏んだのが一端役をだも振られる運が無くして中途で病に仆れて了つたのは恐らく死んでも死切れない遺憾であつたらう。二葉亭は小說家で終るを屑としなかつたが、終生志を得ないで、自ら屑しとしない小說家として終に最後の幕を閉ぢたのは生活其れ自身が一生の使命の重みに悶えた小說であつた。運に見放され、常に不滿、絕えず不幸、不遇失意をチャ[illegible]にして一人相撲を取る觀があつたは、藥も毒も[illegible]照の苦汁を舌打して賞味する "Sturm und Drang" の時代の放浪兒なる哉である。

魯庵生

浮　雲

浮雲はしがき

薔薇の花は頭に吹て活人は書となる世の中獨り文章而已は黴の生えた陳奮翰の四角張りたるに頬返しを附けかね又は舌足らずの物言を學びて口に涎を流すは拙し是はどうでも言文一途の事だと思立ては矢も楯もなく文明の風改良の熱一度に寄せ來るどさくさ紛れお先眞闇三寶荒神さまと春のや先生を頼み奉り缺硯に朧の月の雫を受けて墨摺流す空のきほひ夕立の雨の一しきりさら〳〵さつと書流せばアラ無情始末にゆかぬ浮雲めが艶しき月の面影を思ひ懸なく閉籠て黒白も分かぬ烏夜玉のやみらみつちやな小説が出來しぞやと我ながら肝を潰して此書の巻端に序するものは

明治丁亥初夏　　二葉亭四迷

第一編

第一回　アヽラ怪しの人の擧動

千早振る神無月も、最早跡二日の餘波となッた廿八日の午後三時頃に、神田見附の内より、塗渡る蟻、散る蜘蛛の子と、うよ〳〵ぞよ〳〵涌出て來るのは、孰れも顋を氣にし給ふ方々。しかし熟々見て篤と點檢すると、是にも種々種類のあるもので、まづ髭から書立てれば、口髭、頬髯、顋の鬚、暴に興起した拿破崙髭に、狆の口めいた比斯馬克髭。そのほか矮鶏髭、貉髭、ありやなしやの幻の髭と、濃くも淡くもいろ〳〵に生え分る。髭に續いて差ひのあるのは服飾。白木屋仕込みの黑い物づくめには佛蘭西皮の靴の配偶はありうち。之を召す方樣の鼻毛は延びて蜻蛉をも釣るべしといふ。是より降ッては、背皺よると枕詞の付くスコッチの背廣にゴリゴリするほどの牛の毛皮靴。そこで踵にお飾を絶やさぬ所から泥に尾を曳く龜甲洋袴。いづれも釣るしんぼうの苦患を今に脱せぬ貌附、でも持主は得意なもので、髭あり、服あり、我また奚をか覓めんと濟ました顔色で、火をくれた木頭と反身ッてお歸り遊ばす、イヤお羨ましいことだ。其後より續いて出てお出でなさるは孰れも胡麻鹽頭、弓と曲げても張の弱い腰に無殘や空辨當を振垂げてヨタ〳〵ものでお歸りなさる。さては老朽しても、流石はまだ職に堪へるものか。しかし日本服でも勤められるお手輕なお身の上、さりとはまたお氣の毒な。

途上人影の稀れに成ッた頃、同じ見附の内より兩人の青年が話しながら出て參ッた。一人は年齢二十二三の男、顔色は蒼味七分に土氣三分、どうも宜敷ないが、秀でた眉に儼然とした眼附で、ズーと押徹ッた鼻筋、唯惜い哉口元が些と尋常でないばかり。しかし締はよささうゆゑ繪草紙屋の前に立ッてもパックリ開くなどといふ氣遣ひは有るまいが、兎に角顋が尖って頬骨が露れ、非道く癯れてゐる故か、顔の造作がとげ〳〵してゐて、愛嬌氣といッたら微塵もなし。醜くはないが、何處ともなくケンがある。背はスラリとしてゐるばかりで、左而已高いといふ程でもないが痩肉ゆゑ、半鐘なんとやらといふ人間の惡い諢名に縁が有りさうで、年數物

ながら摺疊皺の存じた霜降スコッチの服を身に纏ッて、組紐を盤帶にした鍔廣な黑羅紗の帽子を戴いてる。今一人は前の男より二つ三つ兄らしく、中肉中脊で色白の丸顏。口元の尋常な所から眼付のハッキリとした所は仲々の好男子ながら、顏立がひねてこせ〳〵してゐるので、何となく品格のない男。黑羅紗の半フロックコートに同じ色のチョッキ、洋袴は何か乙な縞羅紗で、リウとした衣裳附、縁の卷上ッた釜底形の黑の帽子を眉深に冠り、左の手を隱袋へ差入れ、右の手で細々とした杖を玩物にしながら高い男に向ひ、

「しかしネー、若し果して課長が我輩を信用してゐるなら、蓋し已むを得ざるに出でたんだ。何故と言ッて見給へ、局員四十有餘名と言ゃア大層のやうだけれども、皆腰の曲ッた老爺に非ざれば、氣の利かない奴ばかりだらう。其内でから言ゃア可笑しい樣だけれども、若手でサ、原書も些たア囓ッてゐてサ、而して事務を取らせて捗の往く者と言ッたら、マア我輩二三人だ。だから若し果して信用してゐるのなら、已むを得ないのサ。」

「けれども山口を見給へ、事務を取らせたら、彼の男程捗の往く者はあるまいけれども矢張兎を喰ッたぢやアないか。」

「彼奴はいかん、彼奴は馬鹿だからいかん。」

「何故。」

「何故と言ッて、彼奴は馬鹿だ、課長に向ッて此間のやうな事を言ふ所を見りやア、彌馬鹿だ。」

「あれは全體課長が惡いサ、自分が不條理な事を言付けながら、何にもあんなに頭ごなしにいふこともない。」

「それは課長の方が、或は不條理かも知れぬが、しかし苟も長官たる者に向ッて、抵抗を試みるなどといふなア、馬鹿の骨頂だ。まづ考へて見給へ、山口は何んだ、屬吏ぢやアないか、屬吏ならば假令課長の言付を條理と思ッたにしろ思はぬにしろ、ハイ〳〵言ッて、其通り處辨して往きやア、職分は盡きてるぢやアないか。然るに彼奴のやうに、苟も課長たる者に向ッてあんな指圖がましい事を……。」

「イヤあれは指圖ぢやアない、注意サ。」

「フム乙う山口を辯護するネ、矢張同病相憐れむのか、アハ〳〵〳〵。」

　高い男は中脊の男の顏を尻眼にかけて、口を鉗んで仕舞ッたので、談話がすこし中絶れる。錦町へ曲り込んで、二つ目の横町の角まで參ッた時、中脊の男は不圖立止ッて、

「ダガ、君の免を喰ッたのは弔すべく、また賀すべしだぜ。」

「何故。」

「何故と言ッて君、これからは朝から晩まで情婦の側にへばり付いてゐる事が出來らア、アハ〳〵〳〵。」

「フヽン、馬鹿を言ひ給ふな。」

　ト、高い男は顏に似氣なく微笑を含み、さて失敬の挨拶も手輕く、別れて獨り小川町の方へ參る。顏の微笑が一かは〳〵消え往くにつれ、足取も次第々々に緩かになつて、終には蟲の這ふ樣になり、悄然と頭をうな垂れて二三町程も參ッた頃、不圖立止りて四邊を回顧し、駭然として二足三足立戻ッて、トある横町へ曲り込んで、角から三軒目の格子戸作りの二階家へ這入る。一所に這入ッて見よう。

　高い男は玄關を通り拔けて、縁側へ立出ると、傍の坐舖の障子がスラリ開いて、年頃十八九の婦人の首、チョンボリとした摘ッ鼻と、日の丸の紋を染拔いたムックリとした頰とで、その持主の身分が知れるといふ奴が、ヌッと出る。

「お歸ンなさいまし。」

トいつて何故か口紙ずりをする。

「叔母さんは。」

「先程、お嬢さまと何處らへか。」

「さう。」

ト言捨てて高い男は縁側を傳ッて參り、突當りの段梯子を登ッて二階へ上る。玆處は六疊の小座鋪、一間の床に三尺の押入れ付、三方は壁で唯南ばかりが障子になッてゐる。床に掛けた軸は隅々も既に蟲喰んで、床花瓶に投入れた二本三本の蝦夷菊はうら枯れて枯葉がち、座鋪の一隅を顧みると古びた机が一脚据ゑ付けてあッて、筆、ペン、楊枝などを摑插しにした筆立一個に、歯磨の函と肩を比べた赤間の硯が一面載せてある。机の側に押立てたは一本立の書函、是には小形の爛缶が載せてある。机の下に差入れたは縁の缺けた火入、是には摺附木の死骸が横ッてゐる。其外座鋪一杯に敷詰めた毛團、衣紋竹に釣るした袷衣、柱の釘に懸けた手拭、いづれを見ても皆年數物。その證據には手擦れてゐて古色蒼然たり、だが自ら秩然と取旁付いてゐる。

高い男は徐かに和服に着替へ、脫棄てた服を疊掛けて見て舌鼓を撃ちながら其儘押入へへし込んで仕舞ふ。所へ、トバクサと上ッて來たは例の日の丸の紋を染抜いた首の持主。横幅の廣い筋骨の逞しいズングリムックリとした生理學上の美人で、持ッて來た郵便を高い男の前に差置いて、

「アノー先刻此郵便が。」

「ア、さう、何處から來たんだ。」

ト、郵便を手に取ッて見て、

「ウー、國からか。」

「アノネ貴君、今日のお嬢さまのお服飾は、ほんとにお目に懸け度いやうでしたヨ。まづネ、お下着が格子縞の黄八丈で、お上着はパッとした宜い引縞の縮緬で、お髪は何時ものイボジリ捲きでしたがネ、お搔頭は此間出雲屋からお取んなすッた、こんな……」

ト、故意々々手で形を拵へて見せ、

「薔薇の花搔頭でネ、それは〳〵お美しう御座いましたヨ……私もあんな帶留が一つ欲しいけれども……」

些し寒いで、

お嬢さまは、お化粧なんぞはしない、と仰しやるけれども、今日はなんでも内々で、薄化粧なすッたに違ひありませんよ。だッて、なんぼ色がお白いッて、あんなに……私も家にゐる時分は、是でもヘタクタ施けたもんでしたがネ、此家に上ッてから、お正月ばかりにして、不斷は施けないの。施けてもいゝけれども、御新造さまの惡口が厭ですワ。だッて何時かもお客樣のいらッしやる前で、鍋の白粉を施けたとこは、全然炭團へ霜が降ッたやうで御座いますッて……。餘りぢやア有りませんか、ネー貴君。なんぼ私が不器量だつて餘りぢやありませんか。」

ト敵手が傍にでもゐるやうに、眞黑になッてまくしかける。高い男は先程より手紙を把ッては讀みかけ、讀みかけてはまた下へ措きなどして、さも迷惑な體。此時も唯「フム」と鼻を鳴らした而已で、更に取合はぬゆゑ、生理學上の美人は左なくとも縹壞れさうな兩頰をいとゞ膨脹らしてツンとして二階を降りる。其後姿を見送つて、高い男はホット顏、また手早く手紙を取上げて讀下す。その文言に、

一筆示しまゐらせ候、さても時こうが日增しにお寒う相成り候へども御無事に御勤め被成候や、それのみあんじくらし參らせ候。母事も此頃はめつきり年をとり、髮の毛も大方は白髮になるにつけ心まで愚癡に相成候と見え、今年の晩には御地へ參られるとは知りつゝも、何となう待遠にて

をしてゐると、捨てる神あれば助くる神ありで、文三だけは東京に居る叔父の許へ引取られる事になり、泣の泪で靜岡を發足して叔父を便ッて出京したは明治十一年、文三が十五に成ッた春の事とか。

　叔父は園田孫兵衞と言ひて、文三の亡父の爲めには實弟に當る男、慈悲深く、憐ッぽく、加之も律儀眞當の氣質ゆゑ、人の望けも宜いが、惜哉些と氣が弱すぎる。維新後は兩刀を矢立に替へて、朝夕算盤を彈いては見たが、慣れぬ事とて初の内は損耗ばかり、今日に明日にと喰込んで、果は借金の淵に陷り、如何しよう斯うしようと足掻き踠いてゐる内、不圖した事から浮み上ッて當今では些とは資本も出來、地面をも買ひ、小金をも貸付けて、家を東京に持ちながら、其身は濱のさる茶店の支配人をしてゐる事なれば、左而已富貴と言ふでもないが、まづ融通のある活計。留守を守る女房のお政は、お摩りからずる〳〵の後配、歷とした士族の娘と自分ではいふが……チト考へ物。しかし兎に角、如才のない、世辭のよい、地代から貸金の催促まで家事一切獨りで切ッて廻る程あッて、萬事に拔目のない婦人。疵瑕と言ッては唯大酒飮みで、浮氣で、加之も針を持つ事がキツイ嫌ひといふばかり。さしたる事もないが、人事はよく言ひたがらぬが世の習ひ。彼女は蟒蛇の再生だらう、と近邊の者は影人形を使ふとか言ふ。夫婦の間に二人の子がある。姉をお勢と言ッて、其頃はまだ十二の蕾。弟を勇と言ッて、是もまた袖で鼻汁拭く灣泊盛り、是は當今は某校に入舍してゐて、宅には居らぬので、トいふ家内ゆゑ、叔母一人の氣に入れば、イザコザは無いが、さて文三には人の機嫌氣褄を取る抔といふ事は出來ぬ、唯心ばかりは主とも親とも思つて善く事へるが、氣が利かぬと言ッては睨付けられる事何時も〳〵。其度ごとに親の難有さが身に染み、骨に耐へて、袖に露を置くことは有りながら、常に自ら叱ッてヂッと辛抱、使歩行きをする暇には近邊の私塾へ通學して、暫らく悲しい月日を送ッてゐる。ト、或る時、某學校で生徒の召募があると塾での評判取り〳〵。聞けば給費だといふ。何も試しだと文三が試驗を受けて見た所、幸ひにして及第する、入舍する、ソレ給費が貰へる。昨日までは叔父の家とは言ひながら、食客の悲しさには追使はれたうへ氣兼苦勞而已をしてゐたのが、今日は外に掣肘る所もなく、心一杯に勉強の出來る身の上となッたから、イヤ喜んだの喜ばないのと、夫は〳〵雀躍までして喜んだが、しかし書生と言ッても是もまた一苦界。固より餘所外のおぼッちやま方とは違ひ、親から仕送りなどといふ洒落はないから、無駄遣ひとては一錢もならず、また爲ようとも思はずして、唯一心に、便のない一人の母親の心を安めねばならぬ、世話になッた叔父へも報恩をせねばならぬ、と思ふ心より寸陰を惜んでの刻苦勉強に、學業の進みも著るしく、何時の試驗にも一番と言ッて二番とは下らぬ程ゆゑ、得難い書生と教員も感心する。サアさうなると傍が喧ましい。放蕩と懶惰とを經緯の絲にして織上ッたおぼッちやま方が、不負魂の妬み嫉みからおむづかり遊ばすけれども、文三は其等の事には頓着せず、獨りネビッチョ除け物と成ッて朝夕勉強三昧に歳月を消磨する内、遂に多年螢雪の功が現はれて一片の卒業證書を懷き、再び叔父の家を東道とするやうに成ッたから先づ一安心と、其れより手を替へ品を替へ種々にして仕官の口を探すが、さて探すとなると無いもので、心ならずも小半年ばかり燻ッてゐる。其間始終叔母にいぶされる辛さ苦しさ、初めは叔母も自分ながらけぶさうな貌をして、やは〳〵吹付けてゐるからまづ宜かッたが、次第にいぶし方に念が入ッ

て來て、果は生松葉に[illegible]をくべるやうに成ッたから、其のけぶいこと此上なし。文三も暫くは鼻をも潰してゐたが、竟には餘りのけぶさに堪へ兼ねて、噎返る胸を押鎮めかねた事も有ッたが、イヤ／＼是れも自分が不甲斐ないからだと思ひ返してヂッと辛抱。さういふ所ゆゑ、其後或人の周旋で某省の准判任御用係となッた時は天へも昇る心地がされて、ホッと一と息吐きは吐いたが、初て出勤した時は異な感じがした。まづ取調物を受取りて我座になほり、さて落着いて居廻りを視廻すと、仔細らしく首を傾けて書物をするもの、蚤取眼になッて校合をするもの、筆を啣へて忙し氣に帳簿を繰るものと種々さま／＼有る中に、恰ど文三の眞向うに八字の浪を額に寄せ、忙しく眼をしばたたきながら間斷もなく算盤を彈いてゐる年配五十前後の老人が、不圖手を止めて珠へ指ざしをしながら、「ニー六五七十の二……でもなしとエー六五、」と天下の安危此一擧に在りと言ッた樣な、さも心配相な顏を振揚げて、其くせ口をアンゴリ開いて、眼鏡越しにヂッと文三の顏を見守め、「ウー八十の二か、」ト一越調子高な聲を振立ててまた一心不亂に彈き出す。餘りの可笑しさに堪へかねて、文三は覺えず微笑したが、考へて見れば笑ふ我と笑はるる人と餘り懸隔のない身の上。アヽ曾て身の油に根氣の心を浸し、眠い眼を睡ずして得た學力を、斯樣な果敢ない馬鹿氣た事に使ふのかと思へば悲しく、情なく、我になくホッと太息を吐いて、暫くは唯茫然としてゐたが、イヤ／＼是れではならぬと心を取直して、其日より事務に取掛る。當座四五日は例の老人の顏を見る度に嘆息のみしてゐたが、其れも向ふ境界に移る習ひとかで、日を經る隨に苦にもならなく成る。此月より國許の老母へは月々仕送りをすれば母親も悦んで、叔父へは月賦で借金濟しをすれば叔母も機嫌を直し、其年の暮に一等進んで本官になり、昨年の暑中には久々にて歸省するなど、いよ／＼喜ばしき事が重なれば、眉の皺も自ら伸び、どうやら壽命も長くなつたやうに思はれる。玆にチト艶いた一條のお噺があるが、此を記す前に、チョッピリ孫兵衞の長女お勢の小傳を伺ひませう。

お勢の生立の有樣、生來子煩惱の孫兵衞を父に持ち、他人には薄情でも我子には眼の無いお政を母に持ッた事ゆゑ、幼少の折より插頭の花、衣の裏の玉と撫で愛まれ、何でも彼でも言成次第に、オイソレと仕付けられたのが崇と成ッて、首尾よくやんちや娘に成果せた。紐解の賀の濟んだ頃より、父親の望みで小學校へ通ひ、母親の好みで清元の稽古、生得て才溌の一徳には生覺えながら飲込みも早く、學問、遊藝、兩つながら出來のよいやうに思はれるから、母親は目も口も一つにして大喜び、尋ねぬ人にまで吹聽する娘自慢の手前味噌、切りに涎を垂らしてゐた。其頃新に隣家へ引移ッて參ッた官員は、家内四人活計で、細君もあれば娘もある。隣づからの寒暄の挨拶が喰付きで、親々が心安く成るにつれ、娘同志も親しくなり、毎日のやうに訪ひつ訪はれつした隣家の娘といふは、お勢よりは二つ三つ年層で、優しく温籍で、父親が儒者のなれの果だけ有ッて、子供ながらも學問が好こそ物の上手で出來る。いけ年を仕ッても、兎角人眞似は輟められぬもの、況てや子供といふ中にも、お勢は根生の輕躁者なれば、尚更倏忽其娘に薫陶れて、起居、擧動から物の言ひざままで其れに似せ、急に三味線を擲却して唐机の上に孔雀の羽を押立てる。お政は學問などといふ正坐つた事は蟲が好かぬが、愛し娘の爲度いと思つて爲る事と、其儘に打棄てて置く内、お勢が小學校を卒業した頃、隣家の娘は遐邊のさる私塾へ入塾することゝ成つた。サアさう成るとお勢は矢も楯も堪らず、急に入塾

が傷度くなる。何でも彼でも親を責がむ、寝言にまで言ッて責がむ。トいッて、まだ年端も往かぬに、殊にはなまよみの甲斐なき婦人の事でゐながら、入塾などとは以ての外。トサ、一旦は親の威光で叱り付けては見たが、例の絶食に腹を空かせ、入塾が出來ない位なら、生きて居る甲斐がない。ト溜息噛雑ぜの愁訴。萎れ返ッて見せるに兩親も我を折り、其程までに思ふならばと、萬事を隣家の娘に託して、覺束無くも入塾させたは今より二年前の事で。

お勢の入塾した塾の塾頭をして居る婦人は、新聞の受賣からグッと思ひ上りをした女丈夫。しかも氣を使ッて一飯の恩は酬いぬがちでも、睚眦の怨は必ず報ずるといふ蜓蚰魂で、氣に入らぬ者と見れば何彼につけて、眞綿に針のチクチク責をするが性分、親の前でこそ蛤貝と反身れ、他人の前では蜆貝と縮まるお勢の事ゆゑ、責まれるのが辛さにこの女丈夫に取入ッて卑屈を働く。固より根がお茶ッぴいゆゑ、其風には染まり易いか忽ちの中に見違へるほど容子が變り、何時しか隣家の娘とは疎々しくなッた。其後英學を始てからは、悪足掻もまた一段で、襦袢がシャツになれば唐人髷も束髪に化け、ハンケチで咽喉を緊め、鬱陶敷を耐へて眼鏡を掛け、獨よがりの人笑はせ、天晴一個のキャッキャとなり濟ました。然るに去年の暮、例の女丈夫は、教師に雇はれたとかで退塾して仕舞ひ、其手に屬したお茶ッぴい連も一人去り二人去りして殘少なになるにつけ、お勢も何となく我宿戀しく成ッたれど、正可さうとも言ひ難ねたか、漢學は荒方出來たと拵へて、退塾して宿所へ歸ッたは今年の春の暮、櫻の花の散る頃の事で。

既に記した如く文三の出京した頃は、お勢はまだ十二の蕾、甲の狭い帶を締めて、姉様を荷厄介にしてゐたなれど、こましやくれた心から、

「彼の人はお前の御亭主さんに貰ッたのだよ。」

ト座興に言ッた言葉の露を實と汲んだか、初の内ははにかんでばかり居たが、子供の馴むは早いもので、間もなく菓子一つを二つに割ッて喰べる程、睦み合ッたも今は一昔。文三が某校へ入舎してからは、相逢ふ事も稀なれば、況て一つに居た事は半日もなし。唯今年の冬期休暇にお勢が歸宅した時而已十日ばかりも朝夕顏を見合はしてゐたなれど、子供の時とは違ひ、年頃が年頃だけに、文三もよろづに遠慮勝でよそよそ敷待遇して、更に打解けて物など言ッた事なし。其癖お勢が歸塾した當座兩三日は、百年の相識に別れた如く、何となく心淋敷かつたが……それも日數を經る隨に忘れて仕舞ッたのに、今また思懸けなく一つ家に起臥して、折節は狎々敷物など言ひかけられて見れば、嬉敷もないが一月が復た來たやうで、何となく賑かな心地がした。人一人殖えた事ゆゑ、是は左もあるべき事ながら、唯怪しむ可きはお勢と席を同うした時の文三の感情で、何時も可笑しく氣が改まり、圓めてゐた背を引伸して頸を据ゑ、異う濟して變に勞付ける。魂が裳抜ければ一心に主とする所なく、居廻りに在る程のもの悉く薄烟に包れて、虚有縹緲の中に漂ひ、有る歟と思へばあり、無い歟と想へばない中に、唯一物ばかりは見ないでも見えるが、此感情は未だ何とも名け難い。夏の初より頼まれて、お勢に英語を教授するやうに成ッてから、文三も些しく打解け出して、折節は日本婦人の有様、束髪の利害、さては男女交際の得失などを論ずるやうに成ると、不思議や今まで文三を男臭いとも思はず太平樂を並べ大風呂敷を擴げてゐたお勢が、文三の前では何時からともなく口數を聞かなく成ッて、何處ともなく落着いて、優しく女性らしく成ッたやうに見えた。或一日、お

し、といつた樣な容子。

「何故貴君、今夜に限ツてさう遠慮なさるの。」

「デモ、貴孃お一人ツ切りぢやア・・・なんだか・・・。」

「オヤマア、貴君にも似合はない・・・アノ何時か、氣が弱くツちやア主義の實行は到底覺束ない、と仰しやツたのは何人だツけ。」

ト、嫁の首を斜に傾げて嫣然、片頬に含んだお勢の微笑に釣られて文三は部屋に這入り込み、座に着きながら、

「さう言はれちやア一言もないが、しかし・・・。」

「些とお遣ひなさいまし。」

ト、お勢は團扇を取出して文三に勸め、

「しかしどうしましたと。」

「エ、ナニサ、陰口がどうも五月蠅くツて。」

「それはネ。どうせ些とは何とか言ひますのサ。また何とか言ツたツて宜いぢやア有りませんか、若しお互に潔白なら。どうせ貴君、二千年來の習慣を破るんですものヲ、多少の艱苦は免れツこは有りませんワ。」

「トハ思つてゐるやうなものゝ、まさか陰口が耳に入ると厭なものサ。」

「夫はさうですよネー。此間もネ貴君、鍋が生意氣に可笑しな事を言つて私に嬲ふのですよ。到底解るまいとは思ひましたけれども、試みに男女交際論を說いて見たのですヨ。さうしたらネ、アノなんですツて、私の言葉には漢語が雜るから、全然何を言ツたのだか解りませんて・・・眞個に敎育のないといふ者は、仕樣のないものですネー。」

「アハヽヽ其奴は大笑ひだ。・・・しかし可笑しく思ツてゐるのは、鍋ばかりぢやア有りますまい、必と母親さんも・・・。」

「母ですか、母はどうせ下等の人物ですから、始終可笑しな事を言つちやアからかひますのサ、其れでもネ、其たんびに私が辱しめ〳〵爲い爲いしたら、あれでも些とは耻ぢたと見えてネ、此頃ぢやア其樣に言はなくなりましたよ。」

「へー、からかふ。どんな事を仰しやツて。」

「アノーなんですツて、其樣に親しくする位なら、寧そ貴君と・・・(すこしモヂ〳〵して言ひかねて)結婚して仕舞へツて・・・。」

ト聞くと等しく文三は、駭然としてお勢の顏を目守める。されど此方は平氣の體で、

「ですがネ、敎育のない者ばかりを責める譯にもゆきませんよネー、私の朋友なんぞは、敎育の有ると言ふ程有りやしませんがネ、それでもマア普通の敎育は享けてゐるんですよ。それでゐて貴君、西洋主義の解るものは廿五人の内に僅四人しかないの。その四人もネ、塾にゐるうちだけで、外へ出てからはネ、口程にもなく兩親に壓制せられて、みんなお嫁に往ツたりお婿を取ツたりして仕舞ひましたの。だから今まで此樣な事を言ツてるものは私ばツかりだとおもふと、何だか心細くツて〳〵なりません。でしたがネ、此頃は貴君といふ親友が出來たから、アノー大變氣丈夫になりましたワ。」

文三はチョイと一禮して、

「お世辭にも嬉しい。」

「アラお世辭ぢやア有りませんよ、眞實ですよ。」

「眞實なら尙ほ嬉しいが、しかし私にやア貴孃と親友の交際は到底出來ない。」

「オヤ何故ですエ、何故親友の交際が出來ませんエ。」

「何故といへば、私には貴孃が解らず、また貴孃には私が解らないから、どうも親友の交際は・・・。」

「さうですか、それでも私には貴君はよく解ツてゐる積りですよ。貴君は學識が有ツて、品

行が方正で、親に孝行で……。」

「だから貴孃には、私が解らないといふのです。貴孃は私を、親に孝行だと仰しやるけれども、孝行ぢやア有りません。私には……親より……大切な者があります……。」

ト、吃りながら言ッて、文三は差俯向いて仕舞ふ。お勢は不思議さうに文三の容子を眺めながら、

「親より大切な者……親より……大切な……親より大切な者は、私にも有りますワ。」

文三はうな垂れた頭を振揚げて、

「エ、貴孃にも有りますと。」

「ハア、有りますワ。」

「誰……誰れが。」

「人ぢやアないの。アノ眞理。」

「眞理。」

ト文三は慄然と胴震ひをして、唇を喰ひしめた儘、暫く無言。稍あッて俄に喟然として歎息して、

「アヽ、貴孃は清淨なものだ、潔白なものだ。……親より大切なものは眞理……アヽ、潔白なものだ。……しかし感情といふ者は實に妙なものだナ。人を愚にしたり、人を泣かせたり、笑はせたり、人をあへたり、揉んだりして玩弄する。玩弄されると薄々氣が附きながら、其れを制することが出來ない、ア、自分ながら……。」

ト些し考へて、稍ありて熱氣となり、

「ダガ、思ひ切れない……どう有ッても思ひ切れない……お勢さん、貴孃は御自分が潔白だから此樣な事を言ッてもお解りがないかも知れんが、私には眞理よりか……眞理よりか大切な者があります。去年の暮から全半年、其者の爲めに感情を支配せられて、寢ても寤めても忘られればこそ、死ぬより辛いおもひをしてゐても、先では毫しも汲んで呉れない。寧ろ強顏なくされたならば、また思ひ切りやうも有らうけれども……。」

ト些し聲をかすませて、

「なまじひ力におもふの、親友だのといはれて見れば、私は……どうも……どう有ッても思ひ……。」

「アラ月が。……まるで、竹の中から出るやうですよ。鳥渡御覽なさいよ。」

庭の一隅に栽込んだ、十竿ばかりの纖竹の葉を分けて出る月のすゞしさ。月夜見の神の力の測りなくて、斷雲一片の翳だもない蒼空一面にてりわたる清光素色、唯亭々皎々として雫も滴るばかり。初は隣家の隔ての竹垣に遮られて庭の半より這初め、中頃は縁側へ上ッて座鋪へ這込み、稗蒔の水に流されては金瀲灔、簷馬の玻璃に透りては玉玲瓏、座賞の人に影を添へて、孤燈一穗の光を奪ひ、終に間の壁へ這上る。涼風一陣吹到る毎に、ませ籬によろぼひ懸る夕顏の影法師が婆娑として舞ひ出し、さては百合の葉末にすがる露の珠が、忽ち螢と成ッて飛迷ふ。艸花立樹の風に揉まれる音の、颯々とするにつれて、しばしは人の心も騷ぎ立つとも須臾にして風が吹罷めば、また四邊蕭然となつて、軒の下艸に集く蟲の音のみ獨り高く聞ゆる。眼に見る景色はあはれに面白い。とはいへ、心に物ある兩人の者の眼には止まらず。唯お勢が口ばかりで、

「アヽ、佳いこと。」

トいッて、何故ともなく莞然と笑ひ、仰向いて月に見惚れる風をする。其半面を文三が偸むが如く眺め遣れば、眼鼻口の美しさは常に變ッたこともないが、月の光を受けて些し蒼味を帶んだ瓜實顏にほつれ掛ッたいたづら髮二筋三筋、扇頭の微風に戰いで頰の邊を往來する所は慄然とするほど凄味が有る。暫く文三がシゲ〴〵と眺めてゐると、頓て凄味のある半面が次第々々に此方へ捻れて……パッチリとした涼しい眼が

ジロリと動き出して……見とれてゐた眼とピッタリ出逢ふ。螺の壺々口に莞然と含んだ微笑を細根大根に白魚を五本並べたやうな手が持つてゐた團扇で隱蔽して、恥かしさうなしこなし。

文三の眼は俄に光り出す。

「お勢さん。」

但し震聲で。

「ハイ。」

但し小聲で。

「お勢さん貴孃もあんまりだ、餘り……殘酷だ。私が是れ……是れ程までに……。」

トいひさして文三は顏に手を宛てて默ッて仕舞ふ。意を注めて能く見れば、壁に寫ッた影法師が、慄然とばかり震へてゐる。今一言……今一言の言葉の關を踰えれば、先は妹背山。蘆垣の間近き人を戀ひ初めてより、晝は終日、夜は終夜、唯其人の面影而已常に眼前にちらついて、砧に映る軒の月の拂ッてもまた去りかねてゐながら人の心を測りかねて、末摘花の色にも出さず、岩堰水の音にも立てず、獨りクヨ／＼物をおもふ胸のうやもや、もだくだを、拂ふも拂はぬも、今一言の言葉の綾……今一言……僅一言……其一言をまだ言はぬ……折柄がら／＼と表の格子戸の開く音がする。……吃驚して文三はお勢と顏を見合はせる。蹶然と起上る。轉げるやうに部屋を驅出る。但し其晩は是れ切りの事で、別段にお話なし。

翌朝に至りて、兩人の者は初て顏を見合はせる。文三はお勢よりも氣まりを惡るがッて口數をきかず。此夏の事務の鞅掌さ、暑中休暇も取れぬので匆々に出勤する。十二時頃に歸宅する。下座鋪で晝食を濟まして二階の居間へ戻り、「ア、熱かッた」ト風を納れてゐる所へ、梯子バタ／＼でお勢が上ッて參り、二つ三つ英語の不審を質問する。質問して仕舞へば最早用の無い筈だが、何かモヂ／＼して交野の鶉を極めてゐる。頓て差俯向いた儘で鉛筆を玩弄にしながら、

「アノー、昨夕は貴君どうなすつたの。」

返答なし。

「何だか私が殘酷だッて、大變憤ッていらしッたが、何が殘酷ですの。」

ト笑顏を擡げて文三の顏を窺くと、文三は狼狽て彼方を向いて仕舞ひ、

「大抵察してゐながら、其樣な事を。」

「アラ、それでも私にや何だか解りませんものヲ……。」

「解らなければ解らないでよう御座んす。」

「オヤ可笑しな。」

其から後は文三と差向ひになる毎に、お勢は例の事を種にして、乙う搦んだ水向け文句。やいのやいのと責め立てて、終には「仰しやらぬとくすぐりますョ、」とまで迫ッたが、石地藏と生れ付いたせうがには、情談のどさくさ紛れに、チョックリチョイといッて除ける事の出來ない文三、然らばといふ口付からまづ重くろしく、折目正しく居ずまッて、しかつべらしく思ひのたけを言ひ出さうとすれば、お勢はツイと彼方を向いて、「アラ、鳶が飛んでますョ、」と知らぬ顏の半兵衞摸擬。さればといッて、手を引けばまた意あり氣な色目遣ひ。トかうじらされて文三は些とウロが來たが、兎も角も觸らば散らうといふ下心の、自ら素振に現はれるに、「ハヽア」と氣が附いて見れば、嬉しく難有く辱けなく、罪も報も忘れ果てて、命もトントいらぬ顏附。臍の下を住家として魂が何時の間にか有頂天外へ宿替をすれば靜には坐ッてもゐられず、ウロ／＼座鋪を徘徊いて、舌を吐いたり、肩を縮めたり、思ひ出し笑ひをしたり、又は變ぼうらいな手附をしたりなど、よろづに瘋癲じみるまで喜びは喜んだが、しかしお勢の前ではいつも四角四面に喰ひしばつて、猥褻が

ましい寐言はしない。最も曾てじやらくらが高じて、どやくやと成ッた時、今まで嬉しさうに笑ッてゐた文三が、俄に両眼を閉ぢて静まり返り、何と言ッても口をきかぬので、お勢が兒戯ながら、「そんなに真面目にお成んなさると、かう為るからいゝ、」とくすぐりに懸ッた。其の手頭を払ひ除けて文三が熱気となり、「アヽ我々の感情はまだ習慣の奴隷だ。お勢さん下へ降りて下さい。」といつた為めに、お勢に憎られたこともあッたが、……しかし、お勢も日を経るまゝに草臥れたか、余りじやらくらもしなくなつて、高笑ひを罷めて、静かになッて、此頃では折々物思ひをするやうに成ッたが、文三に向ッては、ともすればぞんざいな言葉遣ひをする所を見れば、泣寐入りに寝入ッたのでもない光景。

アヽ偶々咲懸ッた恋の蕾も、事情といふ思はぬ沍にかじけて、可笑しく葛藤れた縁の糸のすぢりもぢつた間柄。海へも附かず、河へも附かぬ中ぶらりん。月下翁の悪戯か、それにしても余程風変りな恋の初峯入り。

文三の某省へ奉職したは、昨日今日のやうに思ふ間に、既に二年近くになる。年頃節倹の功が現はれて、此頃では些しは貯金も出来た事ゆゑ、老耄ッたお袋に何時までも一人住の不自由をさせて置くも不孝の沙汰、今年の暮には東京へ迎へて一家を成して、而して……と思ふ旨を半分報知せてやれば、母親は大悦び、文三にはお勢といふ心宛が出来たことは知らぬが仏のやうな慈悲心から、「早く相応な者を宛がつて、初孫の顔を見たいとおもふは、親の私としてもからなれど、其地へ往ッて一軒の家を成すやうになれば、家の大黒柱とて無くては叶はぬは妻。到底貰ふ事なら身類[illegible]の次女お何どのは内端で温順く、器量も十人並で、私には至極気に入ッたが、此娘を迎へて妻としては」と写真まで添へての相談に、文三はハッと当惑の眉を顰めて物の序に云々と叔母のお政に話せば、是れもまた当惑の体。初めお勢が退塾して家に帰ッた頃、勇といふ嗣子があッて見れば、お勢は到底嫁に遣らなければならぬが、如何だ文三に配偶せては」と孫兵衛に相談をかけられた事も有ッたが、其頃はお政も左様さネと生返事。何方附かずに綾なして月日を送る内、お勢の甚だ文三に親しむを見てお政も遂に其気になり、当今では孫兵衛が「あゝ仲が好いのは仕合はせなやうなものゝ、両方とも若い者同志だから、さうでもない心得違ひが有ッてはならぬから、お前が始終看張ッてゐなくッてはなりませぬぜ。」トいッても、お政は、「ナアニ大丈夫ですよ、また些とやそッとの事なら有ッたッて好い事さ。アネ、到底早かれ晩かれ一所にしようと思ッてる所ですものヲ。」ト、ヤッと[illegible]ゐる所ゆゑ、今文三の説話を聞いて当惑をしたも其筈の事で、[illegible]有ッやうになれば、到底妻を貰はずに置けますまいが、しかし気心も解らぬ者を無暗に貰ふのは余りドッとしませぬから、此縁談はまづ断ッてやらうかと思ひます。」と常に諳ッた文三の決心を聞いて、お政は漸く眉を開いて切りに点頭き、「さうともネ〳〵、[illegible]母親さんの気に入ッたからッて、肝腎のお前さんの気に入らなきやア不熟の基だ。しかし、よく断はしたッた。実はネ、お前さんのお嫁の事に就ちやア、些イと良人でも考へてる事があるんだから、是から先き母親さんが、どんな事を言ッておよこしでも、チョイと私に耳打してから返事を出すやうにしてお呉んなさいヨ。いづれ良人でお話し申すだらうが、些イと考へてる事があるんだから……それは然うと、母親さんの貰ひ度いとお言ひなのは、どんなお子だか、チョイと其写真をお見せナ。」トいはれて、文三はさもきまりの悪るさうに、

「エ、寫眞ですか、寫眞は‥‥私の所には有りません。先刻アノ何が‥‥お勢さんが何です‥‥待ツて往ツてお仕舞ひなすツた‥‥。」

トいふ光景で、母親も叔父夫婦の者も、殆どする所は思ひ〳〵ながら、一樣に今年の晩れるを待佗びてゐる矢端、誰れの望みも、彼れの望みも、一ツにからげて背負ツて立つ文三が、（話を第一回に戻して今日思懸けなくも‥‥諭旨免職となツた。さても星煞といふものは、是非のないもの。トサ、昔氣質の人ならば、言ふ所でも有らうか。

第四回　言ふに言はれぬ胸の中

さて其日も、漸く暮れるに間もない五時頃に成ツても、叔母もお勢も更に歸宅する光景も見えず、何時まで待ツても果てしのない事ゆゑ、文三は獨り夜食を濟まして、二階の椽端に端居しながら、身を丁字欄干に寄せかけて暮れ行く空を眺めてゐる。此時日は既に萬家の棟に沒しても尚ほ餘殘の影を留めて、西の半天を薄紅梅に染めた。顧みて東方の半天を眺むれば、淡然とあがツた水色、諦視めたら宵星の一つ二つは鑿り出せさうな空合。幽かに聞える傳通院の暮鐘の音に誘はれて、塒へ急ぐ夕鴉の聲が、彼處此處に聞えて喧ましい。既にして日はパッタリ暮れる。四邊はほの暗くなる。仰向いて瞻る蒼空には、餘殘の色も何時しか消え失せて、今は一面の青海原。星さへ處斑に燦き出でて、殆んど交睫をするやうな眞似をしてゐる。今しがたまで見えた隣家の前栽も、蒼然たる夜色に偸まれて、そよ吹く小夜嵐に、立樹の所在を知るほどの闇さ。デモ、土藏の白壁は、流石に白い丈けに見透かせば見透かされる‥‥サッと軒端近くに羽音がする。囘首ツて觀る‥‥何も眼に遮るものとてはなく、唯最う薄闇い而已。

心ない身も、秋の夕暮には哀を知るが習ひ。況して文三は糸目の切れた奴凧の身の上、其時々の風次第で、落着く先は籬の梅か、物干の竿か、見極めの附かぬ所が浮世とは言ひながら、父親が歿してから今十年、生死の海のうやつらやの高浪に、搖られ搖られて辛うじて泳出した官海も矢張波風の靜まる間がないことゆゑ、どうせ一度は捨小舟の寄邊ない身に成らうも知れぬと、兼て覺悟をして見ても、其處が凡夫のかなしさで、危に慣れて見れば苦にもならず、宛に成らぬ事を宛にして、文三は今歳の暮にはお袋を引取ツて、チト老樂をさせずばなるまい、國へ歸ると言ツても、まさかに素手でも往かれまい、親類の所への土產は何にしよう。「ムキ」にしようか品物にしようかと、胸で彈いた算盤の桁は合ひながらも、兎角合ひかねるは人の身のつばめ、今まで見てゐた盧生の夢も一炊の間に覺め果てて「ア、また情ない身の上になツたかナア‥‥。」

俄にパッと西の方が明くなツた。見懸けた夢を其儘に文三が振返ツて視遣る向うは隣家の二階。戸を繰り忘れたものか、まだ障子の儘で人影が射してゐる‥‥。スルト其人影が見る間にムク〳〵と膨れ出して、好加減の怪物となる。‥‥パッと消失せて仕舞ツた跡は、また常闇。文三はホッと吐息を吻いて、顧みて我家の中庭を瞰下ろせば、處狹きまで植駢べた草花立樹なぞが、佗し氣に啼く蟲の音を包んで、黯黑の中からヌッと半身を挺出して、硝子張の障子を漏れる火影を受けてゐる所は、家内を覗ふ曲者かと怪まれる‥‥ザワ〳〵と庭の樹立を揉む夜風の餘りに顏を吹かれて、文三は慄然と身震をして起揚り、居間へ這入ツて手探りで洋燈を點し、立膝の上に兩手を重ねて、何をともなく目守めた儘、暫くは唯茫然‥‥‥不圖手近に在ツた藥罐の白湯を茶碗に汲取りて、一息にグッと飲乾し、肘を枕に横に倒れて天井に圓く映

る洋燈の火影を目守めながら、莞爾と片頬に微笑を含んだが、開いた口が結ばッて前齒が姿を隱すに連れ、何處からともなくまた、愁の色が顏に顯はれて參ッた。

「それはさうと如何しようか知らん、到底言はずには置けん事たから、今夜にも歸ッたら、斷念ッて言ッて仕舞はうか知らん。嘸、叔母が厭な面をする事だらうナア……眼に見えるやうだ……。しかし其樣な事を苦にしてゐた分には埒が明かない、何にも是れが金錢を借りようといふのではなし、毫しも恥ケ敷事はない。チョッ、今夜言ッて仕舞はう。……だが……お勢がゐては言ひ難いナ、若しヒョッと彼娘の前で厭味なんぞを言はれちやア困る。是は何でも居ない時を見て言ふ事だ。ゐない……時を……見……。何故、何故言ひ難い。苟も男兒たる者が、零落したのを恥づるとは何だ。其樣な小膽な。糞ッ、今夜言ッて仕舞はう。それは勿論、彼娘だッて口へ出してこそ言はないが、何んでも、來年の春を樂しみにしてゐるらしいから、今唐突に免職になッたと聞いたら、定めて落膽するだらう。しかし、落膽したからと言ッて、心變りをするやうな、其樣な浮薄な婦人ぢやアなし、且つ通常の婦女子と違ッて教育も有ることだから、大丈夫、其樣な氣遣ひはない。それは決してないが、叔母だテ。……ハテナ、叔母だテ。叔母はあゝいふ人だから、我が免職になッたと聞いたら、急にお勢を寡れるのが厭になッて、無理に彼娘を、他へ嫁づけまいとも言はれない、さうなッたからと言ッて、此方は何も固い約束がして有るんでないから、否、さうは成りませんとも言はれない。……嗚呼つまらん、つまらん、幾程おもひ直してもつまらん。全體、何故我を免職にしたんだらう。解らんな。自惚ぢやアないが、我だッて何も役に立たないといふ方でもなし、また殘された者だッて、何も別段、役に立つといふ方でもなし。して見れば矢張課長におべッからなかッたから、其れで免職にされたのかな。……實に課長は失敬な奴だ、課長も課長だが、殘された奴等もまた卑屈極まる。僅かの月給の爲めに腰を折ッて、奴隷同樣な眞似をするなんぞッて、實に卑屈極まる。……しかし……待てよ……しかし今まで免官に成ッて、程なく復職した者がないでも無いから、ヒョッとして明日にも召喚狀が……イヤ……來ない。召喚狀なんぞが來て耐るものか。よし來たからと言ッて、今度は此方から辭して仕舞ふ。誰れが何と言はうと關はない、斷然辭して仕舞ふ。しかし、其れも短氣かな、矢張召喚狀が來たら復職するかナ。……馬鹿奴。それだから我は馬鹿だ、そんな架空な事を宛にして、心配するとは、何んだ馬鹿奴。それよりか、まづ差當り、エート、何んだッけ……さう/\免職の事を叔母に咄して……嘸厭な面をするこッたらうな。……しかし、咄さずにも置かれないから、思切ッて今夜にも叔母に咄して……ダが、お勢のゐる前では……チョッ、ゐる前でも關はん、叔母に咄して……ダガ、若し、彼娘のゐる前で、口汚なくでも言はれたら……チョッ關はん、お勢に咄して、イヤ……お勢ぢやない、叔母に咄して……さぞ……厭な顏……厭な顏を咄して……口……口汚なく咄……して……ア、頭が亂れた……。

ト、ブル/\と頭を左右へ打振る。

轟然と駈けて來た車の音が家の前でパッタリ止まる。ガラ/\と格子戸が開く。ガヤ/\と人聲がする。ソリヤコソと、文三がまづ起直ッて、度胸をついた兩手を杖に起たんとしてはまた坐り、坐らんとしてはまた起つ。腰の蝶番は滿足でも、胸の蝶番が、「言ッて仕舞はうか」「言難いナ」と離れ/\に成ッてゐるから、急には起揚られぬ。……俄に蹶然と起揚ッて、

梯子段の下口まで參ツたが、不圖立止まり、些し躊躇ツてゐて、チョッ言ツ「仕舞はう。」ト獨言を言ひながら急足に二階を降りて、奥座鋪へ立入る――奥座鋪の長手の火鉢の傍に年配四十恰好の年増、些し痩肉で、色が淺黑いが、小股の切上ッた、垢抜けのした、何處ともでんぼふ肌の、萎れてもまだ見處のある花。櫛卷とかいふものに髮を取上げて、小辨慶の絲織の袷衣と養老の浴衣とを重ねた奴を素肌に着て、黑繻子と八段の腹合せの帯をヒッカケに結び、微醉機嫌の銜楊枝でいびつに坐ツてゐたのはお政で、文三の挨拶するを見て、

「ハイ只今、大層遲かツたらうネ。」

全體今日は何方へ。」

「今日はネ、須賀町から三筋町へ廻らうと思ツて家を出たんだアネ。さうするとネ、須賀町へ往ツたら、ツイ近所に、あれは、エート、藝人……なんとか言ツたツけ、藝人……」

「親睦會。」

「それそれ、その親睦會が有るから一緒に往かうツてネ、お濱さんが勸めきるんサ。私は新富座か、二丁目なら兎も角も、其樣な珍木會とか、親睦會とかいふものなんざア、七里けツぱいだけれども、お勢……ウーイプー……お勢が往き度いといふもんだから、仕樣事なしのお交際で往ツて見たがネ、思ツたよりはサ、私はまた親睦會といふから、大方演じゆつ會のやうな種のもんかしらとおもツたら、なアに矢張品の好い寄席だネ、此度文さんも往ツて御覽な、木戸は五十錢だよ。」

「ハア然うですか、其れでは孰れまた。」

說話が些し斷絶れる。文三は肚の裏に「同じ言ふのなら、お勢の居ない時だ。チョッ、今言ツて仕舞はう。」ト思ひ決めて、今將に口を開かんとする。……折しも緣側にバタバタと跫音がして、スラリと背後の障子が開く。振反ツて見れば……お勢で、年は鬼もといふ十八の娘盛り、瓜實顏で富士額、生死を含む眼元の鹽にピンとはねた眉で力味を付け、壺々口の緊笑ひにも愛嬌をくんで無暗には滴さぬほどのさび。背はスラリとして、風に搖めく女郎花の、一時をくねる細腰もしんなりとしてなよやか。慾には最うすこし、生際と襟足とを善くして貰ひ度いが、何にしても七難を隱すといふ雪白の羽二重肌、淺黑い親には似ぬ鬼子でない天人娘、艶やかな黑髮を惜氣もなく、グッと引詰めての束髮。薔薇の花插頭を插したばかりで、臙脂も莟めねば鉛華も施けず、衣服とても絲織の袷衣に、友禪と紫繻子の腹合せの帯か何かで、さして取繕ひもせぬが、故意とならぬ眺めはまた格別なもので、火をくれて枝を撓めた作花の、厭味のある色の及ぶ所でない。衣通姫に小町の衣を懸けたといふ文三の品題は、それは、惚れた慾眼の贔屓沙汰かも知れないが、兎にも角にも十人並優れて美しい。座鋪へ這入ざまに、文三と顏を見合はして莞然。チョイと會釋をして摺足でズーと火鉢の側まで參り、温雅に座に着く。

お勢と顏を見合はせると、文三は不思議にもガラリ氣が變ツて、咽元まで込み上げた免職の二字を鵜呑みにして何喰はぬ顏色、肚の裏で「最うすこし經ツてから。」

「母親さん、咽が渴いていけないから、お茶を一杯入れて下さいナ。」

「アイヨ。」

トいツてお政は茶箪笥を覗き、

「オヤオヤ、茶碗が皆汚れてる……鍋。」

ト呼ばれて出て來た者を見れば、例の日の丸の紋を染拔いた首の持主で、空嘯いた鼻の端に突出された汚穢物を受取り、振榮えのあるお尻を振立てて却退る。軈て洗ッて持ッて來る、茶を入れる、サア其れからが、今日聞いて來た歌曲の噂で、母子二つの口が結ばる暇なし。免

職の事を吹聴し度くも、言出す潮がないので、文三は余儀なく聴き度くもない咄を聞いて、空しく時刻を移す内、説話は漸くに清元、長唄の優劣論に移る。

「母親さんは、自分が清元が出来るもんだから、其様な事をお言ひだけれども、長唄の方が好いサ。」

「長唄も岡安ならまんざらでもないけれども、松永は唯ツこむばかりで、面白くもなんとも有りやアしない。それよりか清元の事サ、どうも意氣でいゝワ……四谷で初て逢うた時、すいたらしいと思うたが、因果な縁の絲車」

ト中音で口癖の清元を唄ッて、ケロリとして、

「いゝワ。」

「其通り、品格がないから嫌ひ。」

「また始まッた。ヘン、跳馬ぢやアあるまいし、番毎に品々も五月蠅い。」

「だッて、人間は品格が第一ですワ。」

「ヘン、そんなにお人柄なら、煮込みのおでんなんぞを喰べ度いと言はないがいゝ。」

「オヤ、何時、私がそんな事を言ひました。」

「ハイ、一昨日の晩いひました。」

「謔ばッかし。」

トは言ッたが、大いにへこんだので大笑ひとなる。不圖お政は、文三の方を振向いて、

「アノ、今日出懸けに母親さんの所から郵便が着いたッけが、お落掌か。」

「ア、眞に然うでしたッけ、薩張忘却れてゐました。……エー母からも、此度は別段に手紙を差上げませんが、宜しく申上げろと申すことで。」

「ハアさうですか、其れは。それでも母親さんは、何時もお異ンなすッたことも無くッて。」

「ハイ、お蔭さまと丈夫ださうで。」

「それはマア、何よりの事だ。嘸、今年の暮を樂しみにして、およこしなすッたらうネ。」

「ハイ、指ばかり屈ッて居ると申してよこしました……。」

「さうだらうてネ。可愛い息子さんの側へ來るんだものヲ。それをネー、何處かの人みたやうに、親を馬鹿にしてサ。一口いふ二口目には、直に揚足を取るやうだと義理にも可愛いと言はれないけれど、文さんは親思ひだから、母親さんの戀しいのも亦一倍サ。」

トお勢を尻目にかけて、からみ文句で宛る。お勢はまた始まッた、といふ顔色をして彼方を向いて仕舞ふ。文三は余儀なささうに、エヘ、、笑ひをする。

「それから、アノー、例の事ネ、あの事をまた、何とか言ッてお遣しなすッたかい。」

「ハイ、また言ッてよこしました。」

「なんてッてネ。」

「ソノー、氣心が解らんから厭だといふなら、エー、今年の暮、歸省した時に、逢ッてよく氣心を洞察いた上で極めたら好からう、といッて遣しましたが、しかし……。」

「なに、母親さん。」

「エ、ナニサ、アノ、ソラお前にも此間話したアネ、文さんの。」

お勢は獨り切りに點頭く。

「ヘー。其様な事を言ッておよこしなすッたかい、ヘー、然うかい……それに附けても、早く内で歸ッて來れば好いが……イエネ、此間もお咄し申した通り、お前さんのお嫁の事に付いちやア、内でも些と考へてる事も有るんだから……尤も私も聞いて知ッてる事だから、今咄して仕舞ッてもいゝけれども……。」

ト些し考へて、

「何時返事をお出しだ。」

「返事は最う出しました。」

「エ。モー出したの。今日。」

「ハイ。」

「オヤマア文さんでもない。私になんとか、一言咄してから、お出しならいゝのに。」
「デスガ……」
「それはマア兎も角も、何と言ッてお上げだ。」
「エー、今は仲々婚姻どころぢやアないから……。」
「アラ、其様な事を云ッてお上げぢやア、母親さんが何ほ心配なさらアネ。それよりか……。」
「イエ、まだお咄し申さぬから何ですが……。」
「マア、私の言ふ事をお聞きよ。それよりかアノ、叔父も何だか考へがあるといふから、いづれ篤りと相談した上でとか、さもなきやア此地に心當りがあるから……。」
「母親さん、其様な事を仰しやるけれど、文さんは此地に、何か心當りがお有んなさるの。」
「マアサ、有ッても無くッても、さう言ッてお上げだと、母親さんが安心なさらアネ……イエネ、親の身に成ッて見なくッちやア解らぬ事だけれども、子供一人身を固めさせようといふのは、どんなに苦勞なもんだらう。だから、お勢みたやうな如此な親不孝な者でも、さう何時までもお懐中で遊ばせても置けないと思ふと、私は苦勞で／＼ならないから、此間も私がネ、「お前も最う押付けお嫁に往かなくッちやアならないんだから、ソノー、なんだとネー、何時までも其様に子供の様な心持でゐちやアなりませんと、それも母親さんのやうに此様な氣樂な家へ、お嫁に往かれりやア兎も角もネー、若しヒョッと先に姑でもある處へ往ッて御覽、なか／＼此様なに、我儘氣儘をしちやアゐられないから、今の内に些と、覺悟をして置かなくッちやアなりませんよ。」と、私が、先へ寄ッて苦勞させるのが可憐さうだから、爲をおもッて言ッて遣りやアネ、文さん、マア聞いてお呉れ、斯うだ。『ハイ、私にやア私の了簡が有ります、ハイ、お嫁に往かうと往くまいと私の勝手で御座います。』といふんだよ。それからネ、私が、『オヤ、其れぢやアお前はお嫁に往かない氣かエ。』と聞いたらネ、『ハイ、私は生一本で通しますッて……』マア、呆れかへるぢやアないかネー、文さん。何處の國に、お前、尼ぢやあるまいし、亭主持たずに一生暮すものが有る者かネ。」

是は萬更形のないお咄でもない。四五日前、何かの小言序に、お政が尖り聲で、「ほんとにサ、戯談ぢやアない、何歳になるとお思ひだ。十八ぢやアないか。十八にも成ッてサ。好頃嫁にでも往からといふ身でゐながら、なんぼなんだッて、餘り勘辨がなさすぎらア。ア、／＼早く嫁にでも遣り度い。嫁に往ッて、小喧しい姑でも持ッたら、些たア親の難有味が解るだらう。」ト言ッたのが原因で、些ばかりいぢり合をした事が有ッたが、お政の言ッたのは全く其作替で。

「トいふが畢竟るとこ、是れが晩熟だからの事サ。私共がこの位の時分にやア、チョイとお酒落をしてサ、小色の一ッも拵了だもんだけれども……。」
「また猥褻。」

トお勢は顔を顰める。

「オホヽヽヽ、ほんとにサ。仲々小惡戯をしたもんだけれども、此娘はヅー體ばかり大きくッても、一向しきなお懐中だもんだから、それで何時まで經ッても、世話ばッかり燒けてならアしないんだよ。」
「だから母親さんは厭よ、些とばかりお酒に醉ふと、直に親子の差合ひもなく、其様な事をお言ひだものヲ。」
「へー／＼、恐れ煎豆はじけ豆ッ。あべこべに御意見か。ヘン、親の謗はしりよりか、些と自分の頭の蠅でも逐ふがいゝや、面白くもない。」
「エヘヽヽヽ。」
「イエネ、此通り親を馬鹿にしてゐて、何を言

ツても、達も、私共の言ふ事を用ひるやうな、
そんな素直なお嬢さまぢやアないんだから、此
度文さん、ヨーク腹に落ちるやうに、言ツて聞
かせてお呉んなさいよ。これでもお前さんの言ふ
事なら、些たア聞くかも知れないから。」
トお政は又もお勢を屁目に懸ける。折しも紙
襖一ツ隔てゝ、お鍋の聲として、
「あんな帶留……どめ……を。」
此方の三人は、吃驚して顏を見合はせ、「オヤ、
鍋の寢言だよ。」と果ては大笑ひになる。お政は
仰向いて柱時計を眺め、
「オヤ最う十一時になるよ、鍋の寢言を言ふの
も無理はない。サア／＼、寢ませう／＼、あん
まり夜深しをすると、また翌日の朝がつらい。
それぢやア文さん、先刻の事はいづれまた、翌
日にも緩り噺しませう。」
「ハイ私も……私も是非、お噺し申さなけれ
ばならん事が有りますが、いづれまた明日……
それではお休み。」
ト挨拶をして、文三は座鋪を立出で、梯子段
の下まで來ると、後より、
「文さん、貴君の處に今日の新聞が有ります
か。」
「ハイ有ります。」
「最うお讀みなすツたの。」
「讀みました。」
「それぢやア拜借。」
トお勢は、文三の跡に從いて二階へ上る。文
三が机上に載せた新聞を取ツて、お勢に渡す
と、
「文さん。」
「エ。」
返答はせずして、お勢は唯笑ツてゐる。
「何です。」
「何時か頂戴した寫眞を、今夜だけお返し申し
ませうか。」
「何故。」
「それでも、お淋敷からうとおもツて、オホヽ
ホ。」
ト笑ひながら、逃ぐるが如く二階を驅下りる。
そのお勢の後姿を見送ツて、文三は吻と溜息
を吐いて、
「ます／＼言難い。」
一時間程を經て、文三は漸く寢支度をして褥
へは這入ツたが、さて眠られぬ儘に、過去將來
を思ひ回らせば回らすほど、尚ほ氣が冴えて眼
も合はず。是ではならぬと氣を取直し、緊敷雨
眼を閉ぢて、眠入ツた風をして見ても、自ら欺
くことも出來ず、餘儀なく寢返りを打ち、溜息
を吻きながら、眼も合さずして夢を見てゐる內に、
一番鷄が唱ひ、二番鷄が唱ひ、漸く曉近くな
る。「寧そ今夜は此儘で。」トおもふ頃に、漸く
眼がしよぼついて來て、頭が亂れだして、今迄
眼前に隱見いてゐた母親の白髮首に、斑な黑髭
が生えて……課長の首になる、そのまた恐らし
い髭首が、暫くの間、眼まぐるしく水車の如
くに廻轉ツてゐる內に、次第々々に小さく成ッ
て、……軈て相好が變ッて　何時の間にか
薔薇の花插頭を插して……お勢の　首……に
……な……。

第五回　胸算違ひから見一無法な難題

枕頭で喚覺ます下女の聲に、見果てぬ夢を
驚かされて、文三が狼狽へた顏を振揚げて向う
を見れば、はや障子には朝日影が斜に射して
ゐる。「ヤレ寢過したか……。」と思ふ間もなく、
引續いてムク／＼と浮み上ッた「免職」の二字で
狹い胸がまづ塞がる。茉莨を振掛けられた
死蛙の身で躍り上り、衣服を更めて夜の物を
揚げあへず、楊枝を口へ頰張り、手拭を前帶
に插んで周章てゝ、二階を降りる。其足音を聞

きつけてか、奥の間で「文さん疾く爲ないと遲くなるよ。」トいふお政の聲に主角はないが、文三の胸にはぎツくり應へて、返答に迷惑く。そこで頰張ツてゐた楊枝を是れ幸ひと、我にも解らぬ出鱈目を口籠勝に言ッてまづ一寸遁れ、匆々に顏を洗ッて朝飯の膳に向ッたが、胸のみ塞がッて箸の步みも止まりがち、三膳の飯を二膳で濟まして、何時もならグッと突き出す膳も、ソッと片寄せるほどの心遣ひ。身體まで俄に小さくなッたやうに思はれる。

文三が食事を濟まして縁側を廻り、竊かに奧の間を覗いて見れば、お政ばかりでお勢の姿は見えぬ。お勢は近屬、早朝より駿河臺邊へ英語の稽古に參るやうになッたことゆゑ、偖は今日も最う出かけたのかと、恐る／＼座鋪へ這入ッて來る。その文三の顏を見て、今まで火鉢の琢磨をしてゐたお政が、俄に光澤布巾の手を止めて、不思議さうな顏をしたも其筈、此時の文三の顏色がツイ一通の顏色でない。蒼ざめてゐて力なささうで、悲しさうで、恨めしさうで、恥かしさうで、イヤハヤ何とも言樣がない

「文さん、どうかお爲か、大變顏色がわりいよ。」

「イエ、如何も爲ませぬが……。」

「其れぢやア疾くお爲よ、ソレ御覽な、モウ八時にならアネ。」

「エー、まだお話し……申しませんでしたが……實は、さくじつ……め……め……

息氣はつまる、冷汗は流れる、顏は赧くなる、如何にしても言切れぬ。暫く無言でゐて、更に出直して、

「ム、めん職になりました。」

ト一思ひに言放ッて、ハッと差俯向いて仕舞ふ。聞くと等しく、お政は手に持ッてゐた光澤布巾を宙に釣るして、「オヤ」と、一聲叫んで身を反らした儘、何も出ではこそ、暫くは唯茫然として文三の貌を目守めてゐたが、稍あッて忙はしく布巾を擲却り出して、小膝を進ませ、

「エ、御免にお成りだとエ……オヤマア、どうしてマア。」

「ど、ど、如何してだか……私にも解りませんが……大方……ひ、人減らしで……」

「オーヤ／＼、仕樣がないネー、マア御免になッてサ、ほんとに仕樣がないネー。」ト落膽した容子。須臾あッて、

「マアそれはさうと、是からは如何して往く積りだエ。」

「どうも仕樣が有りませんから、母親には最う些し國に居て貰ッて、私はまた官員の口でも探さうかと思ひます。」

「官員の口てッたッて、チョックラチョイと有りやアよし、無からうもんなら、また何時かのやうな、憂い思ひをしなくッちやアならないやアネ……だから私が言はない事ちやアないんだ、些イと課長さんの處へも御機嫌伺ひにお出でお出でと、口の酸ばくなるほど言ッても、强情張ッてお出でなかッたもんだから、其れで此樣な事になッたんだよ。」

「まさか然ういふ譯でもありますまいが……。」

「いゝえ、必とさうに違ひないよ。でなくッて、成程人減らしだッて、罪も咎もない者をさう無暗に御免になさる筈かないやアネ……。それとも何か、御免になッても仕樣がないやうな、わるい事をした覺えがお有りか。」

「イエ、何にも惡い事をした覺えは有りませんが……。」

「ソレ御覽なネ。」

兩人とも暫く無言。

「アノ本田さんは（此男の事は第六回に委曲し）どうだッたエ。」

「彼の男はよう御座んした。」

「オヤ善かッたかい。さうかい。運の善い方は何方へ廻つても善いんだネー、其れといふが、全體あの方は如才がなくッて、發明で、ハキ／＼し

てお出でなさるからだよ。それに聞けば課長さんの處へも、常不斷御機嫌伺ひにお出でなさるといふ事だから、必と其れで今度も善かッたのに違ひないよ。だから、お前さんも、私の言ふ事を聞いて、課長さんに取入ッて置きやア、今度も矢張善かッたのかも知れないけれども、人の言ふ事をお聞きでなかッたもんだから、其れで此樣な事になッちまッたんだ。」

「それはさうかも知れませんが、しかし、幾程免職になるのが恐いと言ッて、私にはそんな卑劣な事は……。

「出來ないとお言ひのか……。フン、痩我慢をお言ひでない、そんな了簡方だから、課長さんにも睨められたんだ。マア、ヨーク考へて御覽。本田さんのやうな、彼樣な方でさへ御免になッてはならないと思ひなさるもんだから、手間暇かいて、課長さんに取入らうとなさるんぢやアないか。まして、お前さんなんざア、さう言ッちやアなんだけれども、本田さんから見りやア……なんだから、尚更の事だ。それもネー、是れがお前さん一人の事なら、風見の鳥みたやうに、高くばッかり止まッて、食ふや食はずにゐようと居まいと、そりやア最う、如何なりと御勝手次第さ、けれども、お前さんには、母親さんといふものが有るぢやアないかエ。」

母親と聞いて、文三の萎れ返るを見て、お政は好い責道具を視付けたといふ顏付。長羅宇の烟管で席を叩くをキッカケに、

「イエサ、母親さんが、お可哀さうぢやアないかエ。マア篤り、胸に手を宛てて考へて御覽。母親さんだッて、父親さんには早くお別れなさるし、今ぢや便りにするなア、お前さんばッかりだから、如何樣にか心細いか知れない。なにも彼して、お國で一人暮しの不自由な思ひをしてお出でなさり度くもあるまいけれども、それも、是れも、皆お前さんの立身するばッかりを樂みにして、辛抱してお出でなさるんだよ。そこを些しでも汲分けてお出でなら、假令どんな辛いと思ふ事が有ッても、厭だと思ふ事があッても、我慢をしてサ、石に囓付いても出世をしなくッちやアならないと、心懸けなければならない所だ。それをお前さんのやうに、ヤ、人の機嫌を取るのは厭だの、ヤ、そんな卑劣な事は出來ないのと、其樣な我儘氣隨を言ッて、母親さんまで路頭に迷はしちやア、今日冥利がわりいぢやないか。それやア、モウ、お前さんは自分の勝手で、苦勞するんだから、關ふまいけれども、其れぢやア母親さんがお可哀さうぢやないかい。」

ト層にかゝッて極付けれど、文三は差俯向いた儘で返答をしない。

「アヽ〳〵、母親さんも彼樣に、今年の暮を樂みにしてお出でなさる處だから、今度御免にお成りだとお聞きなすッたら、嘸、マア、落膽なさる事だらうが、年を寄ッて御苦勞なさるのを見ると、眞個にお痛はしいやうだ。」

「實に母親には面目が御座んせん」

「當然さ、二十三にも成ッて、母親さん一人さへ、樂に養す事が出來ないんだもの。フヽン、面目が無くッてサ。」

ト、ツンと濟まして空嘯き、烟草を環に吹いてゐる、其のお政の半面を、文三は怖らしい顏をして佶と睨付けて、何事をか言はんとしたが……氣を取り直して、莞爾微笑した積りでも、顏へ顯はれた所は苦笑ひ。震聲とも附かず、笑聲とも附かぬ聲で、

「へヽヽ、面目は御座んせんが、しかし……出……出來た事なら、仕樣が有りません。」

「何だとエ。」

ト言ひながら、徐かに此方を振向いたお政の顏を見れば、何時しか額に芋蠋ほどの青筋を張らせ、癇癪の眥を釣上げて、脣をヒン曲け

てゐる。

「イエサ、何とお言ひだ。出來た事なら仕樣が有りませんと……誰れが出來した事たエ、誰れが御免になるやうに仕向けたんだエ、みな自分の頑固から起ッた事ぢやアないか。其れも傍で氣を附けぬ事か、さんざッぱら、人に世話を燒かして置いて、今更御免になりながら面目ないとも思はないで、出來た事なら仕樣が有りませんとは、何の事たエ。それはお前さんあんまりといふもんだ。餘り人を踏付けにすると言ふもんだ。全體マア人を何だと思つてお出でだ。そりやア、お前さんの事だから、鬼老婆とか、糞老婆とか言ッて、他人にしてお出でかも知れないが、私ア何處までも叔母の積りだよ。ナアニ、是が他人で見るがいゝ、お前さんが御免になッたッて成らなくッたッて、此方にやア痛くも痒くも何とも無い事たから、何で世話を燒くもんですか。けれども、血は繋らずとも、緣あつて叔母となり、甥となりして見れば、然らしたもんぢやア有りません。ましてお前さんは、十四の春ポッと出の山出しの時から長の年月、此私が婦人の手一つで頭から足の爪頭までの事を世話アしたから、私はお前さんを、御迷惑かは知らないが、血を分けた息子同樣に思ッてます。あゝやッてお勢や勇といふ子供が有ッても、些しも陰陽なくしてゐる事が、お前さんにやア解らないかエ、今までだッても然うだ、何卒マア、文さんも首尾よく立身して、早く母親さんを此地へお呼び申すやうにして上げ度いもんだと思はない事は唯の一日も有りません。そんなに思ッてる所だものを、お前さんが御免にお成りだと聞いちやア私は愉快はしないよ。愉快はしないから、ア、困ッた事に成ッたと思ッて、ヤレ是れからはどうして往く積りだ、ヤレお前さんの身になッたら嘸、母親さんに面目があるまいと、人事にしないで歎いたり、悔んだりして、心配してる所だから、全體なら、叔母さんの了簡に就かなくッて、から御免になッて實に面目が有りません、とか何とか、詫言の一言でも言ふ筈の所だけれど、それも言はないでもよし、聞き度くもないが、人の言ふ事を取上げなくッて御免になりながら、糞落着に落着拂つて、出來た事なら仕樣が有りませんとは、何の事たエ。マ、何處を押せば其樣な音が出ます……。アゝ〱つまらない心配をした、此方ではどこまでも實の甥と思ッて、心を附けたり、世話を燒いたりして、親切を盡してゐても、先樣ぢやア屁とも思召さない。」

「イヤ決して、然う言ふ譯ぢやア有りませんが、御存知の通り、口不調法なので、心には存じながら、ツイ……。」

「イヽエ、其樣な言譯は聞きません。なんでも私を他人にしてお出でに違ひない、糞老婆と思ッてお出でに違ひない……。此方はそんな不實な心意氣の人と知らないから、文さんも何時までも彼やつて一人でもゐられまいから、來年母親さんがお出でなすッたら、篤り御相談申して、誰れと言ッて宛もないけれども、相應なのが有ッたら一人授け度いもんだ、夫にしても外人と違ッて、文さんだお嫁をお貰ひの事だから黙ッてもゐられない。何かしら祝ッて上げなくッちやアなるまいからッて、此頃ぢやア、アノ、博多の帶をくけ直さして、コノお召縮緬の小袖を仕立直さして、あれをかうして、是れを斯うしてと、毎日々々考へてばッかりゐたんだ。さうしたら案外で、御免になるもいゝけれども、面目ないとも思はないで、出來た事なら仕樣が有りませぬと、濟まアしてお出でなさる。……アゝ〱、最ういふまい〱、幾程言ッても他人にしてお出でぢやア無駄だ。」

ト厭味文句を竝べて始終痛癢の思入、暫く有ッて、

「それもさうだが、今の其位なら、昨夕の中に、實は是々で御免になりましたと、一言位言ッたッてよささうなもんだ。お話してないもんだから、此方は其樣な事とは夢にも知らず、お辨當のお菜も毎日おんなじものばッかりでもお倦きだらう、アヽして勉強してお勤にお出での事だから、其位の事は、此方で氣を附けて上げなくッちやアならないと思ッて、今日のお辨當のお菜は、玉子燒にして上げようと思ッても鍋には出來ず、餘儀處ないから、私が面倒な思ひをして、拵へて附けましたアネ。……アヽ／＼偶に人が氣を利かせれば、此樣な事た。……しかし、飛んだ餘計なお世話でしたよネー。誰れも頼みもしないのに、……鍋。」

「ハイ。」

「文さんのお辨當は打開けてお仕舞ひ。」

お鍋女郎は、襖の彼方から横巾の廣い顏を差出して、「ヘー」ト、モッケな顏付。

「アノネ、内の文さんは、昨日御免にお成りだッサ。」

「ヘーそれは。」

「どうしても働きのある人は、フヽン、違ッたもんだよ。」

……ト半まで言切らぬ内、文三は血相を變へて突と身を起し、ツカ／＼と座鋪を立出でて我子舍へ戻り、机の前にブッ坐ッて、齒を喰切ッての悔涙、ハラ／＼と膝へ零した。暫く有ッて文三は、はぶり落ちる涙の雨を、ハンカチーフで拭止めた……が、さて、拭ッても取れないのは、沸返る胸のムシャクシャ。熟々と思廻らせば廻らすほど、悔しくも、又、口惜しくなる。免職と聞くより早く、ガラリと變る人の心のさもしさは、道理らしい愚癡の蓋で、隱蔽さうとしても看透かされる。とはいへ、其れは、忍ばうと思へば忍びもならうが、面のあたりに、意氣地なしと言はぬばかりのからみ文句。人を見括ッた一言ばかりは、如何にしても腹に据ゑかねる、何故意氣地がないとて叔母があゝ嘲り辱めたか、其處まで思ひ廻らす暇がない。唯最う腸が斷れるばかりに悔しく、口惜しく、恨めしく、腹立たしい。文三は憤然として、「ヨシ先が其氣なら、此方も其氣だ。畢竟姨と思へばこそ、甥と思へばこそ、言度い放題をも言はして置くのだ。ナニ緣を斷ッて仕舞へば赤の他人、他人に遠慮も絲瓜も入らぬ事だ……。糞ッ、面當半分に下宿をして呉れよう……。」ト腹の裏で獨言をいふと、不思議やお勢の姿が目前にちらつく。「ハテさうしては、彼娘が……」ト文三は少しく萎れたが、……不圖、又叔母の惡々しい者面を憶出して、又憤然となり、「糞ッ、止めても止まらぬぞ。」ト何時にない斷念のよさ、から腹を定めて見ると、サアモウ、一刻も居るのが厭になる、借住居かとおもへば、子舍が氣に喰はなくなる。我物でないかと思へば、緣の缺けた火入まで氣色に障る。時計を見れば早十一時、今から荷物を取旁付けて、是非とも今日中には下宿を爲よう、と思へば心までいそがれ、「糞ッ、止めても止まらぬぞ。」ト口癖のやうに言ひながら、焦氣となッて其處らを取旁付けにかゝり、何か探さうとして机の抽出を開け、中に納れてあッた年頃五十の上をゆく白髮たる老婦の寫眞にフト眼を注めて、我にもなく熟々と眺め入ッた。是れは老母の寫眞で。御存知の通り、文三は生得の親おもひ、母親の寫眞を視て我が辛苦を嘗め艱難を忍びながら、定めない浮世に存生へてゐたのは、自分一人の爲而已でない事を想出し、我と我を叱りもし又勵ましもする事何時も／＼。今も今母親の寫眞を見て、文三は日頃喰付けの感情をおこし、覺えずも悄然と萎れ返ッたが、又惡々敷い叔母の者面を憶出して又焦氣となり、拳を握り齒を喰切り、「糞ッ、止めても止まらぬぞ。」ト獨言を言ひなが

ら、再び將に取旁付に懸らんとすると、二階の上り口で、「お飯で御座いますよ、」ト下女の呼ぶ聲がする。故らに二三度呼ばして返事にも勿體をつけ、しぶ〳〵二階を降りて、氣六ケ敷い、苦り切ッた怖ろしい顏色をして奥座鋪の障子を開けると……お勢がゐる。お勢が……。今まで殘念口惜しいと而已一途に思詰めてゐた事ゆゑ、お勢の事は思出したばかりで心にも止めず、忘れるともなく忘れてゐたが、今突然、可愛らしい眼と眼を看合はせ、しをらしい口元で嫣然笑はれて見ると……淡雪の日の目に逢ッて解けるが如く胸の鬱結も解けて、ムシャクシャも消え〳〵になり、今迄の我を怪しむばかりの心の變動、心底に沈んでゐた嬉しみ、難有みが、思ひ懸けなくも、ニッコリ、顏へ浮み出し懸ッた……が、グッと飮込んで仕舞ひ、心では笑ひながら、顏では澁てゝ膳に向ッた。さて食事も濟む。二階へ立戻ッて、文三が再び取旁付に懸らうとして見たが、何となく拍子抜けがして、以前のやうな氣力が出ない。ソッと小聲で「大丈夫、」ト言ッて見たが、どうも氣が引立たぬ。依て更に出直して、「大丈夫、」と焦氣とした風をして見て、齒を喰切ッて見て、「一旦思ひ定めた事を變がへるといふ事が有るものか。……知らん、止めても止まらんぞ。」

　ト言ッて、出て往けば、彼娘を捨てなければならぬか、ト落膽したおもむき、今更未練が出てお勢を捨てるなどといふ事は勿體なくて出來ず。ト言ッて、叔母に詫言を言ふも無念。あれも厭なり、是れも厭なりで、思案の絲筋が纏れ出し、肚の裏では上を下へとゴッタ返すが、此時より既にどうやら人が止めずとも、遂には我から止まりさうな心地がせられた。「マア兎も角も、」と取旁付に懸りは懸ッたが、考へながらするので思の外暇取り、二時頃までかゝッて漸く旁付け終り、ホッと一息吐いてゐると、ミシリミシリと梯子段を登る人の跫音がする。跫音を聞いたばかりで、姿を見ずとも、文三にはそれと解ッた者か、先刻飮込んだニッコリを、改めて顏へ現はして其方を振向く。上ッて來た者はお勢で、文三の顏を見て、是もまたニッコリして、さて座鋪を見廻し、

「オヤ、大變旁付いたこと。」

「餘りヒッ散らかッてゐたから。」

　ト我知らず言ッて、文三は我を怪んだ。何故虛言を言ッたか、自分にも解りかねる。お勢は座に着きながら、さして吃驚した樣子もなく、

「アノ今母親さんがお噺しだッたが、文さん、免職におなりなすッたとネ。」

「一昨日、免職になりました。」

　ト文三も今朝とはうッて反ッて、今は其處どころで無い、と言ッたやうな顏付。

「實に面目は有りませんが、しかし幾程悔んでも出來た事は仕樣が無いと思ッて、今朝母親さんに御風聽申したが　叱られました。」

　トいッて、齒を嚙切ッて差俯向く。

「さうでしたとネー、だけれども……。」

「二十三にも成ッて、親一人樂に過す事の出來ない意氣地なし、と言はないばかりに仰しゃッた。」

「然うでしたとネー、だけれども……」

「成程私は意氣地なしだ。意氣地なしに違ひないが、しかし、なんぼ叔母甥の間柄だと言ッて、面と向ッて意氣地なしだ、と言はれては腹も立たないが、餘り……。」

「だけれども、あれは母親さんの方が不條理ですワ。今もネ、母親さんが得意になッてお話しだッたから、私が議論したのですよ。議論したけれども、母親さんには私の言ふ事が解らないと見えてネ、唯腹ばッかり立ててゐるのだから、教育の無い者は仕樣がないのネー。」

　ト極り文句。文三は垂れてゐた頭をフッと振

擧けて、
「エ、母親さんと議論を成すッた。」
「ハア。」
「僕の爲めに。」
「ハア、君の爲めに辯護したの。」
「ア、。」
ト言ッて、文三は差俯向いて仕舞ふ。何だか膝の上へ、ポッタリ零た物が有る。
「どうかしたの、文さん。」
トいはれて、文三は漸く頭を擡げ、莞爾笑ひ、其癖眼を濕ませながら、
「どうもしないが……實に……實に嬉しい。……母親さんの仰しやる通り、二十三にも成ッて、お袋一人さへ過しかねる、其様な腑甲斐ない私をかばッて、母親さんと議論をなすッたと。實に……。」
「條理を說いても解らない癖に、腹ばかり立ててるから、仕樣がないの。」
ト少し得意の體。
「ア、それ程までに私を……思ッて下さるとは知らずして、貴孃に向ッて匿立てをしたのが今更恥かしい。ア、恥かしい。モウかうなれば、打明けてお話しして仕舞はう。實は是れから、下宿をしようかと思ッてゐました。」
「下宿を。」
「サ、爲ようかと思ッてゐたんだが、しかし、最う出來ない。他人同様の私をかばッて、實の母親さんと議論をなすッた、その貴孃の御親切を聞いちや、しろと仰しやッても、最う出來ない。……が、さうすると、母親さんにお詫を申さなければならないが……。」
「打遣ッてお置きなさいよ。あんな教育の無い者が、何と言ッたッて好う御座んさアネ。」
「イヤさうでない、其れでは濟まない。是非お詫を申さうが、併し、お勢さん、お志は嬉しいが、最う母親さんと議論をすることは罷めて下さい。私の爲めに貴孃を不孝の子にしては濟まないから。」
「お勢。」
ト下座鋪の方で、お政の呼ぶ聲がする。
「ア、母親さんが呼んでお出でなさる。」
「ナアニ、用も何にも有るんぢやアないの。」
「お勢。」
「マア、返事を爲さいよ。」
「お勢〳〵。」
「ハアイ。……チョッ五月蠅いこと。」
ト起上る。
「今話した事は皆母親さんにはコレですよ。」
ト文三が手首を振ッて見せる。お勢は唯點頭いた而已で言葉はなく、二階を降りて奥座鋪へ參ッた。
先程より癇癪の眥を釣り上げて、手藥煉引いて待ッてゐた母親のお政は、お勢の顔を見るより早く、込上げて來る小言を、一時にさらけ出しての大怒鳴。
「お……お……お勢、あれ程呼ぶのがお前には聞えなかッたかエ。聾者ぢやあるまいし、人が呼んだら好加減に返事をするがいゝ……。全體、まア、何の用が有ッて二階へお出でだ。エ、何の用が有ッてだエ。」
ト逆上せあがッて極め付けても、此方は一向平氣なもので、
「何にも用は有りやアしないけれども……。」
「用がないのに何故お出でだ。先刻あれほど、最う是からは、今迄のやうにヘタクタ二階へ往ッてはならない、と言ッたのが、お前にはまだ解らないかエ。さかりの附いた犬ぢやアあるまいし、間がな透かな、文三の傍へばッかし往きたがるよ。」
「今までは二階へ往ッても善くッて、是からは惡いなんぞッて、其様な不條理な。」
「チョッ解らないネー、今迄の文三と文三が違

ひます。お前にやア免職になッた事が解らないかエ。」

「オヤ、免職に成ッてどうしたの。文さんが人を見ると咬付きでもする樣になッたの、ヘー然う。」

「な、な、な、なんだとお言ひだ……。コレお勢、それはお前、あんまりと言ふもんだ。餘り親を馬、馬、馬、馬鹿にすると言ふもんだ。」

「ば、ば、ば、馬鹿にはしません。ヘー私は、條理のある處を主張するので御座います。」

ト脣を反らしていふを、聞くや否や、お政は、忽ち顏色を變へて、手に持ッてゐた長羅字の烟管を席へ放り付け、

「エヽ、くやしい。」

ト齒を喰切ッて口惜しがる。その顏を横眼でジロリと見たばかりで、お勢はすまアし切ッて、座鋪を立出でて仕舞ッた。

しかしながら、此を親子喧嘩と思ふと、女丈夫の本意に負く。どうして〳〵親子喧嘩……其樣な不道德な者でない。是れはこれ辱なくも難有くも、日本文明の一原素ともなるべき新主義と、時代後れの舊主義と、衝突をする處。よくお眼を止めて御覽あられませう。

其夜、文三は、斷念ッて叔母に詫言をまをしたが、ヤ、捏ずッたの捏ずらないのと言ッて、それは〳〵……まづお政が今朝言ッた厭味に、輪を懸け枝を添へて、百曼陀羅并べ立てた擧句、お勢の親を麁末にするのまでを、文三の罪にして難題を言懸ける。されども文三が、死んだ氣になッて、諸事お容されてで持切ッてゐるに、お政もスコだれの拍子抜けといふ光景で、厭味の音締をするやうに成ッたから、まづ好しと思ふ間もなく、不圖又文三の言葉尻から燃出して、以前にも立優る火勢、黑烟焰々と顏に漲る所を見ては、迚も鎭火しさうも無かッたのも、文三が濟みませぬの水を斟盡して澆ぎかけたので、次第々々に下火になッて、プス〳〵燻になッて、遂に不精々々に鎭火る。文三は吻と一息。寸善尺魔の世の習ひ、またもや御意の變らぬ内にと、挨拶も匆々に起ッて座鋪を立出で、二三歩すると背後の方で、お政がさも聞えよがしの獨言。

「アヽ〳〵、今度こそは厄介拂ひかと思ッたら、また背負込みか。」

第六回　どちら附かずのちくらが沖

秋の日影も稍傾いて、庭の梧桐の影法師が背丈を伸ばす三時頃、お政は獨り徒然と、長手の火鉢に凭れ懸ッて、斜に坐りながら、火箸を執ッて灰へ書く樂書も倭文字、牛の角文字いろいろに、心に物を思へばか、快々たる顏の色。動ともすれば太息を吐いてゐる。折しも表の格子戸をガラリと開けて、案内もせず這入ッて來て、隔の障子の彼方から、ヌッと顏を差出して、

「今日は。」

ト挨拶をした男を見れば、何處かで見たやうな顏と思ふも道理。文三の免職になッた當日、打連れて神田見附の裏より出て來た、ソレ中脊の男と言ッた彼の男で、今日は退省後と見えて、不斷着の秩父縞の袷衣の上へ、南部羽織をはおり、チト疲勞れた博多の帶に、袂時計の紐を捲付けて、手に土耳古形の帽子を携へてゐる。

「オヤ何人かと思ッたらお珍らしいこと。此間は薩張りお見限りですネ。マアお這入なさいナ。それとも老婆ばかりぢやアお厭かネ。オホホヽヽ。」

「イヤ結構…結構も可笑しい。アハヽヽヽ。トキニ何は、内海は居ますか。」

「ハア居ますよ。」

「其れから鳥渡行ッて来てから、それから此間の復讐だ。覺悟をしてお置きなさい。」
「返討ちやアないかネ。」
「違ひない。」
ト何歟判らぬ事を言ッて、中年の男は二階へ上ッて仕舞ッた。
歸ッて来ぬ間に、チヨツピリ此男の小傳をと言ふ可き處なれども、何者の子で、如何な教育を享け、如何な境界を渡ッて來た事か、過去ッた事は山媼の霞に罩ッておぼろ〳〵、トント判らぬ事而已。風聞に據れば、總角の頃に早く怙恃を喪ひ、寄邊渚の棚なし小舟では無く宿無小僧となり、彼處の親戚、此處の知己と、流れ渡ッてゐる内、曾て侍奉公までした事が有るといひ、イヤ無いといふ、紛々たる人の噂は、滅多に宛にならぬ坂や、兒手柏の上露よりもろいもの、と旁付けて置いて、さて正味の確な所を掻摘んで誌せば、産は東京で、水道の水臭い士族の一人だと、履歴書を見た者の噺、是ばかりは僞でない。本田昇と言つて、文三より二年前に某省の等外を拜命した以來、吹小歇のない仕合の風にグッとのした出來星判任、當時は六等屬の獨身では先づ樂な身の上。昇は所謂才子で、頗る智慧才覺が有ッて、また能く智慧才覺を鼻に懸ける。辯舌は縱横無盡、大道に出る豆藏の塁を摩して雄を爭ふも可なり、といふ程では有るが、竪板の水の流を堰きかねて、折節は覺えず法螺を吹く事もある。また小器用で、何一つ知らぬといふ事の無い代り、是れ一つ卓絶れて出來るといふ藝も無く、怠けるが性分で、倦るが病だ、といへば其れも其筈歟。
昇はまた頗る愛嬌に富んでゐて、極て世辭がよい。殊に初對面の人にはチヤホヤもまた一段で、婦人にもあれ、老人にもあれ、それ相應に調子を合せて、曾てそらすといふことなし。唯不思議な事には、親しくなるに隨ひ、次第に愛想が無くなり、鼻の頭で待遇ッて、折に觸れては氣に障る事を言ふか、さなくば厭におひやらかす。其れを憤りて喰ッて懸れば、手に合ふ者は其場で捻返し、手に合はぬ者は一時笑ッて濟まして後、必ず讐を酬ゆる。……尾籠ながら、犬の糞で横面を打曲げる。
兎はいふものの、昇は才子で、能く課長殿に事へる。此課長殿といふお方は、曾て西歐の水を飲まれた事のあるだけに、「殿樣風」といふ事がキツイお嫌ひと見えて、常に口を極めて、御同僚方の尊大の風を御誹謗遊ばすが、御自分は評判の氣六ケ敷屋で、御意に叶はぬとなると、瑣細の事にまで眼を剝出して御立腹遊ばす、言はゞ自由主義の壓制家といふ御方だから、哀れや屬官の人々は、御機嫌の取樣に迷いて、ウロ〳〵する中に、獨り昇は迷かず、まづ課長殿の身態、聲音はおろか、咳拂ひの樣子から、嚔の仕方まで眞似たものだ。ヤ、其また眞似の巧な事といふものは、宛も其人が其處に居て云爲するが如くで、そツくり其儘。たゞ相違と言ッては、課長殿は誰の前でもアハヽヽとお笑ひ遊ばすが、昇は人に依ッてエヘヽヽ笑ひをする而已。また課長殿に物など言懸けられた時は、まづ忙はしく席を離れ、仔細らしく小首を傾けて謹で承り、承り終ッて、さて莞爾微笑して恭しく御返答申上ける。要するに昇は長官を敬するといッても、遠ざけるには至らず、狎れるといッても瀆すには至らず、諸事萬事御意の隨意々々、曾て抵抗した事なく、加之……此處が肝腎要、他の課長の遺行を數へて、暗に盛德を稱揚する事も折節はあるので、課長殿は見處のある奴ぢやト御意遊ばして、御贔屓に遊ばすが、同僚の者は善く言はぬ。昇の考では、皆法界悋氣で、善く言はぬのだといふ。
兎も角も、昇は才子で、毎日怠らず出勤す

る。事務に懸けては頗る活潑で、他人の一日分澤山の事を、半日で濟ましても平氣孫左衛門。難澁さうな顔色もせぬが、大方は見せかけの勉强ぶり。小使、給仕などを叱散らして濟まして置く。退省て下宿へ歸る。衣服を着更る、直ぐ何處へか遊びに出懸けて、落着いて在宿してゐた事は稀だといふ。日曜日には、御機嫌伺ひと號して課長殿の私邸へ伺候し、圍碁のお相手をもすれば、御私用をも達す。先頃もお手飼に狆が欲しいと夫人の御意、聞くよりも早飲込み、日ならずして何處で貰ツて來た事か、狆の子一疋を携へて御覽に供へる。件の狆を御覽じて課長殿が、「此奴、妙な貌をしてゐるぢやアないか、ウー、」ト御意遊ばすと、昇も「左樣で御座います、チト妙な貌をして居ります、」ト申上げ、夫人が傍から「其れでも狆は、此樣に貌のしやくんだ方が好いのだと申します、」ト仰しやると、昇も「成程、夫人の仰の通り、狆は此樣に貌のしやくんだ方が好いのだと申します、」ト申上げて、御愛嬌にチョイト、狆の頭を撫でて見たとか。しかし、永い間には取外しも有ると見えて、曾て何歟の事で、些しばかり課長殿の御機嫌を損ねた時は、昇は其當座一兩日の間、胸が閉塞へて食事が進まなかツたとかいふが、程なく夫人のお癪から揉みやはらげて、殿さまの御癇癖も療治し、果は自分の胸の痞も抑さげたといふ、なか／＼小腕のきく男で。

下宿が眼と鼻の間の所爲歟、昇は屢々文三の處へ遊びに來る。お勢が歸宅してからは、一段足繁くなツて、三日にあげず遊びに來る。初とは遊び近頃は文三に對しては、氣に障る事而已を言散らすか、さもなければ同僚の非を數へて、「乃公は」との自負自讃。「人間地道に事をするやうぢや役に立たぬ、」などと、勝手な熱を吐散らすが、それは邂逅の事で、大方は下座鋪で、お政を相手に無駄口を叩き、或る時は花合せとかいふものを手中に弄して、如何がな眞似をした擧句、壽司などを取寄せて奢り散らす。勿論お政には殊の外氣に入ッてチヤホヤされる。氣に入り過ぎはしないかと、岡燒をする者も有るが、正可四十面をさげて。……お勢には……、シッ、跫音がする昇ではないか。……當ツた。

「時に内海は如何も飛んだ事で、實に氣の毒な、今も往ッて慰めて來たが、鬱ぎ切ツてゐる。」

「放擲ツてお置きなさいよ、身から出た錆だもの、些とは鬱ぐも好いのサ。」

「さう言へば其樣なやうな者だが、しかし、何しろ氣の毒だ。斯ういふ事にならうと、疾くから知ツてゐたら、又如何にか仕樣も有ツたらうけれども、何しても……。」

「何とか言ツてましたらうネ。」

「何を。」

「私の事をサ。」

「イヤ何とも。」

「フム、貴君も賴母敷ないよ、あんな者を朋友にして、同類にお成んなさる。」

「同類にも何にも成りやアしないが、眞實に。」

「さう。」

ト談話の内に茶を煎れ、地袋の菓子を取出して昇に侑め、またお鍋を以てお勢を召ばせる。何時もならば文三にもと言ふ處を、今日は八分したゆゑ、お鍋が不審に思ひ「お二階へは、」ト尋ねると、「ナニ茶がウッ食ひたきやア……言はないでも宜いよ。」ト答へた。此を名けてWoman's revenge（婦人の復讐）といふ。

「如何したんです、闘り合ひでもしたのかネ。」

「闘合ひなら宜いが、いぢめられたの、文三にいぢめられたの……。」

「それはまた、如何した理由で。」

「マア本田さん、聞いてお吳んなさい、斯うなんですよ。」

ト昨日、文三にいぢめられた事を、おまけに

おまけを附着て、ペチャクチャと饒舌り出しては止度なく、滔々蕩々として勢ひ百川の一時に決した如くで、言損じかなければ委みもなく、多年の蘊蓄一時に宏辯、自然に備はる抑揚頓挫、或は開き或は闔ぢて、縱横自在に言廻せば、鷺も烏に成らずには置かぬ。哀むべし文三は、竟に世にも怖ろしい惡棍と成り切ッた處へ、お勢は手に一部の女學雜誌を持ち、立ちながら讀み讀み座鋪へ這入ッて來て、チョイと昇に一禮したのみで嫣然ともせず、饒舌りながら母親が汲んで出す茶碗を揮りとも言はずに受取りて、一口飲んで下へ差措いたまゝ、濟まアし切ッて、復た再び讀みさしの雜誌を取り上げて眺め詰めた。昇と同席の時は何時でも斯うで、

―トいふ譯で、ツイそれなり鬼にして仕舞ひましたがネ、マア本田さん、貴君は何方が理窟だとお思ひなさる。」

「それは勿論内海が惡い。」

「そのまた惡い文三に肩を持ッてサ、私に喰ッて懸ッた者があると思召せ。」

「アラ、喰ッて懸りはしませんワ。」

「喰ッて懸らなくッてサ。……私は最う〳〵、腹が立ッて〳〵堪らなかッた。けれども、何にしても此通り氣が弱いし、それに先には文三といふ荒神樣が附いてるから、迚も叶ふ事ぢやア無いと思ッて、蟲を殺して默ッてましたがネ……。」

「アラ、彼樣な虚言ばッかり言ッて。」

「虚言ぢやないワ、眞實だワ……マ、なんぼなんだッて、呆れ返るぢや有りませんか、ネー貴君、何處の國にか他人の肩を持ッてサ、シヽバヽの世話をして呉れた、現在の親に喰ッて懸るといふものが、有るもんですかネ。ネー本田さん、然うぢやア有りませんか。ギャッと産れてから是までにするにア、仇や疎かな事ぢやア有りません。子を持てば七十五度泣くといふけれども、此娘の事では是まで何百度泣いたか知れやアしない。其樣にして育てゝ貰ッても、露程も難有いと思ッてないさうで、此頃ぢや一口いふ二口目にや、速ぐ惡たれ口だ。マ、なんたら因果で、此樣な邪見な子を持ッたかと思ふと、シミジミ悲しくなりますワ。」

「人が默ッてゐれば、好い氣になつて彼樣な事を言ッて、餘りだから宜いワ。私は三歳の小兒ぢやないから、親の恩位は知ッてゐますワ、知ッてゐますけれども、條理。」

「アヽ、モウ解ッた〳〵、何にも宣ふナ。よろしいよ、解ッたよ。」

ト昇は、勃然と成ッて燻り懸けたお勢の火の手を手頸で揉り消して、さてお政に向ひ、

「しかし叔母さん、此奴は一番失策ッたネ。平生の樣にも似合はないなされ方、チトお恨みだ。マア考へて御覽じろ、内海といおり合ひが有ッて見ればネ、ソレ……といふ譯が有るから、お勢さんも默ッては見てゐられないやアネ、アハヽヽ。」

ト相手のない高笑ひ。お勢は顏で昇を睨めたまゝ何とも言はぬ。お政も苦笑ひをした而已で、是れも默然、些と席がしらけた趣き。

「それは戯談だがネ、全體叔母さん、餘り慾が深過ぎるよ。お勢さんの樣な、此樣な上出來な娘を持ちながら……。」

「なにが、上出來なもんですか……。」

「イヤ上出來サ。上出來でないと思ふなら、まづ世間の娘子を御覽なさい。お勢さん位の年恰好で、斯樣に標致がよくッて見ると、學問や何歟は其方退けで、是非色狂ひとか何とか、碌な眞似はしたがらぬものだけれども、お勢さんは、流石は叔母さんの仕込みだけ有ッて、標致が好くッても、品行は方正で、曾て浮氣らしい眞似をした事はなく、唯一心に勉強してお出でなさるから、漢學は勿論出來るし、英學も……

今何を稽古してお出でなさる。」
「ナショナルのフォースに列國史に……。」
「フウ、ナショナルのフォース。ナショナルのフォースと言へば、なか／＼難敷い書物だ。男子でも讀めない者は幾程も有る、それを芳紀も若くッて且婦人の身でゐながら、稽古してお出でなさる。感心な者だ。だから此近邊ぢやア、斯う言やア失敬のやうだけれども、鳶が鷹とは彼の事だと言つて、評判してゐますぜ。ソレ御覽、色狂ひして親の額に泥を塗ッても仕樣がない處を、お勢さんが出來が宜いばッかりに、叔母さんまで人に羨まれるネ。何も足腰按るばかりが孝行ぢやアない。親を人に善く言はせるのも孝行サ。だから全體なら、叔母さんは喜んでゐなくッちやアならぬ處を、それをまだ不足に思ッて、兎や角らいふのは慾サ、慾が深過ぎるのサ。」
「ナニ、些とばかりなら人樣に惡く言はれても宜いから、最う些し優敷して吳れると宜いんだけれども、邪慳で親を親臭いとも思ッてゐないから、憎くッて成りやアしません。」
ト眼を細くして、娘の方を顧視る。斯ういふ睨め方も有るものと見える。
「喜び序に最う一ッ喜んで下さい。我輩、今日一等進みました。」
「エ。」
ト お政は此方を振向き、吃驚した樣子で、暫く昇の顏を目守めて、
「御結構が有ッたの……ヘエエー、それはマア、何してもお芽出度ら御座いました。」
ト鄭重に一禮して、偖改めて頭を振揚げ、
「ヘー御結構が有ッたの……。」
お勢もまた、昇が御結構が有ッた、と聞くと等しく、吃驚した顏色をして、些し顏を赧らめた、咄々怪事もあるもので。
「一等お上んなすッたと言ふと、月給は。」
「僅五圓違ひサ。」
「オヤ、五圓違ひだッて結構ですワ。かうッと今までが三十圓だッたから、五圓殖えて……。」
「何ですネー、母親さん、他人の收入を……。」
「マアサ、五圓殖えて三十五圓、結構ですワ。結構でなくッてサ貴君、何うしで今時高利貸したッて、月三十五圓取らうと言ふなア、容易な事ぢやア有りませんよ。……三十五圓……どうしても働き者は違ッたもんだネー。だから、此娘とも常不斷さう言ッてます事サ。アノー、本田さんは何だと、內の文三や何歟とは違ッて、まだ若くッてお出でなさるけれども、利口で、氣働きが有ッて、如才が無くッて……。
「談話も艶消しにして貰ひ度いネ。」
「艷ぢやア無い、眞個にサ、如才が無くッてお世辭がよくッて、男振も好いけれども、唯物喰の惡いのが、可惜珠に疵だッて、オホヽヽヽ。」
「アハヽヽヽ、貧乏人の質で、上げ下げが怖ろしい。」
「それは然うと、孰れ御結構振舞が有りませうネ。新富かネ、但しは市村かネ。」
「何處なりとも、但し負ぶで。」
「オヤ、それは難有くも何ともないこと。」
ト、また口を揃へて高笑ひ。
「其れは戲談だがネ、芝居はマア芝居として、如何です、明後日、團子坂へ菊見といふ奴は。」
「菊見、左樣さネ、菊見にも依りけりサ、犬川ぢやア、マア願ひ下げだネ。」
「其處にはまた、異な寸法も有らうサ。」
「徒の雪ぢやアないかネ。」
「眞個に往きませうか。」
「正可。」
「お出でなさいヽ。」
「お勢、お前もお出でないか。」
「菊見に。」
「アヽ。」

お勢は生得の出遊き好。下地は好きなり、御意はよし、菊見の催頗る妙だが、オイソレといふも不見識と思ッたか、手弱く辭退して直ちに同意して仕舞ふ。十分ばかりを經て、昇が立歸ッた跡で、お政は獨言のやうに、
「眞個に本田さんは感心なもんだナ。未だ年齢も若いのに、三十五圓月給取るやうに成んなすッた。それから思ふと、内の文三なんざア、盆暗の意氣地なしだッちやアない。二十三にも成ッて親を養す所か、自分の居處立處にさへ彷徨いてるんだ。なんぼ何だッて、愛想が盡きらア。」
「だけれども、本田さんは、學問は出來ないやうだワ。」
「フム、學問々々とお言ひだけれども、立身出世すればこそ學問だ。居處立處に彷徨くやうぢやア、些とばかし書物が讀めたッて、ねッから難有味がない。」
「それは不運だから仕樣がないワ。」
トいふ娘の顏を、お政は熟々目守めて、
「お勢、眞個にお前は、文三と何にも約束した覺えはないかエ。エ、有るなら有ると言ッてお仕舞ひ、隱立をすると、却てお前の爲にならないよ。」
「また、彼樣な事を言ッて。……昨日あれ程、其樣な覺えは無いと言ッたのが、母親さんには未だ解らないの。エ、まだ解らないの。」
「チョッ、また始まッた。覺えが無いなら無いで好いやアネ。何にも其樣に、熱くならなくッたッて。」
「だッて人をお疑りだものヲ。」
暫く談話が斷絶れる。母親も、娘も、何歟思案顏。
「母親さん、明後日は何を着て行かうネ。」
「何なりとも。」
「エート、下着は何時ものアレにしてト、其れから、上着は何衣にしようかしら、矢張、何時もの黄八丈にして置かうかしら……。」
「最う一つのお召縮緬の方にお爲よ。彼の方がお前にやア似合ふよ。」
「デモ彼れは品が惡いものヲ。」
「品が惡いてッたッて。」
「アヽ、此樣な時にア洋服が有ると好いのだけれどもナ……。」
「働き者を亭主に持ッて、洋服なと何なと、拵エて貰ふのサ。」
トいふ母親の顏を、お勢はチッと目守めて不審顏。

第二編

第七回 團子坂の觀菊 上

日曜日は、近頃に無い天下晴、風も穩かで塵も立たず、暦を繰ッて見れば、舊暦で菊月初旬といふ十一月二日の事ゆゑ、物觀遊山には持ッて來いといふ日和。
園田一家の者は、朝から觀菊行の支度とりどり。晴衣の裄丈を氣にしてのお勢のじれこみが、お政の癇癪と成ッて、廻りの髮結の來やうの遲いのが、お鍋の落度となり、究竟は萬古の茶瓶が生れも付かぬ缺口になるやら、架棚の擂鉢が獨手に駈出すやら、ヤッサモッサ捏返してゐる處へ、生憎な來客、加之も名打の長尻で、アノ只今から團子坂へ參らうと存じて、トいふ言葉にまで、力瘤を入れて見ても、まだ藥ほども利かず、平氣で濟まして、便々とお神輿を据ゑてゐられる。そのじれッたさ、もどかしさ。それでも宜くしたもので、案じるより産むが易く、客も其内に歸れば、髮結も來る。其處で、ソレ、支度も調ひ、十一時頃には家内も漸く靜まッて、折節には高笑ひがするやうになッた。

文三は拓落失路の人、仲々以て觀菊などゝいふ空は無い。それに昇は花で言へば、今を春邊と咲誇る櫻の身、此方は日蔭の枯尾花。到頭楯突く事が出來ぬ位なら、打たせられに行くでも無いと、境涯に隨れて僻みを起し、一昨日昇に誘引れた時、既にキッパリ辭ッて行かぬと決心したからは、人が騷がうが騷ぐまいが、隣家の疝氣で關係のない噺。ズッと澄まして居られさうなものの、扨居られぬ。嬉しさうに、人のそはつくを見るに付け、聞くに付け、またしても昨日の我が憶出されて、五月雨頃の空と濕る、歎息もする、面白くも無い。

ヤ、面白からぬ。文三には、昨日お勢が「貴君もお出でなさるか、」ト尋ねた時、「行かぬ、」ト答へたら、「ヘー然うですか、」ト平氣で澄まして落着拂つてゐたのが面白からぬ。文三の心持では、成らう事なら、行けと勸めて貰ひ度かッた。それでも尙ほ強情を張ッて行かなければ、「貴君と御一所でなきやア、私も罷しませう、」とか、何とか言ッて貰ひ度かッた……。

「しかし、是りやア嫉妬ぢやない……。」

ト不圖何歟憶出して、我と我に分疏を言ッて見たが、また何處歟、くすぐられるやうで……不安心で。

行くも厭なり、留まるも厭なりで、氣がムシャクシャとして締癪が起る。誰れと云ッて取留めた相手は無いが、腹が立つ。何か火急の要事が有るやうで、また無いやうで、無いやうで、また有るやうで、立ッても居られず、坐ッてもゐられず。如何しても、斯うしても、落着かれない。

落着かれぬ儘に、文三が、チト讀書でもしたら紛れようか、と書函の書物を手當放題に取出して讀みかけて見たが、いッかな爭な紛れる事でない。小六ケ敷い面相をして、書物と疾視競をした所はまづ宜かッたが、開卷第一章の第一行目を反覆讀過して見ても、更に其意義を解し得ない。其癖、下座鋪でのお勢の笑聲は意地惡くも善く聞えて、一回聞けば則ち耳の洞の主人と成ッて暫くは立ち去らぬ。舌鼓を打ちながら、文三が腹立たしさうに書物を擲出して、腹立たしさうに机に靠着ッて、腹立たしさうに何處ともなく凝視めて、……フトまた起直ッて、蘇生ッたやうな顏色をして、

「モシ罷めになッたら……。」

ト取外して言ひかけて、倏忽ハッと心付き、周章てて口を鉗んで、吃驚して狼狽して遂に讃然となッて、「畜生、」と言ひざま、拳を振擧げに我と我を嘲笑して見たが、惡戯な虫奴は心の底で、まだ……矢張……。

しかし、生憎故障も無かッたと見えて、昇は一時頃に參ッた。今日は故意と日本服で、茶の絲織の一つ小袖に、黑七子の羽織、帶も何歟乙なもので、相變らず立とした服飾。梯子段を踏轟かして上ッて來て、挨拶をもせずに、突如まづ大胡坐。我鼻を視るのかと、怪しまれる程の下眼を遣ッて、文三の顏を視ながら、

「どうした、土左的宜敷といふ顏色だぜ。」

「些し頭痛がするから。」

「然うか。尼御臺に油を取られたのでもなかッたか、アハヽヽ。」

チョイと云ふ事からして、まづ氣に障る。文三も怫然とはしたが、其處は內氣だけに、何とも言はなかッた。

「どうだ、如何しても往かんか。」

「まづ、よさう。」

「剛情だな。……ゴジャウだからお出でなさいよぢや無いか。アハヽヽ……と、獨りで笑ふほかまづ仕樣が無い、何を云ッても先樣にやお通じなしだ、アハヽヽ。」

戲言とも附かず、罵詈とも附かぬ、曖昧なお饒舌に、暫く時刻を移してゐると、忽ち梯子

が十人、まづ花より團子と思詰めた顔色、去りとはまた苦々しい。ト何處かの隱居が、菊細工を觀ながら、愚痴を滴したと思食せ。（看官）何だ、つまらない。

閑話不題。

轟然と飛ぶが如くに驅來ッた二臺の腕車か、ピッタリと停止る。車を下りる男女三人の者は、お馴染の昇とお勢親子の者で。

昇の服裝は前文にある通り。

お政は鼠微塵の絲織の一つ小袖に、黒唐繻子の丸帶。襦袢の半襟も、黒縮緬に金絲でバラダと縫の入ッた奴か何歟で、まづ氣の利いた服飾。

お勢は黄八丈の一つ小袖に、藍鼠金入繻珍の丸帶。勿論下にはお定りの緋縮緬の等身襦袢、此奴も金絲で縫の入ッた、水淺黄縮緬の半襟をかけた奴で、帶上はアレは時色縮緬。統括めて云へば、まづ上品なこしらへ。しかし、人足の留まるは、衣裳附よりは寧ろその態度で、髮も例の束髮ながら、何とか結びとかいふ手のこんだ束ね方で、大形の薔薇の花插頭を插し、本化粧は自然に背くとか云ッて、薄化粧の淸楚な作り、風格丰神共に優美で。

「色だ。ナニ夫婦サ。」ト法界悋氣の岡燒連が、目引き袖引き取々に評判するを漏れ聞く毎に、昇は得々として機嫌顔。是れ見よがしに母子の者を其處茲處と植木屋を引廻しながらも、片時と默してはゐない。人の傍聞するにも關はず、例の無駄口をのべつに竝べ立てた。

お勢も、今日は取分け氣の晴れた面相で、宛然籠を出た小鳥の如くに、言葉は勿論、歩風身體のこなしにまで、何處ともなく活々とした所が有ッて、冴が見える。昇の無駄を聞いては、可笑しがッて絶えず笑ふが、それもさうで、強ち昇の言ふ事が可笑しいからではなく、默ッてゐても自然と可笑しいから、それで笑ふやうで。

お政は、菊細工には甚だ冷淡なもので、唯「綺麗だことネー、」ト云ッて、ズラリと見亙すのみ。さして眼を注める樣子もないが、その代り、お勢と同年配頃の娘に逢へば、丁寧にその顔貌、風姿を研究する。まづ最初に容貌を視て、次に衣服を視て、帶を視て、爪端を視て、行過ぎてから、ズーと後姿を一瞥して、また帶を視て、髮を視て、其跡でチョイとお勢を横眼で視て、そして澄まして仕舞ふ。妙な癖も有れば有るもので。

昇等三人の者は、最後に坂下の植木屋へ立寄ッて、次第々々に見物して、とある小舍の前に立止ッた。其處に飾り付けて在ッた木像の顔が、文三の欠伸をした面相に酷く肖てゐるとか昇の云ッたのが可笑しいといッて、お勢が嬌面に袖を加てて、勾欄におッ被さッて笑ひ出したので、傍に鵠立んでゐた書生體の男が、俄に此方を振向いて、愕然として眼鏡越しにお勢を凝視めた。「みッともないよ、」ト母親ですら小言を言ッた位で。

漸くの事で笑ひを留めて、お勢がまだ莞爾莞爾と微笑のこびり付いてゐる貌を擡げて、傍を視ると、昇は居ない。「オヤ。」ト云つて、キョロキョロと四邊を環視して、お勢は忽ち眞面目な貌をした。

只見れば、後の小舍の前で、昇が磬折といふ風に腰を屈めて、其處に鵠立んでゐた洋裝紳士の背に向ッて、荐りに禮拜してゐた。されども紳士は一向心附かぬ樣子で、尙ほ彼方を向いて鵠立んでゐたが、再三再四虚辭儀をさしてから、漸くにムシャクシャと頰髯の生弘がッた、氣六ケ敷い貌を此方へ振り向けて、昇の貌を眺め、莞然ともせず、帽子も被ッた儘で、唯鷹揚に點頭すると、昇は忽ち平身低頭、何事をか喃々と言ひながら、續けざまに二つ三つ禮拜した。

紳士の隨伴と見える兩人の婦人は、一人は今

媼おはつとか稱へる、突兀たる大丸髷。今一人は落着とした妙齢の束髪頭、孰れも水際の立つ玉揃ひ。面相といひ、風姿といひ、如何も姉妹らしく見える。昇はまづ丸髷の婦人に一禮して、次に束髪の令嬢に及ぶと、令嬢は狼狽てて卒方を向いて禮を返して、サッと顔を赧めた。

暫く立在んでの談話。間が隔離れてゐるに、四邊が騒がしいので、其の言ふ事は能く解らないが、なにしても昇は絶えず口角に微笑を含んで、折節に手眞似をしながら、何事をか喋々と饒舌り立ててゐた。其の内に、何か可笑しな事でも言ッたと見えて、紳士は俄然大口を開いて、顋を撫ッて、ハッハッと笑ひ出し、丸髷の夫人も口頭に皺を寄せて笑ひ出し、束髪の令嬢もまた莞爾笑ひかけて、急に袖で口を掩ひ、額越に昇の貌を眺めて眼元で笑ッた。身に餘る面目に、昇は得々として満面に笑ひを含ませ、紳士の笑ひ罷むを待ッて、また何か饒舌り出した。お勢母子の待ッてゐる事は全く忘れてゐるらしい。

お勢は、紳士にも、貴婦人にも、眼を注めぬ代り、束髪の令嬢を穴の開く程目守めて一心不亂、傍目を觸らなかッた、呼吸をも吻かなかッた。母親が物を言ひ懸けても、返答をもしなかッた。

其内に紳士の一行が、ドロ〳〵と此方を指して來る容子を見て、お政は、茫然としてゐたお勢の袖を匆はしく曳搖かして、疾歩に外面へ立ち出で、路傍に鵠立んで待合はせてゐると、暫くして昇も紳士の後に隨ッて出て參り、木戸口の處でまた更に小腰を屈めて、皆其々に分袂の挨拶、丁寧に、慇懃に、喋々しく陳べ立てて、さて別れて、獨り此方へ兩三歩來て、フト何か憶出したやうな面相をして、キョロ〳〵と四邊を環視した。

「本田さん、此處だよ。」

ト云ふお政の聲を聞付けて、昇は急足に傍へ步寄り、

「イヤ、大にお待遠。」

「今の方は。」

「アレが課長です。」

ト云ッて、如何した理由か、莞爾々々と笑ひ、

「今日來る筈ぢや無かッたんだが……。」

「アノ、丸髷に結ッた方は、あれは夫人ですか。

然うです。」

「束髪の方は。」

「アレですか、ありや……。」

ト言ひかけて、後を振返ッて見て、

「細君の妹です。……內で見たよりか、餘程別嬪に見える。」

「別嬪も別嬪だけれども、好いお服飾ですことネー。」

「ナニ、今日は彼樣なお嬢樣然とした風をしてゐるけれども、家にゐる時は疎末な衣服で、侍婢がはりに使はれてゐるのです。」

「學問は出來ますか。」

ト突然、お勢が尋ねたので、昇は愕然として、

「エ、學問。……出來るといふ噺も聞かんが、……それとも出來るかしらん。此間から課長の處に來てゐるのだから、我輩もまだ、深くは情實を知らないのです。」

ト聞くと、お勢は忽ち、眼元に冷笑の氣を含ませて、振返ッて、今將に坂の半腹の植木屋へ、這入らうとする令嬢の後姿を見送ッて、チョイと我が帶を撫でて、而して、ズーと澄まして仕舞った。

坂下に待たせて置いた車に乘ッて、三人の者はこれより上野の方へと參ッた。

車に乘ッてから、お政がお勢に向ひ、

「お勢、お前も今のお嬢さんのやうに、本化粧にして來りやア、宜かッたのにネー。」

「厭サ、彼樣な本化粧は。」

「オヤ何故ェ。」
「だッて、厭味ッたらしいもの。」
「ナニ、お前、十代の内なら秋毫も厭味なこたア有りやしないわネ。アノ方が幾程宜いか知れない、引立が好くッて。」
「フヽン、其様に宜きやア、慈母さんお傚なさいな。人が厭だといふものを、好い〳〵ッて、可笑しな慈母さんだよ。」
「好いと思ッたから、唯好いぢや無いかと云ッたばかしだのに、それに其様な事いふッて、眞個に此娘は可笑しな娘だよ。」
お勢は最早、辯難攻撃は不必要と認めたと見えて、何とも言はずに默して仕舞ッた。それからと云ふものは、鬱ぐのでもなく、萎れるのでも無く、唯何となく沈んで仕舞ッて、母親が再び談話の墜緒を紹がうと試みても、相手にもならず、どうも乙な塩梅であッたが、しかし、上野公園に來着いた頃には、また口をきゝ出して、また舊のお勢に立ち戻ッた。

　上野公園の秋景色。彼方此方に、むら〳〵と立駢ぶ老松奇檜は、柯を交へ葉を折り重ねて、鬱蒼として翠も深く、觀る者の心までが蒼く染りさうなに引替へ、櫻杏桃李の雜木は、老木稚木も押なべて、一樣に枯葉勝な立姿。見るからが、まづ、みすぼらしい。遠近の木間隱れに立つ山茶花の一本は、枝一杯に花を持ッてはゐれど、煢々として友欲し氣に見える。楓は既に紅葉したのも有り、まだしないのも有る。鳥の音も時節に連れて、哀れに聞える、淋敷い……ソラ、風が吹通る。一重櫻は戰慄をして病葉を震ひ落し、芝生の上に散り布いた落葉は、魂の有る如くに立上りて、友葉を追ッて舞ひ歩き、フトまた云合せたやうに、一齊にバラ〳〵と伏ッて仕舞ふ。滿眸の秋色蕭條として、却々春のきほひに似るべくも無いが、しかし、さびた眺望で、また一種の趣味が有る。團子坂へ行く者、歸る者が、茲處で落合ふので、處々に人影が見える、若い女の笑ひ動搖めく聲も聞える。

　お勢が散歩したい、と云ひ出したので、三人の者は教育博物館の前で車を降りて、ブラ〳〵歩きながら、石橋を渡り、動物園の前へ出で、車夫には、「先へ往ッて、觀音堂の下邊に待ッてゐろ、」ト命じて、其處から車に離れ、眞直に行ッて、聳立千尺、空を摩でさうな杉の樹立の間を通抜けて、東照宮の側面へ出た。

　折しも其處の裏門より Let us go on(行かう)と、「日本の」と冠詞の付く英語を叫びながらピョッコリ飛び出した者が有る。只見れば軍艦羅紗の洋服を着て、金鍍金の徽章を附けた大黑帽子を仰向けざまに被ッた、年の頃十四歳許りの、栗蟲のやうに肥ッた少年で、同遊と見える同じ服裝の少年を顧みて、
「ダガ、何歟食度くなッたなア。」
「食度くなッた。」
「食度くなッてもか……。」
　ト愚癡ッぽく言懸けて、フトお政と顔を視合はせ、
「ヤ……。」
「オヤ、勇が……。」
　ト云ふ間もなく、少年は駈出して來て、狼狽てて昇に三つ四つ辭儀をして、サッと赤面して、
「母親さん。」
「何を狼狽てゝゐるんだネー。」
「家へ往ッたら……鍋に聞いたら、文さんばッかしだッてッたから、僕ア……それだから……。」
「お前、モウ、試驗は濟んだのかエ。」
「ア、濟んだ。」
「如何だッたエ。」
「そんな事よりか、些し用が有るから……母親さん……。」
　ト心有氣に、母親の顔を凝視めた。

用が有るなら、茲處でお言ひな。」

少年は横眼で、昇の顏をジロリと視て、

「チョイと此方へ來てお吳れッてば。」

「フン、お前の用なら大抵知れたもんだ。また小遣ひが無いだらう。」

「ナニ、其樣な事ちやない。」

ト云ッて、また昇の顏を横眼で視て、サッと赤面して、調子外れな高笑ひをして、無理矢理に母親を引張ッて、彼方の杉の樹の下へ連れて參ッた。

昇と、お勢は、ブラ〳〵と步き出して、來るともなく往くともなしに、宮の背後に出た。折柄四時頃の事とて、日影も大分傾いた鹽梅。立駢んだ樹立の影は、古廟の築墻を斑に染めて、不忍の池水は、大魚の鱗かなぞのやうに燦く。ツイ眼下に、瓦葺の大家根の、翼然として峙ッてゐるのが視下される。アレは大方馬見所の家根で。土手に隱れて形は見えないが、車馬の聲が轆々として聞える。

お勢は、大榎の根方の處で立止まり、翳してゐた蝙蝠傘をつぼめて、ツイと一通り四邊を見亙し、嫣然と笑しながら、昇の顏を窺き込んで、唐突に、

「先刻の方は、餘程別嬪でしたネー。」

「エ、先刻の方とは。」

「ソラ、課長さんの令妹とか仰しやッた。」

「ウー誰の事かと思ッたら、……然うですネー、隨分別嬪ですネ。」

「而して、家で視たよりか美しくッてネ。それだもんだから……ネ……貴君もネ……。」

と、眼元と口元に一杯笑ひを溜めて、チッと昇の貌を凝視めて、「さて、オホヽヽ」と吹溢した。

「アッ失策ッた、不意を討たれた。ヤ、どうもおそろ感心、手は二本切りかと思ッたら、是れだもの、油斷も隙もなりやしない。」

「それに、彼孃も、オホヽヽ、何だと見えて、お辭儀する度に顏を眞赤にして、オホヽヽヽヽ。」

「トたゝみかけて意地目つけるネ。よろしい、覺えてお出でなさい。」

「だッて、實際の事ですもの。」

「しかし、彼の娘が幾程美しいと云ッたッても、何處かの人にやア……兎ても。」

「アラ、よう御座んすよ。」

「だッて實際の事ですもの。」

「オホヽヽ、直ぐ復讐して。」

「眞に、戲談は除けて……。」

ト言懸ける折しも、官員風の男が、十許になる女の子の手を引いて來蒐ッて、兩人の容子を不思議さうに、ジロ〳〵視ながら行過ぎて仕舞ッた。

昇は再び言葉を續いで、

「戲談は除けて、幾程美しいと云ッたッて、彼樣な娘にやア、先方も然うだらうけれども、此方も氣が無い。」

「氣が無いから、横眼なんぞ遣ひはなさらなかッたのネー。」

「マアサ、お聞きなさい。彼の娘ばかりには限らない。どんな美しいのを視たッても、氣移りはしない。我輩にはアイドル(本尊)が一人有るから。」

「オヤ然う。それはお芽出度う。」

「所が一向お芽出度く無い事サ。所謂鮑の片思ひでネ、此方はそのアイドルの顏を視度いばかりで、氣まりの惡いのも堪へて、毎日々々其家へ遊びに往けば、先方ぢや五月蠅いと云ッたやうな顏をして、口も碌々きかない。」

トあぢな眼付をして、お勢の貌をヂッと凝視めた。其の意を曉ッたか、曉らないか、お勢は唯ニッコリして、

「厭なアイドルですネ、オホヽヽ。」

しかし、考へて見れば此方が無理サ。先方には隱然亭主と云ッたやうな者が有るのだから。

それに……。」
「モウ何時でせう。」
「それに想を懸けるは、宜く無い〳〵と思ひながら、因果とまた思ひ断る事が出来ない。此頃ぢや夢にまで見る……」
「オヤ厭だ……モウ此と彼地の方へ行ッて見ようぢや有りませんか。」
「漸くの思ひで、一所に物観遊山に出ると迄は、漕付けは漕付けたけれども、其れもほんの一所に歩く而已で、慈母さんと云ふものが始終傍に附いてゐて見れば、思ふ様に談話もならず。」
「慈母さんと云へば、何を做てゐるのだらうネー。」
ト背後を振返ッて觀た。
「偶好機會が有ッて言ひ出せば、其通りとぼけてお仕舞ひなさるし、考へて見ればつまらんナ。」
ト愚癡ッぽくいッた。
「厭ですよ、其様な戯談を仰しやッちや。」
ト云ッて、お勢が莞爾々々と笑ひながら、此方を振向いて視て、些し眞面目な顔をした。昇は萎れ返ッてゐる。
「戯談と聞かれちや填まらない。斯う言出す迄には、何位苦しんだと思ひなさる。」
ト昇は歎息した。お勢は眼睛を地上に注いで、默然として一語をも吐かなかッた。
「斯う言出したと云ッて、何にも貴嬢に義理を缺かして、私の望を遂げようと云ふのぢやア無いが、唯貴嬢の口から僅一言、斷念めろ、と云ッて戴きたい。さうすりやア、私も其れを力に斷然思ひ切ッて、今日切りでもう貴嬢にもお眼に懸るまい。……ネーお勢さん。」
お勢は尚ほ默然としてゐて、返答をしない。
「お勢さん。」
ト云ひ乍ら、昇が、頂垂れてゐた首を振揚げて、ヂッとお勢の顔を窺き込めば、お勢は周章狼狽して、サッと顔を赧らめ、漸く聞えるか、聞えぬ程の小聲で、
「虚言ばッかり。」
ト云ッて、全く差俯向いて仕舞ッた。
「アハヽヽヽ。」
ト突如に昇が、轟然と一大笑を發したので、お勢は吃驚して、顔を振揚げて視て、
「オヤ厭だ。……アラ厭だ。……憎らしい本田さんだネー、眞面目くさッて、人を威かして……。」
ト云ッて、悔しさうにでもなく、恨めしさうにでもなく、謂はゞ、氣まりが惡さうに莞爾笑ッた。
「お巫山戯でない。」
ト云ふ聲が、忽然、背後に聞えたので、お勢が喫驚して振返ッて視ると、母親が帶の間へ紙入を插みながら來る。
「大分談判が難しかッたと見えますネ。」
「大にお待遠さま。」
ト云ッて、お勢の顔を視て、
「お前、如何したんだエ、顔を眞赤にして。」
ト咎められて、お勢は尚ほ顔を赤くして、
「オヤ然う、歩いたら暖かに成ッたもんだから……。」
「マア本田さん、聞いてお呉んなさい。眞個に、彼兒の錢遣ひの荒いのにも困りますよ。此間ネ、試驗の始まる前に來て、一圓前借して持ッてッたんですよ。其れを十日も經たない内に、もう使用ッちまッて、また呉れろサ。宿所なら、こだはりを附けてやるんだけれども……。」
「彼樣な事を云ッて、虚言ですよ、慈母さんが小遣ひを遣りたがるのよ。オホヽヽ。」
ト無理に押出した樣な高笑ひをした。
「默ッてお出で、お前の知ッた事ちやない。……こだはりを附けて遣るんだけれども、途中だからと思ッてネ、默ッて五十錢出して遣ッたら、それんばかりぢや足らないから、一圓呉れろと云

ふんですよ。然う／＼は方圖が無いと思ッて、如何しても遣らなかッたらネ、不承々々に五十錢取ッて仕舞ッてネ、それからまた今度は、明後日、お友達同志寄ッて、飛鳥山で饂飩會とかを……。」

「オホヽヽ。」

此度は眞に可笑しさうに、お勢が笑ひ出した。

昇は頻りに點頭いて、

「運動會。」

「そうらんどうかいとか蕎麥買ひとかをするから、もう五十錢呉れろッてネ。明日取りにお出でと云ッても、何と云ッても聞かずに、持ッて往きましたがネ、其れも宜いが、憎い事を云ふぢや有りませんか、私が、明日お出でか、ト聞いたらネ、是れさへ貰へばもう用は無い、また無くなッてから行くッて……。」

「慈母さん、書生の運動會なら、會費と云ッても、高が十錢か、二十錢位なもんですよ。」

「エ、十錢か、二十錢……オヤ其れぢや三十錢足駄を履かれたんだよ……。」

ト云ッて、昇の顔を凝視めた。とぼけた顔であッたと見えて、昇もお勢も同時に、

「オホヽヽ。」

「アハヽヽ。」

第八回　團子坂の觀菊　下

お勢母子の者の出向いた後、文三は漸く些し沈着いて、徒然と机の邊に蹲踞ッた儘、腕を拱み、顋を襟に埋めて、懊惱たる物思ひに沈んだ。

どうも氣に懸る、お勢の事が氣に懸る。此樣な區々たる事は、苦に病むだけが損だ／＼、と思ひながら、ツイどうも氣に懸ッてならぬ。

凡そ相愛する二つの心は、一體分身で、孤立する者でもなく、又仕ようとて出來るものでない故に、一方の心が歡ぶ時には、他方の心も共に歡び、一方の心が悲しむ時には、他方の心も共に悲しみ、一方の心が樂しむ時には、他方の心も共に樂しみ、一方の心が苦しむ時には、他方の心も共に苦しみ、嬉笑にも相感じ、怒罵にも相感じ、愉快適悅、不平煩悶にも相感じ、氣が氣に通じ、心が心を喚起し、決して齟齬し、扞格する者で無い、と、今日が日まで文三は思ッてゐたに、今文三の痛痒をお勢の感ぜぬは、如何したものだらう。

どうも氣が知れぬ、文三には平氣で澄ましてゐるお勢の心意氣が呑込めぬ。

若し相愛してゐなければ、文三に親しんでから、お勢が言葉遣ひを改め、起居動作を變へ、蓮葉を罷めて、優に艶しく女性らしく成る筈もなし。又今年の夏、一夕の情話に、我から隔の關を取り除け、乙な眼遣ひをし、麁匆な言葉を遣ッて、折節に物思ひをする理由もない。

若し相愛してゐなければ、婚姻の相談が有ッた時、お勢が戲談に托けて、それとなく文三の腹を探る筈もなし、また叔母と悶着をした時、他人同然の文三を庇護ッて、眞實の母親と抗論する理由もない。

「イヤ、妄想ぢや無い、おれを思ッてゐるに違ひない。……が……。」

そのまた、思ッてゐるお勢が、そのまた死なば同穴と心に誓ッた形の影が、そのまた共に感じ共に思慮し、共に呼吸生息する身の片割が、從兄弟なり、親友なり、未來の……夫ともなる文三の、鬱々として樂しまぬのを餘所に見て、行かぬと云ッても勸めもせず、平氣で澄まして不知顔でゐる而已か、文三と意氣が合はねばこそ、自家も常から嫌ひだと云ッてゐる、昇如き者に伴はれて、物觀遊山に出懸けて行く……。

解らないな。どうしても解らん。

解らぬ儘に、文三が想像、辨別の兩刀を執ッて、種々にして、此の氣懸りなお勢の冷淡を解

剖して見るに、何か物が有ッて其中に籠ッてゐるやうに思はれる。イヤ、籠ッてゐるに相違ない。が、何だか、地體は更に解らぬ。依て、更に又勇氣を振起して、唯此の一點に注意を集め、傍目も觸らず一心不亂に、玆處を先途と解剖して見るが、歌人の所謂箒木で、有りとは見えて、どうも解らぬ。文三は徐々ジレ出した。スルト惡戯な妄想奴が、彌次馬に飛び出して來て、アヽでは無いか、斯うでは無いか、と眞赤な贋物、宛事も無い邪推を摑ませる。贋物だ、邪推だ、と、必ずしも見透かしてゐるでもなく、又必ずしも居ないでもなく、ウカ〳〵と文三が摑ませられる儘に摑んで、あえたり、揉んだり、圓めたり、また引延ばしたりして、骨を折ッて事實にして仕舞ひ、今目前にその事が出來したやうに、足掻きつ、踠きつ、四苦八苦の苦楚を嘗め、然る後フト正眼を得て、さて觀ずれば、何の事だ。皆夢だ、邪推だ、取越苦勞だ。腹立ち紛れに贋物を取ッて、骨灰微塵と打碎き、ホッと一息吐き敢ず、また穿鑿に取り懸り、また贋物を摑ませられて、また事實にして、また打碎き、打碎いてはまた摑み、摑んではまた打碎く、と、何時まで經ッても果しも附かず、始終同じ處に而已止まッてゐて、前へも進まず、後へも退かぬ。而して退いて能く視れば、何ほ何物だか、冷淡の中に在ッて、朦朧として見透かされる。

文三ホッと精を盡かした。今は最う進んで穿鑿する氣力も竭き、勇氣も沮んだ。乃ち眼を閉ぢ、頭顱を抱へて、其處へ横に倒れた儘、五官を馬鹿にし、七情の守を解いて、是非も、曲直も、榮辱も、窮達も、叔母も、お勢も、我の吾たるをも、何も角も忘れて仕舞ッて、一瞬時なりとも、此苦惱、此煩悶を解脱れようと力め、良暫くの間といふものは、身動きもせず、息氣をも吐かず、死人の如くに成ッてゐたが、倏忽勃然と跳ね起きて、

「もしや本田に……。」

ト言ひ懸けて、敢て言ひ詰めず。宛然何歟捜索でもするやうに、愕然として四邊を環視した。

それにしても、此の疑念は何處から生じたもので有らう。天より降ッたか、地より沸いたか、抑もまた文三の僻みから出た蜃樓海市か。忽然として生じて、思はずして來り、恍々惚々として其來處を知るに由なし。とはいへど、何にもせよ、彼程までに、足掻きつ、踠きつして、穿鑿しても解らなかッた、所謂冷淡中の一物を、今譯もなく造作もなく、ツイチョット、突留めたらしい心持がして、文三覺えず身の毛が彌立ッた。

とは云ふものの、心持は未だ事實でない。事實から出た心持で無ければ、ウカとは信を措き難い。依て今迄のお勢の擧動を憶出して、熟思審察して見るに、さらに其樣な氣色は見えない。成程お勢はまだ若い。血氣も未だ定らない。志操も或は根强く有るまい。が、栴檀は二葉から馨ばしく、蛇は一寸にして人を吞む氣が有る。文三の眼より見る時は、お勢は所謂女豪の萌芽だ。見識も高尙で、氣韻も高く、洒々落々として愛すべく、尊ぶべき少女であッて見れば、假令道德を飾物にする僞君子、磊落を粧ふ似而非豪傑には、或は欺かれもしよう、迷ひもしようが、昇如き彼樣な卑屈な、輕薄な、犬畜生にも劣ッた奴に、怪我にも迷ふ筈はない。さればこそ、常から文三には親切でも昇には冷淡で、文三をば推尊してゐても、昇をば輕蔑してゐる。相愛は相敬の隣に棲む。輕蔑しつゝ迷ふといふは、我輩人間の能く了解し得る事でない。

「して見れば、大丈夫かしら。……が……。」

ト、また引懸りが有る、まだ決徹しない。文三周章ててブル〳〵と首を振ッて見たが、それでも未だ散りさうにもしない。此の「が」奴が、藕絲孔中蚊睫の間にも這入りさうな此眇然たる

一小「が」奴が、眼の中の星よりも邪魔になり、地平線上に現はれた砲車一片の雲よりも畏ろしい。

然り、畏ろしい。此の「が」の先には、如何な不了簡が竊まッてゐるかも知れぬ、と思へば文三畏ろしい。物にならぬ内に一刻も早く、散らして仕舞ひたい。しかし、散らして仕舞ひたいと思ふほど尚ほ散り難る。加之も、時刻の移るに随つて、枝雲は出來る、砲車雲は擴がる、今にも一大颶風が吹起りさうに見える。氣が氣で無い……。

國許より郵便が參ッた。散らし藥には屈竟の物が參ッた。飢ゑた蒼鷹が小鳥を抓むのは、此樣な鹽梅で有らうか、と思ふ程に、文三が手紙を引摑んで、封目を押切ッて、故意と聲高に讀み出したが、中頃に至ッて……フト默して考へて……また讀出して……また默して……また考へて……遂に天を仰いで、轟然と一大笑を發した。何を云ふかと思へば、

「お勢を疑ふなんぞと云ッて、我も餘程如何かしてゐる。アハ、、、。歸ッて來たら全然咄して、笑ッて仕舞はう。お勢を疑ふなんぞと云ッて、アハ、、、。」

此最後の大笑で、砲車雲は全く打拂ッたが、其代り、手紙は何を讀んだのだか、皆無判らない。

ハッと氣を取直して、文三が眞面目に成ッて落着いて、さて再び母の手紙を讀んで見ると、免職を知らせ手紙のその返辭で、老耄の悲い耳、愚癡を溢したり薄命を歎いたりしさうなものの、文の面を見れば、其樣なけびらひは露程もなく、何も角も因縁づくと斷念めた、思切りのよい文言。しかし、流石に心細いと見えて、返す書に、跡で憶出して書き加へたやうに、薄墨で、

「から申せば、そなたはお笑ひ被成候かは存じ不申候へども、手紙の着きし當日より、一日も早く、舊のやうにお成り被成候やうに、○○のお祖師さまへ茶斷して、願掛け致し居り候まゝ、そなたもその積りにて、油斷なく御奉公口をお尋ね被下度念じまゐらせ候。」

文三は手紙を下に措いて、默然として腕を拱んだ。

叔母ですら愛想を盡かすに、親なればこそ子なればこそ、ふがひないと云ッて愚癡をも溢さず、茶斷までして子を勵ます、その親心を汲分けては、難有泪に暮れさうなもの、トサ、文三自分にも思ッたが、如何したものか感涙も流れず、唯、何となくお勢の歸りが待遠しい。

「畜生、叔母さんが是程までに思ッて下さるのに、お勢なんぞの事を……不埒極まる」

ト勃然として、自ら叱責ッて、お勢の貌を視るまでは、外出などを做度く無いが、故意と意地惡く、「是れから往ッて頼んで來よう。」

トロに言ッて、「お勢の歸ッて來ない内に」と、内心で言足しをして、憤々しながら晩餐を喫して宿所を立出で、狹足に番町へ參ッて、知己を尋ねた。

知己と云ふは石田某と云ッて、某學校の英語の教師で、文三とは師弟の間繋、曾て某省へ奉職したのも、實は此の男の周旋で。

此の男は曾て、英國に留學した事が有るとかで、英語は一通り出來る。當人の噺に據れば、彼地では經濟學を修めて、隨分上出來の方で有ッたと云ふ事で。歸朝後も、經濟學で立派に押し廻される所では有るが、少々仔細有ッて、當分の内(七八年來の當分の内で)唯の英語の教師をしてゐると云ふ事で。

英國の學者社會に、多人數知己が有る中に、夫の有名のハアバアト・スペンサアとも、曾て半面の識が有るが、しかし、最う七八年も以前の

事ゆゑ、今面會したら、恐らくは互に面忘れをしてゐるだらうと云ふ、是も當人の噺で。

兎も角も、流石は留學しただけ有りて、英國の事情、即ち、上下議院の宏壯、龍動府市街の繁昌、車馬の華美、料理の獻立、衣服、杖履、日用諸雜品の名稱等、凡て閭巷猥瑣の事には、能く通曉してゐて、骨牌を弄ぶ事も出來、紅茶の好悪を飲別ける事も出來、指頭で紙卷烟草を製する事も出來、片手で鼻汁を拭く事も出來るが、其代り日本の事情は皆無解らない。

日本の事情は皆無解らないが、當人は一向苦にしないのみならず、凡そ一切の事、一切の物を、「日本の」トさへ冠詞が附けば、則ち鼻息でフムと吹飛ばして仕舞ッて、而して平氣で濟ましてゐる。

まだ中年の癖に、此男は宛も老人の如くに、過去の追想而已で生活してゐる。人に會へば必ず先づ、留學して居た頃の手柄噺を噺し出す。尤も之を封じては、更に談話の出來ない男で。

知己の者は、此男の事を種々に評判する。或は「懶惰」ト云ひ、或は「鐵面皮だ」ト云ひ、或は「自惚だ」ト云ひ、或は法螺吹きだ」ト云ふ。

此の最後の說だけには、新知、故交、統括めて總起立。藥種屋の丁稚が、熱に浮かされたやうに、「さうだ」トいふ。

「しかし、毒が無くッて宜い、」ト誰だか評した者が有ッたが、是は極めて確評で、恐らくは毒が無いから、懶惰で、鐵面皮で、自惚で、法螺を吹くのだ、と云ッたら、或は「イヤ懶惰で、鐵面皮で、自惚で、法螺を吹くから、それで毒が無いやうに見えるのだ、」ト云ふ說も出ようが、兎も角も文三は然う信じてゐるので。

尋ねて見ると、幸ひ在宿。乃ち面會して委細を噺して依賴すると「よろしい、承知した。」ト手輕な挨拶。文三は肚の裏で「毒がないから安請合をするが、其代り、身を入れて周旋はして呉れまい。」ト思ッて、私に嘆息した。

「是れが英國だと、君一人位どうでもなるんだが、日本だからいかん。我輩から見えても、英國にゐた頃は、隨分知己が有ッたものだ。タイムス新聞の社員で某サ、それから……。」

ト記憶に存した知己の名を、一々言ひ立てての噺。屢々聞いて、耳にタコが入ってゐる程では有るが、イエ、其のお噺なら、最う承りましたとも言兼ねて、文三も初て聞くやうな面相をして、耳を貸してゐる。その焦れッたさ、もどかしさ。モヂ〳〵しながら到頭二時間許りといふもの、無間斷に受けさせられた。その受賃といふ譯でも有るまいが、歸り際になッて、

「明後日一新聞の翻譯物が有るから周旋しよう。明後日午後に來給へ、取寄せて置かう。」

トいふから、文三は喜びを述べた。

「フン新聞か。……日本の新聞は、英國の新聞から見りや、全で小兒の新聞だ、見られたものぢやない……。」

文三は狼狽て、告別の挨拶を仕直して、匆々に戸外へ立ち出で、ホッと一息溜息を吐いた。

早くお勢に逢ひたい。早くつまらぬ心配をした事を噺して仕舞ひたい。早く心の清い所を見せてやり度い。ト、一心に思詰めながら、文三がいそ〳〵歸宅して見ると、お勢はゐない、お鍋に聞けば、一旦歸ッて、また入湯に往ッたといふ。文三些し拍子拔けがした。

居間へ戻ッて燈火を點じ、臥て見たり、起きて見たり、立ッて見たり、坐ッて見たりして、今か〳〵と文三が一刻千秋の思ひをして、頸を延ばして待構へてゐると、頓て格子戸の開く音がして、縁側に優しい聲がして、梯子段を上る跫音がして、お勢が目前に現はれた。只見れば常さへ艷やかな緑の黑髮は水氣を含んで、天鵞絨をも欺くばかり、玉と透徹る肌は臙脂引の色を帶びて、眼元にはホンノリと紅を潮した臙梅。

何處やらが惡戯らしく見えるが、ニッコリとした口元の可憐らしい處を見ては、是非を論ずる遑がない。文三は何も角も忘れて仕舞ッて、だらしも無くニタ／＼と笑ひながら、

「お歸んなさい。如何でした、團子坂は。」

「非常に雜沓しましたよ、お天氣が宜いのに、日曜だッたもんだから。」

ト言ひながら、膝から先へベッタリ坐ッて、お勢は兩手で嬌面を掩ひ、

「アヽせつない。厭だと云ふのに、本田さんが無理にお酒を飮まして。」

「母親さんは。」

ト文三が尋ねた。お勢が何を言ッたのだか、トント解らないやうで。

「お湯から買物に回ッて……而してネ、自家もモウ好加減に醉ッてる癖に、私が飮めないと云ふとネ、助けて遣るッて、ガブ／＼、それこそ牛飮したもんだから、究竟にはグデン／＼に醉ッて仕舞ッて。」

ト聞いて、文三は、滿面の笑を半ば引込ませた。

「それからネ、私共を家へ送り込んでから、仕樣が無いんですものヲ、巫山戲て／＼。それに慈母さんも惡いのよ、今夜だけは大眼に看て置くなんぞッて、云ふもんだから、好い氣になッて何ぼ巫山戲て……オホヽヽ。」

ト思出し笑をして、

「眞個に失敬な人だよ。」

文三は全く笑を引込ませて仕舞ッて、腹立しさうに、

「そりや、嘸面白かッたでせう。」

ト云ッて顏を皺めたが、お勢はさらに氣が附かぬ樣子。暫く默然として、何歟考へてゐたが、頓てまた思出し笑をして、

「眞個に失敬な人だよ。」

つまらぬ心配をした事を全然喋して、快く一笑に付して、心の淸い所を見せて、お勢に……お勢に……感心させて、而して自家も安心しようといふ文三の胸算用は、是に至ッてガラリ外れた。昇が酒を强ひた、飮めぬと云ッたら助けた。何でも無い事。送込んでから巫山戲た……道學先生に聞かせたら、巫山戲させて置くのが惡いと云ふかも知れぬが、しかし是とても酒の上の事、一時の戲なら、然う立腹する譯にもいかなかッたらう。要するに、お勢の噺に於て、深く咎むべき節も無い。が、しかし、文三には氣に喰はぬ。お勢の言樣が氣に喰はぬ。「昇如き犬畜生にも劣ッた奴の事を、さも嬉しさうに、本田さん／＼と、噂をしなくッても宜ささうなものだ。」ト思へば、又不平になッて、又お勢の心意氣が呑込めなく成ッた。文三は眞俯向いた儘で、默然として考へてゐる。

「何を其樣に、鬱いでお出でなさるの。」

「何も鬱いぢやゐません。」

「然う、私はまた、お留さん（[illegible]）とかの事を懷出して、それで、鬱いでお出でなさるのかと思ッたら、オホヽヽ。」

文三は愕然として、お勢の貌を暫く凝視めて、ホッと溜息を吐いた。

「オホヽヽ溜息をして、矢張當ッたんでせう。ネ、然うでせう。オホヽヽ、當ッたもんだから默ッて仕舞ッて。」

「そんな氣樂ぢや有りません。今日母の處から郵便が來たから、讀んで見れば、私のかういふ身に成ッたを心配して、此頃ぢや茶斷して願掛けしてゐるさうだし……。」

「茶斷して、慈母さんが。オホヽヽ、慈母さんもまた舊弊だ事ネー。」

文三はジロリとお勢を尻眼に懸けて、恨めしさうに、

「貴孃にや可笑しいか知らんが、私にや薩張

可笑しく無い。薄命とは云ひながら、私の身が定らん計りで、老耄ツた母にまで、心配掛けるかと思へば、隨分……耐らない。それに慈母さんも……。」
「また、何とか云ひましたか。」
「イヤ何とも仰しやりはしないが、アレ以來始終氣不味い顏ばかりしてゐて、打解けては下さらんし……それに……それに……。」
「貴孃も。」ト口頭まで出たが、如何も鐵面皮しく、嫉妬も言ひかねて、思ひ返して仕舞ひ、
「兎も角も、一日も早く、身を定めなければ成らぬと思ツて、今も石田の處へ往ツて頼んでは來ましたが、しかし、是れとても恃にはならんし、實に……弱りました。唯私一人苦しむのなら、何でもないが、私の身の定らぬ爲めに方々が我他彼此するので、誠に困る。」
ト萎れ返ツた。
「然うですネー。」
ト今まで冴えに冴えてゐたお勢も、トウ〳〵引込まれて、共に氣をめいらして仕舞ひ、暫くの間、默然としてつまらぬものでゐたが、頓て小さな欠伸をして、
「ア、睡く成ツた。ドレ最う往ツて寢ませう。お休みなさいまし。」
ト會釋をして起立ツて、フト立止まり、
「ア、然うだツけ……文さん、貴君はアノー、課長さんの令妹を御存知。」
「知りません。」
「さう。今日ネ、團子坂でお眼に懸ツたの。年紀は十六七でネ、隨分別嬪は……別嬪だツたけれども、束髮の癖に、ヘゲル程白粉を施けて、……薄化粧なら宜いけれども、彼樣に施けちやア、厭味ツたらしくツてネー、……オヤ好い氣なもんだ。また噺込んでゐる積りだと見えるよ。お休みなさいまし。」
ト再び會釋して、お勢は二階を降りて仕舞ツた。縁側で、唯今歸ツた許りの母親に出逢ツた。
「お勢。」
「エ。」
「エぢやないよ。またお前、二階へ上ツてたネ。」
また始まツたと云ツたやうな面相をして、お勢は返答をもせず、其儘子舍へ這入ツて仕舞ツた。さて子舍へ這入ツてから、お勢は手疾く寢衣を着替へて床へ這入り、暫くの間、臥ながら今日の新聞を覽てゐたが、……フト新聞を取落した。寢入ツたのかと思へば、然うでもなく、眼はハッチリ視開いてゐる。其癖靜まり返ツてゐて、身動きをもしない。頓て、
「何故、ア、不活潑だらう。」
ト口へ出して、考へて、フト兩足を踏伸ばして嫣然笑ひ、狼狽てて起揚ツて、枕頭の洋燈を吹消して仕舞ひ、枕に就いて、二三度臥反りを打ツたかと思ふと、間も無くスヤ〳〵と寢入ツた。

第九回　すわらぬ肚

今日は十一月四日。打續いての快晴で、空は餘殘なく晴れ渡ツてはゐるが、憂愁ある身の心は曇る文三は、朝から一室に垂籠めて、獨り屈託の頭を疾ましてゐた。實は昨日、朝飯の時、文三が叔母に對ツて、一昨日、教師を番町に訪ふて、身の振方を依頼して來た趣を、縷々咄し出したが、叔母は木然として情寡き者の如く、「ヘー」ト餘所事に聞流してゐて、さらに取合はなかツた。それが未だに氣になツて〳〵ならないので。
一時頃に、勇が歸宅したとて遊びに參ツた。浮世の鹽を踏まぬ身の氣散じさ、腕押、坐相撲の噺、體操、音樂の噂、取締との議論、賄方征討の義擧から、試驗の模樣、落第の分疏に至

るまで、凡そ偶然に懐に浮んだ事は、月足らずの水子思想、まだ完成つてゐなからうが、如何だらうが、其様な事に頓着はない。高辯ながら、矢鱈無上に陳べ立てて、返答などは更に聞いてゐぬ。文三も最初こそ相手にも成ッてゐたれ、遂にはポッと精を盡かして仕舞ひ、勇には隨意に空氣を鼓動さして置いて、自分は自分で、余所事を云ッた所が、お勢の上や身の成行で、熟思默想しながら、折々間外れな溜息噛交ぜの返答をしてゐる。と、フトお勢が階子段を上ッて來て、中途から貌而已を差出して、

「勇。」

「だから僕ア議論して遣ッたんだ。だッて君、失敬ぢやないか。ボートの順番を、クラッスの順番で……。」

「勇と云へば、お前の耳は木くらげかい。」

「だから、何だと云ッてるぢや無いか。」

「綻を縫つてやるから、シャツをお脱ぎとよ。」

勇はシャツを脱ぎながら、

「クラッスの順番で定めると云ふんだもの、ボートの順番をクラッスの順番で定めちやア、僕ア何だと思ふな、僕ア失敬だと思ふな。だッて君、ボートは……。」

「さッさと、お脱ぎで無いかネー、人が待ッてゐるぢや無いか。」

「其様に、急がなくッたッて宜いやアネ。失敬な。」

「何方が失敬だ……アラ、彼様な事言ッたら、尚ほ故意と愚頭々々してゐるよ。チョッ、じれッたいネー。早々としないと、姉さん知らないから宜い。」

「そんな事云ふなら、Bridle path と云ふ字を知ッてるか。I was at our uncle's と云ふ事知ッてるか。I will keep your……。」

「チョイと、お默り……。」

ト口早に制して、お勢が耳を聳てて、何歟聞き濟まして、忽ち滿面に笑を含んで、さも嬉しさうに、

「必と本田さんだよ。」

ト言ひながら、狼狽てて梯子段を駈け下りて仕舞ッた。

「オイ〳〵姉さん、シャツを持ッてッとくれッてば……。オイ……ヤ、失敬な、モウ往ッちまッた。渠奴、近頃、生意氣になッていかん。先刻も僕ア喧嘩して遣ッたんだ。婦人の癖に、園田勢ッ子と云ふ名刺を拵へるッてッたから、お勢ッ子で澤山だッてッたら、非常に憤ッたッけ。」

「アハヽヽヽ。」

ト今迄默想してゐた文三が、突然、無茶苦茶に高笑ひを做出したが、勿論秋毫も、可笑しさうでは無かッた。しかし、少年の議論家は、偏讃されたのかと思ッたと見えて、

「お勢ッ子で澤山だ。婦人の癖に、いかん、生意氣で。」

ト云ひながら、得々として二階を降りて往ッた跡で、文三は暫くの間、また腕を拱んで默想してゐたが、フト何歟憶出したやうな面相をして、起上ッて羽織だけを着替へて、帽子を片手に二階を降りた。

奥の間の障子を開けて見ると、果して昇が遊びに來てゐた。加之も、傲然と、火鉢の側に大胡坐をかいてゐた。その傍にお勢がベッたり坐ッて、何かッべコべと端手なく囀づッてゐた。少年の議論家は、素肌の上に上衣を羽織ッて、仔細らしく首を傾けて、ふかし甘薯の皮を剝いて居、お政は仰々しく針箱を前に控へて、覺束ない手振で、シャツの綻を縫合はせてゐた。

文三の額を視ると、昇が額で電光を光らせた、蓋し挨拶の積りで。お勢もまた後方を振返ッて顧は顧たが、「誰かと思ッたら、」ト云はぬ計りの、索然とした情味の無い相貌をして、急に

また彼方を向いて仕舞ッて、
「眞個。」
ト云ひながら、首を傾げて、チョイと昇の顏を凝視めた光景。
「眞個さ。」
「虚言だと聽きませんよ。」
アノ筋の解らない、他人の談話と云ふものは、聞いて餘り快くは無いもので。
「チョイと番町まで。」ト文三が叔母に會釋をして、起上らうとすると、昇が、
「オイ内海、些し噺が有る。」
「些と急ぐから……。」
「此方も急ぐんだ。」
文三はグッと視下ろす、昇は視上げる。眼と眼を疾視合はした 何だか異な鹽梅で。それでも文三は、澁々ながら、座鋪へ這入ッて座に着いた。
「他の事でも無いんだが。」
ト昇がイヤに冷笑しながら噺し出した。スルトお政は、フト針仕事の手を止めて、不思議さうに昇の貌を凝視めた。
「今日役所での評判に、此間免職に成ッた者の中で、二三人復職する者が出來るだらうと云ふ事だ。然う云やア、課長の談話に、些し思ひ當る事も有るから、或は實說だらうかと思ふんだ。所で、我輩考へて見るに、君が免職になッたので、叔母さんは勿論、お勢さんも……。」
ト云懸けてお勢を尻眼に懸けてニヤリと笑ッた。お勢はお勢で、可笑しく下脣を突出して、ムッと口を結んで、額で昇を疾視付けた、イヤ疾視付ける眞似をした。
「お勢さんも、非常に心配してお出でなさるし、且つ君だッても、ナニも遊んでゐて食へると云ふ身分でも有るまいしするから、若し復職が出來れば此上も無いと云ッたやうなもんだらう。そこで、若し果して然うならば、宜しく人の定らぬ内に、課長に存込ませて置く可しだ。が、しかし、君の事たから、今更直付けに往き難いとでも思ふなら、我輩一臂の力を假しても宜しい、橋渡をしても宜しいが、如何だ、お思食は。」
「それは御親切……難有いが……。」
ト言懸けて、文三は默して仕舞ッた。迷惑は隱しても隱し切れない、自ら顏色に現はれてゐる。モヂ付く文三の光景を視て、昇は早くもそれと悟ッたか、
「厭かネ。ナニ厭なものを無理に頼んで周旋しようと云ふんぢや無いから、そりや如何とも君の隨意さ。だが、しかし、……痩我慢なら、大抵にして置く方が宜からうぜ。」
文三は血相を變へた……。
「そんな事仰しやるが無駄だよ。」
トお政が横合から嘴を容れた。
「内の文さんは、グッと氣位が立ち上ッてお出でだから、其樣な卑劣な事ア出來ないッサ。」
「ハヽア、然うかネ。其れは至極お立派な事た。ヤ、是れは飛んだ失敬を申し上げました、アハヽ。」
ト聞くと等しく、文三は眞青になつて、慄然と震へ出して、拳を握ッて、齒を喰切ッて、昇の半面をグッと疾視付けて、今にもむしやぶり付きさうな顏色をした。……が、ハッと心を取直して、
「エヘ。」
何となく席がしらけた。誰も口をきかない。勇がふかし甘藷を頰張ッて、右の頰を脹らませながら、モッケな顏をして文三を凝視めた。お勢もまた、不思議さうに、文三を凝視めた。
「お勢が顏を視てゐる。……此儘で阿容々々と退くは殘念。何か云ッて遣り度い。何かカウ品の好い惡口雜言、一言の下に、昇を氣死させる程の事を云ッて、アノ鼻頭をヒッ擦ッて、アノ者面を赧らめて……。」トあせる許りで、凄み文

何は以上見附からず、而してお勢を視れば、尙ほ文三の顔を凝視めてゐる……。文三は周章狼狽とした……。

「モウ、そ……それツ切りかネ。」

ト覺えず取外して云ツて、我ながら我音聲の顫ツてゐるのに吃驚した。

「何が。」

またやられた。蒼ざめた顔をサッと赧らめて、文三が、

「用事は。」

「ナニ用事。……ウー、用事か。用事と云ふから判らない。……左やう、是れツ切りだ。」

モウ席にも堪へかねる。默禮するや否や、文三が蹶然起上ツて、座舗を出て二三歩すると、後の方で、ドッと口を揃へて高笑ひをする聲がした。文三また慄然と震へて、また蒼ざめて、口惜しさうに奥の間の方を睨詰めたまゝ、暫くの間、釘付けに逢ッたやうに、立在んでゐた。が、頓てまた氣を取直して悄々と出て参ッた。

が、文三、無念で、殘念で、口惜しくて、堪へ切れぬ憤怒の氣が、クッと許りに激昂したのをば、無理無體に壓着けた爲めに、發しこぢれて、内攻して、胸中に磅礴鬱積する、胸板が張裂ける、腸が斷絶れる。

無念々々、文三は恥辱を取ッた。ツイ近屬と云ッて、二三日前までは、官等に些とばかり高下は有りとも、同じ一課の局員で、優り劣りが無ければ、押しも押されもしなかッた昇如き犬自物の爲めに恥辱を取ッた。然り恥辱を取ッた。しかし、何の遺恨が有ッて、如何なる原因が有ッて。

想ふに、文三、昇にこそ怨はあれ、昇に怨みられる覺えは更にない。然るに昇は何の道理も無く、何の理由もなく、恰も人を辱める特權でも有ッてゐるやうに、文三を土芥の如くに蔑視して、犬猫の如くに待遇ッて、剰へ、叔母やお勢の居る前で嘲笑した、侮辱した。

復職する者が有ると云ふ役所の評判も、課長の言葉に思ひ當る事が有ると云ふも、昇の云ふ事なら特にはならぬ。假令、其等は實說にもしろ、人の痛いのなら百年も我慢すると云ふ昇が、自家の利益を賭物にして、他人の爲めに周旋しようと云ふ、まづ、其れからが呑み込めぬ。

假りに一歩を讓ッて、全く朋友の眞實心から、彼樣な事を言出したとした所で、それなら其れで言樣が有る。それを昇は、官途を離れて零丁孤苦、みすぼらしい身に成ッたと云ッて文三を見括ッて、失敬にも、無禮にも、復職が出來たら此上が無からう、と云ッた。

それも宜しいが、課長は、昇の爲めに課長なら、文三の爲めにもまた課長だ。それを昇は、恰も自家一個の課長のやうに、課長々々とひけらかして、頼みもせぬに「一臂の力を假してやらう、橋渡しをしてやらう、と云ッた。實も無く、昇は、課長の信用、一文不通の信用、主人が奴僕に措く如き信用を得てゐると云ッて、それを鼻に掛けてゐるに相違ない。それも己一個で鼻に掛けて、己一個でひけらかして、己と己が愚を披露してゐる分の事なら、空家で棒を振ッた許り、當り觸りが無ければ、文三も默ッても居よう、立腹もすまいが、そのまた信用を挾んで、人に臨んで、人を輕蔑して、人を嘲弄して、人を侮辱するに至ッては、文三腹に据ゑかねる。

面と向ッて圖太橫に、「痩我慢なら大抵にしろ、」ト、昇は云ッた。

痩我慢、痩我慢、誰が痩我慢してゐると云ッた。また何を痩我慢してゐると云ッた。

俗務をおッつくねて、課長の顔色を承けて、强ひて笑ッたり、諛言を呈したり、四ツ這に這ひ廻ッたり、乞食にも劣る眞似をして、漸くの事で三十五圓の慈惠金に有り附いた。……それ

お何處が榮譽になる。憎まれても文三には、其樣な卑屈な眞似は出來ぬ。それを昇は、お政如き愚癡無智の婦人に持長じられると云ッて、我程働き者はないと自惚れて仕舞ひ、加之も廉潔な心から、文三が手を下げて頼まぬと云へば、嫉み僻みから負惜しみをすると、臆測を逞うして、人も有らうに、お勢の前で、痩我慢なら大抵にしろ、口惜しい、腹が立つ、餘の事は兎も角も、お勢の目前で辱められたのが口惜しい。

「加之も、辱められる儘に辱められてゐて、手出し……もしなかッた。」

ト、何處でか、異な聲が聞えた。

「手出しをしなかッたのだ。手出しが爲度くも爲得なかッたのぢやない。」

ト、文三、憤然として分疏を爲出した。

「我だッて男子だ。虫も有る、胆氣も有る。昇なんぞは蛇蝎とも思ッてゐぬが、しかし、彼時憖じ、此方から手出しをしては、益々向うの思ふ坪に陷ッて、玩弄される而已だし、且つ婦人の前でも有ッたから、爲難い我慢もして遣ッたんだ。」

トは知らずして、お勢が怜悧に見えても未惚女の事なら、蟻とも、螻とも、糞中の蛆とも云ひやうのない人非人、利の爲めにならば、人糞をさへ嘗めかねぬ程の廉恥知らず、昇如き者の爲めに、文三が嘲笑されたり、玩弄されたり、侮辱されたりしても、手出しをもせず、阿容々々として退いたのを視て、或は意氣地が無い、と思ひはしなかッたか。……假令、お勢は何とも思はぬにしろ、文三はお勢の手前、面目ない、恥かしい……。

―ト云ふも、昇、貴樣から起ッた事だぞ。ウヌ、如何するか見やがれ

ト憤然として、文三が拳を握ッて、齒を噛切ッて、ハッタと許りに疾視付けた　疾視付けられた者は通りすがりの巡査で。巡査は立止ッて、不思議さうに文三の容貌を眼分量に見積ッてゐたが、それでも、何とも言はずに、また彼方の方へと巡行して往ッた。

愕然として、文三が、夢の覺めたやうな面相をして、キョロ〳〵と四邊を環視して見れば、何時の間にか靖國神社の華表際に鵠立んでゐる。考へて見ると、成程 俎橋を渡ッて、九段坂を上ッた覺えが、微かに殘ッてゐる。乃ち社内へ進入ッて、左手の方の杪枯れた櫻の木の植込みの間へ遣入ッて、兩手を背後に合はせながら、顏を蹙めて、其處此處と徘徊き出した。蓋し、尋ねようと云ふ石田の宿所は、後門を拔ければツイ其處では有るが、何分にも、胸に燃す修羅苦羅の火の手が盛んなので、暫く散歩して鬱蒸を冷ます積りで。

「しかし、考へて見ればお勢も恨みだ。」

ト文三が徘徊きながら、愚癡を溢し出した。

「現在自分の……我が、本田のやうな畜生に辱められるのを傍觀してゐながら、ヘヽやしさうな顏もしなかッた。……平氣で、人の顏を視てゐた……。」

「加之も立際に、一所に成ッて高笑ひをした、」

ト無慈悲な記憶が、容赦なく言足した。

「然うだ、高笑ひをした。　して見れば、彌々心變りがしてゐるか知らん。」

ト思ひながら、文三が力無ささうに、とある櫻の樹の下に据ゑ付けてあッたペンキ塗りの腰掛へ腰を掛ける、と云ふよりは寧ろ尻餅を搗いた。暫くの間は、腕を拱んで、頤を襟に埋めて、身動きをもせずに、靜まり返ッて默想してゐたが、忽ちフッと首を振揚げて、

「ヒョットしたら、お勢に愛想を盡かさして……そして自家の方に靡かさうと思ッて……それで故意と我を……お勢のゐる處で我を……然ういへば、アノ言樣、アノ……お勢を視た眼付

「……コ、コ、コリャ、此儘には措けん……。」

ト云ッて、文三は血相を變へて、突立ち上ッた。

が、如何したもので有らう。

何樣、カウ、非常な手段を用ひて、非常な豪膽を示して、「文三は男子だ、慥も膽氣も此の通り有る。今まで何と言はれても、笑ッて濟ましてゐたのは、全く恢量大度だからだぞ、無氣力だからでは無いぞ」ト、口で言はんでも行爲で見せ付けて、昇の膽を褫ッて、叔母の眠を覺まして、若し愛想を盡かしてゐるならば、お勢の信用をも買戻して、そして……そして……自分も實に膽氣が有ると……確信して見度いが、如何したもので有らう。

思ふさま、言ッて、言ッて、言ひまくッて、而して斷然絶交する。……イヤ〳〵、昇も仲々口強馬、舌戰は文三の得策でない、と云ッて、正可、腕力に訴へる事も出來ず。

「ハテ、如何して呉れよう。」

ト、殆んど口へ出して云ひながら、文三がまた舊の腰掛に尻餅を搗いて、熟々と考へ込んだ儘、一時間許りと云ふものは、靜まり返ッてゐて、身動きをもしなかッた。

「オイ、内海君。」

ト云ふ聲が頭上に響いて、誰だか肩を叩く者が有る。吃驚して、文三がフッと顏を振揚げて見ると、手摺れて垢光りに光ッた洋服、加之も二三ケ處手疵を負うた奴を着た壯年の男が、餘程醉醺してゐると見えて、鼻持のならぬ程の熟柿臭い香をさせ乍ら、何時の間にか目前に突立ッてゐた。見れば舊と同僚で有ッた山口某といふ男で、第一回にチョイと噂をして置いた、アノ山口と同人で、矢張踏外し連の一人。

「ヤ、誰かと思ッたら一別以來だネ。」

「ハ、、、一別以來か。」

「大分御機嫌のやうだネ。」

「然り、御機嫌だ。しかし酒でも飮まんぢやア堪らん。アレ以來、今日で五日になるが、毎日酒浸しだ。」

ト云ッて、その證據立の爲めにか、胸で妙な間投詞を發して聞かせた。

「何故また、然う Despair を起したもんだネ。」

「Despair ぢやア無いが、しかし、君、面白く無いぢやアないか。何等の不都合か有ッて、我々共を追出したんだらう。また何等の取得か有ッて、彼樣な庸劣な奴許りを選んで殘したのだらう。その理由が聞いて見度いネ。」

ト眞黑に成ッてまくし立てた、その顏を見て、傍を通りすがッた黑衣の園丁らしい男が吹笑した。文三は些し氣まりが惡くなり出した。

「君も然うだが、僕だッても事務にかけちやア……。」

「些し小さな聲で噺し給へ、人に聞える。」

ト氣を附けられて、俄に聲を低めて、

「事務に懸けちやア、から云ふと可笑しいけれど、跡に殘ッた奴等に、敢て多くは讓らん積りだ。然うぢやないか。」

「然うとも。」

「然うだらう。」

ト乘地に成ッて、

「然るに、唯一種事務外の事務を勉強しないと云ッて、我々共を追出した。面白く無いぢやないか。」

「面白く無いけれど、しかし、幾程云ッても仕樣が無いサ。」

「仕樣が無いけれども、面白く無いぢやないか。」

「時に、本田の云ふ事だから恃にはならんが、復職する者が二三人出來るだらうと云ふ事だが、君は其樣な評判を聞いたか。」

「イヤ聞かない。ヘエ、復職する者が、二三人。」

二三人。

山口は俄に口を鉗んで、何歟默考してゐたが、頓て、少許絶望氣味で、

「復職する者が有ッても、僕ぢやア無い。僕はいかん。課長に憎まれてゐるから、最う駄目だ。」

ト云ッて、また暫く默考して、

「本田は一等上ッたと云ふぢやないか。」

「然うださうだ。」

「どうしても、事務外の事務の巧みなものは違ッたものだね。僕のやうな愚直なものには、迚もアノ眞似は出來ない。」

「誰にも出來ない。」

「奴の事だから、さぞ得意でゐるだらうネ。」

「得意も宜いけれども、人に對ッて失敬な事を云ふから腹が立つ。」

ト云ッて仕舞ッてから、ア、惡い事を云ッた、と氣が附いたが、モウ取返しは附かない。

「エ、失敬な事を。如何な事を〱。」

「エ、ナニ、些し……。」

「どんな事を。」

「ナニネ、本田が今日僕に、或人の處へ往ッてお髭の塵を拂はないかと云ッたから、失敬な事を云ふと思ッて、ピッタリ跳付けてやッたら、痩我慢と云はん許りに云やアがッた。」

「それで君、默ッてゐたか。」

ト山口は憤然として、眼睛を据ゑて、文三の貌を凝視めた。

「一條程、やッつけて遣らうかと思ッたけれども、しかし、彼樣な奴の云ふ事を、取上げるも大人氣ないと思ッて、赦して置いてやッた。」

「そ、そ、それだから不可ん。然う君は内氣だから不可ん。」

ト苦々しさうに冷笑ッたかと思ふと、忽ちまた憤然として、文三の顏を疾視んで、

「僕なら、直ぐ其場でブン打ッて仕舞ふ。」

「打らうと思へば譯は無いけれども、しかし、其樣な疎暴な事も出來ない。」

「疎暴だッて關はんサ。彼樣な奴は時々打ッてやらんと、癖になッていかん。君だから何だけれども、僕なら直ぐブン打ッて仕舞ふ。」

文三は默して仕舞ッて、最早辯駁をしなかッたが、暫くして、

「時に、君は何だと云ッて、此方の方へ來たのだ。」

山口は俄に、何歟思ひ出したやうな面相をして、

「ア、然うだッけ。……一番町に親類が有るから、此勢で是れから其處へ往ッて金を借りて來ようと云ふのだ。それぢやア是れで別れよう。些と遊びに遣ッて來給へ。失敬。」

と自己が云ふ事だけを饒舌り立てゝ、人の挨拶は耳にも懸けず、急足に通用門の方へと行く。その後姿を見送りて、文三が肚の裏で、

「彼奴まで我の事を、意氣地なし、と云はん許りに云やアがる。」

第十回　負けるが勝

知己を番町の家に訪へば、主人は不在。留守居の者より飜譯物を受取りて、文三が舊と來た路を引返して、俎橋まで來た頃はモウ點火頃で、町家では皆店洋燈を點してゐる。免職に成ッて懐淋しいから、今頃歸るに食事をもせずに來た、と思はれるも殘念、ト、つまらぬ處に力瘤を入れて、文三はトある牛店へ立寄ッた。

此牛店は、開店してまだ間もないと見えて、見掛は至極よかッたが、裏へ這入ッて見ると大違ひ。尤も客も相應にあッたが、給仕の婢が不慣なので、迷惑く程には手が廻らず、帳場でも間違へれば、出し物も後れる。酒を命じ、肉を命じて、文三が待てど暮らせど持ッて來ない。催促をしても持ッて來ない。また催促をしても、

また持ッて來ない、偶々持ッて來れば、後から來た客の處へ置いて行く。流石の文三も、遂には癇癪を起して、嚴しく談じ付けて、不愉快、不平な思ひをして、漸くの事で食事を濟まし、勘定を濟まして、毎度難有う御座い、の聲を聞流して、戸外へ出た時には、厄落しでもしたやうな心地がした。

　兩側の夜見世を覗きながら、文三がブラ〳〵と、神保町の通りを通行した頃には、胸のモヤクヤも漸く絶え〳〵に成ッて、どうやら酒を飲んだらしく思はれて、昇に辱められた事も忘れ、お勢の高笑ひをした事をも忘れ、山口の言葉の氣に障ッたのも忘れ、牛店の不快さも忘れて、唯醉顔に當る夜風の涼味をのみ感じたが、しかし長持はしなかッた。

　宿所へ來た。何心なく文三が、格子戸を開けて裏へ這入ると、奥座鋪の方でワッ〳〵といふ高笑ひの聲がする。耳を聳てゝ能く聞けば、昇の聲もその中に聞える。……まだ居ると見える。文三は覺えず立止ッた。「若しまた無禮を加へたら、モウ、その時は破れかぶれ」ト思へば荐りに胸が浪だつ。暫く鵠立んでゐて、度胸を据ゑて、戰爭が始まる前の軍人の如くに、思切ッた顔色をして、文三は椽側へ廻り出た。

奥座鋪を覗いて見ると、杯盤狼藉と取散らしてある中に、昇が背なかに、圓く切抜いた白紙を張られて、ウロ〳〵として立ッてゐる。その傍にお勢とお鍋が、腹を抱へて絶倒してゐる。が、お政の姿はカイモク見えない。顔を見合はしても歸ッたか、ト云ふ者もなく、叔母さんは、ト尋ねても、返答をする者もないので、文三が憤々しながら、其儘にして行き過ぎて仕舞ふと、忽ち後の方で、

昇「オヤ、此様な悪戯をしたネ。」

勢「アラ、私ぢや有りませんよ。アラ、鍋ですよ。オホヽヽ。」

鍋「アラ、お嬢さまですよ。オホヽヽヽ。」

昇「誰も彼も無い、二人共敵手だ。ドレまづ此の肥滿奴から」

鍋「アラ、私ぢや有りませんよ。オホヽヽホ。アラ、厭ですよ。……アラー、御新造さアん引」

　ト大聲を揚げさせての騒動、ドタバタと云ふ足音も聞えた。オホヽヽと云ふ笑ひ聲も聞えた。お勢の荐りに、「引掻いてお遣りよ、引掻いて」ト叫喚く聲もまた聞えた。

騒動に氣を取られて、文三が覺えず立止まりて、後方を振向く途端に、バタ〳〵と跫音がして、避ける間もなく、また何かトンと文三に衝當ッた。狼狽へた聲で、お政の聲で、

「オヤー危い。……誰だネー、此様な處に默ッて突立ッて。」

「ヤ、コリャ失敬。……文三です。……何處ぞ痛めはしませんでしたか。」

　お政は何とも言はずに、ツイと奥座鋪へ這入りて、跡ピッシャリ。恨めしさうに跡を目送ッて、文三は暫く立在んでゐたが、頓て二階へ上ッて來て、まづ手探りで洋燈を點じて、机の邊に蹲踞してから、さて、

「實に淫哇だ。叔母や本田は論ずるに足らんが、お勢が、品格々々と口癖に云ッてゐるお勢か、彼様な猥褻な席に連ッてゐる。……加之、一所に成ッて巫山戯てゐる。……平生の持論は何處へ遣ッた。何の爲めに學問をした。先自衒而後人衒之、その位の事は承知してゐるだらう、それでゐて、彼様な眞似を……實に淫哇だ。叔父の留守に不取締が有ッちやア我か濟まん。明日嚴敷叔母に……」

　トまで調子に連れて默想したが、此に至ッて、フト、今の我身を省みて、グンニャリと萎れて仕舞ひ、暫く〳〵してから、まづ兎も角も、ト氣を替へて、懐中して來た翻譯物を取り出して讀

み初めた。

"The ever difficult task of defining the distinctive characters and aims of English political parties threatens to become more formidable with the increasing influence of what has hitherto been called the Radical party. For over fifty year' the party........."

ドッと下座鋪でする高笑ひの聲に、流讀の腰を折られて、文三はフトロを鉗んで、

「チョッ、失敬極まる。我の歸ッたのを知ッてゐながら、何奴も此奴も本田一人の相手に成ッて、チヤホヤしてゐて、飯を喰ッて來たかと云ふ者も無い。……ア、また笑ッた、アリャお勢だ。……彌々心變りがしたならしたと云ふが宜い。切れてやらんとは云はん、何の糞、我だッて男兒だ。心變のした者に……。」

ハッと心附いて、また、越調子高に、

"The ever difficult task of defining the distinctive characters and aims of English political........."

フト、格子戶の開く音がして、笑聲がピッタリ止つた。文三は耳を聳てた。匆はしく緣側を通る人の足音がして、暫くすると梯子段の下で、洋燈を如何とか斯うとか云ふお鍋の聲がしたが、それから後は蕭然として、音沙汰なしになッた。何となく來客でもある容子。

高笑ひの聲がする內は、何をしてゐる位は大抵想像が附いたから、まづ宜かッたが、斯う靜ッて見ると、サア容子が解らない。文三些し不安心に成ッて來た。「客の相手に、叔母は座鋪へ出てゐる。お鍋も用がなければ可し、有れば傍に附いてはゐない。シテ見ると……。」ト、文三は起ッたり居たり。

キッと思付いた、イヤ憶出した事が有る。今始ッた事では無いが、先刻から醉醒めの氣味で咽喉が渴く。水を飲めば渴が歇まるが、しかし水は臺所より外には無い。而して臺所は二階には附いてゐない故に、若し水を飲まんと欲せば、是非共下座鋪へ降りざるを得ず。「折が惡いから、何となく何だけれども、しかし、我慢してゐるも馬鹿氣てゐる、」ト、種々に分疏をして、文三は遂に二階を降りた。

臺所へ來て見ると、小洋燈が點しては有るが、お鍋は居ない。皿小鉢の洗ひ懸けた儘で打捨て有る所を見れば、急に用が出來て使にでも往ッたものか。「奧座鋪は、」と聞耳を引立てればヒソヒソと私語く聲が聞える。全身の注意を耳一つに集めて見たが、どうも聞取れない。ソコで竊むが如くに水を飲んで、拔足をして臺所を出ようとすると、忽ち奧座鋪の障子がサッと開いた。文三は振返ッて見て、覺えず立止ッた。お勢が開懸けた障子に掴まッて、出るでも無く出ないでもなく、唯此方へ背を向けて立在んだ儘で座鋪の裏を窺き込んでゐる。

「チョイト玆處へお出で。」

ト云ふは慥に昇の聲。お勢はだらしもなく頭振りを振りながら、

「厭サ、彼樣な事をなさるから。」

「モウ惡戲しないから、お出でと云へば。」

「厭。」

「ヨーシ、厭と云ッたネ。」

「眞個は、其處へ往きませうか。」

ト、チョイと首を傾げた。

「ア、お出で。サア……サア……。」

「何方の眼で。」

「コイツメ。」

ト確に起上る眞似。

オホヽヽと笑ひを溢しながら、お勢は狼狽て駈出して來て、危く文三に衝き當らうとして、立止ッた。

「オヤ誰。……文さん。……何時歸ッたの。」

文三は何とも言はず、ツンとして二階へ上ッて仕舞ッた。
その後からお勢も續いて上ッて來て、遠慮會釋も無く文三の傍にベッタリ坐ッて、常よりは馴々敷く、加之も顏を皺めて可笑しく身體を搖りながら、
「本田さんが巫山戲て〳〵、仕樣がないんだもの。」
ト鼻を鳴らした。
文三は恐ろしい顏色をして、お勢の柳眉を顰めた嬌面を疾視付けたが、戀は曲物、から疾視付けた時でも、何ほ「美は美だ、」と思はない譯にはいかなかッた。折角の相好も、どうやら崩れさうに成ッた。……が、ハッと心附いて、故意と、苦々しさうに冷笑ひながら、外方を向いて仕舞ッた。
折柄梯子段を踏轟かして、昇が上ッて來た。ジロリと兩人の光景を見るや否や、忽ちグッと身を反らして、さも仰山さうに、
「是だもの。……大切なお客樣を置去りにしておいて。」
「だッて、貴君が、彼樣な事をなさるもの。」
「何樣な事を。」
ト云ひながら、昇は坐ッた。
「どんな事ッて、彼樣な事を。」
「ハヽヽ此奴ア宜い。それぢやア、彼樣な事ッて如何な事を。ソラ、いゝたちこッこだ。」
「そんなら云ッてもよう御座んすか。」
「宜しいとも。」
「ヨーシ、宜しいと仰しやッたネ。そんなら云ッて仕舞ふから宜い。アノネ、文さん、今ネ、本田さんが……。」
ト言懸けて、昇の顏を凝視めて、
「オホヽヽ、マア、かにして上げませう。」
「ハヽヽ、言へ無いのか。夫れぢやア我輩が代ッて噺さう。今ネ、本田さんがネ……。」
「本田さん。」
「私の……。」
「アラ、本田さん、仰しやりやア承知しないから宜い。」
「ハヽヽ、自分から言ひ出して置きながら、然うも亭主と云ふものは恐いものかネ。」
「恐かア無いけれども、私の不名譽になりますもの。」
「何故。」
「何故と云ッて、貴君に凌辱されたんだもの。」
「ヤ、是れは、飛んでも無いことをお云ひなさる。唯チョイと……。」
「チョイと〳〵、本田さん、敢て一問を呈す。オホヽヽ、貴方は何ですよ。口には同權論者だ同權論者だ、と仰しやるけれども、虛言ですよ。」
「同權論者でなければ、何だと云ふんでゲス。」
「非同權論者でせう。」
「非同權論者なら。」
「絕交して仕舞ひます。」
「エ、絕交して仕舞ふ。アラ恐ろしの決心ぢやなアぢやないか。アハヽヽ。如何して〳〵、我輩程熱心な同權論者は、恐らくは有るまいと思ふ。」
「虛言仰しやい。譬へばネ、熱心でも貴君のやうな同權論者は、私ア大嫌ひ。」
「是れは御挨拶。大嫌ひとは、情ない事を仰しやる。そんなら如何いふ同權論者がお好き。」
「如何云ふッて、アノー僕の好きな同權論者はネ、アノー……。」
ト橫眼で、天井を眺めた。
昇が小聲で、
「文さんのやうな。」
お勢も小聲で、
「Yes……。」
ト微かに云ッて、可笑しな身振りをして、兩

手を額に當てて笑ひ出した。文三は愕然として
お勢を凝視めてゐたが、見る間に顏色を變へて
仕舞ッた。
「イヨー、妬ますぞ〳〵。羨ましいぞ〳〵。どうだ、
内海エ、今の御託宣は。文さんのやうな人が好
きツ。アッ、堪らぬ〳〵。モウ今夜、家にゃ寢
られん。」
「オホヽヽヽ、其樣な事仰しやるけれども、文
さんのやうな同權論者が好き、と云ッた許りで、
文さんが好き、ト云はないから宜いぢゃ有りま
せんか。」
「その分疏闇い〳〵。文さんのやうな人が好き
も、文さんが好きも、同じ事で御座います。」
「オホヽヽヽ、そんならばネ、……ア、斯うです
斯うです、私はネ、文さんが好きだけれども、文
さんは私を嫌ひだから宜いぢゃ有りませんか。
ネー、文さん、然うですネー。」
「ヘン、嫌ひ所か、好きも好き、足駄穿いて首
ッ丈と云ふ、念の入ッた落こちやうだ。些し水
層が増さうものなら、ブク〳〵往生しようと云
ふんだ。ナア内海。」
文三はムッとしてゐて、莞爾ともしない。そ
の貌をお勢は、チョイと横眼で視て、
「あんまり、貴君が戯談仰しやるものだから、
文さん、憤ッて仕舞ひなすッたよ。」
「ナニ、正可、嬉敷いとも云へないもんだから、
それで彼樣な貌をしてゐるのサ。しかし、ア、
澄ました所は内海も仲々好男子だネ。苦味ばし
ッてゐて、モウ些し彼の顋がつまると、申分が
ないんだけれども。アハヽヽヽ。」
「オホヽヽ。」
ト笑ひながら、お勢はまた、文三の貌を横眼
で視た。
「しかし、然うは云ふものの、内海は果報者だ
よ。まづお勢さんのやうな、此樣な、」
ト、チョイと、お勢の膝を叩いて、
「頗る付きの別嬪、加之も實の有るのに想ひ附
かれて、叔母さんに油を取られたと云ッては保
護して貰ひ、ヤ、何だと云ッては保護して貰ふ。
實に羨ましいネ。明治年代の丹治と云ふのは此
の男の事だ。燒いて粉にして、飮んで仕舞はう
か、然うしたら些とはあやかるかも知れん。ア
ハヽヽヽ。」
「オホヽヽ。」
「オイ好男子、然う苦蟲を喰潰してゐずと、些
と此方を向いてのろけ給へ。コレサ丹治君。是
れはしたり、御返答が無い。」
「オホヽヽヽ。」
トお勢はまた作笑ひをして、また横眼でムッ
としてゐる文三の貌を視て、
「アー可笑しいこと。餘り笑ッたもんだから、
咽喉が渇いて來た。本田さん、下へ往ッてお茶
を入れませう。」
「マア、最う些と御亭主さんの傍に居て、顏を
視せてお上げなさい。」
「厭だネー、御亭主さんなんぞッて、そんなら
入れて、玆處へ持ッて來ませうか。」
「茶を入れて持ッて來る實が有るなら、寧そ水
を持ッて來て貰ひ度いネ。」
「水を。お砂糖入れて。」
「イヤ、砂糖の無い方が宜い。」
「そんなら、レモン入れて來ませうか。」
「レモンが這入るなら、砂糖氣がチョッピリ有
ッても宜いネ。」
「何だネー、いろんな事云ッて。」
ト云ひながら、お勢は起上ッて、二階を降り
て仕舞ッた。跡には兩人の者が、暫く手持無沙
汰と云ふ氣味で、默然としてゐたが、頓て文三
は厭に落着いた聲で、
「本田。」
「エ。」
「君は酒に醉ッてゐるか。」

「イヽヤ。」
「それぢやア些し聞く事が有るが、朋友の交といふものは、互に尊敬してゐなければ、出来るものぢや有るまいネ。」
「何だ、可笑しな事を言出したな。左やう、尊敬してゐなければ出来ない。」
「それぢやア、……」
ト云懸けて、黙してゐたが、思切ッて、些し聲を震はせて、
「君とは暫く交際してゐたが、モウ今夜ぎりで……絶交して貰ひ度い。」
「ナニ、絶交して貰ひ度いと。……何だ、唐突千萬な。何だと云ッて、絶交しようと云ふんだ。」
「その理由は、君の胸に聞いて貰はう。」
「可笑しく云ふな。我輩少しも絶交しられる覺えは無い。」
「フン、覺えは無い。彼程人を侮辱して置きながら。」
「人を侮辱して置き乍ら。誰が、何時、何と云ッて。」
「フヽン、仕様が無いな。」
「君がか。」
文三は黙然として、暫く昇の顔を凝視めてゐたが、頓て些し聲高に、
「何にも然う、とぼけなくッたッて宜いぢやないか。君みたやうなものでも、人間と思ふからして、即ち廉恥を知ッてゐる動物と思ふからして、人間らしく美しく絶交して仕舞はうとすれば、君は一度ならず二度までも、人を侮辱して置きながら……。」
「オイ〳〵〳〵、人に物を云ふなら、モウ些と解るやうに云ッて貰ひたいネ。君一人位友人を失ッたと云ッて、そんなに悲しくも無いから、絶交するならしても宜しいが、しかし、その理由も説明せずして、唯無暗に人を侮辱した〳〵と云ふ許りぢや、ハア然うか とは云ッて居られんぢやないか。」
「それぢや、何故、先刻、叔母やお勢のゐる前で、僕に、瘦我慢なら大抵にしろ、と云ッた。」
「それが、其様なに、氣に障ッたのか。」
「當然サ。……何故今また、僕の事を明治年代の丹治、即ち意氣地なしと云ッた。」
「アハヽヽ、彌々腹筋だ。それから。」
「一事に大小は有ッても、理に巨細は無い。瘦我慢と云ッて侮辱したも、丹治と云ッて侮辱したも、歸する所は唯一の輕蔑からだ。既に輕蔑心が有る以上は、朋友の交際は出來ないものと認めたからして、絶交を申出したのだ。解ッてゐるぢやないか。」
「それから」
「但し斯うは云ふやうなものゝ、園田の家と絶交して呉れとは云はんからして、今迄のやうに毎日遊びに来て、叔母と骨牌を取らうが、」
ト云ッて、文三冷笑した。
「お勢を娼妓の如く、弄ばうが、」
ト云ッてまた冷笑した。
「僕の關係した事でないから、僕は何とも云ふまい。だから、君も左う落膽、イヤ狼狽して、遁辭を設ける必要も有るまい。」
「フヽウ、嫉妬の原素も雜ッてゐる。それから。」
「モウ、是れより外に言ふ事も無い。また君も何にも言ふ必要も有るまいから、此儘下へ降りて貰ひ度い。」
「イヤ、言ふ必要が有る。寃罪を被ッては、此を辯解する必要が有る。だから、此の儘下へ降りる事は出來ない。何故、瘦我慢なら大抵にしろと忠告したのが侮辱になる。成程、親友でないものに、さう直言したならば、侮辱したと云はれても仕様が無いが、しかし、君と我輩とは親友の關繫ぢやア無いか。」
「親友の間にも禮義は有る。然るに君は面と向

ッて僕に瘦我慢なら大抵にしろ、と云ッた。無禮ぢやないか。」

「何が無禮だ。瘦我慢なら大抵にしろ、と云ッたッけか、大抵にした方がよからうぜ、と云ッたッけか、何方だッたか、モウ忘れて仕舞ッたが、しかし、何方にしろ忠告だ。凡そ、忠告と云ふ者は――君にかぶれて、哲學者振るのぢやアないが――忠告と云ふ者は、人の所行を非と認めるから云ふもので、是と認めて忠告を試みる者は無い。故に若し非を非と直言したのが、侮辱になれば、總ての忠告と云ふ者は、皆君の所謂無禮なものだ。若しそれで、君が我輩の忠告を怒るのならば、我輩一言もない。謹んで罪を謝さう。が、然うか。」

「忠告なら、僕は却て聞く事を好む。しかし、君の言ッた事は、忠告ぢやない、侮辱だ。」

「何故。」

「若し忠告なら、何故人のゐる前で言ッた。」

「叔母さんやお勢さんは、內輪の人ぢやないか。」

「そりや、內輪の者サ。……內輪の者サ。……けれども、……しかしながら、……。」

文三は狼狽した。昇はその光景を見て、私かに冷笑した。

「內輪の者だけれども、しかし、何にも、ア、、口汚なく言はなくッても好いぢやないか。」

「どうも、種々に論鋒が變化するから、君の趣意が解りかねるが、それぢやア何か、我輩の言方、卽ち忠告の Manner が氣に喰はん、と云ふのか。」

「勿論、Manner も氣に喰はんサ。」

「Manner が氣に喰はないのなら、改めてお斷り申さう。君には侮辱と聞えたかも知れんが、我輩は忠告の積りで言ッたのだ。それで宜からう。それなら、モウ、絕交する必要も有るまい。アハ、、。」

文三は、何と駁して宜いか、解らなくなッた。唯ムシャクシャと腹が立つ。風が宜ければ左程にも思ふまいが、風が惡いので、尙ほ一層腹が立つ。油汗を鼻頭ににじませて、下脣を喰締めながら、暫くの間、口惜しさうに、昇の馬鹿笑ひをする顏を疾視んで、默然としてゐた。

お勢が、溢れる許りに水を盛ッたコップを、盆に載せて持ッて參ッた。

「ハイ、本田さん。」

「是れはお待遠さま。」

「何ですと。」

「エ。」

「アノ、とぼけた顏。」

「アハ、、、、しかし、餘り遲かッたぢやないか。」

「だッて、用が有ッたんですもの。」

「浮氣でもしてゐやアしなかッたか。」

「貴君ぢやア有るまいし。」

「我輩がそんなに浮氣に見えるかネ。……ドッコイ、課長さんの令妹と云ひたさうな口付をする。云へば此方にも、文さんと云ふ武器が有るから、直ぐ返討だ。」

「厭な人だネー、人が何にも言はないのに、邪推を廻して。」

「邪推を廻してと云へば、」

ト文三の方を向いて、

「如何だ、隊長、まだ胸に落ちんか。」

「君の云ふ事は皆遁辭だ。」

「何故。」

「そりや說明するに及ばん。Self-evident truth だ。」

「アハ、、。とう〳〵 Self-evident truth にまで達したか。」

「どうしたの。」

「マア、聞いてゐて御覽なさい、餘程面白い議論が有るから。」

ト云ッて、また文三の方を向いて、
「それぢや、その方の口はまづ片が附いたと。
それからして、最う一口の方は何だッけ……然
う然う、丹治々々。アハヽヽ、何故、丹治と云ッ
たのが侮辱になるネ。それも矢張 Selfevident
truth かネ。」
「どうしたの。」
「ナニネ、先刻我輩が、明治年代の丹治と云ッ
たのが、御氣色に障ッたと云ッて、此の通り顏
色まで變へて御立腹だ。貴孃の情夫にしちや
ア、些と野暮天すぎるネ。」
「本田。」
昇は飲みかけたコップを下に置いて、
「何でゲス。」
「人を侮辱して置きながら、咎められたと言ッ
て、遁辭を設けて逃げるやうな破廉恥的の人間
と舌戰は無益と認める。からして、モウ、僕は
何にも言ふまいが、しかし、最初のプロポーザ
ル(申出)より一歩も引く事は出來んから、モウ
降りて呉れ給へ。」
「まだ其樣な事を云ッてるのか。ヤ、どうも、
君も驚く可き負惜みだな。」
「何だと。」
「負惜みぢやないか。君にも最う自分の惡かッ
た事は解ッてゐるだらう。」
「失敬な事を云ふな。降りろと云ッたら、降り
たが宜いぢやないか。」
「モウお罷しなさいよ。」
「ハヽヽ、お勢さんが心配し出した。しかし、眞
に然うだネ。モウ罷した方が宜い。オイ内海、
笑ッて仕舞はう。マア、考へて見給へ、馬鹿氣
切ッてゐるぢやないか。忠告の仕方が氣に喰は
ないの、丹治と云ッたが癪に障るの、と云ッて
絶交する。全で子供の喧嘩のやうで、人に對し
て噺しも出來ないぢやないか。ネ、オイ、笑ッて
仕舞はう。」
文三は默ッてゐる。
「不承知か。困ッたもんだネ。それぢや宜し
い、斯うしよう、我輩が謝まらう。全く、然うし
た深い考へが有ッて云ッた譯ぢやアないから、
お氣に障ッたら、眞平御免下さい。それでよか
らう。」
文三は、モウ、堪へ切れない憤りの聲を振上
げて、
「降りろと云ッたら降りないか。」
「それでも、まだ承知が出來ないのか。それぢ
やア仕樣がない、降りよう。今何を言ッても解
らない、逆上ッてゐるから。」
「何だと。」
「イヤ此方の事だ。ドレ。」
ト起上る。
「馬鹿。」
昇も些しムッとした趣で、立止まッて、暫
く文三を疾視付けてゐたが、頓てニヤリと冷笑
ッて、
「フヽン、前後忘却の體か。」
ト云ひながら、二階を降りて仕舞ッた。お勢
も續いて起上ッて、不思議さうに文三の容子を
振反ッて觀ながら、是れも二階を降りて仕舞ッ
た。跡で文三は、惜しさうに齒を喰切ッて、拳
を振揚げて机を拍ッて、
「畜生ッ。」
梯子段の下あたりで、昇とお勢のドッと笑ふ
聲が聞えた。

第十一回 取付く島

翌朝朝飯の時、家内の者が顏を合はせた。お
政は始終顏を皺めてゐて口も碌々聞かず。文三
もその通り。獨りお勢而已はソハ〳〵してゐて
更に沈着かず、端手なく囀ッて、他愛もなく笑
ふ、かと思ふとフト口を鉗んで、眞面目に成ッ
て、憶出したやうに、額越しに文三の顏を眺め

て、笑ふでも無く笑はぬでもなく、不思議さうな、劍呑さうな、奇々妙々な顔色をする。

食事が濟む。お勢がまづ起立ッて、座鋪を出て、縁側でお鍋に戯れて、高笑をしたかと思ふ間も無く、忽ち部屋の方で、低聲に詩吟をする聲が聞えた。

益々顔を曇めながら、文三が續いて起上らうとして、叔母に呼留められて、又坐直して、不思議さうに、恐る〳〵叔母の顔色を窺ッて見て、ウンザリした。思做かして、叔母の顔は尖ッてゐる。

人を呼留めながら、叔母は悠々としたもので、まづ煙草を環に吹くこと五六ふく。お鍋の膳を引終るを見濟まして、さて漸くに、

「他の事でも有りませんがネ、昨日私が、マア傍で聞いてれば——また餘計なお世話だッて叱られるかも知れないけれども——本田さんがア、やッて、親切に言ッてお呉んなさるものを、お前さんはキッパリ斷ッてお仕舞ひなすッたが、ソリヤモウ、お前さんの事だから、いづれ先に何とか確乎な見當が無くッて、彼樣な事をお言ひなさりやアすまいネ。」

「イヤ、何にも、見當が有ッての、如何の、と云ふ譯ぢや有りませんが、唯……。」

「へー、見當も有りもしないのに、無暗に斷ッてお仕舞ひなすッたの。」

「目的なしに斷ると云ッては、或は無考へのやうに聞えるかも知れませんが、しかし、本田の言ッた事でも、ホンの風評と云ふだけで、ナニも確に……。」

縁側を通る人の跫音がした。多分、お勢が英語の稽古に出懸けるので。改ッて外出をする時を除くの外は、お勢は大抵、母親に挨拶をせずして出懸ける。それが習慣で。

「確に然うとも……。」

「それぢや何ですか、彌々となりや、御布告にでもなりますか。」

「イヤ、其樣な、布告なんぞになる氣遣ひは有りませんが。」

「それぢや、マア、人の噂を恃にするほか、仕樣が無いと云ッたやうなもんですネ。」

「ですが、其れは然うですが、しかし、……本田なぞの言ふ事は……。」

「恃にならない。」

「イヤ、そ、そ、さう云ふ譯でも有りませんが……ウー……しかし……幾程苦しいと云ッて……課長の處へ……。」

「何ですとエ。幾程苦しいと云ッて、課長さんの處へは往けないとエ。まだお前さんは、其樣な氣樂な事を言ッてお出でなさるのかエ。」

トお政が層に懸ッて、極付けかけたので、文三は狼狽てて、

「そ、そ、そればかりぢや有りません。……假令、今課長に依頼して、復職が出來たと云ッても、迚も私のやうな者は永くは續きませんから、寧ろ官員は、モウ思切らうかと思ひます。」

「官員は、モウ思切る。フン、何が何だか理由が解りやしない。此間、お前さん何とお言ひだ。私が、是れから如何して行く積りだと聞いたら、また官員の口でも探さうかと思ッてます、とお言ひぢやなかッたか。其れを今と成ッて、モウ官員は思切る。……左樣サ、親の口は干上ッても關は無いから、モウ官員はお罷めなさるが宜いのサ。」

「イヤ、親の口が干上ッても關はない、と云ふ譯ぢやア有りませんが、しかし、官員許りが職業でも有りませんから、教師に成ッても親一人位は養へますから……。」

「だから誰も、然うはならない、とは申しませんよ。そりやアお前さんの勝手だから、教師になと、車夫になと、何になとお成んなさるが宜

いのサ。」
「ですが、然う、御立腹なすッちゃ、私も實に……。」
「誰が腹を立ッてると云ひました。ナニ、お前さんが如何しようと、此方に關繫の無い事だから、誰も腹も背も立ちゃアしないけれども、唯本田さんが、ア、やッて、親切に言ッてお異んなさるもんだから、周旋ッて貰ッて、課長さんに取入ッて置きゃア、假令んば今度の復職とやらは出來ないでも、また先へよッて何ぞれ仍ぞれ、お世話アして下さるまいものでも無い。トネー、然うすりゃ、お前さんばかしか、綵母さんも御安心なさる事たし、それに……何だから、三方四方、まるく納まる事たから、(此時文三は フッと顏を振揚げて、不思議さうに叔母を凝視めた。)と思ッて、チョイとお聞き申したばかしサ。けれども、ナニ、お前さんが、然うした了簡方ならそれ迄の事サ。」
兩人共、暫く無言。
「鍋。」
「ハイ。」
トお鍋が襖を開けて、顏のみを出した。見れば口をモゴ付かせてゐる。
「まだ御膳を仕舞はないのかエ。」

「ハイ、まだ。」
「それぢゃ、仕舞ッてからで宜いからね、何時もの車屋へ往ッて、一人乘一挺、誂へて來ておくれ。濱町まで上下。」
「ハイ、それでは只今直に。」
ト云ッて、お鍋が、また閉切るを待兼ねてゐた文三が、また改めて叔母に向ッて、
「段々と承ッて見ますと、叔母さんの仰しゃる事は、一々御尤のやうでも有るし、且つ私一個の強情から、母親は勿論、叔母さんにまで種々御心配を懸けまして、甚だ恐入りますから、今一應篤と考へて見まして、」
「今一應も二應も無いぢゃアありませんか、お前さんが、モウ、官員にやならない、と決めてお出でなさるんだから。」
「そ、それは然うですが、しかし……事に寄ッたら……思ひ直すかも知れませんから……。」
お政は冷笑しながら、
「そんなら、マア、考へて御覽なさいだが、ナニモウ何ですよ、お前さんが官員に成ッてお異んなさらなきゃア、私どもが立往か無いと云ふんぢゃ無いから、無理に何ですよ、勸めはしませんよ。」
「ハイ。」

「それから序だから言ッときますがネ、聞きゃ昨夕、本田さんと何だか入組みなすッたさうだけれども、そんな事が有ッちゃア誠に迷惑しますよ。本田さんはお前さんのお朋友とは違ひな條、今ぢゃア家のお客も同然の方だから。」
「ハイ。」
トは云ッたが、文三、實は叔母が何を言ッたのだか、よくは解らなかッた。唯しちへ事が有るので、
「そりゃア、ア、云ふ胸の廣い方だから、其様な事が有ッたと云ッて、それを根葉に有ッて、周旋をしないとはお言ひなさりゃすまいけれども、全體なら……マアそれは、今言ッても無駄だ。お前さんが腹を極めてからの事にしよう。」
ト自家撲滅。文三はフト首を振揚げて、
ハイ。
「イヱネ、またの事にしませう、と云ふ事サ。」
「ハイ。」
何だかトンチンカンで。
叔母に一禮して、文三が起上ッて、そこ〳〵に部屋へ戻ッて、室の中央に突立ッた儘で、暫りもせず、良暫くの間と云ふものは、造付けの木偶の如くに、默然としてゐたが、頓て溜息と共に、

「如何したものだらう。」トッて、宛然雪達磨が、日の眼に逢ッて解けるやうにグズ〳〵と崩れながらに座に着いた。

何故如何したものだらう」かと、其理由を繹ねて見ると、概略はまづ箇樣で。

先頃免職が種で油を取られた時は、文三は一途に叔母を薄情な婦人と思詰めて、恨みもし立腹もした事では有るが、其後沈着いて考へて見ると、如何やら叔母の心意氣が、飲込めなくなり出した。

成程叔母は賢婦でも無い、烈女でもない。文三の感情、思想を忖度し得ないのも勿論の事では有るが、しかし、菽麥を辨ぜぬ程の癡女子でもなければ、自家獨得の識見をも保着してゐる、論事矩をも保着してゐる、處世の法をも保着してゐる。それでゐて、何故、ア、何の道理も無く、何の理由もなく、唯文三が免職に成ッたと云ふ許りで、自身も恐らくは無理と知りつゝ無理を陳べて、一人で立腹して、罪も咎も無い文三に手を杖かして、謝罪さしたので有らう。お勢を嫁するのが厭になッてと、或時は思ひはしたものの、考へて見れば、其れも可笑しい。二三分時前までは、文三は我女の夫、我女は文三の妻、と思詰めてゐた者が、免職と聞くより早くガラリ氣が渝ッて、俄に配合せるのが厭に成ッて、急拵への愛想盡かしを陳立てゝ、故意に文三に立腹さして、而して娘と手を切らせようとした。……如何も可笑しい。

かうした疑念が起ッたので、文三がまた叔母の言草、悔しさうな言樣、ジレッタさうな顔色を、一々漏らさず憶起して、さらに出直して思惟して見て、文三は遂に昨日の非を覺ッた。

叔母の心事を察するに、叔母はお勢の身の固まるのを樂みにしてゐたに相違ない。來年の春を心待に待ッてゐたに相違ない。あの帶をアして、この衣服をかうしてと、私に胸算用をしてゐたに相違ない。それが、文三が免職に成ッた許りでガラリと恃が外れたので、それで失望したに相違ない。凡そ失望は落膽を生み落膽は愚癡を生む。「叔母の言草を愛想盡かしと聞取ッたのは全く此方の僻耳で、或は愚癡で有ッたかも知れん。」ト云ふ所に文三氣が附いた。

から氣が附いて見ると、文三は幾分か恨が晴れた、叔母がさう憎くはなくなッた、イヤ寧ろ叔母に對して氣の毒に成ッて來た。文三の今我は故吾でない。しかし、お政の故吾も今我でない。

悶着以來、まだ五日にもならぬに、お政はガラリ其容子を一變した。勿論以前とても、ナニモ非常に文三を親愛してゐた、手車に乘せて下にも措かぬやうにしてゐた、ト云ふでは無いが、兎も角も以前は、チョイと顔を見る眼元、チョイと物を云ふ口元に、眞似て眞似のならぬ一種の和氣を帶びてゐたが、此頃は眼中には雲を懸けて、口元には苦笑を含んでゐる。以前は言ふ事がさら〳〵としてゐて、厭味氣が無かッたが、此頃は言葉に針を含めば、聞いて耳が痛くなる。以前は人我の隔歴が無かッたが、此頃は全く他人にする。霽顔を見せた事も無い、温語をきいた事も無い、物を言懸ければ、聞えぬ風をする事も有り、氣に喰はぬ事が有れば、目を側てて疾視付ける事も有り、要するに可笑しな處置振りをして見せる。免職が種の悶着は、是に至ッて、沍てて、かじけて、凝結し出した。

文三は篤實温厚な男、假令その人と爲りは如何有らうとも、叔母は叔母、有恩の人に相違ないから、尊尙親愛して、水乳の如くシックリと、和合し度いとこそ願へ、決して乖背し、暌離したいとは願はないやうなものの、心は境に隨ッてその相を顯ずるとかで、叔母に斯う仕向けられて見ると、萬更好い心地もしない、好い心

池もしなければ、ツイ不吉な顔も爲度くなる。が、其處は、篤實温厚だけに、何時も思返して、ヂッと辛抱してゐる。若し文三の身が極まらなければ、お勢の身も極まらぬ道理、親の事なら其も苦勞にならう。人世の困難に遭遇つて、獨りで苦惱して、獨りで切拔けると云ふは、俊傑の爲る事。並や通途の者ならば、然うはいかぬがち。自心に苦惱が有る時は、必ずその由來する所を自身に求めずして、他人に求める。求めて得なければ、天命に歸して仕舞ひ、求めて得れば、則ちその人を嫉妬する。然うでもしなければ、自ら慰める事が出來ない。「叔母も、それで、から辛く當るのだな、」トその心を汲分けて、如何な可笑しな處置振りをされても、文三は眼を閉ツて默ツてゐる。

「が、若し叔母が慈母のやうに我の心を嚙分けて呉れたら、若し叔母が心を和けて、共に困厄に安んずる事が出來たら、我ほど世に幸福な者は有るまいに、」ト思ツて、文三屢々嘆息した。依ツて、至誠は天をも感ずるとか云ふ古賢の格言を力にして、折さへ有れば、力めて叔母の機嫌を取ツて見るが、お政は油紙に水を注ぐやうに跳付けて而已ゐて、さらに取合はず、而して獨りでジレてゐる。文三は、針の筵に坐ツたやうな心地。

しかし、まだ〳〵是れしきの事なら、忍んで忍ばれぬ事も無いが、茲處に尤も心配で〳〵耐へられぬ事が一つ有る。他でも無い、此頃叔母がお勢と文三との間を塞くやうな容子が徐々見え出した一事で。尤も今の内は、唯お勢を戒めて、今迄のやうに文三と親しくさせないのみで、さして思切ツた處置もしないから、まづ差迫ツた事では無いが、しかし、此儘にして捨置けば、將來何等な傷心恨事が出來するかも測られぬ。一念此に到る毎に、文三は我も折れ、氣も挫けて、而して胸膈も塞がる。

かう云ふ矢端には、得て疑心も起りたがる、繩麻に蛇相も生じたがる、株抗に人想の起りたがる。實在の苦境の外に、文三が別に妄念から一苦界を産出して、求めて其の中に沈淪して、あせッて、踠いて、極大苦惱を嘗めてゐる今日此頃、我慢勝他が性質の叔母のお政が、よくせきの事なればこそ、我から折れて出て、「お前さんさへ我を折れば三方四方圓く納まる、」ト穩便をおもツて言ツて呉れる。それを無面目にも言破ツて、立腹をさせて、我から我他彼此の種子を蒔く……。文三然うは爲たく無い。成らう事なら叔母の言状を立てて、その心を慰めて、お勢の縁をも繫ぎ留めて、老母の心をも安めて、而して自分も安心したい。それで、文三は、先刻も言葉を濁して來たので。それで文三は、今又、屈託の人と爲ツてゐるので。

「如何したものだらう」

ト、文三、再び我と我に相談を懸けた。

「一寧そ叔母の意見に就いて、廉恥も良心も棄てて仕舞ツて、課長の處へ往ツて見ようか知らん。依賴さへして置けば、假令へば、今が今如何ならんと云ツても、叔母の氣が安まる。然うすれば、お勢さへ心變りがしなければ、まづ大丈夫と云ふものだ。且つ老母さんも、此頃ぢやア茶斷して心配してお出でなさる所だから、是れ計りで犧牲に成ツたと云ツても、敢て小膽とは言はれまい。コリャ、寧そ叔母の意見に……。」

が、猛然として省思すれば、叔母の意見に就かうとすれば、厭でも昇に親まなければならぬ。昇と彼儘にして置いて、獨り課長に而已取入らうとすれば、渠奴必ず邪魔を入れるに相違ない。からして、厭でも昇に親まなければならぬ。老母の爲め、お勢の爲めなら、或は良心を傷けて、自重の氣を拉いで、課長の鼻息を窺ひ得るかも知れぬが、如何に窮したれば

と云ッて、苦しいと云ッて、昇に、面と向ッて圖大柄に、「痩我慢なら大抵にしろ、」ト云ッた昇に、昨夜も昨夜とて、小兒の如くに人を愚弄して、陽に負けて陰に復り討に逢はした昇に、不倶戴天の讐敵、生きながら其肉を啖はなければ此熱腸が冷されぬと怨みに思ッてゐる昇に、今更手を杖いて一着を輸する事は、文三には死しても出來ぬ。課長に取入るも、昇に上手を遣ふも、其趣きは同じからうが同じく有るまいが、其樣な事に頓着はない。唯、是もなく非もなく利もなく害もなく、昇に一着を輸する事は、文三には死しても出來ぬ。

ト決心して見れば、叔母の意見に負かなければならず、叔母の意見に負くまいとすれば、昇に一着を輸さなければならぬ。それも厭なり、是れも厭なりで、二時間計りと云ふものは、默坐して腕を拱んで、沈吟して、嘆息して、千思萬考、審念熟慮して屈託して見たが、詮ずる所は舊の木阿彌。

「ハテ、如何したものだらう。」

物皆終あれば、古筵も鳶にはなりけり。久しく苦んでゐる内に、文三の屈託も遂に其極度に達して、忽ち一つの思案を形作ッた。所謂思案とは、お勢に相談して見ようと云ふ思案で。

蓋し文三が叔母の意見に負き度くないと思ふも、叔母の心を汲分けて見れば、道理な所もあるからと云ひ、叔母の苦り切ッた顏を見るも心苦しいからと云ふは少分で、その多分は全く、それが原因でお勢の事を斷念らねばならぬやうに成行きはすまいか、と危むからで。故に、若しお勢さへ、天は荒れても、地は老いても、海は涸れても、石は爛れても、文三が此上何樣なに零落しても、母親が此後何樣な言を云ひ出しても、決してその初の志を悛めない、と定ッてゐれば、叔母が面を脹らしても、眼を剝出しても、それしきの事なら忍びもなる。文三は叔母の意見に背く事が出來る。既に叔母の意見に背く事が出來れば、モウ昇に一着を輸する必要もない、且つ窮して濫するは、大丈夫の爲るを愧づる所だ。」

然うだ〳〵。文三の病原はお勢の心に在る。お勢の心一つで、進退去就を決しさへすれば、イサクサは無い。何故、最初から、其處に心附かなかッたか。今と成ッて考へて見ると、文三、我ながら我が怪しまれる。

お勢に相談する、極めて上策。恐らくは此に越す思案も有るまい。若しお勢が、小挫折に逢ッたと云ッて、その節を移さずして、尚ほ未だに文三の知識で考へて、文三の感情で感じて、文三の息氣で呼吸して、文三を愛してゐるならば、文三に厭な事は、お勢にもまた厭に相違は有るまい。文三が昇に一着を輸する事を屑しと思はぬなら、お勢もまた文三に、昇に一着を輸させたくは有るまい。相談を懸けたら飛んだ手輕く、「母が何と云はうと關やアしませんやアネ、本田なんぞに賴む事はお罷しなさいよ、」ト云ッて呉れるかも知れぬ。また此後の所を念を押したら、恨めしさうに、「貴君は、私をそんな浮薄なものだと思ッてお出でなさるの、」ト云ッて呉れるかも知れぬ。お勢が然うさへ云ッて呉れゝば、モウ文三天下に懼るゝ者はない。火にも這入れる、水にも飛込める。況んや叔母の意見に負く位の事は朝飯前の仕事、お茶の子さい〳〵とも思はない。

「然うだ、其れが宜い。」

ト云ッて、文三起ッたが、また立止ッて、

「が、此頃の擧動と云ひ、容子と云ひ、ヒョットしたら本田に……何しては居ないかしらん。」

チョッ、關はん、若し然うならば、モウ其迄の事だ。ナニ、我だッて男子だ。心渝りのした者に、未練は殘らん。斷然手を切ッて仕舞ッて今度こそは思ひ切ッて、非常な事をして、非常

な落膽を示して、本田を拉いで、而してお勢にも……お勢にも後悔さして、而して……而して……。」ト思ひながら、二階を降りた。

が、此處が妙で、散歩行の時、同意せぬお勢の心を疑ッたにも拘らず、その夜歸宅してからのお勢の擧動を怪んだのにも拘らず、また昨日の高笑ひ、昨夜のしだらを、今以て面白からず思ッてゐるにも拘らず、文三は内心の内心では、尚ほまだお勢に於て心變りするなどと云ふ、其樣な水臭い事は無い、と信じてゐた。尚ほまだ、相談を懸ければ、文三の思ふ通りな事を云ッて、文三を勵ますに相違ない、と信じてゐた。斯う信ずる理由が有るから、斯う信じてゐたのでは無くて、斯う信じたいから、斯う信じてゐたので。

第十二回　いすかの嘴

文三が二階を降りて、ソッとお勢の部屋の障子を開ける其の途端に、今迄机に頬杖をついて、何事か物思ひをしてゐたお勢が、吃驚した面相をして、些し飛上ッて居住居を直した。顔に手の痕の赤く殘ッてゐる所を觀ると、久敷頬杖をついてゐたものと見える。

「お邪魔ぢゃ有りませんか。」
「イヽエ。」
「それぢゃア。」
ト云ひ作ら、文三は、部屋へ這入ッて、座に着いて、
「昨夜は大に失敬しました。」
「私こそ。」
「實に面目が無い、貴孃の前をも憚らずして……今朝その事で慈母さんに小言を聞きました。アハヽヽ。」
「さうでオホヽヽ。」
ト無理に押出したやうな笑ひ聲、何となく冷淡い。今朝のお勢とは、全で他人のやうで。
「時に些し、貴孃に御相談が有る。他の事でも無いが、今朝慈母さんの仰しやるには……しかし、最うお聞きなすッたか。」
「イヽエ。」
「成程然うだ、御存知ない筈だ。……慈母さんの仰しやるには、本田がア、親切に云ッて呉れるものだから、橋渡しをして貰ッて、課長の處へ往ッたらば如何だ、と仰しやるのです。そりや、成程、慈母さんの仰しやる通り、今玆處で私さへ我を折れば、私の身も極まるし、老母も安心するし、三方四方、(ト言葉に力瘤を入れて)圓く納まる事だから、私も出來る事なら然うしたいが、しかし、然う爲ようとするには、良心を絞殺さなければならん、課長の鼻息を窺はなければならん、其樣な事は我々には出來んぢゃ有りませんか。」
「出來なければ、其迄ぢゃ有りませんか。」
「サ、其處です。私には出來ないが、しかし、然うしなければ、慈母さんがまた悪い顔をなさるかも知れん。」
「母が悪い顔をしたッて、其樣な事は何だけれども……。」
「エ、關はんと仰しやるのですか。」
ト文三は、ニコ〳〵と笑ひながら問懸けた。
「だッて然うぢゃ有りませんか、貴君が貴君の考どほりに進退して、良心に對して毫しも恥づる所が無ければ、人が如何な顔をしたッて宜いぢゃ有りませんか。」
文三は笑ひを停めて、
「ですが、唯、慈母さんが悪い顔をなさる計りならまだ宜いが、或はそれが原因と成ッて、……貴孃には如何かはしらんが、……私の爲めには最も忌むべき、最も哀む可き結果が生じはしないか、と危ぶまれるから、それで私も困るのです。……尤も、其樣な結果が生ずる

と、生じないとは、貴孃の……貴孃の……。」
ト云懸けて、默して仕舞ッたが、頓て聞えるか聞えぬ程の小聲で、
「心一つに在る事だけれども……。」
ト云ッて差俯向いた。文三の懸けた謎々が、解けても解けない風をするのか、それとも如何だか其處は判然しないが、兎も角もお勢は頗る無頓着な容子で、
「私にはまだ貴君の仰しやる事がよく解りませんよ。何故然う課長さんの處へ往くのがお厭だらう、石田さんの處へ往ッてお頼みなさるも、課長さんの處へ往ッてお頼みなさるも、その趣は同一ぢや有りませんか。」
「イヤ違ひます。」
ト云ッて、文三は首を振揚げた。
「非常な差が有る、石田は私を知つてゐるけれど課長は私を知らないから……。」
「そりや如何だか解りやしませんやアネ、往ッて見ない内は。」
「イヤ、そりや、今迄の經驗で解ります。そりや掩ふ可らざる事實だから、何だけれども……それに課長の處へ往からとすれば、是非とも先づ本田に依賴をしなければなりません。勿論課長は、私も知らない人ぢやないけれども……。」

「宜いぢや有りませんか、本田さんに依賴したッて。」
「エ、本田に依賴をしろと。」
ト云ッた時は、文三は、モウ、今迄の文三で無い、顏色が些し變ッてゐた。
「命令するのぢや有りませんがネ、唯依賴したッて宜いぢや有りませんか、と云ふの。」
「本田に……」
ト文三は、恰も我耳を信じないやうに、再び尋ねた。
「ハア。」
「彼樣な卑屈な奴に……課長の腰巾着……奴隸……。」
「そんな……。」
「奴隸と云はれても恥とも思はんやうな犬……犬……犬猫同然な奴に、手を杖いて賴めと仰しやるのですか。」
ト云ッて、ヂッとお勢の顏を凝視めた。
「昨夜の事が有るから、それで貴君は其樣に仰しやるんだらうけれども、本田さんだッて、其樣に卑屈な人ぢや有りませんヮ。」
「フヽン、卑屈でない、本田を卑屈でない。」
ト云ッて、さも苦々しさうに冷笑ひながら、顏を背けたが、忽ちまたキッとお勢の方を振向いて、
「何時か貴孃、何と仰しやッた。本田が貴孃に對ッて、失敬な戲謔を言ッた時に……。」
「そりや彼時には、厭な感じも起ッたけれども、能く交際して見れば、其樣に貴君のお言ひなさるやうに、破廉恥の人ぢや有りませんワ。」
文三は黙然として、お勢の顏を凝視めてゐた。但し宜敷ない徴候で。
「昨夜もアレから下へ降りて、本田さんがアノー、慈母さんが聞くと必と喧ましく言出すに違ひない、然うすると僕は何だけれども、アノ内海が困るだらうから、默ッてゐて呉れろ、ト口止めしたから、私は何とも言はなかッたけれども、鍋がツイ饒舌ッて……。」
「古狸奴、そんな事を言やアがッたか。」
「また彼樣な事を云ッて……そりや文さん、貴君が惡いよ。彼程貴君に罵詈されても、腹も立てずに、矢張貴君の利益を思ッて云ふ者を、それをそんな古狸なんぞッて……。そりや貴君は溫順だのに、本田さんは活潑だから、氣が合はないかも知れないけれども、貴君と氣の合はないものは、皆破廉恥と極ッても居ないから、……それを無暗に罵詈して……其樣な失敬な事ッて……。」

ト些し顏を赧めて、口早に云ッた。文三は、
益々腹立しさうな面相をして、
「それでは何ですか、本田は貴孃の氣に入ッた
と云ふんですか。」
「氣に入るも入らないも無いけれども、貴君の
云ふやうな、其樣な破廉恥な人ぢや有りません
ワ。……それを古狸なんぞッて、無暗に人を罵
詈して……。」
「イヤ、まづ、私の聞く事に返答して下さい。
彌々本田が氣に入ッたと云ふんですか。」
言樣が些し烈しかッた。お勢はムッとして、
暫く、文三の容子をジロリ〱と視てゐたが、
頓て、「其樣な事を聞いて何になさる。本田さ
んが私の氣に入らうと、入るまいと、貴君の
關係した事は無いぢや有りませんか。」
「有るから聞くのです。」
「そんなら、如何な關係が有ります。」
「如何な關係でもよろしい。それを今說明す
る必要は無い。」
「そんなら、私も、貴君の問に答へる必要は
有りません。」
「それぢやア宜しい、聞かなくッても。」
ト云ッて、文三はまた顏を背けて、さも苦々
しさうに、獨言のやうに、
「人に問詰められて、逃げるなんぞと云ッて、
實に卑、卑、卑劣極まる。」
「何ですと、卑劣極まると。……宜う御座んす。
……其樣な事お言ひなさるなら、隱したッて仕
樣がない、言ッて仕舞ひます……言ッて仕舞ひ
ますとも……。
ト云ッて、少し胸を突出して、儼然として、
「ハイ、本田さんは、私の氣に入りました。……
それが如何しました。」
ト聞くと、文三は慄然と震へた、眞蒼に成ッ
た。……暫くの間は言葉はなくて、唯だ恨めし
さうに、ヂッとお勢の澄ました顏を凝視めてゐ
た其の眼縁が、見る〱うるみ出した……が、
忽ちハッと氣を取直して、儼然と容を改めて、
震聲で、
「それぢや……それぢや斯うしませう、今迄の
事は全然……水に……。」
言切れない。胸が一杯に成ッて、暫く杜絕れ
てゐたが、思ひ切ッて、
「水に流して仕舞ひませう……。」
「何です、今迄の事とは。」
「此場に成ッて、然うとぼけなくッても宜いぢ
や有りませんか。寧そ別れるものなら……綺麗
に……別れようぢや……有りませんか……。」
「誰がとぼけてゐます。誰が誰に別れようと云
ふのです。」
文三はムラ〱とした。些し聲高に成ッて、
「とぼけるのも好加減になさい。誰が誰に別れ
るのだとは、何の事です。今までさんざ人の感
情を弄んで置きながら、今と成ッて……本
田なぞに見返るさへ有るに、人が穩かに出れ
ば、附上ッて、誰が誰に別れるのだとは何の事
です。」
「何ですと、人の感情を弄んで置きながら。
……誰が人の感情を弄びました。……誰が人
の感情を弄びましたよ。」
ト云ッた時は、お勢もうるみ聲に成ッてゐた。
文三は、グッとお勢の顏を疾視付けてゐる而已
で、一語をも發しなかッた。
「餘りだから宜い……人の感情を弄んだの、
本田に見返ッたのと、いろんな事を云ッて讒謗
して……自分が己惚れて如何な夢を見てゐたッ
て、人の知ッた事ちや有りやしない……。」
ト、まだ言終らぬ内に、文三はスックと起上ッ
て、お勢を疾視付けて、
「モウ言ふ事も無い、聞く事も無い、モウ是れ
が口のきゝ納めだから、然う思ッてお出でなさ
い。」

「さう思ひますとも。」

「澤山……浮氣をなさい。」

「何ですと。」

ト云ッた時には、モウ文三は、部屋には居なかッた。

「畜生……馬鹿……口なんぞ聞いて呉れなくツたツて、些とも困りやしないぞ。……馬鹿……。」

ト跡でお勢が敵手も無いに獨りで熱氣となッて、惡口を竝べ立ててゐる處へ、何時の間に歸宅したか、ふと母親が這入ッて來た。

「如何したんだエ。」

「畜生……。」

「如何したんだと云へば。」

「文三と喧嘩したんだよ。……文三の畜生と……。」

「如何して。」

「先刻突然這入ッて來て、今日慈母さんが斯う斯う言ッたが、如何しようと相談するから、それから昨夜慈母さんが言ッた通りに……。」

「コレサ、靜かにお言ひ。」

「慈母さんの言ッた通りに云ッて勸めたら、腹を立ててやアがッて、人の事をいろんな事を云ッて。」

ト手短かに、勿論自分に不利な處は悉皆取除いて、次第を咄して、

「慈母さん私ア口惜しくッて〳〵ならないよ。」

ト云ッて、襦袢の袖口で泪を拭いた。

「フウ然うかエ、其樣な事を云ッたかエ。それぢや最うそれまでの事だ。彼樣な者でも家大人の血統だから、今と成ッて彼此言出しちや面倒臭いと思ッて、此方から折れて出て遣れば、附上ッて其樣な我儘勝手を云ふ。……モウ勘辨がならない。」

ト云ッて、些し考へてゐたが、頓てまた、娘の方を向いて、一段聲を低めて、

「實はネ、お前には、まだ内々でゐたけれども、家大人はネ、行々はお前を文三に配合せる積りでお出でなさるんだが、お前は……厭だらうネ。」

「厭サ〳〵、誰が彼樣な奴に……。」

「必と然うかエ。」

「誰が彼樣な奴に……乞食したツて、彼樣な奴のお嫁に成るもんか。」

「その一言をお忘れでないよ。お前が彌々その氣なら、慈母さんも了簡が有るから。」

「慈母さん、今日から、私を下宿さしてお呉んなさいな。」

「なんだネ、此娘は。藪から棒に。」

「だッて私ア、モウ文さんの顏を見るのも厭だもの。」

「そんな事言ツたツて、仕樣が無いやアネ。マア最う些と辛抱してお出で。その内にや慈母さんが宜いやうにして上げるから。」

此時は、お勢は默してゐた、何か考へてゐるやうで。

「是からは、眞個に、慈母さんの言ふ事を聽いて、モウ餘り文三と口なんぞお利きでないよ。」

「誰が利いてやるもんか。」

「文三許りぢや無い、本田さんにだツても然うだよ。彼樣に昨夜のやうに遠慮の無い事をお言ひでないよ。それアお前の事だから、正可そんな……不埒なんぞはお爲ぢや有るまいけれども、今が嫁入前で一番大事な時だから。」

「慈母さんまで其樣な事を云ツて、……そんなら、モウ、是れから本田さんが來たツて、口も利かないから宜い。」

「口を聞くなぢや無いが、唯昨夜のやうに……。」

「イヽエ〳〵、モウ口も利かない〳〵。」

「さうぢや無い、と云へばネ。」

「イヽエ、モウ口も利かない〳〵。」

ト頭を振る娘の顏を視て、母親は、

「今で狂氣だ。チョイと人が一言いへば、直に腹を立ッて仕舞ッて、手も附けられやアしない。」
ト云ひ捨てて、起上ッて、部屋を出て仕舞ッた。

第三編

第十三回

心理の上から觀れば、智愚の別なく、人咸く面白味は有る。内海文三の心狀を觀れば、それは解らう。

前回參看。文三は既にお勢に窘められて、憤然として部屋へ駈戻ッた。さてそれからは獨り演劇。泡を嚙んだり、拳を握ッたり、どう考へて見ても心外でたまらぬ。「本田さんが氣に入りました。」それは一時の激語、と承知してゐるでもなく、又居ないでも無い。から、強ち其ればかりを怒ッた譯でもないが、唯腹が立つ。まだ何か他の事で、おそろしく、お勢に欺かれたやうな心地がして、譯もなく腹が立つ。

腹の立つまゝ、遂に下宿と決心して、宿所を出た。では、お勢の事は、既にすッぱり思ひ切ッてゐるか、といふに、然うではない。思ひ切ッてはゐない。思ひ切ッてはゐないが、思ひ切らぬ譯にもゆかぬから、そこで悶々する。利害得喪、今はそのやうな事に頓着無い。唯己れに逆ッてみたい。己れの望まない事をして見たい。鴆毒？ 持ッて來い。嘗めて此一生をむちやくちやにして見せよう……。

そこで、宿所を出た。同じ下宿するなら、遠方がよいといふので、本郷邊へ往ッて尋ねてみたが、どうも無かッた。から、彼地から小石川へ下りて、其處此處と尋ね廻るうちに、ふと水道町で、一軒見當ッた。宿料も廉、其割には座鋪も淸潔。下宿をするなら、まづ此處等と定めなければならぬ。……となると、文三急に考へ出した。「いづれ考へてから。」またそのうちに……。」

言葉を濁して其家を出た。

「お勢と評論ッて家を出た。――叔父が聞いたら、さぞ心持を惡くするだらうなア……。」と歩きながら、徐々畏縮だした。「ト云ッて、どうも、此儘には濟まされん。……思ひ切ッて、今の家に下宿しようか？……」

今更心が動く。どうしてよいか、譯がわからない。時計を見れば、まだ漸く三時半すこし廻ッた許り。今から歸宅るも、何となく氣が進まぬ。から、彼處から牛込見附へ懸ッて、腹の屈託を口へ出して、折々往來の人を驚かしながら、いつ來るともなく番町へ來て、例の教師の家を訪問れてみた。

折善く、最う學校から歸ッてゐたので、すぐ面會した。が、授業の模樣、書生の噂、留學、龍動、「タイムス」、ハアバアト・スペンサ――相變らぬ噂で、おもしろくも何ともない。「私、……事に寄ると……此頃に下宿するかも知れません。」唐突に宛もない事を云ッてみたが、先生少しも驚かず、何故か、ふむと鼻を鳴らして、只「羨ましいな、もう一度其樣な身になッてみたい。」とばかり。とんと方角が違ふ。面白くないから、また辭して、教師の宅をも出てしまッた。

出た時の勢に引替へて、すご〳〵歸宅したは、八時ごろの事で有ッたらう。まづ眼を配ッてお勢を搜す。見えない。お勢が……棄てた者に用も何もないが、それでも、文三に云はせると、人情といふものは妙なもので、何となく氣に懸るから、火を持ッて上ッて來たお鍋に、こッそり聞いてみると、お孃さまは、氣分が惡いと仰しやッて、御膳も碌に召上らずに、もう

お休みなさいました、といふ。
「御膳も碌に……」
「御膳も碌に召しあがらずに。」
確められて、文三急に羞れかけた……が、ふと氣をかへて、「へ、へ、へ、御膳も召上らずに……今に、鍋焼饂飩でも喰度くなるだらう。」
をかしな事をいふ、とは思ッたが、使に出てゐて、今朝の騒動を知らないから、お鍋は其儘降りて仕舞ふ。
ト、獨りになる。「へ、へ、へ、」とまた思出して冷笑ッた……が、ふと心附いてみれば、今は、其様な、つまらぬ、くだらぬ、薬袋も無い事に拘はッてゐる時ではない。「叔父の手前、何と云ッて出たものだらう？」と、改めて首を捻ッて見たが、もウ何となく馬鹿氣てゐて、眞面目になッて考へられない。「何と云ッて出たものだらう？」と強ひて考へてみても、心めがいふ事を聽かず、それとは全く關繋もない餘所事を、何時からともなく思ッて仕舞ふ。いろいろに紛れようとしてみても、どうも紛れられない。意地惡くもその餘所事が氣に懸ッて、氣に懸ッて、どうもならない。怺へに怺へて、怺へて見たが、とう〳〵怺へ切れなくッて、「して見ると、同じやうに苦しんでゐるか知らん。」ハッと云ッても追付かず。から思ふと、急におそろしく、氣の毒になッて來て、文三は狼狽てゝ、後悔をしてしまッた。叱るよりは謝罪る方が、文三には似合ふ、と誰やらが云ッたが、さうかも知れない。

第十四回

「氣の毒〳〵」と思ひ寝に、うと〳〵として、眼を覺まして見れば、烏の啼聲、雨戸を繰る音、裏の井戸で釣瓶を軋らせる響。少し眠足りないが、無理に起きて下座鋪へ降りてみれば、只、お鍋が睡むさうな顔をして、釜の下を焚付けてゐるばかり。誰も起きてゐない。
朝寝が持前のお勢、まだ臥てゐるは當然の事。とは思ひながらも、何となく物足らぬ心地がする。早く顔が視たい。如何な顔をしてゐるか。顔を視れば、どうせ好い心地がしないは知れてゐれど、それでゐて、只早く顔が視たい。
三十分たち、一時間たつ。今に起きて來るかと思へば、肉癢ゆい。髪の寝亂れた、顔の蒼ざめた、腫瞼の美人が始終目前にちらつく。
「昨日下宿しようと騒いだは、誰で有ッたらう」と云ッたやうな顔色……。
朝飯がすむ。文三は奥座鋪を出ようとする。お勢は其頃になッて、漸々起きて來て、入らうとする。――縁側でパッたり出會ッた。……
ハッと狼狽へた文三は、豫て期した事ながら。それに引替へて、お勢の澄ましやうは。ジロリと文三を尻目に懸けたまゝ、奥座鋪へツイとも云はず入ッて仕舞ッた。只それだけの事で有ッた。
が、それだけで十分。そのジロリと視た眼付が、眼の底に染付いて、忘れようとしても忘れられない。胸は痞へた。氣は結ぼれる。搗て加へて、朝の薄曇りが、晝少し下る頃より、雨となッて、びしよびしよと降り出したので、氣も消える計り。
お勢は、氣分の惡いを口實にして、英語の稽古にも往かず、只一間に籠ッたぎり、音沙汰なし。晝飯の時、顔を合はしたが、お勢は成り丈け文三の顔を見ぬやうにしてゐる。偶々眼を視合はせれば、すぐ首を据ゑて、可笑しく澄ます。それが睨付けられるより、文三には辛い。雨は歇まず。お勢は濟まぬ顔。家内も濕り切ッて、誰とて口を利く者も無し。文三、果は泣き出したくなッた。
心苦しい其日も暮れて、やゝ雨はあがる。昇は遊びに來たが、門口で華やかな聲。お鍋のけ

たゝましく笑ふ聲が聞える。お勢は、其時、奥座鋪に居たが、それを聞くと、狼狽へて、起上らうとしたが、間に合はず。——氣輕に入ッて來る昇に視られて、さも餘儀なさゝうに又坐ッた。

何も知らぬから、昇、例の如く、好もしさうな目付をして、お勢の顏を視て、挨拶よりまづ戲言をいふ。お勢は莞爾ともせず、眞面目な挨拶をする。——彼此齟齬ふ。から、昇も怪訝な顏色をして、何か云はうとしたが、突然お政が、三日も物を云はずにゐたやうに、たてつけて、饒舌り懸けたので、イッ紛らされて其方を向く。其間に、お勢は、こッそり起上ッて、座鋪を滑り出ようとして……見付けられた。

「何處へ、勢ちやん？」

けれども、聞えませんから、返答を致しません、と云はぬ許りで、お勢は座鋪を出て仕舞ッた。

部屋は眞の闇。手探りで摺附木だけは探り當てたが、洋燈が見付からない。大方お鍋が忘れて、まだ持ッて來ないので有らう。「鍋や、」と呼んで、少し待ッてみて、又「鍋や……。」返答をしない。「鍋、鍋、鍋」たてつけに呼んでも、返答をしない。焦燥きッてゐると、氣の拔けたところに、間の拔けた聲で、

「お呼びなさいましたか！」

「知らないよ……そんな……呼んでも呼んでも、返答もしないンだものヲ。」

「だッて、お奥で御用をしてゐたンですものヲ。」

「用をしてゐると、返答は出來なくッて？」

「御免遊ばせ……何か御用？」

「用が無くッて呼びはしないよ。……そンな……人を……くらみ(暗黑)でゐるのがわかッ(分ら)なッかえッ？」

二三度聞直して、漸く分ッて、洋燈は持ッて來たが、心無し奴が、跡をも閉めずして出て往ッた。

「ばか……」

顏に似合はぬ惡體を吐きながら、起立ッて邪慳に障子を〆切り、再び机の邊に坐る間もなく、折角〆めた障子をまた開けて、……己れ、やれ、もう堪忍が……と振反ッてみれば、案外な母親。お勢は急に他處を向く。

「お勢、」と小聲ながらに、力瘤を込めてお政は呼ぶ。此方は、なに、返答をするものか、と力んだ？　面相。

「何だと云ッて、彼樣なをかしな處置振りをお爲だ？　本田さんが、何とか思ひなさらアね。彼方へお出でよ。」

と暫く待ッてゐてみたが、動きさうにも無いので。

又聲を勵まして、

「よ。お出で、云ッたら、お出でよ。」

「其位なら、彼樣な事云はないがいゝ……。」

と、差俯向く。其顏を窺けば、おやおや泪ぐんで……。

「ま、呆れけエ　ちまはア！」と母親はあきれけエッちまッた。「たンとお脹れ。」

とは云ッたが、又折れて、

「世話ア燒かせずと、お出でよ。」

返答なし。

「えゝ、も、じれッたい！　勝手にするがいい！」

其儘、母親は、奥座鋪へ還ッて仕舞ッた。

これで座鋪へ還る綱も截れた。求めて截ッて置きながら、今更惜しいやうな、じれッたいやうな、をかしな顏をして、暫く待ッてゐてみても、誰も呼びに來ても呉れない。また呼びに來たとて、おめおめ還られもしない。それに奥座鋪では、想像のない者共が打揃ッて、嘲すやら、笑ふやら……。癇癪紛れにお勢は色筆を執

ッて、まだ眞新らしなスウヰントンの文典の表紙を、ごし〲擦り始めた。不運なるスウヰントンの文典！

表紙が大方眞青になッたころ、ふと、縁側に發音。……耳を聳てて、お勢ははッと狼狽へた……。手ばしこく文典を開けて、倒しまになッてゐるとも心附かで、ぴッたり眼で喰込んだ。トント、先刻から書見してゐたやうな面相をして。

すらりと障子が開く。文典を凝視めたまゝで、お勢は少し震へた。遠慮氣もなく、無造作に入ッて來た者は、云はでも知れた昇。華美な、輕い調子で、「遁けたね、好男子が來たと思ッて。」

ト云はして置いて、お勢は漸く、重さうに首を揚げて、世にも落着いた聲で、さも膠なく、

「あの、失禮ですが、まだ明日の支度をしませんから……。

けれども、敵手が敵手だから、一向利かない。

「明日の支度？　明日の支度なぞは、如何でも宜いさ。」

と、昇は、お勢の傍に陣を取ッた。

「眞個に、まだ……。」

「何をさう拗ねたんだらう？　令慈に叱られたね？　え、然うでない。はてな。」

ト首を傾けるより、早く横手を拍ッて、

「あ、あ、わかッた、成、成、それで……。それならさうと、早く一言云へばいゝのに……。なんだらう。大方かく申す拙者奴に……ウ……ウと云ッたやうな譯なんだらう？　大蛤の前ぢやア口が開きかねる。――これやア尤もだ。そこで釣寄せて置いて……ほん、ありがた山の蜀魂、一聲漏らさうとは嬉しいぞエ〲。」

ト妙な身振りをして、

「それなら、實は此方も、疾から其氣ありだから。それ、白癡が出來合靴を買ふのぢやないが、しッくり嵌まるといふもんだ。嵌まると云へば、邪魔の入らない内だ。ちよッくり抱ッこのぐい極めと往きやせう。」

ト白けた聲を出して、手を出しながら、摺寄ッて來る。

「明日の支度が……。」

トお勢は泣聲を出して、身を縮ませた。

「ほい、間違ッたか。失敗々々。」

何を云ッても、敵手にならぬのみか、此上手を附けたら、雨になりさうなので、流石の本田も少し持あぐねた所へ、お鍋が呼びに來たから、それを幸ひにして、奧座鋪へ還ッて仕舞ッた。

文三は昇が來たから、安心を失くして、起ッて見たり、坐ッて見たり、我他彼此するのが薄々分るので、彌々以て堪らず、無い用を拵へて、此時二階を降りて、お勢の部屋の前を通りかけたが、ふと耳を聳て、拔足をして障子の間隙から内を窺いて、はッと顏。お勢が突臥になッて泣……い……て……。

Explanation.（示談）と一時に胸で破裂した……。

第十五回

Explanation.（示談）と肚を極めてみると、大きに胸が透いた。已れの打解けた心で推測るゆゑ、左程に難事とも思へない。もう些しの辛抱、と、哀む可し、文三は眠らでとも知らず夢を見てゐた。

機會を窺てゐる二日目の朝、見知り越しの金貸が來て、お政を連出して行く。時機到來……今日こそは、と領を延ばしてゐるとも知らずして、歸ッて來たか、下女部屋の入口で、「慈母さんは？」ト優しい聲。

其聲を聞くと均しく、文三、起上りは起上ッたが、据ゑた胸も率となれば躍る。前へ一歩、後へ一歩、躊躇ひながら二階を降りて、ふいと

角を廻つて見れば、部屋にとばかり思ッてゐたお勢が、入口の柱に靠れて、空を向上げて物思ひ顔……。はッと思ッて、文三立ち止まッた。お勢も、何心なく振り反ッてみて、急に顔を曇らせる……。ツと部屋へ入ッて、跡ぴッしやり。障子は柱と額合せをして、二三寸跳ね返ッた。

跳ね返ッた障子を文三は恨めしさうに凝視めてゐたが、軈て思ひ切りわるく、二歩三歩。わなゝく手頭を引手へ懸けて、胸と共に障子を躍らしながら、開けてみれば、お勢は机の前に端坐ッて、一心に壁と睨め競。

「お勢さん。」

と、瀬踏をしてみれば、愛度気なく返答をしない。危きに慣れて縮めた膽を少し太くして、また、

「お勢さん。」

また返答をしない。

此分なら、と文三は取越して安心をして、莞爾莞爾しながら、部屋へ入り、好き程の処に座を占めて、

「少しお噺が……。」

此時になッて、お勢は初めて、首の筋でも撮ッたやうに、徐々顔を此方へ向け、可愛らしい眼に角を立て、文三の様子を見たが、何か云ひたさうな口付をした。今打たうと振上げた拳の下に立ッたやうに、文三はひやりとして、思はず一生懸命に、お勢の顔を凝視めた。けれども、お勢は何とも云はず、また向うを向いて仕舞ッたので、やゝ顔を霽らして、極りわるさうに莞爾々々しながら、

「此間は誠にどうも……。」

も、と云ひ切らぬうち、ツと起上ッたお勢の儀が……、不意を打たれて、ぎよッとする。女帯が、友禅染の、眼前にちら〳〵……はッと心附く……我を忘れて、しッかり捉へた、お勢の袂を……。

「何をなさるんです?」

ト慳貪に云ふ。

「少しお噺……お……。」

「今、用が有ります。」

邪慳に袂を振払ッて、ツイと、部屋を出て仕舞ッた。

其跡を眺めて、文三は呆れた顔。……「此期を外しては……、」と心附いて、起ち上りてはみたが、正可、跡を慕ッて往かれもせず。萎れて二階へ、孤鼠々々と帰ッた。

「失敗ッた。」トロへ出して後悔して、後れ馳せに赤面。今にお袋が帰ッて来る、[illegible]の次第に……。失敗ッた、仕損ッた。千悔万悔、臍を噬んでゐる胸元を、貫くやうな午砲の響。それと同時に「御膳で御座いますよ。」けれども、ホイ来たと云ッて降りられもしない。二三度呼ばれて、拠ろ無く、薄気味わるわる降りてみれば、お政はもう帰ッてゐて、娘と取膳で、今、食事最中。文三は黙礼をして膳に向ッた。「もう咄したか、まだ咄さぬか。」ト思へば胸も落着かず。臆病で、好事な眼を、額越にそッと親子へ注いでみれば、お勢は澄ました顔。お政は意味の無い顔。咄したとも付かず、咄さぬとも付かぬ。

寿命を縮めながら、食事をしてゐた。

「そら〳〵、気をお付けなね。子供ぢやア有るまいし。」

ふと聞いたお政の声に、怖気の付いた文三ゆゑ、吃驚して首を揚げてみて、安心した。お勢が誤まつて、茶を膝に滴したので有ッた。

気を附けられたから、と云ふ、えこぢな顔をして、お勢は澄ましてゐる。拭きもしない。「早くお拭きなね。」と母親は叱ッた。「膝の上へ茶を滴して、ぼかんと見てゐる奴が有るもんか。三歳児ぢやア有るまいし、意気地の無いにも方

圖が有ッたもんだ。」

最早斯う成ッては、穩かに收まりさうもない。默ッても視てゐられなくなッたから、お鍋は一とかたけ頰張ッた飯を鵜呑にして、「はツ、はツ。」と笑ッた。同じ心に文三も、「へ、へ。」と笑ッた。

するとお勢は佶と振向いて、可畏らしい眼付をして、文三を睨め出した。その容子が常で無いから、お鍋はふと笑ひ罷んで、もツけな顏をする。文三は色を失ッた……。

「どうせ、私は、意氣地が有りませんのさ、」とお勢はじぶくりだした。誰に向ッて云ふともなく、「笑ひたきやア澤山お笑ひなさい。……失敬な、人の叱られるのが、何處が可笑しいんだらう？　げた〳〵〳〵〳〵。」

「何だよ、やかましい！　言草云はずと、早々と拭いてお仕舞ひ。」

ト母親は火鉢の布巾を放げ出す。けれども、お勢は手にだも觸れず、

「意氣地がなくッたッて、まだ、自分が云ッたことを、忘れるほど耄碌はしません。餘計なお世話だ。人の事よりか、自分の事を考へてみるがいゝ。男の口から最う口も利かないなんぞッて、云ッて置きながら……」

「お勢！」

ト一句に力を籠めて、制する母親。その聲も、もう斯う成ッては、耳には入らない。文三を尻眼に懸けながら、お勢は切齒をして、

「まだ三日も經たないうちに、人の部屋へ……」

「これ、どうしたもんだ。」

「だッて私ア腹が立つものを。人の事を浮氣者だなんぞッて、罵ッて置きながら、三日も經たないうちに、人の部屋へつか〳〵入ッて來て、……人の袂なんぞ捉へて、咄が有るだの、何だの、種々な事を云ッて……なんぼ何だッて、餘り人を輕蔑した……云ふ事が有るなら、茲處でいふがいゝ。慈母さんの前で云へるなら、云ッてみるがいゝ……。」

留めれば留めるほど、尙ほ喚く。散々喚かして置いて、最う好い時分と成ッてから、お政が「彼方へ。」と頤でしやくる。しやくられて、放心して、人の顏ばかり視てゐたお鍋は初て心附き、倉皇て箸を棄てて、お勢の傍へ飛んで來て、いろ〳〵に賺かして、連れに行かうとするが、仲々素直に連れて行かれない。

「いゝえ、放擲ッといとくれ、何だか云ふ事が有るッていふンだから、それを……聞かないうちは……いゝえ、私や、……あんまり人を輕蔑した……いゝえ。其處お放しよ、……お放しッてッたら、お放しよッ。……」

けれども、お鍋の腕力には敵はない。無理無體に引立てられ、がや〳〵喚きながらも、座舖を連れ出されて、稍部屋へ收まッたやうす。

となッて、文三初て人心地が付いた。

いづれ當擦りぐらゐは、有らうとは思ッてゐたが、かうまでとは思ひ掛けなかッた。晴天の霹靂、思ひの外なのに度肝を拔かれて、腹を立てる遑も無い。腦は亂れ、神經は荒れ、心神錯亂して、是非の分別も付かない。只さしあたッた面目なさに、消えも入りたく思ふばかり。叔母を觀れば、薄氣味わるく、にやりとしてゐる。此儘にも置かれない、……から、餘儀なく、叔母の方へ膝を押向け、おろ〳〵しながら、

「實に……どうも、す、す、濟まんことをしました。……まだお咄はいたしませんでしたが、……一昨日お勢さんに……。」

ト云ひかねる。

「其事なら、ちらと聞きました、」と叔母が受取ッて吳れた。「それはあゝした我儘者ですから、定めしお氣に障るやうな事もいひましたらうから……。」

「いや、決してお勢さんが……。」

「それぢやアもう、」ト、急調子高に云ッて、文三を云ひ消して仕舞ひ、また顏を俯に落して、「お叱んなさるも、彼の身の爲めだから、いゝけれども、只まだ嫁入前の事ですから、彼様な者でもね、餘り身體に障る……。」

「いや、私は決して、……其様な……。」

「だからさ、お云ひなすッたとは、云はないけれども、是からも有る事だから、おねがひ申して置くンですよ。わるくお聞きなすッちやアいけないよ。」

ピッたり釘を打たれて、ぐッとも云へず、文三は、只、口惜しさうに、叔母の顏を視詰めるばかり。

「子を持ッてみなければ、分らない事だけれども、女の子といふものは、嫁けるまでが心配なものさ。それやア、人様にやア、彼様な者を如何なッても、よささうに思はれるだらうけれども、親馬鹿とは旨く云ッたもンで、彼様な者でも子だと思へば、有りもしねえ惡名つけられて、ひよッと縁遠くでもなると、厭なものさ。それに誰にしろ、踏付けられゝやア、あンまり好い心持もしないものさ。ねえ、文さん。」

もウ、文三、堪りかねた。

「す、す、それぢや何ですか。……私が……私が、お勢さんを踏付けたと仰しやるンですかッ？」

「可畏い事をお云ひなさるねえ。」ト、お政はおそろしい顏になッた。「お前さんがトお勢を踏付けたと、誰が云ひました？　私ア自分にも覺えが有るから、只の世間咄に、踏付けられたと思ふと厭なもンだ、と云ッた許しだよ。それを其様な云ひもしない事をいッて、……あゝ、なンだね、お前さん、云ひ掛りをいふんだね？　女だと思ッて。其様な事を云ッて、人を困らせる氣だね？」

と層に懸ッて極付ける。

「あゝわるう御座んした……、」ト文三は、狼狽てて謝罪ッたが、口惜し涙が承知をせず、兩眼に一杯溜るので、顏を揚げてゐられない。差俯向いて「私が……わるう御座んした……。」

「さうお云ひなさると、さも私が難題でもいひだしたやうに、聞えるけれども、なにも然う逆げなくッてもいゝぢやないか。其様な事を云ひ出すからにやア、お前さんだッて、何か譯が無くッちやア、お云ひなさりもすまい？」

「私がわるう御座んした……。」ト差俯向いたまゝで、重ねて謝罪ッた。「全く其様な氣で、申した譯ぢやア有りませんが……お、お、思違ひをして……ツイ……失禮を申しました……」

かう云はれては、流石のお政も、最う踏付きやうが無い、と見えて、無言で、暫く、文三を睨めるやうに視てゐたが、頓て、

「あゝ厭だ、〳〵、」と額を皺めて、「此様な厭な思ひをするも、皆彼奴のお蔭だ。どれ、」ト起ち上ッて、「往ッて土性骨を打挫いてやりませう。」

お政は、座舗を出て仕舞ッた。

お政が座舗を出るや、否や、文三は今迄の溜涙を、一時にはら〳〵と落した。たゞ[illegible]、さしうつむいた儘で、良久くの間、起ちも上がらず、身動きもせず、黙然として坐ッてゐた。が、そのうちに、お鍋が歸ッて來たので、文三も、餘儀なく、うつむいたまゝで、力無ささうに起ち上り、悄々我部屋へ戻らうとして、梯子段の下まで來ると、お勢の部屋で、さも意地惡ッた聲で、

「私やアもう、家に居るのは厭だ〳〵。」

第十六回

あれほどまでに、お勢母子の者に辱しめられても、文三はまだ園田の家を去る氣になれない。但だ、そのかはり、火の消えたやうに、悄まッ

て仕舞ひ、いとど無口が、一層口を開かなくなッて、呼んでも捗々敷く返答もしない。用事が無ければ、下へも降りて來ず、只一間にのみ垂れ籠めてゐる。餘り靜かなので、ツイ居ることを忘れて、お鍋が洋燈の油を注さずに置いても、それを吩付けて注がせるでもなく、油が無ければ無いで、眞闇な座鋪に悄然として、始終何事をか考へてゐる。

けれど、から靜まッてゐるは表相のみで、其胸臆の中へ立入ッてみれば、實に一方ならぬ變動。恰も心が顛倒した如くに、昨日好いと思ッた事も、今日は惡く、今日惡いと思ふ事も、昨日は好いとのみ思ッてゐた、情慾の曇が取れて、心の鏡が明かになり、睡入ッてゐた智慧は、俄に眼を覺まして、決然として斷案を下し出す。眼に見えぬ處、幽妙の處で、文三は――全くとは云はず――稍生れ變ッた。

眼を改めてみれば、今まで爲て來た事は、夢か將た現か……と怪しまれる。

お政の浮薄、今更いふまでも無い。が、過まッた文三は。――實に今まではお勢を見謬まッてゐた。今となッて考へてみれば、お勢はさほど高潔でも無い。移氣、開豁、輕躁、それを高潔と取違へて、意味も無い外部の美、それを内部のと混同して、惜しいかな、文三はお勢に心を奪はれてゐた。

我に心を動かしてゐる、と思ッたが、あれが抑も誤まりの緒。苟めにも人を愛するといふからには、必ず先づ互ひに、天性氣質を知りあはねばならぬ。けれども、お勢は、初より、文三の人と爲りを知ッてゐれば、よし多少文三に心を動かした如き形迹が有ればとて、それは眞に心を動かしてゐたではなく、只、ほんの、一時感染れてゐたので有ッたらう。

感受の力の勝つ者は誰しも同じ事ながら、お勢は眼前に移り行く事や物やのうち、少しでも新奇な物が有れば、眼早くそれを視て取ッて、直に心に思ひ染める。けれども、惜しい哉、殆ど見た儘で別に烹煉を加ふるといふことをせずに、無造作に、其物、其事の見解を作ッて仕舞ふから、自ら眞相を看破めるといふには至らずして、動もすれば淺膚の見に陷る。夫故その物に感染れて、眼色を變へて狂ひ騒ぐ時を見れば、如何にも熱心さうに見えるものの、固より一時の浮想ゆゑ、まだ眞味を味はぬうちに、早くも熱が冷めて、厭氣になッて、惜し氣もなく打棄てて仕舞ふ。感染れる事の早い代りに、飽きる事も早く、得る事に熱心な代りに、既に得た物を失ふことには無頓着。書物を買ふにしても然うで、買ひたいとなると、矢も楯もなく買ひたがるが、買ッて仕舞へば餘り讀みもしない。英語の稽古を始めた時も、また其通りで、始める迄は一日をも爭ッたが、始めてみれば左程に勉強もしない。萬事然うした氣風で有ッてみれば、お勢の文三に感染れたも、また厭いたも、其間に絡まる事情を棄てて、單に其心狀をのみ繹ねてみたら、恐らくは其樣な事で有らう。

且つお勢は、開豁な氣質、文三は朴茂な氣質。開豁が朴茂に感染れたから、何處か假衣をしたやうに、恰當はぬ所が有ッて、落着が惡かッたらう。惡ければ良くしよう、といふが人の常情で有ッてみれば、假令免職、窮愁、恥辱、などといふ外部の激因が無いにしても、お勢の文三に對する感情は、早晩一變せずにはゐなかッたらう。

お勢は實に輕躁で有る。けれども、輕躁で無い者が、輕躁な事を爲ようとて爲得ぬが如く、輕躁な者は、輕躁な事を爲まい、と思ッたとて、なかなか爲ずにはをられまい。輕躁と自ら認めてゐる者すら、何うしたもので有ッてみれば、況してお勢の如き、まだ我をも知らぬ、罪の無い處女が、己れの氣質に克ち得ぬとて、

強ちにそれを無理とも云へぬ。若しお勢を深く尤む可き者なら、較べて云へば、稍學問あり、智識ありながら、尚ほ輕躁を免かれぬ、譬へば文三の如き者は、はれやれ、文三の如き者は？ 何と云ッたもので有らう？

人事で無い。お勢も惡かッたが、文三もよろしく無かッた。「人の頭の蠅を逐ふよりは、先づ我頭のを逐へ。」——聞舊した諺も、今は耳新らしく、身に染みて聞かれる。から、何事につけても、己一人をのみ責めて、敢て叨りにお勢を尤めなかッた。が、如何に贔屓眼にみても、文三の既に得た所謂識認といふものを、お勢が得てゐるとは、どうしても見えない。輕躁と心附かればこそ、身を輕躁に持崩しながら、それを憂しとも思はぬ樣子。醜穢と認めねばこそ、身を不潔な境に處きながら、それを何とも思はぬ顔色。是れが文三の、近來最も傷心な事。半夜夢覺めて燈冷かなる時、想うて此事に到れば、常に悵然として大息せられる。して見ると、文三は、あゝ、まだ苦しみが嘗め足りぬさうな！

第十七回

お勢のあくたれた時、お政は娘の部屋で、凡そ一時間ばかりも、何か諄々と教誨かしてゐたが、其後は、如何したものか、急に母子の折合が好くなッて來た。取分けてお勢が母親に孝順くする。折節には、機嫌を取るのかと思はれるほどの事をも云ふ。親も、子も、睨める敵は同じ文三ゆゑ、かう比周ふも其筈ながら、動靜を窺るに、只其計りでも無ささうで。

昇は其後ふッつり遊びに來ない。顔を視れば啀み合ふ事にしてゐた母子ゆゑ、折合が付いてみれば、噺も無く、文三の蔭口も今は道ひ盡す。——家内が何時からと無く濕ッて來た。

「あゝ欝氣たこと！」ト一夜お勢が欠伸まじりに云ッて泪ぐんだ。

新聞を拾讀してゐたお政は、眼鏡越しに娘を見遣ッて、

「欠びをして、徒然としてゐることは無いやアね。本でも出して來て、お復習ひなさい。」

「復習へッて。」ト、お勢は鼻聲になッて眉を顰めた。

「明日の支度は、もう濟まして仕舞ッたものヲ。」

「濟ましッちまッたッて。」

お政は、復、新聞に取掛ッた。

「慈母さん」ト お勢は何をか憶出して、事有り氣に云ッた、「本田さんは何故來ないンだらう？」

「何故だか。」

「憤ッてゐるのぢやないのだらうか？」

「然うかも知れない。」

何を云ッても取合はぬゆゑ、お勢も仕方なく口を鉗んで、少く物思はし氣に洋燈を凝視めてゐたが、それでもまだ氣に懸ると見えて、

「慈母さん。」

「何だよ？」ト五月蠅さうに、お政は起直ッた。

「眞個に本田さんは憤ッて來ないのだらうか？」

「何を。」

「何をッて。」ト少し氣を得て、「そら、此間來た時、私お酌はなかッたから……。」

ト、母の顔を凝視めた。

「なに人、」ト、お政は莞爾した。何と云ッてもまだおぼこたなと云ひたさうで、「お前に構ッて貰ひたいンで、來るのぢや有るまいし。」

「あら、然うぢや無いンだけれどもさ……。」ト、恥かしさうに自分も莞爾。

おほんといふ聲を作ッてゐる、とは知らぬから、昇が例の通り、平氣な顔をして、ふいと遣ッて來た。

「おや、ま、噂をすれば影とやらだよ。」ト お政が顏を見るより饒舌り付けた。「今貴君の噂をしてゐた所さ。え？ 勿論さ、義理にも善くは云へないッさ……はゝはゝ。それは冗談だが、きついお見限りですね。何處か穴でも出來たんぢやないかね？ 出來たとエ？ そら〳〵、それだもの、だから鰻男だといふことさ。え、鰌で無くッてお仕合？ 鰌とはエ？……あ、ほンに鰌と云へば、向ら横町に出來た鰻屋ね、ちよいと異ですッさ。久し振りだッて、奢らなくッてもいゝよ、はゝゝゝ。」

[illegible]延ばしの太平樂、聞くに堪へぬといふは平日の事。今宵はちと情實が有るから、お勢は顏を皺めるは扨置き、昇の顏を横眼でみながら、追蒐け引蒐け一高笑ひ。これ隠しか、嬉しさの溢れか、當人に聞いてみねば、とんと分らず。

「今夜は大分御機嫌だが、」ト、昇も心附いたか、お勢を調戯りだす。「此間は如何したもンだッた？ 何を云ッても、まだ明日の支度をしませんから。はッ、はッ、はッ、憶出すと可笑しくなる。」

「だッて、氣分が惡かッたンですものヲ。」ト、浮唾しい、形容も出來ない身振り。

「何が何だか、譯が解りやアしません。」

少し白けた席の穴を塡めるためか、昇が俄に問はれもせぬ無沙汰の分疏をしだして、近ごろは頼まれて、一夜はざめに課長の處へ往ッて、細君と妹に、英語の下稽古をしてやる、といふ。「いや、迷惑な、」ト言葉を足す。

と聞いて、お政にも似合はぬ、正直な、まうけに受けて、其不心得を諭す。是が立身の踏臺になるかも知れぬと云ッて。けれども、御弟子が御弟子ゆゑ、飛んだ事まで教へはすまいか、と思ふと心配だ、と高く笑ふ。

お勢は、昇が課長の處へ、英語を教へに往くと聞くより、如何したものか、俄に塞れだしたが、此時母親に釣られて、淋しい顏で莞爾して、

「令妹の名は何といふの？」

「花とか耳とか云ッたッけ。」

「餘程出來るの？」

「英語かね？ なアに、から駄目だ。Thank you for your kind だから、まだ〳〵。」

お勢は冷笑の氣味で、

「それぢやア……。」

「I will ask to you と云ッて、今日教師に叱られた。それは、其時、忘れてゐたのだから、仕方が無い。

「ときに、これは、」と昇は、お政の方を向いて、親指を出してみせて、「如何しました、その後？」

「居ますよ、まだ。」ト お政は思ひ切りて顏を皺めた。「づら〳〵しいと思ッてねえ！……それも宜いが、また何か、お勢に云ひましたッさ。」

「お勢さんに？」

「はア。」

「如何な事を？」

おッとまかせと饒舌り出した、文三のお勢の部屋へ忍び込んだ事から、段々と順を逐ッて、剰さず漏さず、おまけまでつけて。昇は頤を撫でてそれを聽いてゐたが、お勢が惡たれた一段となると、不意に聲を放ッて、大笑に笑ッて、

「そいつア痛かッたらう。」

「なに其ン時こそ、些とばかし可怪な顏をしたッけが、半日も經てば、また平氣なものさ。なんと、本田さん、づら〳〵しいぢやア有りませんか！」

「さうしてね、まだ私の事を、浮氣者だなンぞッて。」

「ほんとに、其樣な事も云ッたさうですがね。なにも、其樣に腹がたつなら、此處の家に居ないが宜いぢやア有りませんか。私ならすぐ、下宿

か何かして仕舞ひまさア。それを、其樣な事を云ッて置きながら、づう〳〵しく、ぺんぺんくらりと、大飯を食ッて……ゐるとは、何處まで押が重いンだか、數が知れないと思ッて。」

昇は苦笑ひをしてゐた。暫時して返答とはなく、たゞ、

「何しても困ッたもンだね。」

「ほんとに困ッちまひますよ。」

困ッてゐる所へ、勝手口で、「梅本でござい。」梅本といふは近處の料理屋。「おや、家では……。」と、お政は怪しむ。その顏も、忽ち莞爾となッた、昇の吩咐とわかッて。

「それだから此息子は可愛いよ。」ト、片腹痛い言まで云ッて、やがて下女が持込む岡持の蓋を取ッて見るより、また意地の汚ない言をいふ。

それを、今夜に限ッて、平氣で聞いてゐるお勢どの心持が解らない、と怪しんでゐる間も有ればこそ、それッと炭を繼ぐ、吹く、起こす、燗をつけるやら、鍋を懸けるやら。瞬く間に酒となッた。あひの、おさへの、といふ蒼蠅い事の無い代り、洒落、擔ぎ合ひ、大口、高笑、都々逸の素じぶくり、替歌の傳受等、いろ〳〵の事が有ッたが、蒼蠅いからそれは略す。

刺身は調味のみになッて、噯で應答をするところになッて、お政は、例の處へでも往き度くなッたか、ふと起ッて座舖を出た。

と、兩人差向ひになッた。顏を視合せるとも無く視合して、お勢はくす〳〵と吹出したが、急に眞面目になッて、ちんと澄ます。

「これアをかしい。何がくす〳〵だらう？」

「何でも無いの。」

「のぼる源氏のお顏を拜んで、嬉しいか？」

「呆れて仕舞はア。ひよッとこ面の癖に。」

「何だと？」

「綺麗なお顏で御座いますといふこと。」

昇は例の、默ッてお勢を睨め出す。

「綺麗なお顏だといふンだから、ほゝゝ、」と用心しながら退却をして、「いゝぢやア……おッ……。」

ッと寄ッた昇が、お勢の傍へ。……空で手と手が閃く、からまる……と鎭まッた所をみれば、お勢は何時か手を握られてゐた。

「これが如何したの？」と平氣な顏。

「如何もしないが、からまづ俘虜にしておいて、どッこい……。」と振放さうとする手を握りしめる。

「あちゝゝ。」と顏を皺めて、「痛い事をなさるねえ！」

「ちッとは痛いのさ。」

「放して頂戴よ。よう、放さないと此手に噛付きますよ。」

「噛付きたいほど思へども……。」ト平氣で鼻歌。

お勢はおそろしく顏を皺めて、甘ッたるい聲で、「よう、放して頂戴と云へばねえ。……聲を立てますよ。」

「お立てなさいとも。」

ト云はれて、一段聲を低めて、「あら引 本田さんが引 手なんぞ握ッて、ほゝゝ、いけません。ほゝゝ。」

「それはさぞ引 お困りで御座いませう引。」

「眞個に放して頂戴よ。」

「何故？ 内海に知れると惡いか？」

「なに、彼樣な奴に知れたッて……。」

「ぢや、ちッとかうしてゐ給へ。大丈夫だよ。淫褻なぞする本田にあらずだ。……が、ちよッと……。」ト何やら小聲で云ッて、「……位は宜からう？」

すると、お勢は、如何してか、急に心から眞面目になッて、「あたしやア知らないからいゝ……私やア……其樣な失敬な事ッて……。」

昇は面白さうに、お勢の眞面目くさッた顏を

眺めて、莞爾々々しながら、「いゝぢやないか？たゞちよいと……。」

「厭ですよ、そんな……よッ、放して頂戴と云へばねえッ。」

一生懸命に振放とうとする、放させまいとする、暫時爭ッて居ると、縁側に足音がする。それを聞くと、昇は我からお勢の手を放して、大聲に笑ひに笑ひ出した。

ずッと、お政が入ッて來た。

「叔母さん〳〵。お勢さんを放飼ひはいけないよ。今も人を捉へて、口說いて口說いて困らせ拔いた。」

「あら〳〵彼樣な虛言を吐いて、……非道い人だこと！……」

昇は天井を仰向いて、「はッ、はッ、はッ。」

第十八回

一週間と經ち、二週間と經つ。昇は、相かはらず、繁々遊びに來る。そこで、お勢も益々親しくなる。

けれど、其親しみ方が、文三の時とは大きに違ふ。彼時は、華美から野暮へと感染れたが、此度は其反對で、野暮の上塗が次第に剝げて、漸く木地の華美に戻る。兩人とも顏を合はせれば、只戲れる許り、落着いて談話などした事更に無し。それも、お勢に云はせれば、昇が宜しく無いので、此方で眞面目にしてゐるものを、とぼけた顏をして剽輕な事を云ひ、輕く、氣無しに、調子を浮かせてあやなしかける。其故、念に掛けて笑ふまい、とはしながら、をかしくてをかしくて、どうも堪らず。脣を嚙締め、眉を釣上げ、眞赤になッても耐へ切れず、ツイ吹出して、大事の〳〵品格を落して仕舞ふ。果は、何を云はれんでも、顏さへ見れば可笑しくなる。「眞個に本田さんはいけないよ、人を笑はして許りゐて。」とお勢は絕えず昇を憎がッた。

からお勢に對ふと、昇は戲れ散らすが、お政には無遠慮といふうちにも、何處かしッとりした所が有ッて、戲言を云はせれば、云ひもするが、また落着く時には落着いて、隨分眞面目な談話もする、勿論、眞面目な談話と云ッた所で、金利公債の話、家屋敷の賣買の噂。さもなくば、借家人が更に家賃を納れぬ苦情――皆つまらぬ事ばかり。一つとしてお勢の耳には、面白くも聞えないが、それでゐて、兩人の話してゐる所を聞けば、何か、談話の筋の外に、男女交際、婦人矯風の議論よりは、遙かに優りて面白い所が有ッて、それを眼顏で話合ッて、娯しんでゐるらしいが、お勢には薩張解らん。が、餘程面白いと見えて、其樣な談話が始まると、お政は勿論、昇までが、平生の愛嬌は何處へやら遣ッて、お勢の方は見向もせず、一心になッて、或は公債を書替へる極く簡略な法、或は誰も知ッてゐる銀行の內幕、または、課長の生計の大した事を、喋々と話す。お勢は退屈で〳〵、欠びが出る。起上ッて部屋へ歸らう、とは思ひながら、つい起そゝくれて潮合を失ひ、まじりまじり、思慮の無い顏をして、面白くもない談話を聞いてゐるうちに、いつしか眼が曇り、兩人の顏がかすんで、話聲もやゝ遠く籠ッて聞こえる。……「なに、十圓さ。」と突然鼓膜を破る昇の聲に駭かされ、震へ上る拍子に、眼を看開いて、忙はしく兩人の顏を窺へば、心附かぬ樣子。まづよかッたと安心し、何喰はぬ顏をして、また兩人の談話を聞出すと、また眼の皮がたるみ、引入れられるやうな、快い心地になッて、睡るともなく、つい正體を失ふ……誰かに手暴く搖ぶられて、また愕然として眼を覺ませば、耳元にどッと高笑の聲。お勢も流石に莞爾して「それでも睡いんだものヲ。」と睡さうに分疏をいふ。また、かういふ事も有る、前のやうに慾張ッた談話で、兩人は夢中に

なッてゐる。お勢は退屈やら、手持無沙汰やら、いびつに坐ッてみたり、跪坐ッてみたり、耳を借してゐては際限もなし。そのうちには、また睡気がさしさうになる。から、ちと談話の仲間入をしてみよう、とは思ふが、一人が口を噤めば、一人が舌を揮ひ、喋々として両つの口が結ばるといふ事が無ければ、嘴を容れたいにも、更に其間隙が見附からない。その見附からない間隙を、漸く見附けて、此處ぞと思へば、さて肝心のいふことが見附からず、迷つくうちに、はや人に取られて仕舞ふ。經驗が知識を生んで、今度はいふべき事も豫て用意して、ぞれツたさうに插頭で[illegible]を掻きながら、漸くの思で間隙を見附け、「公債は今幾何なの？」と嘴を插んでみれば、さて我ながら唐突千萬！無理では無いが、昇も、母親も、膽を潰して、顔を視合せて、大笑ひに笑ひ出す。――今のは半襟の間違ひだらう。――なに、人形の首だッさ。――違えねえ。またしても口を揃へて高笑ひ。「あんまりだから、いゝ。」トお勢は膨れる。けれど、膨れたとて、機嫌を取られゝば、それだけ畢竟安目にされる道理。どうしても、かうしても、敵はない。お勢は此の事を不平に思ッて、或は口を利かぬと云ひ、或は絶交するト云ッて、恐喝してみたが、昇は一向平氣なもの、なか／＼其樣な甘手ではいかん。壓制家、利己論者と、口では呪ひながら、お勢もつい其不屆者と親んで、玩ばれると知りつゝ、玩ばれ、調戲られると知りつゝ、調戲られてゐる。けれど、さうはいふものゝ、戯けるも滿更でも無いと見えて、偶々昇が、お勢の望む通り、眞面目にしてゐれば、さてどうも物足りぬ樣子で、此方から、遠方から、危がりながら、ちよッかいを出してみる。餘儀相手にならねば甚た機嫌がわるい。から、餘儀なく其手を押へさうにすれば、忽ちきやッ／＼と輕忽な聲を發し、高く笑ひ、遠方へ逃げ、側の眶の裏を返して、べヽべーといふ。總て、たぶられても厭だが、なぶられぬも厭、どうしませう、トいひたさうな樣子。

母親は見ぬ風をして、見落しなく見ておくから、齒痒くてたまらん。老功の者の眼から觀れば、年若の者のする事は、總てしだらなく、手緩くて更に埒が明かん。そこで耐へ兼ねて娘に向ひ、嚴かに云ひ聞かせる、娘の時の心掛を。どのやうな事かと云へば、皆多年の實驗から出た交際の規則で、男、取分けて若い男といふ者は、かう／＼いふ性質のもので有るから、若し戯談をいひかけられたら、かう。花を持たせられたら、かう。弄られたら、かう待遇ふものだ、などいふ事であるが、親の心子知らずで、かう利益を思ッて、云ひ聞かせるものを、それをお勢は、生意氣にも、まだ世の事は[illegible]癖に、明治生れの婦人は、婚姻は[illegible]無いから、男子に接するに其樣な手管は入らないとて、鼻の頭で待遇ッてゐて、更に用ひようともしない。手管では無い、是が娘の時の心掛といふものだ、と云ひ聞かせても、其樣な深遠な道理は、まだ青いお勢には解らない。そんな事は、女大學にだッて書いて無い、と強情を張る。勝手にしな、と癇癪を起せば、勝手にしなくッて、と口答をする。どうにも、かうにも、なッた奴ぢやない！　けれど、母親が氣を揉むまでも無く、幾程もなく、お勢は我から自然に樣子を變へた。まづ其初めを云へば、かうで。

此の物語の首に、ちよいと噂をした事の有る、お政の知己、須賀町のお濱といふ婦人が、近頃に、娘をさる商家へ縁付けるとて、それを吹聽かた〴〵、その娘を伴れて、或日、お政を尋ねて來た。娘といふは、お勢に一ッ年下で、容色は少し劣る代り、遊藝は一通り出來て、それでゐて、おとなしく、愛想がよくて、お政に

云はせれば、如才の無い娘で、お勢に云はせれば、舊弊な娘。お勢は大嫌ひ、母親が贔屓にするだけに、尚ほ一層此娘を嫌ふ。但し是れは、普通の勝心のさせる業ばかりではなく、此娘のお蔭で、をりをり高い鼻を擦られる事も有るからで。縁付けると聞いて、お政は羨ましいと思ふ心を、少しも匿さず、顔はおろか、口へまで出して、事々しく慶びを陳べる。娘の親も親で、慶びを陳べられて、一層得意になり、さも誇貌に婿の財産を數へ、または支度に費ッた金額の、總計から内譯まで、細々と計算をして聞かせれば、聞く事毎にお政は且つ驚き、且つ羨んで、果は、どうしてか、婚姻の原因を娘の行狀に見出して、これといふも、平生の心掛がいゝからだ、と口を極めて賞める。嫁る事が何故其様に手柄であらうか。お勢は猫が鼠を捕ッた程にも思ッてゐないのに！　それを其娘は、恥かしさうに、俯向きは俯向きながら、己れも仕合と思ひ顔で、高慢は自ら小鼻に現はれてゐる。見てゐられぬ程に醜態を極める！　お勢は固より羨ましくも、妬ましくも有るまいが、たゞ己れ一人で、さう思ッてゐる許りでは、滿足が出來んと見えて、をりをり、さも苦々しさうに、冷笑ッてみせるが、生憎誰も心附かん。そのうちに、母親が人の身の上を羨むにつけて、我身の薄命を歎ち、何處かの人が、親を蔑ろにして、更にいふことを用ひず、何時身を極めるといふ考へも無い、と苦情をならべ出すと、娘の親は、失禮な、なに此娘の姿色なら、ゆくゆくは「立派な官員さん」でも夫に持ッて、親に安樂をさせることで有らう、と云ッて、嘲けるやうに高く笑ふ。見やう見眞似に、娘までが、お勢の方を顧みて、これもまた嘲けるやうに、ほゝと笑ふ。お勢はおそろしく赤面して、さも面目なげに俯向いたが、十分も經たぬうちに、座鋪を出て仕舞ッた。我部屋へ戻ッてから、初て、後馳に憤然となッて、「一生、お嫁になんぞ行くもんか、」ト奮激した。

客は、一日、打くつろいで話して、夜に入ッて から歸ッた。歸ッた後に、お政はまた人の幸福をいひだして、羨むので、お勢は最早勘辨がならず、胸に積る晝間からの鬱憤を、一時に霽らさうといふ意氣込で、言葉鋭くいひまくッてみると、母の方にも存外な道理が有ッて、つひにはお勢も成程と思ッたか、少し受太刀になッた。が、負けじ魂から、滅多には屈服せず、尚ほ彼此と諍論ッてゐる。そのうちに、お政は、何か妙案を思ひ浮べたやうに、俄に顔色を和げ、今にも笑出しさうな眼付をして、「そんな事をお云ひだけれども、本田さんならどうだえ？」ト云ふ。「厭なこッた。」ト云ッて、お勢は今まで顔へ出してゐた思慮を、盡く内へ引込まして仕舞ふ。「おや、何故だらう。本田さんなら、いゝぢやないか。ちよいと氣が利いてゐて、小金も少とは持ッてゐなさりさうだし、それに、第一男が好くッて。」「厭なこッた。」「でも若し本田さんが呉れろと云ッたら。何と云はう？」ト云はれて、お勢は少し躊躇ッたが、狼狽へて、「い……いやなこッた。」お政はじろりと其様子をみて、何を思ッてか、高く笑ッたばかりで、再び娘を詰らなかッた。その後は、お勢は故らに、何喰はぬ顔を作ッてみても、どうも旨くいかぬやうすで、動もすれば沈んで、眼を細くして、何處か遠方を凝視め、恍惚として、夢現の境に迷ふやうに見えたことも有ッた。十一時になるよ。ト母親に氣を附けられたときは、夢の覺めたやうな顔をして、溜息さへ吐いた。

部屋へ戻ッても、尚ほ氣が確かにならず、何心なく寢衣を着代へて、力無ささうに、べッたりと床の上へ坐ッたまゝ、身動きもしない。何を思ッてゐるのか？　母の端なく云ッた一言の

答を求めて、求め得ぬのか？　夢のやうに過ぎこした昔へ、心を引戻して、これまで文三如き者に拘ッて、良縁をも求めず、徒らに歳月を空ッたを、惜しい事に思ッてゐるのか？　或は待つ未來の放ッた光に、我身を繞る暗黒を破られ、初て今が浮沈の潮界、一生の運の定まる時と心附いたのか？　抑また狂ひ出す妄想につれられて、我知らず心を華やかな娯しい未來へ走らし、望みを事實にし、現に夢を見て、嬉しく、畏ろしい思をしてゐるのか？　恍惚として顔に映る内の想が無いから、何を思ッてゐることか、すこしも解らないが、兎に角良久くの間は、身動きをもしなかッた。其儘で、十分ばかり經ッたころ、忽然として、眼が嬉しさうに光り出すかと思ふ間に、見る／＼耐へようにも耐へ切れなさゝうな微笑が、口頭に浮び出て、頬さへいつしか紅を潮す。閉ぢた胸の、一時に開けた爲め、天成の美も一段の光を添へて、艶なうちにも、何處か、豁然と晴やかに、快ささうな所も有りて、宛然蓮の花の開くを觀るやうに、見る眼も覺める計りで有ッた。突然、お勢は跳ね起きて、嬉しさがこみあげて、徒は坐ッてゐられぬやうに、そして、柱に懸けた薄暗い姿見に對ひ、模糊寫る己が笑顔を覗き込んで、あやすやうな眞似をして、片足浮かせて、床の上でぐるりと回り、舞踏でもするやうな運歩で、部屋の中を跳ね廻ッて、また床の上へ來ると、其儘、其處へ臥倒れる拍子に、手ばしこく枕を取ッて、頭に宛がひ、渾身を揺りながら、締殺したやうな聲を漏らして笑ひ出した。

此狂氣じみた事の有ッた當座は、昇が來ると、お勢は、臆するでもなく、恥らふでもなく、只何となく落着が惡いやうで有ッた。何か心に持ッてゐる、それを悟られまいため、矢張今迄どほり、をさなく、愛度氣なく待遇はうと、蔭では思ふが、いざ昇と顔を合せると、どうも、もう、さうはいかないと云ひさうな調子で、いふ事にさしたる變りも無いが、それをいふ調子に、何處か今までに無いところが有ッて、濁ッて、厭味を含む。用も無いに、座鋪を出たり、はひッたり、をかしくも無いことに高く笑ッたり、誰やらに顔を見られてゐるなと心附きながら、それを故意と心附かぬ風をして、磊落に母親に物をいッたりするはまだな事、昇と眼を見合して、狼狽へて横へ外らしたことさへ、度度有ッた。總て今までとは様子が違ふ。それを昇の居る前で、母親に怪しまれた時は、お勢もはッと顔を赧めて、如何にも様子が惡さうに見えた。が、その極り惡さうなもいつしか失せて、其後は、昇に飽いたのか、珍らしくなくなッたのか、それとも何か爭ひでもしたのか、どうしたのか解らないが、兎に角昇が來ないとても、もウ心配もせず、來たとて、一向構はなくなッた。以前は欝々として居る時でも、昇が來れば、すぐ冴えたものを、今は其反對で、冴えてゐる時でも、昇の顔を見れば、すぐ顔を曇らして、冷淡になつて、餘り口數もきかず、總て仲のわるい從兄妹同士のやうに、遠慮氣なく餘所々々しく待遇す。昇はさして變らず、尚ほ折節には戯言など言ひ掛けてみるが、云ッても、もウ、お勢が相手にならず、勿論嬉しさうにも無く、たゞ、知りませんよ、ト彼方向くばかり。其故に、昇の戯ばみも鋒先が鈍ッて、大抵は、泣眠入るやうに眠入ッて仕舞ふ。からきで昇を冷遇する。其代り、昇の來て居ない時は、おそろしい冴えやうで、誰彼の見さかひなく戯れかゝッて、詩吟するやら、唱歌するやら、いやがる下女をとらへて舞踏の眞似をするやら、飛んだり、跳ねたり、高笑ひをしたり、さま〴〵に騒ぎ散らす。が、から冴えてゐる時でも、昇の顔さへ見れば、不意にまた眼の中を曇らして、落着い

て、冷淡になツて仕舞ふ。けれど、母親には大層やさしくなツて、騷いで叱られたとて、鎮まりもしないが、惡まれ口もきかず。却ツて惰氣なく、母親にまでだれかかるので、母親も初のうちは苦い顏を作ツてゐたものゝ、竟には、どうかからか釣込まれて、叱る聲を崩して笑ツて仕舞ふ。但し、朝起される時だけは、それは例外で、其時ばかりは少し頰を膨らせる。が、それも其程が過ぎれば、我から機嫌を直して、華やいで、時には母親に媚びるのか、と思ふほどの事をもいふ。初の程は、お政も不審顏をしてゐたが、慣れゝば、それも常となツてか、後には何とも思はぬ樣子で有ツた。

そのうちに、お勢が編物の夜稽古に通ひたいといひだす。編物よりか心易い者に、日本の裁縫を敎へる者が有るから、晝間其處へ通へ、と母親のいふを押反して、幾度か／＼、掌を合せぬばかりにして、是非に編物をと賴む。西洋の處女なら、今にも母の首にしがみ付いて頰の邊に接吻しさうに、あまえた、强請るやうな眼付で、顏をのぞかれ、やい／＼とせがまれて、母親は意氣地なく、「えゝ、うるさい！　どうなと勝手におし。」と賺されて仕舞ツた。

編物の稽古は、英語よりも面白いとみえて、隔晩の稽古を、樂しみにして通ふ。お勢は全體、本化粧が嫌ひで、これまで外出するにも、薄化粧ばかりしてゐたが、編物の稽古を始めてからは、「皆が大層作ツて來るから、私一人なにしないと……」と、咎める者も無いに、我から分疏をいひ／＼、こツてりと人品を落すほどに粧ツて、衣服も成丈美いのを選んで着て行く。夜だから、此方ので宜いぢやないかと、美くない衣服を出されゝば、それを厭とは拒みはしないが、何となく機嫌がわるい。

お政は、「そは／＼して出て行く娘の後姿を、何時も請難さうに見送る……。

昇は何時からともなく、足を遠くして仕舞ツた。

第十九回

お勢は、一旦は文三と、仂なく角めはしたものゝ、心にはさほどにも思はんか、其後はたゞ冷淡なばかりで、さして辛くも當らん。が、それに引替へて、お政はます／＼文三を憎んで、始終出て行けがしに待遇す。何か用事が有りて、下座鋪へ降りれば、家内中寄集りて、口を解いて面白さうに雜談などしてゐる時でも、皆云ひ合したやうに、ふと口を箝んで顏を曇らせる。といふうちにも取分けて、お政は不機嫌な體で、少し文三の出やうが遲ければ、何を愚頭々々してゐる、と云はぬばかりに、此方を睨めつけ、ときには氣を焦ツて、聞えよがしに舌鼓など鳴らして、聞かせる事も有る。文三とても白癡でもなく、瘋癲でもなければ、それほどにされんでも、今此處で身を退けば、眉を伸べて喜ぶ者が、そこらに澤山あることに心附かんでも無いから、心苦しいことは口に云へぬほどで有る。けれど、尙ほ、園田の家を辭し去らうとは思はん。何故にそれほどまでに、園田の家を去りたくないのか。因循な心から、あれほどにされても、尙ほそのやうな角立ツた事は出來んか。それほどになツても、まだ、お勢に心が殘るか。抑もまた、文三の位置では陷り易い謬。お勢との關繫が、此儘になツて仕舞ツたとは、戲談らしくてさうは思へんのか？　總て、此等の事は、多少は文三の羞を忍んで、尙ほ園田の家に居る原因となツたに相違ない。が、しかし、重な原因ではない。重な原因といふは、卽ち人情の二字。此二字に羈絆られ、文三は心ならずも、尙ほ園田の家に顏を皺めながら留ツてゐる。

心を留めて見なくとも、今の家内の調子が、むかしとは大に相違するは、文三にも解る。以前まだ文三が、此の調子を成す一つの要素で有ッて、人々が眼を見合しては微笑し、幸福といはずして、幸福を樂んでゐたころは、家内全體に生温い春風が吹渡ッたやうに、總て穩に、和いで、沈着いて、見る事、聞く事が、盡く自然に適ッてゐたやうに思はれた。そのころの幸福は、現在の幸福ではなくて、未來の幸福の影を樂しむ幸福で、我も、人も、皆何か不足を感じながら、強ちにそれを足さうともせず、卻ッて今は足らぬが當然、と思ッてゐたやうに、急かず、騷がず、悠々として時機の熟するを俟ッてゐた。その心の長閑さ、寬さ、今憶ひ出しても、閉ぢた眉を開くばかりな。……其頃は人々の心が期せずして、自ら一致し、同じ事を念ひ、同じ事を樂んで、強ちそれを匿さうともせず、また匿すまいともせず、胸に城郭を設けぬからとて、言ッて花の散るやうな事は云はず、また聞かうともせず。まだ妻でない妻、夫でない夫、親で無い親――と、から三人集ッたところに、誰か作り出すこともなく、自らに清々、穩な、優しい調子を作り出して、それに隨れて物を言ひ、事をしたから、人々が宛も、平生の我よりは優ッたやうで、お政のやうな婦人でさへ、何ほ何處か、頼母し氣な所が有ッたのみならず、卻ッて、これが間に介まらねば、餘り兩人の間が接近しすぎて、穩さを缺くので、お政は文三等の幸福を成すに、無くて叶はぬ人物とさへ思はれた。が、その溫な愛念も、幸福な境界も、優しい調子も、嬉しさうに笑ふ眼元も、口元も、文三が免職になッてから、取分けて、昇が全く家内へ立入ッてから、皆突然に色が褪め、氣が拔けだして、遂に今日此頃の此有樣となッた……。

今の家内の有樣を見れば、最早以前のやうな、和いだ所も無ければ、沈着いた所もなく、放心に見渡せば、總て華かに、賑かで、心配もなく、氣あつかひも無く、浮々として面白さうに見えるものの、熟々視れば、それは皆衣服で、躶體にすれば、見るも汚はしい私慾、貪婪、淫褻、不義、無情も塊で有る。以前、人々の心を一致さした同情も無ければ、私心の垢を洗ッた愛念もなく、人々己一個の私をのみ思ッて、己が自恣に物を言ひ、己が自恣に擧動ふ。欺いたり、欺かれたり、戯言に託して人の意を測ッてみたり、二つ意味の有る言を云ッてみたり、疑ッてみたり、信じてみたり、――いろいろさまざまに不德を盡す。お政は、いふまでもなく、死灰の再び燃えぬうちに、早く娘を昇に合せて、多年の胸の塊を、一時におろして仕舞ひたいが、娘が、思ふやうに、如才なくたちまはらんので、それで、齒痒がつて氣を揉み散らす。昇はそれを承知してゐるゆゑ、後の面倒を慮ッて、迂濶に手は出さんが、罠のと知りつつ、油鼠の側を去られん老狐の如くに、遲疑しながらも、何ほお勢の身邊を廻ッて、横眼で睨んでは舌舐りをする(文三は何故か、昇の妻となる者は、必ず愚で醜い代り、權貴な人を親に持ッた、身柄の善い婦人とのみ思ひこんでゐる。)お政は、昇の心を見拔いてゐる、昇も亦お政の意を見拔いてゐる。加之も、互ひに見拔かれてゐると、略心附いてゐる。それゆゑに、故らに無心な顏を作り、思慮の無い言を云ひ、互ひに瞞着しようと力めあふものの、しかし、雙方共、力は互角のしたゝかものゆゑ、優もせず、劣もせず、挑み疲れて、今はすこし睨合の姿となッた。總て此等の動靜は、文三も略察してゐる。それを察してゐるから、お勢がこのやうな、危い境に身を處きながら、それには少しも心附かず、私慾と淫慾とが爍して出來した、輕く浮いた、汚はしい家内の調子に乘せ

られて、何心なく物を言ッては高笑ひをする、その様子を見ると、手を束ねて安坐してゐられなくなる。

お勢は今甚だしく迷ッてゐる。家を抱いて臭きを知らずとかで、境界の臭みに居ても、恐らくは其臭味がわかるまい。今の心の状を察するに、譬へば酒に酔ッた如くて、氣は暴れてゐても心は妙に昧んでゐる故、見る程の物、聞く程の事が眼や耳へ入ッても、底の認識までは屆かず、皆中途で立消をして仕舞ふであらう。また徒だ外界と縁遠くなッたのみならず、我内界とも疎くなッたやうで、我心ながら我心の心地はせず、始終何か本體の得知れぬ一種不思議な力に誘はれて、言動作息するから、我にも我が判然とは分るまい。今のお勢の眼には宇宙は鮮いて見え、萬物は美しく見え、人は皆我一人を愛して我一人の爲めに働いてゐるやうに見えよう。若し顏を皺めて溜息を吐く者が有れば、此世はこれほど住みよいに、何故人は然う住み憂く思ふか、殆ど其の意を解し得まい。また人の老い易く色の衰へ易い事を忘れて、今の若き美しさは永劫續くやうに心得て、未來の事などは全く思ふまい。よし思ッた所で、華かな輝いた未來の外は夢にも想像に浮ぶまい。

昇に狎れ親んでから、お勢は故の吾を亡くした。が、夫には自分も心附くまい。お勢は昇を愛してゐるやうで、實は愛してはゐず、只昇に限らず、總て男子に、取分けて若い美しい男子に慕はれるのが何となく快いので有らうが、夫にも又自分は心附いてゐまい。之を要するに、お勢の病は外から來たばかりではなく、内からも發したので、文三に感染れて少し畏縮けた血氣が、今外界の刺戟を受けて一時に暴れだし、理性の口をも閉ぢ、認識の眼をも眩ませて、おそろしい力を以て、さま〴〵の醜態に奮見するので有らう。若し然うなれば、今がお勢の一生中で、最も大切な時。能く今の境界を渡り課せれば、此一時に、さま〴〵の經驗を得て、己れの人と爲りをも知り、所謂放心を求め得て、初て心で此世を渡るやうにならうが、若し躓けばもうそれまで、倒れた儘で、再び起き上る事も出來まい。物のうちの人となるも、此一時。人の中の物となるも、亦此一時。今が浮沈の潮界、最も大切な時で有るに、お勢はこの危い境を、放心して渡ッてゐて、何時眼が覺めようとも見えん。

此儘にしては置けん。早く、手遅れにならんうちに、お勢の眠ッた本心を覺まさなければならん。が、しかし、誰かお勢のために此事に當らう！

見渡したところ、孫兵衛は留守、假令居たとて役にも立たず。お政は彼の如く、娘を愛する心は有りても、其道を知らんから、娘の道心を縱殺さうとしてゐながら、加之も得意顏でゐるほどゆゑ、固よりこれは妨げになるばかり。ただ文三のみは、愚昧ながらも、まだお勢よりは、少しは知識も有り、經驗も有れば、若しお勢に眼を覺ます者が必要なら、文三を措いて誰がならう？

ト、から、お勢を見棄てたくない許りでなく、見棄てては寧ろ義理に背くと思へば、凝性の文三ゆゑ、もウ餘事は思ッてゐられん。朝夕只この事ばかりに心を苦しめて、悶え苦んでゐるから、宛も感覺が鈍くなッたやうで、お政が顏を顰めたとて、舌鼓を鳴らしたとて、其時ばかり、少し居辛くおもふのみで、久しくそれに拘ッてはゐられん。それで、から、邪魔にされると知りつゝ、園田の家を去る氣にもなれず、いまに六疊の小座鋪に、氣を詰らして始終壁に對ッて歎息のみしてゐるので。

歎息のみしてゐるので。何故なればお勢を救はう、といふ志は有ッても、其道を求めかね

るから「どうしたものだらう」といふ間は、日に幾度となく胸に浮ぶが、いつも浮ぶばかりで、答を得ずして消えて仕舞ひ、其跡に殘るものは、只不滿足の三字。その不滿足の苦を脱れよう、と氣をあせるから、健康な知識は縮んで、出過ぎた妄想が我から荒出し、抑へても抑へ切れなくなツて、遂には、尚だ如何してといふ手順をも思附き得ぬうちに、早くもお勢を救ひ得た後の、樂しい光景が眼前に隱現き、拂ツても去らん事が度々有る。

しかし、始終、空想ばかりに耽ツてゐるでも無い。多く考へるうちには、少しは稍々行はれさうな工夫を付ける。そのうちで、まづ上策といふは、此頃の家内の動靜を、詳しく叔父の耳へ入れて、父親の口から篤とお勢に云ひ聞かせる、といふ一策で有る。さうしたら、或はお勢も眼が覺めようかと思はれる。が、また思ひ返せば、他人の身の上なれば兎も角も、我と入組んだ關係の有るお勢の身の上を、彼此心配して、其親の叔父に告げるは、何となく後めたくてさらも出來ん。假令、思ひ切ツて然うしたところで、叔父はお勢を諭し得ても、我儘なお政は說き伏せるは扨置き、却ツて反對にいひくるめられるかも知れん。と思へば、成る可くは叔父に告げずして、事を收めたい。叔父に告げずして事を收めようと思へば、今一度お勢の袖を扣へて、打附けに掻口說く外、他に仕方もないが、しかし、今の如くに、から齟齬ッてゐては、言ッたとて聽きもすまいし、また毛を吹いて疵を求めるやうではと思へば、かうと思ひ定めぬうちに、まづ氣が畏縮けて、どうも其氣にもなれん。から、また、思ひ詰めた心を解して、更に他にさま〴〵の手段を思ひ浮べ、いろ〳〵に考へ散らしてみるが、一つとして行はれさうなのも見當らず。回り回ッてまた舊の思案に戻ッて、苦しみ悶えるうちに、ふと又例の妄想が働きだして、無益な事を思はせられる。時としては妙な氣になツて、總て此頃の事は皆一時の戯れで、お勢は心から文三に背いたのでは無くて、只背いた風をして、文三を試みてゐるので、其證據には、今にお勢が上ツて來て、例の華かな高笑で、今までの葛藤を笑ひ消して仕舞はう、と思はれる事が有る。が、固より永くは續かん、無慈悲な記憶が働きだして、此頃あくたれた時のお勢の顏を憶出させ、暫息の間に、其快い夢を破ツて仕舞ふ。またかういふ事も有る。ふと氣が滅入ツて、今から零落してゐながら、其樣な[illegible]袋も無い事に拘ツて、徒らに日を送るを、極めて思ふやうに思はれ、もうお勢の事は思ふまいと、少時思ひの道を絕ッて、まじ〳〵としてゐてみるが、それではどうも、大切な用事を仕懸けて罷めたやうで、心が落居ず、狼狽へて、またお勢の事に立戻ッて悶え苦しむ。人の心といふものは、同一事を間斷なく思ッてゐると、遂に考へ草臥れて、思辨力の弱るもので、文三もその通り、始終お勢の事を心配してゐるうちに、何時からともなく注意が散ッて一事には集らぬやうになり、をり〳〵互ひに何の關係をも持たぬ零々碎々の事を、取締もなく思ふことも有ッた。曾て兩手を頭に敷き、仰向けに臥しながら、天井を凝視めて、初は例の如くお勢の事を彼此と思ッてゐたが、その中にふと天井の木目が眼に入ッて、突然妙な事を思ッた。「から見たところは、水の流れた痕のやうだな。」から思ふと同時に、お勢の事は全く忘れて仕舞ッた。そして尙ほ熟々とその木目を視入ッて、「心の取り方に依ッては、高低が有るやうにも見えるな。ふゝん、オプチカル、イリュウジョンか。」フト、文三等に物理を教へた、外國教師の立派な髭の生えた顏を憶出すと、それと同時に、また、木目の事は忘れて仕舞ッた。續いて眼前に、七八人の學生が現はれ

て來たと視れば、皆同學の生徒等で、或は鉛筆を耳に挾んでゐる者も有れば、或は書物を抱へてゐる者も有る、又は開いて視てゐる者も有る。能く視れば、どうか文三も其中に雜ツてゐるやうに思はれる。今越歷の講義が終ツて、試驗に掛る所で、皆エレクトリカル、マシーンの周邊に集ツて、何事とも解らんが、何か頻りに云ひ爭ひながら騷いでゐる。かと思ふと、忽ちそのマシーンも生徒も烟の如く痕迹もなく消え失せて、ふとまた木目が目に入ツた。「ふん、オプチカル、イリュウジョンか。」ト云ツて、何故ともなく莞爾した。「イリュウジョンと云へば、今まで讀んだ書物の中で、サリーのイリュウジョンスほど面白く思ツたものは無いな。二日一晩に讀切ツて仕舞ツたツけ、あれほどの頭には如何したらなれるだらう。餘程組織が緻密に違ひない……。」サリーの腦髓とお勢とは、何の關係も無ささうだが、此時突然お勢のことが、噴水の迸る如くに、胸を衝いて騰る。と、文三は腫物にでも觸られたやうに、あツと叫びながら跳ね起きた。しかし、跳ね起きた時は、もう其事は忘れて仕舞ツた。何のために跳ね起きたとも解らん。久しく考へて居て、「あ、お勢の事か」と、辛くして、憶出しは憶出しても、宛然世を隔てた事の如くで、面白くも可笑しくも無く、其儘に思ひ寢てた。暫くは茫然として、氣の拔けた顏をしてゐた。

かう心の亂れるまでに心配するが、しかし只心配する許りで、事實には少しも益が無いから、自然は己が爲すべき事をさツ〳〵として行ツて、お勢は益々深味へ陷る。其樣子を視て、流石の文三も、今は殆ど志を挫き、迚も我力にも及ばん、と投首をした。

が、其內に、ふと嬉しく思ひ惑ふ事に出遇ツた。といふは他の事でも無い。お勢が俄に昇と疎々敷なツた、その事で。それまではお勢の言動に一々目を注けて、その狂ふ意の跟に隨ひながら、我も意を狂はしてゐた文三も、此に至ツて忽ち道を失ツて、暫く思念の歩みを止めた。彼程までにからんだ兩人の關係が、故なくして解れて仕舞ふ筈は無いから、早まツて安心はならん。けれど、喜ぶまいとしても喜ばずには居られんは、お勢の文三に對する感情の變動で。其頃までは、お政程には無くとも、文三に對して、一種の敵意を挾んでゐたお勢が、俄に樣子を變へて、顏を赧め合ツた事は全く忘れたやうになり、眉を顰め、眼の中を曇らせる事は扨置き、下女と戲れて笑ひ興じて居る所へ、行きかかりでもすれば、文三を顧みて快氣に笑ふ事さへ有る。此分なら、若し文三が物を言ひかけたら、快く返答するかと思はれる。四邊に人目が無い折などには、文三も數々話しかけてみようかとは思ツたが、萬一を危む心から、暫く差控へてゐた。――差控へてゐるは寧ろ愚に近い、とは思ひながら尙ほ差控へてゐた。

編物を始めた四五日後の事で有ツた。或日の夕暮、何か用事が有ツて、文三は奧座鋪へ行かうとて、二階を降りて、只見ると、お勢が此方へ背を向けて、緣端に佇立んでゐる。少し首たれて、何か一心に爲てゐたところ、編物かと思はれる。珍らしいうちゆゑと思ひながら、文三は何心なく、お勢の背後を通り拔けようとすると、お勢が彼方向いた儘で、突然、「まだかえ……」といふ。勿論人違ひと見える。が、此の數週の間、妄想でなければ、言葉を交へた事の無いお勢に、今思ひ掛なく、やさしく物を言ひかけられたので、文三はハッと當惑して、我にも無く立留る。お勢も、返答の無いを不思議に思ツてか、ふと此方を振向く、途端に、文三と顏を相視して、オツと云ツて驚いた。しかし、驚きは驚いても、狼狽へはせず、たゞ莞爾したばかり

で、また彼方向いて、そして縫物に取掛ッた。

文三は酒に酔ッた心地。如何仕ようといふ方角もなく、只茫然として、殆ど無想の境に彷徨ッてゐるうちに、ふと心附いたは、今日お政が留守の事。またと無い上首尾、思ひ切ッて物を言ッてみようか。……ト思ひ掛けて、またそれと思ひ定めぬうちに、下女部屋の障子がさらりと開く、その音を聞くと、文三は我にも無く、突と奥座鋪へ入ッて仕舞ッた――我にも無く、殆ど、見られては不可とも思はずして、奥座鋪へ入ッて聞いてゐると、頓てお鍋がお勢の側まで来て、ちよいと立留ッた光景で、「お待遠さま。」といふ聲が聞えた、お勢は返答をせず、只何か口疾に囁いた様子で、忍音に笑ふ聲が漏れて聞えると、お鍋の調子外の聲で、ほんとに内海……。」「しッ!……また其處に」と小聲ながら聞取れるほどに、「居るんだよ。」お鍋も小聲になりて、「ほんとう?」

「ほんとうだよ。」

かう成ッて見ると、もう潜ッてゐるも何となく極りが悪くなッて来たから、文三が素知らぬ顔をして、ふッと奥座鋪を出る、その顔をお鍋が不思議さうに眺めながら、小腰を屈めて「ちよいとお湯へ。」と云ッてから、ふと何か思ひ出して、眸を潰した顔をして、周章てて、「それから、あの、若し御新造さまがお歸んなすッて、御膳を召上るト仰しやッたら、お膳立をしてあの戸棚へ入れときましたから、どうぞ。……お嬢さま、もう直ぐ宜うござんすか? それぢやア行ッてまゐります。」

お勢は笑ひ出しさうな眼元で、じろり文三の顔を掠めながら、手ばしこく手で持ッてゐた編物を奥座鋪へ投入れ、何やらお鍋に云ッて笑ひながら、面白さうに打連れて出て行ッた。主從とは云ひながら、同じ程の年頃ゆゑ、雙方とも心持は朋友で。尤も是は近頃からなッたので、以前はお勢の心が高ぶッてゐたから、下女などには容易に言葉もかけなかッた。

出て行くお勢の後姿を見送ッて、文三は莞爾した。如何してから様子が渝ッたのか、其を疑ッて居るに遑なく、たゞ何となく、心嬉しくなッて莞爾した。それからは、例の妄想が、勃然と首を擡げて、抑へても抑へ切れぬやうになり、種々の取留も無い事が、續々胸に浮んで、遂には、總て、此頃の事は、皆文三の疑心から出た暗鬼で、實際はさして心配する程の事でも無かッたか、とまで思ひ込んだが、また、心を取直して考へてみれば、故無くして文三を辱めたといひ、母親に忤ひながら、何時しか其のいふなりに成ッたといひ、それほどまで親しかッた昇と、俄に疎々敷なッたといひ――どうも、常事でなくも思はれる。ト思へば、喜んで宜いものか、悲んで宜いものか、殆ど我にも胡亂になッて来たので、宛も遠方から撩る眞似をされたやうに、思ひ切ッては笑ふ事も出来ず、泣く事も出来ず。快と不快との間に心を迷はせながら、暫く縁側を往きつ戻りつしてゐた。が、兎に角物を云ッたら、聞いてゐさうゆゑ、今にも歸ッて来たら、今一度運を試して、聴かれたら其通り、若し聴かれん時には、其時こそ斷然叔父の家を辭し去らう。ト、遂にかう決心して、そして一先二階へ戻ッた。

平凡

一

私は今年三十九になる。人世五十が通相場なら、まだ今日明日穴へ入らうとも思はぬが、しかし未來は長いやうでも短いものだ。過去つて了へば實に呆氣ない。まだ〳〵と云つてる中にいつしか此世の隙が明いて、もうおさらばといふ時節が來る。其時になつて幾ら足掻いたつて藻掻いたつて追付かない。覺悟をするなら今の中だ。

いや、しかし私も老込んだ。三十九には老込みやうがチト早過ぎるといふ人も有らうが、氣の持方は年よりも老けた方が好い。それだと無難だ。

如何して此樣な老人じみた心持になつたものか知らぬが、強ち苦勞をして來た所爲では有るまい。私位の苦勞は誰でもしてゐる。尤も苦勞しても一向苦勞に負けぬ何時迄も元氣な人もある。或は苦勞が上辷りをして心に浸みないやうに、何時迄も稚氣の失せぬお坊さん質の人もあるが、大抵は皆私のやうに苦勞に負けて、年よりは老込んで、意氣地なく所帶染みて了ひ、役所の歸りに鮭を二切竹の皮に包んで提げて來る氣になる、それが普通だと、まあ、思つて自ら慰めてゐる。

もう斯うなると前途が見え透く。もう如何樣に藻掻いたとて駄目だと思ふ。殘念と思はぬではないが、思つたとて仕方がない。それよりは其隙で内職の賃譯の一枚も餘計にして、もう、これ、冬が近いから、家内中に綿入の一枚も引張らせる算段を爲なければならぬ。

もう私は大した慾もない。どうか倅が中學を卒業する迄首尾よく役所を勤めて居たい、其迄に小金の少しも溜めて、いつ何時私に如何な事が有つても、妻子が路頭に迷はぬ程にして置きたいと思ふだけだが、それが果して出來るものやら、出來ぬものやら、甚だ覺束ないので心細い……

が、考へると、昔は斯うではなかつた。人並に血氣は壯だつたから、我より先に生れた者が、十年二十年世の鹽を踏むと、百人が九十九人まで、皆じめ〳〵と所帶染みて了ふのを見て、意氣地の無い奴等だ、そんな平凡な生活をする位なら、寧そ首でも縊つて死ン了へ、などと蔭では嘲けつたものだつたが、嘲けつてゐる中に、自分もいつしか所帶染みて、人に嘲けられる身の上になつて了つた。

かうなつて見ると、浮世は夢の如しとは能く言つたものだと熟々思ふ。成程人の一生は夢で、而も夢中に夢とは思はない、覺めて後其と氣が附く。氣が附いた時には、夢はもう我を去つて、千里萬里を相隔ててゐる。もう如何する事も出來ぬ。

もう十年早く氣が附いたらとは誰しも思ふ所だらうが、皆判で捺したやうに、十年後れて氣が附く。人生は斯うしたものだから、今私共を嗤ふ青年達も、軈ては矢張同じ樣に、後の青年達に嗤はれて、殘念がつて穴に入る事だらうと思ふと、私は何となく人間といふものが、果敢ないやうな、味氣ないやうな、妙な氣がして、泣きたくなる……

あツ、はツ、は！……いや、しかし、私も老込んだ。こんな愚癡が出る所を見ると、愈老込んだに違ひない。

老込んだ身体には、近頃は少し前だと直ぐ過去を憶出す、いや憶出しても一向憶出し栄のせぬ過去で、何一つ仕出來した事もない、どころか碌でもない事ばかりだ、が、それでゐて、其失敗の過去が、私に取つては何處か床しい處がある、後悔慚愧の腸を斷つ想が有りながら、それでゐて何となく心を惹付けられる。

日曜に妻子を親類へ無沙汰見舞に遣つた跡で、長火鉢の側で徒然としてゐると、半生の悔しかつた事、悲しかつた事、乃至嬉しかつた事が、玩具のカレードスコープを見るやうに、紛々と目まぐるしく心の上面を過ぎて行く。初は面白半分に目を瞑つて之に對つてゐる中に、いつしか魂が藻脱けて其中へ紛れ込んだやうに、恍惚として暫く夢現の境を逍つてゐると、

「今日は！　桝屋でございます！」

と、ツイ障子一重其處の臺所口で、頓狂な酒屋の御用の聲がする、これで、私は夢の覺めたやうな面になる。で、ぼやけた聲で、

「まア好かつたよ。」

酒屋の御用を逐返してから、おゝ、斯うしてもゐられん、と獨言を言つて、机を持出して、外國の貯蓄銀行の條例か何ぞに、絞つたら水の出さうな頭を散々惱ませつゝ、一枚二枚は餘處目を振らず一心に筆を運ぶが、其中に曖昧な處に出會してグッと詰ると、まづ一服と舊式の煙管を取上げる。と、又忽然として懷かしい昔が眼前に浮ぶから、不覺其に現を脱かし、肝腎の繙譯がお留守になつて、晩迄に二十枚は仕上げる積の所を、十枚も出來ぬ事が折々ある。

かうどうも昔ばかりを憶出してゐた日には、内職の邪魔になるばかりで、卑しいやうだが、錢にならぬ。寧そのくされ、思ふ存分書いて見ようか、と思つたのは先達ての事だつたか、其後――矢張書く時節が到來したのだ――内職の賃譯が弗と途切れた。此暇を遊んで暮すは勿體ない。私は兎に角書いて見よう。

實は、極く内々の話だが、今でこそ私は腰辨當と人の數にも算まへられぬ果敢ない身の上だが、昔は是れでも何の某といや、或るサークルでは一寸名の知れた文士だつた。流石に今でも文壇に昔馴染が無いでもない。恥を忍んで泣付いて行つたら、随分一肩入れて、原稿を何處かの本屋へ嫁けて、若干かに仕て呉れる人が無いとは限らぬ。さうすりや、今年の暮は去年のやうな事もあるまい、何も可愛い妻子の爲だ。私は兎に角書いて見よう。

さて、題だが…題は何としよう？　此奴には昔から附け倦んだものだッけ。…と思案の末、礑と膝を打つて、平凡！　平凡に、限る。平凡な者が平凡な筆で平凡な半生を叙するに、平凡という題は動かぬ所だ、と題が極る。

次には書方だが、これは工夫するものはない。近頃は自然主義とか云つて、何でも作者の經驗した愚にも附かぬ事を、聊かも技巧を加へず、有の儘に、だらだらと、牛の涎のやうに書くのが流行るさうだ。好い事が流行る。私も矢張其で行く。

で、題は平凡、書方は牛の涎。

さあ、是からが本文だが、此處らで回を改めたが好からうと思ふ。

三

私は地方生れだ。戸籍を並べても仕方がないから、唯某縣の某市として置く。其處で生れて其處で育つたのだ。

子供の時分の事は最う大抵忘れて了つたが、不思議なもので、覺えてゐる事だと、判然と昨

目の事のやうに想はれる事もある。中にも是ばかりは一生目の底に染付いて忘れられまいと思ふのは、十の時死別れた祖母の面だ。

今でも目を瞑ると、直ぐ顯然と目の前に浮ぶ。面長の、老人だから無論皺は寄つてゐたが、締つた口元で、段鼻で、なか〳〵上品な面相だつたが、眼が大きな眼で、女には強過る程權が有つて、古屋の――これが私の家の姓だ――古屋の隱居の眼といつたら、隨分評判の眼だつたさうだ。成程然ういへば、何か氣に入らぬ事が有つて祖母が白眼でジロリと睨むと、子供心にも何だか無氣味だつたやうな覺えがまだ有る。

大抵の人は氣象が眼へ出ると云ふ。祖母が矢張り其だつた。全く眼色のやうな氣象で、勝氣で、鋭くて、能く何かに氣の附く、口も八丁手も八丁といふ、一口に言へば男勝り……まあ、さういつた質の人だつたさうな、――私は子供の事で一向夢中だつたが。

生長後親類などの話で聞くと、それといふが幾分か境遇の然らしめた所も有つたらしい――といふのは、早く祖父に死なれて若い時から後家を徹して來た。後家といふ者はいつの世でも兎角人に影口言はれ勝の、割の惡いものだから、勝氣の祖母はこれが悔しくて堪らない。それで、何の、女でこそあれ、と氣を張る　氣を張つて油斷をしなかつたから、一生人に後指を差されるやうな過失はなかつた代り、餘り人に愛しもされずに年を取つて了つて、父の代となつた。

父は祖母とは全で違つてゐた。如何して此人の腹に此樣な人がと怪しまれる程の好人物で、面も薩張似てゐなかつた。大きな、笑ふと目元に小皺の寄る、豐頬した如何にも愛嬌のある圓顏で、形も大柄だつたが、何處か圓味が有り、心も其通り角が無かつた。快活で、蟠りがなくて、話が好きで、碁が好きで、暇さへ有れば近處を打ち歩き、大きな嚔を自慢にする程の罪のない人だつた。祖父が矢張然うであつたと云ふから、大方其氣象を受繼いだのであらう。

父は此樣な人だし、母は――私の子供の時分の母は、手拭を姉樣冠りにして襷掛けで能くクレ〳〵働く人だつた。其頃の事を誰に聞いても、皆阿母さんは能く辛抱なすつたとばかりで、其他に何も言はぬから、私の記憶に殘る其時分の母は、何時迄經つても矢張手拭を姉樣冠りにして、襷掛けで能くクレ〳〵働く人で、格別如何いふ人といふ事もない。

斯ういふ家庭だつたから、自然祖母が一家の實權を握つてゐた。家内中の事一から十迄祖母の方寸に捌かれて、母は下女か何ぞの樣に逐使はれる。父も一向家事には關係しないで、形式的に相談を受ければ、好うがせう、とばかり言つてゐる。然う言つてゐないと、祖母の機嫌が惡い、面倒だ。

母方の伯父で在方で村長をしてゐた人があつた。如何したのだか、祖母とは仲惡で、死後迄餘り好くは言はなかつたが、何かの話の序に、阿母さんもお祖母さんには隨分泣かされたものだよ、と私に言つた事がある。成程折々母が物蔭で泣いてゐると、いつも元氣な父が其時ばかりは困つた顏をして、何か密々言つてゐるのを、子供心にも不審に思つた事があつたが、それが伯父の謂ふお祖母さんに泣かされてゐたのだつたかも知れぬ。

兎に角祖母は此通り氣難かし家であつたが、その氣難かし家の、死んだ後迄噂に殘る程の祖母が、如何いふものだか、私に掛ると、から意氣地がなかつた。

四

何で祖母が私に掛ると、意氣地が無くなるの

だか、其は私には分らなかつた。が、兎に角意氣地の無くなるのは事實で、評判の氣難かし家が、如何にでも私の思ふ樣になつて了ふ。

まづ何か欲しい物がある。それも無い物ねだりで、有る結構な干菓子は厭で、無い一文菓子が欲しいなどと言出して、母に強求るが、許されない。祖母に強求る、一寸渋る、首玉へ噛り付いて、よう／＼と二三度鼻聲で甘垂れる、と、もう祖母は海鼠の樣になつて、お由――母の名だ――彼樣に言ふもんだから、買つて來てお遣りよ、といふ。祖母の聲掛りだから、母も不承々々起つて、雨降でも私の口のお使に番傘傾げて出掛けようとする。斯うなると、流石の父も最う笑つてばかりは居られなくなつて、小言をいふ。私が泣く、祖母の機嫌が惡い。

――此樣な小さい者を其樣に苛めて育てて、若しか俊坊の樣な事にでもなつたら、如何おしだ？可哀さうぢやないか。

といふのが口切で、ボツリ／＼と始める。俊坊といふのは私の兄で、私も虚弱だつたが、矢張虚弱で、六つの時偸られたのださうだ。それも急性胃加答兒で偸られたのだと云ふから、事に寄ると祖母が可愛がりごかしに口を愼ませなかつた祟かも知れぬ。併し虚弱な兒は大食させ付けると達者になると言はれて、然うかなと思ふ程の父だから、祖母の矛盾には氣が附かない。矢張有觸れた然う我儘をさせ付けては位つ所で切脫けようとする。祖母も其は然う思はぬでもないから、内々自分が無理だと思ふだけに激する、言葉が荒くなる。もう此上憤らせると、又三日も物を言はなかつた果句、ふいと家を出て在の親類へ行つた切歸らぬといふ騷も起りかねまじい景色なので、父は默つて了ふ。母も默つて出て行く。と、もう二十分も經つと、私が兩手に豆捩を持つて雀躍して喜ぶ面を、祖母が眺めてほく／＼する事になつて了ふ。

斯うして私の小さいけれど際限の無い慾が、毎も祖母を透して遂げられる。それは子供心にも薄々了解めるから、自然家内中で私の一番好なのは祖母で、お祖母さん／＼と跡を慕ふ。何となく祖母を味方のやうに思つてゐるから、祖母が内に居る時は、私は散々我儘を言つて、惡たれて、仕度三昧を仕散らすが、留守だと、萎靡けるのではないが、餘程温順しくなる。

其癖私は祖母を小馬鹿にしてゐた。何となく奧底が見透されるから、祖母が何と言つたつて、些とも可怕くない。

それを又勝氣の祖母が何とも思つてゐない。反つて馬鹿にされるのが嬉しいやうに、人が來ると、其話をして、憎い奴でございますと言つて、ほく／＼してゐる。

兩親も其は同じ事で、散々私に悩まされながら、矢張何とも思つてゐない。陰影でお祖母さんにも困ると、お祖母さんの愚癡を零す許かり。

私は何方へ廻つても、矢張好い兒だ。

五

親馬鹿と一口に言ふけれど、親の馬鹿程難有いものはない。祖母は勿論、兩親とても決して馬鹿ではなかつたが、その馬鹿でなかつた人達が、私の爲には馬鹿になつて呉れた。勿體ないと言はずには居られない。

私に何の取得がある？　親が身の油を絞つて獲た金を、私の教育に惜氣もなく掛けて呉れたのは、私を天晴れ一人前の男に仕立てたいが爲であつたらうけれど、私の今膨たる腰辨當で、浮世の片蔭に潜んでゐる。私が生きてゐたとて、世に寸益もなければ、死んだとて其子の外に損を受ける者もない。世間から見れば有つても無くても好い餘計な人間だ。財產なり、學問なり、技能なり、何か人より餘計に持つてゐる

る人は、其餘計に持つてゐる物を挾んで、傲然として空嘯いてゐても、人は皆其足下に平伏する。私のやうに何も無い者は、生活に疲れて路傍に倒れて居ても、誰一人振向いて見ても吳れない。皆素通して匆々と行つて了ふ。偶立止る者が有るかと思へば、熟々視て、金持なら、うゝ、貧乏人だと云ふ、學者なら、うゝ、無學な奴だと云ふ、詩人なら、うゝ、俗物だと云ふ、而して匆々と行つて了ふ。平生最も親しらしい面をして親友とか何とか云つてゐる人達でも、斯うなると寄つて集つて、手ン手ンに腹散々私の缺點を算へ立てて、それで君は斯うなつたんだ、自業自得だ。諦め玉へ〳〵と三度囘向して、彼方向いて匆々と行つて了ふ。私は斯ういふ價値の無い平凡な人間だ。それを二つとない寶のやうに、人に後指を差されて迄も愛して吳れたのは、生れて以來今日迄何萬人となく人に出會つたけれど、其中で唯祖母と父母あるばかりだ。偉い人は之を動物的の愛だとか言つて擯斥されるけれど、平凡な私の身に取つては是程難有い事はない。

若し私の親達に所謂教育が有つたら、斯うはなかつたら。必ず、動物的の愛なんぞは何處かの隅に竊と藏つて置き、例の靈性の愛とかいふものを擔ぎ出して來て、薄氣味惡い上眼を遣つて、天から振垂つた曖昧な理想の玉を睨めながら、親の權威を笠に被ぬ面をして笠に被て、其處ン處は體裁よく私を或型へ推込まうと企らむだらう。私は子供の天性の儘に、そんなふやけた人間が、古本なんぞと首引して、道樂半分に拵へた、其癖無暗に窮屈な型なんぞへ入る事を拒んで、隙を見て逃出さうとする。どッこいと取捉まへて厭がる者を無理無體に、シャモを鷄籠へ推込むやうに推込む。私は型の中で出ようと藻搔く。知らん面してゐる。泣いて、喚いて、引搔いて出ようとする。知らん面してゐる。欺して出ようとする。其手に乘らない。百計盡きて、仕樣がないと觀念して、性を矯め、情を矯め、生ながら木偶の樣な生氣のない人間になつて了へば、親達は初て滿足して、漸く善良な傾向が見えて來たと曰ふ。世間の所謂家庭教育といふものは皆是ではないか。私は幸ひにして親達が無教育無理想であつたばかりに、型に推込まれる憂目を免れて、野育ちに育つた。野育ちだから、生來具有の百の缺點を臆面もなく暴け出して、所謂教育ある人達を顰蹙せしめたけれど、其代り子供の時分は、今の樣に矯飾はしなかつた。皆無教育な親達のお蔭だ。難有い事だと思ふ。眞に難有い事だと思ふ。

しかし內擴がりの外窄まりと昔から能く俗人が云ふ。哲人の深遠な道理よりも、詩人の徹底した見識よりも、平凡な私共の耳には此方が入り易い。不思議な事には、無理想の俗人の言ふ事は皆活きて聞える。

私が矢張其內擴がりの外窄まりであつた。

六

內ン中の鮑ッ貝、外へ出りや蜆ッ貝、と友達に囃されて、私は悔しがつて能く泣いたッけが、併し全く其通りであつた。

如何いふものだか、內でお祖母さんが舐めるやうにして可愛がつて吳れるが、一向嬉しくない。反つて蒼蠅くなつて、出るなと制める袖の下を潜つて外へ駈出す。

しかし一歩門外へ出れば、最う浮世の荒い風が吹く。子供の時分の其は、何處にも有る苛めッ兒といふ奴だ。私の近處にも其が居た。勘ちやんと云つて、私より二つ三つ年上で、獅子ッ鼻の、色の眞黑けた兒だつたが、斯ういふのに限つて亂暴だ。親仁は郵便局の配達か何かで、大酒呑で、阿母は引摺と來てゐるから、常に綻裂だらけの着物を着て、踵の切れた冷飯

草履を突掛け、片手に貧乏徳利を提け、子供の癖に尾籠な流行歌を大聲に唱ひながら、飛んだり、跳ねたり、曲駈といふのを遣り〳〵使に行く。始終使にばかり行つても居なかつたらうが、私は勘ちやんの事を憶出すと、何故だか常も其使に行く姿を想出す。

勘ちやんは家では何も貰へぬから、人が何か持つてさへゐれば、乾度欲しがつて、率直にお吳ンなと云ふ。機嫌好く遣れば好し、厭だと頭振を振ると、顋を突出して、好いよ〳〵と云ふ。薄氣味惡くなつて遣らうとするが、最う受取らない。好いよ、吳れないと云つたね、好いよと、其許りを反覆して行つて了ふ。何となく氣になるが、子供の事だ、遊びに耄けて忘れてゐると、何時の間にか勘ちやんが、使の歸りに何處かで蛇の死んだのを拾つて來て、竊と背後から忍び寄つて、率然ピシャリと叩き付ける。ワッと泣聲揚げて此方は逃出す、其後姿を勘ちやんは白眼で見送つて、「樣ア見やがれ!」

私は散々此勘ちやんに苛められた。初こそ悔しがつて武者振り付いても見たが、勘ちやんは喧嘩の名人だ。直と足搦掛けて推倒して置いて、馬乗りに乗つてピシャ〳〵打つ。私にはお祖母さんが附いてるから、内では親にさへ滅多に打たれた事のない頭だ。その大切にせられてゐる頭を、勘ちやんは遠慮せずにヒシャ〳〵打つ。

一度酷い目に遭つてから、私は勘ちやんが可怕くて〳〵ならなくなつた。勘ちやんが側へ來ると、最う私は恂々して、吳れと言はない中から持つてる物を遣り、勘ちやん、あの、賢ちやんがね、お前の事を泥棒だッて言つてたよと、餘計な事迄告口して、勉めて御機嫌を取つてゐた。斯うしてゐれば大抵は無難だが、それでも時々何の理由もなく、通りすがりに大切の頭をコツリと打つて行くこともある。

外は面白いが、勘ちやんが厭だ。と云つて、内でお祖母さんと睨めッこも詰らない。そこで、お隣のお光ちやんにお向うのお芳ちやんを呼んで來る。お光ちやんは外齒のお出額で河童のやうな兒だつたけれど、お芳ちやんは色白の鈴を張つたやうな眼で、好い兒だつた。私は飯事でお芳ちやんの旦那樣になるのが大好だつた。お煙草盆のお芳ちやんが眞面目臭つて、貴方、御飯をお上ンなさいなと云ふ。アイと私が返事をする。アイぢや可笑しいわ、ウンといふこだわ、と教へられて、ぢや、ウンと言つて、可笑しくなつて、不覺笑ひ出す。此方が勘ちやんに頭を打たれるより餘程面白い。それに女の兒はこましやくれてゐるから、子供でも人の家だと遠慮する。私が一人威張つてゐられる。間違つて喧嘩になつても、乾度敵手が泣く。然うすればお祖母さんが謝罪つて吳れる。

女の兒と遊ぶのは無難で面白いが、併しさう毎日も遊びに來て吳れない。すると、私は退屈するから、平地に波瀾を起して、拗ねて、じぶくツて、大泣に泣いて、而してお祖母さんに御機嫌を取つて貰ふ。

七

……が、待てよ。何ぼ自然主義だと云つて、斯う如何もダラ〳〵と書いてゐた日には、三十九年の半生を語るに、三十九年掛るかも知れない。も少し省略らう。

で、唐突ながら、祖母は病死した。

其時の事は今に覺えてゐるが、平常の積で何心なく外から歸つて見ると、母が妙な顔をして奥から出て來て、常になく小聲で、お前は、まあ、何處へ行つてゐたい? お祖母さんがお亡なンなすッたよ、といふ。お亡なンなすッたよが、一寸分らなかつたが、死んだのだと聞くと、喫驚すると同時に、急に何だか可怕くなつて來

た。無論まだ死ぬといふ事が如何な事だか能くは分らなかつたが、唯何となく斯う奥の知れぬ眞暗な穴のやうな處へ入る事のやうに思はれて、日頃から可怕がつてゐたのだが、子供も人間だから矛盾を免れない。お祖母さんが死んだのは可怕いが、その可怕い處を見たいやうな氣もする。

で、母が來いと云ふから、跟に随いて怕々奥へ行つて見ると、父は未だ居る醫者と何か話をしてゐたが、私の面を見るより、何處へ行つて居た、もう一足早かつたらなあ……と、何だか甚く殘念がつて、此處へ來てお祖母さんにお辭儀しろといふ。

改まつてお祖母さんにお辭儀しろと言はれた事は滅多に無いので、死ぬと變な事をするものだ、と思つて、おツかな悃り側へ行くと、小屛風を逆にした陰に祖母が寢てゐて、面に白い布片が掛けてある。父が徐かに其を取除けると、眼を閉ぢて少し口を開いた眠つたやうな祖母の面が見える……一目見ると厭な色だと思つた。長いこと煩つてゐたから、窶れた顏は看慣れてゐたが、此樣な色になつてゐたのを見た事がない。厭に白けて、光澤がなくて、死の影に曇つてゐるから、顏中が何處となく薄暗い。もう家のお祖母さんでは無いやうな氣がする。といつて餘處のお祖母さんでもないが、何だか其處に薄氣味の惡い區劃が出來て、此方は明るくて暖かだが、向うは薄暗くて冷たいやうで、何がなしに怕かつた。

「お辭儀をしないか。」

と父に催促されて、私は莞爾々々となつた。何故だか知らんが、莞爾々々となつて、ドサンと膝を突いて、遠方からお辭儀して、急いで次の間へ逃げて來て、矢張莞爾々々してゐた。

其中に親類の人達が集つて來る、お寺から坊さんが來る、其晩はお通夜で、翌日は葬式と、何だか家内が混雜するのに、覩る物聞く事皆珍らしいので、私は其に紛れて何とも思はなかつたが、軈て葬式が濟んで寺から歸つて來ると、手傳の人も一人歸り二人歸りして、跡は又家の者ばかりになる。薄暗いランプの蔭でト面を合せて見ると、お祖母さんが一人足りない。あゝ、お祖母さんは先刻穴へ入つて了つたが、もう何時迄待つても歸つて來ぬのだと思ふと、急に私は悲しくなつてシク〳〵泣出した。

私の泣くのを見て母も泣いた。父も到頭泣いた。親子三人向合つて、默つて暫く泣いてゐた。

八

祖母に死別れて悲しかつたが、其頃はまだ子供だつたから、十分に人間死別の悲しみを汲分け得なかつた。その悲しみの底を割つたと思はれるのは、其後兩親に死なれた時である。

去る者日々に疎しとは一わたりの道理で、私のやうな浮世の落伍者は反つて年と共に死んだ親を慕ふ心が深く、厚く、濃かになるやうだ。

去年の事だ。私は久し振で展墓の爲歸省した。寺の在る處は舊は淋しい町端れで、門前の芋畠を吹く風も悲しい程だつたが、今は可なりの町並になつて居て、昔能く憩んだ事のある門脇の掛茶屋は影も形も無くなり、其跡がBarber's Shopと白ペンキの奇拔な看板を揚げた理髪店になつてゐる、が、寺は其反對に荒れ果てて、門は左程でもなかつたが、突當りの本堂も、其側の庫裏も、多年の風雨に曝されて、處々壁が落ち、下地の骨が露はれ、屋根には名も知れぬ草が生えて、甚く淋れてゐた。私は臺所口で寺男が内職に賣つてゐる樒を四五本買つて、井戸へ掛つて、釣瓶繩が腐つて切れさうになつてゐるのを心配しながら、漸く水を汲上げた。手桶片手に樒を

提げて、本堂をグルリと廻つて、後の墓地へ來て見ると、新佛が行つたと見えて、地尻に高い杉の木の下に、白張の提燈が二張ハタ／＼と風に搖いでゐる。流石に微に燈えて有るから、確か彼の邊だなと見當を附けて置いて、さて昨夜の雨でぬかる墓場道を、蹴揚の泥を厭ひ／＼、度々下駄を取られさうになりながら、それでも迷はずに先祖代々の墓の前へ出た。

祠堂金も納めてある筈、僅ばかりでも折々の附け屆も怠らなかつた積だのに、是はまた如何な事！　何時掃除した事やら、臺石は一杯に青苔が蒸して、石塔も白い癜のやうな物に黴はれ、天邊に二處三處ベットリと白い鳥の糞が附いてゐる。勿論木葉は堆く積つて、雜草も生えてゐたが、花立の竹筒は何處へ行つた事やら、影さへ見えなかつた。

私は掃除する方角もなく、之に對して暫く悵然としてゐた

祖母の死後數年、父母も其跡を追うて此墓の下に埋まつてから、既に幾星霜を經てゐる。墓石は戒名も讀め難る程苔蒸して、默然として何も語らぬけれど、今來つて面りに之に對すれば、何となく生きた人と面を合せたやうな感がある。懷かしい人達が未だ達者でゐた頃の事が、夫から夫と止度なく想出されて、祖母が緣先に圓くなつて日向ぼッこをしてゐる恰好、父が眼も鼻も一つにして大な嚏を爲ようとする面相、母が襷掛で縫物をしてゐる姿などが、顯然と目の前に浮ぶ。

颯と風が吹いて通る。木の葉がざわ／＼騷ぐ。木の葉の騷ぐのとは思ひながら、澄んだ耳には、聽き覺えのある皺嗄れた聲や、快活な高聲や、低い纖弱い聲が紛々と絡み合つて、何やら切りに慌しく話してゐるやうに思はれる。一しきりして礑と其が止むと、跡は寂然となる

と、私の心も寂然となる。その寂然となつた心の底から、ふと戀しいが勃々と湧いて出て、私は我知らず泪含んだ。あゝ、成らう事なら、此儘此墓の下へ入つて、もう浮世へは戻り度くないと思つた。

九

先刻舊友の一人が尋ねて來た。此人は今でも文壇に籍を置いてる人で、人の面さへ見れば、君ねえ、ナチュラリーズムがねえと、グヅリ／＼を始める人だ。神經衰弱を標榜してゐる人だから耐らない。來ると、ニチャ／＼韮を食つてるやうな辯で、直と自分の噂を始める。やあ、僕の理想は多角形で光澤がある、やあ、僕の神經は錐の樣に尖がつて來たから、是で一つ神祕の門を突いて見る積だのと、其樣事ばかり言ふ。でなきや、文壇の噂で人の全盛に修羅を燃し、何かしらケチを附けたがつて、誰何某のと近頃評判の作家の名を言つて、姦通一件を聞いたかといふ。また始まつたと、うんざりしながら、いやそんな事僕は知らんと、ぶつきらぼうに言ふけれど、文士たから人の腹なんぞは分らない。人が知らんといふのに反つて調子づいて、秘密の話だよ、此場限りだよと、私が十人目の聽手かも知れぬ癖に、惡念を挿して、その何某が友の何某の妻と姦通してゐる話を始める。何とかが如何とかして、掃溜の隅で如何とかしてゐる所を、犬に吠付かれて蒼くなつて逃げたとか、何とか、その醜穢なること到底筆には上せられぬ。それも唯其丈の話で、夫だから如何といふ事もない。君、モーバッサンの提まゝ、どこだね、といふ位が落だ。

これで最う歸るかと思ふと、なか／＼以て！　君ねえ、僕はねえと、また僕の事になつて、其中に世間の俗物共を眼中に措かないで、一つ思

ふ存分な所を書いて見ようと思ふ、といふ樣な事を饒舌つて、文士で一生貧乏暮しをするのだもの、ねえ、君、責めて後世にでも名を殘さなきやアと、堪らない事をいふ。プスリ〳〵と燻るやうな氣焔を吐いて、散々人を厭がらせた擧句に、僕は君に萬斛の同情を寄せてゐる、今日は一つ忠告を試みようと思ふ、といふから、何を言ふかと思ふと、君も然う所帶染みて了はずと、一つ奮發して、何か後世へ殘し玉へ。」

こんなのは文壇でも流石に屑の方であらう。しかし不幸にして私の友人は大抵屑ばかりだ。こんな人のこんな風袋ばかり大きくても、割れば中から鉛の天神樣が出て來るガラ〳〵のやうな、見掛倒しの、內容に乏しい、親切な忠告なんぞは、私は些とも聞き度くない。私の願は親の口から今一度、薄着して風邪をお引きでない、お腹が減いたら御飯にせうかと、詰らん、降らん、意味の無い事を聞きたいのだが……

その親達は最う此世に居ない。若し未だ生きてゐたら、私は……孝行をしたい時には親はなしと、又しても俗物は旨い事を言ふ。あゝ、嬉しいにつけ、悲しいにつけ、憶出すのは親の事……それにポチの事だ。

＋

ポチは言ふ迄もなく犬だ。

來年は四十だといふ、もう鬢に大分白髮も見える、汚ない髭の親仁の私が、親に繼いでは犬の事を憶出すなんぞと、餘り馬鹿氣てゐてお話にならぬ――と、被仰るお方が有るかも知れんが、私に取つては、ポチは犬だが……犬以上だ。犬以上で、一寸まあ、弟……でもない、弟以上だ。何と言つたものか？……さうだ、命だ、第二の命だ。恥を言はねば理が聞えぬといふから、私は理を聞かせる爲に敢て恥を言ふが、ポチは全く私の第二の命であつた。其緣初めを言へば、欲しくて貰つた犬ではない、止むことを得ず……いや、矢張あれが天から授かつたと云ふのかも知れぬ。

忘れもせぬ、祖母の亡なつた翌々年の、春雨のしと〳〵と降る薄ら寒い或夜の事であつた。宵惑の私は例の通り宵の口から寢て了つて、いつ兩親は床に就いた事やら、一向知らなかつたが、ふと目を覺すと、有明が枕元を朦朧と照して、四邊は微暗く寂然としてゐる中で、耳元近くに妙な音がする。ゴウといふかとすれば、スウと、或は高く或は低く、單調ながら拍子を取つて、宛然大鋸で大丸太を挽割るやうな音だ。何だらうと思つて耳を澄してゐると、時々其音が自分と自分の單調に駭いたやうに、忽ちガアと潰れた調子を破り、凄じい、障子の紙の共鳴りのする程の音を立てて、勢込んで何處へか行きさうにして、忽ち物に行當つたやうに、礑と止む。と、しばらく闃寂となる――その側から、直ぐ又穩かにスウ〳〵といふ音が遠方に聞え出して、其が次第に近くなり、荒くなり、又耳元で根氣よくゴウ、スウ、ゴウ、スウと鳴る。

私は夜中に滅多に目を覺した事が無いから、初は甚く喫驚したが、能く研究して見ると、なに、父の鼾なので、漸と安心して、其儘再び眠らうとしたが、壯なゴウ〳〵スウ〳〵が耳に附いて仲々眠付かれない。仕方がないから、聞える儘に其音に聽入つてゐると、思做しで種々に聞える。或は遠雷のやうに聞え、或は浪の音のやうでもあり、又は火吹達磨が火を吹いてるやうにも思はれゝば、ゴロタ道を荷馬車が通る音のやうにも思はれる。と、ふと晝間見た繪本の天狗が酒宴を開いてゐる所を憶出して、阿爺さんが天狗になつてお囃子を行つてるのぢやないかと思ふと、急に何だか薄氣味惡くなつ

て來て、私は頭からスポッと夜着を冠つて小さくなつた。けれども、天狗のお囃子は夜着の襟から潜り込んで來て、耳元に纏り付いて離れない。私は凝然と固くなつて其に耳を澄ましてゐると、何時からとなくお囃子の手が複雜で來て、合の手に遠くで微かにキャン〳〵といふやうな音が聞える。ゴウといふ凄じい音の時には、それに消壓されて聞えぬが、スウといふ溜息のやうな音になると、其が判然と手に取るやうに聞える。不思議に思つて益耳を澄ましてゐると、合の手のキャン〳〵が次第に大きく、高くなつて、遂には鼾の中を脱け出し、其とは離ればなれに、確に門前に聞える。

かうなつて見ると、疑もなく小狗の啼聲だ。時々咽喉でも締められるやうに、消魂しく嘖々と啼き立てる其聲尻が、軈てかぼそく悲し氣になつて、滅入るやうに遠い〳〵處へ消えて行く――かとすれば、忽ち又近くで堪へ切れぬやうに啼き出して、クン〳〵と鼻を鳴らすやうな時もあり、ギャオと欠びをするやうな時もある。

十一

私は元來動物好で、就中犬は大好だから、近處の犬は大抵馴染だ。けれども、此樣な纖弱い可愛な聲で啼くのは一疋も無い筈だから、不思議に思つて、窃と夜着の中から首を出すと、

「如何したの？　寢られないのかえ？」

と、母が寢反りを打つて此方を向いた。私は此返答は差措いて、

「あれは白ぢやないねえ、阿母さん？　最と小さい狗の聲だねえ？　如何したんだらう？」

「棄狗さ。」

「棄狗ッて何？」

「棄狗ッて……誰かが棄ててッたのさ。」

私はしばらく考へて、

「誰が棄ててッたんだらう？」

「大方何處かの……何處かの人さ。」

何處かの人が狗を棄ててッたと、私は二三度反覆して見たが、分らない。

「如何して棄ててッたンだらう？」

蒼蠅いよ、などといふ母ではない。何處迄も相手になつて、其意味を說明して呉れて、もう晩いから默つてお寢と優しく言つて、又彼方向いて了つた。

私も亦夜着を被つた。狗は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるに隨れて、父の鼾が又蒼蠅く耳に附く。寢られぬ儘に、私は夜着の中で今聽いた母の說明を反覆し〳〵味つて見た。まづ何處かの宿犬が縁の下で兒を生んだとする。まだ小ぽけなむく〳〵したのが重なり合つて、首を擡げて、ミイ〳〵と乳房を探してゐる所へ、親犬が餘處から歸つて來て、其側へドサリと横になり、片端から抱へ込んでベロ〳〵舐めると、小さいから舌の先で他愛もなくコロ〳〵と轉がされる。轉がされては大騷ぎして這返り、又ヨチヨチと這寄つて、ポッチリと黑い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、狼狽ててチウと吸付いて、小さな兩手で揉み立て揉み立て吸出すと、甘い温かな乳汁が滾々と出て來て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言へず甘い。と、腋の下からまだ乳首に有附かぬ兄弟が鼻面で割込んで來る。奪られまいとして、産毛の生えた腕を突張り大騷ぎ行つてみるが、到頭奪られて了ひ、又其處らを尋ねて、他の乳首に吸付く。其中にお腹も滿くなり、親の肌で身體も温まつて、溶けさうな好い心持になり、不覺恍々となると、含んだ乳首が脱けさうになる。夢心地にも狼狽てて又吸付いて、一しきり吸立てるが、直に又他愛なく恍々となつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向

正體がない……其時忽ち暗黒から、茸々と毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がヌッと出て、正體なく寢入つてゐる所を無手と引掴み、宙に釣す。驚いて目をポッチリ明き、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つて藻掻く中に、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息氣が塞りさうだから、出ようとするが、出られない。久く藻掻いて居る中に、ふと足掻が自由になる。と、領元を撮まれて、高い高い處からドサリと落された。うろ〳〵として其處らを視廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で、誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて見る間に濡れしよぼたれ、怕ろしく寒くなる。身慄ひ一つして、クン〳〵と親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れて、ヨチ〳〵と這出し、雨の夜中を唯一人、温かな親の乳房を慕つて悲し氣に啼廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へか彷徨つて行つたやうだつたが、其が何時か又戻つて來て、何處を如何潜り込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

十二

「阿母さん〳〵、門の中へ入つて來たやうだよ。」

と、私が何だか居堪らないやうな氣になつて又母に言掛けると、母は氣の無ささうな聲で、

「さうだね。」

「出て見ようか？」

「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」

「だつてえ……あら、彼様に啼いてる……」

と、折柄絶入るやうに啼入る狗の聲に、私は我知らず勃然起上つたが、何だか一人では可怕いやうな氣がして、

「よう、阿母さん、行つて見ようよう！」

「本當に仕様がない兒だねえ。」

と、口小言を言ひ〳〵、母も澁々起きて、雪洞を點けて起上つたから、私も其後に隨いて、玄關――と云つてもツイ次の間だが、玄關へ出た。

母が履脱へ降りて格子戸の掛金を外し、ガラリと雨戸を繰ると、颯と夜風が吹込んで雪洞の火がチラ〳〵と靡く。其時小さな鞠のやうな物が衝と軒下を飛退いたやうだつたが、軈て雪洞の火先が立直つて、一道の光がサッと戸外の暗黒を破り、雨水の處々に溜つた地面を一筋細長く照し出した處を見ると、ツイ其處に生後まだ一箇月も經たぬ、むく〳〵と肥つた、赤ちやけた狗兒が、小指程の尻尾を千切れさうに掉立つて、此方を瞻上げてゐる。形體は私が寢てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた割合に大きい耳から雫を滴し、ぽつちりと両つの眼を青貝のやうに列べて光らせてゐる。

「おや〳〵、まあ、可愛らしい！……」と、母も不覺言つて了つた。

況や私は犬好だ。凝として視ては居られない。母の袖の下から首を出して、チョッ〳〵と呼んで見た。

と、左程畏れた様子もなく、チョコ〳〵と側へ來て、流石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下からグイ〳〵推上げるやうにして、ペロ〳〵と舐廻し、手を呉れる積なのか、頻に圓い前足を擧げてバタ〳〵やつてゐたが、果は和りと痛まぬ程に小指を咬む。

私は可愛くて〳〵堪らない。母の面を瞻上げながら、少し鼻聲を出し掛けて、

「阿母さん、何か遣つて。」

「遣るも好いけど、居附いて了ふと、仕方がないねえ。」

と、口では拒むやうな事を言ひながら、それ

でも臺所へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて來て呉れた。

早速椽側へ引入れて之を當がふと、小狗は一寸香を嗅いで、直ぐ甘さうに先づピチャ／＼と舐め出したが、汁が鼻孔へ入ると見えて、時々クシン／＼と小さな嚏をする。忽ち汁を舐盡して、今度は飯に掛つた。他に爭ふ兄弟も無いのに、切に小言を言ひながら、ガツ／＼と喫べ出したが、飯は未だ食潰れぬかして、兎角上顎に引附く。首を掉つて見るが、其樣な事では仲々取れない。果は前足で口の端を引掻くやうな眞似をして、大藻掻きに藻掻く。

此隙に私は母と談判を始めて、今晩一晩泊めて遣つてと、雪洞を持つた手に振垂る。母は一寸澁つたが、もう斯うなつては仕方がない。阿爺さんに叱られるけれど、と言ひながら、詰り桟俵法師を捜して來て、履脱の隅に敷いて遣つた——は好かつたが、其晩一晩啼通されて、私は些とも知らなんだが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

十三

犬嫌の父は泊めた其夜を啼明されると、うんざりして了つて、翌日は是非逐出すと言出したから、私は小狗を抱いて逃廻つて、如何しても放さなかつた。父は困つた顏をしてゐたが、併し其も一時の事で、其中に小狗も獨家に慣れて、夜も啼かなくなる。と、逐出す筈の者に、何時しかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと父までが一緒に搜すやうになつて了つた。

父が斯うなつたのも、無論ポチを愛したからではない。唯私に覊されたのだ。私とてもポチを手放し得なかつたのは、強ちポチを愛したからではない。愛する愛さんは扨置いて、私は唯可哀さうだつたのだ。親の乳房に縋つてゐる所を、無理に無慈悲な人間の手に引離されて、暗い浮世へ突放された犬の子の運命が、子供心にも如何にも果敢なく情けないやうに思はれて、手放すに忍びなかつたのだ。

此忍びぬ心と、その忍びぬ心を破るに忍びぬ心と、二つの忍びぬ心が搦み合つた處に、ポチは旨く引掛つて、辛くも棒石塊の危い浮世に彷徨ふ憂目を免れた。で、どうせ、それは、蜘蛛の巣だらけでは有つたらうけれど、兎も角も雨露を凌ぐに足る椽の下の藁の上で、甘くはなくとも朝夕二度の汁掛け飯に事缺かず、まづ無事に暢びりと育つた。

育つに隨れて、丸々と肥つて可愛らしかつたのが、身長に幅を取られて、ヒョロ長くなり、面も甚くトギスになつて、一寸狐のやうな犬になつて了つた。前足を突張つて、尻をもつたてて、弓のやうに反つて伸をしながら、大きな口をアングリ開いて欠伸をする所なぞは、誰が眼にも餘り見とも好くもなかつたから、父は始終厭な犬だ／＼と言つて私を厭がらせたが、私はそんな犬振りで情を二三にするやうな、そんな輕薄な心は聊かも無い。固より玩弄物にする氣で飼つたのでないから、厭な犬だと言はれる程、猶可愛い。

―ねえ、阿母さん、此樣な犬は何處へ行つたつて可愛がられやしないやねえ。だから家で可愛がつて遣るんだねえ。—

と、いつも苦笑する母を無理に味方にして、調戯ふ父と爭つた。

犬好は犬が知る。私の此心はポチにも自然と感通してゐたらしい。其證據には犬嫌ひの父が呼んでも、ほんの一寸お愛想に尻尾を掉るばかりで、振向きもせんで行つて了ふ事がある。母が呼ぶと、不斷食事の世話になる人だから、又何か貰へるかと思つて眼を輝かして飛んで來る、而した母の手中に其らしい物があれば、兎のやうに跳ねて喜ぶ。が、しかし、唯其丈の事

で、其時のポチは矢張犬に違ひない。

その矢張犬に違ひないポチが、私に對ふと……犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか？……何方だか其は分らんが、兎に角互の熱情熱愛に、人畜の差別を撥無して、渾然として一如となる。

一如となる。だから、今でも時々私は犬と一緒になつて此樣な事を思ふ、あゝ、儘になるなら人間の面の見えぬ處へ行つて、飯を食つて生きてたいと。

犬も屹度然う思ふに違ひないと思ふ。

十四

私は生來の朝寢坊だから、毎朝二度三度覺されても、仲々起きない。優しくしてゐては際限がないので、母が最終には夜着を剝ぐ。これで流石の朝寢坊も不承々々に床を離れるが、しかし大不平だ。額で母を睨めて、津蟹が泡を吐くやうに、沸々言つてゐる。ポチは朝起だから、もう其時分には疾くに朝飯も濟んで、一切り遊んだ所だが、私の聲を聽き付けると、何處に居ても一目散に飛んで來る。

これで私の機嫌も直る。急に現金に莞爾々々となつて、急いで庭へ降りる所を、ポチが透さず泥足で飛付く。細い人蔘程の赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立つて、嬉しさうに面を瞻上げる。視下す。目と目と直たりと合ふ。堪らなくなつて私が横抱に引ン抱く。ポチは抱かれながら、身を滚搔いて大暴れに暴れ、私の手を舐め、胸を舐め、顋を舐め、頰を舐め、舐めても〳〵舐め足らないで、惡くすると、口まで舐める。父が面を顰めて汚い〳〵と曰ふ。成程、考へて見れば、汚いやうではあるけれども……しかし、私は嬉しい、止められない。如何して是が止められるもんか！　私が何も好い物を持つてゐるぢやなし、ポチも其は承知で爲る事だ。利害の念を離れて居るのだ、唯懷かしいといふ刹那の心になつて居るのだ。毎朝これでは着物が堪らないと、母は其を零すけれど、着物なんぞの汚れを厭つて、ポチの此志を無にする事が出來た話だか、話でないか、其處を一つ考へて貰ひたい。

理窟は扨置いて、この面舐めの一儀が濟むと、ポチも漸と是で氣が濟んだといふ形で、また庭先をうろ〳〵し出して、緣の下なぞを覗いて見る。と、其處に草鞋蟲の一杯依附つた古草履の片足か何ぞが有る。好い物を看附けたと言ひさうな面をして、其を啣へ出して來て、首を一つ掉ると、草履は横飛にポンと飛ぶ。透さず追蒐けて行つて、又啣へてポンと抛る。其樣な他愛もない事をして、活潑に元氣よく遊ぶ。

其隙に私は面を洗ふ、飯を食ふ。それが濟むと、今度は學校へ行く段取になるのだが、此時が一日中で一番の私の苦痛の時だ。ポチが跟を追ふ。うッかり出ようものなら、何處迄も〳〵隨いて來て、逐つたつて如何したつて歸らない。こッそり出ようとしても、出掛ける時刻をチャンと知つて居て、其時分になると、何時の間にか玄關先へ廻つて待つてゐる。仕方がないから、最終には取捉まへて否應なしに格子戸の内へ入れて置いては出るやうにしてゐたが、然うすると前足で格子を引搔いて、悲しい〳〵血を吐きさうな啼聲を立てゝ後を慕ひ、姿が見えなくなつても啼止まない。私もそれは同じ想だ。泣出しさうな面をして、バタ〳〵と驅出し、聲の聞えない處まで來て、漸くホッとして、普通の步調になる、而して常も心の中で反覆し〳〵此樣な事を思ふ、

「僕が居ないと淋しいもんだから、それで彼樣に跟を追ふンだ。可哀さうだなあ……。僕ア學校なんぞへ行きたか無いンだけど……。行かないと、阿父さんがポチを棄てツ了ふツて言ふも

ンだから、それでシャウがないから行く〳〵んだけども……」

十五

ジャン〳〵と放課の鐘が鳴る。今迄静かだつた校舎内が俄に騒がしくなつて、彼方此方の教室の戸が前後して慌だしくパッ〳〵と開く。と、その狭い口から、物の眞黒な塊りがドッと廊下へ吐出され、崩れてばら〳〵の子供になり、我勝に玄關脇の昇降口を目蒐けて駈出しながら、口々に何だか喚く。只もう校舎を揺つてワーッといふ聲の中に、無數の圓い顔が默つて大きな口を開いて躍つてゐるやうで、何を喚いてゐるのか分らない。で、それが一旦昇降口へ吸込まれて、此處で又紛々と入亂れ重なり合つて、腋の下から才槌頭が偶然と出たり、外齒へ肱が打着かつたり、靴の踵が生憎と霜燒の足を踏んだりして、上を下へ捏返した昇降口にワッと門外へ押出して、東西へ散々になる。

仲善二人肩へ手を掛合つて行く前に、辨當箱をポンと抛り上げてはチョイと受けて行く頑童がある。其隣は往來の石塊を蹴飛ばし〳〵行く。誰だか、後刻で遊びに行くよ、と喚く。蝗を取りに行かないか、といふ聲もする。若々と呼ぶ背後で、馬鹿野郎と誰かが誰かを罵る。あ、痛ッ、何でい、わーい、といふ聲が囂然と入違つて、友達は皆道草を喰つてゐる中を、私一人は摺脱けるやうにして側視もせずに切々と歸つて來る。

家の横町の角迄來ると、擽たいやうな心持になつて、窃と其方角を觀ると、果してポチが門前へ迎へに出てゐる。私を看附けるや、逸散に飛んで來て飛付く、舐める。何だか「兄さん！」と言つたやうな氣がする。若し本包に、辨當箱に、草履袋で、兩手が塞がつてゐなかつたら、私は此時ポチを捉まへて何を行つたか分らないが、其か有るばかりで、如何する事も出來ない。據どころなくほた〳〵しながら頭を撫でて遣るだけで不承して、又歩き出す。と、ポチも忽ち身を曲らせて、横飛にヒョイと飛んで駈出すかと思ふと、立止つて、私の面を看て滑稽た眼色をする。追付くと、又逃げて又其眼色をする。からして巫山戯ながら一緒に歸る。

玄關から大きな聲で「只今！」といひながら、内へ駈込んで、率然本包を其處へ抛り出し、慌てて辨當箱を開けて、今日のお菜の殘り——と稱して、實は喫べたかつたのを我慢して、半分殘して來た其物をポチに遣る。其でも足らないで、お八つにお煎餅を三枚貰つたのを、貰つて五枚にして貰つて、二枚は喫べて、三枚は又ポチに遣る。

夫から庭で一しきりポチと遊ぶと、母が屹度お温習をお爲といふ。このお温習程私の嫌ひな事はなかつたが、之をしないと、直ポチを棄てると言はれるのが辛いので、澁々内へ入つて、形の如く本を取出し、少し許りおんによご〳〵と行る。それでお終だ。餘り早いねと母がいふのを、空耳潰して、衝と外へ出て、ポチ來い、ポチ來いと呼びながら、近くの原へ一緒に遊びに行く。

これが私の日課で、ポチでなければ夜も日も明けなかつた。

十六

ポチは日増しにメキ〳〵と大きくなる。大きくはなるけれど、まだ一向に孩兒で、垣の根方に大きな穴を掘つて見たり、下駄を片足門外へ銜へ出したり、其樣な惡戯ばかりして喜んでゐる。

それに非常に人懷こくて、門前を通掛りの、私のやうな犬好が、氣紛れにチョッ〳〵と呼んでも、直ともう尾を掉つて飛んで行く。況して

家へ來た人だと、誰彼の見界はない、皆に喜んで飛付く。初ての人は驚いて、子供なんぞは泣出すのもある。すると、ポチは喫驚して其面を視てゐる。

人でさへ是だから同類は尚ほ戀しがる。犬が外を通りさへすれば乾度飛んで出る。喧嘩するのかと、私がハラ／＼すれば、喧嘩はしない、唯壯に尻尾を掉つて鼻を嗅合ふ。大抵の犬は相手は子供だといふ面をして、其儘匆々と行かうとする。どッこいとポチが追蒐けて巫山戯かゝる。蒼蠅いと言はぬばかりに、先の犬は歯を剝いて叱る。すると、ポチは驚いて耳を伏せて逃げて來る。

ポチは此樣な無邪氣な犬であつたから、友達は直出來た。

友達といふのは黑と白との二匹で、いづれもポチよりは三つ四つも年上であつた。歷とした家の飼犬でありながら、品性の甚だ下劣な奴等で、毎日々々朝から晩まで近處の掃溜を漁り歩き、三度の食事の外の間食ばかり貪つてゐる。以前から私の家の掃溜へも能く立廻つて來て、馴染の犬共ではあるけれど、ポチを飼ふやうになつてからは、尚ほ頻繁に立廻つて來る。ポチの喫剩しを食ひに來るので。

ポチは大樣だから、餘處の犬が自分の食器へ首を突込んだとて、怒らない。默つて快く食はせて置く。が、他の食ふのを見て自分も食氣附く時がある。其樣な時には例の無邪氣で、ウッかり側へ行つて、一緒に首を突込まうとする。無論先の犬は、馳走になつてゐる身分を忘れて、大に怒つて叱付ける。すると、ポチは驚いて飛退いて、不思議さうに小首を傾げて、其ガッガッと食ふのを默つて見てゐる。

父は馬鹿だと言ふけれど、馬鹿氣て見える程無邪氣なのが私は可愛い。尤も後には惡友の惡感化を受けて、友達と一緒に近處の掃溜へ首を突込み、鮭の頭を舐つたり、通掛りの知らん犬と喧嘩したり、屑拾ひの風體を怪しんで押取圍んで吠付いたりした事も無いではないが、是は皆友達を見やう見眞似に其尻馬に騎つて、譯も分らずに唯騷ぐので、ポチに些とも惡意はない。であるから、獨りの時には、矢張元の無邪氣な人懷こい犬で、滑稽た面をして他愛のない事ばかりして遊んでゐる。惟ふに、私等親子の愛しみを受けて、曾て痛い目に遭つた事なく、呑氣に安泰に育つたから、それで此樣に無邪氣であつたのだらうが、あゝ、想出しても無念でならぬ。何故私はポチを躾けて、人を見たら皆惡魔と思ひ、一生世間を睨め付けては居させなかつたらう？　憖じ可愛がつて育てた爲に、ポチは此樣に無邪氣な犬になり、無邪氣な犬であつた爲に、遂に殘忍な刻薄な人間の手に掛つて、彼樣な非業の死を遂げたのだ。

十七

或日の事、卑しい事を言ふやうだが、其日の辨當の菜は母の手製の鰹節でんぶで、私も好だが、ポチの大好な物だつたから、我慢して半分以上殘したのが、チャンと辨當箱に入つてゐる。早く歸つてこれが喫べさせたかつたので、待憧れた放課の鐘が鳴るや、大急ぎで學校の門を出て、友達は例の通り皆道草を喰つてゐる中を、私一人は切々と歸つて來ると、俄に行手がワッと騷がしくなつて、先へ行く兒が皆雪崩れて、ドッと道端の杉垣へ片寄つたから、驚いてヒョイと向うを見ると、ツイ四五間先を荷車が來る。瞥と見たばかりでは何の車とも分らなかつた。何でも可なり大きな箱車で、上から菰を被せてあつたやうだつたが、其を若い土方風の草鞋穿の男が、餘り重さうにもなく匆々と引いて來る。車に引添うてまだ一人、四十許りの、四角な面の、靑々と髭の生えた、人相の悪い、

矢張草鞋穿の土方風の男が、古ぼけた茶だか鼠だか分らなくなつた、塵埃だらけの鉢卷もない帽子を阿彌陀に冠つて、手ぶらで何だか饒舌りながら來る。

道端の子供等は皆好奇の目を圓くして、此怪し氣な車を見迎へ見送つて、何を言ふのか、口々に譟然と喚いてゐる中から、忽ち一段際立つて甲高な、「犬殺しだい〳〵！」といふ叫聲が其處此處から起る。と聞くより、私はハッとした。全身の血の通ひが急に一時に止つたやうな氣がして、襟元から冷りとする、足が竦む……と、忽ち心臟が破裂せむばかりに鼓動し出す、「ポチは？……」といふ疑問が曇つたやうな頭の中で、ちらりと電光のやうに閃いて又暗中に沒する時、ガタ〳〵と車が前を通る。

後で聞けば、菰の下から犬の尻尾とか足とかが見えてゐたといふけれど、私が其時信と目を据ゑて視たのでは、唯車が躍つて菰が魂の有るやうにゆさ〳〵と搖れるのが見えたばかりで、他には何も見えなかつた。或は最う目も霞んでゐたのかも知れぬ。

「おッそろしい餓鬼だなあ！　まだ彼樣に出て來やがら……」

と、太い煤けたやうな野良聲で、——確に年上の奴に違ひないが、然う言ふのが聞えた。

ガタンと一つ小石に躍つて、車は行過ぎて了ふ。

跡は兩側の子供が又續々と動き出し、四邊が大黑帽に飛白の衣服で紛々となる中で、私一人は佇立つたまゝ、茫然として、轅棒の先で子供の波を押分けて行くやうに見える車の影を見送つてゐた。

と、誰だか私の側へ來て、何か言ふ。顏は見覺えのある家の近處の何とかいふ兒だが、言つてる事が分らない。私は默つて其面を視たばかりで、又竊と車の行つた方角を振向いて見ると、最う車は先の横町を曲つたと見えて、此方を向いて來る澤山の子供の顏が見えるばかりだ。

「ねえ、君、君ン處のポチも殺されたかも知れないぜ。」

といふ聲が此時ふと耳に入つて、私はハッと我に反ると、

「嘘だい！　殺されるもンか！　札が附いてるもの……」

と狼狽て打消してから、初て木村の賢ちやんといふ兒と話をしてゐる事が分つた。

「やあ……札が附いてたッて、殺されますから。へえ。僕ン處の阿爺さんが……」

と賢ちやんが言掛けると、仲善の友の言ふ事だが、私は何だか急に口惜しくなつて、嚇と急込んで、

「何でい！　大丈夫だい!!……」

と怒鳴り付けた。賢ちやんが喫驚して眼を圓くした時、私は率然バタ〳〵と駈出し、前へ行く兒にトンと衝當る。何しやがるンだいと、其兒に突飛されて、又誰だかに衝當る。二三度彼方此方で小突かれて、蹌踉として、危かつたのを辛と踏耐へるや、後をも見ずに逸散に宙を飛んで家へ歸つた。

十八

門は明放し、草履は飛び〳〵に脱棄てて、片足が裏返しになつたのも知らず、

「阿母さん〳〵！」と率然內へ喚き込んだが、母の姿は見えないで、臺所で返事がする。

誰だか來て居るやうで、話聲がしてゐるけれど、其樣な事に頓着しては居られない。學校道具を座敷の中央へ拋り出して置いて、臺所へ飛んで行くなり、

「阿母さん!!……ポチは？……」

と喘ぎ〳〵まづ聞いてみた。

母は默つて此方を向いた。常は減入つたやう

な蒼い面をしてゐる人だつたが、其時此方を向いた顔を見ると、微と紅くなつて、眼に潤みを持ち、どうも尋常の顔色でない。私は急に何か物に行當つたやうにうろ〳〵して、

「殺されたかい？……」

と凝然と母の顔を視た時には、氣息が塞りさうだつた。

母は一寸躊躇つたやうだつたが、思切つて投出すやうに、

「殺されたとさ……」

逸散に駆けて來て、ドカッと深い穴へ落ちたら、彼樣な氣がするだらうと思ふ。私は然う聞くと、ハッと内へ氣息を引いた。と、張詰めて破裂れさうになつてゐた氣がサッと退いて、何だか奥深い穴のやうな處へ滅入つて行くやうで、四邊が濛と暗くなると、母の顔が見えなくなつた……

「炭屋さんが見て來なすッたンだッさ。」

といふ聲がふと耳に入ると、クワッとまた其處らが明るくなつて、眼の前に丸髷が見える。母は又彼方向いて了つたのだ。

「ぢや、木村さん處の前で殺されたンですね？」

と母の聲がいふ。

「へえ、」といふ者がある。機械的に其方へ面を向けると、腰障子の蔭に舊い馴染の炭屋の爺やの、小鼻の脇に大きな黒子のある、皺だらけの面が見えて、前歯の二本脱けた間から、チョコ〳〵舌を出して饒舌つてゐる聲が聞える。「丁度あの木村さんの前ン處なんで。手前は初は何だと思ひました。棒を背後へ匿してましたから、遠くで見たンぢや、ほら、分りませんや。一寸見ると何だか土方のやうな奴で、其奴がかう手を背後へ廻しましてな、お宅の犬の寢てゐる側へ寄つてくから、はてな、何をするンだらう、と思つて見てゐますと、彼樣な人懐ッこい犬だから、其奴の面を見て、何にも知らずに尻尾を掉つてましたよ。可哀さうに！　普通の者なら、何ぼ何でも其樣にされちや、手を下せた譯合のもンぢやございません、――ね、今日人情としましても、それを、貴女……いや、どうも、あゝいふ手合に逢つちや敵ひませんて、卒然匿してた棒を取直して、おやッと思ふ間に、ポンと一つ鼻面を打ちました。さうするとな、お宅のは勃然起きましてな、キリ〳〵と二三遍廻つて、バタリと倒れると、仰向きになつてから四足を突張りましてな、尻尾でバタ〳〵地面を叩いたのは、あれは大方苦しがつたンでせうが、傍で見てゐりや何だか喜んで尻尾を掉つたやうで、妙な塩梅しさでしたがな、其處を、貴女、またポカ〳〵と三つ四つ咽喉ン處を打ちますとな、もう其ツ切りで、ギャッともスウとも聲を立て得ないで、貴女……」

私はもう後は聽いてゐなかつた。誰を憚る必要もないのに、窃と目立たぬやうに後方へ退つて、狐鼠々々と奥へ引込んだ。ペタリと机の前へ坐つた。キリ〳〵と二三遍廻つたといふ今聞いた話が胸に浮ぶと、そのキリ〳〵と廻つたポチの姿が、顯然と目に見えるやうな氣がする。熱い涙がほろ〳〵零れる、手の甲で擦つても擦つても止度なくほろ〳〵零れる。

十九

ポチが殺されて、私は氣脱したやうになつて、翌日は學校も休んだ。何も自分が罪を犯したでもないのに、何となく友達に顔を見られるのが辛くッて……

午過にポチが殺されたといふ木村といふ家の前へ行つて見た。其處か此處かと尋ねて見たけれど、もう其らしい痕もない。私は道端にイんで、茫然としてゐた。

炭屋の老爺やの話だと、うッかり寢轉んでゐる所を殺されたのだと云ふ。大方昨日も私の

歸りを待ちかねて、此處らまで迎へに出てゐたのであらう。待草臥れて、ドタリと横になつて、角のポストの蔭から私の姿がヒョツコリ出て來はせぬかと、其方ばかりを餘念なく眺めてゐる所へ、犬殺しが來たのだ。人間は皆私達親子のやうに自分を可愛がつて呉れるものと思つてゐるポチの事だから、犬殺しとは氣が附かない。何心なく其面を瞻上げて尾を掉る所を、思ひも寄らぬ太い棍棒がブンと風を截つて來て……と思ふと、又胸が一杯になる。

ヒウと悲しい音を立てて、空風が吹いて通る。跡からカラ〳〵に乾いた往來の中央を、砂烟が濛と力のない渦を卷いて、捩れてひよろ〳〵と行く。

私は其行方を眺めて茫然としてゐた。と、何處かでキャン〳〵と二聲三聲犬の啼聲がする……。佶と耳を引立つて見たが、もう其切で聞えない。隣町あたりで凍けたやうな物賣の聲がする。

何だか今の啼聲が氣になる。ポチは殺されたのだから、もう此處らで啼いてる筈はない。餘處の犬だ餘處の犬だ、と思ひながら、何だか其儘聞流して了ふのが殘惜しくて、思はずバタバタと駈出したが、餘處の犬ぢや詰らないと思返して、又頽然となると、足の運びも自然と遲くなり、そろり〳〵と草履を引摺りながら、目的もなく小迷つて行く。

小迷つて行きながら、又ポチの事を考へてゐると、ふッと氣が變つて、何だか昨日からの事が皆嘘らしく思はれてならぬ。私が餘りポチばかり可愛がつて勉強をしなかつたから、父が萬一したら懲しめのため、ポチを何處かへ隱したのぢやないかと思ふ。さうすると、今の啼聲は矢張ポチだつたかも知れぬと、うろ〳〵とする目の前を、土耳古帽を冠つた十徳姿の何處かのお祖父さんが通る。何だか親切さうな好いお祖父さんらしいので、此人に聞いたら、偶然とポチの居處を知つてゐて、教へて呉れるかも知れぬと思つて、凝然と其面を視ると、先も振向いて私の面を視て、莞爾して行つて了つた。

向うから順禮の親子が來る。笈摺も古ぼけて、旅窶れのした風で、白の脚絆も埃に塗れて狐色になつてゐる。母の話で聞くと、順禮といふ者は行方知れずになつた親兄弟や何かを尋ねて、國々を經巡つて歩くものだと云ふ。此人達も其樣な事で斯うして歩いてゐるのかも知れぬ、と思ふと、私も何だか此仲間へ入つて一緒にポチを探して歩きたいやうな氣がして、立止つて其後姿を見送つてゐると、忽ち背後でガラ〳〵と雷の落懸るやうな音がしたから、驚いて振向かうとする途端に、トンと突飛されて、私はコロ〳〵と轉がつた。

「危ねい！ 往來の眞ン中を彷徨してやがつて……」とせい〳〵息を逸ませながら立止つて怒鳴りつけたのは、目の怕い俥夫であつた。

俥には黑い高い帽子を冠つて、温かさうな黃ろい襟の附いた外套を被た立派な人が乘つてゐたが、私が面を顰めて起上るのを尻目に掛けて、髭の中でニヤリと笑つて、

「鎌藏、構はずに行れ。」

「へい……本當に冷りとさせやがつた。氣を付けろ、洟垂らしめ！……」

と俥夫は又トッ〳〵と曳出した。

紳士は犬殺しでない。が、ポチを殺した犬殺しと此人と何だか同じ樣に思はれて、クラ〳〵と目が眩むと、私はもう無茶苦茶になつた。

率然道端の小石を拾つて打着けてやらうとしたら、俥は先の横町へ曲つたと見えて、もう見えなかつた。

バタリと小石を手から落した。と、何だか急に悲しくなつて來て耐らなくなつて、往來の眞ン中で私は到頭シク〳〵泣出した。

二十

ポチの殺された當座は、私は食が細つて瘦せた程だつた。が、其程の悲しみも子供の育つ勢には敵はない。間もなく私は又毎日學校へ通つて、友達を相手にキャッ／＼とふざけて元氣よく遊ぶやうになつた…

今日は如何したのか頭が重くて薩張書けん。徒書でもしよう。

愛は總ての存在を一にす。

愛は味ふべくして知るべからず。

愛に住すれば人生に意義あり、愛を離るれば、人生は無意義なり。

人生の外に出で、人生を望み見て、人生を思議する時、人生は遂に不可得なり。

人生に目的ありと見、なしと見る、共に理智の作用のみ。理智の眼を抉出して目的を見ざる處に、至味存す。

理想は幻影のみ。

凡人は存在の中に住す、其一生は觀念なり。詩人哲學者は存在の外に遊離す、觀念は其一生なり。

凡人は聖人の縮圖なり。

人生の眞味は思想に上らず、思想を超脱せる者は幸なり。

二十世紀の文明は思想を超脱せんとする人間の努力たるべし。

此樣な事ならまだ幾らでも列べられるだらうが、列べたつて詰らない。皆嘘だ。嘘でない事を一つ書いて置かう、

私はポチが殺された當座は、人間の顔が皆犬殺しに見えた。

是丈は本當の事だ。

二十一

小學から中學を終るまで、落第をも込めて前後十何年の間、毎日々々の學校通ひ、――考へて見れば、面白くもない話だが、併し其を左程にも思はなかつた。小學校の中は、内で親に小煩く世話を燒かれるよりも、學校へ行つて友達と騷ぐ方が面白い位に思つてゐたし、中學へ移つてからも、人間は斯うしたものと合點して、何とも思はなかつた。

しかし、凡そ學科に面白いといふものは一つも無かつた。何の學科も／＼、皆味も素氣もない難澁する物ばかりだつたが、就中私の最も閉口したのは數學であつた。小學時代から然うだつたが、中學へ移つてからも、是ばかりは變らなかつた。此次は代數の時間とか、幾何の時間とかとなると、もう其が胸に支へて、溜息が出て、何となく世の中が悲觀された。

算術は四則だけは如何やら斯うやら了解めたが、整數分數となると大分怪しくなつて、正比例で一寸息を吐く。が、其お隣の反比例から又亡羊し出して、按分比例で途方に暮れ、開平開立求積となると、何が何だか無茶苦茶になつて、詰り算術の長の道中を浮の空で通して了つたが、代數も矢張其通り。一次方程式、二次方程式、簡單なのは如何にかなつても、少し複雜のになると、AとBとが紛糾かつて、何時迄經つてもXに膠着いてゐて離れない。況や不整方程式には、頭も亂次になり、無理方程式を無理に強付けられてはげんなりして、便所へ立つてホッと一息吐く。代數も分らなかつたが幾何や三角術は半分も分らなかつた。初の中は全く相合せ得る物の大さは相等しなどと眞顔で教へられて、馬鹿扱にするのかと不平だつたが、其中に切賣の西瓜のやうな弓形や、二枚屛風を開いたやうな二面角が出て來て、大きなお供に小さいお供が附着いてヤッサモッサを始める段になると、もう氣が逆上つて了ひ、丸呑にさ

せられたギゴチない定義や定理が頭の中でしやちこばつて、其心持の惡いこと一通りでない。試驗が濟むと、早速咽喉へ指を突込んで溜飮の黄水と一緒に吐出せるものなら、吐出して了つて淸々したくなる。

何の因果で此樣な可厭な想をさせられる事か、其は薩張分らないが、唯此可厭な想を忍ばなければ、學年試驗に及第させて貰へない。學年試驗に及第が出來ぬと、最終の目的物の卒業證書が貰へないから、それで誠に止むことを得ず、眼を閉つて毒を飮む氣で辛抱した。

尤も是は數學ばかりでない。何の學科も皆多少とも此氣味がある。味つて樂むなどいふのは一つもない、又樂んでゐる暇もない。後から後からと他の學科が急立てるから、狼狽てて片端から及第のお呪ひの御符の積で鵜呑にして、而して試驗が濟むと、直ぐ吐出してケロリと忘れて了ふ。

二十二

今になつて考へて見ると、無意味だつた。何の爲に學校へ通つたのかと聞かれゝば、試驗の爲にといふより外はない。全く其頃の私の眼中には試驗の外に何物も無かつた。試驗の爲に勉强し、試驗の成績に一喜一憂し、如何な事でも試驗に關係の無い事なら、如何なとなれと餘處に見て、生命の殆ど全部を擧げて試驗の上に繫けてゐたから、若し其頃の私の生涯から試驗といふものを取去つたら、跡は他愛のない煙のやうな物になつて了ふ。

これは、しかし、私ばかりといふではなかつた。級友といふ級友が皆然うで、平生の勉强家は勿論、金箔附の不勉强家も、試驗の時だけは言ひ合せたやうに、一色に血眼になつて：：鵜の眞似をやる、丸呑に呑込めるだけ無暗に呑込む。尤も此連中は流石に平生を省みて、敢て多くを望まない、責めて及第點だけは欲しいが、貰へようかと心配する、而して常は事每に敎師に抵抗して靑年の意氣の壯なるに誇つてゐたのが、如何した機でか急に殊勝氣を起し、敬禮も成る丈氣を附けて丁寧にするやうにして、それでも尙ほ危險を感ずると、運動と稱して、敎師の私宅へ推懸けて行つて、哀れツぽい事を言つて來る。

私は我儕者の常として、見榮坊の、負嫌だつたから、平生も餘り不勉强の方ではなかつた。無論學科が面白くてではない、學科は何時迄經つても面白くも何ともないが、譬へば競馬へ引出された馬のやうなもので、同じやうな靑年と一つ埒内に鼻を列べて見ると、負けるのが可厭でいきり出す、矢鱈に無上にいきり出す。

平生さへ然うだつたから、況や試驗となると、宛然の狂人になつて、手拭を捻つて向鉢卷ばかりでは間怠ッこい、氷嚢を頭へ載ッけて、其上から頰冠をして、夜の目も眠ずに、例の鵜呑をやる。又鵜呑で大抵間に合ふ。間に合はんのは作文に數學位のものだが、作文は小學時代から得意の科目で、是は心配はない。心配なのは數學の奴だが、それをも無理に狼狽てた鵜呑式で押徹さうとする、又不思議と或程度迄は押徹される。尤も是はかね合ので、そのかね合を外すと、落こちる。私も未だ試驗慣れのせぬ中、ふと其かね合を外して落こちた時には、親の手前、學友の手前、流石に面目なかつたから、少し學校にも厭氣が差して、其時だけは一寸學校敎育なんぞを懷疑して受けるのが、何となく馬鹿氣た事のやうに思はれた。が、世間を見渡すと、皆此無意味な馬鹿氣た事を平氣で懸命に行つてゐる。一人として躊躇してゐる者はない。其中で私一人其樣な事を思ふのは何だか薄氣味惡かつたから、狼狽てて、いや、馬鹿氣てゐるやうでも、矢張必要の事なんだらうと思

直して、素知らん顔して、其からは落第の恥辱を雪がねば措かぬと發奮し、切齒して、扼腕して、果し眼になつて、又鵜の眞似を繼續して行つた。

鵜の眞似でも何でも、試驗の成績さへ良ければ、先生方も滿足せられる、內でも親達が滿足するから、私は其で好い事と思つてゐた。然うして彡′學んで殆ど何も得る所がない中に、いつしか中學も卒業して、卒業式には知事さんも「諸君は今回卒業の名譽を荷うて……」といつた。內でも赤飯を焚いて、お目出度い〳〵と親達が右左から私を煽がぬ許りにして呉れた。してみれば、矢張名譽でお目出度いのに違ひないと思つて、私も大に得意になつてゐた。

二十三

中學も卒業した。さて今後は如何するといふ愈胸の轟く問題になつた。

まだ中學に居る頃からの宿題で、寐ても寤めても是ばかりは忘れる暇もなかつたのだが、中學を卒業してもまだ極らずに居たのだ。

極らぬのは私ではない。私は疾うに極めてゐた、無論東京へ行くと。

東京は如何な處だか、人の噂に聞く許りで能くは知らなかつたが、私も地方育ちの青年だから、誰も皆思ふやうに、東京へ出て何處のか學校へ入りさへすれば、默つてゐても自然と運が向いて來て、或は海外留學を命ぜられるやうになるかも知れぬ。若し然うなつたら……と目を開いて夢を見てゐたのも昨日や今日の事でないから、何でも角でも東京へ出たいのだが、さて困つた事には、珍らしくもない話だけれど、金の出處がない。

父は其頃縣廳の小吏であつた。薄給でかつがつ一家を支へてゐたので、月給だけでは私を中學へ入れる事すら覺束なかつたのだが、幸ひ親讓りの地所が少々〳〵と小さな貸家が二軒あつたので、其上りで如何にか斯うにか糊塗つてゐたのだ。だから、到底も私を東京へ遣れないといふ父の言葉に無理もないが、しかし……私は矢張東京へ出たい。

父は其頃未だ五十であつた。達者な人だけに氣も若くて、まだ〳〵十年や十五年は大丈夫生きてゐると、傍の私達も思つてゐたし、自分も其は其氣でゐた。從つて世間の親達のやうに、早く私を月給取にして、嫁を宛がつて、孫の世話でもしてゐたいなぞと、そんな氣は微塵もないが、何分にも當節は勤向が六かしくなつて、もう永くは勤まらぬといふ。成程父は教育といつても、昔の寺子屋教育ぎりで、新聞も漢語字引と首引で漸く讀み覺えたといふ人だから、今の學校出の若い者と机を列べて事務を執らされては、辛い事も有らうと、其樣な事には浮の空の察しの無かつた私にも、話を聞けば能く分つて、同情が起らぬでもないが、しかし、それだからお前は縣廳へ勤めるなとして自分一人だけの事は爲て呉れと、言はれた時には情なかつた。父は然うして置いて、何ぞ他に氣骨の折れぬ力相應の事をして縣廳の方は辭職する、辭職しても當分はお前の世話にはなるまいと、財産相應の穩當な案を立てて、私の爲をも思つていふのは解つてゐるけれど、しかし私は如何しても矢張東京へ出て何處かの學校へ入りたい。

で、親子一つ事を反覆すばかりで何日經つても話の纏まらぬ中に、同窓の何某はもう二三日前に上京したし、何某は此月末に上京するといふ話も聞く。私は氣が氣でないから、眼の色を異へて、父に迫り、果は血氣に任せて、口惜し紛れに、金がないと言はれるけれど、地面を賣れば如何にかなりさうなものだ、それとも私の將來よりも地面の方が大事なら、學資は

出して貰はんでも好い、旅費だけ都合して貰ひたい、私は其で上京して苦學生になると、突飛な事を言ひ出せば、父は其樣な事には同意が出來ぬといふ、それは壓制だ、いや聞分ないといふものだと、親子顏を赤めて角芽立つ側で、母はおろ〳〵するといふ騷ぎ。

其時私の爲には頗る都合の好い事があつた。私と同期の卒業生で父も懇意にする然る家の息子が、何處のも同じ樣に東京行きを望んで、親に拒まれて、自棄を起し、或夜竊に有金を偸み出して東京へ出奔すると、續いて二人程其眞似をする者が出たので、同じ樣な息子を持つた諸方の親々の大恐慌となつた。父も此・件から急に我を折つて、彼方此方の親類を馳廻つた結果、金の工面が漸く出來て、最初は甚く行惱んだ私の遊學の願も、存外難なく聽されて、遂に上京する事になつた時の嬉しさは今に忘れぬ。

二十四

愈出發の當日となつた。待ちに待つた其日ではあるけれど、今となつては如何やら一日位は延ばしても好いやうな心持になつてゐる中に、支度はズン〳〵出來て、さて改まつて父母と別れの杯の眞似事をした時には、何だか急に胸が一杯になつて不覺ホロリとした。母は固より泣いた、快活な父すら目出度い目出度いと言ひながら、頻に咳をして洟を拭んでゐた。

玄關への俥が來る。性急の父が先づ狼狽に出して、座敷中を彷徨しながら、ソレ、風呂敷包を忘れるな、行李は好いか、小さい方だぞ、ココ蝙蝠傘は己が持つてツてやる、と固より見送つて呉れる筈なので、自分も一臺の俥に乘りながら、何は截つたか、何は……ソレ、あの、何よ……と、焦心る程倚ほ思出せないで、何やら分らぬ手眞似をして獨り無上に俥上で騷ぐ。

母も門口まで送つて出た。愈俥が出ようとする時、母は悲しさうに凝然と私の面を視て、「ぢや、お前ねえ、カカ身體を……」とまでは言ひ得たが、後が言へないで、涙になつた。

私は故意と附元氣の高聲で、「御機嫌よう！」と一禮すると、俥が出たから、其儘正向になつて了つたが、何だか後髮を引かれるやうで、俥が横町を出離れる時、一寸後を振向いて見たら、母はまだ門前に悄然と立つてゐた。

道々も故意と平氣な顏をして、往來を眺めながら、勉めて心を紛らしてゐる中に、馴染の町を幾つも過ぎて俥が停車場へ着いた。

まだ發車には餘程間があるのに、もう場內は一杯の人で、雜然と騷がしいので、父が又狼狽て出す。親しい友の誰彼も見送りに來て呉れた。其面を見ると、私は急に元氣づいて、例になく壯に饒舌つた。何だか皆が私の擧動に注目してゐるやうに思はれてならなかつた。無論友達は家で立際に私の泣いたことを知る筈はないから……

軈て發車の時刻になつて、汽車に乘込む。手持無沙汰な落着かぬ數分も過ぎて、汽笛が鳴る。私が窓から首を出して挨拶をする時、汽車は動出して、父の眼をしよぼつかせた顏がチラリとして直ぐ後になる、見えなくなる。もうプラットフォームを出離れて、白ペンキの低い柵が走る、其向うの後向きの二階家が走る、平家が走る。片側町になつて、人や俥が後へ走るのが可笑しいと、其を見てゐる中に、眼界が忽ち豁然と明るくなつて、田圃になつた。眼を放つて見渡すと、城下の町の、角か屋根は黒く、壁は白く、雜然と塊まつて見える向うに、生れて以來十九年の間、毎日仰ぎ瞻たお城の天守が遙に森の中に聳えてゐる。あゝ、家は彼の下だ……と思ふ時、初て故郷を離れることの心細さが

身に染みて、悄然としたが、悄然とする側から、妙に又氣が勇む。何だか籠のやうな狹隘しい處から、茫々と廣い明るい空のやうな處へ放されて飛んで行くやうで、何となく心臟の締るやうな氣もするが、又何處か暢びりと、急に脊丈が延びたやうな氣もする。

　かうした妙な心持になつて、心當に我家の方角を見てゐると、忽ち礑と物に眼界を鎖された。見ると、汽車は截割つたやうに急な土手下を行くのだ。

二十五

　中後れたが、私は法學研究のため上京するのだ。

　其頃の青年に、政治ではない、政論に趣味を持たん者は幾んど無かつた。私も中學に居る頃から其が面白くて、政黨では自由黨が大の贔屓であつたから、自由黨の名士が遊說に來れば、必ず其演說を聽きに行つたものだ。無論板垣さんは自分の叔父さんか何ぞのやうに思つてゐた。

　實際の政界の事情は些とも分つてゐなかつた。自由黨は如何いふ政黨だか、改進黨と如何違ふのだか、其樣な事は分つてゐるやうな風をして、實は些とも分つてゐなかつたが、唯初心な眼で局外から觀ると、何だか自由黨の人といふと、其人の妻子は乾度饑に泣いてるやうに思はれて、妻子が饑に泣く――人情忍び難い所だ。その忍び難い所を忍んで、妻や子を棄てて置いて、而して自分は壯者狂ひをするのぢやない、四方に奔走して、自由民權の大義を唱へて、探偵に跟隨られて、動もすれば腰繩で暗い冷たい監獄へ送られても、屈しない。偉いなあ！　と、かう思つてゐたから、それで好きだつた。

　好きは好きだつたが、しかし友人の誰彼のやうに、今直ぐ其眞似は爲度くない。も少し先の事にしたい。兎角理想といふものは遠方から眺めて憧憬れてゐると、結構な物だが、直ぐ實行しようとすると、種々都合の惡い事がある。が、それでは何だか自分にも薄志弱行のやうに思はれて、何だか心持が惡かつたが、或時何かの學術雜誌を讀むと、今の青年は自己の當然修むべき學業を棄てて、動もすれば身を政治界に投ぜんとする風ありと雖も、是れ以ての外の心得違なり、青年は須らく客氣を抑へて先づ大に修養すべし、大に修養して而して後大に爲す所あるべし、といふ議論が載つてゐた。私は嬉しかつた。早速此持重說を我物にして了つて、之を以て實行に逸る友人等を非難し、而して竊に自ら辯護する料にしてゐた。

　斯ういふ事情で此樣な心持になつてゐたから、中學卒業後尚ほ進んで何か專門の學問を修めようといふ場合には、勢ひ政治學に傾かざるを得なかつた。父が上京して何を遣りたいのだと言つた時にも、言下に政治學と答へた。飛んだ事だといつて、父が夫では如何しても承知して呉れなかつたから、ぢや、法學と政治學とは從兄弟同士だと思つて、法律をやりたいと言つて見た。法律學は其頃流行の學問だつたし、それに親戚に、縣の大書記官も法學士だつたし、私立だけれど法律學校出身で、現に私達の眼には立派な生活をしてゐる人が二人あつた。一人は何處だつたか記憶がないが、何でも何處かの地方で代言をして、藝者を女房にして贅澤な生活をしてゐて、今一人は內務省の屬官でこそあれ、好い處を勤めてゐる證據には、曾て歸省した時の服裝を見ると、地方では奏任官には大丈夫踏める素晴しい服裝で、何しても金の時計をぶら垂げてゐたと云ふ。それで父も法律なら好からうと納得したので、私は遂に法學研究のため斯うして汽車で上京するのだ。

二十六

東京へ着いたのは其日の午後の三時頃だつたが、使つて行くのは例の金時計をぶら垂げてゐたといふ、私の家とは遠縁の、變な苗字だが、小狐三平といふ人の家だ。招魂社の裏手の知れ難い家で、俥屋に散々こぼされて、辛と尋ね當てて見ると、門構は門構だが、潜門で、國で想像してゐたやうな立派な冠木門ではなかつた。潜りを開けて中に入ると、直ぐもう其處が格子戸作りの上り口で、三度四度案内を乞うて漸と出て來たのを見れば、顔や手足の腫起んだやうな若い女で、初は膝を突きさうだつたが、私の風體を見て中止にして、立ちながら、何ですといふ。

はてな、家を間違へたか知らと、一寸狼狽したが、標札に確に小狐三平とあつたに違ひないから、姓名を名告つて今着いた事を言ふと、若い女は怪訝な顔をして、一寸お待ちなさいと言つて引込んだぎり、仲々出て來ない。俥屋は早く仕て呉れといふ。私は氣が氣でない。が、前以て書面で、世話を頼む、引受けたと、話が着いてから出て來たのだし、今日上京する事も三日も前に知らせてあるのだから、今に伯母さんが——私は家では此家の大人を伯母さんと言ひつけてゐた——伯母さんが出て來て好いやうに仕て呉れると、其を頼みにしてゐると、久くして伯母さんではなくて、今の女が又出て來て、お上ンなさいといふ。荷物が有りますと、口を尖がらかすと、荷物が有るならお出しなさい、といふから、俥屋に手傳つて貰つて、荷物を玄關へ運び込むと、其女が片端から受取つて、ズン／＼何處かへ持つてツて了つた。

俥屋に極めた賃錢を拂はうとしたら、骨を折つたから増を呉れといふ。餘處の俥は風を切つて飛ぶやうに走る中を、のそ／＼と歩いて來たので、些とも骨なんぞ折つちやゐない。田舎者だと思つて馬鹿にするなと思つたから、厭だといつた。すると俥屋は何だか譯の分らぬ事を隙間もなくベラ／＼と饒舌り立ッて、段々大きな聲になるから、私は其大きな聲に驚いて、到頭言ひなり次第の賃錢を拂つて、東京といふ處は厭な處だと思つた。

俥屋との悶着を默つて衝立つて視てゐた女が、其が濟むのを待兼ねたやうに、此方へ來いといふから、其跟に隨いて玄關の次の薄暗い間へ入ると、正面の唐紙を女が此時ばかりは一寸膝を突いてスッと開けて、默つて私の面を視る。私は如何して好いのだか、分らなかつたから、

「中へ入つても好いんですか？」

と狼狽して案内の女に應接を乞うた時、唐紙の向うで、勿體ぶつた女の聲で、

「さあ、此方へ」

私は急に氣が改まつて、小腰を屈めて、注意深に中へ入つた。と、不意に簞笥や何や角や澤山な綺麗な道具が燦然と眼へ入つて、一寸目眩しいやうな氣がする中でも、長火鉢の向うに、三十だか四十だか、其樣な悠長な研究をしてる暇はなかつたが、何でも私の母よりもグッと若い女の人が、厚い座蒲團の上にチンと澄ましてゐる姿を認めたから、狼狽して卒然其處へドサリと膝を突くと、眞紅になつて、俯向きになつて、

「初めまして……」

二十七

伯母さん——といつては何だか調和が惡い、奥樣は一寸會釋して、

「今お着きでしたか？」

「は、」と固くなる。

「何ですか、お國では阿父さんも阿母さんもお變りは有りませんか？」

一は。」

と矢張固くなりながら、訥辯でポツリ〳〵と兩親の言傳を述べると、奧樣は聽いてゐるのか、ゐないのか、上調子ではあ〳〵と受けたが、軈に赤ちやけた出がらしの番茶を一杯注いで呉れたぎりで、一向構つて呉れない。氣が附いて見ると、座蒲團も呉れてない。

何時迄經つても主人が顏を見せぬので、

「伯父さんはお留守ですか？」

と不覺言つて了つた顏を、奧樣はジロリと尻眼に掛けて、

「主人はまだ役所から退けません。」

主人と殊に力を入れて言はれて、ぢや、伯父さんぢや不好かつたのか知ら、と思ふと、又私は眞紅になつた。

ところへバタ〳〵と緣側に足音がして、障子が端手なくガラリと開いたから、ヒヨイと面を擧げると、白い若い女の顏――とだけで、其以上の細かい處は分らなかつたが、何しろ先刻取次に出たのとは違ふ白い若い女の顏と衝着つた。是が噂に聞いた小狐の獨り娘の雪江さんだなと思ふと、私は我知らず又固くなつて、狼狽て俯向いて了つた。

「阿母さん〳〵、」と雪江さんは私が眼へ入らぬやうに挨拶もせず、華やかな若い艶のある美い聲で、「矢張私の言つた通りだわ。明日が樂だわ。」

「まあ、さうかい、」と喫驚した拍子に、今迄の奧樣がヒヨイと奧へ引込んで、矢張尋常の阿母さんになつて了つた。

「厭だあ私……だから此前の日曜にしようと言つたのに、阿母さんが……」といひながら座敷へ入つて來て、初て私が眼へ入つたのだらう。ジロ〳〵と私の風體を視廻して、膝を突いて、母の顏を見ながら、「誰方？」

「此方が何さ、阿父樣からお話があつた古屋さんの何さ。」

「さう。」

といつて雪江さんは此方を向いたから、此處らでお辭儀をするのだらうと思つて、私は又倒さになつて一禮すると、殘念ながら又眞紅になつた。

雪江さんも一寸お辭儀したが、直ぐと彼方を向いて了つて、

「私厭よ。阿母さんが彼樣な事言つて行かなかつたもンだから……」

「だつて仕方がなかつたンだわね。私だつて彼樣な窮屈な處へ行くよか、芝居へ行つた方が幾ら好いか知れないけど、石橋さんの奧樣に無理に誘はれて辭り切れなかつたンだもの。好いわね、其代り阿父樣に願つて、お前が此間中から欲しい〳〵てツてる彼ね？」と娘の面を視て、薄笑ひしながら、「彼を買つて頂いて上げるから……仕方がないから。」

「本當？」と雪江さんも急に莞爾々々となつた。「本當？　そんなら好いけど……ちよいと〳〵、其代り……」と小聲になつて、「ルビー入りよ。」

私は見ないでも雪江さんの擧動は一々分る。

「不好ません〳〵！　ルビー入りなんぞツて、其樣な贅澤な事が阿父樣に願へますか？」

「だつてえ……尋常のぢやあ……」と甘たれた嬌態をする。

「そんならお止しなさいな。尋常ので厭なら、何も強ひて買つて上げようとは言はないから。」

「あら！……」と忽ち機嫌を損ねて、「だから阿母さんは嫌ひよ……直あゝだもの。尋常のぢや厭だつて誰も言つてやしなくツてよ。」

「そんなら、其樣な不足らしい事お言ひでない。」

「へえ〳〵、恐れ入りました、」と莞爾して、「ぢや、尋常のでも好いから、乾度よ。ねえ、阿母さん、欺しちや厭よ。」

「誰がそんな――」
「まあ、好かつた！」と又莞爾して一寸私の面を見た。

二十八

私は先刻から存在を認めてゐられないやうだから、其隙に窃そり雪江さんの面を視てゐたのだ。雪江さんは私よりも一つ二つ、それとも三つ位年下かも知れないが、お出額で、圓い鼻で、二重顋で、色白で愛嬌が有ると謂へば謂ふやうなもの〻、左程に器量は美くなかつた。が、若い女は何處となく好くて、私がうッかり面を視てゐる所を、不意に其面が此方を向いた。だから、私は驚いた。驚いて又俯向いて、暫時……只通りの處を偸と視据ゑた。雪江さんは又更めて私の様子をジロ〳〵視てゐるやうだつたが、

「部屋は何處にするの？」

と阿母さんの方を向く。

「え？」と阿母さんは雪江さんの面を視て、「あの、何のかい？　玄關脇の四疊が好からうと思つて。」

「あんな處!?……」

と雪江さんが一寸驚くのを、阿母さんが眼に物言はせて、了解させて、

「彼處が一番明るくッて好いから。」

――さう、と、皆の意味を面から引込めて、雪江さんは澄まして了つた、

「おゝ、さうだッけ、」と阿母さんの奥様は想出したやうに私の方を向いて、「荷物がまだ其儘でしたッけね。今案内させますから、彼方へ行つて荷物の始末でもなさい。雪江、お前一寸案内して上げ。」

雪江さんが起つたから、私も起つて其跟に随いて今度は縁側へ出た。雪江さんは私より脊が低い。ふッくりした中背で、リボンの色は――彼は樺色といふのか知ら、若い女の後姿といふものは悪くないものだ。

縁側を後戻りして又玄關へ出ると、成程玄關脇に何だか一間ある。

「此處よ。」

と雪江さんが衝と其處へ入つたから、私も續いて中へ入つた。奥様は明るいといつたけれど、何だか薄暗い長四疊で、入るとブクッとして変な足應へだつたから、先ず下を見ると、疊は茶褐色だ。西に明取りの小窓がある。雪江さんが其を開けて呉れたので、少し明るくなつたから、偖は能く視廻すと、壁は元来何色だつたか分らんが、今の所では濁黒い変な色で、一ヶ處[illegible]を取繕つた痕が目立つて白い[illegible]を描いて、人[illegible]のやうに尾を曳いてゐる。[illegible]疵だらけで、[illegible]落書の[illegible]を留めて、腰張の新聞紙の破れた[illegible]から[illegible]した大[illegible]が[illegible]を出してゐる。天井を仰向いて視ると、貴方此方の雨漏りの痕が[illegible]したやうな染[illegible]めいた模様になつて浮出してゐて、何だか気味の悪いやうな部屋だ

「何時の間にか掃除したんだよ。それでも綺麗になつたわ、」と雪江さんは部屋の中を視廻してゐたが、ふと片隅に積んであつた私の荷物に目を留めて、「貴方の荷物ッて是れ？」と、臆面もなく人の面を視る。

私は狼狽て壁を視詰めて、

「然うです。」

「机が無いわねえ。私ン處に明いてるのが有るから、貸して上げませうか？」

「なに、好いです、明日買つて來るから、」と矢張壁を視詰めた儘で

「私要らないンだから、使つても好くッてよ。」

「なに、好いです、買つて來るから。」

「本當に好くッてよ、然う遠慮しないでも。今持つて來てよ、」と蝶の舞ふやうに飜然と身を翻

して、部屋を出て、姿は直ぐ見えなくなつたが、其處らで若い華やかな聲で、「其代り小さくツてよ。」といふのが聞えて、輕い足音がハタ〳〵と縁側を行く。

私は荷物の始末を忘れて、雪江さんの出て行つた跡をうッかり見てゐた。事に依ると、口を開いてゐたかも知れぬ。

二十九

荷物を解いてゐると、雪江さんが果して机を持つて來て呉れた。成程小さい——が、折角の志を無にするも何だから、借りて置く事にして、禮をいつて窓下に据ゑると、雪江さんが、それよか入口の方が明るくツて好からうといふ。入口では出入りの邪魔になると思つたけれど、折角の助言を聽かぬのも何だから、言ふ通りに据直すと、雪江さんが、矢張窓の下の方が好いといふ。で、矢張窓の下の方へ据ゑた。

早速私が書物を出して机の側に積むのを見て、雪江さんが、

「本箱も無かつたわねえ。私ン處に二つ有るけど、皆塞がつてて、貸して上げられないわ。」

「なに、買つて來るから、好いです。」

「そんならね、晩に勸工場で買つてらッしゃいな。」

「えゝ。」と私は聞直した、——勸工場といふものは、其時分まだ國には無かつたから。

「小川町の勸工場で。」

「勸工場ツて？……」

「あら、勸工場を知らないの？　まあ！……」

と雪江さんは吃驚した面をして、突然破裂したやうに笑ひ出した。娘といふものは壺口をして、氣取つて、オホヽと笑ふものとばかり思つてる人は訂正なさい。雪江さんは娘だけれど、口を一杯に開いて、アハハ〳〵と笑ふのだ。初め一寸仰向いて笑つて、それから俯向いて、身を揉んで、胸を叩いて苦しがつて笑ふのだ。私は眞紅になつて默つてゐた。

先刻取次に出た女は其後漸く下女と感付いたが、此時障子の蔭からヒョコリお龜のやうな笑面を出して、

「何を其樣に笑つてらッしゃるの？」

「だつて……アハヽヽ！……古屋さんが……アハヽヽ！……」

「あら、一寸、此方が如何かなすツたの？」

無禮者奴がヅカ〳〵部屋へ入つて來た、而して雪江さんの笑ひが止らないで、些とも要領を得ない癖に、譯も分らずに、一緒になつてゲラゲラ笑ふ。

其時ガラ〳〵といふ俥の音が門前に止つて、ガラッと門が開くと同時に、大きな聲で、威勢よく、

「お歸りッ！」

形勢は頓に一變した。下女は急に眞面目になつて、雪江さんを棄てて置いて、急いで出て行く。

雪江さんもまだ可笑しがりながら泪を拭き拭き、それでも大に落着いて後から出て行く。

主人の歸りとは私にも覺れたから、急いで起ち上つて……竊そり窓から覗いて見た。

歸つた人は丁度滑りを潛る所で、まづ黒の山高帽がヌッと入つて、續いて縞のズボンに靴の先がチラリと見えたかと思ふと、澁紙色した髭面が勃然仰向いたから、急いで首を引込めたけれど、間に合はなかつた。見附かつちやッた。

お歸り遊ばせ〳〵、と口々に喋々しく言ふ聲が玄關でした。奥樣——も何だか變だ、雪江さんの阿母さんの聲で何か言ふと、ふう、さうか、ふう〳〵、といふ聲は主人に違ひない。私の話に違ひない。

惡い事をした、窓からなンぞ覗くンぢやなかつたと、閉口してゐる所へ下女が呼びに來て、

愈閉口したか、仕方がない。どうせ志を立てて郷關を出た男兒だ、人間到る處で極りの惡い想ひする、と腹を据ゑて奥へ行つて見ると、もう歸つた人は和服に着易へて、曾て雪江さんの阿母さんが占領してゐた厚蒲團に坐つてゐる。私は誰でも逢ひつけぬ人に逢ふと、此度眞紅になる癖がある。で、此時も眞紅になつて、一度國で逢つた人だから、久濶といつて例の通り倒さになると、先方は心持首を動かして、若し聲に腰が有るなら、その腰と思ふ邊に力を入れて、「はい」といふ。父も母も宜しく申しましたといふと、又「はい」といふ。何卒何分願ひますといふと、一段聲を張揚げて、「はアい」といふ。

三十

晩餐になつて、其晩だけは私も奥で馳走になつた。花模樣の丸ボヤの洋燈の下で、隅ではあつたが、皆と一つ食卓に對ひ、若い雪江さんの罪の無い話を聽きながら、阿父さん阿母さんの莞爾々々した面を見て、賑かに食事して、私も何だか嬉しかつたが……

軈て食事が濟むと、阿父さんが又主人になつて、私に對つて徐々小むづかしい話を始めた。何でも物價高値の折柄、私の入れる食料では到底も賄ひ切れぬけれど、外ならぬ阿父さんの達ての頼みであるに因つて、不足の所は自分の方で如何にかする決心で、謂はゞ義俠心で引受けたのであれば、他の學資の十分な書生のやうに、悠長な考へでゐてはならぬ、何でも苦學すると思つて辛抱して、品行を愼むは勿論、勉強も人一倍するやうにといふ話で、聽いてゐても面白くも變哲もない話だから、雪江さんは話半に小さな欠びを一つして、起つて何處へか行つて了つた。私は少し本意なかつたが、やがて奥まつた處で琴の音がする。雪江さんに逢ひたい。雪江さんはまだ習ひ初めだと見えて、琴の音色は何だかボコン、ボコンベコン、ボコンといふやうに聞えて妙だつたけれど、私は鳴物は大好だ。何時聽いても惡くないと思つた。

で、遠音に雪江さんの琴を聽きながら、主人の勘定高い話を聽いてゐると、琴の音が食料に搦んだり、小遣に離れたりして、六圓がボコン、三圓でベコンといふやうに聞えて、何だか變で、話も能く分らなかつたが、分らぬ中に話は進んで、

「で、家も下女一人外使うて居らん。手不足ぢや。手不足の處で君の世話をするのぢやから、客扱などにはされん。そこで手紙で阿父さんにも能う言うて上げてあるから、君も心得てるぢやらうな？」

「は。」

「からして勉強の合間には、少し家事も手傳うて貰はんと困る。なに、手傳ふというても、大した事ぢやない。まあ、取次位のものぢや。また何ぞ角ぞ他に賴む事も有らうが、なに、皆大した事ぢやない。行つて貰へような？」

「は、何でも僕に出來ます事なら……」

「そ、そ、その僕が面白うない。僕といふのは同輩或は同輩以下に對うて言ふ言葉で、年長者に對うて言ふべき言葉でない、そんな事も注意して、僕といはずに私というて貰はんとな……」

「は……」　不知氣が附きませんで

「それから、も一つ言うて置きたいのは我々の呼方ぢや。もう君の年配では伯父さん伯母さんでは可笑しい。これは東京の習慣通り、矢張私の事は先生と言うたら好からう。先生、此方が御面會を願はれます、先生、お使に行つて參りませう——一向可笑しうない。先生というて貰はう。」

「は、承知しました。」

「で、私を先生といふ日になると、勢ひ家内の事は奥さんと言はんと權衡が取れん。先生に對する奥さんぢや。な、私が先生、家内が奥さん、——宜しいか？」

「は、承知しました。」

これで一通り訓戒が濟んで、後は自慢話になつた。先生も法律は晩學で、最初は如何にも辛かつたが、その辛いのを辛抱したお蔭で、今日では内務の一等屬、何とかの係長たることを得たのだといふ話を長々と聽かされて、私は痺が切れて、耐へ切れなくなつて、泣出しさうだつた。

辛と放免されて、暗黑を手探りで長四疊へ歸つて來ると、下女が薄暗い豆ランプを持つて來て、お前さん床を敷つたら忘れずに消すのですよと、朋輩にでも言ふやうに、粗率に言置いて行つて了つた。

國を出る時、此家の伯父といふの先生は、昔困つてゐた時、家で散々世話をして遣つた人だから、惡いやうにはして呉れまいと、父は言つた。私は矢張其氣で便つて來たのだが、便つて來てみれば事毎に案外で、あゝ、何だか妙な氣持がする。

私は家が戀しくなつた……

三十一

私は翌日早速錦町の某私立法律學校へ入學の手續を濟まして、其處の生徒になつて、珍らしい中は熱心に勉強もしたが、其中に段々怠り勝になつた。それには種々原因もあるが、第一の原因は家の用が多いからで。

伯父さんの先生——私は口惜しいから斯ういふ——伯父さんの先生は、用といつても大した事ぢやないと言つた。成程一命に關はるやうな大した事ではないが、併し其大した事でない用が間斷なく有る。まづ朝は下女と殆ど同時に覺されて、雨戸を明けさせられる。伯母さんの奥さんと分擔で座敷の掃除をさせられる。其が濟むと、今度は私一人の專任で、庭から、玄關先から、門前から、勝手口まで掃かせられる。少しでも塵芥が殘つてゐると、掃直しを命ぜられるから、丁寧に綺麗に掃かなきやならん。是が仲々の大役の上に、時々其處らの草むしり迄やらされて萎靡する事もある。

朝飯を濟ませて伯父さんの先生の出勤を見送つて了ふと、學校は午後だから、其迄は身體に一寸隙が出來る。其暇に自分の勉強をするのだが、其さへ時々急ぎの謄寫物など吩咐かつて全潰になる。

夕方學校から歸ると、伯父さんの先生はもう疾うに役所から退けてゐて、私の歸りを待兼ねたやうに、後から〳〵と用を吩咐ける。それ、郵便を出して來いの、やれ、お客に御飯を出すのだから、急いで仕出し屋へ走れのと、純臺所用の外は、何にでも私を使ふ。時には何の用だか知れもせぬ用に、手紙を持たせられて、折柄の雨降にも容赦なく、遠方迄使ひに遣られて、つく〴〵辛いと思つた事もある。さもなくば内で取次だが、此奴が餘處目には樂なやうで、行つて見ると仲々樂でない。漸く刑法講義の一枚も讀んだかと思ふと、もう頼まうと來る。聞えん風も出來ぬから、澁々起つて取次に出て、倒さになる。私のお辭儀は家内の物議を惹起して度々喧しく言はれてゐるけれど、面倒臭いから、構はず倒さになる。でも、相手が立派な商人か何かだと、取次榮がして好い。伯父さんの先生、其樣な時には、ふう〳〵と二つ返事で、早速お通し申せと來る。上機嫌だ。其代り其樣な客の歸る所を見ると、持つて來た物は屹度持つて歸らない。立派な髭の生えた人もまだ好い。そんなのに限つて尊大振つて、私が倒さになつて

も、首一つ動かさぬ代り、取次いでも小言を言はれる氣遣ひはない。反て伯父さんの先生狼狽てて迎へに飛んで出る事もある。一體六かしいのは風體の餘り立派でない人で、就中帽子を冠らぬ人は、之を取次ぐに大に警戒を要する。自筆の名刺か何かを出されて、之を持つて奥へ行くと、伯父さんの先生名刺を一見するや、面を顰めて、居ると言つたかといふ。居るものを居ないと言はれますか、と腹の中では議論を吹懸けながら、口へ出しては大人しく、はい、然う申しましたといふと、チョッと舌打して、此樣な者を取次ぐ奴が有るか、君は人の見別が出來んで困ると、小言を言つて、居ないと言つて返して了へといふ。私は脹れ面をして容易に起たない。すると、最終には澁々會ひはするが、後で金を持つてかれたといつて、三日も沸々言つてる。

沸々言つたつて關はないが、斯ういふ所を傍から看たら、誰が眼にも私は立派な小狐家の書生だ、伯父さんの先生の畜生、自分からが其氣で居ると見えて、或時人に對つて家の書生がといつてゐた。既に相手方が此始末だから、無理もない話だが、出入の者が皆矢張私を然う思つて、書生扱にする。不平で〳〵耐らないが、一々辯解もして居られんから、私は誠に據どころなく不承々々に小狐家の書生にされて了つて、而して月々食料を拂つてゐた。

が、今となつて考へて見ると、不平に思つたのは私が未だ若かつたからだ。監督を頼まれたから、引受けて、序に書生にして使ふ、――これが即ち親切といふもので、此の外に別に親切といふものは、人間に無いのだ。有るかも知れんが、私は一寸見當らない。

三十二

體好く書生にされて私は忌々しくてならなかつたが、しかし其でも小狐家を出て了ふ氣にはならなかつた。初の中は國元へも折々の便に不平を漏して遣つたが、其も後には弗と止めて了つた。さればといつて家での取扱が變つたのではない。相變らず書生扱にされて、小ッ甚くコキ使はれ、果は下女の擔任であつた靴磨きをも私の役に振替へられて了つた。無論其時は私は憤激した、餘程下宿しようかと思つた、が、思つたばかりで、下宿もせんで、爲せられる儘に靴磨きもして、而して國元へは其を隱して居た。少し妙のやうだが、なに、妙でも何でもない。私は實は雪江さんに惚れてゐたので。

惚れては居たが、夫だから雪江さんを如何しようといふ氣はなかつた。其時分は私もまだ初心だつたから、正直に女に惚れるのは男兒の恥辱と心得てゐた。女を弄ぶのは何故だか左程の罪惡とも思つて居なかつたが、苟も男兒たる者が女なんぞに惚れて性根を失ふなどと、そんな腐つた、そんなやくざな根性で何が出來ると息卷いてゐた。が、口で息卷く程には心で思つてゐなかつたから、自分もいつか其程に擯斥する戀に囚はれて了つたのだが、流石に囚はれたのを恥ぢて、明かに然うと自認し得なかつた氣味がある。から、若し其頃誰かが面と向つて私に然うと注意したら、私は屹度、失敬な、惚れなンぞするものか、と眞紅になつて怒つたに違ひない。が、實は惚れたとも思はぬ中に、いつか自分にも内々で、こッそり、次序なく惚れて了つてゐたのだ。

惚れた證據には、雪江さんが留守だと、何となく歸りが待たれる。家に居る時には心が藻脱けて雪江さんの身に添うてでも居るやうに、奥と玄關脇と離れてゐても、雪江さんが、今何處で何をしてゐるかは大抵分る。

雪江さんは宵ッ張だから、朝は大寢眠たがる。阿母さんに度々起されて、しどけない寢衣姿で、

膠の縁はになるのも氣にせず、厭さうな面をしてふら／＼と部屋を出て來て、指の先で無理に眼を押開け、瞼の裏を赤く反して見せて、「斯うして居ないと、附着いて了つてよ、」といつて皆を笑はせる。

雪江さんは一ツ橋のさる學校へ通つてゐたから、朝飯を濟ませると、急いで支度をして出て行く。髮は常も束髮だつたが、履物は脊が低いからッて、高い木履を好いて穿いてゐた。紫の包を抱へて、長い柄の蝙蝠傘を持つて出て行く後姿が私は好いッて堪らなかつたから、いつも其時刻には何喰はぬ顔をして部屋の窓から外を見てゐると、雪江さんは大抵は見られてゐるとは氣が附かずに、一寸お尻を撫でてから、裳を壞すまいと、低く屈んで徐と門を潛つて出て行くが、時とすると潛る前にヒョイと後を振向いて、私と顔を合せる事がある。さうすると、雪江さんは綺麗な前齒をチラリと見せて、何の意味もなく莞爾する。私も狹から出さうな莞爾を顔の何處へか押込めて、強ひて眞面目を作つてゐるのだから、雪江さんの笑顔に誘はれると、耐へ切れなくなつて不覺矢張莞爾する。からして莞爾に對するに莞爾を以てするのを一日の樂みにして、其をせぬ日は何となく物足りなく思つてゐた。いや、罪の無い話さ。

三十三

午後はいつも私が學校へ行つた留守に、雪江さんが歸つて來るので、掛違つて逢はないが、雪江さんは歸ると、直ぐ琴のお稽古に近處のお師匠さんの處へ行く。私は一度何かで學校が早く終つた時、態々廻道をして其前を通つて見た事がある。三味線のお師匠さんと違つて、琴のお師匠さんの家は格子戸作りでも、履脱に石もあつて、何處か上品だ。入口に琴曲指南山勢門人何とかの何枝と優しい書風で書いた札が掛けてあつた。窃と格子戸の中を覗いて見ると、赤い鼻緒や海老茶の鼻緒のすがつた綺麗な駒下駄が、三四足行儀よく並んだ中に、一足紫紺の鼻緒の可愛らしいのが片隅に遠慮して小さく[illegible]てゝある。之を見遁してなるものか、雪江さんのだ。大方駒下駄の主も奥の座敷に取繕つてチンと澄ましてゐるに違ひないと思ふと、そのチンと澄ましてゐる所が一目なりと見たくなつたが、生憎障子が閉切つてあるので、外からは見えない。唯琴の音がするばかりだ。稽古琴だから騷々しいばかりで趣は無いけれど、それでも琴は何處か床しい。雪江さんは近頃大分上手になつたけれど、雪江さんではないやうだ。大方まだ濟ないんだらう、なぞと思ひながら、ウッかり覗いてゐたが、ふッと氣が附くと、先刻から側で何處かの八つばかりの男の兒が青洟を啜り啜り、不思議さうに私の面を瞻上げてゐる。子供でも極りが惡くなつて、匆々に其處の門口を離れて歸つて來た事も有つたッけが

夕方は何だか混雜して落着かぬ中にも、一寸好い事が一つある。ランプ掃除は下女の役だが、夕方之に火を點けて座敷々々へ配るのは私の役だ。其時だけは私は公然雪江さんの部屋へ入る權利がある。雪江さんの部屋は奥の四疊半で、便所の側だけれど、一寸小綺麗な好い部屋だ。本箱だの、机だの、ガラス戸の箱へ入れた大きな人形だの、袋入りの琴だの、寫眞挾みだの、何だの角だの體裁よく列べてあつて、留守の中は整然と片附いてゐるけれど、歸つて來ると、書物を出放しにしたり、毛絲の球を轉かしたりして引散らかす。何かに紛れてランプ配りが晩くなつた時などは、もう夕闇が隅々へ行渡つて薄暗くなつた此部屋の中に、机に茫然頰杖を杖いてゐる雪江さんの眼鼻の定かならぬ顔が、唯圓々と微白く見える、何となく詩的だ。

「晩くなりました。」

とぶつきらぼうの私も、雪江さんだけには言ひつけぬお世辭も不圖出て、机の上の毛絲のランプ敷へ鶴とランプを載せると、
「いゝえ、まだ要らないわ。」
雪江さんは乾度斯らいふ。これが伯父さんの先生でも有らうものなら、口を尖がらかして、「もツと手廻して早うせにや不好！」と來る所だ。大した相違だ。だから、家で人間らしいのは雪江さんばかりだと言ふのだ。
其儘出て來るのが、何だか曲氣なくて、
「今日貴孃の琴のお師匠さんの前を通りました。一寸好い家ですね。」
「あら、さう、」と雪江さんがいふ。心持首を傾げて、「何時頃？」
「さうさなあ……四時ごろでしたか。」
「おや、私の行つてた時だわねえ。」
「えゝ、」と私は何だか極りが惡くなつて俛向いて了ふ。
此話が發展したら、如何な面白い話になるのだか分らんのだけれど、其樣な時に限つて生憎と、茶の間邊で伯母さんの奥さんの意地惡が私を呼ぶ、
「古屋さん！　早くランプを……何を愚圖々々してるンだらうねえ。」
殘惜しいけれど、仕方がない。其切で私は雪江さんの部屋を出て了ふ。

三十四

一番樂しみなのは日曜だ。それも天氣だと、朝から客が立込んで私は目が眩る程忙しいし、雪江さんもお友達が遊びに來たり、お友達の處へ遊びに行つたりして、私の事なンぞ忘れてゐるから、天氣は嫌だ。雨降に限る。就中伯父さんの先生は何か餘儀ない用事があつて朝から留守、雪江さんは一日家、といふ雨降の日が一番好い。
其樣な日には、雪江さんは乾度思切つて朝寢坊をして、私なンぞは徐々晝飯が戀しくなる時分に、漸う起きて來る。顏を洗つて、御飯を喰べて、其から長いこと掛つて髮を結ふ。結ひ了ふ頃は最う午砲だけれど、お晝はお腹が滿くて喰べられない、私廢してよ、といふ。
部屋で机の前で今日の新聞を一寸讀む。大抵續物だけだ。それから編棒と毛絲の球を持出して、暫くは默つて切々と編物をしてゐる。私が用が有つて部屋の前でも通ると、「古屋さん、これ何になると思つて？」と編掛けを翳して見せる。私が見たンぢや、何だか圓い變なお猪口のやうな物で、何になるのだか見當が附かないから、分らないといふと、でも、まあ、當てて見ろといふ。熟考の上、「巾着でせう？」といふと、「いゝえ、」と頭を振る。巾着でないとすると、手袋には小さし、靴下でもなささうだし、「あゝ、分つた！　匂袋だ、」と圖星を言つた積でいふと、雪江さんは吃驚して、「まあ、可厭だ！　匂袋だなンぞッて其樣な物は編物にやなくッてよ。」匂袋でもないとすると、もう私には分らない。降參して了ふと、雪江さんは莞爾ともしないで、「これ、人形の手袋。」
雪江さんは一つ事を何時迄もしてゐるのは大嫌ひだから、私がまだ自分の部屋の長四疊へ歸るか歸らぬ中に、もう編物を止めて琴を演つてゐる。近頃では最うポコンのペコンでも無くなつた。斯うして聽いてゐると、如何しても琴に違ひないと、感心して聽惚れてゐると、十分と經たぬ中に、ジャカ〳〵ジャンと引掻廻すやうな音がして、其切バタリと、琴の音は止む……と、もう茶の間で若い賑かな雪江さんの聲が聞える。
忽ちドタ〳〵〳〵と縁側を駈けて來る音がする。下女の松に違ひない。後からバタ〳〵と追

覺けて來るのは、雪江さんに極つてゐる。玄關で追付いて、何を如何するのだか、キャッ／＼と騷ぐ。松が敵はなくなつて、私の部屋の前を駈脱けて臺所へ逃込む。雪江さんが後から追覺けて行つて、また臺所で一騷動やる中に、ガラ／＼ガチャンと何かが壞れる。阿母さんが茶の間から大きな聲で叱ると、臺所は急に火の消えたやうに闃寂となる。

私は獨に居る時分は、お向うのお芳ちゃん——子供の時分に能く飯事をして遊んだ、あのお芳ちゃんが好きだつた。お芳ちゃんは小さい時には活潑な兒だつたが、大きくなるに隨れて、大層落着いて品の好い娘になつて、私は其樣子が何となく好きだつたが、雪江さんはお芳ちゃんとは正反對だ。が、雪江さんも惡くない、なぞと思ひながら、茫然机に頰杖を突いてゐる背中を、誰だかワッといつてドンと撞く。喫驚して振反ると、雪江さんがキャッ／＼といひながら、逃げて行くしどけない後姿が見える。私は思はず莞爾となる。

莞爾となつた儘で、尙ほ雪江さんの事を思續けて、果は思ふ事が人に知れぬから、好いやうなものの、怪しからん事を内々思つてゐると、茶の間の緣側あたりで、オーといふ例の艷のある美い聲が聞える。初は地聲の少し大きい位の處から、段々に甲高に競上げて行つて、絲のやうに細くなつて、何かを突脫けて、遠い／＼何處かへ消えて行きさうになつて、又段々競下つて來て、果はパッと擴げたやうな太い聲になつて、餘念がない。雪江さんが肉聲の練習をしてゐるのだ。

三十五

私は其時分吉田松陰崇拜であつた。將來の自由黨の名士を以て自任してゐるのなら、グラッドストンかコブデン。ブライトあたりに傾倒すべきだが、如何した機だつたか、松陰先生に心醉して了つて、書風まで力めて其人に似せ、窃に何回猛士とか僭して喜んでゐた迄は罪がないが、困つた事には、斯うなると世間に餘り偉い人が無くなる。誰を見ても、先づ松陰先生を差向けて見ると、一人として手應のある人物はない。皆一溜りもなく敗亡する。それを松陰先生の後に隱れて見てゐると、相手は松陰先生に負けるので、私に負けるのではないが、何となく私が勝つたやうな氣がして、大臣が何だ、皆門下生ぢやないか。自由黨の名士だつて左程偉くもない。況や學校の先生なンぞは只の學者だ、皆下らない、なぞと鼻息を荒くして、獨りで威張つてゐた。私なぞの理想はいつも人に迷惑を懸ける許りで、一向自分の足になつた事がないが、側から見たら嘸苦々しい事であつたらう。兎も角もかうして松陰先生大の崇拜で、留魂錄は諳誦してゐた程だつたが、しかし此松陰崇拜が、不思議な事には、些とも雪江さんを想ふ邪魔にならなかつたから、其時分私の眼中は天下唯松陰先生と雪江さんと有るのみだつた。

で、いつも學校の歸りには此二人の事を考へ考へ歸るのだが、或日——たしか土曜日だつたかと思ふ、土曜日は學校も早仕舞なので、三時頃にさうして二人の事を考へながら歸つて見ると、主人夫婦はいつも茶の間だのに、其日は茶の間に居ない。書齋かと思つて書齋へ行かうとすると、緣側の盡頭の雪江さんの部屋で、雪江さんの聲で、

「誰？」

といふ。私は思はず立止つて、

「私です。」

「古屋さん？」

といふ聲と共に、部屋の障子が颯と開いて、雪江さんが面だけ出して、

「今日は皆留守よ。」

「え？」と私は耳が信ぜられなかつた。

「阿父さんも阿母さんもね、先刻出懸けてよ。」

「さうですか、」と何気なく言つたが、内々は何だか急に嬉しくなつて来て、

「松は？」

「松はお湯へ行つて未だ帰つて来ないの。」

「ぢや、貴嬢お一人？」

「えゝ……一寸入らッしやいよ、此処へ。好い物があるから。」

と手招をする。斯うなると、松陰先生崇拝の私もガタ〳〵と震ひ出した。

三十六

前にも断つて置いた通り、私は曾て真剣に雪江さんを如何かしようと思つた事はない。それは決して無い、度々怪しからん事を思つて、人知れず其を楽しんで居たのは事実だけれど、勧業債券を買つた人が当籤せぬ先から胸算用をする格で、ほんの妄想だ。が、誰も居ぬ留守に、一寸入らッしやいよ、と手招されて、驚破こそと思ふ拍子に、自然と体の震ひ出したのは、即ち武者震ひだ。千載一遇の好機会、逸してなるものか、といふやうな気になつて、必死になつて武者震ひを喰止めて、何喰はぬ顔をして、呼ばれる儘に雪江さんの部屋の前へ行くと、屈んでゐた雪江さんが、其時莞爾顔を挙げた。見ると、何だか口一杯頬張つてゐて、私の面を見て何だか言ふ、言ふ事は能く解らなかつたが、側に焼芋が山程盆に載つてゐたから、大凡で察して、礼を言つて、一寸躊躇したが、思切つて中へ入つて了つた。

雪江さんはお薩が大好物だつた。私は好物さはないが、何故だか年中空腹を感じてゐるから、食後だつて十切位はしてやる男だが、此時ばかりは芋どころでなかつた。切に勧められるけれど、難有う〳〵とばかり言つてて、手を出さなかつた。何だかもう喝となつて、夢中で、何だか霧にでも包まれたやうな心持で、是から先は如何なる事やら、方角が分らなくなつたから、彷徨してゐると、

「貴方は遠慮深いのねえ。男ツて然う遠慮するもンぢやなくツてよ。」

と何にも知らぬ雪江さんが焼芋の盆を突付ける。私は今其処どころぢやないのだが、手を出さぬ訳にも行かなくなつて手を出すと、生憎手先がぶる〳〵と震へやがる。

「如何して其様に震へるの？」

と雪江さんが不審さうに面を視る。私は愈々狼狽して、又真紅になつて、何だか訳の分らぬ事を口の中で言つて、周章て頬張ると、

「あら、皮ごと喰べて……皮は取つた方が好いわ。」

「なに、構はんです……」仕方が無いから、皮ぐるみムシャ〳〵喰りながら、「何は……何処へ入らしッたンです？」

「吉田さんへ、」と雪江さんは皮を剥く手を止めて、「私些とも知らなかつたけど、今晩が結子さんのお輿入なんですッて。そら、媒人でせう家は？ だから、阿父さんも阿母さんも早めに行つてないと不好つて、先刻出て行つたのよ。」

これで漸く合点が行つたが、それよりも爰に一寸吹聴して置かなきやならん事がある。私は是より先春色梅暦といふ書物を読んだ。一体小説が好きで、国に居る時分から軍記物や仇討物は耽読してゐたが、まだ人情本といふ面白い物の有ることを知らなかつた。これの知初めが即ち此春色梅暦で、神田に下宿してゐる友達の処から、松陰像と一緒に借りて来て読んだが、非常に面白かつた。此梅暦に拠ると、斯ういふ場合に男の言ふべき文句がある。何でも貴嬢は浦山敷思はないかとか、何とか、ヒョイ

と輕く戯談を言つて水を向けるのだ。思切つて私も一つ言つて見ようか知ら……と思つたが、何だか、どうも……ソノ、極りが惡い。

「大變立派なお支度よ。何でもね、簞笥が四棹行くンですつて。それからね、まだ長持だの、挾箱だの……」

あゝ、もう駄目だ。長持や挾箱の話になつちや大事去つた、と後悔しても最う追付かない。

雪江さんは、何處が面白いのだか、その長持や挾箱の話に夢中になつて了つて、其から其と話し續けて、盛返したくも盛返す隙がない。仕方が無いから、今に又機會も有らうと、雪江さんの話は浮の空に聞いて、只管其機會を待つてゐると、忽ちガラッと障子が開いて、

「あら、おたのしみ！……」

喫驚して振反ると、下女の松めが何時戻つたのか、見ともない面を罅裂れさうに莞爾つかせて立つてやがる。私は徐桿飛蒐つて横面をグヮンと毆曲げてやらうかと思つた。腹が立つて腹が立つて……

三十七

千載一遇の好機會も松に邪魔を入れられて滅茶滅茶になつて了つたが、松が交つて二つ三つ話をしてゐる中に、間もなく夕方になつた。夕方は用が有るから、三人ばら〳〵になつて、私はランプ配りやら、戸締りやら、一切り立働いて、例の通り部屋で晩飯を濟すと、また身體に暇が出來た。雪江さんは一番先に御飯を喰べて、部屋へ籠つた儘音沙汰がない。唯松ばかり後仕舞で忙しさうで、臺所で器物を洗ふ水の音がポシャ〳〵と私の部屋へ迄聞える。

私は部屋で獨りランプを眺めて徒然としてゐるやうで、心は仲々忙しかつた。婚禮に呼ばれて行つたとすると、主人夫婦の歸るのには未だ間が有る。歸らぬ中に今一度雪江さんと差向ひになりたい。差向ひになつて何をするのだか、それは私にも未だ極らないが、兎に角差向ひになりたい、是非なりたい、何か雪江さんの部屋へ行く口實はないか、口實は……と藻掻くけれど、生憎口實が看附からない。うづ〳〵して獨りで焦心てゐると、ふと緣側にハタリ〳〵と足音がする。其足音が玄關へ來る。確に雪江さんだ。部屋の前を通越して臺所へ行つたが、それとも萬一障子が開くかと、成行を待つ間の一分に心の臟を縮めてゐると、素破、障子がスッ〳〵と……開きかけて、ツッと止つたのを其儘にして、雪江さんが隙間から覗込みながら、

「勉強？」

と一寸首を傾げた。これが何を聞く時でも雪江さんの爲る癖で、看慣れては居るけれど、私は常も可愛らしいと思ふ。不斷着だけれど、荒い縞の着物に飛白の羽織を着て、華美な帶を締めて、障子に掴まつて斜に立つた姿も何となく目に留まる。

あゝ求むる者に與へられたのだ。神よ……といひたいやうな氣になつて、無論莞爾々々となつて、

「いゝえ……まあ、お入ンなさい。」

「ぢや、私話して行くわ。奥は一人で淋しいから。」

珍客々々！　之を優待せん法はない。よ、よ、と雪江さんが掛聲をして障子を明けようとするけれど、開かないのを、私は飛んで行つて力任せにウンと引開けた。何だか領元からぞく〳〵する程嬉しい。

生憎と火鉢は私の部屋には無かつたけれど、今迄敷いてゐた赤ケットを、四つに疊んだのを中央へ持出して、其でも裏反にして勸めると、遠慮するのか、それとも小汚ないと思つたのか、敷いて呉れないから、私は默つて部屋を飛出した。雪江さんは後で定めて喫驚してゐたらう

が、私は雪江さんの部屋へ座蒲團を取りに行つたので、是だけは我ながら一生の出來だつたと思ふ。

膳が出來ると、雪江さんが、

「貴方、御飯が喰べられて？　私何ぼ何でも喰べられなかつたわ、餘り先刻詰込んだもンだから。」

と微笑する。何時見ても綺麗な齒並だ。

私も矢張莞爾して、

「私も喰べられませんでした……」

大嘘！　實は平生の通り五杯喰べたので。

雪江さんは國産れでも東京育ちだから、

「……にもお芋か有つて？」

「有りますとも。」

「おや、歸つても不自由はないわねえ。」

と又微笑する。

私も高笑ひをした。雪江さんの言草が可笑しかつたばかりぢやない、實は胸に餘る嬉しさやら、何やら角やら取交ぜて高笑ひしたのだ。

それから國の話になつて、國の女學生は如何な風をしてゐるの、英語は何位の程度だの、洋樂は流行るかのと、雪江さんは其樣な事ばかり氣にして聞く。私は大事の用を控へてゐるのだ。其所ぢやないけれど、仕方がないから相手になつてゐると、チョツ、また松の畜生が邪魔に來やがつた。

三十八

松が來て私はうんざりして了つたが、雪江さんは反て差向ひの時よりはずみ出して、果は松の方へ膝を向けて了つて、松ばかりを相手に話をする。私は居るか居ないか分らんやうになつて了つた。初は少からず不平に思つたが、しかし雪江さんを觀てゐるのには、反て此方が都合が好い。で、母屋を仕切つて、庇で滿足して、雪江さんの白いふツくりした面を飽かず眺めて、二人の話を聽いてゐると、松も能く饒舌るが、雪江さんも仲々負けてゐない。話は詰らん事許りで、今度開店した小間物屋は安賣だけれど品が惡いの、お湯屋のお神さんのお腹がまた大きくなつて來月が臨月だの、八百屋の猫が兒を五疋生んで二疋喰べて了つたさうだのと、要するに愚にも附かん話ばかりだが、しかし雪江さんの樣子が好い。物を言ふ時には絶えず首を搖かす、其度にリボンが飄々と一緒に搖く。時々は手眞似もする。今朝結つた束髪がもう大分亂れて、後毛が頬を撫でるのを蒼蠅さうに掻上げる手附も好い。其樣な時には彼は友禪メリンスといふものだか、縮緬だか、私には分らないが、何でも赤い模樣や黄ろい形が點々と附いた華美な襦袢の袖口から、少し紅味を帶びた、白い、滑こさうな、柔かさうな腕が、時とすると二の腕まで露はれて、も少し持上げたら腋の下が見えさうだと、氣を揉んでゐる中に、又舊の位置に戻つて了ふ。雪江さんは處女だけれど、乳の處がふツくりと持上つてゐる。大方乳首なんぞは薄赤くなつてるばかりで、有るか無いか分るまい……なぞと思ひながら、雪江さんの面ばかり見てゐると、いつしか私は現實を離れて、恍惚となつて、雪江さんが何だか私の……妻でもない、情人でもない……何だか斯う其樣な者に思はれて、兎に角私の物のやうに思はれて、今は斯うして松といふ他人を交ぜて話をしてゐるけれど、今に時刻が來れば、二人一緒に斯う奧まつた座敷へ行く。と、もう其處に床が敷つてゐる。夜具も郡内か何かだ。私が着物を脱ぐと、雪江さんが後からフハリと寢衣を着せて呉れる。今晩は寒いわねえとか雪江さんがいふ。む、む、寒いなあとか私も言つて、急いで帶をグル／＼と卷いて床へ潜り込む。雪江さんが私の脱棄を疊んでゐる。其樣な事は好加減にして、早く來て寢なと私がいふ。あいといつて

雪江さんが私の面を見て微笑する……
「ねえ、古屋さん、然うだわねえ？」
と雪江さんが此方を向いたので、私は喫驚して眼の覺めたやうな心持になつた。何でも何か私の同意を求めてゐるのに違ひないから、何だか仔細は分らないけれど、
「さうですとも……」
と跋を合はせる。
「そら、御覽な。」
と雪江さんは又松の方を向いて、又話に夢中になる。
私はホッと溜息をする。今の續きを其儘にして了ふのは惜しい。もう一度、幻想でも何でも構はんから、もう一度、今の續きを考へて見たいと思ふけれど、もう氣が散つて其心持になれない。仕方がないから、默つて話を聽いてゐる中に、又いつしか恍惚と腑が脫けたやうになつて、雪江さんの面が右を向けば、私の面も右を向く。雪江さんの面が左を向けば、私の面も左を向く。上を向けば、上を向く、下を向けば下を向く……

三十九

パタリと話が休んだ。雪江さんも默つて了ふ、松も默つて了ふ。何處でか遠方で犬の啼聲が聞える。所謂天使が通つたのだ。雪江さんは欠びをしながら、序に伸もして、
「もう何時だらう？」
「まだ早いです、まだ……」
と私が狼狽て無理に早い事にして了ふ心を、松は察しないで、
「もう九時過ぎたでせうよ。」
「阿父さんも阿母さんも遲いのねえ。何を爲てるンだらう？」と又欠びをして、「あゝ〱、古屋さんの勉强の邪魔しちやツた。私もう奥へ行くわ。」
私が些とも邪魔な事はないといつて止めたけれど、最う斯うなつては留らない、雪江さんは出て行つて了ふ。松も出て行く。私一人になつて了つた。詰らない……
ふと雪江さんの座蒲團が眼に入る……之を見ると、何だか搜してゐた物が看附かつたやうな氣がして、卒然引浚つて、急いで起上つて雪江さんの跡を追つた。
茶の間の先の暗い處で雪江さんに追付いた。
「なあに？……」
と雪江さんの喫驚したやうな聲がして、大方振向いたのだらう、面の輪郭だけが微白く暗中に見えた。
「貴孃の座蒲團を持つて來たのです。」
「あ、さうだッけ。忘れちやツた。爰へ頂戴、」
と手を出したやうだつた。
私は狼狽て座蒲團を後へ匿して、
「好いです、私が持つてくから。」
「あら、何故？」
「何故でも……好いです……」
「さう……」
と何だか變に思つた樣子だつたが、雪江さんは又暗中を動き出す。暗黑で能くは分らないけれど、其姿が見えるやうだ。私も跡から探足で行く。何だか氣が焦る。今だ、今だ、と頭の何處かで喚く聲がする。如何か爲なきやならんやうな氣がして、むず〱するけれど、何だか可怕くて如何も出來ない。咽喉が乾いて引付きさうで、思はずグビリと堅唾を呑んだ……と、段々明るくなつて、雪江さんの姿が瞭然明るみに浮出す。もう雪江さんの部屋の前へ來て、雪江さんの姿は衝と障子の中へ入つて了つた。
其を見ると、私は萎靡した。惜しいやうな氣のする一方で、何故だか、まづ好かつたと安心した氣味もあつた。で、續いて中へ入つて、持つて來た座蒲團を机の前に敷いて、其處を退く

と、雪江さんは禮を言ひながら、入替つて机の前に坐つて、
「遊んでらッしやいな。」
と私の面を瞻上げた。えゝとか、何とかいつて跼蹐してゐる私の姿を、雪江さんはジロ〳〵視てゐたが、
「まあ、貴方は此地へ來てから、餘程大きくなつたのねえ。今ぢや私とは屹度一尺から違つてよ。」
「まさか……」
「あら……屹度違ふわ。一寸然うしてらッしやいよ……」
といひながら、衝と起つたから、何を爲るのかと思つたら、ツカ〳〵と私の前へ來て直と向合つた。前髪が額に觸れさうだ。紛と好い匂が鼻を衝く。
「ね、ほら、一尺は違ふでせう。」と愛度氣ない白い顔が何氣なく下から瞻上げる。
私はわな〳〵と震ひ出した。目が見えなくなつた。胸の鼓動は臓へまで響く。息が逼んで、足が竦んで、もう凝として居られない。抱付くか、逃出すか、二つ一つだ。で、私は後の方針を執つて、物をも言はず卒然雪江さんの部屋を逃出して了つた……

四十

何故彼時私は雪江さんの部屋を逃出したのだといふと、非常に怕ろしかつたからだ。何が怕ろしかつたのか分らないが、唯何かなしに非常に怕ろしかつたのだ。
生死の間に一線を劃して、人は之を越えるのを畏れる。必ずしも死を忌むからではない。死は止むを得ぬと觀念しても、唯此一線が怕ろしくて越えられんのだ。私の逃出したのが矢張それだ。女を知らぬ前と知つた後との分界線を俗に皮切りといふ。私は性慾に驅られて此線の手前迄來て、これさへ越えれば望む所の性慾の滿足を得られると思ひながら、此線が怕ろしくて越えられなかつたのだ。越えたくなくて越えなかつたのではなくて、越えたくても越えられなかつたのだ。其後幾年か經つて再び之を越えむとした時にも矢張怕ろしかつたが、其時は酒の力を藉りて、半狂氣になつて、漸く此怕ろしい線を踏越した。踏越してから酔が醒めると、何とも言へぬ厭な心持になつたから、又酒の力を藉りて強ひて纔に其不愉快を忘れてゐた。此樣な厭な想ひをして迄も性慾を滿足させたかつたのだ。是は相手が正當でなかつたから、即ち賤女であつたからかといふに、さうでない。相手は正當の新婦と相知る場合にも、人は大抵皆然うだと云ふ。殊に婦人が然うだといふ。何故だらう？
之と縁のある事で今一つ分らぬ事がある。人は皆隠れてエデンの果を食つて、人前では是を語ることさへ恥ずる。私の樣に斯うして之を筆にして憚らぬのは餘程力むから出來るのだ。何故だらう！ 人に言はれんやうな事なら、爲んが好いぢやないか？ 敢てするなら、誰の前も憚らず言ふが好いぢやないか？ 敢てしながら恥ずるとは矛盾でないか？ 矛盾だけれど、矛盾と思ふ者も無いではないか？ 如何いふ譯だ
之を靈肉の衝突といふか？ しからば、靈肉一致したら、如何なる？ 男女相知るのを怕ろしいとも恥かしいとも思はなくなるのか？ 畜生と同じ心持になるのか？
トルストイは北方の哲人だと云ふ。此哲人は如何な事を言つてゐる。クロイツエル、ソナタの跋に、理想の完全に實行し得べきは眞の理想でない。完全に實行し得られねばこそ理想だ。不犯は基督教の理想である。故に完全に實行の出來ぬは止むを得ぬ、唯基督教徒は之を理想

として終生追求すべきである、と言つて、世間の夫婦には成るべく兄妹の如く暮らせと勸めてゐる。

何の事だ？　些とも分らん。完全を求めて得られんなら、悶死すべきでないか？　不犯が理想で、女房を貰つて、子を生ませてゐたら、普通の墮落に輪を掛けた墮落だ。加之も一旦貰つた女房は去るなと言ふでないか？　女房を持つのが墮落なら、何故一念發起して赤の他人になッ了へといはぬ。一生離れるなとは如何いふ理由だ？　分らんぢやないか？

今食ふ米が無くて、ひもじい腹を抱へて考へ込む私達だ。そんな伊勢屋の隱居が心學に凝り固まつたやうな、そんな暢氣な事を言つて生きちやゐられん！

四十一

其後間もなく雪江さんのお婿さんが極つた。お婿さんが極ると、私は何だか雪江さんに欺かれたやうな心持がして、口惜しくて耐らなかつたから、國では大不承知であつたけれど、口實を設けて體よく小狐の家を出て下宿して了つた。

馬鹿な事には下宿してから、雪江さんが萬一鬱いではゐぬかと思つて、態々樣子を見に行つた事が二三度ある。が、雪江さんはいつも一向鬱いで居なかつた。反てお婿さんが極つて怡々してゐるやうだつた。それで私も愈忌々しくなつて、もう餘り小狐へも足踏せぬ中に、伯父さんが去る地方の郡長に轉じて、家族を引纒めて赴任して了つたので、私も終に雪江さんの事を忘れて了つた。これでお終局だ。

餘り平凡だ、下らない。こんなのは單純な性慾の發動といふもので、戀ではない、戀はも少と高尚な精神的の物だと、高尚な精神的の人は言ふかも知れん。然うかも知れん。唯私のやうな平凡な者の戀はいつも斯うだ。先づ無意識或は有意識に性慾が動いて滿足を求めるから、理性や趣味性が動いて其相手を定めて、初て其處に戀が成立する。初から性慾の動かぬ場合に戀はない。異性でも親兄弟に戀をせぬのは其爲だ。青年の時分には、性慾が猛烈に動くから、往々理性や趣味性の手を待たんで、自分と盲動して撞着つた者を直ぐ相手にする。私の雪江さんに於けるが、卽ち殆ど其だ。私共の戀の本體はいつも性慾だ。性慾は高尚な物ではないが、下劣な物とも思へん。中性だ、インヂフェレントの物だ。私共の戀の下劣に見えるのは、下劣な人格が反映するので、本體の性慾が下劣であるのではない。

で、私の性慾は雪江さんに戀せぬ前から動いてゐた。から、此とても不自然でも何でもないが、雪江さんといふ相手を失つた後も、私の戀は依然として胸に殘つてゐた。唯相手のない戀で、相手を失つて彷徨してゐる戀で、其本體は矢張滿足を求めて得ぬ性慾だ。露骨に言つて了へば、誠に愛想の盡きた話だが、此猛烈な性慾の滿足を求むるのは、其時分の私の生存の目的の——全部とはいはぬが、過半であつた。

これは私ばかりでない、私の友人は大抵皆然うであつたから、皆此頃からポツ〳〵所謂「遊び」を始めた。私も若し學資に餘裕が有つたら、矢張「遊」んだかも知れん。唯學資に餘裕がなかつたのと、神經質で思切つた亂暴が出來なかつたのとで、遊びたくも遊び得なかつた。

友人等は盛に「遊」ぶ、亂暴に無分別に「遊」ぶ。其を觀てゐると、羨ましい。が、弱い性質の癖に、極めて負惜しみだつたから、私は一向羨ましさうな顏もしなかつた。年長の友人が誘つても私が應ぜぬので、調戯に、私は一人で墮落して居るのだらうといふやうな事を言つた。恥かしい次第だが、推測通りであつたので、私

は嘲となつた、血相を變へて、激論を始めて、果は腕力までして、遂に其友人とは絶交して了つた。

斯うして友人と喧嘩迄して見れば、意地としても最う逆はれない。で、不本意ながら謹直家になつて、而して何ともえたいの知れぬ、謂はれのない煩悶に囚はれてゐた。

四十二

あゝ、今日は又頭がふら／＼する。此樣な日にや碌な物は書けまいが、一日拔くも殘念だ。向鉢卷でヤッつけろ！

で、私は性慾の滿足を求めても得られなかつたので、煩悶してゐた。何となく世の中が悲觀されてならん。友人等は遊ぶ時には大に「遊」んで、勉強する時には大に勉強して、何の苦もなく、面白さうに、元氣よく日を送つてゐる。それを見てゐると、私は癪に觸つて耐らない。私の煩悶して苦しむのは、何となく友人等の所爲のやうに思はれる。で、責めてもの腹慰せに、薄志の弱行のと口を極めて友人等の公然の墮落を罵つて、而して私は獨り超然として、内々で墮落してゐた。若し友人等の墮落が陽性なら、私の墮落は陰性だつた。友人等の墮落が露骨で、率直で、男らしいなら、私の墮落は……あゝ、何と言はう？ 人間の言葉で言ひやうがない。私は畜生だつた……

が、こつそり一人で墮落するのは餘り沒趣味で、どうも夫では趣味性が滿足せぬ。どうも矢張り異性の相手が欲しい、が、其相手は一寸得られぬので、止むを得ず當分文學で其不足を補つてゐた。文學なら人聽も好い。これなら左程錢も入らぬ。私は文學を女の代りにして、文學を以て墮落を潤色してゐたのだ。

私の謂ふ文學は無論美文學の事だ、殊に小說だ。小說は一體如何いふものだか、知らん、唯私の眼に映ずる小說は人間の墮落を潤色するものだ。通人の話に、道樂の初は唯色を漁する、骨肓に入ると、段々贅澤になつて、唯色を漁するのでは面白くなくなる、惚れたとか腫れたとか、情合で異性と絡んで、唯の漁色に趣を添へたくなると云ふ、其處だ、其處が即ち文學の需要の起る所以だ。少くも私は然うであつた。で、此目的で、最初は小狐に居た頃喰付いた人情本を、引續き耽讀してみたが、數を累ねると、段々贅澤になつて、もう人情本も鼻に附く。同じ性慾の發展の描寫でも、も少し趣味のある描寫を味つてみたい。そこで、種々と小說本を渉獵して、終に當代の大家の作に及んで見ると、流石は明治の小說家だ、性慾の發展の描寫が巧に人生觀などで潤色されてあつて、趣味がある、面白い。斯ういふ順序で私の思想で墮落すれば[illegible]骨肓に入つて、終には西洋へ迄手を出して、サッカレーだ、ゾラだ、ユゴーだ、ツルゲーネフだ、トルストイだ、といふ人達の手を借りて、人並にしてゐれば、[illegible]の性慾を無理に不自然な靈肉の[illegible]にして、[illegible]の著書中に散見するやうな色情狂に想像で成濟して、而して獨り高尙がつてゐた。

いや、獨り高尙がつてゐたのでない。それには同氣相求めて友が幾人も出來た。同縣人で豫備門から後文科へ入つた男が有つたが、私は殊に其感化を受けた。あゝ、昔自分が惡かつたので、人を怨んでは濟まないが、私は今でも此男に逢ふと、何とも言へぬ厭な心持になる。儘になるなら刺違へて死んで了ひたく思ふ事もある。

四十三

私が感化を受けた友といふのは私より一つ

二つ年上であつた。文學が專門だから、文學書は私より餘計讀んでゐたといふ丈で、何でもない事だが、其を私は大層偉いやうに思つてゐた。まだファウストを讀まぬ時、ファウストの話を聴かされる。なに、友は愚にも附かん事を言つてゐるのだが、其愚にも附かん事を、人生だ、智慾だ、煩悶だ、肉だ、墮落だ、解脱だ、といふやうな意味の有氣な言葉で勿體を附けて話されると、何だか難有くなつて來て、之を語る友は偉いと思つた。こんな馬鹿氣た話はない。友は唯私より少し早くファウストといふ古本を讀んだ丈の事だ。讀んで分つた所で、ファウストが何程の物だ？ 技巧の妙を除いたら、果してどれ程の價値がある？ 況や友は曖昧な語學の力で分らん處を飛ばし〳〵讀んだのだ、讀んで幼稚な頭で面白いと感じた丈だ、其も聞怯して、從頭面白いに極めて掛つて、半分は雷同で面白いと感じた丈だ。讀んで十分に味ひ得た所で、どうせ人間の作つた物だ、左程の物でもあるまいに、それを此樣な讀方をして、難有がつて、偶々之を讀まぬ者を何程劣等の人間かのやうに見下し、得意になつて語る友も友なら、其を聴いて敬服する私も私だ。心ある人から觀たら、嘸ぞ苦々しく思はれたらう。

此友から私は文學の難有い譯を種々と説き聴かされた。今では最う大抵忘れて了つたけれど、何でも文學は眞理に新らしい形を賦して其生命を直接に具體的に再現するものだ、とか聴かされて、感服した。自然の眞相は普通人に分らぬ、詩人が其主觀を透して描いて示すに及んで、初て普通人にも朧氣に分つて人間の寶となる、とか聴かされて、又感服した。戀には人間の眞髓が動く、とか聴かされて、又感服した。其他まだ種々聴かされて一々感服したが、此樣な事は皆愚言だ。世迷言だ。空想に生命を託して人生を傍觀するばかりで、古本と首引して瞑想するばかりで、人生に生命を託して人生と共に浮沈上下せんでも、人生の活機に觸れんでも、活眼を以て活動を機微の間に察し得んでも、如何かして人生が分るものとしても、友のいふやうな其樣な文學は、何處かで誰かが空想した文學で、文學の實際でない。文學の實際は人間の墮落を潤色して、醜劣な人間を更に懦弱にするばかりだ。私の觀方は偏してゐるといふか？ 唯弊を見て利を見ぬといふか？ しかし利よりも弊の勝つたのが即ち文學の實際ではないか？ 私の觀方より文學の實際が既に弊に偏して居るではないか？

あゝ、しかし、文學を責めるより、友を責めるより、自ら責めた方が當つてゐよう。私のやうな斗筲な者は、例へば聖賢の遺書を讀んでも、矢張害を受けるかも知れん。私は自然だ人生だと口には言つてゐたけれど、唯書物で其樣な言葉を覺えただけで、意味が能く分つてゐるのではなかつた。意味も分らぬ言葉を弄んで、いや、言葉に弄ばれて、可惜浮世を夢にして渡つた。詩人と名が附きや、皆普通の人より勝つてるやうに思つてゐた。小説、殊に輸入小説には人生の眞相が活字の面に浮いてゐるやうに思つてゐた。西洋の詩人は皆東洋の詩人に勝るやうに思つてゐた。作の新舊を論じて其價値を定めてゐた。自分は此樣な下らん眞似をしてゐながら、他の額に汗して着實の浮世を渡る人達が偶々文壇の事情に通ぜぬと、直ぐ俗物と罵り、俗衆と罵つて、獨り自ら高しとしてゐた。獨り自ら高しとする一方で、想像で姦淫して、一人で墮落してゐた。

あゝ、恥かしくて顔が熱る。何たる苦々しい事であつた。私は當時の事を想ひ出す度に、人通りの多い十字街に土下坐して、通る人毎に、踏んで、蹴て、唾を吐懸けて貰ひ度いやうな心持になる‥‥

四十四

文學の毒に中られた者は必ず終に自分も指を文學に染めねば止まぬ。私達が即ち然うであつた。先づ友が何か下らぬ物を書いて私に誇示した。すると私も直ぐ卑しい負けぬ氣を出して短篇を書いた。どうせ碌な物ではない。筋はもう忘れて了つたが、何でも自分を主人公にして、雪江さんが相手の女主人公で、紛紜した擧句に幾度となく姦淫するのを、あやふやな理想や人生觀で紛らかして、高尚めかしにすぢり捩つた物であつたやうに記憶する。自惚は天性だから、書上げると、先づ自分と自分に滿足して、これなら當代の老大家の作に比しても左して遜色は有るまい、友に示せたら必ず驚くと思つて、示せたら、友は驚かなかつた。好い處もあるが、もう一息だと言ふ樣なことをいふ。私は非常に不平だつた。が、局量の狹い者に限つて、人の美を成すを喜ばぬ。人を褒めれば自分の器量が下るとでも思ふのか、人の爲た事には必ず非難を附けたがる、非難を附けてその非難を附けたのに必ず感服させたがる。友には其癖があつたから、私は友の評を一概に其癖の言はせる事にして了つて、實に卑劣な奴だと思つた。

何とかして世に名を鳴させて遣りたい。それには此短篇を何處かの雜誌へ載せるに限ると思つた。雜誌へ載せれば、私の名も世に出る、萬一したら金も獲られる、一擧兩得だといふやうな、愚劣な者の常として、何事も自分の都合の好い樣にばかり考へるから、其樣な蟲の好い事を思つて、友には內々で種々と奔走して見たが、如何しても文學の雜誌に手蔓がない。其中に或人が其は既に文壇で名を成した誰かに知己になつて、其人の手を經て持込むと好いと敎へて吳れたので、成程と思つて、早速手蔓を求めて某大家の門を叩いた。

某大家は其頃評判の小說家であつたから、立派な邸宅を構へてゐようとも思はなかつたが、定めて瀟洒な家に住つて閑雅な生活をしてゐるだらうと思つて、根岸の其宅を尋ねて見ると、案外見すぼらしい家で、文壇で有名な大家のこれが住居とは如何しても思はれなかつた。家も見窄らしかつたが、主人も襟垢の附いた、近く寄つたら惡臭い匂が紛としさうな、銘仙か何かの衣服で、鐵緣眼鏡で、汚ない髯の處斑に生えた、土氣色をした、一寸見れば病人のやうな、陰氣な、くすんだ人で、ねち〳〵とした辯で、面を看合せると急いで俯向いて了ふ癖がある。通されたのは二階の六疊の書齋であつたが、庭を瞰下すと、庭には樹から樹へ繩を渡して襁褓が幕のやうに列べて乾してあつて、下座敷で赤兒のピイ〳〵泣く聲が手に取るやうに聞える。

私は甚く輕蔑の念を起した。殊に庭の襁褓が主人の人格を七分方下げるやうに思つたが、求むる所があつて來たのだから、質樸な風をして、誰も言ふやうな世辭を交ぜて、此人の近作を讀んで非常に敬服して敎へを乞ひに來たやうにいふと、先生疊を凝と視詰めて、あれは咄嗟の作で、書懸けると親戚に不幸が有つたものだから、とかいふやうな申譯めいた事を言つて、言外に、落着いて書いたら、といふ餘意を含める。私は腹の中で下らん奴だと思つたが、感服した顏をして媚びたやうな事を言ふと、先生滿更厭な心持もせぬと見えて、稍調子付いて來て、夫から種々文學上の事に就いて話して吳れた。流石は大家と謂はれる人丈あつて、驚くべき博覽で、而も一家の見識を十分に具へてゐて、ムッツりした人と思ひの外、話が面白い。後進の私達は何の點に於ても敬服しなければならん筈であるが、それでも私は何ほ輕蔑の念を去る事が出來なかつた。で、終局に只ほんの看て貰へば好

いやうに言つて、雜誌へ周旋を頼む事は噯にも出さないで、持つて行つた原稿を置いて、下宿へ歸つて來てから、又下らん奴だと思つた。

四十五

某大家は兎に角大家だ。私は靑二才だ。何故私は此人を輕蔑したのか？　襟垢の附いた着物を着てゐたとて、庭に襤褸が乾してあつたとて、平生名利の外に超然たるを高しとする私の眼中に、貧富の差は無い筈である。が、私は實際先生の貧乏臭いのを看て輕蔑の念を起したのだ。矛盾だ。矛盾ではあるが、矛盾が私の一生だ。

醫者の不養生といふ。平生思想を生命として、思想に役せられてゐる人に限つて、思想が薄弱で、正可の時の用に立たない。私の思想が矢張其だつた。

けれど、思想々々と大層らしく言ふけれど、私の思想が一體何んだ？　大抵は平生親しむ書卷の中から拾つて來た、謂はゞ古手の思想だ。此蒼褪めた生氣のない古手の思想が、意識の表面で凝つて髣髴として別天地を拓いてゐる處を見ると、理想だ、人生觀だといふやうな種々の觀念に美しい空想の色彩を帶びて其中に浮游してゐて、腹が減いた、食が欲しいといふ現實界に比べれば、遙に美しいやうに見える。浮氣な不眞面目な私は直ぐ好い處を看附けたといふ氣になつて、此別天地へ入り込んで、其處から現實界を眺めて罵つてゐたのだ。我存在の中心を古手の思想に託して、其で自ら高しとしてゐたのだ。が、私の別天地は譬へば塗盆へ吹懸けた息氣のやうな物だ。現實界に觸れて實感を得ると、他愛もなく剝げて了ふ、剝げて木地が露はれる。古手の思想は木地を飾つても、木地を蝕する力に乏しい。木地に食入つて吾を磨くのは實感だのに、私は第一現實を輕蔑してゐたから、その實感を得る場合が少く、偶得た實感も其取扱を誤つてゐたから、木地の吾を磨く足にならなかつた。從つて何程古手の思想を積んで見ても、木地の吾は矢張故のふやけた、秩序のない、陋劣な吾であつた。

かうして別天地と木地の吾とは別々であつたから、別天地に遊んでゐる時と、吾に戾つた時とは、勢ひ矛盾する。言行は始終一致しない。某大家に對しても、未だ會はぬ中は多少の敬意を有つてゐたけれど、一たび其人の土氣色した顏が見え、襟垢が見え、襤褸が見えて、想像中の人が現實の人となると、木地の吾が、貧乏だから下らん、別天地では流行せぬ論法で論斷して之を輕蔑して了つたのだ。

噫當時私はまだ若かつたから、陋劣な吾にしても、私の吾には尙ほ多少の活氣が有つて、多少の活機を捉へ得た。文壇の大家になると、古手の思想が凝固まつて、其人の吾は之に壓倒せられ、纔に殘喘を保つてゐるやうなのが幾らもある。斯ういふ人が現實に觸れると、氣の毒な程他愛の無い人になる。某大家が即ち其であつた。だから、人生を論じ、自然を說いて、微を析き、幽を闡く頭はあつても、目前で靑二才の私が輕蔑してゐるのが、先生には終に見えなかつたのだ。

四十六

二三日して行つて見ると、先生も友と同じ樣に、好い處も有るが、もう一息だといふやうな事を言ふ。謔だ。好い處も何も有るのぢやない。不出來だと直言が出來なくて斯う言つたのだ。先生も目が見えん人だが、私も矢張自分の事だと目が見えんから、其を眞に受けて、書直して持つて行くと、先生が氣の毒さうに趣向をも少し變へて見ろと云ふ。言ふ通りに趣向をも少し變へて持つて行くと、もう先生も仕方がない、

不承々々に、是で好い……と云ふ……なに是で好い事は些とも無いのだが、先生は氣が弱くて、もう然う〳〵は突戻し兼ねたのだ。先生に曰はせると、之を後進に對する同情だといふ。何の同情の事が有るものか！ 少しでも同情が有るなら、頭から叱付けて、文學などに斷念させるが好いのだ。是が同情なら、同情は「煮え切らん」の別名だ。どうせ思想に囚はれて活機の分らぬ人の爲る事だから、お飾の思想を一枚剝れば、下からいつも此樣な愛想の盡きた物が出て來るに不思議はないが、此方も此方だ、其樣な事は少しも見えない。本當に是で好い事だと思つて、其言葉の尾に縋つて、何處かの雜誌へ周旋をと賴んだ。こんなのを盲目の紛れ當りと謂ふのだらう。機を制せられて、先生も仕方がなささうに是も受込む。私達の應對は活きた人には側で聽いてゐられたものであるまい。

一月程して私の處女作は或雜誌へ出た。初戀が霜げて物にならなかつた事を書いたのだからとて、題は初霜だ。雪江さんの記念に雪江と署名した。先生が筆を加へて私の文は行方不明になつた處も大分あつたが、兎も角も自分の作が活字になつたのが嬉しくて〳〵耐らない。雜誌社から送つて來るのを待ちかねて、近處の雜誌店へ驅付けて、買つて來て、何遍か繰返して讀んでも讀んでも讀飽かなかつた。眞面目な人なら、此處らで自分の愚劣を悟る所だらうが、私は反て自惚れて、此分で行けば行々は日本の文壇を震駭させる事も出來ようかと思つた。

聊かながら稿料も貰へたから、二三の友を招いで、近處の牛肉店で祝宴を開いて、其晩遂に「遊び」に行つた。其時案外不愉快であつたのは曾て記した通り。皆嬉しさの餘りに前後も忘却したので。

これが私の小說を書く病付きで又「遊び」の皮切であつたが、それも是も緣の無い事ではない。私の身では思想の皮一枚剝れば、下は文心即淫心だ。だから、些とも不思議はないが、同時に兩方に夢中になつてる中に、學校を除籍された。なに、月謝の滯りが原因だつたから、復籍するに造作はなかつたが、私は考へた、「寧その事小說家になつて了はう。法律を學んで望み通り政治家になれたつて、仕方がない。政治家になつて可惜一生を物質的文明に献げて了ふより、小說家になつて精神的文明に貢獻した方が高尙だ。其方が好い……」どうも仕方がない。活眼を開いて人生の活相を觀得なかつた私が、例の古手の舊式の思想に捕はれて、斯う思つたのは仕方がないが、夫にしても、同じ思想に捕はれるにしても、も少し捕へられ方が有りさうなものだつた。物心一如と其樣な印度臭い思想に捕はれろではないが、所謂物質的文明は今世紀の人を支配する精神の發動だと、何故思はれなかつたらう？ 物質界と表裏して詩人や哲學者が讀み得ぬ精神界が別にあると、何故思はれなかつたらう？ 人間の意識の表面に浮んだ別天地の精神界と違つて、此精神界は着實で、有力で、吾々の生存に大關係があつて、政治家は即ち此精神界を相手に仕事をするものだと、何故思はれなかつたらう？ 此道理をも考へて、其上で去就を決したのなら、眞面目な決心とも謂へようが……あゝ、しかし、何の道思想に捕はれては仕方がない。私は思想に、自ら欺いて、其樣な淺墓な事を思つてゐたが、思想に上らぬ實際の私は全く別の事を思つてゐた。如何な事を思つてゐたかは、私の言ふ事では分らない、是から追々爲る事で分る

四十七

私は其時初めて文士にならうと決心した、トサ後には人にも話してゐたけれど、事實でない。私は生來未だ曾て決心をした事の無い男だ。い

つも形勢が既に定つて動かすべからずなつて、其形勢に制せられて初て決心するのだから、學校を除籍せられたばかりでは、未だ決心が出來なかつた。唯下宿に臥轉んでグヅリ〱として文士に爲りさうになつてゐたのだ。

初て決心したのは、如何してか不始末が國へ知れて父から驚いた手紙の來た時であつた。行懸りで愚圖々々はしてゐられなくなつたから、初て斷らうと決心して事實を言つて同意を求めてやると、父からは怒つた手紙が來る、母からは泣いた手紙が來る、親達が失望して情ながる面は手紙の上に浮いて見えるけれど、かうなると妙に剛情になつて、因襲の僻見に囚はれてゐる年寄の白髮頭を冷笑してゐた。親戚の某が用事が有つて上京した序に、私を連れて歸らうとしたが、私は頑として動かなかつた。そこで學資の仕送りは絶えた。

かうなるは最初から知れてゐながら、私は弱つた。仕方がないから、例の某大家に縋つて書生に置いて貰はうとすると、先生は相變らずグヅリグヅリと煮切らなかつたが、奧さんが飽迄不承知で、先生を差措いて、御自分の口から斷然斷られた。私は案外だつた。頼めば二つ返事で引受けて呉れるとばかり思つてゐたから、親戚の者が連れて行かうとした時にも、言はでもの廣言迄吐いて拒んだのだが、かう斷られて見ると、何だか先生夫婦に欺かれたやうな氣がして、腹が立つて耐らなかつた。世間の人は皆私の爲に生きてゐるやうな氣でゐたからだ。

もう斯うなつては、仕方がない、書けても書けんでも、筆で命を繋ぐより外仕方がない。食ふと食はぬの境になると、私でも必死になる。必死になつて書いて〱書捲つて、その度に、惡感情は抱いてゐたけれど、仕方がないから、某大家の處へ持つて行つて、筆を加へて貰つた上に、賣つて迄貰つてゐた。其が爲には都合上門人とも稱してゐた。然うして一二年苦しんでゐる中に、どうやら曲りなりにも一本立が出來るやうになると、急に此前奧さんに斷られた時の無念を想出して、夫からは根岸のお宅へも無沙汰になつた。もう先生に餘り用はない。先生は或は感情を害したかも知れないが、先生が感情を害したからつて、世間が一緒になつて感情を害しはすまいし……と思つたのではない、決して其樣な輕薄な事は思はなかつたが、私の行爲を後から見ると、詰り然う思つたと同然になつてゐる。

先生には用が無くなつたが、文壇には用が有るから、私は廣く交際した。大抵の雜誌には一人や二人の知己が出來た。かうして交際を廣くして置くと、私の作が出た時に、其知己が餘り酷くは評して呉れぬ。無論感服などする者は一人もない。私などに感服しては見識に關はる。何かしら瑕疵を見付けて、其で自分の見識を示した上で、しかし、まあ、可なりの作だと云ふ。褒める時には屹度然う云ふ。私は局量が狹いから、批評家等が誰も許しもせぬに、作家よりも一段上座に坐り込んで、其處から瞰下した鑑識で輕率に人の苦心の作を評して、此方の鑑定に間違ひはない、其通り思うて居れ、と言はぬばかりの高慢の面付が癪に觸つて耐らなかつたが、其を彼此言ふと、局量が狹いと言はれる。成程其は事實だけれど、さう言はれるのが厭だから、始終默つて憤つてゐた。其癖批評家の言ふ所で流行の趣く所を察して、勉めて其に後れぬやうにと心掛けてゐた……いや、心掛けてゐたのではない、其樣な不見識な事は私の尤も擯斥する所だつたが、後から私の行爲を見ると矢張然う心掛けたと同然になつてゐる。

四十八

久く文壇を彷徨してゐる中に、當り作が漸く

と、味はるゝものは人生で、味ふものは作家の主觀であるから、作家の主觀の精粗に由つて人生を味ふ程度に深淺の別が生ずる。是に於て作家は如何しても其主觀を修養しなければならん事になる。

私共は只文學者になりたいが一生の願だから、大に人生に觸れて主觀の修養をしなければならん。が、漠然人生に觸れるの、主觀を修養するのと言つてる中は、意味が能く分つてゐるやうでも、愈實行する段になると、一寸まごつく。何から如何手を着けて好いか分らない。政治や實業は人生の一現象でも有らうけれど、其樣な物に大した味ひはない筈である。といつて教育でもないし、文壇は始終觸れてゐるし、まあ、社會現象が一番面白さうだ。面白いといふのは其處に人生の味が濃かに味はれる謂である。社會現象の中でも就中男女の關係が最も面白さうだが、其面白味を十分に味はうとするには、自分で實驗しなければならん。それには一寸相手に困る。人の戀をするのを傍觀するのは、宛も人が天麩羅を喰つてるのを視て其味を想像するやうなものではあるけれど、實驗の出來ぬ中は傍觀して滿足するより外仕方がない。が、新聞の記事は局部だけで内容が分らない。内容を知るには、戀する男女の間に割込んで、親しく其戀を觀察するに限るが、戀する男女が其樣な所に落ちても居ない。すると、當分まア戀の可能を持つてゐる若い男女を觀察して滿足して居なければならん。が、若い男を觀察したつて詰らない。若い男の心持なら、自分でも大抵分る。戀の可能を持つてゐる若い女の觀察が當面の急務だ。と、から考へ詰めて見ると、私の人生研究は詰り若い女の研究に歸着する。

で、歸着點は分つたが、矢張實行が困難だ。若い女を研究するといつて、往來に佇立つてゐて通る女に一々觸れもされん。勢ひ私の手の屆く處から研究に着手する外はない。が、私の手の屆く處だと、まア下宿屋のお神さんや下女になる。下宿屋のお神さんは大抵年を喰つてる。若いお神さんはうッかり觸れると危險だ。剩す所は下女だが、下女ではどうも喰ひ足りない。忙しさうにしてゐる所を捉まへて、一つ二つ物を言ふと、もう何番さんかでお手が鳴る。へーイと尻上りに大きな聲で返事をして、跡をも閉めずにドタ／＼と座敷を駈出して行くのでは、餘り沒趣味だ。下女が沒趣味だとすると、私の身分ではもう賣女に觸れて研究する外はないが、これも大店は金が掛り過ぎるから、小店で滿足しなければならん。が、小店だと、相手が越後の國蒲原郡何村の産の鼻ひしやげか何かで、私等が國さでと、未だ國訛が取れないのになる。往々にして下女にも劣る。尤も是は少し他に用事も有つたから、其用事を兼ねて私は絶えず觸れてゐたが、どうしても、どう考へて見ても、是では喰ひ足らん。どうも素人の面白い女に打着つて見たい。今なら直ぐ女學生といふ所だが、其時分は其樣な者に容易に接近されなかつたから、私は非常に煩悶してゐた。

馬鹿なッ！　其樣な事を言つて、私は女房が欲しくなつたのだ。

五十

人生の研究といふやうな高尚な事でも、私なぞの手に掛ると、詰り若い女に打着りたいなぞといふ愚劣な事になつて了ふ。普通の人なら青年の中は思を意識して随分愚な眞似もしようけれど、私は其を意識しなかつた。矢張私共でなければ出來ぬ高尚な事のやうに思つて、切に若い女に打着りたがつてゐる中に、望む所の若い女が遂に向うから來て打着つた。

それは小石川の富坂近辺の下宿に居る時であつた。此下宿は余り好くなかつたが、それでも富坂近辺での下宿で、学生は大学生が一人だつたか、二人だつたか、居たかと思ふ。余は皆小官吏や下級の会社員ばかりで、皆朝から弁当を持つて出掛けて、午後は四時過でなければ帰つて来ぬ連中だから、昼の中は家内が寂然とする程静かだつた。

私は此下宿で一番上等にしてある二階の八畳の部屋を占領してゐた。たゞ、一番上等といつても、元来下宿屋に建てた家だから、建前は粗末なもので、動もすると障子が反つて開閉に困難するやうな安普請ではあつたが、型の如く床の間もあつて、年中鉄舟先生やら誰やらの半折物が掛けてあつて、花活に花の絶えたことがない……といふと結構らしいが、其代り真夏にも寒菊が活けてあつたりする。造花なのだ。これは他の部屋も大同小異だつたが、唯た一つ他の部屋にはなくて、此部屋ばかりにある、謂はば此部屋の特色を成す物があつた。それは姿見で、唐草模様の浮出した紫檀紛ひの縁の、向ふと四角な顔も長方形になる、勧工場仕込の安物ではあつたけれど、兎も角も是が上等室の標象として恭しく床の間に据ゑてあつた。下にもまだ八畳が一間あつたが、其処には姿見がなかつた。同じやうな部屋でありながら、間代が其処より此処の方が三割方高かつたのは、半分は此姿見の為だつたかとも思はれる。

部屋は此通り余り好くなかつたが、取得は南向で、冬暖かで夏涼しかつた。其に一番詰頭の部屋で階子段にも遠かつたから、他の客が通り掛りに横目で部屋の中を睨んで行く憂ひはなかつた。

も一つ好い事は――部屋の事ではないが、此家は下宿料の取立が寛大だつた。亭主は居るか居ないか分らんやうな人で、お神さん一人で繰廻してゐるやうだつたが、快活で、度の大きい人で、少し馴染んだ者には、一月二月下宿料が滞つても、宜しうございます、御都合の宜い時で、といつてピリ／＼しない。収入の不定な私には是が何よりだつたから、私は二年越此家に下宿してゐた。

或日朝から出て昼過に帰ると、帳場に看慣れぬ女が居る。後向だつたから、顔は分らなかつたが、根下りの銀杏返しで、黒縮緬だか何だかの小さな紋の附いた羽織を着て、ベタリと坐つてゐる後姿が何となく好かつたが、私がお神さんと物を言つてる間、其女は振向いても見ないで、黙つて彼方向いて編物を遣つてゐた。

部屋へ来る跡から下女が火を持つて来たから、捉まへて聞くと、今朝程私と入違ひに尋ねて来たのださうで、何でもお神さんの身寄の者だとかで、国で手荷物なども持つて来たから、地方の人らしいと云ふ。唯其切で、下女の事だから要領を得ない。

「如何な女だい？」

「あら、今御覧なすツたぢや有りませんか？」

「後向きで分らなかつた。」

「別品ですよ、」といつて下女は莞爾々々してゐる。

「丸顔かい？」

「いゝえ、細面でね……」

「色は如何だい？　白いかい？」

下女は黙つて私の顔を見てゐたが、

「大層お気が揉めますのね。何なら もう一遍下へ行つて見ていらしッたら……」

誰にでも翻弄されると、途方に暮れる私だから、據どころなく苦笑として黙つて了ふと、下女は高笑して出て行つて了つた。

五十一

軈て夕飯時になつた。部屋々々へ膳を運ぶ忙

しさうな足音が廊下に轟いて、何番さんがお急ぎですよ、なぞと二階から金切聲で嚴しく喚く中を、バタ〳〵と急足に二人ばかり來る女の足音が、私の部屋の前で止ると、

「此方が一番さんで、夫から二番さん三番さんと順になるンですから何卒……」

といふのは聞慣れた小女の聲で、然う言捨てて例の通り端手なくバタ〳〵と引返して行く。

と、跡に殘つた一人が障子の外に蹲まつた氣色で、スル〳〵と障子が開いたから、見ると、彼の女だ、彼の女に違ひない。私は急いで餘處を向いて了つたから、能くは、分らなかつたが、何でも下女の話の通り細面で、蒼白い、淋しい面相の、好い女だ……と思つた。年頃は二十五六……それとも七か……いや、八か……女の歳は私には薩張分らない。もう羽織はなして、紬だか縮緬だか、夫とも更と好い物だか、其も薩張分らなかつたが、何しても半襟の掛つた柔か物で、前垂を締めて居たやうだつた。障子を明けると、上目でチラと私の面を見て、一寸手を突いて辭儀をしてから、障子の影の膳を取上げて、隱した體もなくスルスルと内へ入つて來て「どうもお待たせ申しまして、」といひながら、畏縮してゐる私の前へ据ゑた手先を見ると、華奢な蒼白い手で、藥指に燦と光つてゐたのは本物のゴールド・リングと見た。正可鍍金ぢや有るまい。飯櫃も運び込んでから、

「お湯はございますか知ら。」

と火鉢の藥罐を一寸取つて見て、

「まだ御座いますやうですね。ぢや、お後にしませう。御緩くりと……」

と會釋して、スッと起つた所を見ると、スラリとした後姿だ。あゝ、好い風だ、と思つてゐる中に、もう部屋を出て了つて、一寸小腰を屈めて、跡を閉めて、バタ〳〵と廊下を行く。

別段異つた事もない。小娘でないから、少しは物慣れた處もあつたらうが、其は當然だ。風に一寸垢脱のした處が有つたかも知れぬが、夫とても浮氣男の眼を惹く位の價値で、大した女ではなかつたのに、私は非常に感服して了つた。尤も私の不斷接してゐる女は、厭にお澄しだつたり、厭に馴々しかつたりして、一見して如何にも安ッぽい女ばかりだつたから、然ういふのを看慣れた眼には少しは異つて見えたには違ひない。

何者だらうと考へて見たが、分らない。或は玄人上りかとも思つてみたが、下町育ちは山の手の人とは違ふ。此處のお神さんも下町育ちだと云ふ。さういへば、何處か樣子に似た處もある。或は下町育ちかも知れぬとも思つた。

素性は分らないが、兎に角面白さうな女だから、此樣なのを味つたら、女の眞味が分るかも知れん。今に膳を下げに來たら、今度こそは勇氣を振起して物を言つて見よう、私のやうに默つて居ては、何時迄經つても接近は出來ん、なぞと思つてゐると、隣室で女の笑ひ聲がする。下女の聲ではない。今のに違ひない。隣の俗物め、もう捉まへて戯言でも言つてると見える。

五十二

其晩膳を下げに來るかと心待に待つてゐたら、其には下女が來て、女は顔を見せなかつた。翌朝は女が膳を運んで來たが、率となると何となく氣怯れがして、今は忙しさうだから、晝の手隙の時にしよう、といふ氣になる。で、言ふべき文句迄拵へて、徐くやうにして晝を待つてゐると、晝が來て、成程手隙だから、他の者は遊んでゐて小女が膳を運んで來る。

三四日經つた。いつも女の助けるのは朝晩の忙しい時だけで、晝は顏も出さない。考へて見

ある。ズッと張揚げた聲を急に落して、一轉二轉と急轉して、何かを潜つて來たやうに、パッと又浮上るその面白さは……なぞと生意氣をいふけれど、一體新内をやつてるのだか、清元をやつてるのだか、私は夢中だつた。

　俗曲は分らない。が、分らなくても、私は大好だ。新内でも、清元でも、上手の歌ふのを聽いてゐると、何だか斯う國民の精粹とでもいふやうな物が渾然として意氣な聲や微妙な節廻しの上に顯はれて、吾心の底に潜む何かに觸れて、何かが想出されて、何とも言へぬ懷かしい心持になる。私は之を日本國民の二千年來此生を味うて得た所のものが、間接の思想の形式に由らず、直に人の肉聲に乘つて、無形の儘で人心に來り逼るのだとか言つて、分明な事を不分明にして其處に深い意味を認めてゐたから、今お糸さんの歌ふのを聽いても、何だか其樣なやうに思はれて、人生の酸な味や意氣な味がお糸さんの聲に乘つて、私の耳から心に染込んで、生命の絃に觸れて、全存在を搖がされるやうな氣がする。

　お糸さんの顏は緣側からは見えないけれど、乾度少しボッと上氣して、薄目を開いて、恍惚として我か人かの境を迷ひつゝ、歌つてゐるに違ひない。所謂神來の興が中に動いて、[illegible]に現を脱かしてゐるのは歌ふ聲に魂の入つてゐるので分る。恐らくもう側でお神さんや下女の聽いてることも忘れてゐるだらう。お糸さんは最う人間のお糸さんでない。人間のお糸さんは何處へか行つて了つて、體に俗曲の精靈が宿つてゐる、而してお糸さんの美音を透して直接に人間と交渉してゐる。お糸さんは今俗曲の巫女である、薩満である。平生のお糸さんは知らず、此瞬間のお糸さんはお糸さん以上である、いや、人間以上で神に近い人である。

　斯う思ふと、時としては斯うして人間を離れて藝術の神境に出入し得るお糸さんは尋常の人間でないやうに思はれる。お糸さんの人と爲りは知らないが、歌に於て三味線に於てお糸さんは確に一個の藝術家である、事に寄ると藝術家と自覺せぬ藝術家である。要するに、俗物でない。

　私も不肖乍ら藝術家の端くれと信ずる。お糸さんの人となりは知らないでも、藝術家の心は唯藝術家のみ能く之を知る。此下宿に客多しと雖も、能くお糸さんを知る者は私の外にあるまい。私の心を解し得る者もお糸さんの外には無い筈である……と思ふと、まだ傍に物を言つた事もないお糸さんだけれど、何だかお糸さんが生れぬ前からの友のやうに思はれて、私は……あゝ、私は……

五十四

　私の下宿ではいつも朝飯が濟んで下宿人が皆出拂つた跡で、緩くり掃除や雜巾掛をする事になつてゐた。お糸さんは奉公人でないから雜巾掛には關係しなかつたが、掃除だけは手傳つてゐたので、いつも其時分になると、お掃除致しませうと言つては私の部屋へ來る。私は内々其を心待にしてゐて、來ると急いで部屋を出て緣側を彷徨く。彷徨きながら、見ぬ振をして横目でチョイ〳〵見てゐると、お糸さんが赤い襷に白地の手拭を姉樣冠りといふ甲斐々々しい出立で、私の机や本箱へバタ〳〵と拂塵を掛けてゐる。其を此方から見て居ると、お糸さんが何だか斯う私の何かのやうな氣がして、嬉しくなつて、斯うした處も惡くないなと思ふ。

　ところが、お糸さんが三味線を彈いた翌朝の事であつた。萬事が常よりも不手廻りで、掃除にもいつも來るお糸さんが來ないで、小女が代りに來たから、私は不平に思つて、如何したのだと詰るやうにいふと、今日はお竹どんが病氣で

寢てゐるので、愛想なンぞの事を言つてゐられないのだといふ。其なら仕方が無いやうなものだけれど、小女のは掃除するのがきなくて、埃をほだてて行くのだから、私が叱り付けてやつたら、小女は何だか滞々言つて出て行つた。

暫くして用を達しに行かうと思つて、ヒョイと私が部屋を出ると、何時來たのか、お糸さんがツイ其處で、着物の裙をクルツと捲つた下から、華美な長襦袢だか腰卷だかを出し掛けて、倒さになつて切々と雜巾掛をしてゐた。私の足音に振向いて、お邪魔樣といつて、身を開いて遁して呉れて、お糸さんは何とも思つてゐぬ樣だつたが、私は何だか氣の毒らしくて、急いで二階を降りて了つた。

用を達してから出て來て見ると、手水鉢に水が無い、小女は居ないかと視廻す向うへお糸さんが、もう雜巾掛も濟んだのか、バケツを提げてやつて來たが、ト見ると、直ぐ氣が附いて、

―おや、さうだツけ……只今直ぐ持つて參りますよ。

と駈出して行つて、臺所から手桶を提げて來て、

―お待遠樣。

とザツと水を覆ける時、何處の部屋から仕掛けたベルだか、帳場で無暗に消魂しくヂリ、リ、リンと鳴る。

お竹さんが臺所から面を出して、

「誰も居ないのかい? 十番さんで先刻からお呼びなさるぢやないか。」

「へい、只今……」

とお糸さんが矢張下女並の返事をして、

―お三どんは新參で大狼狽……―

と私の面を見て微笑しながら、一寸滑稽た手附をしたが、其儘所帶崩して駈出して、表梯子をトン〳〵〳〵と上つて行く。

私が手を洗つて二階へ上つて見たら、お糸さんは既う裾を卸したり、襷を外したりして、整然とした常の姿になつて、突當りの部屋の前で膝を突いて、何か用を聽いてゐた。

私は部屋へ歸つて來て感服して了つた。お糸さんは歌が旨い、三味線も旨い、女ながらも立派な一個の藝術家だ。その藝術家が今日は如何だらう? お竹が在宅たら仕方がないやうなものの、全で下女同樣に追使はれてゐる。下女同樣に追使はれて、慣れぬ雜巾掛までさせられた上に、無理な小言を言はれても、格別厭な面もせずに、何とか言つたツけ? 然う〳〵、お三どん新參で大狼狽といつて微笑……偉い!

修行の積れた者でなければ、[illegible]

これがお竹でゞも有らうものなら、直ぐ顏に出て、でもない面を膨らして、ぶつ〳〵口小言を言つて、而たそれを當擦にして了つて、お三どん新參で大狼狽といつて微笑……偉い!

五十五

感服の餘り、私は何とかして此自覺せぬ藝術家に敬意を表したいと思つたが、併し奉公人同樣に金など包んでは出されない、何でも品物を呈するに限ると、何故だか獨りで極めて掛つて、慘澹たる苦心の末、[illegible]江一代の智慧を絞り出して、其翌日の日曜に本郷の或友人を尋ねて、噓八百を陳べ立て、其細君を誘かして半襟を二掛見立てて買つて來て貰つた。値段の所も私にしては一寸奮んだ積だつた。

早く之をお糸さんに呈して其喜ぶ顏を見たいと、此處らは未來の大文豪も俗物と餘り違はぬ心持になつて、何だか切に嬉しがつて、莞爾して下宿へ歸つたのは丁度夕飯時分だつたが、火を持つて來たのは小女、膳を運んで來たのはお竹どんで、お糸さんは笑聲が他處の部屋でするけれど、顏も見せない。私は何となく本意なかつた。

待侘びて獨りで焦れてゐると、漸と目差すお糸さんが膳を下げに來たから、此處ぞと思つて、極り惡かつたが、思切つて例の品を呈した。大に喜ぶかと思ひの外、お糸さんは左して色を動かさず、輕く禮を言つて、一寸包みを戴いて、膳と一緒に持つて行つて了つた。唯其切で、何だか餘り呆氣なかつた。

　何時間經つたか、久くすると、部屋の障子がスッと開いた。振向いて見ると、思ひがけずお糸さんが入口に蹲まつて、兩手を突いて、先刻の禮を又言つてお辭儀をする。私は何となく嬉しかつた。お床を延べませうかといふから、敷つて呉れといふと、例の通り戸棚から夜具を出す時、昨夜も今朝も手に掛けて知つてゐる筈の枕皮の汚に初て氣が附いて、明日洗ひませうといふ。なに、洗濯屋に出すから好いと言つても、此樣な物を洗ふのは造作もないといつて聽かなかつた。私は又嬉しくなつて、此樣な事なら最と早く敬意を表すれば好かつたと思つた。

　お糸さんは床を敷つて了ふと、火鉢の側へ膝行り寄つて、火を直しながら、

―本當に御不自由でございませうねえ、皆氣の附かない者ばかりの寄合なんですから。どうぞ何なりと御遠慮なく仰しやつて下さいまし。然う申しちや何ですけど、他のお客樣は隨分ツケツケお小言を仰しやいますけど、一番さん（私の事だ）は御遠慮深くツて何にも仰しやらないから、「あゝいふお客樣は餘計氣を附けて上げなきや不可。本當にお客樣が皆一番さんのやうだと、下宿屋も如何樣に助かるか知れないッてね、始終下でもお噂を申して居るンでございますよ……―

　無論半襟二掛の效能とは迂濶の私にも知れた。平生の私の主義から言へば、お糸さんは卑劣だと謂はなければならんのに、何故だか私は左程にも思はないで、唯お糸さんの媚びて呉れるのが嬉しかつた。

　小女がバタ〳〵と駈けて來て、率然障子をガラッと開けて、

「あの八番さんで、御用が濟んだら、お糸さんに入らッしやいッて。」

―何だい？―

　小女が生意氣になけ無しの鼻を指して、

―これ……―

「さう。」

　お糸さんは挨拶も匆々に私の部屋を出て行つたが、ツイ其處らで立止つた樣子で、

―今お歸り？　大層御緩くりでしたね。―

　歸つて來たのは隣の俗物らしく、其聲で何だか言ふと、又お糸さんの聲で、

「あら、本當？　本當に買つて來て下すッたの？　まあ、嬉しいこと！　だから、貴方は實が有るッていふンだよ……―

　してみると、お糸さんに對つて敬意を表するのは私ばかりでないと見える。

五十六

　私がお糸さんに接近する目的は人生研究の爲で、表面上性慾問題とは關係はなかつた。が、お糸さんも活物、私も死んだ思想に捉はれてゐたけれど、矢張活物だ。活物同志が活きた世界で顏を合せれば、直ぐ其處に人生の諸要素が相轢してハズミといふ物を生ずる。卽ち勢だ。此勢を制する人でなければ、人間一疋の通用が出來ぬけれど、私の樣な斗筲輩になると、直ぐ其勢に制せられて了つて、吾は吾の吾でなくなつて、勢の自由になる吾、勢の吾になつて了ふ。困つたものだが、仕方がない。私は人生研究の爲お糸さんに接近しようと思つたのだけれど、接近しようとすると、忽ち妙なハメになつて、二番さんだの八番さんだのとい

ふ落附けになつても俗物共の競爭圏内に不覺卷込まれて了つた。又卷込まれざるを得ないのは、半襟二掛ばかりの效能ぢや三日と持たない。直ぐ消えて又元の木阿彌になる。二掛の半襟は惜しくはないが、もう斯うなると、勢に乘せられた我が承知せぬ。憤然となつて二日二晩も考へた末、又一策を案じ出して、今度は晝のお糸さんの手隙の時に、何とか好加減な口實を設けて酒を命じた。酒を命ずればお糸さんが持つて來る、お糸さんが持つて來れば、些との間たらお酌もして異れる、お糸さんのお酌で、酒を飲んで醉へば、私にだつて些とは思ふ事も言へて打解けられる。思ふ事を言つて打解けて如何する氣だつたか、それは不分明だつたけれども、兎に角打解けたかつたので、酒を命じたら、果してお糸さんが來て呉れて、思ふ通りになつた。

「ぢや、何ですね、」と未だ一本も明けぬ中から、私は眞紅になつて、「貴女は一杯喰はされたのだ。」

「大喰はされ！」とお糸さんは煙管を火鉢の角でポンと叩いて、「正可女房子の有る人た思ひませんでしたもの。好加減なチャラッポコを眞に受けて、仙臺くンだり迄引張り出されて、獨身でない事が知れた時にや、如何樣に口惜しかつたでせう。寧そ其時歸ッ了や好かつたンですけど、歸つて來たつて、家が有るンぢや有りませんしさ、人の厄介になつて苦勞する位なら、日蔭者でもまだ其方が勝かと思つたもンですからね、馬鹿されえ、貴方、言ひなり次第になつて半歳も然うして居たンですよ。さうすると、私の事がいつかお神さんに知れて、死ぬの生きるのといふ騷ぎが起つてみると、元々養子の事だから……」

「養子なンですか？」

「えゝ、養子なンですとも。養子だから、ほら、私を棄てなきや、看す〳〵何萬といふ身臺を棒に振らなきやならんでせう？ ですから、出るの引くのと揉め返した擧句が、詰る所私はお金で如何にでもなると見括つたンでせう、人を入れて別れ話を持出したから、私ももう踏んだり蹴たりの目に逢はされて、口惜しくツて〳〵、何だかもうカッと逆上せッ了つて、本當に一時は井戸川へでも飛込んで了はうかと思ひましたよ。」

「御尤もです。」

「ですけど、私が死んぢまや、幸手屋の血統は絶えるでせう？ それでは御先祖樣にも、又ね、死んだ親達にも濟まないと思つて、無分別は出しませんでしたけど、餘り口惜しかつたから、お金も出さうと言つたのを、そんなお金なンぞに目をくれるお糸さんぢやない何んか言つて、啖呵を切つてね、一文も貰はずに、歸つて來たか貴樣ぼして、其を持つて歸つて來たは好かつたけど、其代り今がキッテン〳〵で、お結構も伯母さんも濟みませんがといふ始末ですのさ。」

「いえ、面白い氣象だ。」

「ですから、私は、貴方の前ですけど、もう〳〵男は懲々。そりやあね、稀には旦那のやうな優しい親切なお方も有りますけど、どうせ私のやうな者の相手になる者ですもの、皆其樣な薄情な碌でなしばかしですわ。」

「いや、御尤もです。」

「まあ、自分の勝手なお饒舌ばかりしてゐて、お燗が全然冷め了つた。一寸直して參りませう。」

「御尤もです……」

五十七

お糸さんがお燗を直しに起つた隙に、茲で一寸國元の事情を吹聽して置く。嘗て私が學校を退校せられた時、父が學資の仕送りを絶つたのは、斯うもしたら或は歸つて來るかと思つた

からだ。ところが、私が如何にか斯うにか落着いて歸らなかつたので、兩親は獨息子を玉なしにしたやうに歎いて、父の白髮も其時分僅の間に滅切殖えたと云ふ。叔父が見兼ねて、態々上京して、もう小說家になるなどは言はぬ、唯是非一度歸省して兩親の心を安めろと懇に諭して呉れた。さう言はれて見ると、夫でもとも言兼ねて、私は其時叔父に連れられて久し振で歸省したが、父の面を見るより、心配を掛けた詫をする所か、平然先文學の貴い所以を說いて聽かせて、私は墮落したのぢやない、文學に於て向上の一路を看出したのだ、墮落なんぞと思はれては心外だと喰つて懸かると、氣の練れた父は敢て逆はずに、昔者の己には然ういふ六かしい事は分らぬから、己はもう何にも言はぬ、お前の思ふ通りにしろ。だが、東京へ出てから二年許りの間に遣つた金は、地所を抵當に入れて借りた金だ。己は無學で働きがないから、己の手では到底も返せない。何とかしてお前の手で償却の道を立てゝ呉れ。之を償却せん時には、先祖の遺產を人手に渡さねばならぬ。其ではどうも御位牌に對しても濟まぬから、己は始終其が苦になつての……と眼を瞬かれた時には、私も妙な心持がした。で、何にも當はなかつたけれど、其式の負債は直き償却して見せるやうに廣言を吐き、月々なし崩しの金額をも極めて再び出京したが、出京して見ると、物價騰貴に付き下宿料は上る、小遣も餘計に入る、負債償却の約束は不知不識約束になつて了つた。その稍實行の緒に就いたのは當り作が出來てからで、夫からは原稿料の手に入る度に多少の送金はしてゐたけれど、夫とても殘らず負債の方へ入れて了ふので、少しも家計の足しにはならなかつた。父は疾うに驛遞の方も罷められて、其後一寸學校の事務員のやうな事もしてゐたが、それも直き又罷められて、全く收入の道が絶えたので、父も母も近頃は心細さの餘り、遂に內職に觀世撚を撚り出したと云ふ。私は其頃新進作家で多少賣出した頃だつたから、急に氣が大きくなり、それに天性の見榮坊も手傳つて、矢張某大家のやうに、假令襟垢の附いた物にもせよ、兎に角羽織も着物も對の飛白の銘仙物で、縮緬の兵兒帶をグル／＼卷にし、左程惡くもない眼に金緣眼鏡を掛け、原稿料を手に入れた時だけ、急に下宿の飯を不味がつて、晚飯には近處の西洋料理店へ行き、髭の先に麥酒の泡を着けて、萬丈の氣燄を吐いてゐたのだから、兩親が內職に觀世撚を撚るといふ手紙を貰た時には、又一寸妙な心持がした。若し此事が夫の六號活字の耳に入つて、雪江の親達は觀世撚を撚つてゐるさうだ、一寸珍だね、なぞと素破拔かれては餘り名譽でないと、名譽心も手傳つて、急に始末氣を出し、夫からは原稿料が手に入ると、直ぐ多少餘分の送金もして、他の物を撚つても、觀世撚だけは撚つて呉れるなと言つて遣つた。

で、此時もツイ二三日前に僅かばかり原稿料が入つた。先月は都合が惡くて送金しなかつたから、責めて此內十圓だけは送らうと、紙入の奥に別に紙に包んで入れて置いたのが、お糸さんの事や何や角やに取紛れてまだ其儘になつてゐる。それをお糸さんの身上話を聽くと、ふと想出して、國への送金は此次に延期し、寧そ之をお糸さんに呈して又敬意を表さうかと思つた。が、何だか其では聊か相濟まぬやうな氣もして、何となく躊躇せられる一方で、矢張何だか妙に……かう……敬意を表したくて耐らない。で、お糸さんが軈てお燗を直して持つて來て、さ、旦那、お熱い所を、と德利の口を向けた時だつた、私は到頭耐らなくなつて、しかし何故だか節儉して、十圓の半額金五圓也を呈して、不覺又敬意を表して了つた。

五十八

お糸さんに敬意を表して見ると、もう半端になつたから、國への送金は見合せてゐると、母から催促の手紙が來た。其中に何だか父が加減が惡くて醫者に掛つてゐるとかで、物入が多くて困るとかいふやうな事も書いてあつたが、例の强請だと思つて、其内に都合して送ると返事を出して置いた。其時は眞に其積で强ち氣休めではなかつたのだが、彼是取紛れて不覺其儘になつてゐる一方では、五圓の金は半襟二掛より效能があつて、夫以來お糸さんが非常に優待して吳れるが嬉しい。追々馴染も重なつて常談の一つも言ふやうになる。もう少しで如何にかなりさうに思へるけれど、何時迄經つても如何にもならんので、少し焦れ出して、又欲しさうな物を買つて遣つたり、連出して甘い物を食べさせたり、種々してみたが、矢張同じ事で手が出せない。お糸さんといふ人は滅多に手を出せば、乾度甚い恥を掻かすけれど、一度手に入れたら、命懸けになる女だと、何故だか私は獨りで極めてゐたから、危險で手が出せなかつたが、傍から觀れば、もう餘程妙に見えたと見えて、他の客はワイ／＼いつて騷ぐ、下女迄が私の部屋を覗込んでお糸さんが見えないと、旦樣は、なぞといつて調戲ふやうになる。かうなると、お糸さんも目に餘つて、或時何だか厭な事をお糸さんに言つたとかで、お糸さんが憤つてゐた事もある。私は何だか面白いやうな焦心たいやうな妙な心持がする。それで夢中になつて金ばかり遣つてゐたから、一度申譯に聊かばかり送金した限で、不覺國へは無沙汰になつてゐる中に、父の病氣が大層好くないと母からは又送金を求めて來る。遂に伯父からも注意が來た。其時だけは私も少し氣が附いて、急いで、書掛けた小說を書上げて若干かの原稿料を受取つたから、明日は早速送金しようと思つてゐた晚に、お糸さんが切に新富座の當り狂言の噂をして觀たさうな事を言ふ。と、私も何だか觀せてやり度くなつて、芝居だつて觀やうに由つては幾何掛るもんかと、不覺口を滑らせると、お糸さんが例になく大層喜んだ。お糸さんは何を買つても、澄まして禮を言つて、其場では左程嬉しさうな顏もせぬ女だつたが、此時ばかりは餘程嬉しかつたと見えて、大層喜んだ。

もう後悔しても取返しが附かなくなつて、止むことを得ず好加減な口實を設けて別々に內を出て、新富座を見物した其夜の事　お糸さんを一足先へ還し、私一人後から遲蒔に下宿へ歸つたのは、夜も彼是十二時近くであつたらう。もう雨戶も引寄せて、入口の大戶だけを殘してあつた。留守居をしてゐるお竹が顏を見るなりでお歸んなさいと言つたが、お糸さんの姿は見えなかつた。

部屋へ來て見ると、ランプを細くして既う床も敷いてある。私は場でお糸さんと膝を併べてゐる時から、妙に氣が燥つて、今夜こそは日頃の望をと、芝居も碌に目に染みなかつた。時々ふと氣が變つて、此樣な女に關係しては結果が面白くあるまいと危む。其傍から直ぐ又今夜こそは是が非でもといふ氣になる。で、今我部屋へ來て床の敷つてあるのを見ると、もう氣も坐ろになつて、他の事なぞは考へられん。今にも乾度來るに違ひない、來たら……と其事ばかり考へながら、急いで寢衣に着易へて床へ入らうとして、ふと机の上を見ると、手紙が載せてある。手に取つて見ると、國からの手紙だ。心は狂つてゐても、流石に父の事は氣になるから、手早く封を切つて讀むと、まづ驚いた

五十九

此手紙で見ると、大した事ではないと思つて

ゐた父の病氣は其後甚だ宜しくない。まだ醫者が見放したのでは無いけれど、自分は最う到底も直らぬと覺悟して、切に私に會ひたがつてゐるさうだ。此手紙御覽次第直樣御歸國待入申候と母の手で狼狽へた文體だ。

私は孝行だの何だのといふ事を、道學先生の世迷言のやうに思つて、鼻で遇つてゐた男だが、不思議な事には、此時此手紙を讀んで喫驚すると同時に、今夜こそはと衝り立つてゐた氣が忽ち萎えて、父母が切に懷かしく、何だか泣きたいやうな氣持になつて、儘になるなら直ぐにも發ちたかつたが、かうなると當惑するのは、今日の觀劇の費用が思つたよりも嵩んで、元より幾何もなかつた懷中が甚だ輕くなつてゐる事だ。父が病氣に掛つてから、度々送金を迫られても、不覺怠つてゐたのだから、家の都合も嘸惡からう。今度こそは多少の金を持つて歸らんでは、如何に親子の間でも、母に對しても面目ない、といつて、お糸さんに迷つてから、散々無理を仕盡した今日此頃、もう一文の融通の餘地もなく、又餘裕もない。明日の朝二番か三番で是非發たなきやならんがと、當惑の眼を閉ぢて床の中で凝と考へてゐると、スウと音を偸んで障子を明ける者が有るから、眼を開いて見ると、先刻迄待憧れて今は忘れてゐるお糸さんだ。竊と覗込んで、小聲で、「もうお休みなすツたの？」といひながら、中へ入つて又竊と跡を閉めたのは、十二時過で遠慮するのだつたかも知れぬが、私は一寸妙に思つた。

「どうも難有うございました、」とゐめるやうに私の床の側に坐りながら「好かつたわねえ、」と私と顔を看合せて微笑した。

今日は風呂日だから、歸つてから湯へ入つたと見えて、目立たぬ程に薄りと化粧つてゐる。寢衣か何か、袷に白地の浴衣を襲ねたのを着て、扱をグル／＼卷にし、上に不斷の羽織をはおつてゐる秩序ない姿も艶めかしくて、此人には調和が好い。

「一本頂戴よ、」といひながら、枕元の机の上の卷烟草を取らうとして、袂を銜へて及腰に手を伸ばす時、仰向きに臥てゐる私の眼の前に、雪を欺く二の腕が近々と見えて、懷かしい女の香が芬とする。

「何だかまだ芝居に居るやうな氣がして相濟まないけど、」とお糸さんが烟草を吸付けて、フツと烟を吹きながら、「伯母さんの小言が臺詞に聞えたり何かして、如何樣に可笑しいでせう、」と微笑した所は、美しいといふよりは仇ッぽくて、男殺しといふのは斯ういふ人を謂ふのかと思はれた。

以下書肆の希望に依つて削除する

六十

翌朝は夙く發つ積だつたが、發てなくなつた。尾籠な事には自から尾籠な法則が有るから、既に一種の關係が成立つた以上は、女に多少の手當をして行かなきやならん！――ナニ、私は思はざるを得なかつた。見榮坊だから、金が無くても金の有る風をして、紙入を叩いて遣つて了ふと、もう汽車賃も殘らない。なに、父はまだ危篤といふのぢやなし、一時間や二時間發つのが後れたつて仔細は無からうと、自分で勝手な理窟を附けて、女には内々で朝から金策に歩いたが、出來なかつた。晝前に一寸下宿へ歸ると、留守に國から電報が着いてゐた。胸を轟かして、狼狽て封を切つて見ると、「父危篤直歸れ」だ。之を讀むと、私はわな／＼と震へ出した。卒然下宿を飛び出して、血眼になつて奔走して、辛うじて聊かの金を手に入れたから、下宿へも歸らず、其足で直ぐ東京を發つて、汽車の幾時間を藻掻き通して、國へ着いたのは其晩八時頃であつた。

停車場で俥を雇つて家へ急ぐ途中も、何だか氣が燥つて、何事も落着いて考へられなかつたが、片々な思想が頭の中で狂ひ廻る中でも、唯息のある中に一目父に逢ひたい逢ひたいと其ばかりを祈つてゐた。時々ふッと最う駄目だらうと思ふと、錐でも刺されたやうに、急に胸がキリ/\と痛む。何とも言へず苦しい。馴染の街々を通つても、何處を如何俥が走るのか分らない。唯俥上で身を揉んで、無暗に俥夫を急立てた。俥夫が何だか腹を立てて言つたが、何を言つてるのか分らない。唯無暗に急立てるばかりだ。

漸くの思で家へ着くと、狼狽てて俥を飛降りて、俥賃も拂つたか、拂はなかつたか、卒然門内へ驅込んで格子戸を引明けると、ハッと燈火が射して、其光の中に人影がチラ/\と見え、家内は何だか取込んでゐて話聲が譟然と聞える中で、誰だか作さん——私の名だ——作さんが着いた、作さんか、と呟く。何處からか母が駈出して來たから、私が卒然、「阿父さんは？……」と如何やら人の聲のやうな皺嗄聲で聞くと、母は妙な面をしたが、「到頭不好かつたよ……」といふより早く泣出した。私はハッと思ふと、氣が遠くなつて、茫然として母が袖を顔に當てて泣くのを視てゐたが、ふと何だか胸が一杯になつて泣かうとしたら、「まあ、彼方へお出でなさい、」と誰だか袖を引張るから、見ると從弟だ。何處へ何しに行くのだか、分つてゐるやうな、分つてゐないやうな、變な鹽梅だつたが、私は何だか分つてる積で、從弟の跟に從いて行くと、人が大勢車座になつてゐる明るい座敷へ來た。と、急に私は何か母に聞きたい事が有るのを、忘れてゐたやうな氣持がして、母は如何したらうと後を振向く途端に、「おゝ、作か、」といふ聲が俄に寂然となつた座敷の中に聞えたから、又此方を振向くと、其處に伯父が居るやうだ。夫から私は其處へ坐つて、何でも漫に其處に居る人達に辭儀をしたやうだつたが、其中に如何いふ譯だつたか、伯父の側へ行く事になつて、側へ行くと、伯父が、阿父さんも到頭此樣になられた、といひながら、側に臥てゐる人の面に掛けた白い物を取除けたから、見ると、臥て居る人は父で、何だか目を瞑つてゐる。私は其面を凝と視てゐた。すると、何時の間にか母が側へ來てゐて、泣聲で、「息を引取る迄ね、お前に逢ひたがりなすつてね……」といふのが聞えた。私はふッと目が覺めた、目が覺めたやうな心持がした。あゝ、父は死んでゐる……ッイ其處に死んでゐる……[illegible]と父は[illegible]痩果てた其死顏がツイ目の前に見える。之を見ると、私は卒然として、あゝ、濟なかつた……と思つた。此刹那に理窟はない、非凡も、平凡も、何もない。文士といふ肩書の無い白地の尊い人間に戻り、あゝ、濟なかつた、といふ一念になり、我を忘れ、世間を忘れて、私は……私は遂に泣いた……

六十一

後で段々聞いて見ると、父は殆ど碌な療養もせずに死んだのだ。事情を知らん人は壽命だから仕方がないと言つて慰めて呉れたけれど、私には如何しても然う思へなかつた。全く私の不心得で、まだ三年や四年は生延びられる所をむざ/\殺して了つたやうに思はれてならなかつたから、深く年來の不孝を悔いて、責めて跡に殘つた母だけには最う苦勞を掛けたくないと思ひ、父の葬式を濟せてから、母を奉じて上京して、東京で一戸を成した。もう斯う心機が一轉しては、彼樣な女に關係してゐる氣も無くなつたから、女とは全で手を切つて了つた。其時女の素性も初て知つたが、當人の言ふ所は皆虚構だつた。しかし其樣な事を茲で言ふ必

要もない。止めて置く。
で、生來初て稍眞面目になつて再び筆硯に親しまうとしたが、もう小說も何だか馬鹿らしくて些とも書けない。泰西の名家の作を讀んで見ても、矢張馬鹿らしい。此樣な心持で碌な物が出來る筈もないから、評判も段々落ちる、生活も困難になつて來る。もう私もシュン外れだ。此處らが思切り時だらうと思つて、或年意を決して文壇を去つて、人の周旋で今の役所へ勤めるやうになつたが、其後母の希望を容れて、妻を迎へ、子を生ませると、間もなく母も父の跡を追つて彼世へ逝つた。

これが私の今日迄の經歷た。

つく〲考へて見ると、夢のやうな一生だつた。私は元來實感の人で、始終實感で心を苛めてゐないと生疎になる男だ。實感で試驗をせんと自分の性質すら能く分らぬ男だ。それだのに早くから文學に陷つて始終空想の中に漬つてゐたから、人間がふやけて、秩序がなくなつて、眞面目になれなかつたのだ。今稍眞面目になれ得たと思ふのは、全く父の死んだ時に經驗した痛切な實感のお庇で、卽ち亡父の賜だと思ふ。彼の實感を經驗しなかつたら、私は何處迄だらけて行つたか、分らない。

文學は一體如何いふ物だか、私には分らない。人の噂で聞くと、どうやら空想を生命とするもののやうに思はれる。文學上の作品に現はれる自然や人生は、假令へば作家が直接に人生に觸れ自然に觸れて實感し得た所にもせよ、空想で之を再現させるからは、本物でない。寫し得て眞に逼つても、本物でない。本物の影で、空想の分子を含む。之に接して得る所の感じには何處にか遊びがある、卽ち文學上の作品にはどうしても遊戲分子を含む。現實の人生や自然に接したやうな切實な感じの得られんのは當然だ。私が始終斯ういふ感じにばかり漬つてゐて、實感で心を引締めなかつたから、人間がだらけて、ふやけて、やくざが愈どやくざになつたのは、或は必然の結果ではなかつたか？ 然らば高尙な純正な文學でも、こればかりに溺れては人の子も賊はれる。況んやだらしのない人間が、だらしのない物を書いてゐるのが古今の文壇の、、、。

二葉亭が申します。此稿本は夜店を冷かして手に入れたものでございますが、跡は千切れてございません。一寸お話中に電話が切れた恰好でございますが、致方がございません。

情ない荏けたやうな無能の裏ばかり、こんな手腕なら、卑しい職人となつてゐるのが相當であるのに、自分で勝手に美術家に成り濟ましてゐるのである。尤も美術家となつても、自分の天分には忠實で、心の裏の中へ手の裏を持込んではゐるが、矢張同じ顏料で、同じ畫法で、同じ慣れた腕であるが、此腕は人の腕といふよりは寧ろ粗末な自動人形の腕である！

　畫家は久らく汚ならしい繪の前に立つてゐたが、後には最う繪の事などは思つてゐない。ところが亭主、これは何處となく燻ぶつた色の淺黑い男で、フリーズの外套を着て、前の日曜に剃つた儘でといひさうな髯むしやであつたが、先程から畫家を捉へて傍寄りつけて、獨りで直段の押問答までやつて、まだ何れが氣に入つたとも、欲しいとも知れぬうちに、ちやんと直を決めて了つてゐる。—この百姓と景色繪とは二十五ルーブリに致して置きませう、へい。巧く畫いたぢや御座りませんか！　眼が覺めるやうだ。只今會所から持つて來たばかりで、未だ漆も乾いてません。でなきや、こちらの冬景色——こりや如何でございます？　十五ルーブリ！　線ばかりでも大した金目のものだ！　良い繪でさ！」と云つて、ぽんと布を彈いたが、大方冬景色の脆弱ではないのを示せようといふ氣で——皆束つて持たせて差上げませうか？　御客様は何處樣で？　小僧や！　細繩を持つといで！—

　と敏捷い亭主が本當に繪を束げに懸つたので、畫家は初めて眼の覺めたやうな面をして、

—まア、待つて呉れ、然う急れちや困る。

　こんなに長い間を懸けてゐながら、何も買はないでは何だか極りが惡いから、

—待つてお呉れ、此處に何か無いか、一つ見よう」と屈んで、床に山のやうに積上げた、手擦れた、塵だらけの、見た通り、餘り大事がられてゐない、古い繪を擇り出したが、最う血筋が絶えてゐるかも知れぬ、ずッと昔の、何處かの人の肖像畫、全で正體の分らぬ、地の切れ〴〵になつた、何かの圖、箔の剝げた額、などといふ廢物ばかりで。けれども畫家は何か掘出物が有るかも知れぬと思つて擇り出した。隨分廉賣店で古物の中から名家の畫いたものを見附け出した話も聞いてゐるから。

　亭主はそれと見て、最うこせつくのを廢めて、平生の通りどつしりした風になつて、更に戶口の所に立つて、片々の手で店を指しながら往來の人を呼び始めた。—入らしやい、入らしやい、繪をお召しなさい。さア〳〵入らしやい、會所より大立の繪で御座い。—散々に喋り立つたが、大概は喋り損となる。そこで向うの、これも店頭に立つてゐる、小片布屋の亭主と談話を始めたが、これにも飽足したころ、ふと店に客の居ることを憶出したから、見物に背を向けて、內へ入つて來て、—旦那、如何で御座ります？　何か見附かりましたか？—と云つたが其時は畫家がとある畫を凝視めて身動きもせずに、久らく立つてゐた時で、畫は何時か一度は立派な事も有つたらうが、今は處々箔の剝落ちた大きな緣を附けた肖像畫で。

　顏色の青黑い、顴骨の高い、露れた、瘦こけた老人の肖像で有つたが、何でも恐ろしく精神の激動した時に寫つたものと見えて、面相が北國の人らしく無い、活々としてゐる。衣服は寬濶した亞細亞風の奴で。隨分損所もあれば、塵だらけでもあつたが、それを拂つて見ると、如何にも大家の手に成つたものに違ひない。未だ完成げては無いやうであるが、筆力は目を駭かすばかりである。畫家は殊に眼に滿幅の精神を注いで、有たけの力を此に込めたものと見えて、尋常のもので無い。佶と睨んだ、地を拔出しさうな眼付で。全體の調和もこの怪しく活々した

眼のために打壊されんとする許りである。戸口の處へ持出して見ると、眼は益々睨む、見物の眼にも然う見えたと見えて、畫家の後に立つてゐた女が、「睨んでるよ！」と云つて後退りをした位で。何とも譯の分らぬ不快な心地になつて、畫家は肖像畫を地面へ置いた。

「それは如何さまで？　それをお存し下さい！」と亭主は云ふ。

「何程だね？」と聞く。

「それならお廉く致して置きます。七十五哥に致して置きませう。」

「いや／＼。」

「それならお幾干で——」

「二十哥。」と言棄てゝ行きさうにする。

「それぢや愍然だ！　二十哥ぢや、旦那、後生だつて買へやしません。では明日願ひますか？　旦那、旦那、一寸お戻んなすつて、せめて最う十哥色氣を附けて遣つて下さい。ちよッ、檢けとけ、檢けとけ、二十哥で願つて了へ。本當に、口開だから檢けとくんですぜ。」と云つて變な手眞似をして見せたが、其の樣子が宛で「如何せ此樣な事だらうと思つた。遣つて了へ、／＼」と云ひさうで。

といふのでチャルトコフは全く思懸なく古い肖像畫を買つたが、買ふと同時に、「何だと云つて此樣な物を買つたのだらう？　是が何の役に立つ？」と思つた。けれども仕方がないから、隱袋から二十哥の銀貨を出して亭主に渡して、畫を小脇にして歩き出した。道でふと心附いて見ると、今二十哥を拂つて了つたとすれば最う跡に一文も無い、と思ふと眼がくら／＼として、忌々しいと同時に、何の關ふものかと云ふ氣にもなる。「ちよッ、厭になつて了ふな！」と呟いたが、何か面白くない事になると、露西亞人は何時も此樣な心地になるもので。で、殆ど機械的に急足に歩つて來たが、最う何も目に留らない。空は未だ半ば夕燒に赤らんで、西を向いた家は皆その暖かさうな反映を受けてゐる一方には、冷に蒼味を帶びた月影が次第に煌めいて來る。家や往來の人の足は朦朧した淡い影を尾のやうに地に曳いてゐる。畫家は底の澄んだ、ほんのりと淡紅い空を段々見上げ出したが、軈て「好い色合だなア！」といふ傍から、「ちよッ、忌々しい！」と口を滑らして、小脇に抱へた額が動もすれば擦落ちさうになるので、それを搖上げ／＼足を早めた。

憊れ切つて、しつとり汗になつて、ワシリエフスキイ島の十五丁目の住居まで歩つて來て、遣ひ棄てた水だらけの、猫や犬の足跡の階段に附いた梯子段を息を切りながら登つて、入口の戸を敲いて見たが、何の挨拶も無い、僕は居ないものと見える。仕方が無いから、窓に凭掛つて、氣永に待つてゐると、軈て背後の方で跫音がする、跫音の主は青いシャツを被た若い男で、畫家の傍には助手でもあれば、モデルでもあれば、繪具摺でもあれば、掃除人でもある。尤も床を掃く傍から長靴で直ぐ汚して了ふ掃除人であるが、名をニキータと稱つて、旦那の留守には、戸外ばかりを彷徨いてゐる男で。ニキータは久らく鑰で孔を尋ね迷つてゐたが、暗いので何處が孔だか更に解らない。やう／＼戸が開く。チャルトコフは入口の間へ入つた。恐ろしく寒い間で、尤も主人は氣が着かぬ樣であるが、繪師の家の入口の間となると、何處もかうしたもので。外套をも脫らず、直に畫室へ入つたが、これは廣い、天井の低い、窓の皆凍着いた、眞四角な室で、石膏細工の手の片地だの、布を張つた枠だの、描掛けたの、描損けたの、椅子に掛けた小布片だのといふ、種々の美術的廢物が竝べてある。大層疲れたので、外套を脫つて、持つて居た肖像畫を布地の空いたのが二本あつた其間に匆卒に置くと其儘、狭い小さな

長椅子に身體をどつしり落したが、此長椅子には革が張つてあるとも言ひかねる、何故なればその昔は革の押へに銅の鋲を幾筒か打附けたものであるが、今は鋲は鋲、革は革と分離になつて了つてゐて、革の下へはニキータの細工と見えて、黒い靴足袋だの、襯衣だのといふ汚物が突込んである。さてその長椅子に腰を掛けて、それから久らく横になつてゐた。尤も此狹い長椅子の事であるから、相應に窮屈な想をしなければならぬが、横になつてゐて、それから蠟燭を持つて來いと命ずると、ニキータが、

「蠟燭なんざ有りやしません。」

「如何して？」

「昨夜だつて有りやしません。」

成程然う云へば昨夜も蠟燭なしに了した、と心附いて見れば、氣が休まつたか、默つて了つて、先づ兎も角も衣服を脱いで、恐ろしく着古した便服に着替へると、ニキータが、

「それからまた、大家さんが來ました。」

「家賃の催促にだらう？　大方そんな事だらうと思つた。」と蚊を拂ふやうな手眞似をする。（これは放置といふ手眞似で。）

「人を連れて來ました。」

「誰を？」

「誰だか知りませんが、警察の人です。」

「警察官なんぞ何爲連れて來たんだらう？」

「何爲だか知りませんが、家賃を納めんからつていつてましたつけ。」

「そんな事して如何しようと云ふんだらう？」

「如何しようつていふんだか知りませんが、何でも家賃を納めなきや、店立を喰はせるんだつていつてましたつけ。明日又來るつていつてましたつけ。」

「來るなら來るさ。」と平氣な面をしたが、何處か心細さうでも有る――恐ろしく氣色が惡くなつて來た樣子で。

一體此チャルトコフと云ふ男は畫にかけては天才のある、將來なか／＼多望の青年で、その畫いた物を見ると、觀察も善いが、着想も面白く、成るべく自然に近つかうとする壯な意氣込もちら／＼見える。それゆゑ畫學の師となつた人も度々言ひ聞かした事がある。

「氣を注けなさいよ、君は天才があるがの、それを殺してはならんよ。けれどもの、君は耐忍力に乏しいから、何か面白い事があつて、それが氣に入つたとなると――それにばかり浮身を窶して、他の事は關ひ附けない、何のくだらんと云つたやうな調子で見向もしなくなるがの、人氣繪師にならんやうに氣を着けなさいよ。今から最う何だか繪の具が大層目立つ氣味がある、筆が遒勁しない、時に寄ると全然力がなくて筆勢も何も見えないことがある、何でも人の目に着き易い所を氣にして、兎角俗受のしさうな彩を附けたがるが……放心すると、英吉利畫になるよ。用心しなさいよ。君は最う體裁なんぞが氣になると見えて、時々洒落た頸卷をしたり、立派な帽子を被つたりするが、宜しくないの。そりや俗受のする繪を畫けば錢が取れるんだから、一寸は氣も迷ふがの、そんな事をすれば天才は亡くなるばかりで、發展はせんよ。だから何でも辛抱が肝腎だ、何でも仕事に對つたら篤と考へてお遣り、洒落氣なぞは亡くなさなきや駄目だよ。他の者が錢を儲けるなら儲けさせて置くさ――何も君の分が失くなる譯ぢやないからの。」

先生が斯ういふも萬更無理でもない。成程、我の美術家は時とすると、一寸洒落た風をして酒でも飲んで遊び行いて、まア早く云へば――花を遣つて見たく思ふこともないではないが、それでも感心に辛抱してゐる。筆を執つて萬事を忘れてゐることも度々あるが、そんな時に無理に筆を措かせられると、面白い夢を見てゐる

却退つて、暖いた調子で、一視てゐる、畫いた眼で視てゐる！——と言つた程である。すると、ふツと胸に浮んだは曾て師匠から聞いた有名なレオナルド・ダ・ウィンチの逸話で、此畫伯ふとさる肖像畫に着手つたことがあるが、何年經つても出來上つたと云はない。けれども、リザーリの言ふ所で見ると、其畫は誰が見ても精を極め美を極めたもので、殊に眼の緻密には誰も驚かぬものは無い程で、極々細い、見えるか見えぬ程の細管までが、漏さずちやんと寫し出してあつたと云ふ。けれども、今此目前にある肖像畫には何か不思議な所がある。既う斯うなると美術も美術でない、全體の調和までが之が爲に壞されてゐる。此は生きてゐる、人の眼である！　生きてゐる人の眼を挾つて來て此處へ嵌めたもののやうに思はれる。美術家の作つた物は、撰んだ題目が如何に厭なものでも、見れば津々として興味の盡きぬものであるが此畫を視ると滅入りさうな不快な氣持になる。變に思つて畫家も、「妙だな！　宛で活きてゐる、實物だ。それにしても何故變に不快な心持がするのだらう？　實物の有樣のやうに成つて一々模寫するのが既に過つてゐるので、そんな事をするから調子外に醜を曝揚けたやうな醜態になるのかしら？　それとも心を入れずに、同感も何もせずに、漠然と物を寫すと、物の實際の厭な處ばかりが出て、萬物に藏れて居る一種不可思議の想が色を着けて見せんからであらうか？　矢張美人の眞を得ようと思つて、解剖刀で腹を剖いて見ても、穢いばかりで何も得る所がないと同じ道理かな。尋常の見所のない自然でも、或る美術家が寫すと、一種の色が着いて、厭な感じが起らないばかりか、反つて何となく娯しくなつて、それを覽た後では、周圍の萬象が刻々に推移する光景も以前よりは穩かに調子が整つて見えるものだけれども、其自然を他の美術家が寫すと、同じやうに有の儘を寫しても、厭な見苦しい物に見える。これは如何いふ譯だらう？　いや、自然の儘を寫しても色々着けるものを缺いてゐるな。例へば景色のやうなもので、如何樣に絶景であつた所が、空に太陽と云ふものがないと、何か物足らぬやうな心持がする、それと同じ理窟かな。」

などと思つて、また肖像の不思議な眼を熟く視ようと思つて傍へ寄ると、如何にも睨られるやうなので、慄然とする。最う斯うなると生人を模したものではなくて、墳穴を這出した死人の面を寫つたものである。恍惚とした夢のやうな月影に其處らの物が總て白晝の判然した所を失つて全く別物になる其所爲でか、それとも他に何か理由が有るか知らぬが、兎に角、何故ともなく、ふと一人で居るのが薄氣味惡くなつて來たから、密と畫の傍を離れて、他方を向いて、成るたけ見ぬやうにしてゐるけれども、どうも眼が自然に横眼を遣つて畫を見てならぬ。結局は室の内を一人で歩くのも無氣味になる。今にも誰やら後から跟隨で來さうに思はれるので、動もすれば怖々振返つて、後を視てゐた。此男は想像も神經も鋭敏の方であるが、曾て物に臆した事はない。けれども今夜ばかりは何故かう恐ろしくて成らぬのか所由が判らぬ。隅の方で椅子に憑つて見たが、それでも今にも誰やらが背後から面を覗き込みさうに思はれてならぬ。入口の間でニキータが高鼾をかいてゐるのが聞えても、それでもどうも紛れられぬ。そこで、遂に下を向いた儘で、おそる／＼起立つて、衝立の蔭の寢臺へ上つて横になつたが、衝立の隙間からは月の射した室の光景が隱見して、壁に掛けた肖像畫が、正面に見える。その眼が益々變に仔細ありげに此方を睨み詰めて、他の物には眼を觸れぬやうな鹽梅である。堪らなくなつたので、遂に起立つて、臥床の上敷を取

つて、肖像畫の傍へ來て、矢庭にそれを包んで了つた。
　からして置いて、又床に就いて、少しは落着いて、美術家といふ者の哀れなこと、薄命なこと、自分がこれから先も艱難しなければならぬことなどを考へ出したが、その眼は何時となく、衝立の隙間越しに、上敷で包んだ肖像畫を視てゐる。月影を受けて上敷は愈々眞白になつてゐたが、何だか恐ろしい眼の光るのが布越に見えるやうに思はれる、慄然としながらそれを凝視めた其樣子は、宛と其樣な馬鹿な事のない事を確めたいやうな鹽梅であつたが、其內に上敷の布がいつしか脫れて、肖像畫が露になつて、四邊の物には眼も觸らさず、宛然洞穿きさうな眼付で、直と此方を凝視めてゐるのが、紛ふ方なく、まざ〳〵と見える……と思ふと、胸が冷りとした。頓て老人は動き出して、額緣に兩手を掛けて身を動かしたかと思ふと、足を二本ぬツと出して、額を躍り出た……衝立の隙間から覗いて視ると、空になつた額ばかり見える。すると、室の內に跫音がして、段々衝立の傍へ來る。美術家は胸で早鐘を撞き出した。恐ろしいので息氣を凝して、今にも老人が衝立の向うから面を出しさうに思つて居ると果して例の青銅色の面がぬツと出て、衝立の內を覗いて、大きな眼でじろ〳〵視廻す。チャルトコフは聲を立てようと焦心つたが、聲が出ない、動かう、手足を働かせようとして見たが、動きが取れない。ハッと息氣を引いたまゝ、目を開いて、此背の高い、寬濶した亞細亞人の衣みたやうなものを着た、恐ろしい幻像を視て、如何な目に逢ふことかと思つてゐると、老人は足の方へ來て腰を掛けて、それから衣服の裏から何か取り出したが、それは袋であつた。で、老人が其袋を開けて、兩隅を摘んで振ふと、何か重いものを包んだ、長い棒のやうなものがどッさり落ちた。視れば孰れも皆青い紙に包んで、上に千チェルヴォーネツ（金貨の名）としてある。老人が寬い袖口から長い骨ばつた手を出して、其包を解くと、金貨が煌々とした。前後も辨へぬ程恐ろしく苦しかつたとは云ふものの、こればかりは流石に眼に留つて、恍惚として、骨ばつた手が包を解いたり、金貨が煌り、ざら〳〵として、又包まつたりするのを見てゐると、何時の間にかその內の一つが頭の方の寢臺の脚の處に轉つて來てゐる。わなゝきながら其を引摑んで、發見られはしなかつたかと、恐る〳〵老人を見ると彼は自分の仕事に氣を奪はれてゐる樣子。で包を搔集めて、それを再び袋の中へ納れて、此方は視向きもせずに、衝立の向うへ出て行つたから、跫音を聽いてゐると、段々彼方へ行くやうであるが、胸が怦々する。緊り手を握つて、慄々震へてゐると、――又此方へ戻つて來るやうである……一包足りないのに氣が附いたらしい。すると衝立の向うからぬつと又面が出たから、ハッと思つて、碎けるばかりに金包を握詰めて、一生懸命に踠いて、聲を立てる拍子に――眼が覺めた。
　冷汗にしつとり濡れて、心臟は恐ろしく鼓動して、胸が迫つて今にも息氣が止まりさうになる。「夢だつたか？」と云つて、兩手で頭を押へた。けれども、夢にしては餘り恐ろしく、まざまざとしてゐる。老人が額へ入るのを見たのは最う眼が覺めた後の事で、其寬濶した衣服の裾も瞥と見えたが、手にもつい今しがたまで何か重いものを持つてゐたやうな心持がする。
　月影は室の內を照らして、布地だの、細工物の腕だの、椅子に載せた布片だの、洋袴だの、汚れた長靴だのと云ふものが薄暗い隅から明處へ面を出してゐる。ふと心附いて見ると、自分は寢臺に臥てゐると思ひの外、肖像畫の前に眞向に立つてゐるのである。如何して此處まで出て

來たか——頓と覺えがない。そればかりか、額は全く露出になつてゐて、上敷が掛つてゐない。愕然として、身動きもせず、額を視てゐると、人間の眞物の眼で、直と視詰められたやうな氣持がする。覺えず冷汗を額ににじませて、其處を去かうとすれば、足が床に生抜いたやうになつてゐる。只見ると、——最う夢とは謂はれない、老人が滿面を蠢かして、口を尖らして宛然人の生血を吮ひさうにする……呀と言つて飛退く拍子に——眼が覺めた。

「又夢を見たのか？」轟く胸を鎭めあへず、身の周圍を摸索つてみると、なるほど、寢臺に臥てゐるので、眠入つた時の樣子に少しも變らぬ。前には衝立があつて、月影は室を限なく照らしてゐる。衝立の隙間から額が見えたが、形の如く布地で包んである。自分が包んだ通りになつてゐる。してみると、矢張夢であつた！ けれども、握詰めた手には何か持つてゐた樣な覺えが今だに爲る。胸の動悸は烈しく、殆ど氣味が惡い程で、苦しくて堪らぬ。隙間へ眼を當てて凝と額を視詰めてゐると、布地がまくれさうになつたのが瞭然見える、それを撥退けようとして、手を働かしてゐるやうな魔術である。「こりや堪らぬ、如何した事たらう！」と無上に十字を描いて喚く〳〵と同時に——眼が覺めた。

是もまた夢であつたか？ 氣も坐ろに夢中になつて、寢臺を飛下りたが、如何した事やら、頓と分らぬ。魘されたのか、襲はれたのか、熱に浮されたのか、それとも眞の幻像を見たのか、氣はわく〳〵する、血は荒れる。脈管といふ脈管では恐ろしく脈を搏つので、些と落着きたいと思つて、窓際へ來て、小窓を開けると、冷たい何かの香が紛とする風が颯と吹き入れて、快い心持になる。月影はいまだに屋根や白壁に射してゐたけれども、村雲の往來は稍繁くなつて來た。四邊は森としてゐる。をり〳〵辻馬車の軋る音が遠方に聞えたが、御者があぶれて客待をしてゐる中に、何時しかよぼ〳〵した瘦馬に汚ない何處かの横町へ轍込まれて、眠りこけてゐるのであらう。小窓から首を出して、諸家は久らく眺めてゐた。空は段々拂曉近い景色に爲つて來る。その内に睡氣を催したから、小窓を閉めて、奥へ入つて、寢臺へ這上る間もなく、死んだやうになつて、グッスリ眠込んだ。

大分日が長けてから漸々眼を覺したが、烟草に醉つた後のやうな鹽梅で、不快な心持がして、頭が痛める。室の内は暗淡く、戸外の空氣もじめ〳〵してゐて、繪を插んだり布地で張つたりした窓の隙間を漏れて入つて來る、何を爲ようといふ氣にもならず、不機嫌な、氣六しい、鷄の濡れしよぼれたやうな面をして、破れ長椅子に坐つてゐるうちに、ふと、昨夜の夢を憶出したが、憶出せば憶出すほど、夢中の恐ろしい事がまざ〳〵と眼に見えて、結局はどうも夢では無ささうに思はれる、唯睡耄けたのでは無ささうに思はれる、何か仔細が有りさうで、或は魔がさしたのではないかとも思はれる。布地を脱つて、日光に就いて、例の無氣味な額を視れば、成程眼は只ならず活々として見えるが、別段何も恐ろしい所はない、が唯視ると何だか不快な心持になる。けれども、どうも夢のやうには思はれない。夢のやうな中にも、何處か恐ろしい現が雜つてゐるやうな所があるばかりか、老人の眼付面色を見れば、何とか言つてゐるやうである、或は昨夜出て來た事を言つてゐるのかも知れぬ。また手には今しがたまで何か重い物を持つてゐた覺えがあつて、誰かが只今それを持つて去つたやうな氣がする。最う少し緊り握つてゐたら、眼が覺めても手の中には金包が屹度殘つてゐたらうものをとさへ思はれる。

「嗚呼彼の金が少しでも有つたらうになア！」と

了ヤアがつたでげす、御覽なさい、こんな物が畫いてある、こりや室でげせう。體裁好く道具でも竝べた、清潔な室でもあることか、この樣は如何でげせう？　破壞物や、襤褸や、引散らした儘を畫いてある。いや、はや、から室を汚されちや、かなはねえ！　これでげすもの、貴君、堪らんぢやげえせんか？　私の所にや大佐さんだの、プフミステーロワ、アンナ・ペトローウナだのといふ借家人が七年も住まつてるんだ……うんにや、繪師ほど可厭借家人はげえせん、錢の無え人はこれだから困る、もう懲々した。」

哀れなるかな畫家はこんなに口汚なく言はれても、それを、默つて聞いてゐなければならなかつた。家主が喋つてゐる側で、警察官は其處らの繪や畫稿を視てゐたが、して見ると、此警察官は家主よりも談せる男で、畫の趣味にしても滿更解らぬでも無いと見える。その中にヘッと言つて、裸體美人の畫に指ざしをして、

「こやつは何ぢや……きはどい奴ぢや。こりや如何してこんなに鼻の下が黑いですか？　烟草でも附いとる所ですか？」

「影です、」と面をも視ずに慳貪に言ふと、

「成程影ぢやアな。最う少し他處へ持つて行つたら如何ですか、鼻の下ぢや餘り眼立つぢやないですか？　こりや何ですか？」と傍の老人の肖像畫の側へ寄つて、「えらい面を爲ちよる。實際こんな面の人ですか？　丸で睨んぢよるやうぢや！　えらい氣六しい奴と見える！　誰の肖像ですか？」「これは或る老人の……」と言ひかけると、何やら破れた音がした、警察官の手は堅固一方に出來てゐるものであるから、額緣を強く握つたものと見えて片々が內へ折れ込んで、床の上へ落ちると、それと一所に靑い紙に包んだ物がどッさり落ちた。千チェルウォーネツといふ表書が瞥と見えたから、チャルトコフは狂人のやうになつて、飛蒐つて、引浚つて了つたが、緊り握つてゐる手が重みに自然と下る。

「錢の音ぢやないですか？」と警察官は言つたが、何か床に落ちた音は聞えても、チャルトコフの拾ひやうが速かつたので、何が落ちたとも分らなかつたのである。

「何の音でも可いぢやありませんか？」

「いや可え事はないです。貴君は錢を持つちよるなら、何故家賃を拂はんですか？　直ぐお拂ひなさい。」

「今日中に拂ひます。」

「何故貴下は先に拂はなかつたですか？　大家さんに心配を掛けたり、警察に手數を掛けたり、不都合ぢやないですか？」

「此金に手を附けたくなかつたのですが、しかし今晩家賃に不殘拂つて了ひませう、而して明日は他處へ引越します、最うこんな人の借家に居たくない。」

警察官は家主の方を向いて、

「そいでは、大家さん、拂ふちふことぢやアから、そいで、若し今晚貴下の請求の如拂はんぢやッたら、そん時は、繪師どん、容赦はしませんぞ。」

と言つて、警察官は三角帽を戴つて入口の間へ出て行く、續いて家主も出て行つたが、投首をして、何か思案にくれてゐた。

戶の締る音を聞いて、チャルトコフは「あゝ、漸と出て行つた！」と獨言を言つて、入口の間を覗いて見ると、ニキータが居るから、此奴が居ては不可と思つて、何か用を命けて出して遣る、後の戶を締めて室へ戻つて、胸をときめかせながら、金包を解きに懸つたが、解くと眞新しな、炎え立つばかりの金貨が出た。茫然として金貨の堆くなつた前に坐つて、「夢ぢやないか？」と疑つてゐた。包の中には果して千枚あつたが、昔夢で見たその儘の金貨である。暫く

の肖像金貨を握つて、ためつすがめつ眺めてゐたが、それでも未だ正氣にならない。世間には隨分先祖が、孫子の時代になつて身代を擲つて了ふことのあるを豫見して、そんな時の用心にと、大金を箱に詰めて、それを地か何かの底に埋めて置くといふ話が幾らもあるが、そんな事がふツと想像に浮んで、此金もそんな金で、此家かの祖父さんが孫に遺して置く積りで、形見の肖像畫の額縁に隱して置いたものではあるまいか？と思ふと、いろ／＼妄想も働き出して、或は自分は此金に何か縁があるのではあるまいか、此肖像畫と自分とは如何かいふ關係があつて、これが自分の手に入つたのも、何か前世の約束とでもいふ樣な事があるまいか、などとさへ思はれて來る。不思議なことに思つて、額縁を覆して視ると、横に溝が刳つてあつて、それへ板が插めてあつたが、氣の附かぬやうに極めて巧に出來てゐるので、若し警察官の太い手が毀して呉れなかつたなら、金貨は永劫世に出ずに了つたらうと思はれる、肖像を視れば、その手際には今更のやうに感服される。眼差の工合がどうも尋常の物でない、最う無氣味にも見えないがそれでも、見るたびに、矢張何となく不快な心地がする。「兎に角誰家の祖父さんにしろ、何もお禮だ、玻璃を嵌めて金縁を附けてやらう。」と口の中で言つて、目前に堆く積上げた金貨に更に手を觸れて見ると、ざく／＼するほど嬉しくなる。それを凝然と視詰めて、「はてな、如何して呉れよう？これだけあれば先づ三年は大丈夫だ、室に籠つて、仕事が出來る。顏料代もあれば、飯代もあるし、茶を買ふ錢もあるし、家賃も小遣錢も十分だし最う誰も邪魔をする者もなければ、五月蠅く來る者も無いと、そこで何を買はうかな。立派な人形を買はう、石膏細工の首無人形を誂へてやらう、それから足の雛形を揃へさせて、ウェネーラ(女神)を裝置るんだ。名畫の銅版畫を蒐集るんだ。然うして賣物なんぞは書かずに、落着いて三年も腕を磨きや、何の彼奴等に負けるもんか、立派な畫家になつて見せる。」

と分別に指圖をされて、その通りを口で言ふ肚の底では全く別の事を言つてゐたが、此方が寧ろ聲高にかんばしつてゐた。改めて金貨を視て見ると、如何しても二十二の血氣盛りであるから、さう眞面目な事ばかり、言つてゐられない、今までは羨ましさうに、舌舐ずりをしながら、遠方から視てゐた種々な物が、今は手の屆く處にあると、思つたばかりでも、むず／＼する。流行の上衣を着て、良い帽子を[illegible]物を腹一杯喰つて、立派な馬車を借りて、それから直ぐと劇場へ往つて、菓子屋へ往つて、彼處へ往つて、此處へ往つて、それからまた：：何處やらへも行く――と錢を摑むと其儘戸外へ出た。

先づ以て裁縫店へ寄つて、全然服裝を擇へたが、子供の如に、絶えず氣にして自分の風を振返つて視るといふ始末で、それから香水やら、香油やらを移し、買ひ込んで、ネーノスキイ通りでふいと出會つた、一枚玻璃を嵌つた、素見附の、立派な馬車を言ひ値で借りると、或る店で高價の眼鏡を買ふ氣もなく買つて、種々の頸卷をつい餘分にうんと買ひ込む、斬髪店で髪を捲かして、それから何の用も無いに馬車を驅つて市内を二遍乘廻す、菓子を妄に喫ひ散らして、其店を出ると此度は、フランツーズといふ料理店へ寄つたが、此料理店の事は今まで遠方で噂を聞いたばかりであるから、チヤルトコフに取つては、支那帝國と同じやうなものであつたので、其店では肱を張つて腰を据めながら、食事をして、えらい高慢ちきな面をして、相客の面を尻眼にかけて、動もすれば姿見に對つて捲髪を繕つてゐたが、それから未だシャンパンを

一齣空けた、これも今までは噂に聞いたばかりの物である。少しちろ〳〵眼になつて、威勢好く、活潑に、之を露西亜風で言へば、悪魔には縁の無い顔色をして戸外へ出て、逢ふ人毎に眼鏡を向けて、反身になつて徒歩道を通つて橋へ掛ると、ふッと以前の師匠に出逢つたが、素知らぬ顔をしてズッと摺違つたので、師匠は呆気に取られて、茫然と後影を見送つた儘、久らく立竦んでゐたが、其顔には疑問標が浮んでゐた。

枠だの、布地だの、繪だの、といふ所有道具を其晩立派な借家へ運ばせて、目ぼしい物は眼立つ處へ列べ、見ともないのは隅の方へ片附けて、チャルトコフは絶えず姿見を覗きながら、立派な室の内を歩いてゐたが、腹の中では、後とも云はず只今ぱッと名を揚げて喝采と言はせたい、と思ふと、何處でか、「チャルトコフ、チャルトコフ、貴下はチャルトコフの畫を御覧になりましたか？　えらい筆勢で、全く天才が有るので。」などといふ聲が聞えるやうである。欣々しながら室の内を歩いてゐたが、魂は最う有頂天に飛んでゐた。翌日金貨十枚ばかりを持つて、さる評判の好い新聞の主筆を訪ねて、何卒格別の評判を賴むと申込むと、記者先生其場でチャルトコフの事を先生と稱へて、兩手を握つて、姓名住所など仔細に訊ねたが、翌日になると、新發明脂蠟燭の廣告の次に、こんな標題で一篇の紹介文が新聞に出た。

俊才家チャルトコフ氏を紹介す

急々都下の人士に告ぐ、悦べや人々、大なる掘出物あり、我國元來明眸皓齒の人に乏しからずと雖も、今日までは之を布幀に載せて後世子孫に貽すの手段なきを病めりしが、今や靈腕妙筆の人を得て、忽ち此缺陷を補ふことを得たり、美人よ、憂ふる勿れ、風の綏く吹き、蝶の花に戯るゝが如き、翩々たる汝が嬌態も、今や此を描寫して遺憾なきを得む、一家の主人公よ、汝が妻子に圍繞せられつゝ有る所も、今や此を面りに觀るを得む、商人となく、軍人となく、平人となく、政治家となく、散歩の次で、朋友を訪ひ、從兄弟を音づれ、大々的商店に詣れる歸るさに、往いてこの畫家を訪へ、畫家の住居はネーフスキイ通り何番地に在り、人若し其の畫室に入らば、ワンチークを凌ぎチ、アンを欺くの肖像畫雜然として陳列するを見む、是れ皆畫家が平生揮灑せる所のもの、之を覽る者は、先づ其の描寫の眞に逼れるに驚くべきか、將た其の運筆の靈妙なるを異とすべきかに惑ひて、俄に自ら決むること能はざらんとす、嗚呼畫家の光榮も茲に至りて又大なりと謂ふべし、是れ直に以て富の當籤を抽き得たるに比ふべきなり、アンドレイ。ペトローウィチ、萬歳！・（記者先生臭々しく物を言ふのが好きと見える。讀者[illegible]總じて[illegible]の[illegible]註を呼ばずして名を呼びたるが故にかくいかで喋りたるものならむ總じて此文は奇妙なる文字多し其心して讀み給へ）君よ願くば君が令名を中外に流傳して、以て我國光を揚げむことを勉めよ、我輩不敏と雖も豈に君が眞價を知るの能力を缺く者ならむや、依賴者門に集り、潤筆料匱に滿つ、（假令同業者中には之を嫉みて毒筆を逞うする者あらむも）是れ君が當に受くべき褒賞ならむ。

美術家は此紹介文を讀むと、内々甚だ滿足して、莞爾となつた。新聞紙上で自分の評判をされる――つひぞ喰べ附けない事である。幾回となく繰返し〳〵讀んでみた。ワンチークやチ、アンを引合に出して呉れたのがどうも嬉しい。

「アンドレイ・ペトローウィチ、萬歳！」といふ文句も氣に入つた、活字で名を呼びかけられる

といふ事も、つひぞ覺えの無い名譽の事である。急々と室の内を歩くやら、髪を掻立てるやら、肱懸椅子に腰を掛けるかと思ふと、ふと又跳起きて長椅子に腰を掛直すやらしながら、動もすれば訪問者に應接する工合を彼此と想像してゐたが、その中の布地の傍へ來て、勢よく筆を揮つて、さツと何やら畫く眞似をした。是れ手振に品を遣らうと試みたものである。

二

翌日入口の呼鈴が鳴つたから、駈出して往つて見ると、仕着せと見えて毛皮附の外套を着た一僕を伴に連れた貴婦人が入つて來たが、女と見えて、十八ばかりの令孃を連れてゐた。

「貴下がチャルトコフさんですか？」と貴婦人が聞くから、チャルトコフは默禮をした。

「新聞や雜誌で大層な御評判ですが、アノ何ださうですね、貴下は大層肖像畫がお上手でいらツしやるさうですね？」と言つて貴婦人は眼鏡を眼へ宛がつて、ズッと壁を視廻したが、何も無いので、「畫は何處に？」

チャルトコフは少し狼狽へて、「皆持つて行つ……ソノ……引移つたばかりなので、未だ參りませんので……只今運搬中なので。」

「貴下は伊太利へ入らしツた事が有りますか？」と言つて、此度はチャルトコフに眼鏡を向けたが、他に向先が無かつたからである。

「いや、未だ參つたことは御座いませんが、一度はソノ……ウー……都合が有つて見合せましたが……何卒お掛けなすツて、さぞお、お、お疲れで……。」

「お關ひ下さいますな、馬車でも永くなると、草臥れますよ。ア、彼處に有るんですね？」と貴婦人は次の間へツカ〱と入つて、畫稿、プログラム、遠景畫、肖像畫などが壁に立掛けてあつたのに眼鏡を向けて、C'est charmant Lise! Lise, venez ici.（リーズ一寸來て御覽面白く出來てゐることといふほどのこと）テニエール好みの室なんだよ。ね、色々の物が散らかつてゐて、机があつて、半身像だの、手の型だの、そらね、顏料板も載つてゐる。これは塵だよ。……まア、善く出來てゐること。C'est charmant!（矢張り面白く出來てゐると云ふ位どのこと）こちらのは女が顏を洗つてゐる所だね。Quelle jolie figure.（マア綺麗と云ふほどのこと）あら、まア、一寸此田舍漢を御覽よ！ 露西亞風の襯衣を着てゐるよ！ ね、百姓なんだよ！ では貴下は肖像ばかりをお畫きなさるのではないのですね！」

「なアに、詰らん物で……ほんの戲に畫いて見たので……畫稿です……」

「貴下は今の肖像畫師の事を如何思召すか知りませんが、どうも最うチ、アンのやうな人は無いやうですね、色に彼程の力が出ませんね、それにアノ……何も……どうも言へない、此國の言葉ぢや。（此貴婦人は畫が好きで伊太利へ往つた時なぞは、眼鏡を提げて陳列館と云ふ陳列館を悉く經歷つたものである。）けれども、ノーリさん……彼方は巧い！ あんなに巧い方も滅多にないものだ！ 私どもはチ、アンのよりは彼方のお畫きなすつたものの方が顏が活きてゐると思ひますね。貴下はノーリさんとお知己ですか？」

「ノーリさんとは？」

「ノーリさん。ほんとに、彼方のは天才だ！ まだ此女が十二の時に肖像を畫いて貰ひましたがね、巧いものですよ。貴下も是非私共へお咄に入らツしツて下さい。リーズさん、お出なすツたら、お前さんの畫帖を御目に懸けるがいい。アノ、今日は此女の肖像を願ひに上ツたのですが、直ぐ願はれませうか？」

「宜しう御座います、直ぐ着手りませう。」と豫て用意に布を張つて置いた枠を早速持出して、顏料板を把つて、令孃の蒼白い面を凝然と視詰

めた。若しチャルトコフにして人を知るの明があつたならば、一目見て此孃には最う徐々夜會が面白くなつて來たらしい、晝食前後の時間が永くて、倦で／＼ならぬらしい、運動會へ往つて、衣服一枚で駈廻りたいらしい、母樣の仰しやりつけで、心を高尙にする爲めに、厭々ながら種々の畫を習ふ、それが辛くて／＼ならぬらしい所が造作もなく見えたであらうが、しかし美術家は此令孃の柔しい面を見て、肉色の筆に載せて榮える、殆ど陶物のやうに瑩徹る所、ぽツと氣の拔けたやうな可愛らしい所、首筋の細々と淸潔な所、姿の上品に裊々した所の外は何も眼に留めなかつた。今迄は荒けないモデルの粗末な面相か、柔味のない古代の彫刻物か、さなくば名家の畫いた物の外には緣の無かつた我輩にも懌くて艷のあることを示して、喝采を博する氣に十分成りすまして、心中では最う此令孃の柔しい面相が筆に出る工合を想像に描いてゐた。

貴婦人は面色まで少し勿體らしくして、「あの、何卒……此女は今此樣な服裝をしてゐますがね、何卒、尋常の衣服を着た所でない所を、淸楚した風で、木の蔭に坐つてゐる所か何かで、背後は野で、遠方には羊が遊んでゐるとか、森が見えるとか云ふ所を……いけませんよ、舞踏會や夜會へ行きさうな風では。夜會なぞは、貴下、本當に、何ですからね、碌なもんぢや有りませんからね、少し位人間らしい所が有つても、彼樣な所へ往けば、鈍つて了ひますアね……なんでも、取繕はない自然の趣のあるやうにね、願ひますよ。へツ！　母樣の面を視ても、孃樣の面を視ても、夜會で踊り疲れて、蠟燭の鎔けたやうになつてゐるのが、まざ／＼見透いてゐる癖に。

そこでチャルトコフは仕事に着手つたが、まづ當人を坐らせて、註文の趣に工夫を加へて、眼を瞑で點を打ちながら、筆を虛空で使つて、眼を瞬いてゐたが、頓て一足後へ退つて、離れた所を視ておいて、それから一時間ばかりで下書を終した。下書は出來が善かつたから、自分も滿足して、直ぐと畫き出す、その內に段々面白くなつて來て、何時しか貴婦人の居ることをも忘れて了ふ、仕事に魂を奪はれてゐる美術家には有りうちの事であるが、時々美術家らしい癖を出して、種々の聲を出したり、折にふれては小聲で歌を唱つたりする。そればかりか、遠慮會釋なく、筆で指圖をして頭を擡げさせるのが嵩じて、果はくる／＼廻りをさせられるので、令孃も惡ろしく草臥れたと言ひだした。

「最う宜しい、初回は是で澤山。」と貴婦人は言ふ。

「最う少し、」と此方は前後を忘れてゐる。

「いゝえ、最う然らしてはゐられません。」と帶の處に金鎖で垂げてゐた小形の時計を出して見ながら、「リーズ、最う三時だよ！　まア、大變晩くなつたこと！」

「最う少々何卒か、」と邪氣ない子供のやうな聲で拜むやうに云つた。

が、貴婦人は此時ばかりは少しも藝術上の都合を顧つて呉れる氣がなかつたが、其代り此次は更と永く居ようと約束をした。

「チョッ、仕樣がないなア。筆が漸う動き出したのに、」と心中で歎息すると、ワシリエフスキイ島の畫室で仕事を爲てゐた頃の事を憶出したが、彼時には誰も妨げるものもなければ、筆を留めさせるものもなかつた。ニキータを坐らせて置くと、何程寫しても、身動もせずに坐つてゐる。のみならず、命けられた恰好の儘で、眠りこけたことも有つた程である。機嫌を損じて、筆と顏料板を椅子の上に置いて、茫然と布地に對つて立つてゐた。

世馴れた貴婦人に世辭を言はれて、ハッと我

に反ると其儘、急いで戸口へ駈寄つて迯り出したが、梯子段の處で、をり／＼遊びに來るやうに、次の週には食事を爲に來いなどと言はれて、欣々として室へ歸つて來た。貴婦人のためにコロリとされたのである。今まではかうした人は側へも寄附けぬ人で、法被を着た僕に盛裝した御者を連れて立派な馬車で墓地に乗抜けながら、見すぼらしい服裝をして徒歩で彷徨してゐる者を平氣な面をして視て通るばかりに此世に生れ出た人のやうに思つてゐたのが、ふと其一人が訪ねて來て、肖像を書かせて、食事に喚んで呉れたのである！　と思へばぞく／＼する程嬉しい。そこで心祝ひにとて晝食はグッとはずんで、夜に入つてからは觀物を視に往つて、何の用もないに、また馬車で市内を乗り廻した。

それから二三日といふものは平常の仕事は手に着かない。唯最う心構をして呼鈴の鳴るのを待つてゐると、例の貴婦人が蒼白い面の令嬢を連れて訪つて來た。直ぐに坐らせて、枠を持出したが、此時は最う敏捷く立廻つて世馴れた風を衒つてゐた。で、畫出したが、天氣は快晴で、日の當り工合も判然してゐるので　大層都合が好い。弱々とした令嬢の様子を見れば、捉へて布に載せれば、肖像の品格を高めべき處か幾らも見える。今眼に映る缺點のない處をそッくり寫し取つたら、少しは新らしみを添へることも出來さうに思はれる。他人の心附かぬ新手が出さうに思つた時には、有繫に胸が躍つた。また寫される當人の身分を忘れて、仕事に憂身を窶して、筆に魂を打込んで、息を昂めて畫いてゐると、輕く筆が走つてスッと眼鼻が出る、瑩徹るばかりの肉色が出る。眼に見えるほどの色合は、ほんのり黄ばんだ處から、眼の下の模糊と蒼くなつた所まで、悉く捉へて、あはや額にポッチリ吹き出した含羞移まで寫さうとすると、ふと耳元で貴婦人の聲で、「ア、そんな餘計なものは……そんなものは廢して下さい。それに……そこいらか……些と何だか黄ろいやうぢやありませんか？　ね、ソラ此處にも黑い點々が……いや、此點々も黄ばんだ所も畫上げて見れば善くなつて、顏に氣味の好いほんのりした色が着くと、説明をしてみても、いッかな承知することでない、いえ、色も着かない善くなりもしない、それは貴下に然う思はれる許りだと云ふ。「では此處だけ少し黄ろくさせて下さい」と邪氣なく言つたが、飛でもないこと、リーズは今日は少し氣分が惡いので、平生はそんな黄ろい所などは少しも無い、鮮かな顏色であると言はれる。殘念ながら、折角寫し取つた所を消して了ふと、面相の一寸は俗眼に入らぬ微妙な處も彼處此處消えれば、それと同時に幾らか形似も亡なる。それから氣無しに圭角のない色を着けだしたが、かうした色は當人を視ぬでも着けられるもので、之を着ければ、實物から寫し取つた顏も、初心で畫いたプログラムのやうに、冷かな理想的のものとなつて了ふものである。けれども貴婦人は怪しからぬ色を放逐して了つたので、それで満足した様子、唯噂で聞けばチャルトコフは二回で肖像畫一枚を畫上げたと云ふに、それを斯う永びくとは思ひ懸けん事であると言ふ。これにはチャルトコフ何とも返答の爲やうが無かつた。さて貴婦人達は起上つて歸りさうにするから、筆を措いて、戸口まで送つて出て、それから復た肖像の前へ來て、久らく茫然として佇立んでゐた。

ほんがりとして視てゐる眼の前には、筆では酷たらしく殺して了つたが、眼にはチャンと視て置いた、柔しい女らしい面相やら、ほんのりした色合やら、反映やらが隱現つく。そればかりを思ひ詰めて、遂に肖像畫を放下して置いて、久しい以前に畫懸けておいたプシヘーiヤの像の

何處へか投り込んであつたのを探し出して見ると、顏がなか／＼巧く出來てゐる。尤も面相が理想的で、何處に特色もなく、活きてはゐないけれど、巧く出來てゐる。所在の無いまゝに、令孃の面で觀て置いた所をこれへ寫取りに懸つて、彼處此處筆を入れて見ると、その眼に留つた面相も色合も垢脫けがしたやうになつて出て來るが、自然と十分に觀て置いて、さて其處を去つて、觀た所に均しきものを作り出さうとする時でなければ、かうは行かぬものである。プシヘーヤが活き出して、初は霞んでゐた想も段々眼に見える形を得て來る。その內に交際社會を踊り廻る娘の面相がいつしかプシヘーヤに傳つて、それがためにプシヘーヤの面も一種の趣を具へて、これならば眞の創作と謂つても可いやうになる。成程、眼付なら、鼻付なら、總體の面相なら、例の令孃を粉本に取つたものと見える。で、此仕事に身が入つて、數日の間これにのみ掛つてゐる。所へ、例の母子が訪つて來た。チャルトコフが枠から畫を外さうとするを遠目に認めて、二人とも驚歎の聲を揚げて、手を拍つて欣んだ。

「リーズ、一寸まア御覽、お前さんに酷肖だ！ Superbe superbe！（ほんとに善く出來たほどのこと）希臘風の衣服とは好い思附でした。まア、どうも好かつたこと！」

と、思ひ違ひをして喜ぶので、此方は挨拶に當惑したが、何分にも氣恥かしいので、俯いたまゝ、小聲で、

「それはプシヘーヤで。」

「成程、プシヘーヤの風ですね。C'est charmant！（面白いと云ふほどのこと）」と言つて母親が微笑すると、女も嫣然した。

「ねえ、リーズ、お前さんにはプシヘーヤの風が一番善く似合ふやうだね？ Quelle idée délicieuse！（面白い思ひ付きだと云ふほどのこと）それに好いお手際だ！ 全でコルレッヂだ。實はね、私も貴下の御噂は新聞や、人の談で聞きましたが、これほどとは思ひませんでしたよ。どうぞ、是非、貴下、私の肖像も是非一つ畫いて下さい。」母樣も、どうやら、プシヘーヤか何かの風に畫いて貰ひたくなつたものと見える。

「如何して遣らう？……えい、望みとあるなら、プシヘーヤを身代りに立ててやれ、」と思つたから、口へ出して、「何卒少しお坐んなすツて、少し筆を入れたい處が有りますから。」

「然うですか？ でも、若しヒョッと何になると何だから……最う大變善く肖てゐますよ。」

夫人の心配は例の黃色の一件にあると察したから、眼に最う少し光澤を着けて物を言はせるのだからと言つて安心さしたが、實の所は餘り氣恥かしいから、最う少しなりとも本人に肖せて、萬更の破廉恥漢になりたくなく思つたのである。成程、筆を加へると、プシヘーヤの面も益々蒼白い令孃の面らしくなつて來る。

餘り肖ては困るので、夫人徐々心配し出して、「最う澤山！」といふ、さて莞爾されるやら、謝金を貰ふやら、世辭を言はれるやら、熱心に手を握られるやら、食事に招かれるやら、種々のお禮を頂戴して、美術家は殊の外面目を施した。

肖像畫は市內一般の評判となつた。貴婦人が知己の奧さん達に吹聽すると、いづれも美術家の形似を失はずして能く花を添へる技倆に驚く。花を添へるに驚く時の面には、勿論羨ましい色を浮べてゐるのである。そこでチャルトコフは仕事に追はれるやうになつた。市內擧つて肖像を畫いて貰ひに來るかのやうに、入口の呼鈴は間斷なく鳴る。一方から考へて見れば、是れ至極結構である。色々の面を續々持つて來るから、絕えず修行が出來る。併しながら、生憎といづれも此方の思惑通りにならぬ人のみ

である。忙しい、落着かれない、でなければ、交際社會に入つてゐるので人一倍用の多い人であるから、皆恐ろしく性急である。來る人も來る人も、皆手際善く而して急いで畫いて呉れろと云ふから、到底も念を入れてはゐられない。皆筆の輕い達者な所で糊塗して置いて、大摑みに全體の面色を寫つて、細い微妙な處は食つて了はなければならぬ、到底も自然の精妙な跡を追つてゐる暇は無い。それに畫かせる人にもそれぞれ思ひ思ひの註文がある。貴婦人達は何でも心意氣の面白い所を專一にして、他の所は、品に寄つては、顧はずに置いて呉れろ、それから、角々を圓く、疵を目立たぬやうにして、成らう事なら、全で削つて貰ひたい、何でも熟々視入られても恥かしからぬ、惚れて了はれても大事ないから、そのやうな面に畫いて貰ひたいと言はれる。であるから、椅子に憑つて畫かせるとなると、奇妙な面色をされるので、美術家も吃驚することがある。背を折つて鬱いだやうな面色をする方もあれば、物思はし氣な風を粧ふ方もある。然うかと思ふと又、如何でも壺口に見せなければならんといふので、おそろしく口を窄めて、ぼツちりとビンの頭ほどにして了ふ方もある。其癖、何でも似たやうに、無理に表情はぬやうにと言はれる。紳士方も貴婦人に劣らない、グツと威張つて首をヒン振つた所を畫いて呉れろと云ふ方もあれば、神々しく眼を釣揚げて天を睨んだ所をといふ方もある。近衞の中尉は是非眼にマルス(軍神)の宿つてゐるさうにといふ。文官の人は成るべく正直らしい氣高い面色で、明瞭と守正不渝といふ四字を題した書物に手を掛けてゐる所をといふ好みである。初はチャルトコフも斯う色々の註文を受けて、途方に暮れた。いづれも皆篤と工夫をして、勘考をして見なければならぬものであるが、どれもおろしい急ぎ仕事である。けれども、後には事の意を了解んで、最う少しも驚かなくなつたのみならず、依賴者の言ふ事を一言二言聞くと、直ぐ先方の好みを洞見るやうになつて、マルスが好みの人には、面にマルスを押込む、バイロンめかうといふ野心のある人には、バイロン好みの恰好をさせて、そのやうに首に据ゑる。さてまた、貴婦人であれば、コリンナでも、ウンヂーナでも、アスパージヤでも、何でもお好次第に調進して言はれんでもそれぞれ十分に繕をして差出すと、誰方さまでもお氣に召して、少し位肖てゐんでも、としてお小言も出ぬ。其内にいつしか自分でも我筆の不思議なほど達者になつたのに驚くやうになる。畫かせる方は、勿論、大滿足で作者は天才家だと持囃す。

で、チャルトコフは種々の新聞までが人氣繪師に成りきつて了つた。方々へ食事にも喚ばれゝば、貴婦人と連立つて陳列館は愚か、運動會へも行く、洒落た風をも爲る、而して公然人に向つて此樣な事を言つてゐる。何でも美術家と云ふものは交際社會に入つてゐなければならん、美術家たる體面を潰すやうな事をしては不可、靴職人のやうな服裝をしてゐる美術家に限つて禮に嫺はぬ、野卑な、無作法漢であるなどと言つてゐる。家では畫の間を清潔に秩然と片附けて立派な僕を二人まで召使つて、盛裝した書生を置いて、日に幾回となく種々の朝衣を取替へ引替へ着て、髮を捲いて、訪問者に接する工合をいろいろと工夫して、貴婦人の氣に入らうといふので、所有手段を盡して美貌法を講ずるといふ始末であるから、直に見違へるやうになつて、これがワシリエフスキイ島の汚ない借家で兀々勉つてゐた見る影もない美術家であつたとは、如何しても思はれぬやうになつた。美術や美術家の事に付いても此頃は痛い事を言ふやうになつて、世間の人は今迄の美術家を餘り買ひ

被つてゐる、なアに古人の畫いた物だつて、ラファエーリの畫だつて、物にはなつてゐない、皆不足である。何か意味ありさうに、神々しく思はれるのは唯看者の思做からで、なアにラファエーリの畫いた物だつて、皆が皆出來の好いものばかりでもない、昔から佳いものにしてあるから、佳くなつてゐるものも隨分ある。また、ミケーリアンジェルにしても、手前味噌に過ぎぬ、解剖學を心得てゐるからと云つて、それを鼻に掛けるばかりの事である、其證據には彼人の畫いたものを御覽じろ、美も何もあつたものぢやない、いや、眞の光澤にしろ、筆力なり、彩色の力なりにしろ、有れば今有るので、現世紀でなければ見られんものである、などと言つてゐる。から饒舌つて見ると、勢ひ自分の事を言はなければならんので、それで此樣な事を云ふ、「私には如何も人を坐らせて置いて、のツつそツつして肖像を畫いてゐる人の心持が解らんですな、一つ繪に幾月も從事つて兀々く畫つてゐるのは、私の考へでは、そりやア美術家ではなくて、唯骨を折るといふだけの人だ。其樣な人に畫才の有つた例がない、天才家なら神速にドシ〳〵畫つて了ひまさア。例へば私にしても、」と言つて、いつも相手の方を向く、「此肖像はこれでも二日も掛りましたらうが、此首は一日に畫成げたもので、これは二三時間で、これなぞは一時間少し餘しか掛りません。いや、貴下の前だが一筆々々拘泥つて逡巡してゐるやうな事では、美術ぢやない、それでは手工といふもので、藝術とは謂はれんですな。」などと客に對つて高慢を並べると、客はいづれも主人の筆の力のあることにも達者なことにも感服して、その作の速なことを聞いては感歎の聲まで揚げて、影で互に話合ふことを聞けば、此樣な事を云つてゐる、「彼人はえらい。全く天才が有ります! あの話風を御覽じろ、眼中の鋭く光るところは如何です! Il ya quelque chose d'extraordinaire dans toute la figure!(顔を見ても何處か非凡な處かあると云ふほどのこと)」

此樣な評判を聞くと、チャルトコフ獨笑がされる。雜誌か何かで公然褒められると、金で其文句を買つた事は忘れて了つて、子供のやうに喜ぶ。そんな評判の出た號は方々へ持つて行く、而も故とらしくない風をして持つて行つては、朋友知己にひけらかす、それがまた當人には殊の外嬉しい、餘所目には餘り邪氣なさすぎると思はれるほど、嬉しいのである。名は益々賣れる、誂への仕事は續々來る。けれども、最う同じやうな人物に對つて、極り切つた位置や恰好を付けて、珍らしからぬ肖像を畫くのも厭になつて來たから、澁りながら筆を把つて、辛うじて略と首だけを畫いて、跡は書生に渡して仕上げさせる。以前は、それでも幾らか位置の附け方に新手を出して、筆力をパッと見せて、看者の眼を驚かさうと勤めたものであるが、今では其樣な事は面白くも何ともない。工夫するも厭、勘考するも厭で、最う我慢にもそんな事は出來ない、又爲てゐる暇もない。交際社會の浮りとした間へ入つて、華美に世を渡らうとしてゐる所であるから、想を練つたり、筆を把つたりするのは最う氣が乘らない。筆も鈍れば、情熱も減なつて、今では變化の無い、極り切つた、古くさい形に陷つて、氣の拔けたやうになつて了つた。冷かな、どれも同じやうな、いつも片附けてゐる、謂はゞ他處行きといひさうな文官や武官の面ばかりでは筆を揮ふ範圍がないから、立派な衣裳附も、感情の激動する工合も殆ど忘れたやうになつて了つた。況て布置結構や、想と形との取合せ方や、其調和の加減などに至つては言ふまでも無い事である。始終目に觸れるものは制服だの、コルセットだの、禮服だのといふ、美術家が觀れば、膽が縮んで、想

像も何も引込んで了ひさうなものばかりであるから、チャルトコフの畫には最う前の畫にもそれしきの妙處はあるといふ程の妙處も無くなつてゐるけれども、それでも尚ほ評判を落さぬ。尤も眞の鑑識家や美術家は彼が近ごろ畫いた物を觀ては首を竦めるばかりで、以前からの知人は如何して修行の初めには彼程筆の器用に動いたものが是程拙くなつて了つた事かと異しむほどである。チャルトコフといつても今が盛の年配になつたばかりであるのに、如何して天才を亡くして了つた事かと、人々不思議の想を爲してたのである。

然しながら、かういふ評判は志を得て氣の滿ちた美術家の耳には最う入らなかつた。最う年も長ければ、心も成熟して了つて、身體も肥えて横へ擴がるばかりである。新聞や雜誌でも畫伯アンドレイ、ペトローウィチとか、アンドレイ・ペトローウィチ先生とか、尊稱を附けて呼ぶやうになる。名譽ある地位に据ゑるから、官途に就けと言つて勸められもすれば、試驗に臨席して呉れろ、委員に爲つて呉れろなどとも申込まれる。相應の年配になれば誰しも然うなるものであるが、チャルトコフも最う徐々ラファエーリなどといふ古の名家の肩を恐ろしく持つやうになる、それも古人の技倆の絶れてゐることを信ずるからではなく、古人を引合に出して後進の美術家を窘めようばかりで、其肩を持つのである。靑年と言へば、誰彼の差別なく、品行は惡いもの氣風は宜しくないもの樣に罵る。世の中の事にすぢりもぢツた事は一つもない、神聖の興會などいふのは何の皮で、何事も格式を守つて齊整一律にするのが肝腎である、などと思つてゐる。から、最う此人の世も末で、鬱勃たる勇氣も沮喪して了へば、天の機が辛うじて心の絃に觸れても、唯鈍い音を發するのみの事で、美に接しても情念は炎えず、又熱しもせず、氣の拔けたやうになつた心は兎角金の音のみに惹かれて、つくぐ其妙音に聽入つて、いつとなく恍惚となつて了つてゐる。名譽と言ふものは其實も無くて、其名を偸んだやうな者では能くは味へぬもので名實相稱ふ程の者でなければ、名が揚がれば從氣が奮ふとは行かぬものであるから、チャルトコフの心も今は黄金一邊に傾いて、黄金が其生命とも、理想とも、生存の目的ともなつて、得れば喜び、失へば憂ふといふ樣になつたが、金匱の中に紙幣の束が殖えれば殖えるに隨れて、益々陰氣になる、金の外には何も眼を觸れぬ、妄に吝嗇な、何の目的もなく溜めたがる男になる、是れ併しながらチャルトコフ一人に限らない事で、此恐るべき物に見込まれた者は誰しも然うなるものである。で、此冷酷な世の中には、生氣の活潑な、情ある者から觀れば實に温かい情を懷たぬ死人が起つて徘徊してゐるやうに見える、誠に淺ましい妙な人間が隨分と有ることであるが、チャルトコフも殆ど其類の人物になりかけた。ところが、ふと或事に出會つて、痛く感動して、今まで眠つてゐた心が俄に眼を覺ましたやうになつたことがあつた。

或る日机の上を見ると、手紙が載つてゐる。これは美術學校から來た手紙で其文面では今度伊太利で修行をした露西亞の美術家から態々畫を送つて來たに付いては、貴下は當校の校友であるから、何卒來て意見を陳べて呉れろといふことである。此美術家といふは前はチャルトコフの學友であつて、子供の折から繪が好きで、トント魂を打込んで斯道に熱中してゐたが、總て朋友をも親兄弟をも振棄てて、身に取つては破り難い習慣をも破つて了つて、畢竟、羅馬と言へば、美しい空の下に生し立てられた、宏大な美術園で、其名を聞いたとへ多情な美術家の胸は一杯になつて、烈しく波を打つほど

の處であるが、其處へ往つて、傍目も觸らず——心に勉强をした。自分の人と爲りや、應對の拙な事や、體裁を顧はぬ事や、餘職い見すぼらしい服裝をして美術家の體面を汚す事に就いて、人が何と言はうが、そんな事には頓着せず、仲間の者が自分に對して不滿を懷かうが、懷くまいが、一向平氣なもので、萬事を擲つて、美術に陷つて、怠らず陳列館へ通つては、名畫の前に佇立んで、絕妙な筆路を逐ふやら、捉へ所を尋ねるやらして、時の移るを忘れてゐたことも數有つた。何か自分で畫いても、幾囘となく此樣な名家に相談を懸けて、耳には聞えぬが、心には應へる其訓を受けぬ中は、決して休まなかつた。喧しい話にも加はらず、議論にも與らず、淸淨派に與しもせず、反對もせず、諸派を平等に觀て、各其長處だけを取つて、それだけに珍重して置いて、畢竟は名工ラファエーリ一人を自分の師と仰いでゐた。譬へば、大詩人がいろ〳〵の好處妙處を具へた種々の作を讀んだ上、ホーメルのイリアーダほど玄妙圓滿のものはなく、衆美を鍾め衆妙を具へてゐると發明して、之をば帳中の祕とするといつたやうなものである。かうして修行した代り、美術家は遂に創造の玄機を默會し、理想の妙趣を感得して、神助あるが如き名工の筆底には天地間の精華の萃まることをも悟つた。

　さてチャルトコフは美術學校の廣間へ入つて見ると、畫の前には最う一杯人が群集つて觀てゐたが、場所一面に水を打つたやうに森としてゐる。かうした事は多人數寄集つて品評などする場合には、滅多にない事である。と見るより、チャルトコフは忽ち容體ぶつた、如何にも鑑識家らしい面色をして、畫の前に進んで——

嗚呼、如何な畫を見たことか!

　淸い、一點の汚れを留めない、處女の如くに美しい畫を見たのである。溫順しい、神々しい、邪氣ない、虛飾氣のない、天人のやうな樣子をして、其畫が人々に臨んでゐる所は流石の天女も、多くの人の眼に目守められて、羞かしさうに美しい睫毛を垂れたかのやうである。見た所、何も彼も備つてゐる。位置の絕妙な處にラファエーリを硏究した痕が見えれば、運筆の圓熟した處にコルレジオに私淑した影も見える。けれども、何よりも先づ目に留まつたものは創作の力であるが、此創作の力に至つては最早美術家其人の心から出るより外に出やうのないものである。畫中の纖は何を見ても作家の魂が籠つてゐて、生命も有れば、天法も宿つてゐる。自然界に浮いたやうに見える曲線も眼を遣る處に見えたが、此樣な線は唯創造の才のある美術家の眼にのみ見えるもので、若し模擬を旨とする美術家に寫さしたら、角度になつて了ふものである。思ふに、作家は外界より抽出した所を一旦我胸に收めて置いて、それから更めてそれを調子の整つた花々しい歌と爲て心頭から吐出したものであらうか。兎に角創作と尋常の模擬との間には霄壤の差があることが、畫に精くない者にまで明かに解るので、人々は息を屛めて寂然として其畫に視入つてゐると、畫は次第々々に塵界を離れて、此世の物とは紛れやうがなく、玄妙不可思議な物になつて、遂に混沌とした境に入る、人界に住むも此境に至らんとする階梯に過ぎぬことで、これこそ天籟の物に凝つたものであらう。畫を繞つて立つてゐた人々も覺えず泪ぐまうとした。種々の趣味を持つてゐる人も、邪路に迷入つた粗野の趣味を持つてゐる人までが、此神品に對つては一つになつて、聲は立てずに讚美の歌を唱つてゐるかのやうであつた。

　口を開いたまゝ、身動きもせずに、チャルトコフは畫の前に佇立んでゐたが、其内に來觀人や鑑識家が次第々々に動搖き出して、品評を始

めて、さてチャルトコフにも意見を述べろといふことである。茲に至つてチャルトコフ初て氣が附いたから、平然した常の面色になつて、揚こびれた美術家相應に片腹痛い言を云はうとした。例へば、然うですな、勿論才筆でないとは謂はれん、一寸面白い處がある、何やら意味を有たせようとしたものと見える、兎に角全體が……と言つて、それから譽めたが譽めたにならぬ事を言はうとしたが、言葉が口元で消えて了つて、返答の代りに涙が零れて、歔欷けて來たから、狂人のやうになつて、廣間を飛出した。

我家の立派な畫の間の中央に突立つたまゝ暫らくは身動きもせず茫然としてゐた。恰も一瞬の間に蘇生つたやうな、若返つたやうな、才思の油が竭きて暗くなつたのが再びぱツと明くなつたやうな心地がする。眼を蔽した布でもふツと脱れたやうな心地がする。嗚呼!… 花の年頃を徒に過して、我胸にも或は炎えてゐたかも知れぬ神火を空しく消して、今は赫奕たる光明を放つことも出來ぬか、彼のやうに人の目を駭かして随喜の泪を流させることも出來ぬやうになつて了つたか! えツ情ない事をした! と思へば急に技癢を感じて勇氣勃々となる、これ曾て覺えのある事である。筆を執つて、布に近づけば、力みの汗が額に潤む、一身を打して一の望と爲して、一念に身を焦す、堕落の天人を描きたく思つたのである。これ今の心地には一番能く恰當る想である。けれども噫、情ない! 形態も、位置も、結構も、趣意も、布へのりは上りながら、不自然で調和を缺いてゐる。筆にも、想像にも、最う癖が附いて了つてゐて、自ら好んで手足に嵌めた此桎梏を打破らむと藻めいてみても、筆が亂次になつて畫き損じるばかりで、其效がない。永い間苦學の功を積まず、他年大作を出す爲に下地を作つて置かなかつたから、餘儀ない譯であるが、無念は骨髓に徹する。そこで、近頃描いた、死んだやうな人氣縮や、輕騎隊の士官や、貴婦人や、國務顧問官などの肖像畫を悉く目通より遠けて、客を謝して、獨り一室に籠つて、仕事に陷つて、根氣よく書生のやうな氣になつて、畫いて見たが、いや、情ない程拙いものが出來る。平生の素養がないために、一筆々々に筆が澁つて、誠に詰らぬ瑣細な事が氣先を挫いて、想像の難關となる。どうもツイ筆癖が出て黴の生えた形になる。手の組方も例の通りになつて、首の振方に新手も出ず、衣服の襞積までが舊味に落ちて、思ふ樣に新しい畫の恰好に來らぬ。これは自分にも然う思はれる、自分の素眼にも然う見えるのである! 頭に余には才が有つたのだらうか……唯有るやうに思つてゐたばかりぢや無からうか? と言つて、昔自分が畫いた物の側へ來て見た。これはどれも未だワシリエフスキイ島の、哀れな借家に居た頃、世間を離れて、榮耀榮華を餘所に見ながら、慾も得も忘れた、清い心で畫いたものである 今其側へ寄つて熟々と視入ると、寧ろに昔の哀れな境涯が憶出される。今更口惜しくなつて、有つたのだ、全く才が有つたのだ。どれを視ても、その影が見える……

ふと立止まつて、愕然とした。凝然と此方を諦視めてゐる誰やらと眼を視合したのである。ア、是はシチウキン長屋で買つた例の不思議な肖像畫であつた。是迄は他の畫の蔭になつてゐて、見えなかつたので、殆んど忘れて了つてゐたが、今しがた室一杯になつてゐた流行畫や肖像畫を取除けさせたので、折もあらうに此時、昔畫いた畫と倶に眼に觸れる所へ出てゐたものである。此肖像畫の來歷を憶ふと、此不思議な畫が幾らか堕落の原因となつたと憶ふと、ゆくりなく金が手に入つた爲めに、いろ／＼の妄

念が萌して、遂に畫才を無なしたのだと憶ふと、殆ど氣も狂せんとするばかりになる、そこで、直ぐさま此憎むべき畫を取除けさせたが、然うしたからとて、煩悶は少しも鎮まらぬ、心の底へ手を突込んで攪拌されるやうな心持がする。此時初てチャルトコフも才分以外の事を爲ようとして出來ぬことの如何に苦しいものであるかを悟つた。然しかう苦しんだとて、それは若い時分ならば、隨分大したものも出來ようが、想像の發達が止つた者であつて見れば、唯心の焦れるのみで何の效もない事である、人はかうした時に、恐ろしい事を爲るものである。で、それからは、天才の有る人が何とも言へず妬ましい、物狂はしくなる程妬ましい。何か巧に畫いたものを見ると、青筋が額に出る、齒を切つて、蜥蜴の樣な眼をしてそれを睨む。其内にいつか淺ましい鬼々しい念が動いて、狂氣の如くになつて、それを貫かうとして、是迄の畫の中で、佳いといふ程のものを悉く買蒐めだした。大金を出して買つて、大切さうに持つて歸つては、猛虎の怒つた如き權幕で、躍蒐つて、引裂く、引破る、片々にする、踏躙る、而して愉快さうにから／＼と笑ふ。貯の金は鳴動る程あるから、この鬼々しい望を遂ぐるに、困ることはない。持つてゐる程の金嚢の紐を悉く解いて、金函の蓋を殘らず開ける、是迄文盲の鬼が出て數多の美術品を破滅したことが有つても、この執念深い亂暴者ほどのことは決してない。何處の競市でも、此男の姿を見ると、誰も初手から投げて了つて、競らうとしない。天が怒つて態々此凄まじい厄病神を降して、此世の調和を破らうとするのかと思はれる程である。此恐ろしい執念が起つてからは、チャルトコフも凄まじい形相になつて、額には常も青筋が消えない。此世を詛ふ、萬事を破壞せんとする意が、自ら顏色に浮いて見える。プーシキンが空想で描いた、夫の恐るべき惡魔のこれが化現かとも思はれる。口を開いて物を言ふことがあれば、それは毒語でなければ、必ず呪詛の辭である。町へ出れば知己の者までが、遠方からそれと見て、横町へ逸れて、成るべく遭はぬやうにする。遭へば一日氣色が惡いといふ、宛で食人鬼でも出たやうな騷ぎである。

此世に取つて、又美術に取つて、幸福な事には、かう無理に、張詰めた氣では永く生存へることが出來なかつた。人間の弱い命根では、この度外れな、凄まじい妄執に耐へ得なかつた。瘋癲の發作は、數々襲れて來て、遂に恐ろしい病になる。激しい熱の上に、急性の肺患に苦しめられること三日で、白痴のやうになつて了つた。剰さへ瘋癲の方も不治の症となる。時としては數人懸りでも、取押へることの出來ない事もある　其内に疾うに忘れて了つた、例の不思議の肖像畫の、活々とした眼が見えだす――烈しく狂ふ。床の周圍に居る者が、悉く恐ろしい肖像に見える。見る／＼其數が二倍になる、四倍になる、四方の壁は一面に肖像畫となつて、例の眼で凝然と睨む、天井からも、床からも睨む、室は際限もなく擴がつて奥行が長くなるに隨れて、眼を据ゑた面が幾らも現れて來る。治療を擔當けた醫者は度々チャルトコフの不思議の來歷を聞いた事があるから、其眼に見える幻影と生涯の出來事との間に何か祕密の關係は有りはせぬかと、種々に手を盡して穿鑿して見たが、何も判らなかつた。病人は唯苦しみ悶えて、恐ろしい呻聲を立てて、取留めぬ言を口走るばかりで、更に正體はない。其内に聲は立てずに跪いたが、それが最期で、その儘息を引取つて了つた。死骸を見ると、身の毛も彌起つ程であつた。あれ程の貯が一文も殘らなかつたが、數百萬ルーブリも棄てたらうと思はれる、

種々の名畫が片々になつてゐたので、初てその金の支途が知れて、人々憬然としたといふ事である。

三

箱馬車や覆附き覆無しの馬車が幾臺となくトある家の玄關先に停めてあつたが、是はさる金滿家で美術好と謂はれた人の道具類が此家で競賣になるのである。金滿家で美術好と云へば、微風の神や戀の神を相手に、一生を面白い夢の中に過して、メツエナートといふ罪の無い名が立つて、それがために先祖の遺産ばかりでなく、自分が稼ぎ溜めた萬金さへも譯もなく費ひ棄てて了ふ人であるが、さうした人は今は勿論跡を絶つて了つた。此十九世紀は已が財産を紙へ數字で載せて、それを觀て樂しんでゐる銀行家の面相を觀るやうに、興味も可笑氣もない世の中である。種々雜多の人で奥深い座鋪が一杯に埋つてゐたが、これらは野曝の死骸に群集る鷙鳥のやうな輩で、會所なら未だしも、雜具市場からも青色の獨逸風の上衣を着た商人達が隊を成して來てゐたが、こんな處で見ると、この人達は店で客におべツかる風は無くて、何處となく氣が強く大風に見える。身柄の善い人は隨分居たが、こんな人に他處で遭つたら、長靴に附いて來た塵を辭儀の頭で拂ひかねまいが、此處では些とも惡丁寧をしない。全然打寛いで了つて、無遠慮に書物や畫に手を觸れて品の善惡を鑑定して、伯爵何の某といふ鑑識家が附けた値を遠慮會釋なく買煽る。此他毎日朝餐を食ふ所を競賣へ來て糊塗かして了ふ例の連中も來てゐる。十二時から一時までは他に用の無い身體で、藏品の數を殖す機會を外しては面目ないやうに思つてゐる貴人の玄人筋も來てゐる。それから素性は惡くはないが、服裝のえらいお粗末な、ポケットのえらい輕い御仁も、毎日御座るが、これは微塵も慾氣があつて御座るのではない、唯競賣の成行を、人が高く附けたり、廉く附けたり、買遮つたり、種々な物を手に入れたりする、その樣子を觀にばかり御座るのである。さて繪は澤山其處らに次第なく取散らしてあつて、道具類や書物と混淆になつてゐたが、此書物も前の持主の名前の頭字は附けてゐても、ひよつとすると一度も覗かれたことは無いかも知れぬ。支那出來の植木鉢だの、机に用ゆる大理石の一枚板だの、グリーフ(大鳥の名)や、スフィンクスや、獅子の足を飾に付けた道具の、新らしいのだの、古手だの、箔を置いたものだの、置かぬ物だの、釣燈だの、ランプだのといふものが擲け出してあつて、店に列つてあると、大分趣が違ふ。宛で美術を顚覆したやうな騷ぎである。總じて競賣と云ふものは何處か葬式に似た所が有つて、觀ると變な心持になる。競賣の行る廣間に限つて何となく陰氣なもので――道具や繪に塞けられて、窓の明りも十分に取れず、皆口を噤んでゐる中で、槌で臺を打いて、不思議な縁で此に寄集つた哀れな美術品に引導を渡す競賣者の葬禮聲が聞えるなど、觀るもの聞くもの皆不快の感を誘ふ媒とならぬものはない。

競賣は今を盛りと見える。賤しからぬ際の人が多人數一團に成つて頻りに何か爭つてゐる。四方からループリ、ループリといふ聲が響き渡つて、競賣者もその買煽りの直を反覆してゐる暇がない。直段も最う初の呼直から見ると、四倍にも成つてゐる、大勢が環視つて爭つてゐるのは肖像畫であつたが、これが又多少繪に趣味の有るものには誰の眼にも留る繪で有つた。作家の筆力の神に入つてゐるのが瞭然と見える。繪は最う度々繕が入つて塗直してあるもののやうで、何か寛濶した衣服を着た、尋常ならぬ異樣の面相の、色の淺黑い、亞細亞人ら

しい男の肖像であつたが、殊に眼が奇怪に活々としてゐて、覽る者の目を駭かした。視れば視るほど腸に喰入るやうな眼付である。その不思議なところ、作家が人を誑かす妙手段、それが誰の眼にも留まる所である。けれども、格外な直が附いて來たので、競つてゐた者も大抵は引退つた後に、美術好と名を取つた二人の貴族ばかりはいツかな手を引かない。夢中になつて競り立つて、打捨てて置いたら、如何様に競上げるかも知れぬと思はれる程であつたが、其時傍で觀てゐた一人の男が唐突に、「暫らく、暫らくお待ち下さい。此畫は何方よりも私が讓つて頂くべきものだらうと思ひます。」

と云つたので、其處に居合せた人々言合せたやうに一齊に振返つて視ると、年は三十五にも爲らうかといふ、長く縮れた黑い頭髪の、恰好の好い男であつたが、嫺やかな、悠然した、見れば心持の快くなる面相で、人々の心を痛める此世の紛擾には緣の遠い風である。服裝を看ても、微塵も氣取つた所がない、如何看ても美術家らしい。と思はれるも其筈の事で、これは某といふ畫家である。其處に居合せた多くの人にも滿更知らぬ顔でない。

畫家は人々が自分に注意を集めたのを見て、「貴下方は可異な事を言ふと思召さうが、これには少々仔細がある。それを御聽き下すつたら、私のから言ひ出したのも無理はないと思つて下さらうと思ふ。如何見ても此肖像畫は私の尋ねて居る繪に相違ないと思ひます。」

人々の面には至極尤な不審の色が現れる。競賣者も槌を振上げたまゝ、口をあんごり開いて、聽耳を立てる。話の初には自然畫に眼を惹かれる者も多かつたが、話が面白くなるに隨れて、皆話してゐる當人の面ばかりヒタと目守めて了つた。

畫家は話の緒を開いて、「府内には皆様御承知のカロムナといふ處がある。同じペテルブルグでも、彼邊は他所とは違つて、都とも附かず、田舎とも附かず、如何もあの町へ入ると、氣が滅入つて老人染みて來るのが自分にも解るやうである。彼處には未來といふものが無い、寂閴として何を見ても浮世の暇があいたやうなものばかりで都の紛擾の殘滓が此處に凝つてゐるのかと思はれる、此處へ移轉して來る者は官吏あがりか後家さまか、元老院議員に知己が有るので一生此處に埋木と覺悟を極めた身貧な人か、一日市場を彷徨いて小店商人と無駄口を叩いて、毎日々々五カペイカが珈琲と四カペイカが砂糖を買ふのに極めてゐる爨婢の古手か、左なくば、天氣で云つたら、霽れもせず、照りもせず、唯霧が懸つて何を見ても判然せぬとでも云ひさうな、衣服も、面も、頭髪も、眼色も、皆何か糢糊して灰色がかつた、一口におぼろ組と云つても可ささうな人達で、此他には芝居者やら、チツリヤールヌイ、サウエートニク（九等官）やら、厚脣で片目の軍神の申子のなれの果もあるが、いづれも氣の薄い人達で、何にも眼を觸れずに歩いて行く、何も考へずに默つてゐる。その住つてゐる室には道具類も餘り無い、時とすると正銘の露西亞燒酎の壜が一本あることもあるが、それを此人達は一日ぐづり〱と嘗めてゐる。若い獨逸人の職人、メシチャンハカヤ町の若衆、夜の十二時過には人道を獨占にして幅を利かせるといふ連中が通常日曜に、えらく奮んで飲むのとは性質が違ふ。

カロムナといふ所は浮世を頓と掛離れた所である。箱馬車などは餘り見掛けたことはないが、若し見掛ければ役者が乘つてゐるので、遠雷のやうに轟々と響いて四邊の寂寞を破る。どれも〱皆徒歩で行く人で、御者も客を乘せずに、毛深い馬に飼はうといふので、秣草を運んで、とぼ〱と行く。貸間も一ケ月五ルーブリ

で、加之も朝の珈琲の附くのがある。扶助料を貰つてゐる後家が此處らでの門閥家であるが、かういふ人は始末が善くて、日に幾度となく部屋の掃除をして、朋友と牛肉やキャベツの騰貴つた噂などをする、まだうら若い、中には美しいのもあるが、無口の頼で、汚ない小犬や、振子の昔の哀れ氣な掛時計が斯うした人の殆ど附物になつてゐる　後家に次での門閥家は俳優で、給金が給金だから此カロムナを退くことが出來ないのであるが、兎も角も閑散な人達である。尤も洒落に浮世を渡る藝人は誰れも斯うしたものであらうが、室衣の儘で坐つて、ヒストルの繕ひをしたり、厚紙で種々の人物を拵へたり、遊びに來た賤女と將棋を指したり、骨牌を弄つたりして暇を送る。晩も大抵同じ事で、時折に觸れてはブンシ(酒)が醸るばかりである。此貴人高家の外は皆普通のコンマ以下の端者で、古い酢に生く蟲ほどあるから、到底も一々數へ立ててはゐられない。呑醉の老婆もある、何をしてゐるとも知れねど、どうにか斯うにか活きてゐる、十五カペイカに賣ようといふので、襤褸や下着をカリンキン橋から佛具市までえッちらおッちら持つて行く、蟻か何ぞのやうな老婆もあるが、早く云へば孰れも皆人間の粕のやうな、いかに人助けが持前の經濟學者でも是ばかりは手の着けやうが無からうといふ、哀れな人ばかりである。

かうした人の上をお話するも實は前置に過ぎぬ事で、是から本筋の御話に掛るが、こんな人には屢くほんの一時の融通を利かせる借金をせなければならぬ場合が突然湧くことのあるので、そこで一種の高利貸、少許の金を貸すに何か抵當を取つて高い利を貪る高利貸が其間へ頭を出す。こんな小な高利貸は大きな高利貸から見ると一倍無慈悲といふも、貧乏で明々地に權威を振けた、箱馬車に乘つて來る人ばかりを相手にしてゐる大資本の高利貸なぞは滅多に見たこともない、乞食々々した人の間に生いたものであるから、人間らしい心は疾うに沒くなつてゐるのである、かうした高利貸で、尤も、お斷り申して置くが、今お話する事は前世紀の事で、即ち先帝エカテリーナ二世の頃の事であるから、カロムナの面目も、その生活向も、今は勿論餘程變つてゐる。さてさうした高利貸で、不思議な人物があつた。このカロムナでの古株で、いつも寛濶した亞細亞風の衣服を着てゐる男であつたが、顏を視れば赤黒くて、南國の産らしい、と云つて、印度の者だか、希臘の者だか、波斯の者だか、その生れ故郷は誰にも分明らぬ。脊の高い、殆ど並外れて高い、色の淺黒い、痩こけた、凄まじい面相の男であつたが、その又面の色が奇怪な色で、眼は大きく炎えるやうで、太い濃い眉であつたから、他のおぼろ組から見ると、目立つて違ふ、加之其住宅までが他の小さな木造家のやうなものではなくて、一頃ジェノヴァ商人が好んで建てたやうな石造家で、大小不同の窓々には鐵の戸に鐵の栓が附いてゐるといふ家相である。此男は乞食の老婆であらうが、宮中一勤める浪費の好きな高貴の人であらうが、相手嫌はずに何程でも金を貸すから、唯それればかりを見ても、他の高利貸とは毛色が變つてゐる。すばらしい馬車が往々其家の前に停めてあるが、立派な交際慣れた貴婦人の頭が馬車の窓越しに見えることもある。何の噂では、家には金やダイヤモンドや貴重な質物を一杯納れた鐵の箱が幾個もあるといふことであるけれど、高利貸には生來の強慾の氣は無い男で、金を貸すにも澁るといふことをせず、期限も極く都合の善いやうに切つて呉れる、それでゐて、不思議な勘定で、此男の金は恐ろしい高利に抵く。と、まア評判では、いふ事である。けれども、それよりも更と不思

議な事で、多くの人が奇異に思つた事は、此男から金を借りた者は皆逆な事になつて了ふ、哀れな風で終を取る。是は唯人に然う思はれるばかりの事で、妄信から出た孟浪めぬ言であるか、それとも故意と此樣な事を言觸らしたものか、確乎とした事は分らぬが、兎に角その例にも援くべき變な事が僅の間に度々有つた、人々の面りに見た事である。

當時の上流社會に世の中の目を我身一つに集めた壯年の門閥家があつた。未だ弱年の頃から政治界で名を成して、道理に合つた高尙な事なら、何事に寄らず深く崇めて、人間の藝術學問の產んだ物なら、何でも熱心に愛する。行々はメツェナートとも謂はれようといふ人であるから、早くも主上の御目に留つて、我志を行ふには至極適當した相應の顯職を授けられて、學術のため、總じて世間のために一働することが出來るやうになつた。そこで此壯年の門閥家は美術家、詩人、學者などを身邊に集めたが、人々に仕事を授けて、學藝を奬勵したいといふので、私費を擲つて學者を益すべき多くの書物を出版したり、澤山に註文を出したり、懸賞の廣告をしたりして、それがために少からぬ財を費つて、遂に家道不如意とまでなつたけれど、固より身を捨てゝ懸つてゐる事であるから、それしきの事に志を飜さうとは思はず、いろ〳〵に融通を求めて、遂に例の高利貸を使つて、これから大金を借出した。ところが、僅の内に全然氣が變つて了つた。學藝に秀でた者をば虐げ辱めて、どんな文を見ても、惡い處ばかりを見て、言葉の意味をも曲解するやうになつた。折柄生憎にも佛蘭西で革命亂が起つたので、それが原因で、ふと種々の邪推を起して、何を見ても何となく革命の氣味を含んでゐるらしく、その兆があるらしく思はれて、果は自分で自分が危まれる程になつたから、恐ろしい誣告をして、多くの人に難儀を掛けた。かうした事が遂に天聽に達せぬ筈はないから、寬仁な御氣性の事とて、主上は苦々しい事に思召して、仰せ下されたその綸言は一々今に傳はらないが、深い御趣意の在る所は多くの人の肝に銘じてゐる。陛下の仰せられるには、君主政治の下で貴い向上の傾向が容れられなかつた例はなく、學術や詩文や藝術上の創作が蔑にせられたり、讐の如く扱はれたりした事もない、ばかりか、君主こそさうしたものの柱とも賴む者であつて、その厚い惠みを得てシェクスピール、モリエルなどいふ類の人も世に時めいたけれど、共和國に生れたダンテの如きは身を措く處さへなかつた始末である。眞の天才のある者は君主の榮え、君主政の勢の盛な時分に出るもので、共和政の如き政道亂れに亂れて世の中の血腥い時分に出るものではない。そんな時に一人たりとも詩人らしい者の出た例は無いことである。兎に角詩人の類は人の心を和げ宥めて美しくこそすれ、誘惑して怨を懷かせる者でないから、隨分優待つて遣らねばならぬ。學者詩人美術家などは王者の冠を飾る珊瑚、ダイヤモンドの如きもので、かうした者がなければ、君が代に花も咲かせられず、御稜威の光も薄れる道理である。と、かう仰せられた時の陛下は神々しくも美しくも拜まれたといふ。老よつた人は泪片手に此話をしたものである。で此聖志を成さんとて世を舉つて力を協した。一寸茲で一言言つて置きたいのは、露西亞人は常も日影者の肩を持つ香しい心を持つてゐる。これは國の自慢としても可い事である。さて陛下の御信任を失つた門閥家は餘衆へ懲戒のお咎を蒙つて官職を褫れた。がそれよりも一段身に應へて辛かつたは世上の人の面色で、誰も彼も皆斷然侮蔑の色を浮べてゐる。名聞を重ずる心から之を何程苦しく思つたか、

迚も言葉に言盡されぬ程であつたが、殘念やら、傷を負つた名譽心やら、外れた望やらが一つに混淆つて、遂に恐ろしい狂憤を發して、狂ひ死に死んで了つた。

まだ他にも怪しい例とも見らるべき話があるが、これも人々の面りに見た事である。同じころ此北の都に隨分と美人もあつた其中で、一人絶れて美しいのがあつたが、北國の美と南國の美とを一つにしたやうな、希代のダイヤモンドにも比ふべき美形であつた。亡父も生れて初て此樣な美人を見たといひました。何一つ缺點の無い人で、資産もあれば、才もあれば、心も美しい。それゆゑ之を宿の妻にと望いだ人も多く有つた中に、殊に目立つたのは侯爵某といふ、若手の中では第一の門閥家で、顔も美しければ、心も大樣で、侠氣があつて、小說家や婦人達の理想になりさうな、如何見ても人情の厚かりさうな男であつた。物狂ほしい程美人を思ひ焦れてゐたが、女の方でもまた一方ならず心を寄せてゐた。然るに親々は相應はぬ緣だとて承知しない。といふものは、侯爵家の世襲財産であつた地所は疾うに人手に渡つてゐたのみならず、賢こき邊の御覺もめでたからぬ家柄であつて、家道の裕でないのも隱れもない事であつたからである。ところが、侯爵が不圖居なくなつた。家政の整理に往つたのだといふことであつたが、軈て恐ろしく立派になつて歸つて來て、盛な夜會を催したり、饗筵を開いたりしたので、宮中でも取沙汰せられる程になつた。そこで、美人の親も我が折れて、此都で面白い[illegible]亂があることとなつたか、如何して侯爵の懐合がかうも善くなつて凄じい長者となつたものか、その仔細を能く知つてゐる者は一人もなかつた。けれども、蔭言を聞けば、例の高利貸と何やら約束を取極めて借金をしたのであるといふ。それは兎も角も、此緣組は都中の取沙汰となつて、誰一人羨ましく思はぬ者もなかつた。兩人の關係は昨日今日の事ではなく、永い間思ひ焦れて、互にいくその思をして來た關係で、雙方ともまたそれだけの苦勞を爲榮えのする人柄である。氣の逸い婦人達は若夫婦が極樂へ生れ出たやうな樂しい月日を送るであらうとて、それを取越苦勞にする程であつた。ところが、案外な事もあるもので、何時となく侯爵の氣質が變つて淺ましい人になつて了つた。疑ひ深い妬心や、氣短や、おそろしい我儘の毒に中てられて、今迄優しく美しかつた心も醜惡になつて了つて、妻を虐げ苦しめるばかりか、かうも變らうとは誰しも思ひ掛けぬ事であつたが、誠に淺ましい所業をして、折に觸れては打擲までするから、一年も經つ内には、女もこれが此頃まで世に持囃されて、[illegible]れ男に媚びの[illegible]ひつされた者かと怪しまれる程になつて了つた。そこで、最う辛抱が爲きれなくなつて、到頭離緣話を持出したところが、離緣と聞くと侯爵は嚇と逆上せて狂氣のやうになつて、刃物を執つて妻の室へ躍込んで、あはや一突といふ所を、居合せた者が縋り付いて漸く取押へた。侯爵は無念と猛り狂つた擧句、我と我刃に伏して、無殘の最期を遂げた。

此二件の話は世に隱れない事であるが、此他にも下流では色々の評判をして、いつも結局は淺ましい事になつて了ふといふ。酒嫌な正直な男が爛酒漢になつたもあれば、手代で主人の金を盜んだのもある。年來律義にしてゐた御者が僅かの金のために客を斬殺したのもある。など種々の事を、折に觸れては尾鰭を附けて、言觸らすから、氣の弱いカロムナの者は自然鬼胎を懷くやうになつた。あの高利貸は魔物であると、誰も思つてゐた。評判では、何でも此男の持出す條件は身の毛の彌立つやうな人には斷うと言ひかねる程の事であるの、此男の金は同類

を喚ぶの、自然と燒けて紅くなるの、可異な印が附いてゐるのと、種々の託浪めぬ言をいふ。で、殊に奇異なのは、此カロムナの、哀れな老婆やら、小官吏やら、果敢ない美術職人やらといふ、前に數へた貧乏人の連中は、皆言合したやうに、どんなに困つても、例の高利貸を便るよりは、寧そ辛い思をしてゐる方が利だと極めてゐて、身を殺しても魂は助けたいといつて、餓死した老婆さへある。往來で其人に出逢つても、何だか恐ろしくなる。徒歩で行く人はおづおづ退步をして、振向いて絕れて脊の高いその後影を見えなくなるまで見送つてゐることもある。姿ばかり見ても、餘程樣子の異つた處があつて、如何も人間らしくない。から深く筋の入つた面は人間にはないもので、それに面の色は靑銅色に光つて、眉が恐ろしく濃く、眼差が脈に鋭くて、何を見ても、着てゐる亞細亞風の衣服の寬濶した襞積までが、此男の胸に炎える煩惱の尋常でないことを示し顏である。

亡父なども、此男に逢ふたびに、立止つて身動きもせずに、『鬼だ。眞の鬼だ！』とつい言つたさうです。併し最う好い加減に亡父を御紹介しませう、これがお話の當の人であるから。

亡父は如何考へて見ても珍らしい人でした。

畫工と云つても滅多に無い畫工で、獨學した者で師にも就かず、何の流派にも屬せず、自分の心の中に方式を求めて、腕を磨かうと云ふ一念に凝つて、自分にも何故とも解らなかつたかも知れぬが、如何かいふ原因が有つて、我心の示す道ばかりを便つて行く、矢張一種の變物であるから、世間では往々無學といふ人聞の惡い名を負はされるが、自分は世間の惡評にも己が爲損じにも屈げず、益發憤つて勵むので、無學といふ名を取る原因の繪を畫いた時分から見ると、滅切腕が出來て來る、大した直覺の力で、何を見ても意味の籠つてゐるのを悟り、歷史畫といふ語の眞の意味をも自然と了解んで、何故にラファエーリ、レオナルド・ダ・ウインチ、チ、アン、コルレジオ等の畫いた尋常の首や肖像が歷史畫と謂はれて、他の畫家が材を歷史に取つて、種々に歷史畫らしく見せかけて、大幅の畫を作いても矢張 tableau de genre（尋常の圖畫）になつて了ふのか、その理由をも會得した。で、竊に感ずる所もあるし、又信ずる所もあるので、好んで高尙なものの中でも高尙な宗教を材料にして繪を作いてゐた。それのみならず、畫家と云へば大抵名聞の奴とか、癇癪持とか相場の極つたものであるが、亡父はそんな事はなかつた。毅然してゐて、正直で、幾分か强情な所もあつて、肌合の荒い、人の噂をするにも、稍自分を高く置いておいて皮肉のやうな贔屓分を言ふ人であつた。人が何と云はうが關つたことはない。我は人のために繪は畫かん。客間の飾物にする繪なぞは畫かん。と云つても、我の意を汲んで吳れる人なら、惡くは思ふまいが、全體俗人に繪が解らんと云つて、それを彼此言ふ事はないのだ。繪が解らん代り彼人達は骨牌が上手で、酒の美不美を飲みわけて、馬の眼が高い――紳士方はそれで澤山ぢやないか？　それを間違つて何かを嚙つて見たがいゝ、直ぐ高慢を陳べて耐つたものぢやないか！　人にはそれ相應に爲る事があるのだから、自分の爲る事をしてゐれば、それで可いのだ。我は知りもしない事を知つたか風をして、虛飾ばかり言つて、可惜興を醒させる者よりは、知らない事なら正直に知らないと云ふ人の方が、遙か勝だと思ふ。などといつも言つてゐる。僅かの潤筆料で、といふが一家を支へて仕事を續けることの出來る程の額であるが、それを取つては繪を畫いて、貧乏な畫師の力になつたり人を拯つたりするのを厭つたことは一度もなく、なだらかな忠實な心で、古人を慕つてゐたから、その故でもあら

うが、如何な畫家でも到底も眞似の出來ない
ほど氣高い額を書いてゐた。で、到頭勉強と辛
抱の功が顯れて、今まで、無學の、我流のと譏
つた人までが安く扱はぬやうになつて、宗教畫
の註文が絶えず來て、仕事に逐れるやうになつ
たが、その中で痛く氣が乘つた仕事が一つあつ
た。如何な繪であつたか、今では覺えがないが、
なんでも闇黒の靈を寫さなければならぬもので
あつた。如何いふ風に寫さうかと久しい間工
夫をして、どうかなして其額に人間を苦しめる、
所有厭なものを出したいものだと、種々考へて
ゐると、をり／＼夫の怪しの高利貸の姿が目前
に隱顯いて、覺えず『彼奴を粉本に取れば可いの
だ！』と思つたこともある。であるから、或る時
畫室で仕事を爲てゐると、戸を敲く音がして、
頓てその無氣味な高利貸がヌッと室に入つて來
た時には吃驚した――これは然うありさうな事
である。慄然として水を浴せられたやうな氣持
がしたと云ふ。

高利貸は父に對つて無造作に、

『お前さんは繪師かい？』

と云ふから父も不審な事に思ひながら、

『繪師です。』

と云つて、何を言ひ出すかと樣子を見てゐる
と、

『では私の肖像を畫いて貰ひたい。私は死目が
近寄つてゐるかも知れんのに、子供が無いが、
全然死んで了ひたくない、生きてゐたい。如何
だな、お前さんには生物酷肖といふ肖像が畫け
るか？』

亡父は肚の中で『丁度好い！　自分から望ん
で鬼の粉本になりに來たのだ』と思つたから、早
速引受けて、直段や期限を取極めて、翌日繪具
板と繪筆を持つて出懸けて往つて見ると、屋の
棟の高い屋敷で、犬が飼つてあつて、戸も栓も
鐵製で、妙な敷物で包んだ櫃などがあつて、
例の尋常人で無いらしい主人が目の前に取澄し
て坐つてゐるといふ爲體であるから、それを見
ると妙な心持になつた。窓は故意とらしく下
部の方ばかり物の蔭になつてゐたから、日は唯
上の方から射込むばかりである。『實に妙に面
白く額に陰影が出來てゐる！』と肚の裏で思つ
て、此面白い陰影が消えないやうにと願ひなが
ら、畫きに懸つた。『えらい力のある面相だな！
此半分でも畫けたら、今迄の繪は皆反故になつ
て了ふ。少しでも寫し取つて遣りたいな、然う
すりや布を抜出しさうなものが出來るだらう。
實に不思議な面相だ！』と絶えず感歎しながら、

愈身を入れて畫いてゐると、幾分か面相が取
れて來る。けれども、段々畫き込むに連れて、
自分にも何とも取留めては謂はれないが、何だ
か苦しいやうな、落着かれぬやうに妙な氣持が
する。でも、それには頓着せず、面色や面相の
一寸は氣の附かぬ所までも生物そツくりに寫
し取らうと心に誓つて、何よりも先ず眼の完成
に懸つた。此眼が又恐ろしく力があつて、到底
も生物の通りには寫し取れさうにもない。け
れども、極々細かな所を、色合までも是非寫し
取らんでは置かぬ、この秘密を發かんでは置か
ぬと決心したが、さて筆を執つて畫込むとなる
と、怪しく厭な心持になつて、何とも云へず苦
しいから、餘儀なく少しの間筆を休めては、又
畫いてゐた。けれども、終局には、眼が腸に
喰込むやうで、何とも云へず苦しくて、どうも辛
抱が爲きれなくなる。二日目三日目と徐々甚
しくなる。薄氣味が惡くなつて來たので、遂に
筆を擲げ出して、最う到底も畫いてはゐられぬ
と、斷然云ふと、無氣味な高利貸はおそろしく
顏色を變へて、父の足下に跪いて、若し肖像
が出來なければ、私の運命もそれきりで、此世
に長く生きてゐられんことになる、最う肝心の
處に筆を着けてゐるのではないか、其處を生

物通りに畫終けて呉れたら、それで私の魂も不思議の力で畫に籠つて、全然死に果てて了はぬでも濟むことになる、私は如何しても此世に生存へてゐなければならぬのだから、何卒畫終げて呉れろ、と云つて頼む、これを聞くと父も慄然とした。言草が如何にも變に氣味惡く思はれたから、繪筆も繪具板も投出して置いて、一目散に室を驅出して了つた。

さて其日は夜晝なしに其事が氣になつてならなかつたが、翌朝になると、高利貸のためには掛替のない一人の召使であつた女が肖像畫を持つて來て、主人は此繪は貰つて置けないから、お返し申す、其代り代は拂はぬ、と云つて、返して行つた。すると、其晩高利貸は死んで、形の如く葬式を營むといふことを聞いたので、何とも妙な事に思つたが、其頃からして亡父の心持が目に立つ程變つて來て、自分にも何故とも解らぬが、沈着いてゐることが出來んで、わさわさする。程なく亡父がまさか其樣な事をと思ふ程の事をもするやうになつた。其頃門人の中で去る男の畫く畫が鑑識家や美術好などといふ少數の人の目に留り出したが、亡父も平生此男の畫才を見拔いてゐたから、特に贔屓にしてゐたのである。ところが、ふツと此男が妬ましくなつて來て世間で彼此と其評判をして持囃すのが耐へられぬ程忌々しい。最後に、近頃出來上つた去る立派な寺の繪を此男に畫かせる話があると聞いたので、忌々しさも絶頂に達して、腸を攪捲られるやうな心持がする。『べらぼうめ、彼樣な青二才に跋扈られて耐るもんか！ヘン、老人に恥をかゝせようとするには未だ些と早からうぜ。まだ乃公だつて元氣があらア。反對に鼻を明かさせられんやうに用心しろ。』などと云つて、正直で曲つた事の嫌ひであつた人が、今までは始終厭惡く思つてゐた卑劣な手段をまで用ゐて、漸く繪を募集する廣告を出させて、他の畫家も銘々の作を持出して競爭に加はることが出來るやうにした。それからは一室に閉籠つて、一心不亂に筆を執つて、力のありたけを出して、己が魂を此繪に打込めようとしたやうであつたが、成程、出來上つた所を見ると、今までの作中での上出來である。誰も是こそ第一の選に當らうと信じてゐた。で、彌々繪を陳列することになつたが、他のを之に比べて視れば、晝の前へ夜を出したやうな塩梅である。すると、ふと立合の人の中で、たしか僧であつたと思ふが、餘の人の心附かぬことを一言云つた。其言葉に、『此繪は成程巧く畫いてあるが、[illegible]に缺けた處がない、ばかりか、眼に何やら毒氣を含んでゐて、如何も畫家が之を畫いた時の心は汚れてゐたらしく思はれる。』人々繪に目を集めて視たが、成程どうも其通りである。亡父も此批評で面目を失つたが、果して其通りであるか、ないかを我眼で鑑定をしたく思つたかして、つかつかと我作の前に進んで見ると、これはまア何とした事であらう、夫の高利貸の眼付が何の人物にも大抵乗移つてゐる。どれもどれも皆鬼々しく逆目に睨んでゐるやうであるので、我知らず慄然とした。で、此繪は斥けられて、かの門人の繪が到頭選に當つたので、亡父は恐ろしく業を煮して、宅へ歸つて來たが其時の物狂はしさは到底も口では云はれない。殆ど母を打擲せぬばかりで、子供等を追拂つて、繪筆や畫架を踏み折つて、壁に掛けてあつた高利貸の肖像を引外して、ナイフを持つて來い、煖爐を焚付けろと命ける。これを截細ざいて火に投べようと思つたのである。さうしてゐる所へさる朋友が訪つて來たが、これも亡父同樣畫家で、氣輕な、曾ぞ不足らしい面をしたことのない、途方もない望なぞは起さぬ如何な仕事でも關はず機嫌好くする、其位であるから飲んだり食つたりとなると、一段と機嫌の好くなる男で

あつた。
友の畫家は、「何を爲てるのだ！ 焚いて了ふ積りか？」と云つて肖像畫の傍へ寄つて、「飛でもない事をする、それは君の傑作の一つだ。此間死んだ高利貸だらう？ 善く出來てゐる。所謂眉を通過して眼に入つたものだ（我、形を描き、たりと云ふ意をもちりて寫したものなるべし）實際はなか〳〵此樣な眼付をしてゐたことはない。」
「火に投べたら、如何な眼付をするか、試驗してやらう。」と云ひながら、亡父が繪を煖爐へ投入れようとすると、朋友は遮つて、
「まア待ち給へ！ そんなに眼障になるなら、寧そ僕に與れ給へな。」
初の内は亡父も強情を張つてゐたが、それでも遂に納得したので、氣輕男も此肖像の手に入つたのを殊の外喜んで、持つて歸つた。
友が歸ると、亡父は急に氣が落着いた。宛然肖像と一所に心の壓石も脱れたやうな氣がする。我ながら如何して彼樣に意地が曲つて、妬ましい心が起つて、氣分ががらりと變つたものか、異まれる程である。自分の所業を省みてみると、情なくなるから、聲も哀れに、「いや、これは何でも罰が當つたのだ。我の繪が輸けたとて、輸けるだけの罪はあるのだ。もと〳〵人に鼻を開かせようとして畫いたのだからなア。妬ましいといふ鬼のやうな心で筆を執つたのだから、作にも其が出なければならぬ筈だ。」といふや否や、家を出て、舊の門人を訪ねて、抱付いて謝罪を言つて、成丈罪の輕くなるやうにして置いて、さて更に仕事に掛つて、相變らず兀々と畫つてゐたが、前から見ると、屈託顏をすることが多い。屢く祈をもすれば、默然としてゐることもあつて、人の噂をしても、最う前に衣着せぬやうなことは云はぬ。何となく心が圓くなつたやうである。其内にトある事に出遇つて、一層深く心を動かした。かの肖像畫を持つて往つた友に久しく會はぬから、訪ねてみようと思つてゐる處へ、その男がふと訪ねて來た。二言三言の問答の後、友の云ふには、「君が此間あの肖像畫を焚かうとしたのは道理だよ。成程何處となく無氣味な處があるね……僕は魔法なぞは信じはしないが、彼繪には如何も魔が射してゐるよ……』
『如何して？』
『如何してでもないが、あの繪を持つて歸つて室に掛けるとね、其時から何とも云へなく厭な氣持がして……宛で誰か人でも殺さうとしてゐるやうな氣がしたよ。今まで眠られんといふことのなかつた僕も此度初て其味を知つたが、それはかりでない、變な夢を……夢とも現とも判然しないが、何でも魘はれたやうな心持が——てね。あの老夫めが眼前に目顯いてならなかつた。兎に角その心持は僕には口では言はれん。生れて初てこんな目に逢つた、此頃は始終狂人のやうな風をして彷徨いてゐたが、何かどうも氣遣で、何か事が、起りさうで、厭な心持がしてならなかつたよ。何か愉快な言でも云つたり、眞率な言を言はうとしても、如何も云へないでね、宛で探偵でも僕に附いてゐるやうな心持さ。すると、甥が彼畫を欲しいといふから與つた所が、與ると急に重荷でも卸したやうな氣分になつて、此通り快濶になつて了つた。僕は如何も魔を使つたんだよ！」
亡父は一心に此話を聽入つてゐたが、軈て、
「それで畫は今甥の所にあるのかね？」
「如何してなか〳〵！ 我慢が出來るもんか！ どうも何だね、彼畫には老夫の氣が乘移つてゐるんだね。老夫がね額を脱出して、室中歩き廻つて——いや奇妙な事を言つたよ、甥がさ。僕も自分で經驗してゐなかつたら、乾度彼奴を氣が違つたと思つたらうよ。で、繪は何とかいふ畫を買集めてゐる人があつて、それに賣つた所

が、其男も持ちきれなくつて、又誰かに賣つたさうだ。

　此話を聞いて亡父は深く感じた。つく〲思に沈んで、鬱々としてゐたが、遂に全く筆に魔がさしたので、高利貸の氣が如何かして幾分か畫に乘移つたからこそ、今から人に危險な心を起させたり、美術家を惑はして正路を踏み外させたり、又は嫉妬の恐ろしい苦しみを嘗めさせなどして世間を騷がすのである。とかう思ひ込んだ矢先へ不幸が三度續いて、妻と、娘と、乳呑兒を急に喪したから、亡父は之を天罰と思つて、是非とも此世を捨てて了はうと決心した。で、私が十歲になるのを待つて、美術學校へ入れて、負債の始末を付けなどしてから、人里離れたさる寺院にかき籠つて、程なく僧になつて了つたが、僧になつてからは戒行怠りなく勇猛精進するので、衆僧皆目を聳てたといふことである。すると、其處の院主が亡父の畫に巧なことを聞いて、一つ此院のために本尊を畫いて吳れろといふ賴みである。亡父も最う心の角が折れてゐたから、いや私の筆は穢れてゐるから、筆を執るのは憚り多い。さうして繪の畫ける身となるには、先づ一命を神に獻げて、難行苦行の功を積んで、心の汚穢を洗去らなければならぬと云つて謝つた。それゆゑ強てとも云はれなかつたが、亡父はそれから戒行を思ふさま難かしくした。けれども後にはそれでも不足で、左程辛くも思はれぬやうになつたから、そこで此度は院主の許を得て、全く一人で居ようといふので、人氣のない處へ往つて、樹枝を折つて庵室を構へ、草の根などで命を繫いで、或は石を搬んだり、又は一日一つ所に佇立んだまゝ、兩手を擧げて絕えず祈をしたりして、樣々の難行をし、聖人の言行を外にしては他に例なく思はれる程の捨身の修行をした。然うして幾年といふ久しい間、祈で力を附けながら、此肉身を苦しめてゐたが、頓て或日の事、院へ來て院主に對つて、「最う宜しい、神樣の御意に適ふことなら、日外お賴みの畫を描きませう。」といふ聲にさへ力が籠つてゐる。そこで、畫題を基督の降誕と定めて、庵室に籠つたまゝ、粗末な食をも飽くまでは食はず、口に祈禱の聲を絕たずして、全一年も其畫に從事つてゐると、畫が出來上つた。誠に精巧な出來である。固より院主も、弟子の僧達も、畫に精しい人達ではなかつたが、皆畫中の人物の尋常ならず神々しいのを見てめざましいものに思つた。俯き加減に幼ない神の御子を目守められた聖母の面相の氣高く柔しい優やかなところ、最ら遠く何やらを視遣つてゐられるらしい神の御子の眼差の賢しく心深く見受けられるところ、神業の不思議に荒膽を挫がれた諸王が御足の下に跪いて鳴を鎭めてゐる晴がましい樣子。さては畫一面に充滿つた言ふに言はれぬ神寂びた鹽梅などを見れば、調子の調うた中に大きく力のある處も見えて、視る目も眩いほどである。衆僧總て此新作の前に跪いて了つた。院主は院主で、『いや〱、人間業ばかりでは斯うはいくもんではない。これは何でも神の御力が足下の筆に宿つて、天の祝福が此畫に降つたに相違ない。』と云つて、難有がつた。

　其頃私は學校を卒業して、金牌を貰ふと共に伊太利へ遊學するといふ娛しい望を負ふ身となつたが、伊太利へ遊學するといふのは二十年代頃の美術家が願の第一であつた。父と別れてから十二年にもなるから、父に告別さへして了へば、最う他に用のない身である。有樣は父の面影も疾うに忘れて了つてゐたが、度々其行狀の嚴正で高潔であることは聞いてゐたから、會はぬ前から定めて庵室と祈禱の外には浮世に何も心を留めぬ、終極もない精進潔齋に憊れ切つて枯れたやうになつた世捨人の剛ばつ

た姿を見ることゝ想つてゐたところが、目の前に優しい尊げな老僧を見たので、私も大に驚いた。觀音の貌といつては額に少しも見えない。天國の樂の透いて見えさうな冴えた面色をしてゐる。雪に紛ふ白髯や、細く輕く雲のやうな同じ色の頭髮の美しく胸に垂れて、質素な黑の法衣の襞積を隱し、それを括る紐にまで届いてゐる。けれども、何よりも珍らしく感じたのは、美術に就いて父が親しく意見を述べた其言葉で、父の言葉は私も永く心に銘じて忘れまいと思ふが、我技藝の友たる人々も亦同じやうにありたいと切望する。

祝福を受けに傍へ寄つたとき、父のいふには、

『倅や、私はお前を待つてゐた。お前の生涯も最うこれで道が開いたといふものだが、お前の行く道は清い道だから、踏外さんやうにしなければならん。お前は畫才がある、才といふものは神樣の下すつた貴いものだから、亡なさんやうに、氣を附けなさい。何を見ても、研究をして、總ての物を我筆に從へて、物の内に籠つた想を看出すやうにして、何よりも先づ創造の奧祕を索らうと心掛けるが可い。神樣のお見出に預つて、創造の奧儀を明めて見なさい。幸福なものだ! 然うなると、自然に賤しい物が無くなる。創作の才のある美術家は果敢ないものを作つても、大したものを作つた時のやうに、矢張大きい所がある。其樣な人が作るとなると賤しい物も賤しい所がなくなる。何故なれば其人を介して創造の妙旨が透いて見えて、賤しい物も其心に清められて、貴く現れて來るからだ。人間のためには神樣の、天上界の、樂園の影の射すのは美術だから、そればかりでも、美術は他のものより貴い譯だ。悠々として天を樂しむことは浮世に交つて齷齪してゐるより遙に勝つてゐる。創作は破壞より遙に貴い。天使は其曇らぬ心の清くて邪の無い所ばかりでも、惡魔が多力を恃んで、神を憚らず恣に振舞ふよりも何程尊いと思ふ、高尚な美術の作物は此世の所有物よりも何程貴いか知れん。何も彼も美術に打込んで了つて、熱情を傾けて美術を愛するやうにしなさい——熱情と云つても、人慾の臭のあるのでは駄目だ。靜穩した天上から來た熱情でなければ不可。熱情がなければ人は此世を離れることが出來ぬ。人心を安める妙音を吐くことも出來ぬ。人の心を安めるため、和げるために美術上の逸品は此世に出るのだ。だから、それが人の心に不平の種を蒔く處はない。反つていつも朗かな祈の聲となつて神樣の御側へ往かうとする翼を持つてゐるものだ、けれども、なう、嫌な事がある……』と言淀んだが、其時父の顏には一寸雲が掛つたやうで、今まで晴れてゐたのが急に曇つた。で、いふには、

『私も曾て出遇つたことがある。私が肖像を描いた彼の變な男はあれは何者たか、今に解らん。正しく何か魔物だと思ふが、世間では魔の有ることを認めんから、それはそれとして措いて、たゞ私は厭々ながらその肖像を描いたのだ。描いてゐても、少しも氣が乘らなかつた。無理に自分を壓へ附けよう、自分に在るものは何も彼も酷たらしく殺して置いて、只自然に從はうとばかり思つたのだ。だから、美術上の製作はなかなか出來なかつた。美術上の製作でないから、それを觀て人の感ずる所も落着かぬ物騷がしい感じで、美術家の感じに適ふ所がない。美術家といふものは騷がしい中でも靜定といふものを失はんからなア。人の噂に聞けば、その肖像畫は人手から人手に渉つて、美術家に嫉妬心や、淺ましい猜みや、他を虐け苦しめようといふ惡念を起させて、毒を流してゐるさうたが、お前に如何か其樣な心を起させたくないものだ。それが一番恐るべきものだ。露ほどでも

人を容るるなら、寧そ人に容められて所有難儀をしたはうが遙か利だ。心の純潔だけは守るが可い。天才の有る者は他一倍純潔でなければならん。餘の者なら大目に見て置かれることも隨分あるが、天才の有る者は然らはいかん。曠がましく禮服を着けて戸外へ出ると、僅ばかり車の飛沫が掛つても、多勢が環立つて、指さしをして、不體裁のを嗤はうけれど、其處へ來合した、平服の餘の者が何程泥に塗れてゐても、それには目を注める者がない。何故ならば、平服では汚點が目立たぬからだ。』

父は私を祝して、抱いて呉れたが、私は生れて此時ほど心の高氣く奮ひ興つたことはない。敬愛の心を傾けて、子が親に對ふといふよりは一層深い敬愛の心を傾けて、犇と父の胸に抱付いて、垂れてゐた白髮に接吻した。

父は眼に泪を浮めた。最う分袂といふ時、更に私に對つて、『倅や、私はお前に賴みがある。先刻話した肖像畫をお前が何處かで見掛けることがあらうも知れんが、不思議な眼付で人間らしくない面色だから、見れば直ぐそれと辨る。見掛けたら、是非破つて呉れ……』

かうした依賴であつて見れば、私も屹度引受けたと云はなければならんぢやありませんか？けれども、父の話に少しでも似た所のある畫は今十五年も經つ内に一度も見たことはなかつたが、今ふと此競賣で……」

と言ひかけて畫家は今一度肖像畫を見ようとして壁へ目を轉した。そこで、聽衆も一時に同じやうに首を振向けて、眼で夫の怪しい肖像畫を索ね廻したが、不思議なるかな、掛つてゐない、肖像畫は。判然聽取れぬ話聲や身動の音が片隅から起つて全體に行渉ると、頓て「竊まれたんだ。」といふ言葉が彼處此處に聞える。何者かが人々話に聽惚れてゐる間に外して行つたものと見える。其處に居合せた人々も、斯うなると、實際不思議な眼を見たのであらうか、それとも、餘り古ぼけた畫を覽散らしたので、眼が疲れて一寸其樣な物が見えたのであらうか、何方とも思ひ定めかねて、多時はうやむやの中に彷徨つてゐたといふことである。

—（ゴーゴリ作）—

うき草

一

夏の靜な朝の事であつた。晴やかな空に日は最う高く昇つてゐたが、野は未だ露に煌いて、今しがた靄の霽れた谷間からは何處となく良い匂のする涼風が通つて、しつとり濡れた森の中には早起の小禽が面白さうに囀る聲がする。稍花を持ち出した裸麥が裾から巔へ生上つた平な岡の上に小村が見える。今其小村を指して狹い田舍道を辿つて行く若い女があるが、見れば、白地のモスリンの服を着けて、圓い麥藁帽子を冠つて、手には傘を持つてゐる。其後から離れて傭男が伴をして行く。

女は逍遙を樂んでゐるかの樣に緩々行く、道傍の脊の高い裸麥がそよ〳〵と風に靡いて大紆曲にうね〳〵となる時、薄緑の浪が淡紅い浪を追つて走つて、中空には雲雀が囀渡る。若い女は此處からは十町もある自分の持村を出て、今向うの小村へ往かうとしてゐるのであるが、名をアレクサンドラ・バーウロウナ・リービナと云つて、後家で、子のない代り、なか〳〵の財產家で、弟のセルゲイ・バーウルィチ・ワルィンツォーフといふ非役の陸軍中尉と一所に生活してゐる。ワルインツォーフは未だ獨身で、姉の財產を預つて其世話をしてゐるのである。

アレクサンドラは小村まで來て、一番端の古い低い小舍の前に立止つたが、傭男を招寄せて、內へ入つて、其家の家內の容體を尋ねさせると、程なく白い髯の生えたよぼ〳〵した老爺を連れて出て來た。

「どんなだね？」とアレクサンドラが問くと、老人は漸く、

「まんだひくら〳〵しちよりまする……」

「入つても可いかえ？」

「可うがんすとツて。入らツしやりませ。」

で、小舍の內へ入つた。內は薄暗くて、息氣苦しいやうで、烟が籠つてゐる。……誰やら臥煖爐の上でむく〳〵と動いて唸るものがある。振向いて見ると、碁盤縞の布で包んだ黃ばんだ皺だらけの老婆の首が薄々見える。老婆は厚ぼつたい毛布を胸まで掛けて、瘠せこけた腕を力無げに投出して、切なさうに息氣をしてゐる。

アレクサンドラが其側へ寄つて、額に手を觸れて見ると、炎えるやうに熱い。

「どんなだね、マトリョーナ？」と臥煖爐の上へ屈みかゝつて問くと、老婆は其面を凝然と目戍めて、うゝむと唸つて、

「駄目だアよ、奧樣。最うお迎が來たでがんすよ。」

「其樣な事はない、屹度癒るよ。アノ藥を遣したが、お服りかえ？」

老婆は悲しげに呻いたばかりで、何とも返答をしない。聞取れなかつたものと見える。

「頂きましてがんすよ、」と戶口の處に立つてゐた老爺が答へる。

アレクサンドラは振返つて「お前の外には誰も附いてゐないの？」

「小女を附けときまする――孫でがんすが、なかなか附いとりましねえ。始終遊びに出かけまするだ、お轉婆だもんだけんね。老婆が水を飲みたいとツても、面倒がりまするし、私イ老人の事だけん、役にや立たず、ほんに手の甲ばう摩りまするだ。」

「內の病院へ入れては如何だらうね？」

「無駄でがんすよ。どうせ、お前さま、おッ死ぬもんだものをや。えら、永生のウしましたアけん、大方天父のお迎に御座らしたんだんべえちふますことよ。臥煖爐を降りることもなんねえだ。何で病院さ往かれるもんで！　動かして見なさろ、直ぐおッ死ぬべえから。」

「う、う、うむ、」と病人は呻いて、「奥様よ、私イ死んだら、孫女イ孤兒だア。面倒見てやつて吳れさッせえよ、私等が旦那は遠方だけんど、お前様ア……」

　と言ひさして口を噤む。最う云はれなくなつたのである。

「心配おしでないよ、惡いやうには爲ないから。それはさうと、お茶とお砂糖とを少しばかり持つて來たからね、飲みたくなつたら飲んでお吳れ……。湯沸は有るだらうね？」と老爺の面を見る。

「湯沸でがんすか？　湯沸は有りましねえけんど、借りて來ますべえ……」

「そんなら借りて來ることにおし、內のを遣しても可いけれども。それから、孫女に命けて此と側に居させるが可いよ。遊びに行くなんて、そんな事はないッて。」

　老爺は何とも云はずに、兩手を出して、茶と砂糖の紙包を受取る。

「そんなら、マトリョーナ、私は最う歸るよ。また來るよ。あんまり鬱々思はないで、精出して藥をお服り……」

　老婆は少し頭を擧げて、身を捩つて、「奥様、お手を頂かして吳んなさろ、」と口の中で云ふ。

　けれど、アレクサンドラは手を出さずに屈みかゝつて、老婆の額に接吻した。

　出がけに老爺に對つて、「大事にしてお吳れ。藥は書いてある通りに屹度服ませてお吳れ……。それから、お茶もね。」

　老爺は此時も何とも返答をせずに、唯辭儀をする。

　戸外へ出れば、爽然とするやうである。傘を開げて出懸けようとすると、ふと小舍の横手から、鼠色のコロミヤンカの散外套に同じ様な帽子を冠つた三十許りの男が競走馬車に乘つて出て來た。アレクサンドラを見ると、急に馬を駐めて、此方を振向いた其面を見れば、血の氣の薄い大きい面で、蒼味がかつた鼠色の小さな眼で、白ッぽい髭を生してゐて、着てゐる衣服の色に副つた面色である。氣の無ささうに莞爾として、「お早う。何の御用で？」

「おやまア、レジネフさん！　病人の見舞に來たの……貴下は何處へ？」

　レジネフと云はれた男はアレクサンドラの面を覗込んで、又莞爾として、「病人の見舞に？　それは御奇特な。だが、寧そ病院へ入れたら如何です？」

「でも、大病ですからね。手が附けられないの。」

「貴女の處の病院は取拂ひますか？」

「取拂ふ？　何故？」

「何故でもないが。」

「奇異いのねえ！　如何して取拂ふなンぞとお思ひなすッて？」

「でも貴女はダーリヤさんと親密で、少し感化されてませう？　ダーリヤさんは病院や學校はくだらない、餘計なもんだと云つてるぢやありませんか？　慈善も教育も公然爲ては不可、皆精神的の事業だから……とか何とか云つてるさうぢや有りませんか？　誰の口眞似でせう？」

　アレクサンドラは笑ひ出した。

「ダーリヤさんは、それは發明な方だから、私も尊敬してゐますわ、それに好ですわ。ですけれども、彼方だつて思違ひがないとは云はれないから、仰しやる言を一々信用はしませんわ。」

「それなら可いですな、」とレジネフは云つた

が、また馬車に乘つてゐる。

「彼人は自分で自分の言ふ事を餘り信じてはゐないですからな。兎に角、好い鹽梅にお目に懸つた。」

「何故？」

「何故といふ挨拶が有るもんですか、貴女に逢つて厭な氣持のする奴はない。別して今日は爽然した面色で、鮮かですな。宛で今朝の天氣といふもんですな。」

アレクサンドラは復た高笑をした。

「何が可笑しいです？」

「何がツて、貴下！　貴下の面を御覽なさい。氣の無い、冷い面色をして、そんなお世辭を云つて。能く終に欠が出ませんでしたね。」

「冷い面色……貴女は何でも火でなければ夜も日も明けんですな。けれども、火といふ奴は仕方がないものだ、パッと炎上つて、烟が起つて、消えて了ふばかりで。」

「其代り煖まります。」

「其代り火傷をします。」

「火傷をしたつて可うござんすわ。そんな事は些とも恐れないわ。それでも矢張何よりは……」

「如何だか！　一度こんがり火傷を爲たら然うは仰しやるまい。」と氣短に云ひ放しながら鞭で馬を撲つて、

「左樣なら。」

「一寸！　此度は何時入らツしやる？」

「明日。賢弟に宜しく。」

と馬車は去つて了つた。

アレクサンドラは後を見送つてゐたが、心の中で「宛で袋だよ。」成程、帽子を阿彌陀に冠つた其下から黃色い縮毛が蓬々と漏出して、塵塗になつて、背を圓くしてゐる所は如何見ても大きな粉袋である。

アレクサンドラは徐に家路を辿つた。俯向いて歩いて行くと、蹄の音が間近に聞えたので、立止まつて面を揚げて見れば、弟が向うから馬に騎つて來る。それと竝んで乙な上衣の胸を開げて、乙な頸巾をして、乙な鼠色の帽子を冠つて、手に細いステッキを持つた、脊の低い、若い男が來る。アレクサンドラは考へながら歩いてゐたので、それとは少しも氣が付かないのは判つてゐながら、若い男は其姿を見ると、まだ遠方から笑ひかけて、此方が立止まると、直ぐ側へ來て、さも嬉しさうに、殆ど舌たるく、

「お早うござります。御機嫌よろしう。」

「おや、パンダレーフスキイさん！　お早うございます。ダーリヤさんの御用で？」

「お察しの通り、」と云つて莞爾となつて、「主人の用で參つたので、貴女をお尋ね申したのでございます。結構なお天氣だのに、一里ばかりしかない所でございますから、歩いて參りましたが……參つて承れば、お留守で。御舍弟樣に承りましたが、セミョーノフカへお出で遊ばしたのださうでございますな？　丁度御舍弟樣も田圃へお出ましになる所でございましたから、御一所にお迎に參りましたが……へ、へ、好い處でお目に懸りました。」

若い男は純粹の露西亞語で、訛らずに物を云ふけれど、其音は如何も外國人らしい——尤も何處の者とも定めかねるが、面相を看ると、何處か亞細亞人らしい所がある。通つた段鼻で、飛出した儘で固まつた樣な大きな眼で、眞紅な厚脣に低い額、松脂のやうに黑い頭髮——何を見ても東の產らしいけれど、名はコンスタンチン・チオミーヅイチと云つて、オデッサの者だと云つてゐる。其癖ベロルシヤの何處かで去る慈悲深い金滿家の後家に養はれたのであるさうだが、それとは別人の去る後家の世話で役に就いたこともある。一體年增連は皆此男を贔屓にする、それといふも、然うした人の機嫌を取つて、それに取入るのが上手であるか

らである。今もダーリヤ・ミハイロウナ・ラスンスカヤといふ金満の女地主の所に養子とも附かず、食客とも附かず、厄介になつてゐるのである。なか〲如才がなく、愛想も善くて、物事に感じ易くて、それで内々好色な、好い音聲の、可なりピヤノも彈く男であるが、話をする時には相手の面を凝然と視詰める癖がある。衣服持が善くて、いつも清潔にしてゐる。大きな髭を丁寧に剃つて、頭髪を綺麗に撫附けてゐる。

アレクサンドラは話の終るのを待つて、弟に對つて、

「今日は色々な方にお目に懸るよ。今もレジネフに逢つたの。」

「レジネフに！　何處かへ出懸ける處でしたか？」

「然うでせうよ。而してね、まア如何だらう、競走馬車に乘つて、だぶ〲した衣服を着て、塵だらけになつて……ほんとに彼人も餘程奇人だよ！」

「奇人と云や奇人かも知れないが、兎に角好い漢だ。」

「何方で？　レジネフさんでございますか？」とパンダレーフスキイは何か驚いたやうな面をする。

「然うです、ミハイロ・ミハイルイチ・レジネフの事で、」とワルインツォーフは答へて、更に姉に對つて、

「おや、これでお別れだ。私はこれから田圃へ往かなきやならん、蕎麥の種蒔をしてゐるから。貴姉はパンダレーフスキイさんと御一所にお歸んなさい……」

と云ひ棄てて駈を追つて往く。

「これは難有い！」と仰々しく云つて、パンダレーフスキイは腕を持つて來る。

アレクサンドラは手を渡して、二人連立つて住宅の方へ歩き出した。

アレクサンドラを連れて行くのがパンダレーフスキイには恐ろしく嬉しいと見えて莞爾々々しながら徐々歩いて行く。其亞細亞風の眼を見ると濕みを持つてゐる位。尤も是は珍らしからぬ事で、此男は何ぞと云ふと直ぐに感動して涙ぐむ。然し、誰にしろすらりとした美しい若い女に腕を借して厭な心持のする者はあるまいから、其も其筈か。アレクサンドラの美しいのは縣下一般の評判であるが、成程其評判の通り、活々とした鳶色の眼で、黄ばんで薄白く光る頭髪で、むつちりした頬に靨が寄る。其他數へ立てれば未だあらうが、通つて少し上反つた鼻、それ一つでも、大丈夫、男を迷はすけれども、何よりも一番好いのは其面色で、美しい中にも毒の無い温順しい開放しの所があつて、人の心を動かす、奪ふ。小兒のやうな眼付をして小兒のやうに笑ふので、方々の夫人たちも淡泊してゐるよと云はれる……これで未だ不足なら、それは慾といふものである。

「では、ダーリヤさんの御用で入らしツたのですね？」とアレクサンドラが重ねて問くと、

「左樣でございます、」とパンダレーフスキイは答へる。すの音を妙に氣取つて。「えゝ、あの、何でございます、貴女に今日是非御夜食を喫りに入らしツて下さるやうに、是非お願ひ申して來いと申すことで……珍客が有りますので、是非御紹介いたしたいと申すことで。」

「何方、お客といふのは？」

「ムツフェーリとか申して、男爵の侍從さまで、ペテルブルグからお出でになつたのでございますが、主人は此頃ガーリン侯の所でお相識になつたのださうで、大層稱めてでございます。お若いが、教育がお有ンなすつて、大層愛想の好い方ださうで。此方も矢張文學といふよりは

ア、美しい蝶々！　御覧遊ばせ……といふより は經濟學でございませう、修つてをられるのだ さうでございますが、何やら面白い論文をお書きになつたとかで、主人の批評を聽きたいと仰しやるさうで。」

「論文の？」

「何さ、文章の批評でございますよ、文章の。文章に懸けては主人も、御承知でもございませうが、名人でございますからな、ジウコーフスキイも文章の事では相談相手にされたさうでございます。それに、これも私の御恩を戴いた方でございますが、オデッサのロクメラン・メヂアローウイチ・クサンドルイカ、最う御老體でございますが、えらい方で……貴女も多分御存じで入らッしやいませうな？」

「いゝえ、聞いたこともありませんよ。」

「御存じない？　これはしたり、如何したもんでございませう！　まア、何に致せ、そのロクメラン・メヂアローウイチも、主人の露語に精しいことには大層感服してをられましたやうな譯で。」

「その男爵といふのは衒學者ぢやありませんか？」

「いや、左樣な方ではないさうでございます。主人の話では、反つて、見るからが才子々々した方ださうで。ベートオーフェンの事を大層面白くお話になつて、侯爵樣すらお浮れ遊ばしたと申すことでございますが、これは手前も何卒伺ひたく思ひます。矢張手前の繩張内の事でございますからな、へ、へ。いや、美しい花がございます、如何でございます、差し上げませうか？」

　アレクサンドラは花を貰つて、少しすると、遣して了つた。家までは二十歩よりはあるまい。大きな明るさうな窓を附けた新築の家が菩提樹と楓の古木の繁みの中に白々と主待貌に見える。

　パンダレーフスキイは心を籠めた贈物の身の果を見て、少し不興氣な體であつたが、

「では御返事は何と申しませう？　お出で遊ばしますか？　御令弟樣にも是非お出で下さるやうに願ひ置きましたが……」

「伺ひませう。ナターリヤさんは如何してゐます？」

「ナターリヤ樣でございますか？　お異りも御座いませんが……しかし、歸りまするには、この後方の處を曲りませんではなりませんが、最う通り越しましてございますから、これで御免を蒙ります。」

　アレクサンドラは立止まつて、

「然うですか。お寄んなさいましな。」

　と思ひきり惡く云ふ。

「難有うございまするが、主人がタリベルグの新曲を聽きたいと申しましたから、餘り後れましては——些と復習つて支度をしておきませんでは、何でございますから。それに、手前風情がお饒舌を致したのでは反つてお五月蝿うございませうから。」

「いえ、そんな事は有りませんがね……」

　パンダレーフスキイは溜息をして、思入十分に俯向いて暫く默つてゐたが、軈て左樣ならばと、一歩退つて辭儀をする。

　そこで、と、アレクサンドラも會釋して歸つて行く。

　パンダレーフスキイも家路を辿り出したが、其顏を見ると、今までの愛嬌は急に引込んで、威張つた、どころか、殆ど慳貪な面相になつてゐる。歩き振までが變つて、今は大股にヅシリヅシリと歩いて行く。細い杖を氣無しに揮廻しながら、十八九町も來ると、路傍に一寸姿色の美い百姓の娘が燕麥の中から犢を逐出してゐる。それを見ると、パンダレーフスキイは

急に又莞爾となつて、猫のやうに靜と側へ寄つて、物を云ひかけた。娘は初の内は默りで、顏を綴めて、笑つてゐたが、其内に袖を口元へ宛てて、横を向いて、

「彼方へ行かッしやいよ……好かねえ旦那さアだよ……」

パンダレーフスキイは一寸指で威嚇す眞似をして、それからワシリョークの花を摘つて呉れろと云ふ。

「何にするだアね？　環でも作らッしやるのけえ？　私イ厭だア、彼方イ往かッしやいてば……」

「これさ、まア其樣な事を云はずに、お聽きよ……」

「厭だア、彼方イ往かッしやいよ。そら、若樣が御座らしッた。」

振返つて視ると、成程ワーニヤにペーチャと云ふダーリヤの子供達が駈けて來る、其後から抱への教師のバシストフといふ、書生上りの、今歳二十二になる、若い男が隨いて來る。バシストフは脊高で、淡泊した面相で、大きな鼻に厚脣、豚の眼の樣な眼付で、醜くてのつそりした男であるが、人が善くて正直である。衣服にも關はず、髮をも剪らずにゐるが、洒落で然うしてゐるのではない、無精からで。無暗と口を可愛がつて、眠ることも好きな代り、面白い書物を讀んだり、身を入れて話をしたりすることも好きで、心底からパンダレーフスキイを憎んでゐる。

子供達はバシストフに狎いて吾佛と崇めて居る。其他の家内の者とも、バシストフは心易くしてゐる。これが主人には餘り快としない。常々舊弊な事は爲んと云つてはゐる樣なものの。

パンダレーフスキイは「坊さん、お早う！　今日は大層早く運動に出懸けましたね！　僕は、」とバシストフの方に向いて、「最う大分歩いた。如何も景色が好きでね。」

「然うさ、君の景色を見てゐる所は善く見えた。」

「君は實に俗物だ。最う異う感ぐツてゐる。何せ君はさうだよ！」

パンダレーフスキイはバシストフ風情の者に對ふと、直に憤る。而してすの音を判然強く發す。

「道が分らなくなつて、問いてゐたのかい？」

と左右を顧みながらバシストフが云ふ。パンダレーフスキイが直と顏を見守めてゐるので、甚だ厭な心持がするのである。

「君は如何しても俗物といふに過ぎない。何を見ても乾度俗な所を目附け出さなければ承知しないのだ……」

「さア、坊さん！」と不意にバシストフが號令を掛けた、「向うの原に灌木が見えるでせう、彼處まで競走して行きませう、誰が一番に達くか。宜うござんすか？　ワン！　ツー！　スリー！」

子供は一生懸命に駈出す。バシストフも續いて駈けて行く……

「下司め！」とパンダレーフスキイは肚の裏で思つた、「子供を不行儀にして了ふ、全くの下司だ！」

で、得意氣に自分の粧した清潔した服裝を視廻して、平手で二度ばかり上衣の袖を彈いて、領を振つて、而して歩き出した。歸つて來て、室へ入ると、古びた房衣に着改へて、心配さうな面色をしてピヤノの前に坐つた。

二

ダーリヤ・ミハイロウナ・ラスンスカヤの住宅は縣下でも一二を爭ふ程の者である。石造の大廈で、ラストレーリの繪樣に基いて昔風に建てたもので、巍然として岡の上に聳えてゐる。その裾には中露西亞でも名ある川が流れてゐる。

主婦のダーリヤも名の聞えた人で、金滿家で、亡くなつた夫は樞密顧問官をしたものである。パンダレーフスキイは歐羅巴でダーリヤを識らぬ者はない樣に云つてゐるけれど、歐羅巴では餘り識つた者もない、ペテルブルグですら左程羽振の善い方でもない。其代りマスクワでは誰一人識らぬ者もなく、皆出入をする。多く上流社會の者と交際をして、少し奇癖が有つて、餘り人の好くない方であるが、恐ろしく賢い女と名が通つてゐる。若い頃は大層美しくて、詩人が詩を贈るやら、若い男が戀れるやら、高位顯官の人が附廻すやらしたものであるさうだが、それも最う二三十年も前の事で、今では昔の面影だに殘つてゐない。「年寄でもない癖に、こんなに瘦せこけて、黃ろくなつて鼻の尖つた女でも、一度は美人であつたこともあるのか！　歌にまで唱はれたのは此女か！」と誰も初ての者は異んで、竊に人の世の賴み難い事を嘆ずる位である。尤もパンダレーフスキイは眼が今だに恐ろしく美いと云ふけれど、歐羅巴でダーリヤを識らぬ者はないと云ふのも此人であるから、餘り宛にはならぬ。

　ダーリヤは每年夏になると子供を連れて、（ナターリヤと云つて今年十七になる娘を頭に、九歲と十歲と男の子が二人、都合三人あるが）、それを連れて持村へ歸つて來る、而して華美に暮す。男といふ中にも獨身者と多く交際をして、地方產の貴夫人達は七里けつぱいだと云ふ。其代り其連中からは恐ろしく惡く云はれる。ダーリヤと云ふ女は傲慢で、不品行で、恐ろしく我儘者で、第一、その話を聞くと、時々ハッと思ふ程厭らしいことをいふなどと云はれる、成程ダーリヤは田舍では餘り氣を置かぬ。繕ひ氣なく憚らず振舞ふ所を見ると、都の立者が其邊の名も知らぬ賤婦を輕蔑む色がほのめかぬでもない……町方の相識に對つても、心置きなく、幾分か茶かし加減に待遇ふ、けれどもこれは輕蔑むのではない。

　一體自分より身分の卑い者の前でおそろしく打寬ぐ者に限つて、身分の上の人の前へ出ると、打寬がぬものである。これは如何した譯であらう？　併し、こんな不審を起したとて、何の益にも立たぬことである。

　パンダレーフスキイが漸くタリベルグの新曲を復習ひ果げて、面白い綺麗な我室を出て、客間に降りて見ると、最う家內の人々は寄集つてゐる。サロン（集）が始まつてゐるのである。主婦のダーリヤは大きな臥椅子に憑つて、足を縮めて、手に新版の佛蘭西の小本を持つてゐる。窓の側には纖架を中間に相對にナターリヤと女敎師の Mlle. Boncourt とが坐つてゐたが、此女敎師といふのは、今迄男を持たずに押通して來た六十ばかりの干乾びたやうな老婆で、染分の頭巾を冠つて、兩方の耳に綿花を插んでゐる。隅の戶の側にはバシストフが坐つて新聞を讀んでゐる。その側にはペーチャとワーニャが將棊を弄してゐる。煖爐の前には蓬々とした白髮頭の、色の淺黑い、黑眼勝のきよと〳〵した眼の、脊の低い男が兩手を後に廻して立つてゐる。是はアフリカン・セミョーヌィチ・ピガーソフとかいふ男で。

　此ピガーソフといふのは妙な人である。凡そ世の中のもの、といふ中にも女が殊に嫌ひで、朝から晩まで女の惡口をばかり云つてゐる。巧く毒ることもある代り、また愚にも附かぬことをいふこともあるが、いつも當人は何處か面白さうである。大人氣ないほど腹立ぼくて、癎癖が全身に充滿としてゐて、音聲、笑聲までが稜々としてゐるやうである。ダーリヤはピガーソフが來ても惡い面をしない。といふのも畢竟は此男の惡口を云ふのを可笑しい事に思ふからであらうが、成程一人の慰みになる。何でも彼でも

誇大に言做すのが此人の病で、例へば、雷が落ちて一村全燒となつたと云はうが、水が水車場を浚したと云はうが、百姓が斧で自分の手を切斷したと云はうが、如何な凶事災難の話をしても、いつも癇癪の塊を擲出したやうに、其女は何者だと云ふ。其災難を惹起した女は誰だといふ意であるが、如何な災難でも、起因を糺せば、皆女から起つた事だと思つてゐるから、其樣な事を云ふのである。或時さる貴夫人が強て呼んで馳走をしようとしたところが、左程心易い關係でもないのに、ピガーソフは倉皇てて其前へ膝を折つて、殆ど泣かぬばかりになつて、其癖滿面に怒氣を帶びて、何卒勘辨して下さい、何も惡い事をした覺えは更々ありません、最う是からは忘れてもお宅の閾は跨ぎまいから、などと云ひ出したといふことである。又或時馬が山を驅下りるとてダーリヤの抱の洗濯女を大溝へ放込んで、半死半生の目に逢はしたことがある。其からはピガーソフは此馬の噂をすると、必ず天下の名馬だと云ふ、此山や大溝の噂をすると、必ず風景絕佳の地だと云ふ。
けれども、ピガーソフは不運の人である——尤も求めて不運になつたやうなものでもあるが。家は隨分困窮であつた。父はいろ〳〵の職に就いてゐたが、いづれも薄給で、先づ文盲の方であつたから、餘り息子の教育には心を留めず、ほんの手足を延ばしただけのことである。母親とても甘やかすばかりの事であつたが、これは早く死んで了つた。それゆゑピガーソフは自分の才覺で修行したやうなもので、郡立の學校を出てから中學へ入つて佛獨語は勿論、羅甸語まで學んで、優等の證書を貰つて卒業して、それからデルプトへ往つて、始終貧に責められてゐたが、それでも如何にか斯うにか三年の學期を辛抱し通した。儕輩絕れて才のある譯ではないが、辛抱強く強情なことと云つたら一通でない、殊に名譽心が熾で、運命に逆つても歷々の仲間入がしたい、人に輸けたくない、といふ意氣込である。怠らず學問するも、デルプトの大學へ入つたのも、皆名聞を求むるからのことである。貧乏なのが心外でならないので、自と觀察が利いて狡猾くなる。一風變つた物言方で、若い頃から氣短な焦燥つたやうな一種の辯を持つてゐる。考が別段秀でてゐるではないが、其口の利き方を見ると、尋常才氣があるどころでない、さも〳〵才氣がありさうである。學士候補になつてから、學問に身を委ねようと決心した、他の事では到底も朋友に及ばぬと悟つたから。(ピガーソフは成るべく身分のある者を擇んで朋友にして、巧に其風を眞似て、諂ひさへしてゐた、其癖始終惡口ばかり云つてはゐたが)。けれども、明白に云つて了へば、學士になるには學力が足りなかつた。學問が好きで勉強したのではないから、實の所は餘り學識もない。それで試驗の時に甚く失敗つたのに引替へて、同室の一學生は才のない男で、始終ピガーソフの嘲笑物となつてゐたけれど、規則正しい確乎した教育を受けてゐたので、旨く行つた。ピガーソフは此失敗から業を煮して、書物も手帳も火に燒べて了つて、役に就いた。初の内はまづ首尾が善かつた。官吏としてはなか〳〵役に立つ、事務を執るのが大して巧いのではないが、極めて自信が強くて活潑である。けれども早く游ぎ出したいと思つたばかりで、種々な事情に絡められて、蹶いて、到頭餘儀ない仕合で非職になつた。幸ひ小さな村を買つて持つてゐたので、三年ばかり其村に蟄伏つてゐる中に、自墮落な茶かしたやうな風の香餌で、さる金滿家だが、ねッから教育のない女地主を釣つて、俄にそれと結婚した。けれども、ピガーソフの心も最う劫を經て甚くこぢれて來たので、夫婦暮しも餘り面白くない所へ、搗て加へて、

妻が幾年か共棲をした擧句、竊にマスクワへ往つて、夫が家を建てたばかりの持地面を何とかいふ山師で煮ても燒いても喰へない男に賣つて了つたので、ピガーソフも此重ね〴〵の不幸に腹の最底から業を煮して、妻を相手取つて訴訟を起さうとまでしたが、それほどまでに爲てみても、何の效もなかつた……それからは獨身で世を渡つて、隣歩きばかりして、蔭でなら未だしも、目前でも惡口を云つてゐる。近所の人も此男が來ると、無理笑をして紛してゐるが、眞に怖ろしく思ふのではない。ピガーソフは最う書物を手にも取らん。小作は百人ばかりもあらうが、執も左して貧乏でもない。

パンダレーフスキイが客間へ入ると、ダーリヤが、

「A! Constantin!（パンダレーフスキイを謂ふ）Alexandrine（アレクサンドラを謂ふ）は來るかえ？」

「宜しく仰しやいました。是非伺ふと仰しやいまして。」と愛想善く彼方此方へ辭儀をしながら、爪を三角に尖らした太い白い手で、念入に梳した頭を撫でる。

「ワルインツォーフも來るかえ？」

「入らッしやいます。」

「では、何ですか、」とダーリヤはピガーソフの方を振向いて、「女の子は皆不自然だと仰しやるんですか？」

ピガーソフは脣を捩曲げ、肱を突張つて、焦燥つた聲で物を云ひ出した。甚く焦燥つと、徐々と明瞭云ふのが此男の癖である。

「まア、概して然うですな。勿論、此處にお出でなさる方の事を云ふのではないが……」

「でも、此處に居るのも然うなんでせう？」と

「此處にお出でなさる方の事は如何とも云ひません。けれども、概して女の子は極めて不自然です——物の言方が不自然を極めてゐる。例へば、驚くにしても、喜ぶにしても、また悲しむにしても、必ず先づ斯ういふ風に氣取つて身體を曲げて（と厭らしく身を捩つて手を啓げて見せて）、而して大層らしく『あらツ！』といつたものです。でなければ泣くとか、笑ふとかするものです。然し、私は（と云つて自分一人でさも面白さうに莞爾として）、さる甚い不自然なお孃さんに自然な取繕はない聲を出させたことがある。」

「如何してね？」

ピガーソフの眼は爛々とした。

「白楊の杙で後から横腹を引撲いたんです。すると、キャッと云つたから、善哉……それこそ自然の聲だ、取繕はずに聲を出すと、然ういふ聲が出る。以來は然ういふ聲をお出しなさい、と云つてやりました。」

皆笑ひ出した。

ダーリヤは、「まさか！　誰が、そんな、杙や何かで女の子を撲つものがあるもんですか！」

「いや本當です。杙で引撲いたんです、而も太い奴で。籠城の時敵を防ぐに用ゐるやうな、變樣な奴で。」

「Mais c'est une horreur ce que vous dites là, Monsieur（まア大變な事を[illegible]）と云ひながら Mlle. Boncourt が笑ひ仆ける小兒等を睨迴す。

「僞だよ、ボンクールさん！　こんな出鱈目を云ふのが此方の癖さ、」とダーリヤが宥める。

ピガーソフは平氣なもので、

「僞なら僞にしてお置きなさいだが、實際の話です。私が自分で做つたんだもの、間違ふ筈がない！　それを本當になさらん位だから、到底も信用はなさるまいが、お隣のチエプーゾワー・エレーナ・アントーノウナね、彼人が自分の口から、可うがすか、自分の口からですぜ、實の甥を殺したと私に自狀した。」

「また出鱈目！」

「ま、ま、お待ちなさい。話を悉皆聽いてから何故とでも仰しやい。私は何もチエプーゾワーを譏謗したいことは些ともない。それどころか、私は彼人が好きな位だ。尤も好きだと云つても、女の事だから際限が有るが。彼處へ往つて御覽なさい、家中搜したつて、書物と云つたら、暦の外にや何も有りやしません。書物を讀めばと云つても、彼女は默つては讀めない――讀むと、汗が滲んで、後で眼がしよぼ／＼すると云ふ。どうも善い人です。それに、彼家の小間使は皆肥滿だ。何故で惡く云ひたいもんですか！」

「斯らお株が始まつては、晩まで止む氣遣ひはない。」

「お株か……然し、女のお株は三つありますな――而も始終云ひづめで、眠た時の外は止めない。」

「三つとは？」

「先づ厭味さ、それから諷刺に譴責。」

「何で貴君は然う女が憎いのでせう！　屹度女に……」

「痛い目に逢はされたことが有るだらう……ですか？」

ダーリヤはピガーソフの妻の亂行を憶出したので少し面を食つた……何も云はずに唯點頭いて見せると、

「成程、私を痛い目に遇はした女が一人ある、人の善い女でしたがな、極く人の善い女だつたが……」

「誰でせう？」

「お袋です、」と小聲に云ふ。

「母樣が？　母樣が如何して痛い目に遇はしたんです？」

「私を産んだからさ……」

ダーリヤは眉を寄せた。

「何だか話が理に落ちて來ましたね。Constantin、タリベルグの新曲を彈いてお聞かせな。ピヤノでも聽いたら、ピガーソフさんも我を折んなさるかも知れない。オルフォイスは猛獸をさへ鎭めたといふから。」

パンダレーフスキイはピヤノに對つて新曲を彈いたが、仲々巧くやつた。ナターリヤは初の内は耳を澄して聽いてゐたが、其内に又仕事に掛つた。

「Merci, c'est charmant.（難有う面白かつたといふほどのこと）本當にタリベルグは面白い、Il est si distingué.（名曲だといふほどのこと）ピガーソフさん、何を其樣に考へてらツしやる？」

ピガーソフは沈着き拂つて、

「考へて見ると、利己主義といふにも三通りありますな。自分も善いことをするが、人にもさせるのと、自分ばかり善い事をしたがつて、人にはさせないのと、自分も善い事をしない代り、人にもさせないのと三通り……女の利己主義といふのは大抵此最後の奴ですな。」

「痛く仰しやるね！　でも貴君は感心だよ、ちやんと然う確定て了つて、御自分の思ふ事に思違はないやうな面をしていらッしやるから。」

「誰が思違がないと云ひました？　思違は私だつて爲ますさア。男にだつて有りますさア。けれども、我々男の思違と女の思違とには雲泥の相違がある。解りませんかな？　解らなければ、かうです。例へば、男なら二二ンが四といふ所を五とか三と半分とかいふかも知れんですな、所が女なら二二ンが脂蠟燭。」

「それは最う此前も一度伺つたことが有るやうですね。だが、まア、それはそれで宜しいとして置いて、それだから今の曲が如何だと仰しやるんです？」

「如何だともいふんではないのです、私はピヤノなんぞは聽いてゐなかつた。」

「どうも、貴君は何ですのれ、到底も心は岩が

根の動がすべくもですね、」とグリボエードフの詩を換つて、「音曲もお厭なら一體何がお好き？文學ですか？」
「文學は好きですな。尤も近頃のは不可。」
「何故？」
「かういふ理由です。私先達て去る紳士と乗合でオカの渡を渡つたことが有つたが、船が斷岸の處へ着いたので、馬車は背手で舁いで揚げなければならん。ところが、紳士の馬車は非常に重いので、船頭が汗みづくになつて、それを引揚げてゐると、紳士は船の中でうん〳〵云つてゐる、見てゐるも氣の毒な程唸つてゐるのです……これこそ分業法の新適用だ！と私は思つた。今の文學も宛でこれですな。人が大騷ぎをやつて事業を爲てゐる、文學者はそれを見てうん〳〵云つてゐる。」
ダーリヤは微笑した。
ピガーソフは仲々默らない。
「而してそのうん〳〵いふのを今の世態を描くのだといふ。公共の問題に深く同情を表するのだとか、何だとか、彼だとか……いや、御大層な事をいふ！」
「女は――貴君は痛く攻撃を爲さるけれども――女は其樣な事は云ひませんね、それだけは……」
ピガーソフは首を縮めた。
「云へないから、云はないのでさ。」
ダーリヤは少し面を赧めた。
「そろ〳〵失禮なことを言出しましたね！」と苦笑ひする。
一座寂然として了つた。
子供の一人かふとバシストフに、
「ゾロトノーシヤといふのは何處？」
「パウターフスカヤ縣さ、」とピガーソフが代つて答へた。「ね、そら、ホァランチヤに在る。」話を變へる機會を獲たので、内々喜んでゐるのである。「今も文學のお話が出たが、若し私に不用な金でもあつたら、直ぐと小露西亞の詩人になりますね。」
「どうしてね？好い詩人が出來るだらう！」
「それに、小露西亞の言語も御存じないのでせう？」
「少しも知りません。其樣なものは知らなくても可い。」
「知らなくても可いとは？」
「知らなくても可いでさ。何の造作はない、紙を一枚持つて來て、上の方に世迷言と書いて、それから斯らいふ風に書出すでさ、さても命は難面ちものよ、とか、又は、夢の浮世に生存へてとかして、それから、我や鶉よ、朝夕ぎやぎや啼ち暮ちゆ、とか何とか書るでさ。それ詩が出來る。そこで、印刷する、出版する。然うすると、小露西亞の人は其を讀んで、感心して、泣く。泪脆い人達ですからな。」
バシストフが大きな聲で、
「誰が、貴君！そんな、貴君！途方もないことを仰しやる！私は小露西亞に居たこともあるし、一體小露西亞が好きです。彼地の言語も知つてゐますが……そんな、鶉だの、ぎやぎや啼ち暮ちゆだの――そんな事を云ふもんですか。」
「それは然うかも知れんが、兎に角小露西亞の人は泣きます。それに、君は彼地の言語と云はれたが、一體小露西亞の言語といふものが有りますか？私は曾て小露西亞の者に遇つた時、率然其持物を開けてみたら、命限り根限り斬つて斬つて斬り立つればといふ文句が有つたから、それを彼地の訛に直させてみた。然うした所が、此樣な風に直したんです。命かぢり、根かぢり、ちつて、ちつて、ちりたてばッ……これでも言語でせうか？純粹の言語と云はなければならんなら、私は寧ろ首を縊つて死んで了ま

ひます」—

パシストフは何か反駁を爲ようとすると、ダーリヤが、

「打棄つてお置きなさいよ。どうせピガーソフさんの口に掛けたら、鷲も鴉になつて了ふんだから。」

ピガーソフはニヤリと笑つた。折柄僕が來てワルインツォーフ姉弟の來たことを報せたので、ダーリヤは起上つて迎へた。

「Alexandrine！」と側へ寄つて、「どうも、まア、宜く來て下すツたねえ…ワルインツォーフさん、宜うこそ。」

ワルインツォーフはダーリヤの手を握つて、それからナターリヤの側へ往つた。

「如何でせう、お知己の男爵殿は今日來られるでせうか？」とピガーソフが聞く。

「お出でなさるでせうよ。」

「大變な哲學者だといふぢや有りませんか？恐ろしくヘーゲルを振廻す人ですとな？」

ダーリヤは之には何とも答へず、アレクサンドラを臥椅子に坐らせて、自分も其側に坐つた。

ピガーソフは未だ止めない。

「哲學か…高尚な見地…この高尚な見地といふ奴が至極癪に觸る奴だ。高い處から見たら、何が見えませう？ 馬を買ふと云つて、望樓へ登つて觀める奴はありやしない！」

「男爵さんが何だか論文を持つて入らツしやるさうですね？」

とアレクサンドラが問くと、ダーリヤは然も平氣な風で、

「はア論文をね、露國に於ける商工業の關係を論ずとかいふ…ですが、大丈夫！ 此席で讀みはしませんよ。其を讀むと云つてお招き申したんぢやないから。Le baron est aussi aimable que savant.（男爵は學者でゐながら如才がない人です）それに露西亞語は巧いですよ。C'est un vrai torrent... il vous entraîne.（それこそ河の瀬で…聽いてゐると感心してしまひますよ）」

「佛蘭西語で褒められる程、露西亞語が巧いのだ」とピガーソフが口小言のやうに云ふ。

「仰しやい〳〵、たんと仰しやい…貴君の蓬頭にはそれが丁度似合ふから。だが、何故か遲いのだらう？ どうです、皆さん、」と座中を見廻して、「庭へ出ようぢやありませんか？ …まだ食事には一時間も間があるし、それにお天氣が好いから…」

皆起上つて庭へ出懸けた。

庭は河岸まで續いてゐたが、黃ろい香の高い菩提樹の古木を並木のやうに植雙べた薄暗い細道が幾條も附いてゐて、樹は木杪ばかりに日を受けて、エメラルドの玉を耀らしてゐる。アカチヤ、連翹などの四阿屋が遠近に見える。

ワルインツォーフはナターリヤや Mlle. Boncourt と連立つて庭の奧の方へ入つて往つた。ワルインツォーフとナターリヤとは默然で竝んで行く。少し離れて後から Mlle. Boncourt が行く。

「今日は何をしていらしツた？」とワルインツォーフが到頭口を切つた、赤茶けた髭の頭を撚りながら。

ワルインツォーフの面相は姉に酷肖であるが、姉ほど面色に生死がない。美しい愛嬌のある目差であるが、何處となく憂を含つてゐる。

ナターリヤは、「何も爲ませんでしたわ。ピガーソフさんの惡口いふのを聽いたり、刺繡をしたり、書を讀んだりしたばかりで。」

「何をお讀みなすツた？」

「アノ…十字軍の歷史を、」と少し吃つて云ふ。

ワルインツォーフはナターリヤの面を凝然と視て、

「十字軍の？ 面白いでせうな。」

細い木の枝を折つて、くる〳〵廻し出したが、二十歩ばかり行くと、また、
「御母樣の相識にお成んなすッた男爵といふのは如何いふ人です？」
「侍從とかで、旅の方ですの。Maman は（母は なり）大層稱めて。」
「御母樣は動ともすると浮かれる。」
「まだ氣は若いのですね？」
「然うです。あ、それから、貴嬢の馬ね、直ぐに返しますよ。最う大抵慣れましたが、まだ直ぐ駈が追へない。けれども、其内に屹度追はして見せます。」
「Merci（謝）……ですが、お氣の毒ですねえ、そんなにお手が懸つては……馬を慣らすのは大變困難といふぢやありませんか？」
「貴嬢の爲なら、私は……私は……これしきの事を……」と言ひ淀む。
ナターリヤは柔しい眼でワルインツオーフの面を見て、また Merci と云つた。
ワルインツオーフは久らく言淀んでゐたが、頓て、
「私は如何な事だつて……併し、云ふがものはない、貴嬢は御存じの筈だから。」
其時家の内で鐘が鳴る。
「Ah! la cloche du dîner! rentrons.（おや、飯の鐘が鳴つた、家へはひりませうよとのこと）」と Mlle. Boncourt が云ふ。
二人の後に隨いて石段を上り乍ら老嬢が心の中で「Quel dommage que ce charmant garçon ait si peu de ressources dans la conversation… 」と思つたが、之を露西亞語で云つたら、お前さんは可愛らしいが、少し氣が利かないね、とでもいふのであらう。
男爵は食事になつても來ぬ、半時程も待ちぼけをした。卓に對つても、談話が一向冴えない。ワルインツオーフはナターリヤの隣に坐つて其面をばかり見てゐる、而して傍から水を水呑に注いでやつてゐる。ハンダレーフスキイは隣席のアレクサンドラを款待つ積りで愛想たら〳〵でゐるけれど、可憐さうに、敵手は欠伸をしないばかりである。
バシストフは麪麭で丸藥を拵へてゐて、餘念はない。ピガーソフさへ默つてゐるので、ダーリヤが今日は貴君は大變無愛想だと云ふと、怖ろしい面をして、「私の愛想の善かつたことがありますか？　そんなお愛想なぞは私には出來ない……」と苦々しさうに云つて、「まア、最う些との辛抱だ。どうせ私は尋常の露西亞人だが、お客樣の侍從さんは……」
「おや、をかしい！」とダーリヤは大きな聲を出して、「ピガーソフさんは妬ける……だが、手間しの遲いことねえ、まだ來もしないのに！」
けれどもピガーソフは何とも答へず、唯[illegible]しに眺めてゐる。
七時が鳴る。皆客間に戻つた。
「來ないかしら、」とダーリヤが云ふ……
途端に車輪の音がする。見れば、小さな旅馬車を邸内へ乘入れるものがある。暫くすると、僕が銀の皿に手紙を載せたのを持つて、客間に入つて來て、主婦に渡す。ダーリヤは一通り手紙を讀下すと、僕に對つて、
「此手紙を持つて來た方は何處に入らッしやる？」
「まだ馬車に入らッしやいますが、お通し申して宜しう御座いますか？」
「お通し申してお呉れ。」
僕は出て行く。
ダーリヤは座中の人々に對つて、「どうもまんの惡いこと！　男爵は急にペテルブルグへ喚戻されることになつたさうですよ。それで、ルーヂンさんとかいふ御朋友が[illegible]文を持つてお出でなすツたのですがね、男爵は大層此方の事を稱めて、是非私に紹介したいと云つてお遣し

なすツたんださうですよ……併し、如何も不可いこと、ねえ…必とお出でなさるだらうと思つたら……」

「ドミートリイ・ニコライチ・ルーヂン、」と僕が披露する。

三

入つて來たのを見れば、年頃三十五六の、脊の高い、少し猫背で、縮毛の、色の淺黒い男である。男前が好いのではないが、締つて活々とした面相で、鋭い青黑い眼にしつとりと光を持つて、徹つた大きな鼻で、脣はクッキリ際立つてゐる。着てゐる衣服も左まで新しくもなく、而も窮屈さうで、着た儘成長したとでも云ひさうである。

つとダーリヤの側へ來て、一寸會釋をして、豫てお目に懸りたく思つてゐたこと、友人の男爵が暇乞に參ることが出來んのを痛く殘念がつてゐました、なとと云ふを聞けば、細い聲で、脊の高い胸の廣い人に似合はぬ聲が出る。

「如何ぞ、まア、お掛けなすつて……宜うこそ、」とダーリヤも云つて、座中の人々に紹介してから、土地の者か、旅の者かと聞く。

ルーヂンは帽子を持つた手を膝に措いて、

「私は何縣の者で、此頃當地へ參つたのです。少々用事が有つて參つたのですが、用の濟むまでは町方に逗留して居らうと思ひます。」

「町は何處に？」

「醫者の家です。彼男は大學に居た頃からの舊い朋友ですから。」

「はア、然うでございますか。醫者も大層評判の好い方で、療治が巧いさうですが……アノ何でございますか、男爵さんとは舊いお知己でいらツしやいますか？」

「いや、なに、此冬マスクワで相識になつたのですが、此頃も一週間ばかり彼人の宿に居りました。」

「發明な方ですね――男爵さんは。」

「然うです。」

ダーリヤは香水に浸した手巾の匂ひを嗅いで、

「貴下は御奉職爲すツて いらツしやるのですか？」

「私ですか？」

「はア。」

「いや……非役です。」

と談話が中絕れる。それからは皆思ひ〳〵に話し出した。

ピガーソフがルーヂンに對つて、「男爵さんは論文をお達しなすつたさうですが、如何な事が書いてあるか、貴下は御存じですか？」

「知つてゐます。」

「その論文といふのは露西亞の工商業……ぢやない、商工業の關係を論じたものだとか……ねえ、御主人、然うでしたな？」

「はア、商工業の關係を、」と云つて主婦は手を額に加てる。

「勿論、私は然ういふ事には暗い方ですが、」とピガーソフは言葉を繼いで、「併し、論文の題からして、如何も何ですな……婉曲に云つたら、何と云ひますかな……如何も非常に淡然として……ソノ……錯雜してゐますな。」

「如何いふ譯で？」

ピガーソフは莞爾としてダーリヤを尻眼に懸けたが、また狐面をした我顏をルーヂンの方へ振向けて、「貴下には明瞭ですかな？」

「私にですか？　明瞭です。」

「ふむ……然うですかた。」

「頭痛でもなさるんですか？」とアレクサンドラがダーリヤに問ねる。

「いえ、なアに、何でもないのですよ……C'est nerveux.(坐て)」

「何ですか、」とまたピガーソフが鼻聲で始める。「御朋友のムッフェーリ男は……確か、然う仰しやッたですな？」

「然うです。」

「ムッフェーリ男は專門に經濟學を修つて居られるのでせうか、それとも、公務の片手間に、經濟學は面白いと云ふので、修つて居られるのでせうか？」

ルーヂンは凝然とピガーソフの面を目守めた。

「いや好きで修つてゐるのです、」と云つた其時の面は少し赧んでゐた。「けれども、今度の論文には至當な議論も耳新しい說もなか／＼有ります。」

「肝腎の論文を讀まんから、何とも云ひかねるが……併し、いづれ何でせうな、事實よりか大摑みの議論が多いでせうな？」

「事實も有るが、事實に基いた議論も有ります。」

「な、成程。併し、私の考では……私も、から見えても、三年デルプトに居つた者でがすが……私の考では、所謂全體論とか、假定說とか、體系とかいふ其樣なものは……私は田舍漢だから艷氣なく云つて了ふが……何の役にも立たんもんですな。唯智慧を揮廻すばかりの事で──人を惑はすに過ぎん事で。事實を傳へれば、それで澤山です。」

「然うでせうか！」とルーヂンが反駁した。「事實の意味を說くといふことも必要でないでせうか？」

「全體論か！」とピガーソフは自分の云ひたい事ばかりを云つてゐる。「や、全體論でござるの、觀察でござるの、結論でござるの、いやはや堪つたもんぢやない！ それが皆所謂主義から割出したものです。猫も杓子も各自に己が主義を揮廻して、擔ぎ廻る。剩けに人にまで强賣をする……いやはや堪つたもんぢやねえ！」

とピガーソフは無暗に首を振立てる。パンダレーフスキイは笑ひ出した。

「宜しい！」とルーヂンが受取つて、「では何ですな、貴下のお考では、主義といふものは無い？」

「有りませんとも──有る譯がないです。」

「それが貴下の御持論ですな？」

「左樣。」

「それでも主義は無いもんですか？ それが卽ち主義といふもんぢや有りませんか？」

座中の人皆微笑して眼を視合した。

「ですが……それは然うですが──」とピガーソフはあせり出す。ダーリヤは手を拍つて、

「これは可かつた！ ピガーソフさんも一本參つた！」と云つて扨とルーヂンの持つてゐた帽子を取る。

「お待ちなさい、まアお待ちなさい、」とピガーソフは口惜しがる。「えらさうな面をして揚足を取つたばかりぢや濟まん、理由を言はなければ不可、議論を戰さんければ不可……議論の趣意が其方退けになつてゐる。」

ルーヂンは落着き拂つて、「宜しい。何でもない事です。貴下は全體論は役に立たんと仰しやる、主義なぞは信じないと……」

「信じません！ 信じませんとも、何も信じません！」

「面白い！ 卽ち懷疑論者である。」

「そんな學者めいた言葉を用ゐるにや當らんと思ふが、併し……」

「まア、默つて結局までお聽きなさい、」とダーリヤが制する。

「よいや、殘つた！」とパンダレーフスキイは云つて、齒齦まで出して莞爾とする。

ルーヂンが、「併し私の思ふ所を云へば懷

疑論者である。懐疑論者で貴下にお解りになれば、然う云つても差支ないぢや有りませんか？ で、貴下は何も信じないと仰しやる：：それなら、何故事實をお信じなさる？」

「何故と云つて、貴下、そりや：：仕方がない：：事實は事實です、事實を疑ひやうはない：：事實か事實でないかは經驗で判ります、自分の感覺で。」

「ですが、その感覺に誤りがないと云へますか？ 感覺で考へれば、太陽は地球の周圍を回るやうである：：併し貴下はコペルニカスの説に御同意でないかも知れんですな？ 矢張地動説をも信用なさらんですか？」

人々皆微笑する。皆ルーヂンの面を視て、「馬鹿ぢやない、」と思ふ。

ピガーソフが、「貴下は戲言ばかり仰しやる。それは、貴下の仰しやる所は耳新しいかも知らんが、併し問題外だ。」

「ところが、不幸にして私の云ふ所は少しも耳新しい事でない。皆判り切つた事で、耳に胼胝の入る程云故した事です。それは如何でも可いが、私は甚だ遺憾な事であると思ふ：：」

「何がです？」とピガーソフがさも憎てらしく云ふ。

一體議論をすると初は論敵を嘲弄して、それから無禮になつて、最後に面膨らして默つて了ふのが此男の癖である。

「立派な人でありながら、排斥するに事を缺いて：：」

「主義を排斥する。」

「さ、主義でも宜しい——排斥するのを聽くと私は甚だ遺憾な事に思ふ。何故其樣に主義をお嫌ひなさる。主義といふものは根本の天則に、生存の原理に基いて立てたものであるから：：」

「さ、其が解らない、其天則が解るもんぢやない：：何で判るもんですか！」

「まア、お待ちなさい。成程、誰にでも天則が解るものではない、それに人間は誰しも思違をすることもある。例へば、ニウトンは天則の幾分を發見したといふ事は貴下もまさか拒みはなさらんでせう。成程ニウトンは、それは、不世出の人物であらう。けれども、假令不世出の人物でも、其發見した天則は世間一般の重寶になる、然うあればこそ、その發見が益々貴重いものになる。分殊に就いて理一を求めんとするのは人間天賦の傾向であつて、所謂文明といふものも：：」

「いや大變な事になつて來た！」とピガーソフが嘲弄した。「私は俗物だから、そんなえらい高尚な議論は胸に閊へる——大嫌ひです。」

「それは御勝手である。併し貴下が俗の事の外は耳を假すのも、厭だと仰しやる、それが即ち一箇の主義といふものである、理論といふもので：：」

「文明！ えらい怖かない事を仰しやる。そんなに文明々々と御大層らしく仰しやるけれど、文明が何の役に立ちます。半文の價値もありはせん。」

「併し、ピガーソフさん、貴下は議論はから下手ね、」と、ダーリヤが云ふ。內々新客の落着いて、少しも取亂さぬのが氣に入つた樣子である。

「C'est un homme comme il faut.（立派な人だといふ程のこと）」とルーヂンの面を惚々諦視めて、「手馴けてやりませう。」これは露西亜語で思つたのである。

ルーヂンは暫く默つてゐたが、頓て言葉を續けて、「私は敢て文明を辯護しようとは思はぬ。辯護せんでもの事である。貴下は、文明は嫌ひだと仰しやる：：好不好は有るから、それも致方がない。それに餘り枝葉に入るから、それはそれとして措いて、古い諺に、『ユピーテ

ル、汝は怒れり、されば汝は過てるなり」といふことがある。私の思ふには、主義や、全體論を排斥するのは可いが、それと一所に知識や、學術や、學術を信ずる心、即ち自分を、自分の力を信ずる心、さういふものまでも排斥するから、それで宜しくないと思ふです。人間には然ういふ信仰が必要である。唯感覺ばかりで活きてゐられるものでない。思想を怖かつて信用しないといふのは間違つた話です。懐疑主義を懐くと何も出來なくなる、何を仕遂ける氣力もなくなる ―

「そんなことはほんの言葉で、意味も何も有りはしません！」

「或は然うかも知れん。併しながら人は往々意味の有る事を云ふ必要が有つても、ほんの言葉だと云うて、それを避けたがる。」

「エ、何を？」と云つてピガーソフは眼を細める

「何をと云つて、大抵解つてゐませう、」と我知らず苛々としたが、直ぐ氣を取直して、「からです、若し人に堅固な信仰がなく、確乎とした立脚地がなかつたら、國家の急務や、國民の本分や、未來や、それが如何して解ります？如何して自分の盡すべき本分が解ります？若しも……」

「最う止めます！」とピガーソフは慳貪に云つて、辭儀をして、澄まして他の方へ往つて了つた。

「やれ／＼、到頭敗北」とダーリヤが嘲弄した。「御心配にや及びませんよ、ドミートリイ……」と愛想よく茫衞として、「あの、貴下のお讓の名（父より讓られたる名の義）は？」

「ニコライチ。」―

「ドミートリイ・ニコライチ、どうせからだらうと思つてゐました、彼人はね、最う議論が盛になつた風をするので、實は最う議論が出來ないのですよ。夫よりか最そつと此方へお進みなさいませんか？何かお噺を致しませう」

ルーヂンは椅子を居去らせた。

ダーリヤは言葉を繼いで、「今迄お知己でなかつたのが殘念なやうですよ……貴下は最う、此書を御覽になりましたか？ C'est De Tocqueville, vous savez?（トックヴィーユ・御[illegible]ふこと）」

と佛蘭西の小冊子を出す。

ルーヂンは小本を受取つて、二三枚開けて見て、復つて卓上へ返して、此書は未だ讀んだことはないが、併し中に書いてあることは度々考へたことがあると答へた。そこで、話の種は出來た。

けれども、初の内はルーヂンも何となく躊躇つて、思ふ所を判然とは云はず、言葉に差支へることもあつたが、其内に氣が乘つて來て、口が解ける。二十分も經つた頃にはルーヂンの聲ばかりするやうになつて、誰も彼も皆其周圍に集つて了つた。

獨りピガーソフのみは其の圍に入らず、隅の方の開爐の側に佇む。ルーヂンは熱心に巧に話をした、くだらぬことは少しも言はぬ。博覽で多識であることは其話でわかる。誰も此人がこれ程の人物とは思ひ掛けなかつた、つまらぬ服裝をして、名も聞えぬ人であつたから。如何して田舍に此樣な才物が忽然現れ出たことかと、人々不思議の想を爲すばかりである。それだけに又一層眼覺しく思はれるので、皆心を奪はれて了つた。ダーリヤを首として……ダーリヤは掘出物をしたとて得意になつて、もう取越してルーヂンを世間へ引出す工夫をしてゐる。一寸心に浮ぶ所は、年は取つてゐても、未だ餘程愛度氣ない所がある。アレクサンドラは、實の所はルーヂンの話が餘り善くは分らなかつたけれども、眼覺しいことに思つて欣々してゐる。弟も同じく驚いてゐる。パンダレーフスキイはダーリヤの樣子に氣を附けて羨ましく思つて

ゐる。ピガーソフは、「五百ルーブルも出したら、もツと好い鶯がある！」などと思つてゐる……けれども一番感に堪へたのはバシストフとナターリヤで。バシストフは殆ど息氣をせず、始終口を開いて眼を瞠いて、生來人の物を言ふのを初て聽いたやうな面をして坐つてゐる。ナターリヤはナターリヤで、面をぽつと赧めて、一心にルーヂンの面を諦視めた儘、眼の中を曇らしたり光らしたりしてゐる……

「眼付がどうも好いぢや有りませんか！」とワルインツオーフが囁くと、

「はア、ねえ。」

「唯惜しいことには手が大きくて赤いけれど。」

ナターリヤは是には何とも返答をしなかつた。

茶が出る。人々漸々口を利き出す。けれども、ルーヂンが一度物を云ふと、皆忽ち口を噤んで了ふ。大した感動を與へたものである。ふとダーリヤはピガーソフに調戯ひたくなつたので、其側へ來て小聲で、「何故貴下は默つて苦笑ひばかりしていらツしやる？ 最う一遍掛つて御覽なさい、」と云つて返答をも待たず、ルーヂンを招き寄せて、「貴下は未だ御存じないけれど、此方には、」とピガーソフを指して、「まだ可異な事が有りますよ。女が甚い嫌ひで、何の彼のと云つては攻撃なさるです。眼を開けて上げて下さい。」

ルーヂンはピガーソフを下目に視た……が、それも餘儀ないことで、首二つがけも脊が高いから。ピガーソフは怫然として只さへ癇癪の強さうな面を眞着にする。

少し震へ聲で、「さうぢやありません。女ばかりを攻撃するのでない。總て人間が餘りゾッとせぬです。」

「何故然う人間をお嫌ひなさる？」とルーヂンが問ねる。

ピガーソフは直とルーヂンの眼の處を睨んで、

「多分自分の心を研究した結果でせう。自分の心を研究して見ると、見れば見るほど穢い。私は自分を尺にして人を測る。それは間違つた事かも知れん、私は人より百倍も善くないのかも知れん、併し如何しやうが有りませう？ 習慣です！」

「了解りました。私も御同感です。高尙な心のものなら、誰にしても自非の念は起る。併し然ういふ境涯に沈淪して了つて浮ばれんでは困りますな。」

―これは辱ない、私の心に高尙といふ折紙を附けて下すツて。併し私の境涯は一向何でもない、これで結構です。だから浮ぶ瀬が有らうが有るまいが、そんなこと頓着はない！ 又餘り浮びたくも有りません。」

「けれども、それでは――失禮な申しやうだが――自愛心さへ滿足すれば、眞理に往はんでも可いといふことになる……」

「勿論です！ 自愛心――これは私にも解せる、貴下にも解せるでせう、誰にでも解せる。併し眞理は――眞理とは如何なものです？ 何處に遺こつてゐます？」

「また議論が後戻りをしますよ、」とダーリヤが口を插む。

「後戻りをしたつて宜しい。御存じなら承りたい。何處に遺ちてゐます。カントが眞理とはかういふものだと云へば、ヘーゲルは否然うでない、こんなものだと云ふ。」

「ヘーゲルはどんなものと云つたか、御存じですか？」

とルーヂンが何氣なく云ふと、ピガーソフは憤然となつて、

「眞理は何樣なもんだか、私にや解せんと云ふのです。私の考では、眞理といふものは

全然ないものだ、成程、語はある、けれども實體はないものだ。」

「まア、けしからん！」とダーリヤが大聲を立てた、「能くまア恥かしくもなく、其樣な事が言へますね！ 眞理がない？ 眞理が無いなら、生きてる效が有りますか？」

ピガーソフは忌々しさうに、「眞理が無くつても、御宅の料理人のステハンが居なくなつた程に不自由な事は有りません。ステハンは肉羹を煮させたら名人ですよ！ それに眞理が何の役に立ちます？ 眞理で頭巾を縫つて被る譯にやいきませんや！」

「戯言は駁論にはなりませんよ。殊に其樣な、人を譏謗するやうな言なら、尙更……」

「眞理は如何だか知らないが、忠言なら些とは耳が痛いでせうさ、」と呟くやうに云つて、ピガーソフは憤然しながら他の方へ往つて了つた。

それからルーヂンが自愛の事を論じ出したが、いふ事に洵に間然がない。自愛の心のない人は取るに足らぬ、自愛心は謂はゞアルヒメードの槓杆で、これさへあれば大地を轉ばすことも出來る。自愛心は結構であるが、人たる者は自分の自愛心を御すること騎士が馬を御するが如くならねばならぬ、自分一個の私を公益に殉ずることが出來ねば不可……

といふ事を說いて、さて云ふには、「私愛は自殺の樣なものです。私愛の人は一本立の實も何も結らん木のやうに枯れて了ひますが、自愛は完全を求むる活潑な傾向であつて、總て偉大な事の原因となる……實に自分一個の私は强情なものであるけれども、それを如何がなして挫かなければならん、挫かなければ天眞を發揮することは到底出來ません！」

といふと、ピガーソフはバシストフに向つて、

「鉛筆は有りませんか？」

バシストフは何の事だか一寸は解らぬやうであつたが、頓て、

「鉛筆を何になさる？」

「今ルーヂンさんの云はれた最後の一句を書留めて置かうと思ふんです。書留めて置かんと、然らでもない、忘れると不可！ あゝいふ文句は四三のやうなもので、滅多に出るもんぢやない。」

「戯言にも程が有る！」と銳く云放つてバシストフは餘所を向く。

其時ルーヂンはナターリヤの側へ來た。ナターリヤは起上つて狼狽する。

側に居たソルイ ンツォーフも同じく起上つた。

燕の公達といふ體裁で、慇しく、愛想よく、ルーヂンが、「ピヤノが有りますね。貴孃がお彈きなさるんですか？」

「はア、少しは彈しますが、ハンダレーフスキイさんは最とにお上手で……」

ハンダレーフスキイは面をぬツと突出して莞爾として、

「あんな事を仰しやる！ 御自分が御上手でいらツしやる癖に。」

「シウベルトの〝Erlkönig〟を御存じですか？」とルーヂンが問くと、

「知つてますとも！」とダーリヤが引取つて、「一つお彈りな、Constantin…… 貴下は音樂がお好き？」

ルーヂンは唯一寸首を垂げたばかりで、頭を撫でて聽きに掛る……ハンダレーフスキイは彈き出した。

ナターリヤはピヤノの側に、丁度ルーヂンの眞對うに座に着く。ピヤノの音が出しだすと、ルーヂンの面は華やかになつた。濤綠の眼が徐に動いて、折々ナターリヤの面に止まる。彈止む。

ルーヂンは何とも云はずに、開放した窓際へ

寄つた。庭は暗霧の羅に包まれて、香氣が紛々と迸つてゐる。近い處の植木は涼しさうに眠つてゐる樣で、星は靜にちら〳〵と見える。此悠々とした夏の夜の景色に對ふと、心も自ら緩む。ルーヂンは薄闇い庭を覗いて視て、つと此方を振向いて、

「音樂を聽いて、此夜景色を觀ると、獨逸に遊學してゐた頃の事を憶出しますな。集會や、セレナード（夜の音樂）や……」

「獨逸へ入らしツたことが有るんですか？」とダーリヤが問く。

「ハイデルベルヒに一年居ました。それから伯林にも一年許り。」

「矢張大學生の風をしていらしツたんですか？彼地ぢや大學生は皆異樣な風をしてゐるといふぢや有りませんか？」

「ハイデルベルヒに居た頃は私も馬刺輪の附いた長靴を穿いて、紐附のジャケットを着て、頭髮を肩まで垂げてゐましたが、伯林では大學生も尋常の人に違はん風をしてゐます。」

アレクサンドラが、「貴下の遊學していらしツた頃の御話を些と伺ひたいもんですね。」

ルーヂンは話し出したが、餘り面白く行かなかつた。どうも云ふ事に修飾が無い。餘り眞面目すぎる。けれども、其留學の話は匆々に止めて、文明だの、學術だの、大學だの、大學の生活だのを題目にして、總べての議論に移つたが、からなるとざッと大摑みの事を云つても、大きな景が浮ぶので、皆耳を澄して聽いてゐた。洵に言廻しが巧くて、乘地になつて話してゐる其言草に、少し判然しない所は有つたが、判然しないだけに倘更面白い。

種々の事がむら〳〵と込上げて來るので、それを口へ出して言つて見ると、どうも判然しなくなる。曖昧になる。象が象を追つて浮び、比喩が比喩に續いて起る、それにも奇想天外より落ちたのも有れば、又著々と肯綮に中つたのもある。口を突いて出る言葉は神來の語で、話上手が自慢の言葉使とは撰が異ふ。別に言葉を求めんでも、言葉が思ふ通りに自在に口へ出て來る、而も直に肺腑の中から流れ出たやうで、確信の熱を帶びてゐる。音調を上手に整へるのは神祕中の神祕とすれば、ルーヂンは此無上の神祕を手に入れてゐるのである。心の絃を一つ彈けば、他の絃までが幽に鳴つて餘音を響かせる、その術を心得てゐるのである。其話を聽いてゐて何の事とも善くは領會めぬ者もあらうが、然うした者でも兎に角胸が脹つて、何やら幕がばツたり落ちて、何か前方に燦爛とした物が見えるやうな心持がする。

ルーヂンの心は總て未來に向つて働く。それ故に何となく勢が善くて若々としてゐる。窓際に立つたまゝ、誰の顏を見るでもなく話してゐたが、人々が自分と心を一つにして身に沁みて聽いてゐる上に、若い婦人が傍には居るし、夜景色は美しいので、話も自ら調子附いて、我感念の夫から夫と變つて行くに連れて雄辯になり、詩的になる……音聲までが落着いたしんみりした調子で一入興味を增すので、何か思ひも寄らぬ神々しきものが當人に乘移つて物を云はせてゐるやうである……ルーヂンは人の露の命が如何して不滅のものになるものか、其理由を說いてゐたのである。

さて話の終に、「スカンヂナヴヰヤにかういふ昔話があります。さる王樣が家來の武士と一所に薄暗い奥深い小舍の中で火に當つてゐたことがある。冬の夜の事であつた。すると小禽が不圖入つて來てつツと通り脫けて往つた。それを見て王樣が、『人の身も猶ほ此小禽の如し、暗黑を出て暗黑へ行く、暖い明るい處に居るのは束の間である』と云ふと、家來の中でも一番年嵩の者が、『小禽は暗黑の中に消えて失くな

りは致しません、矢張自分の巣を探出すことで御座りませう」と云つたといふ。「成程、人の一生は短い果敢ないものですが、併し人を經て傳はつて大きな成長する、其精力の器となつてゐると云へば人間の識なぞは顧みるに足らん。死の中にも生は有つて自分の巣は見出せます。」

と口を噤んでみると、我にもなく極りが惡くなつて、微笑して差俯向く。

「Dieu que c'est bête!（讃下げた）」とダーリヤが聲を低めて云ふ。

一座の人々も皆然う思つた――尤もビガーソフだけは例外で。ビガーソフはルーヂンの長談の終るを待たずして、鍋と帽子を取つて、戸口の處に立つてゐたパンダレーフスキイに、「どうも馬鹿の仲間の方が宜いやうです、」と憎さげに囁きながら出て行つたが、誰も出て行くのを氣に留めた者もなければ、また抑留める者も無かつた。

晩餐を運び込んでから、半時も經つと、皆おもひおもひに歸つて了つたが、ルーヂンだけは引留められて泊ることになつた。アレクサンドラは弟と一つ馬車で歸りながら幾度かルーヂンの奇才に驚嘆した。ワルインツォーフの心も姉に同じだけれど、併しルーヂンの所説は折々、少し混亂になる……ソノ判然しないと、多分思ふ所を明らさまに云はうと思つたのであらう、言葉を足して云つた。けれども顔色も冴えんで、馬車の闇を凝視めて、さも愛はしさうな眼付をしてゐた。

パンダレーフスキイは寢ようとして細紐で締をしたズボン釣を外しながら、口へ出して「中々味を遣るわい！」と云つたが、偶然恐ろしい顔をして家僕を睨付けて、彼方へ行けと云つた。バシストフは終夜眠らず、衣服をも脱かず、一心にマスクワの友人に宛る手紙を書いてゐた。ナターリヤは衣服を脱いで臥床には就いたが、同じく、まんじりともせず、又眠ようともしなかつた。手で頭を支へて、暗黒を凝然と諦視めてゐたが、脈は烈しく搏つて、幾度となく深い溜息が胸を突いて出た。

四

翌朝ルーヂンは臥床を出ると間もなく、ダーリヤが茶を喫みに書齋に來いと喚びに遣したから、往つて見ると、主婦一人である。大層莞爾やかに挨拶をして、昨夜は寢心は惡くはなかつたかと問ね、自身に茶を注いで與れて、砂糖は是で可いかと、其樣な事をまで聞き、卷烟草を薦めて、また二度繰返して、如何も貴下の様な方と是まてお相識にならずに居たのは……と嘆いた。ルーヂンは少し離れて座に就かうとしたが、ダーリヤは自分の臥榻椅子の側の小さなハチーを指して、それに掛けさせて、少しルーヂンの方へ身を捩つて、家族は何人で、何を爲る積りだの、如何して爲る積りだのと問き出した。容赦無しに物を云つて、さして心にも留めず聽いてゐるやうではあるが、實はルーヂンに氣を持つて媚びぬばかりにしてゐるのは善く解る。朝から呼びに遣したのも、Madame Récamier 風に淡泊した身綺麗な風をしてゐるのも、成程其筈である！

併しダーリヤも間もなく問くのは止めて、今度は自分の事を、自分の若い頃の事や、知己の事を話し出した。ルーヂンは身を入れて、其お饒舌を聽いてゐたが、可異な事には、誰の話であつても、話の表面に立つものは矢張ダーリヤで、ダーリヤ一人で、話の當の人は影になつて立消をして了ふ。其代りダーリヤが某の顯官に如何いふ事を云つたとか、くれがしの詩人を何程手に入れてゐたとかいふことは委しく解つた。當人の話で見ると、此五十年來の高名の人は皆如何がなしてダーリヤに會ひたい、ダーリヤの權

嫌を取りたいと、只それぱかりを思つてゐたらしく思はれる。其様な人の事を屹で同情か何ぞのやうに、別段賞讃しもせず何の氣もなく噂をする。或人の事などは奇人だと云つた。譬へて云へば、寳石に立派な緣を附けたやうなもので、さういふ人の名がダーリヤ・ミハイロウナといふ立者の名の緣となつて煌々と光る……

ルーヂンは卷烟草を燻らして默つて聽いてゐながら、折々話少なにお饒舌の相槌を打つてゐる。此人は話上手でもあれば、また話好きでもある。話の音頭を取るのは得手でない代り、聽上手で、初手から紛らかされない者なら、誰でも此人の前では氣を緩して口を解く、それ程身を入れ他の話に節を追つて話を誘ふやうにする。他より立優つてゐると思ふのが常の習となつた人は一種の好意を持つてゐるものであるが、此人にもそれが有るのである。他と論爭ふとなると、なか／＼論敵に口を開かせない、熱心な鋭い辯舌で壓倒して了ふ。

ダーリヤは露西亞語で物を云つてゐた。國語に通じてゐるのを自慢してゐるのであるが、佛蘭西風の言廻しやら佛蘭西語やらが小煩く交る。故意と俗に言廻してゐたが、折々適用が違ふ。ルーヂンはダーリヤの怪しい斑らな言葉遣を聽いてゐても別段何とも思はぬ様子であつた。恐らく耳がないのかも知れぬ。

ダーリヤは到頭喋り草臥れて、椅子の背を枕に頭を持たせて、ルーヂンの面へ眼を遣つて口を噤んで了つた。

ルーヂンは落着いた聲で、「成程それで解りました、何故毎年夏になると田舍へ入らツしやるのか、休息なさらなければならんのですな。都で紛擾した擧句に田舍の閑靜な處へお出でなさると、爽然して氣が確りなさるのでせう。貴女は景色がお好きでせうな？」

ダーリヤは流眄にルーヂンの面を視て、「景色ですか？……景色……それは然うですとも……大變好きです。ですが、田舍だつて談敵がなくツちや困りますが、此邊には一人もないですよ。ピガーソフが一番分曉つてゐる位で。」

「昨夜の憤りツぽい老人ですか？」

「はア、彼人です。あれでも田舍では無いには增しですよ——時々笑はせ位はしますからね。」

「彼人は馬鹿ぢや有りません。唯邪路に入つたのです。貴女は如何いふお考かは知らんが、非難するといふことは——何も彼も盡く非難して了ふのは——宜しくないですな。總てのものを非難すると、直に人物だと謂はれる。善く有る手でさ。非難する者は非難されるものよりえらいと好人物が直き斷定する。けれども、それが當にならんですな。何にだつて探せば缺點は出て來まさ。それに道理な事を云ふにしても、非難すのは宜しくない。始終非難しつけてゐると、活氣が失くなつて枯木死灰のやうになる。高慢の鼻を高くするは宜しいが、それが爲に觀察といふことの眞の妙味を解し得なくなる。苛立つた心で餘り小さな處ばかりに目を注けてゐると人生が——人生の眞相が——分らなくなる。から、見るものに吠え付いて、人笑はせになつて、それで結局となる。何でも愛する者でなければ、非難することも罵ることも出來んもんですな。」

「Voilà Mr. Pigassoff enterré!（おや〳〵ピガーソフさんひどくやられたといふほどのこと）貴下は眞個に人物評がお上手だ！併しピガーソフには貴下の仰しやる事は解りますまいよ。彼人は自分ばかりを愛してゐるのですからね。」

「それでゐて自分を罵るのは、自分を罵らなければ人を罵るのに都合が惡いからでせうな。」

ダーリヤは笑ひ出した。

「玉石……アノ何ですね……玉石同じく焚く

といふ所でせうね。それから、男爵は貴下は何と思し召す？」
「男爵ですか？　善い人ですな、親切で、博識で…唯締りがない…一生學者とも附かず、俗人とも附かず曖昧で終ふでせう、即ち學問好きで――露骨に云つて了へば、何でもない人で…惜しいものですな！」
―私も然う思ひますよ。論文も見ましたがね…Entre nous...cela a assez peu de fond.
(是れ限りのお話ですが…どうも論據がしつかりしませんのねといふほどのこと)」
暫くしてルーヂンが、「それからまだ如何な人が居ます？」
ダーリヤは小指で卷煙草の灰を落して、「他には最う誰も有りません。リーピナ・アレクサンドラ・ハーウロウナ――昨夜お遭ひなすつた――彼女は姿色は佳いが、唯それだけの事で、弟も矢張好い人です、l'imparfait honnête homme.(淘に温厚な人です)それから、ガリン侯は御存じだと。それだけです。まだ二三人近所に居ますが、是はお話にもならん人達で。恐ろしい野心が有つて、氣取るんでなければ、含羞む、でなければ無暗に無遠慮か何かで。夫人たちとは、御存じの通り、交際をしませんから。ほ、まだ一人居ましたツけ。大層立派な教育のある人ださうで、學者だ何ぞと評判をしますが、恐ろしい奇人でね、空想家ですよ。Alexandrine は知己で、何だか少し氣でもあるやうですが…ほんに、貴下、些と彼女を薫陶して遣んなさいましな。可愛らしい女ぢや有りませんか？　唯最う少し大人びなければ不可が、何でも最う少し大人びなければ。」
―大層人好のする方ですな。―
「全くの子供で、彼女が本當の赤兒です。それでも一度嫁いたことが有るのですが、Mais c'est tout comme.(嫁いたつて何の事もないのです、とでも譯すべきか)若し私が男だつたら、彼樣なのにでなければ、惚れませんね。」
「然うですかな。」
「然うですとも。あゝいふのは兎に角無垢です。無垢な眞似は出來ませんからね。」
「他の者の眞似なら出來るんですか？」と云つて、ルーヂンは高く笑つた。此男の高笑することは滅多にない。其代り、高笑をするとなると、顏が妙な顳顬に老人じみて、眼がすぼまつて、鼻に皺が寄る…
「リーピナさんが氣があるといふソノ奇人は如何いふ人です？」
「慥かレジネフ・ミハイロ・ミハイルィチといひましたツけ。矢張地主です。」
ルーヂンは吃驚して顏を揚げて、「レジネフ・ミハイロ・ミハイルィチ？　彼男が御近所に居ますか？」
「はア。御存じですの？」
ルーヂンは默つてゐたが、軈て、「以前懇意でした…餘程以前の事ですが。たしか、金滿家でせう？」
と肱懸椅子の總房を揑る。
「はア金滿家ですよ。ですがね、ひどい服裝をして輕馬車に乘つて、手代か何ぞの樣な風をして歩いてゐるですよ。分別つた人だといふから、如何ぞして宅へも出入りをさせたいと思つてゐますがね、それに少し掛合をしなければならん事もありますから…私はこれでも自分で地面の差配をしてゐますよ。」
ルーヂンは頷いて見せた。
「自分でやりますよ。お國風を守つてね、馬鹿な外國の眞似なんぞはしませんが、それでも如何か斯うかズーッとね(と撫でるやうな手附をして、)差支なくやれますよ。」
ルーヂンは慇懃に、「婦人には事務の才がないなどと主張する人もありますが、私は其樣な筈はないと始終思つてゐます。」

ダーリヤは快然に莞爾して、「お世辭にしろ嬉しい！　だが、何を云はうと思つたんだッけ？　えゝと、何のお話でしたッけね？　あゝ、然う然う、レジネフのお話でしたッけね、地割の事で少し掛合はなければならん事があるので、度々來て吳れろと云つてるんですがね、今日も心待に待つてゐるんですが、來ないかも知れませんよ：：さういふ奇人ですの！」

靜と戶が開いて下男頭が入つて來た。これは白髮で禿頭の脊の高い男で、黑の上衣に白の胴着を被て、同じく白の胸飾をしてゐる。

「何だえ？」とダーリヤは云つたが、一寸ルーヂンの方を向いて、小聲に「N'est ce pas, comme il ressemble à Canning?（カニングに似てるぢやありませんか）」

下男頭は、「レジネフ樣が入らッしやいましたが、お通し申しても宜しう御座りまするか？」

「あら、まア！　噂をすれば影とやらだよ、お通し申してお吳れ。」

下男頭は座鋪を出て行く。

「あんな奇人でも到頭來ましたよ。けれども、折が惡いのね、お話の腰を折つて了つて。」

ルーヂンが起上つたので、

「何處へ、貴下ッ。いらしッても關ひませんよ。ピガーソフを批評なすッたやうに、一つレジネフをも批評して下さい。貴下が仰しやると、Vous gravez comme avec un burin.（ひッたり極るから不思議とでもいふこと）いらッしやいな。」

ルーヂンは何か云はうとしたが、考へて又座に就いた。

諸君お知己のレジネフが座鋪へ入つて來た。矢張灰色の外套を着て、日に焦けた手に例の帽子を持つてゐる。靜に主婦に會釋をして喫茶卓の側へ寄る。

「到頭入らしッて下すッたね！　何卒お掛けなすッて。貴下方はお知己ださうですね、」とルーヂンを顧みながら云ふ。

レジネフはルーヂンの面を視て變に莞爾として、

「知つてゐます。」

と一寸辭儀をする。

「大學に一所に居つたので、」とルーヂンも小聲に云つて、差俯向く。

「大學を出てからも逢ひましたな？」とレジネフは冷淡に云ふ。

ダーリヤは怪訝な顏をして兩人の樣子を視てゐたが、更にレジネフに座を勸める。そこで、レジネフも座に就いて、

「御用といふのは地割の事でせうな？」

「地割の事も地割の事ですが、兎に角一度お目に懸りたくて。ツイ御近所だのに、それに貴下のお家とは親類でないばかりの間柄ですから。」

「さうですか、それはどうも：：で、地割の事は貴宅の執事と話を決めて了ひました。執事の云ふ所に悉く同意で。」

「どうか左樣ださうで。」

「唯貴女にお目に懸つた上でなければ證書に署名は出來ぬといふことで。」

「はア、さういふ規則にしてゐるのですが、アノ何ですか、貴下の所のは皆年貢を納めてゐるのですか？」

「然うです。」

「それでゐて貴下御自身に地割の世話をなさるんですね？　まア御奇特な！」

レジネフは默つてゐたが、頓て、

「では最うお目に懸りましたから：：」

ダーリヤは苦笑をして、

「左樣さね、お目に懸つたには違ひありませんね。どうも酷く餘所々々しく仰しやいますね。屹度私共へお出でなさるのがお厭でしたらうね？」

「私は何處へも出懸けません、」と澄ましてゐ

る。
―何處へも？　アレクサンドラの許へも入らッしやいませんか？―
―ソルインツォーフさんは以前から懇意ですから。
―ソルインツォーフさん！　へ、へ、併しお厭なものを無理に何しは致しませんがね……失禮な申樣ですが、私は、貴下より年上だから口幅ツたい事を申しますよ。一體まア何で貴下は然う拗ねていらッしやるです？　私の家が一體お氣に入らないんですか？　それとも私がお嫌ひなんですか？―
―私は貴女とはお親しくせんから、嫌ひも好きも有りません。お宅は結構です。けれども、腹藏のない所を云へば、私は窮屈が嫌ひです。着られるやうな上衣もなければ、手袋も持つてゐません。それに私は貴女逹とは全で境涯が違ふから……」
「何故でせう？　身分にしても、教育にしても、御同樣ぢや有りませんか？　Vous êtes des nôtres.（貴下も吾々の組でさアね）」
「身分や教育は姑く措いて、一體どうも……」
「人間は人間に交はらなきや不可ませんね。チオゲンが桶に入つたやうに唯一人で居たら、何處が面白いでせう。」
―一寸桶に入つてゐるのが適宜なんです。それに私は人間に交らんと仰しやるが、果して交らんでせうか？―
ダーリヤは脣を咬締めた。
「それは別のお話になるが、私は唯貴下の御交遊の仲間に入れないのが残念だと申すので。」
ルーヂンが嘴を容れて、「自由を愛するといふ事は至極結構な事ですが、レジネフさんはそれを誇張して仰しやるんでせう。」
レジネフは何とも云はなかつた、唯ルーヂンをジロリと視たばかりで。一寸座に穴が開く。
レヂネフは突と起上つて、「では、地割のお話は決つたから、お宅の執事に證書を遣すやうになつて、宜しいでせうな？」
「宜しう御座いますとも……尤も貴下は餘りお酷いから、お辭り申す筈なんですが……」
―ですが、此度の地割は私の都合よりは貴女の御都合の善い樣に決めたので。」
ダーリヤは首を竦めた。
―私共では朝飯も食りたいのですか？―
―難有う、私は朝飯は食りません、それに少々急ぎますから。」
ダーリヤも起上つて、
―ではお引留は申しません、」と云ひながら窓際へ寄つて、「お引留め申すも失禮ですから。」
レジネフは辭儀をする。
「どうも失禮致しました！　御事多の所をお呼出て申しまして。」
―如何致しまして、」と云つて、レジネフは出て行つた。
ダリーヤはルーヂンに對つて、「如何です、まア!?　豫て奇人だとは聞いてゐましたが、正可斯樣なでもあるまいと思つたら。」
―矢張ピガーソフと同病ですな、一風變つてゐたいといふ病で。ピガーソフはメフィストーフェリを氣取つてゐるが、彼男は、犬儒を氣取つてゐるので。どうも斯ういふ病には利己主義や己惚氣は澤山に有つても、眞理や愛の分子は少ない。これも矢張一種の政略ですからな。平氣な氣の無い面を被つてゐると、惜しいものだ、あれ程の才を持腐れにして了つて、と思ふ者が有るかも知れん。けれども、熟く視ると、實は才も何も無いので。」
「Et de cela（それ迄）どうも、まア、お眼が高い！　如何なに隠さうとしたッて、貴下に逢つちや敵はない。」
―でも有りますまいが……併し、實はレジネフ

の事を彼此云つては濟まないので、私は親友として彼男を愛したことが有るから……尤も其後種々行違が有つて……」

「仲違をなすッたんですか？」

「いや然ういふ譯でも無いですが、疎々しくなつて了つたです。最う到底も舊のやうにはなりますまい。」

「大方其樣な事だらうと思ひました、彼人の居る中ぢゆう貴下は何となくお冴えなさらなかつたから……併し、どうも難有うございました。お蔭で大層今朝は面白う御座いました。最う好い加減にして置きませう。朝飯の時又お眼に懸ります。私は是からまだ種々用が有りますから。書記が――貴下は御存じの筈です。Constantin, c'est lui qui est mon secrétaire.（コンスタンチンは、あれが私の書記です）――最う乾度待つてゐるでせう。彼男は若いですが、善く氣の附く質で、上出來の男です。大層貴下に敬服してゐますよ。では、御免を蒙ります。眞個に男爵は貴下のやうな方を紹介して下すつて嬉しい！」

とダーリヤはルーヂンに手を出す。ルーヂンは先づ其手を握つて、それから其に接吻して、座鋪を通つて戶外へ出ると、ナターリヤに出會つた。

五

ダーリヤ・ミハイロウナの一人娘ナターリヤ・アレクセーエウナといふのは一寸見は餘り人好のせぬ風である。色は淺黑く、痩削で、少し猫背で、未だ身體も全然は發育てゐないけれど、顏の道具は完備つてゐて美しい、尤も十七の小娘にしては少し長せて見えるが。此娘の命は綺麗な滑ッこい額で、眉は細くへの字形をしてゐる。餘り口數をきかず、意を籠めて心に視たり聞いたりする所は何に向つてもその物の意を了解まうとするやうな鹽梅である。往々兩手を垂れて凝然と身動もせず考へてゐることがあるが、其時の面には內心で種々に物を思つてゐる影が映る……覺束ない微笑がふと口元に浮んで消えると、黑眼勝の大きな眼が空を向上げる：：Qu'avez vous ?（どうなすつた）と Mlle. Boncourt が問ねて、さて處女が屈託したり放心したりしてゐては見ともないと云つて叱る。けれども、ナターリヤは放心してゐるのではない、どころか、物學びに身を入れて、書物に對つても、針を持つても、つひぞ厭な顏をしたことがない。深く強く物事に感ずるけれども、內々に感ずる。子供の時にも餘り泣かなかつたが、今でも溜息をすることさへ罕で、何か心に逆ふ事の有る時には唯少し蒼ざめる許りである。母はナターリヤを穩當で分別があると思つて、戲に Mon honnête homme de fille（わが尊敬すべき娘の義）と謂つてゐるけれど、左程才氣があるとは思つてゐない。「ナターシャ（ナターリヤをやさしく和げていひたるなり）は幸福と淡泊してゐる。私に似ないで好い鹽梅だ。乾度苦勞を知らずに了はう」と常々云つてゐるが、間違つてゐる。けれども、母親で娘の氣質を知つてゐるものは澤山無いものである。

ナターリヤは母親を愛してはゐるが、餘り信信してはゐない。

或時ダーリヤが娘に對つて、「お前は何事でも私に隱すには當らないよ。何だかお前は隱立でもしてゐさうだけれどもね……尤も自分の了簡を持つておいでだから……」

といふと、ナターリヤは母の面を視て、心の中で、「自分の了簡を持つてるのが何の不思議だらう？」

ルーヂンが戶外で出會つた時には、ナターリヤは庭園へ往かうといふので、帽子を取りに部屋へ入る所であつた。朝稽古は最う終んだのである。ナターリヤも最う小娘待遇をされてゐない。Mlle. Boncourt に神話學や地理學を

敎へて貰はなくなつたのも久しい前からの事であるが、其代り毎朝その眼の前で歴史や旅日記や其他の利益になる書物を讀むことになつてゐる。尤もダーリヤが自分一流の見識で嚴重に讀物を選擇して與へる。けれども、實はペテルブルグの佛蘭西本の賣捌店から送つて寄すのをそつくり其儘ナターリヤに取次ぐだけの事である。但しデュマー、フィース會社出版の小説本だけは取除けて、之はダーリヤが自分の讀物としてゐる。Mlle. Boncourt はナターリヤが歴史を讀むとなると、いつも別して澁面を作つて氣難かしい面をして眼鏡越にじろ〳〵見る。一體歴史は怪しからぬ事ばかり書いてあると老人氣質に思ひ込んでるからであるが、其癖此老婆は昔の豪傑では何故かカンビセス一人しか知らない、近世の人ではルイ十四世とナポレオンとを知つてゐるばかりであるが、ナポレオンは大嫌ひである。けれども、ナターリヤは Mlle. Boncourt が夢にも知らない書物をも讀む、プーシキン物なら何でも諳で知つてゐる……

　ナターリヤはルーヂンを見ると少し面を赧めた。

「散歩ですか？」とルーヂンが云ふ。

「はア。庭園へ。」

「私もお供しませうか？」

　ナターリヤは、ト、Mlle. Boncourt の面を視る。

「Mais certainement, monsieur, avec plaisir.（どうぞあなた御一所に）」と老婆が急込んだやうに云ふ。

　ルーヂンは帽子を把つて一所に出掛けた。

　ナターリヤも初の内は一つ道をルーヂンと竝んで行くのを極り惡く思つたが、それも其内に少し改る。ルーヂンが何を爲てゐるの、田舎は氣に入つたかのと聞き出したので、遠慮勝にそれに返答をしてゐたが、狼狽した含羞んだやうな風をすると、人は直と厭らしい氣にでもなるやうに言ひ做し思ひなして、ツイそれにして了ふけれど、ナターリヤには其樣な樣子はなかつた。たゞ併しどうも胸がどきつくらしい。

　ルーヂンはナターリヤを流盻に視て、「田舎は淋しくは有りませんか？」

「些とも淋しいとは思ひません。反つて來て善かつたと思ひます程で。何だか田舎は面白うござんすから。」

「面白い……えらい言を仰しやるね、併し、それも其筈ですかな、未だお若いンだから。」

　未だお若いンだから、と云つた其調子は羨むのでもなく愍むのでもなく、何だか變な鹽梅であつた。

「若い内が花です！」と言葉を繼いで、「學問の目的と云つても、若い時なら造作もなくツイ合點が行くことを、有意識に會得しようとするに過ぎん事ですからな。」

　ナターリヤはルーヂンの面を視た、何を云つてゐるのか解らない。

　ルーヂンはまた、「今朝久らく御母堂とお談をしましたが、えらい方ですな。詩人達が交際して頂くのを名譽の樣に思つたのも無理はないです。」暫く默然としてゐて、「貴孃、韻文はお好きですか？」

「人を試驗してゐるのだよ、」と肚の裏では思つたが、口へ出しては、

「はア、洵に好きで。」

「詩といふものは神の語ですな。私も韻文は好きだが、韻文にばかり詩があるとは限らんもので、詩は天地間に充塞つてゐます、吾々の周圍は皆詩です。此樣な樹を觀ても、天を觀ても、到る處に美と生命がある。美と生命の在る所は即ち詩の在る所ですからな。」

「此腰掛で休まうぢや有りませんか？　も、かう腰を掛けて……若し貴孃とお馴染になつたら（と莞爾々々としてナターリヤの面を覗込ん

で、屹度親友になるだらうと、何故だか私には思はれるが、貴嬢は如何思ひます？」

「宛で子供扱ひにする、」と肚では思つたが、何故と返答をして可いか解らんので、永く田舍に逗留してゐる積りかと問くと、

「夏一杯、秋へ掛けて、冬も居るかも知れません。が、私は御存じの通り餘り都合の善い方でない。それに家事は無茶苦茶になつてゐるし、最う彷徨いて歩くのも倦々しましたから、好加減に退隱したいと思つてゐます。」

ナターリヤは稀有な事に思つた。

「本當に然う思召して？」と怯々問く。

ルーヂンは屹と此方を振向いて、

「と仰しやるのは？」

ナターリヤは少し狼狽しながら、「他の者ならアノ……何ですけれども、貴下は……アノ……働かなければ不可ませんわ、他の利益に成るやうに爲さらなければ。貴下のやうな方が働かなければ働くものはないから。」

「どうも然う仰しやると面目を施します。成程、人の利益になるか……口で云へば何でもないのですな！（と面を撫廻して）、人の利益になる！　けれども、假令自ら信ずることが厚いとしても、人の利益になりやうがないから困るです。自ら恃む所があつても、眞實に同情して呉れる者がないから困るです……」

と、さも心細さうに悄然と差俯向く。昨日きほひ立つて彼樣に末に望を繋けて物を云つてゐた、是が其人かと異まれる程である。

ルーヂンはふと獅子の頭の樣な頭髮を一振掉つて、「いや、然うでない。愚癡だつた、貴嬢の仰しやる通りだ。どうも難有うござんした、實にどうも。（何で禮を云ふのか、ナターリヤには些とも解らなかつた。貴嬢に云はれて私の本分に心附いた、私の履むべき道が解りました……然うです、私の働かなければならんです。若し私に才が有るなら、それを晦ますやうな事をしてはならんです。唯饒舌つてばかりゐて、下らぬ他愛のない言ばかり云うてゐて、半生の心血を空言に濺いで了つてはならんです。」

と滔々と辯ずる。薄志弱行は士の愧づる所、何でも一廉の事功を建てねばならぬといふことを眞心を籠めて言葉巧に、聽けば成程と思へるやうに論ずる。我と我を散々に叱りちらして、凡そ行よりは言が先に立つのは熟えた果實を針で突くやうなもので害になる、唯汁氣を漏すのみ氣の張を弛めるのみの事で何の益にも立たぬ。健氣な心を持てば、同情を運ぶ者なきを憂へず、世に知られずに了ふのは我求むる所を我も善くは知らぬほどの人、でなければ、知られるだけの價値が無い人に限ると論ずる。久らく辯じた擧句に、また改めて禮を述べて、ふと思掛なくナターリヤの手を緊く握締めて、「貴嬢はどうも健氣だ、優らしい！」と云ふ。

Mlle. Boncourt は露西亞に來てから四十年にもなるが、言葉が善く解らぬから、唯ルーヂンの口から淀みなく言葉が流れ出るのを聽いて眼覺しく思つてゐるのみの事であつたが、この無遠慮な擧動を見た時には目を圓くした。尤も、此老婆の眼からはルーヂンは音樂師か繪師か何ぞのやうに見えるが、然ういふ人達に禮儀を守れと云つた所で無駄なことだと思つてはゐるが。

老婆は起上つて手荒く身繕をして、最う家へ歸らなければなりません、殊に Monsieur Volinsoff（ワルインツオーフの事をから謂つてゐるので）が朝飯に來るかも知れぬからと、ナターリヤに云ふその口の下から、「それ、彼處へお出でなすつた！」と言足をして、住宅へ行く或る竝木道の方を視遣る。

成程、ワルインツオーフの姿がツイ其處に見える。

ワルインツオーフは逡巡しながら來て、遠方から皆の者に會釋をしたが、厭な面をしてナターリヤに對つて、
「散歩ですか？」
「はア、今歸る所なの。」
「然うですか。ぢや御一所に歸りませう。」
で、皆連立つて行く。
「お姉樣はお變りもございませんか？」
とをかしく莞爾やかにルーヂンが云つたが、ワルインツオーフに對ふと、昨日から斯うである。
「難有う。變つたことも有りません、今日事に寄ると來るかも知れません……今何かお話中でしたな？」
「然うです、ナターリヤさんとお話してゐたです、ナターリヤさんの仰しやつた事が酷く胸に中つたものですからな……」
ワルインツオーフは如何な言がとも問かなかつた。人々沈默つた儘で住宅へ引返した。
食事前に又サロン(會集)があつた。尤もピガーソフは來ず、ルーヂンは何か氣の乘らぬ樣子で、パンダレーフスキイを捉へて、ベートホーフエンの曲を奏らせてばかりゐる。ワルインツオーフは默然として俯向いてゐる。ナターリヤは母の側を離れず、ぢツと考へ込んでは又仕事に懸る。バシストフはルーヂンの面から眼を放さず、今に何か名言を吐くだらうと、そればかりを待つてゐる。といふ有樣で三時間ばかりといふもの極く詰らなく過ぎた。アレクサンドラは食事になつても姿を見せなかつたが、ワルインツオーフは卓を離れるや否や、馬車を支度させて、誰にも挨拶をせず、何時の間にかこツそり歸つて了つた。
さてワルインツオーフはどうも厭な心持がする。豫てよりナターリヤを想ひに想つてゐて、今日いひ出さうか明日はいひ出さうかとむずむずしてゐるのである　ナターリヤも萬更でもないやうではあるが、しかし戀ふの慕ふのといふのではない。それはワルインツオーフも善く知つてゐる。また嫁はなければそれで可いとしてゐるが、唯最と全然馴染んでからと、その機會を見合せてゐるのである。それならば、何が心配になるのか？　此二日の間にナターリヤの樣子でも違つたのか？　待遇かたに些とも變りは見えないが……
今迄は全く見損つてゐたので、敵は思つたよりも氣が無いと、ふツと思はれて來たのか、それとも敵心が頭を擡げて來たのか、それとも何か厭な事でも有りさうな心持がするのか、兎に角如何紛れようとして見ても、どうも厭な心持がする。
姉の居間へ通つて見ると、レジネフが來てゐる。
「大層早かつたのね。如何か爲すツたの？」と姉が云ふ。
「なアに、如何もしたのではないが、たゞ面白くなかつたのです」
「ルーヂンさんも居て？」
「居ました。」
ワルインツオーフは帽子を放り出して腰を掛けた。
「あのね、セルゲイ(ワルインツオーフの名)さん、お前さん加勢して頂戴。私がね、ルーヂンさんは餘程才子で辯が巧いと云つても、此人が強情張つて如何しても承知しないの。」
ワルインツオーフは何故か默つてゐる。
「いや、私は貴女に些とも反對はしない。ルーヂンの才子で雄辯なことは異議はないが、唯彼男は、私は嫌ひだといふばかりです。」
「君は最う會つたのかい？」とワルインツオーフが云ふ。

「今朝會つた、ダーリヤさんの家で。彼男も今は羽振が好いやうだね。何時か一度はお拂箱になるのだらうが。なにパンダレーフスキイばかりさ、彼女の一生厭きないのは。けれども、今はルーヂンが跋扈してゐる。會つたね！　加之ルーヂンが端坐として坐つてゐるところへ僕を引張出して見せたんだ、ちよいと御覽なさい、此地ではかういふ變人が出來ます、と云つたやうな鹽梅さ。賣物に出た馬ぢやあるまいし、相を見られるのは迷惑だから其儘歸つて了つた。」

「何だつて彼家へ往つたんだい？」

「地割の事で、といふのは表面で、實は僕の面相を親に呼んだのだらうさ。どうせ貴婦人の事だからね！」

「あ、解つた〳〵、彼方が豪いもんだから、それで貴下はやつかむのだよ――乾度、然うなんだよ、」とアレクサンドラが憤り出した。「それで仇敵のやうに思つていらツしやるんだよ。でも私共は彼方は智慧が有るばかりでなく、乾度情も厚いだらうと思ひますわ。だつて眼付で判りますアね、アノお話を爲さる時の……」

「大袈裟に純潔の講釋をする時の……」とレジネフが腰を折る。

「憎らしいねえ、貴下は。泣出しますよ。本當に可惜事をした、貴下なんぞに關はずにダーリヤさんの家へ行けば可かつた。貴下なんぞに關つてゐるほど詰らないことはない。もう何卒後生だから調戯ふのは止して頂戴〳〵と哀れな聲を出して、その暇で些と彼方の若い時の話でもして聞かして頂戴ツてば。」

レジネフは起上つて座鋪を歩き出した。

「はア。貴下は舊いお知己で善く御存じだと仰しやるぢや有りませんか？」

「ルーヂンの若い時の話ですか？」

「さア、善く知つてることは知つてる。彼男の若い時の話をしろと仰しやるんですな？　よろしい、やりませう。ルーヂンは一體或る地の者で貧乏地主の息子です。親父には早く訣れて母親の手一つで育てられたのだが、此又母親といふのが極の結構人で、息子に掛けては眼がないといふ人で、自分は燕麥の粉ばかり食つてゐても、息子の爲には有金を皆費つて了つた。敎育はマスクワで受けたのです、初は叔父とかが學資を出してゐたのだが、成人してからは金滿の侯爵を欺して――ぢやなかつた、ツイ口が滑つたんです……侯爵に愛せられて、其人に金を出して貰つてゐた、それから大學へ入つたんです。大學で私は相識になつて、極く親密にしてゐました。其時分の事は他日お話を爲ます。今日はいけない。それから彼男は外國へ往きました……」

レジネフは相變らず座鋪の中を歩き廻つてゐる。それをアレクサンドラは目で以て送りつ迎へつしてゐる。

レジネフは言葉を繼いで、「外國へ往つてからは母親の方へは僅り音信をしなかつた。尤もたつた一遍歸省したツけが、それも十日間ばかりで……母親は留守中に歿くなつて、他人が死水を取つたさうですが、息氣を引取るまで息子の肖像から眼を放さなかつたといふことで……私は某地に住まつてゐた頃、屢次見舞つてやりましたがな。善い人で、人が尋ねると大層喜んで、妄に櫻桃の甘露煮を喫べろ〳〵と云つて侑める。ミーチャ（ルーヂンの名をやさしく云へるなり）が如何も可愛くツて可愛くツてならないですな。ペチョーリン一流の人は常に情愛の薄い者ほど深く愛するものだといふが、私の考では母親といふものは我子の中でも殊に離れてゐる者を愛する傾がある。其後外國でルーヂンに逢つたことがあるが、其時分ルーヂンは去る貴婦人と浮名を立ててをつた。貴婦人といふのは矢張露西亞の者で、青足袋連（學問のある女をいふ）ださうだが、最

う相應の年齢で、餘り美しくもなかつた。併し青足袋連に限つて皆然うしたものですな。大分長い間此女に關係してゐたが、其内に見捨てて了つた……いや、然うでない、見捨てられたんだツけ。私も其頃ルーヂンと分れて了つた。

これで大團圓です。」

レジネフは話し了ると、額を撫でて、さもガツかりしたやうに安樂椅子に腰を卸した。

アレクサンドラが、「レジネフさん、貴下は餘程人が惡いよ、本當にピガーソフに輸けないよ。夫は貴下のお話は眞實でせうさ、何も僞は仰しやるまいけれども、然う云つて了つては花が散るわ。老母さんが可哀想だつたの、大層可愛がつてゐたの、他人に死水を取られたの、貴婦人に關係したのツて……其樣な事は云はんでもの事ですわ……立派な人の身の上でも、些ともお誇言を附けずに――可うござんすか、些ともお誇言を附けずにですよ――厭に云つて了ふことが出來るもんですよ。それも矢張譏謗の類ね。」

レジネフは起上つて復座鋪の内を歩出したが、頓て、「私は厭に云はうとは些とも思はん。私は人を譏謗するやうな男ぢやない。」少し考へてから、「が、併しそれは眞に、貴女の仰しやる所も幾分か道理かも知れん。私はルーヂンを譏謗したのぢやないが、事に寄ると彼男もそれから變つてるかも知れん――それは何とも云はれんですな！――私の思ふ所は偏頗かも知れん。」

「おや斯うしませう……貴下がルーヂンさんと最う一遍知己におなんなすツて、善く先方のお肚裏を洞見いてから、最後の所を仰しやい。ね、それが可いでせう？」

「宜しい、然うしませう……それはさうと、君は何故然う默つてる？」

ワルインツォーフはびくりツとして面を揚げた。眠りかけた所を覺されたとでもいふやうな鹽梅である。

「何とも云ひやうがないもの、僕は彼男を知らんから。それに今日は頭痛がして……」

「眞に然う云へば今日は何だか顏色が惡いやうですよ。どうぞ爲すツたの？」

「頭痛がします、」と同じ事を云つて、ワルインツオーフは座鋪を出て了つた。

アレクサンドラとレジネフは後を見送つて面を視合したが、互に何とも云ひはしなかつた。ワルインツォーフが如何いふ心持でゐるかは二人とも知らんではないのである。

六

二月餘り經つたが、此間ルーヂンはダーリヤの家に殆ど居ずくまりであつた。ダーリヤは最うルーヂンでなければ夜も日も明けぬ。ルーヂンを捉へて自分の噂をしたり意見を聞いたりせぬでは如何も居られぬ樣になる。或時ルーヂンが懷淋しくなつたからとて歸らうとすると、ポンと五百ルーブル出して呉れた。ルーヂンはワルインツオーフにも二百ルーブル許り借りてゐる。ピガーソフは滅切足を遠くした。ルーヂンに氣壓されたので。尤もそれはピガーソフばかりでもないが、

ピガーソフは此樣な事を云つてゐる。「私は彼才子は嫌ひだ。厭に物を云ふ、宛で小說中の人物か何ぞの樣に、しんみりとなつて「私はといふ……私は、私は……ツて、長口上を並べ立てる。一寸嚔でもすると、直ぐ何故嚔をして咳をしなかつたと、其理由を說つて聞かせる。人を賞めるにしても、宛で官職でも授けるやうに大けさにいふ。大層自分を擯斥して我と我を叱飛すから、大方最う人に顏は合はされまいと思ふと、如何だらう！　浮かれて騷出すほどだ。宛で苦い酒をかツ飲つたといふものだ。」

ハンダレーフスキイはルーチンを憚つて怯る怯る機嫌を取つてゐる。ワルインツォーフとルーチンとは奇異な關係で、ルーチンはワルインツォーフを侠氣が有ると云つて、蔭でも眼の前でも賞讃す。けれどもワルインツォーフにはルーチンがどうも氣に喰はぬ。眼の前で業々しく稱立てられる毎に、覺えず氣が苛立つて忌々しくなる。「彼樣な事を云つて余を嘲弄してゐるのかも知れん、」と思へば、むら／＼とすることもある。幾度か氣を取直して見ても、どうも嫉ましい。尤もルーチンとても、ワルインツォーフの面を視ると毎も喧ましいほど愛想を云つて、侠氣があると推奨げて余を借りる算段をするやうなもので、餘り好いてゐるとも思はれぬ。此二人が親しらしく手を握合つて眼と眼を視合せる時、互に如何樣な心持がするか一寸解らぬ。

バシストフは相變らずルーチンを神佛のやうに敬つて、その云ふ事を一々耳に留めてゐる。ルーチンはバシストフには餘り氣を留めぬ。尤も如何かして一朝一所に居て、人生の大事を語合ひ、てんと堪らぬ氣にならしたこともあつたが、其後は棄てて見返りもせぬ……清い心を打込んで陷る人に遭ひたいといふのはそれは眞の口頭ばかりと見える。レジネフはダーリヤの家に出入りをするやうに成つたけれど、ルーチンは之とは議論を闘はしだにせず、何處となく避け氣味にしてゐる。レジネフも亦ルーチンとは餘所々々しくしてゐるけれど、判然としたことも云はんので、「アレクサンドラは彷徨してゐる。」ルーチンを崇めてゐるけれど、レジネフは信じてゐるのである。ダーリヤ一家の者は皆ルーチンの思ふ通りになつて、聊かの望でも叶はぬといふことはない。晝間の業務もルーチン次第で順が定る。如何な Partie de Plaisir (遊山)でもルーチンを入れずに組んだことはない。けれども、ルーチンは俄に思立つて遊びに出たり慰みを企圖んだりすることは餘り好まないから、然ういふ仲間に入つても、大人が小兒の遊びに交つたやうに尭衛はしてゐながら少し退屈さうにも見える。其代り何事にも首を突込む。地所の差配やら、小兒の教育やら、家内の始末やら、凡そ一家の事に就いては主婦の相談相手になつて、其意見を參酌して、瑣細な事にまで立入つて、いろ／＼の改革を勸め、計畫を立てる。ダーリヤはいつも至極尤もと同意はするが、それは口頭ばかりで、率となると常も執事の意見に從く。執事といふのは小露西亞の者で、隻眼の、氣の長い、それでゐて仲々横着な老人であるが、毎も一つしかない眼を細くして、「年は喰はなければ、味は出ません、若い内は内のないもので、」と云つて、ニヤリとする。

主婦を除いてはルーチンは一番ナターリヤと話を懐くする、而して長く話してゐる。内々で書物を貸したり、思立つた事を打明けたり、書きさした文章の初の方を讀んで聞かせたりするが、ナターリヤには毎々其意味が解りかねる。けれども、ルーチンは解らぬとて、それには餘り頓着せず、唯聽いてさへ居ればそれで可い、と云つた樣な樣子である。ナターリヤがルーチンと親しくするのがダーリヤには餘り喜ばしくない。けれども、一田舍だから、まア仕方がない。大方子供で面白いのだらう。大した害も有るまい、それに彼樣いふ人と交際するのは畢竟彼娘の利益になる事だから……併しペテルブルグへ往つたら、かうはさせまい……」などと思つてゐる。

けれども、ダーリヤは誤解をしてゐる。ナターリヤは子供になつて話をしてゐるのではない。心を籠めてルーチンの話を聽いて、その深意を探らむとすることもあれば、自分の思ふ所疑ふ所を打明けて敎を請ふこともある、ルー

チンはナターリヤの師とも手引とも頼むもので
ある。當座は唯智慧のみが働く　けれども、
若い者の智慧は何時までも獨りで働いてゐるも
のでない。庭の楡皮の影のぼんやり斑に射す
處で、捨牀几に腰を掛けて、ルーヂンがギョー
テのファウストや、ホフマンや、ペッチンの手
紙や、ノワーリスを讀みながら、意味の解しか
ねる所へ來ると、讀みさしては講釋をする、そ
れを聽いてゐるその面白さ！　此國の處女は誰
も然うであるが、ナターリヤも獨逸語で話をさ
せると下手な代り、解ることは善く解る。然る
にルーヂンは獨逸の詩に魂を打込んで、縹渺
とした際涯のない處を泳廻る男であるから、
ナターリヤも何時しか釣込まれて然ういふ俗物
禁制の境へ入る。心を籠めて視てゐると、曾
ぞ見たことの無い美しい天地が眼前に開けて、
ルーヂンが手に持つてゐる書物の中から、眼覺
しい心象やら、鮮かな新思想やらが眼に視え
ぬ泉となつて湧出でて滾々と心の中へ流込む
と、生變つたやうな心持がするので、たゞ辱
けなさに胸が一杯になつて大歡喜の神火がぶ
すぷすと燻つて遂にぱッと炎上る：：：
或時ナターリヤが、窓際で繡架に對つてゐた
が、ふとルーヂンに向つて、「アノ貴下も冬籠
にペテルブルグへ往らッしやるのでせう？」
「如何しますか知らん、」とルーヂンは繙げて
ゐた書物を膝に措いて、「懷中の都合で往けた
ら、往きませう。」
物を云ふのも懶げである。何となく力脫が
したやうで、今朝から何もせずにゐる。
「往けないと云ふことは有りますまい？」
ルーヂンは首を掉つて、
「それは然う思はれるでせうが：：：」
と理由ありさうに向うを凝然と視詰める。
ナターリヤは何か云はうとして耐へて了つ
た。
「あれを御覽なさい、」とルーヂンは窓外を指し
て、「あの林檎ですな、あれは實が澤山結つたの
で其重みで折れたのでせうが、天才の有る者も
丁度如彼ものですな：：：」
「支へるものが無いから折れたのでせうね：：」
「成程、然うでせう。けれども、それが、其支へ
といふものが容易に見付かるものでないです。」
「でも人の同情は：：なんでも獨棲は：：：」
と少し亂次になつて、顏を赧めて、
「田舍で冬何を爲すツて？」
と狼狽て言葉を足す。
「田舍でですか？　一昨日貴嬢に腹稿をお話し
たでせう、あの論文を——人生と美術との悲壯
を論ずといふのを、隨分長くなるでせうが、あ
れを書かうと思つてゐます——出來たらお眼に
懸けませう。」
「印刷なさるのですか？」
「否。」
「何故なさらないの？　それぢや誰の爲にお
書きなさるのだか分らなくなるぢや有りません
か？」
「さア、まア、貴嬢の爲に書くと思つても宜し
い。」
ナターリヤは俯向いた。
「私などが拜見したつて解りは致しません。」
「お話の中だが、何の論文です？」とバシストフ
が怯る〳〵問く。離れた處にゐたのである。
「人生と美術との悲壯を論ずといふ、」とルーヂ
ンは題を反覆して、「然う〳〵、バシストフさん
も讀んで下さるでせう、だが、未だ君には此の
骨子となる思想が十分に手に入らんから不可、
戀愛の悲壯の處が全然了解んから。」
ルーヂンは往々戀愛の話を始める、また好き
である。初の内は Mlle. Boncourt も戀愛と
聞くと駭然として耳を聳てて、軍馬が喇叭の響
を聞附けたやうな面をしてゐたが、其内に慣れ

て了つた。唯其話が始まると、口を尖らせてへたくた烟草を嗅ぐばかりで。

「戀愛の悲壯の甚は戀のかなはない時ぢやありますまいか？ー

と怯づ〳〵ナターリヤが云ふと、

「いや、然うぢやない！ それは寧ろ戀愛の滑稽な處で…然う云ふ風に考へては不可、最と深く入らなくては…戀愛！ 不思議なものですなア！ 何處からともなく起つて來て、漸々に發展して、而して消滅して了ふ。突然明るくなつたやうに華やかに起つて來ることもあれば、灰を被つた火のやうに多時も燻つて、事情の綾が解れてから、炎となつて炎上ることもある。また蛇の這込むやうに心の内へ這込んで、ふと滑出て了ふこともある…實に不思議なものだ、研究の價値は十分にある。けれども、今時戀愛なんぞしてゐる者は有りませんな。戀愛し得る程の氣力を誰も持つてゐないから。」

と考へ込んだ。

「ワルインツォーフさんは久しく見えんぢや有りませんか？」

と突然いふ。

ナターリヤはハッとして 繡架へ屈みかゝつて、

「如何したのですか。」

と小聲に云ふ。

ルーヂンは起上りながら、「あんな立派な人はない。彼人こそ眞の露西亞の貴族を代表してゐる人で…」

Mlle. Boncourt が佛蘭西風の横眼を遣つてルーヂンの樣子を視る。

ルーヂンは座鋪の中を往きつ戻りつしてゐる。

急に踵でぐるりと廻つて、「樫の——樫は堅い木ですな——樫の葉は若いのが芽を出す時分でなければ古いのが落ちませんな。」

「然うですねえ、」とナターリヤは思切り惡くいふ。

「しつかりした人の戀愛も然うしたもので、古い戀は最う枯れ〳〵になつてゐる、けれども尙ほ附着いてゐる。たゞ別に新しい戀が芽を出すのでなければ散らん。」

ナターリヤは何とも挨拶をしなかつた。

「何で彼樣な事を云ふのだらう？」と心の中で思つてゐる。

ルーヂンは立止つてゐたが、ぶる〳〵と頭髮を掉つて座鋪を出て了つた。

ナターリヤはナターリヤで部屋へ戻つて來て、久らく茫然として寢臺に腰を掛けて、ルーヂンの最後に云つた事に思ひ入つてゐたが、ふと拳を握固めて、欷泣げて泣き出した。何が悲しいのか——解らん。自分ながら何故かうふいと泪が出て來たのか解らん。拭いても〳〵後から出て來る、沸々と湧上る泉の水の溢れて流れるやうに止度なく出て來る。

丁度其日の事、アレクサンドラはレジネフとルーヂンの噂をした。レジネフは初の内は何と云つても、相手にならなかつたが、何分にもアレクサンドラが承知しなかつた。

「どうもルーヂンさんは今でも矢張お氣に入りませんね？ 私は今まで故意と何にも伺はずに居たけれど、尤も彼人が變つてゐるかゐないか、貴下に大概解りましたらうから、其理由を仰しやい、何故彼人がお氣に入らないのか。」

レジネフは例の通り平氣な調子で、「宜しい。そんなに氣が揉めるなら云つて了ひませう。併し怒つちや不可ませんぜ…」

「まアさ、仰しやいよ。」

「其代り結末まで默つて聽いてらツしやい。」

「はい〳〵畏まりました。さア、何卒。」

「ぢや云つて了ひませう、」と胖に長椅子に腰を

落着けて、「成程、ルーヂンは私には氣に喰はん。それは彼男は賢い…」
「當然さ、貴下！」
「なか／＼賢いが、併し詰る所たわいが無い男だ…」
「まア、口に年貢が出ないと思つて！」
「たわいが無い男だ、」と同じ事を繰返して「併しそれはまだ宜しい、吾々は皆たわいの無い人間だから。それからまだ缺點が有る。尤も私は左程の事とも思はんが、彼男は内心壓制家で、懶惰で餘り學識もなくツて…」
アレクサンドラは手を拍つて、
「學識がないツて！　まア、驚いた！」
と喚く。
「餘り學識もなくて、」と同じ調子でレジネフは繰返して、「方々喰倒して歩いて、氣取り散らしてゐるが、これは然うありさうな事だ。併し彼男は氷の如く冷い、それが宜しくない。」
「まア、あんなに情のある人を捉へて冷いなんぞツて！」
「さうです、氷の如く冷いです。しかも自分はそれを承知してゐながら、情の厚いやうな面を被つてる。それが甚だ宜しくない、と次第に乘地になつて來て、「危い眞似をするから宜しくないです――勿論危い眞似と云つても、彼男に危いのぢやない。自分は一文だつて賭けちやゐないが、相手は命を賭けてゐる…」
「何を云つて在らツしやるんだか、些とも解りませんよ。」
「彼男は正直でない。夫が宜しくない。賢いなら、自分の云ふことに何程の價値が有る位は解りさうなもんだが、それでゐて何か仔細らしく勿體を付けて饒舌つてゐる…無論彼男は雄辯です、併し露西亞人の雄辯ぢや有りませんね。それに若い者なら雄辯を弄するも仕方がないが、あの年頃になつて自分の舌の動く騷がしい音を聽いて、それで嬉しがつて氣取つてゐるとは氣羞しい事ぢやありませんか？」
「でも氣取らうが、氣取るまいが、聽者には關係がないぢや有りませんか？」
「いや、然うでない。同じ話でも、或人の口から聞くと腸に沁みるほど身に沁みるけれども、他の者がそれよりは最つと上手に云つても、耳を傾ける事の出來ないことがある。何故でせう？」
「それは貴下が耳を傾けないばかりですわ。」
「私は耳を傾けない――尤も私の耳は少し大きい方かも知れんが、一口に云へば、ルーヂンの話はいつまでも話で、曾て所信になつた例がない――所が其話で以て隨分若い人の心を迷はして生涯を誤らせることが出來る。」
「若い者／＼ツて、まア誰の事？」
「誰の事？　解りませんかねえ。ナターリヤさんの事でさ。」
アレクサンドラは一寸狼狽いた樣であつたが、直ぐと笑ひ出した。
「まア、飛んでもない！…貴下はいつでも奇異なことを仰しやるよ。ナターリヤさんは未だ赤兒でさアね、それに假令一ぱ何かをかしな事があつたにしろ、ダーリヤさんが附いてゐれば…」
「さア、そのダーリヤさんが我儘者で自分にばかり掬けて居るから困る。それに兒女の教育に掛けては自分程のものはないと思つてゐるから、少しも苦にしてゐない。何で其樣な事があるもんかと思つてゐる。自分が一寸一つ容體ぶつて目交をすりや、何も彼もすら／＼と思ふ通りになると思つてゐる。そんなもんでさ、彼女の思つてる事は。私は美術家の守本尊だとか、賢いとか、何とか云つて己惚れてゐるけれど、實は尋常の老婆さんで、取得と云つては交際の廣い位のものですからね。それからナター

リヤさんだが、彼娘は赤兒ぢやない、我儕よりか能く考へてゐる、それに考が深い。かうした正直な熱情を持つてゐる者が、彼樣な俳優じみた手練師に逢着るとは全く不運さね、併しそれも異むには足らん事かも知れんが。」

「手練師ツて、彼人がそんな手練師ですか？」

「手練師ですとも……まア、積つても御覽、彼男は一體ダーリヤさんの家で如何な事をしてゐます？　一家內の偶像となつて、豫言者のやうに款待されて、家事の取捌や家內の紛紜にまで首を突込む――そんな事が果して男兒の爲すべき事でせうか？」

アレクサンドラは呆れてレジネフの面を視詰めた。

「まア、不思議な！　貴下が顏を赧くして、いきりだして……何ぞ是には謂くがあるんだよ……」

「あれだ！　女といふものは之だから厭になつちまふ！　人が己の信ずる所を眞直に話をすれば、然ういふのには何か仔細があるだらうと云つて、緣の無い瑣末な原因を拵へなきや、承知が出來ないんだ。」

アレクサンドラは怒りだした。

「いえ、どうも御道理さまですよ！　貴下は女を虐めだしましたね　ピガーソフさんに輸けませんね。だつて、なんぼ貴下が眼が高いツて、僅の間にさう何も彼も全然見て取れるもんぢやありませんやアね。乾度誤解をしていらツしやるんだよ。貴下の仰しやるやうぢや、ルーヂンさんは宛でタルチューフか何かのやうになつて了ひますもの。」

「さア、其處だて。ルーヂンはタルチューフにも劣る。タルチューフはそれでも自分で何を求めてゐたか知つてゐたけれど、ルーヂンは才はあつても……」

「才はあつても如何したんです？　さア、云つてお了ひなさいと云へば。本當に貴下は根性曲りの厭な人だよ！」

レジネフは起上つた。

「根性曲りといふのは貴女の事で、私の事ぢやない。餘りルーヂンの事を酷く云ふもんだから、それで貴女は腹が立つんだらうが、私は酷く云つても宜い權利を有つてゐる――考へて見ると、高い代を拂つて此權利を買つたやうなもんだが。何しろ私は久らく一所に居たから彼男の腹はちやんと洞察いてる。何でしたな。先達て貴女にマスクワに居たころの話は他日すると云つて約束をしましたツけな。かうなると其話をしなければならぬ機會になつて來たが、貴女は結末まで聽いてゐられますか？」

「是非伺ひませう。是非！」

「では、しませう。」

レジネフは緩々と座鋪の內を歩きだしたが、をり／＼身を屈めては立止まつて、さて、「貴女は御存じだか、御存じでないか知らないが、」と話し出した。「私は極の小兒の時に兩親を喪くして了つて、十七の時には最う頭の押手がなかつたんです。マスクワの伯母の家に世話になつてゐたのだが、何でも氣隨にしてゐました。青年頃には私は隨分くだらぬ負けぬ氣、奴で、加之氣取屋のみえばうだつたが、大學へ入つてからはグッと書生風になつて了つて、忽ち艷聞の種を蒔いた。尤も是はお話にもならん事だから省略つて了ひますが、其時私は皆に一杯喰はしたんだ。それも宜いが、その喰せかたが些と手酷かつたもんだから、朋友めが寄つて集つて洗ひだてをして、明るみへ引摺出して、恥を與したので、私は途方に暮れて子供のやうにおい／＼泣きだした。何でも去る知己の家で、多勢朋友の居る處でやられたんですが、皆がアハヽ笑つてゐる其中で唯一人……それが其癖私が強情を張つてしいらを切つてゐる間は一番

憤激となつてゐたのだが、さうなつて見ると氣の毒とでも思つたと見えて、私を引張つて、自分の處へ連れて行つたです。」

「それがルーヂンさんなんでせう？」

「いや、ルーヂンぢやない。此男は最う死んで了つたが、非常な人物で、パコールスキイといふ人です。一寸如何いふ人と一口には云つて了はれない程の人物で、此男の話を始めると、最う他の者の話なんぞは厭になつて了ふ。高尚で、純潔で、あんな頭腦は滅多には有りませんな。古い木造家の中二階みたやうな處の天井の低い狹い部屋を借りてゐたッけが、非常な貧乏で、出稽古をしてかつ〴〵凌いでゐたです。だから客が來ても茶一杯振舞ふことが出來んこともあつたし、唯一脚しかない長椅子は甚く壞れてゐて、一寸見ると小舟か何ぞのやうでしたな。だが、そんな家でもなか〳〵人出入が多い。どうも皆が慕ふ、懷かしがる。そんな哀れ果敢ない部屋でも、其處に居るのが如何なに快い心持で面白かつたでせう！　私は此人の處でルーヂンと相識になつたのだが、其頃ルーヂンは最う侯爵どのとは縁切になつてゐたのです。」

「そのパコールスキイといふ方は何處が好くッて皆がさう騷いだんです？」

「さア、何と云つたものかな！　優しくて儼然してゐる――それが皆の氣に入つたんでせうな。曇のない廣大な智慧を持つてゐながら、子供のやうに愛度氣なくて可愛らしい處がある。快濶にアハヽヽ笑ふ聲が何だか今だに聞えるやうな心持がする。それでゐて、

　神に供へし御燈と
　心細くも夜を守る

といつたやうなとこもある。これは矢張我黨で詩人と謂はれた半狂氣の面白い男がパコールスキイを誦つた文句です。」

「辯舌は如何でした？」

「機嫌の善い時には仲々巧に話をしたが、驚く程ぢやなかつた。其時分でもルーヂンの方が十倍も雄辯でした。」と立止まつて腕を組んで、「パコールスキイとルーヂンとは餘程違つてゐます。ルーヂンはけば〳〵しい性質で、何事にも口が先へ立つて、事によると狂熱も餘計有るかも知れん位で、一寸見た所ではパコールスキイより遙か立優つてゐるやうではあるが、實は比べものにならんので。或想を捉へてそれを言推すところは仲々巧い、それに議論も巧者だが、其想といふのが自分の頭腦で產出した者ではなくッて、多くはパコールスキイの説を燒直したので、借物です。パコールスキイは見た所では靜な優しい人で、柔弱かとさへ思はれる程だが、馬鹿に女が好きで、酒も飲めば、喧嘩もする。ルーヂンは熱血があつて勇氣があつて活潑に見えるけれど、內心は冷かなもので、少し臆病です。尤も恥を與されると、無茶になつて了ふけれど。而して種々にして人を心服させようとする。原則とか概念とかいふものを揮廻して人を威すから、ルーヂンに敬服してゐたものも仲々ありました。けれども誰も愛してはゐなかつた、ルーヂンに親しんだのは私一人位なもんでしたらう。皆壓服されてゐたのですな……けれどもパコールスキイには人が自然と懷く。其代りルーヂンは誰に向つても講釋をする、誰とでも議論を鬪はすことを辭さない……餘り書物を讀んではゐないが、パコールスキイよりか讀んでゐる、我儕は勿論敵はない。それに秩序のある頭腦で、記憶も非常に强いから、青年ならソラ感心して了ひまさ。何でも青年に向つては最後の斷案を持出すに限る、間違つてゐても可いから斷案を持出すが可い！　極の正直者はかういふ事は出來ませんがな。何故なら、青年に向つて自分にも善くは分らないから確な事は云へないと云つて御覽……誰も此方

のいふことを聽いちやゐない。併し徹頭徹尾其すことも出來ないから、自分も幾分か確だと信じて話をしなければならん。ルーヂンが大に我輩青年を動かしたのも其所爲かも知れませんな。今お話した通りルーヂンは餘り多くは書物は讀んでゐない、けれども讀んだのは皆哲學書で、それに一種の讀書眼を持つてゐるから、讀むと直ぐ要領を提へて、議論の根本となる思想を摑む、而して其思想から美妙な絲を八方へ亂からぬやうに引出して眼に見えぬ畫幅を織出すのです。其頃の仲間と云つたツて實は皆小兒でさ――未だ修行中の小兒ばかしでさ。だから、哲學だの、美術だの、科學だの、人生だのと云つた所で、我儕には尋常の言語に過ぎん。善くした所で、唯然らいふ概念がある位のものだ。尤も派手な一寸眼に附く概念だが、一々ばらばらになつてゐて其間に連絡がない。此概念を一貫する原則といふものに至つては、始終手探りでいろ〳〵說を立て、解釋を試みたけれど、どうも慥な事が解らない……所が、ルーヂンの說を聽いて見ると、初めて其一貫するものに逢着つたやうな、何だか隔ての幕でも除られたやうな心持がする！　夫はルーヂンの云ふ所は皆取次でせうが、取次でも何でも關はない！我儕の知り得た所のものが總て井然と整理が附いて、分々碎々のものが俄に連絡つて完整つて、儼然と樓閣の如く目前に現れて、八面玲瓏として、眼を遣る所に生氣が躍つて見える。天地間に無意義のもの偶然のものが無くなる、萬物に必然と靈妙とが浮いて見える、總ての意味が判明すると同時に奧妙不可思議となつて、夫々の現象も自から調子が整つて見える。又我儕とても常住の眞理を宿した生身で、謂はゞ眞理の道具のやうなもので、何か大した運命を身に負うてゐるやうに思はれて、難有いやうな、怖ろしいやうな、妙な氣持になつて、頻に胸が迫つて來る……こんなことを云つても可笑しくはありませんか？」

「いゝえ！」と引張るやうに云つて、「何故ね？　何故そんなことを仰しやるか知らないけれど、可笑しくはありませんよ。」

「其時分から見ると私共も幾分か利口になつた」と話し續ける。「今から其時の事を考へると總て一場の兒戲に過ぎない……併し、今も云つたやうに、其頃は私共もなか〳〵彼男のお蔭を被つたものです。それはパコールスキイはルーヂンの如きものでない、無論えらい。私共の氣を興奮さして火を胸に焚かしたのは此人だ、けれども、神經質の羸弱な人であつたから、時としては塞れて默つてゐることもある。その代り一たび鼓翼をするとなると非常なもので、九天の上へまで飛んで行く！　けれども、ルーヂンとなると、外見は立派な青年だが、隨分可卑な所も有つて、無い事も有るやうに云つて他を讒謗することさへある。それに何處へでも首を突込んで、何でも鑑定をして說明したがる。いつも醒醒と突廻つて些とも落着いてはゐない。どうも政治家の天稟ですな！　其頃は然うであつたから、其通りと云ふのだが、情ないことには今も變つてゐない。その代り自分の思想も變つてゐない。三十五になるのですぜ……三十五にもなつてさ、思想の變らん者もないではないが、澤山は有りませんね。」

「まア些とお掛けなさいな。何故然う動いてばかりいらツしやるのだらう。宛で時計の搖錘のやうだよ。」

「此方が勝手です。そこで、パコールスキイの連中へ入つてからは私も再生つたやうになつて、溫順しくもなれば、勉强もしました、不審を質して喜ぶやら、難有がるやら――宛で寺入でもしたやうな始末さ。けれど、實際連中の集つた時の事を憶出して見ると、それは仲々感心な

優らしい所がありましたよ。まア五六人少年が集つたとお思ひなさい。脂蠟燭が一本點つてゐて、おツそろしく粗い茶に古臭い陳ねたやうなビスケットが出る所で皆が如何な面色をして何を話してゐるかと云へば、銘々眼には喜の色を浮べて頬には火を焚いて、胸をときめかせて、神だの、眞理だの、美だの、人間の未來だのといふ事を談じてゐるのだ――尤も時としては下らぬ事を言つて詰らん事に感心することもあるけれど、さうだと云つて何ぞ相病むに足らんさ……ハコールスキイは足を引込めて、蒼ざめた頬を手で支へて坐つてゐるが、眼がおそろしく光つてゐる。ルーヂンは部屋の中央に突立つて年のいかぬデモスフェンがどうどツと鳴る海に對つたやうな風をして喋舌つてゐる、滔々と喋舌つてゐる。頭髮を蓬に亂した詩人のスッポーチンが折々囈語のやうに斷つたやうな大きな聲を立てる。獨逸の牧師の息子でシェルレルといふ四十男は極の寡言で滅多に口を開いたことのないので、皆が豪い思索家のやうに謂つてゐる男だが、其男は相變らず口を閉ぢて、何となく眼立つ程位を取つて默つてゐる。我儕仲間のアリストファニースと謂はれたシチートフといふ氣輕男も大層大人しくして唯莞爾々々笑つて許りゐる。二三人の新參も居たが、是等は大歡喜に滿されてぞく／＼しながら話を聽いてゐるといふもので……夜は肅然として知らぬ間に更ける。其内に頓て東が白む頃になつて散會するのだが、皆感激して、眞面目になつて、其時分は酒と云つては一水も飮まなかつたから、白面で、而して疲れてゐるから心持善く恍然としてゐるのです……今でも憶出しますがな、僕らしい氣になつて、人一人通らん森閑とした町を通つて行く。星を視てさへ何となく懷かしいやうな氣がするが、そんな時には星も間近く見えて、その意も解るやうな心持がしますさア……あゝ、考へて見ると彼時分は面白かつた！　どうも彼時分の事を昔の夢にして了ひたくない。が、併し實際夢にもならんですな――それから後浮世の垢に汚れた人から見ても……其證據には、さういふ以前の朋友に幾人も逢つたことが有るが、皆人間が宛で畜生じみて了つてゐる。けれども其前で一寸ハコールスキイの名をいふと、少しばかり殘つてる人間らしい處がむくむくと頭を擡げて來るから、譬へて云へば、まア汚い暗黒な座鋪で取遺してあつた香水の壜の栓を脱いたやうなもので……」

とレジネフは默つて了ふ。蒼い面が今は赧くなつてゐる。

「ですが、如何して貴下はルーヂンさんと仲違ひをなすつたの？」とアレクサンドラが不思議さうにレジネフの面を視た。

「いや、仲違をしたのぢやない、たゞ外國で逢つた時彼男の腹を全で洞見いて了つたから、それで疎々しくなつて了つたんです。喧嘩を仕ようと思や、マスクワに居た時に仕ますア、醜い目に逢はせたからな。」

「どんな目に？」

「どんな目と云つて……私は……何と云つたもんかな……私はソノ…體裁に無いことだが、人に惚れツぽかつたです。」

「貴下が？」

「私が。ナンと奇妙ぢや有りませんか？　けれども、實際然うだつたんです。それで其時分私は去る可愛らしい娘に惚れてゐてね……何故然う人の面を御覽なさる？　これしきの事は何でもない、最つと不思議な事もある。」

「如何な事、それは？」

「その、何です。私は其時分マスクワに居た頃され、毎晩逢ひに行つたものがあるが、何に逢ひに行つたと思ひます？　庭園の端に菩提樹の稚木があつたが、それに逢ひに行きましたな。

菩提樹の細いすらりとした幹を擁へると、宛で天地を擁へた樣な心持がして、氣が大きくなつて、恍惚として、實際萬物が胸の内に入つてゐるやうな氣がする…然ういふ私は男だつたし！…如何です！貴女は私は詩なんぞ作つたことはあるまいと思ひませう？ところが、作りましたな、而もマンフレッド張のドラマさへ一つ書いた位だ。出て來る人物の中には胸を血に染めた幽靈もあるんだが、其血がさ、自分の血ぢやなくて、總ての人類の血なんだ、何も然う驚くことはないです…併し肝腎の話が何處へか往つて了つた。そこで私はさる娘と相識になつた…」

「而して菩提樹と逢引するのはお止しなすツた？」

「それは止しました。で、その娘といふのは極く氣立の善い姿色の佳い娘でした。はつきりした涼しい眼付で、徹透る聲で…」

「大層形容がお上手ね、」とアレクサンドラは莞爾する。

「そんな皮肉を云つちや不可。で、その娘は年を取つた父親と一所に居たのだが…併し委しいことは止めませう。たゞ實際氣立の善い娘でした——茶をコップに半分呉れろといへば、屹度八分目注いで呉れるといふ程善い娘なんだ！…初て逢つてから三日目には私は最う上氣せて了つて、七日目には我慢が仕きれんで、到頭全然ルーヂンに打開けて了つた。若い者が惚れたとなつたら、最う默つてはゐられんのですからな、それで私もルーヂンに全然白狀して了ひました。其時分私は全でルーヂンに感化れてゐた。又平たい噺が、感化れてゐて利益を得たことも多かつた。ルーヂンも私を輕蔑しなかつた、舐めるやうに可愛がつて呉れた。私はパコールスキイには深く隨喜してゐたけれど、何分彼が餘り純潔なので、其前へ出ると幾分か怯れが出る、けれども、ルーヂンには氣が置けない。ルーヂンは私の懺悔を聞くと、おそろしく喜んで、私に抱付いて、お目出度うの百も云つて、それから早速忠告を始めた、私が容易ならん身分になつたと云つて、その理由を說明し出したが、御存じの通りの雄辯だから、私も耳を傾けた。で、どうも非常に感動する。それから自分ながら我身が大切になつて、眞面目な顏色をして高笑もせんやうになつた。今でも憶出しますがな、何でも其時分は歩くのにも徐と歩いたもので、宛で腹の中に大切な水を一杯入れた器があつて、それを溢すと不可といつたやうな鹽梅で…どうも嬉しかつた、それに敵も萬更でないのは判つてゐたから尚更嬉しかつた。それからルーヂンが其娘と相識になりたいと云ひ出したが、これは尤も私の方から相識にしたいと云ひだしたのかも知れん…」

「へ、へえ、成程、それで解りました。それぢや貴下はルーヂンさんに橫取されたんでせう、その情婦を。それだもんだから今だに恨みに思つてゐる…屹度然うに違ひないよ。圖星でせう、賭けませうか！」

「所がお生憎さま、賭なら貴女の輸だ。然うぢやないです。ルーヂンは橫取をしたんぢやない、また仕ようとも思はなかつたが、併し兎に角酷い目に逢はした、尤も今となつて落着いて考へて見ると、然うされて反つて幸かつたとも思ふが。併し兎に角其時は私も非常に弱つた。ルーヂンは少しも私の爲惡かれと思つたのぢやない——そりや然うぢやない！けれども彼男は自分の事でも他人の事でも蝶々を針で刺める樣に言葉でぴつたり刺めたがる厭な癖がある。だから、私共を捉まへて、貴下がたは如何いふ心持でゐるの、如何いふ關係だの、如何いふ風にしてゐなければならんの、といふ事を說明して、吾等の心の底まで敲いて全然言

はせなければ承知しなかつた。而して褒めたり、叱つたりして、私共と密書の往復までした、如何です、密書の往復まで！……それで折角の情事も滅茶々々にして了つた！ 私はそれでも未だ幾分か常識が殘つてゐたから、其娘と結婚はまづ仕なかつたでせうが、それでもパーウェル・ヴィルギーニヤ氣取で面白をかしく二月三月送つたでせう。ところが然ういふ始末だもんだから、いろ〳〵行違がある、無理を爲る、――どうも下らん眞似をしたですな。その中に一日ルーヂンが、自分は親友の神聖なる義務として何も彼も情婦の親に知らせなければならんと云ひだした。それが話の拍子で然う云はなければならなくなつて云つたので、到頭ルーヂンはその通り做つて了つた。」

「まア、本當に？」

「實際の話です。それがさ、私の同意を得て做つたのだから、妙でせう？……今から思ふと、其時分は頭腦の中が混沌かつてゐたんですな。宛でカメラ・オブスキュラ（眼鏡の名）を覗いたやうに、總ての物がぐる〳〵廻りをして追蒐け追廻すもんだから、黑白の差別も附かなくなつて、僞も眞實のやうに想はれゝば、妄想が義務のやうに想はれるのだ……いや憶出しても冷汗が出る！ けれども、ルーヂン――そんなことには一向驚かない……如何して！ どんな紛糾つた中でも、燕が池を掠つて行くやうに、スッと通つて行く。」

「而して其娘とは別れてお了ひなすつたの？」とアレクサンドラが眉を少し釣上げて愛度氣なく首を傾げて訊いた。

「別れて了ひました……而も何の必要もないのに離別口上を竝べて、極りの惡い面目ない想をして拙い別れやうをしたです……彼も泣けば我も泣く、いやはやお話にならない始末さ……何やら紛糾つて了つて始末に行かなくなつて來たから、一思に別れて了はなければならないのだが、さてどうも辛い！ 併し世の中の事は如何にか斯うにか皆好い鹽梅に終局がついて了ふもんで、其娘も今ぢや好い所天を持つて幸福にしてゐます。」

「それでも、どうもルーヂンさんが恨めしいんでせう……」とアレクサンドラがいひかけると、

「何の、そんなことはない！ 反つてルーヂンが外國へ行く時なんぞは見送に往つて子供のやうに泣いた位です。だが實は其時分から最う厭氣は萌してゐたんでせうな。で、其後外國で逢つてから……尤も其時分には私も最う年を取つてゐたが……初てルーヂンの本色が解つた。」

「解つたと云つて、如何？」

「どうと云つて先刻お話したやうなことでさ。けれども、ルーヂンの話は最う止めませう。事によると、何事もなく濟むかも知れん。唯私は彼男の人となりを知らんから、それで酷評をするのぢやないといふ事だけが貴女に解れば、それで可いのです……それからナターリヤさんの事は云はんでもの事だから云ひますまいが、併しワルインツォーフの樣子には氣を附けんと不可ませんぜ。」

「ワルインツォーフの？ 何故？」

「何故と云つて樣子を御覽なさい。何も變つたところは無いでせうか？」

アレクサンドラは行詰つたが、頓て、

「本當に、然う云へば然うですねえ。成程……彼人も……此頃は全然違つて了ひました……ですが、貴下は……」

「一寸！」とレジネフは小聲になつて、「先生やつてお出でなすつたやうだ。それからナターリヤさんは小兒ぢやない、尤も經驗の無いことは小兒のやうだけれども。今に御覽なさい、彼娘

は乾度吃驚するやうな事を爲るから。」

「如何な事を？」

「如何な事ッて……身を投げるとか、毒を服むとかするのは如彼娘に限るでさ。一寸見ると溫順しいやうだけれども、非常に熱情があつて、氣性も確固してゐる！」

「えらく大層に仰しやるね、貴下のやうな冷淡な方にや、私なぞは噴火山か何ぞのやうに見えるでせうね？」

「ところが、然うでないね」とレジネフは莞爾して、「氣性と云つては貴女には、幸福と些ともない。」

「まア、あんな失禮な事を！」

「失禮な事を？　如何して〳〵、非常なお世辭でさ……」

ワルインツオーフが入つて來て胡散さうに二人の樣子を視廻した。此人も此頃は滅切窶れて了つた。二人がいろ〳〵話し懸けて戲言を云つてみても、唯やう〳〵ニヤリとするばかりで、成程ピガーソフの言つた樣に、兎が屈託したやうな面相をしてゐる。けれども、世の中に兎が屈託したよりも最つと厭な面を生涯に一度もせずに了ふ者は恐らく有るまい。ワルインツオーフはナターリヤの氣が逸れたと思ふと、大地がゆら〳〵と動れだして足の踏處も定かならぬやうな心持がするのである。

七

翌日は日曜でナターリヤは遲く床を出た。昨日は一日物をも云はず、泪に袖を絞つたのを人知れず羞かしいことに思つてゐたが、昨夜はおち〳〵寢られなかつた。衣服を脱掛けたしどけない風で、小さなピヤノに對つて、Mlle. Boncourが眼を覺してはと思ふからそツと調子を合してみたり、又は冷い鍵盤に額を押付けたまゝ久らく身動もせずにゐたりしてゐた。始終考へてばかりゐたが、ルーヂンのことを考へてゐたのではなく、ルーヂンの言つた言葉の中に考へることが有つたので、深くそれに思ひ沈んでゐた。をり〳〵ワルオンツイーフのことを憶出す。此人に想はれてゐることはナターリヤも承知してゐる。けれども、憶出しても永く思つてゐられない……どうも妙に心が騷ぐ。朝になると、手ばしこく衣服を着て、階下へ降りて、母に挨拶をしたが、其中に機會を見て庭園へ出て了つた……をり〳〵細雨が降つて來る癖に、日光も射して、明るくて、なか〳〵熱い。朗らかな空に烟のやうな浮雲も低くふは〳〵と漾つて、日を蔽しはせぬが、をり〳〵思掛けない時分に驟雨をどツと落して行くかと思ふと、直ぐ後から霽る。ダイヤモンドでも灑したやうに燦爛する大粒の雨が颯と澄んだ音を立てて降りそゝぐと、其雨脚のちらつく隙間に日が煌いて、今しがた風に揉まれた野草が寂然となつて渴いた喉を雨に霑す。樹々はしとゞに濡れて、力なくへた〳〵と葉を動かす。鳥は暫くも啼囀まぬ。其口豆に囀る聲がさツと降つて通る雨の涼しい音に交るのを聞くと面白いやうである。塵埃だらけの往來も度々の雨の跡を處斑に留めて烟つたやうに見える。その内に浮雲が通り過ぎて了ふと、風が何處からともなく吹いて來て、草がひら〳〵と靡いてエメラルドや黃金の玉を躍らせる。木葉は隙間勝ながらひた〳〵と密着きあつてゐる……其處ら一面に蒸れてむしむしとする……

ナターリヤが庭園へ出た時には空は大方晴れてゐた。何處ともなく爽然して肅然してゐて心持が善いので、氣もそれに隨れて和らかに優しくなつて、何とはなしに物慕はしくなる……

池に沿いて白楊の長い並木道がある。その並木道をナターリヤが行くと、思掛けなくルーヂンが降つて湧いたやうに鼻の先へ顯はれた。

ナターリヤは狼狽てる。其顔をルーヂンは覗きこんで、

「お一人ですか？」

「はア、一人ですが、一寸出て見たばかりで……最う歸りませう。」

「御一所に往きませう。」

で、竝んで歩きだす。

ルーヂンが、「貴孃は何か憂いでおいでなさるやうですな？」

「私？　私よりか貴下こそお顏色が惡うござんすよ。」

「さうかも知れません……能く私には然ういふことがある。けれども、私は可いが、貴孃がそんな顏色をしていらしツては不可ませんな。」

「何故です？　私だつて悲しいことも有りますわ。」

「貴孃方の年頃では此世を樂しく思はなければ不可。」

ナターリヤは默つて二歩三歩する。

「ルーヂンさん！」

「何です？」

「貴下、記えていらしツて……昨日のお話を……アノ、樫の木の？」

「記えてゐますとも。それが如何したのです？」

ナターリヤは竊とルーヂンの面を見て、

「何故貴下は彼樣なことを……お話の趣意がどうも解らなくなつて……」

ルーヂンは首を傾げて凝然と遠方を凝視めてゐたが、頓て例の仔細ありさうな重々しい顏色をして口を開いた。どうも心に思ふ十分一も口には出ないと云ひたさうである。

「貴孃も氣が付いていらツしやるでせうが、私は一體身の上談をするのを好まん。私の心の絃には觸らずにそツとして置くのである。私の心は……心が如何なつてゐようと、それを人に話す必要は無い。そんなことを口外するのは神を褻瀆するも同じことであるが、併し貴孃には隱立をしません、貴孃には何となく氣が置けない……だから悉皆打開けて了ひますが、私も人竝に戀の味を知つてゐます、隨分苦しんだこともある……何時如何な戀をしたかは云はでものことだが、併し私も隨分嬉しい想もしたが、また悲しい想もしました……」

少し言葉が斷絶れて、

「昨日お話した事は、幾分か私の今の身の上に適つてゐる、けれども、お話する程の事ではない。さういふ人生の一面は私の爲には既う消滅して了つてゐる。私は今後日盛に塵埃濛山の道をがた馬車に乘つて立場々々と追つて歩けばそれで可いのです……而して思ふ處へ行着いてから……さ、それも行着かれるものか、行着かれぬものか、知れたもんぢや有りません……それよりか貴孃のお身の上の話をしようぢや有りませんか。」

「それでは貴下は最う此世に望が無いと仰しやるんですか？」

「いや、然ういふ譯ではない、いろ／＼望は有ります。けれども私一個の望ではないので。活動といふことは面白いもので、夫を私は厭ひはせんが、併し私は最う面白い目を見ようとは思はない。私の希望なり妄想なり幸福なりは最う期待してゐないので、例へば戀（と云ひかけて肩をすぼめて）戀なぞといふことは最う私は斷念めてゐます。私には戀をする資格が無い。縱令んば相手の女から命に懸けて思つて呉れると云はれた處で、私には最う甘んじて其戀を受ける事は出來ない。且又女に好かれるなどといふことは若手のする事で、かう年を取つては最う駄目です。如何して他を迷はすどころか、自分の耄碌しないのが目付ものだ！」

「成程解りました。大きい望を持つていらッしやる方は御自分にかまけては成らないでせうが、さういふ立派な事が女にだつて解らないことは有りませんわ。解らないどころぢやない、自分の事ばかり思つてゐるやうな其様な人は女の身にしても厭だと思ひますわ……それだのに若い男は、貴下の仰しやる若手の方は皆手前勝手の人で、人を愛した時でさへ自分の事は忘れずに居るやうな人ばかりですものを。犠牲になるといふ心持は女にだつて解ります、解るばかりぢやない、犠牲にならうと思や、なれます。」

ナターリヤは少し頬を赧めて、眼の色を變へてゐる。ルーヂンと知己にならぬ迄は、これほどの長文句をから熱心に云つたことは恐らくあるまいと思はれる。

ルーヂンは善くも言つたと云はぬ許りに莞爾して、「私の婦人の天職についての考へは最う度々お話をしたから御存じでせうが、私はジアン・ダルクは獨力を以て佛蘭西を救つたのだと思ふ……けれども、まアそんな事は如何でも可いとして、私は貴嬢のお身の上の話がしたい。貴嬢は之からといふ所だから、貴嬢の行末の話をするのは面白くもあるし、又萬更徒言でもないでせう‥そこで、申すまでもないが、私は貴嬢の親友で、貴嬢の事となると他人の事のやうに思へないから、お尋ね申しても失禮には當るまいと思ふが、貴嬢は何ですか、これまで男に迷つたことはありませんか？」

ナターリヤは耳の附根まで赧くして何とも答へなかつた。雙方齊しく立止まつて了つた。

「お氣に障りましたか？」

「いゝえ。ですが……アノ‥餘り不意でしたから……」

「併し、仰しやるまでもない。私は貴嬢の祕密を知つてゐます。」

ナターリヤは駭然として相手の顔を見た。

「知つてゐます、誰を貴嬢は好いていらッしやるか。だが至極結構なお見立だと思ふ。彼方なら申分はない、貴嬢の價値も屹度解ります。まだ人摩れてはゐないし、それに淡泊で純潔で……屹度貴嬢はお幸福だ。」

「誰の事を仰しやッていらッしやるの？」

「耄けちや不可ません。勿論ワルインツオーフさんの事でさ。え、如何です？ それに違ひないでせう？」

ナターリヤは少し身をそむけた。ほと〳〵途方に暮れたのである。

「ワルインツオーフさんは貴嬢のことを何とも思つてゐないでせうか？ どうも然うは云はれんやうですな。貴嬢の面を諦視めて、眼で跡を追蒐けて歩く。どうしても素振に出る。それに貴嬢も萬更でもないやうだし、また御母様にも、私の見た所では、御氣に入つてゐるやうだしするから、貴嬢の御見立は……」

「ルーヂンさん！」とナターリヤが話の腰を折つたが、狼狽して手近の灌木に掴まらうとした。「此様なお話をするは何だか極りが惡くて厭ですけれども、貴君は誤解をしていらッしやいますよ。」

「誤解？……でせうか？ 私は未だお馴染は薄いが、貴嬢のお心はチヤンと洞察いてゐた積りだが……まづ貴嬢の御様子が全然變つた。それは確に變つて了つてゐるが、これは如何したもんでせう？ 六週前の貴嬢と、今の貴嬢とは全で別人だ。いや、何と仰しやッても、貴嬢のお心は平でない。」

「それは然うかも知れませんが、それでは貴君は誤解をしていらッしやいます、」と云つたが、ほと〳〵聽取りかねる程の小聲であつた。

「如何して？」

「最う此お話は廢して頂戴、」とナターリヤは足早に住居の方へ行かうとした。此時ふッと我

にもなく妙な心持になつて來たのを氣が付いて、思はず慄然としたからである。
ルーヂンは追縋つて、腕を控へて、「ナターリヤさん！　此お話はどうも是切にはならない、私に取つても大事の事だから……如何私が誤解をしてゐます？」
「最う廢して頂戴！」
「何卒、ナターリヤさん、何卒其樣なこと仰しやらずに……」
ルーヂンは蒼さめて、胸をわく〳〵さしてゐる。
「何も彼も御存じの癖に、其樣な……」と把られた手を振解いて、後をも顧ずして匆々と行く。
「僅一言言發したことが有る。」
とルーヂンが後から呼掛けた。ナターリヤは立止まつたが、併し振向きはしなかつた。
「昨日何故私が樫の木を譬に援いて彼樣なことを云つたのか、その心持が解らんと仰しやッたが、虛言を吐きたくないから、自地に云つて了ひますが、私は自分の身の上、過去の事を云つたのです。貴孃にも關係してゐます。」
「えッ！　私に？……」
「然うです。虛言を吐きたくないから何して了まふが、貴孃に關係してゐます。から云つたら、最う何の話だかお解りになりましたら……私は今日まで云ふまいと思つてゐたけれど……」
ナターリヤは不意に顏に手を加てて、駈出した。
思掛けない談話になつて來たので、堪らなくなつて駈出したのだが、ワルインツオーフが立樹に倚つて凝然と立つてゐた其側を通りながら、夫が眼に入らぬ程であつた。ワルインツオーフは十分ばかり前にやつて來たのであるが、客間へ入るとダーリヤが居たので、一言二言話をして、それから颯と脱けてナターリヤを探しに出た。戀をする者の常としてそれと蟲が知らせたから、いきなり庭へ出ると、果して二人の者に逢着したが、其時は丁度ナターリヤがルーチンに把られた手を振解く時であつた。ワルインツオーフは夫を見ると眼がくら〳〵とした。で、ナターリヤを見送つて、立樹を離れて二歩ばかり前へ出たが、何しに何處へ往かうでもないので。ルーチンも側へ來てから初て夫と氣が付いたが、互に眼を睨み合した儘、何とも云はずに辭儀をして分れて了つた。
「此儘には濟まされん、」と二人とも心中に思つた。
ワルインツオーフは庭の端へ來た。どうも悲しく、辛く、胸を壓付けられるやうで、兎もすれば氣が荒立つてむら〳〵となる。また細雨が降り出して來た。ルーヂンは部屋へ戾つたが、これも矢張落着いてはゐられない。心が顚動して了つてゐて、わさ〳〵するばかりで。尤も恍惚娘に一途に思込まれて、それを思掛けず諷かされたので見れば、こりや誰しも平氣ではゐられまい。
食事の時もどうも妙な鹽梅であつた。ナターリヤは眞蒼な面をして、辛うじて椅子に憑つてゐたが、少しも面を揚げ得なかつた。ワルインツオーフは例の通り其側に坐つて時々眼々話をしてゐた。丁度其日はピガーソフも來てゐたが、此男ばかりは善く喋舌つてゐた。種々な事を喋舌つてゐる中に、頓て人間を犬同樣尻尾の長いのと短いのと二種に分けられるといふことを論じ出して、こんなことを云つた――尻尾の短い人にも天性と心柄との二種あるが、どちらにしろ不幸なもので、何事も成就しない――自信といふものが無いから。けれども、長い房々とした尻尾を有つてゐる人は幸福もので。尻尾の短い人より不出來な薄弱い人もあらうが、兎に角自信が厚い。尻尾を擧げると皆が賞める。不思議な事には、尻尾と云へば人の身

體中で一番無用なのは誰も知つてる、尻尾が何の役に立つ？ それでゐて皆が尻尾で人物を鑑定する……

「私は、」と溜息を吐いて、「私は尻尾の短い種だ。それも可いが、自分で截つて了つたのだから厭になつちまふ。」

「と云ふのは、貴君よりズッと前にラ・ロシフーコーが、先づ自ら信ぜよ、然るときは人汝を信ぜんと云ふたことが有る、それを仰しやるのでせうが、何故尻尾を引合に出さなければならんのだか、それが私には解らん。」

とルーデンが何氣なく云ふと、ワルインツォーフは眼の色變へて聲鋭く、

「如何云つたツて可いぢや有りませんか？ 壓制壓制ツて惡く云ふけれど、才子の壓制ほど癪に障るやつはない。糞ツ！」

ワルインツォーフの此暴言に驚かされて一座寂然となつた。ルーヂンはワルインツォーフの面を視ようとしたが、其睨み詰めた眼付が無氣味であつたので、餘所を向いて苦笑をしたばかりで、一言も口を開き得なかつた。

「へ、へ！ 此奴も尻尾が短いわい！」とピガーソフは思つた。ナターリヤははら〳〵してゐた。ダーリヤは呆氣に取られて久らくワルインツォーフの面を見守めてゐたが、其内に眞魁けに口を開いて、親友であつた何とやらいふ大臣の飼犬に名犬があつた話を仕出した……

食事が濟むと間もなくワルインツォーフは歸つて了つたが、ナターリヤに挨拶する時には耐らなくなつて、

「何を貴孃は然う濟まん面をしていらツしやる？ 宛で何か義理の缺けることでも爲すツたやうですよ。そんな事が有らう筈はないけれども……」

ナターリヤは何とも合點がゆかなかつたから、唯其後影を見送るばかりのことであつた。

茶の出る前にルーヂンはナターリヤの側へ來て、新聞を覽る風をして卓の上に屈みかゝつて、小聲ながらに、

「何だか夢のやうですね？ 是非一度……一分間でも可いから相對でお話が仕たい。」Mlle. Boncourt の方を向いて、「それ、これでさ、貴女の探しておいでなすツた雜錄は。」更にナターリヤの方に屈みかゝつて、「十時頃にだら〳〵降の連翹の四阿屋まで來て下さい。待つてゐますから……」

其晩持てたはピガーソフで。ルーヂンは株を讓つて了つた。ピガーソフは大きにダーリヤを笑はした。まづ去る隣に居た地主の話をしたが、此男は三十年も細君の臂に敷かれてゐたので全然女に孵化つて了つて、或時ピガーソフが觀てゐると、淺い水溜を渡るとて、女のやうに手を後へ廻して、上衣の裾を横ッちように取つたといふ。それから他一人の地主の話に移つたが、此男は最初は「フリーメーソン」に入會し、それからが鬱憂病で、一番終ひが銀行家になりたいと云ひだした。

「如何して『フリーメーソン』なんぞに成つたんです、」とピガーソフが此男に訊いたら、「如何してと云つて、小指の爪を長く生やしてゐたんですものツ。」

けれども、何よりもダーリヤを可笑しからしたのは、ピガーソフが戀愛談を始めて、之でも女に惚れられた事がある、さる獨逸人などは、尤も盛んな女であつたが、貴君はおいしさうだとさへ云つたと話した時で。ダーリヤは大層可笑しがつたが、併し虛言ぢやない、ピガーソフも仲々隅には置けない男である。彼の云ふには、女を惚れさせるのは造作もない事で、十日も續けて、貴女の眼元や口元は千兩だ、貴女に比べれば他の女は皆お多福だと云つて聽かせると、十一日目には自分も本當に目元と口元に千

雨の價値があるやうに思つて惚れて了ふものだと云ふ。廣い世界であるからピガーソフの云ふやう　ことも有るかも知れぬ。

九時半といふころには最うルーヂンは四阿屋に來てゐた。向上げれば蒼々とした空の奥深い處に星がちら／＼と見えるが、西の空はまだ夕陽の餘光を留めて、空と地との境目も格別に判然見える。かごとがましい音を立てる樺の薄暗い梢から片割月の影がちらめいて、種々の立樹が或は枝と枝とを折重ねた透間を眼のやうに明けて怖ろしけな巨人のやうに立ちはだかつてゐるもあれば、又は眞黒に押塊まつて物凄い樣に見えるもある。木の葉はそよとも動かず、連翹やアカチヤの木梢が微温い空氣の中に突出て、何か物の音に聽入つてゐるやうな姿をしてゐる。間近には家が黒んでゐて、その細長い窓に燈火が射して赤々と見える。誠に靜かな穩かな晩ではあるが、その押鎭まつた中に何處か熱い息をむツと吹籠めたやうな處がある。

ルーヂンは腕組をして凝然と聽耳を引立つてゐた。胸では烈しく動悸を打つて、覺えず息氣を呑込んでゐる。と、其内に輕い急足の音がして、ナターリヤが四阿屋へ入つて來た。

ルーヂンは飛附くやうに立向つて兩手を把つた。手は氷のやうに冷えてゐる。顫へ聲を低めて、「ナターリヤさん！　明日を待たれんで、此處までお出でを願つたんだが……私は……今まで、今朝まで自分ながら氣が附かずにゐたが……私は貴嬢に迷ひました。」

といふと、ナターリヤの手が操られた儘で幽に慄然とした。

ルーヂンは重ねて、「私は貴嬢に迷つた。それを如何して今まで氣が附かずにゐたか、考へて見れば不思議なやうです、如何して永い間自ら欺いてゐられたかと思ふと……それで貴嬢のお心が何ひたいのだが、ナターリヤさん、貴嬢は私のやうな者でも何とか思つてゐて下さるか？」

ナターリヤは漸うじて息氣をしてゐる。

久らくしてから、「此通り來たのに、貴方はそんな……」

「いや、それぢや不可、私のやうなものでも何とか思つて下さるか、それを判然仰しヤッて下さい。」

「そりや、私だツて……アノ……お慕ひ申してゐます……」

ルーヂンは更に緊とナターリヤの手を握締めて、聊へ引寄せようとすると、ナターリヤは急に後を振向いて、

「放して頂戴。誰だか立聽をしてゐるやうですよ……何卒後生ですから、氣を附けて頂戴よ、ワルインツォーフが感附くと不可ませんから。」

「ワルインツォーフなんぞ如何でも可い！　今日彼樣な事を云つて、私は默つてゐた位だ。あゝ私は薄福人だ！　最う斯うなつちや誰が何と云つたツて離れるこつちやない！」

ナターリヤは凝然とルーヂンの眼の處を見て、小聲で、「放して頂戴よ。最う歸らないと不可ませんから。」

「最う少し……」

「最う不可ませんよ。放して頂戴よ……」

「貴嬢は私を怖がつてゐますね？」

「いゝえ、然うぢや有りませんけれども、最う本當に、歸らないと不可ませんから……」

「そんなら最う一度云つて下さい、貴嬢は本當に私を……」

「貴君は本當に幸福だと思召して？」

「世界中に私ほど幸福な者はない！　それを貴嬢は疑るなんぞツて、どうも非道い。」

ナターリヤは面を揚げた。蒼褪めた面で有つ

たが、氣高く若々としてゐて、氣もそゞろになつてゐる様子で、それが四阿屋の影の中に薄暗い月光に透かして薄々見える所は何とも云へず美しい。

「見捨てちや厭ですよ……」とナターリヤは云ふ。

「あゝ、どうも!!……」とルーヂンは聲を揚げて寄添はうとする……

突と外してナターリヤは出て行つて了つた。

ルーヂンは少しの間佇立んでゐたが、頓て徐に四阿屋を出て行く。其面を月が正面に照らした所を見ると、脣に微笑が漾つてゐた。

「難有い!」と、小聲に云つたが、それでは未だ安心がならぬやうに、また繰返して、「どうも實に難有い!」

而して反身になつて、飜れかゝる頭髪を振揚げて、浮々と手を振りながら、庭の方へ往つて了つた。

すると、四阿屋の灌木を竊と押分けて、パンダレーフスキイが面を出した。きよろ／＼四邊を視廻して、首を振つて、口を窄めて、仔細らしく、「これだもの! 何はさて措き、ダーリヤ樣のお耳に入れなければならん、」と云つてまた隠れて了つた。

八

ワルインツォーフは家へ歸つて來ても恐ろしゝ憂いで、無機嫌な面ばかりしてゐて、姉が物を云つても碌に返事もせず、匆々に部屋に閉籠つて了つたので、到頭レジネフの處へ使者が立つた。アレクサンドラは何か思案に餘る事があると、レジネフに相談することにしてゐるのである。で、レジネフは明日參上するといふ返事が來た。

ワルインツォーフは翌朝になつても未だ面白からぬ顔色をしてゐる。茶が濟むと、田圃へ出ようとしたが、罷めて、長椅子に臥轉んで、珍しく讀書を始めた。一體文學がかつたことは好かぬ質で、詩となると怖毛を振つて怖れる。「此奴あ解らない、詩のやうだ」といふのが癖で、いつもその證據にと詩人アイブラートのかういふ歌を讀んで聞かせる。

聖の身にも、世に經れば
憂事しげし、ありはてぬ、
命待つ間のそのほどは。

アレクサンドラは弟の樣子を見ては心配さうな顔をしてゐたが、併しどうしたとも云はなかつた。其内に馬車が玄關に着いたやうだから、やれ嬉しやレジネフが來たと思つたら、僕が來てルーヂンが來たと知らせる。

ワルインツォーフは書物を投出して、首を擡げて、「誰が來たと?」

「ルーヂン樣、ドミートリー・ニコライチ樣が入らッしやりました。」

ワルインツォーフは起上つて、

「お通し申せ。姉さん、とアレクサンドラの方を向いて、「貴女は少し遠慮して下さい。」

「何故!」

「何故でも可いから、遠慮して下さい、」と癇癪紛れに云ふ。

ルーヂンが入つて來た。ワルインツォーフは部屋の中程に突立つたまゝ素氣なく辭儀をしたばかりで、手は出さなかつた。

「思懸けないでせうな?」とルーヂンが先づ口を切つて、帽子を窓へ載せたが、能く視ると脣が震へてゐる。どうも極りが悪いけれど、それを紛らさうとしてゐるのである。

ワルインツォーフは「成程思懸けませんな。昨日の樣な事があつて見れば、誰か他の者が來る筈ですからな――貴君に頼まれて。」

「成程、然うでせう、」とルーヂンは椅子に腰を掛けて、「然う打開けて下されば難有い。其方が

幾ら好いか知れません。私も貴君を紳士と思ふから自身に伺つたのですが……」
「お世辭は略にならんでせうか？」
「お世辭ぢやない、伺つた主意を陳べるのです。」
「知己であつて見ればお出でになるのに不思議はないぢや有りませんか？ それに初てお出でなすツたのぢや有るまいし……」
「兎に角私は自分も紳士と思ひ、また貴君をも紳士とお見掛け申して參つたのですから、一つ篤と考へて戴きたいのだが、私は深く貴君を信ずるから……」
「一體何の事です？」とワルインツォーフが云つたが、かうなつても未だ座舖の中央に突立つてゐる、不機嫌な面をしてルーヂンを睨付けながら、折々髭の端を拈りながら。
「まづ、お聽き下さい……私は勿論辯解に來たのであるが、併し一寸かい摘んで云つて了ふ譯にはいかない。」
「何故いかんです？」
「といふものは、去る人にも關係した事だから。」
「去る人とは？」
「大抵解つてゐながら貴君も……」
「いや些とも解つてゐません。」
「どうも貴君は……」
「私は迂遠い話は嫌ひです！」
ワルインツォーフは心から怒り出したのである。
ルーヂンは眉を顰めた。
「宜しい……他に人も居ないこつたから……他の事でも有りませんが——併し多分既にお察しの事だと思ひますが、」ワルインツォーフが焦かしさうに首を縮めたから、——「ソノ何です、私はナターリヤさんを思つてゐるし、またナターリヤさんも私を思つてゐるものと見えますが……」
といふとワルインツォーフは眞蒼になつた、併し何とも云はず、窓際へ行つて此方を振向きもしない。
「勿論、若し實際然うでなかつたならば……」
とルーヂンが言葉を續けると、ワルインツォーフは狼狽てて、
「いや、それは實際でせう。私は些とも疑はない……なに、結構でさ。併し唯何の必要があつて其樣なことを態々吹聽しにお出でなすつたのか私には解らん。誰を貴君が思はうと、また誰に思はれようと、そんな事は私の知つた事ぢやないぢや有りませんか？ 私は貴君のお心持が解らん……」
ワルインツォーフは矢張窓を覗いてゐたが、聲が何となく嗄つてゐた。
ルーヂンは起上つて、
「いや、私が今日斯うやつて伺つて、兩人の中……我々の關係を全然貴君にお話し申して了はうと思つたのは、それはソノ何です、私は深く貴君を尊敬してゐるから、それで伺つたのです。私は……彼女も然うでせうが……貴君のナターリヤさんを思つておいでなさることは私も承知してゐます……それは私だつて正可己惚れてもゐないから、現在貴君といふものが有る所を私に見返らせるなんぞといふ、そんな德は私にない事も知つてゐますが、併しそんな間違つた事が若し有るとすればですな、貴君は如何思ひますか、面を被つて貴君の眼を拔いた方が可いと思ひますか？ お互に諒解して、例へば昨日のやうな事が有つた方が可いと思ひますか。」
ワルインツォーフは腕組をして胸を押へるやうにしてゐる。落着かうとしてゐるのであらう。

ルーヂンは言葉を續けて、「成程私は貴君の感情を害したでせう、それは私にも解つてゐます……けれども此處を能く考へて下さい……生中隱蔽なぞをしては貴君を輕蔑したことになる、貴君の正直で賤しい御心なぞは微塵もないのを能く承知してゐることが分らなくなる。それは他の方なら全然暴露けてお話して了ふのも變でせうが、貴君だからお話して了はなければ、反つて義理が闕ける。我輩の秘密を貴君が御存じであつて見れば、私共も寢覺が快いといつたやうな譯で……

ワルインツオーフは故意とらしく高笑をして、「いや如何も大層御信用下すつて難有い！けれども、お氣の毒ながら私は貴君の秘密を知りたくもなければ、又自分の秘密を貴君に打開けたくもない。然るに貴君は私の秘密を自分の秘密かなんぞのやうにズン／＼素破抜いてお了ひなさるが、隨分御遠慮がなさすぎますな。それも然うだが、聞いてゐれば貴君は先刻から私共々々と仰しやッたね。してみれば、ナターリヤさんも貴君が斯うやつてお出でなすつたことも、またお出でになつた趣意も御承知なんですか？」

ルーヂンは少し狼狽いた。

「いや、ナターリヤさんには何とも云はずに來ました。併し彼人にしても私に賛成しないといふことは無からうと思ひます。」

ワルインツオーフは暫く默つてゐたが、頓て、「成程、御道理です。」と云つて窓玻璃を指の端で二つ三つ叩いて、「併し最少し私を輕く視て下すッたら尚ほ善かつたですな。正直に云つて了へば、貴君に重く視られて餘り難有くない。併し、それはそれとして、一體如何しろと仰しやるんです？」

「如何しろでもない……いや、一つお願か有ります。何卒貴君も私の意を汲分けて、私を狡猾な奴だなぞと思つて下さらぬやうに願ひたい……最う私の誠心誠意を以て動いてゐることはお解りになりましたらうから、何卒親交としてお分袂申したい。今迄のやうに一つ握手させて下さらんか……」

と起上つてワルインツオーフの側へ寄らうとするを、ワルインツオーフは振返つて見て、一足後へ退却つて、

「いや、御免を蒙らう。それは成程貴君の仰しやる所は御道理でせう、いや御道理どころか、ズツと凡俗を離れてゐませう。けれども、私共は凡人です、霞を食つて生きてゐるのぢやアないから、貴君のやうな聖人の思慮へは這入れない……貴君に誠心誠意と思はれる事でも、私共から視れば誠は無遠慮な押付がましい事のやうで、貴君から視れば義理明晰で何でもない事でも、私共の身になつては何だか錯雜つてゐて更に譯が解りません……何しろ私共なら祕して置くことを貴君は暴露けて了つて、それで得意でおいでなさるんだから、解りやうがないぢやア有りませんか？　から、御氣の毒ですが、貴君を親友と思ふことも出來ないし、また貴君と握手する事も厭です……私の云ふ事は或は可卑な事かも知れないが、元來私が可卑な人間なんだから如何も仕方がない。」

ルーヂンは窓から帽子を取つて、さも不本意さうに、「では私はお暇致します。此樣なことに成らうとは思はなかつたが、併し考へて見れば、成程私の伺つたのは隨分變でせう、唯私は貴君の事だから多分、（ワルインツオーフが我慢が爲きれぬやうな身振をしたので）……併し、最う此話は廢めませう。兎に角、考へて見れば、貴君の仰しやる所は御道理で、貴君の身となつたら他に仕樣もないでせう。から、私も最うお暇致しますが、唯許いやうだが私は決して惡意があつて參つた譯ぢやない、

それだけはお含み置き下さい……又貴君は無暗な事を他言なさるやうな方でないことは能く承知してゐますが……」
といふとワルインツォーフは腹立たしさに身を慄はして、一段聲高に、
「餘り云へば失敬な事を仰しやる！ 貴君なんぞに善く思はれたいことは些ともない。何を饒舌らうと私の勝手です！」
ルーヂンは何か云はうとしたが、思反して、如何も仕樣がないといふ身振をして辭儀をして出て行つて了つたから、ワルインツォーフは長椅子に打倒れて壁を睨んでゐた。すると、
「這入つても可うござんすか？」
と入口にアレクサンドラの聲がする。
ワルインツォーフは一寸は返答が出なかつた、鬆と面を撫で廻して、少し五音の狂つた聲で、
「今は不可、最う少し待つて下さい。」
半時ばかり經つと、アレクサンドラが復たやつて來て、
「レジネフさんが來ましたよ。會ひますか？」
「會ひませう。通して下さい、」と答へる。
レジネフが這入つて來た。
「如何したんだ——加減でも惡いのか…」と長椅子の側の肱懸椅子に腰を掛ける。
ワルインツォーフは少し起上つて、肱を突張つて、凝然と眼を据ゑてレジネフの面を見守めてゐたが、頓てルーヂンとの談話を遺漏なく話して聞かせた。是迄レジネフに對つてはナターリヤを慕つてゐることを噫にも出したことはなかつたが、レジネフも氣取つてゐるとは勿論心附いてゐたのである。
ワルインツォーフが話し終るや否や、レジネフが、「いや如何も驚いた！ 彼奴は變な奴だとは思つてゐたが、是程とは思はなかつた……併し、彼奴の仕さうな事だね。」
「だつて、君、餘り非道いぢやないか！ 僕は餘程撮み出して遣らうかと思つた。一體まア如何したんだらう、高慢を竝べて行つたんだらうか、それとも臆してゐたんだらうか？ どうも來る處に事を缺いて僕の處へ……」
と云ひかけて兩手を頭に敷つて默つて了つた。
レジネフは例の落着いた調子で、「いや、然うでないよ。君は僕の云ふことを信じないけれども、それは惡意があつて來たのぢやないよ。全くだよ……自分で來て話を付ける——どうも洒々落々としてゐて男らしいぢやないか？ それに辯解を拵ふ機會を得たといふものだから、そら堪らないや……どうも彼奴のためには口は敵だね……その代り隨分能く言ふことを聽くから味方にもなるけれども。」
「如何なに威張つて這入つて來て喋舌つて行つたらう、見せたかつた！」
「然うだつたらう。何しても神聖なる義務を盡す氣なんだから、上衣の釦鈕を掛けて斉手るんだ。彼奴を無人島へ連れて行つて、如何するか、傍から見てゐたら、面白いだらうね。それでゐて口ぢや始終質樸々々と云つたもんだ！」
「一體如何いふんだらう、矢張哲理から割出したんだらうか？」
「然うさな。如何云つたもんだらうな。一方から云へば先あ哲理さね——けれども又一方から云へば然うでもないんだ。下らん事なら何でも哲理に押被せて了ふ譯にも不能からね。」
ワルインツォーフはジロリとレジネフの面を見たが、
「彼奴口と心と反對しちやゐまいか？ 君は如何思ふ？」
「いや其樣な事はあるまい。けれども、まア此樣な話は廢めにして、一ぷく喫らうぢやないか、而してアレクサンドラさんを喚ばう…アレク

サンドラさんが居ると、話をするにも默つてゐるにも都合が好い。乾度茶でも喫ませて貰へよう。」

「それも然うだ。姉さん、お這入んなさいな！」と呼ぶ。

姉が這入つて來ると、ワルインツォーフは唐突其手を把つて、ひしと接吻した。

ルーヂンは家へ歸つて來たが、何とも云へず妙な心持がする。考へて見ると、自分ながら愧かしい。輕擧にも程の有つたもので、誠に子供めいてゐる。馬鹿氣た事を爲た後で氣が附いた程辛ないものはないと誰やら云つたことがあるが、成程それは然うに違ひない。

考へれば考へる程どうも口惜しい。

一莖ツ、何だつて彼樣な家へ往つたんだ？　自分で自分の氣が知れない。恰で罵られに往つたやうなもんだ！　……」と呟いた。

家内の動靜を視ても何處か變である。主婦は、朝は勿論晝餐にも出て來ない。パンダレーフスキイの外誰も側へ往くことを許されなかつたが、そのパンダレーフスキイの話では頭痛がするといふことである。ナターリヤも Mlle. Boncourt と部屋へ閉籠つて了つたぎり殆ど姿を見せない。一寸食堂で出遭つたが、さも悲しさうな眼付をして凝然と顏を見るから、ルーヂンも堪らなくなる。ナターリヤの顏色の勝れないのを見ても、昨日別れてから何か睚な事が降つて湧いたらしく思はれる。何と取留めた事はないが、何か事ありさうで居ても起つても居られない。如何がなして紛れようと思つて、バシストフと話をした。久らく話をしたが、バシストフは相變らず熱心で活潑なものだ。唯未來にばかり望を繋けて、夢中になつて、まだ世の味を知らぬから、何事をも深く信じてゐる。夕方になると、ダーリヤが客間へ出て二時間ばかり坐つてゐた。ルーヂンに對つては愛想よくしてゐたが、然し何となく餘所々々しいところも有つて、或は冷笑をしたり、又は八の字を寄せたり、物を云ふにも鼻聲で、半分しか言はず——どうも大層取澄してゐる。近頃は何となく愛想がない。「如何したんだらう？」とルーヂンも首を捻つた、少し反らしたダーリヤの横顏を視て。

が、此不審は忽ち霽れた。夜の十二時頃部屋へ戻らうとして、薄闇い廊下を通ると、ふと誰やら手紙のやうなものを押付けるやうに手渡しにして逃出して行く。振返つて視ると、どうもナターリヤの小間使らしい。部屋へ戻つて、僕を追拂つて、さて手紙を開いて視ると、ナターリヤの手で走書にから認いてあつた。

近頃打つけながら明朝七時に樫の森のアウヂューンが池までお越下さるべく候。七時を外せば最早御目もじえ叶ふまじくと存候。品に寄ると、これが永の御別れになるやも知れず候へど、兎も角も御越の程待上まゐらせ候。何とか致さでは叶はぬことに相成り申候。かしく。

なほ〳〵若し此方より參らぬやうに候へば、最早其迄の事と思ひ捨てられたく、尤もその節は使の者を以て改めて申上ぐることもあるべく候。

ルーヂンは手紙を玩弄にしながら凝然と考へ込んでゐたが、頓て手紙を枕の下に收めて、衣服を脫いで、褥へ入つた。けれども、なか〳〵睡就かれなかつたし、また眠てもおち〳〵してもゐられなかつたから、まだ五時にならぬ内に眼を覺して了つた。

九

ナターリヤが出遭の場所に擇んだアウヂューンが池といふのは久しい前から最う池ではない

のである。三十年許り前に堤が崩れたとかで、それから乾物になつて了つたのであるか、今は唯浩然穴が開いてゐるばかりで、其昔浮萍が浮いて粘りした泥であつたのがいつか乾固まつて下な底になつてゐるのと、處々に堤の壞れが形ばかり殘つてゐるのとで、それと察しが附くだけのことである。舊と池の邊に邸が有つたが、これも疾うに取拂はれて、今は其跡に大きな松が二本形見に殘つてゐて、高い處の痩枯れた枝に始終風を受けて凄い音を立ててゐる。此松の根方で人殺が有つたとかで物凄い話もあるが、一體此邊の松は倒れゝば屹度人を殺める、現に舊と茲に在つた一本の松が嵐に吹倒されて女の子を壓殺したこともある。どうも此界隈には魔物が住んでゐるらしいといふ事で。人里には離れてゐるし、淋しくはあるし、白晝通つても森としてゐて凄い處であるが、近處に枯々になつた古い樫の森の跡があるだけに尚ほ物凄い。脊の低い灌木が一面に生茂つてゐる其間に、稍黑ずんだ大木の株が處々にヌッと突出てゐる所を觀ると、宛で惡黨の老翁が寄集つて惡事でも企んでゐるやうな趣があつて、何となく薄氣味惡くなる。一方には狹い細い徑が幽にうね/\と附いてゐる。こんな淋しい處であるから、格別の用がなければ、誰も此池の端を通る者はない。それでナターリヤも此處を出遭の場所に極めたのであるが、ダーリヤの邸からはほんの三四町しかないのである。

ルーヂンが池まで來た頃は夜が明けてから最う餘程經つて居た。今朝は天氣も冴々しない。空一面に乳色の村雲が蔽さつてゐて、それを風が烈しい音を立てて吹捲つてゐる。動もすると梢に絡まるロプーシニクと黑味がかつた苜蓿の一面に生茂つた堤の上をルーヂンは往きつ戻りつ歩いてゐたが、どうも氣がわさ/\してならぬ。今にナターリヤに逢ふのだと思ふと、妙にそれが氣になつて心配でならぬ、昨夜彼樣な手紙が來て見れば、尚更氣懸りで落着いてゐられない。屹と腕組をして四邊を見廻した所は如何にも腹が据つてゐるさうであるが、實はどうかせねばならなくなつて來た、と思ふと、内々狼狽するのである。ピガーソフが曾てルーヂンを評して彼男は侏儒のやうに頭がちだと云つたことがあるが、成程それに違ひない。併し頭ばかりでは、如何樣に出來の善いのでも、自分で自分の心さへ解らぬ勝のものであるから、如何に賢い眼から鼻へ拔けるやうなルーヂンでも、自分は一體ナターリヤを愛してゐるのだか、居ないのだか、苦んでゐるのだか、居ないのだか、又是から先も苦しめようか、苦しめまいか、それが慥には解らないのである。ルーヂンだと云つて、旺呵ロウラーイを氣取つてゐるのではない――それは慥に其樣なことはないが、それなら何故、氣の毒らしい、ナターリヤなぞを迷はしたのだか、其理由が解らない。ナターリヤに遭ふのを竊に怕れてゐるのも怪しい。けれども、情の薄いものに限つて惚れッぽいといふこともあるから、或はそんなことかも知れん。

堤の上を歩いてゐると、頓てナターリヤが露けき草を踏みしだいて、野を横に此方へと來る樣子である。

マーシャといふ小間使が息氣せき切つて跡から隨いて來たが、

「お孃さま！　お孃さま！　御足が濡れますよ」

けれども、ナターリヤは其樣な事には耳をも假さず、後をも顧ずに驀然に驅けて來る。

マーシャは仲々默らない。「何卒目附からなきやア可いが……能くまア家が出られたと思つて……奥樣がお眠覺になつたら大變だが……アア嬉しい、最う彼處だ……」と云ひつゝルーヂンが堤の上に例の恰好の好い風で畫に描いた樣に

立つてゐるのを見付けて、
「あら、もう待つていらッしやいますよ！　まア、堤の上なんぞに――池へ降りていらッしやれば可いのに。」
ナターリヤは立止まつた。
「マーシヤ、お前は此處の松の處に待つて居てお呉れ。」と云ひ棄てて、池へ降りて行く。
それと見てルーヂンは側へ來は來たが、吃驚して立止まつて了つた。ナターリヤの此樣な面付をしてゐるのをツヒぞ視たことがない。眉を寄せて、口を緊乎と結んで、眼を据ゑて儼然としてゐる。
「ルーヂンさん、」と口を開いた。「私は一寸脱けて來たので、永くは居られませんから、搔摘んで申しますが、最う母は何も彼も存じて居りますよ。一昨日御眼に懸つたのをパンダレーフスキイさんが見附けて母に申したのださうで。昨日私は母に喚ばれまして……」
「ちよッ！　失策つた！……」とルーヂンは叫んだ。「で、御母樣は何と仰しやいました？」
「別段憤つてもをりませんで、口汚なくも云ひませんでしたが、唯輕擧だと云つて小言を申しましたの。」
「唯それぎりでしたか？」
「而して貴君に娶せる位なら死んで呉れた方が可いと申しました。」
「え、そんなことを仰しやッたか」
「はア、而してまだ母の申しますには、彼方はお前を貰ふ氣なんぞは些ともお有んなさるんぢやアないけれども、唯退屈だもんだから一寸調戯つて御覽なすッたのだ。眞個に人は見懸に寄らないもんだ。尤も、然うは云ふもの私も惡かつた、お前が彼方と數々お話をするのを打棄つて措いたのが失策だつたけれど、正可お前が其樣な大膽れた事は爲まいと思つたから油斷してゐたのだ。眞個に呆れて物が云はれない……なんぞッて種々なことを申しましたよ。」
とナターリヤが一伍一什を話して聞かせたが、其聲が如何にも冴えない一本調子であつた。
「それで貴孃は何と仰しやッた？」
「私ですか？　それよりか貴君は是れから如何しようと思召して？」
「どうも情ない事になつて了つたなア！　どうも酷い！　まだ漸くお親しくなつたばかりだのに！　かうならうとは夢にも思懸けなかつた！……ぢや、何ですね、御母樣は甚く御立腹ですね？」
「はア……どうも、最う貴君のお噂を聞くのも可厭だと申して……」
「そりや殘酷い！　其樣に御立腹ぢや最う到底も望は有りませんね？」
「到底も！」
「何たる因果で此樣な思をするのだらう！　パンダレーフスキイといふ奴は可卑な奴だな！　貴孃は如何すると仰しやるけれど、私は何だか眼が眩んで、最う無茶苦茶になつて來た……洵に情ないと思ふより外、何も思つてゐられない……貴孃は如何して然う沈着いてゐられるかと思ふと、不思議のやうだ！」
「私は平氣だと思召しますか？」
ルーヂンは堤を歩き出す。それをナターリヤは凝然と視てゐる。
頓てまたルーヂンが、
「御母樣は種々なことをお問きなすつたでせうね？」
「はア、問きました……あの、私は貴君のことを眞個に慕つてるかッて。」
「で……貴孃は？」
ナターリヤは急には答へなかつたが、姑くして、「隱したッて仕樣が有りませんから、云つて了ひました。」
ルーヂンはナターリヤの手を把つて、「どうも

貴孃は潔白だ、實に大氣なものだ！ ほんに婦人の心といふものは――玉の樣だ！ けれども本當に御母樣は結婚は許らんと斷然仰しやッたのですか――

「はア、斷然申しましたの。それといふのも貴君は結婚などなさる氣遣ひはないと思込んでゐるもんですから。」

「では私は貴孃を欺したんだと思つておいでなさるんですね！ 實に情ないお見立だ！」

と云つて我と我頭髮を掻る。

「そんなことを仰しやツてては無益に時が經つて了ふばかりで……これッ切り最う御目に懸れないやうになるかも知れないのですから……私は愚癡を漏したり泣いたりしに參つたのでは有りません――御覽遊ばせば解りますが、私は泣いては居りません――私は御相談に參つたのですから。」

「相談と云ふのは……」

「貴君は男子の事だし、しますから私は何でも貴君の仰しやる通りになりますよ、死んでも仰しやることには背かない積りですよ。ですから貴君も是から如何なさる思召ですか、それを仰しやツて下さいまし。」

「如何するといふのですか？……何でせうな、屹度最う私はお宅には居られないことに成るでせうな？」

「それは然うなるかも知れませんよ。昨日も最う貴君とは御交際は出來ないと申して居りましたから……けれども、私の伺つたことは！ 貴君は何とも仰しやらないのだものを。」

「伺つたこととは？」

「これから如何なさる思召だか……」

「如何すると云つて、他に仕樣も無いぢやありませんか？ 諦めて了ふより外仕方がない。」

「諦めて了ふ？」とナターリヤが變に引張つたやうに言ふかと思ふと、脣が忽ち眞蒼になつた。

「諦めるんですな、是迄の緣だと思つて。それより外に仕樣がないぢや有りませんか。成程それは辛い、耐へられない程辛いには違ひないけれど、私は貧乏です、其處を能く考へて見て下さい……それは働かうと思へば働けんぢやないが、假令金が出來たところで、貴孃は御母樣の勘氣を受けて家出をしてゐられますか？……到底もそれは出來ん事だ。ね、然うでせう？ だから到底も貴孃とは一所にはなれない。私も今迄そればかりを樂みにしてゐたのだけれども、どうも私には然ういふ運がないものと見える。」

ナターリヤは急に顏に手を加てて泣き出した。ルーヂンは側へ寄添つて、言葉に力を込めて、

「それぢや困る、ナターリヤさん。然うお泣きなすッちゃ、私まで辛い……どうも仕方が無いんだから諦めて下さい……」

ナターリヤは顏を揚げた。見ると眼中が潤んで爛々としてゐた。

「諦めろ〳〵と仰しやるけれど、私やそんな諦めるのが厭で泣くのぢや有りません。それが辛いのぢや有りません、貴君を見損つたのが悔しいのです……どうも！……こんな事になつて了つたのに、御相談を懸ければ最初から諦めろなんぞッて……能く其樣な事が仰しやられましたね！ 貴君は口でこそ自由だの犧牲だのと仰しやるけれど、率となると……」

最う言ひきれなくなつた。

ルーヂンは大きに弱つて、「いや、どうも、然うぢやない……私は何も持論に背く譯ぢやない……けれども……」

ナターリヤは更に憤然となつて、「母が死んだつて一所にはさせないと云ふ時、私は何と云つたと思召す？ 私は其時他へ嫁く位な

ら死んで了ひますと云ひました……それに貴君は、仕方がないから諦めろなぞと仰しやッて……然うして見ると、全く母が申す通り、貴君は所存がないので、私をお弄り遊ばしたのですね？……」

「いや、決して然ういふ譯ぢやない……そんな貴孃……」

と云つても爭かな聽いてはゐない。

「そんなら何故私の深入するのを止めては下さいませんでした？　何故貴君は御自分から……それとも故障は有るまいと思召したのですか？　私や最うこんなことを口へ出して云ふのも恥かしい……何も彼も最う是迄……」

「まア少し落着いて下さい。如何したら宜いか、まア篤と考へて見んでは……」

「貴君は口癖のやうに犧牲々々と仰しやるけれど、そんなら何故私はお前を愛するが結婚することは出來ない、これから將來は如何なるか請合はれないが、一所に來るなら來いと何故仰しやッて下さいません？　然う仰しやッて下されば私は貴君のお伴をして何處へでも參ります、如何な事でも致します。口で如何な立派な事を仰しやッても、行で爲さらなければ何の役にも立ちません。貴君は一昨日ソルインツォーフに彼樣に云はれても默つていらしッたが、今も聽していらッしやるに違ひ有りません。」

ルーヂンは面色忽ち朱を灑いだ。ナターリヤが思懸けず憤然となつたのに度肝を拔かれてゐたが、最後の一句を聞くと、グッと癪に障つたのである。

「大層逆上せていらッしやる、然う逆上せていらしては貴孃は何程私に恥辱を與へたか御解りになりますまいが、落着いて考へたら、其内には少しは私の心も察しられるやうに成るでせう。私は貴孃を連れ去きたくないぢやない。夫に貴孃の仰しやるやうに、連れ去いたと云つて、私に何も迷惑は懸らんかも知れんが、私の身に取つては貴孃の御身の安泰といふことが何よりも大切です。夫を……ソノ……貴孃の何を奇貨にして、そんなことをしては私が濟まん……」

「成程、それは貴君の仰しやる通りかも知れません。私は何を云つてゐるのか、宛で夢中ですから……ですが、私は今迄貴君の仰しやることを一々本當にしてゐましたが、これからは物を仰しやるなら口頭ばかりで仰しやらずに能く考へて仰しやいまし。私は一旦貴君の事を思ふと言つたからは、其覺悟でゐました、如何な事でもする積りでゐました……けれど、今となつては最う仕樣が有りません。お蔭さまで好い修行を致しました、難有うございます。左樣なら、御機嫌よう。」

「まア、一寸待つて下さい。一寸、どうぞ。どうも貴孃は甚く輕蔑なさるけれど、私は然う貴孃に輕蔑される覺えはない。まア、貴孃も私の身になつて一つ考へて見て下さい。私は貴孃の身に就ても、私の身に就ても責任を負ふのを厭ひはしません。若し貴孃を深く愛してゐないなら、何でも無い、私は直ぐ貴孃を連れて退きます……御母樣だッて何時までも御立腹なすッてもいらッしやるまいから。けれども、自分の事を思ふよりも先づ……」

と云ひかけたが、云ひきれない。ナターリヤが直と面を目守めてゐるので、どうも極りが惡い。

ナターリヤは「貴君は惡意がないと辯解をなさるけれど、それを私は疑ひは致しません。それは貴君は何も惡意が有つて爲すッた譯ぢやないでせうが、そんな事は伺はんでも存じて居ります、私はそんな事を伺ひに參つたのぢや有りません。」

「どうも意外な事になつて來た。貴孃は……」

「然うでせう、そ、然うなんでせう！　貴君は斯う成らうとは思召さなかつたでせう――私を御見損ひなすッたでせう、いゝえ、夫なら最う御心配遊ばしますな、貴君がお厭なものを無理にも慕つて下さいとは申しませんから。」
「いや、慕はんとは云ひません！」
ナターリヤは儼となつて、
「然うで御座いますか。でも貴君のやうな慕ひ方では、慕はないのも同じ事です。私は貴君の仰しやッた事は一々記憶してゐますが、貴君は雙方が同等の人物でなければ愛は成立たんものだと仰しやッたことが有ります……成程貴君は私から見ればズッと優勝い方ですから、私には勿體ないのでせう……こんな思をするのも當然な事なんでせう。貴君はこんな下らない事に拘らつてはいらッしやられますまい。私は今日の事は一生忘れません……左様なら……」
「何處へお往でなさる？……ナターリヤさん、こんな事でお分袂申すんですか？」
と手を出したが、其言方が如何にも訴へるやうで哀れであつたので、ナターリヤも流石に心が動いたと見えて立止まつた。
「頓て、何だか私も悲しくなつて來ました……本當に此處へ來たのも、お話をしたのも、宛で夢中ですよ。少し落着きませう。かうして了つては不可ませんね、貴君も斯うはさせないと仰しやる所だから。ですけれども、私は家を出る時、最う之が見納だと思つて、泣きながら暇乞をして來たのです。夫だのに來て見れば、貴君は其様な小膽な事を仰しやッて……ですけれども、貴君は如何して私には家出をして苦勞をする事が出來ないと思召したの。「御母様が不承知……情ない事だ！」……位なほか貴君は何にも仰しやらない。正可其様な方ぢやないと思つてゐたら……えゝッ、最う云ひますまい。今更其様な事を云つたッて仕方がない。最うお分れにしませう……あゝ〳〵、貴君が若し本當に私を慕つてゐて下すッたなら、此様な思もすまいのに……。あゝ最う云ひますまい。何度云つても最う仕方がない。それぢやア左様なら！……」
ナターリヤは急に身を轉じてマーシャの居る方へ駈出して行つた。マーシャは疾くより心配をして手招きをしてゐたのである。
「私ぢやない、貴嬢が隱してゐるのです、」とルーヂンは後から呼懸けた。
けれども、最うルーヂンの云ふ事などは耳にも懸けず、匆々と野を横に家路を辿つた。首尾克く寢間まで來たが、閾を跨ぐと其儘氣を失つて、マーシャの腕へガックリ倒れかゝつた。
ルーヂンは久らく堤の上に立つてゐたが、頓て慄然と胴震をして、徐々小徑へ出て、靜にそれを辿つて行つた。大に恥しめられて……少し忌々しいやうな心持もする。肚の裏で、「まア、如何だらう？　十七であれだ！　いや、吾は見損つたのだ……豪い女だ、意力の強い事は！……成程ナターリヤの云ふのが道理だ、彼女は吾の慕つてゐたやうな事では不足たらう……慕つてゐたと？」と自問して、「では最う吾は慕つてゐないんだらうか？　えい、どうせ終局は此様な事た！　彼女から見ると吾は情ない程可卑な男だなア！」
馬車の輕く軋る音が聞えたので面を揚げて見ると、向うからレジネフが例の馬を御して來る。默つて辭儀をして分れてから、ふと何か心附いたやうな面をして横道へ入つて、急足にダーリヤの住宅へ戻つた。
レジネフはルーヂンの行く後姿を見送つてゐたが、少し考へて、馬の首を回して、ワルインツオーフの家へ戻つて來た。昨夜は其處に泊つたのである。來て見ると未だ眠てゐるので、

其儘そツとして置いて觀樓へ出て烟草を喫しながら、茶の時刻になるのを待つてゐた。

十

ワルインツオーフは十時に起きたが、レジネフが觀樓に居ると聞いて、大きに驚いて、部屋へ呼んで、
「如何したんだ？ 歸ると云つたぢやないか。」
「然うさ、歸らうとしたんだがね、途中でルーヂンに遭つたんだ。野を歩いて來たツけが、見るも氣の毒な面をしてゐるんだ それを見ると僕も不圖歸る氣になつたんだ。
「ルーヂンに遭つたから歸つて來たのかい？」
「といふが、實は、何故歸つて來たんだが、僕にも解らない。大方君の事を憶出して、復たお饒舌を仕たくなつた、とでもいふのだらうさ。けれども家へ歸るには未だ早いよ。」
ワルインツオーフは苦笑をした。
「然うさな、ルーヂンの事を思ふと、僕の事をも思はずには居られなからうな……誰ぞ居らんか？」と高く叫んで、「茶を持つて來い」
二人で茶を喫んで居た。レジネフは農談を始めて、穀倉を紙で張る新法か何かの話を仕出すと……

ワルインツオーフは不意に躍上つて、大いに腕力を出して卓を磕と撃つたから、皿も茶碗もガチヤ／＼と鳴つた。大きな聲で、
「いや、最う如何しても勘辨ならん！ 僕は彼奴に決鬪狀を付けてやる。僕を撃殺すなら撃殺すで宜しい、僕は彼奴の學者然とした額に鐵砲丸をお見舞申さなきや措かん。」
レジネフは故と落着いて、
「頼むぜ／＼！ 最う些と靜にしないかい！ お蔭でハイプを落した……如何したんだい？」
「僕は最うルーヂンと聞いたばかりでも、平氣ぢや居られん。全身の血が沸返るやうだ。—何を云ふかと思つたら愚癡い、」とパイプを拾つて、「打棄つて措くさ、彼樣な奴は……—だつて僕に恥辱を與へたのだもの、」と部屋の内を歩き出して、「何でも恥辱を與へたに相違ないさ。そりや君も然う思ふだらう。初は方角が附かなかつたから僕もツイ放心してゐたんだ——誰だつて又彼樣な事を云つて來ようとは思はんだらうぢやないか？ けれども、僕は愚弄されたと氣が附いちや其分にや濟されん……彼哲學者の畜生を鷓鴣か何ぞのやうに撃殺して遣るから待て。」
「至極好からう！ そりや姉さん何ぞは如何でも宜いさ、君は今逆上せてゐるんだから、姉さん何ぞの事を思つちや居られなからうが、併し最う一個の人の事だが、如何だい、哲學者を撃殺したら、舊のやうに成るだらうか？」
ワルインツオーフは肱懸椅子にドツサリ腰を掛けて、「そんなら何處か旅をして來る！ 此處に居ちや、葦忌々敷つて／＼如何も斯うもならん！」
「旅をする……そりや別問題だ！ そいつア好からう。そこでト、僕が好い事を思附いた。如何だい、一所にカウカサスへ往からぢやないか、それとも小露西亞へ行つて名物の餅でも喰ふか。屹度妙だぜ！」
「然うさ。だが、姉一人留守番に置いて行く譯にもいかんな。」
「姉さんも連れて行くさ。屹度面白い。姉さんの世話は僕が引受ける、決して不自由はさせない。若し御所望とあるなら、毎晩窓下で音樂を奏らせて、御者を香水臭くして、路傍に花を插しても苦しくない。僕等は僕等で、屹度生れ變つたやうになるね。そこで散々保養をして、腹が大きくなつて歸つて來りや、戀も糞も有つたもんぢやない！」
「そんな串戲を云つちや不可。」

「いや串戯ぢやないよ。君の思附は全く妙だよ。」
「いや不可！」とワルインツォーフは又聲を張揚げた。「僕は如何しても決鬪する！」
「また其樣なことを云ふ！　今日は餘程如何か仕てゐる！……」
僕が手紙を持つて入つて來た。
レジネフはそれと見て、「何處から來たんだ？」
「ルーヂンさまからの御手紙で。ダーリヤさまの家の僕が持つて參りました。」
「ルーヂンの手紙　誰の處へ……」
「旦那樣の處へ參つたので御座ります。」
「え、己の處へ……此處へ持つて來い。」
ワルインツォーフは引摑むやうに手紙を取つて、狼狽てて封を押切つて讀出した。其面をレジネフが凝然と視てゐると、驚いたらしい中にも何處にか嬉しさうな所も見えて、頓て手を措いたから、
「如何したんだい？」
「まア、讀んで見給へ、」と聲低に云つて手紙を渡した。
レジネフが讀んでみると手紙は此樣な文面であつた。

「一拜啓。小生事本日ダーリヤ氏の家を辭し去り申候。最早再び歸り來るまじと存候。昨日申上たる事も有之候へば、或は不思議なる事に思召さんか。何故に斯る事を貴兄にお知らせ申すにか我にも胡論に候へど、唯何となくお知らせ申さねばならぬやう被存候も不思議に候。貴兄は小生とは意氣相合はず、剰へ小生をば惡むべき人物のやう思召され候ことも善く承知致居候へど、御目がねの違へるや否やは程を經なば自ら瞭然たるべきことゆゑ、唯今は強て辯解不致候。且つ小生の見る所を以てすれば、先入主となりたる人に對し、その先入の見の謬れる由を論ずるは無益の業にて、男兒の宜しく爲すべき事にあらず。小生の意を解する者は小生を咎めざるべく、小生の意を解せんことを願はざる者、若くは解すること能はざる者などが如何樣に誹謗致候とも小生の少しも疚しとする所にあらず候。小生は貴兄を見謬り申候。固より只今とても小生の眼中に於て貴兄は鄙陋の念とては半點も懷き給はざる立派なる御方に相違なけれど、最初は今少し立上りたる方かと存候ひき。併しながら斯る過を仕出でたるも全く小生に人を見るの明なき故に候へば、今更何とも致方無之、且つかゝる事は今に始りたるにてもなく、又此度に終りたるにてもあるまじく候。かやうに急に出立致すやうに相成候については謹んで貴兄の清福を祈り候　こは眞心より申す所に候へば、疑ひ給ふべからず。貴兄は是より定めて幸福ならんと存候。かくて時をだに經ば小生を見給ふ眼にも自ら變化あらんか。今後再會は期し難く候へども永く高風を欽慕して敢て忘るまじく候。敬具。

ドミートリイ・ルーヂン

二白。恩借の二百ルーブルは歸郷次第返辨可致候。又此書面を差上候事はダーリヤ氏には内々に願候。
尚又かやうの仕誼に相成候からは先日參堂致候ことをナターリヤどのに御吹聽被下間敷候。これは最後の願に候へど、等閑ならぬ仔細有之候事と御了知可被下候。」

レジネフが手紙を讀了るや否や、ワルイン

ツォーフが、
「君は何と思ふ？」
「何と思ふと云つて、東洋風に呀と云つて、口に手を加てる外仕樣があるもんか。發つて行くならそれ迄の事だ……おさらば／＼だ。けれども、此處が妙だね、何でも此手紙を書くのを義務の樣に思つてゐるんだ、君の處へ來たのも矢張それなんだ……彼連中は歩行くと義務に蹴躓くんで、それ義務、やれ義務なんだ。」
となほ／＼書を示しながら苦笑をする。
ワルインツォーフが、
「それも然うだが、此文句は如何だらう！　何だか僕を見謬つた。僕は最う少し立ちあがつた人物かと思つたと書いてある……何をべらぼうな、詩よりも下らない！」
レジネフは何とも云はずに眼に微笑を湛へてゐる。
ワルインツォーフは起上つて、
「これからダーリヤの家へ往つて來よう。何が何だか仔細が解りやアしない……」
「まア、待ち給へ。今往つちや、彼奴も逃げる暇が有るまい。彼樣な奴と衝突したつて詰らんやアね。此土地に居なきや、言草はないさ。それよりか、まア些と横になつて休み給へ。昨夜は夜中臥返りばかり打つて居たぢやないか？　最う之からは此方のもんだ……」
「何故此方のもんだ？」
「まアさ、然う僕に思はれるのさ。まア、眠たまへ。僕は姉さんの處へ行つて、お饒舌を仕に來る。」
「些とも眠くない。眠たつて詰らん……それよりか田圃でも巡つて來よう。」
と外套の裾を引張る。
「それも宜からう。そんなら、往つて一巡り巡つて來給へ。」
レジネフはアレクサンドラを尋ねて見ると、客間に居たが、相變らず愛想が善い。アレクサンドラはいつもレジネフが來ると喜ぶ。けれども今日は少し面色が惡いが、これは昨日ルーヂンが來たので、それが如何も心配でならぬからである。
「今まで彼方でしたか？　如何な樣子です、今日は？」
「いや、心配な事は有りません。今、田圃巡りに出懸けました。」
アレクサンドラは默つて了つたが、久くすると、おろし立の手巾の緣を熟々視ながら、「彼方で何か話が有つたでせうが、一體何の用で……」
「ルーヂンが來た用事ですか！　それなら、なに、暇乞に來たんです。」
アレクサンドラは面を振揚げて、
「え――暇乞に？」
「然うです。貴女は未だ御存じないのか？　最う故郷へ歸るんださうです。」
「歸るつて？」
「最う二度と來んでせう。と、まア、自分では云つてます。」
「まア、如何もをかしいぢや有りませんか？　彼樣に大事にされて居たのに……」
「然う云や成程をかしいかも知れんが、併し實際の話です。何か事が起つたんでせう。餘り行り過ぎたもんだから、襤褸が出たんでせう。」
「まア、如何も！　私にや何だか些とも譯が解りませんね……欺ぐんぢや有りませんか？」
「いや、全くです。全く立つと云つて、皆の處へ、しかも手紙で知らせて來たさうです。尤も彼男が居なくなつて都合の好い事も有るが、お蔭で折角ワルインツォーフと相談しかけた素晴しい企畫が如何やらフイになつて了つた。」
「如何な、企畫と云つて？」
「斯ういふ話さ。私がワルインツォーフにね、

保養のために、貴女をもお誘ひ申して、旅行しないかと云つて勸めてゐたんです。貴女のお世話は私が引受けることにして……」

「それは結構！　さぞ善くお世話をして下さるでせう。大方餓死でも爲せられるのが結局さね？」

「貴女は私を善く知らんから、其樣なことを仰しやるんだ。屹度私を極の頓間で木を伐つて放出したやうな人間だと思つてるんでせうが、斯う見えても私は砂糖のやうに溶けろと云へば、溶けもするし、又何時までも膝を突いてろと云へば、隨分突いてもゐるが、それは解らんでせう？」

「一度然ういふ所を拜見したいもんですね。」

レジネフはふと起上つて、

「そんなら私と結婚なさい、悉皆お眼に懸けるから。」

アレクサンドラは耳の附根まで赧くして、

「何を仰しやるんですよ！」

と極り惡さうな風でゐる。

「これは疾うから云はう〳〵と思つてゐた事だが、到頭云つて了つた。併し如何しても御心次第です。側に居ちや氣詰りだらうから、私は戸外へ出ます。貴女に思召がなければ……其儘歸りますが、若し思召が有るなら、呼びに遣して下さい。然うすりや然うと合點するから……」

アレクサンドラは抑留めようとしたが、レジネフは敏捷く逃出して、帽子も冠らずに園の方へ往き、潛戸に倚懸つて何處ともなく眺めてゐると、背後の方から小間使の聲がして、

「レジネフの旦那樣！　奥樣が一寸貴君に入らしツて下さいと仰しやッて。」

レジネフは振返りざまに小間使の首に絡着いて、額に接吻して、アレクサンドラの處へ行つた。や、小間使の驚くまいことか！

十一

ルーヂンはレジネフに別れてから、程なく家へ歸ると其儘部屋に閉籠つてワルインツォーフとナターリヤとへ贈る二通の手紙を書いた（ワルインツォーフへの手紙は讀者が御存じの通りだ）。ナターリヤへの手紙は消すやら改すやら久しく掛つて下書を書いて、之を薄い書翰紙に丁寧に寫改して、成るたけ小さく折つて隱袋へ入れた。で、鬱ぎ切つた顏をして部屋の中を幾回となく往つたり來たりしてゐたが、頓て窓際の長椅子に腰を掛けて頬杖を杖くと、睫毛が泪に潤んで來た……軈て起上つて、僕を喚んで、ダーリヤに逢ひたいから都合を聞いて來いと命ける。

程なく僕が歸つて來て、差支ないと云ふから出懸けた。

ダーリヤは書齋でルーヂンに會つた。二箇月前も此書齋で會つたのであるが、今日は一人ではなく、パンダレーフスキイが相變らず瀟洒した見綺麗な風をして愼ましげに坐つてゐる。

ダーリヤは愛想好くルーヂンを迎へ、ルーヂンも亦愛想好くダーリヤに會釋した。が、雙方の莞爾した面を見ると、左程に世馴れぬ者の眼にさへ、表面は至極美しく見えても底意に變な所が有ると直ぐ感付く。ダーリヤの腹を立ててゐることはルーヂンも承知してゐるし、ダーリヤもまたルーヂンは最う何も彼も聞いて知つてゐるだらうと思つてゐる。

ダーリヤはパンダレーフスキイのお訴訟を聞いて大に立腹した。から踏付にされては世間に顏出がならぬといふ街氣が先づむく〳〵と頭を擡げる。どうも貧乏人で、官位もない癖に、それは傑いかも知れぬが、まだ向名が聞えてもしない癖に、身の程をも顧みず、このダーリヤ・ミハイロウナ・ラスンスカヤの娘たる者を誘出して逢引するとは怪しからん!!　と先アい

ふ氣になる――」

で、此樣なことを云つた。「それはルーヂンはなか／＼如才がない俊才だらうさ。だが、それだからと云つて此樣なことをされちや困るぢやなからうか。俊才だからと云つて婿にしたら、皆婿に仕なきやならないわね。」

パンダレーフスキイが引取つて、「手前は現在見たことで御座りまするが、どうも僞らしく思はれて成りません。分際を知らんにも程の有つたもので、いやはや驚き入つた事で御座りまする。」

で、ダーリヤは甚い立腹、それが爲にナターリヤも大きに痛付けられた。

ダーリヤはルーヂンに座を勸めた。ルーヂンも坐りは坐つたが、從來の樣に主人顏も出來ず、極懇意の人といふ程にも行かなかつた。如何にもお客樣で、しかも餘り親しくないお客樣だ。瞬く間に斯う成つて了つたので、丁度水が俄に凍つてコチ／＼した氷になつて了つたやうな鹽梅である。

ルーヂンは口を開いて、

「えゝ、永々御厄介になりましたが、先刻國元から手紙が來まして、今日中に出立致さなければならんやうな都合になりましたから、それで一寸御禮に……」

ダーリヤは凝然とルーヂンの面を目守めて心の中に、「先を越したよ。大方感附いたんだらう。厭な思ひを仕ないで濟んで、まア好かつた。それだから怜悧者は繁昌するのさ！」と思つたが、口へ出しては、

「おや、まアいけませんねえ！　だが、どうも仕樣がない。此冬復マスクワでお目に懸れるでせうね？　私も其内に參る積りですが……」

「マスクワへは參られるか如何だか知れませんが、若し參られたら是非伺ひませう。」

パンダレーフスキイはパンダレーフスキイで、「如何だい、ツイ昨日まで此家の主人のやうな面をして居た者が、今日は此爲體だ！」と肚の裏では思つたが、口へ出しては、例の調子で、

「では何で御座りますか、お國元に何か面白からぬ事でも起りましたので？」

「然うです、」とルーヂンは素氣なく答へる。

「不作ででも御座りまするので？」

「いや……然うぢやないです……」と云ひつゝ、改めてダーリヤに向つて、「どうも永々御厄介になりました。御厚情は忘れは措きません。」

「私こそお相識になりまして大層面白い思ひを致しましたから、たか／＼忘れる事では御座いません。が……何日お立ち遊ばします？」

「今日晝過にしようと思ひます。」

「まア急な事で御座いますね……では折角道中お氣をお附け遊ばして……尤も餘りお手間が取れませんやうでしたら、またお出で下さいまし、それまでは未だ此處に居る積りで御座いますから。」

「難有うございますが、どうも然ういふ譯に參らんかも知れません、」と起上つて、更に言葉を改めて、「それから甚だ申しかねますが、恩借の金子は唯今直にと申す譯にもなりませんから、いづれ國に歸りましたら早速……」

と云ひ終らぬ内に、

「あら、まア、何で御座いますよ、ルーヂンさん！　そんな御心配をたすッちや不可ませんよ。だが、最う何時だらうね？」

と問はれて、パンダレーフスキイは胴衣の隱袋からエナメル附の金時計を出して、桃色の頰が堅い白の襟を壓すのを厭ふやうにして徐と眺めて、

「二時三十三分で御座りまする。」

「では最う着改へなければならない。夫では、ルーヂンさん、復た後刻に……」

ルーヂンは起上つた。二人の咄工合はまこ

とに妙であつた。俳優が臺詞を復習ふのも、外交官が會議に臨んで準備の文句を竝べるのも丁度此樣な暗循である。

起上つて座舖を出たが、此時初て交際社會に立交る人が不用になつた者を棄てるのには、打棄る程の手數もせず、ほんの取遺すと同樣で、宛で夜會過ぎての手袋、菓子の包紙、外れた富札と同樣な待遇をするといふ事を悟つた。

匆々に旅支度をして、むづ〳〵しながら出立の時刻の來るのを待つて居ると、出立と聞いて家内の者は皆驚いて、婢僕までが不審の眼を注ぐ。パシストフは頭から別れを惜んでかゝり、ナターリヤは人目をも憚らず公然に逃廻つて、成るべく眼を視合さぬやうに構へてゐたが、それでもルーヂンは辛うじて手紙だけは渡した。食事の時にダーリヤは重ねてマスクワへ上る迄には最一度會ひたいと云つたけれど、ルーヂンは何とも返答をしなかつた。パンダレーフスキイは人よりも餘計にルーヂンに物を云懸けたが、ルーヂンは此男の得意らしい紅顏を見ると、飛蒐つて打倒したく思ふことも幾度か有つた。Mlle. Boncourt は何か擽つたいやうな可異な眼付でルーヂンの面をじろ〳〵視てゐた。年功を積んだ怜悧な探犬は如何かすると此樣な眼付をすることがある。眼が物を云つたら、「そら見たことか！」とでもいひさうである。

頓て四時が鳴る。馬車の支度も出來る。そこで皆の者に匆々に告別をしたが、誠に厭な心持がする。之では宛で逐出されるやうなもので、かうして此家を去らうとは思はなかつた。强ひて笑顏を作つて右左に會釋をする時、心の中で、「考へて見れば果敢ないものだなア！ 先を急いで來て見れば、こんな事だ！ 併し世の中の事は皆此樣なものか、」と思つた。見納と思つてナターリヤの面を視ると、恨めしいといふ中にも何處か名殘惜しさうな所も有る。悲しい眼付で凝然と視てゐたので、ルーヂンも流石に胸が一杯になつた……

足疾に玄關を降りて、身を躍らして馬車へ入つて了つた、パシストフはステーションまで見送りたいと云つて合乗をした。

馬車が邸内からヨウカを兩側に植ゑた廣い往來へ出ると、ルーヂンが、

「ねえ、パシストフさん！ ドン・キホーテが公爵夫人の邸を出る時、家來のサンチョーに向つて、『自由といふものは天から人に與へられた物の中で一番貴いものだ。人のお蔭を蒙らんでも飯の喰へるものは幸福人だ！』と言つたことがあるが、私も今丁度同じやうな感がある……貴下も何時か一度かういふ目に逢つて御覽なさい。そりやア屹度發明する。」

パシストフは凝とルーヂンの手を握締めた。正直な男であるから同情に打たれて頻りに胸が波立つ。ステーションへ着くまでルーヂンは人の人たる所以、眞の自由の貴き所以を熱心に說き立てて、隨分高尙なことも道理なことも云つた。愈分袂といふときパシストフは耐りかねて、ルーヂンの首にしがみ付いて泣出したので、ルーヂンも泣きは泣いたが、併しパシストフに分れるのが辛くて泣いたのではない。彼の泪は利己の涙であつた。

ナターリヤは部屋へ入つて、ルーヂンの手紙を讀んでみると、其文に、

「一筆書殘し申候。さて私事他に詮方なく候まゝ、明らさまに立退くべきやう御沙汰なきうち、我より身を引き申候、私だにをらず相成候はゞ、何事も丸く納るべく、また私ごときもの身を引き候とも、誰一人惜むものもあるまじと存候。なほ留りをり候へばとて、何とか相成り申すべき。任他かゝる文をま

ゐらせ候は、今お別れ申候ときは、再び御目に懸ることもあるまじく候へば、身に覺えなき惡名を被りたるまゝにてあらむこと、如何にも殘念なるからに候。固より我罪を言釋かむとおもふにてもなく、また我より外に誰をも怨むとにはなく候へど、我筆の廻らむほどは、事の情を聞え奉らまほしう候。誠に此頃の事どもは、あわたゞしう思ひ設けざる事のみにて、まだしみ〴〵物打聞えまゐらすることもなかりしを……

「今朝しも御目に懸りたるは身に取りて好き修行となり申候。こは一生忘るまじく候。仰せられ候ところ一々御尤にて、成程私は御許様を知らず、たゞ知りたる様に思ひあやまり候のみ。これまでさま〴〵なる人と交り、あまたの婦人に親しみたれど、未だ御許様の如く心ざまの清く正しき人に遭ひ申さず、人といふものは皆淺墓なるもののやうに思ひ貶しめ候から、遂に御許様をも見損ぜしにて候。はじめて御目に懸りし時より、私の御許様に心ありたるは御心附の事なるべきか。されど毎度御咄を致しながら、御心をえ知らず、或は知らむともせざりしやも知れず。さるを身に代へて慕ひまゐらせたりなど思へるぞ、かへす〴〵も淺墓なりし。さるからに今此身になりて此思を致し候にこそ。

「前かたさる婦人に懸想せしこと有之候ひしが、これは必ずしも片思にてもあらざりしやうに候、其時の我思は誠に込入りたるものにて、尋常の戀にはあらざりしやうなれど、懸想せられし人も同じやうなる心なりしゆゑ、まづは似つこらしとも申すべきにや。其折は遂に事の情をえ悟らずして已みにしが、其後ふつに打絶え候ても、なほ戀人の人となりをえ知らず、稍經てやう〳〵知り得たれど、其時は既に晩かりし……されど遂事は追ふべからずとかや。苦樂を共にせむとおもはゞ、共にするを得べきやうにして、遂に意に任せぬ身なれば、是非なき事に候。かやうに眞に人を慕ひ得るや否や覺束なき身に候へば、何として眞の情愛を傾け、妄想ならで眞實に御許様を慕ひまゐらせたりなど口廣く申すことを得べきや。

「私は天分薄きものにはあるまじく候。これは私も善く心得をり候ところなるを、憚づまじきことを憚ぢて謙退ぶらばをかしかるべく、殊にかゝ口惜しく恥かゞやかしき身の上となりたる私には一倍をかしかるべしと存候へば、包まず申上候。されど私は力相應の事は何もえせず、何一つ仕出でたる事もなくて果つべきものに候。天分ありとも何の役にも立たず、種を蒔きたりとて何も生ゆまじく候。私には……何が不足せしともえ辨へず候へど……何か人の心を動すべきもの、取分けて婦人の思を惹くべきものの不足しをるかと存ぜられ候。唯人の智のみを領するは果敢なく無益しきことにて候。熱心に身をも心をも打込めむと存候へど、打込むこと叶はず、おもへば怪しくをかしき運命に候かな。多分は心にもなき果敢なき戯れのために命を捨つることとなるべきか。あはれ、三十五歳にもなりて、何ほ何をか爲さむとおもふよ。をかしき事に候はずや。

「かゝることは未だ誰にも打開けたることなく候。これ懺悔ぞと御聞取下さるべ

く候。
「されど私の身の上は多く言ふを須ゐず、これより御許様の御身の上につき、存寄候ところを少しく申上ぐべきか。かゝることの外に何の役にも立たぬ身こそつらく候へ……さて御許様はまだうら若き御身のおひさきも永くおはしませど、常に情に聴きて智に聴き給ふべからず。人の境涯は狭く単純なるほど宜しく、假令目覺しき事はなくとも、萬事自然に推移するが肝腎に候。若き時より若き者は幸なりとこそ承り候へ……されどかかる誡は御許様よりは實は私に適切なるやも知れず候。
「有様を申候へば、私は今甚だ心苦しく候。固より母君の私を見給ふことは甚だ重しとはかけても思ひ候はざりしが、兎も角も假の宿を見附けたりと思ひをり候ひしに、復たも江湖にさすらふ身の上と成果て申候。御許様に差向ひ、四表八表の御物語をいたし、賢しげに油断なき御目元を見まゐらするうれしさに、又いつの世にかは逢ひ申すべき。何事も身の愚かなるより起り候など、何となく運命のために弄ばれたらむやうなる心地もいたし候。一週前までは露慕ひまゐらせしとは思はざりしを、一昨夜庭にて御許様の……されど其時仰せられしことを今此に繰返す要なかるべくや。御許様にはあのやうに罵られ、此世にかゝる望もなくなりて、恥を含みて今日出立いたし候へど、私の如何ばかり御許様に罪負へるかは、まだ測り知り給はざるべし。私は愚かしきまで打開けたる質にて、しかも口數さへ多く候へば……されど今かゝる諫言を申したればとて、何の甲斐か候べき。兎に角今お別れ申候はゞ、最早再び御目に懸ることもあるまじと存候。」
（此處でワルインツォーフを音問れた事を書かうかと思つたが、思返して消して了つた。それでワルインツォーフへの手紙には猶又を書添へたのである。）
「私は今便なき孤立の身と相成申候。これより果して何事をか致すべき？ 身に相應せる事業に就けとて、今朝は甚く御嘲りなされ候へど、悲しいかな、私は生來の懶惰に克つこと能はず、所謂事業に精神を打ち込むこと出來ず候へば、矢張これまで通り何處やら物足らぬ所あるものにて一生を終るべしと存候……如何なる故障に遭へば、忽ち氣沮みて志を挫くこと、今度の事之を證して餘りあるべく候。若し將來の事業のために戀を捨てたるにてもあれば、稍自ら慰むる所も候はんが、私は單身に堪へらむとする責任を懼れたるにて候。誠に私の如きは御許様の偶にあらず、家出をおさせ申すほどの價値私には無之候。されど又思返せば、かやうの事も反つて身のためにならむも知れず、私も苦しき思を經來りたれば、心の垢自ら去りて意氣復た壯んになることも可有之か。
「御身の上に幸あらむことを祈り候、さらば健かにあらせ給へ。をりふしは私がことをも思し出し下さるべく候。なほ私の身の成果は風の便に聞知り給ふこともおはしまさむ。かしこ
ナターリヤはルーヂンの手紙を膝に措いて、潸然と床を目守めたまゝ、久くは身動きもせずに居た。今朝がたルーヂンに別れる時、思はず聲を揚げて、貴君は私の事を思つては下さら

ないと云つたが、實に其通りで、此手紙が何よりの證據である。からとて少しも心を慰める足にはならない。身動もせず坐つてゐたが、何やら浪のやうなものが眞黑になつて音をも立てずに頭の上へ蔽さつて來たやうで、慄然と身體も冷固まつて、底の方へ沈んで行くやうな氣がする。誰にしろ初て失望した時には辛いものではあるが、輕擧もせず、過大にも云はず、ちやんと眼を開いてゐて、深く思込んだ者の身になつては、殆ど耐へられぬ程辛いものである。

ナターリヤは幼い時の事を憶出したが、子供の時には夕方散歩に出ると、暗い方に背いて、天の一方が夕照に赤々と見えるその方へその方へと行きたがつたものである。それだのに今は光明を背後にして闇へ向つて行くやうな氣がする……

ナターリヤは泪ぐんだ。泪を落せば常も樂になるとは行かぬ。胸が一杯になつて耐へかねて漏した泪は、初は苦くても次第に快く樂に流出て、聲をも立てずに胸を責めてゐた悲みが之で外へ泄れて了ふから、幾分か心をも慰め氣をも安める便となるが、悲みが盤石でも載せたやうに胸を壓付けて一滴々々と絞出した勢の無い冷い泪は、漏れても氣も休まらなければ樂にもならぬ。此様な泪の出るのは誠に餘儀ない譯からで、之を漏した者でなければ、まだ眞の薄命者とは謂へない。ナターリヤは今日といふ今日初て此泪の味を知つたのである。

二時ばかり經つてから、漸く氣を取直して、起上つて、泪を拭いたが、頓て蠟燭に火を點じて、それに翳してルーヂンの手紙を燒いて、燃殻は窓から捨てて了つた。それから率然プーシキンの詩集を開けて、初に目に觸れた句を讀んでみると、

こひせし人のあはれとは
いつまで草のいつまでも
かへらぬむかし歎たれて
浪たちさわぐこゝろには
はなも紅葉もうつらめや
只ひとすぢにくやしくて
おつる泪は干さじぞと

とあつた。ナターリヤはいつもからして占ふので、暫く佇立んでゐたが、頓て鏡を覗いて冷かに微笑して、何か頷いて客間へ下りて行つた。

ダーリヤはナターリヤの面を視ると、直ぐ居間へ連れて行つて、自分の側へ坐らせて、莞爾々々しながら頬を輕く突きなどしたが、それでも何か珍らしさうに凝然とナターリヤの眼を目守めた。實は生れて初て自分は未だ娘の心は洞察いてはゐないやうだと思つたので、内々不思議に堪へぬのである。ナターリヤがルーヂンと媾曳したことをハンダレーフスキイに聞いた時には、立腹したといふよりは、寧ろ如何して彼様な怜悧な娘が其様な事をする氣になつたらうと吃驚したのであつたが、ナターリヤを呼寄せて、小言を言つて見ると――それが又歐羅巴の婦人らしくもなく、隨分口汚なく喚いたのであるが――言つて見ると、案外斷然した挨拶をして、眼付を見ても、所爲を見ても、決然と覺悟をしてゐるやうなので、少し方角が違つて、薄氣味惡くなつた程であつた。

ルーヂンが突然に發つたので、理由は判然しないが、兎に角眼の上の瘤が除れた様な心持がするけれど、定めて泣きもされよう、ヒステリーでも起して氣絶もされようと思つてゐたのが、見た所まづナターリヤは平氣でゐるので、復た方角が附かなくなつて來た

「どうだね、如何な心持がするね？」

と云ふと、ナターリヤは母の面を凝然と視詰めた。

「發つて行つたのぢやないか……彼人がさ。何

故斯う狼狽へて發つたのだか、お前は知つておいでか？」

　ナターリヤは低い聲で、

「母樣！　貴女さへ彼人の事を何とも仰しやツて下さらなければ、私は最う屹度噂もしません。」

「然うして見ると、お前は濟まない事をしたとお思ひのかえ？」

　ナターリヤは俯向いて、

「最う屹度噂もしません。」

と同じことを二度云つた。

　ダーリヤは莞爾して、

「これからは些と氣をお附けなさいよ。私は今迄通りお前さんを信用するから。一昨日はまア如何だつたらう、お前は……だが、最う止さうね。濟んだ事は濟んだ事で水に流して了はうね。ね？　此樣なら矢張舊のお前だけれど、あれぢやお前、誰だつて呆れて了はアね。まア、接吻でも爲さいな！……」

　ナターリヤは母の手を執つて脣に接ける、ダーリヤも娘の屈めた頭に接吻した。

「之からは一々私の云ふ通りにお成りよ。決してラスンスカヤの娘といふことを忘れてはなりませんよ。然うすればお前も幸福でゐられるのだから。さア、最う用は濟んだから、彼方へお出で。」

　ナターリヤは何とも云はずに出て行く。其後姿を見送つて、ダーリヤは肚の裏で、「矢張私に似てゐるんだよ。屹度之からも苦勞するだらう、」と思つたが、それから昔の事を憶出して凝然と考込んだ、尤もズッと昔の事であるが……

　久くして Mlle. Boncourt を呼寄せて、戸を締切つたまゝ、二人で長い間話をしてゐたが、頓て之をも下げて、ハンダレーフスキイを呼寄せた。どうもルーヂンの發つた眞の理由を知りたくて〱ならぬのである。けれども、パンダレーフスキイの事であるから主人の氣の落着くやうに話して聞かせた。こんな事はお手の物である。

　その翌日ワルインツォーフが姉と連立つて食事に招ばれて來た。ダーリヤはワルインツォーフが來ると常でも愛想善くしてゐたが、此日は殊にチヤホヤ款待した。ナターリヤは何とも云はれず辛かつたが、併しワルインツォーフが極謹ましげにしてゐて、遠慮勝に話をして呉れたから、心の中では内々嬉しく思つてゐた。

　靜かで隨分淋しかつた其日も暮れて、軈てお閨きとなる時、皆心の中で、舊の轍に陷つて來たなと思つたが、この舊の轍に陷るといふことは大に意味のあることで、ツイ尋常の事ではないのである。

　成程誰も皆舊の轍に陷つて來たが……ナターリヤばかりは然うは行かぬ。一人になつてから辛うじて臥臺まで來て、ガッカリして慾も德も無くなつて、寧然枕に面を埋めて了つた。最う生きてゐるのが辛くて悲しくて厭で〱ならぬ。我ながら我身に愛想が盡きる。慕つても歎いても皆身の恥になるのだから、寧そ死んだが勝かとさへ思つた……何ほ其後も久くの間は晝も辛く、夜も眼が合はず、悶え苦んでゐたが、何してもう若い身の、これからが花といふ所であるから、早かれ晩かれ創痍も癒える道理。人といふものは如何な憂い目を見ても、其日の中に、高々翌日になれば——少し艶の無い言方だが——最う飯を食ふ。それ之が氣の安まる發端といふものである。

　ナターリヤは甚く苦んだ、此樣な思をするのは生れて初てで……けれども初ての苦みは初ての戀のやうに、善くしたもので、二度とはせぬものである。

十二

二年許り經つた。五月初旬の事であつたが、觀樓へ出て、アレクサンドラ・パーウロウナ、其頃は最うリーピナではなくて、レジネフが坐つてゐた。レジネフの處へ嫁てから最う一年餘にもなるのである。相變らず美しいが、此頃は少し肥つたやうで。觀樓には階が附いてゐて、それを下りると庭になつてゐる。乳母が小さな白い外套を被つて、白い房の附いた帽子を戴つた、頰の紅い赤兒を抱いて、觀樓の前を彼方此方と步いてゐたが、アレクサンドラはともすれば其兒の方を見遣つてゐた。赤兒は泣きもせずに、眞面目くさつて自分の指を吸ひながら、おツとりと四邊を視廻してゐた。どうしてもレジネフの息子に違ひない。

アレクサンドラの側には、例のピガーソフが坐つてゐた。此前から見ると、眼立つ程白髮も殖えて、背が曲つて、窶れてゐたが、前齒が一本脫けて了つたので、物を云ふと聲が漏れる。それだけに又言語が餘計毒々しく聞える。齡を取つても癇癪は直らない。其代り鋭い處も鈍つて來て、前よりは餘計一つ話を反覆してするやうになつた。レジネフは留守であるが、茶の時刻迄には歸らうと、皆心待に待つてゐるのである。最う日沒で、日の入つた方には薄く黃ろく檸檬色をした線が棚引いて、其反對の方角には、上の方に紅い連翹色の線と下の方に碧色の線と二線見える。浮雲は中空に消えて了つた。どうやら天氣が續きさうな空模樣である。

突然にピガーソフが笑出したので、アレクサンドラが、

「何が可笑しいのです？」

「なに、何でもないが……昨日、聞いてゐると、さる小作が女房に——甚く饒舌り立つてゐたもんだから——そんなに頤を叩くないと云つた。なんと面白いぢやがアせんか？　頤を叩くない！　本當に然うで、女の饒舌るのは頤を叩くだけの事でさ、尤も貴女方の事を謂ふのではないが……それにつけても昔の人は旨い言を云つたものさ。ソレ美人が額の處に星の飾を附けて窓際に坐つてゐたが、口は少しも利かなかつたといふ話が有るでせう。眞に彼話の通りでさ。其證據には、一昨日族長の細君が私に向つて、貴君の傾向が氣に喰はんと云つて、ポンとピストルを擊放した。傾向が可笑しいぢやがアせんか？　何と、彼樣な女はふッと如何いふか鹽梅で舌が働かなくなつたら、人助けにもなるが自分も助かるといふもんぢやがアせんか？」

「貴君は相變らずですね、矢張女の事を酷く仰しやるのね。それも因果といふものでせうが、お氣の毒のやうですね。」

「因果？　飛んだ事を仰しやる！　私の考へぢや、世の中に因果な事は三通りしかない。冬寒い座鋪を借りてゐるのと、夏窮屈な長靴を穿いてゐるのと、波斯粉でも振掛けたい程赤兒の啼く室に泊つてゐるのと、これだけだ。それも然うだが、私は此頃は至つて穩當しくなつた。模範にしても可い位だ！　行儀を善くしてゐますからな。」

「然うで御座いませう。だから、しかも昨日エレーナ・アントノウナが貴君は酷いッて泣言なんぞ云ひはしませんからね。」

「へ、へえ、エレーナが！　如何な事を云つてゐました？」

「先日の朝何を伺つても貴君は『何が？　何が？』とばかり仰しやッて、それも大層慳貪に仰しやッて、些とも相手になさらなかつたといふぢやありませんか？」

ピガーソフは笑出した。

「如何です、好い思付でがせう？」

「飛んだ思付ですわ！　まア一體、ピガーソフ

さん、女は然う苛めに濟むもんでせうか？」
「女？ 女でせうか、エレーナは？」
「女でなくて何です？」
「太鼓で、尋常の太鼓です、撥で叩くナ……」
「ア、さう〳〵、貴君はお目出度い事が有りましたね。」
と云つたは話を變へたいからで。
「何です？」
「裁判が濟んで……グリノーフの原が貴君の物になつたさうですね？……」
「左樣、私の物になりました、」と苦い面をする。
「自分の物にしたいと云つて彼程永い間御心配なすツたんぢやありませんか？ それだのに今になつて其樣な不足らしい面をなすツて……」
ビガーソフは故意と落着いて、
「だが、旬外れに逢着つた幸福ほど忌々しい業腹なものは有りませんからな。幸福は幸福でも、矢張嬉しくない、それでゐて最う惡體を吐くことも、運命を罵ることも出來なくなるのだ——大切な權利を褫奪されるのだ。いや、旬外れの幸福といふ奴は厭な小癪に觸る奴でがす。」
アレクサンドラは唯首を窘めたばかりで、何とも云はなかつた。軈て、
「乳母や！ 最う坊を眠かす時分だらう。此處へお渡し。」
で、アレクサンドラは赤兒を眠かしに掛つたから、ピガーソフは何か口の中でブツ〳〵いひながら、向うの隅の方へ去つて了つた。
すると、ツイ庭の向うの往來を、レジネフが馬車に乗つて通る姿が見える。馬の前には大きな番犬が黄色のと灰色のと二匹駈けて行く。これは近頃飼つたのであるが、能く咬合ふ癖に仲が善くて、始終一所に歩いてゐる。牧場で使ふ老犬が門を出て、此二匹の犬に立對つて、口を開いたから、吠えるのかと思へば欠びをして、嬉しさうに尾を掉つて後へ戻つて來る。
レジネフは外から妻に聲を掛けた。
「サーシャ（アレクサンドラを和げて呼ぶ時の名）一寸御覽。珍らしい人を連れて來たから。」
然う云へば、夫の背後に合乘をしてゐた者があるが、アレクサンドラには誰だか一寸は判りかねた。
「あら、まア、パシストフさんだよ！」
と頓て大きな聲を出すと、レジネフが、
「如何だ、珍らしいだらう。それに目出度い話がある。まア其處へ往つて話さう。」
と邸内へ乗入れる。間もなくパシストフと一所に露臺へ出て來た。
出し抜けに萬歳と云つて妻を抱へて、「セレジャ（セルゲイを和げて呼ぶ名）は結婚したとさ。」
「まア、誰と？」
とアレクサンドラは胸を躍らせる。
「ナターリヤとさ……パシストフさんがマスクワから來たので判つたんだが、お前の處へ手紙がお來たさうだ……如何だ、坊主と子供の兩手を揃つて、お前の叔母さんが出來たぞ！……何といふ冷淡な奴だらう！ 眼をパチクリさせるばかりだ！」
「お眠いので、」と乳母が云ふ。
パシストフはアレクサンドラの側へ來て、
「只今お聞きの通りで。ダーリヤさんのお依賴で、村の總勘定に、今日マスクワから參つたのですが、貴女の處へお手紙が……」
アレクサンドラが手早く弟の手紙を開封して見ると、ほんの三四行で、ナターリヤに結婚を申込んで、當人は勿論、ダーリヤの承諾をも得たが、いづれ委細は次便に申上げる、人々へ宜しく、といふだけの事であるが、嬉しさは文面に溢れて見える。大方夢中で書いたもので

あらう。

茶が出る。バシストフに座を薦める。皆先を争つて思ひ〳〵に問ひかける。バシストフの土産の報道で人々喜んだ。ピガーソフさへ喜んだ程である。

頓てレジネフが、

「貴君に伺つたら判るだらうが、ナターリヤは、何やらカルチャーギンとかいふ男と妙な事が有つたと云つて、此邊でも評判しましたが、そんなら痕跡もない事でしたか？」

カルチャーギンといふは何だ壯い好男子で、交際社會では女殺しと謂はれてゐたが、酷く高慢で、澄し切つてゐて、おツそろしく容體振るので、生きた人ではなくて、有志家の醵金で建てた銅像か何かのやうな男である。

パシストフは莞爾して、

「いや、滿更痕跡の無い事でもないです。ダーリヤさんには大層氣に入つてゐたやうですが、何分にもナターリヤさんが嫌つてゐて、噂をされても慄然とするといふやうな鹽梅だつたので……」

「彼男なら私も知つてゐます、」とピガーソフが引取つて、「いやお話にならん愚物だ、甚い愚物だ……それは甚いでがす！　若し人間が皆彼奴のやうだつたら、萬と錢でも取らなければ、生きてゐるのはお斷りでがすな、どうも……」

かも知れませんな、」とバシストフが受けて、「けれども交際社會では仲々利け者で。」

「そんなことは如何でも可いけれど、まア、どうも嬉しいこと！……ナターリヤさんも喜んでゐませうね、浮々して？……」

然うですな。御存じの通りの方だから、矢張平生のやうに落着いたもんですが、併し如何も御滿足のやうで。」

談話が榮えて、人々心持好く時を移した。その内に晩餐になる。

バシストフにラフィータを注いで遣りながら、レジネフが、

「それはさうと、ルーヂンは如何したでせう？」

「確としたことは知りませんが。が、兎に角去年の冬一寸マスクワへ來て、それから同伴が有つてシンビールスクへ往きました。私も暫く手紙の往復をしてゐましたが、最後に何處へとも云はずに、唯シンビールスクを發つと云つて寄したぎりで、それからといふものは更に行方が判りません。」

「大丈夫失くなりはしません、」とピガーソフが引取つて、「屹度何處かに蹲踞つて、説教をしてゐるです。あゝいふ人にはいつでも二人や三人は崇拜者があるもので、口をアングリ開いて説教に聽惚れて、錢を貸して吳れるものです。まア、見てゐて御覽なさい、ルーヂンは屹度何處かツァレウォコクシャイスクかチウフロームかで、鬘を戴つた極の老婆か何かを瞞着して、一代の人傑だ何ぞと思はれて、其手で介抱せられて死ぬに定つてゐるから。」

「どうも酷く仰しやる、」とバシストフは小聲に云つて、不機嫌な面をする。

「いや、些とも酷い事はない、」とピガーソフは反對する。「私はルーヂンは唯だ人の處を喰倒して行くばかりの男だと思つてゐる、」と云放つて、レジネフの方を振向いて、「未だお話することを忘れてゐたが、私はルーヂンと一所に外國へ往つたあの、テルラーノフといふ男と相識になりましたよ。實際です！　ルーヂンの事はテルラーノフから聞くと、それは頗る滑稽だ。殊に不思議なのは彼男の朋友とか崇拜者とかいふ人は時が經つと皆敵になつて了ふ。」

「私だけは例外に願ひたい、」とバシストフは憤然となる。

「貴君は別物さ。それは云ふ迄もない事だ。」

「テルラーノフから如何な事をお聽きなすツ

た？」とアレクサンドラが問く。

「種々な事を聽きましたな。數が多いから一々記えてゐないが、併し其中で一番面白いのは、ルーヂンは始終發達する男だから……彼輩は無暗に發達します。他の者なら唯眠たり食つたりしてゐる丈だが、彼輩のは發達しながら夢を見たり、飯を喰つたりしてゐるんで。ねえ、さうぢやアせんか、バシストフさん？(と云つたがバシストフは相手にならなかつた。)で、こんな鹽梅に發達する最中、哲理研究の結果、どうしても女に惚れなければならん、といふ結論を得た。不思議な結論ぢやがアせんか？ 處が、その不思議な結論に適當した婦人を探索し出した。去る佛蘭西生れの裁縫職でげしてナ、それがまた頗る美人で、何でもライン近くの去る市での事なんださうでがす。處で、奴さんその女の處へセッセと通ひ出した。種々な書物を持つて行つて、天然の話や、ヘーゲルの話で持切つてゐたもんだから、女も妙に思つた。大方天文學者だらうと思つてゐた。けれども、御存じの通り、ルーヂンも一寸睹める男だ。それに外國の者で、露西亞人と來てゐるから、婦人もソレ萬更でなく、到頭逢引に引張出したが、そのまた逢引といふ奴が振つてる、舟で逢はうてのでナ、女も承知して、二人で二時間も舟を漕廻してゐたが、其間ルーヂンは何をしてゐたかと云へば、女の頭を撫でまはして、物思はし氣に空を瞻上げて、私はお前を娘のやうに思つてゐると、何遍も〳〵繰返して云つたもんださうナ。そこで女も憤々怒つて、家へ歸つて了つたが、跡で悉皆其事をテルラーノフに話したさうでがす。ルーヂンはさういふ男なんだ！」

と話し終つてピガーソフは高く笑つた。

「またお株の皮肉！」とアレクサンドラは口惜しさうに云つて、「彼人の事をいくら惡く云はうと思つても、其樣な事しか云へないんだから、如何しても俊傑に違ひない。」

「其樣な事しか云へない！ これは可笑しい！ そんなら何でがすか、彼男が人の處を喰倒して行つたり、借倒して……御主人！ 貴君も矢張借倒された方ぢやがアせんか？」

「ピガーソフさん！」とレジネフが口を開いて、如何にも眞面目な面色になつた。「ピガーソフさん！ 貴君も御存じだし、また家内も知つてゐる事だが、私は初は兎に角後には餘りルーヂンを好かなくなつたのみならず、折節は非難したことさへある。けれども(とシャンパンを其處らのコップに注ぎ廻して)、一つ御相談がある。今義弟と義妹との健康を祝して下すツたから、此度はドミートリイ・ルーヂンの健康を祝して、一つ祝盃を擧げようぢやありませんか？」

アレクサンドラとピガーソフとは吃驚してレジネフの面を見守める。バシストフは嬉しいので面を眞紅にして、伸上つて、眼をむき出す。

レジネフは言葉を續いで、「私は彼男を善く知つてゐる。缺點も善く判つてゐる。凡人でない代り、缺點が殊に目立つて見える。」

「豪傑ですからな、」とバシストフが應接に出懸ける。

「豪傑の分子も幾分かあらう。けれども、意思が……之が一番の缺點だが、意思が如何も弱い。が、それは先あ可いとして、彼男には仲々好い處がある。勝れた處がある。狂熱があるが、狂熱といふものは今の世の中では一番大切なもので、私のやうな無頓着な者からいふのだから、餘程大切に違ひないです。我々露西亞人は餘り理窟ぽくなつた、冷淡に無氣力になつて眠つてゐる、燻んでゐる。誰でも關はない、一轉瞬の間でも我々を動かし、我々の冷却した情を温める者があつたら、夫は恩人といふ者です。最う好い加減に眼を覺さなけりやならんです。ねえ、サーシャ、お前とルーヂンの噂をし

て、冷淡だと云つて私が彼男を非難した事が有つたッけな。冷淡と云つたのは間違つてゐると云つても可し、また間違つてゐないと云つても可い。彼男の冷いのは血が冷いので、頭が冷いのぢやない――だから冷いと云つて責めるのは酷だ。それから彼時は手練師だと云つたけれども、手練師でも虚言家でもない、人を欺きはしない。始終餘所を泊り行いてゐるけれども、卑しい心が有つてではないので、極無邪氣で行いてゐるのだ。それは成程、何處かで倒死をするかも知れんが、倒死をしたからと云つて、罵倒すべきものでせうか？　意思の力が弱いから自分は何も仕事を仕ないけれども、それだからと云つて社會を裨益しないとは云へぬ、既に裨益してゐないとも云へぬ。少年の中にはルーヂンのやうに天賦に缺けた所があつて、働く力、意思を實行する能力の無い者ばかりでもないから、さういふ人達がルーヂンの說を聽いたら、必ず大に得る所があるに違ひない。これはまづ第一私が自身に經驗した所です。家内も知つてゐるが、私は若い頃は大にルーヂンの感化を受けてゐた。尤も私も曾てルーヂンの說は人を動かすに足らぬと云つたこともあるけれど、それは私と同じ年配になつて、私のやうに老込んで了つた人の事をいふので。最う斯う年を取つては、話の中に一寸虛僞らしいことが雜ると、折角の雄辯も其甲斐が無くなつて了ふけれども、少年といふものは幸にして未だ然う耳が肥えて贅澤になつて居ない。だから、話すことさへ立派な事であれば、調子などは如何でも可い。調子は自分の胸に蓄へてある。」

「謹聽！　謹聽！」とバシストフは大聲に叫いて、「實に仰しやる通りで。實にルーヂンの感化と云つたら、それは實に人を動かす、人を逐立てる、凝然としてはをらせない、腹のドン底まで引掻廻す、腸を搔捲る！」

レジネフはピガーソフを顧みて、「此通りだ！　之でも未だ證據が要りますか。貴君は哲學が嫌ひで、哲學の事といふと、いくら惡く云つても、云足りないやうに見えるけれど、私も餘り哲學は贔屓でないし、夫に善くは解りもしないが、併し哲理に趨るのが今の時弊ぢやアない。哲學上の變に紛糾つた議論や、譫言のやうな言草は露西亞人の腹には入らないといふものは、常識が一杯詰つてゐるから、其樣なものの入つて來る餘地がないのである。けれども、哲學を攻擊するを名として、眞理に一致せんとしたり、悟を開かうとしたりする、總ての傾向を手當り次第に攻擊してはならん。ルーヂンの不幸なは露西亞を知らんからで、露西亞を知らんのは實に大なる不幸です。露西亞は我々の一人を缺いても立つて行くけれど、我々は總て露西亞といふものが無くては生きてゐられん。露西亞が無くても濟むやうに思つてゐる人は哀むべく、實際露西亞が無くても濟んで行く人は更に哀むべしである。博愛主義は無意義で、博愛主義を奉ずる者は零である、いや、コンマ以下である。國家以外には美術もなく、眞理もなく、生活もなく、何もない。人の面にしたところで、如何理想的のものでも、人相がなければ成立たぬ。人相が無くても濟む面は變なものに違ひない。けれども、之も亦ルーヂンの罪ではなく、寧ろ彼男の運命、辛い悲しい運命であつて見れば、これを以て彼を責むるに忍びん。何故ルーヂンのやうな者が出來たかといふことを硏究するも面白いが、餘り問題外に渉るから、それは廢めにして、唯ルーヂンにも好い所があるのを認めて、其利を享ける恩を謝するだけの事にして置きませう。我々はルーヂンに對して偏頗な考を持つてゐたが、偏頗な考を持つてゐるよりか、感謝してゐる方が餘程氣樂ですからな。ル

ーヂンを罰するのは我々の職分でもなければ、また餘計な事です、といふものは當人が自分で自分を罰し過ぎてゐる位の所ですもの……どうぞルーヂンも不幸を經て、垢が去れて、生粹の男子にならせたい。兎に角ルーヂンは私の青年の時の朋友ですが、我々も青年の頃には希望も有つたし、意氣込も壯であつたし、正直でもあつたし、好意も多かつた。二十歳ごろに我々の心を領したものは人生の寶で、それに勝るものは今までも無かつたし、また是からも恐らくあるまいと思ふと、青年の頃が頻りに戀しくなる。からして今青年を祝し、ルーヂンの健康を祝して、一つ飲みます。」

人々レジネフと杯を合した。バシストフは夢中になつて、殆ど杯を壞さうとして、一息に飲干す。アレクサンドラはぢッと夫の手を握締めた。

「御主人、私は貴君は雄辯だとは思つてゐたが。實に閉口しました。それではルーヂンの好敵手だ。」

とピガーソフが云ふと、レジネフは少し癪に障つた氣味で、

「戯言を言つちや不可、些とも雄辯なことはない、また貴君だつて餘り閉口する風でもないぢゃ有りませんか、けれども、ルーヂンの噂は最う好加減にして、何ぞ外の話にしませう。え、と……何とか云つたッけな……さう〳〵パンダレーフスキイは如何してゐます、矢張ダーリヤさんの家に居ますか？」とバシストフの方を向く。

「居ますとも！　ダーリヤさんの周旋で今は奉職してゐますが、仲々儲かるさうで。」

レジネフは冷笑して、

「彼男は倒死をする憂ひはない。大丈夫なものだ。」

食事が濟む、客は歸る、夫婦差向ひになつた時、アレクサンドラは莞爾々々して夫の面を覗込んで、

「今日は貴郎は上出來だつたこと！　本當に立派な演説だつたわ。だけれど、少しルーヂンの肩を持ち過ぎましたね、先達てはその反對で非難し過ぎたけれど……」

「倒れたる者は打たずさ。彼時はお前がルーヂンに迷ひはせんかと思つたもんだから、それでさ。」

「そんなことは有りませんわ、」とアレクサンドラは何處までも無邪氣で、「彼人はおそろしく學問が有りさうだもんだから、何だか氣が置けて、彼人の前へ出ると、何と云つて好いものか、解らなくなる譯でしたもの。だけれど、ピガーソフさんも隨分酷い言を言ひますねえ。」

「ピガーソフ？　ピガーソフが居たから、私も熱心にルーヂンの辯護をしたのだ。ルーヂンのことを方々喰倒して行くなんぞといやアがる！……私の眼から見ると、ピガーソフの方が遙に卑劣だ。可なり財産も有つて、何を見ても冷笑してゐる癖に、身分のある者とか、金滿家とかいふと、こびり附いて了つて離れない。お前は知るまいが、ピガーソフは何を見ても彼樣に憎々しく惡體を云つて、哲學や婦人を攻撃するけれど、あれで、役人をしてゐる時分には、隨分賄賂を取つたもんだ。それがまた醜い取方さ！　あゝいふ奴に限つて其樣な事をするもんだ！」

「まア、どうも！　見掛けに依らんもんですねえ。」

暫くしてから、「あなた！　如何でせうねえ……」

「何が？」

「ワルインツォーフはナターリヤと一所になつて旨く行くでせうか？」

「さうさなア……まア旨く行くだらうよ。夫はナターリヤが采配を揮るね――これぎりの話だ

が――彼娘はワルインツォーフよりか利口だもの。けれどもワルインツォーフも好漢だし、それに心からナターリヤに惚れてゐるんだから、何も云ふことは無いさ。例へばお前と私にしても、互に思合つてゐて、幸福な身の上といふものだらう、ね、さうぢやないか？」

アレクサンドラは莞爾して夫の手を握締めた。

アレクサンドラの家で前の話があつた丁度其日に、露西亞の片田舍で、筵の蓋を附けた見すぼらしいキビツトカに瘦馬を三匹服けたのが、日盛をも厭はず、がたくり廣い街道を駆けて行くのが見えた。ぼろ〳〵した駱駝毛織の上衣を着た白髪頭の百姓が、足を斜に踏張りながら横木の上に乘つて、やたらに繩の手綱を引張つて鞭を揮廻してゐたが、キビツトカの内には眉庇附の帽子を冠つて古い埃だらけの袖無上衣を着た脊の高い男が、小さな鞄の上に腰を掛けてゐた。これは誰でもない、ルーヂンである。帽子を眉深に冠つて頭垂れてゐたが、キビツトカが躍るので、彼方へ傾ぎ此方へ傾ぎしてゐる。全然感覺を失つてゐるやうな、眠つてゐるやうな、妙な風をしてゐたが、頓て居直つて、

「立場にはまア何時着くんだ？」

と百姓に云ふと、

「そんねえに云はツしやるけえど、上りだア、お前さまア、」と一段力を込めて手綱を引つて「まんだ二里もありますべえ……コレ、コン畜生奴が！　おどれ、業つく張めが！……」と細い聲で叫きながら、右の方の副馬を打ちはじめた。

「お前は馬を御ふことが餘り上手でないと見えるな。朝から出かけて未だ着かないぢやないか。些と歌でも唱つたら如何だ。」

「だツて仕方がねえだ！　馬めエ、腹ア減つて草臥れとるだ……それにえら熱いもんだけん……歌ア唱へツて、私は御者ぢや無えだ、唱へねえと思ひなさろ……えい、この道陸神め！　去かんけえ」と通りすがりの鳶色の衣服を着て、切れかゝつた草鞋を穿いた男に云ふと、其男は立止まつて後を振向いて、

「何吐かすい、御者奴が！」

と云つたが、頓てさも〳〵口惜しさうに、

「がり〳〵亡者め！」

と悪體の繼足をして、頭髪を一振ふつて向うの方へ行つて了つた。

「どツこい！」と百姓は斷つたやうに云つて、中の馬を引張つて、

「その手は喰ふめエ、その手は……」

其内に馬も疲足を引摺つて、どうにか斯うにか立場まで漕附けたので、ルーヂンはキビツトカを降りて、賃錢を渡して、自分で鞄を立場へ持込んだ。百姓は賃錢を貰つても、辭儀もせずに、久く掌で錢を引覆して眺めてゐた――大方酒手が不足であつたのであらう。

自分の知己に若い時分多く露西亞を旅をして行いたものがある。其人の云ふのに、若し立場にカフカーズ捕虜譚の一節か、又は露國の陸軍將官を描いた額が掛つてゐれば、直き馬が雇はれるけれど、若し有名の骨牌師ジョルジ・デ・ジェルマニーの畫の額であつたら、到底も急には立たれぬから、ジョルジが若い頃縮れた頭髪を鶏冠のやうに立てて、白い胴衣を着て、極狹い短い袴を穿いた姿や、或は年を取つてから、屋根の勾配の急な百姓家の内で、椅子を高く振擧げて、現在の息子を撃殺さうとした時のやうな怖ろしい面色をつく〳〵見倦かなければならぬものと覺悟をしろと、云つたことがあるが、ルーヂンの入つた立場の壁には丁度此「骨牌師の一生」の額が掛つてゐた。人を呼んで見ると、番人が睡眠眼をして出て來た、尤も番人に睡眠眼をしてゐないのも滅多には無いが。而して、

また何とも云ひもせぬ内に、ほやけたやうな聲で、馬はないと云ふから、ルーヂンが、
「馬は無い？　未だ何處へ行く者だとも判らぬ内から、馬がないとは、をかしいぢやないか？　私は今尋常の馬で來たのだ。」
「どうも馬が無えもんだで、お前さま、何處へ往かッしやるだれ？」
「私は某處へ往くのだ。」
「馬は無えだよ。」と云捨てて、番人は出て行つて了つた。
　ルーヂンは舌打をして、窓際へ寄つて、帽子を卓の上へ放り出した。見ると、左程變つても居ないが、唯此二年の間に少し色黒になつて、白髪も處々に見える。それに眼が今も尚ほ美しいけれど、何だか朦朧してゐて、苦しい切ない思をしたのが小皺になつて、口元や頬や蟀谷の邊に現れてゐる。
　衣服も甚く着破したもので、白襯衣などは着てゐないらしい。今は盛も過ぎて、園丁の言草ではないが、此人も最う種子になつたものと見える。
　旅人が所在がないと往々することであるが、ルーヂンが壁の掲示を讀んでゐると、ふと戸が開いて番人が入つて來た。
「某處へ行く馬は有りましねえ。待つて御座らしたッて駄目だんべいが、某處なら戻馬が有るだ。」
「某處へ戻馬が？　戯言いつちや不可！　私は其樣な方へ行くのぢやない。ペンザへ行くのだ。某處ならタンボーフへ行く道だらう？」
「それだッて好かッぺえぢやねえか？　タンボーフを廻つて行くだ。さうでもねえけりや、某處からも行かれるかも知んねえだ。」
　ルーヂンは考へてゐたが、頓て、
「かヨツ、仕方がない。馬を附けて貰はう。如何でも可い、タンボーフへ行かう。」
　程なく、馬車の用意が出來る。そこでルーヂンは鞄を持出して、馬車に乘つて坐つたが、また以前のやうに首を垂れた。その背を圓くして蹲踞つてゐる所を見ると、何處か悄然と萎れた所が有る。‥で、馬車は鈴の音を刻むやうに立てて氣の無ささうに駈けて行つた。

大團圓

　何ほ幾年か經つた。
　或秋の寒い日の事であつたが、某縣の某町で一等と謂はれる旅店の玄關先に旅馬車が着いて、伸びをしながら嚏をして馬車を出た紳士を見ると、未だ老人といふではないが、最うデツプリ肥つて、人にも推重られる年配である。梯子段を登つて二階へ上つて、廣い廊下の入口に足を停めたが、誰も居ないので大きな聲で座鋪へ案内を求めた。すると何處かで戸の開く音がして、低い衝立の後から脊の高い僕が飛んで出て、少し體を斜にして前に立つて案内をしたが、薄暗い廊下ながら、僕の背後の妙に光るのと袖を捲揚げてゐるのとが隱現見えた。旅の紳士は座鋪へ入ると其儘外套を脱ぎ襟卷を外して、長椅子へ腰を掛け、握拳を兩膝に置いて、睡惚けたやうな面をして四方を視廻したが、頓て從僕を連れて來いと命じたので、僕は愛想善く會釋をして出て行つた。旅の紳士といふは誰でもない、レジネフで。徴兵の事で田舍から出て來たのである。
　レジネフの從僕といふのは頭髮の縮れた頬の赭い若い男で、鼠色の外套に青い帶を締めて、柔いフェルト氈の靴を穿いてゐたが、座鋪へ入つて來た。
　それと見てレジネフが、
「どうだ？　貴樣は[illegible]鐵が外れると云つたけれども、何事もなく着いたらう。」
「何事も御座りましなんだ、」と僕は外套の立

燈の中で無理に微笑して、何故外れなかつたッぺえ……」

「誰も居らんか？」と廊下で呼ぶ者がある。

レジネフは蹶然として耳を欹てた。

「おい！　誰ぞ一寸！」

レジネフは起上つて、入口へ來て、急に戸を開けると、最う大方白髪頭の、脊骨の曲つた、脊の高い男が、青銅の鈕釦を附けたフリースの上衣を着て、眼の前に立つてゐる。一目視ると、それと知れたから、レジネフは胸を躍らしながら思はず聲を揚げて、

「ルーヂンさん！」

ルーヂンは振向いて視たが、レジネフが燈火を背後にして立つてゐたから、ツイ一寸は判らぬやうで、不思議さうに面を眺めてゐる。

「お見忘れなすツたか？」

といふと、ルーヂンも、

「や、レジネフさんでしたか！」

と云つて、手を出しかけたが、狼狽して、また引込めようとする……その手をレジネフは兩手で握つて、

「お入んなさいな、まア好いでせう！」

と座舖へ伴込む。

レジネフは一寸は口を開き得なかつたが、頓て、我にもなく聲を低めて、

「貴君も變りましたな！」

「然うださうですな、」とルーヂンは座舖の中をきよろ／＼視廻して、「全く、年齡の加減で……貴君は些とも變らない。アレク……細君はお變りも有りませんか？」

「まア、達者でゐます。が、併し如何して此處へ？」

「種々な事が有つて……實は來る氣で無かつたのですが、知つてゐる者が居るので……併し、好い工合でした……」

「何處で食事をやりますッ？」

「されば、さ。何處か外へ出てやりませう。實は今日中に立たなきやならんので。」

「今日中に？」

ルーヂンは仔細あり氣に微笑して、

「今日中に。種々都合が有つて、是から田舍へ歸つて永住しようといふので。」

「どうですか、一所に飯を喫はうぢや有りませんか？」

ルーヂンは此時初て直とレジネフの面を目守めて、

「一所にですか？」

「さうです、昔に返つて、朋友交際で不可ませんか？　貴君にお目に懸らうとは思掛けなかつた。今日別れゝば、また何時逢はれるか判らん。此儘別れるのも餘り呆氣ないぢや有りませんか？」

「ぢや、御一所に喫べませう。」

レジネフはルーヂンの手を握つて、僕を召んで、食事の支度をして、それからシャンパンを一本氷に漬けて置けと命じた。

食事中レジネフもルーヂンも、云合した樣に書生時代の話ばかりして、生殘つてゐる者や死んだ者の噂、又は昔の事などを憶出して語合つてゐた。初の程はルーヂンも話をしても氣が乘らぬやうであつたが、一杯を重ねたので、漸く元氣づいて來た。食事が終んで僕が最後の皿を持つて出て行くと、レジネフは起上つて、戸を締切つて、卓へ戻つて來て、靜に頭を兩手で支へて、

「此前別れてから貴君は如何してゐました？　是から一つ其話を聽きませう。」

ルーヂンはジロリとレジネフの面を視た。

「あゝ、變つたなア、氣の毒な！」とレジネフも心の内でまた思つた。

最う老年にも近いことゆゑ、額にも自ら其

影が射してゐるけれど、ルーヂンは左程違つてゐるでもない、殊に立場で見た時から見ると、左程でもない。けれども、顔色は違つてゐる。眼付も違つてゐるが、起居振舞も愚頭々々してゐるかと思ふと、急に夂然しくなる、言語も氣の抜けたやうで、張合が無くて、一體様子が如何にもがつかりしてゐる。大方心の底では獨りで鬱々してゐるのであらう。概して青年の頃は溢れる程の希望を懐いて、自惚も強く、何も彼も意の儘に成るやうに思つてゐる癖に、故と鬱いだやうな顔色をするもので、ルーヂンも昔は其様な風も有つたけれど、今はそれとは全く違つてゐる。

・

で、ルーヂンが、「別れてからですか？ いや、なか〳〵口では云ひ切れん程の思をして來ましたが、併し詳しくお話する程の價値は有りません。隨分彷徨きました、體ばかり彷徨いてゐたのではなくて、心も彷徨いてゐました。種々な事を遣つても見たし、又種々な人に交際つても見たが、いつも終局には失望しました、失望ばかりしてゐたです（と繰返して云つた、レジネフが異しく氣を入れて自分の顔を覗込んでゐるのを見て、いつも終局には自分の説を、自分の口からなら勿論だが、人の口から聽いても厭になる、子供のやうに怒りツぽくなつて、それから馬のやうに鈍く無感覺になる、鞭で打つても尾も搖かさなくなる。喜び勇んで、いろ〳〵の希望を懐いた跡が、いつも互に敵視して苦々しい思をする。けれど、其様な事をしたつて挽回は附きやしませんや。鳥のやうに飛んで出た奴が、殻を潰された蝸牛のやうに這つて戻つて來るのだが、時々路が滲つてゐてねえ（と云足をして一寸額を顰めて見せた）。貴君も御存じの通り……といひかけるのをレジネフは遮つて、

「一寸、吾々も昔は互に君僕で話をしたものだ。如何です、昔に復らうぢやありませんか？ 而して祝に一つ飲りませう。」

ルーヂンは慄へながら起上つた。眼中は妙に潤々した。

「飲りませう。難有い、飲りませう、」といふ。

二人とも一杯づつ傾けた。

ルーヂンは復た口を開いて、莞爾しながら、

「君も、」と、君といふに力を込めて、「知つてる通り、僕の腹の中には何か蟲のやうなものが居つて、其奴が責めるので、どうも凝然としてゐられない。から堪らなくなつて人に撞着ると、初は大抵僕の感化を受けるけれど、後がいけない……（と手眞似をして）、貴君に……君に叛かれてから、僕は種々な事に出逢つて、種々な經驗を得た。行つて見ては罷め、行つて見ては罷めして、二十遍も實地試驗をしてやつたか——[illegible]御覽の通りの態になつて了つた！」

「といふが支へるものが無かつたから、」とレジネフが獨言のやうに云つたと、

「さうです、支へるものがなかつたからです！ 一體僕にはなか〳〵物を纏めるといふことが出來ない。先も足を踏張る所がないので、土臺から作つて懸らなければならんのだから、それも其筈さね。僕の爲て來た事、といふが詰り失敗ばかりだが、その話は詳しくは仕ますまい。唯一つ二つ仕ませう……運が向いて來たやうに思はれた、いや然うでない、旨く行きさうに思はれた——少し差がある——さういふ場合を一つ二つ……」

と云つて頭髮を後へ掃つた。その手振は昔に變らなかつたが、黒く濃かつた頭髮が今は白髮で薄くなつてゐる

「で、まア、聽き給へ、僕は、マスクワでね、隨分奇妙な人間に出逢つたです。なか〳〵金満家で、地所も澤山に持つてゐたが、別段官途に就いてゐた人ではなかつた。此男に一つの癖があ

る――といふのは何學に限らず、總て學問が非常に好きであつた。如何して其樣な癖が附いたものか、今だに解らないが、兎に角此男にして此癖の有るのは牛に鞍を置いたやうなものだ。此男は普通學問をした者と肩を竝べて行くのも頗る困難の方で、唯物を云ひさうな眼付で視廻したり、仔細らしく頷くばかりが能で、口一つ碌に開けない。僕は此男程天分の薄い無能な者を見たことはないです。あのスモレスカヤ縣に砂ばかりで、他には何もない、罕に生えてゐる草も牛さへ喰はない、といふ處があるさうだが、此男は恰でそれだ。手に乘るといふ事は一つも無くて、何事も皆手に餘る、頓返しが附かない、人には容易い事でも此男に遣らせると難しくして了ふ。それでゐてそれが遣りたくて〳〵堪らないのだ。若し此男の儘になつたら、人間は皆踵で物を喰はうとするやうになるかも知れん。讀んだり、書いたり、勉强許りしてゐるが、倦きない。非常な忍耐で、宛で意地になつて勉强してゐるやうだ、尤もなか〳〵負嫌ひで强情な男ですがな。獨身で、奇人と云ふ評判を取つてゐた。僕は此男と相識になつたのです――而して、まア、好かれたのですな。先の如何いふ人物といふことは直ぐ解つたが、何分熱心なのには感心した。それに非常に金を持つてゐるから、此男を利用すれば、隨分仕事か出來る、社會を益することが出來る……と思つたから、それで僕も其男の家へ同居して、到頭其持村へ一所に出懸けた。其時は非常な大計畫を立てて、種々な改革やら、新らしい事……」

「ダーリヤの家に居た時のやうに、」と云つてレジネフが毒の無い微笑を漏らす。

「どうして〳〵！　彼時は僕が何を云つたツて駄目だとは内々思つてゐた位だが、其時は然うでない、全く場合が違ふ。そこで、農書を澤山擔いで行つて……尤も卷尾まで讀んだのは一册もなかつたが……而して仕事に懸つて、最初は難しからうと思つてゐたが果して旨く行かなかつた。けれども、其内に如何か旨く行きさうになつて來る。友人といふのは默つて視てゐて邪魔を仕ない、といふが、まア比較的の話で、僕の意見を用ゐて其通り遣るけれども、澁々、ギゴチなく、内々危みながら遣るので、兎角自分の流儀を出したがる。一體非常に自分の意見を大事がる男なのです。あの金花といふ蟲が草を這上るのを見ると、仲々骨を折るもので、這上つて、翩をして飛びさうにするかと思ふと、コロリと轉落ちて又這上るものだが、此男も丁度然ういふやうに苦勞をして自分の意見に取付く……奇妙な比喩だが、僕には其時分からどうも然う思はれてならなかつた。然ういふやうな鹽梅で二年許り骨を折つて見た。けれども、僕が何程骨を折つても、どうも面白く行かない。其内に僕も漸々草臥れて友人が厭になつて來たから、徐々嫉め出す、友人は僕を猫蒲團と取違へてでもゐるやうに無暗に壓付ける。初は唯僕を信用しなかつたのが今は默つて憤つてゐるやうになつて、互に敵愾心を起して來たから、最う何の話も出來なくなつて來た。それで友人も始終僕に服して居ない所をそれとはなしに見せ付けたがつて、僕の處分した事が處分通り行かなくなることもあれば、從頭行はれないこともある……詰りお地主樣の家に學問のお相手になつて食客をしてゐるやうになつて來たから、徒に時間や精力を費したのが殘念で堪らない、また失望かと思ふと忌々しくなる。勿論別れゝば不利益は判つてゐるが、どうも辛抱が出來んで、或時厭な胸糞の惡くなる事があつて、友人の最も拙い處を視たので、全然大喧嘩を仕て了つて、露西亞の粉を獨逸の糖蜜で練つたやうに學者振る旦那を棄てて、其處の家を出て了つた……」と云つてレジネフ

はゝゝゝゝと其の肩へ兩手を掛けた。
「それはさうだ。で、心身が輕くなつて裸體一貫で無人境に立つ事になつた。最う何處へ飛んで行つても構はないとなつた……エイ、一杯飲まう！」
「君の健康を祝して飲まう……」と云ひながらレジネフは起上つてルージンの額に接吻して、「君の健康を祝して、それからパコールスキイの記念のために……彼人も矢張貧乏だつた。」
暫くするとルージンが復た口を開いた。
「ソレ是が僕の失敗第一號だ。如何です、次のを聽く氣が有りますか？」
「聽かして見れ給へ、是非。」
「あゝ、お饒舌も最う厭になつた。僕も最う隨分饒舌り草臥れたからね……けれども、仕方がない、話して了はう。それから僕も處々方々彷徨いて……さう〳〵、或顯官の、好人物だつたが、其人の書記になりかゝつて妙な事も有つたが、其樣な事を話してゐると長くなるから、省略つて了つて……處々方々彷徨いて、結局に……笑つちや不可ぜ……實業家にならうと決心した、事業家にね。尤も或人に出遇つてから、さういふ機會になつて來たのだが、其人は……君も知つてゐるかも知れんが……クルベーエフといふ男だ……知らない？」
「知らない。けれども、ルージン、君の事業は……洒落のやうで何だか……事業家になつたや、出來やしない。君にして其位の事が解らんといふのも妙ぢやないか？……」
「それは然うだ、けれども、僕の事業はそれぢやア何でせう？ いや、クルベーエフは君に見せたかつた……くだらん奴だと思ふと、違ふよ。僕はこれでも昔は雄辯だつたさうだが、其男の前へ出ると、一文の價値もなくなる。非常に學問も有つて、博識で、商賣や工業の事に掛けては、それこそ天才が有るのだ。非常な大計畫や奇想が滾々として頭腦の中に沸上つて來るのだ。それで僕も此男と力を協せて公益になる事業をやらうと決心した……」
「事業といつて、如何な事を？」
ルージンは俯目になつて、
「いつたら、笑はれるだらうな。」
「何故？ 其樣な事はない、笑ひはしない。」
「なにね、某縣の或川を浚渫して船の通ふやうに仕ようと計畫したので。」と云つて、極りが惡さうに莞爾する。
「なるほど！ 然うすると、そのクルベーエフといふ男は資本家なので？」
「いゝえ、僕より貧乏な人だ。」と云つてルージンは徐と白髪頭を下げる。
レジネフは笑ひかけたが、急に止めて、ルージンの手を握つて、
「宥して呉れ給へ……だが餘り意外だつたから、ツイ……それで、如何だつたね、實行が出來なかつたかね？」
「いや、全然出來ないでもなかつた。手初だけは行つた。けれども……其處に種々故障が有つてね。まづ第一に、水車場の持主が如何しても同意しない、けれども、水の事だから、機械なしにや、如何する事も出來ない、ところが機械を買ふ錢がないと來てゐるのだ。何でも六箇月ばかり二人で小舍住居をしてゐた。クルベーエフは始終麺麭ばかりで凌いでゐる、僕も腹一杯喰つたことはないといふ始末さ。けれども、今になつても後悔はしない、彼處の景色は非常に好かつたからね。一生懸命に運動して、商人を說いたり、手紙を書くやら、廻文を書くやらしてゐたが、詰り僕は嚢中無一物になつて了つた。」
「成程！ 澤山も無い處だからね。」
「さうとも。」
ルージンは窓の方を向いて、
「けれども、面白い計畫だつたがな……若し實

行が出來たら、それは大した便利なものが出來たんだが……」

「それで、そのクルベーエフといふのは如何なつて了つたね？」

「クルベーエフ？　今西伯利へ往つて、金山か何かに關係してゐる。併し、彼男は、今に見給へ、乾度財産を作るから。名が出ずに了ふ男ぢやない。

「それは然うかも知れんが、併し君は最う金は出來んね。」

「僕かね？　如何も仕樣がない！　尤も君は僕の事を始終愚癡奴だと思つてゐるのだらうけれども……」

「馬鹿を云つちやア不可！……それは、成程、君の缺點ばかりが眼に付いた時代も有つたけれども、今は僕も修行を積んだから、君の眞價が解るやうになつた。成程、君は金を作るやうな男ぢやない……ないが、それだから君を愛するのだ……然うさ、然うに違ひないさ！」

ルーヂンは力なく莞爾して、

「本當かい？」

「然うとも、全くそれだから君に敬服してゐるのさ！　解つたかね？」

二人とも默つて了つた。

やゝ有つてルーヂンが、

「如何だね、第三號に移らうか？」

「可からう。」

「では、第三號、これでお終だ。この第三號は、今、局が附いたばかりなんだが、如何だね、最う聞くのが厭になりはしないか？」

「まア、文句を云はずに話すさ。」

「それなら話すが、或日閑な時に、……尤も、いつでも閑なんだが……偶と考へたね、之でも僕は相應に知識を持つてゐる、且つ親切氣もある……此親切氣のあるだけは、君だつて認めて呉れるだらう？」

「無論とも！」

「そこで、最う他の事は何にも出來なくなつて來たから、教育家にならう、平たく云へば、教師になるんだ……遊んでゐるよりか、其方が勝しだ……」

と云つて歎息して、

「遊んでゐるよりか、自分の知つてゐる事を人に傳へた方が可い。すれば僕の傳へた知識から人が利益を汲出すかも知れん。それに僕だつて滿更才が無いといふでもなし、饒舌る事も出來る……といふので、彌此新事業に懸ることにした。處が仲々口がない、と云つて出稽古をやるのは嘘だし、小學校ぢやア仕樣がないし、弱つてゐたが、漸とこさ此處の中學校の教員にありついた。」

「何の教員？」

「露國文學の教員さ。これほど熱心に行つたことは今まで無いね、何しても少年を薫陶しようといふのだから、面白い。初度の講義を起草するには、何でも三週間ばかり掛つた。」

「その草稿は今でも在るかね？」

「いや、最う何處へか遣つて了つた。なか〳〵善く出來て、自分ながら氣に入つた。今でも生徒の面が眼前に隱現くやうだ――若い惡氣のない面を並べて、何も彼も忘れて了つて、熱心になつて、幾分か驚いた氣味も有つて聽いてゐるのだからね。だから僕も講座に上つて、夢中になつて講義をしたが、大丈夫一時間餘は掛らうと思つてゐたのが、僅か二十分ばかりで終んで了つた。丁度學校の幹事も來てゐたが、これは始終銀縁の眼鏡を掛けて短い鬘を着けてゐる干乾びたやうな老人でね、時々僕の方を向いては頷いてゐたツけが、講義が終んで僕が椅子を離れると、『善く出來ました。唯少し高尚すぎる、夫から趣意の解りかねる處もあつたが、兎角枝葉の論が多いやうだつた、』と云つた。生徒

は皆えらい先生だといひたさうな顔をして、僕の教場を出るのを見送つてゐた……本當だよ。少年といふものは、それだから、可愛くなる。二度目の講義も旨く行つたし、三度目のも然うしたが、其後は準備なしに行つた。」

「それで旨く行つたかい？」

「旨く行つたね！　生徒は隊を成して傍聴に来た。だから僕も腹に在る事は残らず打撒けて行つた。生徒の中にもなか／＼感心に出來るのが三四人はあつたが、他は皆僕の云ふことが善くは解らない位なもので。けれども、實際を云へば、僕の云ふ事が解るといふ者でも、時とすると奇妙な質問を起して弱らせたこともあつたつさ。それでも一向落膽せずに行つた。僕を愛することは皆愛してゐて呉れたが、其代り試驗の時には皆に滿點を遣るのだからね。ところが、其中に僕を憎んで陥れんとする者が出來て來た……ぢやない、陥れるも何もないのだが、僕も些と行り過ぎたのさ。だから人の邪魔になる、人も亦僕の邪魔をする。尤も僕の講義てのが、大學生にさへ滅多に其様な講義はしないツて程難しいのだから、生徒が聴いたつて左程益する所がない……事實をいふと、僕からして餘り知つては居らんのだ。それに、託されただけの仕事では滿足が出來ないのさ、君も知つての通り僕の病でな、講義してばかりはゐられない、學校の根本的改革をやらうとしたのだ。その改革てのは、勿論學校に取つて必要な改革で、且つ容易に實行出來る譯だつたのだ。といふのは、校長が惡氣の微塵もない正直な男で、最初は僕を信じ切つてゐたから、此校長を擔いで改革しようと思つたんだ。それに其校長の細君が力になつて呉れた。其細君てのは、四十に手が屆かうといふ年配なんだが、それでゐて、十五六の小娘か何ぞのやうに、善いといふ事には深く心を打込んで、立派な事なら何でも好きで、誰の前でも自分の信ずる所は憚らずに云ふ。純潔で正義が溢れる許り有つて、彼様な女は滅多にはないね。彼女の事は忘れようとしても仲々忘れられない。その細君の忠告で、改革案を書かうとした……ところが、陥れられた、此細君が人の讒言を信じて僕の事を惡く思ひ出した。殊に邪魔をしたのは數學の教員であつたが、此奴は小造の男で、鋭い、癇癪持の、何も信じない、ピガーソフ一流の人物だ、尤もピガーソフから視ると、遙に役に立つ男だけれども……ときに、ピガーソンは未だ達者でゐますかい？」

「達者でゐますとも、而も商人の後家を女房にしてゐる、細君には時々打たれるさうだ。」

「不思議はないね。それからナターリヤさんは？」

「健在だ。」

「幸福でゐるかね？」

「幸福だ。」

ルーヂンは默つて了つた。暫くして、

「えゝと、何の話だッけ……さう／＼！　數學の教員の話だッけ。其奴が僕を憎んで、僕の講義を烟花同然だなぞと云つて、少し明瞭でない事を云ふと直ぐ押へる、一度なんぞは十六世紀頃の何かの記念物の事で揚足を取つたこともあるが、第一僕の心を疑つてゐるのだ。それで僕の最後の石鹼玉も此男に出會つて、針にでも逢着つたやうに、破裂けて了つた。幹事といふのも仲々手強な奴だつたが、校長を煽てて、僕に反對させたもんだから、衝突したね。僕は一歩も讓るまいと思つて憤然となる。それが其筋の耳に入つて、僕は到頭免職さ。其儘往生して了ふとは出來んから、斯う見えても然う自由にならない男だといふ所を一番見せつけて遣らうと思つたが……いや、實際如何にでもなる男でね。之から實は餘儀なく田舍へ歸るので。」

と話し止む。粛然となつて、二人とも頭垂れ

—坐つてゐた。
軈てルーヂンが先づ話し出した。
「かうした身の上になると、カリツォーフの歌の「身の措處なきまでに成果てたるも若氣から」といふ句が身にこたへる……けれども、實際僕は何の役にも立たん奴だらうか？　此世で僕に適する仕事は無いのだらうか？　僕はそれを平生疑つてゐるのだ。いくら自分で自分の沽券を落さうとして見ても、どうも僕の天分は多少厚い方だと思はん譯には行かん。それなら、何故此天分が無益になつて了ふのだらう？　夫から君と一所に外國に行つて居た時分は、僕もまだ自惚氣が熾で、了簡が間違つてゐた。成程、彼時分は自分で自分の氣が知れなかつた、空論に醉つてゐて、夢の樣な事を信じてゐた。けれども、今僕が思つてゐる事は誰の前でも憚らずに云へる。隱したつて仕樣がないから、云つて了ふが、僕は全く惡氣のない人間だよ。だから温順しくなつてゐる、境遇に適應したく思つてゐる、大した望も起さんで、卑近な目的でも可いから達したい　聊かでも可いから世を益したいと思つてゐる。けれども、どうも然う出來ない。如何いふ譯なんだらうか？　何故僕には人のやうに生活して行くことが出來んのだらう？　如何かして人並にして行きたいと、それぱツかりを僕は思つてゐる。それだのに、地位が極るとか、境涯が定まるとかすると、直ぐ沈として居られなくなる……自分の運命が何だか怖くなり出した……一體、まア、如何いふ譯なんだらう？　此謎を君、僕の爲に解いて呉れ。」
「謎を？」とレジネフも鸚鵡返しに云つて、「然うさ、謎に違ひないね。君は僕のためには始終謎なんだ。若い時分、何か詰らん惡戯をしてから、急に人の膽を奪ふやうな事を言つて、而してまた遣り出す……變な事をいふやうだが、君には解つてゐるだらう……彼時分でさへ僕には君が解らなかつた、僕が君に愛想をつかしたのも其爲なんだ。君はなか〳〵元氣が有る、理想に對つて奮進して倦る、事を知らない……」
「みんな口ばかりさ！　實際何にも仕てゐない……」
「何にも仕てゐない！　といふのは何か爲る事があるのかね？」
「何をツて、プリヤジェンツェフ——記えてるだらう、彼男のやうに、自分で稼いで、盲目の老婆やその子供等に貢いでやる——あれが眞の事業なんだ。」
「なるほど、けれども立言も矢張一個の事業ではあるまいか？」
ルーチンは默つてレジネフの面を視て、徐に首を振つた。
レジネフも何か云はうとしたが、面を撫でて默つて了つた。頓て、
「では是から田舍へ歸るのかい？」
「左樣。」
「地面は未だ殘つてるのかね？」
「些とばかり。地付の小作が二人と半分ばかり有るのだ。まづ骨を埋める處は有る。かう云つたら君はまた、「此樣な場合にも虚飾を云ふ」と思ふだらうが、成程虚飾は僕の敵だ、此奴が骨にまで喰込んで了つて、死ぬまで除れない。けれども、今云つたことは、虚飾ぢやアないよ。此白髮や皺を見て呉れ給へ！　これが虚飾だらうか？　此肱の破れた所なぞは虚飾ぢやアないね。君は僕に對ふと、始終毫も假借する所が無くて、公平だつた。けれども、最う僕も駄目だよ、油が盡きて、ラムプまでが壞れて了つて、燐寸が今に消えさうになつてゐるのだ。最う斯うなつては君も深くは咎めまい。死といふものでなければ、人間は和睦は出來んものだね……」
レジネフは躍上つた。
「ルーヂン！」と高く叫んで、「何故其樣な事を

云つて呉れる？　僕はそんな事を云はれる覺えはない。君の頭の禿げた所や、皺の出來た所を見て、まだ空論を云つてゐるなぞと思ふやうな、そんな無情な者ぢやない。僕が君の事を何と思つてゐるか、聞きたければ、云はう。僕は思つてゐるのだ、君のやうな境遇に有る者は、仕ようと思へば何でも出來る、人間の權利にして獲られないものはない！　それだのに今逢つて見れば、苦悶を抱へて、苦痛に打たれて……」

「可憐だといふかね？」とルーヂンは不機嫌に云ふ。

「いや、然うぢやない、敬す可き人だと思ふのだ。若し君が友人の地主と折合つたなら、屹度其男が財産を拵へて呉れたに違ひないが、何故實業家に落着かなかつたのだ？　何故中學校に住付くことが出來なかつたのだ？　どうも君は妙な人だ！——何か考へて計畫んでは、ド、の終局はいつでも自分の利益を犧牲に供して、何樣に地味が好くッても、そんな處には根を張らない。何故然うなんだらう？」

ルーヂンは悲しさうに微笑して、

「矢張浮草の性分なんだね、一處にいつまでも落着いてられないのだ。」

「然うだ。けれども君のいふやうに、腹の蟲に責められて落着いてられないのぢやなからう。腹の蟲が責めるなら意味なしに氣が忙しい筈だが、君には然うぢやない。眞理を愛する念が常に炎えてゐるのだ。君にも隨分缺點は有らうけれども、眞理を愛する念だけは何時でも熾んだ。世間には隨分自分は利己の人間ぢやないと思つてゐて、君の事を狡猾だ何だと云つてゐる者も有らうけれど、其樣な人達の企て及ぶ所でない。僕だつて、若し君の地位に居たら、疾くに蟲を殺して温順しくなつて了ふ。それだのに君は自棄をも起さないで、若し新しい事業があれば、今日からでも、今からでも、少年のやうな意氣込で、それに懸らうといふ氣である。」

「いや、最う僕は草臥れたよ、最う厭になつた。」

「草臥れた！　他の者なら疾うに死んでゐる所だ。君は死なければ、和睦は出來んといふけれども、生きてゐては出來んだらうか？　年を老つても寛大にならぬやうな者なら、自分も寛大に扱はれる價値がないといふものだが、世の中に寛大に扱はれても困らぬと云ひ得る者は恐らく有るまい。君は出來るだけの事をして力の續くだけ働いて來たんだから、最うそれで十分ぢやないか？　それは君と僕とは生活の仕方が違ふ……」

「君は全く親切な人だよ。」とルーヂンは歎息した。

「生活の仕方が違ふ。」とレジネフは繰返して、「何故違つて來たといへば、僕は喰ふには困らんし、冷淡な性質だし、其他にもいろ〳〵都合の好い事情が有つたもんだから、凝然として手を束ねて傍觀してゐられたんだが、君は田野へ出て、袖を捲つて働かなきやならなかつたので、何時か斯う違つて來たのだが、元來僕と君とは餘程似てゐる所があるよ。同じやうな事を云つたりしてもお互に意味が解る。同じやうな心持で成人して來たのだ。最う我々の連中で生殘つてる者は少ない。君と僕位の者だらう。生先が長かつた頃なら、お互に勝手な道を行つて、喧嘩をしても可かつたが、最う斯う連中が減つて、青年輩が我々を追越して我々と違つた方向に向つて行くやうになつては、お互は緊り手を引緊合つてなければならんぢやないか？　一つ杯を合せよう、而して昔に返つて Gaudeamus igitur でも唱はう。」

で、杯を合せて、それから二人して身に泌みるやうな、調子外れな露西亜歌を合せて、昔流行つた書生節を唄つた。

軈てレジネフがまた、

「君は是から田舍へ歸るといふが、歸つたッて永くは居られまいと思ふ。君が何處で何をして如何いふ風に死ぬか、僕には解らない……けれども、假令へば如何いふ事が有つても、君には隱家、死場所があると思ひ給へ。他でもない、僕の家だ。解つたかい？　思想界にも擬兵といふ者はある。擬兵にも隱家が無きやならん。」

ルーヂンは起上つて、

「難有う！　決して君の好意は忘れない。唯僕は隱家を作つて置いて貰ふ程の價値のある人物ぢやないよ。全然失敗つて了つて、思想界のためにも根ツから爲さんだつたからね……」

「そんな事はない！」とレジネフは遮つて、「誰が如何なつたつて、それは天命で、天命以外の事を望んでも仕方がない！　君は一生漂泊猶太人で終るんだと云つてゐるが……それがさ、然う一生旅をして行くのが君の本分で、それで君にも解らない天命に適つてゐるのかも知れんぢやないか？　だから世の言習に人は神を戴いて行くといふのは至極道理さ。（ルーヂンが帽子に手を掛けたのを視咎めて、）おや最う行くの？　泊らんのかい？」

「最う行かう！　左樣なら、難有う……併し僕は終を善くすまいよ。」

「そんな事が人間に解るもんか……如何しても行くかい？」

「行かう。左樣なら。御機嫌よう。」

「さうかい……そんなら、僕の今云つたことを忘れずに居て吳れ給へ。左樣なら……」

と抱合つた。ルーヂンは足早に室を出て行つた。

レジネフは久く室の中を往きつ戻りつしてゐたが、軈て窓際へ來て立止まつて、少し考へて、「薄命な男だなア！」と口の中で云つた、而して机に向つて妻へ贈る手紙を書出した。

戸外は風が出て凄い音がする。どッと烈しく吹付けて、玻璃戸ががた〳〵いふ。長い秋の夜になつた。此樣な晩に、屋根の下に溫かにして蹲踞つてゐる者は幸福だ……神よ、家も無くて彷徨ふ人々を救はせ給へ！

千八百四十八年の六月二十六日の日盛に、巴里で、所謂赤共和黨の亂も最う大抵鎭まつた頃、主戰隊の或大隊が聖アントニー寺前の狹い橫町の壘を拔いた。壘は最う幾つか砲彈を受けて壞れてゐる。守兵の中で未だ生殘つてゐる者が、壘を棄てて先を爭つて迯出す際に、ふと壘の頂の顚覆した乘合馬車の潰げた箱の上へ現れ出た者がある。見ると、脊の高い男で、故い上衣に赤い吊帶を締めて、白髮を振亂した上に麥藁帽子を冠つてゐる。紅い旗と頭の丸い曲つたサーベルを兩手に持つて、それを揮廻しながら、尙ほ上の方へ登らうとして、細い聲を振絞つて何か頻りに叫んでゐる。ヴァンセンヌの一兵卒が狙ひを定めてドンと擊つと、高い男は旗を取遺して、宛で誰かに低く辭儀でもしたやうな風をして、バッタリ倒つた……彈丸が胸に中つたのである。

すると迯出して行く叛徒の一人が傍の者に向つて、

「Tiens ! on vient de tuer le Polonais（ヤア、波蘭人が擊殺れた）。」

といふと、相手の男が、

「Bigre !」

と答へて、傍の窓の戸を悉く閉ぢた、壁に銃丸や砲彈の痕を斑に留めた家の綠の下へ、二人とも駈込んで了つた。

この le Polonais（波蘭人）といふのは——卽ちドミートリイ・ルーヂンの事であつた。

——（ツルゲーネフ作）——

夢かたり

一

其頃自分は母と二人で、さる海邊の町に住まつてゐた。自分は最う十七を幾月か過してゐたが、母は未だ三十五にもならぬ。若くて嫁いだ人である。父の歿くなつたのは自分の七歳の時で、また能く顔を見覺えてゐる。母は矮小で、頭髪の白ッぽい、綺麗な人であつたが、始終浮かぬ面の、些も沈んで勢の無い、擧動の活潑しない人で。若い頃から美人と名の通つたもので、歿くなるまで艶美で人好きのする風であつたが、あんな憂を持つた柔しく奥床しい眼差や、細く軟かい頭髪や、花車な手は復と見たことがない。自分は母を吾佛と崇めてゐたし、母も亦自分を愛してゐた……が、どうも面白く行かぬ。何やら自ら作せる障ではなくて、人には知られぬ、忘れ難い、可憂い事があつて、それが母の命を縮めるかのやうである。それは成程母は深く父を愛してゐたから、父を喪くして大層力を落した、永く父の事は忘れずに思つてゐたに相違ないが、唯それはかりではない。まだ何か其處にある、何とも擇らぬが、その落着いた動かぬ眼差や、きッと緊しく結んだ、一生其儘でゐさうな、美しい口元を見れば、然う思はれる、取留めたことはないが、どうも然う思はれる。

母は自分を愛するとは云つたが、また自分と云ふ者のあるのが母のためには耐へられぬ程辛くて、何か突退けるやうにする時もある。其時はふッと自分が厭になるのであるが、其程が過ぎれば、恐ろしく後悔をして、泪を流して謝罪を云つて、自分を引寄せてヂッと抱緊める。から一寸厭氣を差すのは身體が弱つてゐるからだ、不幸であるからだと、自分は思つてゐた。尤も自分も折々何故とも知れず、妙にむら〳〵と拗けた空恐ろしい氣になることがあるから、其所爲も幾分かあらうけれど、自分がそんな氣になる時にばかり母が厭がるのでもなかつた。母は忌中のやうに、いつも黒い衣服を着てゐた。隨分裕に暮してゐたが、殆ど誰とも交際をしなかつた。

二

母は自分の事ばかりを心に懸けて心配をしてゐたから、母も子も同じやうな世を送つてゐたが、かうした親子の關係は子の爲にならぬこともある……いや、ならぬがちのものである。それに自分は獨り子……獨り子と云ふものに満足に發育つものは少い。教育をするといふので、子供の世話を焼きながら、種々と張銘々の身を厭ふ……これが宜しくない事で、自分は我儘もせず、惡たれもしなかつた獨り子にはそれが多い、けれども唯早くから神經が衰弱してゐた上、一體蒲柳の質であつた——母に似たのであらう、面貌までが瓜二つであつたから。同じ年頃の者を朋とすることを嫌つて、總じて人交りをせぬ、母とすら打解けて話をすることも滅多には無かつた。何よりも讀書に獨り歩きが好きで、始終うつら〳〵と物を思つてゐた。何を思つてゐたとも云ひかねるが、唯もう〳〵何か閉めかけた戸の彼方に隱れてゐるものがあるので、その手前に立つて、出て來るのを待佗びてゐるやうな心持がする——其事其時を眇がうてもなく、唯何が隱れて居るのであらうと、其

様な事ばかりを思つて、待ち草臥れて、恍惚となる……でなければ、眠入る。若し自分に詩才があつたら、詩でも作つたらう、神いぢりが好きであつたら、僧にでもなつたらうが、然うした心は露ほども無かつたので、唯うつら／＼と物を思つて、何か心に待つてゐるばかりであつた。

三

今自分は夢のやうな事をうつら／＼と思つてゐる中に眠入ることもあると云つたが、一體自分は能く寢たものである――而して始終夢ばかり見る、殆ど毎晩のやうに夢を見る。それをまた能く記えてゐて、氣に掛けて、何かの前表に違ひないと思つて、その隱れた意を判じようとする。それに一つ夢を度々見ることもあつたので、誠に不思議な事に思つてゐたが、その中でも殊に或時見た夢が氣になつてならなかつた。何でも古い町の狹い、道の惡い通りで、兩方には屋根の頭の尖つた何階にもなつた家のある、その間を通つて行くのである。父を尋ねてゐるのであるが、父は死んだのではない、唯何か仔細があつて姿を隱して、卽ち此邊に潛んでゐるのである。で、自分は低い薄暗い門を入つて、材木や板の積んである處を通つて、その奧の家の、闇窓の二つ附いた、とある狹い室へ入つた。室の中程に父が房衣の儘で煙草を吸つてゐる。眞の父には露ほども似てゐない、脊が高くて、痩ぎすで、頭髮が黑くて、鼻が尖曲りで、眼が鋭く凄味があつて、見た所四十恰好である。見付け出されて不機嫌な體であつたが、自分も亦父に遭つても少しも嬉しいとは思はず――茫然として立つてゐた。すると、父は少し面を反けて、何か口の中でぶつ／＼云ひながら、小股に室の內を步き出したが、其中に休みなく何か云つては、肩越しに振返つて吾の面を見ながら、段々奧の方へ行く。室は見る／＼廣くなつて靄の中に消えさうになる……復父を見失ふのかと思ふと、急に心細くなつて、跡を追つて駈出したが、最う形は見えない、唯腹立たしげに、熊の唸るやうに、ぶつ／＼いふ聲が聞えるばかりで……氣も滅入るばかりになつて――眼が覺める。最うなか／＼眠付かれなかつた。翌日も一日此夢の事ばかり考へてゐたが、無論何も考へ付いた事はなかつた。

四

彼此する內に六月になつたが、自分共が住まつてゐた町は、此頃になると、恐ろしく賑やかになる。船は何艘となく港に着いてゐて、見馴れぬ人が幾らも其處らの町を徘徊する。其時分になると、自分は能く海岸通りの珈琲店や宿屋の前を彷徨いて、マドロスなどが布の差掛の下で、銘々麥酒を注いだ錫覆のコップを控へて、白木の卓に向つてゐる、その色々の風を眺めて面白い事に思つてゐた。

一日さる珈琲店の前を通ると、其店に一人の男が居たが、それを見ると、自分は動けなくなつた。長い黑のバラホン（夏服の一種）を着て、麥藁帽子を目深に冠つて、胸で手を組合せて、凝然と坐つてゐたが、薄い黑い捲毛が殆ど鼻の處まで垂つてゐて、薄唇の周には短いパイプの口を銜へてゐる。どうも見知つた人のやうである。淺黑の、黃ばんだ面の造作と云ひ、姿恰好といひ、どうも見覺えがあるので、我知らず立止まつて、誰だッけ？　何處でか見掛けた人だが……と考へ込んだ。すると、先の男も、多分自分が凝然と諦視めてゐるのに感付いたのであらうが、黑眼勝の鋭い眼でジロリと此方を視た。それを見ると、自分は思はず呀と云つた……これは尋ねてゐる、夢で遭つた父である！

見違へよう筈がない――そツくり其儘であ

ま一度見た顔に纏つた帽子のパナホンまでが、色合といひ、襟の附け方といひ、夢で遭つた時着てゐた浴衣に相違ない。

「夢ぢやないか？」と思つたが……そんな氣遣はない。眞晝で、四邊には人が喧擾してゐて、頭上には日が眩い程に輝いてゐて、眼前には四圍に人が居るのではない、活きた人が居るのである。

そこで自分は空虚いてゐた卓の側へ來て、麥酒と新聞紙とを誂へて、その不思議な人物の間近に座を占めた。

五

新聞を面と平均に持つて、倚ほ尻眼で樣子を覗つてゐると、其男は殆ど身動きもしない、唯をり／＼垂けた首を傾けるばかりで、人を待合はせてゐるものとは誰が眼にも知れる。自分は凝然と諦視めてゐたが……時々がらり氣が變つて、何で是が父なものか、些とも似た所はありはしない、予は放心して目を開いて夢を見てゐるのだ、と思ふ……かとすれば、ふと先の男が少し居住ひでも改すか、手でも擧げれば、また夢で遭つた父に相違なく思はれて、呀といはぬばかりになる、結局は先の男も自分があからめもせず視めてゐるのに氣が附いたやうで、初は不審さうな面が、後には小癪に障つたらしくなつて、此方を睨てゐたが、頓て起上りさうにする、その權勢に、卓に寄掛けてあつた細いステッキが轉がつた。自分は急に起上つて、それを拾つてやつた。胸がおそろしく騒ぐ。

先の男は作つたやうに莞爾して、禮を云つたが、軈て近々と面を寄せて、自分の顔を覗いて視て、眉を釣上げて、少し口を開いた、何か驚いたやうな樣子である。

急に冷かな、無作法な鼻聲で、「貴君はえらく禮儀が厚いですな。今時には稀な方だ、定めて親御さんの御教育が善いのだらうが、結構な事です。」

自分は何とか之に挨拶をしたか、今では覺えてゐないが、兎に角これで談話の緒が附いた。聞けば此人も自分と同國で、亞米利加に久らく居たが、此頃一寸歸つて來たのである。けれども又近々に行く／＼といふことである。男爵、何とかと名告つたが……善く聞取れなかつた。夢で遭つた父のやうに、此人の言語も常も終ひが口の中でぶつ／＼といふやうになつて判然せぬ。自分の名前を聞くから、名告ると、また愕然としたやうであつたが、頓て何時此地へ來て、諸と一所に居ると聞く、自分は彼と一所に居ると答へた。

「では御尊父さんは？」「最う餘程以前に歿くなつたのです。」彼の其名を聞くから、言ふと、唐突に餘所外れの高笑をしたが、頓て無禮を云つて、此樣な亞米利加風が附いて了つたので、私も隨分變物だと云ふ。それから、住居は何處だと聞くから、云々の處に居ると答へた。

六

談話の初には胸が波立つたが、それも次第に收まる。此人と相識になつたのを妙な事に思ふ外は、自分は何とも思はなかつた。但男爵が色々な事を聞く時に、片頰に微笑を含んでゐた、その微笑が厭であつた、射貫くやうな眼で吾の面を視る、その眼付も厭であつた。それを視ると、何處か柔しい中にも、鬼々しい所があつて……無氣味である。夢で遭つた父は此樣な眼付ではない。顔も奇異な顔で、鼻の脫けた、勢の無い、その癖若々とした、眼に若々とした顔色である。それに、側へ寄るまでは心附かなかつたが、此人の額には横に深く皺襞がある、夢で遭つた父には此樣なものは無い。

自分が住居の町名番地を男爵に告げてゐる

と、袖無外套を着た、背の高い黒人が背後から來て、輕く男爵の肩を叩いた。男爵は振向いて視て、「ア、待たせたなア！」と云つて、それから一寸自分に會釋をして、黒人と一所に咖啡店へ入つて了つた。自分は尚ほ差掛の下に止まつてゐて、男爵の出て來るのを待つてゐた、また談話を爲ようで待つてゐたのではない（何を話す事があらう）、唯最う一度逢つて、矢張父のやうに思はれるか、否だか、試して見たかつたのである。半時經つ、一時間になる……出て來ない。咖啡店へ入つて、室々を尋ねてみたが、男爵も見えなければ、黒人も居ない……由是觀ると、裏口から出て行つたものであらう。

少し頭痛がするから、新しい空氣を吸はうと思つて、海岸に沿いて、町盡頭の公園へ往つたが、此公園は二百年前に出來たもので、隨分大きなものである。大きな樫やプラタンの蔭を二時間ばかりも散歩して、家へ歸つた。

七

入口の間へ入ると、下女が心配さうな面色をして、倉皇と迎へに出て來た。その面色で、留守に何か變つた事があつたのを直ぐ見て取つたが、聞けば案の如くである。一時間ばかり前に、母の寝間で、偶然けたゝましい聲がしたから、下女が駈入つて見ると、母は床に倒れてゐる、氣絶してゐるのである。幾分か經つて、漸く人心地が附いたが、到底も起きてはゐられないから、蓐に就いた。吃驚した變な面色をしてゐて、一言も口を開かぬ。何を問いても默つてゐる。唯四邊をジロ〳〵視て、身震ひをするばかりで。下女の計らひで、醫者を喚びに庭男を遣つた。醫者が來て氣の落着く處方を書いて呉れたが、醫者にも母は何とも云はなかつた。庭男の云ふには、母の室で叫聲がすると間もなく、見知らぬ男が驀地に園の花床の上を駈通つて、町へ出る門の方へと往くのを見たといふ（自分共の住まつてゐた家は平家で、かなり大きな庭に向いて窓が開いてゐたのである）。庭男は其男の面を熟く視て置く暇が無かつたが、何でも瘦ぎすの男で、山の低い麥藁帽子を冠つて、長い上衣を着てゐた……と聞くより早く、「男爵の衣裳だわい！」と自分の頭に閃いた。庭男は其男を捉へることが出來なかつた、それに直ぐと呼ばれて、醫者を喚びに往つたから。で、自分は母の居間へ入つた。母は臥てゐたが、就てゐる枕よりも白い面をしてゐる。自分が判つたと見えて、力無げに微笑して手を伸したから、蓐の側に坐つて、色々に云つて問いて見ると、初は秘し隱しに隱してゐたが、それでも最後に恐ろしく怖いものを見たといふ。「誰か來たのですか？」と聞くと、周章てて、「いゝえ、誰も來はしないがね、唯……氣の所爲だらうよ……」と口を噤んで、手で面を掩した。自分は庭男から聞いた事を話して、序に男爵に遭つた事をも話さうかと思つたが……何故か言語が口元まで來て消えて了つた。それで、最後に思ひ切つて、幽靈といふものは白晝出るものでないと云ふと、母は私語くやうな調子で、「最う措してお呉れ、厭な事を言つてお呉れでない。何日か一度はお前にも解らうから……」とまた口を噤んだ。手は冷くなつて、脈も疾く、狂つてゐる。自分は母に藥を服ませて、少し他方へ寄つて、邪魔にならぬやうにしてゐたが、母は一日蓐を離れなかつた。靜かにして身動きをもせず、唯折々深く溜息を吐いて、おど〳〵と眼を視開くばかりで。家内中變な事に思つてゐた。

八

晩になると、母は少し發熱して來た。自分は追拂はれたが、室へは歸らず、隣座敷の長椅子に臥て、殆ど十分毎に起きては、足を爪立てて

戸口の處へ來て、聽耳を引立てた……いつも森としてゐたけれど、母も此晩は恐らく眠られなかつたらう。翌朝早く寢間へ入つて見ると、母は逆上せたらしい面をして、眼中に怪しい光を持つてゐた。晝の中は少しは快いやうであつたが、夕刻になると、また熱が發して來た。すると、其までは固く口を噤んでゐたものが、急に息氣續き忙しく口疾に物を云ひ出した。云ふ事に意味があるのを見れば、譫語を云つてゐたのではないが、際の無い事が續々出る。夜の十二時少し前と思はれるころ、母は突然震ひ上がるやうにして臥床の上に起直つて（自分は傍で看病をしてゐるのであるが）、話し出した。矢張急込んだ調子で、絶えず玻璃盃の水をがぶがぶ飲みながら、一度も自分の面は見んで話してゐる。折々言葉が斷絶れると、氣を勵まして更に話し續ぐ……宛で主は藻脱けの殼となつてゐて、誰かが母の口で物を云つてゐるのか、さなくば、母に物を云はせてゐるのかと思はれるやうな、誠に變な鹽梅で、夢中に喋つてゐるやうである。

九

母の云ふには、「少しお前に話して置きたい事があるのだがね、お前も最う小兒ぢやなし、承知してゐて貰はなければならないと思ふから、話すのだよ。私にね、極く仲の善いお朋友が一人あつたがね、其人が豫てまア好いとか何とか思つてゐた人があつて、其人の許へ嫁いたのだとお思ひ。だから夫婦なかは善かつたのさね。嫁いた其年だッけが、夫婦して少し保養をして來ようといふので、ペテルブルグへ出てね、上等の旅籠を取つて、芝居や寄席へ毎日のやうに往つてゐたのさ。私のお朋友と云ふのは隨分姿色が好い方であつたもんだから、大勢の人が目を注けて、若い男達は大騷ぎをするのさ——其中に一人……士官で、執拗く附け廻す人があつたが、何處へ往つても、其人が來てゐてね、黑瞳勝な厭な眼で人の面ばかり見るのだよ。相識になりもしないから、物を云つたことはないけれど、唯面ばかり視てゐるの——誠に遠慮のない、變な眼付でね。こんな人が居るので都住居も面白くなくなつて來たものだから、早く田舎へ歸りたいと思つてね、旦那を勸めて、支度をしてゐると、或日の事で、その厭な人のお同僚の士官さんたちが骨牌を弄るから來いと云つて呼びによこしたので、旦那はクラブへお出でなすッたのさ。それで、いつになく一人で留守をしてゐたところが、何時まで經つても歸つて來なさらないもんだから、下女を寢かして自分も蓐に就くと……何だか室の向うで微な音がするのさ——宛で犬でも何か引掻くやうな。それを聞くと、急に誠に氣味が惡くなつて來て、全身が冷くなつて、ぶる〳〵慄へながら、音の方を視詰めてゐると、隅の方にランプが點いてゐて、室は模樣絹で張詰めてあつたのだがね、ふとその模樣絹がむく〳〵と動いて、捲くれると壁の中から黑裝束をした脊の高い人が出て來たのだよ。それが、お前、例の厭な眼付の怖らしい人ぢやないか！ 聲を立てようとしても、聲が出ないわね。怖いので息氣を殺してゐると、其男が怖ろしい權幕をして、つか〳〵と側へ來て、何だか顏へ、ふはッと覆せたんだがね、何だか息氣の塞るやうな、重たいやうな、白い物さ……それから後は如何なつたのだか、覺えがない……覺えなんぞありやしないわね！ 死んでゐたのだもの、殺されてゐたのも同然だもの。その内に、その怖い霧のやうなものが散れると、私は……アノ……お朋友は漸く我に返つたが、最う室には誰も居ないのさ。それでも未だなか〳〵聲を立てられなかつたが、その內に聲を立てると……また四下がもや〳〵となつ

て了つたの‥‥
其内に、ふツと氣が附いて見ると、旦那が傍に居なさるのさ。二時までもクラブに引止められてゐなすツたんだとさ。旦那も顏色を變へてゐなすツて、色々問きなさるけれど、何とも云はずに了つたがね、それから、病氣になつたツけが、傍に人の居ない時、善く壁を檢めて見ると、模樣紙を張つた裏に、お前、隱戶があるのさ。それに嵌めてゐた結納の指環が失くなつてゐたツけが、此指環は變つた恰好でね、金の星と銀の星が七つづつ一つ隔に並べて附けてあつて、古くから家に傳はつた物だとさ。旦那が指環を如何したと問きなすツたけれど、何とも返答をしないものだから、何處へか遣したんだらうと云つて、方々尋ねなすツたが、何で何處にあるものかね。それから旦那は厭な氣持になつて來たものだから、一刻も早く田舍へ歸りたいと云つて、お醫者の許しが出るを待ちかねて、夫婦揃つてペテルブルグを出たがね、まア如何だらう！　立つといふ其日に、町でふと頭を割られて卽死した人を釣臺で擔いで行くのに出逢つたがね、それがさ、不思議さねえ！　例の厭な眼付の人さ、夜來た、怖らしい‥‥骨牌の事で殺されたのだとさ、まア！

それから、田舍へ歸ると、其內に‥‥初めて子供が出來てね‥‥旦那はそれから數年達者でゐなすツたけれど、何もお知んなさらずに了つたが、又何と云つてお話が出來よう？　自分だつて何も覺えがないんだもの。

でも、最う前のやうに面白くは行かないのさ。お互に氣が欝んで了つて、如何しても改らないの‥‥子供は後にも前にも唯一人しか出來なかつたが、其子は男の子で‥‥』

母は總身を戰慄かして、兩手で面を掩したが、頓て憤然となつて、

『だツて、私のお朋友に惡い所が有るだらうか？　何處が惡いんだらう？　それは罰が當つたのだらうけれども、神樣もかうした者に罰をお當てなさるとは餘り聞えない爲され方ぢやないか？　何にも惡い事を爲もしないのに、良心に責められてさ、最う餘程になるのに、今だに昔の事を憶出すと、何とも云はれなく情なくなるは何たる因果な事だらう？　マクベートはバンコを殺したのだが、何か眼前に隱顯いたのも無理はない‥‥私ア‥‥』

と云ふ頃には、最う談が紊れて、紛糾かつて、解らなくなつた。どうしても囈語を云つてゐるに相違ないと思つた。

十

母の話を聞いて自分は深く感動した――それは云ふ迄もない事である！　初から自分の事を話してゐるので、朋友の事ではないと思つてゐたが、口が滑つたので、愈々それに違ひないと解る。シテ見れば、あれが自分の父であるのだ、夢で捜したのも、現に見たのも、自分の父であるのだ！　母は殺されたと思つてゐるが、殺されたのではなくて、たゞ傷を負つたのみの事であるので有らう‥‥それ故母の處へ來たのであるが、吃驚されたのに吃驚して、逃出したのに相違ない。と思へば、何も彼も全然了解める。母が時々ふツと自分が厭はしくなるのも、絕えず欝々としてゐるのも、世と隔離れた母子で暮してゐるのも、何も彼も仔細が解る‥‥すると、頭がグル〳〵と旋轉るやうな氣がして來たので、兩手で頭を押へたが、押へたら停るとでも思つたのかも知れぬ。で、是が非でも、今一度父を尋ね出さずには置かぬと決心する、一筋に深く思込む。何故尋ね出す？　尋ね出して如何する？　と云へば、それは自分にも胡亂であつたが、唯尋ね出す‥‥父を尋ね出す――それが自分の懸命の事業となつたのである！　翌朝に

なると、母は漸く落着いて、熱も除く……で、眠入つた。そこで、母の看病を家主や召使に委せて置いて、自分は父を捜しに出た。

十一

言ふまでもなく、先づ一番に父に逢つた珈琲店へ往つて見たが、珈琲店でも誰も知つてゐない、氣が付いた者さへない。ほんの偶然の客であつたものと見える。黑人は亭主も氣が付いたといふ——形が形だから、眼に付いたのであらうが、名は何と云つて、何處に住まつてゐる者だか——矢張知らない。萬一を慮つて、宿所の書付を置いて、珈琲店を出て、それから町となく、海岸となく逍遙き、並木道を辿り、波止場を彷徨いて、人の寄る處は漏さず覗いて見たが、父に似た者も、同伴の黑人に似たものも、何處にも居ない！……姓を聞き外したから、警察へ掛かることも出來ぬ、けれども、內々で二三の警察官に若し尋ね出して呉れたら、厚く勞に酬いようと云つて、二人の狀貌を委しく話して賴んで置いた（尤も先方は瞻を潰した風で自分の面を見て、餘り眞面目にも信けなかつたやうであるが）。さうして晝食前まで尋ね廻つて、疲れ切つて家へ歸つて見ると、母は最う蓐を離れてゐたが、其樣子が平生のやうに鬱々としてゐるばかりでなく、まだ何處か變つた所があつて、何か陰氣な茫然した所もあるので、自分は甚だ氣遣はしく思つた。その晩は母の居間で夜を深したが、兩人とも殆ど物を云はぬ。母は骨牌で卜占を行る、自分は默つて其を觀てゐた。昨日の一件も、昨夜の事も、母は何とも云ひ出さぬ。宛で彼樣な奇怪な、氣味の惡い事は最う二人の口に上すまいと、云ひ合せでもしたやうにしてゐる。母の樣子を見ると、何となく後悔をしてゐるらしい、我にもなくツイ打開けて了つたので、氣恥かしく思つてゐるらしい、とは云ふものの、半は熱に浮かされて囈語のやうに云つたのであるから、或は何と云つたのか、善くは記えてゐないかも知れぬが——兎に角、自分も深くは咎めまいと、それを賴みにしてゐたやうである。成程、自分も深くは咎めなかつたし、母は然うと心附いてゐたらしいが、昨日のやうに、矢張自分と目を見合せるのを避けてゐる。自分は終夜眠が合はなかつた。戶外は急に恐ろしい暴になつて、風が凄まじい音を立てて吹荒れる。窓々の玻璃は躍り〳〵鳴る。空には恐ろしい叫聲やら呻聲やらが響渡る。宛で雲の上で何か爆裂したものがあつて、それが狂氣のやうに泣聲を立てて、震撼めく家の上を掠めて飛過ぎるやうな心持がする。曉近くなつて、自分はとろ〳〵とした……かと思ふと、ふと誰やら室に入つて來て、自分の名を呼ぶ——高聲ではないが、キツパリした調子で。面を揚げて見たが、誰も居ない、けれども、不思議な事には、自分は別段驚きもしないのみならず、反つて今こそ宿望を果す時といふやうな氣になつて、嬉しく思つて、手ばしこく衣服を更めて、戶外へ出た。

十二

暴風は收まつた……が、まだ餘勢が殘つてゐる。まだ早いので、町には人一人通らぬ。彼處にも此處にも烟突の破片やら、瓦やら、飛ばされた堺板やら、吹折られた木枝やらが轉がつてゐる……暴風の迹を見ると、『海は如何だつたらう？』と思はれたから、波止場へ往かうとしたが、何か來て引張るやうで、それに逆ふことが出來ずして、ツイ飛んでもない方角へ行く。十分ばかり行くと、今まで來たことのない處へ出た。足早といふでもないが、休みなく足を運んで行くその心持は妙な鹽梅で、何か非常な、世に有るまじい事に出逢ふやうな氣がする、必

ずその非常な事に出逢ふに相違なく思はれる。

十三

ところが、果して思懸けず非常な事に出逢つた！　只見ると、二十歩ばかり前方を、咖啡店で自分の居る處で父と物を云つたアノ黒人が行く！　彼時早くも眼を留めて置いたアノ袖無外套を矢張被てゐたが、宛で降つて湧いたやうに出て來て、曲折つた横町の狹い徒歩道を前方を向いて早々と行く〳〵！　と見るより早く、追及らうとして急ぐと、彼も振向きもせず、足を疾めて、急に出張つた家の角を曲つたから、自分も駈出して其家まで往つて、同じやうに急いで角を曲つて見ると……不思議！　そこは細長い町であるのに、最う影も形も見えぬ。朝霧が懸つて朦朧白み渡つてゐたが、ズツと盡頭まで眼が屆く、建家の數も算へられる程である……けれども、何處にも人の氣色もしない！　黒人は突然出て來て突然消え失せて了つたのである！

自分は驚いた……が、それも瞬く間で、忽ち變つた心持になる。眼の前の町は森として死んだやうな町であるが、覺えがある――これは何でも夢に見た町である。ぶる〳〵として、縮み上つて――尤も冷々とした朝であつたが――驚いた内にも必ず此處だと信ずる所もあつて、少しも遲疑せず、直ぐさま前へ進んだ。

眼を走らせて尋ねて見ると……果してツイ右側に、徒歩道へ出張つた夢中の家が見える。ソレ其處に、兩方に石で唐草の形を飾に附けた古い門も見える……尤も住居の窓は四角で、圓くはなかつたが……其樣な事はまア如何でも好いとして、門を敲いた。初は靜に、後は荒らかに二度三度敲くと、門が軋んで、重さうに、欠びでもするやうに開いて、若い召使らしい女が、寐起の儘と見えて、蓬々頭の、寐耄眼で出て來た。此家に男爵で何とかいふ方はお出でにならぬか？　と問きながら、忙しく眼を働かして狹い奥深い庭先を視廻すと……果して夢で見た通り……板も材木もある。

下女は、「いゝえ、そんな方はいらッしやいません。」

「いらッしやらん譯はない！　そんな譯はない！」

『でも最ういらッしやいません。昨日お立ちになりました。』

「何處へ？」

『亞米利加へ。』

「亞米利加へ！」と覺えず口眞似のやうな事を云つて、「では、また歸つてお出でなさるんだらうか？」

『どうで御座いますか。最うお出でなさいませんかも、知れませんよ。』

「此地には永く逗留して入らしッたのかい？」

「いゝえ、ほんの七日ばかりで、お立ちになりましたので。』

『彼方の苗字は何といふんだらうね？』

下女は凝と吾の面を視て、「何と仰しやいますか？　私達は唯旦那々々ッてましたから……ちよいと！　ピョートルどん！」と、自分が門内へ入りさうにしたので、聲を立てた。「ちよいと來てお呉れッてば。何方だか來ていろんな事をお問きなさるからさ。」

すると、不恰好な風をした、倔強な、職人體の男が家の内から出て來て、皺嗄れ聲で、「何です？　何御用です？」と問く。で、自分の尋ねる事を無愛想な面をして聽いて、矢張下女が云つたやうな事を云ふ。

『一體此家は誰の家だい？」

「親分の家でさ。』

『親分とは何をしてゐる人？』

「指物屋です。此町内はみんな指物屋でさ。』

『一寸親分に會へんだらうか？」

今ア不可ません、また家で[illegible]ます。』

『家の中へ入つて見ては惡いだらうか？』

『不可ませんね、またお出でなさい。』

『ぢや、後に來たら會へるだらうか？』

『會へますとも。何時でも會へます。商人でさ。だが、今ア駄目だ。まだ談法早うがすからね。』

自分が唐突に、『黑人が居るだらう？』と聞くと、その男は怪訝な面をして、初は自分の面を視たが、頓て其眼を下女に向けて、

『黑人とは！　まア、旦那、又お出でなさい。もつと後に來て、親分に會つて聞いて御覽なさい。』

自分が往來へ出ると、門はパッタリ閉つたが、此時は軋む音はしなかつた。

町や家の樣子に眼を留めて、それから其處を立去つたが、家へは歸らなかつた。何となく落膽したやうな心持がする。出逢つた事は決して尋常の事でない、奇妙な事であるが——それが馬鹿氣た事に終つて了つた！　自分は今の家で、見覺えのある室へ入つて、その中央に父の男爵が、房衣の儘で烟管を銜へてゐる所を面りに見ることとばかり思ひ込んでゐた、信じてゐたのである……ところが、主人は指物師で、會ひたければ、何度でも會はれる——なんなら、何か註文をしても宜しいと云ふ事である……

父は亞米利加へ立つて了つた！　はて、如何したものであらう？　何も彼も母に話して了はうか——それとも、父に逢つたことは永く自分の胸一つに收めて置かうか？　兎に角、あゝも不思議に仔細ありげに始まつた事が、此樣な他愛もない詰らん事で結局が附いたかと思ふと、何だか僞らしくてならぬ！

家へは歸りたくなかつたから、足の向く方へ往つて、町外へ出て了つた。

十四

何をも思はぬばかりか、殆ど何をも感ぜずして、其癖只管何か屈託しながら、うな垂れて、歩いて行くと、一本調子の、籠つたやうな、物凄い音が耳に入つて、ふと我に反つた。面を揚げて見ると、五十歩ばかり向うに海が轟いて騷いでゐる。見れば、自分は砂濱を歩いてゐるのである。昨夜の風に暴されて、海は眼の屆く限り白泡を吐いて、山の聳えたやうな大浪が曲りを打つて寄せて來ては、平な礒を拍つて摧ける。自分は其間近くへ來て、寄せては返す浪の痕が黄ろい砂の上に際取つて殘つてゐる邊を歩いてゐたが、其處には[illegible]のやうな海草の斷片や、貝殼の片塊や、蛇の這つたやうなアソーカ（海藻の名）——葉などが散つてゐる。[illegible]幾分ともなく悲しい氣に[illegible]れて、遙か後方の方から風に[illegible]つて飛んで來たか、頓て雲の斷片いた灰色の雲に白く雪の飛ぶやうに舞ひ上つて、さて颯と海上に降りて、浪から浪へと飛び移るやうにして、更に流れ去つて、漸く浪の白泡の中に白く紛々と紛れて了つたが、視れば其内二三羽だけは、跡に殘つて、何の趣もない砂濱の中央に、侘しげに横たはつた大きな岩の上を、去りかねて、徐に舞つてゐる。岩の側には見所のないアソーカが長く、短く、不揃に塊まつて生えてゐたが、その葉が黄ばんだ泥の中から絡みあつて出て居る所に、左して大きくもないが、何か闇味のある長いものが黒んでゐる……眼を留めて見ても、何とも正體が辨らぬが、何か黒ずんだ物が其處に、岩の側に、寂然と横はつてゐる……近寄るに隨つて、次第に定かに分明となる……

岩まで三十歩ほどの處へ來る……

あッ、人の形だ！　死骸、浪に打上げられた溺死人である！　岩の間近くになる。

ヤッ、男爵、父の死骸である！　自分は釘附に

されたやうに立竦んで了つた。是に至つて初めて氣が付いたが、今朝から自分は何か怪しいものに引廻されてゐるのである、その何かの虜となつてゐるのである。茫然として久らくは絶間のない浪の音の外に心を領するものもなかつたが、身に掩ひ懸る運命を考へて見れば、怖ろしくて聲も立てられなかつた……

十五

死骸は少し横向になつて仰向いて、左の手を投出して、それへ頭を載せて、右の手を屈めた體の下に敷いてゐる。マドロスの穿くやうな大長靴を穿いてゐたが、その頭をベッタリした泥の中に埋めてゐる。青い短いクールトカ(上衣)はビッショリ海水に浸つて、釦も外れてゐない。赤い頭巾が執念く首筋に捲付いてゐる。仰向けた面を視れば、微笑でもしてゐるやうで、上脣を反らした下から細い齒が隙間もなく竝んで見えて、半眼に閉ぢた眼の中は、白眼も曇り瞳も朦朧として、どれをどれとも見分けかねる程である。頭髪は水泡を蒙つて、塵芥に塗れて、泥の上に散らばつてゐたから、紫色の傷痕を留めた滑つこい額も露に見えたが、頬は落けて、痩せた鼻梁が白く際立つて隆起つてゐる。

昨夜の暴風は無事には濟まなかつたものと見えるが……哀れや亞米利加も見ずに了つたか！ 母を辱しめて日蔭者にさせた人は、なにさ、自分の父は——父であるとも！ ——それはそれに違ひない——今自分の足下に、泥に塗れて、哀れな態をして横はつてゐるのである。と思へば、胸が透いたやうな、氣の毒のやうな、忌はしいやうな、怖ろしいやうな心持がする中で、一番怖ろしいが勝つ。それも二筋に絡んで怖ろしい、面りに見た所も怖ろしいが、天網の免れ難いのを思へば、それも怖ろしい。例の、拗けた、空おそろしい氣が、何故ともなく、むらむらと起つて來て……息氣も塞りさうになる。心の中で、成程なア！ 何で予は此樣かと思つたら……血筋といふものは爭はれんものだなア！ と思つた。死骸の側に佇立んで、凝然と視詰めてゐると、据ゑた眼や、冷固けた脣が今にも動き出しさうに思はれたが、正可そんな事もなかつた、唯寂然としてゐるばかりで。傍のアソーカまでがそよろとも動かない。鷗も飛び去つて、何處に何の破片もなく、板片も、綱の斷れたのもない。寂寞とした中に、唯死骸と自分とが居るのみ——遠方で、海が鳴るのみである。振返つて視れば、後の方も茫漠としてゐる。天末に霞れた山の影が見える……唯そればかりの事である！ 此樣な人氣の無い濱邊の淤泥の中に此薄命の人を殘して置いて、魚や鳥の餌食にするのは如何にも心苦しい。救けたいと云つて、これが救けられるものでもないから、死んだのは仕方がないとしても、此儘にしては置かれぬ、人家の在る處へ死骸を運ばなければならぬ、それには人を見付けて連れて來るのが肝腎だと、獨り肚の裏で思案をしてゐると……ふと何とも云へず怖ろしくなつて來た。如何も死人が自分の此處へ來たのを知つてゐるやうに思はれる、此世の名殘にかうした姿を見るのも、その導きであるやうに思はれる——それのみならず、例の含んだやうな言語までが、如何やら聞えるやうで……はツと思つて駈退きながら、又振返つて視ると……何か光る物が眼に入つたから、立止まつて視ると、死人が投出した方の手の指に金の指環を嵌めてゐたのである。熟く視ると、母の結納の指環であるから、怖ろしいのを我慢して、死骸の側まで立戻つて、屈みかゝつて、冷くなつた指に觸ると、ニッチャリする。指環を外さうとするが、なか〳〵外れない。息氣が激むやら、齒の根が合はぬやら……辛うじて外すや否や、一目散に駈出した——何

か後から追覺けて來る者があるやうで、今にも追附かれて、捉まへられさうで：：：

十六

家へ歸つた時の自分の面には、多分怖ろしい思をして來た事が書いてあつたのであらう。母の居間へ入ると、母が急に起上つて、不審さうに凝然と自分の面を見守めたから、自分は一伍一什を話さうとして見たが、何分にも物が云はれないので、手短に默つて指環を出して見せた。すると、母の顏色は土の如くになつて、はツと見開いた眼の中も、今見て來た眼のやうに、曇つて了つたが、勢のない聲を立てて、指環を把ると其儘、蹌踉として自分に倒れ蒐つて、少し身を反らして放心と面を見守めて、石のやうに固くなつて了つた。それから、自分は母を兩手で支へて、立ちながら、夢を見た事も、父に邂逅つた事も、何も彼も遺漏なく徐に話して了つた。母は自分の話し終るまで、一言も發せずに聽いてゐたが、其中に胸が次第に高浪を打出して――ふと眼が爛々と光つたかと思ふと、忽ち又伏目になる。軈て指環を無名指に嵌めて、少し傍寄つて、外套と帽とを取りさうにするから、何處へと問くと、不思議さうに自分の面を視上げて、何か云ひたいが云はれないといふ風でゐたが、幾回か身震をして、手を温めるやうに揉んで、さて漸く直ぐ行からと云ふ。

『何處へ、おツかさん？』

『死骸の在る處へ、さ：：：如何なだか見たいから：：：それに違ひないか如何だか：：：屹度解るよ：：：』

諫止めようかとも思つたが、母は殆ど取逆上せてゐる。到底も止まるまいと思つたから、連立つて戸外へ出た。

十七

復た砂濱を歩いて行つたが、今度は自分一人ではない、母の手を引いてゐる。海は前に來た時よりも遠くへ退いて靜まつてゐたが、浪の音は低くなつたと云つても、まだ／＼烈い音で、物凄いやうである。やがて行先に孤岩が見え出す――ソレ其處にアソーカも見える。ト瞳を定めて、かの淤泥の上に丸くなつて寢てゐるものを見出さうとして見たが、何も見えない。傍近くへ來た時には、足の運びも自ら緩くなつたが、かの黑い動かぬものは何處へ行つたのであらう？　唯アソーカの莖が既う乾いた砂の上に黑ずんで見えるばかり。岩の傍まで來て見たが：：死骸は何處にも見えない。死骸の在つた處は凹んで、手や足の跡も顯然殘つてゐる：：：四邊のアソーカは蹂躪られたやうになつてゐて、一人の人の足跡が砂濱を過ぎて、磯地の處まで附いて、其處で消えてゐる。

自分は母と面を視合して、互に銘々の顏色の變つてゐるのに驚いた：：：

では、一人で起きて、何處へか往つて了つたのであらうか？

『お前の見た時には確に死んでゐたのだね？』と母が小聲に問く。

自分は物を言ひ得んで、唯頷いたばかり。死骸を見付けてから、まだ三時間と經たぬ：：：誰か見付け出して擔いで行つたものであらうか、誰が擔いで行つたのか、擔いで行つて如何したのか？　又一穿鑿せねばならぬ。

それよりも、差當つて母の介抱が肝腎であつた。

十八

母は未だ此處へ來ぬ内から、熱が發して來たけれど、それでも我慢をしてゐたが、彌々死人の行方が分らぬとなると、落膽して、茫然となつて了つた。氣が狂れねば幸いがと思つた程であ

る。漸くの事で家へ連れて戻つて、床に就かせて、復た醫者を附けたが、母は少し落着くと、早速自分に『彼人』を尋ね出して來いと云ふ。自分は承知した。けれども、如何に手を盡して尋ねて見ても、如何も分らない。度々警察署へ往つたり、近傍の村々を遺漏なく尋ね廻つたり、處々の新聞に廣告を出したり、彼處此處で問合せたりして見たが――何の效もない！　ふと濱方の去る村で溺死人を引揚げた話を聞いたから、早速其村へ往つて見ると、最う埋葬して了つた後であつたが、人相を聞いて見ると、どうも父ではない。どの船で亞米利加へ往つたのか、それも聞き出したが、初は暴風の時に難船したやうに皆が云つてゐた其船も、數箇月經つたら、紐育の港に繫つてゐるのを見掛けた者があると噂する。殆ど手段が盡きたから、責めては彼黑人なりとも尋ね出さうと思つて、自分の家へ名告つて來て呉れろ、さうしたら莫大の謝金を贈らうと新聞紙で廣告すると、成程袖無外套を被た、脊の高い黑人が留守に來たさうだ……けれども、下女に種々の事を聞いて、其儘プイと去つたきり、最う尋ねて來なかつた。

と云ふので、父は……實の父親は行方不知となつて了つた。烟となつて消えた儘音沙汰も無くなつて了つた。母とは最う父の噂も爲なかつたが、唯或時母が何故お前は早く奇怪な夢を見た話をしなかつたのだと云つて異しんで、シテ見ると、屹度アレが……と云ひさして、口を噤んで了つたことがある。母は久らく病氣でゐたが、全快しても自分との關係は最う以前のやうな譯にはいかなかつた。如何も自分に對ふと極りが惡い――それが死ぬまで改らなかつた……とア、如何も極りが惡いのであらう。さて斯うなると、最う駄目なもので。何事も時が經てば忘られる、假令ば內輪の愁歎話にしても、餘熱が冷めれば氣が脫けて腸に浸みなくなるものであるが、親身の間で極りが惡いといふ氣が差したら――最う到底も根から忘れては了はれぬものである。自分はあれ程心の騷いだ彼樣な夢は、それからは最う一度も見なかつたし、又再び父を尋ねもしなかつたが、唯時々妙な夢を見た――今でも見るが――何でも遠方で何か泣くやうな、何か絕えず悲し氣に訴へるやうな聲が聞える。到底も越すことの出來ぬ程高い壁の彼方に聞えるのであるが、それを聞くと、腸を絞られるやうな心持がするので、眼を閉ぢた儘で泣く。人が呻くのか――それとも、海が荒れて物凄い音を聲尻長く立てるのであるか、更に辨らぬ。軈て其聲が次第に變つて、獸か何ぞが低く唸るやうな聲になる――と、心細く怖ろしくなつて、ツイ眼を覺して了ふのである。

――（ツルゲーネフ作）――

親ごゝろ

―な、な。ぢやア何だね、お前さんとこの娘御は別品なんだね？ なアる程な。イヤさうでごあせう。お前さんに似た日にやア、堪つた者ぢやアねえからね。」と肥滿漢の商人は額中を皺だらけにして笑つて、「ふむ、なアるほど。お前さんに生寫しなんだ。ね？ ソノお前さんの十九の時に生寫しなんだ。」

餘り嫗にすぎたとでも思つたのか、かう云直して、ズッと乘合を視廻すと、皆がをかしがつて笑ふ、その樣子が宛で心で頷きあふといつたやうな鹽梅であつた。けれども、田舍者の老婆さんの答を聽くと、商人は稍心を動かした態で、眞面目な面色になつた。

老婆さんのいふには、「いんね、親仁似でござりますよ。親仁にや酷肖でござりますけんど、氣質はこの私に似てをりますだ。だもんだで、學校でも始終一番で、いつでもハア人より先に聲が懸るだからね。私も若い時分は丁度同じやうで、何か難かしい事べえあると、直ぐ先生樣が名指で私を呼出さッしやりましッけえ。」

―はこれ。ぢやア何だ、最う少し學問させたら、娘子はお姫樣にでもなる所だつたんだ。惜いことをしましたね。」と肥滿漢は乘合に目語して、故意とらしく殘念がると、乘合は皆面白い方に遭つておもひ懸けぬ慰を致しますといひたさうな面色をして商人の面を視てゐる。

老婆さんは娘をさる安ッぽいものに思はれたのが殘念さうな樣子で、「それによ、私が娘は佛蘭西で修行のうしたでござりますよ。私イ附いとるからにや、佛蘭西へ遣らねえでは濟まされましねえ。親仁殿あ學なんぞの方はいゝから解んねえ人だアから、何だ彼だ云はしッたけんど、私イ到頭言條を徹したんだ。テレザは私等が樣に一生百姓して置かせにえ、最と出世べえさせねえでは成んにえッてね、お前さま。」

「へ、へーい。ぢや、佛蘭西語もいけるんだね？」と剽輕者はをかしく意味ありげに眉を釣上げた。

「一度お前さまに聞かせてえだね。ぺーろぺろ、ぺろ〳〵、そらほんにカナリヤの囀るやうでござりますよ。だもんだで、お前さま、彼が村さア戻つて來ると、私等が所の郵便局長樣の總領殿のハンスさまがよ、一つ試して呉れべえ、何でもハア饒舌り込めてやらねえではなんねえッてね、掛つたッけえ、終局にや手前の方が饒舌り込められて默ッちまッただ。それからハア村中の評判で、あんねえな姉はねえ、眞の佛蘭西人のやうに口イきくッてね、お前樣、えら評判のうされましッけ。」

老婆さんは手を戰かして膝に載せた籃を引寄せて、丁度日の射つてゐる車室の板目へ首を凭せたから、娘自慢の微笑を浮べた上に、金色の日光を受けて、面は徐鮮いで見えた。

商人が、

「いや、村の若衆が可愍され。娘子が村へ歸つて來たら、皆大騷ぎやつたでげせう？ 定めて大熱々の先生もあつたでげせう？」

「ヘッ！ 一寸外面へ出ようもんだら、蚊ア見るやうに、男がぶん〳〵いらて群集つて來るだ。ほんに婿ウ取らうと思や、幾干でも好え若衆で來者はあるだ。譃と思ふだら、リュチメイエル・ヤコブを見なさろ。彼人は何でもハアえらい執心でござりましッけ。身臺のえら好え人で牛だら四匹も持つとッて、每年一匹宛は蛇度屠すだ。

そんだけんど、村の若衆なんぞの嫁ッ子にせうツて、テレザに錢ィ掛けたでねえだからね。今時百姓なんぞになつて、何としますべえ？　腰ィ曲るまで鍬柄把つて稼いだとツて、いつ迄經つても矢張元の水吞だアから、ハア終へねえ事だと申すことでござるよ。テレザにやア私見たやうな事アさせられにえ。彼だとツて最と出世べえせうと思つとるだんべえからツてね、お前様。」

「そりやア然うでげせう。大方百萬兩といかずば責めて五十萬兩位持つてる奴でなきやア、亭主にしねえ位な見識なんでげせう、それとも最と上手を行つてるかも知れねえてね。ま、一體どんなお子でげすい？　矢張、髪の白ッぽい方かね？」

「いんね、胡蘿蔔みたやうな色でござりますよ。」

「胡蘿蔔みたやうな色の？　妙でごすな！　何でげすかい、小作で、肥滿つてる方ぢやアげえせんかい？」

「いんね、脊のすらりとした淸癯な娘でござりますよ。親仁殿が痩ッこけた人だアに、私が娘は親仁似でござりますからノシ。」

「何をしてゐなさるんでげすい？　矢張炊婢かね？」

「炊婢なんぞ、お前様！　仲働でござりますよ」と、憚りさまといひたさうな面色をする。

一車擧つて腹を抱へて笑倒けた。兎角する中に汽笛がヒューと鳴渡る。それを聽くと老婆さんは突と起上つて、乘合の笑ひ動搖めくを振向きもせず、匆々と手荷物を片付けて、蓋の隙間から黑麵麭と赤い林檎が透いて見える籃を左の手に掛け、摘立の菠薐草の青い葉がはみ出した風呂敷包を右の手に持つて、人より先に降りようといふので、入口の所まで出懸けて來た。程なく娘に逢はれると思ふと、嬉しくて堪らぬと見えて、餘の乘合はいふもさら、今迄差向つてゐた肥滿の商人をも殆ど忘れたやうになつてゐる。

やがて列車がプラットフォームへ差懸る、皆おもひ〳〵に降りる準備をはじめる。

老婆さんは戰く手を戶の引手へ掛けてゐたが、ドンといふ響で危なく倒れさうになつたところを、辛と引手に掴まつて押耐へた。手ばしこく戶を開けて、突と出たときには、今此處で娘に逢ふことばかり思つてゐたから、あはや手を擧げて抱付かうとしてみたが、かなしやプラットフォームはがらんとして人一人ゐない。

けれども彼方の出口の方を視ると、戶の外に出迎の人が夥しく折重つて見えるから、勿論テレザも彼中だらうと、潮の湧くやうに車を出て來る人の間を潛脫けて足早に行かうとするが、押退けられたり、突飛されたり、動ともすると後から來た者に追越されて、人の後に立往生をしさうになるので、老婆さん大に憤然となつて、向うに見える戶口まで往けば、テレザに逢へると思ふから、その戶をヒタと視詰めた儘で、死力を出して無二無三に押通る。

「ボル、デュ、ラック、ホテルでございます、お泊を願ひます！」といふ大きな聲が突然に耳の側でしたので、老婆さん肝を潰して極り惡さうに、

「辱ならござるけんど、私イ、テレザが迎に出とをるだから。」

哄と笑ふ聲が四方に起つた。と、氣が附いて見ると、これは自分に云つたのではないので、今しも列車を出て來た紳士に云つたのである。

扨、テレザの姿が見えないので、餘儀なくステーションを出は出たが、ハタと當惑した。ステーションの前は材木を敷詰めた廣小路で、それから道は蜘手に分れてゐる。どの道を行つて可いものか、判らん。途方に暮れもするし、ま

た心細くもなるが、それにしてもテレザは病氣で來られぬのであるまいか、何か變つた事が有るのではあるまいか、と思へば、それも氣に懸る、宛で林の中を迷つてゐるやうな譯柄で、どの道を行くことも出來ない、何處へ出ようも知れぬと思へば。

　それもさうなら、から町の蜘手に分れて、大きな家の建こんでゐる處で、如何してテレザを尋ね出さう、と思へば、泣出したくなるのを、ぢッと怺へは怺へても、さて、いつまでも一所に立往生してゐられもせず、何處かへ行かなければならんから、不得已に歩きだしたが、町の方へは行かないで、反對の方角に當つて、河岸に何やら園めいて樹を植込んだ處がある、その方へと辿つた。

　先の程からステーションの車寄の太い柱の後から若い女が幾度となく首を出しては又引込めてゐたが、一番しまひの乘合馬車が車掌を車後の踏板へ載せて驅出して行くを見澄まして、やう／＼柱の後を出て、急いで來たためでもあらうか、せい／＼しながら、老婆さんの跡を追つて驅出しながら、「阿母さん／＼！　何處へ行くんだよ！」と聲を掛けた。

　老婆さんは立止まると與に振返つて、それと見るより莞爾々々となつて、

「テレザだアな！　やれ／＼、嬉しや！」

と喜びの餘りに聲を揚げた。

　テレザはお袋の側へ來て、頰へ接吻したが、至極冷淡なものであつた。

「何處へ往かうと思つたのサ？」

　けれどもお袋は娘の無愛想なのには少とも氣が附かず、たゞ久しぶりで逢つた嬉しさに、ぞく／＼しながら、

「ま、えら困つたと思はッしやい。大方手紙が屆かねえで、そんで來ねえだんべえと思つただよ。こんねえな、お前、廣い處さア來て、知音緣引もなくッてよ、うら一人でハア如何しべえと思つただ。何でこんねえに遲くなつただアね？」

　テレザはまだ息氣を激ませながら、「時間を間違へたのサ。私はまた急行で來るんだらうと思つたもんだから。急行だと遲く着くんだから、それでサ。でも急いで來て好かつたわ、さうでないとお前は迷子になつちまふ所なんだよ。此方へ來たつて、何處へも往けやアしないんだよ。」

　話しながらもお袋は横目を遣つてチョイチョイ娘の様子を視てゐた。これがまア我娘のテレザであらうか？　何家かのお孃様か今日を晴と着飾つたやうで、何とも云へず様子が宜い。それに深張の傘まで持つてゐる。此前見た時とは萬事様子が違ふ中にも、殊に面相が全然違つて了つて、むかしの娘らしく愛度氣ないところは失くなつて、眼差も猛く殆ど人を人臭いとも思はぬ色が見える。何となくテレザらしく思はれないので、妙な心持がするけれど、それもほんの瞬く間の事で、母の身になつては、兎も角も嬉しくて鼻も高くなるから、往來の人が殊に目を留めてテレザの姿を見返りがちに行過ぎるのを見ても、何がなしに嬉しさが込上げて來て、それにつけても自分がみともない服裝をしてテレザと幷んで行くのが少しは恥かしいやうな極りの惡いやうな心持もする。娘はレースで緣を取つた、燃えるばかりに紅い傘を玩弄にしながら、世にも平氣な面で、

「あゝ熱い！　また飲みたくなつちやッた。何處かで御膳を喰べて行かう。阿母さんもお交際ひな。」

　お袋は驚いて、

「お前等まんだ飯イ食はんだかね？　水ウ飲みてえんだら、そーら、彼處に在るだよ。」暫く杜絶れて、頓て少しは恨みがましく、「モノお前

といふ人は、親仁さんは健在なかとも云はねえだね。私が遠方の所を態々出て來たのも、親仁さんの事で相談打たうと思ふことが有るだからだによ。親仁さんもノシ、近來はえら弱らしッて、口イ出して何とも云はねえで隱してござるけんど、私が側で見てえると、どうも平生のやうでねえだ。」

「大した事ア無いんだらう？　私が記憶えてからも、家の阿爺さんは始終何處かしら惡いんだからね。」とあまり氣にも留めぬらしい。

「それからノシ、お前等の樣子も聞きてえだ。親仁さんもえら心配さしッてだ。手紙ぢやア善く解んねえと思へ。何だかどうもハア變てこで、何といふこともねえだが、何だかどうも……だもんだで、親仁さんも、こら何でもお前等が鹽梅でも惡いのを隱しとるでねえかッて云ふだ。それによ、何で手紙は留置郵便で出せッていふだか、から解んねえだ。御主人樣が立身でもさしッて、お前等もお供のうして何處へか往つたでねえか、とも思つただがね、親仁さんのいふにや、いや然うでもねえ、住替のうしたかも知んねえッて、云ふだ。それから種々相談打つて、ま、兎も角も私が出て樣子べえ見て來うッて、そんで出て來ただよ。」

テレザは何か濟まんことがありさうで、面色が稍曇つた。

「あらほど心配おしでないッて言つて上げたのに！　何が異つたことが有るもんかね、馬鹿らしい！　あれさ、あッちの道を往くんだよ。」

母子の者は今熱鬧場へ差懸つた。驀然に驅けて來た馬車の輪にあはや懸けられようとして、老婆さんは狼狽へて飛退いた。やう〳〵向うの人道へ移つて、ホッと息を吻いたが、車輪の音や、人の喚聲や、鞭の音や、汽笛の響が混淆になつて、その喧しいこと氣も遠くなりさうである。

「ホー、喧しいこんだ、氣べえ違えさうだ！」と老婆さんが小言を言つた、その聲が餘り大きかつたので、往來の人が皆振返つてじろ〳〵視る。テレザは堪らなくなつて、お袋の側をツと離れて了つた。

徒歩で行く人、馬車で行く人、往來が暫くも絕えない。

群衆に交つて行くと、皆母子に目を留めて、殊にテレザの姿をじろ〳〵視る。娘が容色美だからと思ふと、お袋も鼻が高く、酒に醉つたやうな心持になつて、おぼえず罪のない微笑を口頭へ浮べた。

けれども、テレザは行けば行く程益々不機嫌になる。お袋のぼろ〳〵した風を往來の人が珍らしさうに見るのが、如何にも極りが惡いので、次第にお袋には遠離つて、此田舍婦の連は何處に居るといつた樣な面をしてゐる。

「テレザ、そんねえに急ぐでねえよ！」と聲を懸けながら、お袋は息を切らして娘に追付いた。

トある大きな店頭に、玻璃の箱に種々の品物がならべてあるのを見付けて、老婆さん駈出して覗きに行つたが、大きな聲で讃歎した。

「見さい〳〵、何でもあるだ、無えもんは無えだ！」

眼に觸れるもの皆おッ魂消る料とならぬはなしで、

「見さい、この何だら道具の入ッてる箱は大したもんだねえか！　ま、いろんな物を作出すだなア！　こんねえな物も買ふ人が有るだアね。」

今一つの箱に移らうとしたから、娘は呼び立てた。

「さ、行かうよ、阿母さん！」

ズッと五六間も先へ行つて、待合せてゐたのである。

頓て橋の側へ出た。此處は今來た通りよりも

無闇である。お袋は今まで饒舌りつゞけに饒舌つてゐたが、此時ふと珍らしい物を見付けたので、默つて了つて、口をアングリ開いて、凝と視詰めた。馬車は幾臺となく長い行列をなして群衆の中を縫つて行くのが見える。馬車の中には白い衣服を着た少女と若い盛裝した男が對合つて乘つてゐる。華やかな面や、白い衣服や、風に飄々する花嫁の面掛や、車に結付けた種々の花が、眼の前を夢のやうに移つて行く。

「二つ、三つ、四つ、これで六臺……ハレマ、馬車が十臺！」と口へ出して數を讀んで、大きな聲で、「魂消たこんだぞ！　馭者どのまでが白の手袋をしとるだ！」

匆々と先へ立つて行く娘の跡に辛うじて續きながらも、尙も饒舌りやまない。

「うらが親仁さんの所へ嫁ツた時たア、おツ月さまと鼈ほど違ふだ。彼時の皆歩行いて、まんづお寺樣さア往ぎて、それから行列して、矢張歩行いてリドウヰールへ往ぎて、彼處の『金獅』で酒宴しツけ。そんで何程掛つたといや、五フランと少しばかしだつたと思へ。あんねえに面白かつたこたア、ツヒぞねえた。あの衆だとツて、あんねえには行くめえ、私等ア年百年中藷べえ食つとるけんど、其代是迄親仁さんと顏一つ見あやつたこたアねえだ。他衆は其眞似が出來るか如何だか、覺束ねえ事だよ。」

お袋はながながと饒舌りたてたが、テレザはろくろく聽きもせず、眞紅になつて、腹立だしさうに眼ばかり光らして、傍視もせずに匆々と行く。

をかしな素振をするので、お袋もやうやう氣が附いたと見えて、

「テレザ、お前等如何かしたでねえかね？」

娘は一向返答もしないで、ずんずん行く。見れば見るほど佛頂面をして穩かならん樣子なので、

「コレ如何かしたでねえかね？」

とかさねて氣遣はしさうに尋ねた。

でも矢張默つてゐるので、此度は側へ來て、心配さうに娘の顏を窺きこんで、

「鹽梅でも惡えだかね？」

「極りが惡いんだよ！」

と唐突に我鳴りつけた。

お袋は吃驚して後へ退却つた。

それからが小言だらだら。それをお袋は駢んで歩行きながら、默つて、悲しさうな面をして聽いてゐる。

「町中でそんな大きな聲を出して、極りが惡くなくツて？　皆が振返つて面を視てるぢやないか？　面を視て笑つてるのがお前の眼にや入らないのかい？」

癇癪まぎれに激烈叱り付けると、お袋はあやまり入つて、俯向いたまゝ、小聲で申譯をした。

「だとツて私ばかし大え聲しるでねえがね。だからこんねえに喧しいでねえかね！」

「大きな聲するツつツたツて、通る人の評判する奴はないよ。それからお前のその服裝はまア何といふ服裝だえ？　皆が眼を圓くして視るぢやアないか？　何だえ、その持つてる物ア？　この包ン中の物は何だえ？」と下手な裁判官が被告を捉まへて審問でもするやうに、頓る大風な尋ねかたである。

「旦那樣の所へ菠薐草をお土産に持つて來ただよ。手ぶらでも來られねえと思はツしやい。」

「ヘン！」と娘は鼻の頭で吹飛ばして、「そんな物ア此地ぢやア市へ行きやア一文も出やしない。」

「でも此樣に善えのは無かツぺえがなや？」

と辯解した。

「何だい、其籃ン中の物ア？」と赤い傘を擔いで、尙も審問を續けた。あら、まア、厭な！

「黒麵麭だよ！　正可私ン處へ持つて來たんぢやあるまいね？　ほんとに馬鹿にしでないね。なんぼ町だッて、麵麭位は御座いますよ。それもさうだが、ま、何だッて今時分出て來たんだらう。人が手紙を出す毎に來い〳〵ッて云つてやつた時分にやア、挺でも動かなかつた癖に。」

「都合の惡え時來ただかね？　都合が惡えんだら、直ぐ戾つても可えだがね……」

と云つたが、頗る小聲であつた。

默つて、悲しさうな面をして、凝然と地面を視詰めたまゝで、娘の後に隨いて步いて行くが、最う嬉しいのも珍らしいのもなくなつて、唯持物が荷になるばかりで、溜息をしたり、呻いたりしてゐる。テレザは足輕に步いて行くけれど、これも顏色を視ると怏々として、樂しまぬ所あるらしく、矢張お袋とは離れ離れになつてゆく。焦れてでもゐるのか、をり〳〵赤い傘が肩の上で躍る。

面白からん町が何處までも續いて、素人家が素人家に接續き、店が店に聯つてゐる。處々狹い横町があつて、そこには薄黑い汚ない壁と陰氣らしい小さな窓が見える。一方には、壁と壁との間に插まつて、横町の突當りに、をりをり河岸通りがクワッと明るく見える。母子とも一言をも交へない。殊にお袋はあれほど思ひに思つて來たところを、から冷淡くされたので、少し當が外れて、しよげた態でゐる。

ふッと氣が付いて見ると、テレザがトある横町へ逸れたので、吃驚して追蒐けて行つて見ると、娘は何處かの知らん家へ入らうとして、その入口に立つてゐるから、

「テレザ、何處へ往ぐだね？」

「咽が乾いて仕樣がないやアね。」といふが返事で、戶を突開けて、「何故立止まッちまッたの？」

で、お袋も據どころなく、娘の後に從いて、何だか薄氣味が惡いが、恐々えたいの解らぬ家へ入つた。

薄闇い座敷を視廻して見て、吃驚した。これは清潔な旅籠屋である。が、幸に客が少なかつた。尤も少しは居たが、それは奥の方の料理場の側の薄闇い所に居るので、老婆さんホッといふ息をして、椅子に就いた。

テレザは馴染客といふ外見で、周章と出て來た女中に、憚り氣なく麥酒二杯を命けてから、ふとお袋の方を向いて、

「それともお前は葡萄の方が好いかい？」

「私かね？」とお袋は狼狽して、「い、いんね、矢張ソノ麥酒が好かッぺえ。」

お袋は酒杯を口へ附けたばかりで下へ措いて了つたが、娘は一息に飮干した。それからはグッと機嫌が直つて前よりは愛想も善くなつて來たから、お袋も辛と安心して、最う悄々しないで、無所畏に四邊を視まはし出した。

奥の方の一座は色の生白い、虛飾家らしい若旦那風の男の一座で。若旦那が時々卓の上へ金貨をばら〳〵と撒いて、葡萄酒の代りを持つて來させ、大盤振舞をやるので、末者共は妄におべッかッてゐる。その代り葡萄酒を持つて來る小綺麗な婢を捉まへて接吻するだけは若旦那の特權で、これが懷を傷める儲けと見えた。

老婆さんはこの有樣を見て眉を顰めてゐたが、婢がそんな亂らな事をされても餘り厭がりもしないので、ます〳〵呆れかへつてゐた。

命けて二杯目の麥酒を持つて來てからは、テレザは一層愛想善く口を開きだして、ヤレ久らく逗留してゐる積りかの、町へ出て如何な氣持がするの、と尋ねた。

娘に愛想よくされてお袋はころ〳〵となつて了つた。婢が出て行くのを待ちかねたやうに、娘に向つて、

「あんねえに自墮落でねえと、器量は佳し、愛想は好し、何處へ出しても立派な姉だけんど……大方良家の娘子だんべえ、おしやらくでもまんた何處か取柄がある。だけんど、あんねえな若衆の前で……

といひかけてふと口を噤んだのは、テレザは密に苦笑したからである。

「取柄なんぞがあつてお溜小法師があるもんか！」と娘は鋭く云つた。「お前は何も知らないから其樣な事いふんだけど、あんなあつかましい厭な奴ッちやないんだよ。」

といふ時の面は眞紅になつてゐた。

「お飲りでないか。」と云つてテレザはまた一杯仰飲りつけて、「さア是から意地汚なしだ。お前もさぞお腹が空いたらう。」

娘がグイ／＼仰飲るのは、お袋は世にも淺間しいことに思つたから、それを云はうと思つてゐるうちに、かう云はれたから、狼狽てて、

「うんにや／＼。餘計な錢遣はんが可え。お前等食ひたいんだら、食へさ。うらア澤山だよ。だがノシ……モノ……お前等如何して酒え飲むやうになつただね？　何處で飲み習つただね？　錢イ溜めべえとは思はねえでからに……」テレザが食事をするとき、また例の小綺麗な女が出て來たから、此度は間近でつく／＼樣子を見たけれど、別段あんな厭な奴ッちやないといふ程厭な所も見えないので、テレザは何をいふかとお袋は思つた。そこで娘を見ると、さも甘さうに豚の腿肉をもぐ／＼食つてゐるので、老婆さん少し羨しくなつたところへ、テレザが食べろといふし、婢も頻りに勸めるので、ツイ匙やフォークが出ることになつた。老婆さんひどく極りが惡がつた。老人の癖にこんな贅澤をしては濟まないと內々思つてゐながら、さうもならなかつたので、少しは言譯らしいことを言つてみたくなつて、

「家ぢやアノシ、布片子一つ切るでも、えら心配で、百遍も引繰返しおッ繰返し仕てから、漸と切るだよ。親仁さんの日曜着の上衣もえらみとむなくなつたで、最う外へは着て出られねえと思へ。だから日曜にやア家にかッ蹲踞んでをらねえではなんねえだから、何でも一つ新らしく拵アねえではなんねえだけんど、錢が無えだ。なか／＼衣服どころぢやねえ。外に據どころねえ入途が幾干もあるだ。それによ、最う直き」と小聲になつて、宛で言葉が口の頭へ出て來て始末に困つたやうに、うじ／＼しながらも、到頭思ひきつて稅を納めねえではなんねえだけんど、どうしても錢が出來ねえだ。知つてお知んねえか、牛が一匹おッ死ぬし、いつまでも寒いもんだで、藁はがいに要るし、今年はえら年廻が惡えと思はッしやい。それだによつて、いろ／＼相談打つて、お前等に頼んだだら、如何かして呉れべえとッて、私ア出て來ただがノシ、お前等錢ッては一文だとッて、家さア入れた事ねえだから、少しは溜つたんべえがなやう？」と、おそるおそる娘の氣色を窺つて、返答を待つてゐた。けれども娘は何處を風が吹くといふ風で、虚空を凝視めた儘、何とも云はないで、唯急に額を恐ろしく曇らした。

お袋は辯解らしく、「私ア初手は、そんねえな事ア出來ねえッて、なか／＼納得しなかつたけんど、親仁さんがいに心配して、一昨日の晩なんざ終夜まんじりともしねえもんだで、私も到頭昨日の朝になつて出て來ることに決めただがノシ……」

「折角だけど、お生憎さまだねえ……」とテレザは云つたが、その語氣が自分でさへ餘り殘酷かつたとおもふほど憎々しかつた。「丁度私も文無しさ。一週間ばかり前に、此穿いてる袴を買ふッて、なけなしのお錢を皆無にしちやッた。今までのは最う穿いてられないんだもの。此地方ち

やぼろ〳〵するまで着てえる者ア無いからね。（と意地悪るさうな眼付でお袋の風を尻眼に掛けて）何と思はれたつて仕様がない。どうされたつて、倒にして振はれたつて、今は一文も無いよ。」

お袋は借りる目的が外れた外に、まだ何か外れたものがあるやうな心持がした。

「さうかね。私アまたお前等に相談しただら、如何にかなるべえと思つたもんだで……」と勢のない聲で云つて、フォークを措いて了つた。

頓てテレザは金貨を出して、それで酒杯を敲いて、「一寸、姉さん、勘定!」と云つて、別に妽に祝儀も遣つたが、その大風なのにはお袋も膽を消した。その代りテレザの謂ふあんな厭な奴ツちやないのが戸口まで送出して來て、大層ちやほや云つたので、お袋もツイ丸められて了つた。

戸外へ出て、また人道を詰らなく辿つたが、此度はテレザが後の方へ引退つて行く。二人とも默然として行く。尤もお袋は娘が後から來るか如何かと、をり〳〵振向いて視る。その振向いて視るたびに、眼付が胡散臭いといつた様な洞貫きさうに鋭い眼付になる。

「一寸、阿母さん、御覽よ、綺麗な繪があるから。」と、テレザが遂に沈默を破つて、トある繪屋の窓の内を窺込んだ。窓外には大勢人が群聚つて見てゐる。

けれどもお袋は繪を覽てはゐられなかつた。窓際へ寄らうとして、ふと氣が附いて視ると、誰家かの大兵肥滿の大年增が、地響をさせて歩いて來るのを、往來の人が皆振返つて視てゐる。年增が段々近づいたのを見て、老婆さんは其眼の前へ釘付にされたやうに直立つて、眼を丸くして、頭の天邊から足の爪端まで、見上げ見下した。肥滿の年增は贅澤なやうな安ッぽいやうな變挺な風をして、厭らしいほど香水の匂をさせてゐたが、傲然としてこのお百を見卸したまゝ、避けて通過ぎて了つた。それを老婆さん振返つて、久らく目送つてゐたが頓て、「今のを視さッたか?」と叫んだ。尤もテレザはそらッとぼけて、聞えない風をしてゐたけれど。「遠方で見ると、誰家かの奥様がお徒歩で行かッしやるやうだけんど、側で視ると、雲泥萬里の違えだ。あの風を見さッたか? ま、あんたら風だッぺえ! がいに人目に付くやうにお化粧のうしてをるだ。身柄の善え人だら、あんねえなお化粧しるもんでねえだ。」

「モノ お前等何時から頭髪を捲き出しただかね!」と饒舌り續けた。「矢張燒鏝當てるだアね。それもさうだら、また妙なことが流行るもんだぞ――後から前の方へ撫付けるだね。お前等知つてだらうが、村ぢやア其事を馬の額髪といふだよ。そんねえな風しとるのと視ただら、さぞ皆が笑ふべえ。」

テレザは頭垂れたまゝで、何にも云はずに、お袋の前に立つて歩いてゐる。

「はアてね、何だら變挺な匂アしるが、お前等が匂だねえかね?」と唐突に云つて、お袋は鼻をひこつかせた。「それとも今の女子の匂がまんだ鼻に附いとるだかしら? お前等まさか得體の解んねえ物をかん塗りもしめえ。私ア思ふだよ。何も匂アしねえ方が可えけんど、若しるだら、人間の匂アしる方が可えだ。」

テレザは最う堪らなくなつて、身を震はして憤つた。

「をかしいのねえ! お前は私の惡口しに態々出て來たのかい?」

「いんね、さうだねえけんど。」とお袋も少しは腹を立てゝゐながらも、何ほ辯解らしく云つた。「親子の事だもん、お前等が氣イ附かねえだら、言はざらにやア。何處へ往きても、人が皆お前等が風をじイろじろ視るだもん。またお前

等もお前等だ、些たア……」と言淀んで默つて了つた。少しは酷烈いことも云ひたかつたが、ぢッと押堪へたのである。ところが廣小路一つ通越すと、また物好の眼が集まつて來るので、堪らなくなつて、「お前等よく極りイ惡くねえだね」

叱るなぞといふことは元來品に無い方だから、わく／＼して、顏を眞紅にしてゐる。テレザはぶる／＼ッと身震をして、前よりは一層頭垂れて了つた。

只見れば、行先は川が湖水へ落込むところで、其處に長い橋が架つてゐる・今まで見えなかつた湖水も此處からは廣く蒼々と見える。老婆さんは此新らしい景色に眼が覺めるやうな氣がして、おぼえず立止まつたが、ふと氣が附いて見ると、テレザは橋を渡るか、ツイ其處の横町へ曲るべきを、湖水の縁に運動場に出來てゐる徑の方へ行く。

「ハレマ、何處へ行ぐだね？」とお袋は氣を揉みだした。「まんだ來ねえだかね？　まんだ餘程あるだかね？　まアこの徑行ぎやア何處へ出るだね？」

「此處から觀ると、町が能く見えるんだよ。」といひながら、テレザは匆々と行く。

「そんでも最う私ア歩くなア厭々した。最う何處へ行ぐのも厭だよ。」とはいひながら、矢張不得已に娘の後に隨いて行く。「なア、早うお前等が所へ往がうでねえかね。最う寄道しねえで、眞懸に往ぐべえさ。ほんに、何だら事だ。こんねえに來ねえことぶウらぶら宛なしに歩いとッてからに　御主人樣が何とか思はッしやるだんべえがなや。」

けれどもテレザは相變らず無言で、何といはれても委細構はず、ズン／＼行く。老婆さんは堪らなくなつて、トある捨ベンチにドッシリ腰を卸した。

「ヤレ／＼草臥れた。最う歩けねえと思へ。道が敷路でコチ／＼しとるもんだで、脚エ棒みたやうになつたア！」

テレザも餘儀なくお袋の側へ腰を掛けて、傘の端で砂をほじつて、久らくは雙方とも默然でゐた。

お袋が遂に口を切つて、「お前等に最う噺しただか知んねえが、リュチメイエル・ヤコフ殿ア此前の金曜に嫁子を貰つただよ。」

テレザは夢の覺めたやうな顏をして、聽耳を引立つた。

「ほんにお前等詰んねえ事したもんだ。彼人は心掛が善えに、正直な人だアが、何でもハア人は心掛さえ善きや身代は惡くとも、そんで可えだよ。身代が善えたとッて仕合だたア限らねえだからね。お前等ヤコフ殿と一つになりやア、何も不自由らな思もしねえで濟んだもの。彼人も今はえら都合が善えげで、借金とッては鐚一文だッて無えし、それに直き大え身代を讓られるな眼に見えとる事たし、しるから、一所になつたら、苦勞もしずに仕合にしてをられるんだんべえさ。あに、お前、これが、稼がねえではなんねえとッて、何だんべえ。私ア親仁さんと一所になつてから、貧乏だもんだで、年百年中手をあけて遊んどることアねえけんど、そんでも、まア、仕合といやア、仕合なやうなもんだアからね。」

「一寸、阿母さん御覽よ。」とテレザは噺の腰を折つて、町の方角を指ざしをして、「あすこに白い大きな家が見えるだらう、ホラ、柱に人形のくッついてる？　ね？　あれが此度出來た滑稽芝居なんだよ。」

「滑稽た芝居だら、今日厭々しるほど觀ただ。」とお袋は手短に答へて、また理窟を絡んだ視たの話を續ける。「彼人もツイ此頃までは能くお前等が事を尋ねてだつた。親仁さんも彼人が好

きで、冬晩氣になると、能く彼人を相手に咄イ始まるだ。しると、彼人はいつでもお前等が事をいひだして、何でもハア子供の時分にやア、同志に遊んだもんだッていふだ。」

テレザはもぢ〳〵してゐる。胸がわくつくやら顔がほてるやら。

「屹度お前等が事を思つとッて、如何にかなるべえと思つとッたに違えねえだよ。だもんだで、結納の取替せしる少し前に來てからに、テレザさまアいつまで出てをるだ、どんねえな様子だか聞かしてくんろッて、いふもんだで、お前等が所から手紙でいつて遣した通り、から〳〵した好え所に御奉公のうしてをるだッて、話して聞かしただ。しると、それからといふもな、鼬の道切だア、ちッとも來ねえ。何だか腹べえ立つたんべえさ。さうしてよ、急いで結納の取替せしたもんだで、皆魂消ただ。それから直ッき婚禮だと思はッしやい。それも可えが、まア、誰を貰つたと思はッしやる？ こりやア解んめえ、えら貧乏だアし、持參金ッちやア、一文だとッてねえだから、誰だとッて彼娘ぢや有んめえと思つたわさ。だもんだで、彼娘だと解つたら、皆らッ魂消ただ。どうだね誰だか解んめえがね？ リザウェタ・ウェフテルだと思はッしやい！

「まア、驚いた！」とテレザは脣を反した。

「魂消ただんべえがなや？」といつたお袋の一言には千萬無量の意味が籠つてゐた。「だけんど、能く考えて見ると、ヤコフ眼が高え。あんねえな善え嫁様ア又と無えだ。一體ヤコフは愚魯とるなんぞッて、いふ人もあるけんど、さうでねえ、詰んねえ事を饒舌らねえとこ見ると、さうでねえ。それに、リザウェタも心掛の善え娘だア。から、誰だとッて惡くいふ者はねえ、皆褒めるだ。兄弟澤山だアから、始終、可哀さうに、齷齪ばかしてるだ、おまけに、彼家の親仁さんは知つての通り、酒食ひだけんど、彼娘はいつが日にも厭な顔したことねえで、始終やさしくしる、――辛抱强え娘だとことよ。所帶の事だら、おッ張つてくれ〳〵働ぐし、儉約くはあるし、ほんに心掛が善えッちやねえ。皆がヤコフに睦じくしなさろッていふけんど、あんねえな嫁様貰つて、いざござア起る譯がねえだよ。丁度似合の夫婦だアからノシ。それから婚禮だッけえがえら立派な事でござッたよ。これまでにねえ立派な婚禮だッけえ、何がハア村中一日酒べえ飲んで祝つただ‥‥」

「いつ見ても、湖水は綺麗だこと！」

「モノ彌々吹聽があつてからは、皆が二人をやれこれ云つて、手車に載けて騒ぐだ。彼方からも此方からもお祝物が來るだ、思掛けねえ所からも來るだ、その中にもリザウェタはいかいこと貰つたといひッけ。さア歌ア唱へる人達が一つ御祝儀に唱ふべえといひだした。彼娘も元は皆と同志に人の御祝儀を唱つたもんだッけえが、此度は自分が唱はれるだ。村の姉達は婚禮の前日に、お寺様さ行ぎて、花束でお飾のら拵える。私がのも其日は貸してやつただ。彼方へ駈けずり、此方へ駈けずり、宛でコレ御祭禮の準備しるやうな騒ぎだア。ほんにお前等にも見せたかッたアよ。お寺様の門にやア、大え美麗な花環を吊す。供物臺の前にやア、綺麗な敷物を判事様の所から借りて來て敷詰める。そのうちにも一番供物臺の前のお飾が立派だッけえが、供物臺の上にやアでかばちもねえ花束が載けてあッけ。何でも二人分に植木屋殿が別拵えに拵ッたもんだといひッけ。」

テレザは額へ大粒の汗を出して聽いてゐたが、眼の遣場に困つて、まご〳〵してゐる。そのうちに、ト眼を留めて視たものは、度々見て珍らしくもないが、如何かして今まで眼に留らなかつたものである。

「此處から觀ると、雪の積つた山が能く見える。空氣が若いから何のこと綺麗だこと。宛で繪に描いたやうだよ。」
「お前等山ア初めて見ただかね？ 私ア村で始終目見とるだ」とお袋は吃驚したやうな面色をして、少しは疎ましいやうに云つた。けれども、最う咄に脂が乘つてゐるから、なか／＼此樣な事では胡魔化されない。早速後を續けて、
「あんねえな婚禮は滅多にやアねえだよ。皆が往ぐもんだで、私も丁度麵麭のう捺ッて、最う曲突へ載けたとこだッけえが、竈はず往ぎた。ソレ麵麭どこア眞黑氣に焦げッちまふと云ふ始末だもんだで、や、親仁さんの怒つたことはよ。だとッて、百兩が錢積まれたとッて、家に引込んでるなア厭アだから、竈はド出懸けただ。方丈樣の妹子さまがオルガン彈いて、歌ア唱ふ人達は歌ア唱ふ。方丈樣も說教べえ語らしッけえが、私方丈樣アあんねえに說教が旨えと思はだッたよ。何でもハア一度夫婦になつたら、お互に操といふもん守らねえではなんねえ、眞の夫妻の間柄はこんねえしたもんだとッて、いろ／＼語らしッけえが、皆アほんに眼を剝いて聽聞しただ。ほんに方丈樣の云はッしやる通りだアよ。私だとッて、お前等の親仁さんと一所になつてから、お互に人に指イ差される樣な事したことねえだからね。だけんど番太ん處のカテリーナばかしはえ向腹のう立つて、方丈樣に對して惡口べえ吐いた。何故だッては、方丈樣が品行イ愼しんで、姦淫なんぞしてなんねえ。皆がリザウェタのやうに心掛を善くして、しらきちやうあんで、婚禮の花環ア被いて、供物臺の前さア出たとッて、氣イ引けることア些ともねえやうでなければなんねえッてッた、それが氣に喰はねえだね。こりやさうあるべえ事だ。カテリーナはノシ、眞の事いや、婚禮の花環を引扯られたとッて、仕樣のねえ人だアからね。リザウェタは花環ア被いて、面掛エかけて、えら美しくッて立派だッけえが、方丈樣がさう云はッしやると、ぽーろぽろ／＼泪ア積して、泣き出したア。其時私ア思つただ、全體だらお前等がかうしたことになる筈だつたもん、とおもつたら、えら口惜しかつたと思はッしやい。ほんによ。お前等ア、ヤコフ殿の所へ嫁入つたら好かつただに、そりよ取外しッちまッてからに、またとあんねえな緣談が有るか無えか、知れたもんでねえよ。私ア然う思つたら悲しくなつて、人目さへなかつただら……」とテレザは咄半に起上つた。
「えッ？ 然うだね、最うお日樣もお沈まりなさるだ。えらお饒舌のうした事だぞ！」と氣が附いて吃驚して、「さやア、かせいで行ぐべえ。何處へ行ぐだね？ まんだ先だかね？」と立止まつて、「何處へ連れて行ぐだ」そりよ云はねえでは、うら一足も歩るな厭アだよ。」
折柄二人手を組合はして、高笑をしながら側を通過ざる娘がテレザに挨拶をしたので、
「お前等彼衆と知己だかね？」
「挨拶だけするのさ」と云つたが、狼狽して、なるべくお袋と面を合はさんやうに構へる。
「彼衆は心掛の惡え人だんべえ。それとも金滿家ん所の孃樣達だアから、今時分遊んで步かれるだかね？」と前とは違つて喧ましくいふ。
「ほんに厭な人を友達にしねえが好えだよ。顔ア知合つとるばかしでも、善くねえ。彼衆と交際つたら、碌な事ア見習ふ事ぢやアねえ。ええかね？ お前等誰とでも交際つて可えとおもふと、大きな間違えでござるよ。」
忠告に身が入つて、我知らずズン／＼來たが、ふと又氣が附いて、聲を勵まして、
「ほんに串戲でねえ！ 此道往ぎて可えだかね？」

テレザはぐづ〳〵して、初の内は返答しともないやうすであつたが、其中に、
「何處へも往くんぢやないよ。」
と到頭本音を吹いた。
「アニ、何處へも往ぐでねえ？　まア、お前等如何しただね？　何だかどうもハア變挺だア！　それともお前等が所さ往ぐな、厭アだかね？　それとも私と同志に往ぐのが、厭アだかね？」と云つても、何とも返答をしないので、此度は儼然となつて、「さア、往ぐべえ。家さア往ぐのが何で厭アだツペえ！」
テレザは矢張向うへ行く。
「はてね、どうしても戻らねえだかね？」
「歸らないよ。」といつた聲が極く小聲であつたから、お袋も判然聽取つたのではないが、併しそれと察して、
「ハレ、マア！　あんだら事だ！」と面色を變へて、大聲になつた。「そんだら暇貰ふべえッて、いふだかね？　それとも最う貰つただかね？　モノ如何あつても、戻らねえ氣だかね？」
「最う歸るな厭だよ。」と前より稍聲高に云つた。
「あんで戻るな厭アだア？　御主人様に叱られただか？　お前等前ヶ御主人様の事をえら褒めとつたでねえか？　あに、何でもねえ事だんべえ、根も葉も有る事だなかツぺえ？　え？　まア、譯エ語れ。譯エ聞かねえうちは、うらもう安心が出來ねえツちや！」
テレザは頸垂れたまゝで、尤も度胸を据ゑたらしい面色をしてゐたが、ズン〳〵行く。お袋は跡を追蒐けながら、
「さア、情を剛くしねえで、悉皆語れさ。譯エ聞かねえうちは、うらア心配で〳〵なんねえツ。追出されたでねえか？　若し追出されたんだら、うらハア何としべえ、小恥しくツて、最う世間にや面出しイなんねえツ。」
テレザはしぶとく返答をしない。
「まア、何だら事だツちやア！」とお袋は憤然となつた。「家さ戻つて何といふべえ？　親仁さんが問いたら、何といふべえ？　お前等もまたお前等だ。他に口の見當るまで、何で辛抱しなかつただ？」と少し考へて、急にまた聲を和らげて、「だがノシ、何だとツて取返しの附かねえ事はねえだ。あんだんべえがなや、お前等別に惡え事したでねえだんべえがなや？　だら、私が往ぎて談イしべえ。さうしたら、濟まねえ事もあんめえさ。それが可えだ。さア、同志に歩ばツしやい。だとツて、お前等が荷物はまんだ彼處に在るんでねえかね？　だが、その前にまア譯を語れ、何故暇ア出ただか。隱すもんでねえツとことよ。」と情愛の籠つた眼付で、睨むやうに娘の面を窺込んで、「洗ひ濯ひ語つて了はしやいてばよ。」
「そんな譯の分らない事いつたツて！　いゝよ澤山お困らせ！」と宛でお袋が惡いのでもあるやうに、喰つて懸つた。「幾ら私を困らしたツて、今更如何なるもんかね。」
「何故や？」と柔しく爭つた。「詫びで濟まねえ事もあんめえでねえかね？」
「最う私は疾の昔出て了つたんだよ。」とテレザは屹と面を揚げる拍子に、傘を擔いで、さも憎々しく苦笑をした。定めてがみ〳〵ツと來るだらうと思つたから、その用心したのである。
「ハレマ眞の事だかや？」とお袋は眼を圓くして娘の顏を見て、たぢ〳〵となつた。「そりよ今迄おツ隱しとるだものを！　そんで、他に口があつただかや？」
と返事を待つ間もわな〳〵してゐる。
「まだ無いのさ。」
お袋は小言を並べるとおもひの外、何にも云はないで、さめ〴〵と泣出した。頓てやう〳〵泣罷みは泣罷んでも、まだ泪がぼろ〳〵と頬を

傳はつて流れる。

「エレ／＼、ほんに長生すれば恥多しだ。何たら因果で、私ばかし親仁さんまでが、こんなえな憂い目を見る事だんべえ。そんでなくとも家は困つとる所へ、ほんに泣面に蜂たアこの事だア！」

とがッかりして最う抗ひもせず、娘の跟に隨いて歩いて行く。いつまで行つても矢張溝水の縁ではあるが、軈て段々町を遠離る。路の片側には其處此處に別莊めいた建家も見えて、その周圍の圃には葉澤山に春の高い樹が鬱蒼と植込んである。段々四邊は暗くなつて、蒼々と見えた溝水も、いつしかどす黒くなつて、それが最後には白々と薄光に光りだす。老婆さんは景色を眺めるどころでない。傍視もしないで、とぼとぼ歩いて行く。

と前方から人氣の稀れな徑を、スラリと脊の高い奥樣らしい女と若い男が押並んで來る。若い男が頻りに手眞似をしては、何か大きな聲で話をしてゐる。それを觀るとテレザはツイと向側へ逸れて了つたから、お袋も我にもなく、其跡を追つて徑を斜に向側へ移つた。若い男が何か面白さうに高笑するのを聞いて、老婆さん心の中で、「彼衆は幸福者だ。私等アハア……」

と思つて、深く溜息を吐いた。

遠方から觀ると、溝水の縁が鬱蒼と森のやうになつて見える處がある。そこまで來てみると、成程森ではあるが、其邊は公園で、なかなか廣い。若草の青々として翠も滴るばかりの中に、枝を車蓋の如くに開けた大木が如[illegible]々／＼立つてゐる。

その大木の影へ入つた時お袋は俄に物を云ひだしたが、その時の聲は柔しく沈んでゐて、今しがた憤然となつた人とは如何しても思へぬほどであつた。

「テレザや、お前等何も惡え事したでなかッペえノシ？　惡え事したでねえだら、まア仕方がねえだ」

大愁歎にもならずに、まづ納まつたらしいので、テレザも漸と安心して、さも親しらしく殆ど甘えるやうにお袋に寄添つた。

少時すると、またお袋が、

「暇ア取つてから凡ら幾日になるだね？」

お袋の眼付は悄々して、聲も慄へてゐたけれど、テレザはそれには氣が附かないで、

「もう全一月になるよ。」

「全一月？　ハレマ、そんねえになるだかね？　それから如何してゐただね？　何故家さア戻らねえだッたかね？」

「口を探してゐたんだもの。」といつた時の調子は少し曖昧であつた。

「まア、全一月も何よしてゐただんべえ？　何處に居ただ？　さア言はッしやい。」と威猛だかになつて問詰めた。

「何處に居やうがあるもんかね。お友達が來いてッたから、其處の家へ往つてたのさ。」と空ッとぼけて、少しは怫然としたやうな調子で答へた。

「友達ッて誰だ？　先刻お前等に挨拶したやうなお洒落殿の所でねえか？」

テレザは俯向いて了つた。

「あれは堅氣な人だねえだんべえ？」とお袋は鋭くいひ放したが、その時は儼然となつて、面の構を歪めて、眼中を曇らせてゐた。暫く間に籃と包とを地面へ措いて、猛虎が餌食を見付けたやうに、テレザに躍蒐つて、グッと腕を握つて、「おやア、われも彼衆の仲間に入つただな？」とおそろしい眼付をして娘を睨まへて、「さア、白狀さッしやい！」といふ聲も咬付くやうである。

テレザはよろ／＼として把られた手を振放さうとするけれども、なか／＼放せない。お袋の

腕は野良仕事で鍛上げた腕であるから、ぢッと握られたら、絞木にかけられたやうで、その痛いこと一通りでない。

一人に肝煮らせずと、早う云つて了へ。われも矢張彼衆の仲間に入つたんだんべえ？」と喚きたつて、「チェー情ねえこんだ。私アそんねえな餓鬼産付けた覺えねえぞ。」

「私一人ぢやあるまいし。最と親元のしツかりした都合の好い人だッてする事たもの。私なんざ當然さ。」

お袋は娘の手を放して、よろ／＼となつて、額へ手を加てるとそのまゝ、身を震はしてヒーとばかり泣出した。みるもいぢらしいやうである。

久らくしてから泥醉漢のやうにふら／＼しながら、呻るやうな聲で、

「最うわれは駄目だア！ 私だとツて、親仁さんだとツて、これが小恥しくなくツて、何としべえ！ えゝ、親仁さんが慾らしい！」と夫の事を憶出すにつけて、また急に娘が憎らしくなつて、躍蒐つて、肩の邊を引抓んだ。

「何故私等をこんねえな眼に逢はせるツちやア！ 私等アわれがためにや、喰ふ物も喰はねえで、どえらい苦勞して來ただに、そりよ思にねえで、こんねえな眼に逢はせて、濟まねえぞ。此年になつて、世間へ面出しのなんねえ眼に逢はせて、首イ縊つておッ死ねといふだかッ？ うらだとツて、親仁さんだとツて、これが原因で今直ツきおッ死ぬべえさ。こんねえな恥をかゝせると知つただら、われが産れる時分に、首イふねツておッ殺すだつたに。えゝ、このど畜生めが！」

と叱飛してみると、張詰めた氣も流石に緩んだとみえて、娘を突放しておいて、胸一杯のかなしさ口惜しさを熱い泪にハラ／＼と灑した。

「えゝ、神樣も聞えましねえ。何の罰でハアこんねえなどえらい眼にお逢はせなさるツちやア！ これ、テレザ、私等アこれまで何も道でねえ事をわれにして見せた覺えがねえぞ。この年になるまで、律義眞當にしてゐて、曲つた事だら、これんばかしでも仕たことねえ。親仁さんと二人で、年百年中眞黑になつて働えで、榮耀らしいこと一つしたことねえ。ほんにわれを養育げるにやア、どらほど苦勞したと思ふ。われが小さな時にはな、いつの事にもお祈のう上げねえで臥げたことねえ、始終氣べえ附けて、善え事ばかし見習はして惡え事しら折檻しても直させねえでは措かなかつただに、えゝ、何が不足で、そんねえな心になつたツちやア！」

「われは誰に似たたんべえ。」と獨言のやうに言葉を續けた。「うらが家は親類縁者皆正直で善え人ばかしだに、わればかしだ、そんねえに身を持崩して一門の面ア汚したなア。」

またさめ／＼と泣出したが、次第々々に泣龍んで、たゞ泪ばかりが靜に流れるやうになつた。いくらか胸が安まつたやうすである。

「まア一體如何してそんねえな心になつただ？」と娘の側へ寄つて、「その經過を語つて聞かさツしやい。さうしると何だな、われは是迄私等を欺罔かしてをつただな。家ぢやアそんねえな事たア知らず、矢張無事で勤めとる事だと思つとツただが、こんねえな事だら、早う樣子べえ見に出て來るだつたものを。まア語つて聞かせろ、如何してそんねえな身の上になツただか？ ヨー、如何してそんねえになつただよ？」

テレザは辯解をはじめた。その言草を聽くと、女友が贅澤な服裝をして、一日何事をもせずに、おもしろをかしく遊び暮してゐるのが羨ましくて、遂に墮落した有樣が、あり／＼眼に見えるやうに分る。それを聽くと老婆さんは、自分の身につまされて、人の親達が傷はしくな

つて、「あの衆の判御達が氣の毒だ！」といつた。

がそれと同時に事の意が悉皆了解めてみると、もう仕樣模樣もないから、落膽して路の盡處まで來て、入日を眺めた。眞紅に燒けた玉のやうになつて、薄青い山の端にかゝつた入日があかあかとした長い影を湖水一杯に落して、その端が殆ど老婆さんの足元まで屆きさうになつてゐる。暮靄に包まれた山水、湖水に臨んだ別莊、塔の高々と見える町などを一撫でにした紫紺の霞が、樹木の茂つて蒼々とした小山の、今日を受けて晃々と見える邊まで行亙つて、暗くなるかとすれば、また急に明るくなつて、何とも云へず美しい。四邊が寂然としてゐるだけに、この下界のものとは思はれぬほどの眺が一入美しく見える。

「私等何たら不仕合な事だんべえ！」と老婆さんは覺えず歎息した。自然の美と人間の深憂との差異が發して此語となつたのである。

久らく默然としてゐたが、頓て小聲を震はせながら、

「エレ〳〵、こんねえな事だら、早うおッ死んだはうが增だんべえ。もう私等が一生も是限だア。生きとッたとッて樂みはねえ。どの面さげて親仁さんに逢ふべえ。逢つて何といふべえ。私が戻らねえ間に親仁さんがポッコリ往生さしッたら、」と泣聲になつて「私アその方が餘程よかんべえと思ふだよ。」

急に儼然となつて、ツカ〳〵と娘の側へ寄つたので、娘は思はず逡巡すると、

「テレザ、われは私が腹ア痛めて産んだ兒だアから、此儘突放かして了ふ譯にもなんねえ。それにわれも最う一生を駄目にしただから、神樣は罰を中てさッしやらねえでも、われと罰を中てとるだア。だアからわれ私と同志に村さ戻れえ、これから、直ぐ戻れえ。何もこま言いふでねえ、家中皆懺悔して、お祈上げて、同志にわれが罪を被るべえさ。其代最う出ようたとッて出すこんでねえから、さう思へ。さア、往ぐべえ？」

テレザは始終木像のやうに凝然と立つてゐたが、此時も動きさうにもしないので、お袋は其手を把つて、かさねて、

「往ぐべえッたら、往ぐべえッ！」

テレザは把られた手を振放して、

「出來た事ア、仕樣がないやアね。私は歸るな厭だよ。」と小聲ながら決然といつた。

「何だと、戻るなア厭アだ？ 戻らねえで、如何しる氣だア？ われどうでもかうでもお洒落になつちまふ氣だかッ？」と一段聲を張揚げていつたが、また急に心配さうに、「そんねえなこといふでねえよ。こらほど心配さしたら、最う澤山にしろさ。親仁さんが心配するをわれ何とも思はねえかよ！」

でもテレザはぐるりと彼方むいて何處へか行きさうにするので、

「コレ、何處へも往ぐでねえよ。」とお袋は賴む樣に云つた。「有つたこたア仕方アねえだから、皆水に流しッちまふべえさ。わりやア一人子だアから、假令どんねえな事あつたとッて、何で憎いとおもふべえ。家さ戻つたとッて何故戻つただか、解んねえやうにしろ。親仁さんにも隱しとくべえ。うんにや隨ぶん拔くでねえよ。萬事うらが善えやうにしべえから、戻れッたら戻れえ。」

「今更そんな事したッて仕樣がないよ。打遣ッといとくれ。」と慳貪にいふ。

「打遣ッといてくれろ？ 打遣ッといたら、我堅氣になるべえか？ うんにや、打遣ッとけねえ。何でもかんでも私と同志に來さい。それとも最う泥水が浸みて、淸い心になれねえだか？ ハア、何だら因果な餓鬼だッぺえ！」と腹立しげ

に云つたが、殆ど最う何を云つてゐるのか、自分にも善くは解らん樣である。が、また氣を變へて柔しくなつて、「そんではわれ、あんまりだ。わりやア最う私や親仁さんのこたア思つてくれねえだがや？　子供の時分にやア柔しい娘だつたけんど……われ忘れたか知んねえけれど、わりやア何處へ突出しても輸ヱ取る娘でねえだつたから、私も親仁さんも、うんにや、私や親仁さんばかしでねえ、誰だとツてわれヱ可愛がらねえ者は無かつただ。親仁さんはどんねえにわれが自慢だつたツぺえ。私と二人で、われがためだら、何でも厭はねえでしただ。私アわれに嬢樣つやうな服裝させべえとツて、手前は始終破 袴穿いとツた と思へ。何でもハア衣べえ見ると着せたがるツて、親仁さんが嘻しく云つた位だ。うらア馬鹿だつたなア、われは大きうなつたら、出世べえせうと思つてただアに……」と杜絶れて了つた。ふと思浮んだ事があつたからである。「ほんに然うだツけもの！」とトンと自分の額を叩いて、「誰が惡えでもねえ。見たくでもねえ高慢氣イ出して、みんな私が惡かつただ！　うら打撃かれても仕樣ねえ、うらがわれに高慢氣イ吹込んだアだから。ハア飛んでもねえ事してのけたア。だがノシ、最う好加減に斷念してくんさい。料簡のう入替えて戻つてくんさいよ。」と祈るやうにいつた。

見上げれば紫紺色の空も次第に薄闇くなつて、金線を引いたやうな光も遥か向うの空へ退いて、入日と與に忽然と消えて了つた。それを觀て、

「エレ〳〵、如何なる事だんべえ！」

四邊も暗くなれば、心の内も暗黒になつて、颯と吹起る夜風に木の葉の騷ぐ音も心の揉める種となる。

老婆さんは今にも倒れさうな風でわな〳〵しながら、

「どうでもわれは戻るナ厭アだか？」

「厭だよ。」

「そんだら儘全でゐさい。うらも最う家さアは戻らねえ。」と高聲にいつて足早に其場を去つた。

テレザは迹を追つて駈出しさうにして、立止まつて了つた。お袋の疾足の音が向うの方に籠つて聞える。頭の上でざわつく木の葉も、何となくありし昔を囁くやうで、町の方を觀ると、遠方に火影がちら〳〵と見える。むかしは星を眺めて樂しんだこともあつたが、何となく其頃の事が憶出される。夜は森閑としてゐる中で、何處でか人聲がする、テレザは我知らず身震ひをした。

街燈のほのぐらい蔭でみると、向うから何處かの奥樣らしい人とその息子と見える若い男が來る。歩くたびに絹布のすれる音がさら〳〵とする。

若い男がゴホ〳〵と咳入つたので、奥樣は吃驚して、

「まア、咳が出ますね？　お父樣のやうにならなければ好いが、どんなだえ？」

「なアに、なんでもないです。咽喉が少し焮衝を起したので・なに、心配するほどのことはないです。」と慰める。

母親は忠だつて、「でも用心なさいよ。第一、こんなに晩く歸つて來ちや不可よ。それにまア些と月のお小遣を考へてお遣ひよ。私の小遣も最うそろ〳〵盡りさうだから、さう〳〵は最うお前さんに貢いで上げる譯にいかないからね。」

「ジューリさん。」と呼懸けたテレザの聲は常の聲でなかつた。「今田舎者のお老婆さんにお逢ひなさりはしませんでしたか？」

「いゝや、逢はんだつた。」といつて、若い男は大層恐縮してゐる。

「あの女と相識かえ、お前さんは？」と母様は眼を圓くして、少し氣色ばんだやうである。

若い男は口の中で、

「なアに、ありやアソノ　ありや何も友人と飯を食ひに行く家の婢なんで。」

といふ時分にはテレザは最うきよろ〳〵しながら湖水の縁を駈けて行つた。をり〳〵水際まで來て捜してみるけれども、お袋の姿はかいもく見えない。ト耳を澄して聽いてみると、水がぴしや〳〵と鳴るばかりである。吻と溜息をして、また駈出した。石で築いた垣から湖水へ降りる石段の附いてゐる處へ來ると、誰やら下の方にゐるやうであるから、鐵欄を躍越して、ぢッと視卸したが、何も眼に遮るものもないから、行過ぎようとして、また立戻つて、再び覗込むや否や、矢を射る如く石段を駈降りて、ぴしや〳〵と水音のする邊へ來てみると、頭を石垣へもたせて、身を慄はして忍泣に泣いてゐる者がある。テレザは立止まつて、凝然と視て、唐突抱付いた。

「阿母さん！」とテレザの胸を突いて出た一聲は、一生懸命な聲であつたが、併しさも嬉しさうな調子であつた。

くされ緣

一

千八百二十何年のこと、何とやら町にイワン・アファナーシェウィチ・ペッシコーフといふ陸軍の中尉があつた。貧家に生れて、早く兩親に死なれ、五年間も煢獨でゐた擧句、後見の手に渡り、其又後見のお蔭でなけなしの財産を皆無にして了つたから、隨分果敢ない世を渡つて來た。中脊で、少し猫背で、細面の飼面だらけの顏ではあるが、仲々愛嬌がある、少し黑味がかつた亞麻色の頭髮に、鼠色の氣の弱さうな眼で、凹んだ額には最う皺が幾筋となく見える。誠に穩かな世を渡つて來た人であるから、四十になつても未だ何處か若々としてゐる代り、大のお坊樣で極く愛度氣ない、相識が有つても逢ふのを厭がつて、目下の者には極く柔しくする。

一本調子の面白くない世を渡る人にはえて有りがちの一癖、何や彼や無くては濟まされぬ物の數ある中に、毎朝朝茶に出來たての白い捻麵麭を味ふのが大の好で、此君なくては一日も居られないのである。ところが、或朝家僕のオニシムが藍の花紋の附いた皿に、捻麵麭の代りに黑赤いビスケットを三つ載せて持つて來たので、旦那殿は最う不機嫌な顏になつて、

『何故捻麵麭を持つて來ない？』

『賣切れツ了ひました。』

老僕はペテルブルグ近在の者であるが、如何いふか拍子で此南露西亞の中央へ漂つて來たのである。

『そんな筈はない！』

『だとツて賣切れツ了つただから、仕樣が有りましねえ。今日族長樣ン所で、お客事を爲るとツて、皆彼方へ持つてツ了つたもんだからね。』

と持つてツ了つた手眞似をして、如何いふ料簡か、右の足を片足踏出した。

旦那殿は部屋の中をノソリ〳〵と歩廻つてゐたが、頓て衣服を改めて、自分が買ひに出かけた。麵麭店は町に一軒しかない。十年前に此町へ流れ込んで來た獨逸人が出した店で、出すと間もなく賣出して、今は肥つた後家の代になつてゐるが、まだ〳〵仲々賣れる。

ペッシコーフが小窓の處をコツ〳〵と叩くと、その肥滿の主婦が厭にむくんだやうな寢惚顏を窓からヌッと出したから、

『捻麵麭が有るかい？』

と愛想善く云ふと、

『お生憎さま、賣切れました。』

と頓狂な聲でいふ。

『無いの？』

『へえ。』

『無いなんぞツて、どうも困るな。私は毎日此店で買ふのだ。加之も代はチャン〳〵と拂つて居ます。』

主婦は默つてペッシコーフの面を視てゐたが、頓て欠び一つして、

『クレンデリではお間にあひますまいか？　でなきやア、パプリューハ……』

『そんな物は不可。』と怫然とまでなつた。

『ぢや、どうも……お生憎さま。』と小窓をパタリ。

恐ろしく忌々しかつたが、如何することもならぬから、町の向側へ往つて其處で一人で焦燥

れてゐる。宛で孩兒！
「旦那……旦那！」と柔しい女の聲がする。
ふッと面を揚げて視ると、小窓の穴から十七許りの娘が手に捻麺麭を持つて面を出してゐる。福々しい丸顔の、頬の紅い、眼の小さな着色の、鼻の少し上ぞつた、亜麻色の頭髪の、肩附の素的な代物であつたが、毒のない放恣な無頓着な面をして、莞爾しながら、
『旦那、捻麺麭を呈げませうか！　これはね、私のに取つといたんですけれど、呈げて了ひませう。」
「いや、そいつは難有い。それぢや……」と隠袋へ手を入れてかさこそやる。
「代は要りませんよ。まア、持つてツて召上れ。」
といひ棄てて小窓を閉めた。
ペッシコーフは莞爾しながら歸つて來て、
「オニシム、如何だ、お前にや呉れなかつたが、己にや呉れたぜ……」
老僕はニヤリとしたばかりであつた。
其晩衣服を着代へながら旦那どのが、
「あの、麺麭店に居る娘な、あれは何だらう？』
老僕は酷く難しい面をして、他方を顧きながら、
『用でもあらツしやるだかね？』
「なに、何も用が有るんぢやないけれどな……」
と自分に手を下して長靴を脱つてゐる。
「何と別品で御座りませうがノシ？」
と大儀に輪けて相手になると、同じく他方を顧いて、
「さやうさ……中位だな……何といふだらう、名は？　知つてるかい？」
「ワシリーサ——ツてましツけ。」
「ぢや、相識だね？」
久らく待たせておいて、
「相識でござります。」
旦那は何か云はうとしたが、寢返りを打つてスヤ〳〵と眠入つて了つたから、老僕も次の間へ來て、煙草を喫いで、首を振つてゐた。
翌朝夙く起きて旦那殿が衣服を着たいといふから、老僕は平生着の古上衣、大きな色の褪めたエポレット附の、草色のを持つて行くと、旦那殿は言葉はなくて、唯凝然と僕の面を諦視めてゐたが、頓て新しい方のを持つて來いといふ。變だなとは思つたが、持つて行くと、それを着て、シャモイ皮の手袋を丁寧に穿めて、少し極りの悪い態で、
「お前は今日麺麭店へ往かんでも可い。己が往くから……どうせ路次だ。」
「はア、」と愛想のない聲で、突飛ばされたやうに云ふ。
ペッシコーフは家を出て、麺麭店へ來て、窓を叩くと、例の肥滿の主婦が戸を開けたから、拍子抜のした聲で、
「捻麺麭を呉んなさい。」
肩まで暴露にした、鷲のやうな、うれしくない手が、燒立の麺麭を鼻の頭へ突出す始末。
暫くは茫然として窓下に立つてゐたが、軈て家の前を二三度往き戻りして、それから窩と構内を窺いて見たが、餘り小兒じみてゐて恰好が悪いから、捻麺麭を持つて歸つて來た。けれども其日一日どうも心持が悪い。晩になつても、平生のやうにオニシムと談話もしなかつた。
其翌朝からはまたオニシムが買ひに行くことになつた。

二

一二週も經つ中には、ペッシコーフも最う全く麺麭屋の娘の事を忘れて了ひ、相變らず老僕と機嫌善く話をするやうになつたが、或朝ブブリーチンといふ男が訪つて來た。未だ生若い男で、秩序がない性質ではあるが、至つて愛嬌

が有る。亡も時とすると何を云ふのか常人にも胡亂なことが有つて、世に謂ふ帽子を横冠にする連中では有るが、兎に角話敵として面白い人物。煙草が大の好で、眉を釣上げ、息を深く引いて、顚附くやうにして喫む——其時の顏色はといふと、恐ろしく心配さうで、最う一息吸つてから何か意外な珍事を云ひさうに思はれる時もあれば、或は又牛の鳴くやうな聲を出して、手を振立てて、大悶躁に悶躁いて煙草を吸込むから、大方何か圖拔けて面白い事か、さなくば天下の一大事でも憶出したのかと思ふと、頓てパクリと口を開いて、煙を環に吹いて、極々詰らん事を云ふ、なら未だしも、全然何も云はんこともある。このブブリーチンが來て、些ばかり近所の噂や、馬や女の至極裨益になりさうな話をしてゐたが、其内に不圖眼を激しく瞬いて、頭髮を撫上げて、妙に莞爾しながら、室の飾物になつてゐる懸代の無い唯一つの鏡、加之も酷く曇つてゐるやつの前へ來て、鳶色の髭を撫でて見て、

『けれどもなア、君、此地の町家の娘には非常な美形が有るよ、ウエネーラ共處退けといふ代物がな——例へば、麵麭店のワシリーサの如きものだ。君御存じかい？』と一息吸込む。

ペシコーフは默然とした。

『併し、』とブブリーチンは煙草の煙の中に消えて、『君に其樣な事云つたッて仕樣がないか。如何も君は變人だよ。毎日何をして居るんだらう……』

『矢張君の仕てゐるやうな事を仕てゐるさ。』

と少し怫然氣味になる。

『でないね、でないことさ。君の仕てゐるやうな事は押の强い！』

『何故？』

何故ッて、君。』

『何故？　何故？』

でも、敵手はパイプを臺の隅に置いて、穿いてゐる餘り綺麗でない長靴を眺めてゐるので、少し手持無沙汰の態でゐると、頓てブブリーチンは友の野暮天を憫れむが如き調子で、

『まア、それは可いさ。併し麵麭屋のワシリーサは實際美だよ——なツかなか美だよ。』

と鼻の穴を擴げて、徐に隱袋へ手を入れた。

異むべし、ペッシコーフ少しから妬けて來たのである。椅子に掛つてゐても落着いてはゐられぬ樣子で、つけもなく高笑をする、謂れなく面を顰める、欠びをする、欠びをするとて、下顎を少し捻曲げる。ブブリーチンが今三服喫つて歸つた後で、窓際へ來て、ホッと溜息を吻いて、『水が飮みたい』と云ひ出すと、オニシムが入つて來て、クヮスを卓の上へ置いて、主人を尻眼に掛けて、入口の戸に倚れて首垂れて了ふ。

旦那殿は薄氣味惡く思つたから、猫撫聲か何かで、

『何を其樣に考へてるんだ？』

『何をッて……お前樣の事ばか考えとるだよ。』

『己の事？』

『はア。』

『己の事を如何考へてるんだ？』

『如何ッて、お前樣……』と煙草を嗅いで、『お前樣、能く小恥しくも無えだね？』

『何が？』

『何がとッて……ブブリーチンの旦那を見なさろ。若え衆といふもんは如彼したもんで御座りますよ。』

『それが如何したんだ？　己にや薩張解らない。』

『解んねえ……解んねえこた有りましねえ。』

間を措いて、

『ブブリーチンの旦那は眞の旦那で、旦那ッていふもんは如彼にして居らんぢやなんねえだよ。それだのにお前樣ア、ふア、駄目だにエ

えェ
『己だッて旦那らしくして居るぢやア無いか？』
『押の重てえことを云はッしやる、』と癇癪を起して、『そいでも旦那らしいだかね？ うんにや、お前様は鶏の濡れしよぼたれたやうな人だよ。日がな一日まじイリ／＼打坐ッて御座ッて、骨牌ア弄るでもねえけりや、交際しるでもねえだ。それに女子に掛けても……』
駄目だと手真似をする。
『何故？……如何も酷い事云ふな……』と狼狽してハイプを抛上げる。
『何が酷い事が有りますべえ。まア考へて見なさろ。此度のワシリーサの事にしても然うだよ。お前様ア何もそんねえにビク／＼……』
『なに其様な事があるもんか、』とは云つたが、聲が萎れてゐた。
『そんだら何もコレ遠慮してゐることはねえでねえかね？ だけんどお前様にや到底も駄目だにえ……まア積りにも知れたもんだア。お前様のやうな……』
旦那殿は衝と起上つて、
『最う／＼好加減にしろ、』と狼狽てて腰を折つて、老僕の居處が別らなくなつたやうにウロウロしながら、『なに、己はだッて……己だッてソノ……酷いことをいふナ、お前は！……まアそれよりか何だ、衣服でも着更へさせて呉れ。』
老僕は主人の後に廻つて、徐々垢染みた韃靼上衣を脱がして、息子ででもあるやうに凝然と主人の面を視て、首を振つて、それから漸うフロックコートを着せて、箒で背後を拂いてやつた。
ペッシコーフは家を出て、屈曲つた町を一つ二つ通越して麺麭店の前へ出ると、變に微笑とした。
お馴染の店附を望み見ること未だ三度に及ばぬ内に、ふと角門が開いて、パタ／＼と驅出して來たのはワシリーサ。見ると黄ろい布片で頭を裹んで、袖無を露西亞風に引掛けてゐる。ペッシコーフは透かさず追縋つて、
『何方へ？』
ワシリーサは振返つて視て、笑つたが、ズーッと餘所を向いて、口元へ手を遣る。
『買物ですかね？』と足を踏變へる。
『能く根掘り葉掘りなさるのね、貴下は。』
『いや、そ、そ、然ういふ譯ぢやない、』と狼狽てて手を揮廻して悶躁き出して、『然ういふ譯ぢやアないが……ソノ……何だもんだからね、』
と急込んで辭足をする。實でこの何だもんだからで全然説明が出來でもするやうに。
『此間は捻麪麭を召上つて？』
『喰べました。誠に難有かつた。』
ワシリーサは歩きながら何か考へて居る。
『今日は好いお天氣ね、』とペッシコーフは詞を續けて、『お前さんは散歩は好きかね、』
『好きですわ。』
『ぢやアお願が有るんだが……』
『何ですの？』
露西亞の娘はこの『何ですの？』を妙に云ふ――何か慳貪らしく口疾に、夜明に鶺鴒が啼くやうな聲で。
『え？ 何ソノ……何さ……お前さんと一所にね……町外を散歩したい……』
『アラ厭な！』
『何故？』
『本當に貴下は厚かましいよ！』
『だがね……』
と云はうとすると、只見る一個の商人體の男が、山羊の髯に鐵把の爪を尖らして、青カノタンを裾長に着做し、温かさうな眉庇附の帽子をスッポリ冠つて、向うから來たので、外見を慮つて、少し後に引退つたが、商人が行過

ぎて了ふと、また直ぐ追附いて、

『如何だね？　散歩は！』

ワシリーサは妙な擽つたさうな眼付でペッシコーフの面を視たが、復た高笑をして、

『貴下は土地の方？』

『此地の者さ。』

ワシリーサは一寸髪を直して、足の運びを緩くする。ペッシコーフは莞爾となつて、おツかなびツくり顫へる手を廻して、そツとワシリーサを抱へると、呀と聲を立てて、

『お止しなさいよ、町中で。』

『何故、可いぢやないかね？』

『お止しなさいツたら！……人が見ますよ！……』

『へ……へ……ヘッ、餘程情剛だね。』と恨めしさうに云つて、耳の附根まで紅くなる。

ワシリーサは立止まつて、

『跟いて來ちや厭ですよ！　本當に好かない人だよ……』

ペッシコーフは素直に云ふことを聽いて、我家へ歸つて來て、丸一時間も椅子に掛つたまゝ、凝然としてゐて、煙草さへ喫まなかつたが、頓て鼠色の紙を一枚出して、鵞ペンを削つて、長いこと考へた擧句、こんな手紙を書いた。

拜啓。陳者、拙者儀生來人ニ對シ惡意ヲ挿ム如キ者ニ無之候ヘバ、貴殿ニ對シ、御無禮仕ルノ意思ハ毫モ無之候。然ル處、過刻拙者儀貴殿ニ對シ及御無禮候。右者偏ニブプリーチン殿ノ一言ニ憤激致候ニ依リ、遂ニ意外ノ御無禮ニ及ビ候次第ニ有之候。前述ノ次第ニ有之候ヘバ、御無禮之段ハ偏ニ御海容被成下度、伏而奉懇願候。元來拙者儀ハ多感ノ男兒ニ有之候ヘバ、貴殿之御好意ハ深ク肝銘多謝セズンバアラズ。依而、兎マレ角マレ拙者ヲ深ク咎メザランコトヲ、此段伏而奉懇願候。泣血百拜。

辱知

イワン・ペッシコーフ

ワシリーサ・チモフエーエウナ殿

膝下

オニシムに此手紙を持たせて遣つた。

三

さて二週間許り經つた。捻麪麭は毎朝例に依つてオニシムが買ひに往つたが、一朝ワシリーサが出て來て、

『叔父さん、お早う。』

此方は急に難しい面になつて、にべなく、

『お早う。』

『叔父さん、些とお寄んなさいな。些ともお寄んなさらないのね。』

老僕は睨めるやうにして、

『寄れツたとツて、茶べい一杯振舞ふめえがの。』

『あらお茶位煎れますよ。些とお出でなさいな。ラムを入れますから。』

老僕は氣の無ささうに苦笑として、

『そんだら些と來べいか……』

『何日、叔父さん？』

『何日ツて……お前も、ハア……』

『今夜お出でなさいな。ね？』

『だら來べいよ。』と云つて、けツたるさうな腰付をして、遲々と歸つて來た。

其晩狹い座鋪で、縞の羽蒲團を敷いた寢臺の側に、不恰好な卓を間にして、オニシムとワシリーサが差向ひでゐたが、卓の上には薄汚ない湯沸が嗚々と鳴つてゐて、風呂草の瓶插が窓の前に置いてある。一方の隅を顧ると、丁度入口の側に、小さな垂錠の附いた鞄の舊くなつた奴を横向に押付けた上に、種々の襤褸を押塊めて載せてあつて、壁には汚ない額が掛けてあ

る。二人とも默つて顔を見合せながら茶を啜つてゐる。或はビスケットの片塊を長いこと玩弄つた擧句、脈々喰缺いてみたり、或は睡眼をしたり、細目になつたり、又は濃黄ろい茶を[illegible]に[illegible]々しく啜込んだりしてゐる中に、湯沸も空にして了つて、圓い茶碗を伏せたのを見ると、一つのには一杯一杯又一杯といふ語が焼附けてあつて、今一つのには[illegible]腹蟲驚と してあつた。それから[illegible]々奇なる聲を一[illegible]づつ出して、汗を拭いて、徐々談話を始めた。

『叔父さん、貴下ン許の旦那は……』

と云ひかけて云はふと、

『旦那が如何しただね？』と煙管を突いて、『旦那は旦那だがな。旦那に用でもあるだかね？』

『いえ、用も何も無いんですけどね、唯一寸……』

『己が許の旦那から、』とニヤリとして、『手紙イ來たでねえかね？』

『はア、來てよ。』

老僕は徐々として首を振つてゐたが、頓て皺嗄れたやうな聲で、薄笑をしながら、

『どんねえな事が書えてあつただね？』

『いろんな事を書いてあつてよ。アノ、何ですツて、私は、アノ、惡く思つてお呉れでない、アノ、腹が立つたら勘忍しておくれツてね、まだ種々な事が書いてあつたの……』と少し考へて、『アノ、旦那は如何な御樣子？』

『生きとるだよ、』と澄ましたもので。

『怒つてなくツて？』

『なんの、怒つとるもんだ。だがなう、己が許の旦那を、お前等好いとるだかね？』

ワシリーサは極り惡さうに袖を口へ加へて笑つてゐる。

『如何だね？』

『如何でもよくツてよ。』

『うんにゃ、然うで無えとこだよ。まア、云つて見さいツてツたら云つてみさい。』

久らくして、『そりやアね、彼方は身分が身分だから、そりやア、私だツても……アノ……それに旦那の方でも……最う知らない……』

『知んねえツていふ法は無え。』

『だツて、叔父さん、皆知つてる癖に……』

段々胸がときめいて來た樣子。

『あのね、叔父さん、歸つたら旦那に然う云つて頂戴な、アノ私は些とも怒つちやゐないんですから、アノツ……』

と言淀む。

『えゝだよ、』と云つてのツそり起上つて、『皆己が了解んどるだよ、そんだら、己ら厄介になりました。』

『然う？ そいぢや又ちよい／＼遊びに來て頂戴よ。』

『來べえ、來べえ。』

と云ひながら入口へ出ると、丁度例の肥滿の主婦が入つて來た。

『おや、叔父さん。今晩は、』と慵けたやうな聲で云ふ。

『やあ、主婦。今晩は。』これも同じく慵けた聲。

互に顔を見合せて、一寸立往生の態でゐたが、

『そんだら、また。』

『そんなら、また。』

家へ歸つて見ると、旦那は寢臺に横臥んで天井を眺めてゐたが、

『オニシム、何處へ往つたんだ？』

『何處へ往ぎたツて……』問いたのを咎めるやうに鸚鵡返しに云ふのが老僕の癖で、『私イ、お前樣の事で出ただが、知んねえだかね？』

『己の事？』

『解んねえかねえ……ワシリーサの許へ往ぎたで御座りますよ。』

是に於て旦那は頻りに瞬きをする、身をもち

もぢやる。
『ソーラ、そら其通りだ。』と老僕は平氣で煙草を喫いで、『己がそんだから不是といふだよ。お前様アいつでも然うだもの……ソシリーサが善く云うて呉れッていひよりましたよ。』
『本當か？』
『譃ウ打抜いて何としべえ！ そんだからお前様ア不是だよ、先方ぢや久しう見えさッしやらねえもんで、何故御座らッしやらねえだんべえッて、評議のうしにをりますだアよ。』
『それでお前何と云つた？』
『私イ云うてやつただ、汝あ馬鹿だア、何で彼様な旦那衆が汝等見たやうな許へ御座らッしやるもんだ。それよか、汝の方から來うッてやりましたア。』
『そ、そ、然うしたら何と云つた？』
『何と云ひますべえ。』
『だッて何とか云つたらう？』
『何とも云ひましねえ。』
旦那は少し考へて、
『來るだらうか？』
老僕は首を掉つて、
『來べえか？ ヘン、お前様も随分蟲の善え人だね。大抵積りにも知れたもんだよ。さう旨く行ぐもんだら、何もハア、コレ……』
『だッてお前が然う云つて來たんぢやないか？』
『然う云うたに不思議はあんべえさ。』
旦那はまた默つて了つた。
『ぢやマア如何したもんだらう？』
『如何したもんだア？……如何でもお前様の好にするが可えでねえだかね？ 旦那衆とも謂はれる人が其様な事を家來に聞く法はねえだ。』
『だッて如何も……そんなこと云つたッて……』
老僕は米でも舂くやうに伸つ反つして得意は面に顯れてゐたが、頓て、
『お前様あプラスコーウイヤ・イワーノウナを知つて御座るけえ？』
『否や。何だそのプラスコーウイヤ・イワーノウナといふな？』
『麵麭屋の主婦だがな。』
『うむ、然うか。そんなら見たことはある。大層肥つてる女だらう？』
『なか／＼嚴格しい人さ。彼娘の實の叔母様だアから……』
『え、實の叔母？』
『お前様知らねえのかね？』
『知らない。』
『ま、何たら……』
と云ひかけたが、主人だと思つて默つて了つた。頓てまた、
『彼人とお前様知音になるが可えだよ。』
『そりや相識になつても可いのさ。』
善くも云つたといひたげに、老僕は主人の面を見てゐると、
『だが、相識になつて如何するの？』
『エレ／＼、それが解んねえだね。』
と落着き拂つてゐる。
ペッシコーフは起上つて、室の内を歩き廻つてゐたが、窓際へ來て立止まつて、彼方向いたまゝ、少し恰好の惡い態で、
『オニシム！』
『はア？』
『麵麭店の主婦なんぞと相識になつて、外聞が惡くは無からうか？』
『惡えと思はッしやるだら、止めるばかしの事だ。』
『何さ、唯一寸然う思つたばかしなんだが……如何もな、朋友に知れでもすると、其處んところがソノ如何も……併し、まア考へて見ようよ。煙草を一服喫まして呉れんか……』

少し考へて、『ぢやア、何だな、ワシリーサがソノ……何だツけな？』

と水を向けても、最うオニシムは相手になる氣が無いと見えて、例の難しい面をしてゐた。

四

さて叔母さんと相識になる一段。オニシムと話をしてから五日許り過ぎての夕方のこと、ペッシコーフは麪麭屋へ來て、軋む角門を開けながら、腹の裏で、

『旨く行くかしら？……』

階段を登つて戸を開けると、雞冠の馬鹿に大きい雞が耳の聾ひるばかりのけたゝましい聲を立てて、大狼狽に狼狽てて足元へ飛び出して來て、庭を彼方此方駈廻つて仲々鎭まる氣色がないので、例の肥滿の主婦が奥の方から肝を潰した顏をヌッと出した。早速ニタリと笑つて頷いて見せると、先でも挨拶をしたから、一生懸命に帽子を握つておづ／＼奥へ入つた。主婦も衣服の鍵鈕を殘らず掛けてゐたから、丁度御來臨を待つてゐたやうに見える。

相對つて座に就いて

『今晩はね、實はソノ……何で來たのですが……』

とまで出たが、二の句が續かない。脣を歪めて憫々顏をしてゐると、主婦も餘所行きの聲を出して、

『善うこそお出で下さいました。誠にハヤお難有いことで。』

と辭儀をする。

是に至つて少し息を吹返して、

『疾うからね、お相識になりたいと思つてましたが……』

『左樣で入らッしやいますか。それは何にしてもお難有いことで御座いまして。』

と二人とも默つて了つた。此方は形の有る手巾を出して頻りに面を拭いてゐる、先方は顏を反けてあらぬ方を凝然と諦視めてゐる。雙方とも甚だ極りが惡いけれども、久しぶりで會つた朋友の仲でさへ變に澄して了ふ町家の事であるから、これしきの事は何でもないどころか、反つてこれが當然で、殊に初對面であつてみれば尚更の事である。主婦だとて決してペッシコーフが厭ではない。チンと澄してゐる所は如何踏倒しても紳士に違ひないに、それに兎も角も役の有る人である。

『私は、主婦さん、お前さん許の捻麪麭が大變好でね。』

と又話の端緒を拵へると、

『左樣で入らッしやいますか。』

『どうも甘い……どうも大變甘い。』

『左樣で入らッしやいますか。どうぞ此後とも何分御贔屓を願ひます。』

『マスクヮでも此方のやうなのは喰べたことは有りませんな。』

『左樣で入らッしやいますか。』

とまた斷絕れて了ふ。

久らくして、

『此方に居るアノ何は、お前さんの姪ださうですね？』

『御意で御座います。手前の實の姪で御座いまして。』

『如何いふ譯でソノ……此方に居なさるんで？』

『兩親が死りましたから、引取りましたので。』

『何を仕てゐなさるんで？　矢張店の方を手傳つてゐなさるのかね？』

『御意で御座います。店の方をね、矢張、貴下、手傳はして居りますんで。誠に能く働いて呉れまして、へえ。』

最う姪の話も可笑しくなつて來たから、

『あの籠の中の禽は何です。』

「何と申しますか存じませんが、矢張何かの禽で。」
『ふむ、成程……いや、大きにお邪魔しました。』
『これはどうもお匆々さまで御座いました。また何卒これにお懲なく入らしッて下さいまし。何卒お茶でも召上りに。』
『難有う。』
歸らうとすると、出口の處でワシリーサに出逢つた。面を見ると笑ひ出したから、此方も餘程馴々しく、
『何處へ往つたの？』
『厭よ、旦那は調戲ふんだもの。』
『へ、へ、手紙は屆いたかね？』
口元を袖で蔽して、何とも返答しない。
『最う怒つちや居ないだらうね？』
『ワシリーサ！　ワシリーサ！』と叔母さんの震聲が聞える。
ワシリーサは家へ駈込んで了つたから、ペッシコーフも我家へ戾つて來た。その日を序開きとして、それから毎日せッせと麵麭屋へ通つたが、又通つただけの事はあつて、高尙な語で云へば、遂に目的を達した。他の者なら、この目的と云ふ奴を達すると、頓と熱が冷めて了ふところであるが、ペッシコーフは反對に目的を達してからは益々熱くなつた。去る人が――戀の味は知らぬ癖に、戀の事を云はせると、旨いことをいふ人があつたが――それがいふのに、戀は機會物で、美術品のやうに神生に生出でて、自然のやうに出來たに辯解は要らぬ、と云つたが、ペッシコーフのもまづ其樣なやうなもので、それで首丈陷つて了つた。どうも嬉しい。一切夢中になる。段々に道具を殘らずといふと誇張だが、パイプだけは皆麵麭屋へ運んで了つて、毎日入浸りになつて、その奧座鋪に居る。食料を拂はして、茶が無代で飮めるのだから、主婦も惡い面をしない。ワシリーサも全然馴染んで、ペッシコーフを側に置いて、働きもすれば、歌をも唄ふし、絲をも紡るし、偶には話をもする。ペッシコーフはワシリーサの面を視ながら、煙草を喫んだり、椅子に掛つて身體を搖がしたり、笑つたり、閑な時には二人を對手に骨牌を弄つたりなどしてゐた。どうも嬉しくて嬉しくてならぬ……けれども、滿つれば缺くるが世の習ひで、縱令大した望みでなくとも、運命といふ奴は十分に叶へて吳れぬは愚か、事によると邪魔をすることがある。タールの柄杓がふッと蜜の桶へ入ることもあるてな。
ペッシコーフも丁度其樣な目に逢つた。まづ麵麭屋へ引越してからは、一層朋友に遠ざかつて了つて、用が無ければ成るべく會はぬことにしてゐる。會つても調戲はれまいと思ふから、稍自暴氣味の怖い面をして、そればかりを氣にして悄々と、宛で煙花に觸れに出る兎のやうな面をしてゐるが、其癖いつでも矢張調戲はれる。それからオニシムが全然輕蔑して了つて、意地にかゝつて虐げる、辱める、吻と息氣をする暇もない。それから又……まア續回を讀んで御覽じろ。

五

前回の理由で、叔母さんの家に居るのが一番居心が善いので、尙のこと入浸りになつてゐる或日のこと、裏のワシリーサの部屋で、ジャムとも附かず煮浸しとも附かぬ妙な物を拵へてゐたが、其日は叔母さんは留守で、ワシリーサは店で歌を唱つてゐたのである。スルト、小窓をトン〳〵と叩く者がある。ワシリーサは起つて小窓の側へ寄つたかと思ふと、微にオヤッと云つて笑つたが、頓て私語をする聲がする。久らくするとまた元の處へ歸つて來て、溜息をして、前よりは大聲で歌を唱ひ出した。

『誰が來たんだ？』
と云つても聞えぬかして、矢張『鰊を釣つて』ゐる。
『ワシリーサ！　聞えんのか！　ワシリーサ？　ワシリーサつてば？』
『はア？』
『誰と話してゐたんだ？』
『そんなこと聞いて何になさるの？』
『何にするんでもないがさ。』
といひながら店へ出て來た服装を見ると、霜降の短い外套を被て、袖をまくし上げて、手に漏斗を持つてゐる。
『好い人。』
『好い人ツて、だ、誰だ？』
『ピョートル・ペトローウィチツていふ人。』
『ピョートル・ペトローウィチ？……ピョートル・ペトローウィチツて何者だ？』
『矢張貴下のお仲間よ。何だか難しい名前の人。』
『ププリーチンか？』
『あゝ然うだツけか。ピョートル・ペトローウィチツていふの。』
『お前知つてるのか？』
『知つてますともさ、』と顋を突出すやうにいふ。
ペッシコーフは默つて十遍ばかり部屋の内を往きつ戻りつしてゐたが、
『ワシリーサ。お前知つてるといふが、如何いふ風に知つてるんだ？』
『如何いふ風ツて……知つてるんだから、知つてるんですわ……好い旦那よ。』
『好いとは？　好いとは何處が好い？　如何いふ處が好い？』
ワシリーサはペッシコーフの面を凝然と見て、不思議さうに、徐々、
『好い旦那だから好い旦那ツてツたんでさアね。何處が好いツて、そんな……』
ペッシコーフは脣を咬んで、また彷徨き出した。
『何の話してゐたんだ？　うむ？』
ワシリーサは嫣然笑つて、恥かしさうな嬌態をする。
『何の話だ？　さア云へ！　さア〳〵！　云へツてツたら、云はんかツ！』
『まア！　何をそんなに怒つてるんだらう。』
少し間を置いて、
『何も怒つてるんぢやないがな……まア、一體如何な話をしたんだか、聞かして呉れ。』
ワシリーサは思出し笑をして、
『ふんとに彼人は可笑しい人よ！』
『ど、ど、如何？』
『可笑しいの。ふんとに可笑しいの。』
ペッシコーフはまた默つて了つた、頓て、
『ワシリーサ、お前は己の事を忘れちや呉れまいな？』
『あら、まア、厭な！　貴下まだ其様なこと云つてるよ！』
可哀さうに、ペッシコーフ胸は焦けるやうである。叔母さんが歸つて來て飯になつたが、飯が濟むと、叔母さんは寢床へ登つて了つた。
ペッシコーフは臥煖爐の上に横になつて、二三度臥返を打つて、トロ〳〵とすると、ふとギーツと云ふ音が耳に入つたから、跳起きて、頬杖をついて、キツと向うを見ると、戶が開いてゐる。飛起きて見ると――ワシリーサが居ない。戶外へ出て見たが――戶外にも居ない。町へ出てキョロ〳〵と彼方此方視廻したが、影も見えないから、帽子も冠らずに市場まで驅出して行つて見たが、此處にも居ない。落膽して歸つて來て、臥煖爐の上に打倒れて、壁を睨詰めた。氣が揉めて〳〵堪らない。ププリーチン……ププリーチン……と耳の端でわい〳〵鳴り

喚くやうである。
　叔母さんが睡惚け聲で、
「旦那如何ぞなさいましたかい？　大層苦なさうですね。」
「ナニ、何處も何ともないんだが……たゞ少し胸がから變挺で……」
「菌を餘り食り過ぎたからですよ。あゝ皆菌の所爲だ。南無阿彌陀佛！」
　一時間待つても二時間待つても一向歸つて來る樣子がないから、ペッシコーフは二十遍も跳起きさうにしては又悲しさうな面を夜着に埋めてゐたが、到頭歸らうと決心して、煖爐を降りて戸口まで出て來て、また引返すと、丁度叔母さんも起きて來て、職人のルーカと云ふ麵麭屋の辮に無患子のやうに黒い男が麵麭を燒きにかゝる樣子。それを見てペッシコーフはまた入口へ出て來て、凝然と考へ込んだ。放飼の山羊がコッソリ側へ來て、軈と角で突いて親密の意を表するから、凝然とそれを視て、何故だか「キシ、キシ」と云ふ途端に、ギーッと開戸が開いて、ワシリーサが顏を出した……と見るよりペッシコーフはツカ〳〵と側へ行つて、手を緊乎握つて、極めて冷淡く、その癖決然とした調子で、

「一所に家まで來て貰はう。」
「だッて、私ア……」
「一所に來いと云へば！」
　ワシリーサも餘儀なく其意に任せた樣子。
で、我家へ引張つて來て見ると、オニシムは相變らず大の字形か何かで睡てゐるから、覺して燭火を點けさせなどする。其中ワシリーサは窓際へ寄つて默つて腰を掛けてゐた。ペッシコーフも向うの窓際へ往つて、人間の生拔見るやうに直立つて往來を眺めてゐたが、オニシムが燭火を持つて入つて來て、何か云はうとするを見て、急に振返つて、
「彼方へ往つてくれ！」
　呆れて座鋪の中央に直立つて了ふと……
「直ぐ出て行つてくれ。」
　ジロリと旦那の面を視て、座鋪を出て行く老僕の背後から、旦那の聲が追蒐けて來て、
「何處かへ往つとれ、二時間ばかし！」
　オニシムは家を出て了つた。
　開戸がガタンといふを待兼ねたやうに、ペッシコーフはツカ〳〵とワシリーサの側へ寄つて、
「何處へ往つてたんだ？」
　此方は狼狽する。

「何處へ往つてたんだと云へば！」
　益々きよろつく……
「貴樣は聾かッ！　何處へ往つてたんだと云へば、返答せんかッ……」
　と手を振上げさうにする……
「あッ！　堪忍して……堪忍して頂戴……」
　と駭いて早口に云ふ。
「いや……ぶ、ぶ、打ちやせん！……打つんぢやない。打つたッて仕樣がない。何なと好きな事をしろ！　お前が……己の事を思つて呉れた時分なら……其時分なら……おりやア……」
　と默つて了つたが、せい〳〵云つてゐる。
　頓て又、
「ワシリーサ。己は人に迷惑を掛けた事は決してない。なア、ワシリーサ、然うぢやないか？」
「そ、然うですとも、」と吃る。
「己は惡い事したことはない、これッぱかりもない。また人を欺したこともない。それだのに、何故お前は己を欺した？」
「私ア欺した覺えはありませんわ。」
「覺えはない？　さうか。よろしい。それなら、先刻何處へ往つてたんだか、云はれんことはなからう。」
「先刻は……あの……マトリョーナーーン許へ

「往つてたんですね。」
『譃吐け!』
「あら、本當だわ。本當にマトリョーナ——ン許へ往つてたんだわ。嘘だと思ふなら、マトリョーナに問いて御覧なさい。」
「ブブ…ン…彼野郎に逢ひに往つたんだらうツ?」
「はア。」
「はア? はア? イヤ、はアだと?」
と蒼くなつた。
「ぢや、今朝窓の處で約束したんだな…そ、然うなんだな?」
『だツて、來いツてンですもの。』
「來いと云はれて、お前は行つたんだね…難有う、どうも難有う!」
と丁寧に辭儀をした。
「貴下は何だか變に思つてお出でなさるやうだけど…」
「こりや己の耳へ入れて呉れずともの事だつた。さうとも知らず、馬鹿だつたなア、己は…大聲出して喚き散らして…いゝさ、好きな處へ澤山行くが可いさ。己ア最うお前にや用はない…き、貴樣の面ア…最う…み、み、見るも厭だわツ!…』

ワシリーサは起上つて、
「さうで御座いますか。そんなら…』
『何處へ行く?』
「だツて貴下が…」
といひかゝるを遮つて、
「己ア何も出て行けとは云やせん。』
『いゝえ、そんなこと仰しやツたツて、私ア…最う面を視るも厭だツて仰しやるんですから…』
と出口の處まで來る。
「ぢやア、如何あつても歸るんだな?』
『だツて、貴下は人を虐めますもの…』
『虐める? こりや面白い! 何時私が虐めたい? さア、いつの幾日に虐めたか、云つて貰ひませう!』
『だツて、今しがた私を打たうとしたぢや有りませんか?』
『好加減な事云ふ。貴樣は非道い奴だ。』
「それから面を見るのも厭だツて云つたぢやありませんか? そりやア、貴下はどうせ立派な方ですから、私の面なんか見るもお厭で御座いませうさ。』
ペッシコーフは默つて切なさうな面をしてゐる。ワシリーサは戸の引手へ手を掛けて、
『なアに、貴下なんぞに交際つて貰はなくツたツて些とも困りやしない。なんぞ私みたやうなもんだツて…』
「もう好いぢやないか、ワシリーサ、もう好加減にしろよ。己の面ア見たつて分りさうなもんぢやないか。どうだ、狂人じみてゐるだらう? な、おりやア自分でも何を云つてるんだか些とも分らん位だ。本當に可哀さうだと思つて呉れ…」
「だツて、あんなに虐めますもの。」
「まだいふか。あゝ、困つた! もう濟んだ事はいひツこなし。最う堪忍して呉れ。な!」
「だツて貴下は虐めるんだもの。」
「いゝさ〳〵、最う虐めはせんよ。辭に免じて勘辨して呉れ。もう是からは乾度愼むから。な? 堪忍して呉れるか?」
『堪忍するもしないもないけど…』
『それぢやア一つ笑つて呉れ、笑つて呉れ…』
ワシリーサが面を反けると、
「あゝ、笑つた〳〵」と大きな聲を出して、躍上つて喜ぶこと雀の子の如し。

六

翌日も例の通り麵麭屋へ出かけて、何も變つ

た事はなかつたが、しかしペッシコーフは最う胸に創痍を負つてゐるから、從來のやうに快く笑ふことも出來ず、折々凝然と考へ込むことさへあつた。さて日曜になつた。叔母さんは腰が痛むと云つて、寢床を離れなかつたが、それでもお祈の時分には辛と降りて來た。お祈が濟むと、ペッシコーフはワシリーサを奥へ呼込んだ。今朝はワシリーサは始終辛氣だ〳〵と云續けに云つてゐる、ペッシコーフはペッシコーフで、何か思掛けぬ奇想が浮んだのを胸に祕してでもゐるやうな面色をしてゐたのである。

　で、ワシリーサを奥へ呼込んで、

『そこへお掛け、己は此處へ掛けるから。少し話がある。』

　腰を掛けると、

『ワシリーサ、お前は字が書けるかい？』

『字？』

『字。』

『いゝえ、書けないわ。』

『ぢや讀むことは？』

『讀むことも出來ないの。』

『それぢやア己の手紙を誰が讀んだの？』

『和尚さんが。』

　少し躊躇つて、

『お前は字を習ひたいとは思はないかい？』

『字なんぞ私達が習つたツて仕樣がないわ。』

『なに仕樣がないことが有るもんか。書物が讀めるさ。』

『書物ツて如何な事が書いてあるの？』

『いろんな裨益になる事が書いてあるのさ。何なら持つて來ようか！』

『だツて、私にや讀めませんもの。』

『己が讀んでやるから可いぢやないか？』

『だツて陰氣なもんでせう？』

『なに、其樣な事が有るもんか！　反つて陰氣な時なぞに讀むと善いものだ。』

『昔噺なんかも有つて？』

『まア、明日持つて來るから、見てゐるが可い。』

　其晩歸つて彼方此方の箱を探して見付け出したのは、小說文庫の端本が數册、鼠色になつたマスクワ出來の小說が五册、ナザーロフの算術例題が一册、卷頭に地圖が附いてゐる地理初步といふのが一册、カイダーノフの歷史の二卷目が一册、夢占手引草といふのが二册、千八百十九年の曆が一册、ガラテーヤが二部、カズローフのナターリヤ・ドウゴルーカヤといふ詩とラスラーウレフの詩集の第一卷とが各一册。さて何が可からうと散々迷つた擧句、到頭カズローフとラスラーウレフの詩集を持つて行くことに決定した。

　翌日は急いで衣服を更めて、二册の書物を上衣の下に隱して、麵麭屋へ出懸け、折を見てワシリーサを坐らせ、ザゴスキンの小說を讀み始めた。ワシリーサは兀然と坐つて、初の內はニヤリニヤリ笑つてゐたが、其內に何か考へ込むやうな風をして……それから少し俯向くかと思ふと、眼を細くして、口を少し開いて、手をパッタリ膝へ落して――坐睡をはじめた。ペッシコーフは太い聲でノベツに駈出すやうに讀むのであるから、これは誰にしても解りにくからう。ふと顏を揚げて、

『何だ、睡つてるのか？』

　ワシリーサは愕然ッとして、面を撫でて、序に伸をした。ペッシコーフは甚だ面白くない……

『詰らないわ、』とワシリーサは睡さうに云ふ。

『ぢやア、此度は詩を讀まうか？』

『え？』

『詩をさ……面白い詩を。』

『もう〳〵澤山。もう澤山！』

　ペッシコーフは無手とカズローフの詩集を引

抓んで、蹶然と跳起きるや否や、やけに二三度部屋の中を歩き廻つて、ツカ〳〵とワシリーサの側へ寄つて——讀み始めた。ワシリーサはうッと反身になつて、手を楯にして、ペッシコーフの面を凝視めてゐたが——不意に頓狂な聲を放つてけたゝましく笑ひ出して、轉げ廻つて可笑しがる……

ペッシコーフは癇癪紛れに書物を床へ叩付ける。ワシリーサは益々止度なく笑ふ。

『何が可笑しいんだ、馬鹿め！』

何のこと笑ひ倒ける。

『笑ふなら笑へ、澤山笑へ、』と怫然としてゐる。

ワシリーサは腹を抱へて笑倒けて、絕入るやうに呟々云つてゐる。

『何がそんなに可笑しいんだい、狂人め！』

でもワシリーサは手を揮るばかりであるから、ペッシコーフは矢庭に帽子を引抓んでプイと戶外へ出て了つた。少し蹌踉ながら早足に歩いて、來るともなく町の出口の番所の在る處まで來ると、ふと馬車の音がして、誰やらおいおいと聲を懸ける者がある。ヒョイと面を揚げて視ると、成程大きな古ぼけた馬車が來て、內には例のブブリーチンがチュチュリョーフと云ふ人の姉妹の女の間に挾まつて、此方むきに坐つてゐる。お孃さん達は二人とも仲の好いのを風聽顏に對の衣裳を着て、同じやうに首を曲げて嬌態をやつて、奧床しい、誰が眼にも厭でない微笑を口元に湛へてゐる、馬車の此方側には親父さんのチュチュリョーフの幅廣な麥藁帽子がシャに構へてゐて、その下から圓々と肥つた頸窩がほの見え、そのお隣には阿母さんの髮飾がチンと澄してゐる。この並び方を見てもブブリーチンが阿父さん阿母さんに大方ならず氣に入つてゐるのは分るが、當人もそれをば合點で、甚く難有がつてゐる樣子。勿論平氣な面を作つて平氣で物を云つて笑つてゐるやうなものの、その平氣で取繕はぬ中に何處となく優しく身に沁みる程殊勝氣な所も見える。で、お孃樣達はといふと、これが又一寸一口には云はれぬ程の樣子。まづ嫻雅で溫柔しく、淺猿しからぬ程には世を樂んでゐながら、始終無常の念を去らず、その癖自ら信ずることは厚くして、人の身に負ふ天賦の高尙にして優美なることを須臾も忘れぬほどであるから、才分に於ては對手の男をおかッたるく思ふけれど、其信實に羈されて醜からぬ程には意を寄せてゐる——といふ念の入つた心持や性質が一度にドッと顏へ押出してゐる。ブブリーチンのペッシコーフを呼懸けたのは強ち用があつてではなく、唯嬉しさの餘りが溢れたので、愛想よく優しらしく挨拶をした。お孃樣達も柔しい褒こらしい眼元で此方を見おこして、品によつたら隨分言葉の一つも掛けて呉れさうな樣子であつた。肥つた素直さうな小馬がダクで側を驅通り、悄氣のない娘々した笑聲を跡に殘して、馬車が廣い往來を長閑に驅けて行く。チュチュリョーフの帽が今一度ちら〳〵と見えた。副馬が首を傾げて姿致をやりながら、躍るやうに驅けるのに、煙るが如き小草を踏蹴いて、御者は意を注けながらも機嫌よく口笛を吹いて行く……と。馬車は灌木の影に隱れて了つた。

哀れなるペッシコーフは多時其場に立盡してゐたが、頓て小聲に、

『薄倖だなア、おれは！……』

襤褸々々した服裝の小兒が前へ來て、おづおづ面を覗いて、手を出して、

『どうぞや、旦那樣、一文戴かして遣つて下さいまし。』

ペッシコーフは一文出して、

『そら。貴樣も薄倖なお仲間だからなア。』

と云ふ聲までが力無げであつた。

さて麵麭屋へ戾つて來たが、ワシリーサの部

屋の入口で立止まつて、心の中で、
『あゝ、情ない！　これが己の巣なんだ！　それにつけてもブブリーチンが恨めしい。出れば彼通り見せつけられるし、歸ればまた彼男で苦勞するし……』
ワシリーサは後向きになつて、何の氣もなく歌を唱ひながら絲を解してゐた。更紗の色の褪めた衣服を着て、髮も辛とおツつくねたのらしい。部屋の內は堪らなく蒸熱くて、羽蒲團やら襤褸やらの匂がむん／＼とする。赭ちやけた虚飾家らしい油蟲が壁を縱橫に走巡つて、鋌の代りに孔を開けた古箪笥の上には、破れた壺と押竝んで女物の破靴が乘つて居るといふ爲體で、おまけにカズローフの詩集がまだ放つた儘になつてゐる……ペッシコーフは腕組をして首を振つてそれを見てゐたが、また戶外へ出て了つた、どうも恐ろしく馬鹿にされたやうな氣持がしたので。
我家へ歸つて來てから、衣服を着かへたいと云ふと、オニシムは澁り／＼フロックコートを出して來た。旦那殿は話がしたくてむず／＼するやうだけれど、老僕が意地惡く默然でゐるので、もう堪らなくなつて、
『おれが外へ出さうなら、何處へ行く位は云つても好ささうなもんだナ？　何故默つてる？』
『そんねえな事問いたとツて、仕方がねえからね。』
『仕方がないもんか！　誰かヒョッと用があつて來まいものでもない。イワン。アファナーシイチ（ペッシコーフの名）は何處へ行らツしたツて問いたら、何處其處へ往つたと云はなきやならんぢやないか？』
『誰が用があつて來べえ？　誰が來るもんで。』
『また始まつた！　そ、それが貴樣の癖なんだ。』
老僕は彼方向いて、委細構はず衣服の塵を拂ひにかゝる。
『だから己ア貴樣は嫌ひだ。』
老僕は額越に旦那殿の面をジロリと見た。
『いつでも然うなんだ。人が一言いや二言めには直ぐ口返答だ。』
老僕は苦笑として、
『お前さまそんねえに云はツしやるけんど、往先イ問くがものはねえだもの。私イちやんと知つてるだ。麵麭屋でなくツて何處へ往かツしやるべえ！』
『大違ひ……大違ひの眞中だ！　なに彼樣な處へ往くもんか！　おれア最う麵麭屋へはふツつり往くまいと思つてるんだ。』
老僕は險しさうな眼付をして、箒でハタ／＼と拂いてゐる。今に何とか云つて贊成の意を表するかと思つて待つてゐても、いつかう何とも云はないので、旦那殿は決然として、
『彼樣な處へ出入りをしては體もないからね。己の體面に關はる。なア、オニシム、貴樣はまア何と思ふ？』
『私イ何と思ひますべえ？　お前樣が行かれえんだら行かねえで可えでがさ。』
衣服を着更へながら、腹の中で、『老夫め、本當にしやがらない。』
で、家を出たが、何處へ行くでもなかつた。町を彷徨いて、入口を眺めなどしてゐたが、戾つて來たのは彼是九時ごろでもあつたらう。莞爾莞爾しながら、今までの我愚かさを自ら異むが如く、首ばかり竦めてゐた。心の中で、『これがソノ鐵の意志といふ奴なんだ……』
其晩は誠に寢苦しく明かして、翌朝は遲く起きたが、晩までは何處へも出ずに、ひどく淋しがつてゐた。所藏の書を皆讀盡して、小說文庫の然る小說を讀んだ時には、『旨いな！』と云つた位。褥に就からとして、パイプをといふと、汚ならしいのを持つて來たから、先づそれで喫始

めると、宛で焮衝を起した馬の馬るやう。

『厭なパイプだなア！　櫻の木のは何處に在るい？』

『麵麭屋に在りますべえさ。』

と老僕は落着いてゐる。旦那は眼をパチクリやるばかり。

『どうしますべえね？　取つて來ますべえかね？』

『いや、それにや及ばん。取つて來んでも可い……取つて來ちや不可。よろしい？』

『はア。』

其晩は如何にか斯うにか明かして、翌朝になると、老僕が例の通り青い花形の附いた皿に捻麵麭を載せて出した。それを視るとペッシコーフは窓の方を凝然と視つめて、

『お前……麵麭屋へ行つたのか？』

『私が往がねえで、誰が行ぎますべえ？』

『ふむ。』

と考へ込む。

『往つたら、ソノ、誰が出て來たらう？』

『人が出て來ねえでは、麵麭が買へねえからね。』

『誰が出て來たい？』

『誰がとツて、極つてるだ。ワシリーサでがさア。』

旦那は默つて了つた。老僕が空皿を攫つて、座鋪を出ようとすると、

『オニシム。』

と情ない聲が出た。

『何か用だかね？』

『ソノ……己の事を何とか云つて問きやしなかつたか？』

『何とも問きましなんだ。』

ペッシコーフは齒を切つた。肚の裏で『やれやれ、戀といふものは果敢ないものだぞ！』

とグンニャリして、『だが、己も如何かしてゐたなア！　詩を讀んで遣らうなんざ可笑しかつた。彼奴ア馬鹿なんだ。彼樣な馬鹿にや、煖爐に臥そべつて、麵麭でも喰つてるのが相當なんだ。下司だなア！　人間の屑たア全く彼奴の事なんだ！』

凝然と坐つた儘で二時間も經つてから、小聲で、

『來ない……來やがらない！　如何だい、まア！　己が腹を立つて歸つて來たな言はずと知れてる、己がソノ癇癪を起したな判つてる。それだのに……イヤ如何も、戀ツていふ奴は果敢ないもんだなア……何とも問きもしやがらない。旦那は如何していらツしやるとも云やアがらない。二日も顔を見せなくツても心配もして呉れないんだ……それどころかい、事によつたらまた彼ブブ……幸福者奴！　チョッ、おれア馬鹿だなア！』

衝と起上つて、默つて部屋の中を歩いてゐたが、頓て立止まつて、少し顔を顰めて、頭窩を搔いた。口へ出して、『しかし、行つて見ようかしら。如何して居やアがるか、一つ見て呉れよう。而して思ふさまソノ鼻を引捽つてやるんだ、それが好い〱。オニシム、衣服を持つて來て呉れ！』

衣服を改めながら、

『行つたら如何なだらう？　ヒョッとしたら、向うでも憤つてやしないかな？　何だツて、毎日のやうに往つてた者が、ふツと斷れ因縁もなく鼬の道切になつちやツたんだからな。まア、行つてみろ。』

さて麵麭屋へ來たが、少し洒落る必要もあるので、角門の處で立止まつて、兩手で上衣の襞積を引張ると、危く綻びが切れさうになつたから、狼狽てて拔衣紋をして首を振つてみて、それから襟の一番上部の隱釦紐を外して、吻と溜息をすると……

『何故其樣な處に立つていらツしやいます。お入んなさいましな。』

と窓の内でいふのは叔母さんである。

氣を變へてズッと家へ入ると、叔母さんが出迎へて、

『昨日は何故入らツしやいませんでした？ お加減でも惡かつたんですか？』

『何だか昨日は、ソノ、頭痛がしてね……』

『頭痛がなすツたら、兩方の顳顬ン處へ黃瓜をお張んなさると可うござんしたのに。そりやア本當に拭いて取つたやうに治ッちまひますよ。最うお宜しいのでございますか？』

『最うい丶ので。』

『それは善うございました。』

奥へ通ると、ワシリーサが、

『おや、入らツしやい。』

『アイ。』

『貴下は漏斗を知らなくツて？』

『漏斗？ 如何な漏斗？』

『漏斗……我家の漏斗さ。貴下ン處へ持つてツたんでせう。本當に貴下は、本當に油斷がならないよ。』

ペッシコーフは冷かな眞面目くさつた面をして、

『ぢやア探させて見よう。私は昨日は此家へ來なかつた筈だが……』

と妙に聲に力瘤を入れる。

『あ、さうだツけ、貴下は昨日は來なかつたんでしたね。忘れツちやツた。』

と蹲踞んで、箱の中を掻廻しながら、

『叔母さん！ 叔母さん！』

『何だよ。』

『私の胸かけを知らなくツて？』

『胸かけツて、如何な？』

『黃ろいのさ。』

『黃ろい？』

『あ丶、黃ろい、縞の。』

『うんにや、知らないよ。』

ペッシコーフはワシリーサの上へ屈みか丶るやうにして、

『ワシリーサ、少しお前に話がある。己ア漏斗や胸掛どこぢやない。そんな物は後だツても可いんだらう。』

ワシリーサは起たうともしないで、唯顏を揚げたばかり。

『お前は何かい――本當の事を云つて吳れなくツちや困るが、實際ソノ、己の事を何とか思つてて吳れるのかい、如何だい？ 一つお前の了簡を聞きたいんだが……』

『あら、また！ 本當に貴下は可笑しな人よ！……そんな事ア云はなくたツて知れてまさアね。』

『そんなら、何故昨日來て吳れなかつたの？ 手が放せなかつたのかい？ 手が放せないなら放せないで、病氣だか何だか知れないんだから、使で問ねて吳れたツて好ささうなもんぢやないか？ それをお前は全然知らん顏してゐるんだもの。己が死なうが生きようが一向構はないんだね。』

『だツて其樣な事ばか思つちや居られませんもの、用が多いんだから……』

『用が多いてツたツて……人を然う馬鹿にするな……そんなら猶の事、善くない。長者のためなら、お前、品によりやア何だツてするぢやアないか……そりやア然うと、己のパイプを知らないかい？』

『貴下のパイプは此處に在つてよ。』

ペッシコーフはパイプを受取つてパクリパクリ。

七

それより何日かの間は外見はまづ穩かに過

ぎた。併しペッシコーフは氣が揉めて〳〵堪らんから、些とも油斷せず、始終きよろ〳〵眼で附廻すので、ワシリーサの身になつては蒼蠅いこと夥しい。或夕方の事であつたが、ワシリーサは常よりも念入りに盛裝をして、隙を見て一寸何處へか出掛けたぎりで、夜に入つても歸つて來ない。ペッシコーフは拂曉になつて一旦我家へ戻つて、朝の八時ごろに又出直して來て見たが、まだ歸つて居ない。消えも入りさうな思ひをして晝まで待つてみても、矢張歸つて來ないから、餘儀なく叔母さんと卓に向つた。

叔母さんは平氣なもので、

『彼娘は何處へ行つたのかしら。』

ペッシコーフはむしやくしや腹で、

『餘り甘やかし過ぎるから不可。どうも餘り甘やかし過ぎる……』

『だツて、旦那、さう〳〵は世話ア燒き切れませんもの。まア好にさせとくほか仕樣が有りませんのさ。自分の爲る事さへ爲てゐればね、散步位は、まア仕方が有りませんからね。』

で、ペッシコーフ一人ではら〳〵思つて待つてゐると、ワシリーサは晩方になつて漸う歸つて來た。此方は待ちに待つてゐた所であるから、それと見るより衝と起上つて、腕組をして、眉に八字を寄せて、おそろしい面をして見せると、ワシリーサは些とも臆した氣色はなく、凝然と其面を覗込んで、故と鼻の頭で冷笑ひ、まだ一言も言はぬ内に、衝と自分の部屋に入つて錠を卸して了つた。呆氣に取られて呀と口を開いた儘、叔母さんの面を視ると、叔母さんも流石に氣の毒と思つたか、差俯向いて了つたので、久らくは其處に立往生。遂に探手に帽子を取つて横倒しに冠つた儘、ふら〳〵と戶外へ出は出たが、開いた口は未だ閉がらなかつたのである。

我家へ歸るや否、唐突革枕を取つて、長椅子の上へどツさり倒れ、壁に向つて臥て了つたのを、オニシムは次の間から覗いて見て、のツそり入つて來たが、入口の戶に凭れて、煙草を嗅いで、足を組みながら、

『鹽梅でも惡えだかね？』

返答なし。

少し經つてから、

『醫者樣ア呼んで來べえかね？』

『何とも有るんぢやない…彼方へ往つとれ！』

といふも懶さう。

『何ともねえ？　うんにや、何でも鹽梅が惡えだツぺえ。何で何ともねえ事が有んべえ？』

ペッシコーフは默つてゐる。

『まア、御自分の面ア見なさろ。痩ツこけツちまつて以前の影も形もねえだ。それも何かに思つた事だと云や……ほんに考へると、馬鹿々々しく〳〵ツて堪んねえだよ。お前樣だとツて、コレ、旦那衆とも謂はれる人でねえかね？』

と返答を待つてみても身動きもしないから、

『旦那とも謂はれる人が、そんでは濟むめえでねえかね？　そりや一寸女郎ツ子に構つて見るも好かツぺえさ。男だアもの、些とや少との事ア仕方がねえ。だけんど好加減構つたら、放下しツちまふが好えでねえかね？　そりをお前樣のやうに……ほんに蓼喰ふ蟲も好々ツていふけんど、お前樣のやうな人もねえだよ。』

ペッシコーフは唯縮こまつたばかりで、何とも云はなかつた。

『ほんの事で御座りますよ。餘所の者が汝が許の旦那は是々だツて云つたら、私イ本當にしねえね。「譃ウぶん拔くな。そんねえな事本當にしる己だと思ふかツ！」て叱つてやるね。私イ手前の眼玉で視とつてさへ、どうも眞の事だた思へねえだ。こんねえな愚擬けた事ツてねえ。守宮の黒燒でも打掛けられたでねえかね？　ま

ア彼女ッ子が何處がそんねえに善かんべえ？　其處を考えて見ただら、ほんに愚癡けた事だから、思切ッ了はれさうなもんでねえかね？　口イ一つ碌に開けねえやうな者を、お前樣は……彼女は尋常の女ッ子だアよ。そりを其樣に大騷ぎやるた、何たら事だッぺえ。』

『彼方へ行けと云へば』とペッシコーフは枕に顏を埋めたまゝで唸るやうに云ふ。

『うんにゃ、行ぎますめえ。私が云はねえきや、誰が云ふべえさ。ほんによ。そんねえに懊惱してからに……まア、考えて見なさろ、誰が事でそんねえに氣イ揉むだか。馬鹿氣てるでねえかね？』

『彼方へ行けッてば、行かんか？』

と、また唸る。

オニシムは主人に對する禮だけに些とばかり默つてゐて、また、

『それもよ、向でお難有えとでも思つてるだらまんだ可えが、向ぢや何とも思つてねえだもの。他の者だら、如何かして恩返ししねえでは濟まねえッて心配しる所だけんど、そりを如何だッぺえ……彼女ッ子はお前樣の事なんざ此んばかしも思つてねえだ。ほんに此樣な面汚した事アねえ。世間ぢやお前樣の事をいろ〱に云ふだよ、そりやほんに如何ッて云ひきれねえ位だ。こんねえになると知つただら、彼時私が……』

『彼方へ行けッたら、何故行かんか？』

と聲を厲らげて云つたが、併し顏をも得揚げず、身動きをもしなかつた。

オニシムはなか〱命を奉じない。

『うんにゃ、彼方へ往ぎますめえ。こんねえな憎まれ口イ利くも皆御前樣の爲だアよ。だから私が云ふ事聽いて、思ひ切つて了ひなさろ、よ、思ひ切つて了はッしゃいよ。若しどうあつても思ひ切れねえんだら、私が巫女殿を連れて來べえから、御祈禱して貰はッしゃい、御祈禱でもして貰つてから考えただら、自分にも可笑しくなつて、オニシム、如何して己ア彼樣に思つただんべえッて、笑はッしゃるべえさ。まア、考えても見なさろ、彼樣な女ッ子は狗子見たやうに何處にでも居るだ……一つ口笛ェ吹いて見なさろ。』

といひかけると、ペッシコーフが狂氣の如くになつて蹶然と跳起きたから、オニシムは驚いて兩手を楯に構へると、怪むべし、ペッシコーフは足でも攫はれたやうに復ペタリとなつた。見ると、蒼褪めた頬に涙が滴はつて、髮の毛はそゝけ立ち、眼をどんよりと曇らして、拗歪めた唇をぶる〱顫はし、頭を胸へ垂れてグタりとなつてゐる。

それと視るよりオニシムはバッタリ膝を突いて、

『旦那樣や、勘辨して呉れさッしゃい！　私が惡かつた！　私イ口が過ぎ申した……勘辨して呉れさッしゃいまし！　私等がやうな者が何を云つたとッて、何も然んねえに氣にして泣く事ア御座んねえ……なア、モシ、旦那樣……』

けれども、ペッシコーフは顏をも揚げ得ないで、グルリと彼方向いて、復た長椅子の隅に打伏して了つた。

オニシムは起上つて、旦那の側へ差寄つて、臥姿を眤と視れば、後悔臍を噛む思ひ。

『旦那樣や、衣服を脱がしやらねえか？……寢臺へ横げさッしゃッた方がよかんべえでねえかね？……覆盆子を食はッしゃらねえかね？……何も然んねえに力ア落す事ア御座んねえ……皆淋しいからで、何でもねえ事だよ……今に何ともなくなるから、氣イ確然持つていさッしやいよ』と反覆し〱云つてゐた。

けれども、ペッシコーフは長椅子を離れようともせず、唯時々肩を竦め、足を縮めて丸くなるばかり……

其晩はオニシムも夜一夜附切りで居た。夜が明けてからペツシコーフは初て眠入つたけれど、眠てゐたのは僅の間で、七時には最う起き出でた。蓬頭亂髮で眞蒼な顔をして、如何にもガッカリしたらしい樣子で、茶を吳れろと云ふ。から、オニシムはいそ〳〵として立働き、早速湯沸を卓に据ゑて、さておづ〳〵、

『旦那樣や。お前樣も腹ア立つだんべえが、勘忍して吳れさツしやいまし。』

ペツシコーフは哀れな聲で、

『なに、腹ア立つちや居ないよ、お前の云ふ事は一々尤もだ。己も實は然う思つて居るんだ。』

『私イ、お前樣の爲ヱ思ふもんだからね。』

『それも能く分つてゐるよ。』

と默つて俯向く。

どうも樣子が可異いから、

『旦那樣。』

『何だ？』

『私イ、ワシリーサを呼んで來うかね？』

ペツシコーフは赧然と面を赤めて、

『なに、呼んで來ちや不可。（といふ肚の中では、「呼んで來るやうな女なら賴母しいけれど」と思ひながら、）さう弱味を見せちや不可。なに、考へて見りや、他愛もない事だ。昨日はな、己はツノ……考へて見りや憎しい譯さ。お前の云ふ通りだよ。これは何でもフッツリ思切つて了はなければならん。な、然うぢやないか？』

『そりや最うそれに違え御座りましねえ。』

ペツシコーフは又凝然と考へ込んだ。考へれば考へるほど、不思議なやうな心持がして、我ながら我心が怪しまれる。凝然と床を視詰めて身動もしなかつたが、胸が有耶無耶の雲に鎖されて、茫然と氣脱がしたやうでありながら、腸を掻毟られるやうな氣持がする。

『己はまア如何したんだらう？』と時々思つては、直ぐ又滅入つて了ふ。『馬鹿氣切つてゐる！宛で赤兒だ！』と口へ出して云つて、面をツルリと撫でて、頭振を掉るかとおもふと、又兩手をバッタリ膝に落して、凝然と床を見詰めて了ふ。

オニシムは旦那の樣子に氣を附けて、悲しげな面をしてゐた。

其内にペツシコーフはふッと面を揚げて、

『オニシムや、本當にそんな惚藥なんぞが有るもんだらうか？』

『なくツてね、お前樣、』と片足踏み出して、『アノ下士のクルボワーツィを知つて御座らッしやるかね？……彼人の舍弟は惚藥を打掛けられたもんだで、到頭女子で命を失くならかして了ひましたアモシ。それも相手は、お前樣、料理番だツけえが、えらい老婆さまだつたと思ひなさろ。尋常の裸麥の麵麭を一片食はしただアね——初手お呪ひしてだけんど。然うすると、舍弟め首ツたけ惚込んで了つて、老婆さまの跡べえ追廻して、夢中になつて、晝ばか晩めとる始末だア。何でもハア老婆樣のいふ事たら、厭だとは云はねえ。だもんだで、老婆樣は自慢にして舍弟を誇示すだ。人目も何も在つたもんでねえだ。到頭終局にや舍弟め肺病に罹つておッ死にましツけえが、料理番なんぞに其樣に惚込んだだあね。それも皺くたの甚い老婆樣だつたと思ひなさろ。（と煙草を嗅いで、）何でも嬶だの神樣だのいふ者にや碌な者はねえだノシ。』

『彼女は己の事を何とも思つちやアゐないのだ、そりやもうチヤンと分つてる。そりや誰が何と云つたツてそれに違ひないのだ。』

とペツシコーフは妙な身振をしながら、小聲で呟くやうに云つたが、それが宛で全く關係の無い事を全く關係の無い人に話すやうな身

振であつた。

オニシムは自分の話を續けて、

『然うした女子も隨分有るでがすよ。』

『有る？』

とペッシコーフは問返したのでもなく、異んだのでもなく、妙な調子で哀れ氣に云ふ。

オニシムは凝然とその様子を視て、

『旦那様や、何ぞ喰べさしッたら、如何だね？』

『喰べたら？』

と同じことを云ふ。

『それとも煙草でも持つて來べえかね？』

『煙草を？』

とまた鸚鵡返し。

オニシムは口の中で、

『これだから女子は可怖え。最う全然魅られとるだな。』

八

長靴の音が次の間にして、例の愼まし氣な咳拂ひも聞え、誰ぞ部下の者でも來た様子であるから、オニシムは座鋪を出たが、間もなく一人の兵を連れて入つて來た。兵といふのは脊低な燻んだ面の男で、黄ばむほど着古して彼方此方に繼を當てた外套を着たばかりで、下着も着てゐなければ、襟飾もしてゐなかつたが、直と直立して、禮をして、官印の捺つた大きな封書を出したから、開封して見ると、衛戍長官の少佐から來た手紙で、卽刻出頭可有之といふことである。

ペッシコーフは手紙を拈くつてゐたが、聞いたとて無駄と知りつゝ、聞かない譯にもいかないで、使の者に、

『何の用だか、貴様は知つてゐないか？』

兵士は寢言でも云ふやうに、口をむぐ〳〵やつて、さて辛うじて、

『存じません！』

『他の將校も呼ばれるのか、己一人なのか？』

矢張口をむぐ〳〵やつて、

『存じません？』

『さうか。それぢや最う歸つても宜しい。』

兵士はトンと一つ足拍子を踏むと同時に、左へグルリと向いて、腮の邊を平手でパタリ（二十年代には此様な事が行はれたもので）、而して出て行つた。

跡では主從顏を視合して默然たりで、殊にオニシムが急に心配さうな面になつたが、打棄て置くべき事でもないから、兎も角もと長官の處へ出懸けて行つた。

長官といふは膨んだやうな赤面の、首の短い、肥つた、不恰好な、六十許りの老人で、餘りウォドカが過ぎるので、手が始終顫へるといふ人物。矢張ブルボンの連中で、老朽軍人の一人。三十の時初めて讀書を習覺えて、物を云ふには餘程骨を折る、これは一つには病の故でもあるが、また一つには思慮を纏めることが大の下手からでもある。氣分は人間に有り得るだけのものを一人で背負つてゐて、朝からウォドカを飲む頃までは沈鬱で、晝頃は氣短で、夕方からは放任になつて、褥に就くまでは鼻を鳴らして唸つて許りゐる。ペッシコーフの來たのは丁度氣短の刻限で、便服をはおつて、銜煙管で長椅子に腰を掛けてゐたが、耳の短い肥つた猫が押竝んで香箱を作つてゐた。

長官は長椅子に凭つた儘、鉛のやうな眼でジロリとペッシコーフを尻眼に掛けて、

『や、來ましたな！　まア、お掛け。一つミツシリとな……最う何も彼も全然判つとるからな。』

ペッシコーフが席に就くや否や、長官は突如に憤然となつて、

『君は、將校ぢやないか？　將校なら、何故豫ての訓令通り品行を愼んぢよらん？　若し君

が兵ぢやツたら、私は君を笞つて〳〵笞ちからかいて、而して隊から放逐するんぢやけど、君は將校ぢやから、然うもならん。ま、一體如何した事か？　軍人の面を汚して、そいで濟むもんと思つちよるのか？』

『一體その何のお話で……』

『私に向うて口答へしちや不可！　私そいが大嫌ひぢや。大嫌ひと云うたら大嫌ひぢや。そら見い、その釦紐の體様は何ちふ様ぢや？　そげな風しちよツて君恥と思はんな！　軍人とも云はるゝ者が毎日々々麪麭屋なぞに往きをつて！　何やら女子が居るから、そいで往くのぢやらうが、女子どもに構つとツちや不可！　自身に麪麭まで焼いて、軍服を汚すちふぢやないか？　あゝ？』

　ペッシコーフは聊か冷りとした。

『ですが、ですけれど、承はつた處では、それは皆私一個の私事ぢや有りませんか？』

『口答へしちや不可ちふが、君にや解らんか？　私一個の事ちやとは何ぢや？　若し事が職務上の事で有ツつらうもんなら、私や其分にや置かん、君を監獄に打込むんぢや――そのための宣誓ぢやないか！　私は從來枝の一百も折つて來た男ぢやアから、職務上の事なら、能く知つちよる。そんな事なら、私の知らん事ないわ。私は職務上の事云ふでない、軍服の事云うちよるのぢや。軍服を汚すが悪いちふのぢや。私は君を子の如思うちよるから……君達の品行は皆私が監督せにやならんから、云ふのぢや。私は責任を負はんならんから、云ふのぢや……』

『そりを君は彼此口返答するかツ？』と思ひ掛けない時分に憤然となつて、眞紅になつて、口から泡まで吹いたので、鼠は尻尾を捲いて床へ飛降りた。『私が……私の了簡一つで、君はど、ど、ど、ど、如何でもなるぞ……私を誰ぢやと思ふ？　長官たる者が命令するに、君は反對するかツ？　長官たる者が……ちよ、ちよ、長官たる者か……』

　といひかけて咳込むやら、唸るやら。無殘や、ペッシコーフは椅子の端に腰を掛けて、眞蒼な顏をして、小さくなるより外はなかつた。

　長官は慄へる手を揮廻しながら、威猛高に、

『私が部下の者はシャンとしちよらんば不可！　品行は第一ぢや！　不品行は決してすることならん！　そりや交際したいなら誰とでも交際するが可え――私構はん！　ぢやが、將校ならば――ソノ……ソノ、ソノ、ソノ……何しちや不是！　麪麭焼くことならん！　町の女子を叔母さんちふことならん！　軍服汚しちやならん！　口返答しちやならん！　默つちよれツ！』

　最う口も開かれぬ仕合、喘と一息入れて、其の間を睨んで、

『フローウカ！　鰊持て來いツ！』

　其間にペッシコーフは徐捷く起上つて廊下を飛出し、給仕の子供が鰊の盆の上に頭の切つたのと、ウォドカを入れた大きな壜とを載せて持つて來るのに、危なく突當らうとしたを引外して、戸外へ駈出すと、

『默つちよれツ！　口返答すツか！』と激しく喚く長官の尖聲が背後に聞えた。

九

　さて戸外へ駈出しは駈出したが、どうも妙な心持がする。

『夢ぢやないだらうか？　それとも氣違ひになつたのかしら？　どうも不思議だ。畜ッ、向うで愛想を盡かしたなら、此方も愛想を盡かした……それが何が不思議だ？』

と面を皺めて、殆ど聞えるほどに、口に出して、

『いつまでもかうしちやゐられん、これから往つて全然話を附けて、跡で寝覺の悪くないやう

にして、切れて了はう。」

　足早に麵麭屋へ行くと、職人のルーカの甥に當る小さな子供――彼外住居をしてゐる山羊の仲善の朋友が、まだ遠方からペッシコーフの姿を瞥と見るや否、ツイと角門の内へ入つて了つた。

　麵麭屋へ來ると、叔母さんが出迎へに出て來たから、

『ワシリーサは居ますか？』

『生憎出まして留守で御座いますよ。』

と聞いて折好しと思ひながら、

『少し貴女に咄が有つて來たんだが……』

『へえ。何の御用で？』

『他の事でもないが、その何です……どうも彼樣な事が有つちや……その……どうも昨日のやうな事が有つちや（と少し狼狽いて）、まア早い話がその……併し腹を立つちや不可ませんぜ。』

『へい〳〵。』

『まア私の身にも成つて考へて見て下さい。』

『へい〳〵。』

『お前さんは道理が解つてるから、何だが、どうも彼樣な事が有つちや、最う私も此方へ遊びに來る譯に行かない。』

「へい〳〵、御尤も樣で。」

『そりや私ア非常に殘念だ……ソノ、辛い位だ、誠に辛い……』

「どうも致方が御座いません。」と落着いたもので、「これまでの御緣で。ぢや、今日までの御勘定を致しますから、何卒。」

　ペッシコーフはかう早速納得して吳れようとは思ひがけなかつたのみならず、實は從頭納得して貰ひたくは無かつたので、唯叔母さんは兎に角ワシリーサを一番驚かして遣らう位に思つてゐたのであるから、かうなつてみると何だか心細くなつて來て、

『かういふ話にしたところで、ワシリーサは無論異存はあるまいと思ふ、反つて喜ぶ位だらうと私は思ふんだが……』

　叔母さんは算盤を取つてパチ〳〵彈き出したから、此方は益々氣が氣でない。

『尤もワシリーサが何で彼樣な擧動をしたのか、其理由さへ判りやア……そりや私だつて……何もその……尤も問いてみなければ解らん事たけれど、併し或はその、何の仔細も無い事かも知れんのだから、私だつてその、承知が出來ないとも限らないけれども……』

『御勘定は丁度札で三十七ルーブリと四十コペークになります。一寸當つて御覽下さいまし。」

　何とも挨拶がない。

「御飯代が一度が七グリーウナで十八度で御座いますから、これが十二ルーブリと六グリーウナ。」

『ぢやア彌々別れるんですか？』

「如何も致方が御座いません。どうせ合せ物は離れ物で御座いますから。お茶が十二度。一度が一グリーウナづつでございますから、これが……」

『だが、叔母さん、一體ワシリーサは何處へ往つたんです？』

『ツイ問きませんでしたよ、へい……丁度銀貨で一ルーブルと二十コペーク。」

　ペッシコーフは凝然と考へ込んだ。

『クワスに肉羹が、」と叔母さんは人差指で行きさうな所を、どういふものか中指で玉を彈いて、『銀貨で五十コペーク。お茶の相手のお砂糖に、それからお茶受の麵麭が――矢張銀貨で五十コペーク。それから煙草が四箱で銀貨八グリーウナ――これがお立替に成つて居ります。それから裁縫屋のクプリアン・アポロノーフに……』

　ペッシコーフはふと面を揚げて、猿臂を延し

て算盤を掻廻して了つたので、
『旦那まア何を爲さいます？　私が何か狡猾い事でもしてゐると思召すんですか？』
此方は狼狽てて微笑して、
『叔母さん、私は思直したよ。實の所は只一寸洒落にやつてみたのさ。矢張今迄通り仲好くして居ませう。ほんに私も詰らん洒落をしたもんだ、今更別れると云つたツて、然うツイ造作もなく別れられるもんぢやないからね。』
叔母さんは差俯向いて何とも云はなかつた。
ペッシコーフは部屋の中を歩き廻りながら、頻りに揉手をして、
『最う串戯は好加減にして置かう。西の海へサラリさ！　ハ、ハ、ハ。』と矢張舊時の旦那に成り濟した氣で、『まア、それよりか一服喫るとしよう。』
叔母さんは尚ほ直立つたまゝで居るので、
『腹が立ちましたかな！　そりや私が惡かつたらうが、此處の處は一つ大輸に輸けて、勘辨してやつて下さい。』
『何で腹なんぞ立ちますもんで！　何も腹を立てることは御座いませんですが、旦那樣、どうも誠に何で御座いますが（と頻りにお辭儀をして、最う手前共へ入らツしやることはお斷り申します。』
『えツ、何ですと?!』
『一體私共風情の者が旦那樣みたやうな方と御懇意に致すからが、間違つてをりますんで、へい。どうぞ、それで御座いますから今日限り、どうぞ……』
頻りにピョコ〳〵お辭儀をする。
ペッシコーフは我耳ながら信じられぬ面をして、
『ま、一體如何いふ譯です？』
『どうも然う云ふ譯なんで御座いますから、どうぞ私共を助けると思召して、どうぞ今日限り……』
『併し、叔母さん、理由を云つて下さいな。』
『實はワシリーサからお願ひ申すんで御座いますが、御恩の程は決して忘れは致しませんですが、何卒今日限りお暇を戴きたいと申されますんで。』
と靴の端を嘗めるばかりにお辭儀をするから、
『ぢや、何ですか、ワシリーサが最う來て呉れるなと云ふんですか？』
『御意で御座います、彼人がお願ひ申しますんで。實は只今入らしツて、最う手前共へは來ないと仰しやいましたんで、私ア丁度好い鹽梅だと思つてましたんで。どうも手前の方から其樣な事ア申上げ難う御座いますもんですから……で御座いますから、何卒今日限り、どうぞ……』
ペッシコーフはクワッと赤くなると殆ど同時に青くなつた。叔母さんは一生懸命にペタペタお辭儀をしてゐる。
『然うですか、』とペッシコーフは尖聲になつて、『至極宜うがせう。左樣なら。』
ツイと背後を向けて帽子を冠ると、
『旦那、御勘定を何卒……』
『家へ取りに來て下さい……』
と云ひ棄てて、後をも見ずにツカ〳〵と店を出て了つた。

十

二週間ばかり經つた。初の内はペッシコーフも力みかへつてゐて、屢々家を出ては、朋友の家、と云つたところがブブリーチンだけは例外で、音問れなどしてゐたから、オニシムも賞めちぎつてゐたが、實は淋しくて鬱々して氣が揉めて氣でも違ひさうな心持がする。唯オニシムとワシリーサの噂をするのが切めてもの遣悶

であるから、何か話が始まれば、二言目には直ぐその方へ水を向けるけれど、さうなるとオニシムはいつも澁い顔をする。

例へば此樣な鹽梅で。オニシムが例の通り手を後へ廻して戸に凭懸つてゐると、ペッシコーフは長椅子に臥そべりながら、

「考へて見ると不思議だなア、何だッて彼樣な者が氣に入つたんだらう？ 何も是と云つて長所は有りやアしない。たゞ善かつたのは氣質ばかりだ。氣質は實際善かつたからなア。」

「何で善えもんだ。」

と佛頂面をする。

「いゝや、然うでないよ。善いもんは善いと云はなきやならん。最う過去つた事だから、如何でも可いやうなもんだけれど、善ければ善いに違ひないからなア。お前は彼女を能く知らんから其樣なに云ふんだけれど、そりや實に氣質は善かつた。乞食が來りや一人だッて徒は歸さない。麵麭の片のやうなものにしろ、與らないことはない。それにな、大層快活で面白い女さ――眞實だよ。」

「何を云はッしやる？ 何が快活で面白え事が有るもんで！」

「だからお前は能く知つてゐないといふのだ。それから何で、彼女は慾がないね……眞實、慾張らないと云つたら、そりや慾張らない。だから己は、知つての通り、何も與つたことがなかつた。そんなだ。」

「だから愛想を盡かされたゞ。」

「いゝや、それでぢやないのさ。」

と太息をする。

オニシムは毒々しく、

「お前樣アまんた斷念れねえだね　すんだら縒を戻したら好ささうなもんでねえかね。」

「馬鹿を云つてる。それぢやお前は己の心も知らないんだ。來て呉れるなと云ふ處へ謝罪つて出入りするなんて、そんな馬鹿な事が出來るもんか！ 最う過去つた昔の事さ。」

「どうかそれだと好えだがね。」

「それに違ひないさ。けれども絶縁れたッて何も惡く言ふ理窟はない。假令己が何程彼奴の面に難癖附けたッて、別品は別品に違ひないからな。」

「好え別品だ！」

「彼女が別品でなきや、誰が別品だい？ 彼女より別品が有つたらお眼に懸らない……」

「そんなに美えんだら、また出懸けさしッたら好かんべえでねえかね？」

「あれだもの！ 己は何も復行きたいんで云ふんぢやない。お前にや己の心持が分らんのかい？……」

「うんにや、能く分り過ぎてゐるだよ。」

とオニシムは深く溜息を吐いた。

それから一週間ばかりもすると、最うオニシムと話もしなくなつて、頓と外へは出なくなつた。朝から晩まで兩手を頭の下にかッて、長椅子に臥ころんでばかりゐる。段々疲れて、血色も惡く、食卓に向つてもさも不味さうにして、匆々にナイフを擱いて了ふ。煙草さへ全く喫まなくなつた。オニシムは其樣子を視て唯首を掉るばかりである。

折々氣にして、「如何かさッしやいましただか？」と聞いてみるが、唯いゝえとばかり云つてゐるのである

一日オニシムの留守であつたが、ペッシコーフは長椅子を離れて、簞笥をかき廻して、隨分熱い日であつたのに、外套を被て、窃と戸外へ出て、十五分も經つと歸つて來たが、何か外套の下に忍ばせて來たものがあつた。

オニシムは其日の朝我部屋に閉籠つて、何か頻りに考へては、ぶつくさ口小言を云つてゐたが、頓て家を出て麵麭屋へ行つた。

叔母さんは煖爐の上にさも心持善さゝうに高鼾をかいて睡てゐる樣子で、ワシリーサが店番をしてゐたが、オニシムの姿を視ると莞爾しながら、

『今日は。此頃は大層お見限りね。』

『好え天氣だね。』

『如何かなすツたの？ 大變顏色が惡くツてよ。まアお入んなさいな、お茶でも入れるから。』

『うらが事なんざ如何でも可えだよ。』

と焦れつたさうに見える。

『如何したの？』

『如何したツて、分んねえだかね？ すんだら云ふべえが、汝やアうらが許の旦那を非道い目に遭はしただな？』

『何故？』

『何故もねえもんだよ。往ぎて見さい。うらが旦那は今に煩え出しておツ死ぬべえから。』

『だツて私の所爲ぢやないわ。』

『アニ、汝の所爲でねえ事が有るもんだ。旦那があんねえに思つとるものを、汝やア仲間同志の人か何ぞのやうに、見たくでもねえから、來るなと云つたでねえか？ そりや立派な人でれえかも知んねえけんど、兎も角コレ旦那とも云はれる人だア。己達た身分が違ふだが、汝やア知つとるか？』

『だツて旦那はシンネリムツツリで好かないんだもの。』

『シンネリムツツリで好かねえ？ 此人にや何でも浮氣の男でなきや氣に入らねえだ。』

『シンネリムツツリならこそ可いけど、何だかから氣難しくツて、本當に甚助よ。

『だからお前は浮氣者だツてことよ、旦那が附いとると、浮氣イ出來ねえもんだで、そんで厭だアいふんだんべえ。』

『だツてお前さんは、旦那が私ン家なんぞへ來るツて惡く云つてたぢや有りませんか？』

『賞めもされねえでねえかね？』

『そんなら、最う旦那は來なくなつちやツたんだから、最う何も言分は無い筈ぢや有りませんか？』

『だとツて仕樣がねえだよ、うらが許の旦那は氣イ狂れてるだもの。』と低聲になつた。

『それだツて私の知つた事ぢやなし、どうも仕樣がないわ。』

『うんにや有るだよ。これから私と同志に旦那の機嫌聞きに來て呉んさい。』

『厭なこツた！』

『何故厭だ？』

『何故ツて、行く譯はないんですもの。』

『旦那は汝が事を氣質善えツて、えら賞めてだツけが、汝イ氣質善えンだら、來て呉れさうなもんでねえかね？』

『行つたツて仕樣が無いぢや有りませんか？』

『仕樣が有るだから私も來たゞ。どうせ汝が許へ來るやうだから、碌な事ではねえ。他に仕樣樣も盡きたから來たゞと思はツしやい。

良あつて、

『汝も厭だんべえが、後生だから來て呉んさい。』

『だツて私ア最う旦那は眞平だもの……』

『だから昔のやうに懇になつて呉ろた云ふはねえ。たゞ私が許へ來て、旦那に對面して、『何も其樣に力ア落とツしやつこた御座られえ、』と、好えか？ 『最と大きく氣を持つが可く御座る』と、たゞ一言云つて呉れゝば、それで可えだよ。』

『だツて私ア本當に最う……』

『こんねえに云うても不足なら、もう一つお辭儀イして賴むべえ。ソーラ、此通りお辭儀イしるだよ……ソーラ、此通り……』

『ふんとに如何も……』

『ヤレ汝も情の無い姉だノシ。こらほど賴ん

だら、最う承知して呉れても可さそうなもんでねえかね？」

いろ／＼に説かれて、ワシリーサも誠に餘儀なく承知して、ハンケチを被つて、オニシムと共に出懸けた。

ペッシコーフの住居まで來ると、「汝ア此入口の間に待つてて呉んさい。私ア旦那に然う云つて來べえから……」とオニシムばかり奥へ入つた。

ペッシコーフは兩手を隱袋に入れ、やけに兩足を踏張つて、ふら／＼しながら床舗の中央に直立ち、面を眞紅にして、眼を爛々光らしてゐたが、

「や、誰かと思つたら、オニシムか！」と粘付く様な調子で、『オニシム先生か！……己はな、お前の留守に……ハ、ハ、ハ、」と高笑ひするかと思ふと、グタリとなつて、「實にどうも、ハ、ハ、ハ……僻し、」と眞面目になつて、「醉つちやゐない、」と動かうとしたら、蹌踉となつたので、うむと踏耐へる拍子に、太い聲で、「煙草が喫みたい！」

オニシムは肝を潰して見てゐたが、ふと四方を視廻すと、窓の上に青黒い空罎が乘つてゐて、張紙に『最良ヤマイカ・ラム』としてあつた。

『ふッと飮みたくなつてな、』とペッシコーフは言葉を續けて、「ツイ一杯飮つちやッた。お前は何處へ往つたんだ？　まア話して聞かせな……御遠慮なしにお話し下さい……お前は話上手だから己は好だ。」

「どうもお前様にも困つたもんだノシ。」

『困つたか。困つたら勘辨して呉れ。己が惡かつた。謝まる、』と秩序なく手を振つて、「誰にでも謝まる、お前にも謝まる、ワシリーサにも謝まる。皆に謝まる。實はね、まア聞いて呉れ、ふッと飮みたくなつたんだ。それからツイ一杯飮つちやッた……誰だ？　誰だ、其處に居るな？」

と次の間を佶と視る。

オニシムは狼狽てて、

『誰も居りましねえ。誰も居るもんで……何處え行かッしやる？』

と留めにかゝるを振放さうと焦りながら、

「馬鹿云へ、放せ。己は視た、確に視た……コラ放さんか？……放せと云ふに……あッ、ワシリーサだッ！」

と眞蒼になる。

『何故入らない？　さア、お出で、此方へお出で。よく來て呉れた。」

ワシリーサはオニシムの面を視て――ト座舗へ入ると、ペッシコーフは肩で息をしながら、ヒョロ／＼と側へ寄つて來た。オニシムは凝然と様子を見てゐる。ワシリーサはこは／＼兩人の面を見てゐる。

「まア、お掛け。よく來て呉れた。己はな、今日はと……何と云つたものかなア……此様な……此様な秩序のない風だけれど……なア……まア宥しといて呉れ。お前が尋ねて來て呉れようとは實のところ思掛けなかつた。であるからして……どうも仕様がない。まア、お掛け、この長椅子へ……如何だ、間違つてはゐまいな、己の云ふ事は？」

ワシリーサは腰を掛けた。

「よく來て呉れた　其後何も變つた事はないか？　達者かな？」

「お蔭様で、丈夫で。貴下はお變りもございませんか？」

「己か？　己は御覧の通りの仕合、全然參つちやツた。これも誰ゆゑさ。ねえ、然うぢやないか？　けれども、腹を立つてるんぢやない。たゞ參つちやツた。譃と思ふなら、此人に問いてみな。（とオニシムに指しをして）、醉つてても大丈夫だ。醉つてることは醉つてるが、正氣

だつたと參つちやツた。參つちやツたから、醉つちやツた。』
『あんなこと仰しやツて！』
『ほんとに然うさ、參つちやツたのさ。嘘は吐かない。決して吐きません。己はお前に嘘を云つたことはない。それは然うと、叔母さんは如何したな？　達者かな？』
『難有うございます。丈夫でをります。』
　ペッシヨーノが頻りにふらつき出したので、
『ふんとに貴下は大層醉つてらツしやるよ。些とお休みなすツたら……』
『なに、そんなに醉つてやしない。醉つてるんではないけれど、正氣ぢやない。本心は何方へ往つちやツた。全く！　之だけは何と云はれても仕樣がない。』
　ガックリ仰向に倒れさうにしたから、オニシムが狼狽て後方から擁へると、
『誰が惡いのでもない、みんな己が惡いんだ。はてさて、如何したものかな？　えゝと、からだによつて、と……如何もかうも有りやアしない。云ッ了やア濟むこツた。オイ、ワシリーサ……ワ、ワ、ワシリーサ。己はな、己はな……お前に惚れてゐる。よろしいか？　ほ、ほ、ほ、惚れてるンだよ。わかつたか？　そこでと、それだからしてと、如何だ、己の女房になつちやア？　え、厭か？　眞平か？　それやお前は町の女だ、そんな事お構ひなし。なア町の者を女房にしてる者幾程もある。己の識つてる者にもある。ふとした拍子で惚れたに依つて、ソレ、女房にしたんだ。如何だ、厭か？　氣がないか？　己の女房になつてみろ、そりや可愛がるぜ。乾度可愛がる。己はかう見えても親切者だからなア。そりや今は醉つてる。今は醉つてるけれど、己の親切を買つて呉れなきや恨みだ。嘘と思ふなら此人に問いてみな、だから……皆己が惡いんだ。あゝ參つちやツた。』
　益々醉が發して來たので、最うオニシムが擁へてゐなければ、座にも堪へぬほどになつた。
『だが……それはさうだけれど、お前も罪作りだ、あゝ、罪作りだ！　己はお前に惚れてる、だからあんなにお前を大事にしてゐたんだ。それだのにお前は……ひどいや！　ひどいさ！　だが……併し己は今直ぐにでも一所になる氣だ。如何だ、厭か？　お前と、承知なら直ぐでも可い。だが考へると、お前は酷い……實に酷い！同じ離るンならばさ、直に離つて呉れりや可いのに……それを……彼樣な肥滿の叔母さんなんぞに離らして……ひどいや！　己はお前一人が樂みだつたんだ。だッて皆なしたもの……孤獨だもの。最う誰も氣を注けて呉れる者もない。優しい言葉を掛けて呉れる者もない……おれは孤獨！　木から落ちた猿同然の身の上だ。嘘と思ふならこの……人に……といひかけて泣き出した。『ワシリーサ、後生だから偶時のやうに出入りをして呉れ。さうすりや……最うおれも……お、お、おれも穩しくしてるよ、お前が何處へ行かうとも、最う二度何とも云はんから。な、承知して呉れ、こ、こ、この通りだ。』
　と膝を突かうとするから、[illegible]、オニシムが脇の下に手をやつて擁へ上げるやうにすると、
『打遣つといて呉れ、貴樣の知つた事ぢやない。おりや死ぬか生きるかの瀬戸際だ。貴樣……貴樣は邪魔するかッ？』
　ワシリーサは途方に暮れた。
『厭か？　厭なら如何も仕樣がない……達てとは云はない。そんなら、最うこれでお訣別だ……隨分身體を氣を附けてな……忘はんやうにしてくれ。おれは……お、お、おれは……』
　おい〳〵泣き出した。一生懸命に後から擁へてゐたオニシムも、妙に面を皺めるかと思ふ

と、これも泣き出した……リシリーサも到頭貰泣をして了つた……

十一

十年ばかりの後、某町の往来で、襟の塵だらけな、ブリース織の、青の古フロツクコートを着た、痩ぎすの、鼻の頭の赤い男を折々見かけることがあつたが、これは例の麺麭店の物置に住まつてゐる人で。其頃は麺麭店の叔母さんも最う故人の数に入つて、姪のリシリーサが頭髪の赤ツちやけた、始終眠さうな面をしてゐる亭主のデモフオントと後を引受けてゐたのである。青のフロツクコートを着てゐる男には一つの癖があつて、酒が大の好物、併し飲んでも温順しくはしてゐる。何處かで見たやうな人と熟々視れば、それも其筈、ベツシコーフであるものを。オユシムは如何したか、知つてゐる者更に無かつた。

──(ツルゲーネフ作)──

酒袋

「イコー、珍らしい！」
「イヤ、これは！」
と互に吃驚する中にも、嬉しいと思ふ所もあつて、町の中央へ立止まると、
「まア一體您麼して此地方へ？」
「少し用があつて――ま、兎に角お懐しいことで御座りますな。何處でお眼に懸るか分らんもんで。イヤ、どうもお珍らしい。そこでと、如何で御座いませう、今日一日お交際下さる譯にや參りませんか？ま、御都合も御座りませうが……どうも嬉しいのが此處ン處まで込上げて來て、口へ出しちやアいへない位のもんで……どうも……」
千八百八十何年にジェネワのモンブラン町で、かうゆくりなく邂逅つたのであるが、これが故郷での事なら、自分にしても左程に喜ばなかつたであらう。まして相手のミーシャ・プルーチコフなぞは餘所の者。元來左程親しい間柄でもないし、又親しくはなれない間柄であるので。マスクワに居た時分には、時とすると芝居で出逢つたこともあるが、こんなとこへ來ると、針の蓆にでも坐つたやうな心持がする様子であるけれど、ナーヂェンカ・シェストーワといふ女優が手の内に丸めて指の頭で三番を踊らせてゐるので、自分の出る芝居へは、何でも彼でも引張つて來て、手の一つも餘計に拍かせねば承知しないのである。自分は顔は知つてゐても何といふ男だか久らく知らずにゐたが、或時シェストーワが書割の後を通る時、例の戯けたやうな様子をして、此男に指ざしをして、
「此人はミーシェンカツていふ色男なの、矢張法螺吹仲間ですよ……」
といふ風に紹介をしておいて、駈出して部屋へ入つて了つた。
ミーシェンカはギッと自分の手を握つて、
「貴下は何を召上る、ブランですかヘレスですか？」
「まア酒は廢しませう。」
「廢す？ そりやア酷い、そんな事ッて。初てお相識になつた者にさう恥をかゝせなくツても可いぢやごあせんか。一杯づつ飲りませう、ね、一杯づつ？」
と可笑しい程熱心に僕の面を覗き込むので、自分も覺えず苦笑をして、
「折角だからお同伴したいですがな、私は實際飲まないのです。」
「ぢや、リモナードは？」
「リモナードなら飲んでも宜しい。」
「結構！」と喜んで、「おやア、私はブランを飲るから、貴下はリモナードを召上れ。」
それから物賣場へ往つて、ミーシェンカはブランデー、自分はリモナードを飲んで、交を結ぶことになつた。
其後出逢ふと、一所に物賣場へ往つて、ブランデーにリモナードを飲むだけのことで、變つたことと云つては、自分がリモナードの代に茶を喫む位の事であつたが、自分が飲んだ茶やリモナードの代を拂はうとすると、いつもミーシェンカは大に機嫌を損じて、
「いゝさ、さうしたものさ。澤山恥をおかゝせなさるが可い。」と云つて、トンと胸を打つのが癖であつた。
苗字を知つたのはかうして知つたのである。

或る朝食も新聞も讀んでしまつて、これから仕事に掛らうとすると、廊下番ボーイ――其時分は道具附の室を借りてゐたので――名刺を持つて入つて來た。見ると開けかけた戸の後面に例のミーシェンカの姿が見えた。

例の通りヂツと痛い程手を握つて、

「今日は實は御祝儀の一件で上つたので。」

「御祝儀とは？」

と顏を視ると、

「貴下御存じなし？」

と云つた聲が少し恨めしさうであつた。

「一向知らない。」

「どうも厭になつちまふな。御祝儀も御祝儀尋常の御祝儀とは性質が違ふ。それを貴下が知らないなんぞは、どうも……あんまりどうも……」

「でも知らないのだから仕方がない。」

「どうも僻通を以て任じてる人が、どうもそれぢやア困る。」

と苦り切つて首を振るので、ふと氣が附いて、

「ま、待ち給へ。ではナデージダの御祝儀狂言の談ですか？」

「さうですとも。」

と莞爾々々となる。

「それで私に用事といふのは可笑しいね。」

「イヤ些とも可笑しい事はない。」

「分らないな。」

「分らないとは分らない。」と氣を揉みだした。

「どうも折角お指圖を願はうと思つて來たのに、空不知けてゐて、相手にして下さらないな、非道いや。先生が一ツウンと云つて肩ア入れて下さらなきやア、到底も私なんぞにやア駄目だ、到底も旨く行きッこはないや。乾度半間なことばかしやらかすに極つてまさ。にツてかういふことに掛けちやア、私アからツきし經驗と云ふ奴がないんだからね。まるで馬鹿さ。だから、ま、そんな事云はずに、此處ン處一ツ大輪にまけてやつて、助けると思つて、一つ、是ツ非お指圖ツていふ奴を願ひたい。」

と殆ど泪ぐまぬばかりになつて、毒のない灰色の眼で凝然と自分の面を視つめる。

「それは力を假せなら假さんでもないが。まア一體如何しろと云ふので？」

ミーシェンカは忽ち又元氣附いて、痛い程又手を握りしめた。

「しめた！　難有い！　なに、先生の御助勢を願ひたいな、他でもないが……なにしろ大層氣を揉んでまさ、ナデージダがね。だつて先生、御祝儀はソレ鼻の頭に來てませう。それだのに新聞にやア、廣告の外にやア何も出てゐないんでさ。あんまり非道いぢやア有りませんか？　ねえ、先生、然うぢやア有りませんか？」

「なる程。」

「でせう？　だから茲で一つ先生のお骨折を以て、明日ア方々の新聞で、何でもシッカリ一つ評判をして貰ひたいんで。その代り、私だツて吝嗇れた事アしませんわ。さ、受取つて下さい、これだけ運動費を奮發するから……」

と卓の上へ百ループル札を一枚投出した。

「それから宴會ですがね、此奴も一つウンと奮發しまさ。なんでもナデージダの肚を剔るやうな事をやりまさ。」

と得意になつて前觸をした。

自分は甚だ面白からず思つた。此乳臭兒めが金さへ出せば如何でもなると高を括つて、得意になつて微笑して居るのを見ると、厭な氣持になつて、殆ど胸が惡くなつて來たから、一つ手非道く辱めて吳れようと思つて、突然其紙幣を取つて擲げ返すと、

「えツ、いけないんですか？　どうもそれぢやア……私だツて何もソノ……」

とうろ／＼する。

その面を見ると、自分は相手の無禮も疎忽も

忘れて了つて、おもはず笑出した。ひどく狼狽して、如何にも哀れ果敢ない顏をしてゐるので、最う今の蔑蔑した仕方なぞのことを思つてはゐられなくなつた。自分を責めようなどといふ氣は露ほどもなく、唯ともすれば金を投げ出して、何事も徒は骨を折らせないのが癖となつてゐるので、此度も矢張その手でいつたのは言はずと知れてゐるのである。で自分は、

「金なぞは要らん。御依賴とあるなら、隨分盡力しませう。」

「では最う御立腹ぢやないんですか？」

「立腹もなにもない。」

「難有いな。ひどく驚されツちやツた。だけど、先生も無理でさ。此方は先生はそんな奇……矢張尋常の人かと思つたんですもの。そこへ行くと商人だ……商人となると、誰だつて錢でなきやア動くもなア有りませんからね。だから先生方も矢張……しかし失禮なんでせう。手前共などにやア解りませんな……」

と云つて愛度氣ない如何にも子供々々した面をして自分の顏を見たから、成程之では商賣と文學の差別も分るまいと思つたが、別段此差別を說明する面倒も見なかつたのは、第一說明してもこんな人には分るまいし、それに日限の仕事があつたから成可く早く追還して了はうと思つたからである。

で、兎も角も來るお祝儀狂言に付いては出來るだけ盡力しようと約束して、來た時には怒つてあつたが、歸る時には互に機嫌よく分れた。

戶口まで送出して、机の側へ戾つて來て、と心附いてみると、名刺にはミハイル・ペトローウィチ・プルーチコフとしてあつた。今迄面は知つてゐても姓名は能く知らなかつたが、此時初て知つて驚いたのである。

「何物かと思つたら、プルーチコフか。勿體なくも大將自身に御出馬といふ譯だつたのか。」

といふのは、プルーチコフと云へばマスクワに響渡つた大町人である。それに今の主人はしだらなくて放蕩であるので、益々名代男になつてゐる。一週間の內に一度は郊外の料理屋で眼を驚かすばかりのことをするのが小新聞に乾度出るといふ程であるが、可笑しいのは、小新聞は皆此男の事を惡くもいはず、ちやかしもしないで、反つて同情を表して、殆ど贔屓にせぬばかりにする。其醜行を書いても始終筆を巧に繕はして、少しも當人の淫恣にならぬやうに書くから、宛で記者等が此男の時々好材料を與へるのを德として、讀者にも此男を贔屓にさせようとつとめてゐるやうにも見える。

翌日は彼處此處の新聞にシェストーワ孃のお祝儀狂言の評判が出たので、ミハイルはその禮に來たけれど、自分が留守であつたので、名刺に入場券を添へて置いて行つた。名刺には肉太の商人風の筆でかう書いてあつた。

「御盡力の段難有仕合に奉存候。

此御恩は死しても忘るまじく候。」

お祝儀狂言の當日には芝居で出遇つたが、例の通り癖い程グッと他の手を握つて、無理無體に物賣場へ連れて行つて、相變らず自分ばかりでレモナードを飲ませされた。此時は氣がおそろしく逆上つてゐるやうすで、急込みながら、用意の萬端整つてゐることと、花も贈物も皆チャンと用意がしてあることを自分に告げた、

場へ入ると、土間に指さしをして、「彼處に大勢の善い奴を四十人ばかし入れときました。此方の椅子にも矢張四十人ばかし。何でも一生懸命に手を拍いてくれッて言つときました。先生の前だが、是も誰ゆゑ、皆役人の爲でさ。たかが唯一ツ困ることがある。手の拍手が揃つてても、肝腎のキッカケをかける奴がない。ツノ……先達でなし、法印でなしと……」

と言葉が見つからないで狼狽する。
「音頭取──」と助太刀に出懸けると、
「それ〳〵、その音頭取がない。彼連中は芝居は皆素人だから、から方角が付きませんや。だから折角企てたことを滅茶々々にして了はなきや可いがと思つて、心配してゐるンでさ。ねえ、先生、貴下はいかゞ思召す？」
とさも心配さうに云ふ。如何にも氣を揉んで居るらしいから、お祭儀式はいつも騷々しいもので、よし廻者の連中が騷いだからとて、誰もなんとも云ひますまいから、悶着などの起る氣づかひはない」と云つて慰めてやつた。併し何故そんな廻者なんかしてあるの、支度が整つてゐるのといふことを吹聽する、若しナデージダに知られたら、非道い目に逢ふだらうと、注意すると、急に狼狽へだして、
「飛んでもないこと仰言る、誰にいふもんですか。秘密にして置かなきやならん事ぐらゐ心得てゐまさ。だから廻者にも私の依つてる方は振向いてはならんッて、云つときました。」
「そんなら何故私に打明けたのか？」
「貴下に？」
「さうさ、私に──」
「だッて貴下は他言はなさるまい。」
「それは然うでも、兎に角打明けたのは宜しくない。若しこの用意をしたことがぱッと評判になつたら、ナデージダは難有いとは云ふまいがね。」
「そりやア言はないに極つてます。」と云つた時の聲は少し慄へてゐた。「だが、先生後生だから何卒默つてて下さい。もう皆忘れッちまツて下さい……」
と横目で他の面を視て、匆卒と別れて了つた。
此晩ほど厭の氣がしかつたことはなかつた。
ミハイルの廻者は果して無暗に騷ぎ立つたので、隨分埒くちはなかつた。それでも、終ねてから、ミハイルが莞爾々々と嬉しさうな面をして舞臺の後から出て來たところを見ると、全で無駄骨にもならなかつたものと見える。
その後二三度逢つた。それに雜報だか、裁判傍聽錄だか、何方だかもう忘れて了つたが、二三度新聞で其名前を見掛けたことも有つたが、お祝儀狂言以來は大層大人しくなつたので、自分も全く、ワルーチコフを忘れて了つてゐた。
最後に逢つてから最う五年餘にもなる今月今日、自分は弟の用で此ジェネリへ來て、ふと此處で逢つたのであるから、雙方とも吃驚もしたし、又喜びもしたのである。
ワルーチコフがひどく騷ぐので、往來の人は皆目を峙てゝ視るから、
「最少し靜にして下さい。御覽なさい、彼通り皆が視てゐる。」
「視たッて關やアしませんや。何の此奴等が。此樣な馬鹿野郎どもが何と思つたッて關ふもんか、此奴等に此方等の精思が分つて堪るもんか。私や小面が憎くツて堪らないや。横面を張飛ばしたくツて腕がむず〳〵する位なものだ。」
「何か無禮な事でも仕たことがあるのですか？」
「無禮な事……無禮な事なんぞされて堪るもンですか。厭ッていふ程金を強奪つたら、それで澤山だ。無禮な事でもすりやア、私だッて默つちやゐません。憚ンながらそんな意氣地なしぢやごわせん。」
「おや何故默つて金を強奪られてゐたのです？」
「さういふ規則なんだから、仕方がありません。他國から入込んで來たものなら、誰彼の容赦はない、皆金を捲上げッ了ふんで、文明國の

人民だと、さういふ事をしても關はないんださうで。何しろ此地にやア山だの、湖水だの、種々なものがある――だから貴方等は其稅を取られるんで。ですから、此處で山の景色を眺めようとか、息氣をしようとかして御覽じろ、直ぐと代を取られるから。どうも食るの食らないのッて、それや非道いアコギなもんですぜ！

――あんまり御山すぎる、まア話半分に聞いて置から

「御山すぎる？」ところが然うでないから可笑しいね。貴下は御存じないんだから、そんなこと仰しやるんだけど、私やこの週間ばかり前に非道い眼に逢はされた。迚も話しにやア……、本當になりやアしまい。ジェネワの奴は皆盜賊だ！」

と憤々怒って唾を吐いて、默って了った。

「まア何でそんなに腹が立つので……」

「何だッて彼だッて、貴下、如何でせう、唐突裁判所へ引張っていって、何の謂れ因緣もなく、罰金だッて五十フラン强奪ったんで……」

「裁判所で罰金を取られたなら、取られる譯が有ったんでせう。そんなら何も取られたッて不思議はない。それを然う憤るとは妙ですな。それとも何かね、五十フランが其樣に惜しかったのかね？」

「五十フラン位何でせう？ 五十フランばかア錢の中に入りやしませんや。マスクワに居た時分亂暴して、治安裁判所で取られた罰金はそんな事ぢやないや、それだッて私や何も苦情云ったことないさ、實際取られるやうな事したんだから仕樣がないと思ってまさ。泥醉って鏡を打壞すとか、誰かの横面を張曲げるとかしたんなら、文句なしに罰金出して、おまけに牢まで行きまさ。其位だから曾て苦情なんぞ云ったことありません。惡い事すりや、罰を被るなア當然だ、そりやア言はないだッて分ってまさ。だけど此處は萬事自由で持切ってる處だから、勿論私だって世間の物笑になるやうな事はしませんさ。及ばずながら萬事文明風にやってまさ、恥をかくのも厭だし、また國の名も出したくありませんからね。私も外國へ來てえると思ふから、何事も内端にして窮屈な想をしてゐるンだから、それを些たア察してくれたッて可いぢやありませんか？ 自分達も其通り此處は一番俠氣を出して、ジェネワッ子の腹を見せなきやならん所だ。ねえ、他國者だと思ったら疎略に扱はんが好いでさ」ところが其樣な心持些ともなし、他國人だらうが、何たらうが關ふもんかッていふ風でさ。己達は歐羅巴人だッてんで此方等を馬鹿にする、それだのに、馬鹿だねえ、皆が貴方の處をえッちらおッちら錢を無くしにやッて來るんだ。此處の奴等の懐を肥しに來るんだからね。彼等の懐が空になったからッて、强奪られに來るんだからね。」

プルーチェフは歐羅巴人に平かならぬ所のあるのを云へば云ふほど大に激して來て、段々前後の辨が失くなって、激しく手眞似を仕出す。此時ばかりは話の調子から、體の樣子が唯事でなく思はれたから、自分も目覺ましく思ってそッと覺られんやうに其樣子を眺めてゐた。此男のかう激した所は自分は曾て見た事がない。マスクワに居た頃のプルーチコフとはプルーチコフが違って居る。まづ衣服からして今は彼頃のやうに洒落た風ではなく、話の仕樣も大分上達して居る。全く別人の樣に見えるから、自分は思はず目を留めて視た。それに音聲にも此男には似氣ない愁の調子を持って居るので稍不思議な事に思った。

「五十フランばか何でせう？」と又元の話にもどって、「勿論それッぱかの端金取られたッて正可身代限もしないから、何とも思やアしません。面に唾を吐掛けさせたら、その十倍出して

もやらうけれど、唯業腹なのは、餘り人を踏付けたことしやアがるんで。唐突胸倉を取つて、さア田舍者、錢出せツていふんで。何で錢を出せツていふんだか些とも分らないんで……」
とまた口汚なくジエネソ人を罵つて、ト口を噤んで了つた。
「だが、まア何で罰金を取られたんです？」
「話したツて到底も本當にやなさらない。」
「まアさ、それでも……」
「地面を歩いたからツて、罰金を取りやアがツたんで。」
「まさか。」
「そら御覽なさい。だから話したツて駄目だつていふんでさ。だが實際の御話で。――
ト唐突に、何のツケもなく、町中へ響くほど大きな聲で高く笑つてから、自分の手を把つて、
「イヤ如何もならん。腹ア立つて見ても、憶出すと、可笑しくツて堪らなくなる。奇妙キテレツな規則も有つたもんで。まアお聽きなさい、からなんだ。或日私がさる横町を通つたんだ。ところが最う一筋先方の横町へ行かなきやならないんだが、グルッと廻れば、大分の廻りになるもんだから、歩きながら考へた、何處か拔路かあると奇妙だがと思つて、ト見ると、ツイ鼻の先に何かから畠のやうな處があつて、其處に徑が附いて居る。其處を通ると裏町へ拔けられるやうだから、〆めたと思つて早速其處へ入つて、十歩も歩いたかと思ふと、何處から出て來たか知らしないが、しわくちやの老婆がフッと出て來やアがつて、お前さんは誰に斷つて他人の地面内へお入んなすツた？　此處は私共の地面内だから、妄に入つちやいけません。ツて云やアがる。
何を云やアがるンだ。道の附いてる處を歩いたツて御託を云しやアがる。狐にでも抓まれたんだらうと思つて、呆氣に取られてえる老婆さんの面を見たばかりで先へ行かうとすると、この老婆さんが唐突私の袖を捉まへて一生懸命に怒鳴つた。どうして彼樣な老婆さんで彼樣な聲が出たらうと思ふほどの聲でな。勿論これが野郎だつたら、私だツて勘辨なりませんわ。他人の袖をフン捉まへるツて法はないや。だけど老婆さんだつたから毆打る譯にもいかないから、かうやつて立つてると、老婆さんは緊乎袖を捉まへてます〳〵喚立てる、此方は呆氣に取られて其面ばかり見てえる、イヤ此奴氣が違つたんだなと思ひましたね。さうしてえると頓て老爺さんと倔強な若い男が二人駈付けて來やアがつて、老爺さんが丁寧に、「お名前は？」ツて云やアがるから、いふと、此度は、「お宅は何處で？」ツて云やアがつたが、それがまた惡く丁寧に云やアがるのさ。それからかう〳〵云ふ處に居るツていふと、紙片を出して書付にして、それを出して見せて、これで間違ひは御座いませんか？　ツていふから、讀んで見て、「其通りです。」ツていふと、
「宜しうございます。では何方へ御出でなさいます、お戻りなさいますか、通り拔けをなさいますか？」ツて問くから通り拔けをしたいといふと、「宜しうございます。ではお通りなさい。」ツて、丁寧にお辭儀をすると、老婆さんも漸う袖を放してお辭儀をするから、私は其處を通り拔けて、途々も妙な奴も有れば有るもんだと思ひましたね。その日も經つて私は最う昨日の事なんぞ忘れツ了つてると、フト家内が……」
「ヤ、細君が出來ましたか？」
「御存じなし？」
「一向知らなかつた。
「さうですか。最う貰つてから五年になります。」
と云うて深く溜息を吐いた。

で家内が來こ、裁判所から明日出ろッていふ召喚狀が來たッていふから、書付を取つて讀んでみると成程召喚狀だ。よ、翌日裁判所へ往きながらも考へた、何事たらう？何で召喚狀なんぞが來たんだらう？何も悪い事した覺えは些ともない。悪い事をしない者を何で引張り出すんだらう？と思つて歩きながら文書付を出してみたが、何事とも分らない。唯何の某何時に出頭すべしと書いたばかりで、何故呼出すとも何の件で喚び出すとも書いてない。それが如何でやらうと一ヤリとして、その道の附いてる處を通つたから、ッて騒動が持起りこんぢやッたんで。」

と凝然と他の面を目守めて、

「それから裁判所へ行くと、迎に出て來て丁寧にお辭儀をする者が在るから此方もお辭儀をしにヒョイと其面を視ると、ヤ、吃驚した、其が例の老婆さんに老爺さんと、それから若い男でさ。皆莞爾々々した機嫌の善い面をしやアがッて、老婆さんでさへ其日は其樣に澁い面もしてなかつた。ですから私も萬更脈な心持もしなかつたから、手を出すと、老爺さんも何氣なく手を出して握つて莞爾笑つたもんさ。それから話をはじめようとすると、判事が出て來たもんだから、默ツて了つた。それがまた一寸は判事とはおもへないので、何んでも莞爾々々した快闊な面白さうな人で、些とも威張つてないのさ。裁判官の徽章もなんにも付けてない。皆に踞つて莞爾して、今日は好い天氣だね、なんか言つて、それから審問に懸ると、老婆さんがッ、と前へしやしやり出て、「エー申上げます。此方が——と自分に指さしをして——えらい悪い事をなさいました。默つて私の地面内へ入つて來なさいました。僞と思召すなら證人にお聞き下されば解ります。こゝに居るのが證人で——ト老爺さんと若い男に指さしをして——此人達にお尋ね下されば解りますが、僞は申上げません。何卒御規則通り罰金を取つてやつてお呉んなさいまし。』といふと裁判官が私の方をむいて、

「貴君心配なさらんが可い。私共は外國人を疎略に思ふ者でない、出來る丈け貴君方の利益を圖ります。ところで何か辯解の仕樣か在りますか？」といふでさ。どうも驚きましたね、何の夢を見てえるンぢやないかと思ひましたね。何の事だか薩張譯が解らない。道の附いてる處を通つたッて裁判沙汰なんだ、他の地面内へ入つたから罰金出せッて言ふんだ。どうです、萬事自由々々で持切つて居る國内ッていふなかういふ國なんで、自分達が氣がなくなつたから出せッていふんで、それから私アからかつてやりました、『なる程私は道の付いてる處を通つたに違ひございません。それりや其通りですが、そんな事アまア何んでもない、私はもツと悪い事してえます、ッてやりました。』すると判事が奴眼を丸くしやアがッて、眞面目な面になりやアがッて、「如何云ふ悪い事したか？」ッていふから、「へイ、悪い事しました。露西亜といふ國ア善い處で面白く暮される處なんに、脈結構な處を棄てて私アこんな脈なジエネリみた様な處へ來て、胸の悪くなる様な物を喰つて我慢してもう五年にもなるが、それでも矢張り毎年々々萬ノフンから遣つて、お前さん方の懐を肥して、國へも歸らずにゐます。これ程悪い事はありますまい。」ッて云つてやりました。それでも、如何です、奴さん些とも怒らない。怒るどころか、蓄然と莞爾笑やアがつて、「此處に永く居るといふ件に付いては、歸つてからゆツくり國で裁判をお受けなさい。で、此地の法律の第何條とかに依つて償金として五十フラン老婆さんにお拂ひなさい、さ。「何日拂ひませう？」ッて聞くと、「持つてるなら、今でも宜

い。」ツていふから、早速ポツケツトから紙入を出して揃つてやつた。老婆め金を受取ると奪付くやうにして私の手を捉へて、一生懸命に握りやアがつたから、無理に振解く〳〵、判事奴も私の肩を叩いて、「貴君は面白い人だ、だから私は露西亞人が大好きだ。」とぬかしやアがつた。それで一件落着さ。如何です、これでも金を強奪つたんぢやないでせうか？」

と手を妄に振舞した。少し黙つて歩いて行くかと思ふと、急に又元氣附いて、

「併し下らん話で、さぞ御退屈でしたらう。トキニ、實際御用はないんでせうな？」

「さアまア、無いと言へば無いやうなもんであるけれど、ステーションへ往つて問合せなければならん事があるので。それさへ濟ませば別にからと云つて用はありません。」

「妙々！　それからは私のいひなり次第になりますね？」

「さア成れなら成つても宜しいが！」

「ぢやア御一所にステーションへ行くから、それからお附合ひ下さい。一番久し振で底脱騒ぎをやりませう。」

「だが私は酒が嫌ひだ。」

「知つてますとも、忘れやしません。貴下は茶やリモナードでなければ、夜も日も明けないんだ。」と云つて高笑をして、「大丈夫お嫌なものを無理に勸めはしません、貴下はリモナードばかり召上るさ、その代り私共は一番ウンと羽目を外して飲ります。若い時マスクワでやつたやうにね、まア見てゐて御覧じろ、如何様に騒ぐか。だが、連中を集めなきやアならん、貴下の様な法師みたやうな人と二人限りぢやはじまらない。」

「連中と云つて、どんな？」

「まアどんなでも可い、黙つて見て居て御覧なさい。何處へ行つても喰仲間にやことを缺かない。一度呼べば皆方々から集つて來る。無代で飲めるのだからね。」

「土地のものは厭だと云つてゐながら、飲む時にや相手にするんですか、御馳走までして？」

「いゝえ土地の者ぢやない。土地の者なんぞ連れてツたツて仕方がない。國の者を連れてくんで。そりやア國の人だツて餘りゾッとしませんさ。皆非道い奴等で、虚無黨なんですからね。だが、酒を飲ませると、矢張私共みたやうに皆豪傑でさ。まア見てゐて御覧なさい。」

「それよりか私を細君に紹介して下さいな、而してほんの内々で茶でも御馳走になりませう。」

「いや女房のない方が好い。」と故意と面白さうに云つて、「女なんぞ仕様がない、それに私共の嚊と來たら、お客扱が大の下手ですからね。へ、へ、へ、へ。」

と妙な破れたやうな、震へ聲で、底氣味惡く笑つた。何でも妻とは餘り睦しくない様子であつたが、其事由を問けば甚だ機嫌を損んじようし、また、無遠慮に立入つたことを聞くのも厭であつたから、自分は何とも問かなかつた。然し自分は圖らず彼の面に雲をかけさせたから、それを拂はうとして急いで話を轉へて、

「ぢや、國者を誘つて行くんですな？」

「さうですとも。」とまだ不機嫌な面をしてゐる。

黙つてステーションへ行つて、用は濟ましたが、プルーチコフの様子を見ると、なか〳〵自分どもに關つてはゐられんやうな様子であるから、如何かしてそれとなく分袂れて了はうと思つて、

「ですがなア、どうも此處で分袂れた方が好いかと思ひますな、私は明後日出發つ積りだが、まだ此處に用は澤山ある。貴下に交際つて酒たんぞ飲んでゐたなら、用も何も足せなくなるか

ら、これで御免を蒙りませう。」

「そりやア不可ません。」とプルーチコフは悄然になつて、「今更逃げようたツて逃すもんですか。約束したが不肖だ、まアそんなことといはずに附合つて下さい。」

　また愛嬌を誑して笑つてみせたが、その時には最う額の皺も消えてゐた。

「愚頭々々して居ちや時が經ツちまふから、鐵道馬車で、カルージへ行つて、彼處の Café Anglais へ寄つて誰か國人を引張つて行きませう。一所に行けツてツたら、屹度喜んで行く。彼處で勢揃をして、それから Café Lyrique へ繰込んで飯を喰つて、それから……」

　といひかけると、丁度鐵道馬車が來たので、其儘乘つて了つたから、自分も其後に從いて乘つて了つた。

　午後五時の事で、熱さは凌ぎ切れぬ程である。馬車の内は客が一杯で、芋を洗ふやうな騒ぎなので、話はそれぎりとなつて了つた。

　スルトふとプルーチコフが肩を突いて、

「降りませう。」

　といふから止めさせもせずに二人とも飛降りたのが丁度 Café Anglais の前であつた。橡樹の木を陳べた廣い土間に椅子や小形のベンチで周圍をかこつた圓い卓、と幾側ともなく据ゑ、灼く樣に熱い日光を日蔽で避け、其蔭に、おもひ〳〵の服裝をして客が一杯詰懸けて居る。脊の高いコップで麥酒を飲んでゐるものもあれば、或は氷水に果の煮汁を入れたのを飲んで納涼んでゐる者もあつたが、熱いからなんどなく皆だらけた風をしてゐた。プルーチコフは未だ遠方から凝然と店頭を覗いて、「居た〳〵!」と面白さうに云つて、足を早める

「誰がね?」

「國人がさ。丁度集つてる。奇妙キテレツ! そりアね、彼連中にや風儀の惡い奴が居るから、餘り好ましくもないが、どうも仕様がない。まア、一所に連れてツてやりませう。そりアや恐入つた一座ですよ。」と兇猛たとなつて、「皆虚無黨なんだが、派が色々分れてゐます。皆氣早な族でなしの連中だけれど、酒の手並は露西亞風で、皆浴びる程飲りますよ。」一段聲を高めて、「イヤー、ニコライ・イリーノウィチ、ヒョートル・ステハノーウィチ、カジミール・アントノーウィチ、イサーク。ソロモーノウィチ、諸君お揃ひで。失敬……」

「イヨー!」

「待つてました!」「失敬!」「ホク敬!」「ハチモク敬!」なんといふ聲々、卓に寄つた一團の卓から、がや〳〵と騒いで、八九人の人が一度に席を離れて我等を迎へた。卓と卓との間の狹い通路を漸う拔けて一座の處まで來ると、プルーチコフが、

「諸君紹介する方がある。これは矢張本國の方で、ハーウロツといふ文學の先生で、私が年來お心易くして居る方なんで。」それから一々指さしをして、「この方がバン・プシエホンドフスキイ、それからへトローフ、ステパノフ、スウヤニツキイ、ブリュムキン、シドーレンコ、ワーニヤの叔父さん……あゝ草臥れた……餘の人は後で知己におなりなさい。ガルソン!…」と呼びながら椅子に就いて、「シフォンを一杯、ブランを一杯、それから麥酒を……諸君何杯だらう?」と指で人數を數へだすと、「十四杯。」と誰やらが云つた。

「おやシフォンを一杯、ブランを一杯、それから麥酒を十四杯。」とお誂へを聞きに來たガルソンに命じた。

「シフォンは誰のだ?」とブリュムキンが異むと、プルーチコフは自分に眼を呉れて、

「此方が喫るのさ。酒が飲けないんで、水ばツか飲みたがる人さ。」

「水は飲む物の中に入らん。飲んだッて面白くも何ともない。國の小露西亞なんざぢや女だッて酒を飲む。水を飲むな牛と馬ばかしだ。」と洒落を云つて大口を開いてハヽヽと笑つた。

ガルソンが麥酒にブランにシフオンを持つて來たので、皆先を爭つて把手附の玻璃盃を取つたが、どうも話が冴えない、識らぬ者が一人交ると何時もかうしたものである。此暇に圖らず相識になつた此一座の人々の樣子を見ると、皆人樣々の風體で國所もそれ〴〵違つてゐるし、年齡もまた同じからぬ。一座の中で殊に目に付くのはパン・プシエホンドフスキイとペトローフとであるが、パン・プシエホンドフスキイは最う六十を餘程越して居るらしく、ペトローフは五十何歲とでもいひさうな男である。パン・プシエホンドフスキイは一座の中で、一番服裝が立派で、中脊の堅肥滿に肥滿つた、眼の小さい飛出してゐる、殆ど泪ぐんでるやうな、近視眼の男で、白い髯を左右へ分けてゐるところは一角の頭分らしく見える。大きな鼻へ大きな金縁眼鏡を掛けてゐるのが動もすると横ッちよへ滑落ちる。領の短い首の大きな男で、頗る容體ぶつてゐて、他の者を幾分か下目に見る樣子である。ニコライ・ペトローフはプシエホンドフスキイほどではないが、矢張瀟洒した風をしてゐて風采も先づ良い方である。脊の高い瘠ぎすの足の細い手の長い男で、短いピッジヤークに狹いブリユークを着てゐるところはどう見ても猩々のやうで、圓錐形の鬚が最う大分胡麻鹽になつてゐる。細長い領に小さな首で、眼は金壺の窪んだ眼であるが、まだ少年の活々した光を失はずにゐる。始終右の手で頭を撫でて左の手で鬚を撚つてゐる。餘の者は取立ててこれといふべき所はない。こせ〴〵して居る猶太人のブリユムキンから額髮を山のやうに搔上げたシドーレンコの狡猾さうな自慢れてゐるらしい態に至る迄、別段人の眼につくものもない。強ひて云へば、骨を折つて無遠慮といはうよりは寧ろ暴慢無禮の風を粧つて新參の自分に見せつけてゐる二三人が眼に付くだけである。どれもどれもおそろしく汚れた、曾てブラシをかけたことがなささうな衣類を着たものである。

良久らくの間默然でゐると、頓てプルーチコフが緩々とブランを飲了つて、

「諸君。パーウロフ君と邂逅つたお祝に、一つ宴會を開かうと思ふが、何でせう?」

「贊成!」とペトローフが云ふと、

「至極結構。」とパン・プシエホンドフスキイも太い聲でいふ。

「開るべし〳〵!」と皆が贊成する。

プルーチコフは又言葉を續いで、

「ぢや移動しようぢやありませんか? 此英吉利は食物も食へず酒も[illegible]向しきだが、其處へ行くとカフエーリリックだ、彼家でやりませう。」

「宜からう。」とパン・プシエホンドフスキイが同意する。

「宜ければ直ぐお御輿を揚げねえ。貴い時間を徒に潰すも氣が利かない。ニコライ・イワーヌイチ、君は料理を見繕つてくれ給へ。それからカジミール・アントノーウイチ、君は酒の方を受持つてくれ給へ。」

「よろしい心得た。」とペトローフが肯ふ。

「酒は勿論我輩の持ちや、こりや我輩の專門ぢやからな。」とパン・プシエホンドフスキイがまた例の太い聲でいふ。

「奇妙! それから飯が濟んでから僕が一つ不思議な物をお目にかける。諸君の土手腹を扶つてみせる。」とプルーチコフは面白さうに莞爾して「だから諸君はまア一足先へパーウロフ君の案內をしてリリックへ押出して呉れ給へ、而して料理の所も善いやうにしておいて呉れ給へ。」

僕はこれから一寸家へ寄つて、飯に待つてないやうに云ひおいて、直ぐ追付くから」

ガルソンを喚んで、勘定をして起上つた。歩きながら、

「何でも思ふさま奮發つておいて、くれ給へ。錢金にや際限は付けない。何程掛つても關はない、文句なしに拂ふ。さア一足さきへ……」

ブルーチコフに別れると、ペトローフが、

「大層孝行だな。嬶の處へ斷りに行きやアがつた……ムチャーエフと二人で淋しくないやうにしてゐろツていふんだ……ハ、ハ、ハ！」

皆も哄と笑ひながら身を起した。

無料で飲めるといふので、皆がや〳〵と浮立つて戸外へ出た。眞先にはペトローフが細い竿のやうな脚で大股に急いで行く、餘の者は其後に從いて二人宛押竝んで行く。自分は馴染がないから獨り取殘されて一番後から行つた。少し行くと猶太人のブリュムキンが傍へ來て、唐突に臂を把つて、

「君は國を出てから最う餘程になるかね？」

「イヤ、ツイ此頃出て來たので。」

「どうだね、國ぢや？　帝室政治も土臺が動いて來たらうねえ？」

「土臺が動くとは、どう？」

「どうもないもんだ。國の樣子は僕等チャンと知つてるんだから駄目だよ。何でもチャンと分るんだからね。皆此地で此方共が絲を引いてんだもの、萬事此方共の指圖で運動するんで。此地が景氣を附けてやるんで、だから此方等に知れないといふ理窟はないんだ。」

「そんなに知つてゐるなら、聞くがものはないぢやアありませんか？」

「そりやア然うだア……まアと……國から來た人だツていふから樣子を聞いて見たくなるやつさ……」

「私は何も知らない。第一、私は政治上の事には關係しないし、それに貴方等は[illegible]い勢力のあるやうな事をいふが幸ひと國は穩かですからな。」

ブリュムキンはさも苦々しさうに横目で他の面をジロリと見たが、併し手は放して呉れなかつた。默つて少し行くと、またお饒舌をはじめて、

「君はブルーチコフとは舊い馴染かね？」

「マスクワに居るころの知己で。」と好加減に返答をしておくと、

「可笑しな奴だが、金滿家で、金はウンと持つてる。時々果飲をやらかす　何か汐があると、直にやらかす。」

「でも貴方も一所になつて果飲る連中ぢやありませんか？」

「當然さ。皆を家へ引込んでる奴はねえ。矢張惡くねえからね　仲間の者は皆ブルーチコフが大好で、能く一所に酒を飲む。ブルーチコフだツてさう棄てた者でもねえからね。だが彼奴は家へ行くと可愛さうなもので、嬶がムチャーエフと、矢張仲間の者だが、其奴とイチャついてると、彼奴は其側で二人の間に出來た子供の守をしてるやアがる……ほんとに可笑しくツて耐へられねえ……ハ、ハ、ハ！」

と憎々しく刻んだやうな笑方をする。

「私にや此とも可笑しくない。」とまた突慳貪つて無理やりに手を振解いて了つた。

けれども彼は何程冷淡くされても平氣なもので、矢張自分と竝んで行きながら、

「お前さんにね、一座の棟梁株を一つ紹介して置からうか。」とまた何氣なき體で饒舌り出した。

「まづペトローフ君だ、お前さん噂に聞いてるかも知れねえが、六十三年に脱走した人で、舊と砲兵の士官を勤めた人だ。えらい革命家なんだ。國にや金滿家のえらい身分の貴い親類もあ

るンで、叔父さんは何でも大臣になつたことが有るさうだ。すてきに口の達者な男で、音曲の名人だ、何でも二代目のルービンシテインといふ評判さ。むかしはゲルツェンの書記を勤めて、「警鐘社」でパリ〳〵云はせた人だッさ。此間のハルトマンの一件の時も、此ジェネワに居る露西亞の革命黨の名代でパリへラウロフの加勢をしに行つたんだ。素敵に口が達者で、佛蘭西語の名人で、本當の佛蘭西人も敵はねえ位なんだから、ガンベッタに會つたときなんざ、一人で座敷を持つたといふ話だ。何處へ行つても馴染が澤山有る。ロシフォールもジェネワへ來ると乾度尋ねて來る位なんだからね。それからブシェホンドフスキイ。こいつも英物さ。ガリバルヂー組に入つてたもんだから、方々の戰でえらい働きをして來たもんだ。だからガリベルヂーも彼人にや一目置いてたさうだ。國を脱走したなカラ子供の時分で、何でも三十一年とか何とか云つたよ。だがね、今迄些たア仕損もあるのさ。バクーニンと大層親密で、矢張ペトローフの樣に書記を勤めてたんだが、バクーニンの死ぬ時分に何だか些と揉めた事があつたさうだ。何だか婦人の事で出入りが出來たんださうだ。それがね、お前さんの前だが、パン・ブシェホンドフスキイはあんな老人でゐながら女に掛けちや眼が無えんだね。今でも彼人ン所にや素敵な別品が居て、その女の爲に毎月二百フランから遣ふさうだ。あれでもモッと若え時分にや女の方から入揚げたもんだッさ。何でも何とかいふ伯爵の夫人に惚れられて毎年六千フラン宛仕送られてゐるんだといふ評判だ。そればかりぢやねえ、まだ彼人のことぢや種々な評判をする。僞だか眞實だか知らねえがね……たゞ、確な事は彼人は酒に眼のねえ男だけに、利酒の名人だ。お前さんも聞いてたらうが、自分で酒の事は己に限るていつてるが、僞ぢやねえこれ。酒屋が、お前、利酒を頼みに來る位なんだもの。」

うるさい猶太人はしつこく止度なく饒舌り立てた。見た所、話が好きで自分のたのしみに話をするやうである。うるさくて堪らんから、此方は急に足を早めると、彼は少しも頓着せずに後を追蒐けて來て、また饒舌り出す。

「何故其樣に急ぐんだね！」と云つて臂を把つて、「そんなに急がんでも、おいてきぼりになりはしねえよ。まア、聽きなせえ、アノ髮を盛砂のやうに盛上げてる奴ね、と指さし〳〵して、「彼奴はグリッコといふ奴だが、から馬鹿さ。ドラゴマーノフ派の奴だがね　ドラゴマーノフ派ッて聞いた事があるかね？　俗にグロマーダといふ派さ。彼奴等アからッきし仲間はづれで此方等のやうな社會黨たからッきし性質が違ふんだ。小露西亞を煽てこんで露西亞と仲違にさせようと企んでるんだ。皆馬鹿さ！　から馬鹿さ！……若し己達が善い目が出ようもんなら、小ぽけな國なんぞ拵えて何にする、其樣な狹え了簡ぢや駄目だッてんで、一番驚かしてやるンだけども……何だ、やれ小露西亞だの、やれ波蘭だのッて、べらぼうめ、何だッて人間ほど大事な者はねえんだ、人間が先なんだ。だからあいつ等ア皆馬鹿だッてんだ、何でも盛砂連中でなきや、眼の敵にしやアがる。公然に雜誌でもつて、露西亞が猶太人を虐める肩を持ちやがるやうな奴等なんだもの！　猶太人は正教の奴を虐めるの、膏を絞取つて懷を肥してるの、何だの彼だのと云やアがる。べらぼうめ、そんなに澤山さうに猶太人猶太人ッてぬかしやアがるけれど、猶太人だッて露西亞の爲に竪の臺を飛ばしたものもあるぞ。猶太人の中からだッて、憚んながら、テイヂだのズンデレーウィチだのサンドベルグだのといふ革命黨が出たのを知らねえか。カルル・マルクスだッて猶太人

だ、ラッサールだッて、矢張さうだ。氣を付けやアがれ、と云ひたくなるね。だがノ、猶太人を眼の敵にしやアがるな、ドラゴマーノフ派の奴ばかぢやねえ。口でこそ人間は何處の者でも皆同等だなんぞッて云つてるけど、皆此方等を眼の敵にしやアがるんで。何だッて侯爵で革命黨で歐羅巴中に名の響いてる人だッてそれだから仕樣がねえ。」

「侯爵とは？」と自分も到頭釣込まれて問くと、

「クラポトキンさ。あんな侯爵ともいはれる人までが……」

「侯爵ともいはれる人が如何したので？」

「どうも非道いや。矢張種々なこと云つて猶太人のことを惡くいふんだもの。やれ猶太人はどうで御座るの、からで御座るの、猶太人が交つてるから革命黨の名が汚れるのッて……ねえ、あんまり譯が分らねえぢやねえか？ その癖自分は猶太人の娘に惚れて嚊にしてるんだ……あの人の夫人は、やはり此方等の仲間で、猶太人だからね……それをかんがへたら、口が開けめえだらうに……」

「侯爵夫人は元は猶太人でも今は然うではないのでせう？」

「何故？」とブリュムキンは吃驚して、「今だッて猶太人に違ひねえと！」

「侯爵夫人が？ そんなら如何して婚姻の式を濟したんでせう？ 正教の侯爵なら猶太人の女と結婚は出來んぢや有りませんか？」

「婚姻の式なんざしやアしねえのさ。そんな馬鹿な眞似なんざしねえでも可いんだからね。尋常の婚禮をして一所になつてるンで。」

「それぢや侯爵夫人ぢやない。尋常の情婦にすぎない。」

「そりやお前さんの方ぢや、情婦といふだらうが、情婦だッて嚊も同じ事たからね。」と慳貪に云つて、「リヨンで侯爵が裁判に掛つた時だッて、新聞にや皆夫人ッて言つてあつた。裁判所へ出ても女房の樣に侯爵の傍に坐つてたし！ パリーやリヨンの繪入雜誌にも肖像が出て、町ぢや寫眞を賣つてたが、どれにだつて『侯爵夫人クラポトキナ』といつてあつた。皆が侯爵夫人侯爵夫人ッていふんだから、私が侯爵の女房だつッたッて可いぢやねえか？」

と何か穩かならぬ眼付で自分を睨廻してゐたが、更に言葉を繼いで、

「えゝと何の話だッけ？ さう／＼。そこで以て今は最うてん／＼わい／＼さ。ドラゴマーノフはグロマーダ派を引連れて騷ぎ立てるし、プレハーノフはマルクスの言草を受賣してゐるし、クラポトキン侯は世界中に革命を起すんだッて騷ぐし……（侯爵は公然に己は無政府黨だッて云つてるんだからね。）波蘭の社會黨は云ふが者はねえ。彼奴等ア毎でも仲間外れだ、手前の方だけで目的をつけてる。それから此方等の方でも最う年寄は駄目だ、皆老耄してゐる。パン・プシェホンドフスキイは今は最う利酒させる外役に立たねえ、ペトローフは演説して獻立書を書くばかりが能だ。尤も何か纏つた事があるとまだ役に立つがね。歐羅巴の社會黨が集會をする時分にや、いつでも名代に出すんだ。まア謂はゞ抱への演説遣ひとね。そこへ行つちや、此方等の組だ、本當の遣手が出て、どしどしやらかすなア。此方等の組は民意黨ッていふんで、頭はレフ・チホミーロフさ。僕達は何だッて機關ッていふ奴を持つてるんだ。大きな雜誌よ。最う二號出て今三號の印刷中なんだ、民意報知ッてんだ。君見たことが有るだらう。讀んだだらう？」

「イヤ見たことも讀んだこともない。」

「なんなら明日取寄せて進げやせうか。一部四フラン宛で。」

「誠に難有いが、明後日出立するから、貰つても仕方がない位で。」

「要らなければ、それ迄だが……此方等は何でも思切つて騒動をおツぱじめる、それでなきや、到底も望の叶ひツこはねえツていふ腹で、こういふことを雑誌に書立てるンだ。チャンと最うからしてあゝしてからしてあゝしてと、チャンと企畫んで居るンだから盲目滅法にやるのた撲が異ふんだ。」

「貴君も矢張お書きなさるの?」

「書くともね。僕の書いたもな大層受けるよ。矢張かうみえても徹頭の編輯員なんだからね。」

「誰が主筆なんで?」

「主筆といつては別に無いが、たゞレフ・チホミーロフが編輯の方の親方になつてるんだ。ラ!ウロフも矢張書いてる。だがこれは極内の話だがね、彼奴の書いたもな誰も讀まないて。文句が冴えねえで、重ツくるしい調子だもんだからね。だが、デボゴーリイ・モクリエーウイチの書いたもなアなかく面白いから、此度讀んで御覧なさい、此奴はカーラから逃出して支那を通つた奴で、その旅日記がなかく巧く書いてある。」

自分はチホミーロフの砂を噛む様な革命主義の書を讀んだことがあるから、此話になると流石にブリュムキンのお饒舌も少しは耳に止まる節もあるので、

「あのザスーリチとかいふ婦人も此ジェネワに居るといふ話を聞いたが、實際ですか?」

「ウェーラ・イソーノウナの事だらう? 居なくツてさ。」

「彼婦人も矢張チホミーロフ黨の人ださうですな?」

「何に、お前さん。ウェーラ・イソーノウナは、昔は成程革命黨の人だつたらうが、それは昔の話で、今は尋常の老婆さんさ。それからプレハーノフだ、宛で土耳其の王様みたやうな奴で、情婦が十何人もあるといふ男だ、年はとつても、なかく其道の剛のもので、幾人となく情婦を拵へて、わいくいつて騒いでゐる。」

「こら猶太人め!」とふと後に破鐘のやうな聲がして、大きな手がドッシリ、ブリュムキンの肩に掛つた。「貴君はそれだから不可。初て逢つた人に内輪の事を話すとは何のこツた?」

何者かと振返つて視ると、幅の廣い顔で、大きな鼻の、背の高い、筋骨の逞しい、屈強の男が立つてゐたが、顔も手も何か黒い汚點がついてゐて、玉なす汗をかいて、同じく黒い汚點の附いた青色の事業服を着て、膝までかくれさうな長靴を穿いて居る。長い胡蘿蔔色の頭髮を蓬々とさせて、大きな飛出したやうな灰色の眼を光らしてゐる。その太い手の重みでブリュムキンは殆どくの字になつて了つた。

見知らぬ男はブリュムキンの肩を押さへたまゝで、「よしく、澤山饒舌ろ、貴樣は法螺を吹かずにゐられんのか? 已が彼程意見したた最う忘れツちやツたのか? これからは些と氣を付けろと彼程いつといたぢやねえか? うむ? 此奴如何して呉れよう?」

ブリュムキンは詫るやうに、「ま、放して呉れ……おゝ痛! 默つてれば好いかと思つて、非道い事をする!」

「まだく此様な事ア何でもねえ。狼狽すると撚潰すぞ。皮ばかりにならないやうに用心しろ……」

と眉を皺めて恐ろしい面をしたが、それでも手は卸して了つた。

ブリュムキンは吻といふ息氣をして、「本當に君は惡く巫山戯る男だよ。」

「うんにや、巫山戯るンぢやねえ。極の生眞面目で貴樣の土手腹を蹴破るから、こう思へ、先刻から後に從いて全然貴樣の法螺を聞いたぞ……

……對手が知らねえと思つて彼様な嘘八百を並べやアがつて、貴様なんざ如何様に非道い目に逢はしたつて可いんだ

「だがねえ」とブリュムキンは相手の悪口の裏を折つて、「茲に一つ奇妙不思議キテレツといふ話があるんだ。それを云つたら君だッて恐悦至極ッてなことになるだらう……」

「なんだ？……また欺がうかと思つて……」

「君なんぞ欺いだッて仕様がねえ……いふから、最う暴ッぽい事は御免だぜ。」

「まア云つてみろ……聴いて遣らう。」

「まア我輩らア君何處へ行くんだと思ふ？」

「そんな事が分るもんか？」

「これからカフェーリリックへ行くんだぜ……ブルーチコフの驕で……最う先へ同勢十二人ばかり繰込んでるンだ……」

「面白い！」と見知らぬ男は果して恐悦の體で忽ち機嫌を直して、「ぢや、己も一所に往かう。人の懐でハクつくんなら關はねえ。」

ブリュムキンは、さも愉快さうに、「ところでチョッピリ御紹介ッて奴をしよう。これはアレクサンドル・アレクサンドローウィチ・ツッイシキンといつて社の活版所で字拾をしてゐる人で、これはパーウロフてッて、僕の舊い友達なんで、極く懇意なんで……マス[illegible]に居る時分は、矢張一つ寄宿舎だつたもんだ……なかなか立派な青年で……自分の身元保證をして……僕ア何も何處の馬の骨とか得體の分らん者なんぞに請合ふ事を饒舌りやアしたい。此人なら僕が受合ふ、大丈夫なもんだよ。それに君我輩らがお酒に有付いたのも實は此人のお蔭なんだからね。ブルーチコフは一體此人を御馳走するンで、我輩らはいはゞ御陪食なんだ。だから、君、此人は粗末にならないよ。」

「ぢや、全く君のお蔭でハクつかれるんだね……有難い／＼……」

といつてツッイシキンが自分の手をぢッと握つて、前へ匆々と行く。するとブリュムキンは自分の耳を嗅いで、

「久しい馴染だッて嘘を吐いたのはね、さういはねえと事が面倒になッちまふからさ。此様な奴アねえんで——無暗と威張りやアがつて、何だぞといふと直き突つて来やアがッて、宛で病犬みたやうな奴なんだ。だから何でも騙して置くが勝さ。」

Café Lyrique の廣間ではペトローフの號令でガルソンが卓を並べて準備に懸る。ハン・プシェホンドフスキイは酒板を把つて沈思默考する。連中は[illegible]に[illegible]ツッイシキンとシドーレンコが何か[illegible]しさうになつたので、ペトローフが仲裁に入ると、

「何でい、[illegible]、[illegible]すると、土手腹へ風穴を開けるぞ！[illegible]やうに用心しろい！」

とツッイシキンが怒鳴る。

「何だと！　風穴ア開ける？　利いた風なこと吐しやアがるない！　手前の鼻柱ア引擦られねえ用心しやアがれ——」

とシドーレンコが叫く。

「まア／＼、最う宜しい！　最う黙つた／＼！」

とペトローフが引分ける。

「何でい、コノ、ドイツマンの[illegible]め！」

「己ソ、我利々々亡者奴が……」

「諸君如何かしてくれ／＼！」

とペトローフが哀れな聲で救を求める。

二三人ばら／＼と起つて来て、ペトローノに力を戮せて、漸くのことで引分けた。

さて、三十分もすると、全然準備が出来て、鹽漬の茸子などの取肴が別に卓に人待顔に並べてある。ハン・プシェホンドフスキイは、擇つて卓の上に並べさせた壜の列を瞰めて得々と

して居る。近眼眼を光らして口元にさも嬉しさうな微笑を浮べてゐる。心の内では、「まづ首尾克くまゐつて安心。最う是で心配することはない。」と思つてゐさうである。唯ペトローフばかりはそろ／＼心配し出して幾度となく出口のところへ來ては、手を翳して日光を避けながら凝然と往來を眺めてみてゐると、二十分ばかりも經つたが、プルーチコフは一向影も形も見せないので、ペトローフも氣が氣でなく、最う出口の處に立往生をして、眼を皿の如くにして、プルーチコフが來べき筈の方角を覗詰めてゐたが、頓て自分の方を向いて、

「なア、君、若しプルーチコフが一杯喰はしたんで、これぎり來ないとなつたら、如何だらう。善い業晒だ、なんだツて、最う一人前五フランの料理を十七人前命けツ了つたんだからね。おまけに取肴は二十人前だと思ひ給へ。」

と祈るが如き眼付して自分の面を見たが、見れば青い面をして、餘程心配と見えて、細い脚を突張つてわな／＼してゐる。

「併し私の知つた事ぢやない。」

「君の所爲だとは云はん。けれども、若し萬一の場合には君が引受けて吳れなきや困る。僕は久しく此土地に居るんだから、皆顏を識つて居る。こんな事で恥をかゝされちや耐らん。だから君が引受けて吳れなきや不可。よろしいか？」

とグッと自分を睨みつけたのみならず、宜しいかと云つた其調子が如何にも無禮過ぎた調子で、宛で喧嘩を吹懸ける樣な强談をする樣な調子であつた。

「では私に此處の勘定をしろと云ふんですか？」

「さう／＼、さうともさ！」

隨分始末に終へぬ事になつた。勘定と云へば百フランを出ようが、自分にしてもさうは出せない。それにペトローフの言ひかたが第一氣に喰はん。如何にも人を踏付けにした無禮ないひかたである。併しながら拂ふまいとすれば、それこそ、飛んだ善い業晒な目にも逢はうから、それも困る、如何したものかと、途方に暮れたが、如何も仕樣がないと諦めて、あはや承知の返事をしようとするトタンに、不圖ブリュムキンの聲として、

「ソラ、プルーチコフが來た！……」

間もなくプルーチコフは破裂彈のやうに飛込んで來た。息氣を切らして、熱いから眞赤になつて、汗をたら／＼滴してゐる。ハンケチで面を拭ひながら、

「諸君お待遠う！　さぞ腹が空いたでせう。どうも失敬した……ツイ引留められたもんだから……まア少し休ませて吳れ給へ、あゝ苦しい……」

「ゆツくり休み給へ、其間に此方等は取肴を退治つけツちまふ。職人だア、腹ア空かしちやゐられねえ。」

「や、ツツイシキンだ！　如何して來た？」

「職人だもの、鼻が利かアな。甘え物がありや直ぐ嗅付けて來るんだ。」

「面白い／＼。振舞だ。澤山喰ひなさい。オイ皆さん、始めようぢやないか。ツツイシキンの言草ぢやないが、ほんとに腹ア空かしちやゐられない。」

プルーチコフの後に從いて餓鬼共もばらばらと起上つて、小さな卓を圍んで、取肴を目掛けて武者振り付いた。連中の中にはウォトカの無いのが殘念だと云つた者もあつたが、其癖矢張負けずに熱心にキルシを呷りつけた。キルシも適れウォトカの身代りに立つたのである。十分も經つか經たぬ内に、取肴を皆平らげ、キルシの大壜を幾個となく空にしたので、まだ食事に掛らぬうちに、醉拂つて了つた者も隨分あ

つた。
一から勞を除けといて、これから此處勢で飯を食ふんだ」とプルーチコフが戯れた。
連中は小さな卓を離れて、先を爭つて此方の大きな卓に來て場を取つた。卓の上にはそれぞれ道具が竝んでゐて、既に熱い肉汁が竝べてあつた。
初めの内は誰も口を開かない。先刻食べた取肴も仲々の量であつたに拘らず、大抵は皆ガツガツして、白麺麭を食ふ事一通りでない所を見ても、平生餘り御馳走を喰べつけぬから、それでから狼狽てて詰込むものと見える。唯パン・プシエホンドフスキイとペトローフとニキータ・ウオズドウイジエンスキイと、それからプル！チコフとだけは左程にガツつきもせず、ウオズドウイジエンスキイを除く外は皆食ふよりは飲む方を急いでゐた。先づプルーチコフは重にキルシと組打を始めて一杯々々と退治る。ペトローフとパン・プシエホンドフスキイとは葡萄酒の方が好いといつて、赤だの白だのと贅澤をやり、パン・プシエホンドフスキイは沈着拂つてグビリ／＼とやつては、如何にも旨さうに舌打をして味つてゐる。ペトローフは一度に半杯位宛飲んでは急いで注足すから、前に控へたコップはいつ見ても溢るゝばかり一杯になつてゐる。ニキータ・ウオズドウイジエンスキイは何も飲まないばかりでなく餘り身に染みて喰ひもしなかつた。一體此人はカザンの宗教中學出身の人であるが、最う餘程の年配で、脊の高い、無愛想な、無口な、白髪の老人で、交際が嫌ひといふので名が通つたものである。如何して此連中に加はつたものか、また如何して亡命者となつたのか、更に分らん。自分はこれより以前に逢つたことがある。最う露西亞を出てから餘程にならうが、或はジエネワに居たこともあるし、またロザンに居た事もあつて、平生露西亞から來たものの子供なぞの學問の師をして、浪風穩かな世を送つてゐる。で、此時も連中とは懸離れて、獨り隅の方に小さくなつて、氣難しい面をして沈默を守つてゐた。
伊太利仕込の索麵を配るところに、少し揉が起つた、それが段々むづかしくなつて、遂に一場の亂癡戲騷ぎになつた。先づ事の起はからで。
今しがた口論つたツツイシキンとシドーレンコとは、如何かして隣同志になつてゐたが、二人とも最う喧嘩の事などは全然忘れて了つてゐる、頻りに酒の酌を仕合ひ、絶えず杯の縁を打合をしては、ニヤリ／＼笑つてゐた。ツツイシキンが巻舌で、
「ヤイ、シドーレンコ……何だそれは？」
「これか？　こりやア伊太利索麵よ……取つて遣らうか？」
「索麵？……イヤ要らねえ、索麵なら要らねえ。イヤ要らねえと云つたら要らねえ。」
「だッて素敵に甘えぜ……」
「甘え？　ソ、索麵が甘え？　うんにや、甘くねえ、索麵甘くねえ。索麵なんざ伊太利の乞食が食ふもんだ。今日は、よしか、プルーチコフの驕りだぞ。分つたか！　そんなら最と甘え物食はせろ。」
「ぢや何が善い！」
「何が可い。知れた御事、汁に粥よ……からめえても憚ンながらコノ己様は職人様だぞ……人間の食ふ食物でなきやア、氣に入らねえ。」
「汁に粥か。食ひてえなア。」とシドーレンコも同意する。
「手前も喰ひてえか？　難有え！　そんなら何も遠慮することねえ。直ぐとい、い、い、い、言付けべえ。プルーチコフ！」とおもひがけず大聲を揚げて、大きな拳でドンと卓を叩いたから、玻璃盃は倒けて酒は卓掛に覆れた。
「何だ？」とプルーチコフが問ねると、

「今日はお前の驕りか？」
「さうだ。」
「そんなら己とコノ、シドーレンコが食ふんだから汁と粥を命けてくれ。こんな物は――お前と云つて汚ない指で索麵の皿を指して
食ふなら食へ。己ッ達の口にや入らねえ。」
「馬鹿ア云へ、ジェネワに汁や粥があつて堪るもんか。」
「そんなら何も食ひたくねえ！ から云ひ出したからにや、何でも彼でも命けなきや承知しねえ。早くやつて貰ひてえな……早くしねえと皆打壞すぞ、この索麵の皿を手前の頭から打掛けるぞ！ みんな粉微塵にしツちまふから、然う思へ。」
ツツイシキンは成嚇文句を竝べたばかりでなく、實際索麵の皿を取りさらにしたから、猶太人のブリュムキンは頓智を出してプルーチコフの難を救つた。まづ一寸ツツイシキンの側へ飛んで來て兩手を取つて席に着かせて、索麵の一杯入つた皿を前に置いて、如何にも親しらしく宥めるやうに、
「さア粥を持つて來た。」
「何がこれで粥だ？……コ、コ、こりやア索麵ぢやねえか？……何だ、この野郎、人を馬鹿にしやアがつて、打殺すぞ！……」
ブリュムキンは委細構はず、
「索麵なもんか。索麵なら己からして嫌えだ。索麵は露西亜の敵だ……索麵は糞だ……だが、こりやア本當の露西亜の粥よ……如何様に甘えと思ふ！ 何だ、醉つてるンか？ 解らんのか？ まア、一ッ食つてから文句云へ……」
と索麵を匙に一杯殆ど無理矢理に、ツツイシキンの口へ押込むと、ツツイシキンはそれをむぐ／＼やつて呑込んだ。忽ち莞爾々々となつて、醉つて締りの無い面に此上もない滿足の色を浮べて、
「甘え！ 露西亜の粥甘え！ そりをあんな索麵なんぞ食はさうとしやがつて……ヤイ、ブリュムキン、手前まア一杯やれ。手前は猶太ツ坊でも、おれ好きだぞ……」
といふので粥一件は收まつて、泥醉漢のツツイシキンも大人しくなつて了つた。
左右する内に、此度は他の連中が騷ぐやら叫くやら罵るやらし出して、隨分手非道い言もひだした。給事のガルソン達が、わツ／＼と騷ぐのを覩て肝を潰した顏をしてゐる所を見ると、此樣な客は此いかめしいCaféへは初てだとみえる。連中は二三人を除く外はいつの間にかナイフやフォークを放り出してビーフステーキやサラーダさへ手抓みにして食つてゐる。
「諸君！」と叫んだパン・プシェホンドフスキイの聲が騷ぎの中に一段高く聞えた。
「諸君！ 今金箔附の暴人が一言したいことが有るから聽いてくれ給へ。ガリバルヂーの旗下の老將のいふことを聽いてくれ給へ……」
とやをら身を起した。
「皆靜かにしろ！」
「さア始めた／＼！」
「胴上してやれ、胴上を！ やれ／＼！」
といふ喚聲が辯士への挨拶であつたが、プシェホンドフスキイは蟹のやうに眞紅になつて、詰つた領に太い線を出し、眼中を血走らし、葡萄酒を溢るゝばかりに盛つた杯を手に持つて、ふら／＼しながら、ニヤリ／＼と笑つてゐる。全く大へゞレケの體である。
「さアやり給へ。」と誰やらが少し鎭まつた時に云つた。
「エシチョー、ポリシャ、ネ、ズグニーラ、バカー、ムイ、ピエームイ。」と胴滿聲で唱びだしたから、もツと唱び續けるのかと思ふと、「モスカリー、スウィニイー、ド、ペイロー、イフ、シウレイ……ライダーコフ……」と尻切蜻蛉に

して了つた。
「此畜生、座山戯た眞似しやがる！」手前達に馬鹿にされて堪るもんか！」「コノ波蘭の天刑病者奴！」「播木野郎奴！」「ヤツ付けツ了へ！」拳を固めて一度にドッと起立つて、あはやパン・プシェホンドフスキイに打蒐らうとした。此分で打擲されたら、何れ首の骨の一つも打挫かれなければならぬ所であつたを、ふとしたことでたすかつたといふは、危機一髪といふ時に、連中の誰やらが卓掛を引外したので、卓の上に載つてゐた種々の道具がおそろしい音を立てて床の上へ轉け落ちた。スルト（三階）の亭主がガルソンやら料理番やら其他の召使等を數多引連れて出て來て、大聲を揚げて連中を野蠻人だの土鼈だのと罵つた。プルーチコフはグツと癪に觸つた樣子で、拳を固めて亭主に立向ひさうにしたから、ペトローフが間に入つて、壞物は總て代を償つて損を掛けぬと云つて亭主を慰め、プルーチコフを傍へ連れて退いて、これをも慰めたので、程なく騷動は鎭まつた。で、男が來て壞物を片付けるやら、卓掛や手巾を取換へるやらしたから、又皆席に着いて、何事もなかつたやうな面をして、澄して食事を續けた。騷動の張本人なるパン・プシェホンドフスキイも椅子に腰を卸して、眼を閉つてチビリと飲んでは、ピチャリ〳〵と舌を鳴らしだした。

最う八時頃でもあつたらうか、ガルソンが空皿を片付けに來たので、連中が蹌踉きながら、がたぴしと椅子を居去らして、席を起たうとすると、

「ま、諸君、待ち給へ！」とプルーチコフは皆を呼留めて、「君達は忘れたのかい、僕が今日は奇妙な御馳走をするといつたのを。ガルソン！リケールを持つて來い！」

「何杯で御座りますか？」

「何杯ツて、壜で持つて來い。何でもいゝから一壜づつ……それからな、鷄卵の善いのを二十と、小さな酒杯を一つと、大きな闘長の杯を人數だけ……早くしてくれ！……諸君是から一つ熊退治といふのをやらう。本當の露西亞の熊退治を……」と仰々しく口上をいひたつて、眞に熊と組打でもはじめるかのやうに、ジャケツの袂をまくりにかゝつた。

ガルソンがリケールを持つて來ると、プルーチコフはその八本もある壜から小杯に一杯づつ大酒杯に汲取つて、その混合酒が凡そ八分目ほどになるを度として止めて、それから徐に生鷄卵を一個づつ割つて、丁寧に白味を取つて皿の上へ除け、黄味をば丸ごと大酒杯の中へ入れた。以上の事をなか〳〵巧にやつたが、やり了るとさも大層らしく、

「そら熊だ！」と一寸考へると何でもないやうだが、此奴を退治るのはなか〳〵骨だ。なか〳〵容易でない、森林に居るのに負けないのだ。此奴を退治つけるには餘程用心をして懸らなきやならん。それから少しは退治方もある。よしかれ、諸君！そも此遊戯の秘術といツぱさ、まづ口をワングリ開いて、一度に喇と大酒杯の中の物を殘らず注込んで、黄味が咽喉の處で壞れないやうにするんだ。若し萬一黄味が壞れたとなると、駄目だ！到底も飲めない、熊殿が鼻の穴から駈出すんだ。まアかうして熊を退治るんだから、よく見てゐ給へ。よしかね？」

と大酒杯を捧げて、グツと呷つて、首尾よく熊を退治たが、面一つ顰めなかつた。

プルーチコフの次にパン・プシェホンドフスキイが大酒杯を揚げた。手が慄へてはゐたが、兎も角も勢よく揚げて杯中のものを一息に飲むと、むせてプルーチコフの豫言通りの始末となつた。それを見て連中が皆哄然と笑ふ。此時分には他の客も隨分あつたが、其人達も同じ

く聲を合せて笑つた。
　殘りの連中も熊退治に懸つたが、大抵ハン・アシェホンドフスキイ同樣の始末で、首尾よく退治たのは僅か二三人であつた。其中にもブリュムキンは顏中を黄味だらけにして、大聲を揚げて頻りにブルーチコフに迫つて、是非最う一度熊を拵へさせようとしてゐる。
「最う解つた……此度こそは乾度退治つけてみせる！」と勢一杯の聲を出して喚いてゐた。
　自分は殆ど穴へも入りたく思つたから、此先如何なるか見てゐたくないでもなかつたが、如何にも席に耐へ兼ねて、眼立たぬやうに竊とCaféを出て了つた。
　町へ出ても當分は我に反ることが出來なかつた。野獸の如き連中がやい／＼いふのが耳に付いてゐて、汚い面をして荒氣ない眼付をした世にも淺ましい姿が眼前に髣髴くやうである。些とも早くカフェーを遠離らうとして足を早めて行くと……「ハーウロフさん！」と後から聲を懸ける者がある。
　振返つて見ると、ニキータ・ウォズドウィジェンスキイである。大層憤激してゐる樣子で、いまで満面を彌々濃くしてゐたが、追付いて一所に歩きながらも、久らくの間は互に默然としてゐた。
　やがてウォズドウィジェンスキイが太い唸るやうな聲で、
「本當に仕樣がない奴等だ！……」
「いつでも彼樣ですか？」
「をり／＼やるです。」と返答するも痛さうである。
　また雙方とも押默つて了つた。
　横町を曲ると、またウォズドウィジェンスキイが悲しさうな聲で、
「人前位は憚つても宜ささうなものだのに、恥も外聞も關はないのだから仕方がない……實に厭になつてしまふ……最う連中の奴等も墮落したなア！　人間らしい者は一人もない。まづ餓鬼大將になつて、大勢の者の音頭を取るのを第一の目的にしてゐる樣な恐ろしい大天狗か、でなければ泥醉漢の破落漢の外ゐない。始終いがみあつたり、睨めあつたりして、何ぞの折には暗中の恥を明處に出す算段をする！　此ジェネワでは露西亞人の亂暴者だといふと最う箸にも棒にも掛らん者の樣に人が思つてゐる。全然輕蔑されて了つてゐるんで……」
　と云つて深く溜息を吐いた。
「それも若手が亂暴するンならまだ可いでさ。」と老人は憮然として言葉を呑込むやうにして、震へ聲で話を續けた。「それを、貴下も御覽の通り、ペトローフだの、ブシェホンドフスキイだのといふ手合までがなか／＼若いものに負けてゐないで、一所になつて呆氣を盡すんですもの……」
「ペトローフはゲルツェンの書記だつたと云ふが、實說ですか？」と彼が再び口を噤むを見て尋ねると、
「それは實說です。が、ゲルツェンの存命中はペトローフも彼樣に亂暴ぢやありませんだつた。高い聲ぢや物もいはない位で溫順しく／＼てゐたものです。けちな人間は誰でもさうだが、頭の壓手があると意氣地はないもんですな。ところが今は御覽の通りの爲體なんだ……併しどうも仕樣がない、時勢が時勢ですからな。昔は革命黨といへば、相應の教育があつて、德義上の制裁をも受けなければならなかつたから、我々の連中にも隨分人類の爲に働かうといふ眞の熱誠を持つてゐた者もあつたもんです。尤も古いものなら何でも構はず皆破壞して了へといふ暴論家もないではなかつたが、あつたところでそんな空想家は少數でしたさ。無政府主義はバクーニンの主唱で建設された主義だけれど、其時

分にゃ其樣な事をいつたつて、人が笑つてゐて、相手にならなかつたもんです、處が今時は如何でせう、誰も彼も、書生黨の人間で、何を目的として働くのかと云へば、解らん位です。如何して革命黨になつたのかと云へば、自分でさへ不思議に思ふ位で何等なんだ。さうぢや有りませんか？彼等の中にや立派な理想があるでせう？目的も志望も有つたもんぢやない。唯碌でもないテルロールなんぞを案じ出したばかりの事で……國で人を暗殺にして懲役にやられるのが恐ろしいと云つて、此處へ迯出して來ただけの事で……實に恥の上塗でいゝ業曝です。」

ふと話止んで、狼狽て手を振つて、横町へ曲つて了つた。

自分はそれから久らく散歩して、宿へ歸つたのは最うかれこれ十二時ごろであつたらう。騷がしい一日を送つた揚句、長く散歩してひどく草臥れたから、燭火も點けずに衣服を脫いで、枕に就くと間もなく、グッスリ睡入つたかと思ふと、部屋の戶を叩く音にふと眼が覺めた。眼を開いて暗中をジロ〳〵窺覗してゐると、益々烈しく戶を敲く。

「誰だ？」といふと、「私です、プルーチコフです。」といふ。

「何用です？」と臥たまゝで慳貪にいふと、

「まア、此處を開けて下さい。是非お眼に懸りたいことがあるから……」

「最う臥て了つたから？明日にして下さい。」

「どうも明日まで待つちやアゐられない……どうも困る……まアそんなこと云はずと此處を開けて下さいな。」

といふのがいかにも祈るやうであつたから、自分も追返すに忍びなくなつて、起上つてラムプを點け、衣服を着て、戶を開けた。

プルーチコフは眼もあてられぬ樣をしてゐる。ジャケツは泥に塗れ、胴衣も襯衣も釦鈕が外れて、毛だらけの大きな胸を露にし、帽子を耳の隱れるほど深く冠り、襟飾は途中に落して來たものと見えて、附いてゐない。今一人連があつたが、矢張露西亞人で、社會黨員で、乞食みたやうな襤褸々々した服裝をしてゐる男で、幾本か壜を下げて後に立つてゐた。

プルーチコフは連の男に向つて、

「卓の上へそれを置いといて最う歸れ。もう何も用はない、空手で歸るのは極りが惡けりや一本持つてけ。」

といふと、連の男は壜を卓の上に置いて、其中一本を取るや否や、忽ち掻消す如く姿を隱して了つた。と差向になると、プルーチコフが、

「折角お休みの所をお邪魔してお氣の毒ですが、どうしてもお眼に懸らなきやならん事があるので、實際あるので……醉つていふんぢやない、決して醉つちやゐない、實際用があるンで。」

「今時分用が有る筈はない！好加減に歸つたら如何です、細君が心配してゐるだらう……」

「妻が？……」と云つて苦笑をして、「妻なら心配なんぞする氣遣ひは有りません。患者がチャンと傍に附いてるから……」

といつてさも賴りなげに溜息を吐いて、如何にも辛さうな面色をするから、彼の胸中には容易ならぬ苦みのあることを自分も忽ち悟り得た。

「さうなんで、患者が附いてるンで、實はそれに就いてチトお話があつて伺つたんで、」と云つて又深く溜息を吐いた。「勿論貴下の關係した事ぢやアないんだけど、私だッて苦しいから誰ぞに些とは聽いてもらひたいでさ。矢張人間だもの、性があるから、應へまさア！何で私をかう非道い目にあはせるでせう？何か怨

が有るンでせうか？　私ア何も怨を受ける様な覺えはない……」
と雨手で頭を押へて久らく凝然としてゐたが、頓てブランデーを一杯ついで、それを飲干してから、凝然と他の面を目守めて、言葉を繼いだ。
「といふが皆貴下のお蔭ですぜ……」
「とは又何故？」
「どうもさういふ事になる――貴下のお蔭です！……だが、心配しちや不可……私ア此とも貴下に對して何とも思つてゐるんぢやないから……」
「併し何故私の所爲です？」
「それはかういふ譯で。まア委しくお咄をしませう。」
と云つて、又ブランデイを一杯引掛けて、長椅子に身を落して、
「貴下はもうお忘れなすツたかも知れんが、マスクワに居る時分シェストーソのお祝儀狂言の一件で貴下ン所へ伺つたことがありましたツけな。彼時は全く貴下を金で買はうと思つて伺つたんでした。だから、ソラ、百留獻じようとしましたアね。ところが貴下は金は取らないで、それでもつて私の望は無代で叶へて下すツた。それが私の爲には大の毒になつたんで。解りましたか？」
「何んだか些とも解らない。」
「イヤ、此奴は解るまい。まづ彼時の事からお咄しなきや解らない。かうなんで。お咄すりや全然解ツちまふんですがな。彼時ソレ貴下は百留を私に叩返した。私ア大に極りが惡うがしたね。私だつて盲目ぢやないから、貴下の金で自由にならんな直ぐ解つた。ようがすか。ところで全然考へ込んだね。ソコデ考へて見ると、どうも私共の人間の見方は間違つて居るといふ所に氣がついた。いえね、私共の方ぢや何だツて金沙汰でさ、金でなきア埒ア開きませんや。商賣といふもんはさうしたもんなんで。だから私はひどく貴下に感心しちやツた。どうも學者は違つたもんだ――金にや眼を呉れない。全く私共た撰が異ふんだから、學者ツていふ者の腹を呑込まなきやア譃だと思ひましたね。で其後ムチャーエフといふ男に出逢したが、此奴が矢張學者だツて自分ぢやア云つてるんで。だから私も頭から買被つちやツた。で、懇意になつて、段々たつ内に、到頭膝組で酒を飲むやうな關係になつちやツて、全然胡麻化されツちやツた。だが、私ア嬉しかつたね。何だツて、私共の交際ふ人間は皆學なんざ些ともない奴ばかしのところが、ふと學者に出逢して、それにヤレコレ云はれたんだから、堪らないや。それがね、私が惡かつたんだ、彼奴に例の百ルーブルの一件の話をして、大層貴下を褒めちぎつたんです。今から思や、これが惡かつたね。宛で向うに隙を見せたやうなもんで、だから向うはそれを聞くと、心得たといふもんで、おツそろしく慾のないやうな風をして見せたもんだから、此方ア全然惚込んぢやツた。ところが、或る時ムチャーエフのいふにや、『おれの知つてるものに、士族といつても大したもんで、何でも元は侯爵出か何かの人の娘がある。おツそろしい別品だが、ひどく困つてる。何と救つてやる氣はないか。』ツていふもんだから、『よろしい、幾干でも出さう。』ツていふと、『そりやアいけない。大變に氣位が高い女だから、唯遣らうツたツて到底も受取る憂はない。』ツてんでさ。それぢや如何すりや可いんだといふと、私にその娘ン處へ往つて佛蘭西語の稽古をしろツていふんでさ。その娘ツていふな佛蘭西語が馬鹿に甘いので、其時分も人に教へてゐたんださうで。で、私も、よろしい、早速連れてツてくれツてよなことで、到頭ラリーサ・ミハイロ

ウヰツていふ女なんだが、その家へ引張られて行つた。逢つてみると、成程大した品物だから、初對面の私も妙な氣になつて、まア早い話が、デレツちまツたんですな。成程ムチャーエフのいふ通り貧乏だと見えて、室も狹くツて、道具ツてツたら、椅子が二脚に破れ卓が一脚しかない始末さ。で、私が一時間青札一枚づつで稽古をして貰ひたいツて云ひ出すと、先方は笑つて、大層お氣前の宜いこツてすね。そんなに違ひなさると、今に身代限りをしますよ。私はそんなには要りません、週に三度の稽古で三ルーブル宛頂きや澤山でございます。ツさ。どうも恐入つちやツた。流石は士族の女だと思ひましたね。それから稽古に通つたが、イヤどうも甘く行かなかつたね。一體鈍な所へ持つて來て、始終先生の面ばかり見てゐるといふもんだから始末にいかない。どうもデレツちやツたんですな。心の中ぢや一つ引抱へて接吻でもしてやりたいんだが、何方しろ先の見識が偉いから、滅多なことア出來ねえ。まア早い話が、ソレ、此方は全然逆はされツちやツたんでせう。だから面を見てゐると好い心持がするけど、歸る時分にや最うこれで二日も逢はれないんだと思ふと、どうも厭になつちやツて堪らなくなる。最う從來の樣な馬鹿アしたツて、どうしたツて、些とも面白くない、頭でする氣になれないんでさ。いやどうも、くさ／＼してね、これぢやア到底も命が續かないから、こりや寧そムチャーエフに何も彼も打開けツ了はう、さうしたらどうかしてくれるだらうと思つたから、出懸けて行つて胸を割つて全然白狀して了ふと、ムチャーエフ奴しらばツくれて聽いてゐやアがツたが、そんなら其樣に心配するに及ばん。あゝいふ氣位の高い女だから、財産に目がくれたんだと思はれようかと思つて、今迄秘しかくしにしてゐるんだけど、先にも其思召なきにあらず。そりやア、チャンと己が心得てる。ツていふでさ。僞だらうツてツたら、いや本當だ、當人が己にもう白狀してゐるツていふもんだから、私ア躍上つて、抱付いて接吻したね。秘密を漏してくれて嬉しいツていふんで、禮をいひましたね、すると彼奴め無理に私を突放すやうにして、かういふんでさ、まづ向ふを生擒にして夫婦約束をしてから禮をいへ。ツていふから、惚れてるもんならそれでもうきまつてるぢやないかツてツたら、惚れてたツて、其處が見識の高いとこだ。何しろ侯爵の血統を引いてるツてものは爭はれねえもんだ、君が貧乏なら承知もしようが、懸金を持つてるだけに猶更面倒だ。ツていやアがつた……。」

と一息吐いて、ブランデーを引掛けて、

「だが詰らんお噺を永々とやつて、さぞお眠いでせう。私も最う眠になつちやツた。」

「いや、そんなことはない。なか／＼面白い。」

「面白いですか？」と苦笑をして、「ぢや、順を追つてお話しませう。何處までお話しましたツけな？ あゝ、さう／＼それから私も一番大奮發で、ムチャーエフの家を出た其足でラリーサ・ミハイロウナの處へ行つた。而して例の通り膝を突いてさ、全然心を割つて話をしました。彼時どうして彼樣に喋舌られたかと思ふと、不思議な樣ですな。一時間餘も口說きました。でもラリーサは默つて聞いてたまゝで、何とも云はない。たゞ眞青になつて、眼ばかり光らしてゐたが、なんとなく冷淡い樣子さ。でも私ア氣が附かないで、なか／＼氣位の高い女だ。成程侯爵出といふか、さうだらう。此樣子ぢやおツ放り出されるかも知れないと思ふと、何んだかおツかなくなつて來たが、それでもやツぱり女房になつてくれツて無暗に口說き立てました。一生懸命だから恐いもなにもないんだね。といふのも畢竟其時分は女房に出來

なきや生きてる甲斐がないと迄思込んでたから、「ラリーサ・ミハイロウナ、最う苦めるた好加減にして、否か應か判然云つて下さい。」ッていふと、「厭ぢやない、貴下の女房にならう。」と來た。しめたと思ふと私ア何だか夢中になつちやッて、我知らず飛付いたと思ひなさい。さうしたら私を邪慳に突飛ばして、グッと睨みつけて、『無禮なさるなッ。』てッた。勿論私は謝罪つちまひました。それから毎日入浸つて、面ばか眺めてデレ〳〵してゐましたが、たゞ少し心配なのは、花嫁どの始終苦蟲を喰潰したやうな面ばかして居て、ツヒぞお愛想一つ云つたことがない。約束をしない中も私を馬鹿にしてゐたが、してからも同じことだ。私が些と如何かすれば、ま、一寸手を握つてやうがいつもより永くでもなれば、薄氣味のわるい眼つきをしてじろりと見るから、私も胸が冷りとして折角の氣合を挫かれッ了ふといふ始末さ。其中に或る日妙な事があつて私や變な氣持がした。例の通り出掛けて行くと、泣いてるから、如何したんだッて問くと、ムチャーエフが外國へ脱走したッてッて、ほろ〳〵泪を飜すのさ。如何して脱走したんだッてッたら、斯々いふ譯だッて、話して聞かせたが、私ア初て聞いたがね、ムチャーエフは社會黨でね、陰謀露顯に及んだもんだから、それで逃けたんださうです。それを聞くと、「私ア馬鹿だつたね、社會黨が何だか其時分はねッから御存じなしだもんだから、そりよ聞くと、私は、彼人は友人だし、それに私がラリーサと、かういふ關係になつたのも全く彼人のお蔭だけど、どうも無賴漢なんぞと交際つて騷動をおッ始めようッていふな可くない、と思つたから、馬鹿さ加減が堪りませんね、ラリーサを慰める氣で、其通りいふと、や、怒つたの怒らないのといつて、お前さんのやうな道理も分らないものはない、犬だ畜生だッていふ騷さ。ひどく逆上せてゐるから、今につかみ付きやしないかと思つて、私もひどく心配しましたね。初て彼樣に怒つたとこを見たが、貴下の前だが、澁皮の剝けてる奴ッてものは怒つても何處か美しいものさね、今にもつまみ出されるかと思うて、私あビク〳〵ものでゐたところが、案じるより產むが易く、其内に我に反つた樣子で、落着いて、此度は大層愛想よくなつて、『あのムチャーエフは一文も持たずに行つたんだから二百ルーブルばか送つて呉れ、屆先は此處だから。』ッて書付を渡すから、一も二もなく承知しッ了ひました。それから如何云ふ者だか婚禮を急ぎ出したから、此方はおッとまかせで早速支度萬端整へて、私が留守になつても差支のない樣に、家の事は萬事弟にまかせる事にして、それから式を執行つて、寺から直ぐとステーションへ馳け付けた。何んでも一年ばかも外國を遊んで來ようと思つてね。こりやラリーサの望なんだが、私ア女房の云ふ事なら何んでも厭ッてッたことはなかつた。上等へ乘込んで、若い女房と差向ひになつたッていふもんだから、私も考へた、最うかうなつたら少しは思ひ切つてやッてみてもよからう、ね、何だッて法律上でもつて、最う亭主になつちやッたんだからと思つたけどラリーサは素知らん顏をして前よりはもッと嚴重に構へてる。一寸私が接吻しようとしたら、儼然となつて、『串戲しちやいけません!』といふのさ。「だッて最う婚禮を濟しッちやッたんだから、おれはお前の亭主ぢやないか?」ッていふと、『亭主は云はずと知れてるけど、維也納に着くまでは今までどほりソッとして置いてくれろ。」と來た。驚いッ了ひましたね。でも仕樣がないから、どうせ今まで待つたもんだから辛抱しろい、幸ひ維也納迄は三日かゝりやア往ける、永いことはない、その

代り維也納に着いたら蛇理合ましよう、と思つて私も納得しました。維也納にて朝中に着きました、何でも夜時ごろであつたかな。家内が萬事取捌いて、私ア其時分は獨逸語がから不能なかつたもんだから、萬事取捌いて、荷物を受取つて、例の通り馬車を雇つて旅宿へ行つた。旅宿へ着いた時も矢張家内の氣任せにましておいたところが、荷物を二つに分けて別々の部屋へ運ばせてあるから、不思議に思つて、何故だッて聞くと、銘々手近な處に自分の物があつたはうが、便利だからと云ふ。おや別々に居るのかいッてッたら、家内が如何にも苦々しい面をして私を睨め付けて、ツと自分の部屋へ入つて錠を卸しッちやッた。私ア呆氣に取られて、入口の處に立つて、暫ばかりパチクリやつてゐた。腹が立つたのでもなきや、縁りが悪いのでもないが、唯譯が分らない。久らく立つてたが、立つてたッて仕様がないから、自分の部屋へ来て、面を洗つて了ふと、珈琲を持つて来たから、そりよ飲みながら考へた、どうも羞かしがるにも方圖がある。いつまでも辛抱しちやゐられない。夫婦約束をしても何處へも寄付けず、法律でもつて亭主になつても、矢張かまひ付けない！ そんな理窟ッてはない。こりや何でも短兵急に攻付けて降参させてやらう。何の關ふもんか、おれは亭主だ、ッて思つてると、ふと戸を敲くものがあるから、これは何でも家内が自分の方から甲を脱いで降参と出掛けて来たんだらうと思つて、ぞく〳〵しながら戸を開けて見ると――ムチャーエフさ！ どうも驚いたね。あゝ、咽喉が引付きさうだ……エイ最う一杯やれ……

と酒杯に一杯注いで、それを取上げて、物思はし氣に凝然と虚空を視詰めてゐたが、頓て思ひ掛けず口惜しさうに切歯をして、急いで飲干して、また注いで、また飲んで、空の酒杯を邪慳にトンと卓の上へ置いた。

久らくして、

「ムチャーエフが眼の前に立つてるンでさ。そりよ見ると、私ア呀と云つて竦んぢまひましたね。天から降つたのか、地から湧いたのか解らないが、その面を見ると、フッと眼の覺めたやうな心持がして、なんだか妙に落膽しました。鼻の頭に突立つてにや〳〵笑ひながら『お前が来ようと思はなかつた。併し逢ひたかつたよ。』ッていふから、私も癪に障るのをグッと耐へて、『まア此方へ入つてお掛けなさい。久し振りでお饒舌でもしませう。』ッていつたもんだから、入つて来て腰を掛けて、一出逆にも行かなくッて失敬した。ツイ寢過したもんだから、トキニ最う婚禮をやつたさうだね、お芽出度う！……』と云つたもんさ。私ア腹が沸くり返るやうだつたね。馬鹿にしきつてやアがるンだ。それからまだかういふんでさ、『少し用があつて來たんだ。君の細君には少し人には云はれん事があるんだが、それを君に耳打をして置かなきやならん。』といふから『人に云はれん事とはなんだ？』ッていふと、『實はそれが爲に細君は自殺しようとしたから、僕が無理に止めて来た。』といふ。自殺と聞いて私は眼が眩む樣な心持になつたから、『最う好加減に理由を話してくれ。』ッていふと『そんなら君はどんな事があつても勘辨するか？』と念を押すんでさ。から『何んでも勘辨するから最う苦めずに言つてくれ。』ッていふと、『君は細君を大層可愛がつてゐるやうだから、何事も勘辨して呉れ給へよ。實は細君は結婚して最う六月か七月になるんだ。人に云はれん秘密といふのは此一件さ。』ッてッたから、私はクワッと逆上せて、唐突鐵拳を揮へてムチャーエフに躍蒐つて、『好加減なこと云ふな！ おれの嚊に何の怨があつて、難癖附けやアがるンだ？』ッて大聲出して喰つて懸つたところが、先方は此方よりか腕力が強い者だ

から、私の顔を見上げやアがつて、なか／＼放さない。私が漸々落着くと、それから家内は去る男に欺されたんだツて、なんだかクド／＼咄しだしたが、何で本當にするもんですか。欺者は知れてまさ、彼奴でさア。けども私は胸を摩つて成らぬ堪忍をしてさ、人の笑草になるも業腹だから萬事内濟で濟ますことにしました。それから家内の身二つになるのを待つてゐると、丁度四月目に産があつて男の子が生れたから、形の如く露西亞の教會で洗禮を受けさせて、ミハイルと名を付けました。私がミハイレだから、ソレ、ミハイル・ミハイロウイチさ。ね？　これが本當に神樣が子を授けて下すツたのさね。しかし樣子の知つた事ぢやない。天人のやうな罪つない顔をしてゐるから、私ア、好くした者で、可愛くツて仕樣がないから、毎日抱いて守をしてゐましたが、奴さん何事も御存じなしだからスヤ／＼默つてゐて、時々乳が飲みたくなつた時分に泣出すばかりだ。家内は産後の肥立も好くツて、産をしない前よりか餘ほど綺麗になつた。私ア業が煮えて／＼堪らなかつたけど、家内の面を見ると何事も忘れツちやツて、たゞ最う無上に可愛くなる。私ア最う國へ歸りたくなつたけど、家内が承知しない、マスクワへ歸つて月足らずの子を産んだのがパッと世間に知れちやア極りが悪いから、最う一年外國にゐたいといふから、私もそれもさうだと思つて、納得はしたけど、何分ムチャーエフと面を合せるのが厭で堪らないから、何處か他へ行つて暮さうといつて、それでコノ、ジェネワへ來たんですが、來ると直ぐムチャーエフが跡を追つて來た。而して此地へ來てからは、最う遠慮會釋もなく、公然に巫山戲出しやアがつて、止度がないんでさ。最う四年越私は可懸な眼に逢つてるンだ。家内は私を眼前に置いといて情夫と巫山戲てゐるンだ……そりよ皆が知つてるもんだから、私を好い笑物にしてゐる……けども私は何事も我慢して辛い思をしてゐるンで……」

といひやんで、凝然と自分の面を見守めた。

「何故離縁して了はんのです？」

「離縁てツたツて、さう口でいふ樣に造作もなく出來る者ぢや有りませんや。私もやらうとして見ましたがな、どうも出來ん者ですな。最う荷物迄旁付けて、出て行くばかりにしたけど——矢張思切つて出ちや行けなかつた……」

「貴下の仕送で細君は暮してゐるンですか？」

「一切ガッサイ私の懐から出るンで。家内も姦夫も、それからまだ他に食倒しが何程も來るが……皆私の錢で飲んだり喰つたりして、而して種々な悪い事を企むんで……それがね、私の噂アといふな、金箔附の虚無黨なんだ。だから先へ立つて種々な悪い事をやつてるンでさ。」

「その悪い事をする資本を貴下が卸してゐるやうなもんだが、それで貴下は何んとも思ひませんか？」

「いや、思はんどこぢやない。私の錢でお國の仇をしてゐるンだ、と思ふと、私ア胸が張裂けるやうだ。」と云つてトンと我と我が胸を打つて、「私ア天子樣に刃向ふ氣は些ともないんだ。」

「でも、どうも仕草がどうも……」

「みんなあの古狐がさせるンで、彼畜生に化されてるンで……打殺したいけど、打殺せない！……自分で死んで了ひたいけど、矢張死ねない！……仕樣がないから酒ばか飲んでるンだが、飲んでも何の役にも立ちませんや。たゞ身體へばか悪く廻つて、足がふらつくばかしで、心持は些とも變らない……何程飲んでも何ともない……今日も御存じの通り随分飲つたが些とも醉はない。たゞ飲めば飲む程苦しくなるばかりで……」

とまたクド／＼と酒でも忘れられぬ切なさ辛

さを訴へた。自分は女の社會黨員が此商人を欺き、剰へ今日迄も引續いて少なからぬ金を絞取つてゐる其所業を如何にも憎く思うたから、何ほラヴーサの身の上を委しく知りたく、思つてプルーチコフがクド／＼と泣言を陳べるを遮つて、

「ぢや、何んですか、細君といふは名ばかりで、細君らしくしたことは今迄になかつたのですか？」

「ところが、然うでありません！」とさも腹立しさうに、「一頃は無理に納めさせて了りましたが……その中に此方で厭になつちやツたから、止めツちまひました……」

「無理にとは如何？」

「如何ツていふこともないが、たゞ私だけ宿を替へちやツて、仕送を止めちやツたもんだから、それで兜を脱ぎやアがツたんで……」

自分は氣色が惡くなつて來た。「それぢや細君は唯金の爲に貴下に……どうも貴下の前だけれども……」

「さうですとも……全くそれに違ひないんです……貴下はまた如何思つたんです？」

「それだのに見棄てゝ國へ歸れんとは……それぢや貴下はどうも病人だ……瘋癲に近い……」

「狂人に違ひないんです！……それや私にも能く分つてます……」

とプルーチコフは唸るやうに云つて、長椅子にうつぶしに倒れて了つた。オイ／＼と云つて泣く聲が部屋中に響き渡るほどであつた。

翌日は長く眠を覺まさなかつたが、やつと[illegible]頭が痛んでならなかつた。プルーチコフはまだ長椅子に寝て高鼾をかいてゐるから、その儘にしておいて、例の珈琲と共に持つて來た土地の新聞の一枚を取つて、何心なく開けて見ると、三面の雜報欄に鮮明な活字で「野蠻人の宴會」といふ標題が置いてあるのに眼が付いた。讀んで見ると、昨日カフェーリリックでプルーチコフといふ者を首に露西亞の虛無黨員が宴會を開いて亂暴狼藉を極めたといふことが精細と記いてある。

自分は好んで此宴會に加はつた譯ではないが、兎も角其連中の一人には相違ないから、此記事を讀むと、ハッと思つて毛髪の根元まで赤くなつた。

四人共産團

(一) 原始時代の裁縫師

僕はフェーチャ・ブドケーウィチとはズッと昔からの馴染——何日ごろからとも一寸分りかねる位だ。同じ町に生れたのであつて見れば、まだ東西辨かぬ頃よりの友達であつたに違ひないが、其後中學でも一所なら、大學でも同窓の友さ。

互に名をサーシャ、フェーヂャと和らげて喚合つた仲で、大學の在る不知案内の市へ出て來てからも生存の苦鬪にも伴の有つた方が樂と云ふ事が誰に教へられたともなく互の胸にあつたから、自然と手を握合つたものだが、いや一通りならぬ苦鬪さ。僕の兩親は久しい以前に世を逝つて、中學に居た頃から僕はソレ學業優等に付官費生たるを許されてゐた譯だから、いよいよ獨立の境界へ入つてみると、木から落ちた猿同然。早い話が、其市へ出た時にはポッケットには僅四留ほか無くて、將來の安危を繋つて其手垢だらけな黄色な紙四枚に在りと云ふ始末だつた。

フェーヂャの親父は達者でゐたが、恰も其時何か仔細があつて弱つてをつた、何の仔細か僕は知らん。町の病院の會計か何かやつてゐたのだから、大方何か餘り人聽の好くない事が有つたのだらうがフェーヂャは弗に噂をせん。恐らくは愧ぢてゐたんだらうよ。

だから家からは一錢だつて仕送はせず、僕同樣自力で世渡をせなければならんのだ。

そこで二人して陋室一間を借りたが、さア其室だて、那方這方から隙間漏る風は吹き次第、壁は雨漏の痕に汚されて、加之に殆ど眞暗だ。間代はたしか二人で一ケ月七留ばかりだつたから、恐ろしい御安直さね。だが其でゐて始終滯勝だつたから、隨つてお神さんとも際限なく談判のやりづめで、或は嵩に懸つて威嚇してみたり、或は下手に賺してみたりさ。そのまたお神さんといふのが僕等に劣らぬ貧乏だつたから、這麽借人とは縁を切りたがる、蓋し無理は無い所さね。

何を喰つてゐたと云はれると、一寸答が出來かねる、世間並の家に住つて二度の食事に事を闕かぬ今、當時の事を思ひ出してみると、時とすると全く神代の作話で、夢で、想像の結晶のやうに想はれる事もあるがね、怎麽でせう、血氣壯の、勿論食慾では牛馬をも欺く青年二人が、全一週間を一個五哥宛の、サルデリカといふと御大層だが、何を詰めたとも本體の知れぬ、知れては大變だから胡椒をゴテとふりかけて紛らかした腸詰四個と、胃腑の恰好を歪めまいばかりに注込まうと云ふ茶にして茶の氣の無い茶幾斤に滿足して命を繫いでゐようとは、なんとうその樣な話ではあるまいか。

けれども實際那麽で幾月をか送つて、其間曾て失望しなかつた。五哥の腸詰を永持のするやうに幾個にも割るところに先見の明を示せて、その一塊を喰つて、今に見ろ脂ぎつた汁の滴るビフテーキを喰つて見せるぞと自ら慰め襤褸を敷いた板に臥て、隙間の風に吹曝され、天井から落ちる雨漏にしとど濡れながら、今温い室で柔な寢臺に寢られると、チャンとそれに極めてゐたのであつたが、成程それもこれも望通りになつた。いや實際どんな馬鹿氣た望でも、中途で敗れて挫折れて斃れて了ひさへし

なければ、達せられんと云ふ事はない、僕もフェーチャも望を達した、しかし多くの人は餘り虚弱で纖弱くて戰闘の苦に耐へなかつたから、斃れて了つた……考へて見ると、氣の毒なものさ。

服裝の事を未だ言はなかつたが、最初市に出て來た時の服裝は、着故した中學校の制服に同じ雨曝しの外套で、それを着て大學へ出頭して、願書を差出して、彌生徒籍に編入せられて見ると、こアもう這麼物は着てゐられんわい。新しい學友等を見ると、種々雜多の服を着て居る。彼時代は大學生に制服と云ふものが無かつたから、皆思ひ〳〵の服裝をしてゐたものだ。裁縫に念の入つた短い天鵞絨の背廣に、ハツとした鼠の太いズボン、雪白のカラーに何かは知らず燦爛したネクタイ、細いステッキを手にして、綺麗な釜形帽を、時とするとシリンダーなぞを冠つたハイカラ式も有れば、垢染みたフロックに短い窮屈なズボン、或は無地の或は縞の蠟引かずといふホワイトに恰好の壞れた破長靴の窮措大もある。或はフロックも着ず、[illegible]衣の上へいきなり外套を投掛つた者もあれば、或は紅襯衣をだらりと垂して其上へ革帶を締めた若衆扮裝の者もあるし、或は勞働者の着る上衣を着たのもあれば、甚しいのになると、百姓の袖無外套を着たのさへあつたが、此紛雜無統一がまた自然のやうに思はれたものさ。

しかし僕がフェーヂャと白鈕釦の淺黄服を着てやつて來て見ると、宛然餘所の世界が僕等の身に添つて此連中に割込んだやうで、白鈕釦に淺黄服が兎角目立つ。それも其筈かい、諳誦やら、意固地やら、偏頗やら、物識振やら、禁足やら、落第點やら、一日八時間押通し腰掛に兀坐とした、辛い〳〵八年間のこれが厭な記念だからな。誰しもそれが辛さに、自由の空氣の滿ち亙つた學問の此本家本元へ逃込んで來たのだからな。

宛然人垣の前を通るやうに心怯れて、宿へ歸るや否や、散々白鈕釦を毒づいて、それでも足らず癇癪紛れにペンナイフですんくり〳〵。遣りはやつたが、しかしそれで服裝の始末は附かん。掛替と云つては他に一枚も無し、と云つて新調も出來ん始末。ところが、フェーヂャは頓智が有るよ。彼の頓智で僕は幾度浮び上つたか知れん。

「縫ひ直さなきやならん。」と彼が決然として云ふのさ。

僕は反抗したね。

「縫ひ直すッて？　縫直させりや代を拂はなきやならんぢやないか？」

「代を拂ふ？　馬鹿云へ！　代なんぞ拂つて堪るもんか！　僕等の手で縫直すのさ。」

「だッて僕は未だ針を手に持つたことがない……。」

「持つた事が無きや、持つて見るさ。僕だッて今迄裁縫屋の職人をした事は無いさ。」

「すると、怎麼して縫ふの？」

「フォンウォンシンの書いた裁縫師は如何だ？　原始時代の裁縫師を引合に出して自ら辯護したぢや無いか？　だから僕等も原始時代の裁縫師の縫つたやうに縫ふさ。露國文學史を諳誦したのは何の爲めだ？　此樣な時のためぢやないか？」

「だッてどうも君の云ふ事は分らん。」

「なに、分らん事があるもんか、まあ假に針と鋏が只今發明されたとして見給へ、好いかね、而して君が原始時代の裁縫師になつて、有り合せの布で、怎麼にかして身體に纏へるものを工夫するのだ。必然受合つて何か出來る。まア急く事はない。制服が少しでも滿足である中に、那地かの店で裁縫道具を買つて來よう、それが第一の急務だ。」

「一道具ッて。」
「指環貳個に針四本——これは折れた時の用心だ、それから絲に、釦鈕に、紐。」
「何故紐が要る。」
「まア何んでも好い、今に分る。とア躊躇しちやゐられん、明日は日曜だから、一日がかりで縫ふとして、月曜日には祈禱會に第一回の講義だ、出ない譯にやいかん。」

打連れて、或店へ往つて、フェーヂャが入用と云ふ品々を殘らず買揃へた。釦鈕は大きな松脂の樣に黑いのを撰んだが、中學のは白釦鈕だから、故と其反對に出たので、飾紐も太い矢張黑いのを好んで、約十二碼も買つたから、勘定は合計一留許りとなつた、其時の財政では、大支出さね。

「さア是れから腸詰を明日の分だけ買ふんだ、何故といつてみ給へ、明日は衣服を全然解いてしまふだらう、ね、そら、外へ出れらない——」で、腸詰も買つて宿へ歸つて來た、彌々仕事の始りだ。

話は要點に止めて置くが、先づ以てお神さんに鋏を借りて來て、未練氣なく中學校の制服を引解いてヘツたくさ身體に合し〲、形の一新に肝膽を碎いた。フェーヂャは未だ中學に居た頃から圖に妙を得て居たから、鉛筆で背廣の標本を書いて、それを模して作るのだが、要するに問題は背廣が出來ればそれで可いので、フロックになつては大變だ。淺黃のフロックと來ては、何程釦鈕を附易へたところで、やツぱり何處か制服臭いからな。

切る裁つ縫ふで其晩夜更しをして、翌る日曜も半ば潰して漸く背廣の出來上つた所を見ると、歷史あつて以來未だ曾て類の無い珍たる背廣には相違ないが、しかし之を被た以上は、第一裸體だとは言はさぬ。第二も中學生徒ではない。たゞ一風變つた服裝になるばかりだ。それから物の二時間も掛つて、中學式の外套を竝のに縫直したが、まづ白釦鈕を黑釦鈕に附易へる、これは何んでもないが、例の飾紐はグサール隊の軍服めかして胸の兩方へ縫ひ付ける、これで成程とフェーヂャの眞意も悟れたが、そりや馬鹿氣て居ると云へば居もしよう、かうした所へ飾紐を縫付ける筈のものではないやうなものの、しかし是が這裡に在るばかりで我々の外套は中學生のそれと怎麼看ても思へんやうになつた。

で、月曜には祈禱會へ出て、それから講堂へも行つたが、驚くべきは、誰れ一人僕等の服裝を見て目を側てる者がない、此處へは何を被て來ても構はんので、非凡な到底も想像が屆かぬ服裝をして來る者が多いから、僕等の珍柄も其中に紛れて餘り目立たない。

といふもので四ケ月ばかりの間は萎靡れた生活をやつたが、其困難は一通りでなかつた。報酬は高の知れた筆耕といふのに時々撞着かる。それで辛く命を繋いでゐたのだから、そりや隨分寒い飢餓じい想もしたが、兎も角活きてはをつた。

ところが四ケ月程經つと、ふと或人に出逢つたのが緣となつて、妙な生活をやつたよ。

(二) 薪を強請る法

その新生涯の曙光を閃と見せたのは、自然の情人を以て自ら居る長軀のキルヂャーガといふ男であつた。小亞細亞の人とは問はでも著く、苗字なら言葉なら、それ全露で、儼然した重々しい底力のある爺であつたが、それよりも爭はれぬは外貌だ。年齡は僕等より二つも兄たつたらうが、眼鼻といひ、耳といひ、脣までが註文に依つて件の如くと云ひさうな鹽梅。鼻下に濃い黑い髭がコサック風に垂れて、頰鬚は顏一杯に蔓り、殆ど目の下まで及んで

着る。上衣は小露西亜風の網の目に刺したやつ、圖抜けて太いズボンを圖抜けて長い長靴の中へ押込んで、笹太節だらけのステッキを引摺り、剥げちよろけた羊の毛皮帽の鼠色になつたのを夏冬なしに亂髪蓬頭に冠つて居ようと云ふ男。

初めて知己になつた時のキルヂャーガは先づ這麼云つた風の男であつた。其前にも見知越ではあつたが、親しく言葉を交さなかつた。向うは理科だし、此方は博言科であつたから、講堂が違ふ。

ところが然うした約束と見えて、何やらの話が緣でツイ知己になつて了つた。

キルヂャーガは極く率直な質で、馴染の薄い者にまで誰彼なしに貴樣呼はりをする。またそれに反きなければ承知せん。それで我々も逢ふからもう「貴樣」さ

段々親しくなつて見ると、殆ど僕等に輪をかけた貧乏人だ。僕等が腸詰生活をやつて居ると聞いて、一週間に幾干食ふと云ふから、二人で八十哥かゝると云ふと、

「贅澤な! 八十哥かゝる――ほ、ほ、贅澤極まッちよる!」

「だッて其だけは怎麼しても掛るもの。」

とフェーヂャが云ふと、

「なに那樣事有ッもんか。安う上げよう思うたら。安う上げる方法が有ッと、チャンと有ッと。貴樣共無暗な店で無暗に高く買うて喰ッからだ(何故だか「喰る」とばかり云ふ。)尋常の店賣なら二本十哥ぢやらう、市で買うて見い、同じ物を六哥で買うて來らるゝぢや。」

是は至極有益な事を聞込んだといふものは、お蔭で僕等の果敢ない豫算額を殆ど半減することが出來た。之を發端としてキルヂャーガを友人にしたお蔭で大に僕等の社會眼を開き得た事が他にもまだある。程なく僕等の宿へ遊びに來て、住居風を看たが、一ヶ月七留の間代を拂ふと聞くと、些とも遅疑せず僕等を罵つて大痴漢と云うた。

「這樣腐つた室に七留出すちふ事があッか。廓外へ往つて見い、教會の歌者の寡婦がしれよか倍も廣か間を一留半で貸すぞ。」

「だッて廓外ぢや遠いもの。」

「那地まで一里餘あるだらう。然うすりや、毎日往復二里半歩かなきやならん。」

「二里半歩くが怎麼か? 足は何の爲めに持ッちよる? 道を歩く爲めぢやなッか? おゝ、こいか、二本十哥の腸詰ちふは――」

と不用意窓へ載せておいた腸詰を目付け出して、一つ摘んで[illegible]と口へ持つて行つた。齒は太く鋭し、口は鰐口であつたから、無殘や五哥の腸詰を一頬張に頬張られて了つた。むしや〳〵と音を立てゝ、さも滿足らしく平げながら、

「好か腸詰ぢや、實際よか! 六哥ぢやとよか、胡椒が少か。好か味ぢや!」

這麼御世辭を云つて置いて、今一つ窓の上に悄然として欲しげに上つてゐるのを復た摘んだ。前のに同じく片付けてしまつた。晩飯の宛がキルヂャーガの太廣い口へ入つて行くのを眺めて、僕等は情味索然とした詰らない顏をして居たが、でも押默つてゐた。先は兎も角も客だ。

「好か味ぢやつた。非常に好か味の腸詰ぢや。」と又賞めて、「ぢやが、何か飲むもんは無ッか? なあ、何かから飲む物が有ッと好かけどなア……」

「茶を入れようか?」

と云ふと、

「茶? 貴樣ども茶飲んぢよるんか? 地面持の好か樂は違うたもんぢや、きつかもんぢや! 茶――好かッ。茶あ好かもんぢや。茶を入れ

え！」

　フェーヂャが茶を入れる、キルチャーガはそれをば腹の滿くなるまで飮んで、甘いと云つて激賞口を絶たず、甚しく滿足して居るらしかつた。

　其後三日程經つて復た遊びに來たが、其時は一人でなく、まだ生若い學生を一人引張つて來た。甚く痩細つて蒼い顏をして居る人であつたが、その服裝の變なしさは言語に斷えたもので、それから視れば僕等のは上の部類だ。何形とも一寸は知れぬ短い背廣、と云ふよりは寧ろ婦人のジャケツめくもので、下に何か綿織を胴衣、襯衣なんど云ふものは、着て居ない。上被は綿は勿論、裏さへ附いてゐない、薄ツぺらな、羽の生えた化物じみた外套で、之を着て町を行く所は、宛然鶴の飛び行くやう、尋常の鼻ハンケチを頸に卷いて、低聲で物を云つては一寸咳をする癖がある。

　此人を見てさう思つた、からしてみると我々より更と甚いのもある、それを僕等は何だ不足らしく思つて……。

　キルチャーガの紹介は簡單なもので、

「こいはおいが友人ぢや。數學者ぢやがなう、數學者なんぞ撰ぶちふが分らんぢやなツか？　おいは化學をやツちよるけれど、化學なら運が惡うても化學工場を開くことが出來るちふもんぢやが、數學で何が出來る？　ぢやがなう、苗字だけは立派ど、ヤーゲレノフちふんぢや、大方誰ぞリトヮ王の後胤どんぢやらうが、其代い食ふに困ツちよる……。」

　此紹介には紹介せられた當の人も痛く面を食つて入る穴にも戸惑ひさうな形であつたが、兎も角も僕等は此苗字だけ立派な人と知己になつた。キルチャーガが又しても遠慮のない事を云ふ。

「今日な、途中で逢うたら、蒼い顏しちよる。怎麼したかちふと、怎麼もせんちうて逡巡しよる。ははあ、こやつ二日も何も喰ツずに居ツとぢやな思うたから、おいが這麼説うたのぢや、貴樣に何か振舞うてかいたけど、おいは今一文も無か。彼奴共の所へ、ちふな貴樣共の事ど——行てみよう。いつて好か腸詰が有ツとぢやから、ちうたが……有ツか、腸詰は？」

　と云はれて彌と當惑したのは、生憎腸詰が無い。けれども錢は少々ばかり有つたから、

「買つて來よう……僕が行く。」

　とフェーヂャが名にし負ふ例の外套を引掛けようとするのを見て、ヤーゲレノフは痛く恐縮して、泣き出しさうな聲で、

「いや、何……何卒お構ひ下さるな。此男の云ふ事は皆虚で……。」

「こら、ヤーゲレノフ、遠慮すツ事はなか。此二人の奴共は好か男ど、學友としてそりや好か漢ど……貴樣實際腹がぺこ〳〵しちよる癖に、おいが虚云ふとは何いふか！　行け〳〵、フェーヂャ、行て買うて來てやれ……序ぢや、おいが分も買うて來て貰はうか……。」

　實際空腹なのをヤーゲレノフは極り惡がつて、それとも餘計な痩我慢でか、然うでない事にしてゐるのは見え透いてゐるから、フェーヂャは腸詰を買ひに走る、僕は茶の用意にかかつた。

　茲に哀を留めたのはヤーゲレノフで、巣から落ちた雀の子の樣な顏をしてゐる。一體此人は顏に何處やら纖柔しい女らしい所が有つて、おそろしく氣扱をして一寸の間も油斷せず、キルチャーガに、毒は無いが、無遠慮をつけ〳〵と云はれる度に額を顰めるのだ。

　フェーヂャが腸詰四本持つて歸つて來ると、キルチャーガは其中二本をヤーゲレノフに分けてやり、殘る二本を自分のに取つてむしや〳〵と喰り出す。ヤーゲレノフはまづ遠慮したもの

だ。何とか手出しゃ好いやうに主人側から機會を與へべきだが、僕は茶に憂身をやつして居たので、フェーヂャ其役を引受けて、

「君、何も、何の趣味もなく……、今度又僕等が押し懸けた時は、御馳走になりますぜ。學生間はお互の事だから好いぢやありませんか……。」

此時漸つ目の前に取掛つたキルヂャーガが大きな聲で、

「そやで好か漢ぢやとおいが云うたのぢや。漢も好かぢやが、鵞鳥も實に好か、非常に好か鵞鳥ぢや！ ヤーゲレノフ、喰らんか、貴樣喰らんと、おいが喰ッど。」

成程他人の口なら容赦はなさゝうだし、それに甚だ空腹であつたから、此度噂がきいたのか、それとも單に打解けて來たのか、何方かは知らずヤーゲレノフも喰出したが、それが又嗜深く、愼重の態度で、餘り大きくは口を開かず、勿論ぴしや〳〵の音を嫌つて、人柄好くやつてゐる所にキルヂャーガと正反對。

で、喰ふに從つて、眼中には活氣を生じ、蒼褪めた頰には紅を潮し、應對も稍活潑になつても遠慮はせず、聲さへが故障でなくなつて來た。

到頭本音を吹いて、

「實は僕は非常に空腹だつたです。しかし初めに伺つて御馳走になるも變ですからなあ……」

「ぢやが、學友の所へ來たんぢやど。そいを忘るゝな」

とキルヂャーガが注意する。

それからヤーゲレノフの口も解けて、樂々話合つてみれば、中々に、面白い、談話だ。でもキルヂャーガの無遠慮には出る鼻をはじかれに折々顏を顰めるのであつた。

「いや御馳走樣がへてみても、好か鵞鳥ぢや。」とキルヂャーガはとも滿足氣に腹をなでて、

「ぢやが、此室は非常に寒いなう！ こいが缺點ぢや、暖爐を焚いて暖まつてはどうぢや？」

僕等の答は哀であつた。

「薪が無い。もう一昨日から焚いてくれんのだ。」

「そら怪しからん。何故焚いて吳れんのか？ 神さん失敬な奴ぢや！」

「だがね、それには……理由が有るのさ。」

「理由が有る理由は無か。神さんッ處に薪があッなら、焚かんちふ理由は無か。薪ちふものは焚くために有ツのぢや。」

「だが、今月はその……間代を拂はなかつた……。」

「そいだけの理由？ そゝ、其位のこと、おいが處に錢が有ッたら、貴樣共に、くれてやッのぢやがなう。神さん那地に居ッとか？」

「自分の室に居る。しかし駄目だよ、もう僕等がさんざ頼んで見たのだが、駄目なんだ。」

「試うだ？ そいなら貴樣共に試お構ひ無しのぢや。おいが試うてやる。部屋は何處か？」

と起上つて室外へ出た。多分ツイ其處で偶さんに逢着したのであらう、もう聲が聞える。

「お神さん、今日は好か天氣ごわんすな。薪は何處にありますか？」

「薪ですッて！ 薪はそりゃ臺所に在りもしませうが、何つたら怎麼なんです！ 何つても無くッても好いぢやありませんか？」

「臺所は那裏ですか？ や、こいが臺所か！ こりや妙ぢや！……」

と、突然臺所へ入つたらしい。話聲が物にこもつて聞える。

「何をするンです？ お前さんは、まア、何んだと云つて那樣處へ！……」

とお神さんの聲が甲高く申込む。

「あの部屋は非常に寒かごわんすから、そいで煖爐焚から思うてな。」

とキルヂャーガの平氣で澄ました聲がして、

薪をぐわら／＼と卸す音。

「いけません／＼！　いけませんと云へば！　まあ、どうも、いけづう／＼しい！　お前さんは盗賊だね、盗賊に來たんだね？」

「實際寒かごわんすよ。薪が有ッとなら、焚かんちふ法は有いません。那裏は寒かごわんすよ、そりや實際寒かごわんすよ。」

と既う足音がして廚房から戻つて來るらしい。

「こら、戸を開けんか！　さうぢや／＼！　誰か煙口を開けい。フェーヂャ、早うせんか！　時は金ど。」

と指圖する其人は薪一抱か〻へてゐるのだ。ぐわら／＼と薪を拋り出す。フェーヂャは煖爐の焚口を開けに煙突を昇つて滿身煤塗になつて降りて來た時には、キルヂャーガは既う煖爐の前に蹲踞つて手ばしこく薪を投べて居たが、煖爐が大きな口を開けて薪を呑む事は、十分前にキルヂャーガの口が腸詰を貪食つたに異ならん。

お神さんは廊下で險惡しい聲を立てて喚き散らしてゐる。

「まあ、呆れッちまふぢやないか！　宛然白晝盗賊だ、强盗が押込んで來て薪を偸んで行つたんだ・巡査を呼んで來るよ、警察へ訴へるよ。惡い事をした報いだ、監獄へ入れてやるから、然う思つてるが好い。此大盗賊め！」

「紙を寄與せ、どしこと寄與せ」――マッチもぢや。」

とキルヂャーガが云ふから、古新聞を渡すと、其を丸めて丁と煖爐の薪の下へ押し込む。火が燃出す、薪が爆る、室内忽ち照々として春を生じた。

お神さんは未だ怒罵して止まぬ。

「好いとも／＼、監獄へ入れてやるから、然う思つてるが好い！　人をつけ、馬鹿にするにも程があらあ！　間代も呉れないで薪を焚く、そんなに薪が焚きたきや、まづ間代から拂ふが好い。」

キルヂャーガは起上つて、直と行つて戸を開けて、穩かに、人懷こらしく、

「お神さん、何を那麼心配のしてをらるゝですか？　薪は既う燃付きもしたよ、既う心配せいでも好かごわんすよ。」

「人を馬鹿にしてゐるよ。此人は！　ほんとに那麼まで、づう／＼しいんだらう。這麼人は犬にでも喰はれて死んで了ふが好いんだ。ほんとに。」

とカッと唾を吐いて部屋へ歸つてからも、いつまでもまだ沸々云つて居たが、終にはそれも草臥れてか、寂然となつて了つた。

煖爐からは熾な温氣がむん／＼と煽る。僕等は皆側近く膝行寄つて、その温氣を飽かず必死と身に受ける所は、宛も之を受溜めて冬一杯持續せようとでも思つたかのやう！

「薪を貰ふには、這麼して頼まんば不好。這麼して頼うだら、いつでも拒絶せらるゝ事が無か。そりや請合うて無か。」

これがキルヂャーガの結論であつた。

（三）　共産團の發起に會計主任の選擧

大學中でまたと無い不運な者は僕とフェーヂャであらう。どちらもどうも思はしく行かん。他の者はツイ一寸造作なく助教授の口にあり附くけれど、僕等は多少望がある時でも、必ず誰かに橫合から奪はれて了ふ。其時分は僕等もお坊さんさね、人間が世に處し身を立つるには自ら其道がある、それを一向知らずに居たのだ。

ヤーゲレノフに至つては僕等よりも更に慘澹たるものであつた。どうも變な頭腦さね。天成

の數學家で、父は、數學に凝つて居たがそれ以外の事は更に心が向かん。數學の問題ならどんな難問題に出遭つても、直ぐに巧に其文を解して行つて、自得せること主人の家に在るが如しだが、其代り浮世の事になると、高の知れた困難に出遭つても、礑と當惑する。一例を擧げれば、曾てさる豪家に割の好い出教授の口があつたので、のこ〳〵出懸けて行つて、鈴を引いて、玄關へ上つた、までは好かつたが、例の乞食の樣な服裝をして居る一件から、玄關番がにが〳〵しさうにじろ〳〵視廻した、それで先生閉口頓首して、逃出して歸つて來た。や、キルチャーガの罵るまいことか、危く鐵拳を揮はうとまでして見たが、しかし怒つたとて罵つたとて詮ない事で、彼は到頭掙口に有附かず仕舞さ。

　キルチャーガ其人も、廓外の貸間では大に通がつて居たけれど、怪しむべき事には、彼が學友の處を泊りあるく噂を毎日のやうに聞く、恐らくは其手段で口をも糊うてゐたのであらう。僕等の腸詰をも其後二度ばかり襲つて來て最後にかういふのさ。

「此處の腸詰は好かことは好かけど、おいが來て喰ッちふは實際氣の毒ぢや、おいがきて喰らんちやこて、貴樣どんは、窮しちよるこちやもんな。好か、もうおいは喰いに來ん。」

　不思議な男もあればあるもの、粗暴な樣で思遣が深い、厚顏しいやうで義氣がある、しから其時僕等は思つたのだが、それは兎に角此人何時も勝軍の將軍で、少しも萎れてゐたことがない。毎日何かしら望を懷いて、心にそれを撫して樂しんで居る。

　一日僕等の宿で例の四人が鼻を突き合せることがあつた。お神さんはキルチャーガの姿を暫と見るより、其日の惡寒いにツイ氣が付いて、有程の薪を一本殘さず隱して了つたから、皆の萎れかたといつては無かつた。前途に少しの光明も見えず、來年初からは奨學給費に有付ける望はあつても、それには未だ間遠であるし、如何にか此冬を糊塗つて、まだ肝腎な事は、試驗の準備をしなければならん。ところが、寒くはあるし、食物は足りず、大に元氣が沮喪して了ふ。

　キルチャーガは室内を大股に行きつ戻りつ何か思案の體であつたが、やがて礑り立駐まつて、聖靈の憑依つたやうな顏をして、仰山らしく、

「おい、こら、おいは非常な事を思ひ付いたど！」

　どうせ碌な事では有るまいと思つたが、まあ云はせてみると、

「非常な奇想ぢや、我等は今[illegible]待機廻りよる、え、か？ 銘々おもひ〳〵に生存苦闘をやッちよるが、しかし考へて見い、這麼した愚な話はなかど。譬へば、大敵に向うた將軍が兵力を集中すッことを忘れて、反つて非常に間を置いて兵を一人々々竝べたやうなもんぢや。また何ぢややら云ふ事があるらうが、おいは雄辯家ぢや無かけん、云へん。併し這麼愚な事は有ッか。斷じて愚ぢや、愚ぢや、愚ぢや！ そいよッか我等が一致して苦闘したらどうか？」

「一致してとは如何？」

「這樣してぢや。まづ我等は四人じや。銘々が二錢ない三錢ない錢を藏くる。好か？ おいが今日錢を取らんおやッたら、貴樣か此奴かが取る、しかし明日は貴樣は一錢も取らんも知れん、其代いおいが取る。好か、那麼して銘々が取つた錢を集めて其奴を共同財産とすッのぢや。」

「成！……そりや、まあ、隨分好からう、けれども實行が難かしいな。」

「なんの、容易に出來る。おいに任せちよけ。

まづ貸間は廓外の寡婦かなにを借る——こいはおいが引受けて談判すッとせう。彼部屋には窓が三つ有ッつらう。道具は何も無かけど、道具なんぞなにも要りやせん。箱々が板を拾つて自身寝臺をこしらふのぢや、而して藁を貰うて蒲團を作れば、たいで天國ぢや。貴様共は這樣廣の如ある部屋に七留出しをツけども、おいは四人が住まふ部屋を五留で借ッて見する。な？ 節儉ぢやらう？ そいもそぢやが、おいは考へると氣色が惡うなる、我等が今喰いをる飯は、あいは何ぢや？ 那樣物喰いをつたら、近き未來に於て胃の腑が腫るゝど、寡婦がとこには臺所煖爐が有ッぢやから、何か煮いて喫ッ事が出來る。そいぢやからして飯の菜な、こやつに順番に煮くのぢや——今日はおい、明日は貴様、明後日は此奴と、順番にすッのぢや。而して我々は皆博愛平等主義を奉じて、皆同しやうに奔走して職業を求むる。若し誰ぞ職業を得たらば、その所得をばすべて共有資本金の中へ入るゝのぢや。譬へばフェーヂャ、貴様が數學の出教授の口を見付けたとせえ、ところが貴様は數學は出來んからして、其口をヤーゲレノフに讓るのぢや、又ヤーゲレノフが譬へば希臘語の口を見付けたとせえ、が、ヤーゲレノフは數學家ぢやから、そこで其口を貴様共の中誰ぞに讓るのぢや。そいからおいぢやて……おいは未だ中學に居つた頃から文學通ぢやつたと思へ。イゴリ王軍族の歌なんどは起句から終句迄諳誦したよつたものぢや。能く友人がなう、夜戲においを起して、こら、キルヂャーガ、四枚目の千二行目をやれちふのぢやな。すッと、おいがヤロスラーウナの泣く所から始むるのぢや。『おゝ風。汝は何しに然は烈しう吹くぞ。何しに御軍に向うて、ハノワの矢を射懸くッど。』ちうて結局までやッのぢや。ぢやから若し文學の口ぢやつたら、おいが引受くる。えゝか？ 這麼して我等が組織すッものは共産團ぢや。總て共有で異議を云はさぬ。共同の勞働、共有の財産皆が同等の權利で——要すッに共産團ぢや。どうぢや、解つたか？——

解らんでどうするもんか！ 面白い！ 面白いぞ！ 第一、無慈悲な運命が人苦めの取置、それに抵抗しての四人結託は頗る妙。僕の力及ばぬ事、乃至手の屆かぬ事は、他人が引受けて手に入れる。第二には、差當つての節儉、間代で剰し得るとすれば、それをそツくり食物に向けて、その改良が圖られる。第三には、久しく掛け違つてお目に懸らぬ出來たての菜、それが味へると思つたばかりでも、それこそ神蕩き魂迷うて醉心地になる。第四には寒さを凌ぐ法もつかうし、第五には何しろ我々は共産團を組織するのである。其時分共産團と聞くと、何かなしに、只もう破天荒の快華美事と思はれた。あゝ財産の共有、勞働の共同、同等の權利、相互救濟、相互保險——這樣言葉は其頃萬人を魅する力があつたものだ。ところが、彌、其共産團が出來る、而も我々の手で組織するのだ。フェーヂャも僕も未だ二十歳未滿だし、ヤーゲレノフも同庚の青年、此不思議の魔力を有する一語を聞くと皆眼の色を違へた。

で皆大賛成、皆きほひたつてキルヂャーガの提議を歡迎して、未來の共産團組織の事は之は提議者に任したから、彼はいよ／＼實行に着手した。

先づ以て基本金を作らなければならんが、これを作るに左程困難を感じなかつたのは、その時僕等二人の懷に約十留あつたから、此内三留を食料に取除けて、殘額をキルヂャーガに渡す。ヤーゲレノフも四留ばかり持つてゐた。

是は此頃お袋から毎月の仕送の七留を受取つた其殘りであるのだが、此うちから三留

を出す。
—おいもポッケットを探したら、些とは有るぢやらう。」とキルヂャーガも云ふ。
で、現金で集つたのが十留、それにキルヂャーガがポッケットを叩けば、それが不足目を補はうと云ふもの。
「通算して見ッと、おいが共産團の會計主任になつたのぢやな。好か……勿論おいは非常に精確な決算報告を出すど。」とキルヂャーガが云ふ。我々も此男の會計主任たることを承諾する。是で共産團の第一歩を成し了つた。
それから後場所の極るまでの我々の役目と云つては、唯辛抱して待つばかりのこと。宿のお神さんに引拂を宣告したら、僕等は極々拂の惡い借人でありながら、お神さんは呻吟し、長歎し、之に繼ぐに涕泣を以てしたくらゐ。では此陋室の新しい借人を求めても、それは無理だからだ。
毎日學校でキルヂャーガに逢ふ。片隅に落合つて其報告を聽く。
—辛と寡婦どんを口説き落いた。非常に骨を折らしをつたど。六留半寄與せちふのぢや。何故ちふと、ごはん達四人ぢやで、空氣の汚るゝことは却々三留が分だけおや無かちふのぢや。
そいからおいが、おいは既うお十留しちよらう、善か年ぢや、娯樂物に熱狂ッちよけ、好加減に後生どん願ふもんぢや。そいに汝は借人とは違ふぢやで、善か事の範を示せんばならん、などと種々云うたら、そしたら、老婆め、到頭我を折りをつた、四留半に輸けて。そいに卓一脚に椅子二個だけ据ゑ付ける事を承諾さして來たのぢや。たゞ煖爐は藁を自身に焚いてくれちゆのぢや、暇が無かちうこたな、老婆め御供物やきをしちよるで、御供の饅頭を燒かんばならんのぢや。ぢやがなう、部屋は廣うて好か部屋ど。天井が些と低かけんな、おいは首を縮めて歩かんばならんけど、貴樣共は皆小人島の住人ぢやで、丁度好かちふもんぢや。」
他田父又新しい報告を齎らした。
—昨日な。大工を看付け出いて、寢臺を誂へちよいた。非常に立派な寢臺が出來ッど。教會書記から古か鳥小舍を四十哥で買うたで、こいで寢臺が三個出來る、今一個は老婆のとぢや、死んだ老爺が用ひとッとぢやさうなが、こいは相識の徴においに貸して吳るゝ筈ぢや。大工には寢臺一個に付いて二十五哥宛手間代を吳れてやる筈ぢや。其代いそりや非常に立派な寢臺が出來ッど。」
待ちに待つた吉報に漸く接した。共産團に入るる貸間の用意全く終つて、もう引移つても差支ないと云ふ。
一月下旬で寒さは骨に徹するばかり、從來の貸間は何故かは知らず例ならぬ寒さを覺えたから、之を捨つる喜びは物に喩へやうもない位。學校から戻るや否や、所帶道具一切を掻き集めたところで、高が小包一個に過ぎなかつたが、兎も角も辻馬車を雇つて來てそれをば運び出した。

（四）共産團創立の當日附り 團員の悶絶

ところが初めて新貸間に見參した時の其感じの不思議さは、比較を取らうにも物のない始末。なんぼ窮迫して居つた僕等でも、人の住まふ所なら、それ相應の家具は在る事とばかり思つて居た。よしそれは使古の粗末な物で、椅子が壞れて居らうと、箪笥は鼠不入の類は缺であらうと、寢臺は年數物の片輪であらうと、ソファのバネが暴露で、之に腰を掛ける大膽漢があれば、其尻へ强か喰付く品物であらうと、兎も角も物各其處に安置されてなければならぬ。實際用に足りんでも差支はない、たゞ見る眼を

欺しておくだけでよろしい。

然るに其狭隘な間には此樣な物一つもない。殆ど正方形の間で、天井が極めて低く、それへ縦の稜々しく出張つたところは、髣髴として大なる儀骨の肋骨を見るやう。小窓が三つ、苔の吹いたやうに色變りした窓ガラスの濕つて露の滴るところは、宛然に泣いてゐるやうで。窓外の小汚い空地には犢、豚、鵞鳥、其外種々の家禽が放飼の氣儘に彷徨いてゐる、家主は貧乏で這樣物を飼ふどころではない、これは此教會の牧師・同の共有であるのだ。部屋の内は暗濇く、何の壁際にも例の鳥小舍の引剝、雨風に曝れた古板を打付合せた妙な物が一つづつ有つたが、能々看れば其中一個は成程寢臺で、これには蹂躙つたやうな古蒲團を一枚敷いてあつた。で、一方を顧ると、窓の下に卓の化物が据ゑてあつた。これは家主の婆さんが年來御供物の饅頭を製するに使ひ故して今は如何な事にもう使へぬと其職を免じたもので、其側に同じやうな沽券の附いた腰掛が二個と、かういふ部屋であるのだが、之に對すると、何の事はない創世の混沌なる光景をまのあたりに見る心持がするのだ。

「そら、こいが新宅ぢや。質素ぢやアあるが、好か住居ぢやらう。」

とキルデャーガが云ふ。

「けれども、何にもないぢやないか。」とフェーヂャが少々ばかり反抗してみる。

「何も無か事は無か。第一、四方に壁があつて、天井もある、床もある。雨露を凌ぐ所以のものは盡く備ッちよる。第二、煖爐が有ッぢやから、愉快に煖を取ッことが出來る。第三、寢臺が四つ……。」

「寢臺といふけれど、這樣な裸板の上へ臥られると思ふか、君？」

「まあ、一寸來い。」

とキルデャーガは卒然にフェーヂャの臂をとつて、窓側へ伴れて行つて、

「這裏に生物のえッと繁殖しちよる空地が有ッど。え丶か？ この空地の端の處を看い、藁束の積んだとが有ッぢやらう。あの藁な書記どんの有ぢやが、貴樣一體書記どんは何ぢやと思ふ？ 辱なくも基督の御弟子で尊むべき人ど。賴うだら、藁の三把四把吳れぬちふ道理はなか。おお、丁度好か所へ……一寸待て……。」

といふは此時空地に坊さんの姿が見えたのだ、でツぷり肥つた人で、煖燠さうな海狸の毛皮法衣に、昔貴族の冠つたやうな山高帽を冠つてゐる。キルヂャーガは入口の土間へ飛降りるより早く空地に駈出して、教會書記に縋つて藁を強請り出した。愛嬌者に違ひないことには、いつも旨く事を纏める。書記が納得したので、十分も經つと、教會の番人が藁を山ほど擔ぎ込んで來た。

「さあ、銘々に寢所を作りもはんか。」

とキルヂャーガが云ふ。で、我々も彼に手傳つて貰つて、藁を板の上に敷き、其上を上敷で蔽うて、兎角して寢所をしつらへた。

キルヂャーガは吹聽らしく、

「おいは作る必要は無か。死んだ歌者が此寢臺で二十五年も臥ちよッたちうて、老婆が貴物の如えらう大切にしちよるぢやさらぢやけど、ごはんの事なら、相識になつたもんぢやで、使うても大事なかちふのぢや。」

「那樣事より外套や襯衣や何かは何處へ置く積りだ？」

「那裏へ？ 詰らなか事に屈託したもんぢやな、針を貰うて來て、何もかも壁へかけとくのぢや。」

と家主の處へ駈付けて、大きな釘幾本かに鐵槌一本借りて來て、釘をば壁に打ち込む、その先へ襯衣やら、股引やら、蓐の上敷やら、有る

に甲斐なきトアレットの必需品すら、有る程の物を殘らずズラリと掛け並べたから、部屋が如何やら古着屋の出店めいて來た。固より飾り體裁の好い態でもないが、兎も角も必要品の中での必要品が壁にぶら下つたお蔭には、部屋も俄に人氣ついて、少しも世上の景色を望見したら、此處は人の住居でないと義理にも云へぬ譯となつた。

商議進んで取片付ける中に共產團の文庫が出來た。各々有るだけの書物を皆持ち出して一間に押込めたのが卽ちそれだ。此時皆の呆れた事がある、キルギャーガは書物と云つては一冊も持つて居ない、而も此人の持つて居ないのは書物ばかりではなく、何も持つて居ないので、財產は全然身に付いて居るのだ、

たゞ部屋は成程暖い、これだけは事實だ。家主の老婆さんが隣室で割烹煖爐を焚くと、此方の煖爐も自然と煖まる、ところが老婆さん區教會で用ひる饅頭をも澤山燒くので、一日殆ど火を絶さぬから、此方の部屋では全く煖爐を焚く必要がないくらゐだ。

何はさて寒さには懲々した揚句だから、部屋の暖なのは何よりの事、假令この貸間はちツとをかしなものであつたにも拘らず、兎も角も我々は根據を得たのであつた。

で、愈々共產主義の生活を始めたのだが、其詳しい話をする前に、今少し團員の閱歷を話さうかな。

フェーヂャ・アドケーウィチの素生は既に御存じの通りだが、たゞ彼の老父の動靜が一向分らん。多分は餘り人聽の好くない話であらう、談一度其事に及ぶと、フェーヂャが毎も固く口を閉ぢて了ふのも、仔細ある事らしい。しかし、であるからと云つて敢て彼の人柄の累とはならぬ。フェーヂャは依然たる好箇の青年で、今も昔も渝はない。

それは何でも無いが、茲に困つた事は、彼の老父は澤山の娘持と云ふ一件。老父の娘は卽ちフェーヂャの姉妹だから困る、これが大した荷だ、いやでも應でも養つて行かねばならん。氣の毒なはフェーヂャ、少年のときは何不足ない身の上であつたに引易へ、二十歳の今になつては、中學校の制服を我手に縫ひ直した背廣に、捻麵麭の化物が胸に取り付いたのかと思はれる黑い飾紐付の外套に、ズボンに、夜着に、枕に、下着一二枚の外には、我物とては何もなく、剩へ自活の道を講じて行かなければならんのだ。

今一人の共產團員ヤーゲレノフに至つては、其窮境に祟られる事、フェーヂャよりも更に甚しい。彼の父は地方では屈指の資產家で、其身は不斷モスクワ住居の華奢な生計を立てて、息子の教育にも手を措いたものであつた。然るに分に過ぎた奢に大分家產を凹ませたが、それしきに氣を腐らす親父ではない、何やら事業に關係つて、これで否でも一家全部財寶の中に埋もれて、第一倅の生先は安心になると、かう云ふ胸算用であつた。

ところがその大儲けに儲かる筈の事業が一朝瓦落々々と壞れて、胸算用がほんと外れて見ると、這麼な筈ではなかつたが、那方向いても總て借金だらけ、鐚一文の資力も殘らん。かうなると親父深くも考へず、妻と息子とは運次第に抛つて置いて、自分は匆々と鐵砲丸を額に喰つて了つた。

其時分ヤーゲレノフは中學の七年生であつたが、もうモスクワにも住ひ兼ねる。幸び何處だか天離る鄙だ、遠い〳〵田舍の町に、數にも入らんほんの小舍ながら、辛うじて住はれる家が一軒あつて、母親がそれへ引込んで、遺緖に精根を枯らしながらも、これだけはと苦勞した甲斐はあつて、彼は中學を卒業した。

で、ツイ此頃運命の打撃をヤツと凌いだばかりの、一本立にはから未だ／＼しい、痩せた、虚弱の身を以て此市へ出て來たのだが、母親が月々無理算段してくれる七留の外には、まづ行末かけて何んの收入の目的もない。

といふのがヤーゲレノフの身の上。

さて此次は共産團の發起人キルチャーガの身の上だが、これには僕も一寸胸が躍る。此男に對すると、何時も妙な心持になる、天分はなかなかあつくて、剛氣不屈、如何なる困難にも逡巡せん、いつも押強で勝利を得る。よしや間違つて居ようと、我に權利ありと固く信じて、猛然として奮進するものに遇へば、ツイ避けて通す氣になる。それが人情だ。キルチャーガは宗教家出身だ。もと彼に云はせると、些と違ふ。自稱には天神の後裔だと云つてゐる。簡短に彼自らの身上話を紹介しよう。

「おいは親共は知りをらん。そりや赤子の時顏を見たことは有ッたらうが、ぼやけた目で見たのぢや、見た中には入らんわ。親父は村の教會の雜役ぢやつたから、必然ひよろ長うて、猫背で、髯が疎らぢやつたらう、一濃か縮な雜役風情にや過ぎちよるもんな。而して頭窩に薄か毛を垂いて、教會では細か第二低音で歌を唱うて、經を讀うで、監督に逢ふちふと、懷へ上つて路傍へ飛退いて、一町も前から帽を脫つて、祭司長の前に出るちふと、舌が上顎に乾付いて物が言はれいで、非番の時には必然醉酬れたに違ひなか、さもなきや基督の御弟子とは謂はれぬ、で、要すッに、死んだ後迄も好人と謂はるる尊い人ぢやつたらう。おいは、まあ、那麼思うちよるのぢや。そいからおいの御袋ぢや。こいは此家の持主どんた全で違ふ。あの老婆は御供物燒もしちよる。歌者の寡婦どんな旣う時代後れぢやし、そいばかいか我所父にも後れちよるもんな。そして彼恰好は、ま、何ぢや、宛然燒けば饅頭にならうちふ捏粉の如ふツくり膨れちよるが、こいは何ぢや、その、天の成せる特質ぢや、おいがお袋はこいの反對で、國で一細腰ちふ野草が生えるが、其莖の如細うて、蒼か顏の、極めて蒼か顏の人ぢや。そいを爺父は醉酬ふちふとぼか／＼打つ、そぢやけど醉が醒めるちふと怡しがツて、「こちの嚊よ、おのしは、まあ、可愍さうに……」ちふ。おいが親共はぼやけた目で視覺えんから、想像で作ッちよいた親共は、まあ、這麼した人物ぢやと思へ。そいからおいの生立ぢや。おいの生立は怎麼かちふなら、行先々で手を易へ品を易へ打たれたちうたら、そいで盡きちよるぢや。頰桁と云はず、橫腹と云はず、捻るのぢや。身軀中處嫌はず蹴るのぢや、耳を引張るのぢや、頭髮を挘るのぢや、鼻を彈くのぢや、鼻ばかいか、彈き好か處は那處でも構はず彈くのぢや。誰が打ちよつたちふなら、そりやおいは知らん。親共が死んでから親類の奴がおいを引取つて世話をして吳れたのぢやから、其奴共に違ひ無かと思うちよるのぢやがな。

——そいからが修學時代ぢや。「青春は樂しみ多しと雖も、一たび逝いて回すに由なし、誰かよく顧戀せざらん、惆悵として自ら哀しむ、」と、だしぬけに情を籠めて朗吟し終つて、哈々と笑つて、「この詩を作つた奴が若しおいが樣な境遇を渡つたならばぢや、『青春は苦しみ多きが故に、一度逝んだら回さんで好か。』ちふぢやらうと思ふのぢや。宗教中學の寄宿舍に抛り込まれて、給費生になされて、腐つた魚に新しか油蟲を食はされて、希臘語か羅甸語の凡人離れした所を無理無體に詰め込れて、處嫌はず滅多無上に打たれて、打たれて、打たれて、解剖學の應用打に打たれたんぢやから堪らん、凡そおいが五體で學名の附いちよる點は皆打たれた。そいが又誰ちふ差別なく、打ちたか者は打ち、腕の癢か

者は打つ、打つが面倒で無かもんは打つ。うんにやお作は樂しみ多しと雖も、惡魔どんにくれてやれぢや。そりや人には嫌らうれ、幸福ぢやつた者もあらうし、幸福でなかつた者もあらうれ。ぢやがおいも死にもせんで——死にもせんどころか、此通い成長して立派な阿呆になつたのぢやが、此困難はおいの性質に影響を及ぼさんぢや無かつたど。で、おいは發明したのぢや、人には二種ある、一種の人は自然と天禀と準備ッちよるぢやから、何も心配せいでも好か、又一種の人は極めて天禀が薄かぢやから、機會さへあれば極めちふ主義を奉ぜんばならんことなる。で、到頭宗教中學の衒學風が非常にいやになつたぢやから、證書どん纏めて、給費も最後には惡うはなかつたけど、辭して了うて、此大學へ入つたのぢや。そこで今はこの着ちよる襤衣の外何も無かけど、身體は暑さにも寒さにも負けいで、常識も吃驚しつらうが、強健に發育して了うて、おいは之を養うて衣服を着せて行かんばならん、聖書にも曰うてある、誰か其肉體を憎まん、故に之に物食はせ衣被すッない……。」

共産團の發起人キルデャーガの身の上は先づ這麼的であつた。

（五）肉湯の料理法附り ヤーゲレノフの大の事

合宿の初は多少の困難を免れ得なかつた。申合せて、毎日誰かしら一人居殘つて薪水の勞を執り、餘の者は登校すると、かうなつて居つた。

一週前の話は怎麼しても少し遠過ぎる、わけてヤーゲレノフは翼の生えた上ッ羽織では却々凌ぎ兼ねる寒さを歎つのであつたが、それには昔程なく慣れに了つた、唯一番貧乏黨は居殘りのもので、貧乏か、いふ僕だつた、會計係任のキルヂャーガが錢二十哥を渡して此市の市場を教へて呉れたから、そこへ出懸けて行つて買物をせねばならん。で、まづ教へられた通り行きは行つたが、さて困つた事には、懷中と市の相場と怎麼しても出合はん。ぎり〳〵決着の勘定をしても、二十哥では何さら碌な物は買へぬとなる。肉湯を拵へ一これで四人の共産團員が腹を作る筈ではあるが、肉が一斤十哥もするから、こればかりでも豫定額の半分は消えて了ふ。且つ血氣壯の青年の口へ肉一斤が何になるもんか。

でも、まあ、力の及ぶ範圍内で買物をした。先づ十哥が肉を買ひ、二哥が人參の樣なものを買ひ、四哥が黑パンを二斤買つて、手元に殘つたのが四哥。これで更に[illegible]を買つた。で、宿へ歸つてお婆さんに買物を示せて、これで五人分の肉湯を拵へるのだと云ふと、宿主のお婆さんは斷じて同意せん。

「それぢや何か上流のやうなもんが出來ッちまひますわれ。まア何處の國にかお前さん、一斤の肉と馬鈴薯二箇ばかしで、四人分の肉湯を拵えるなんて、そんな人があるもんですか。それで肉湯が出來たら御目に懸られえ、それもとうだけど、お前さん方はまア何たる氣紛れて御自分で肉湯なんか拵えるッて、そんな事なすッちや、御身分に觸るぢやありませんか、可惜大學の書生さんが不體面になッちまふ。それにたッた一錢で二十人も喫べようなんて、まア、大それた……。」

と、いふのがお婆さんの意見であつたが、これに取りあつてる必要はないから、僕は勇を鼓して職務の執行に掛つた、約定を率するに、お婆さんは、僕等の意見に賛成であらうがあるまいが、拵へる菜次第で、シチウ鍋かフライ鍋を貸して呉れる義務がある。此時はシチウ鍋が入用なのだ。

しかしお婆さんは口よりも行の方が餘程親切で、僕等がシチウ鍋へ水を入れて、それへ人參に馬鈴薯に挽割に肉を抛り込んで、雑物ごと鍋をあはや火へ掛けようとすると、お婆さん手を拍つて魂駭て氣たゝましい聲を立てた、宛然僕が人殺でもしさうなさわぎだ。「まあ、どうも、呆れツちまふ！　そんな事して肉湯を拵える者が何處の國にありますよ。それで肉湯が出來ますかよ。」

「何故です？」と僕は大に狼狽へる。

「何故ツて、お前さん、まあ第一番に水を煮立てなきや――水ばかし、何にも入れねえでね。それが手初でえすのさ。それから其次に肉を洗ふんでえす。誰が、お前さん、正教の信者で肉を好く洗はねえ者があるもんでえすかえ。而してからに水が煮立つたら、人參に、胡椒に、お鹽に、老列兒の葉……胡椒は？　おや〳〵まあ胡椒は無し……胡椒なしで味が出るもんでえすかよ。まあ、どうも胡椒なしで肉湯を拵える！……お鹽もねえ、お葉もねえ、そんな肉湯は見た事もねえ。如何な事でも、まあ！……葱は那裏にござんすえ！　ほい、葱もねえ、それで肉湯が出來る！　まあ、どうも！……」

と饒舌りながら、鍋の中の物を殘らず明けて了つて、更に水を入れて、火に掛けて置いて、それから此方の買物を引奪つて、甲斐々々しく肉を洗ひ出す、早い話が、肉湯の煮方を引受けてくれたのだ。僕は仕方がないから側で見て感心して居た。鍋の水が沸騰つと、お婆さんは人參と肉を入れて、自分持出しの鹽を好く撒布いて、これを煮ながら匙で攪拌ぜて居たが、少時してそれが煮あがつた所へ挽割を入れ、細かに刻んだ馬鈴薯を入れて、それが十分煮えるを待つて此度は胡椒に老列兒の葉を入れて、遂にこれはと手を拍つ程の物を拵へ上げた。さてフライ鍋に油を注いでジリ〳〵といふ所へ、細かに刻んだ葱をバラ〳〵と撒いて、赤くなるほど熬めて、それをシチウ鍋へ入れる。

「さあ〳〵、これで出來ました。これが本當の肉湯といふもんでえすよ。」と教へてくれて、「そりやね、肉は少なうござんすのさ、あんまり少なすぎる程なんだから、それで以て葱で味を附けたんでえんす、葱は熬めると、一寸、ほら、まじくなへるもんでえすからね。」

僕は謹んで禮を言つた、料理法を敎へられた御禮に、油の御禮に、葱の御禮に、鹽の御禮に、胡椒の御禮と、皆在内で。然るに謙なるかなお婆さんで、あへてその功に居らない。

「何しろお菜拵への法ツて從頭御存じねえんだから、仕方がねえ。一體こんな事に手出しをなさるんが間違ひさ。えゝ〳〵、間違ひとも、間違ひとも、大間違ひの頂邊。」

肉湯は成程甘さうな匂を紛々させてゐる。餘り煮過ぎんやうに、お婆さん鍋を少し居去らせて遠火にかけたものだ。

ところへ三人がどや〳〵と歸つて來た。皆鉢坊主を欺く程の空腹だ。往復二里半の道を踏んで食慾は底ひ知られずとばかり増長してゐる。そこで僕は食卓の用意をして、皿を陳べてパンをそれへ出すと、

「何んぢや、これツばかいか？」とキルヂャーガの尖り聲、「これぱかいのパンぢや、おい一人にも足らん。」

でも之より多くは買得なかつた理由を説明して、總ての支出を計算して見せると、キルヂャーガは彌憤れて、

「肉が一斤！　貴様は我等は猫の子とでも思うちよるンか？　一斤ばかいの肉な食慾を弄つて激ませるばかいの事ぢや。そいもそぢやが、十哥の肉を買ふちうこ、貴様は大名な？　何故一ち下等なとを買うて來ん？　一ち下等なとは一斤四哥ど、さうすツと、一斤どこぶか、二

斤半買はふ。肉が悪かちらて怎麼ある？　餘計腹に入れば、そいで好かおやなッか？　うんにや、貴樣共はいかん、宛然赤子ぢや。」

で、まづ肉湯にかゝつた。パンは成程足りなかつたが、キルヂャーがお爺さんの處へ驅付けて、例の賢者上手で足らずまへを埋合せる。で、岡入口を揃へて肉湯を啜つたのだが、永い間安料理に馴されたお腹たから、その甘いことといつたら。

「好かノ、！　天下の名肉湯ぢやーーとキルヂャーがは有頂天だが、フェーヂャとヤーゲレノフは黙つて唯々ウノ／＼云はつてゐる。

然うはいふもの、實際なかノ＼甘い肉湯で、第一熱い所が身上だ、我々の胃の腑は永い間、この熱いところを求めて休まなかつたのだ。

翌日にキルヂャーがおもッと安月を買はなければならんと、衣から碎發つて、那裏を怎麼採したか、皮程安い肉を買つて來た。非常な粗肉ではあつたが、那樣な事には誰も頓着せん、其次はフェーヂャ、これもまづ見事にやつて退けた……が、ヤーゲレノフの番になつて珍事ちふやうの事が出來した。

我々が學校へ出て行く跡から直ぐ先生も市へ出懸けたのだ。經驗に依ると、二十哥ではどうも足りんから、ポッケットに三十三哥入れてをつたのだ。見れば一杯に戸を開けて種々の店が並んでゐる。入口の柱には牡牛の四つ切りや、皮を剝いた丸剝の犢やらが吊してあつて、肉には未だ生々しい血の滴る肉が垂下つてゐる。廣場には乾魚やら、馬鈴薯やら、羊肉やら、豚の臓物やらの露店が塵埃きまで詰合つて、賣番は皆女だ、おそろしい雜沓で、店へ入る者、出る者、いづれを見てもきよろ／＼と勘定高い顔をして、皆買物には巧者さう、その中をヤーゲレノフは此方の店から彼方の露店へと宛もなく彷徨いた。何を看ても皆貴へさうに想はれる、他人は皆匆々と店先に行つて、馬鈴薯を秤目一斤に、他の品の十種も買つて、鍋一杯に押込み、肉舖で汁の取りさうな生肉を幾斤も買つて、或は犢の四つ切を全部持出すものさへ有る。其中で端錢をポッケットにして店へ驅込み、安物をしかもたッた十哥呉れと云つたら、店の賣子と買物してゐる人達も定めて輕蔑の眼を此方の顔へ集めてじろ／＼見る事だらうと思ふと……

どうも這入れんで、一時半も彷徨きまはつて塞さに縮み上つてしまつたが、それでもまだその氣になれん。そろ／＼人が横目で見出す、不思議な服裝が目立つて、露店の側を通る時には、店番の女が危險さうに手近に物を遣ける樣になる。

かれこれする中、人影は漸く疎になつて、市は軈て終了さうな氣色。もう露店の中には片付にかゝるのもあるけれど、ヤーゲレノフは未だ決着がつかぬ。果はやぶれかぶれの氣も些ろになつて、目を瞑つて突然に肉舖へ飛込んで、何が目に入らうぞ、賣子も見えず、買手も見えず、賣物の肉も無論見えず、浮の空に譫語でもするやうに、

「一斤四哥の肉を下さい……。」

「犬にやるンですか？」

「そ、そ、そ、然うです……犬にやるンです……二斤半下さい……。」

さあ、行りましたかな。もう少と早いと何だつたが……。

無かつたならもう那舖へも行かんぞと腹の裏で極めて居たが、でも犬にやる肉はあつた。代を拂つて肉を受取つて、匆々に店を出たッきり、もう何も買はなかつた。犬にやる肉とあるからは、もう義理にも馬鈴薯は買へない、買へばすぐ肉舖の奴がそれと氣取つて、指さしをして笑ふに違ひない、─しかしこれおそれが弱いと

云ふものだ。小膽なのだ。」と我と我を叱咤してみたが、その弱い氣がさて怎麼にもならん。
宿へ歸つて、藉地に部屋に駈込んで、泣いてしまつた。稍落着いて、しかし四人の共產團員に飢餓じい想ひをさせぬ義務は自分にあるのだと氣が付いたから、お婆さんを驚かして、恥を包まず一伍一什の話をした。是に於てお婆さん大に惻隱の心を動かして、お可愍さうにと、殘りの錢を受取り、自分と不足の品々を買ひ揃へて、我々の歸る頃には、澤山に却々喰はれぬ……おツと、犬にやる肉にしては却々喰はれるカトレートを拵へておいてくれた。
此一件はヤーゲレノフも一寸は白狀しなかつた——極りを惡がつて。之を白狀したのはズツと親しくなつてから後の事であつたが、しかし是は彼の爲には好い經驗で、それから後は當番の日には、もう怯めず臆せず肉鋪へ走つて澄して犬にやる肉を買つて來た。その澄した所で、當人實に犬がありさうに見せた積りであつたのだが、あの服裝では、此山は中つたか怎麼だか些と覺束ないものであつた。

（六）　經濟學の講義

二週間程經つ內には我々も共產團員の職務には十分慣れて來たし、煖爐の煖りに、餘り滋養にはならぬながら熱い食物と、此兩樣の福を絕えず享け得たしするので、共產團の生涯は彌々我々の氣に入つた。尤も肉湯にカトレート——我々のメニューはこれ以上に進步しなかつたから、肉湯にカトレート、こいつはいつも家主のお婆さんの厄介になつてゐた。いつも當番が手づから自ら料理に取掛りはするが、したゝか法則を破るので、お婆さんもう〳〵呆れかへツちまつて、ツイ自分に手をおろして了ふ。それが寧ろ此方の勝手であるから、我々は敢て反抗を試みなかつた。
十日目に一寸頓挫がありさうであつた。會計主任のキルヂャーガの宣告に、共有資金は段々減つて、もう僅に七哥ほか剩さんと云ふ。三人の中で一番目端の利くフェーヂャが對手の氣を兼ねながらも、
「しかし一寸勘定してみると、今日迄に費つた額は僕等二人の出金と、ヤーゲレノフの分と、それだけに過ぎんやうだがな、それも殘金は七哥でなくツて、三十四哥あるべきの筈の樣に思はれるが……。」
「其通い。」
とキルヂャーガは云ふ。
「それなら未だ僕の分がある筈ぢやないか？」
「ところが無か。」
「だツて君はポッケットを搜したら幾干か有らうと云つたぢやないか？」
「ところが搜しても無かつたのぢや。」
「それぢや、どうも、些と不公平のやうだな……。」
「そりや然うぢや、些と不公平のやうぢや。しかし貴樣はなら、人間の爲ツ事に、完全に公平ちふ事が一事だつて有ツと思うちよるか？ そりや決して無かど、人間の爲ツ事は、眞理ぢや正義ぢやちふものを標準として考ふれば、誤だらけぢや。そこが即ち人間の神と違うちよる點で、完全ちふものは神の外にあるべき筈がない。」
「そんな事を今更云つたつて、僕はどうも承知出來んな。」
「そぢや今一つ辯解のしやうがある。こいなら貴樣がなんぼ阿房でも分るらう。まあ、からぢや、我等は今共產團を組織しちよる。えゝか？ 一體共產團とはなんか？ 共產團ちふものは一種の共同生存法で、此生存法に據るちふと、皆が共同で使用しちよる總てのものは皆の財產で、又銘々の財產にもなるのぢや。ぢやか

らして、貴様どんの出金にせい、ヤーゲレノフの出金にせい、共金が共有資本の中に編入せられた時からして貴様共の金でもヤーゲレノフの金でも無うなつて、共有の金になるのぢや、換言すれば、共金が貴様共やヤーゲレノフの金であッと同時に又おいの金でも有ツのぢや。な、解つらう？　そ、そ、そぢやから、貴様は經濟學を覺えんばならんちふのぢや。そいからして今一つ這樣した理由が有ツのぢや。今はおいは都合が惡かぢやけど、貴様は都合が好か、貴様は寫字をやッちよるで、今日にも二留四十哥を取ッ事が出來る。しかし形勢は明日にも一變すッも知れんど、貴様は都合が惡うなつて、おいはフッと好かならうも知れんど。そしたらおいが共有資本へ錢を拂込む、その錢が又貴様の物にもなるちふもんぢや、こいで解ッつらう？」

「そりやア、さう云へば、そりやア、然うかも知れんが、しかし殘金が二十四哥あるべき筈だのに、七哥ほか殘らんといふのは解らんぢやないか？」

「そいにや理由が有ッのぢや。おいが二十四哥で刻煙草を四半斤に三哥でペーハーを買うたからぢや。勿論此煙草もペーパーも共産團の所有物ぢや。」

「けれども君一人で喫んでるぢやないか？」

「そりや誰も喫はんから、おい一人で喫うぢよるのぢや。今も云うた如、こいは共産團の所有物ぢやから、貴様共誰でも此煙草を喫ふ權利は有ッとるのぢや。」

何んだか妙なものだが、から說明せられてみれば、此上何んと言草も言はれぬ始末、そこでフェーヂャは寫字料の二留四十哥を受取つて來て、之をば共有資金の內へ拂込むことにして、それでまづ幾日かの安心を得た。

玆に强か眼に物見せをつたは僕等が手製の藁蒲團めで、上敷を蔽せたばかりだから、藁が始終はみ出して零れるのみならず、から〲に枯れた尖の稜つた莖が上敷を透して身體を突く。キルヂャーガは之を大層氣の毒がつてゐたが、しかしスハルタ風の生活にはえて有りうちの事だと云ふ意見であつた。

「おいが此蒲團付の寢臺な、おいだけが寢る約束で借ッたとぢや無かもんなら、誰ぞに讓つてやッぢやけどなあ、殘念ぢや。老婆が云ふ事にや、この寢臺は死んだ親仁どんが臥ちよつたとぢやから、法緣のものでなきやこれに臥る格式が無かちうてな。」

經濟學の講義はまだ幾度か開されたが、或晩キルヂャーガは所用あつて外出しなければならなかつたが、道が甚く濘る、連日の荒晴で、町は雪解のどろ〲だ、キルヂャーガは外套を着て、帽子を冠つて、而してヤーゲレノフの比較的小さなオヴァシュウを大長靴へ穿きにかゝる。之を持つて居るのは、ヤーゲレノフばかりで、僕もフェーヂャも只夢に見て居るばかりだ。と看てヤーゲレノフ驚くまいことか。

「君は何をしてをるのです？」といふのを受けてキルヂャーガが、

「大方オヴァシュウを穿いちよるので有いませう……目で看たら、分いさうなもんぢやなッか。」

「しかしそれは僕のです！」

とヤーゲレノフの聲は甲走る。感情を惱れるので、大事がつてゐるのだ。

「貴様のぢやッ？　這裏に在るものに貴様のおいのちふ差別はなか。皆共有物ぢやからして、此オヴァシュウも共産團のもんぢや。」

と委細構はず無理に穿かうとするので、

「しかし君の足には合ひません。君の長靴に穿けば裂けて了ひます…。」

とヤーゲレノフはハラ〱する。

一通樣した小さなとを買うな、眞に阿房ぢや。矢張貴樣は資本家の根性が脱けきらぬと見ゆるわい。おい、こら、皆聽け、こいから先オヴァシュウ買はう思うたら、皆の足に合ふとを買へ、さもなきや共産團を組織した效が無か、共産團にあッもんは皆の用に足るもんでなくばならん。」

ヤーゲレノフのオヴァシュゥは小さ過ぎて怎麼してもキルヂャーガに着けなかつたばかりで、ヤッと御難を免れたのであつた。

又或時此方は僕が強いて經濟學の講義を聞かされた。前にも言つた通り、僕等の衣類はキルヂャーガが打つてくれた大釘の端に引懸けて四方の壁に釣してあつたのだが、キルヂャーガが我々の腦裏へ共産思想を播くには彼如く務めたに拘らず、僕等は矢張多少の私有權を認めて、その影の射す位は已むを得ぬ事にしてゐたから、銘々に自分の壁といふのがあつて、それへ自分の衣類一式をかけてゐたのだ。

尤もキルヂャーガばかりは何も持つてゐなかつたから、隨つて自分の壁と云ふものも無かつた。上敷にしろ、枕にしろ、乃至夜着にしろ、皆お婆さんのを借りてゐた。こればかりでなく、一體晶屓にされてゐたのだ。

或日曜の朝、皆衣服を着つゝあつたのだが、と見ると、一珍事こそ起りたれで、キルヂャーガが例の紅絲で胸を網目に縫つた襯衣を脱いで床の上へ拋り出した。こんな事はつひぞない事で、今迄夜晝なしに着通してゐたのだ。初めて看たが、胸毛の生えた肉附豐かな如何にも丈夫に出來た體だ。

キルヂャーガは起きて來て、ヤーゲレノフの衣服の掛つた壁の前に悠然と立止まつて、一枚一枚念入に點檢めてゐたが。丁度好いのがなかつたと見えて、次のフェーヂャのに移つて、又丁寧に點めたが、矢張氣に入つたのが無いらしい。そこで此次は彌僕のお粗末な衣服の番になつた所が、僕の爲には生憎だが、共産主義の爲には恰も好し、襟に模樣のある折襟の襯衣がれいくと垂下つてゐる。キルヂャーガは一體模樣物が好であつたから、自然と之に目を留めて、やをら猿臂を伸べて外しにかゝる。

共産主義の生活をするからは、何一つ我物と見るべき權利のないのは、僕も匇く迄承知はしてゐるけれど、まだどうしても資本家根性が失せぬと見えて、それと見るより我知らず大聲が筒脱けて、

「何をするんだ？」

「着よう思ふのぢや。おいがとは非常に汚れた。三週間も着詰ぢやつたもんな。」

「僕が着ようと思つてるンだよ。」

「おいの方が早う思ひ付いたのぢやから、おいが着る。」

こりや怪しからん——君の方が早いとは怎麼して知つた？　僕は昨日から其を着ようと思つて居たんだ。」

「そりやさうも知れんがな、しかしおいが、そら、から着て了うたら、と平氣で他人の襯衣を着ながら、「もう無理に引剝ぐ事は出來ん。」

と云つた頃には、もう頭が襟をスポッと脱けて、ちやくと着て了つた。で、澄して悠々と襟の釦鈕を掛け、腕の釦鈕を掛けつゝ、宛然意見する樣な口吻で、

「や、どうも貴樣共の紳士風の脱けぬにも驚く。怎麼しても共産主義になりをらんぢやな。始終原則に戻つて云うて聽かさんばならん。おいがなあ、えゝ、殘念ぢや、何も有ッちよらんが殘念ぢや。有ッちよッたら、貴樣共に好か龜鑑を示せてやッぢやものを。しかし其內には都合も好うならう。そりや屹度好うなつて見する……。」

有樣を云へば、僕が其時押堪へたのは憤怒の

氣であつた。其時僕が着てゐた外に僕の襯衣は未だ二枚あつたが、其内一番氣に入りのはキルチャーガに撑取られたやつで、それをば其日曜に着ようと思つて居たのだ。この襯衣を庇護ふ爲なら、何の鐵拳を固めて躍出る程の紳士魂乃至資本家根性に事を缺きはせん、隨分キルヂャーガの手に在るのを引奪りかねるのではなかつたが、彼が巧にスポッと被つて了つたので、まだなんとも手出しをせぬうちに大事既に去つてしまつたのだ。

　といふ樣な事件が累積つて我々の生涯には雲が掛つた、何と云はうが角と云はうが、我々三人は兎も角もして共産團の維持費を出してゐる。僕とフェーヂャは筆耕で幾干かづつ拵いで行くし、ヤーゲレノフは母の仕送の七留を全部其儘出してゐたが、獨キルチャーガは一文も出さぬ、そして我々の厄介になつてゐる、而して彼は底知らぬ食慾を持つてゐるから、何を「喰」つても一番餘計に「喰」る、而して共産團の錢で煙草まで買つて喫んでゐる。

（七）　黨派の勃興にキルチャーガの獨裁職

　我々の組織した共産團は理想的國家の雛でであるとはキルチャーガの能く我々に教說した事であるが、いづれの國家にも黨派といふものが必ず起るやうに、我々の間にも程なくそれが起つた。

　我々は四人だから四つの黨派が出來る道理で、又共産團が次第に發展したら、實際に出來たかも知れんが、差し當つては先づ二派に分れた。

　僕とフェーヂャは、怎麼如何なる場合でも一體であつた。紳士主義で生計を營んだ時もさうであつたが、共産主義の生活に歸依してからも矢張其通りであつた。ヤーゲレノフも、前の話でも知れてゐる通り、矢張僕等同樣資本家根性が蟬脫けきらず、聊かながら衣類も持つてゐたから、折々は自分の權利を庇護ふべく試みる。それ許りでなく、矢張之も共産團の資力充實のため始終金を拂込むだけそれだけ僕等に緣近く、さなくも單に平生の所見行動に於て既に僕等の同臭味であつた。

　曾て口にこそ出して云はなけれ、曾て公然黨派を結んだ事こそなけれ、公敵を禦ぐ爲には各各力を戮さなければならんとは、皆の胸に感じた事だ。キルチャーガの壓制はもう珍しくはなくなる。敏捷く立廻るので、殆ど爭ふ暇もない、此方が何か自分の權利を陳べに出ようと踠く内に、もうその權利を足下に敷いて蹂躙つて了ふ。數々他の下衣を着る、時としては外套、ならまだしも、それ以上の無くて叶はぬ物を斷りなしに着て行つて了つて、大に困らせることもある。食事は非常の健啖で、他三倍も食ふ。果は共産主義を滅方もなく擴張して、或時一杯機嫌で歸つて來ての言草に、共有資金の中から一留だけ飲んで了つたと云ふ。玆に至つては最早疑ひもなき反對黨だ。從來數々の迷惑を忍び來つた我々も、此度の一留を飲んで了つた一件には、紳士魂もむら〳〵と起るを禁じ得ずして、遂に包圍攻撃に及んだ。

　三人がまんがちに、

「そりや餘りひどい。どうも呆れツちまつた。我々の今生活費を得るに困難してゐるのは君も承知ぢやないか。それを大枚一留飲んで了ふとは！　一留出せば、晩餐が五遍喰へるぢやないか。我々四人が五日の命を繋げるぢやないか、共産團が五日維持せられるぢやないか？」

　などと、或は別々に、或は口を揃へて、十分に辯舌を揮つて道理の眞中心を說いたから、之に抗ふ詞はよも有るまいと思はれた。キル

チャーガも默つて聽いてゐる、眉一つ動かさず、反駁したさうな氣色を更に見せぬから、さては初めて取つて押へたか、今度こそは定めて謬つたと云ふだらうと思ひの外、我々の理窟ももう是迄となつた時、キルヂャーガは初めて口を解いて、

「段々聽けば成程尤ものやうぢやが、玆に一つ貴樣共の氣の付かぬ事情があつて、おいが尤もになるのぢや。貴樣共はそいを知らんぢやから、無理も無かぢやけど、おいを責むツのは間違うちよるど。まあ、這麼した理窟ぢや、おいがなう、獨逸ビーヤホールの側を通つたのぢや。以前能くあすこでビールを飲うだ事がある、勿論他の錢でぢや。おいが錢を有ツちよッた例は無かもんな。そいでそのビーヤホールの側を通ツと、非常に麥酒を飲うで、山葵入腸詰の煮いたのを三四本喰りたうなつた。あれは好か味ど——欺された思うて一遍喰つてみい、味が惡かなら、己ぢやて喰りやせん、ところが好かもんぢやから、おいは四本ぢや滿足出來んで、八本喰つたのぢや。ポッケットに錢はあつた、尤もこいは團の錢ちふ事はおいも知ツとる、そいを一寸でも忘れて好かもんか。しかし然ぢやておいの腹は少しも太りやせん。すツと、其時なおいがビーヤホールの側まで來ッとな、奇想天外より落ッて來たのぢや。おいは今でも此奇想に對して感謝しちよるのぢや、若しこいが浮ばんぢやッたら、おいはビールも飲めず腸詰も喰れん所ぢやたもんな。こいからその奇想ちふのを言うて聽かさう。」

「そりや一段の聽物だ。」とフェーヂャが嘲るやうに云ふ。

「そりや然うぢや、云うたら直ぐ分る。まあ、からぢや。われ／＼の共產團は創立以來既に二ケ月になりよる。此間始終おいは會計主任の役を勤めちよる。あの通い自由選擧で當選したのぢや。そいでぢや、すべて公務ちふもんには必ず或る職分勞働責任が伴ふもんぢやからして、那樣した公務に當る人には一定の俸給ちふもんを給れて其勞に酬いツのが習慣ぢや、ところがおいは二ケ月間も會計主任の職務を執ツちよるけど、未だ一文も報酬を貰うてをらん。ぢやから今日そいを貰うたのぢや。そいだけの事ぢや。あゝ、飲うだビールめが頭の中で騷ぎ居つて、腸詰の喰い過ぎで氣が重うなつた。おいはもう眠る。」

とごろりと己が寢臺に倒れて、壁の方をぐるりと向いたかと思ふと、もう寢入つて了つた。

もう這麼なつては反駁も無效、況や既成の事實だもの、咎めたところで仕方がない。しかしこのときから僕等の黨派は一心同體、牢乎として拔くべからずなつた。成程我黨は受動的態度を取つた、團の會計主任は宗教中學の哲學科で養ひ來つたに紛れない僞の詭辯を恃み、我黨の眼前で憚氣なく專制的傾向を示し、公々然と無上權を私せんと勗めた。しかしながら我黨の內部に潛める反抗力は黨員の一致を鞏固にし、若し事情だに許したならば、或は革命亂を釀したかも知れなかつた。

事情が許さなかつたから其迄には至らなかつたが、こゝにその事情を語る前に、共產主義の生活に伴ふ二三の現象に就て略說せん事を要する。抑も其等の現象たる、そりや詰らん事さ。しかし詰らん事でも其相應に大局に關係はある。例へば、フェーヂャは寢所で讀書する癖がある、皆が寢に就いて卓上の共同ラムプを吹消すと、彼は枕頭に椅子を引き寄せて、蠟燭の燃指に火を點じ、其頃夢中になつてゐたカラムジンの露國史を耽讀するのだ。

僕と二人住の時、彼の此癖は僕の頭痛の種となつたから、彼も一步を讓つて被中の讀書を廢さうと試みたけれども、怎麼もいかん。

「無效だ」と殆ど泣かんばかりの顔をして、一時夜具を着ずに寝てみたら、終宵寝付かれんで寝所の上をのたうち廻つた。」

膏肓に入つた病は怎麼なるものか。であるから僕の方で夜着を被つたり壁に面したりして閨を合せてゐる中に、いつしか慣れてしまつて、燈火があつても寝られるやうになつた。

しかし今四人寝てゐるのでは然うはいかん。ヤーゲレノフの此輩に悩まされたはそれと察せられたばかりで、始終寝苦しさうに寝返りを打つては、長息を付いたり呻吟いたりしてゐた。燭火が射すと眼を縮めるのださうだが、それは後で分つたので、その時は僕の内端から黙つてゐた。

ところがキルヂャーガは最初の晩から大反對だ。

「おい、こら、燭火を消せ。燭火が點いちよッては、怎麼しても寝られん。」

フェーヂャが、

「僕は本を讀まんと、怎麼しても寝られんもの。」

「寝られんちうて、貴様一人の室ぢや無か、皆が火を消して寝ツのが普通ぢや、世間一統然しちよるのぢや。」

フェーヂャも内々當技に在りと思ふから、深くは拒びもせず火を吹消したが、其代り其晩はまんじりともしなかつた。幾晩か讀書せずに寝習はうと試みたけれど、無效だ。それからフト思ひ付いて、皆の寝鎮まるを待つて、燭を點じて讀書三昧に入つた。僕とヤーゲレノフは熟睡して居たから、知らずにもすんだところを、一事件が起つたので、皆に知れて了つた。

キルヂャーガも同じく寝入つてゐた所を、燭火に眠を破られて頭を擡げてみると、フェーヂャが例の露國史に憂身を窶して居る、竊と寝臺を下りて、足音を偸んで側へ行つて、ふッと燭火を吹消す。それとは氣がつかぬフェーヂャはおやッと云つて燭火を點ける、キルヂャーガ又それを吹消す。此に於てフェーヂャが寝臺を飛び降りる、後は一場の修羅場で、互に聲高に罵り喚く、專制壓制はまだな事、人面獸心などいふ言葉さへ飛びちがふ。僕もヤーゲレノフも眼を覺す、そこで燭火がまた點いたけれど、短い命で。キルヂャーガが共産團員の權利義務さては一般の幸福に付て略數語を述べると、フェーヂャも讓歩して、僕等は復た寐入つたが、フェーヂャは遂に眠られなかつたと云ふ。彼は一般の幸福の犠牲となつたのだ。ヤーゲレノフも毎夜不快な鼾聲をやる、驀然と起きて聲高に罵り騒ぐかとすれば、時とすると、咽喉でも締められたやうに、たゞもうキャッと悲鳴を揚げる事もある、又泣出す事さへある。これは虚弱で神經が狂つてゐるから出る事なのだ、僕もフェーヂャも之がために數々眼を覺すけれど、おッと我慢をしてゐるが、キルヂャーガになると、さうはいかん、憤々ぶつて不平を鳴らす。

時ならず覺された腹立聲で、

「何ぢや其狀態は？　宛然女子の腐つたやうぢや、何ぢやそら愚にも附かん事を夢に見ッと、もうすぐ大聲出いて騒ぐ。不體裁ちふ事を貴樣知らんか？」

ヤーゲレノフは閉口して捻伏せられたやうに押黙つてゐた。自分でも飽まで濟まんと思つてゐるのであるが、さう思へば思ふ程神經が攪亂する。

けれどもキルヂャーガだとて、言分が無いではない。彼は彼の性癖があつて、これには絶えず惱らせられた。まづ煙草は極く粗末のを喫かす、煙は絶えず低い天井の下に立迷つて、常住の雲の散る暇がない。窓に息氣抜きといふものがないから、換氣に戸を

明けねばならん、僕もフェーヂャも健全な肺の頗る我慢強い方であるけれど、ヤーゲレノフは此煙に噎んでは咳をする、祈る樣にキルヂャーガに、

「君、煙草を喫ふなら、入口へ出て喫ふ譯にはいかんですか？　實際どうも衛生上から云つても惡いですからな……」

之に答へての言草は或程キルヂャーガで、

「衛生なぞちふもんは間數のえッと有る廣か家に住んぢよる富者の發明したもんぢや。煙草を喫うたら、神經が興奮して精神が活潑になつて大作用を起すぢやから、其餘澤は廣く人類に及ぶちふわけぢや。そいもそぢやが、貴樣那麼柔弱で如何すツか、怎麼しても其體を鍛うて、もツと丈夫な我慢の強かもんにならんばいかん。さもなうては今に生存競爭に負けて自滅すツど、スパルタ人になれ、スパルタ人になれ……」

「へえ、、スパルタ人は皆煙草を喫んだのかい？」とフェーヂャが口を出す。

「若し煙草を喫はんぢやツたら、そいならスパルタ人は阿房ぢや。そいはどうぢやろと、一體スパルタ人は何も偉か事しやせん。」

しかし何よりもヤーゲレノフの惱まされたのはキルヂャーガの驚くべき不潔な癖で、彼は卷煙草の吸殻を處嫌はず抛散らすから、部屋の四隅には何時も三つ四つ轉つてゐぬ事はない、時とすると何か厭な蟲でも捉へた樣に、茶の臺皿で壓潰す事もあれば、簡單に今喫つたばかりの肉湯の皿へ沈めて了ふ事もある。

其外にまだ室内で痰を吐いて、それを靴で蹂躙るといふ、いやどうも堪らぬ癖がある。ヤーゲレノフはそれと見ると、いつも顔色が違つて、目が眩んで、眞暗三寶部屋を飛出して了ふ。

キルヂャーガは苦々しさうに、

「何ちふお上品な事ちや。紳士風の馬鹿な教育を受ければ、誰も皆那樣なつて了ふ、少か時打たれぢやツたからぢや、監督どんから笞の根で打たれちよツたら、那樣なりやせん。うんにや、いかん〳〵貴樣共は、その性根を叩き直すにや、まだ餘程苦勞せにやならん。」

「だが僕のは單に不潔な癖といふだけぢやないか？」

と反駁する。

ところが這樣なると、キルヂャーガ獨舞臺で、理科が專門だけに、生理學上から見を起して、人は苟も清潔ならんこと欲せば、如何なる場合をも顧みず、時々刻々唾を吐かなければならぬといふことを證據立てる。

「那麼みともなかとか好かとかちふことは閑人が閑潰しに發明した事ぢや。生理學は那樣した事は認めぬ、生理學の認むるもんは唯有機體の正作用ばかいで、有機體の正作用は何でも故障なく間斷なくやらんばならん。」

かういふ風にキルヂャーガは、第一經濟學を恃み、第二生理學を恃み、第三少年の時強か打擲されたことを恃み、總じては面の皮の千枚張を恃みにして著しく獨裁官たらんとする傾向を示して來た。

（八）キルヂャーガの最後の講義
附り共産團解散の事

時は四月、町々の雪は殘なく消えて、空にはうら〳〵と春の日の强からぬ光照り渡つて、人懷かし氣に心に沁み入る。鳥もおしなべて來啼く中にも、我々の住む廓外は取分けて多いも道理で、這邊には大廈高樓もなければ、敷石路もなく、街頭を走る馬車の絡繹もなければ、市聲の喧雜も聞えぬ。

春早く來て窓の二重戸を外され、晝は終日開放の、唯夜ばかりを閉める。ヤーゲレノフの煙草の煙攻に遭ふも既う前程にはなくなつた。

けれど一陽來復して外面白くなるに引易へ、内の其產團は苦しい日を渡つた。僕もフェーヂャも、怎麼しても内職がない、間が惡いこ、果敢ない寫字の儲みも、出遣はんのだ。ヤーゲレノフも家に何事かあつて、お袋の文にはやがて運の開けさうな事をそれとなくほのめかしてはあつたけれど、さりとて例の七留は何故か添へては寄與さなかつた。キルヂャーガの都合はいつに變らず、一文も稼がぬから、一文も拂込めぬ。

其產團員が食事らしい食事をせず、唯ハンと茶で凌いだのも既う二日になつた。

其頃一日キルヂャーガが何か欣々とはずみきつて歸つて來て、大きな聲で讃美歌を唱ひ、エリア調を口笛に吹き、手を揉み、二度ばかり何やらバレットめかして跳ねてみたが、全然物にならなかつた。

フェーヂャが不思議がつて、

「怎麼したの?」

「怎麼した? おいが怎麼したちふのか? まあ、待ッちよれ、今話す。」

何事か事ありげに見えるから、皆耳を側てた。

キルヂャーガはじらし加減に、

「ふむ! おいが那裏へ往ッちよッた思ふ? うむ? 那裏へ往つちよッたか、貴様どん中てて見い。」

那裏へ往つてゐたのか、何で此怪物がはしゃぐのか、知れッこはないから、そんな事は御免を蒙ると、

「おいは今出教授をやつて來たのぢや。はッ、はッ、はッ!」

「出教授?」と皆の聲が紛糾る。

「はッ、はッ、はッ! 出教授をやつて來たのぢや。眞の事ぢやよ、ぢやが那樣した出教授ぢや思ふ? こいは一寸分ッまいな。」

「出教授の口が有つたのか?」

「有つたのぢや。はッ、はッ、はッ! 那樣した事ぢや思ふ? 或非常な懶惰者ぢや、商人の息子ぢやがな、今年十八になッとおや、そやつが大學の傍聽生の試驗を受けたからちうで、その準備をしてやッのぢや、そいで怎麼ぢや、六ケ月でおいが其奴を引受けて、懶惰者から眞人間に叩き直いて、毎月四十留づつ貰て……」

「四十留? こいつは强義だ!」

と團員は勇みの大聲を揚げて、僞ならぬ喜の色は皆の面上に溢れた。事の意を能くも辨へず、早呑込に呑込んで、たゞもう恰々するばかりだ。

「勿論强義ぢや、」とキルヂャーガも同意して、「そいから肝腎な事は、おいはもう明日なら月謝を半分引奪つて來たのぢや。はッ、はッ、はッ! こら、見い、ポッケットは這麼膨れちよる。はッ、はッ、はッ!」

「しめた! うまいぞ、素敵だ!」

と皆わい〳〵云つて、もう甘さうな晩餐の菜が數々目の前にちらつく。

キルヂャーガは讃美歌を唱ひ、口笛を吹きつつ、部屋の内を往きつ戻りつしてゐる内にも、何やらじろ〳〵四隅を看廻してゐたが、軈て卓の側へ寄つて、煙草を截せた紙を取つて、散らばつた葉をそッと掃き寄せて、包んで、着た儘でゐた外套の隱袋へ入れて、さてまた隅々を索し出して、寢臺の下さへ覗いて見た。到頭堪へかねて、

「おいの襯衣は那裏へ行つたぢやらう? 怎麼してか、見えん……熟はおいが唯一の財產ぢやに、ふッと……此度老婆が洗濯に持つて行つたとぢやらう……おゝ、這裏にあつた。」

と網目に縫つた襯衣を腰掛の下から取り出して、丁寧に疊んで、新聞紙に包んで、羊毛皮の帽を眉深に冠り直して、その紙包を小腋に引抱へて、太いステッキを取つて、

「Omnia mea mecum porto!(おれの物は皆持つて行くといふほどのこと)……そぢや、失敬すッ!」

「那裏へ行く?」

とフェーチャが問くと、

「引移る。」

「引移るとは?」

「おいは引移るのぢや。既う貸間も看付けちよいた。三階で好か部屋ど、學校へも近うてな……湯沸附で十二留ぢや。」

「そりや一體どう云ふ譯だ?」

「おいが引移ッたて、怎麼ある?」

「共產團はどうする積りだ? ぢや、君は錢の無い內だけ、我々の錢を遣つといて、出教授の口を見つけてから……」

「矢張引續いて貴樣共の錢を遣うたら、そりや惡か……」

「しかし君……それぢや餘りひどい!」

キルヂャーガは歎息して、

「そりや然らぢや、實際ひどか事ある。しかしなう、おいは說が違うて來たのぢや、おいの今の考ぢや、共產團は既う時勢に後れとると思ふのぢや。共產團は所謂個人ちふものを壓迫する、個人の個性を奪うて了ふ。人格の特色ちふものは人の靈性を潤色する所以であつて、又總ての進步のこいが土臺になッぢやけど、共產團は其特色の發生發展を妨害する……兎に角、おいが既に這麼した意見である以上は、主義の許さぬ事をしちよるのは何以て心に愧づる、ぢやからして勿論會計主任の職はおいから辭する。と、這麼しておいてぢや……そぢや、失敬すッよ。」

と出て行く。此途方途徹もない暴論を反駁して大に言ふべき事は無論有つたであらうが、我々は唯もう呆氣に取られて了つて、ペタンとへたばつて了つた。僅にフェーチャの云ひ得たのは、

「おい待て! 僕の襯衣はどうしてくれる? 君が着て居るぢやないか……。」

とだけ。キルヂャーガはいやに猫撫聲で、

「這樣襯衣でも無うては困るちふか。好か、後刻で持たせて寄與さう。」

と、出て行つて了つた。跡で我々はお互にお初に御目にかゝつたやうな妙な顏を看合した。一分前の世界とは全で世界が違うたやうにヘンテコに想はれる、恰もたッた今此世へ生れ出たやうな氣がする、其時の心持を云はうなら、まづからより外は云はれない。

辛うじて才覺した端錢に我が共產團は尙ほ二週間ほどかつ〳〵此世に生存へてをつた。すると又一事件出來。

ヤーゲレノフのお袋が出て來たのだ、其晚お袋に逢つて來てのヤーゲレノフの話に、お袋がさる親戚の遺產を少しばかり讓られたから、その蔭に立つて彼の收入もこれから每月三十留づつはあるはずと云ふ吉報。

僕等二人は此報道を聽いて默然として一語も發しなかつたのは、キルヂャーガの浮び上つた時、我々の喜が糠喜となつて、思はぬ恥辱を取つた事が今に忘れられぬからだ。ところがヤーゲレノフは我から沈默を破つて「だからと云つて僕は今更君等と分離する氣は些とも無いですから、その積りで。僕はどうあつても今迄通りの主義で諸君と一所に居ます。今更、今更分離するなんて、そんな破廉恥な事はないです……。」

と甚く羞ぢて顏を眞紅にする。此清い所が此男の身上、これだから此男は可愛い。僕等も大にその心情を諒としてはやつたが、しかし虛弱で風にも耐へぬ甘育ちの病身な彼には、吾々スパルタ風の生活はちと荷が勝ち過ぎる事は高々察して居たし、且つ彼が贅澤が出來ぬまでも、さして不自由させず、我性癖に愜つた生

涯を營みつゝ好きな數學の研究も出來るのを僕等が妨げる筈はない、換言すれば、義に於て居ねばならぬ所だ。

ヤーゲレノフは一定の學資が入る、僕等は兎も角皆にはならぬ振り仕事に露命を繋ぐべき運命を荷うて闘に一揮つても畢竟するに一個の賤民に過ぎぬ。

そこで僕等は分離して獨立の生活をするやうに熱心にヤーゲレノフに勸告して、却々承知せぬのを無理に說伏せたのであつたが、其時彼の云ふには、

「そりや成程今の生活は不便ですな。此生存法には條理統制的の分子が含まれてをるです　實を云へば、僕は始終非常に苦痛であつたです……それなら然な事は云はんですから、何卒今晩僕と一所に晩餐を食つて下さい、而していつでも……ソノ……都合の惡い時には、僕に云ふと、かうしておいて下さい。」

其晩僕等は大に晩餐に錢をやつて、其上ヤーゲレノフから大枚五留の金を借りて、其後とても二人は久しい親友であつた。

僕等二人は尚ほ多時お婆さんの貸間に燻つて貧苦を忍んでゐた。間代は一留半輸けてくれたから、月にたツた三留であつた。其内に試驗が切迫する。僕等は何しろ奬學給費に有附きたい一心から、いや凄じい勢で準備をして、遂に優等の成績で及第する、然て銘々奬學給費を貰つたから、市の郭內へ引越して、天晴一廉の長袖學生に成濟した。

それで其產開も[illegible]さ。

—ボッヘンコー作—

猶太人の浮世

（一）

カインは窄頭の、顔の痩削けた、赤銅色の、矮小な、進退の敏捷い猶太人である。頰にも顋にも鬖々と生えた、赤毛の剛い鬚髯の中から顔を出してゐる所は、縺れた古フラシテンの枠の中から竊と浮世を覗いてゐる肖像、ト見立てれば、彼の薄汚れた帽子の眉庇は差詰め其額縁の天にならうといふもの。

その眉庇の下の、矢張赤ちやけた、宛も挘つた如き眉毛の下に、灰色の眼が孑然と光つてゐる。抑も此眼は、永く一物の上に留まることは稀で、絶えず惘々と四方を[illegible]、物に怖ぢた如く媚ぶるが如き微笑の色を相手嫌はずに振撒く。

此微笑を見た者は誰も然う思ふ。こんな笑顔をする者に限つて、何につけても先づ惘つく、それが些の機にも直ぐと昂じて戰々となる。始終間斷なく張詰めた此感情に、神經は漬されて、骨張つた身體を裹む帆木綿の衣服の襞積の何時も慄へて見えるにも、是が感染つてゐるのかと怪まれる。

本名はハイム・アアロン・プルウキッツと歷としてあるものを人は皆カイン〱と呼ぶ。ハイム云々といふよりは、此方が簡單もあるし、通りも好し、それに生恥も澤山晒されて飛んだ好いとて用ひられる。矮小な、弱々しい、始終惘々してゐる親仁には相應はぬ名ではあるけれど、人は反つて此名ならでは彼の體も心も表はすに足らず、彼に恥を與へるには恰好といふやうに思ふのであつた。

浮世を掃出された此町の住人は喜んで人を侮辱する癖があつて、機會さへあれば必ず之を行る。といふも先づ差當りかうでもしなければ浮世恨めしの一念を霽す道がないのである。カインはかういふ町に住んでゐるのだから堪らない。とはいふものの、カインを辱めるのは造作もない事で、人が一寸嘲弄れば彼は只もう恐入つて茫爾するばかりで、時には手傳つて我と我を嘲ることもある。人々に立交つて其日を送り得るこれがお禮心といふのかも知れぬ。

言ふ迄もなく、彼は商賣で生計を立てゝゐる。木箱を腕に町々を經廻りながら、甘えたやうな纎弱い聲で、「靴紐はよろしう、ピンにブローチはよろしう、さア小間物一切何でもござい。何か小間物はよろしう、」と呼びあるく。

も一つ親仁の特色は耳が大きい、立つた耳で、此奴が絶えず動く。宛然臆病な馬のそれのやう。

彼の商して歩行く町はシハンと謂つて、人間の屑の掃溜のやうな地。幅の狹い町で、屋棟こそ高いが、貧乏くさい古家が建込んで、安宿、居酒屋、麵麭屋、乾物屋、古鐵屋、古物商など軒を並べてゐる。此外盜賊、贓品買、露店商人、食物屋なども大分居る。家並の高い所爲か、滅多に日の光が見られぬ地で、名物は泥濘と醉人。夏はいつもむツとする程の物の饐えた臭氣に、腐敗したウオツトカの匂がする。太陽も此處の泥濘には恐れを爲すと見えて、朝の内[illegible]と覗いて視るばかりで、直ぐと蔵れて了ふ。

山なぞひに逶迤と開いた町で、その山の裾には大川が流れてゐる。それで町は何時も汽船の水夫、艀の船頭、荷揚などで鼻を衝くやう。皆醉拂つて狂ひ廻る、それを又盜賊が窺窬つて泥のやうになつた處を引剝ぐ　町の兩側の人道に

沿うては、肉入饅頭、鶏卵饅頭、腸詰などを賣る屋台店が出てゐる。島から上つた船頭共はその煙の出るやつをガツ／＼食つて、酔拂つては獸の唸るやうな聲で歌を唱つたり、喧嘩つたりする。小商人が各自の商賣物を責め立てて、甲走つた聲で客を招く。買ふ者、賣る者、仕事を待つ者、人の油斷を覗ふ者などで雜沓する中を、推分け／＼荷車が轟々と通る。かうした雜多の物音が縺合ひ、紛糾り、旋風のやうに湧起つて、閉塞と泥濘のやうな町中を通り、其處らの家の壁に捲着かるのであるが、その又壁といふのが土壁の剝落のした、青苔のやうな黴の生えた、疵だらけの奴である。

泥の撥返る、耳の聾ひるばかり騒がしい、聞苦しい言葉の飛交ふ、此町中を絶えず飛廻り跳廻つてゐるのが子供で、大きいのもあれば小さいのもあるが、何奴も此奴も皆汚穢げな、空腹らしい、惡摺のした小僧ばかり。朝から晩まで驅廻つて、商人の情やら小さな手先の早業やらで生命を繼いで、夜は其處らの門下、饅頭屋の荷箱の陰、往來よりは一段低い穴長屋の端の門處で寢る。夜が明けると直ぐ、藁蓆のやうな眼病患者のその骨ばかりの姿が町に顯はれて、旨さうな物と見れば、賣物でも偸む。賣物にならんやうな物なら、強請つて貰ふ。親はといへば、其邊ら中にあるので、誰と名差は出來ぬのである。

かうした町をカインは毎日彷徨いて、そぼろな風俗の女を相手に、小間物を賣行く片手間にカラスも貸す。二十文で二文が利を取るが、滅多に貸されたことがない。其外仲々の掠をする。出手へ徒ほうけて歸ることも忘れた日傭取などなら、襯衣、帽子、長靴、ハーモニカといふやうな物、神さん達なら、ペチコート、上衣、三文程の裝飾品の類、何でも買つて、十文も利鞘を見れば、交換もすれば賣却もする。而してヘツタやたらに嘲られ、打擲され、時としては賣溜を強奪されるけれど、彼は哀れにも溫順しく只莞爾するばかりで、曾て愚痴を言つたことが無い。

屢有る事だが、町の薄暗い片隅で、空腹紛れに又は爛醉の氣を負つて、隨分殺人罪をも犯しかねまじき面構した壯者二三人に捕捉り、鐵拳で撃倒されたのか、恐怖しいので平臥つたのか、其足下に蹲踞ひ、齒の根も合はゞこそ、顫へる手先にポケットを探りつゝ、祈るやうに言ふのを聽けば、

「親方さんや、後生だ、悉皆奪ることだけは堪忍してやつてお呉んなせえ……悉皆呆けツちまツちや、親仁明日から商賣が出來ねえからね。」

ト頭の剝けた額中を笑みかたまけて皺を躍らせる。

「世迷言吐すない！ 勿々と三十文出しツ了へ。それで我慢してやらア。」

トその親方さん達は、牛乳が欲しけりや乳房を勞はれといふことをチヤンと心得てござる。

で、出すものを出して親仁は起上り、彼等と岐れて莞爾しながら連立つて行く。彼等も亦要らざる虛榮を棄てて談話をする、商賣ふ。目的を達してからは磊々落々の、至極濟然したもので。カインも亦奪られてからは、いとゞ寠れた顏に一層寠れが見えるので、何の氣も無ささうである。

猶太人仲間とは折合が惡いと見えて、彼が仲間と一所に居たことは滅多に無い。仲間の猶太人も亦彼をば卑めて與に商するを愧づるやうである。町での噂では、親仁は破門されてゐるのだと云ふ。それで大道商人などは一時彼の顏さへ見れば、ソレお構ひ老爺が來たと言つたものである。

しかし是は信にはならぬ。尤も宗門破りと謂はれても仕方がない所もあることはある。安息日に安息せず、又掟通り精進を守らぬ。何故お宗旨でならぬとある物を食ふ、其理由を問かうと詰寄る者があれば、彼は容み上つて、莞爾して、冗談言つて紛らさうとする。それでも迫付かずば遁避もするが、未だ曾て宗旨の事を口にしたこともなく、猶太人の風習に付いて云々したこともない。

であるから町の宿無し小僧までが馬鹿にして虐める。泥土の塊や西瓜の皮、手當次第に拾來つて、背中に打附ける、荷箱に抛込むを、親仁は溫柔しい言葉で制することもあるが、多くは人群へ逃込んで了ふ。小僧共も此處迄は追蒐けて來ぬ。來れば踏潰される虞があるから。

カインはかうした憂き日を送つてゐる。誰一人知らぬ者も無い代り、誰にも虐められ、戰々しながらも商してはニヤリ〳〵と笑つてゐたのであるが、このニヤリ〳〵で誘出したのか、一日思ひがけず幸福の神に笑顏で迎へられたのである。

（二）

浮世に鬼の住まぬ隈は無い。シハンの鬼は好男子アルテムである。身體ばかりは拔群に大きいが、から子供で、頭顱は眞圓く、濃い黑髮を蓬と振亂してゐる。毛の性が柔軟いので、華面白く環を捲いて、額へ垂れて、天鵞絨の如き美しい眉を掩ひ、大きくて切長で常も濕味を有つた鳶色の眼に屆きさうである。古代彫像にでも有りさうな骼構の善い通つた鼻筋に濕氣の絕えぬ脣、それを黑く毿々と掩ふ口髭、ト一々算へ立てる迄もなく、圓く綺麗な淺黑い此壯夫の面の造作は何から何迄端麗書くが如くで、その眼の朦朧とした所までが、錦上更に花を添へて其美を發揮するが如くである。胸幅廣く、丈高く、爽颯とした其姿、脣邊に不斷得々と無意識の微笑を湛へて、彼は一身にシハン中の男の嫉み女の贔屓を負うてゐる。で、晝間は大抵何處か日當の好い處に、其大きな物臭い身體を横たへ、悠然と呼吸をしては大きな胸に高い穩かな浪を打たせてゐる。

年の比は二十五六であらう。三年前に土方の本場といふプロムジノ村の組に交つて、此町へ流込んでから、結氷で川が杜塞つた後も、此地に居殘つて冬越をした。ナニ仕事はせずとも、此腕節と此顏で面白をかしく世は送られると悟つたのである。で、其儘自然と根が生えて、出稼の土方が何時か饅頭賣の娘、小商人の女房など、シハン中の女の贔屓男になつて了つたが、これにさへ成つてゐれば、飯にも酒にも烟草にも事を缺かぬ。また此三つにさへ事を缺かねば、其外に何の慾もないところから、ツイ其儘に世を送つてゐる。

女仲間は此男の事で喧嘩の絕間がない。鬪合つたり攫合つたり、相手が亭主持と見れば、亭主に讒訴ける。亭主は憤つて女房を喰はす——イヤえらい騷動であるが、アルテムはそんな事は空吹く風の、我には一向關係の無い面相して、背を日に晒し、猫の如く伸をし、例の三つの慾の何かが萌す迄は、動かうともせぬ。

彼が喜んで臥ころぶ處は町の縋つた山の巓で、此處からは直下に川を眺め、川向うは茫々と末は空なる野を見晴らし、野の草が萋々と靑毛氈を平に敷いた上に處々灰色に村が霞む邊は、只洞開と、蕭條に、眼に見えるもの皆綠色であるが、一たび首を回らして左手を瞰下せば、町の首尾歷然に見えわたつて、浮世はいつも沸返る程の騷ぎ。其どさくさの憂き中に覗入れば、見識つた姿の足搔き廻るのも見え、市聲の噴雜と飢を訴ふるが如きも聞えて、彼は何か思ふ所あるやうな面相になる。身邊を顧れば、

ブリヤン草が山なぞのに生茂つた中に、處々僅の見る影もなく凄寂つたのが、悄然と、さて接骨木は頭を挖られたやう。此處らあたりで始終見掛けるは寄合ひ付ける鐵夫の姿で、醉つて倚も悉けば、一時にもむぶ、衣服の綻を繕ふこともあれば、仕事歸りか、喧嘩帰句なら、頽然として休息してゐることもある。

アルテムは此仲間の受がわるい。大力無雙で、滅多無上に亂暴を仕散らす上に、食ふ物は樂々と食つてゐる。これが忌々しくてけたいがわるい。それに這奴好い目が出ることがあつても、ついぞ朋友と其喜びを分つたことが無い。達引ッ氣と言つたら藥にしたくも無くて、いつもねぶいッちやう陰物である。誰ぞが話しかければ、厭な面もせず相手にもなるが、我から話しかけることはなく、飲代を貸せと言へば貸しもするが、我と進んで振舞つたことがない。ところが、此仲間では、一文でも手に入れば、皆打寄つて飲んだり食つたりして了ふのが習俗である。

アルテムを戀の使が訪れるのも矢張此灌木の間である。戀の使はおんぼろの汚穢い乞食娘か又は物貰ひの小僧。皆ねッからの子供で、七八が多く、十といつては滅多に無い程でも、容易ならぬお使といふことを能く心得てゐて、物を言ふにも細々と小さな面にこましやくれた祕密の色を忘れずに浮べてゐる。

「叔父さん、あの、あの、マリヤの叔母さんがね、あの、あの、あの、宿……宿六が留守だから、お前と一所に向岸へ遊びに行かうッて、だから、あの、あの、舟を、あの、舟を拵えてお奥れッて、私お使に來たんだ。」

「おゝ、」とアルテムは物臭さうに返事して、美しい眼元で幽に笑ふ。

「乾度、あの何だッて……」

「好々……だが、待ちねえよ。マリヤの叔母さんッて誰だッけえ」

「あら、腸詰の屋臺店出してる、あの叔母さんだい。」と咎めるやうに言ふ。

「腸詰の屋臺店を！　あの古鐵屋の隣のか……」

「古鐵屋ッて、あの、あの、アニシヤの叔母さんの店だぜ、あの隣だア。叔父さん知らねえのか？」

「知つてる〳〵、冗談言つただ、加之もマリヤの叔母さん古馴染とけつかるわ。」

でも小僧は胡散さうな面をして、駄目を押す。

「あの何だぜ、小ぼけな頬邊の眞紅い叔母さんだぜ。鰻の隣だよ。」

「ちや、鰻か。面白え事言きやがる。知つてるだよ。歸つたら、然う言つて奥んねえ、承知のしたッて。好いか、忘れるでねえぞ、承知のしたッて、さう言ふだぞ。さア、歸つた歸つた。」

茲に於て小僧は莞爾となつて、

「叔父さん、駄賃お奥んな。」

「駄賃奥んろ？　錢ア無えも知んねえ。」

ト兩手を一時にズボンの隱袋に入れる。ところが錢は何時も多少とも隱袋に在つて、使の小僧は又滿面に笑を湛へる。で、逸散に腸詰の叔母さんの許に走つて、使命を全うしたことを告げて、其處で又駄賃を貰ふ。小さくても、錢の價値は知つてゐる。空腹じいばかりでなく、烟草も吹せば酒も飲むので、其相應に使途が有るから、これを欲しがる。アルテムはかうした戀の幕を出した翌日は、浮世の事には例よりは更に無頓着になつて、譬へば眠れる獅子の感あつて猛からざる如く、凛々として美男が獨り水際立つて見える。トから飢を知らず、寒さを知らず、殆ど無意識の、眞に安泰な世を渡つてゐるのであるが、嫉み嫉みの中に身を置きながら、安泰な世を遂り得られるのは、彼の身はおッそろしく堅

い其拳固の陰に蔵れるからである。

けれど、時とすると、彼は青色の眼に鋭く険しき[illegible]を湛へて、天鵞絨の如き眉を佶と寄せ、浅黒い[illegible]に深き八字を刻むことがある。で、やをら身を起して、小舎を出で町を行き、熱閙場へ近づくに随れて、徐々瞳を見張り、小鼻を怒らせる。左の肩に地粗の羅紗の短い上衣を引掛けて、右は褐色の、着込んだ襯衣を其儘露はしてゐるが、その肩の頑丈なことは！　長靴は嫌ひで、常住草履を穿き、白脚絆をキリヽと紐で結へ、其腰の太い所を示せて、汗漫と、真黒な夕立雲の巷を壓して行くやう。

町の者は皆其習癖を知つてゐるから、顔色で直ぐそれと看て取つて、低聲に相警める、「ソラ、アルテムが來るぞ……」

皆狼狽てゝ貨物を並べた戸板を居去らせ、烟の立つ鍋を引込め、荷箱を片寄せて道を譲り、媚ぶるが如き笑顔で迎へて會釋する……皆懐畏のである。その憚られ、畏れらるゝ中を彼は茨の花の、美しい中にも刺を藏つて、默然でのそりのそりと行く所は、如何見ても何か斯う大きな獣。

只見ると、彼の足は路傍の戸板に觸れて、咄嗟といふ間に、牛の胃袋、腸、肺などの煮轉ばしが紛々と消飛んで、往來の泥濘へ落ちる。雑物屋はリッと言つて立騒ぎ、流石に腹に据ゑかねてか、口汚く罵るを、アルテムは平氣な、とはいひながら何處か薄氣味のわるい面相で、

「何だツて其様な處に突立つてけつかるだア？」

「だツて此處は路傍だ。路傍で店を出してるに仔細は無え筈だ。」

「己が其處へ行きてえんだら、如何しる？」

ト頬骨の下に疾瘤程の力瘤が入つて、眼は血走つて炎えんとする。雑物屋はこの權幕に氣を呑まれて、

「往來は廣いや……」

トうじやじやけて了ふ。

アルテムは又汗漫と向うへ行く。跡で雑物屋の親仁は居酒屋で湯を貰ひ、商賣物を洗ひ清め、五分も經つた頃には、又町中へ響く大聲で喚び立てる。

「さア〳〵入らはい！　腸に肺の臓に心の臓！　煮立てのホヤ〳〵だ！　おい親方！　口切だから舌を五文に輸けとくぜ。買つてきねえ。お神さん咽喉は要らねえか？　さア〳〵心の臓の煮立！　腸に肺の臓！」

百の聲千の聲が紛糾つてワーッと聞える中に、鑄物、火酒、汗、魚、松脂、葱などの匂が一つになつて、馥氣とする。丸太に土を被せた鋪道の上を彼方此方と彷徨き廻つて、大勢の者が叫び、商ひし、笑ふ中で、荷馬車の馬は立竦んでゐる。

向上げる空は蒼かるべき筈のが、人の活氣と湯氣と烟に黒樒く見え、家々の落す影に、町中は濕ついて、處々泥々と濘る。

「小間物はよろしう！　絲に針はよろしう！」

ト、カインは呼びながら、アルテムの後から行く。凡そアルテムを恐れると云つて、此親仁程恐れる者も又とあるまい。

「さア饅頭は好か、お饅の焼立！」ト申走つた聲に呼立てるは新造の饅頭屋。

「葱や葱、青葱は好か！」ト其隣でも叫ぶ。

「クワース〳〵！」と繊嗄聲を振絞るは、侏儒な、横太りの顔の皺亂な老爺で、商賣物のクワスの樽の陰に蹲踞んでゐる。(クワスは麥酒のやうな飲料)

襤褸婿さんと妙な渾名の有る男が、荷揚らしい風體の者を提まへて、薄汚れた自分の襯衣を賣附けようとて、大聲に熱心に喚いてゐる。

「だツて、兄貴、お前其様な事言ふけど、こんな素晴らしい襯衣がよ、二十文やそこらで何處で買へる？　こんな襯衣を着て歩行いてみねえ、

其處らの女子總惚だ！　百萬兩持つて嫁に來たいと言はア！」

喧々と獸の吼ゆるが如き人に罵れた聲が街中に飛交ふけれど、何れも此れも似寄つた聲でさのみ耳立たぬ中に、突然に子供の金切聲が耳を劈く。

何卒や一文與つてお吳んなさいまし……イエスへのお賽錢だと思つて與つてお吳んなさいまし……爹も阿母もねえ孤兒でございます……」

此處シハンの町で、基督の御名の唱へられるを聽くと、餘り移りが惡いので何だか妙な心持になる。

「ちよいと〳〵、アッちやん！　ちよいとお出でよ。まアお前は如何したのさッ　二三日些とも顏を見せなかつたぢやないか。」

ト、聲に媚を帶びてアルテムに話しかけたのは、お俠のダリヤとて肉入饅頭を賣る女、兵士の嚊である。

「おゝ忙しねえか？」

ト、アルテムは平氣なもので、足で一寸惡戲をすると、ダリヤの荷は顚覆つて、黃色い饅頭が轆轆と大道を轉がり、湯氣がプーと立つ。ダリヤは武者振りつきさうな權幕で、

「何を爲るんだ、この馬鹿野郎！　癩病患者め！　アストラハンの駱駝め！　私が地面なら、手前なんぞ載ッけてやらねえよ！」

皆洪然と笑ふ。かうは言つても、ダリヤは直き勘辨して了ふ、それは皆が知つてゐる。

で、アルテムは相變らず汗漫と行く。衝突つたり、のし懸つたり、足を踏付けたりして行く〳〵。向う處低聲に相詈むる聲が蛇の這ふ如に逶迤くと、其から其へと傳はる。

「ソラ、アルテムが來るぞ！」

言葉なら僅二言であるけれど、初めて聞いてさへ、是が何となく不氣味でツイ道を讓る氣になつて、悔々ながらも珍らしさうに、如何にも頑丈に出來た其後姿を見送る。

只見ると、アルテムは相識の土方に遭つて、挨拶しながら、グッと其手を握る。鐵の搾木にでも懸つた如き痛さに、相手は覺えず悲鳴を揚げて、而して罵る。スルト又肩先を抓みなどして、痛い目見せて默つて平氣で顏を見てゐる。抓まれた方は息氣も塞りさうなので、大藻掻に藻掻いて、聲を抄めて、

「放せッてッたら、は、は、放さねえか……この、獄卒め！」

然れども獄卒は頑として其心を動かさぬこと、裁判官の如し。

カインも始終アルテムの隨い手に懸つて、手玉に取られる。惡戲な子に懸つたら、甲蟲も慘澹なものである。

何の爲にこんな眞似をするのか、眞意が分らぬ此大力の奇癖、これをシハンでは「アッちやんの惡戲」と稱へる。これが爲にアルテムの敵は夥しく出來たが、しかし誰にも其怪力の鼻を挫くことが出來ぬ。尤も試みた事はある。一度などは、これならばと皆も謂ふ、鬼とも組むべき七人の壯漢が、心を協せて、一番懲して吳りようと懸つたところ、其中五人は格別の事もなく濟んだが、二人だけは反對に殘刻い目に遭された。又一度、嚊を寢取られて恨骨髓に徹した屋臺店の亭主連が、居牛者何某とて、田舍廻りの力持などと力量を較べては、滅多に負を取つた事の無い町で隱れのない大力の男に、少からぬ金を與へて、アルテムを半殺しの日に遭さうと企み、彌之を咬合せたところ、此方も喧嘩なら買つても行らうといふ男、忽ち鐵拳の一撃に敵手の腕の蝶番を引外し、胸へドンと吳れた一突に、さしもの居牛者も、呍といつて仰反つて了つた。こんな事でアルテムの威勢は益々震ふ。隨つて敵は益々殖える。

敵は殖えるが、彼は倘ほ其惡戲を止めぬ。道を塞ぐものは、何の容赦もなく蹴散らし蹂躙つて推通る。如何いふ氣でこんな事を爲るのか、一向分らぬが、或は野の子林の子が、その野にも林にも離れて、町の天地に彷徨ふ恨を是で霽してゐるのかも知れぬ。町住居は心身を蠹毒する、それを朧氣にも悟つて、彼を俘にせんとする運命の手を免れようとて、今ぞ一期の浮沈と藻掻いてゐるのかも知れぬ。惡戲の果に警察に揚げられる事もあるが、彼は盜賊ではない、盜みをする程の智慧がないのである。警察でもそれは知つてゐるから、其怪力を奇なりとして、玩弄物に扱ひ、餘の者よりは手加減をする。けれど、警察へ揚げられることは滅多に無い。惡戲の果は大抵そんじよ其處らの可怪な宿へシケ込んで、懐ふ人に機嫌を取つて貰ふ。亂暴擧句は毎も憤然として、無氣味な眼差で、その活潑せぬことといつたら、宛然獃子で、いや氣六かしいの、何のと。で、懐ふ人といふのは骨の髓まで香油に染みた强從しい商人の嗅か何かで、此獸を我物顔に、其癖腫物に觸るやうに取扱ふ。

「ねえ、アッちゃん、もう一本麥酒を通さうか？　それともリキュールにしようか？　何かお肴も要らなくッて？　本當に厭になッちまふよ。何故さう今日は活潑しないんだらう……」

「蒼蝿い！」

トいふ聲も冴えぬ。そこで女も少しは差控へて、五分も經つたころ又酒を進める。素面では常も無愛想で面白くないと思ふからで。

運命の神も滑稽過ぎる。かういふ男を不圖カインと絡ませたのである。

（三）

それは斯らいふ譯で。

一日例の惡戲、それに伴ふ暴飲が有つた擧句、女に連れられて其家へシケ込まうと、町外れの狹い寂寥しい小路を蹣跚しながら行くと、待伏してゐたと見える四五人が、バラ〳〵と現はれて、矢庭に撃つて蒐つて、呀といふ間に打倒され、酒に力が脱けて思ふやうに働けぬところを、小一時間も日頃の恨を思ひ知らされた。連の女は勿論逃げて了つた。暗夜の事なり、人通りは無し、思ふ樣痛い目見せるには屈强であるので、相手の奴等は力限り根限り踏んづ蹴つするのであつたが、軈てこれも草臥れて漸う手を收めた時には、人間二人地上に踣つてゐた。一人はアルテムに、今一人は「赤山羊」と渾名のある男。

さて此動かぬ人間二人、この始末は何とすると相談の結果、アルテムは流氷で壞れた古舟が川端に釣してある其下に匿し、頻りに呻く赤山羊の方は之を擔いで行くことに決めた。

地面を曳摺られて川端へ行く途中、餘りの痛さにアルテムは不圖人心地が附いたが、待て暫時、今は死んだ眞似をしてゐた方が結句身の爲と心附いて、痛さを怺へて默つてゐると、引摺つて行きながら、口々にアルテムを罵つて面々の手柄話をする。それを聽くと、ミーシカ・ワウキローフは始終隙を狙つて肩胛骨の下處を突かうとした。これは心臟を破裂させうが爲だと云ふ。スホプューエフは又土手腹ばかり狙らつた。何故といへば人間は腸を痛めたが最後の助、食物が無益になつて、幾ら食つても力は出ぬものだと云ふ。ロマーキンは二度まで腹へ飛上つたと吹聽する。他の奴等もそれ〴〵に目覺しい働をしたとて、自慢たら〳〵舟の在る處へ來て、其下へアルテムを推込み、かうして置けばもうこれで假令や息を吹返しても舊の體になりやうはないと、一同安心して引揚げて行く。アルテムは始終の話を殘らず聽取つて置いたのである。

ト一人取殘されて闇夜の中で舟の下に臥つてゐたが、滿水の時浪に打上げられた芥の上に臥つてゐるものと見えて、濡々する。折しも頃は五月の事とて夜氣は仲々冷いから、時々正氣附く。其度に水際へ這降りようとしては、全身に尋常ならぬ疼痛を覺えて又正氣を失ひ、正氣を失つては又正氣附く。言ひ知らぬ痛さの上に、搗てて加へておそろしき渴を覺えるけれど、如何しても這降りる力が無いのを、川水は嘲る如く、何處かツイ其處らで、岸を拍つ音がピチャ／＼とする。けれども動けば痛いから、夜一夜其處に平伏してゐた。

　ふと又正氣附いて見ると、嬉しや疼痛も大分薄らいだやう。傷で腫上つた脣を幽に蠕かして、辛うじて一眼を開いて見ると、もう夜が明けたか、日光が船板の隙間を漏れて、其處らが薄朦朧と見える。で、又辛との思で手を擧げて面を撫廻すと、濡れた布切が手先に觸つて、胸にも腹にも其が載せてあり、肌は全然露出になつてゐるので、寒さに幾分か苦痛を忘れてゐるものと見える。さては誰か側に居るなと心附いて、

「水ウ與れ……」

トいふと、枕元からヌッと手が出て、壜の口を口元へ宛がつて與れた者があるが、手が顫へるので壜が躍つて、齒に戛々と當る。アルテムは水を飲み終つて、誰が飲ませて與れたのかと、其方を見向かうとして見たが、痛くてそれも叶はぬから、皺嗄聲で、斷續に、

「ウォットカ……飲みてえ。飲んで身體へも抹込みや……起きられるも……知んねえ……」

一起きられる？　駄目だ。起きられるもんで。宛然土左衞門のやうに青膨れに脹れてゐなさるンだもの。ウォットカは此處に手着かずのが一本ある。呈げようかね？」

　ト聲を偸んで、悄々しながら口早に言ふ。聞覺えのある聲ではあるけれど、誰の聲とも憶出せぬが、兎も角も與れろといふ。

　スルト又其男が枕頭からウォットカの壜を出して與れたが面を視られるのを厭つてゐるのは、擧止にもそれと知れる。アルテムは辛うじてウォットカを一口飲んで、又一眼を開いて熟と視ると、黑々と黝んだ舟底は水に濡れて處々菌が生えてゐる。

　壜の四半分も飲んだ時、彼は幾らか樂になつたか、吻と深く溜息をして、力も艶もない淋しい聲を抄めながら、

「酷い目見せをつたな……今に見ろ、癒……癒つたら、野郎共……アイタ、……

　ヒョイと飛退く人の氣色がして、後は又寂然となる。ピチャ／＼と浪の音が枕に通つて、何處かで遠く／＼聞える木遣音頭、エンヤ／＼と掛聲もする。何か重い物を曳いてゐるらしい。スルト、ウォルガ通ひの汽船の汽笛がけたゝましく響き互つて、其聲尻が忽ち切れると、今度は轟といふ音。思ひ做しか永く、陸を別れて行く悲を音に立てて鳴くやうに聞える。アルテムは側の男が何か言ふかと多時待つて見たが、何の音沙汰もない。青苔に埋もれた舟底の下から視ても重さうに舟は搖られて、あはや今一搖に機を打つて撻と墜ちて、其下に押潰されさうな氣がする。

　之を視てゐると、忽然として果敢ない今の我身が熟々思はれて、悲しくもなれば、忌々しくもなる。町第一の大力の、美男の中の美男の己を、よくもから見る影も無い態にしをつたなと、力の無い手に額や胸の搔創や浮腫を觸つて見てさも口惜しさうに罵つて……さて泣出した。吸上げて泣きながらも、尙ほ悲しげに罵つて止まず。眼を瞬いて堰り來る泪を絞れば、大粒な熱涙がほろ／＼と頰を傳ひ、耳へ流込む……が、しかし泣いたお蔭には、結ぼれた胸が

稍開いたやうに覺える。

「今に、おどれ・如何しるか見とれ！」

ト泪の間に呟くのであつた。

忽ち何處か其處らで何やら沸々言ひ〳〵、忍音に泣く者がある。薄氣味は惡いが、我眞似を爲れるやうで癪にも觸るから、アルテムは儼然となつて、

「誰だア？」

けれども返答をせぬ。

滿身の力を籠めて横向になり、痛さに物凄く呻きながらも、辛と半身を起しかけて肱を枕き、暗中を透して見ると、舷の下の處に小さく丸まつた人の姿が見える。絲の如に纖弱い長い手で兩膝を抱き、膝の間に額を埋め、肩を慄然と顫はせてゐる所は子供でないかと思はれる。

「おい！　此處へ來う。」

ト呼べども答へず、只もう瘧でも震つてゐるやうに戰々してゐる。痛さは痛し、薄氣味は惡し、アルテムは眩暈となる拍子に大喝して、

「やい！　來うといふに來ねえかッ！」

ト叱責ける。

スルト其返答に、わな〳〵しながら早口に言ふ言葉が、止度なく泥々と流出るのを聽けば、

「何故其樣に叱んなさるの？　私些とも叱られる覺えは無え　親方が泥塗になつて打倒れてゐなさるから、私ゃ水で傷處を洗つて上げたんだ。水が飲みてえッて言ひなさりゃ、水を飲ませて上げたりさ、ウォットカを飲ませたり、泣きなさる時にや手前も泣いて、ほんによ、親方の唸聲を聞く毎に、腹ン中ア煮えくり返るほど切ねえ思して介抱して上げりゃ、これだもの。ちえッ！　偶に親切にすりゃ、反つて其が仇となつて叱られるたア、神樣も餘程聞えねえ。え〳〵何たる因果な事たらなう？……」

ワッと泣く聲に言葉は斷絶れて、彼は頭髮を挘り身を揉むのである。

「カインのお老爺か？　うゝ、お前か。」

「然うか、お前が先刻から其處に居ただか。己ア誰だかと思つたら、お前だつたか。餘程奇異けた老爺だなア！　一寸此處へ來う。」

餘りの思懸けなさにアルテムは稍狼狽した氣味であつたが、それと同時に忽ち嬉しさが込上げて、カインが例の滑稽けた面で、金壺眼を憂慮しさうに瞬きながら、悧々もので四ン這に這つて來るのを視た時には、哈々と高らかに笑ふのであつた。

「悧々しる事ねえだよ！　如何もしやしねえといふに。」

ト言つて先づ安心させる。

でも親仁は足元まで這つて來たばかりで、其より此方へは一歩も進み得ず、其處から怖る怖る覗込んで、莞爾してゐる。今にも蹴付けられるかと、それのみを恐れて媚を獻ずる態がある。

「お前だつただか？　誰に賴まれて來ただ——アンフヰサにか？」

ト言ふも切なさう。

「誰にも賴まれやしねえけどね。」

「賴まれねえ？　噓吐け！」

「噓ぢやねえ、眞の事たよ。」と口疾に言つて、「可哀さうに誰にもたのまれたんぢやねえけど、實はかうなんだ。私がね、昨夕グラビローフカで茶を喫んでると、親方が袋叩きになんなすッたといふ噂さ。私ア眞實にしなかつたね。馬鹿言へ、親方は今サムソンだ、誰が勝てるもんで、袋叩きが聞いて呆れるッてね、腹ン中で冷笑つてると、來る者も〳〵さう言つて、好い氣味だッてね、お前さんの惡口言つちゃ笑ふぢやねえかね。そいから私も、ぢゃア眞實かしらと思つて、聞いて見ると、親方ア此處に打倒れてゐなさるッていふ話さ。もう幾人もお前さん

の死んだやうに成つてゐなさる所を見て來た者が有るンさね。そいから私アグラビローフカを飛出して此處へ來て見ると、成程噂の通り親方ア打倒れて唸つてゐなさる。そりよを見ると、私ア、殘刻い事をしをつた、彼様に強え親方を打殺しッちまふた情ねえと思つてね…親方、憤んなすッちや不可ぜ…實ア私ア親方が可哀さうだつた。まア水でも汲んで來て洗つて上げようッてんで、川の水を汲んで來て傷を洗つて上げると、親方ア息氣吹返した。私ア嬉しかつたね。から言つても、私が猶太人だから、親方ア眞實にしねえかも知れねえが、私ア嬉しかつたと云ふと其理由は…私ア眞實の事を言ふんだが、親方憤んなさりやアしめえね、大丈夫だらうね？」

「ソーレ十字を切るだア…假令雷に撃たれて死ぬ法もあれさ、これだら好かッぺえ。」

ト痛さを耐へて辛うじて誓文する。

カインは尙も膝を進めて、私語き立てる。

「ぢや、言つちまふがね、外の事でも無え、私の身の上だ。ま、如何なに辛え事だと思ひなさる？ 親方の前だが、お前さんに打たれたのも一度や二度ぢやねえ。猶太人だッてんで始終苛められる。ねえ、誰ア言ふめえ？ さう言つちや何だが、お前さんは私を呪ひまで爲なすッた。まア、後生だ、腹ア立てねえで聽いてお吳んなせえ。私ア何もお前さんばかしだとは言はねえ、皆猶太人を目の敵にするけれど、猶太人だつて人間でねえかね？ 同じ神樣の子でねえかね？ お前さん達が神樣から魂を受けてるンなら、猶太人だとッて矢張神樣が魂を授けて下すッて、此世へ生れて來たんぢやねえかね？」

ト何やら狼狽て返答をも待たず、疊みかけて問ふのであつたが、日頃胸に累積つた無念殘念の言草に、不圖魂が入つて煮返り、沸騰り、熱き泉と成つて沸々と肺腑中より迸り出るが如くである。

聞けばアルテムも流石に難くなつて、冴えぬ聲で、

「もう措焉え。其代是から何だ…已アお前の身體に指一本でも觸るめえ…若しかヒョット他の奴等がお前を如何ぞしただら、已が打挫いてくれべえ。な、そんだら文句有るめえ？」

「そこだ！」ト カインは思はず調子づいた聲を逸ませて、グッと唾を呑込み、「そこだてね！ お前さんが惡かつた…御免なせえよ。憤んなすッちや不可よ。えて自分が惡かつたと思ふと腹の立つものだけどね。お前さんが惡かつたと、よしかね？ だッて他の奴等から視りや、親方、お前さん方が餘程罪が輕いや。そりや私もチャンと知つてら、チャンと心得てまさ。他の奴等ア私だけに汚穢え唾を吐懸けやアがるンだが、お前さんな誰彼の見界なしなんだ。今迄親方に殘刻い目に遭つた奴ア澤山有るが、私なんざ、まア、これで、輕く濟んでる方さね。だから私ア然う思ふんだ、親方ア何も私が猶太人だからッて毆打んなさるンぢやねえ、親方から見りや、私も他の奴等も同じ事なんだ。私の方が好いッて譯もねえが、皆と同じ浮世を渡つてる人間だから、それで毆打んなさるんだ。トから思ふもんだからね、私ア今迄親方ア可怖が好きだつた。親方の顔見る度に然う思ふんだ。えれえ人だ。此人なんぞこそ獅子の口へ手え懸けて眞二つに扯裂く人なんだ。パレスタインの奴等を毆殺すな斯らいふ人なんだ。えれえもんだッてね。それでお前さんが人間を毆打んなさる…そいつを視てえると、面白くッて堪へられねえ…如何かして已も彼様な強え人に成りてえとは思ふけど、親仁かたッきし意氣地が無えんで…宛然蚤だからね。」

アルテムは皺枯れた聲で哈々と笑つて、

「遂えねえ――蚤だア!」

トは言つたが、其癖親仁の話を注意して聴いてゐた譯では無い。たゞ見る影もない小ぼけな猶太人ではあるけれど、これでも側に附いてゐると思へば快くてその夢中になつて囈くを聴きながら、彼は靜かに彼の考に耽るのであつた。

「えゝと、もう何時だッペえ? 待てよ、からだに因つてと、もう正午時分だッペえかな。畜生! 平生は可愛えの滑つたのと言きやアがつたとて、率となりや、女兒一疋面も出しやがらねえだ……ところで來て哭れたな、此猶太人の親仁ばかしだ……おまけにコレ介抱まで爲て哭れただ。己ア彼樣に虐めてばか居つたのに、聞きや、己が好きだと言きやがる……親仁彼樣に強え〳〵ッていふけど……己舊の身體に成れるだかな? 若しか成れたもんだら、おどれ、只は置かねえぞよ!」

ト吻と息。眠らぬ夢に、相手の撃倒されて、今の彼の身に等しく、全身浮腫れて、矢張何處か其處らで死人のやうになつて横臥つてゐると、猶太人ではない其友が來て介抱するところを顯然と見て……

脅と親仁の面を尻眼に懸けたが、悲しい思が胸一杯に塞つたので、プッと唾を吐いて、又ホッと息。

親仁は氣も逆上つて戰々と、面構まで曲めつつ、倘も饒舌り立てる。

「眞によ、お前さんの泣きなすッた時にや、私も思はず泣けた……彼樣に強え人がと思ふと、何だか斯う情なくなつて來てね……」

「己ア又た誰か己の眞似べえして調戲やアがるだと思つただ。」

ト、アルテムは苦笑をする。

「私ア平生から親方の腕節の強え所に全然惚拔いてるンだ。だから私ア神樣にお願え申したね、天にも地にもグッと遠い〳〵天の頂邊にもお在でなせえます神樣、何卒後生一生のお願えだから、私を此強え人の役に立てて下せえまし、此人の力に成つて此人が親仁の味方になつて哭れますと、親仁大助かりでごぜえます。さうなると、もう世間の奴等も滅多に虐められることではごぜえません。もしか間違つて虐めでもすりや、此人が仇を取つて哭れます。あなた樣は昔方々の國々を征伐したえらい王樣をモルドヘイにお授けなすッた事がごぜえます。何卒私にも敵の中でも一番強え此人を授けて守本尊樣になすッて下せえまし、お願えでごぜえますッて、心の中で一心に禱んでると、お前さんが泣きなすッたから私も泣いた……スルトがみがみッと怒鳴られたもんで、お願えも何も形無しになつちやッたア……」

「だッて己ア其樣な事を些とも知んねえだもの、仕方が無えだ……」

ト氣の毒さうに莞爾とする。

けれども親仁は其言葉を耳にも掛けぬ體で、手を振り、身體を搖がし、夢中になつて囈き立てる其聲には、喜も望も、此壯夫の腕力を吾佛と崇める心から、憂慮、心配までが雜然に響く。

「今からやつて私一人でお前さんの介抱するな、日頃の思が屆いたといふものさね。皆知らん顏してる所で、私一人お世話してるンだ……だが、親方、大丈夫だらうね? 又舊の身體になんなさるだらうね?」

「大丈夫、舊の身體になつてみせら……心配しることねえ。癒つたら、此恩返しに、お前の身體は己が屹度引受けて遣るべえ。」

實に此親仁信切でもあり、胸の蟠を棄てて打割つて話もする、快豁で率直で少しも憎むべき所はない。よしさらば此親仁の楯となつて、一番世間の向うを張つてやらうと、アルテムは

身の上の疼くも消らぎ、心持も爽然として、少しづつ快くなるにつけ漸くも思定めた時、思懸けず光偶となつた。先刻方から何やら物足らぬやうに覺えたが、えゝ判つた。

「己ア何か喰ひてえのだ。お老爺、何か喰ふ物無えかい？」

おツとりかけに親仁は飛上り、危く椅底でコツンとやらうとしたが、其顏色は晴れ〳〵と、何處か確かな氣丈夫な處があつて、全く見違へるほどになつた。アルテムといへば是大力無雙の今サムソン、それがカインに何か喰ふ物は無いかと云ふ！

「オット皆迄言はツしやるな。有るともね、ござえますともさ、チャンと彼處に置いて在らア。何も角も用意して來たんだ。人間鹽梅の悪い時にや、喰物を喰はねえぢや不可ツてことを、親仁チャンと心得てるンだ。ほんによ、此處へ來懸けに、一枚(一留の半)がとこ種々な買物して來たんですぜ、親方。」

「いゝや、後で十倍にして返してやら。己ア錢の事些とも苦にならねえ。手前の錢イ遣ふぢやなしよ…寄越せツて言や、寄越す奴ア幾らも有るだア。」

ト機嫌よく高笑をする。親仁も益々悦に入つて、ヒ、ヒと笑つて、

「知つてるよ、親方。だから何でも好きな物を所望なさえ。何でも買つて來て上げらア。」

「おやア、斯樣して呉ンねえ。ウォツトカを吹いてよ、己が身體を引摩つて呉んねえ。まア喰ふ物は後でも好えだから、それよか引摩つて呉んねえ。」

「えゝ、好うがすとも。お醫者様其處退けツていふやうに上手に引摩つて上げら。」

「早くして呉んねえ。ウォツトカを摩込みや、起きられるだ。」

「起きられる？ 飛んでもねえ！ 如何して、お前さん、起きられるもんで。」

「見てえて見ろさ、起きて見せるだ。起きられねえとツて、何時迄も此樣ン處に臥そべつてもゐられめえでねえか。お前も餘程唐變木だア：：まア何でも好えから引摩つてよ、それから下町にモケーウナツていふ女兒あるだんべえ、饅頭屋のよ：：彼女兒ン處へ往つて然う言ふだ、己が今に行くから、藁床でも拵えて待つてけつかろと。彼奴の處で養生して呉れべえ：：お前にや後で禮しら、只は使はねえだ。悧々しる事ねえ！」

「親方の事たから、そりや大丈夫さ。」と親仁はアルテムの囑へウォツトカを濺し〳〵、

「私ア、何だ、手前の言ふ事とか、親方の言ふ事の方を信用にする位だ。親方の心ア己アチャンと知つてるンだからね。」

「う、う、う！ ゴシ〳〵：：痛えとツて、關ふ事ねえ：：もツとゴシ〳〵：：う、う、う、さうだ〳〵：：：」

ト呻きながら。

「私アね、親方の爲なら、川へ飛込んで死んだツて好いや！」

ト親仁は獨り〳〵意中を語る。

「そ、そ、然うか：：肩、肩ン所をもツと：：ツツ、畜生！ 殘刻い目に遭はしやがつただなア！ 皆女兒が悪いだ。女兒にせえ遭はなかつたもんだら、素直だもんだら：：ツツ、素直だもんだら、反對に殘刻い目に遭はしてやる所だア。」

親仁も合槌を打つて、

「女ツてものは罪なものさね。だから私共のお宗旨ぢや、朝祈禱にかういふものが有りまさ、初も終りも無え神様、何處にもお在でなさる神様、私を女に産付けて下さらなかつたお禮を申上げますツてね。」

「さうか、其様な事言ふだか？」ト稍、思懸けず

といふ態で、「其樣打撒けて言ッちまふだか？お前等も餘程旋風イ引曲つてるだな。だッて女兒ッて其樣なもんでねえ……たゞ馬鹿なばかしだ……ところが又此奴も道具だアから、無えとなつた日にや困るだア……そいつを其樣な事言つて拜むたア……何だッペえ……女兒だッて聞いたら憤るだッペえ。彼奴等だとッて人間だア、蟲は持つてけつからア……」

いとゞ大きな身體が、歪んで尙更大きく見えるのを、ヅッシリと横たへて臥そべつてゐる側に、歷折れば歷折れさうな小ぼけな親仁が、息氣を逸ませながら、全身の力を籠めて横腹、胸、腹などを擦つて、狼狽して、ウォットカの香に咽せては咳嗽をする。

川端には相應に人通りがあつて、足音話聲も聞える。古舟は砂地が崩えて一間程ゐくづれ岸になつた處に藏れて、故意岸端まで來なければ、上からは見えぬ筈の處に在る。舟から水際までは一跨程の砂地で、其處には板片塵芥などが散らばつて、舟の下まで洪水の不潔い痕を留めてゐるのであるが、今日は其破壞舟が兎角人々の氣になると見えて、其邊を往きつ戻りつ、舟底に腰を掛けたり、靴の踵で舷を叩いたりする。親仁は之に滅入つて了ひ、もう談話をする空もなく、默然でアルテムの介抱をしながらも、悄々と情ない笑顏になつて、

「親方、聞えるかね？」

「聞えねえで。」ト是は又暢氣なもので、「判つてるだアな。直き舊の身體に成りさうだか如何だか、樣子べえ見に來やアがつただ。彼奴等だとッて氣に成るだ、矢張命は惜しいだからな。ハッ、ハッ、ハッ！　獣子奴等！　己が死らなかつたのが忌々しいだッペえ、骨折甲斐も無えでな。」

トいふ耳を親仁は嗅いで、

「如何したもんだらう？　私が行ッ了つて親方一人になつたら、彼徒輩が行つて來るかも知れねえ……ね、大變ぢやねえかね。」

トさも憂しさうな面をする。

アルテムは大口開いて、枯れた聲で哄然と笑つて、

「ほんにお前は……お前が何だア？　お前なんぞが可怖つて手出イしずに居るゐぢや有るめえしよ。」

「だがね、私が居たら、そら、證人が居る譯ぢやねえかね。」

「何の、お前らなんぞが……グヮンと一つ腦天參つてよ、さア、彼世さア行つて、證人になれだわ。ハッ、ハッ、ハッ、ハッー」

親仁の憂慮はアルテムの高笑に壓倒されて、その狹い凹い胸の内に大安心の喜びが充亙る。今日迄は世間の人に無體を言はれ打擲されても、唾を一つ返されなかつたのが、今日からは全然別世界。彼には強い腕節の影身に添つて守護してゐるから、拳固も無體ももう先から外れて了ふのである！

（四）

一月ばかりも經つた後の事。

或日の正午時分。シハンの町は今を賑盛の、抛つて置いたら煮詰りもしさうな時分。町を彷徨く例の徒輩や、舟から上つた船頭共が、食物店を押取圍んで彼の此のと喚き散らし、腐れた肉の厭に温い煮込の香が、町一杯に擴がる時分。誰やらが小聲ながらも力を込めて、

「ソラ、アルテムが來るぞ！」

何か温まる事はないかと兎の目鷹の目で、町を彷徨くおんぼろ連は之を聞くと忽ち消えて失くなり、シハンの町の人々は物見高い横目を使つて、或は額越しに、その警戒の辭を傳へ來る方角を、胸安からぬ面相して熟と視込んだも道理。

アルテムは如何なになつたらうと、口から泡を吹き〳〵、思ひ〳〵の想像を闘はして、久しい間彼の再び町へ出るのを待つてゐたのである。

例の通りアルテムは町の中央を、腹ごなしに逍遙でもするやうに、悠然々々と足を運んで行く。見掛に何の變異も無い。相變らず背廣の片袖を脱ぎ、大黒帽を横倒しに、曲のある黑い髪を額へばらりと垂らし、右の手の母指は帯の間に、左の手は深く袴の隱袋に入れて、胸をいかつく突出してゐる。

只病氣擧句といふ事は、美しい貌の稍鬱して見える處に現はれて、行々見知越の辭儀をし挨拶をするにも、大儀さうに頤で會釋をする。

町中の人は其後影を見送つて、打つても毆いても腰折のせぬ金剛不壞の此大力を、且つ異しみ且つ讃歎して、竊々と囁く中には、世に打殺さうとして打殺されぬ者は無い筈を、幾人も掛つて肺の臓を打挫ぎもならず、肋一本折り得なんだ喧嘩の相手の不甲斐なさを歯痒がつて、竊に彼の恢復の速かなるを胸惡く思ふ者も少からず、或は此復讐に赤山羊の一卷は如何して憂目を見ようかと、思ひ〳〵の想像を組立てて、其處に謂はれぬ樂を見るものもあるけれども、抑も腕力は強い程人氣が有るものだ。大方はアルテムの腕節の強さに魅せられて、只々恐入つてゐるのである。

兎角する中アルテムの姿は、シハンの町の倶樂部といふ、居酒屋のガルピローフカへ衝と這入つた。彼の脊の高い頑丈作りの姿が居酒屋の閾の上に現はれた時、煉瓦造りの圓天井ではあれど、天井の極く低い、細長い店の中に、客と云つては僅かに幾人。アルテムの姿を見るが否、其處此處二三ケ處に、おやツといふ聲がして、何かは知らず騒立つて、安烟草の烟に薫ぼり、泥土と黴とに濡々するをも厭はず、此墓場のやうな店の角へ竊々と逃込んだ者もある。

誰の面に目を留めるでもなくてアルテムは悠悠と店の中を視廻して、亭主のサフカ・フレーブニコフが愛想好く挨拶するに取合はずに、

「カインのお老爺は未だ來ねえだか？」

「えゝ、未だ來ませんがね、もう追付け來るのでせう。いつも來る時分だ。」

アルテムは鐵格子を嵌めた窓の下のテーブルの側へ來て腰を卸し、一椀の紅茶を誂へて、さて大きな手をテーブルの上へヅッシリと、無頓着に四邊を視廻す。客は僅十人許り、皆鑛夫で、テーブル二つの側に寄集つて、其處から此方を覗越してゐる。でアルテムの眼と合すと、恐縮して諂媚るやうに微々と笑ふ所は、話の水を向けるやうであるけれど、アルテムは莞爾ともせず、睨むやうに其面を視詰めるので、誰すら口を切る者もなく、皆默然でゐる中で、帳場の陰で兀々してゐる亭主のフレーブニコフばかりは、何か鼻歌をつゝじりながら、時々狐のやうな眼付でキョロリと店の中を視廻す。

町は窓越にも囂々と騒がしく、烈しい罵詈も、神懸けての誓文も、物賣の甲走つた呼聲も聞える。何處か其處らで誤つて落した壜が大道の石に觸れて、戞然と云つて壊れる音がする。アルテムはかうした息詰つた、窖のやうな店に居るのが漸く辛氣臭くなつて來て・・・・

不意に堂々した大きな聲で、

「手前等何故其樣默ッ了つただア？　鳩が豆鐵砲でも喰つたやうな面アして、默込んでけつかる。」

「ちや、親方さん、饒舌つても可うがすかね。」

と起上つて側へ來るのは襤褸婿さん。帆木綿の上着に兵隊袴といふ扮裝の、痩削けた、禿頭の、髯の先を尖らせた男で、血走つた金壺眼を意地惡さうに細めてゐる。

「お前鹽梅が惡かつたツていふぢやねえか？」

ト、アルテムに對向つて腰を卸す。

「それが如何しただ？」

「如何もしやしねえがね、餘り多時お姿を拜まねえから、アルテムの兄貴は如何したんだらうツて問くと、鹽梅が惡くお在遊ばち 來るツてね。」

「それが如何しただ？」

「はい、又如何しただアか。ぢや、もう一歩進さう。何處が惡かつたんで？」

「手前知んねえだか？」

「お前を療治しやしめえし、知んねえね。」

「惚けやんがるな、此野郎！ 知んねえ事アねえ。何故其樣空ア使やアがるだア？」

「そりやア知らねえでも無えんだがね‥‥」

ト婿さんは苦笑をする。

「そんだら何故空惚けやアがるだ？」

「空惚けた方が割だからね。」

「何言きやアがる、獸め！」

「だツて眞實を言つたら、お前怒るだらう？」

「手前なんぞが‥‥毆打いたとツて見榮にもなんねえ。」

「見榮になつちや堪らねえがね。如何だい、兄貴、床揚の祝酒ツて奴、一杯飲ませて吳んねえな。」

「飮へたきや、飮へさ。」

婿さんはウォットカを小壜一本通して、欣々として、

「お前は餘程好い月日の下で生れたんだね。始終錢ッ氣の絕えた事が無えんだもの‥‥」

「それが如何しただ？」

「如何もしやしねえがね‥‥皆女兒が入揚げるンだから、叶はねえや。」

「手前なんぞにや唾も引掛けて吳れめえ。」

「引掛けて吳れねえ。到底もお前の眞似は出來ねえ。」

ト婿さん溜息をする。

「何故ツてみろ、女兒だとツて不潔え奴は嫌えだアからよ。手前と己たア比較物になんねえ。己アからめえても白正當の人間だア。樣ア見ろい‥‥」

アルテムが鑛夫と談話をするは毎もかういつた調子。太い聲で面倒臭さうに、抛出したやうに物を言ふが其處に自ら貫目も有つて、加之も其言草が毎も皮肉、宛然喧嘩を吹懸けるやう。恐らくは彼が、相手の奴等は皆無賴漢ではあるけれど、皆彼よりは智慧のあることを承知してゐる、その爲であらう。

ふと、カインが行つて來た。例の荷箱を胸にして、左の腕には黃なる更紗の服を掛けてゐる。相變らず戰々兢々戶口に立つて、薄氣味惡さうに微笑きながら、頸を延ばして內の光景を差覗き、アルテムの姿を視るや否や、やれ嬉しやと蘇生る。アルテムも其面を見て、晴やかに微笑しながら、

「おゝ、お老爺、此處へ來う。」

ト四邊憚からぬ高聲。婿さんには嘲る如く、

「手前彼方へ去せろ、邪魔になるだア。」

人參色の、鬚だらけの婿さんの面は、驚愕と忌々しいとで此處一寸の間鈍い面になつたが、軈て徐々起上つて、是も同じく呀と開いた口の塞がらぬ仲間の面を視、畏る〳〵音をも立てず進み來るカインの面を視‥‥突然に燒滓にブッと土間へ唾を吐いて、

「ヘツ！」

で、物をも言はず徐々と己が席へ歸るや否や、忽ち瞭然とは聞取れぬ耳語が始まつて、其聲には冷笑怒罵の調も響く。カインは世にも嬉しさうに微笑してゐる中にも、狼狽した所も有つて、憂慮しさうに橫目を遣ひ、赤恥搔いた婿さんの一卷の方ばかり視てゐる。

アルテムは機嫌よく、

「お老爺、茶でも喫むべいか。饅頭奢らう。お前饅頭喰ふだんべいな？　何故其方ばか視てるだ？　彼奴等に構ふことねえ。悔々しる事ねえだよ。見てなさろ、己が一番怒鳴りつけて呉れべえから……」

ト起上り、帽を一振ふつて上着を床に蹴落し、不平顏の寄合付けたテーブルの側へ歩み寄り、屈強な突く／＼ばかりの大男が、胸を張り、帽を搖がし、種々に腕力を誇示し、口元に冷笑を帶びて、凛とばかり衝立つたので、不平顏の連中は水を打つたやうに押鎭まつて、驚破と云つたら逃出さうと、皆逃腰になつてゐる。

「やい、奴等ア何爲ツて含欄言きやアがるだア？」

ト、アルテムは漸く口を切つたが、何か斯う恐ろしく、斯う激烈な言がいひたい／＼と思ふばかりで、その言草が見當らぬので、押默つてゐる。

ト見て、襤褸婿さん、手を振り口を曲めて、

「さア／＼、匆々と饒舌つた！　饒舌る事が無えんなら、足元の明るい中に歸つ……」

「默りやアがれ……」ト、アルテムの眉は蠕々と動く。「何だ、汝は不平顏なんぞしやがツて！　大方己が猶太人と朋友交際して、汝を追拂つたのが癪に觸るだんべえがの、から、能く耳の穴を掻撃つて聽きやがれ。彼老爺はな、猶太人だとツて、汝等の如な極道でねえぞ！　親切氣が有るだい……汝等にや薬に仕度くも有るめえ。餘り皆が虐めやアがるもんで、畏縮けツ了つてるばかしだい…何が何でえ……今日から老爺の身替は己が引受けた。何奴でも此奴でも、老爺に指でも差して見ろ――己が承知しねえ！　殴打くばかしぢや我慢出來ねえ、一寸試し五分試しにしるから、其積りでけつかれい……」

ト大喝した時には小鼻は怒り、領元に筋が張り、目から火花も散るかと思はれて、其權幕の凄まじさは。

「己が喰醉つてた所を殴打つたとて、それが何だア！　己の腕節イ弱くなつたでねえーよ、唯氣が荒くなつたばかしだアから、その積りでうしやアがらねえと、當が違ふぞ。カインは己が引受けた。若しか老爺に失禮な言でも吐きやアがツたら、己が承知イしねえ、打殺して呉れるだから、他の奴等にも能く然う言つとけい。」

溜飲が下がつたと言ひさうに、喉一杯の太い息をして、クルリ背後を向けて席へ戻る。

「親玉ツ！」

ト襤褸婿さんは小聲に叫んで、哀れ果敢ない面相をして、アルテムが親仁と相對つて席に着くを尻眼に懸ける。

カインは始終己が席を離れず、心配に顏色は青褪めながら、何とも言ひ知れぬ情の籠つた眼を一杯に看張つて、あからめもせずアルテムの面を視詰めてゐた。

アルテムは儼然として、

「お老爺、聽いてた通りだ。だから自今お前に衝懸る奴ゥ有つただら、己ン處へ然う言ひに來う。さうしりや己が直ぐと行つて、其奴の面ア打曲げて呉れるだア。」

親仁は何か口の中で咕囁と、御祈禱を始めるやら、御禮を言ふやら、其中に襤褸婿が一黨は何やら囁合つて、一人々々戸外へ出て行く。襤褸婿が二人の側を通る時、小聲に唱ふを聽けば、

私は利口なが、錢の無えが疵よ、
錢が有つたら、酒飲もに……

ト唱ひさして、睨とアルテムを尻目に懸け、滑稽けた顏して足拍子を踏みながら、思懸けぬ手前文句で歌を結ぶ。

も一つお剰けに、
世界の馬鹿を買集め、黒漬遣へ投込もに、
そしたら世の中豐年ぢやい。

唱ひ終るや否や、彼はブイと戸外へ飛出して了つた。

アルテムは口汚く罵つた。で四邊を見廻すと此時薄暗い燻つた惡臭い香のする店の中に殘つてゐる者は、彼と、彼と相對つて坐つたカインと、帳場のサフカと、只から三人。

狐の眼のやうなサフカの眼と、アルテムの重たい眼差とハタと出逢つた時、亭主は細長い顏に事々しく感服の色を浮べて、

「えらい！　全く親方はえらいや。」と顎鬚を扱いて、「今のお前さんの行方は全く新約の極意といふ所だ。慈悲深えサマール人の比喩談にもあるやうだ。お老爺は、然う言つちや何だが、膿汁だらけの身體といふものだ。そいつをお前さんは平氣で何するだ。や、恐入りました。」

アルテムは其言草は聞かずして、只其聲の響くを聞くのみであつた。聲は店の圓天井に撥返され、惡臭い空氣の中を泳いで、瀰と鳴つて耳に流込む。アルテムは一言をも發せず、此響の耳に入るを厭ふ如く、靜かに首を振つた、けれど、聲は滾々流來つて其耳を犯して止まぬ。息苦しくも鬱陶しくもなつて、彼は氣が滅入るやうに覺ゆるのである。

熱と親仁を視れば、親仁は茶碗の上に屈懸つて、熱茶に唇を爛らしながら、一心に且つ吹き且つ啜つてゐる。手中の茶碗は躍るやうで、其眼は時々瞥と竊むやうにアルテムの面を掠めるのであるが、それが又アルテムの益々鬱ぐ媒となり、何が不足ともなき不足の感が胸一杯に瀰蔓つて、眼中は愈々曇り、彼はぎろ／＼と物凄く其處らを視廻す。頭腦の中には名も知れぬ情思が巴の如く廻り旋る。かうした、情思は曾て覺えぬのであつたが、病に臥した時之に襲はれて、それが今だに絲が切れぬのである。

監獄で見るやうな鐵格子を嵌めた窓越に聞けば、戸外は相變らず騷々しい……向上げれば圓天井の濕みを持つた重さうな盤石、足下には踏込んだ泥土に動もすれば足を取られる塵介だらけの煉瓦の床……それに此矮小な、貧窶らしい、畏縮けた親仁……坐つて、戰慄へて、物も得言はずに居る……あゝ、村方は今に草刈季節、町と川一つ隔てた向うの野は草が既う帶まで延びた。風の送る草の香の快さといつたら……其儘鎌を押執つて、野の盡頭までも刈貫からかと、心も坐に浮立つ位！

「お老爺何故默つてるだ？　未だ己が可怖だか？　お前も意氣地イ無えだなア……」

ト、アルテムは不機嫌な顏。

親仁は首を竦げて、之をば妙に振つた。何とも恐縮した、見るも氣の毒らしい面色して、

「何故默つてると言ひなさるけど、私にやお前さんに何を如何話をしたら好いか分らねえ、第一お前さんに向つて物を言ふ舌を持合はさねえ。此處に此樣のが一枚あるけどね。」ト舌の頭を態態出して見せて、「こりやア私が尋常の人間と話をする舌だ。此樣な舌で親方と話しちや勿體ねえ。かうしてお前さんと相對でゐるのせえ勿體ねえと思ふ位だ。親方と私ぢや、餘り移りが惡いからね。アルテムの親方といツちや、コレ素晴らしい人だ。イウダ・マツカウエイといふ所だ！　何故神樣がお前さんを此世にお出し遊ばしたんだか、其御心持といふ奴が判らうもんなら、お前さんは如何な偉え事を爲るか判らねえ人だ。だが此奴ばかしは誰にも判らねえてね、何爲生れて來たんだか。私ア此奴を幾ら考へたか知れねえ。何爲私は生れて來たんだらう、魂も智慧もかうして有るが、是は全體何の爲だツてね。だツて私は世間の人から見りや何だ？　汚ねえ唾を吐懸ける痰壺だ。世間の人を私から見りや、人の身體を處嫌はず魂までもチク／＼螫す、謂はゞ蝮だ。何爲

私は生きてるンだか薩張判らねえ。それも樂でもしてゐる事か、始終苦勞ばか爲てゐるンだ。私の爲にゃお天道樣はお光んなさらねえも同然だ……」

小聲ながら一語々々に熱情が籠つて幾層の憂に痩細つた彼の心の奮起る時の特徴とて、此時も彼は滿面の皺を躍らせて戰々してゐるのである。

アルテムは其言葉を聞かずして唯其訴へる聲を聞き面を見るのであつたが、之を見るに付け、聞くに付け、彼の心は益々結ぼれる。

「また始めただアな！」

ト忌々しさうに首を振つて、

「だから己が今後お前の身を庇護ツてやるといふだから、それで好えでねえか？」

親仁は靜に苦さうに笑つた。

「庇護ツてお呉んなさるな嬉しいけど、相手が神樣だから負へねえ……神樣が私を苛めて居さッしやるンだよ、親方。神樣ぢゃ己だとッて爲樣がねえ。だから如何もハア爲樣がねえ……」

ト其處はアルテム、柔順に自力の足らぬことを認めて、氣の毒さうにしんみりとなつて語を續ぐ。

「お老爺、どうも爲樣が無えだから、辛抱するが好えだよ……よ、神樣の向うさ廻つて、お前何が出來るもんだ。」

ト言ふ面を親仁は視て、是も……氣の毒さうに莞爾となる。初は力ある者が智ある者を憐んだのであるが、是に至つて智ある者が力ある者を憐んだので、兩人の間に稍相通ふ所が出來て、間が近くなつたかと思はれる。

「お前は嚊有るだか？」

ト、アルテムが問く。

「えゝ、嚊もあれば、子供も澤山有つこれ、私一人の力ぢゃ到底も遣切れねえんで。」

ト、親仁は溜息を吐く。

「さうか。」

ト、アルテムは言つたが、世に猶太人などを懷ふ女もあらうかと、不思議に思つて凝然と、痩削けた、矮小な、汚穢い、小膽な親仁の面を目戍めると、

「子供は五人有つたんだが、一人缺けて今は四人さ。ハヤッていふ女の子が有ッたんだがね、此奴が咳嗽をしい〳〵到頭死ン了つたんだ……憶出しても、私アか……可哀さうでならねえ……それに嚊も病身で……始終咳嗽ばか爲てゐるンで……」

「お前も大抵でねえだな。」

ト、アルテムは欝ぐ。

親仁も首垂れて、是も悄然となる。

古着屋が二三人騷然と這入つて來て、帳場へ行つて、亭主と談話を始める。亭主は一人に目使しては、何やら竊々と囁くと、古着屋連は呆れた顏に、冷笑の氣味をも加へて、二人の方を側目視る。親仁は目敏く之を見附けて懷へ上る時、アルテムは鎌を手にして野に立つ我を眠らぬ夢に見る……鎌の音に、草のサッ〳〵と足元へ倒れる音……

「親方、お前さんは未だ此處に居なさるかね？居なさるンなら、私は歸らう……」ト親仁は小聲になつて、「今彼處へ來た人達が、お前さんと私とかうして居るのを見て、アラ彼樣に笑つてるからね……」

「何奴が笑ふ？」

ト、アルテムは頓狂な聲を立て、夢の覺めたやうな面をして險しく四邊を顧る。

けれども皆謹愨な面をして或は飲み或は食つてゐる者ばかりで、誰一人此方を視てゐる者さへ無いので、眉を顰めて、

「譃吐け！　誰も笑つてやしねえでねえか。眞個に、冗談でねえ、此方は眞劍だ。喧騷しるでねえ。それともお前の氣ぢや、故意と其樣ン

事言つて、一番己の心を引いて見る氣か知んねえけんど。」

親仁はアルテムの顏を向上げて、淋し氣に莞爾したばかりで別に返答もしなかつた。二人とも此處多時の間默然でゐる。軈て親仁は起上つて箱を首に懸け歸支度をするのを見て、アルテムは手を伸ばし、

「お前もう行くだか？　そんだら、まア、精出して商賣しろ、己アもう些と此處に居る。」

親仁は兩手を出してアルテムの大きな手に抓まつて、熱心に振つて、足早に出て行く。

ト戸外へ出ると其儘、物陰へ忍び込み、其處からは見通しになつて居る居酒屋の入口を暫時目戍つてゐると、間もなく其戸口にアルテムの姿がヌッと現はれた所は、宛然枠に嵌めた繪像のやう。眉間に八字を屹と寄せて、眼に不快を今にも見んとするを恐るゝ如き面色で、良暫く町中に群がる人影を凝然と諦視めてゐたのであつたが、軈て例の物臭さうな無頓着な面相になつて、群衆を押分けて行先は、町は山手の彼の所好な高臺であらう。

親仁は悲氣に其後姿を目送り、兩手で面を掩ひ、傍なる納屋の鐵の戸前にヒタと額を押付けて了つた。

（五）

力あるアルテムの威文句の利目は見えて、町の人は之に膽を拔かれ、猶太人を責むことを止めた。

親仁が墓場へ行く道を塞ぐ荊棘の刺の減つたことは、彼自身も明に判る。町の人は親仁の有るを忘れた如で、相變らず敏捷く人中を潛つては商賣物の小間物を呼行くけれど、今迄のやうに、故意と足を踏む者もなく、乾枯びた脾腹を衝く者もなく、箱の中へ唾する者もないけれども、近來は冷かな眼色で、敵意を含んで、人が彼の面を見る。これも今迄に曾て無い事。

何事も我身に關はつた事には目端の利く彼、忽ち此異つた眼色に目を留めては稀有なと考へ込む。永いこと之を苦に病んでみたが、幾ら考へてみても、何で此樣な眼色をされるのか、其意が了解めぬ。曩日は偶さかではあつたが、人が機嫌よく話懸けて時には商賣の事も尋ねて呉れた。又時には毒氣の無い冗談も言つて呉れたなどと、憶出す‥‥

で、考へ込む。昔の好い事は、其時は眼へ入つて了つた程の果敢ない事まで、時過ぎれば憶出されるが習ひなら、カインの考へ込んだも無理はない。

で、考へ込んで、耳を聳つて、目を萬遍なく配つてゐると、或日不圖耳にした新文句の歌がある。作者は例の襤褸婿さん。一體婿さん大道藝人で、歌と鳴物とで口を餬つてゐる。樂器といふのが木製の食匙八本、之を指の股に挾んで、頰を脹らまして打ち、腹を打ち、指頭の文で匙と匙とを打合せて鳴すと、これも自作の歌の文句に適つた、可なりな拍子になる。聽いて餘り面白いものでない代り、之を奏るには手品使ふ程の器用は要る。器用でさへあれば、大道では何でも受ける。

で、一日親仁が町を行く時、ふと見ると、黑山の樣に人集りのした中央で、婿さんが匙をシャに構へ、威勢よく饒舌つてゐる。

「えーい、お集りの皆さん、豫備の懲役ぢや‥‥無ささうなお歷々樣へ言上奉る。今お目通におきまして手前が新文句の歌ッてやつを唱ふ。出來立のホヤ〳〵烟の出さうな奴だ。さア、一疋で一文宛投げた。一疋と謂はれて悔しいと思ふ人は、十文宛投げたり〳〵。さア、愈々本藝の始まり、エヘン〳〵、東西々々！」

「お天道樣がねえゝ、窓から這込みや人樣があ、（詞）オヤ〳〵〳〵、まア、暖くッて好

いこと、アノ、一寸、お隣のお婆さん、日向ぼッこに入らッしやいな、なかと仰しやろがあ、若しもねえゝ、己が這込んだら、如何だッぺえ：：ソリヤ大變：：：」

「故い〱、もう黴が生えてら！」

ト誰やら見物の中で嘲弄す者が有る。

「オット先刻承知之助！　シタが餡食はうなら皮からだ。急くまい〱。」

ト婿さんは匙を鳴して又唱ひ出す。

「己が親仁は臨終の時にや、「三尺高え木の空へ上た。己は鬼子で親には似いで、木へは上らで落こちた。木から落ちたる猿の身なれば、やれやれ浮世の樂では無いぞ。お噂如何せうパンが無い。」

「御道理様！」

ト見物が囃す。

けれど婿さんは正直者、新文句を唱ふと言つたからは、必ず唱ふに違ひないと、皆紛々と錢を投げる。

「さア、是からが新文句だ。しッかり賴むぜ、獸め！」

ト匙の手が一段と複雑んで來て、豆を煎る如く聞える。

「牛の尾に、チョイと留まッたが虻の子で、馬鹿に取着いたが、猶太人でござる。牛は虻の子を背負つて行くが、猶太人は女の子に馬鹿賣つて、サテ喰物に、致します。やれ〱世間の姉さん達よ：：：」

「オット：：止まれエ、オイ！　カインの旦那が歌を聽いてござる。えゝ、旦那え、こいつアお前さんの聽くもんぢやねえや。さア、ズット通つた〱。」

親仁は惜氣もなく笑顔を振撒いて、溜息つく〱其場を去つたが、此樣な事も何とやら氣になる。

とはいふものの、此頃の氣の樂さ、あゝ何日迄も是が續けば好いがと、取越苦勞もされる程、毎朝商賣へ出るにも、もう誰にも稼を引奪られる憂はないと安心して出れば、眼の中も前方よりは晴れ〲と自ら沈着いて見える。アルテムには毎日逢ふが、呼ばれなければ、成丈側へも行かぬやうにして居る。

アルテムは滅多に呼んだ事はないが、呼べば必ずから言つて尋問る。

「お老爺、異る事ねえだか？」

「お難有うござえます。別段異つた事も無えんで：：これも皆親方のお蔭なんで：：：」

ト親仁は染々嬉しさうな顔色をする。

「誰も如何もしねえだな？」

「如何しえるもんで——お前さんが附いてるンだもの！」

ト飛んだ事をといひさうに、大きな聲でいふ。

「大方然うだんべえた思ふけんどな：：若しか誰ぞ如何かしやがつただら、然う言ひに來るだよ。」

「えゝ、そんな事があつたら、何も彼も打棄らかしといて、早速然う言ひに行きまさ。」

「然うしるだ。」

ト不氣味な眼色で親仁の姿を見上げ見下して、

「さア、匆々と行つて、商賣しるが好え。」

ト突放す。

親仁は足早に其處を立退く。何時も其時苦々しさうな眼色で見物に見送られて、彼は內々薄氣味わるく思ふのであつた。からして一月ばかりも經つた。

或晩の事。カインは吾家への戻道で、不意とアルテムに出逢つた。會釋は頤で掬上つて、指を立てて招くから、小走に走寄つて其顔色を窺へば、アルテムの面には雲が掩つて、雨催の秋空を見るやうに凄い。

「もう仕舞かッ。」
「えゝ、今仕舞つて歸るとこで。」
「さうか…そんだら少し話イあるだ。己と一所に歩べえ。」
と、アルテムの聲は冴えぬ。
大きな身體をさも重さうに運んで前に立つ、その跟に引添うてカインも行くと、町を脱けて、横に折れて川端へ出て、崖下は浪打際の人目に懸らぬ處に撈手と腰を卸して、
「其處へ腰イ掛けろさ。」
言はれる隨に、カインも腰を卸して、畏る〳〵横目で動靜を窺へば、アルテムは背を丸くして悠々と烟草を捲きにかゝるから、此方は空を眺め、岸近くにむら〳〵と林の如く立つた帆檣を眺め、向岸を眺め、夜の靜かなる中に潛まつた穩かな川浪を眺めて、何を言出すかと待つてゐると、
「如何だ、此頃は！」
「もう誰一人指も差す者も無えんで…。」
「ふむ。」
「これといふも皆親方のお蔭なんで、私ア…。」
「まア、待てえ。」
トばかり口を閉ぢ、又悠々と烟を吹く。時時火先が闇黑の中でパッ〳〵と紅く見えるのみで、何事も言出さぬので、片唾を吞んで待侘びる親仁の胸には浪が立つ。
「そんだら、何だな、もう指も差す者もねえだな？」
「皆親方が畏怖んで、獅子に向つた犬ッころで、皆親方の前へ出ちや、かたッきし意氣地が無えんでさ。だから私も…。」
「まア、待てえ。」
ト又默る。
カインは耐へかねて、おッかなびッくり、
「一體ソノ何の話なんで？」
「ちよッくら言へねえ事だ。」
「だッて、まアさ、聞かねえ中は、私だッて氣懸だ。」
「そんだら、何だ…面倒臭え、言つちまはう。己アな…。」
「え？」
「己アな、何だ、もう厭ンなつただ。」
「何が厭ンなつたんで？」
「何がとッて、此樣な事ア柄に無えだもの。己アもう厭だ。」
ト太息を吻く。
「こんな事ッて？」
「ソノ何よ。畢竟お前さ…己アお前と交際たく無えだ。此樣な事ア己の柄に無え。」
打擊かれた如くギョッと縮み上つて、カインは默つて了ふ。
「もう是から誰に何よされたとッて、己が處へさういひに來るでねえ。己アもう厭だア…もう取上げねえだ。だとッて己にや無理だもの。」
カインは默然として死人のやう。
アルテムは口を切つてから、初めて稍胸の安さを覺ゆる如く、それからは言葉も淀まず、いふ事の旨意も瞭然する。
「己ア彼時お前の世話さなつただから、錢イ欲けりや、吳れてやろさ。幾何でも與るだから、言ふが好え。其代もうお前の世話ア出來ねえだから、さう思つてくれ。己アソノ何だア…己ア今迄我慢のして行つて來ただア、氣取つて見ただア、眞に、考へて見りや氣の毒だッて、一時さう思つてもみたがな、いけねえ、矢張附燒刃ア駄目だア。己ッ人の事を氣の毒だなんぞッて思ふ事出來ねえ性分だと思へ。」
「といふが矢張私が猶太人だからかね！」
ト打濕つた聲で問く。
アルテムは親仁の顏をジロリと尻眼にかけて、何の心もなく其時胸に浮んだ事をツイと口

走つたのであるが、から言つた。
「猶太人が何たア、皆吾儕ア神様の前へ出りや、猶太人でねえか。」
「そんなら何故だらう？」
ト小聲に囁く。
「だとッて不可だ、己アお前が氣の毒でも何でもねえだもの、お前ばかしで無え、誰だとッて然うだ。己ア人の事なんざ如何だッて關はねえだ。な、了解つたか？ 己ア何だ、お前だから此様な話もしるだ。他の奴だもんだら、ナニしるもんだ、頭の一つも毆打つて一昨日來うて突放すだア。」
「親方に見放されッちやヤッたら、亂暴されたつてもう庇護つて吳れ手もなくなるし、私ア又孤獨になッ了ふんだ。」
ト聲は徐々打濕つて哀れである。
「だとッて不可え事不可。」
ト、アルテムは魚膠なく頭振を振つて、
「己ア何も皆が笑ふだから、如何のからの言ふでねえ。ナニ世間の奴等が笑はうが、如何しようが關ふもんで。でも此樣な事ア己が畠でねえだから、仕方がねえ……己ア僞を吐くな嫌えだ。全くお前が氣の毒でも何でもねえだよ。其代何だ、錢イ與るべえさ。」
「え丶神様もお情ねえ、何卒もう堪忍してやつて下せえまし、何卒此親仁一人お助けなすッて下せえまし……」
ト、カインは土鼠の如く圓くなつて祈禱をするのである。
夕ぐれは宵との風もなくて生暖く、おぼつかなき入日の光の川に映されて流るゝを見れば、美しい中にも心細い所がある。二人は岸の影の薄朦朧した中に蹲踞つてゐる。
流石にアルテムも沈痛とした調子になつて熟熟と、
「だとッて己が身にもなつて考へて見ろさ、打棄つて置けねえでねえか。此様した事言つたとッて、お前にや解んねえも知んねえけど、彼様な目に遭はされてよ、指を銜へて引込んでゐられねえ。チヨッ、糞忌々しい！」
キリ〳〵と切齒したやうであるが、頓て沙の上を坐行つて、グッと水際まで足を踏延ばし、パッタリ仰向けに倒れる拍子に、兩手を頭の下に撐つて、
「何奴も此奴も皆無頼漢の種にしやがつて……」
「皆といひなさるかね？」
ト親仁は勢の脱けたやうに言ふ。
「皆無頼漢だ。これから、吾儕ア、それにやお前らがやうな足手纏の無え方が好えだ。」
「おや、親方……おや、私がお前さんの邪魔にせえならなきや好いのかね？」
ト少し蘇生る。
「邪魔になるでねえけど、ソノ何だ……己ア人間が皆嫌に成るだ。皆無頼漢の様にしやがッて、己一人無頼漢のやうに扱ひやがるだ。箆棒、此様した樗蒲一イ無え。だからよ、お前の世話アもう出來ねえッて言ふだ。な、解つたらう。」
「私にやどうも解らねえ。」
ト温順しく言つて頭振を振る。
「解らねえ？ 仕様が無えだなア。だら、矢張庇護つて貰えてえだな？ 庇護つて貰えてえとッて、己アもう、誰も庇護はねえ。己ア人を氣の毒だなんぞッて思ふ氣は……え、から……」
ト親仁の脾腹を突いて、
「これんばかしもねえッていふだに、未だ解んねえか！」
……ト彼が口を閉づれば、此も押默つて、暫くは森となる。ピチヤ〳〵と岸拍つ浪の音に雜つて、夢のやうに霞んだ川面遠く、何やらかすめた溜息のやうな音が聞える。夜氣は生暖く

磯臭い。

「私ア如何したら好いだらう？」

ト親仁は溜息をしたが、アルテムは之には何とも言はなかつた。坐睡して居るのか、それとも思案してゐるのか。

「親方に見放されッちやヤツて、如何して、まア、私ア生活して行から……」

ト較聲が遶んで來る。

アルテムは空を向上げて、

「そらア自分で考へて見るだ。」

「あゝ、あゝ、情ねえ事になつちやヤツたなア……」

「ちよツくら好え考へも出めえさ。」

ト生欠びをする

言ひたい事を言ひ了つて、彼は忽ち胸が透いたやうにケロリとしてゐるのである。

「私ア彼時然ら思つたんだ。親方ア……さう永え面倒は見てくんなさるめえツてね……」

ト恨めしさうにアルテムの面を見るのであつたが、此方は更に顧眄もせぬ。

「矢張皆が笑ふもんだから、それで厭になんなすツたんぢやねえかね？」

トおそる／＼小聲で聞くと、アルテムは眼を視開いて、微笑として、

「己ア世間の奴等ア何とも思つてゐねえだから、其氣になりや、お前を肩車に乘けてよ・町中歩行くだア。笑つたとツて關ンねえ。だが腹に無えんだら、其迄の事よ、無理にしる事ねえ。己ア率直けて言ツ了や、お前が其樣な風だから厭だア。別に仔細無えと思へ。」

「成程……それも御尤だ。ぢや、もう私はお告暇しようかね？」

「さうだ、足元の明るい内に歸つたが好かツぺえ。まンだ今時分だら取捕ることもあるめえ。誰も今の話イ聞いてた奴無えだからね。」

「さうだねえ……それも然うだが、此後とてもお前さん誰にも言つちやア呉んなさるめえね今の話を！」

「當然よ。誰にいふもんだ。いひはしねえけれど、お前も餘り己が眼の前へ顔ア持つて來ねえやうにしるだよ。」

「さうしませう。」

ト靜かに情なささうに言つて親仁は起上つた。

アルテムは素氣なく、

「お前ら一體餘所へ往つて商賣しりや好えだがな。此處アあんまり人氣が惡いだ。機會さへ有りや、始終睨られるぞ。」

「だツて行き處が無えんですもの。」

「だら、ハア仕樣が無え。勝手にしるさ。」

「そんなら、親方、もう私ア歸らう。」

「歸るが好え。」

ト臥ながら手を伸して親仁の差伸うた手を握つて、

「もう、これツきり告暇だア。恨むめえぞ。」

「ナニ恨むもんで。」

とは言ひながら、落膽して溜息を吐く。

「ほんの事だ。かうした方が潔然して幾ら好えだか知ンねえ。お前らそりや厭だかも知ンねえけど……だとツて考へて見ろ、手前と己ぢや相撲にならねえでねえか。老爺の世話なんて、其樣な事己の柄に無え。」

「ぢや、もう歸りませうよ。」

「歸るが好え。」

親仁は垂頭れて、甚く背を丸くして、龍鍾と岸を傳つて行く。その後影をアルテムは暫く見送つてゐたが、軈て徑に舊の仰向になる。空はもうトップリと夜の色。

何の音とも得知れぬ音が、いづくからともなく傳へ來ては又消えて行く。變らぬ調子に岸を拍つ浪の音は、泣くが如く又訴ふるが如くである。

親仁は五十歩許り行つたかと思ふ頃、ふと引返して來て、華々しい姿を大地に横たへたアルテムの側に佇立り、腫物にでも觸るやうに戰々兢々、

「ヒョッと、親方、思返しちや呉ンなさるめえかね?」

ト問へど、何の答應もない。

「ね、親方。」

トも一度呼んで見て、熟と答を待つ。

「ねえ、親方! ヒョッとお前さん戯弄つてみたぢやねえかね?」ト聲を顫はして、「恩に被せる、ぢアねえけど、彼時私ア……ねえ、親方……他の者ア寄附かねえ所を、私ア忍んで行つて、出來るだけ介抱して上げた積りだがねえ……」

返答は幽な鼾である。

……ト親仁は多時經つて、夢に和いだ猛者の美しい寢顔を凝然と諦視めてゐた。一呼吸する毎に、幅廣の大きな胸が靜かに高く浪を打つて、靡く口髭の黑い中から、丈夫さうな齒が白々と見える。或は微笑でもしてゐるのかとも思はれる……

深く〱溜息をして、親仁は又垂頸れて岸傳ひに行く。人の世を怖ろしいものに思入つた身は、指頭までも顫はせながら、月光皎かな岸傳ひをそろ〱と行き、光の届かぬ物陰へ入れば、一段と歩調を緩め、跫音を竊むやうにして、そこそこと通つて行く。

小さな臆病な廿日鼠が、何方向いても捕鼠器の中をすり脱け潜りぬけて我巣へ辿る、それにも似たる果敢なさ。

日は既に暮れて、川端は閑寂と人子一人通らぬのである。

——(ゴーリキイ作)——

狂人日記

十月五日

今日は余程違つた事があつた。朝、随分遅かつたが、起きると、マウラが靴の磨いたのを持つて来る、何時だツて問くと、もう疾くに十時を打つたといふから、そこ〳〵に衣服を着た。實をいや、役所へなんぞ行き度くは些ともない、行けば乾度課長の奴が苦い顏をするに違ひないからな。奴、先達中から人の面さへ見りや、君は一體如何したんだ？ 時々煖爐にでも酔つたやうに飛廻るし、書物をさせりや、やたらに表題を小字で書いたり、日附を落したり、番號を遺れたり、何が何だか譯の分らないやうにして了ふ——と、かうだ。何だ、ひよろ長め！ 乾度己がお書齋で閣下の羽ペンを削るのが羨ましいんだらう。なんの、役所へなんぞ行き度くはないが、行かなきや會計に遇へずさ、遭はなきや、あの赤螺を口說いて機が好かつたら幾何か月給の前借をやる目的がなくなるから、其ばかりで行くのだ。が、彼會計も随分頑固な奴だてな！ 彼奴が一月だつて月給の前貸をしたら事だ。それよか、審判の日が來た方が勝かも知れん、拜んだつて、打殴つたつて、喉頭へ喰ひ付いたつて、あの白髪の鬼が貸すこッちやない。其癖家へ歸ると、現在自分の處の下女に頬打を喰ふッていふ男だ。誰だつて知らん者はない。あゝ、詰らんな、中央の局なんぞに勤めてるのは！ 一文だつて融通が利きやしない。其處へ行くと、縣廳だの、民事裁判所だの、稅務署だのといふやつになると格別だ。隅ッ子で小さくなつて書物をやつてる所を見ると、不潔なフロックを着て、蟲酸の走るやうな面をしてる先生でも、田舍で立派な別荘を借り込む。金ぴかの茶碗でも持つてくと、へ、醫者の贈物みたやうだと云ふ。赤馬なら二疋、馬車なら一臺、三百留もする臘虎でも貰はなきや、貰つたやうな顏もしないや。見掛けは馬鹿に大人しくッて、物言ひも馬鹿に丁寧で、ペンを削るナイフがござりまするなら、何卒拜借仰せ付けられ度いもので、なんぞッていふ調子でゐても、誰ぞ何か賴みに來りや、綺麗に剝いて襯衣一枚にして了ふ。其代り吾儕の勤向は高尙なものだて。此様な綺麗づくめは縣廳ぢや一生經つても見られやしない。何しろテーブルはマホガニイと來る、長官は皆君ツて言ひます。から上品でたかつたら、己は疾くに役所を退いてる所なんだ。

外套を被て傘を持つて出た。外はドシャ降さ。人ッ子一人通らない。偶通れば裾を捲つて頭から被つた神様か、傘を差して行く小商人か、でなきや御者だ。上等の人間でトボ〳〵行つてくのは、お仲間の官吏位のものだ。四角で一人見掛けたッけが、其姿を見ると、己は直ぐとかう思つた。「へ、措いて吳れ！ 役所通ひの風で、彼處へ駈けてく女の子の跡を追蒐けて、お御足拜見といふ寸法だらう。如何して吾吾仲間は斯うも悪戯が好きなことかな？ 軍人にだつて負けやしない。ボンネットが通りさへすりや、直ぐ小當りに當つて見るやつさ。」と、此様な事を思ひながら去る商店の前へ掛かると、馬車が一臺ピタリと其店前で止まる。直ぐと分つた。これは局長の家の馬車だ。局長が買物に來られる筈がないから、乾度令孃、と思ふが否、ペッタリ壁へ引附いて了つた。お附

の者が馬車の戸を開ける、小鳥が何ぞのやうに颯然と降り立たれたのは彼お方！と、存在を拔反つて御覽ある、其度にお眉にお顏が發現と：こえ、此奴つた喪つた、失敗つたぞ！　而たつて又此樣な時分にそこに出掛けて來られたこだらう！　これだから人は御役宿に限つ無いッて言はれたつて、仕方がないのだ。先方は己には氣が附かれないやうだつたが、此方も殊と深く外套に包まるやうにしてゐた。外套が甚く汚れてゐたし、それに形が舊かつたからな。今ぢやゝこしいの襟巾を廣くするのが流行だが、己のは巾狹で、ダブルカラーで、ひどい品物なんだ。お手洗の小さな狗が締出しを喰つて戸外に居る。己は見知り越しだ。メッヂイといふ狗さ。で、一分と經つか經たぬ中に、偶と細い聲で、「あら、メッヂイぢやないの？」といふのが聞えたから、「おやッ！誰だらう？」と、其處らを視廻すと、お老婆さんと若造と婦人が二人傘を差して行く。それが行過ぎて了ふと、又、ツイ近所で、「メッヂイ、惡いわね」といふ聲がする。「おやッ！」と思つて、ヒョイと見ると、メッヂイが婦人達の跡から行く小狗と鼻を嗅合つてゐるから、「さては此奴だな！　が、待てよ、己は醉つてるンぢやないかしらん？　何しろ此樣な事は滅多に無い事だ。」すると、メッヂイが物を言ふのが目に見える、「あら、フヰデリ、さうぢやないわ。私ね、フン／＼、私ね、フン／＼、大變鹽梅が惡かつたのよ！」「イヨー、此奴ア！」と、狗が人間のやうに物を言ふのを聞いた時には、甚く驚かされたが、しかし後で能く考へて見ると、なに、些とも驚くことはない。世間には能くある事だ。英國で或時魚が一尾浮上つて、變挺な言葉で二言物を言つたのを、學者がもう三年も研究に掛つてるさうだが、今だに何の事たか薩張分らんといふ事だ。是も矢張新聞で讀んだ事だが、ある店へ牛が二匹連で茶を一斤買ひに來たといふ話がある。しかし、それよりも更と不思議なのは、メッヂイがから言ふのさ、「私ね、お前の處へ手紙を出したんだけど、屹度ポルカンが屆けなかつたんだよ。」手紙を[illegible]る法もあれ、犬が手紙を書くといふ事はついぞ聞いた事がない。些驚したね。もう近頃ぢや變挺な事が能く見えたり聞えたりするけれど。「一寸此狗の跡を隨けて、如何な事を一體考へてやがるか、研究して來まう」と、傘を擴げて、二人の婦人の後から行つて見た。豆町へ出て、町人町へ曲つて、あれから指物屋町を通つて、旦那橋へ掛る手前で、大きな家の前で其婦人達は立止まつた。「おゝ、此家なら知つてる、こりやズウェルコフの持家だ。」と思つたのは、素敵な家でな、凡そ人間で此家に住んでない者はない。下女や田舍者はウヨ／＼居る。お仲間の官吏なんぞは、犬ッころた詰めたやうに、重なり合つてら。己の友人が一人此家に居るが、此男は喇叭の名人だ。二人の婦人は五階へ登つて行つたから、己は腹の中でな、「もう是で好し、からして居る處を突留めて置いて、正可の時にや、屹度役に立ててお目に懸けますから。」とな。

十月四日

今日は水曜だから、局長の官邸の方へ出勤した。故と早めに出て、お書齋でウンと腰を据ゑて、鵞ペンを殘らず削り上げた。閣下は何でも非常に聰明な方に違ひない。お書齋は本棚で一杯だ。[illegible]を讀んで見たが、皆[illegible]か、獨逸語で、小六かしい、[illegible]閉けるもんではかりた。閣下はお顏[illegible]にも、眼中にチャンと威嚴が備つてござる。[illegible]な口數を利かれたことがない。偶々公文でも持つて行つた時に、天氣は如何おやか、[illegible]る、は、[illegible]

何と言つても我々の相手でない、政治家でいらッしやる。が、どうか此己が格別お氣に入つてるやうに思はれるが、若しか萬一してお孃様にも矢張……へ、畜生!……おッと、言ふまい、何事も内所々々と。佛人は馬鹿な奴等だ。皆引搦げて笞で引殴いて呉れるが好いのさ。夜會の記事があつたから、讀んで見たが、非常に面白かつた。クールスカヤ縣の地主の書いたものだが、地主先生筆を持たせると仲々味をやりをる。ふと氣が付くと、もう十二時半だ。閣下はまだお寢みと見える。それは好いが一時半ごろどえらい事があつた。如何な名家の筆でも其時の情景は描き出せまいと思ふ。ギイと戸が開いたから、それ閣下のお出ましと、書物を持つて跳上がると、彼お方、お孃様さ! や、お服裝の好さは! 白鳥のやうな白いお召しだつたが、その立派さと言つたら無かつた! と、覗かれた時にや眩しいやうだつた。一寸お會釋あつて、「あの、父は居りませんでして?」どうも、そのお聲といつたら、どうも、その……カナリヤ、宛然カナリヤだ! 「やれ、お孃様、もう何卒然う焦らさずに。それがならざ、寧その纖弱なお手で殴打つて下さい。」と、餘程言ひたかつたが、口が言ふ事を聽きをらんで、「いや、おいでになりません。」と、ツイ、それ、言つて了つた。すると、お目が己の顔から帳簿へ流れて、ハンケチが飜然とお手を滑り落ちたから、狼狽ててそれを拾はうとして、嵌木細工の床は糞だ、つるりと滑つて、危く鼻梁を挫かうとしたのを、辛と押耐へて、そのハンケチを拾上げたが、や、どうも、素晴らしいハンケチ! 地は麻だが、肌理が細かで――琥珀、宛然琥珀を剝いだやうな色合! 上品な方の持物だから、包まで上品だ。禮を仰有つて、氣色ばかり笑を含まれた時、朱脣が微かに動いたばかりで、其儘お引取になる。己は其からまだ小一時間も居たが、偶と給仕の男が來て、「アクセンチイ。イワーノウヰチ、貴方は最うお歸ンなさい。旦那様はお出ましに成つたから。」給仕の奴程癪に觸る奴はない。いつでも玄關にふんぞり返つてて、挨拶一つしくさらない。それどころかい、一度なんぞは腰を掛けたまゝで、一服やりませんか何ぞと言やアがつた奴がある。生意氣な! 己を誰だと思ふ? かう見えても憚ンながら官員様だぞ! 手前達とは身分が違ふ! が、まあ、勘辨してやつて、帽子を取つて、外套も自分で被た――此奴等が被せて呉れた例がないから。で、戸外へ出たが、下宿へ歸つてからは、大方臥て暮した。尤も詩を一つ寫した。絶妙の詩だ。詩に曰くさ、「相見ぬ一時、一年か、そも、命呪ひつゝ、生くべしや、われ、とこそ、こそ。」とかうだ。屹度プーシキンの句だらう。晩に外套に包まつて、お孃様お出ましに成つたら、お馬車に召す所を一目なりともと、永いこと待つてみたが、生憎お出ましにはならなかつた。

十一月六日

課長奴大いに憤れた。役所へ行く、と、一寸來いと人を呼付けて置いて、從頭に、「君は一體如何いふ料簡で彼樣な眞似をする?」と、からだ。「何が如何したんで? 私は如何な眞似もしません。」と、いふと、「まあ能く考へて見給へ。君は最う四十の坂を越してるだらう? もう好加減に分別が附くころだ。自惚にも程があるぢやないか? 僕が何も知らんと思ふか? 君の悪戯は殘らず知つとるぞ。君は局長の所の令孃を附廻してるだらう? まあ、身の程を省みて見るが好い。君は何だ? コンマ以下の人間ぢやないか? 決して以上ぢやない。所謂素寒貧だ。まあ、些と鏡でも見るが好い。

その面で色事とは聊か押が強い！」とほざいた。べらぼうめ、額が少しばかり薬罐に似てゐて、腦天の髪の毛を、撮縮らしたのを薔薇の花形に盛上げ、それを油で固め付けてりや、最ういッぱし偉い人間のやうに思つてやがら、へ、分つてますよ、何で其様に己に當るんだか。己が格別御贔屓になる所を見たので、羨ましくなつたのさ。何た、彼様な奴！　七等官が何だ！　時計の鎖が金だつて、三十留の靴を穿いたつて、其様な事に動魄ともするンぢやないぞ！　己を平民だと思ふと當が違ふ。己は仕立屋の出身でも、下士の小倅でもないぞ！　士族だぞ！　何の、己だつて更と出世は出來る。まだ四十二だもの、勤向きも、本當は、是からといふ所だ。今に見ろ、己だつて大佐相當官になつて見せる、運が善かつたら、もツと偉くなるかも知れん。然うしたら手前達よりもグッと好い評判を取つて見せる。何だ、自分より外には人間は無いやうに自惚れやがつて！　己だつて何だぞ、新形の乗馬フロックを被て、手前のやつてるやうなネクタイを捲きや、手前なんぞは己の足元へだつて寄付けるンぢやないぞ！　生憎と、己にや其様な贅澤をする錢がないけれど……

十一月八日

劇場へ行つた。出し物は露西亞馬鹿フヰラットカさ。腹の筋を撚つた。まだ何とかいふヴォードゥヰーユをやつたが、其歌が面白かつた。宮内官吏を嘲つた歌だが、中にも一人十四等官のがあつて、それが殊に激烈くやられた。遠慮會釋なく書きのめしてあるが、如何して彼様なものが檢閲濟になつたか不思議な位だ。商人なんぞは皆詐欺師で、その子息株は放蕩で僣上だと、些とも齒に衣を被せないから堪らない。批評家は兎角惡口ばかり言ひたがるツて、看客の加勢を賴む文句も面白かつた。や、今の作者は仲々洒落た物を書く。己は芝居が好きだ。一文でもポケットに入ると、行かずにゐられない。それだのに、己の仲間にや度し難い奴がある。田舎漢め、如何しても行きをらん、尤も無代で切符を與つたら如何だか知らないが……女優で一人歌の非常に巧いのがあつた。想出したね、彼お方の事を……へッ、畜生！　おッと、聲が高い。何事も内所々々。

十一月九日

八時に役所へ行つた。己が行つても、課長奴知らん顔をしてゐる、己も負けずに澄してゐた。書類を檢べたり照合をしたりして、四時に退いた。局長の官邸の側を通つたが、誰の姿も見えずさ。晩餐後は大方寝臺の上でごろ〳〵してゐた。

十一月十一日

今日はお書齋で閣下の鵞ペンを二十三本削つた、序に彼お方のも、へ、へ、……令孃のも四本削つて上げた。閣下は鵞ペンが一本でも多く削つてあるのがお好きだ。何しても偉い方に違ひないてな、黙つてござるが、始終頭の中では何か考へてござらう、如何な事を主に考へてござるか、あの頭の中で企圖まれる事を、一つ知りたいものだな。あゝいふ人の生涯を覗いて見たら嘸面白からう。一體不斷如何な事を行つてられるもんか知ら？　いづれ謎めいた事を言つたり何か宮中向の事ばかりだらうが、そいつが一つ知りたいもんだな。從來何遍か閣下に話し掛けようとして見たが、何分にも口が言ふことを聽かんので、只お寒うござりまするとか、お暖かでござりまするとか言つたばかりで、もう跡が、何も出なく成ッて了ふ。お客間も覗いて見たい。偶に入口の戸が開いてる事があるが、あ

の次にまだ一間あるて。や、室内の裝飾の立派なことは！ 鏡だつて陶器だつて粗末な物は一つだつてない！ 令孃はお奥だ。お奥が覗いて見たいな。お居間も見たい。乾度種々な瓶だの壜だのを列べてあるだらう。花なんぞは息氣をするのも氣遣ひといふのがあるね。衣服なぞが取散らしてあります。此奴も衣服といふよりは寧ろ烟か何ぞのやうに見えようといふものだ。お寢間も覗いて見たいな……乾度見事だ。極樂みたやうだらう。お起になると、可愛らしいお御足をお載けなさる臺がある筈だ。それも見たいな！ そのお御足へ雪のやうに白い靴下をかうお穿かせ申す……へッ畜生、何も言ふな……内所々々と。

しかし、今日はネーフスキイ通りで耳に挾んだ犬の立話を想出すと、カラリと夜が明けたやうな心持がして、「好し〳〵！ 今度こそは眞相を突留めて呉れう。其には先以て彼奴共が往復した手紙を奪ふのが肝要。それさへ手に入つたら、必ず何か手掛りが出來よう。」と思つた。實は一度メッヂイを召んで、「さて、メッヂイ、今は斯うして貴樣と己と二人切だが、戸が開いてていけずば、戸も閉めよう、然うすりや誰の目にも掛りッこはないと、な、そこで、お孃様は一體何を仕てござる、貴樣の知つてる事は洗ひ浚ひ話して聽かせて呉れ、己は決して〳〵他言することでないから。」と言つたのぢやない、言はうとすると、畜生其手に乘りをらんで、尻尾を捲いて……一段と身を縮かめて、何も聞えぬ振をして、窃と部屋を出て行つた。己は疾うから然う思つてるのだが、犬といふやつは人間から視るとグッと利口だ。利口なばかりぢやない、乾度物も言へるに違ひないのだが、只妙に拗ねてゐる。非常な策士で、何でも目に留める、人間の爲る事は何でも目に留める。いや、何でも角でも明日はズウェルコフの借家へ行つて、フキデリの畜生を詰問して、あはよくばメッヂイの手紙を殘らず召上げて來なきやあ。

十一月十二日

一つフキデリに逢つて詰問して來まそと、午後の二時に家を出た。己はキャベヂが大嫌だが、町人町の小店の前を通ると、其臭が紛々するのに、何處の家でも乾度門の下からおッそろしい物を流出すので己は鼻に蓋をして一生懸命に駈け抜けた。お剩けに、職人といふ奴は仕方がないもので、手ン手ンの仕事場から煤烟をした丶か吐き出させるから、此處らで散歩は到底も出來ない。目差す家の六階へ登つて、呼鐘をカン〳〵と鳴らすと、新造が出て來た。少しばかり痘面こそあれ、萬更でない娘でな、熟く視ると、それはお老婆さんと一緒に歩いてゐた彼娘さ。少し顏を赤らめたから、へッ、お婿樣が欲しいなと、直ぐ犬と看て取つたが、「何か御用で？」といふ。「は、貴家の犬に少し話があつて來たのですが……」といふと、此娘馬鹿に違ひない、それは其時の樣子で直ぐ分つた。犬奴がワン〳〵吠えて對つて來る。取捉へようとして、危く鼻へ咬付かれうとしたが、其時隅ッ子に犬の寢床の箱があるのを看附けたから、占めたり、これさへ有れば大願成就と、其側へ寄つて、中の藁を引掻き廻して、取出したのは小さな小版の紙束。や、其時の嬉しさは無かつた。犬奴、と見て、初は己の脹脛に咬付きやがつたが、紙束を取上げてからは、悲しさうな鳴聲を擧げるやら、お世辭を使ふやら。ドッコイ其手は喰ふまい、さよならッて、己は其處を駈出して了つた、お娘乾度己を狂人と思つたに違ひない、非常に驚いてたもの。家へ歸つて來てから、早速其手紙の調べに掛らうと思つたのは、蠟燭の明りでは己の眼では能く見えんからだ。ところがマウラが飛んでもない時分に床洗ひを

始めるのだ。フォンの女は馬鹿だ。綺麗好は好いが、兎角場知らずで困る。仕方がないから戸外へ出た、散歩しながら、一つ篤りと考へて見ようと思つて。今日こそは種々な企み、遣繰算段、何も角も根こそぎ分らう。この手紙で總ての秘密の尻が割れる。犬といふものは利口なもので、政治上の關係なら何でも知つてるから、大方手紙には閣下の肖像から行狀まで悉皆載つてゐよう、それから少しは彼お方の事も……おツと、言ふまい、何事も内所々々と。夕方家へ歸つてからは、大方臥轉んでゐた。

十一月十三日

一つ讀んで見よう。可なり讀み好い字だが、しかし書風に何處となく犬らしい所がある。えゝと。――「なつかしいフヰデリさんといふにも、貴女の名は餘り下品で、私今だに何だか氣が射して仕方がないわ。貴女の名を附ける時、もう些と好い名は無かつたもんですかねえ。フヰデリだの、ローザだの、――厭ぢやなくツて？　ですけど、まあ、それはそれとして、お互にかうしてお文の往復するやうになつて、私大變嬉しいわ。」

や、文句になつてる。句讀の切方も、假名遣ひも、間違つてないやうだ。課長は何處かの大學に居たつて威張るけど、からは書けません。それから、――「何でも思つた事や感じた事を、お友達と話し合ふ程樂しい事は世の中に滅多にないでせうね。」

ふむ、こりや何とかいふ獨逸書の飜譯で讀んだことのある說だ。表題はもう忘れツちやツたけれど、あれの借物だな。

「私お邸の門より外へ出たことがないけど、でもそれは經驗で分るわ。だつて私は先あ幸福な身の上でせう？　旦那様が洒落てソフヰーツて仰有る、私の御奉公申してゐるお孃様はね、それはもう〳〵大變私を愛して下すツて……」

へ、旨くやつてやがる……おツと、言ふまい、何事も内所々々と。

「旦那様も能く頭を撫でたり何かして可愛がつて下さるわ。ですから、私紅茶でも珈琲でも頂くわ、クリームを入れてね。朋輩のポルカンなんぞは毎もお廚房で大きな骨のしやぶりかしをガツ〳〵食べてるけど、あんな物が何處か美味しいんでせう？　骨で甘いのは野禽ばかりだわ。それも髓を吸取つたのは不味くツてよ。種々なソースを調合したのも佳いけど、ケーパースや青みを入れたのは厭だわ。でも、圓めた麵麭を喰べさせられる位厭な事はないと思つてよ。だつて御飯を食べる方だつて、何を有つてらッしやるか分らないでせう、たつに其手で鼻を閉めてさ、人を呼付けて、無理に口の中へ押込むんですもの、恥を搔かせちや不好と思ふから、厭々喰べはするけど……」

何だ、馬鹿な！　食物の外に書く事がないちやあるまいし。他の頁を讀んで見よう。も少し氣の利いた事が書いてあるかも知れん。

「お邸内には種々な事があるから、それを少し書いてみませうか？　先刻前に出た旦那様ね、その方の事をお孃様は父様と仰有るの。變な方よ……」

これ〳〵！　だから言はない事ちやない、犬といふ奴は何を觀るにも政治家の目で觀る。なになに、旦那様が如何だツて？

「變な方よ。不斷は沈默でね、餘り物を仰有らない方だけど、一週間程前から始終口癖のやうに、『己も貰へようかツて獨言仰有るの、片手に何だか書いた物を持つて、空の方の片方を握り詰めちや、『己も貰へようかツて獨言仰有るのよ。一度なんぞ私を捉まへて、メッヂイ、貴様如何思ふ、己も貰へようかツて仰有るけど、私にや何の事たか些とも分りやしないから、旦

那様の穿いてらッしやる長靴の臭を嗅いで退つちやつたわ。それから此間ね、旦那様が活々して歸つてらしッた事があるの。さうすと、朝の中は官服召した方が澤山入らしッて、何でも何か御祝儀を申上げてるやうだッけが、其中に御飯になつたの。其時の旦那様の御機嫌てッたら無かつたわ。」

すると、名譽心が熾んだな。かういふ事は能く記憶しとく必要がある。

―今日は是で失禮してよ。跡は明日までお預けよ。

―今日は！ また手紙を上げてよ。今日はね、お孃様が……」

なに、お孃様が如何したと？ へ、畜生！……おッと、後を讀むべし。

「お孃様が夜會へ行らッしやるので、一日大騷ぎでしたがね、お留守になつたら又手紙が書けると思つて、私嬉しかつたわ。内のお孃様は夜會が大好でいらッしやる癖に、お召替の時にはいつでもお憤り遊ばすの。夜會へ行くのが其様に面白いもんでせうか？ 私にや薩張分らないけど、お歸りはいつも朝の六時ごろでね、蒼い面して痩せて歸つてらッしやる所を見ると、夜會ぢや何も召上らないやうよ。私だつたら到底も辛抱が出來ないわ。だつて鷓鴣にソースを掛けたのか、鷄の骨附のローストが喰べられなかつたら、私如何なるか知れないと思ふんですもの。お粥にソースを掛けたのも好いけど、胡蘿蔔や、蕪菁や、朝鮮薊は如何して喰べても、美味しいとは思へないわ……」

何といふ變な文句だ！ 人間が書いたのでないのは直ぐ分る。初が間違つてゐないと思や、末が犬式に成つてら。此方の手紙を観て見よう。膨に長いな、へ、日附がないや。

―一寸、フヰデリさん、段々春めいて來たのね。私始終心臓が鼓動して、何だかそは〳〵ばかしてゐてよ、耳鳴もするわ。だから此頃は能く片足もちやげて、凝然とお隣室の物音に聞耳を立てるわ。あの、一寸、貴女だから言ふけど、私煩いほど男に附廻されてよ。よく窓へ上つちや、その男達を見てやるけど、中には二タ目と見られない醜男もゐてよ。一疋なんぞは、かう不恰好な番犬でね、大變な馬鹿なの、面を見りや直ぐ馬鹿が分るわ。それがね、のそりのそり歩いて來る所は、自分は何でも偉い者で、通ると皆が氣を附けて観ると思つてるらしいけど、お生憎さま！ 私まるで眼へ入らないやうに知らん面してゐてやるわ。それからね、お部屋の前へ時々怖らしいブルドッグが來てよ、後足で起つたら―其様な氣の利いた藝當は折介にや出來ないかも知れないけど―然うしたら、乾度頭だけ旦那様より高からうと思つて。家の旦那様だつて隨分高い方よ。それでね、其奴は乾度おそろしく鐵面しい奴に違ひないと思ふの。だつて、私唸つてやつても何處を風が吹くかッていふ風で、八の字一つ寄せないんですもの。面してね、舌をベロリと出して、大きな耳をだらりと垂して、窓から覗き込むの―ほんとに田舍漢よ！ ですけど、かうしてヤイ〳〵される中にや、私だつて些とや少と何とか思ふのが無いぢやないわ……一疋ね、お隣の垣根を越して來るのが有るのよ。トレゾルといふ名なの、貴女に見せたいわ。好い器量よ。あら、ほんとだわ……」

チョッ、人を馬鹿にしてやがら！ くッだらない！ こんなくだらん事を書きや、何處が面白いんだ？ 人間の事を書け、人間の事を。己は人間の噂が聞きたいんだ。己の心は饑ゑてるンだから、何ぞ糧になりさうな事を書いて慰めようとはせんで、こんなくッだらん事を……えい、一枚撥ねて見ろ、もッと氣の利いた事が有るかも知れん。

「お嬢様はテーブルの前で、何だかお裁縫していらツしやるから、私室から戸外を見てゐたの。戸外を見てると面白いわ、種々な人が通つて。さうすとね、偶と男衆が來て、『チェブロフ様が入らツしやいました。』といふと、お嬢様は、『お通し申して』と仰有るなり、突然私を抱上げてね、『まあ、メッヂー、嬉しいわねえ! 如何な方だと思つて? 烏羽といふなあといふ髮の毛よ。侍從さんでね、如何なに好い眼光だらう! 黑眼がちで、明るくツて火が炎えてるやうよ。』ツて、お居間へ驅込んでお了ひなさるぢやないか。其中に、その侍從様が入つてらしツたがね、まだ若い、成程黑い頬髯の生えた方でね、入つてらしやると、ズッと鏡の側へ行つて髪を撫でたり、座鋪をジロ〳〵見廻したりなさるのさ。私一寸唸つてやつたわ。而して舊の席に復つてると、お嬢様が直きに入らしツたので、侍從様は畏う氣取つて御挨拶なさる、お嬢様は嬉しさうにお辭儀をなさる、私それを見て見ない風で、何喰はん面して窓の方を向いてね、一寸首を傾げてお話を聽いてると、まあ、フキデリさん、如何なお話があつたと思つて? 皆他愛もない事ばかしよ。やあ、舞踏會でさる貴婦人が舞踏の手を間違へたの、ボ、フとかいふ人の幅廣のネクタイしてる所は殊に滑稽だつたが、危く噴ばうとしたの、リチーナといふ女の方は鼠色の眼だのに、碧い眼だと思つてるのと、其樣な事ばかしなの。何處が好くツて、チェプロフ様がそんなにお嬢様のお氣に召したんだか、私にや分らなくツてよ。そんなに大騷ぎする程の方ぢやないわ……」

さうとも〳〵、如何かしてゐなさるンさ。チェプロフなんぞが其樣にお氣に入る筈がない、ええと、それから、――

―此方がお氣に召す位なら、旦那樣のお書齋に居るあの書記さんだつてお氣に召す筈だわ。その書記ツていふのはね、そりや醜男よ。宛然龜の子が甕を被つて歩いてるやうな人

誰の事たらう?

―名前からして滲よ。いつでもお書齋で羽ヘンを削つてるの。頭といつたら、宛で藁束のやうでね、毎も下男代りにお使に遣られる人なの……

あ! 己の事だ。何で己の頭が藁束だ?

―お嬢様は此人の面を見ると、吹出さずにや居られないんですツて。―

嘘吐け、ど畜生奴! 忌々しい事言やがるなあ! それといふが皆嫉妬からだ。誰が綵を引いて此樣なことを言はせるのだか、己はチャンと知つてる、皆黑長の所業さ。何しろ彼奴は己を不倶戴天の敵と看做してゐるんだから、何かにつけて己にケチを付けたがる、……しかし[illegible]にもう一本あるから、之を觀て見よう、之を見たら自然と事の經緯が分るかも知れん。

―私の懷しいフキデリさん、大變御無沙汰したわねえ、恕して頂戴よ。私ね、此頃は嬉しくツて嬉しくツて、それこそ有頂天だわ。何かの小說に戀は第二の命だと言つてあつたけど、本當に旨いことを言つたもんだと思つてよ。それにね、今お邸は全然光景が違つて了つたの。侍從樣は毎日入浸り、お嬢様は最う夢中で旦那樣も大變御機嫌なの。家にゲリコーリイツて能く獨言言つちや、お座鋪を掃く下男が居ますがね、其人の話だと、押付、御婚禮があるだらうツていふの、それといふがね、旦那樣は常々、將官か、侍從か、下つたつて大佐でなきや、お嬢樣のお婿樣にはしないツてツてらツしやるから……」

えい、もう、此樣な手紙は見たくでもない! ……侍從だ、將官だと、其樣な事ばかりで持切つてら。あ、あ、己も將官になりたいなあ! 將官になつて婿になりたいのぢやない、將官

になつたら、乾度彼人達がチヤホヤして追笑輕薄の有丈を盡す、其が見たいのだ。而して拙者は貴方がたには鼻汁も引掛けんぞと言つてやりたい。チョッ、忌々しい！ と、己は封頭此呆けた犬の手紙をずんべら／＼と引破いた。

十二月三日

無暗言すな、然ら旨くは問屋で卸さぬわ。結婚させてなるものか！ 侍從が何だ。尋常の官職でないか。手に取つて見られる品物ぢやなし、侍從だからつて額に三つ目がある譯でもない。侍從の鼻だつて金製でもあるまい？ 己の鼻だつて、誰の鼻だつて、鼻に違は無い筈だ。彼人だつて鼻で匂を嗅ぐだらうが、飯は食ふまい、嚔をするだらうが、咳嗽はしまい？ 己は時々考へると不思議でならん、何爲斯う人間は身分が違ふんだら、成程己は九等官さ、だが、何故己は九等官だ、九等官の所由が分らない。ひよッとかすると何か、伯爵とか將官とかいふ身分だが、唯一寸九等官のやうに見えるのかも知れん。己が如何いふ者だか自分も知らずに居るといふ事が、隨分無いとも限らん。昔から能く有る事だが、士族なら未しも、ほんの詰らぬ、尋常の素町人、どころか、土百姓と思つてた人が、何かの拍子で素性が知れて見ると、男爵だとか何だとか、何か斯う素晴しい身分の人だつたりする事が幾らも有る。土百姓でさへ然うなら、士族にや如何な人があるか知れやしない。だから若し萬一己が將官服でも着けて、右の肩にもエポレット、左の肩にもエポレットといふもので、藍色の大綬章か何かを肩から斜違に掛けて行つたら如何だらう？ あのお方は何といはれるだらう？ 阿父さんの局長の言草も聞きたい。彼人の虚飾家ッたらないからな。彼は邪宗の歸依者です。何の角のと韜晦れてゐるけれど、彼は屹度邪宗の歸依者です。その證據には挨拶に手を出す時にや、乾度指を二本外出さん。何の、己だつて、から言つてる中に總督を拜命するか、經理部長になるか、如何な偉い者になるか知れやせん。何爲己が九等官だか、其所由が聞きたい。何故九等官だ？

十二月五日

今朝は新聞ばかり讀んでた。西班牙で妙な事がある。己には自體何の事だか能く分らん。王樣が無くなつて、太子を立てなきやならんので、皆途方に暮れて、それで形勢不穩だといふ。妙ちきりんぢやないか。如何して王樣が無くなつたのだらう？ 何とかいふ女の貴族が王位に登る筈だッていふけれど、女が王位に登るッて法はない。其樣な事ッてない。何でも王位には王樣が坐らなきや不好だ。王樣になる者が無いんだッていふけれど、其樣な筈はない。國に王樣が居ないッて事はない。王樣は居るンだが、何處かに隱れてござるのさ。なに、矢張國内にござるのだけれど、何か、その、御一門に故障があるとか、隣國の佛蘭西か何處かが怕いとか、何とか其處に仔細があつて隱れてござるのだらう。それとも何か別に仔細があるかな。

十二月八日

餘程役所へ行かうかと思つたが、種々仔細があつて屈託してゐたから止めた。西班牙の一件が兎角氣になつてならない。女が王樣になるッて法はない。斷じて不可。第一、それでは英吉利が承知しません。それに歐羅巴全體の政治上の關係もある。墺地利の皇帝といふものもある、如何も此一件が氣になつて氣になつて、これに現を拔かして、一日用が何も手に附かなかつた。マウラの話に、飯を喰ひながらも何だか甚く恍然としてゐたといふ。成程放心して皿

を二枚落して粉微塵にしたやうにも思ふ。食後も恍惚してゐたが、何の得る所もなかつた。それからは大方寝室でごろ〳〵して、西班牙の事ばかり考へてゐた。

第二千年四月四十八日

今日は非常にお目出度い日だ！　西班牙に王様はござる。見付かつた。その王様といふのは斯くいふ拙者だ。今日になつて初て分つた。突然目が覺めたやうな氣持がする。考へて見ると不思議でならん、如何して己は今迄九等官だ何ぞと思つてゐられたらう？　こんな途方途轍もない事が如何して頭に浮んだらう？　瘋癲病院へ入れると誰も言はなかつたのが見付けものだ。もう何も角も判然分つた、掌を指すが如く分つた。が、不思議だな、今迄は何も角も斯う何だか霧のやうな物に包まれてゐたのだ。トいふのも畢竟皆が人間の腦髓といふものは頭顱の中に在ると思つてゐるからで、飛んでもない間違ひさ。腦髓は裏海の方から風が持つて來たものだのに。で、まづ手初にマウラに身分を明したところが、己が西班牙の王様だと聞く、と吃驚しやがつて、魂身に添はずといふ體だつた。馬鹿な奴だ、まだ一度も西班牙の王様を見たことがないのだ。しかし、今迄時々長靴の掃除が不行屆の事もあつたけれども、己は其樣な事を何とも思つてやせんと言つて、慰めて置いた。何しろ相手は下司だ。高尚な事を言つたつて分りやしない。マウラは西班牙の王様といふものは皆フヰリップ二世に似てゐると思ひ込んでゐるので、驚いたんだから、己はフヰリップとは違ふと、能く言つて聞かせてやつた。役所へは行かなかつた。役所なんぞの首尾は最う構はん。もう何てツたツてお斷りだ。己や最う彼樣な見たくでもない公文なんぞ寫しちや遣らんから。

三十月八十六日、晝夜の界。

今日役所の守衛が來て、もう三週間も缺勤してゐるから、好加減に出勤しろと言ふのさ。まあ、一寸洒落に出勤して見た。課長奴乾度己がお辭儀をして缺勤の言譯をするだらうと思つてたに違ひないが、己は左程怒つてるやうでもない、トいつて餘り機嫌の好くもない顏をして、平氣でジロリと其顏を見たまゝ、誰も目に入らんやうに、默つて席に着いた。それからズッと一通り小役人共を見渡して、腹の中で、若し此處に西班牙の王様の居ることが分つたら……へ、大騷ぎが始まらうて。まづ課長奴なんか、今局長の前へ出ると行るやうに、己にお辭儀しますから、ト思つてゐると、何た[illegible]、公文を持つて來て摘要をしろといふ。手も附けなかつたね。其中に皆がざわつき出して、局長の御出勤だといふ。我先にと局長の目に留りたさに、先を爭つて飛出して行つたが、己は一寸も動かなかつた。局長が局長室を通り抜ける時も、皆な衣の釦を掛けたが、己は知らん顏してゐた。何だ、局長なんぞ？　局長の前に直立するなんて、己は真平だ。第一彼樣な局長ッて有りやしない。彼はコロップで、局長ぢやない。尋常の、普通のコロップで、壜の栓になるばかりで、其より外に何の用もない人だ。一番面白かつたのは、己の署名を求めに公文を持つて來た時で、大方己が隅ッ子へ、係長何の誰と書くだらうと思つてると――お生憎樣！　いつも局長の署名する中央の處へ、フェルデナンド八世とやつて退けた。すると、一座寂然となつて皆唖然としてゐるから、手を擧げて制して、いや、敬禮ならするに及ばんと言つて、戶外へ出て了つた。其足で直ぐ局長の官宅へ行くと、局長が留守だから、下婢が入れまいとする。そこで、己が一言いつたら、

彼奴呆氣に取られて了つたから、其隙につかつかと化粧部屋へ行つて見ると、令孃は鏡の前に椅子に凭つてゐたッけが、聲上つて後退を始めた。が、己は西班牙の王樣といふことは明さないで、唯胸氣な奴が二人の仲に水を注しても、今に一つになつて、卿は思ひ掛けぬ幸福の身の上に成りますぞと言つて聞かせた。其上言つては妙ではないから、其だけにして戸外へ出たが、考へて見ると、女といふ奴は食へぬもので、今となつて初て女の正體が分つた。古往今來女は何に惚れるものだか能く知つてる者はない、初て之を發見したのは己だ。女の惚れるのは惡魔だ。いや、串戲でないことさ。物理學者は女はかやう〳〵云々のものだと云ふ。馬鹿な話だ。惡魔でなきや女は惚れない。一等棧敷の桝の中から、ロルネットを向けてるから、大方あの勳章を垂げた肥滿漢を見てるのだらうと思ふと、大違ひ！ その男の背後に立つてる惡魔を視てるのだ。惡魔が其男のフロックの中に匿れて、其處から手を出してお出で〳〵を極める——と、もう其男の妻に爲ツ了ふ、妻に。皆虚榮心の爲せる業だが、其虚榮心は何から起るかといへば、舌の裏に小さな腫物があるからで、其中に大さピンの頭ほどの小さい蟲が栖んでゐる。皆豆町の何とかいふ理髮師の細工だ。名をツイ忘れたが、何でも其奴が或る産婆と共謀になつて、回々教を全世界へ弘めようと企んでゐる。これだけは確實な話で、それが爲め佛蘭西では國民の過半が最う回々教徒になつて了つたといふ噂だ。

何日でもない。何日といふこともない日。

ネーフスキイの大通りを歩いたが、微行で、西班牙の王樣といふ事は氣振りにも見せなかつた。まだ謁見も濟まぬ中に、こんな町中で大勢の目に觸れては體面に關すると思つたからだ。謁見を躊躇するのは、まだ西班牙の國服が無い。裁縫師に誂へようかとも思つたが、皆カラ話が分らない、お剩けに商賣に精を出さず、相場に陷り込んだり何かして、今ぢや大方は道普請の石を敷いて居ようといふ徒輩ばかりだ。拵へて唯た一度しか着ない通常官服があつたから、是でマントルを作ることにしたが、彼奴等の手に掛けて不體裁な物にされッ了ふのも業腹だから人目に掛らぬやうに戸を締切つといて、己が自分の手で縫ふことにして、鋏で寸々に官服を切りこまざいた、裁方が全で違ふのだ。

日を忘れた。月も矢張無いやうだ。何だか本體が分らん。

マントルは全然縫上つて、支度は出來た。こいつを着たら、マウラがワッといつて驚いた。しかし未た謁見する譯に行かんのは、今以て西班牙から使節が來ぬ。使節が附添はんでは見ッともない、威嚴に關する。掻くやうにして使節の來るのを待つてるのだ。

一日

使節の遲延してるのには呆れ返る。何ぞ故障が起つたか知ら。佛蘭西でも邪魔をするンぢやないか？ 佛蘭西は、一番仲の惡い國だから。一寸郵便局へ行つて、西班牙の使節は未だ着かぬかと問くと、局長は大篦棒だ、何も知りやアがらない。西班牙の使節なんぞは此處には居ないが、手紙を出したいんなら、制規の郵稅を拂ひなさい、いつでも受付けるッて言やアがつた。馬鹿ッ面な！ 手紙が何だ？ 手紙なんぞが何の役に立つ？ 手紙は藥種屋の書くものだ……

二月の三十日。マドリッドに於て。

兎角する中に、もう西班牙へ來て了つた。や

ツといふ間に來て了つたので、茫然として了つた。今朝の事だが、西班牙の使節が來たから、一緒に馬車に乘つたところが、滅法疾い。變に思つてる中に、疾風の如く走るので、半時ばかりすると、最う西班牙の國境へ來て了つたが、しかし今は歐羅巴中に鐵道が敷かれて、汽船なんぞも途方もない速力を出す世の中だから、其は好いが、西班牙といふ處は妙な處で、ヒョイと内へ入ると、其處に頭を剃つた者が大勢居る。さては貴族か兵士だなと思つた。でなきや、頭を剃つてる筈がない。宰相が己の手を引いて案内をして呉れたが、これが怪しからん事を行るのさ。狹い部屋へ己を突飛ばすやうにして押込んで、此處に入ツとれ、フェルヂナンド王だなんぞと言ふと、酷い目に遭はすぞと云ふ。が、これは試しに過ぎんといふことをチャンと心得てるから、否だといふと、宰相が己の背中を二度棒でどやした。おツそろしく痛かつたので、危く悲鳴を揚げようとしたが、いや〳〵西班牙は今だに武士道の行はれる國だ。これが何でも高位に登る時の武家の作法だツけと憶出して、押耐へた。一人になつてから、國務を視たが、偶と氣が附いて見ると、支那と西班牙とは全く同國だ。それを皆が無學で、別々の國のやうに想つてゐる。譃と思ふたら試しに紙へ西班牙と書いてみるが好い。西班牙と書いた積りでも、いつか其が支那になつてるから。が、其樣な事よりか、明日の事を想ふと厭になツ了ふ。明日七時に變挺な事がある。地球が月に乘かる筈だ。既に此事は英國の有名な化學者のウェーリントンも言つてるが、己は月の箆外れて軟かで脆いことを思ふと、心配で〳〵どうもならぬ。月は通例漢堡で製造するけれど、不手際千萬なものだ。英吉利が默つて視てゐるのが不思議な位のものだ。漢堡では跛の桶屋が拵へるのだが、此奴が愚物と見えて、てんで月ツていふものを知らない。瀝青を塗つた綱を使つて、木油も少々は用ゐるから、地球全體が實に惡臭くなつて、鼻の孔に栓をする必要が起るのだ。從つて月も軟かい。餘り軟かで人が棲つてゐられんから、今では鼻ばかり棲つてゐる。鼻が月に棲つてるから、人間は、それ、自分の鼻が見えん。地球は重たい物で、こいつが乘かつた日にや、吾々の鼻は粉微塵になつて了ふと思ふと、居ても立つてもゐられんから、靴下を穿き、短靴を穿き、急いで參議院の議事堂へ行つた。警察の力で地球を抑へつけて、月へ乘掛らせぬやうに、勅令を出さうといふ腹なんだ。議事堂には頭を剃つた貴族が澤山居たが、此人達は物の道理を能く辨へてるから、己が、皆承はれ、地球が月に乘からうと致す、月を救つて取らしませ、といふと、皆言下に勅旨を畏まつて、いで〳〵と壁を攀ぢて月を捉らうとすると、大宰相が入つて來た。それを見ると、皆バラ〳〵逃げ出したが、己は王樣の事だから一人居殘つて居ると、大宰相は棒で奴を引敲いて元の部屋へ追込んで了つた。己は膽を潰したが、これが西班牙の國風だ。國風にや下樣も敵はない。

同年二月後の一月

今だに未だ西班牙といふ國の樣體が分らん。國風も宮中の儀式も皆世間竝を外れてゐる。どうも變挺で、不思議で、譯が分らん。今日も己は坊さんになるのは厭だつて一生懸命に喚いたけれども、無理に頭を剃られて了つた。冷水を頭から打掛けられる時には全で夢中だつた。あんな厭な想を爲たのは生れて初てだ。狂人のやうになつて騷いだが、大勢に抑へつけられて了つた。不思議な風習で、とんと所由が分らん。馬鹿氣きつてゐる。無意味なものだ！ こんな風習を廢させなかつた今迄の王樣の心持が己には了解めん。が、種々な廉々で考へて見

ると、己は偶然としたら宗教裁判に罹つたのぢやないか知ら。すると、あの宰相と思つてるのが首詰め大拷問官といふ所だ。唯不思議なのは、王様が宗教裁判に罹る筈がない。尤も佛蘭西の所爲なら、何とも謂へんけれど。殊にポリニヤックと云ふ奴も居る。ポリニヤックは厭な奴だ！　必ず己の邪魔をして死地に陷れずんば止まずと誓つた奴だ！　それでから迫害に迫害するのだらうが、へん、己はチャンと知つてるぞ、貴様は英人の指の先で三番を踊つてるのだ。英人は大の策士だ。何處へでも首を突込む。英吉利が烟草を嗅ぎや、佛蘭西が嚏をする位の事は、今ぢや誰でも知つてるからな。

二十五日

今日大拷問官がやつて來たが、其足音が遠くでした時に、己は急いで椅子の下に隱れて了つた。彼奴め己の姿が見えないので、呼び出した。初は大聲でポプリシチンと呼んだツけが、默つてゐるので、今度はアクセンチイ、イワーノフ！　九等官の先生！　士族さん！　といつた。矢張默つてゐると、フェルヂナンド八世、西班牙の王様！　といつて呼ぶから餘程首を出さうかと思つたが、考へたね、いや、其手は喰ふまい！

もう分りましたよ、また頭から冷水を打掛ける氣だらう、と思つてる中に見付かつて、棒で椅子の下から突き出された。厭な棒だ！　ピシャリとやられると、途方もなく痛い。しかし棒の痛さも何も忘れて嬉しかつたのは今日の發見で、雄鷄は何の雄鷄でも皆一つ宛西班牙を持つてゐる、羽がひの下に隱してゐる、それが偶と知れた。大拷問官は大きに尖がつて、何だか罰を當てるツて出て行つたが、幾ら憤つたつて最う睨みが利かないから、己は臍茶でゐた。彼奴は英人に使はれてる人形だもの、機械だもの。

三百四十九月年二三十日四

いや、もう〳〵辛抱出來ん。酷い事をする！　頭から冷水を打掛けるとは情けない。何と言つたつて聽いて呉れるぢやなし、顧きもしなきや、耳も假さない。如何な惡い事を己が爲た？　何爲己を此樣に虐める？　この便りない己を、ま、如何しようといふのだ？　何が欲しいのだ？　何にも與る物は有りやしない。あゝ、こんなに虐められちや耐らん、命が續かん。頭が燃えさうで、其處ら中の物がグル〳〵廻る。助けて呉れ！　連れてツて呉れ！　旋風のやうに疾い馬を三疋貸して呉れ！　そら、馭者、乘つたり、鈴も鳴れ、馬も跳擧がれ、而して此世から連出して呉れ！　どんどと駈けた。何も見えぬ程駈けた！　そら〳〵ひら〳〵と舞騰るのが空で、遠方で光るのが星よ。森が黑い木と飛びや、月も一緒に飛ぶ。鳩羽色の霧が足下に棚引いて、霧の中では絃の音が……そら一方が海で、一方が伊太利で、そら〳〵露西亞の百姓家も見える。遠方に見えるのは己の家ぢやないか？　窓に見えるのはお母親ぢやないか？　阿母さん、お前の倅は憂目を見てゐる。助けて下され、助けて！　切めて哀れを泣いて下され！　これさ、こんなに憂目を見てるでないか！　便りない兒を抱締めて下され！　己や此世に身の置處がないぞい。虐められてるぞい！　阿母さん、病身の兒を可哀さうだと思つて下され！……ときに、アルジールの王様の鼻の下に瘤が出來たを御存じですかい？

志士の末期

原作者ポリヮーノフは露国の社会革命党員である。曾て同志ナサノートンの獄中より脱走せんとして捕へられ、軍法会議に付せられた結果、死一等を減じて無期懲役に処せられ、種々の監獄を転々して最後に西伯利総督府の管下へ移されたが、こゝで千八百九十[illegible]年四月といふから最初、獄に入つてから十二年目である、脱獄を企てゝ首尾よく成功した。此短篇はペトロパウロフスク在監当時、同じ獄舎に同時してゐた同志が数名あつて、その人々の記念の為に作したものだと云ふ。

一

「もう一昔になるなあ！」と彼は呟きながら額を撫でた。撫でたと云ふ頃く湧はる思ひの雲を拂ひ得るではないが。「もう一昔だ！」と又反覆して、腕を伸べて、骨ばかりなる爪先を凝と視め、

「しかし痩せたなあ！ 宛で骨と皮ばかりだ。これぢや生の親だつて見違へるだらう。ますら雄を痩雄か……」と微笑して目を閉ぢた。

「しかし、或日の事は忘れられんなあ！」

と又しても潮と湧来る思出に不知誘はれる。思へば、幾たびかの春秋を経て、今は遥かなる昔の夢とはなつたけれど、ツイまだ昨日の事のやうに思はれて、其日の事が歴然に目の前に浮ぶ。

心ゆくばかりカラリと晴れた、燬くが如き夏の日に、ウォルガの川添の野中を行くと、繊雲一つだにない蒼空に、日は高く差昇つて、輕い袖無外套越しにジリ／＼と照付ける暑さ、それにも弱けず、既に道の十五露里も来てから初めて疲れて渇を覚えたので、立止まつて、帽子を脱つて、額の汗を拭ひつゝ四下を眺廻した。

見渡せば千里の平蕪は日光に浴びて、茸々たる野草の穂先は銀色にきらめき、折節に何處からともなく通ふ微かなる軟風に漣だつ時には、耳に耳を差寄せて、何やら祕密の一大事を囁き、チラ／＼と限りなき火花を散して、穂浪の末は遙かの天末に消える。左手に地の窪みたる處が見えて雲雀鷚が二羽其上を輪に舞ひその啼く聲は耳を劈くばかりで、時々空を滑つては雪白の腹を日に曝す。この窪みを一條の小川が透迤として流れてゐる。[illegible]には緑色ばかりのいさゝ川となり、開いては細長い池となり、その際として日に燿く。所を望めば、草むらの中に[illegible]投薬の首環かと見られる。

其時彼は此小川の岸に近寄つて、岸に生れた青柳の蔭を、やをら草の上に卸して、[illegible]帽子で川水を掬上げた。生温い泥水では有つたけれど、眞に是れ甘露の味！ 之を飲めば元気が俄に體に染込む想がある。飽まで飲んで、帽子を復た被に掛けて曝し、雑嚢の側に腰を卸して[illegible]込んだ。

考へる事は幾らも有る。今度が革命運動の初陣で、遊説の皮切だ。この田舎行脚を被て、下着の着易へ、[illegible]旅券、民衆に讀ませる爲の小冊子数十部、遊説地方の地図なんぞを雑嚢に詰込み、同志に別れて都を出てから、まだ一週間程にしかならぬ。

遊説の皮切は大成功であつた。手初めの村は去年の不作で飢饉の上に、彼の踏込む少し前に警察官に襲はれて、未納を催かれ、牛馬を公賣に付せられて、さらでも人心の激昂してゐる所であつたので彼の激烈な演説は大喝采を以て迎へられ、書物を朗讀すれば熱心に耳を傾け、読話會が[illegible]時なんぞ、かほど下地が出来てゐれば、もう此上は書物も演説も無用とさへ思はれたことが再三あつた。日々に地主を罵り、坊主を叱

し、警察官を呪ふは愚か、時とするとツァールをさへ容赦せぬことがある。曾て一人が、何と言つても我々に自由を與へたのはツァール、お蔭で奴隷は廢せられたと言ふと、もう年配の一人の農夫が之を叱して、「駄目吐くでねえ！　今だとつて己達は奴隷でねえか？　昔はコレ地主の持物だつたアンが今ぢやツァールの物になつたばかしの事でねえか？」といつた。

二

想へば其頃は一生の花であつた。世故に通じた、冷靜な、年寄つた人達でも、かゝる折には調子に乘つて、意氣張り、其活動の效能を信じ過ぎる弊に陷ち易いもの、況て彼はまだ乳の香の失せぬ廿歳の事なら、あどけなく浮かれ易く、筆の力舌の力を信ずること厚くして、世路の難きを慮ることは反つて闕けてゐた。人間の事は皆明白で造作もない事のやうに思ひ、何物か能く眞理の力に勝たむと固く信じてゐたから、人に對つて眞理を告げさへすれば、人も自分の如く深く厚く之を信じて、熱心にその說の流布に努めよう、とすれば遊說兩三年にして、もう赤旗を揭げるばかりになる。赤旗さへ揚げれば、壓制と虐待とに充ちた舊制度は其黑風に吹き斷され、朝霧の風に散り又日光に消ゆるが如く、忽ち跡方もなくなると思つてゐた。かう思つてゐたのは黃口の彼ばかりではない、多くの同志も實は然う思つてゐたのである。

出立の前晚告別かたぐ、今一度何角と眞理のお話を伺ひたいとて、宿へ尋ねて來た者が數名あつた。中にジプシイらしい面相をした紅顏の一青年があつたが、凝と視据ゑて話を聽いてゐたあの險しい眼光、やがて、その彼畜生共が威張りこくつて人の生血を吸ひくさるも最う永い事ぢやござりましねえといつた年頃の深い怨みの籠つたあの音調、それが目の底耳の底に染みて今に忘れぬ。もつと逗留して居て呉れの、再遊の期がなかつたら、同志を代りに寄越して呉れの、新刊の書物は成るたけ多く送つて呉れのと、懇な頼みもあつた。其日の朝は、宿の老婆が辨當代りにと麥粉を捏ねてケーキを燒いて、何といつても、まあ、持つて行かつしやい、お前樣はこれ旅の人だと、强ひつけたその親切には、泣かずには居られなかつた。

あゝ、何たる殊勝な、好い人達であらう！　此時の經驗で彼が平民を信ずる念は愈々堅く、殆ど迷信に陷つて、凡そ平民とさへいへば、皆ありと所有德は愚か、ない德までも備へた人のやうに妄想するやうになつた。さて惟ふに、夫紳士ばら、特權を挾んで我は顏に振舞ふ輩は、新主義を容るゝ雅量のないこと言ふ迄もないけれど、平民は然らず、十分に共同的精神があつて、既に數十代を經來つたれば、其生活にも經驗の生んだ秩序は自ら立つてゐる。此礎の上に新社會制度を打建てんこと、左迄困難でない。平民は必ず我黨の言論に感奮して蹶起するに至らう。さすれば歷史上の一大變動が起つて、截然として茲に一新紀元を劃し、萬民一體の、平和な、幸福な新生涯に入るのも今の間。さうなつた曉には、壓制や無道や、百弊盡く形を潛めて、政治上の不平等、それにも增して有害な貧富の懸隔、それらは皆跡方もなく消失せよう、と思つてさへ、氣も坐ろになるほど嬉しい。

今に忘れぬは、一夜脫俗の偉人トーマス。ミュンツェルの文を誦した事がある。讀んで「生存とは人類の解放の爲に勞苦するの謂なり」と云ふ一句に至つて、忽ち電流が身に傳つて走るが如く感じた。もう、其先を讀むことが出來ず、兩手で確と熱する頭を抱へて、永い〳〵間身動き一つせず、此句の深長な意味に深く思ひ入れば、世には僻かで止みがたい苦しい數々の問題がある、此句は恰も其一つに思ひ切つたる明

自な解決を與へたものと思はれる

其時心に思つたのは、自分は生死の大海に漂ふ、物の緣なき一粟の身となつて、世に懸隔れた狭い境界に潜み、我さへ好くばと果敢なき一個の私にのみかまけて一の系統中の一部分となり、運命に見放され、人間の無法に泣く天下の窮民と生死を共にすべきである。自分は強者に虐げらるゝ多くの弱者を救はん爲に奮闘の中に我幸福を求めんことを欲する。ミュンツェルの語は將來我旗印たるべし。今日以後自分は自由と正義の爲に誓つて一身を獻げよう。

で、其日は遊說の皮切は首尾よく濟ました氣の逸みに、これでこそ我職分を盡したといふもの、思ふばかりでも、限りない幸福の感が胸に充ち、之に比べては世俗の所謂幸福といふものは、取るにも足らぬ空幸福、大理想に仕へるこそ眞に人間の至福だ——と、思ふと、何を目に觀ても心に見ぬ、盲人に等しき人達が此間の消息を解せぬのを、憫とも何ともいへず哀れに思つて、彼は其時大歡喜の涙に滿ちた眼を放ち、遙か彼方の天に消え行く曠野の果を眺遣つた。

「あゝ、皆青年の客氣であつた。」と彼は獨言をいつて臥返りを打たうとすると、壞血病で腫起つた兩足が錐ででも揉まれるやうにキリ〳〵と、その痛さは譬へやうもない。もう此獄に繋つてからも日數が經つが、病勢は日增しに募るばかりで、此頃は兩足も紫色に浮腫れ、處々化膿して膿血が流れて、我足ながら我足のやうな心地がしない。口も上顎が糜爛れて、齒の根は搖ぎ、脱けたのも最う四本に及ぶ。朝と晩との二度の食事には肉入の野菜の汁を二匙三匙吸ふので、麺麭などは柔かな部分でさへ最う口へは入らぬ。強ひて入れゝば、齒に觸つて飛上る程に痛い。搗てて加へて、もう肺がいけぬ。咳嗽が間斷なく出て、赤黑い血を吐く。時とすると夥しく其を吐くので、覺悟した身にも流石に慄然とすることがある。

もう此分では永くは持たぬ、と嘆息して部屋の内を顧視した。窓ガラスはドンヨリ曇つて、天井には蜘蛛の巢を張渡し、四方の壁はじめじめと濕氣を帶びて青苔さへ生えた處がある。床は無論木造りで、加之も其が泥だらけ。此獄を觀ると何とも言へず心持が惡い。

此時入口の戸に開けた孔の蓋がコトリとゐざつた。これは外から內を覗く爲の孔で、ガラスを嵌めてある。見ると、看守の憲兵の胡散さうな眼が其孔から覗いてゐる。やがて、礑と又蓋がおりて、竊と足音を偸みつゝ、憲兵は遠ざかり行く氣色。死ぬにまで監視が附くと思へば、堪えず怨氣が心頭に發する。

又覗かれるのが厭さに、痛みを怺へて臥返りを打ち、再び前の物思ひを續けた。あの時彼は平民を賴もしく思つたが、それは束の間の徒夢で、其後深く親しんで見ると、平民は存外無智で、卑屈で、自分の地位を意識せぬ、よし意識はしても、敢然として其權利を主張する氣力に乏しい。苦い〳〵經驗を嘗めて、失望して遊說から戻つて來たが、しかし元氣はまだ〳〵挫けなかつたから、矢張成功を疑はずに、同志と倶に革命の氣運を鼓吹することを止めなかつた。其中にクーデターが始まつて、同志は續々逮捕せられる、處々の監獄は未決囚で一杯になる、形ばかりの裁判があつて宣告が濟むと、頭を剃りこぼたれ、足枷手枷を穿められて、ハリコフや西伯利の監獄へ死に行く者が道路に項背相望むばかり。其中で稍幸運と謂はれる際は灰色の獄衣を被せられて、西伯利の卑濕の澤地へ流される人々で、尤も可傷なのは三年四年の永の年月を未決監の鐵窓の下に送る憂きに堪へかねて自殺するもの、病死するもの、或は發狂する者さへある。此悲慘の有樣を見るにつけ、聞くにつけ、彼の心中の愁苦は譬ふるに物がなかつた。もう

絶體絶命の場合、非常な場合には非常な手段を要する。——あゝ、彼は進んで死地に入つた。死地に入つたのは誤りか、誤りでないかは、蓋棺の後に定まる事、兎も角も彼は其主義に殉ずる覺悟で、一身を投出して掛つたのであつたが——憶出すと、無念なるに、其事破れこ彼が汽車で莫斯科を落延びる時の事であつた。同乘の旅客の中に、服裝の賤しい、怪しい人物が一人あつたが、彼の向ひに空席の有つたにも拘はらず、態々隔絶れた處に席を占めて、此方が側視でもしてゐれば目を欹てて凝と此方を視め、振反れば狼狽てゝあらぬ方を向いて、素知らぬ面をする。どうも胡散な奴であつた。やがてトある停車場で又一人胡散の奴が乘込んだ。互に知らぬ面をしてゐるけれど、どうも可怪と感じたので、坐睡の眞似をして窃に注意してゐると、果して二人は目交をして點頭き合つた。え失敗つたと思つたが、もう奈何することも出來ぬ。剰へ其二人は二所に分れて左右の入口近く座を占めてゐたから、孰れの口から出るにしても、其中一人の前を通らねばならぬ。失敗つた失敗つたと腹の中で連呼して窃と上衣の下に忍ばせてゐた拳銃を囊から拔き出し、之を外套の衣兜へ入れ易へたが、それでも尚ほ不安心なので、更に上衣の鈕を外して、右の脇に垂けてゐた短刀を窃と前へ引出した。其中に汽車は目指す某市の停車場へ着く。車箱の中が一しきり混雜つく紛れに、彼も左手に僅かばかりの手荷物を提け、右手は外套の衣兜へ入れて、確と拳銃の手を握つたまゝ、素知らぬ面をして降りようとして、例の胡散の奴の前を通ると、其奴は目を揚げて、ジロ／＼と視たばかりで、其時は手出しをせず、引續いて降りて來る氣色であつたが、プラットフォームへ降りて見ると、其等ら一面に憲兵だらけ、加之も停車場の建物の入口には將校が二人立つてゐる。一人は鐵道附らしく、今一人は町から出張したものらしい。彼は殆ど進退谷まつた。手荷物を拋棄て、プラットフォームを飛下り、列車の下を潜り脱けて線路を越え、向うに見える鐵道職員の役宅の處まで逃け果せれば、もう占めたもの、大丈夫捕まる氣遣ひはない。けれども日が入つたばかりで、まだ四下は明るく、到底も逃けたとて逃け果されさうもなし、且つ考へて見れば、近頃は同志中に往々探偵マニヤに罹る者がある。彼も或は其氣味で、實は何も怪しむべき事はないのかも知れぬ。えいと思切つて出口の方へ行かうとすると、衝と憲兵の一下士が行手に立塞がつて、「命令に依つて逮捕します。」と云ふが早いか、誰やら背後から確と兩腕を押へた者がある。もう拳銃を取出すことが出來ぬ。止むを得ず衣兜の中で銃口を前に向け、引金を引く、ドンと云ふ、あッと前の憲兵が腹を押へて、タジ／＼とよろけ、尻居にどうとなつて、吃驚した眼光で凝と面を視上げた。片手は地に突き、片手で傷口を押へた其指の股からタラ／＼と血が流れる。同乘して來た胡散な奴は果して刑事で、其中の一人が是より先衝と人中を脱けて、前より躍り蒐らうとしたか、拳銃の音を聞くと、度を失つて偶と立竦む。其隙に又銃口をそれに向けて發火すると、此奴もハッと悲鳴を揚けて仰反つたが、續く一人の憲兵が隙さず後から之を抑へた。バラバラと憲兵、巡査、刑事にどがおッとり卷く。其時後から組付いてゐた刑事が、彼の左手を押へた手を放して、拳銃を奪ひ取らうとしたので、彼は其隙に辛うじて右手を衣囊から拔くことが出來た。さあ、占めた、いで、目に物見せて吳れむと身構する刹那に、刑事の爲に拳銃の銃尻を抑へられて了つた。これはと思つて振拂らうとしたが、擬られん。えい面倒なと拳銃を放し短刀の柄に手を掛けて、あはや拔放さうとする途端に、グンと腦天を何か堅い物で打たれて、目か

ら火が出たかと思つた。クラ〳〵としてよろける所を、又一撃、二撃、どうと倒れて、其儘知覺を失つたが、後から思へば、これは刑事の奪ひ取つた拳銃で彼を撃倒したのであつた。
　ふと氣が附いて目を開けて見ると、もう引括られて濕潤と冷えつく地面に横はつてゐた、頭部の傷口から流れる血潮に、頭髮はベットリ濕れてゐたが、不思議な事には少しも痛みを感ぜず、只頽然として身動きが出來ないばかりであつた。また目を閉ぢて渺然としてゐると、警部が側の憲兵の將校に向つて、「如何でせう、死んだのぢやないでせうか？」といふのが聞える。すると將校は、「大丈夫！絞罪になる迄は屹度生きとるです。こら！」と下士に向つて、「此奴を馬車へ投り込め。」
　あゝ、其後の事は多く言ふに忍びぬ。監獄の門を潜つて、背後に門扉の磑と閉る音を聞いた時には、何とも言へぬ心持がした。再び此門を潜るのは裁判所か又は絞首臺へ引出される時と觀念してゐたのか、思ひ掛けず死一等を減じて……へ、へ、僞善にも程がある。かうして生存へてゐるよりか、死んだ方が遙か勝しであるものを……。
「や、しかし、今日は隨分妄想に耽つたわい。」

神經に締りが無かつたものと見える。」と思ひつゝ、端と夜着を掛直す時、ペトロパーロフスク寺の大時計が時を打つて、仕掛で自然と讃美歌の譜を調べ出す。之を聽くといつも何とも言へず心持が好くなる　就中萬籟死して深夜の寂寞を破つて其音の嚠喨と響き渡るのを聞く時は、俗念は爲に消えて心氣の轉た澄むを覺える。今も兩手に頭を支へて、つく〴〵聲の行方を追へば、靜かな夜の大氣の中を、飄蕩と漾つて遠くなり、幽かになつて、果は聞えなくなつた。彼は其時徐ろに起掛けて、卓上の水注を取り渇した咽喉を潤して、さて窓の方を見遣つた。
　もう夜も明方と見えて、空氣拔きの孔がほのぼのと明るい。何處やらで鳥の音が聞える。卓上の豆ランプを吹消して、再び枕に着いた。不眠症で近頃は碌々眠られぬが、此時ばかりは餘程疲れたと見えてとろ〳〵となる。其折の夢に誰やら後から纎弱な手を肩に掛ける者がある。驚いて振返つて見ると、それは彼人で、莞爾して小聲で、凝然としていらッしやいよといふ。言はるゝ儘に凝然としてゐると、不思議や、入口の戸が自然とハッと左右へ開くと同時に、彼は忽ち元氣を恢復して、病の身にあるを覺えず、また三年以前の壯夫となつた、彼人と手を執交して、卒然入口へ來てヒョイと閾を跨ぐと、いつもの狹隘しい庭ではなくて、憲兵の衞所の影も見えず、其處らの光景が彷彿として何處か熱帶地方の花園のやうで、百花繚亂として咲亂れ、棕櫚あり、百合あり、まだ何とやら名も知らぬ植物もある。二人は嬉々と大笑して其中を驅け脱ける時、彼人が、もう是で厭な事のお終よ、これからは二人一緒に暮して、安全で、自由で、無限の幸福を味ふことが出來てよ、――と云ふと目が覺めた。
　覺めての後憶出せばいつまでも〳〵忘られぬは、彼人と別れた其夜の事である。遊説に出る前夜、二三の友が告別に來たその中に彼人も交つてゐたが、卓を圍んで茶を喫してゐた時、端なくも・場の議論を惹起して甲論乙駁いつ果つべくも見えない　問題は今始まつたものではなく、與は大抵知れてゐるから、彼は退屈して起上つて窓に凭つて庭の面を眺めると、夜色沈々として吹亂れたライラックの花香は紛々と鼻を撲つ。其時彼人も席を離れて窓際へ來て肩を比べて立ちながら、ふた言三言言葉を交したが、話は其儘途切れて雙方無言になり、暫く立つて庭を眺めてゐる中、ふと彼方から身を摺寄せて、れ
え、「貴郎」といつた其聲は顫ひを帶びてゐた。「遊

殿にお出掛になつたら、何處で如何な事があるかも知りませんけど、假令如何な事があつても、忘れて下さいますな。此世には貴郎の事を深く懷つてる者が一人有ると云ふ事を。ね、ようございますか？」彼は莞爾して然ういふ其人の手を凝と握り締めたぎり其晩は最う再び言葉を交さなかつたが、別れての後も絶えず眼前にちらつくは其人の面影、忘られぬは其夜の事……

もう全く朝になつた。廊下に足音がし出して、戸の開閉の音が聞える。朝の看廻りが始まつたものと見える。これで眠らずして見た夢も忽ち覺めて、黴の生えた壁や蜘蛛の巣だらけの天井が今更のやうに眼に着く。と、看廻りの看守長が部下を連れてぞろ／＼と隣房へ行く。隣房は狂人だ。いつも點檢の時病人が喚くのを聞くと、何でも自分は英國の貴族のやうに思つてゐるらしくて「即刻英國大使を召んで來い、露國人でもない女王陛下の臣民を收監すると云ふ法はない、何でも大使から抗議を申込ませる」と言つて騷ぐ。看守達は大抵は默つてゐるが餘り騷ぎが甚しくなると、極めて落着いた調子で「何だ、貴樣は最う一遍縛られたいのか。」と云ふ。しかも、今朝は大層靜かで、看守長は最う點檢を濟したと見え、何の事やら好し好しといひつゝ、急足に監房を出て行く氣色がした。

點檢が終る。十五分間の散歩も終る。と、今度は醫員の回診。其時彼は試みに問うてみた、「もう、直きでせうかな。」と。

回診の醫員も其意を領して、「さあ、もう永くは持たんな。」と云ふ。

「凡そ何時ごろでせう。」と問けば、

「さあ、一晝夜、永くて二晝夜しか持つまいて。此前診察した時な、彼時もう右の方の肺は駄目ぢやつた、左ばかりで持つとつたのぢやが、もう其左も駄目ぢや。が、人間何時か一度は死ぬるものぢやで、何も悔むことは無い。私も永いこと監獄醫を勤めちよるが、どうせ此處へ來た者に助かつた者は一人だつてないのぢやからな。ぢや、今度は十號室でしたかなう？」と看守長を顧みて、足早に監房を出て行つた。

礑と戸が閉まつて一人になると、彼の面には言ひ知れぬ苦悶の色が顯はれた。固より死は願ふ所、疾くに覺悟はしてゐるやうなものの、此世に在るも今幾時と思ふと、流石に心臟の鼓まる如き感がある。

アッケルマンの詩に斯ういふ事がある。最後の審判の日に、亡者が天使の喇叭の音に復活して墓を蹴り出る中で、獨り執拗くも其墓を棄つることを肯ぜぬ者がある。仔細を糺せば、今更時候後れの天國の樂なんどで過去の苦痛を償ふべくもない。神は萬能におはすとも、爭でか我胸中に滯れる此苦き記憶の塊を洗ひ去ることを得むといふ。

あゝ、彼には既に此苦き記憶の塊が有る。これあるからは最早生も樂しからず、死は固より願ふ所であるけれども、此薄暗い薄汚ない監房で、親しき人の面をも見ずに、情ある言葉も聽かずに此儘むざ／＼と死ぬことかと思ふと、何とも言へず殘惜しい。若し兩軍相接する時、砲烟彈雨の中に馳突して、紅の軍旗の下に屑く討死するか、或は絞首臺の上で、衆目環視の中に、慷慨して命を授くるのなら本望であるけれど、こんな處で獨りじめ／＼と腐る如く死に行くのは、如何にも堪へがたい。マイコフの詩に此處にして生きむも憂く、死なむも辛しとあるのは、正しく彼の今の境涯である。せめてはこの監獄の庭でなりと、青空の下で樺の梢に來鳴く鳥の聲風の音信など聞きつゝ死にたいが、今はそれすら叶はぬ、あゝと又しても嘆息の漏れるのを纔かに耐へて、今更歎くは愚癡の至りと思返し、それよりしてせめての慰めに、餘り長くもなかつた我一生の大事小事、

それなりと想續けて死ならうものと、只管想を凝其に耽するのであつた。

彼は先づ少年の時を憶出した。田舍に育つたから、憶出すのは茫々として一望際限なき原野で、其中を貫き流るる野川で、彼は其處で能く雷魚を釣落した、釣て鰭を仕留めた時の喜びは今に忘れぬ。鬼の首でも取つたやうに、喜び勇んで家に馳廻り、父にも母にも召使の者等にも吹聽し廻つて皆に笑はれたが、獵の師匠は牧番人の親仁で、見掛は極く無愛想で人好のせぬ性質であつたが、實は親切な好い老爺さんであつた。其處で女達は村の小兒で、一緒に能く惡戲をしては叱られたッけが、今から思へば此頃は實に一生の花であつた。

それから學校生活になつて、群を結んだり、秘密出版の禁書を耽讀したりして、一生の運命も稍極りかけたが、併し未だ手續りの荒い實際を知らなかつたから、心に描く所は派手な華やかな空中樓閣で、光明の將來をのみ夢みてゐた。さて愈々實世界に踏み出してからの失望と煩悶とは如何ばかりで有つたらう。固より其間、自ら樂なきに非ずと雖も、樂中にも常に一片の苦味はあつて、未だ世間に懸念なく、腹の底から心ゆくばかり笑つたことはない。浮世は憂き世。憶出せば苦い〳〵事ばかりである。

中にも忘られぬは七十九年の八月オデッサへ行つた時の事である。其頃同志の者が二十八人組事件も漸く裁判が結して、五人死刑に處せらるゝ事となつた。その中ウキッテンベルグとロゴーウェンコの二人はニコラーエフへ護送せられて、其處で死刑に處せられ、オデッサで絞罪になるのはチウバーロフとリゾグーブとダウキーヂエンコの三人であつた。

處刑の當日、朝早く門を出て見れば、もう見物人は町を塡めて往來も止まつた中を、一輛の檻車が護送の兵に圍まれて、徐々と軋つて行く。罪人は皆灰色の獄衣の儘、後手に縛められてゐる。此方の端はチウバーロフで、鬱と物思はしさうに、何方ともなく天の一方を諦視めて、默然として身動きもしなかつたが、中央はリゾグーブで、これは又少しも惡びれた樣子はなく、元氣なもので、兩側の見物人の顏をジロ〳〵と視て行く。向うの端はダウキーヂエンコで、其時僅かに二十二の青年であつた。生先の長い身には死ぬのは辛いと見えて、始終晴れぬ顏をして、頭垂れてゐたが、リゾグーブが屆んで、微笑しながら何か其耳に覆いて囁くと、ダウキーヂエンコも哈々と笑つて面を擧け、それからは胸の雲を晴して、口元に微笑を含んで、平然として矢張兩側を眺めながら行つた。

刑場に着く、と見ると、絞首臺には柱が三本列んで、その傍の綱が風に寒々と鳴つてゐる。臺下には粗木造りの棺桶を三つ揃えてあつた。罪人を檻車から引卸して、獄帽を脫がせると、書記が進み出て、判決文を讀み聽かせる。それが濟むと、宣教師が十字架を捧けて側へ寄つた。チウバーロフが十字架に接吻するのが見える。で、罪人同志が告別の接吻を濟ますのを待つて、押丁がサツクといふ麻の嚢やうの者を銘々に頭から被せて、まづ、チウバーロフの手を引いて臺の上へ上らせ、綱を首へ掛けて、其端を柱に確と括り付けてから、リゾグーブの側へ行く。之を觀てゐる心持は何とも言へぬ。見物は皆慄然と總毛立つて、堅唾を吞んでゐると、リゾグーブは頸筋が綱に挾まつて工合が惡いので、首を搖かして其を直してゐた。と、押丁がチウバーロフの足下の臺を蹴退けると、其儘分銅でも釣したやうに、ぶらりと下る。身悶えもしない。次にリゾグーブの臺を退けると、これは苦しかつて藻搔いて綱がクル〳〵廻る。ダウキーヂエンコは死を急いで自分と臺を蹴退けて、ブランコでもしてゐるやうに、暫らく前

後へふら〳〵と揺れてゐたか、それも次第に弱まつて、遂に寂然となる。

もう見てゐられなくなつた。是からまた三十分経つと、醫師の診察があつて、彌々絶切れたのを見究めてから、紐を切り棺へ納めるのであるが、それは見ずして宿へ歸つた。其時怨骨髓に徹して、いかでいつかはこの讐をと、固く心に誓つたが、其志も空しくなつて、それから後も殉難の義人は幾人もあつたけれど、その人々の英魂を弔ふことのならぬ今の世に、今又自分が、此監獄にて無念の最期を遂げたとて、この怨何時の世にか晴らされようと思へば、無念の切齒を禁じ得なかつたが、しかし考へて見ると、それも愚癡の至りである。かゝる非道の行はるゝ社會組織の缺陷は惡むべきも、此缺陷に生み出され、不義の空氣に育てられて來た人は、抑も惡むべきでない。眞理の光に接せぬ罪ありとすれば、盲人は太陽の光を見ぬにも亦罪ありと謂はねばならぬ。さればこそウキッテンベルグは死ぬる時、遺書として同志が復讐など企てぬやうに戒めた。他の殉難の義人も皆それは一つ心であつた、と思ふと、今まで怨んまじきに人を怨んだ我が愚かなるが慚かしく、心の蟠が釋然と氷の如く解け去る時、春風自ら身邊を繞つて、主義の爲に一命を捨て、正義の國を此世に打建つる其礎の片端となる、身の果報のいみじさも難有く、又青年の温い心になつて、將來の光明を深く〳〵信じて疑はなかつた。

夜は次第に更けて、稍曉方近くなるに從ひ、病勢は益々募り、足から冷え初めて、胸苦しく、頻りに血痰を吐いた。何となく次第に力が拔けて、果は折々精神恍惚となる。が、ふと又正氣に復つて、體を動かさうとしては又恍惚となる。と、過去の記憶に、可懷しい顔に、妄想が烟の如く纒はつて、現に怪しい夢を見る。先刻から咽喉が乾いてならぬが、身動きが出來ぬので我慢してゐた。けれども益々乾いて堪らぬので、思ひ切つて死力を出して、少し首を擡げ、やをら机上の土瓶を取らうとすると、グラグラとして又倒れた。

倒れる拍子に心の底から湧出るやうに浮んで來たのは一生に一度嬉しかつた昔の夢で、其時彼はチブスの癒り際であつた。矢張今日此頃のやうに病みほうけて昏々としてゐると、玄關の戸がキイと開いた、次の間に忍足の音が聞え、窈と部屋の戸を推して入つて來る者がある。ふと目を開けて視ると、それは懐かしい彼人で、今着いたばかりと見え、旅裝束で、小さな鞄を腰に垂け、寝臺の側に差寄つて、「まあ、お窶れなすつたわねえ……」と涙含んだ。

が、夢か、現か、正しく其人は其處に居る。其日のやうに、今も情を籠めて凝と此方を視た目に露を宿してゐる。飛立つ程の懐しさに思はず手を伸べて、戀しい〳〵名を呼ばうとしたら、圖らずも情ない、嗄れた呻聲が出て、其儘右手が頽然と寝臺を垂れ、左手で夜被を摑んだのが慄然と震へて、あゝ、もう、是迄の浮世であつた。

折柄廊下を通る當番の憲兵が、怪しい呻聲を聞咎めてふと立止まり、と聽耳を引立て、ツカツカと戸の側へ歩み寄つて、側の孔から内を窺いてみた。久らく窺いてゐたが、軈て又戸の側を離れて、のそり〳〵と廊下を行盡した處に控所がある。

先程から其處で獨り茶を樂しんでゐた同僚の一人が、

「如何か？　何號室の奴はまだ生きちよるかい？」

「うんにや、もう死んだやうぢや。」

と其憲兵は重たい腰をドシリと椅子へ卸した。

—（ポリワーノフ作）—

椋のミハイロ

鐵道工事も既う竣つた。

請負人は拂ふべき手間を拂ひ、胡魔化される丈け胡魔化してカスリを取り、勞働者は皆一度に已が村々へ歸ることになつた。

路端の飯屋は其前の大繁昌で、ビスケットを袋に詰める者もあれば、土産にウォツトカを買ふ者もあり、又は其場で飲んで了ふ者もある。

それから上着を疊んで、肩へ投懸けて出掛けるとて、口々に、

「そんだら、椋よ　達者で暮らせ……そんだらそんだら！——」

……と、椋のミハイロ一人になつた。

どちら向いても野の中に唯一人取殘されて、昨日迄の仲間が今日は散々になつて行く後影を見送るでもなく、磨いたやうに光る線路を熟々と眺めれば線路は遠く／＼走つて何處ともなく消えて行く。風は髮を吹いて着物の裾が捲れ、今別れた人達の歌ふ聲が遠方で聞える……

その圓い帽子の影は軈て木隱れて見えなくなつたが、ミハイロは背後で手を組んで、まだ立つてゐる。何處へ行處もない。親兄弟もない一人法師で、今線路を切つたあの兎のやうに、或時は野宿したり、或時は人の家の納屋に寢たり行當りばツたりで世を渡つて來た身の上だ。

と、砂山越しに汽笛が鳴つて、煤烟がむくむくと騰り、汽車の音がする。來たのは工事專用の汽車で、それがまだ普請中のステーションの側で停ると、屈強な機關手と其見習が機關車を飛降りて、突然飯屋へ駈付ける。他の連中も其例に倣ふ。汽車に殘つてゐるのは工事擔當の技師ばかりだ。技師は物思はし氣に四下を眺めて汽罐の蒸氣の音に耳を傾けてゐる。

見知り越しの人なので、ミハイロが丁寧に辭儀をすると、

「おゝ、椋か？……如何した？」

「如何もしましねえ。」

「何故村へ歸らん？」

「歸つたとッて、仕方ねえだもん。」

技師は何か鼻歌を唄ひ出したが、頓て、

「ワルソウへ行け、ワルソウへ。ワルソウなら、仕事に困る事はないぞ。」

「ワルソウッて何處だね？　私知んねえたが……」

「無蓋車に乘れ、連れてッて遣るから。」

椋は無蓋車へ身輕くひらりと飛乘つて、石を積んだ上に腰を卸した。

技師が、

「貴樣錢を持つてるか？」

「錢かね！　錢は一兩と[illegible]か四貫、跡に銅貨で十五文ばかし持つとりますだよ。」

技師はまた鼻歌を唄ひ出す。機關車は矢張ぶう／＼小言を言つてゐる。其中に先刻の連中が酒の瓶や紙包みを提げ、飯屋を出て來て、機關方が機關車へ這上ると……やがて汽車は動き出した。

三里程來て一曲りすると、向うの沼の中に痩村が見えて、其處から烟が立つてゐる。之を見ると、ミハイロは急に燥ぎ出して、えへら／＼笑つたり、彼方だから聲は屆かなかつたが、其方を向いて何か大聲に喚いたり、帽子を揮つたりする……ブレーキの處に居た車掌が尖り聲で、

「靜かにしとれ！　何だつて騷ぐんだ？」

「だとッて……ほら、彼處に見える……あれが、うら達の村だもん……」

「うら達の村なら村で好いから、靜かにしとれ！」

ミハイロは大人しく言ふ事を聽いて靜かになつたが、何だか悲しかつたので、お經の文句を稱へてゐた。あゝ、生れた村は蘆葦荒蕪の沼の中の痩村だけれど、此儘歸れたら如何樣に嬉しからう！たゞしかし、歸つたとて仕方がない。椋助だの馬鹿だのと人は言ふけれど、ミハイロは能く心得てゐる。出稼ぎして諸方を彷徨いてゐる方が、ひもじい想をしない、寢泊りする處にも困らない。生れた村には食物が缺乏くて皆が難澁してゐるけれど、餘處は其程でもない。

ステーションを幾つか通越したが、長いこと停車してゐた處もあるし、直き發車した處もある。其中に日が暮れて、技師の情で物を食はされたから、ミハイロは丁寧に辭儀をして禮を言つた。

行つても〳〵知らん地方だ。低地が高臺になつて瀬の早い川が透迤と流つてゐる處もあつた。烟突も無い小舍や木の枝を編んで拵へた納屋が後になつて、立派な邸や石造の建物が見える。生れた村では見た事もないやうな會堂もあつた。

夜に入つてから、ト或る山の下へ來た。山の上は町で、家が家に負さつたやうに累なり合つてゐて、燈火が星のやうに見える。もう夜更だのに、何處でか奏樂の音がして、人通りが絶えない。話聲や笑聲も聞える。村ではもう犬も啼かぬ時間だのに……

ミハイロはまだ起きてゐた。そしたら技師の指圖だとて腸詰を一斤と麵麭を一つ持つて來て吳れて、それから砂を積んだ別の無蓋車に移された。今度は軟かで坐り心地が羽蒲團のやうだ。で、砂の上に坐つて腸詰を食ひながら、

「世の中には甘い物が有れば有るもんだあ！」

汽車は久らく停つてゐたが、曉方になつて出ると、間もなく飛ぶやうに走る。と、森の中のステーションへ來て停つたまゝ、なか〳〵出ない。車掌の話だと、呼戾しの電報が來たから、技師は此處で降りるだらうと云ふ。

成程技師はミハイロを呼んで、

「己はな、此處から戾らにやならんことになつたが、貴樣一人でワルソウへ行くか？」

ミハイロは口の中でぐづり〳〵と、

「さうさねえ、如何すべえか……」

「ワルソウへ行きや人中だ。消えて無くなりもすまい。」

「消えて無くなつたとツて、仔細ねえけどね。私一人たから。」

「お袋が有るとか女房が有るとかいふのなら、跡に殘つた者が困りもせうが、一人切なら誰に掛構ひもたい話だ。」

で、技師が、

「そんたら行くが好い。丁度ステーションの側に何軒か普請中の家も有るから、煉瓦でも運んで居りや、餓ゑもしまい。たゞ酒だけは愼むんだぞ。さうして辛抱して居りや、また其中に何ぞ好い仕事も見附かるだらう。さあ、一圓遣るから、正可の時の用意にしろ。」

ミハイロは一圓貰つて、禮を言つて、また砂を盛つた無蓋車に乘ると、頓て汽車は出た。

途々車掌に問いてみた。

「旦那、私が今迄稼いでたあのステンショれ、彼處からもう餘程來ただんべこか？」

「さうさなあ、百五六十里も來たらうか。」

「此處から歩いて戾つたら、餘程掛るべえかね？」

「さうさなあ、半月は掛るだらうな。」

と聞くと、ミハイロは心細くなつて來た。家へ歸るに半月掛る！何だと云つて此様な遠方へ來た事か。

やれ、大變な事になつちまつたと、初めて氣

が附いたが、もう取返しが附かぬ。尤も取返しが附いて舊の身の上になつたからツて、些とも好い事はない、もつと不好い事もあつた……で、臥反りを打つて、心の中で、
「仕方ねえだ。」
汽笛が消魂しく鳴つたから、ひよいと見たら、向うに家が澤山見える。
「彼は何ちふ處だかね？」
と車掌に問くと、
「あれがリルツウよ。」
さう聞くと、また心細くなつた。如何して此様な處へ來る氣になつたらう？
ステーションに着いた。無蓋車を降りて、車掌に暇乞して、きよろ〳〵と見廻して、それから向うの酒瓶の絵看板の出てゐる見世の方へ行つた。固より酒を飲みにぢやない。其見世の先に普請場があつて、煉瓦職人の姿が其前に見えたから、技師の話を憶出して、仕事をさせて貰はうと思つたからで。
煉瓦職人は皆口勞、好い石灰だらけの若衆達で、先方から言葉を掛けた、
「お前は何だ？　何處の者だ？　此様な帽子を誰に拵へて貰つた？」
などといひながら、袖を引張つたり、帽子を取つて又ポンと冠せたり、ちやうさいばうにされて……ミハイロはうろ〳〵する。
「何處の者だツてば？」
「うらオウロコウヰツキの者だがね……」とまだ面を喰つてゐる。
闘締つた職人達は高笑をした。ミハイロも一緒になつて高笑をして、心の中で、
「皆面白え人達だ。些とも可恐え事ねえ。」
ミハイロの罪の無い笑聲や、人の好ささうな眼色が皆の氣に入つて、弄らずに眞面目に事情を問出したから、仕事をさせて貰ひたいのだといふと、「そんなら已達の跡に隨いて來な」と云ふ。
「少とばかし愚鈍いやうだが、人が好ささうだ。」
と一人がいふと、今一人が、
「遣らせて見ようぢやねえか？」
すると又一人がミハイロに、
「渡りを附けるだらうな？」
「渡りツて何だね？」
「一杯飲ませるかといふことよ。」
側から一人が笑ひながら、
「酒を振舞はなきや、此方から拳固を振舞つてやら。」
ミハイロは考へて見て、
「振舞ふよか振舞はれた方が好えね。」
言草が皆の氣に入つて、帽子の上から輕く二つほど喰はせて、酒の事はお流れになつた。かうして調戯ひながら普請場へ來て皆仕事に掛つたが、職人達は見上げるやうな足場へ上り、娘や子供が煉瓦を運ぶ。ミハイロは新參だからといふので、石灰に砂を入れて捏ねさせられた。
かうして到頭煉瓦職の手間取になつた。矢張ミハイロ同様な貧乏人で、古ぼけた頭巾に穴の開いた腰卷に、襯衣と、それで身上有りツ丈けだといふ。色の淺黑い、痩せツぽちの、ちよツぽり鼻の空を向いた、額の引込んだ、隨分不器量な娘だつたが、ミハイロは女に掛けては贅澤でないから、此娘が道具を持つて側へ來た時から全然氣に入つて了まつて、頭巾の蔭から暫と面を見られた時には、何だか恍然となつた……はて、便りねえ身の上は已ばかしでねえ、一人法師が二人寄りや、もう一人法師でねえちふもんだ、といふやうな氣にもなる。段々大膽になつて來て、終には身の上話を始めた。
「汝何處の人だかね？　リルツウの人だか、それとも更と遠くの人だか？　いつから煉瓦積になつたのけ？」

などといふのが口切で、最後は不覺涙入して、

「何も心配しるでねえ。己が汝の分まで稼いでやるだから。」

成程汗みづくになつて自分ばかり働いて、娘にはほんの上面ばかり撫でるやうに捏ねさせて人前を取繕つて置く。

毎日斯うして二人で働いてゐたが、時々飛入りに手傳に來る職人があつた。此奴が手傳に來ると、乾度娘を叱り飛ばす、而してミハイロに調戯ふ。

ミハイロは夜は普請小舍の隅に寢る事にしてゐた。木賃に泊る程の贅澤も出來ないのだ、手傳の娘は外の娘達と連立つて何處へか歸つて行く、時には例の職人達と一緒に歸つて行く事もある。其癖其職人は娘を口で叱るばかりでなく、動ともすれば手込にする事もあるのだ。

「何故彼樣日の敵にしるんだんべえ？」と椋は不審に思つて、出來るだけ娘を勦つて遣つてゐた。娘の分まで働いて遣るばかりでなく、朝飯のパンも半分分けてやり、晝飯には乾度何かしら煖かな物を二錢が所買つてやつてゐた。娘は始終一文無しなのだ。

煉瓦を運ばされるやうになつてからは、番頭が喧ましくて、もう娘の分まで働いてやれなくなつたが、其代り娘が頭きはせぬか、煉瓦の重味に潰されはせぬかと、始終其樣な事にかり氣にしてゐた。其樣子を例の意地惡の職人が認めて、二人の事を彼此言つては調戯ひ、仲間中に觸れ廻る。仲間の者も笑つて、

「やい、椋、しツかりしろい！」

と足場から聲を掛ける。

一度晝時分意地惡の職人が娘を片蔭へ呼んで何か聲を荒らげて言つてゐた事がある。と、娘が泪ながらミハイロの處へ來て、十錢ばかり貸して吳れといふ。

何がさて娘の賴みだ、聽いて遣らん法はないと、ミハイロは財布の紐を解いて、稼ぎ溜めた金の中から、十錢丸を一つ出して遣つた。

その十錢を娘は意地惡の職人に渡したが、それからは娘は毎日乾度若干づつの無心を言ふ事になつた。

「何故汝や彼樣した奴に錢遣るだか？」

と怯かな悯り聽いて見ると、

「だつて仕方が無いんだもの。」

と娘はいふ。

或日意地惡の職人が番頭と喧嘩をして、仕事を止めて出て行かうとした。其時自分が止すばかりでなく、娘にも止せと、うぬが雇つた者のやうに、權高に言つたが、娘は澁つた。番頭が晩迄働かなきや手間は拂はないと、から言つたさうだ。一文だつて汗の出た錢だから、勞働する身になつては、惜しい。で、娘はまた仕事に掛らうとした。

男は腹を立てて、大きな聲で、

「やい、一緒に行くのか、行かねえのか、判然返事をしろい！」

娘は煉瓦積む手を止めて、男の面を瞥と見た。もう眼には泪を一杯溜めて居たが、それでも男の跡に隨いて行つて了つた。惚れてゐるのだ。

たゞミハイロには其が分らなかつた。娘が居たからつて、格別嬉しい想をさせられた譯ではなかつたが、居なくなつて見ると、切りに淋しい。また一人法師になつて了つた。其晩は眠られなかつた。翌日平生の通り仕事に掛つて見たが、仕事が手に附かない。普請場からがもう厭になつて來た。何處へ行つて見ても、何に觸つて見ても、眺めても、娘の事が想出されて、生別の辛さを犇と思知る。それだのに皆は笑つて、

「やい、椋、ワルソウの新造は如何だ……氣に入つたか？」

——（ボレスラーフ・プルース作）——

おひたち

露西亜は今も變遷の時代だと云ひます。その變遷の大勢を云へば、是迄はパッシーヴで、本領が浮薄で、萬事浮足で有ッたのが、稍〻アクチーヴになり、根強くなり、踏みごたへ、足溜りが出来て、確乎とした一國の性格もいよ〳〵出來さうになって來たのです。此大勢を描いた小說多分に有る中で、一段拔け出てゐるはゴンチャローフ氏の作、「オブローモフ」「オブルイフ」の二書で有りませう。

「オブルイフ」の事は暫く云はず、「オブローモフ」の一書に付いて云へば、これは此小說の主人公オブローモフといふ者に舊露西亜の人の性質を寫し出したものです。趣向は極めて平坦で記す程の事でも有りませんから、省きます。

茲に譯す「おひたち」は即ち「オブローモフ」中の一節で、主人公の生立を夢に託して記したものです。此次には、主人公が自分の標準を朋友に語る一節を譯してお眼に懸ける積りです、それとこれとを讀みあはせれば、舊露西亜の人の どういふ生涯の中に どう人と爲ッたかは略々わからうと思ひます。

「オブローモフ」を批評して有名なはドブロリューボフといふ批評家です。此人の意見は後に申す事としませう。

朝、イーリヤ・イーリイチ（主人公オブローモフの名）は小さな寢臺の上で眼を覺ました。年は七つ。今朝は氣も晴れて面白い。桃色に、肥え太ッて、でも可愛らしい兒振り！　頰は小さく圓々として、餘所の兒が故らに膨らしたとて、かうした頰は作れまい。保姆は覺めるを待ッてをッた。靴足袋を穿かせようとするが、穿かされてはゐない、ふざけて、足をばた〳〵させる。保姆は漸くそれを押さへて、諸共に高く笑ふ。辛くして引起し、顏を洗はせ、髮を撫付けて、母の許へ連れて行く。

死去ッて程經たと思ッた母の顏を見て、オブローモフは、夢の中ながら、戀しさ、なつかしさ、また嬉しさに身を震はせる。熱い涙が一滴、閉ぢた睫毛の下から浮び出て、眼瞼に逗まる。母は我子を引寄せてなつかしさうに、所嫌はず接吻した後、眼は曇りてゐぬかと、かぶりつきさうな眼付で、忙しなく我子を視廻し、どこも何ンとも無いかと尋ね、保姆に向ッて、落着いて眠たか、轉けはしなんだか、夜中に眼を覺ましはしなんだか、熱も無かッたかと、問糺し、さて手を執ッて聖像の下へ連れて行く。聖像の下で跪き、片手で我子を抱へ、祈禱の文句を側から敎へる。涼しい風でシレンニ（植物名）の馨の吹入ゐる窓を眺めながら、子供は敎へられるまゝを何心なく繰返してゐる。――おかアさま、今日散歩に連れてッて頂戴な？　と祈禱最中に突然聞く。――アイよ、連れて行きますよ、と母は聖像を瞻上げた儘口早に答へて、急いで讀み殘した文句をいひつぐ。子供は勢の無い聲で祈禱をするが、母はこれにまるで心を打込んだ姿である。祈禱が果てゝ後、父の許へ行き、それより朝茶飮みに行く。

見れば、茶飮み卓の周邊には今年八十の、ひねたやうな、同居の叔母さまが、卓の側に立ッ

て、年の加減で始終首を振りながら、使はれてゐる小間使に向つて、口癖のやうに呟いてゐられる。其餘は年寄ッた處女三人、これは父方の親族で、母の義兄弟一人、これは少し氣が狂れてゐるので。七人の小作を使ふ地主チェクメーネフ、これは客に來てゐるので。其外老翁老媼總て若干人。此方オブローモフ家の譜代外様の人々が、一々イーリヤ・イーリイチを抱き取ッて、愛想、讃詞を振り懸けるほどに、〳〵、子供は難有くもない接吻の痕を拭ふに手の廻らぬ許り。

それより麵麭、砂糖、乳酪などを喫べさせる事が始まる。それが果てて、母は再び我子に接吻して、さて園なり、家周圍なり、野なり、放ッてやるとて、繰返し〳〵、嚴重に保姆にいひつける。子供を獨りでをらすな、馬、犬、山羊の側へ行かすな、家周圍より遠方へは行かすな、また取り分けて深坑は此邊のおそろしい所で、いやな評判もたッたゆゑ、彼處へは行かすな。深坑で或時犬を見附けた事が有る、此犬、投げ熊手、手斧などを提げて對ッた所、逃げて山の向うへ隱れた許りで狂犬と認められたので。また深坑には畜類の死骸が幾干ともなく瘞めてある。盜賊、狼、其他種々雜多の物、たゞ此邊ばかりではなく、此世にも全く無い物までが其處に居るといふ評判で。

子供はいつまでも母の誡を聞いてはゐない、疾くに駈け出して戸外に居る。初めて外へ出たやうに、嬉しさうに、珍らしさうに四邊を視廻して、さて駈け回る我家には傾いた門も有り、中心に窪みが來て青苔が滑かに蒸した板家根も有り、崩れた階も有り、さま〴〵の建増し建續きも有り、荒れた花園も有る。家を環る釣廊下へ駈け上ッて其處から小河を見渡したい、おそろしく見渡したいが、釣廊下は舊びて崩れ落ちぬばかり、「召使」のみには歩くことを許されてあれど、主人たちは歩かれたことは無い。母の誡を忘れて、やゝあがれ〳〵と唆かす昇り口へ行かうとする折しも、階に保姆が現はれて辛く子供を捉まへる。それを振り放ッて秣棚へと走るは急な梯子を登ッて其上へあがらうとする積りか。保姆が狼狽へて追ひ蒐れば、また鳩小舍へ登り、家畜小舍へもぐりこみ、大變な、深坑へ行かうとたくらむ。――アラ、マア、何といふ子だらうねエ、いたづら許りして！ ちッとぢッとしていらッしゃいよ。坊さま！ どうしたもンですね！ と保姆は叱る。

かうして一日許りか、毎日毎夜、保姆は駈け廻り、走せ廻ッて、息を吻く暇だに無し。子供の爲めに或は壽命を縮め、或は大喜びに喜び、或は倒んで鼻柱を挫かうかと危ぶみ、或は愛度氣なく、僞りの無い眞心をみせられて嬉しみ、或は子供の生先永いことを思ッて坐ろに憂ひに沈む。たゞ是許りで保姆の心臟は脈を打ち、此氣苦勞ばかりで保姆の血は沸え、左も無くば、疾くに消える筈の、眠入ッたやうな生涯もこれが有る許りで漸く持堪へて行かれる。

けれど、子供はいたづらをする許りでも無い。時には不意に靜まッて、保姆の側に坐り、四邊の物をヒシと視詰めてゐることも有る。まだ幼い眼で眼の前に移り行くさま〴〵の顯象を一々漏らさず觀察して置く。いづれ此等の顯象は深く心に浸み徹ッて、子供と共に延びもし、育ちもする事であらう。

今朝は極上の天氣。風も涼しく、日もまだ高くない。家居、立樹、鳩小舍、釣廊下など、いろいろの物の影が長々と地を這ッてゐる。園にも、家周圍にも、涼しさうな片蔭が出來て居て、みれば、立寄つて一休みか、物思ひでもしてみたくなる。たゞ遙かあなたに裸麥の田が火のやうに燃え、小河が日に當ッてまばゆいまでに

光り輝やいでゐる。——婆ア、なぜアノー此方は暗くッて彼方は明るいの、さうッて後には此方もアノ、アノー明るくなるの？と問く。——それはね、お日さまがお月さまに逢ひにお出でなさるところが、お月さまが見えないもんだから、それで顏をおしかめなさるの、それでも後になると、お月さまが遠くにお見えなさるもんだから、それで嬉しさうな顏におなんなさるの。

　子供は思ひ沈んで、只四邊を視廻してのみゐる。みれば、アンチーブ（馬の名）が水を汲みに行く、それと竝んで地を動く別のアンチーブを見れば、正眞のアンチーブよりは十倍も大きく、桶も大さ家ほどに見えて、馬の影に草原は蔽はれる。影は草原を僅か二足歩いて忽ち山を蹈したが、アンチーブはまだ家周圍の空地をも離れない。子供もまた二足歩き出した、今一足で、山を蹈されさうな。山へ行ッて馬の行方を見屆けたくなつた。駈け出して門の方へ行かうとすれば、窓の內から母の聲が響き出す。——婆ア、や、坊が日向へ出るぢやないか！　日蔭へ連れて來なくッちやいけないよ。日にやけると、頭痛がして、胸がわるくなッて、御膳も何も喫べなくならアね。そんな事をさしておくと、今に坑へ行くよ。（チヨッ、あまやかしッこだなら！）と保姆は、小聲で口小言をいひながら、階の下へ子供を引張ッて來る。子供はまた眺め出して、了解の好ささうな、銳い眼付で、大人らは何をどうして、どう朝を送るかと見てゐる。いかな瑣末な事でも、物でも、油斷の無い、物好きな眼は免れ得ない。生計の有樣を深く心に刻み込まれて滅多には消えず、溫順な智慧は活きた例に見飽いて、知らず識らずの中に、いつしか身邊の生涯に擬らへて一生の計を定める。

　オブローモフの家內ではなか〳〵朝を無駄に過ごすどころで無い。臺所でカツレツ靑物を刻む庖丁の響きは村方へまで聞える。召使の部屋からは、紡車の籠ッた響きに、それに下女の低く、細い聲が聞えるが、泣いてゐるのか、哀れな歌を節ばかり唱ッてゐるのか、殆ど聞分けられぬ程で、家周圍の空地では、アンチーブが桶を背負ッて歸ッて來るや否や、下女馬丁などが桶、小桶、手桶の類を提げて所々方々から寄り集ッて來る。此方では老婆が粉を盛ッた茶碗と鷄卵を幾個ともなく持ッて小舍から臺所の方へ行く、彼方では料理番が不意に窓から水を覆して、其處に一朝、愛くるしく尾を掉ッて口嘗めずりをしながら、傍目も觸らさず、窓を見詰めてゐた「黑」に注せる。

　オブローモフの老父もまた手を束ねてはゐない。一朝、窓の側に坐を占めて、油斷なく家周圍でする事に注目してゐる。——オイ、イグナーシカ！　何を持ッて行くんだ？　と窓外を通る小廝に問ふ。——部屋へ庖丁を研ぎに、と其男は主人の顏を見ずに返答する。——さうか、よし〳〵、さア行け〳〵、能く研がんではいかんぞ、いゝか！——それから下女を呼び留める。——これ〳〵、何處へ行ッたんだ？——穴藏へ、旦那さま、と其女はいひながら立留ッて、手を翳して窓を見る。——お飮料の牛の乳を取りに。——さうか〳〵、いけ〳〵！と旦那は答へる。乳を覆さんやうにしろよ。ヤイ、ザハールカ、貴樣又何處へ駈けて行くんだ？と續いて聲を振り立てる。今に酷い眼に逢はすぞ！　見てゐれば、これで三度駈けて行く。彼方へ、玄關へ行ッとれ！——そこで、ザハールカはまた玄關へ眠りにゆく。牝牛が野から來でもすれば、老人先に立ッて世話を燒いて水を飼はせる。窓から飼犬の鷄を逐廻すを見れば、卽座に嚴重な處分に及んで亂暴狼籍を戒める。

妻も亦甚だ多忙で、夫の胴着を息子のジャケツに縫ひ直させようとて、縫物師のアヴエルカとや、三時間も相談し、自身に白墨を執ッて線を引いてみせ、またアヴエルカに羅紗を盗まれぬ用心をする。それより婢部屋へ来て、婢共一人々々に一日分の編物を宛がひ、それが果ててのち、ナスターシャ・イワーノヴナか、ステパニーダ・アガーポヴナか、誰か股肱の者を召んで共に園を散歩するか、それも徒歩きではなくて、どんなに林檎が熟したか、昨日熟してゐたのは、もう落ちはせぬか、此は接がせよう、彼は代らせようなどと見巡るのであるが、第一の世話といふは臺所と食事とで。食事は家内中寄集ッて相談する。ひねた叔母さへ會議に與る。各々おもひ／＼の菜を望む。或は腸の肉汁を望む者、或は蕎麦、または胃を望む者、或は肋を望む者、或は醤に酸い汁を望む者、又は白い汁を望む者、いろ／＼さまざま。望む所のものは残らず議題と成ッて、逐一に商量され、さて主婦の裁断に由ッて、或は採られ、或は捨てられる。臺所へは絶えずナスターシャ。ペトローヴナを遣り、ステパニーダ・イワーノヴナを遣ッて、あれを廢させ、これを足させ、砂糖、蜜、酒を取寄せさせ、又はぬすみはせぬか、こかしはしないか、と吟味せられる。

オブローモフ家で、生計向の、重な、第一の世話といふは食物の世話で、年次の祭の用にとて犢が養はれるが、見事なもの！　家畜も養はれるが、是も亦見事！　之を飼ふとて首を捻ること、心配苦労をすることはどれほどであらう！　命名日を初め、其他の祭日の用に充てられる七面鳥、雛の類は胡桃を餌に飼はれる。鵞鳥は運動を禁められて、祭日前数日の間、嚢に盛られて、動かぬやうに釣して置かれる。これは膩ぎらせるためで。此外に煮物、焼物、鹽漬が用意され、蜜、クヴアス（飲物）が手造りされ、饅頭が焼かれるが、皆結構な物ばかり！

から十二時ごろまでは、總て騒々敷、忙しなく、人々蟻の如くに働いて、眼に立つ事のみ多い。日曜日祭日などでも、此まめしげの無い蟻どもは休息をせぬのみか、此様な日には臺所の庖丁の響きは、常よりは、繁く、烈しく聞え、下女中女は日頃に倍増しの粉や鶏卵のかさを携へて、幾度か小舎から臺所へとゆきかひ、鶏小舎では、平生よりは、多く殺生が行はれ、叫喚の聲が立てさせられる。おそろしく大きな饅頭も焼かれる。これは家内の者が翌日も喫べる。三日目四日目となれば、喰ひ残りが婢室へ下がる。此饅頭は土曜日まで取り置かれるので、遂にアンチープに格別の思召で下される時には、まるで締気の無い、たゞ一つのコチ／＼した物となる。でも、馬は、尾筒で十字架を描きながら、臆する氣色も見せず、おそろしい音をさせて、此珍らしい化石を嚙砕く。おそらく、古物學者が千年もたッた髑髏骨を杯にして濁酒を味ッて飲む格で、これは饅頭といふよりは、寧ろ旦那方のお餘りといふところを賞翫するのでがな有らう。

そこで、子供は只眺めに眺めて、幼い眼で残る方なく認めておく。さて朝は有益な事に忙しなく過ぎゆいて、晝となり、食事となる。日盛りは暑さも甚しく、空には雲のかげさへ無い、太陽は頭上に逗ッて動かず、そして草を燒く。空氣は流れることを罷めて、静まッたまま、ゆるがず。樹立も、水も、些の音をも立てず、村にも、田畠にも、破り難い静かさが行き互ッて――總て死んだやうな。人の物いふ聲が遠く空間に響きわたる。二十「サアジェン」を隔ててさへ、虻の蜚ぶ音唸る聲が聞えて、叢の中では、誰か其處に倒れて熟睡でもしてゐるか、鼾のやうな聲がする。

家内には死んだやうな靜かさがゆき渡る。上下おしなべて晝休みの時刻となつたとなれば、父も、母も、年寄ッた叔母も、寄食の人々も、―皆自分々々の部屋へと散ッて行く。部屋の無い者は林小舍へ行き、園へ行き、或は玄關に涼しさを尋ね、または顏に蠅除けのハンケチをのせて、暑氣の負かす所、便々とした腹の倒すところ、何處とも云はず寢込む。園丁は園の灌木の下で、鍬挺を傍に置いて、ながくと臥し、馬丁は廐の中に眠る。召使の部屋を窺へば、總て長椅子の上、床の上、または入口の間に雜魚の如くに臥倒れ、子供には己れと己れの傳をさして置いてゐる、皆戸外へ遊び出て砂に塗れてゐる。

犬すら犬小舍へもぐッてゐる。幸ひに吠ゆ可き者にも出逢はぬから、家を通り拔けても、出逢ふ者とては一人も無い。若し盜賊が此方にも徘徊したならば、家内中の物悉く引攫ッて、馬車に積んで、造作なく挽き出すことで、さうしたからとて、誰さら妨げることもあるまい。これは誰彼の去嫌ひなく取付いて如何とも仕樣のない睡氣で、死といふものゝ眞の寫し。物音は一切無し。たゞいろ／＼の方角からさまざまの鼾がおもひ／＼の節調子で響き出すのみ。折節には、夢中でフト首を擡げ、寢を潰したやうた、思慮の無い顏をして左右を視廻して臥返りを打つか、左なくば、眼は閉ぢたまゝで、夢の中に唾を吐き、口をムニャ／＼と動かすか、または口の中で何やら呟くかして、そしてまた眠入る者が有る。或はまた、不意に、其氣色とては少しも見せず、大切な用を忘れてゐたやうに、寢臺の上に跳ね起きてクゥーッと[illegible]を引攫み、其中に浮いてゐる蠅を兩側へ吹き付ければ、蠅どのは不意を打たれて、勝手がわるいと騷ぎ出す、その間に喉を濕して、そしてまた寢臺の上へ、狙ひ撃に逢ッたやうに、バッタリ仆れる者も有る。

さて子供は只管觀察に觀察をしてゐる。食後保姆とまた戸外へ出た。が、保姆も、主婦に見付かれば、嚴しく譴じられるは承知してゐるが、また我本意にも背いて、が、催す睡氣には克たれなかッた。保姆もまたオブローモフの家内に流行する、此傳染病には感染した。初の程は油斷なく子供の世話をして、遠く離れる事を許さず、惡戯をすれば、嚴しく叱り懲らしてゐたが、後には、どうやら感染しさうになつて來たので、そろ／＼嘆願し出す、門より外へ出て呉れるな、山羊に觸れて呉れるな、鳩小舍、鈎廊下へあがッて呉れるな。そして、自分は日蔭を求めて、或は階、または穴藏の入口、或はただ草の上に坐る。トント子供の傳をしながら、靴足袋を編まうといふ氣で。そして、程なくコクリコクリ居眠をしながら、なまけた聲で惡あがきを[illegible]するやうになる、「此度上るよ、ア、油斷はならない、此度アノいたづらこのは鈎廊下へ上るよ、と略……夢の中で思ふ。さうでもない……ヒョッと坑へでも………と、首が膝の上へ傾いて靴足袋が手を離れる、子供の姿ももう見えない。すこし口を開いてかすかな息を吹き出す。子供は此時になるを待ちかねてゐた。此時から獨立の生活は始まる、今は全世界に一人をるも同じこと。足を爪立てゝ保姆の側を立退き、誰が何處に寢てゐると、一々に見回る。眼を覺ますか、夢中で噺をするか、又は何か口の中でいふ者が有れば、立止ッてつく／＼其樣子を眺める。それより、ぞく／＼しながら、鈎廊下へ走せ登り、そこの軋む板敷の上を驅け回り、鳩小舍へ這ひ上り、園の奧深い所へ來て蛇の唸る聲を聞き、又その[illegible]を進んで行くを遠く見送る。何か蟲が叢の中で頻りに細むやうに鳴くを聞き濟し、此靜けさを破る狼藉者を尋ねて捕へる、蜻蛉をつかまへて翅をもぎとッて、どう

することかと眺め、又は藁を胴へ通してそれが、此小荷物を背負ッて、跳んで行くを見送る。蜘蛛が捕へた蠅の血を吮ふ、攫まれながら、蠅は跪きつ唸りつする、それを子供は、息を屏めて、さも面白さうに眺めてゐる。竟には、其犧牲も、それを苦しめる者も、均しく息の根を止めて仕舞ふ。それより、溝の中に入り、そこらを掘り散らし、何々の根を見出して、皮を剝いて、そしてそれを旨さうに喫べる、おかアさまの宛がふ林檎、砂糖煮の果よりは此方が口に適ふと見えて。門外へ驅け出す。樺林へ行ッてみたくなる。ツイ眼の前に見えて、本道を回らずに、一直線に溝、檣、穴を超して行かば、五分許りに行き着かれさうに思はれる、が、こはい、怪物、盜賊、おそろしい獸が彼處には居るさうな。深坑へ驅け降りてみたくなる。深坑は閾から僅五十「サアジェン」許りの所に在る。子供ははや坑の緣まで驅け寄ッて、眼を細くして、噴火山の火口でも覗くやうに、今そッとのぞかうとする……と、不意に此坑に付いての所有評判言傳がむら〳〵と胸に浮ぶ。ぞッとして、生きた空はなく、一散に迯け歸って、身を戰かしながら、保姆に取り付き、眼を覺まさせる。老婆は吃驚して起き直ッて、頭を裹んだ布を直し、こぼれ出た白髮を押し込み、まるで坐睡などしてゐなかッたやうな顏をしながら、迂散さうにイリューシャ（イーリヤをやさしく云ったので）を見廻し、奧の窓を見遣ッて、さて膝の靴足袋を取り上げて、手先を震しながら、また編針を遣ひ出す。

——（ゴンチャローフ作）——

雜纂

ひとりごと

上

どうぢや乃公の手際は、五日の晩にはあれ程に逆上せて騒ぎよつたやつも六日の戒嚴令發布で頭から冷水を打かけてやつたもんぢやで忽ち火の消えたごと大人しうなつて、殊に可笑しいやうなは新聞屋どもぢや、今度の講和は屈辱ぢや、君國の大事を誤つたものぢやとかいうて、無暗に責任呼はりを爲よつたもんぢやから、戒嚴令が出たちうで然う急に大人しうなる譯にもいかぬ、というて今迄の調子で書立つる日にや忽ち發を摺ゑらるゝは目に見えとるし、十日も二十日も發行停止を喰うたら、我々の責任問題よりか自分共の鼻の下の問題ぢやから、思切つて政府に喰つて懸ることも出來ぬ、ソコデ何やら反對でもあるし反對でも無いやらな煮切らぬ事を言うて遲疑しよるのを、かう高い處で見物しちよるとソリヤ眞に面白いやうぢやつたから、もう大抵可からうと思うて協約の發布をやつたのぢや、何がさて問題に困つて狼狽しちよつた處ぢやから池の鯉が……鯉といへば彼女は今頃嘸歎いちよらうなア、忙しい時にや忘れとるが、暇になると、彼奴の可愛らしい面が、から眼前にちら〳〵して……ソコデ今のソノ何ぢや、池の鯉……ぢやない鯉が麩を見付けたごと、彼方からも此方からも集まつて來て好え事にして此問題をせゝりよるから、責任問題は御留守になつて了うた。こゝらが政治家の手際といふものぢや、な、えゝか、戒嚴令で激烈なことはいへず、さればちうて穩當の議論はもう爲盡して了うて材料切になつて困つとる處へ、ポンと日英協約ちふ麩を投げてやつたもんぢやから、皆好え物が見付かつたちうて腐集つて來て之をせゝりよる。ソコデ責任問題がお留守になつて了うたとは如何ぢや、ナント乃公の腕は凄いもんぢやらう、た、戒嚴令で非常に弱つちよるところへ……（同じことを暫く獨で繰返してゐるのみにてくだ〳〵しければ中略とす……

此處迄は旨く切拔けて來たが是からが又一苦勞ぢや、此十五六日にや小村が歸つて來るし、講和條約の批准は二十四日が期限ぢやから、其迄にや是非發表せにやならぬ、之さへ發表して了へば、條約破棄ちふ愚論の息の根は止つて了ふ道理ぢやから、そしたら最うお手元へ馬鹿な請願書も出なうなる筈ぢやアあるけれど、さて彌々之を發表したとなると、又候責任問題に火が付くぢやらうな、尤も其迄にや大觀艦式やら、軍隊の凱旋歡迎やらで民間の反抗の氣焔は大分衰へる、新聞屋共は迂濶な奴共ぢやから喜ぶべき事は喜び怒るべき事は怒る、軍隊の歡迎と政府の責任問題とは混淆させぬちうて力味よるが、馬鹿奴人間は活物ぢや、さうは行かぬわ、葬禮と婚禮と撞着り合うたら喜んで可えやら悲しんで可えやら分らなうなつて途方に暮るゝのが人情ちふものぢや、其處が又此方の附目で軍隊の歡迎や觀艦式は成るべく盛に行らする積りぢやアあるけれどもが、今度の反抗の氣運はいつもと大分樣子が違ふやうぢやから、それにしても全く責任問題を揉み消して了ふ譯には行かぬ、條約の發表と同時に又之に火が付く、それに條約を破棄せいちふな人民共の側の議論で、議員共は其處までは得う言はぬ、

といふて之が今の人氣問題ぢやから、大に反對も出來んで、而はど控へとるちふ形でをるから、之を切脱けるに左程骨も折れぬが、責任問題になるちふと、然うはいかぬ、人民も議員共も一所になつて喰つて懸りをらう、イヤ戒嚴令は容易に引込められぬわい、どねえしても議會が濟む迄は引込められぬわい。

中

破棄問題……ちふ程の事もないが、まづ問題と云や問題ぢや、此奴は條約の發表で片が付いて了ふが、責任問題は議會でも手古摺る者と見る。尤も協約の方は此通りの人氣で反對するな谷の偏屈親仁位のもんぢやから議會でも必ず大受に受けるぢやらう。これと絡めて講和顛末の報告をやるのぢやで、一方の人氣で一方の不人氣を幾分か薄うすることは出來る、政府は國民を侮辱した君國の大事を誤つたちふ口の下から英國のやうな強國と同盟を成立さしたのは政府の手柄ぢや、これだけは其功勞を認めんぢやならぬちうては、攻撃しちよるのやら贊成しちよるのやら分らなうなる、此處が此方の手ぢや、議員共は同盟と講和とを別々に値打ちしようとしようが、さらはさせぬ、必ず之を絡めて一個にして一個に値打ちをさする、表面は斯ういふ體裁で持掛けて置いて、而して裏面では例の手段で撫付けるぢや、緊急勅令で世間は薄暗うなつちよるから、裏面の消息は能くは分らぬ。分つたところで闇から闇へ葬つて了ふばかりで新聞共で思切つて火の手を揚げる譯にはいかぬ。院外有志たら何たら云ふ腹の空いちよる奴共が少しは何か行らうとしようが、こいつも戒嚴令をビシ〳〵勵行して一寸も手の出せぬやうにする。さうすればぢや、議會ちうても左程恐るゝこともあるまいと思ふけれどもが、萬一それでも對手におへぬやうぢやつたら、そしたら強面ぢや、政府は陛下に對してこそ責任はあるが、議會に對しては何の責任も有たぬ、只德義上から外交の顛末を言うて聞かせるだけぢや。それで氣に入らずば勝手にせいと突放して怖い目をして睨み付けて呉れるのぢや。そしたら彼奴共は元來腹は臆病で只表面ばかり附元氣で空威張をやりをるのぢやから大抵は腰が拔ける。假令へば腰を拔かさぬにしてもが、宣戰講和は例の大權の發動ぢやから、彈劾ぢや上奏ぢやちうて騷ぎ立つたところで結局どもならぬ。ソコデ詰り戰後の財政計畫案で衝突する外はないぢやけど、此處まで漕付くれば、もう此方の物ぢや、其處のところは又如何にでもなる、喩へば二十九年の第九議會のやうなもので、例の彈劾上奏案で尾崎が傍腹聲を振捲つて哮つたけれどもが、何の役にも立たんぢやつた、結局否決ぢやつた。それから豫算會議に這入つてから佐々の奴めが嫉妬を燒いて不信任案を持出したけれどもが、十日の停會を喰はして置いて其間に例の手段をやつたもんぢやから、彌々期限が來て蓋を明けてみると、あの始末ぢやつた。尤も彼時の議會は多數の自由黨が政府の味方に附いちよつたから、多少の紛擾は免れ得なんでも、結局あの通り首尾よく切脫けられたのぢやアあるけれどもが、あやつとあやつに伴食の椅子でも宛がふことにする日にや、尾を掉つて二つ返事で味方に付く。知事位の處ならまだ一人二人は採つてやつても可え。ナニ議員共は畢竟恐るゝに足らぬ、唯恐ろしいなは靈南坂の親仁ぢや。こやつ好え年齡をしちよる癖にまだ色氣が失せぬ。今度のやうな大芝居に始終日陰者にされてをつて好え役を宛がはれんぢやつたのが面白うない、ぢやからアノ時の議會にも乙う首を捻りやつたんぢやらう。そりや乃公はチャンと見て置いた、それに自分が引受けてやりやはつた二十七八年事件があの不

始末で、第九議會は自由黨を手懐けて如何にか斯うにか切脱けは切脱けたけれどもが、其時の政策が基で終に禍根を出しやつて、内閣總崩れとなつて所謂松隈内閣が出來た、餘り手際でもなかつた。さういふところでコノ乃公が手際よう跡始末を付けて何時までも此内閣萬歳ぢやつた日にや、親仁はいつまでも日陰者で、もう浮ぶ瀬がない。ぢやから慾望心が半分、勞力を恢復したいが半分で、親仁始終面白うない面をしをらう。これが乃公の身に取つては何よりも恐ろしいのぢやけれど、シカシまだ其處までは間が有る、今から心配するには當らぬ。

下

考へて見ると妙なものぢやなう、最初乃公を今の地位に据ゑたのは、乃公を人形にして親仁共が黒幕の内で操らうちふ積りぢやつたのであるけれどもが、此人形なか〳〵の才子ぢやで、親仁共が操る〳〵と思ひよる内に、いつの間にか乃公に操らるゝやうになつて了うて、今ぢや政治の中心は何というても斯ういふ乃公ぢや。如何ぢや此眞似は誰にも一寸出來まい。操る操ると思ひよるところを、操らるゝやうな風をしながら、其實は此方で操つて行く、そのカネアヒちふものを了解まんぢや政治家と云へぬ。將來どんな偉い政治家が出るか知らぬが、要するに政治家の政治家たる所は、このカネアヒちふものを了解うで種々の紛糾つた困難な事情を旨う切脱けて行く處にあるのぢや。それが出來んぢや如何な偉い經綸を有つちよつてもが、そりや空想家で政治家ぢやない。喩へば靈南坂にしてもが、相應に計畫は立てよるが、其計畫を實行する腕がない。それでゐて自分からして其計畫に敬服して斯ういふ計畫を立て得る人間は乃公の外に無いなんぞと手前免許で自惚れて了うて露骨に大きな面をするばかりで何時も計畫の立てばなしぢや。跡始末が出來ぬ。そこへ行くと目白の親仁は陰險に持つて行つて旨くやるけれども、もう老込んだ、乃公を相手にせんことにや、何も出來ぬ。他の親仁共になると土臺三本足らぬ。政治家ちふ資格のある奴は一人も居らぬ。此間の戒嚴令の時もぢや、皆吃驚りして餘りヒドかないかちうたが、今日となつて見りや如何ぢや。そりや六日に戒嚴令を出した時にや、全く此首が惜かつたので、跡先の考へもなく泡を喰つて出したのぢやアあるけれどもが、轉んでも徒は起きぬちふは此處の事ぢや。出して了うてから跡の樣子を見て、ハ、しまうた、とは思つたが、それと同時に直此戒嚴令を使うて一仕事やらうと早くも方針を立てた。此處の呼吸の解らぬ奴は政治家ぢやない。民間の奴等は無暗に屁理窟ばかり捻りよるが、一人だつて此處の呼吸の解る奴があるか。

此間も〇〇の老爺が來て、まア此樣した事にして了うて跡は如何する積りぢやちうて十年も二十年も先の事いうて取越苦勞しよつたが、馬鹿な奴ぢや。そねえした迂濶な事をいひよるから、早うから樞密院なんぞへ祭り込まれて一生浮かぶ瀬がないのぢや。諺にも云ふ通り人間は一寸先は暗ぢや、其暗の世の中に生きちよつて、而も政治家として一國の運命を預かつちよる者が、十年先の事を心配して如何する。今日は宜しく今日の事を處すべしぢや。而して違算が無ければそれで可えのぢや。十年先の事を心配したとて十年先には時勢は如何なるか知れたもんぢやないわ。彼奴も馬鹿ぢやが、本黨のヘニも馬鹿に於ては〇〇に多く讓らぬ。乃公の面を見るが早いか、唐突に憲法政治の講義ぢや政治家ちふ者は憲法に抵觸せぬやうに憲法以上の仕事をして行くのが命ぢや。人民ちふものは昔から馬鹿と相場が極つちよる。シカシ政治家はソノ馬鹿を相手に政治をして行かんにや

ならぬからして、必要上憲法ぢや法律ぢやアいふ道具をも竝べて見せるのぢや、道具の法律や憲法に縛られて了うて、一も二も輿論々々で人民共の機械になつて了うた日にや、政治家たる所は皆無になる。多くの場合に於て輿論の所在は明瞭には分らぬ、縦し分つたところで十中の九迄輿論は愚論ぢや、それを一々實行した日には國家は生存して行かれぬ。ソコデ政治家ちふ者はその愚なる輿論を旨く抑へて、議會を巧に操縦して、憲法や法律を上手に潜つて而して一國を如何にか斯うにか運轉させて行く、そこが政治家の腕前ちふものぢや、乃公は其處を行つてをるのぢや。そりやな、人民は反抗し議會とは衝突し、親仁共は分らぬ事を愚頭々々いうて二進も三進も行かなうなると、えゝ面倒な、寧そ何も角も抛り出いて引込んで了はうかと思ふ時が無いではないけれどもが、シカシ考へて見れば乃公が斯うして今の地位に居ればこそ、世間の奴等が一列一體に乃公を仰いで見るのぢや。何處へ行つても……はア、ありやア何とかいうた……さうぢや、一の位のお人がお出でやつたちうて下へも置かぬやうにさるゝ。ナニ金は千ばかりぢやから相場で儲けた方が大きい。金に惚れるぢやないけれどもが、世間では相應に大きな面をしとる奴も乃公の前では兩手をついてヘイ／＼いひよる。乃公の行る事は善かれ惡かれ日本中の、いや日本中どころか世界中に評判となる。來る外國人も來る外國人も先づ乃公に會ひたがる。天長節の夜會なぞちうたら彼方からも此方からも、さん／＼ちうて乃公の身體は十あつても足らぬ位ぢや。アノ公使の嚊なんぞはいつも乃公の面を妙な眼付して見よる、あんな女子に惚れられたちうて一向難有くもないけれども、シカシ美でも醜でも女子といふやつにチヤホヤされるのは萬更惡い心持はせぬものぢや、……トいふも畢竟乃公が今の地位に居るからぢや。此地位を離れたら然うは行かぬ、ト思ふと乃公は如何しても此地位は去られぬ。誰が何と云うても決して去らぬ……ひとり言ぢやから好えやうなものの、若し世間の有象無象がかうと聞いたら、さぞ惡口を叩く事ぢやらうな、いや既う蔭ぢや叩きをらう。ナンノ惡口なら幾らでも叩け、痛うも痒うもないわ。乃公の一番烟たいのは靈南坂の親仁ぢやけど、一番怖ろしいのは正直者ぢや、正直者が眼の色を變へて、うぬ奸賊ちふやつが一番おそろしいが、此外には何も怖ろしいものはない、イヤも一つ有つた。そりやアノ何ぢや、彼女のねだりごとぢや。

某政治家の「かぐや姫」評

上

記者一日政界の老將某氏を訪うて其北京會商に關する意見を叩きたるに、某氏はかんらからかんらからとお極りの豪傑笑ひに記者が言ふ所を笑ひ飛ばして曰く、君の面は見れば見る程野暮に出來てるなア、始終政治で眼が釣上つてるから大笑ひだ、まア今日はそんなシカツベらしい政治談は止せ、其代り己が大碎けに碎けて一つ「かぐや姫」の批評をやつて聽かさう。さうよ坪内さんの新作のあれよ、何だそんな閑文字は讀んでる閑がないと、だから政治一點張の無趣味の野暮天は話せないといふのだ、己なんぞは時々かういふ洒落た物を讀んでゐる、ナニ盗人の晝寢だらうと、馬鹿言へ英雄閑日月ありだ、ハツ、ハツ、ハ。

讀んだことがなきや筋から話さなきやならんな、面倒臭いな、グツと端折るぞ。「かぐや姫」はまづ歌の竹取物語だ、あの物語の筋を殆どそツくり借用した歌曲よ、歌と樂とは藥で演

奏して、優人がそれに連れて舞臺で振事をやるのださうだから、まア日本式のオペラといふ樣な物が出來るンだらう。其麽事は己には能く分らん、話したつて君にも分るまいから省略にして置く。兎に角竹取物語は彼通り古雅な罪のないお伽話だが、この「かぐや姫」は作中の人物といふ中にも殊にかぐや姫の感懐だ。それを歌ふ文句の中に自然作者の感懐を寓した處があつて、やれ人生觀だ世相觀だと、君達が讀んだら嘸度三日位飯の味が分らなくなる程それはシチツクドイ物よ。

己は自慢にもならんが歌も分らん、音樂も分らん、作者は此新曲を作るに付いて歌曲上音樂上苦心したらしく見えるが、己には其苦心を値打ちすることが出來ん。此點は頭からお辭儀を一つして降參の意を表して置かう。それから歌曲の文句だ、これは玄人目には如何見えるか知らんが、素人の己なんざ之を讀んだ時には今日の作家にも此程の文章家が有るかと思つて驚いた位だ、確かに明治始まつて以來の大文字だ、或は日本開闢以來の名文章の一に數ふべきかも知れん、シカシ其樣な事は玄人の評に讓つて己は此作に寓した作者の感想だな、そいつを一つ批評してみよう、混返さずに謹聽しろ、

まづ己の見た所では「かぐや姫」の着想といふかな、主意だ、そいつはプラトーの天堂追憶說に大に似た處がある。これは物語の筋の然らしむる所だ。かぐや姫は月界の天女であつたから、人間に降謫された後も始終月を觀て空に憧れてゐた。丁度プラトーの說の純理想界の天堂を去つた人間が始終天堂の純眞純善純美に渴仰憧往するのと同じ構だ。「かぐや姫」の作者は姑くプラトーの眼を藉りて事件を觀た趣がある。だから曲に現れた思想の樣式だ、輪郭といつても好い、こいつは始終プラトー臭い。例へばかぐや姫の憧れる月界にしても、物語では只清淨の天人界に過ぎぬけれど、此曲の方では大に曲節を付けて純眞純善純美の理想境のやうに言做して居る、隨つてかぐや姫も物語では前身は天女であつた絕世の美人で、當時の靡頽した女風に連れて多くの浮氣男をなぶつたと云ふに過ぎぬけれど、此曲ではかぐや姫は只の天女の生れ替りでない、美の化身と見える、美が化身して美女となつて人界に現れ來つて、多くの人に接する。人はかぐや姫の美貌、むづかしく言へば差別相の相對美だ、その相對美の中に純理想の絕對美の面影を髣髴して之に憧れて、其結果凡人の俗情として、必ず之を領せんと欲する、私せんと欲する。そこで姫が難題を持出した、難題を持出した主意は、此難題に行詰まらせて其處で當然大悟させたいといふ老婆心切だ。けれども相手が皆緣なき衆生だから、大悟どころか、益大迷ひに迷つて詐欺を働くやら、盜賊をやるやら、醜態百出尾籠千萬をやる、けれども一人も目的を達せぬ。何故なら差別相の相對美でも絕對の理想美の一滴だ、人間の私意を以て之を領せんと企てても、大伴の勇も之に加ふる能はず、車持の皇子の智も之を致す能はず、帝の尊貴も之を屈する能はずよ、到底人間の力では如何もならぬ。只之を神棚に祀つて御神酒を上げて禮拜渴仰するより外は仕方がないのだ、喩へばだ、此處をシチツクドイがシチツクドク言はんと君達には分らん、喩へば君が新橋邊の美妓に岡惚したと思へ、まア喩だ、岡惚すると俗情だから傍處に置いてはゐられん、直ぐ欲しくなる、手に入れたくなる。美人を手に入れるには一金二金だ、金が要る。金は無い。最初の内は無理算段でも遣繰はつくが、さう／＼は其も續かぬ、そこで高利のアイスに引掛る。是で散々油を絞られる、苦し紛れに遂に詐欺を働く、窃盜をやる、まアと喩

だ。そこで自分はいつか監獄のモッソウを喰ふ身となつて美人は畢竟手に入らん。假令へば、幸にして、先祖の遺産の田地でも故郷に在つて、それを賣飛ばして美人の身受をしたところで、美人は老いる、老いれば紅顔凋衰と來る。美人は手に入つても其美は手に入れられるものでないから、一時握つた積りでゐた美人の美は忽ちツルリ手を脱けて見えなくなる。いくら懸賞廣告で探して見たところで此紛失物は出ぬな。だから到底美人の美は之を私することが出來ぬ。人間は只之をメヂウムとして之を通して絶對理想美のちらつくのを見て其で滿足するの外はないのだ、これが前の幕の主意だが、如何だ分つたか。

中

後の幕の事件はかぐや姫の昇天一件だ、此處で姫の假の親の翁媼が親子の切なる情合から姫との別離を悲しんで殆ど常識を失ふ許りの狂態を演ずるといふ人情美やら、快樂主義の醉僕が人間の微力を恃んで天を天とも思はず侮蔑嘲笑するといふ陋態やら種々の事があつて、それが皆我々の今日の狀態に當てて面白く書いてあるが、それを詳しく話してゐたら日が暮れる。省略して率然かぐや姫の昇天に掛るが、己の見た所では、かぐや姫の昇天は人體を假りて化現した美が人體を離れて去ることを意味する、美人衰老の場合でも或は夭折の場合でも何方でも好い。之をプラトー式に言へば純美の理想の物質に憑いてゐたが其物質を離れて再び理想境に戻る場合だ。理想が物質に憑いてゐる間は相對的で純粹でないから、餘程物質に繫縛せられて、物質の氣の勝つた竹取の翁などは子を思ふといふ情合があつても、それが清明の至情とは行かずして大に人間の私意の雜つた私情になる。隨つて子と言へば如何やら私有物のやうに思つて、時節が來て昇天するかぐや姫をも天命に安んずることが出來んで、弓矢の力で守つて去かすまいとするなど、其所業に大に人間の我が働く處がある、流石にかぐや姫は天女の變身だからそれ程には物質に繫縛せられてゐない、併し此處では未だ物質を離れぬ所謂現身のかぐや姫だから、全く物質の係累を脱してゐるのでもない。そこで假の親の翁媼に別れるを悲しむ、只悲しんでも濫せぬ、天命に安んずる處がある。此處らが醇乎たる人情の妙處だ。我は神の子なり菩薩なりと言つて生みの親を棄つること破草鞋を脱ぎ棄てるが如き者が若し世に在つたら、それはかぐや姫の眉を顰める所で又「かぐや姫」の作者の同情の出來ぬ處だらう。人が人たる間は人たる事に甘んじてゐて、人たる者の天性を遺憾なく發揮する工夫をせねばならぬ、それを人の身にして人以上の者にならんといふ非望を起して我意づくめの無理な眞似を爲る者は絶無とは言へんでも僅少だが、そんな說を鼓吹して神の子出でよ超人出でよと喚く者はそこらに幾らも有る。心を盡すとか性を發揮するとかいふ思想の樣式は古めかしいから善をせよ惡を作すべからずといふ教訓同樣餘り人の心に感動を與へぬが、其思想の內容を感興で發揮してみると、いつも新しいきび／＼してゐる、「かぐや姫」の作者は姫の感懷に託して此思想の內容を發揮する點に於て大に成功してゐるとは己は思はんが、多少成功してゐることは事實だ、多少の成功でも珍重せずには居られぬ、十襲して祕藏して置く價値はある。

そこで此哀別離苦の愁歎場が濟むと、今度は愈姫の昇天となつて、姫を押籠めて置いた庫の戸が自然に開くの、守護する武士の身體が萎むのと種々奇蹟らしい事がある。が熟ら視ると是は奇蹟でも何でもない、時節が來て美人の美

の遣り場合には、庫に藏つたとて、弓矢で護つたとて、浮ける者は浮けてしまふ。死も亦然りだ、不死の靈薬はない、夫で人力の限りを盡して引留めてみても追付かぬので、遂に我を折つて責めて記念をと哀願する、美の化身が人間に留めた記念は何かと言へば天上一輪の明月だ。「月見れば離の世いとど醜くけれ」で、此穢土に居て天上の明月を望めば、穢土は愈穢土に見えるけれど、併し之を厭離しようとて厭離せられるものでもなければ又厭離すべき筈のものでもない、穢土の相對界は到底厭離せられぬものと斷念して、只天上の明月なり、地上の美花なり、美女なり、何でも構はん、相對界の差別相に現れた絶對理想美を眺めて、之に隨喜渇仰して、之に使つて出來るだけ穢土の汚れたるを淨めて行けといふ苦り切つた教訓が美しい歌の文句に包まれて、吾々の前に現れて意見をしてゐる。何と難有いか。

まア己の睨んだ所では「かぐや姫」に含まれてゐる作者の人生觀や世相觀は這麼ものだ。固より詩人の感想だ、哲學者の思想のやうにロジック詰の純理一邊ではない。理に絡む情があつて其情が始終理を運んで行く、そこが詩の面白い處で詩の生命よ。だが理は取次がれても情は取次がれぬ、こいつは銘々が自分で讀んでみて、自分の天分相應に受取る外はない、まア一遍讀んで見給へ。

下

まア、之からが己の評だ。しつかり聽け。己が此曲を讀んで感じた所を率直に言つて了ふと、第一に目に着いたのは此曲全體に行亙つて嚮往の氣の甚だ熾なことだ、少し節立つた意味を含めた處は句々皆此氣を載せてゐる、凄まじい意氣込よ、シカシ何に向つてから猛進するのだか其處は能く分らぬ、只何やら向うの方を指と睨まへて猛進するのだ。

按ずるに行先は何れ例の理想國だらうよ。さうとは鑑定するが、シカシ其理想國とは如何な處だか分らぬ。かぐや姫の曲に、「無量妙光を具足して眼裡に妍媸なう、念頭に是非を斷じ、來去無礙にして、飛行自在とならん身の、よし嬉しさはありとても」と天人界の消息を傳へてゐるが、これは一體何だらう。此詩では天人界即ち理想界だから、作者が讀者を誘ひ合せて出懸けようといふのは此樣な處だとすると、己達はまア御免蒙らう。うつかり跟を隨いて行くと、行先は蓬萊島だつたり何かして、秦の始皇の二の舞をやらぬとも限らぬ。かういふと、それは詩だから已むを得ず然うして置いたので、作者の腹にはチヤンと理想國の縮圖面まで出來てゐるといふかも知れぬ、成程それは然うかも知れぬがその肝腎の縮圖面を見ぬ中は、吾々が不思議な面して作者の猛進するのを傍觀してゐるのも、こいつも亦已むを得ぬ次第だ。

或に作者の積りでは理想といふを然う輕く見ず、輕く目的物に擬して置いて、目的なしに彷徨してゐてはいけぬ、成るべく善い目的を立てて、兎も角も其目的に向つて此通り猛進せよと此詩を見せて吳れた次第なら、是は進取の氣風を鼓吹するものだ、誰とて不同意を唱へる筈がないが、それなら己は皆に忠告する、目的を定めて進むのは結構だが、目的は方向だ、生活の方向だ、餘り目的ばかりを視詰めてゐて生活をお留守にするな、且つ目的を定めるといふことは至難の事だ、過失に陷り易い、目的は生活の生み出す處で定める位が好い、能くも生活を翫味せぬ中に輕率に生活を離れて理窟一邊に目的を定むるのは危險だ、「かぐや姫」の猛進を勸告するは非難すべからざる事だが、シカシ其猛進の仕振には注意せよと、かう注意を要する程「かぐや姫」は進取的の詩で、而も其進取の

鼓吹振が頗る理窟ツぽい、詩といふよりは寧ろ說教に近い程だ。マア讀んで見給へ、殆ど悉く理窟が絡んでゐる、感想を發展する仕方だな、即ち結構だ。それにも一條の理路があつて傍目にもチャンと辿られる。實に行屆いたもので五分の隙もないが、其代り五人のうかれ男が滑稽なので、吹き出さうとすると、背後にむづかしい面した人が附いてゐて、それ貴樣達は是だぞ是だぞと言つてゐるやうな氣がして、出かゝつた笑ひが引込んで了ふ。行屆いてゐて無駄がない代りどうも詩の感興に釣込まれて、我を忘れるといふことが出來ぬ、即ち詩の感想が餘り明亮で餘り意識的で理が勝つてゐる。勿論理を運ぶ情がないではない、否理は蔭になつて表面は兎も角も情かも知れぬが、其情は理に作れた情だ、理を離れたものでない、隨つて其理を十分に了解んでゐて之に同意する者は、其情にも同感が出來ようが、其理を十分に合點せぬ者、乃至十分合點してゐても同意せぬ者は、其情にも同感が出來にくくなる。これは理が先に立つて、情が作れられて行く此樣な詩に在つては、止むを得ぬ結果だ。

此通り理が勝つてゐる、理は思索の產物だ、其材料でないから、此詩には是非善惡の判斷があつて、是と善とに隨喜し惡と非とを厭惡する情があつて、是非善惡の味を傳へてゐぬ。月界に隨喜するだけそれだけ此世を厭うて、穢土穢土叱々と叱られるが、穢土の味を如何味つて叱々だか、それが能く分らぬ。五人のうかれ男が馬鹿氣てゐるから叱々でもあるまい、醉漢の管を卷くのを聽いて、あれを現世主義の骨髓と見て叱々でもあるまい。詩の面に表はれた所で見ると、穢土の味を深くも味はずして穢土を厭ひ、理想境は未だ確に分らぬに只管之に渴仰隨喜することになつてゐて、稍輕率の感がある。勿論此詩は敍情詩だから此詩に由つて作者の見解を聽かうとは思はぬが、穢土は厭だと最後の判決を歌ふなら、其厭なる所以をも歌つて貰ひたかつた、それでないとどうも物足らん。

理窟ツぽいから隨つて調子が陰氣になる、是は止むを得ぬ事だらう、俗にいふ理に落ちた形だ、活潑の生氣に乏しくて、全篇に書卷の氣みち〳〵たりだ、其辭詩の詞句は典麗で瑰綺で、華美といつても決してくすんではゐぬ。かういふ詩形にくすんだ陰氣な感想の包まれた所は、まづしなびた老僧が卸し立ての錦襴の袈裟を着たやうなものだな。服裝は頗るきらびやかだが、着てゐる當人を見ると存外淋しい面相だ。

また此詩を讀んで己の感じた所が文學者と普通人との相異の點だ。ざつと言へば文學者は此詩の作者に限らず多くは理想本位だが、吾々普通人は生活本位だ。雙方に長處も有るが短處もある。シカシ待てよ、もう時間が無い、己は是から代議士會へ出なきやならん、其話はまた其內機會を見てしよう、今日は是で歸つて吳れ。

小按摩

師走の空の薄曇り、やがては雪になりさうな風の、ヒュウとばかり小砂利を吹飛ばすからからの往來を、たまさかに通る往來の人は、懷手して、ちゞかまりて、追はるゝやうに小走りに走り行く。程近き傳通院の鐘の音も今しがた八時を打つたばかりの、まだ宵の口ながら、此處らは都も場末とて、町とはほんの名ばかりの、軒燈さへところ〴〵、しもたや雜り小店がち、それさへ今宵は早仕舞ひと、九尺の間口を六尺鎖して、殘る三尺の煤け障子に、ぼんやりと射す灯の、影の暗いは三分心かと心細

く、内から漏るゝうるめ燒く香に、時ならぬ湯漬食ふ音も聞ゆべし。號燈の火の風に煽られんとするを庇ひつゝ、夜なしの車夫が空車を絞り行き、隣町の交番から交代して戻る巡査の靴音、暗夜の中に消えたる後は、一しきり彿と杜絶えし人通り、露路内の竿構架の、はた〳〵と風に煽られる戸の音の外に、物音とては何一つせぬ時、忽ち下町の方にピーと悲し氣に聲尻を引く笛の音して、幽かに〳〵按摩上下六百文と呼ぶ聲音に響いて哀れなりしが、やがて角から二軒目の燒芋屋の前に、ちゞかまりたる小按摩の姿悄然顯はれて、今晩はと挨拶するを見れば、年齢はまだ十五か六なるべし、人の情も薄縞の、古布子なら、半纏なら、襟垢だらけ、繼だらけ、後歯の減つたぺたんこ下駄の、鼻緒の命も短かるべき浮世を、杖の力に辿る身は、莞爾と笑むさへうすら淋しくて、どうやら影も薄かりさうなを、六十ばかりの人の善ささうな芋屋の親仁、愛想よく之を見迎へて、おゝ喜一さんか、今も獨りで如何しなすッたかと思つてた所だ、さぞ寒かつたらう、さあ〳〵内へ這入つて、まつて行きなせい。

喜一といはれし小按摩は稍暫躊うてゐたりしが、ぢや些と當つて行からうか、己らあ今夜はまだ仕事しねえんだから、遊んぢや不好ンだけど餘り寒いので手も足も棒の樣になつちやつたと、首を据ゑて手探りに釜側へ來て蹲まり、ほんとに厭ンなつ了ふ、今夜は五時から流しに出たんだけど、まだ一つもねえんだもの、こんな事なら、阿母の言ふこと聽いて、家でお飯を喰つて來りや好かつたと、思はず口が滑つてハッとなり、あゝ叔父さん、叔母さんの聲がしねえやうだが、居ねえのかねと、餘所事いうて紛らさんとするも哀れなり。芋屋の親仁はそれと見て取つて、老婆さんは今しがた湯へ行つたが、ぢやア何か、お前はまだ飯前か、枵腹ぢや此寒さに遣切れめえ、丁度燒ごろだ、一つ食つてきねえと、起上つて釜の蓋を取れば、白き烟濛々と立昇るその隙より、親仁はためつ透しつといふ態で、長き菜箸の先に二つ三つ燒ごろなを擇出し、さあ此釜の端に置くよ、燒立てだから熱いよ、火傷しめえぜといへど、小僧はもぢついて急には手を出しかねてゐるを、尚再三進められて餘儀なささうに、だつて己らあまだ仕事しねえから、おあしがねえものといふ、親仁はからからと笑つて、錢なんざ如何でも好いッて事よ、まあ食んねえ、ほんに今時お前のやうに遠慮深え子も滅多にや無えよといへば、そんなら小父さん明日の晩まで借りとくよ、己らあ實は腹がペコ〳〵なんだと、狼狽てゝ手探りに觸つ立つのを一切取つて、あぐりと喰りつき、ホッホッと頬返しに困じながらも、がつ〳〵と喰ふ樣の憫然さ、親が見たらば打泣くべし。暫く間に二切程爽けて、稍元氣づきたる時、親仁は煙管の詰りたるを藁の焚尻でコッコッと叩きながら、阿母は如何樣だ、些たあ好い方かと、問はれて小僧は頬張りたる芋を狼狽てゝ鵜呑みにし、同じ事なの、好くもならない代りに、惡くもならないでね、始終腰だの膝だの節々が疼んで仕樣が無えんだッさ、一體ならレウマチだもの、按摩で治る譯なんだけど、だつて己らぢや駄目だ、それかつてお師匠さんに頼みや澤山お錢が掛るしね、如何したら好いだらうッて阿母に言や、ナニそんなに心配しなくッても、今に暖かになつたら自然に治るッていふけど、小父さん眞實だらうか、自然に治りや好いけど、若しか段々惡くなつて阿母が死にでもしたら、己らあ厭だ、妹だつて屹度泣かあ、何でも彼でも今の中に阿母の病氣を治しッ了はなきやならないんだけど、此頃は仕事が閑でね、十二時過まで流して歩いたつて、ばんこにあぶれるンだもの、仕方がねえのさ。それで此頃ぢや芙

イ坊に紙袋を張らせてるンだけど、小父さん紙袋張りッていふもな何程にもなりやしねえよ。それに美イ坊が遊びたがつて仕樣がねえんだ。いつもお晝食が濟むと一時間ばか遊びに出すんだがね、さうすると二時になつても三時になつても歸つて來ねえことがあるのさ。そんな時にや己らが杖を突張つて探しに出ちや、目付けると思ふさま小言をいつてやるンだ。阿母はまだ十一だから遊びてえな當然だつていふけどね、だつて遊ばしといちや、阿母の塗るヨヂムも買へねえもの、だから己らあかういつてやるンだ、美イ坊お前は阿母の事を何とも思はねえのか、お前が遊んぢや藥が買へねえ、藥もつけねえで打棄らかしといて、若しも阿母が死んぢやツたら如何するツていふとね、彼兒はいつもツーツてツて泣出すんだ、おいらもね、目さへ見えたら、何の、年もいかねえ妹なんぞを當にするもんか、車でも何でも引張つて、己ら一人で二人位樂にお飯喰べさせて見せるンだけど、何しろ己らが此樣な盲目だもんだから、仕方がねえ。今夜のやうに仕事の無え晩にや、己らア此目つ見えねえのが悔しくなつちやツてね、己らア……己らア……厭ンなツ了ふぜと、ホロリとして我知らず俯向いて了ふに、親仁もツイ貰ひ泣の鼻汁を啜りあげ、お前も年もいかねえに、可哀さうに、飛んだ苦勞をするよなう。しかし何日迄も其心を亡なすめえぜ。さうすりやお天道樣が打棄つちや置かねえ。今に屹度運が改つて阿母の病氣も好くならうし、お前の稼業も繁昌するやうになるだらう、と慰むれば、此方も元氣ついて莞爾となり、さうだらうか、眞實に然うなるだらうか、若しか然うなつたら己らあ石切地藏樣へ涎掛を獻げるンだ、え、何故ツて己らあ何だもの、阿母の病氣もあるしね、それに早く名人になりてえから、願掛けしてるンだもの。お師匠さんがね、己らが下る時、手前の腕ぢやまだ〳〵一本立は無理だけど阿母があんなに言ふもんだから暇をやる。だけど盲人は藝がなくツちや出世が出來ねえから、手前も出世してえと思ふんなら、家へ下つても稽古にや通へツて言つて呉れたんだ。阿母もさうして貰へツていふしね、己らも成る程さうだと思つて、今では毎朝々々飯を終ふと神田まで稽古に行くんだが、小父さん己らのお師匠さんツていふな偉い人だぜ。若い時にや矢張團つて、己らの死んだ阿父なんぞにや大變世話になつたんださうだが、今ぢや內弟子だつて三人から居るンだ。男の內弟子が二人、女の內弟子が一人で、それがお飯焚きもしてゐるんだ。だから家はお師匠さんにお神さんにお嬢さんと、皆で五人暮しなんだけど、それで、お師匠さんは不斷に美い服裝をしてるぜ。按摩ぢや東京でも名人ツて謂はれてる人なんだから、遠方から車で迎によこすお得意が何軒も有るンだ。何しろ、お前外で一遍療治すりや、お客次第で五十錢と一圓になるンだもの、大したもんぢやねえか。だから按摩だつて腕せえ確りしてりや、困りやしねえ。己らも早く彼樣になりてえから、それで石切地藏樣へ願掛けをしたんだ。今に己らが彼樣に出世したら、阿母が鹽梅が惡い時にや、直ぐお醫者樣に掛けてドシ〳〵藥を飲ませらあ。美イ坊が彼樣に欲しがつてるンだから、二丁目の玉屋で一本二錢五厘の插頭を十本も買つて遣らあ。さうしたら今のやうに毎日五錢や十錢が飯を買ひにや往かねえ、五十錢も一圓も一どきにウンと買込んで、皆に腹一杯食はせらあと、胸に堆積つた有りたけの慾を一時に陳立てて、樂しかるべき未來の夢に、蒼白き面に血の氣を漲らせて勇み立つ時、此家の婆樣と見えて、湯歸りの手拭片手に入り來り、おや喜一さん、今夜は如何して今時分來なすツた、遲いぢやないかと言はれて、見えぬながらも振返り、

おゝ小母さん今歸つたのか、もう何時だらう、え、九時だと、や、大變だ、もうそんなになるだらうか、今夜はまだ日明け前だのに、九時おや、大變だよ、手探りに枕を取つて起上り、小父さん小母さん、お喧しうございました、そんなら芋の代は明日の晩まで借りとくよ、ちょッイ遊んでおやつた、今夜ッまたあぶれなきや好いが、といひ〳〵立出でて、外は寒いねと身慄ひし、袂の笛を取出して一聲ピーと吹き、下より按摩上下、六百文と聲張揚げて流し行く。それも次第に遠ざかりて、後は冬の夜寒の風の音、泣くがやうに悲しかりき。

入露記

一

社命を畏まつて遙なる露都を志し、六月十二日雨持つ空の何となく濕つぽい夕、細君頑兒親戚の誰彼さては新知舊識のなつかしき人々に見送られ新橋から下り列車の客となる。二十年來の知己横山天涯君、同車して國府津迄見送られた。お蔭で退屈を免れて嬉しかつたが、國府津からは全くの一人旅となつて雨さへ到頭降り出した。淋しさは同じ車室に、黒光の一露人の是から浦潮へ歸るといふのが有つたからそれからは此人と話して行く。獨逸語英語の中間とかで名をチョールヌイ君といふ。チョールヌイは黑いの義だけれど名には似ず色白の大柄な柔和な紳士だつた。

山北で給仕を呼んで例の名物香魚の鮨を買はうとすると、何と思つてかチョールヌイ君私にもと云ふ。香鮨といふ物は酢漬けの魚を負つた米の飯ですよと注意するとおゝといつてチョールヌイ君出した手を引込ます。一車室唖然と噴出す。僕の分を裾分けしようとしたが、先生首を掉ってどうしても食はなかつた。

やがて更け行くまゝに其處らに鼾聲グウグウと起る。首をぐたりと垂れてダラシなく狗目に發れた寢姿は誰にしても餘り見つとも好いものでない。況や口から涎を垂らすに至つては言語同斷沙汰の限りだが、此等は止むを得ずと恕す法もあれ、憎むべきは二人詰の腰掛を一人で占領して肱掛を枕に樂々と寢そべりながら時々首を擧げて枕が堅くて眠られぬと吐く奴だ。

チョールヌイ君眠むさうな欠びをして、日本は厭な處だといふ。僕驚いて振向くと、透かさず汽車で眠られんと言足す。僕が云ふ、四圍お出しなさい、何時でも樂に寢て行かれると。是に於てチョールヌイ君禮の一寸首を竪に振つて兩手を擴げ、

負惜しみを言ふやうなものゝ、僕も實は同感だつた。何しろ出發前のドサクサで三晩といふもの碌に寢なかつたから、少々眠たい、生欠びが頻りに出る。チョールヌイ君もいつか眠つて了ふ。大鼾がコクリ〳〵と絶れ絶れに來る、勢ひ此方からも絶れ絶れ氣味にせんと釣合が取れぬ。これを日露のもたれ合といふと、心の中では可笑しかつた。

しよぼ〳〵して來る眼の前に今日新橋で別れた人々の顔がちらつく、末の寵坊が叔父さんに抱つこして吃驚したやうに四方を見廻す顔、其上の富坊が福田女史に何か言はれて含羞んで母の手に振垂がつた顔、三山主筆の大きな顔、風浪君の酒太りに太つた顔、松山君の細長い顔と種々の顔が水車のやうに廻轉して目まぐるしかつたが、三山君には少し仰向いて鼻の先でフフと笑ふ癖がある。風浪君は下唇を裏まで見せてムッと口を引結び六かしい顔をするのが癖だ、松山君の音聲には抑揚がないと、詰らん事を想ひながら他愛なくなる。

名古屋で眼が覺めて米原でチョールヌイ君に

別れ、梅田で下車すると、ヤアといつて帽子を脱る人は是れもなつかしい一人の長田君だ。久濶の挨拶をする間もなく、君と車を列べて豫定の宿に着くなり、先づ枕を求めて横になり、二つ三つ話をしてゐる内に、又他愛なくなる。

二

東京で打合せを濟まして、大阪へ着いた日に又大阪を立つて敦賀へ行つた、後藤男の歸朝を迎へる爲だ。

敦賀は僕が曾て血氣に逸つて滿洲に飛込んだ時通つた所だ。僕に取つては想出の多い土地なるが上に此處にはなつかしい人が數名居る。皆僕の空想の友だ。久し振だといふので、此人々に招かれて某樓に登つて大に飲んだ、此凝季の世には珍らしい淺からぬ人々の志に絆されて、平生深くはいけぬ酒をツイ過したので、泥の如く醉つて了ひ、夜深うして終に車に扶け上せられ一老妓に送られて旅宿へ歸つた。もう商家も戸を閉めて敦賀の町は森として暗い中を二梃の車は威勢よく飛んで行く。霏々たる細雨が醉顔を撲つて快言ふべからさるものがあつた。トある橋へ掛ると橋の中央に丸くなつて寢てゐた犬が驚いて飛起き尻尾を卷いて逃出した。僕の威勢に畏れたのに違ひない。

宿へ歸つてから老妓を勞つて還し（小人の心を以て君子の態度を測量するを許さず）設けの臥樽に入るなり、前後不覺に眠入つたが、間もなく枕元で鳳山丸が着きましたよといふ聲がする、これに驚かされてガバと跳起きた。後藤男は鳳山丸で着かれるのだ。

飯も食はずに車を驅つて、朝の敦賀の町の夢より覺めてまだ間のない中を驅け拔け埠頭へ來て見ると、南無三小蒸汽はもう一間ばかり出てゐる、狼狽して呼止めて漸と便乘させて貰ひホッと一息する間もなく小蒸汽は鳳山丸に着く。フロックコートに黑の山高帽の知事さんや、制服帶劍の嚴めしい警部長さんや、羽織袴の人や、背廣の人がぞろ〳〵と繋がつて段梯子を登つて行く、その尻に附いた薄汚ない夏帽夏外套の僕も登つて行つた。

と見ると、右舷のデッキにゴタ〳〵と一塊まり人影が見える。初は誰が誰やら一寸分らなかつたが、能く見ると其中に霜降りの背廣に黑の山高帽を冠り鼻眼鏡を掛けた脊の高い人が居る。西洋式に剃刀を中てぬと見えて左右の眉が殆ど一の字に繋がり斑白の美しい鬚が頤の先で楔形に刈込んである、自ら備はる威風堂々とあたりを拂つて、御近所のお方にはお氣の毒ながら、洵に是れ鷄群の一鶴だ。出迎の人が交る交る其前へ出て恭しくお辭儀をしてゐる。

男爵に違ひないから、僕も人の尻に附いて罷り出て名刺を捧げてお辭儀をすると、東京で見知り越しの龍居秘書が側に居たから、多分龍居君だつたらう、二葉亭四迷君ですと紹介する。おゝさうかと男爵も跋を合はされた。しかし二葉亭四迷が何だか御存じあるべき筈がないから、新聞記者が二葉亭四迷――妙な名を附けたものだ、矢張内職に浪花節でも語るのだな、と思はれたかも知れぬ。難有い仕合せだ。

上陸後の模樣は當時の電報に盡きてゐるから、爰には省く。

僕は從來數次男爵の噂を聞いたが、噂をする人が人だから、其言葉に多くの信を措かなかつた、なあに逢つて見れば矢張尋常の人かも知れぬと實は思つてゐた。然るに此日親しく謦咳に接して見ると、名虚しく傳はらずと能く云ふ、眞に其通りだと思つた。小說で腐つて葡萄のやうになつた僕の眼で見た所だから當にはならぬかも知れぬが、僕の見た所では男爵は理想家で又實際家である、僕の承はつたのは誠心誠意に人事を盡して天命を竢つといふ男爵の理想

の一端で其全体ではなかつたが、兎も角も此理想を實現せんとし、所謂人事を盡すに方つて男爵の用意の周到なる事は豫想外で、一言一句の末にも注意を怠らず、直ぐ大勢の赴く所を察して變化百端し眞に造物主の好機に奉ずるが如き趣がある。今の世でも理想家はある、しかし多くの理想家の理想は死理想で役に立たぬ。實際家は固より多い、しかし實際家は實際にかまけて理想を缺くが故に、其爲る所は動もすれば小細工に流れケチになる。理想に囚はれず、實際に役せられず超然として心を物外に置きながら、着地に物内に突入して活殺自在の働きを爲し得る底の眞人物は存外少い、否殆ど無いが、僕の見た男爵は則ち其人たるに庶幾い。世には理想に於て男爵より高い人が或はあるかも知れぬ、運用の活才に於ても亦男爵を凌ぐ人があるかも知れぬ。然し理想の堅實に兼ぬるに運用の活才を以てする點に於て男爵には男爵の本領がある。偉い偉くないはさて措いて、此點に於て後藤新平は頂天立地一箇の後藤新平で、到底他人の模倣を許さぬ獨特の長所がある。

午後一時男爵に陪乘して敦賀を發し、米原でお暇乞を申して、僕は下り列車に乘移つた、車室の中僕の外は誰も居ない、僕は獨り默想に倚つて默々と男爵の人と爲りを考へ、其將來の事業を想ひつゝ大阪へ下つた。

三

滯阪二日の間は俗事蝟集殆ど息も吐けなかつた、しかし息も吐けぬ程多忙な所に大に趣味がある、少くも閑散無事に勝ること萬々だと思つた。

此間社内社外の諸友の厄介になつたこと一通りでないが、餘り僕一身の私事に渉る故省略して、いよ／＼六月十七日午前大阪を發し、神戸へ下り此處でも亦朋友同僚の厄介となつた、どうやらかうやら小蒸汽で大連行の神戸丸に送り附けられた。

シャンペンは有りの沙汰と、ビールの離杯を擧げて行く者留まる者迭に健康を相祝する中、手仕舞の小蒸汽が歸るので、見送りの諸君も梯を下りられる。御機嫌よう御機嫌ようといふ聲は耳の底に止まつてまだ消えぬけれど、もう小蒸汽は餘所の船の影に隱れて見えなくなり、僕は到頭全くの一人法師となつて了つた、此時に方つて無限の寂寞を感ぜぬものは恐らく人間であるまい。

豫定の午前十一時に船は錨を拔いて航行を始めた、僕は神戸の町の見えなくなる迄甲板に立盡して、それから徐かに船室へ入り、ドサリとソファの上へ倒れて凝然と目を瞑つた。「あッ、電報を頼むのを忘れた。」といふ事が稻妻の如く、寂寞を過ぎて何處ともなく消えて行く跡から、「なに、頼まんでも長田君が打つて呉れるさ。」と慰めるやうな聲が奧深い處で微に聞えて、跡はもや／＼となつて、僕は其儘グッスリ寢込んだものと見える。

總じて出帆の當日は夢の一日で、寢ては醒め、醒めては寢してくらし、翌十八日朝宇品に着いた時初めて人心地が附いた。省みて前夕の事を想ふと、宵の口ガスの爲に海上に假泊した時、船室の戸を排して觀たら、他にも同じ運命に居竦つた船が有ると見えて、濛々たる海氣の中に處々赤色の檣燈が淡く微に夢のやうに見えたのを記憶するばかりで、跡は何が何だか薩張覺えがない。

宇品までは一等船客といつては僕一人外なかつたが、此處で柳樹屯へ行くとかいふ陸軍の將校が三名乘込んだ。お蔭で食堂は稍賑かになつたが、降りみ降らずみの鬱陶しい天氣なので、運動場はいつもガランとしてゐる。據どころな

く船室に垂籠めて空想に耽つてゐると、時々向う隣で退屈さうな軍歌の聲が聞えるが、それも頓てけッたるさうにダラシなく曖昧になつて了つて、跡は寂然となる、洵に淋しい。

十九日夜半に門司に着いた。夜が明けると荷役が始まる、船客が乘込む。船内は稍賑かになつたを後にして僕は上陸した。支局で用達をしてから、市中を見物するやら、和布刈神社へ參詣するやらして船へ歸ると、間もなく出帆。

初めは左程でもなかつたが、進むにつれて風が次第に加はり、運動場の人影が一人減り二人減りして果はガランとなつた時、ぶらりと軸部へ行つて見ると、デッキに婦人客が三四人死人のやうになつて寢てゐる。船室へ歸つて見ると、棚の上の壜やコップや凡そ轉げ落ちさうな物は皆取片附けてある。僕は少しく心細くなつてふら〳〵しながら頻りにデッキの上を歩いてゐたが、幸ひに大事にならずして濟んだ。それは好かつたが、それから此方今日迄は始終ガス責めに遭ひ通しだ。

まづ二十日朝五次島沖で居ずくまること七八時間、同日夕刻に一時間、同じく八時半から翌二十一日午前五時迄八時間半(たしか所安島附近だとかいつた)、それからズッと飛んで今二十二日午前七時から十二時迄五時間、之に神戸宇品間の居ずくまりを合せて不時に錨を卸すこと前後九回約一晝夜になる。船長の話だと、こんな事は滅多に無いと云ふ。その滅多に無い目に遭はされた僕等は災難だが、しかし今午後一時半船は大連を距る約九哩の處を駛つてゐる、もう一時間足らずで着くさうな。早く着きたいな、船はもう厭き〳〵した。

やれ〳〵着いた、時計を見ると正に午後三時、一寸見ると海軍士官のやうな制服を着た案内者に案内せられて、馬車で揚々と遼東ホテルに乘込んだ、草臥れた〳〵、見物は後の事。

四

大連も曾遊の地である、初めて此處に來たのは三十五年の夏で、二度目に來たのは翌三十六年の夏であつた。まだロシアの物だつたし、どういふものか僕は到る處軍事探偵と誤認せられたから、小さくなつて目立たぬ樣に此處の町を見物して、竊に大に感慨に堪へなかつた。露國の遣方は實際的ではなかつたから、こんなに大風呂敷を擴げやがつて、尻括が出來るか如何か怪しいものだと嘲りながらも、眼前に大埠頭の海に突出し大厦高樓の巍然として廣衢の左右に聳ゆるのを見ては、竊にスラーヴ民族の羽翮の力存外強く、一度搏てば高く天に沖する勢ひあるに驚き、我が日本の前途の爲に危惧せざるを得なかつた。

五年後の今年三度目に來て見れば、大埠頭の海に突出し、大厦高樓の巍然として廣衢の左右に聳ゆるのは昔の儘で面目を改めぬけれど、道行く人は皆我が同胞である。店頭の招牌は皆我が四角な日本字である。僕を軍事探偵かと怪しんで目を側つる者は一人もない。誰に遠慮もなく大手を掉つて大道を濶歩される。僕は嬉しくて〳〵堪らなかつたから、大埠頭から信濃町の遼東ホテルに行く途中、左右に見える建物を指顧して、あれは以前は病院だつた、そこに見えるのはホテルだつた、と躍り上らむばかりに喜んだので、同乘の奉天郵便局長の岩崎君が變な顏をして僕の顏をジロリと見た。

ホテルに着いてから一風呂浴びて、夕方滿鐵の村井君と近所の扇芳亭で飲んだ。扇芳亭といふのは烏森のソレあの扇芳亭の出店で、内藝者もゐるが皆生粹の東京ッ子だといふ。なるほ

ど出て来たのを見ると、サッパリとした東京端で、あなた東京から入らしつたの、なつかしいわねえとか何んとかいふのが日切りで、それから新橋の唄が出る、鳥森の唄が出る、電車の唄も出て、僕が歌舞伎座の噂をした時には、一座皆耳を掩うて、聴かない〳〵。

僕は愉快でこたへられん、興に乗じていけもせぬ酒を呷つて……は嘘だ、嘗め過ごして苦しくなつたから、村井君を促して戸外へ出た。戸外は賑かだ、両側の商家に電燈の光燦と輝いて、浴衣掛けの人がぞろ〳〵とぞめきながら行く。ハイカラの東髪と連立つたのも尠くない。其間を薄汚ない支那人の物賣が間の脱けた聲を振立てて變な日本語で蕃茄々々と呼んで行く。車道には馬車が走る、人力が走る、尤も御者や輓子は皆支那人だが、早い話が濱あたりの支那人町附近の體裁で、内地と大した變りがない、僕は愉快々々たまらない。

無暗に歩いてゐる中にドカンと落ちた、往來の中央に洞然と穴が開けてゐる、さういへば一體に道が凹凸で歩き難いこと夥しい。是で雨が降つたら宛然泥田だらう、ロシア時代の方が却つて道が好かつたやうだ、何故道普請をせんのだらうと村井君にいふと、村井君は金が無いからさと吐出すやうにいつて、憤つてる様に匆々と行く、少し行くと支那人の店がある、其隣もその又隣も支那人の店だ。僕が店の中を覗き込んで皆日本品を賣つてるやうだねといふと、村井君が加之も日本人の店よりか安く賣つてるのだといつて、憤つてるやうに匆々と行く。

相變らず商賣に掛けると日本人は意氣地がないなと思ひながら、然し家は大分殖えたやうぢやないかといふと、皆な小ぽけな家ばかりだといつて、村井君は憤つてるやうに匆々と行く。成程殖えたのは小家で少し大きいと思ふと皆ロシアの讓り物だ。

僕が村井君に別れて獨りホテルへ歸つた頃には、もう醉もスッカリ醒めてゐた。さて醒めた頭が熟々考へて見ると、ロシア人は無理矢理に困難を征服せんとするけれど、日本人はそんな馬鹿な眞似はせぬ、困難に適應するやうに力めて巧に此生に處して行く。そこが日本人の特長だ。大連に於ける日本人の經營を観てコックリ普請に過ぎぬと貶しめ、顧みてロシア時代の規模の雄大を憶ふ者は此特長を認めぬ人である、間違つてゐる、大に間違つてゐる……がしかし、あゝ金が欲しいと僕は思はざるを得なかつた。

露都雜記

一

ネミローウヰチ・ダンチエンコ氏が日本のさる田舎の停車場で、何心なく汽車の窓から首を出すと、そこの棚外に並んで居た洟垂らしの頑童共が、思ひがけず異人馬鹿と手を拍つて囃したので、氏は驚いて首を引込めた事がある。

それからはこの「異人馬鹿」が耳に附いて、京都の秀麗な山河に對しても、宮島の美景を望んでも、之を想出すと、一種の苦しい感じが夕立雲の空に擴がる如く急に心頭に掩ひかぶさつて、折角の感興も之が爲に臺なしにされたとかで、氏は直に之を日本人の排外思想と見做し、日本に可惜瑕の隨一に算へてゐられる。

その事はルースコエ・スローウォに連載された氏の紀行にも出たので、當地の各新聞は珍しい事にして皆其一節を轉載する、それで一時一寸之が評判になつて、逢ふ人が皆其事を言ひ出すので、僕はお蔭でうるさい想をさせられた。

ダンチエンコ氏は田舎の停車場で子供に調戯

はれたのだが、此頃のノーウォエ、ウレーミヤを見ると、去年の天長節に東京の眞中で、しかも大學生に異人馬鹿といはれた露西亞人がある。それはこの新聞の通信員でミ…といふ男である、餘り不思議の話だから、念の爲其通信の一節を左に抄譯する。

群集に誘はれて余等（獨逸人某と此通信員とだ）も前へと進んだ、行けば行く程人氣はたつみ上つて、其處にも此處にも萬歳の聲が聞え、狼煙がしつきりなく上る、と數名の大學生が人浪を押分けつゝ余等の側を通りぬけんとして、無作法に余等の面を眺めて、「異人馬鹿！」と叫んだ、其處らの者一同之に聲を合せて動搖めく。

明治四十一年の大學生が外國人を呼んで異人といつたとは、古今の珍聞といふべしだ。が、珍聞はこればかりでなく、此通信員が旗行列か何かの跡について行くと、皆「萬歳、御名！」と叫んだといふ、グード、モーニング、ヂヤ、リツトルジョンの格だが、ウラー、ニコライとは此方でも聞かぬ事で、これも古今の珍聞だ。

概して此通信は珍聞に富んでゐる、いや、珍聞だらけでうッかり足を踏込むと珍聞を踏んづける程だが、其中で珍の珍たるものは、大方此旗行列は戰勝の名譽を表彰する神社などへ行く事だらうと思つて跡について行くと、吉原といふ處へ來たとある、文章の續柄さうより外には取れぬ、で、吉原の景氣を敍するあたりにも大分珍聞もあるが、それは省略して、此通信員側の獨逸人とトある格子先に立つた……とは書いてないが、立つたに違ひない。すると妓夫ではなくて此家の亭主が側へ來て、文明な露國ではとても聞かれぬ尾籠千萬な事を野蠻な日本人だから平氣で陳べて遊興を勸める。それを通辯に取次がせて聽いてゐると、恰も此時丁度その格子先の往來で大道演說が始まつた、辯士が入替り立替り愛國心を鼓舞したので、萬歳と異人馬鹿の叫び聲は次第に烈しくなり、遂に一同ちぐはぐの聲で歌ひ出すのを聽くと、

「ニポン、カタ、
　ラシヤ、マキター

通信員は事實有つたに相違ない此事實の意味を說明して、これはミカドの生誕日を祝する爲貴賤を擧つて此處に集つた東京の住民が、日本の輸出品中最も賣行の好い代物を眼前に見て意氣頓に揚りそこで愛國的演說をはじめ、外國人を罵詈し、日本の光榮ある將來に望を屬したのである、といつてゐる。事實が既に珍無類だから、說明も亦珍無類である。で、その次にかうある――

「皇帝の誕生日は今歳は東京ではかうして祝されたのである。

是に於て余は獨逸人に一問を足した、若し伯林でカイゼルの命名日に、何人かかゝる處で愛國的示威運動を企てたら、獨逸の警察や社會は果して之を何といふであらうかと。

流石日本贔屓の獨逸人も此時ばかりは啞然として答ふる所を知らなかつた。」

ノーウォエ、ウレーミヤの社中には常識に富む紳士も少くない。その堂々たるノーウォエ、ウレーミヤがかういふ通信員のかういふ通信を平氣で掲載する眞意は僕も知らんが、しかしかういふ通信が保守臭味の露國人に一般に歡迎せらるゝのは事實である、需用の在る所供給之に從ふ。

二

ネミローウヰチ・ダンチエンコ氏が東洋漫遊より歸らるゝや、舊情を溫め旁々一夕僕は氏をニコラーエフスカヤの其宅に訪うた事がある。其時既に先客があつて頻りに感心して氏の日本

談を聴いてゐる所だつたから、僕も他人の興を妨げるでもないと思つて、挨拶が済むと、默して矢賀氏の日本談を聴く身となつた。按るに氏は決して雄辯家ではない、いや雄辯家の沈着を缺く。悪しく早い氏の頭に驚くべき速力を以て僅少の時間内に補が上卷み込んだ日本の百千の印象が今其一端を抓んで引起して見ると、ぞろぞろと釣し柿のやうに連がつて際限なくぬくれて來るから、氏は殆ど始末に窮せられるらしい。其結果狼狽せられる、で、今山の話をしてゐられるかと思ふと、忽ち川の話になる。それもドブンと不意に川に陷つたやうに其話に移るので、聽手は一寸呆氣に取られてゐる中に、話は一躍して向岸に躍り上つてしまふ事がある。

僕は氏の日本談に横槍を入れるどころでなかつた、流石に意見を異にする點もないではなかつたが、それを言はうと口をもぐつかせてゐる中に、話が狂奔して別事に移るから、此方も喘ぎ喘ぎ走つて其尻に附く、なかなか口を開く暇がなかつたが、其中にフト例の異人馬鹿の話になつた。

其時ダンチェンコ氏は僕を顧みて、ニッコリして、

「この彼得堡でそんな悪口を聞く事は無いでせう？」

無論ないといふだらうと豫期してゐられたのだらう。僕が有るといふと、眼を圓くして、

「え、有る？……

「有りますとも、不斷の事だ！……」

「そ、そ、それは怪しからん！　どんな悪口を？……」

それから僕は此地着以來の經驗を語つた。

僕は元來散歩嫌ひの男だが、ここへ來てから急に散歩好きになつたのぢやない、部屋の構造が冬向きの方だから、空氣の流通が頗る宜しくないので、外出して比較的新鮮の空氣を呼吸せざるを得んのだ。しかるに外出すると、毎度悪口を言はれる、外出の方面によつては、出る度といつてもよろしい。

人の面をじろじろ視て、支那人が通るとは無禮に相違ないが、まづ悪口の部には入れない。が中には圖星日本人と看て取つて、ヤポーシカが通るといふ。ヤポーシカとは我國の露助と同格で、日本人の蔑稱だ。複數だとヤポーシヤとなる。之をヤポンスキイと間違へて單に日本人の事だと思ふ人が露語を知らぬ人に多いやうだが、大間違で、ヤポンスキイとは日本のといふ形容詞で日本人の事でない、日本人の事は露語ではヤポーネッといふのだ。

老の繰言

や、貴下の前だがな、私の所の倅にも殆ど愛想が盡きました。ま、聴いて下され、かういふ譯ぢや。私は斯ういふ古物ぢやで一寸も知らなんだが、當節若い者の仲間ぢや、新體詩たらいふものが甚う流行しとるげぢやが、どういふ物ぢやと思うたら、早い所が國などでいふアノ心中口説節な、ま、あゝいうた質の物ぢや。口説節は哀れッぽうて一寸面白い物ぢやが、この新體詩たらいふものは、や、舌足るい胸の悪うなるやうな物で、それ戀ぢや何ぢやの、乳がむツちりしとつて堪らぬの、接吻たらいうて、平たく言うたら女子の口を吸ふことさうな、それが行らかしたいのと、そりや全然色情狂の譫言を陳べたやうなものぢや。こいつを、一寸も知らぬ中に、宅の倅奴が作り覺えて、竊々とやり居つたのぢや。然うとは此方知らんもんだで、彼奴も最う面皰盛りも過ぎる年ぢやに、遊びに行く様子もとッぱり見えぬ。今の若い者が

那樣でも困ると、親馬鹿ぢや、道樂せにやせんで其を又苦勞にしとつたのぢやが、何か、阿房らしい、倅は色氣が内攻しとつたのぢや。さうと知つたな先々月の事で、ありや何たらいふ……えゝ、何たらいふ雜誌……おゝ、さうぢや、一枕の友たらいふ雜誌ぢやつた。其雜誌で今の新體詩の懸賞募集をやつた時倅の作つて出いたくツだらぬものが、何處が好うてか知らぬが、三等に入つたとかで、裸體女の畫の入つた、其癖何やら小六かしい事の書いたる本を一册賞品ぢやいうて其雜誌から屆けて寄越いた。それからといふものは奴乘が來たと見えて、もう公然に、學校の方の事なんか放擲かいといて、朝から晩までそればかりに浮身を窶して、お袋の言ふ事なんぞ從頭耳へも入れぬ。ま、それも好えが、近頃ぢや樣子がガラリ異うて了うて、一向洒落氣の無かつた奴が、服裝を無暗と氣にし出いて、動ともすると、妹共の買うて置く香水を偸み出いて、頭へなんぞ塗りこくる。ハテナ妙だわいと内々氣を附けて見てゐると、如何も女子でも出來たらしい。それから段々探りを入れてみたら、果然看護婦やら女學生やら知れぬが、何でも髮を束髮に結うた若い女子に知己が出來た樣子で、既に此間の晩氣にも、其女子と手を引合うて藻川を逍遥いとつたのを見懸けた者があるなどと、怪しからん噂がチラホラ耳に入る。もう然う／＼打棄かいとく譯にも行かんで、二三日前居間に召付けて、かう／＼いふ噂を聞くが眞かといや、眞だといふ。怪しからん奴ぢやとガミ／＼ッと行らうとしたら、小言なら、ま、待つて下され、私は無考へで行つとるのぢやない、チャンと考へがあつて行つとるのぢやといふ。如何いふ考へぢやというたら、や、今時の若い者は口は達者ぢや。漢語交りぢや未た足らぬと見えて、時々私の嫌ひな英語まで雜ぜて、小六かし言を長々と陳べる。私にや好うは解らなんだが、何でも人間はズバ脫けて強い優い者に成らうと心懸けんぢやならん。強い優い者に成らうといふにや、世間を恐れるやうな事では何うもならんに因つて、世間なんぞは屁とも思はいで、何でも自分の好いた事は遠慮會釋なくドシ／＼行るが好え。私が新體詩を作るな未だ他に深い理由が有るが、第一には好いとるから作るのぢやといふ樣な言を陳べた揚句、かうぢや。彼女子は女學生ぢやが、女子に構ふのは面白いものぢや。自分が面白いと思ふ事を遠慮して行らぬは僞ぢやで、私や彼女子を玩具にしとるのぢやと、ま、かういふぢや有りませんか。私やもう呆れて了つて、開いた口が塞がらんぢやつた。呆然となつて多時、倅の面を見詰めてゐる中に、ふッと是や氣が狂れたのかと思うたが、樣子を見れば然うでもない、小工面な面してまじり／＼としてけつかる。頓と合點が行かぬが、兎も角もこりや尋事でない、ひよッとかすると色情狂の下地かも知れぬに因つて、一つ頭から水を打懸けてこまそと思うて、ふう、然うか、ぢや其女子に構つとるのも詰り人間は我好いた事を世間構はず行らにや不好ちふ所から割出いたものぢやな、然うか、そりや至極道理の事ぢやから、乃公も今から貴樣の宗旨に歸依して、仕度放題を行る事にせう。ところで早速ながら何ぢや、乃公や今日迄貴樣を子と思うて、莫大の金を掛けて足手を伸して、學校へ遣つて學問迄させて來たが、もう厭になつた。子に爲て置くのが厭になつたに因つて、只今出て行んで貰ほ、その衣類は乃公が錢で拵へたものぢやで、乃公の物ぢや、犢鼻褌まで外して素裸になつて出て行んで呉れとやつた。スルト倅奴吃驚しやがつて、そんな亂暴なと曰ふ。いや亂暴でも何でも構はぬ、乃公は乃公の好いた通りに世間構はず行るのぢや。貴樣はそれが人間の道ぢやといふぢやないか。とア脫

け、聾ぢやんか、汝が聾ぢやんと、若い者を喚んで引摺せるぞと、屑に掛つて極付けたので、奴も弱つて了うて、最うグウの音も出ぬ。そこで私が言葉を改めて、如何ぢや、貴様の言ふ通りにすると差出斷らいふ事になる、それでも貴様は不都合と思はんか、うむ、貴様が勝手を徹さうとすりや、人も勝手を徹さうとする、勝手と勝手と衝突り合うては、世の中は到底も一日も持たぬに因つて、そこで銘々少しづつ不承し合うて衝突らぬやうにしとるのぢや。誰ぢやとて格別勝手を振舞はにやア不好とも思ふまいが、我勝手にするのが勝ちふ者もあるまい、皆勝手はしたからうが、目先が見えて利口なゆゑ、八分目で我慢して置くのぢや。貴様が耶蘇坊主のやうに、自分の勝手を棄て人の勝手を立てろと言はぬ丈が未だ取柄ぢやが、貴様の勝手は盲目滅法界の勝手で、詰り馬鹿正直なんぢや。だで直き鼻を衝く、世間の人は貴様よりか一枚も二枚も上手を行つてるのに、貴様は其處に氣が附かんのか、阿房めと、散々叱咤つてやりましたが、口返答すりや又裸にすると言はれうかと思うたのでも有りませう。ぢや今少し考へさせて貰ひませうと大人しう言ふので、其場はそれで治めましたが、彼様子ぢや孰れ其内また隱府せにやならぬでござりませう。それといふも皆枕に友たらいふ雜誌が悪いので、彼を買うて來て讀み〳〵する中に、遂に斯うした事に成りをつたので、私ゃ考へると彼雜誌が恨めしい。あんな者でも男の子は彼一人ぢやで、私に取つては大事の息子でござります。それを彼雜誌のお蔭で到頭臺なしにして退けましたと、溜息つくづく去る親仁様の物語られけるとかや。

日記斷片（明治三十九年中）

十月

○一日（陰暦八月十四日午後二時寒暖計七十九度九）半晴 ○朝の程（午前十一時ころ）近きわたりの木梢にて法師蟬の鳴く聲を聞く。尙ほ其處此處にも聞ゆれども數へつべき程なり。近きわたりなるが一時喧しきまで鳴きてさてふと止みたる跡は心持シンとなる氣味あり。夏に比べれば大に減じたること是にても知らるべし。（午前十一時ころ）ネルの單にて籠り居れば丁度好加減なれど外をであるきたらば汗ばまずやと思はる。昨日も今日も時候少し跡戻りしてやゝ生温く頭重し。耳を聾つれに近きわたりの草叢の中よりは[illegible]の音聞ゆ、[illegible]とかいふものにや。庭の櫻を打見やるにはや大分葉を振ひ落したるゆゑにや、疎らがちに見ゆ。之こそ、二分通りは黃ばみたり。病葉なりとはいましてもあるまじき木のやうに覺えたれど寒に逢ひて是は八分通りは枯れて衰れなるさまなり。されど松なんどは流石に色も變らでたゞあを〳〵と見る目も覺むるばかりといはんも背めかしかるべし。

○晝食後一睡覺來れば涼意頓に加はるを覺ゆ、起ちて東の空を望めば、雲の峯とかいふものなるべし、綿を積み累ねたるが如き白き雲むくむくと天の一角を掩ひて其の一面は薄墨色に黑ずみたり。されどそれも二時頃にはいつしかに行きにけん見えずなりて、空名殘なう晴れわたりぬ。

○晩餐後半盞の酒に醉ひしれて居間にころびて轉寢す、七時ころめざむ。さすがに秋は秋なり、覺來つてまづ肌涼きを覺ゆ。しづかに聽けば家を繞りて皆蟲の音也。

　蟲の音の中に覺めたる轉寢かな

やゝさむとは恰も此ころの氣候をいふなるべし、うたゝねする中に風ひきたらずやと自ら危ぶまるゝばかり也。から筆とりゐる時鼻の形し

て翅あるものの羽蟻なるべし、來つてそとわが
手を這ふ。

　瘦せ枯れし手を羽蟻這ふ生きながら

○風少しあり、遂に障子を入れる。

○例によりて更たくるまで筆を執りてやゝ倦み
たり、いで枕に就かむとてやをら起上り、窓を
排して眺むれば、明月皎々とまた中空にありて
蟲聲喞々たり。

○二日（舊八月十五日）朝來微雨　午後二時華氏五十七度七
衛生大掃除とて朝より家内かたびしと犇く。晝
頃漸く一通り濟みて手があくと、急に寒くなる。
とう／＼耐へきれずしてドテラを引張り出して
ネルの上に着る、丁度好加減也。

○今夜は十五夜なれど、此雨では方なしだ。

○三日（舊八月十六日）朝來微雨。少時して歇みたれど
重雲擁々たり。午後二時華氏六十八度八
寒さきのふに異ならず、朝來どてらにくるまり
て、やれ／＼意氣地のないことかな。

○朝の内西本より使あり松蕈を貰ふ。口上に
曰く國から送つて參りましたからと、成程市中
へはまだ出ぬやうなり、さういへば笠が固く窄
みてゐる。甘さうだ。

　松蕈に新蕎麥欲しとおもひけり

○四日（舊八月十七日）曇　午後二時華氏六十三度
寒さ昨日にも彌增し意氣地なしと思へどどてら
を棄つること能はず。

○湯歸りに餘所の垣に紅き花一つ葉がくれに見
ゆるにふと目留まり立寄りみるに、其形朝貌に
似たり。我が家のは最早疾くに花さかずなりに
けるに、こは遲咲にやとおもへど、例のしかと
見識らねば、他の花を見紛へるかも知らず。

○五日（舊八月十八日）終日細雨　午後二時華氏五十四度
別に記事なし。たゞドテラの愈〻離しがたきを
覺ゆるのみ。

○六日（舊八月十九日）朝來曇夕方霽　午後二時華氏五九度二
今日は朝來寒さ少し緩みて、ドテラを脫ぎ、ネ
ルの單衣の上に綿入羽織で苦にならず、而も障
子は東と南とを終日明放ちたれど、その明放
ちたるを忘れて執筆に餘念なき程なりし。五六
寸の鮎既に市に上れりと晩餐の時母上のお話な
り。

○今夜二時起出でて月を觀る。半弦よりも少し
滿ちたる方にて、殆ど天心に懸りたり。月下蟲
聲、風情言はん方なし。露の置渡したるなるべ
し、しつとりとしたる夜の光景なりき。

　蟲の音に垂[illegible]見はすや／＼と
　しん／＼と露降つ夜を鳴明す蟲
　月下に蟲鳴きてはら／＼と露

○四時ころ用を足しに起き出でたるに木梢を間
斷なくボタ／＼と落つる音す。薄晴きと見ゆゑ、
且は例の近視眼ゆゑ何とも視分ちかねたれど
も、音により判ずれば雨の如し、されど目前
の窓の上を見れば竹格子の影這ひたり、先方袴
裏にありても雨の降るらんやうの音を聞けり。
さては秋空の定めにて、いつしか雨降り來りし
が、今纔かに霽上りて薄月の射せるにもやと推
測られたれど、尙心元なかりければ吾居間に
歸りて後雨戶一枚くり開けて空を打仰ぐに明月
皎々として、目に見ゆる限り一片の雲だになし。
さては露かと、尙一方の最も木立に近き窓の雨
戶を繰りて耳を欹つるに、樹の間に葉より葉に
落つるはら／＼といふ物の音暫くも絶ゆること
なし、今は紛ふべくもなく露の音なり。吾見聞
狹くて露の音を讀みたる詩歌あるを知らざれど
こは少くも吾に取りて珍らしき掘出し物したる
心地しぬ。げに露時雨てふ熟語もあるを、今迄
知らで過ぎしこそうつけたる我心かな。

轡のふと鳴止めに露の音

葉隠れの露の音きく暁や

○深夜折々チッチッといふやうなる蟲の音を聞く、音は壁間に在るものの如くいと近々と聞えしが、いかなる蟲の鳴くらんとあはれなりき。

萩枯梅雨のそぼふる日なりけり

○七日（八月廿五日）終日快晴。

朝、料理屋に行きリネルの上へ綿入羽織を被たるに玻璃戸をメ切りたるゆゑなるべし少し熱苦しくて羽織を脱がんかと思ひしが、少し居馴るれば左程でもなかりしゆゑ遂に其儘にて飯を喫り了れり。

○夜十一時ころ障子を明けて空を打仰ぎたるに月は左程高からざりし。

○今宵より寝衣は袷に單を重ねたるを着る。

○再び起きて二十日月の大さを見る。

○これは今宵に限りたるにもあらざるべけれど秋は氣澄みたるゆゑなるべし、物の影冷々といと黒く見ゆ。

○今宵は風少しあり樹上の秋聲けに淅瀝などいはんぞよく叶ひたる、□か雨か疑ひたる、この頃の氣象此中に能く顯はれたるべし。

○夜一時迄手紙を書きて、それから寝衣にきかへて小便にいつたらカラ〲慄へた。寒いといふ程でもないのにと疑うてみたけれど矢張寒いせゐなるべし。

○八日（八月二十六日）晴

社へ行き、それよりポトパフ氏をメトロポールホテルに訪ふ。あはせの洋服、下はフランネルの襯衣、モスリンの夏股引也。途に帽子を脱ぎ汗を拭ふ、併し大したことなし。内田氏を訪ひ夜十時ごろ歸る。モスリンはゆゑ腰より下は稍々寒かりし。

○九日（八月二十七日）晴

袷にフランネルの古はげて薄うなりたるを着る。シャツも股引も故と着ず、膝のあたり何となく薄寒く、自然正坐するやうになる。

○今日より其面影出づ。

○十日（八月二十八日）雨

雨降りゆゑ寒さも一入なり。今は火鉢と親しむと謂はんもふさはしかりぬべし。

（此頃は六時前にはもうトップリと日がくれる。

○十一日　十二日　記事なし

○十三日　快晴

今日は火鉢の綱は少し熱過る位なり。されど我緊裳は綿入羽織、袷に古きネルを重ねて着たり。

（其面影（第六回）を郵送す。

○十四日（八月三十日）快晴

綿入羽織をぬぎて袷とフランネルばかりになる。

○其面影（第七回）を郵送する。

○十五日（八月三十一日）快晴

家内のもの若きは皆羽織をぬぐ。成程あたゝかなれど、われはなんとなくぬぎかねたり（[illegible]）

小春とはかゝる日和をいふならんか。

○其面影（第八回）を郵送す。

○十六日（八月二十九日）晴

すこしゆるみに羽織なしでゐる。

○其面影（第九回）をおくる。

○十七日（八月三十日）

朝の中はをり〲雨ありて、晝から降りつゞく。

なんとなく蒸暑し。

○十八日（舊九月朔日）晴
蒸あつきこと言はん方なし。頭重くて何をするも懶し、皆厭な天氣だ〳〵と口癖のやうにいふ。

○其面影（第十回）を送る。

○十九日（舊九月二日）晴
また少し寒くなる。

○二十日（舊九月三日）夜雨降る。
朝の内「其面影」（第十一回）を使にて送る、大分危ふくなつて來た。
今日は終日袷羽織を着す。夜光を遠方に見る。

○二十一日（舊九月四日）
其面影（第十二回）を使にて送る。

○二十二日（舊九月五日）雨催の空。
火鉢を引付けてはゐれど、ドテラを取出す程にもなく綿入羽織で凌がる、尤も障子は一方明けて跡は閉めたり。

○朝の内「其面影」（第十三回）を送る。

○午後四時半少し過「其面影」（第十四回）を郵送す。

○二十三日（九月六日）雨
午後「其面影」（第十五回）を郵送す。

○二十四日（九月七日）

○二十五日（九月八日）

○二十六日（九月九日）

○二十七日（九月十日）

○二十八日（九月十一日）
昨日今日は五時ころ日の暮るゝと共に月既に東方の屋根上二枚ばかりの處に在り形◯これほど也。

○二十九日（九月十二日）
金蓮花と龍膽とを買ふ。

○三十日（十三日）夜の名月なれど曇りて詮なし。

○三十一日（十四日）
夜一時半頃起出でみれば月は天心に在りて光りさやけく宛ら眞晝の如くになんありける。蟲の音此ごろはいと心細くなんありける。

十一月

○五日　今朝はじめて皆さむしといふ。幼き者にはとくに綿入を着せたれど我も妻も尚袷に羽織也。

そゞろ言

私は富本を清元だと思つてうつかり聽いてゐるなんぞはバンコの事で、わるくすると常磐津と間違へて知らん面してゐるといふ厄介な男だが、其癖どういふ因縁だか俗曲が大好きで、度々方々のお浚ひや研究會へ聽きに行く。

なに、聽いたつて、ちつとも分りやしない。分らないと云つたら、そりや不思議な程分らない。第一歌の文句からが分らない。日本語だと思へば日本語だが、朝鮮語だと思へば朝鮮語と聞えんでもない位だ。況や三味線となつたら

カラモウ形なしで、歌に合はうが合ふまいが、そんな事に更に頓着なし。唯もう濃い聲の意氣な節廻しで、何とかがどうとかしたつぢやないかいなと歌ふのに絡んでチ、ンといふ音色がすれば、それで滿足してゐるので、誠にはや世話のない話だ。そんなに分らなくて何が面白くて聽きに行くのだと云へば、その澁い聲が意氣な三味線の音色に絡んで高くなつたり、低くなつたり、或はでんぐり反しを打つてツイと逃げたりする處に、チョン髷に結つて小さい刀を指した、ハッチ尻端折のお祖父さんや曾祖父さん、そのまた曾祖父さんなぞの俤が浮ぶ、其處が面白いのだ、必ずしも題材が古いから斯ういふ感じがするのではない。新曲物で題材が新しくても聲や節廻しの趣味が古い、その古い趣味を味つて、成程こいつは面白いと感ずるのだ。

この古い趣味は新しい趣味と調和せぬ。だから隣りに色白の圓顏のハイカラの令孃でも居て、樺色のリボンでもひら／＼させられると、大きに邪魔になる。成らう事なら結び方は今様でも何でも、水の垂れさうな島田髷の、何とか油の匂が芬とする面長の美人の側に坐りたい。明りも電氣では困る。こいつも矢張眞鍮の燭臺に大きな蠟燭をおつ立てて貰ひたい。さらでないと調和が惡い。

で、ハネてから外へ出て見ると、大通りは電氣でパッと明るい中を、電車が轟々と走つて行く。通る人は頭巾でないハンチングや中折を冠つてゐる。洒落た洋服姿で細いステッキを揮舞はして行く人もある。そんな人が通りすがりに黑い髭の中から噴き出す烟を嗅ぐと、マニラだ。西洋人臭い匂がする。トある店頭に人集りのしてるのを何かと思へば、蓄音機を聽いてゐるのだ。電車に乘つて蔓に振ら下りながら、四邊の話を聽いてゐると、メルボルン一世が如何だの、ブレッサンが斯うだらうといふ聲が耳に入る。何の事だと思つたら、今日の競馬の噂だ。

世のなかはドン／＼變つて行く。變らんのは俗曲のチョン髷趣味ばかりらしい・・・。

談話

雜談

文學雜誌宗教雜誌などを見ると、いつも世間の墮落を罵つてゐる。而も其罵り方で見ると中には公憤の餘りと聞けば聞かれるものも有らうが、多くは同情も何もない、嗚呼とか嗟矣とかうるさい程に蹙みかけて歎息の呻聲を揚げながら、其實少しも熱誠の籠つたとは見えぬ聲、親が子を叱る眞情の聲ではなくて、罵るのを賣物にしたやうな情ない聲だ。人を罵れば何となく自分の位を高めるやうな心地がする、我と我を賞めれば直ぐ己惚の譏を招くけれど、人の非を數へて罵つてゐる分には、百千人の世の中だから、どうかも罵る者をえらい様に思ふ者もあらうし、又自分にしても少くも罵つてゐる中だけは、いつもの自分よりもえらいやうな氣がして、己惚心を滿足させるに至極無難の法である。それで其樣に罵るのではないか、トサ餘り罵り方が上調子なので、痛い腹か痛くない腹かは知らぬが探りたくなる位だ。

かういふ罵り聲を聞くたびに、眼の前に浮ぶ人物は、相應の身分のある又は親讓りの財産のある家の息子さんで、子供の時から餘り生活の苦い味を嘗めたことのない、有るに任せて好きな書物を買つて讀み散らした、ト言つてこれと纏つた專門的知識は無いが、兎も角も書物を讀み散らした爲にいつとなく、心を書物に蝕れて了つて、物を見る眼に癖が付いて、我から世間を狹くし、多く人に接せぬから、浮世の事は多く人の噂に聞くばかり、親兄弟に叔父さんに叔母さんにそれに朋友二三人と、かういふ境界を浮世と見て、そこに前人未發なら結構だが、餘り珍らしくもないあやふやな理想界を開き、自らは其中に立籠つて人世を超脫してゐたのが、何かの拍子で人間に墮ち來つて、果は雜誌に投書するに至つた人、トかう一息に言つて了はれぬ人が目の前に浮ぶ。

まだ他にも種々のがあらう、が概してかういふ人々の特色は人生の苦い味を知らぬ、隨つて迂濶だ、想遣がない。強ち惡人ではないが、浮世の荒い浪風に浮きつ沈みつ藻搔いてゐる人の腹が分らぬ、分らぬからとてそれを知らうとするでもなく、唯譯もなく大聲あげて嘆憐むべき者よと來る。それで子供かといへば、當人もう三十幾つで、鬢に白髮の五六本は見えるといふ年配、おもへば無殘なやうな心持がする。

しかしこれ等は品の下つた方で、も少し立勝つたのになると、かうばかりでもない。其憤慨する所には至極尤なところもある。なれども、かうした人の癖として偏僻を免れぬ。

天性深く物に感ずる方であるから、隨つて深く考へ入る。深く考へ入つてかうと思ひ得る所があれば、之に心を据ゑるからさして苦痛を覺えぬが、多くはさうはゆかぬ。深く考へれば考へるほど分らなくなる。人は何の爲に此世へ生れたものか、人生の意味は如何であるか、これさへ分れば如何なる苦辛にも耐へようと思ふが、これが分らぬから、心に便る所がなく苦痛が益々苦痛となる。多少精神修養を修めた者は皆覺えのある事であるが、此時が尤も辛い。疑惑が影の如く身に添つて一寸も離れぬ。眠ても覺めてもこれに責められて心の休まる暇がないから、現にも夢の心地、何を食つても甘くなく、

何を見ても面白くない、當もない浮世にこんな思をして生きてゐるよりは寧そ一思にと思ふことは幾度もある、けれどもさうもならぬは何かこれには仔細があると思はれる。それさへ明らめて了へば、人間はかうまで果敢ないものではあるまいと思はれる、そこで古聖の遺書にしがみ付くやうに縋つて、之に眼を曝す、書いてある事がヒシ／＼と胸に應へて、此處だ、此處だと思ふ事が何度となくあるけれど、それは一時の事で、能く考へて見ると、どうも其處でもない。また迷ひ出して、藻掻く、のたうち廻る。いや、目も當てられぬ有樣。此間にいろ／＼の事もあらうが、それは略して、さて此境界をぬけ出すといふ一段が尤も關機の伏する所で、或は何かの拍子でフッと夜が明けたやうに暗黑の中から光明界に躍り出してたゞもう譯もなく嬉しがる人もある、所謂頓悟といふやつであらう。かと思ふと、又一歩々々と進んで行く中に、次第々々に明るくなつて、遂に全く光明界に出る人もある。これも矢張大歡喜に遭ふ。佛教から入る人、基督教から入る人、乃至一種の哲理に宗教味を加へたものを使つて入つた人と、それ／＼の境遇に準じて形式を異にするけれど、其光明界に出るまでの順序は大抵こんなものであらうと思ふ。之を心理學的に見たら、其錯亂した觀念が比較的十分に整理せられて、其處に一種の心調を得て心的作用に調和が出來たものとでも言はうか、兎も角も當人は蘇生したやうな心持になつて、大歡喜を得て、安心する。さて身外の物に撞着つてみる、チョイと旨く行く、そこでもう是なら大丈夫と愈々安心して益々厚く信じて了ふが、此處で更に一工夫を要しはせぬかと思はれるのは、比較的に調和した心になつてゐても、其心には既に癖が着いてはゐぬかと思はれる。喩へば、工夫中に佛教の感化を多く受けた人は、解脱し得たと思つた後でも、側から其心の働き樣を見れば、何處か佛教臭い。工夫中に基督教の感化を多く受けた人も其通り、復活後も何處か基督臭い。雙方を比べてみると、それが殊に能く分る。大に似た處もあるし、又大に似ぬ處もある。何でこんな臭味が着いて來たか、これは大に工夫を要する所であらうと思ふに、誰も餘り之に心を留めぬ。皆安心してゐる、自ら是として他を非とする氣味がある。が、それも強ち無理とばかり言へないのは、銘々の今住してゐる境涯は容易な事で達し得た境涯でない。殆ど一命を賭して漸き得た境涯であるから必ずしも我執で自是他非と論ずるのではなく、何ら公平に心を以て見ても、自然と自是他非と觀ぜられるから、觀ぜられる儘に觀じてゐるといふ迄である。雙方の關係は研究すれば面白い點が幾らも有るが、之を研究するは問題外になるから、姑く他日の事として置いて、さて種々の臭味はあるけれど、兎も角も雙方とも精神家で、精神上の問題には一と通り苦勞して來たものであるので、世間を見渡すと、非常に墮落してゐる、と見える。此處で自分を顧みて、己の心には癖がある、また不完全である、隨つて己の尺度は必ずしも曲つてゐぬとも限らぬ、曲つてゐるかも知れぬ尺度を以て世間を量るには斟酌を要する、墮落したと見たに違はなくとも、果して己の見たやうに墮落してゐるか如何だかと考へ直すものは、まづ千人に一人とあるまい。墮落の原因を研究する段になつてもさうで、十九世紀傳來の物質的文明とか、物質界が精神界を壓倒してゐるのとか、理想の缺乏とか、何とか彼とか、心の箭にひかされて輕卒に考へて了つて、墮落の事情を審にせぬ、一通りの想像でかうと定めて、もう其儘動かぬものにして了ふ。側から見れば誠に不親切なものであるが、如何いふものか、かうした人にはどうも然うである。て、誰も彼も、

意識してではなく、無意識に、かういふドグマを持つてゐる、皆の堕落したのは薄志弱行からだと。之を敷衍してみれば、堕落すまいと思へば堕落せずとも濟むものを己が心の持ちやう一つで勝手に堕落してゐるといふことになる。明らかに意識してかうと思はなくとも、何となくこんな氣味で、そんなことは餘り深く研究せずして、打棄てては置けぬ、匡正せねばならぬとなる。そこで演説ともなれば雑誌ともなつて世間に觸れてみる。觸れて見ると相應に手應はあるやうだけれど、總體世間は一向頓着せず、ズンズンと堕落して行くやうに、サ見える。それも其筈で、かうして演説を聞き、雑誌を讀んで感服するのは、現實界と縁の關係のない、多くは同臭味の人で、現實界に出頭没頭してゐる、現實界を經營して行く實業家、政治家などといふ連中はテンで振向いてもみない。そこで此方は憤激して益々其聲を大にするが、其聲を大にすれば大にする程、自是他非の聲になるばかりで、シンミリと心に沁みるやうな情合は薄れて行く。即ち聴かせようと思ふ世間の耳には益々疎くなつて行くばかりで、偶々其聲が屆くことがあつても、ヘンな氣障な言を言つてゐると、向ふ向いて了ふ。詰りかういふ説法を聽いて感服するものは、まだ浮世の塵を踏まぬ無垢の青年か、さもなくば現實界の隅に小さくなつてゐる謂はゞ現實界からは寄生蟲のやうに扱はれる無勢力の人々で、精神界と現實界とはいつまでも相離して、没交渉で、我は我たり汝は汝たりでさッさと推移つて行く。

さて果敢ないのは一旦精神界へ足を踏み入れた人の末路で、初めの心は大層皆さん氣樂さうに見える。多くは銘々に讀んだ書物の感化を受けて、それぞれ理想を作り上げて、それにあこがれて騒いでござるやうであるが、しかしそれは一時で、永い目で見てゐると、終まで理想に憧れ通す人は澤山はない。大抵はひどく輕蔑してござる生活の條件といふやつに、からめられて、も少し具體的に言へば、金に困つて自滅して了ふか、さもなければいつの間にか現實界の人となつて終に露命を繋いでござる。すると又後から同じやうな人が何處からともなく出て來て、同じやうな順序を踏んで、所謂精神界を形作つて、同じやうな末路に凋落するから、いつまでも精神界の消滅することもあるまい。又仔細に觀ればいろいろの事情で其間に一盛一衰もあらうけれど、要するに精神界はいつまでも精神界、物質界は何處までも物質界で、其間に何の交渉もなく、喩へば有つても無いに等しい程のものであるとすれば、文學界も宗教界も實世界と無關係で進むとすれば、これで好いものであるが、

僕の見る所では、今日の實世間を動かして行くものは、普通に精神界といふ文學界でもなければ宗教界でもなく、今日の實世間と表裏して存する所の別の精神界である。この精神界こそ今日の社會の原動力で、皆之に由つて活動してゐるので、我々の謂ふ精神界のやうに高尚でないかも知れぬが、其代り偏臭くも哲學臭くもなく、極めて活潑な、生氣の充滿したものである。此精神界を支配する傾向は即ち時代思潮で、非常な勢力を有つてゐる。それを學者批評家達が精神界とさへ云へば直ぐ藝術とか哲學とか云ふのは間違つてゐる。實世間を動かして行く精神は時代の好尚を示す藝術、形而上問題を扱ふ哲學以外に儼として存してゐる。少くも今の日本ではさうである。

で今日の此活精神界を支配する傾向は何であるかと云ふと、學者批評家達は直ぐ金力だといふ。しかしこれは皮相の見だ。金力は實力の標號として崇拜するので、金力を崇拜するのは實力を崇拜する所以である。實力は個人に

在つては個人の慾、社會に在つては社會の要求を滿足せしむる所以のものである。然らば個人の慾、社會の要求といふものは何であるかといふと畢竟幸福に外ならぬ。社會に在つては矢張最多數の最大幸福、個人に在つては出來るだけ多くの幸福といふのが標準である。而して其幸福といふのは物質上の滿足と謂つてもよいが、詳しく言へば物質の充實に關聯する精神の滿足である。唯物質の充實を喜ぶのではない、物質充實せざれば精神上の滿足を得られないが普通の事で、物質不足に拘らず精神上の滿足を得られるのは寧ろ例外に屬するから、それで物質の充實に對して精神の滿足を求めるので、此希望の要求する人物は高尙でないでもよいが、着實で、理屈なんどは乏しいとも活氣に富んで、理を辨析する智はなくとも、事を處する才幹と膽氣とに富んだ人物、要するに行爲の人として適當な人物を求むるのである。エマーソンの言つたやうに英雄には思想の雄と情感の雄と行爲の雄との區別があるから、行爲を生命とする今日の活動社會は行爲の雄を求むること急であるが、それを求むる標準こそは即ち時代精神を結晶したもので、尤も研究に價するものであるのに、文學家批評家等の之を等閑に付するは甚だ心得ぬ。

余が飜譯の標準

飜譯は如何樣にすべきものか、其標準は人に依つて各異らうから、もとより一概に云ふことは出來ぬ。されば、自分は、自分が從來やつて來た方法について述べることとする。一體、歐文は唯だ讀むと何でもないが、よく味うて見ると、自ら一種の音調があつて、聲を出して讀むと抑揚が整うてゐる。即ち音樂的である。だから、人が讀むのを聞いてゐても仲々に面白い。實際文章の意味は、默讀した方がよく分るけれど、自分の覺束ない知識で十分に分らぬ所も、聲を出して讀むと面白く感ぜられる。これは確かに歐文の一特質である。

處が、日本の文章にはこの調子がない。一體にだら〳〵して、默讀するには差支へないが、聲を出して讀むと頗る單調だ。啻に抑揚などが明らかでないのみか、元來讀み方が出來てゐないのだから、聲を出して讀むには不適當である。

けれども、苟くも外國文を飜譯しようとするからには、必ずその文調をも移さねばならぬと、これが自分が飜譯をするについて、先づ形の上の標準とした一つであつた。

そこで、コンマやピリオドの切り方などを研究すると、早速目に着いたのは、句を重ねて同じことを云ふことである。一例を擧ぐれば、マコーレーの文章などによくある in spite of の如きはそれだ。意味から云へば、二つとか三つとか、もしくは四つとかで十分であるものを、音調の關係からもう一つ云ひ添へるといふことがある。併し意味は既に云ひ盡してあるし、もとより意味の違つたことを書く譯には行かぬから仕方なしに重複した餘計のことを云ふ。

これは語の上にもあることで、日本語の「やたらむしやうに」などはその一例である。或は、「強く嚴しく彼を責めた」とか、或は、「優しく角立たぬやうに說得した」とか云ふ類は、屢々歐文に見る同一例である。これらは凡て文章の意味を明らかにする以外、音調の關係からして、副詞を入れたいから入れたり、二つで十分に足りてゐる形容詞をも、一つ加へて三つとしたりするのである。コンマの切り方なども、單に意味の上から切るばかりでなく、文調の關係から切る場合が少くない。

されば、外國文を飜譯する場合に、意味はか

りを考へて、これに重きを置くと原文をこはす虞がある。須らく原文の音調を呑み込んで、それを移すやうにせねばならぬと、から自分は信じたので、原文にコンマ、ピリオドの一つをも濫りに棄てず、原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、譯文にも亦ピリオドが一つコンマが三つといふ風にして、原文の調子を移さうとした。殊に飜譯を爲始めた頃は、語數も原文と同じくし、形をも崩すことなく、偏へに原文の音調を移すのを目的として、形の上に大變苦勞したのだが、さて實際はなか／＼思ふやうに行かぬ。中にはどうしても自分の標準に合はすことの出來ぬものもあつた。で、自分は自分の標準に依つて譯する丈けの手腕がないものと諦めても見たが、併しそれは決して本意ではなかつたので、其後とても長く形の上には、此方針を取つてをつた。

處で出來上つた結果はどうか、自分の譯文を取つて見ると、いや實に讀みづらい、佶屈聱牙だ。ぎくしやくして如何にとも出來えが惡い。從つて世間の評判も惡い。偶々賞美して呉れた者もあつたけれど、おしなべて非難の聲が多かつた。併し、私が苦心をした結果、出來損つたといふ心持を呑み込んで、此處が失敗してゐると指摘した者はなく、また、此處は何の位まで成功したと見て呉れた者もなかつた。だから、譽められても標準に無交渉なので嬉しくもなければ、譏られても見當違ひだから、何の啓發される所もなかつた。いはゞ、自分で獨り角力を取つてゐたので、實際毀譽褒貶以外に超然として、唯だ或る點に目を着けて苦勞をしてゐたのである。といふのは、文學に對する尊敬の念が強かつたので、例へばツルゲーネフが其作をする時の心持は、非常に神聖なものであるから、これを飜譯するにも同樣に神聖でなければならぬ。就ては、一字一句と雖も、大切にせなければならぬやうに信じたのである。

併し乍ら、元來文章の形は自ら其人の詩想に依つて異なるので、ツルゲーネフにはツルゲーネフの文體があり、トルストイにはトルストイの文體がある。其他凡そ一家をなせる者には各獨特の文體がある。この事は日本でも支那でも同じことで、文體は其人の詩想と密着の關係を有し、文調は各自に異つてゐる。從つてこれを飜譯するに方つても或る一種の文體を以て何人にでも當て嵌める譯には行かぬ。ツルゲーネフはツルゲーネフ、ゴルキーはゴルキーと、各別にその詩想を會得して、嚴しく云へば、行住坐臥、心身を原作者の儘にして、忠實に其詩想を移す位でなければならぬ。是れ實に飜譯における根本的必要條件である。

今、實例をツルゲーネフに取つてこれを云へば、彼の詩想は秋や冬の相ではない、春の相である。春も初春でもなければ中春でもない、晩春の相である。丁度櫻花が爛漫と咲き亂れて、稍々散り初めようといふ所だ。遠く霞んだ中空に、美しくおぼろ／＼とした春の月が照つてゐる晩を、兩側に櫻の植ゑられた細い路を辿るやうな趣がある。約言すれば、艷麗の中にどつか寂しい所のあるのが、ツルゲーネフの詩想である。そして、其當然の結果として、彼の小說には全體に其氣が行き渡つてゐるのだから、これを飜譯するには其心持を失はないやうに、常に其人になつて書いて行かぬと、往々にして文調にそぐはなくなる。此際に在つては、徒らにコンマやピリオド、又は其他の形にばかり拘泥してゐてはいけない。先づ根本たる詩想をよく呑み込んで、然る後、詩形を崩さずに飜譯するやうにせなければならぬ。

實際自分がツルゲーネフを飜譯する時は、力めて其詩想を忘れず、眞に自分自身其詩想に同化してやる心算であつた。だが、どうも旨く成

功しなかつた。成功しなかつたとは云へ、標準は矢張其處にあつたのである。唯だ、自分が其間に挿むで考へて見ると、一體、自分の立てた標準に法つて翻譯することは、必ずしも出來ぬと斷言はされぬかも知れぬが、少くとも自分に取つては六ケしいやり方であると思つた。何故といふに、第一自分には日本の文章がよく書けない、日本の文章よりはロシアの文章の方がよく分るやうな氣がする位で、即ち原文を味ひ得る力はあるが、これをリプロヂュースする力が伴うてをらないのだ。

で、外に飜譯の方法はないものかと種々研究して見ると、ヂュコーフスキー一流のやり方が面白いと思はれた。ヂュコーフスキーはロシアの詩人であるが、寧ろ飜譯家として名を成してゐる。バイロンを多く譯してゐるが、それが妙に巧い。尤も當時のロシアは、其社會狀態が小バイロンを盛んに生んだ時代で、殊にジュコーフスキーの如きは、鐵中錚々たるものであつたから、求めずしてバイロンの詩想と合致するを得て、大に成功したのかも知れぬが、兎に角其譯文は立派なロシア文となつてゐる。

けれども、これをバイロンの原詩と比べて見ると、其言ひ方が大變違ふ、原文の仄起を平起としたり、平起を仄起としたり、原文の韻のあるのを無韻にしたり、或は原文にない形容詞や副詞を附けて、勝手に剪裁してゐる。即ち多くは原文を全く崩して、自分勝手の詩形とし、唯だ意味だけを譯してゐる。處が其兩者を讀み比べて見るとどうであらう。英文は元來自分には少しおかつたるい方だから、餘り大口を利く譯には行かぬが、兎に角原詩よりも譯の方が、趣味も詩想もよく分る、原文では十遍讀んでも分らぬのが、譯の方では一度で種々の美所が分つて來る。しかも其イムプレッションを考へて見ると、如何にもバイロン的だ。即ちこれを要するに、覺束ない英語でバイロンを味ふよりは、ジュコーフスキーの譯を讀む方が勞少くして得る所が多いのである。

其處で自分は考へた、飜譯はかうせねば成功せまい、自分のやり方では、形に拘泥するの結果、筆力が形に縛られるから、讀みづらく窮屈になる。これは宜しくジュコーフスキーの如く、形は全く別にして、唯だ原作に含まれたる詩想を發揮する方がよい。とかうは思つたものの、さて自分は臆病だ、そんならと云うてこれを決行する事が出來なかつた。何故かと云ふに、ジュコーフスキー流にやるには、自分に十分の筆力があつて、よしや原詩を崩しても、その詩想に新詩形を附することが出來なくてはならぬのだが、自分にはこの筆力が覺束ないと思はれたからだ。從來やり來つた飜譯法で見ると、よし成功はしない乍らも、形は原文に提つてゐるのだから、非常にやり損ふことがない。けれども、ジュコーフスキー流にやると、成功すれば光彩燦然たる者であるが、もし失敗したが最後、これほど見じめなものはないのだから、餘程自分の手腕を信ずる念がないとやりきれぬ。自分はさすがにそれほど大膽ではなかつたので、どうも險呑に思はれて斷行し得なかつた。で、依然舊飜譯法でやつてゐたが

併しそれは以前自分が真面目な頭で、飜譯に從事した頃のことである。近頃のは、いやもうお話にならない。

エスペラントの話

エスペラントの話を聽きたい、よろしい、やりませう。しかし先月の事だ、彩雲閣から世界語といふ謂はゞエスペラントの手ほどきやうなものを出した、あの本の例言に一通り書いて

置いたが、讀んで下すつたか。え、まだ讀まない、困つたねえ、ぢや仕方がない、少し重複になるが、由來からお話しませう。と云つて何も六かしい由來がある譯ではないが、詰り必要は發明の母ですね、エスペラントの發明されたのも畢竟必要に促されたに外ならんので、昔から世界通用語の必要は世界の人が皆感じてゐた、で、或は電信の符號のやうなものを作つて、○と見たら英人はサンと思へ、獨逸人はゾンネと思へさ、ね、日本人なら太陽と讀めと云つたやうな說もあつたが、そんな無理な事は到底行はれん。そこで、現在の各國に國語中一番弘く行はれてゐる英語とか佛語とかを採つて國際語にしたらといふ說も出たが、これも黨が多くて困る、成程英語が國際語になつたら英人には都合が好からうが夫では他の國民が迷惑する。佛語でも獨逸語でも其通り、夫に各國人皆それ〳〵に自尊心といふものが有るから、餘所の國の言葉が國際語になつては承知せん、何でも自分の國の言葉を採用しろと主張する、到底も相談の纏まる見込はない、そこで是はどうでも何か新しい言語を作つて、それを一般に行ふより外手段はないとなつて諸國の學者は此方面でいろ〳〵工夫してゐる中に、千八百八十二年といへば明治十二年に當りますかね、其年にウォラビュックといふ新發明の國際語が出來た、かの符號などから視れば餘程氣が利いてゐるけれど、惜しい事には餘り人爲的で、細工に過ぎてゐて之を人情風俗の違ふ各國人の口へ掛けたら、どうやら支離滅裂になつて了ひさうで、どうも申分が多いが、外に之に代るべきものもないから、一時は相應に研究する者もあつた、我國でも讀賣新聞が其文法を飜譯して附錄にして出したことがあるから或は研究した人もあるでせう、しかし何國でも未だ弘く行はれるといふ程に行かぬ中、千八百八十七年、卽ち明治十八年になりますかな、其年の末に初めて所謂エスペラントが世に公にせられた。之は露國ワルソウの人だから詰り波蘭人だ、其波蘭人のドクトル、ザメンコフといふ人の發明で、かのウォラビュックなどから視ると、遙かに自然的で無理が少いから、忽ちの中に非常な勢で諸國に弘まつた。今では世界中で亞細亞や阿弗利加を除いては到る處にエスペラント協會が出來てゐて、其敎科書は各國語に飜譯されてある。私が初て浦潮斯德でポストニコフといふ人からエスペラント語を習つた時にも、同氏から此語が歐米で盛に研究されつゝある話を聽いたことがあつたが、當時は仔細あつて私の心は彼に在つて此に無しといふ有樣で、好加減に閑流して置いたが、其後北京へ行つて暫く逗留してゐると、或日巴里から手紙が來た、巴里に知人はないがと怪しみながら封を切つて見ると、エスペラント語で日本に於けるエスペラント流布の狀況が聞きたいといふ意味の事が書いてある。署名は佛人の名だが一向知らない人だ。さてはエスペラント協會員だなと心附いたから、日本では一向まだ駄目だといふ返事を出して置いたが、戰爭前歸朝すると間もなく又墨西哥の未知の人から矢張エスペラント語で繪葉書の交換を申込んで來た、成程敎科書は西班牙語にも飜譯されてあるから墨西哥にエスペランチストのあるに不思議はないが、それでも其葉書を手にした時には、實に意外の感に打たれましたよ、といふものでエスペラントは今では思ひ掛けない處にまで弘まつてゐるから、エスペラントは確かに世界通用語になりつゝあるものと謂つてよろしい。安孫子君の報道でみると、倫敦の商業會議所ではエスペラントを書記の必須科目にしてゐるさうだ、又黑板博士の話では倫敦の或るステーションにはエスペラントのガイドが居ると云ふ、かれこれ思ひ合せればエスペラントは或一部の人の想

像するやうなユートピヤではない、既に世界の人から國際語として存在の價値あることを認められて現に應用されつゝあるものだ。

發明後僅か三十年經つか經たぬ中に此通り弘まつたのは、一方から言へば人間の交通が益々頻繁になつて世界通用語の必要が切に感ぜられることを證據立てると同時に、一方に於てはエスペラントなるものが此需要を滿足する恰好の言語であることを證據立てるとまあいふべきでせう。まあ試みにやつて御覽、それは造作もないものだ。文法は僅か十六則で、語根が一千語内外、それはあの「世界語」の終に載せた字書に殘らず收まつてゐるから、あの字書さへあれば、十六則の文法を便りにして、一寸本も讀めれば、會話も出來、手紙もかける、格別研究する必要もない位のものだ。論より證據といふ私は浦潮でポストニコフといふ人から習つたと云つても唯アルファベットの讀み方を教へて貰つただけの事で其外何も習つたのでない、而もアルファベットも習ひ放しで、いろ〳〵忙がしかつたものだから、教科書は鞄の中へ放り込んだ儘、ツイ窺いてみた事もなかつたが、北京で佛人の手紙が屆いた時、字引を引き〳〵讀んでみると、造作もなく分つた、分る事は分つたが返事が書けるかしらと、何しても此時初めてエスペラント語で書いたものを讀んで見たのだから、内々危ぶみつゝ文法を讀み〳〵、字引を繰り〳〵やつてみると、手紙も亦造作もなく書けた、尤も餘り名文でもなかつたかも知れぬが、兎に角意味の通じる程には書けた積りだ。これは私ばかりではない誰でも然うなので現に此間も去る友人から「世界語」を一部送つて呉れろと言つて來たから送つてやると、直ぐエスペラントで小版三頁程の手紙を寄越した、尤も此友人は倫敦に永く居た人で英文に堪能である所爲もあらうが、仲々巧く書いてある、而してその言草が好いぢやないか、エスペラントの容易しいのには驚いたトかうだ。が、實際その通りで驚く程容易しい、此通り誰でも研究といふ程の研究はせずとも、文法の十六則に一通り目を通しさへすれば、一寸文章も書ける。こんな容易しい言語が世の中に又と有らうと思へぬ。さう容易しくては複雜な思想は言顯せまいと思ふ人もあらうが、ところが然うでない、かの「世界語」の終りに載せた世界語既刊書目を見ても分るが、既にシェークスピヤのハムレットもエスペラントの飜譯になつてゐる、ヂッケンスのクリスマス・キャロルも飜譯になつてゐる、ハイネ、ゲーテの詩も飜譯されてある、バイロンも、プーシキンも、トルストイもシェンキーウヰチも飜譯されてある、私が曾て菊心と署名して四日間といふガルシンのスケッチを反譯して新小說に出したことがあるが、あんなものまで最う反譯されてある。是は皆美文だが、哲學書にしてもライブニッツのモナドロギイが反譯になつてゐる位だから、凡そ今の人間の言語で言顯す事は、どんな事でもエスペラントで言はれぬといふことはない、それでゐて殆ど研究といふ程の研究をせんでも分るのだから、それから推してもエスペラントの將來は實に多望だ。十年二十年と經つたら、今より數十倍應用の範圍が弘まり、五十年も經つたら、各國の小學校の必須科目になるかも知れん、現に既に必須科目にしてゐる地方もある位だから、そりや然ういふことになるかも知れん、私はエスペラントの將來に就いては大のオプチミストだ。

また〳〵エスペラントに就いては大分言ひたい事がある、世間は今では日本にも大分弘まつてゐるやうではあるが、しかしまだ〳〵知らない人も多いだらうからさういふ謂はゞ外國語を習ひ後れた人には、是非エスペラントを勸めたい、それから英語なり獨逸語なり、現在の外

國語になると、何程手に入つたといつても、書いたものを直ぐ出版するといふことの出來る人は少からう、多くは是非一度英人なり獨逸人なりに筆を入れて貰はなければ、安心して出版は出來まい、ところがエスペラントは何國の言葉といふのでないから、同じ文法に依つて、同じ言葉を使ひながら、各國皆其スタイルが違ふやうだ、例へば英人は英語を、獨逸人は獨逸語を、佛人は佛語をそれ〴〵エスペラントに引直して用ゐるから、英人のエスペラントには英語の臭味があり佛人は佛語、獨逸人は獨逸語の臭味がある。だから日本のエスペラントは日本語の臭味があつたとて一向差支ないと思ふ。これは非常に都合の好い話だから、願はくば多數の力でエスペラントの日本式スタイルを作つて、日本語の精神でエスペラントを使つて世界の人を相手にドシ〳〵著作の出來るやうにしたい。此外まだ言ひたい事は澤山あるけれど、まあ、此位で止めて置かう。

小說の題のつけ方

いや、題には毎時も困らせられる、人には相談を掛けたりなんぞするが、つまる所好い題が付かない。と云ふのは何か自分で註文を付けるから然うむづかしくなるんだ。

併しそいつが何だか自分でも變で……矢張その時は色々な心持を持つてゐる。今度の「平凡」なぞ全く平凡だ。あゝ投げて了つて味も趣も添へんでも關はぬといふなら、そりや造作も無いけれども、そこに何か味を出さうと思ふことがある。すると一つの註文が出た譯だから、さて其奴に嵌まるやうな題はなか〳〵見付からんて。

今迄一番苦心して、到頭その苦心が成功せずにしまつたのは「其面影」だ。一體私は題を附ける時には始終色々な昔の題なんぞを調べて掛るのだが、あの時にも標準があつた。それは「ばらばら傘」といふので、成美の、たしか句集だと覺えてゐる。此奴が實に面白い、いかにも垢拔けがしてゐて、もう俳句の題に違ひ無いて。――俗でなく、雅でなく、ネチ〳〵した所がなく、サラリとした所があつて……ま、その時はそれが非常に氣に入つて了つたから、一つ負けない氣になつて垢拔けのした、サラリとした題を附け度いと思つた。と云つて成美の「ばら〳〵傘」は何の理由でさう附けたのか知らぬが、丸きり小說に縁のないことを附ける譯にも行かず、いや、散々に悶えたね。それで内田君が相談相手だつたから、色々な題を持出して見るけれども取合つて呉れず、皆な否決さ。「其面影」なんぞは格別どうといふこともなく、或は古い所にあるかも知らぬが、まアこんな所で我慢する外仕方がないと斷念めて、然う定めて了つた。俳諧もさうだが、端唄なんぞにもなか〳〵好いのがある。併しどうも不可……どうも巧く題に引込むことが出來ない。

また題を附ける時に斯ういふことも考へた。人の附けるのを見ると、小栗君のは「天才」とか「青春」とか云ふ題、あれは皆な今の文壇向きで、青年の頭に嵌りさうな題ばかりだ。從つて何處かハイカラ趣味がある。あれも惡くないと思ふ。これを俳諧語で云へば、所謂不易の題でなくて流行の題、一寸今の時節に向くやうな所がある。だから中の小說も自らホワイトローズや絹のハンカチの匂ひがしさうだ。あれもまた結構。

が、私は題では毎時も目的を達しないのでね。その度びに敬服するのは紅葉さんだ。紅葉山人は巧いもんだ。「多情多恨」なぞ餘り感服せぬが、「隣の女」は好い。俳諧趣味によく據つて

ゐる。私の希望もあんな所を狙つて而も一度も目的を達しない。で、近頃では投げて了つた。題の趣味はなか／＼有るものだとは思ふが、到底自分の經驗ぢや思ふやうに付かん。先づ／＼内容に相當した平凡の題で滿足して、然はかゝぬつもりだ。

全く題にはよく附け倦むことがあるよ。「片戀」なぞにはもう非常に附け倦んだ。誰かの評に「ありや片戀ぢやなくて雙方の戀ぢやないか」とあつた。そりや穩健な說ぢやあるが、實際私の身になると實に大骨を折つたものだ。それに彼を誰でも雙戀の仲と見るが、私だけは然うでない。何處までも片戀と見る。で「片戀」といふ題は平凡でも、不滿足ながら平凡な題以外に味を附けて、私の意見を示さうと思つたのだ。これは「兩方の戀」と附けるよりは優しと思つて附けたのだ。こゝらが凝つては思案に能はずで、終には無理なことに成るのである。

あの作がどうして片戀だと訊くのかい？　さうさ片戀さ。今から見れば多少牽強附會かも知らぬが……戀といふものはあんなものぢやないと思ふ。元來ツルゲーネフは戀の（戀ばかりぢやない・凡てがさうだが極く淺い處ばかりを描いて、深く穿込むことをせぬが、あれなんぞは殊に御坊さんのやうなもので、女の方こそ戀の眞の境に入つたかも知らぬが、男は入つちや居らぬ。たゞアーシャといふ女が見えなくなつてから、男も眞の戀を感じたと、作者も讀者も受取るらしいけれども、私は「逃げた鯉が大きい」ぐらゐに過ぎないと思ふね。なるほど一方の女の戀は熱烈なものだつたらう、が、男の心にはたゞその反響が響いただけで、男自身の心から起つた痕跡といふものが何うしても見えない。そりや多少女に心を惹かれた所は有る。併しあの男は普通の感情を有つた普通の男で、作者も別段彼に性格を附しては居らぬ。あゝ云つた愛を露西亞では「フヒロソヒカル・ラブ」と云ひ、誰にも通ずるラブとしてある。即ち普通の感情を有つた普通の男としたならば、自分は惚れてゐなくとも、えらい眞面目な考へがないとしても、往來を通つて秋波を寄せられゝば吃度心は惹かれるに違ひない。況んやその女が自分を愛してゐるとすれば尚更だ。だが心を惹かれるのと戀するのとは千里萬里の差異がある。有ればこそあんな頓珍漢が起つたらうと思ふ。始終頓珍漢だ。で、一番終ひに感慨を述べてる所があるね。「今だに忘れない」と、忘れないと云ふけれども最初「アーシャのやうな女を妻にしたならば不幸かも知れぬと思つて尋ねない」云々と書いてあるぢやないか。作者の心持はどうか解らんが、あの口上は全體初めから男の心の底に潛んでゐたものだ。――アーシャのやうな女を妻に持つては不幸だと、こりや普通の者の感じだ。女の境遇を見れば同情は起る、そんなら妻にするかと云へば然うは行かないと來る。こんなのが雙方の戀で堪るものか、やつぱり片戀さね。

この考へは或は片戀の讀者には妙に受取られるかも知らぬが、そこがソレ、自分の意見を述べようとしたから附けて了つたんだ。併しね、實際の所を白狀すれば、平凡な題を附けたくなかつた餘り、幾らかそんな意見を生み出した傾きがあるかも知らぬ。

外國の作家は一向題には注意せぬやうに思ふ。やはり平凡な題ばかりだ。中には一寸奇拔なのもあるが、日本人の題のやうに趣味を持たない。日本人と云つても俳諧趣味だな、題の趣味は、俳句でもやる人でなけりや題の趣味は餘り無いやうだが――露西亞の作家の題でも、ちつともこれはと感服するのは無い。少し奇拔だと思ふのは、チェルヌイシェーフスキーといふ作家、これは露のソシアリストの方では有名な

人で、この人が文藝上の作物とは云へぬが、主に自分の主義を書いた作に露語で「シトー・チェーラチ」といふのがある。譯したら、「何を爲すべきか」とも云はうかな。こりや當時の人心の傾向を一句に取り集めた傾きがある。皆な如何して好いか解らずに迷つてる、その有樣を一句に取つたんだから社會的の題としては一寸奇抜だ。「シトー・チェーラチ」その言葉は平凡なものだが、平凡の使ひやうが面白かつたといふくらゐなものだらうね。

ツルゲーネフの作を飜譯する時には、元來が趣味の多い作だから、題もそれに匹敵したものをと思ふことがあるが、ゴルキーにたつちや、內容があゝいふ風だから、趣味のある題なざ却つて拙い。いつかの「二狂人」あれも寧そ「二人狂亂」とでもした方が好いかも知らぬが、二人狂亂では何だか兩花道から所作事でもつて躍つて出さうで變だから、矢張「二狂人」として了つた。何ちかと云や、ゴルキーの方が骨が折れない。

今度の「平凡」の謂れかね、そりや作の中に說明してあるから止さう。だが平凡といふことは私は好きだ。どうも「非凡」は嫌ひで癪に觸つて堪らない。平凡は私の住家だと思ふ。そりや何もあの題を附けるに大した意味があつた譯でもないが、所謂非凡といふことに反抗した心持も多少は有る。

余が言文一致の由來

言文一致に就いての意見、と、そんな大した研究はまだしてないから、寧ろ一つ懺悔話をしよう。それは、自分が初めて言文一致を書いた由來——も淒まじいが、つまり、文章が書けないから始まつたといふ一伍一什の顚末さ。

もう何年ばかりになるか知らん、餘程前のことだ。何か一つ書いて見たいとは思つたが、元來の文章下手で皆目方角が分らぬ。そこで、坪內先生の許へ行つて、何うしたらよからうかと話して見ると、君は圓朝の落語を知つてゐよう、あの圓朝の落語通りに書いて見たら何うかといふ。

で、仰せの儘にやつて見た。所が自分は東京者であるからいふ迄もなく東京辯だ。即ち東京辯の作物が一つ出來た譯だ。早速、先生の許へ持つて行くと、篤と目を通して居られたが、忽ち礑と膝を打つて、これでいゝ、その儘でいい、生じつか直したりなんぞせぬ方がいゝ、とかう仰有る。

自分は少し氣味が惡かつたが、いゝと云ふのを怒る譯にも行かず、と云ふものゝ、內心少しは嬉しくもあつたさ。それは兎に角、圓朝ばりであるから無論言文一致體にはなつてゐるが、茲にまだ問題がある。それは「私が……で厶います」調にしたものか、それとも、「俺はいやだ」調で行つたものかと云ふことだ。坪內先生は敬語のない方がいゝと云ふお說である。自分は不服の點もないではなかつたが、直して貰はうとまで思つてゐる先生の仰有る事ではあり、先づ兎も角もと、敬語なしでやつて見た。これが自分の言文一致を書き初めた抑もである。

暫くすると、山田美妙君の言文一致が發表された。見ると、「私は……です」の敬語調で、自分とは別派である。即ち自分は「だ」主義、山田君は「です」主義だ。後で聞いて見ると、山田君は初め敬語なしの「だ」調を試みて見たが、どうも旨く行かぬと云ふので「です」調に定めたといふ。自分は初め、「です」調でやらうかと思つて、遂に「だ」調にした。即ち行き方が全然反對であつたのだ。

けれども、自分には元來文章の素養がない

から、動もすれば俗になる、突拍子もねえことを云ふやあがる的になる。坪内先生はもう少し上品にしなくちやいけぬといふ。徳富さんは（其頃國民之友に書いたことがあつたから文章にした方がよいと云ふけれども、自分は兩先生の説に不服であつた、と云ふのは、自分の規則が、國民語の資格を得てゐない漢語は使はない、例へば、行儀作法といふ語は、もとは漢語であつたらうが、今は日本語だ、これはいゝ。併し擧止閑雅といふ語は、まだ日本語の洗禮を受けてゐないから、これはいけない。磊落といふ語も、さつぱりしたと云ふ意味ならば、日本語だが、石が轉つてゐるといふ意味ならば日本語ではない。日本語にならぬ漢語は、すべて使はないといふのが自分の規則であつた。日本語でも、侍る的のものは已に一生涯の役目を終つたものであるから使はない。どこまでも今の言葉を使つて、自然の發達に任せ、やがて花の咲き、實の結ぶのを待つとする。支那文や和文を強ひてこね合せようとするのは無駄である、人間の私意でどうなるもんかといふ考へであつたから、さあ馬鹿な苦しみをやつた。

成語、熟語、凡て取らない。僅に參考にしたものは、式亭三馬の作中にある所謂深川言葉といふ奴だ。「べらぼうめ、南瓜畑に落こちた凧ぢやあるめえし、乙うひつからんだことを云ひなさんな」とか、「井戸の釣瓶ぢやあるめえし、上げたり下げたりして貰ふめえぜえ」とか、「紙幟の鍾馗といふもめツけへした中揚底で折がわりい」とか、乃至は、腹は北山しぐれの、「何で有馬の人形筆」のといつた類で、いかにも下品であるが、併しポエチカルだ。俗語の精神は茲に存するのだと信じたので、これだけは多少便りにしたが、外には何にもない。尤も西洋の文法を取りこまうといふ氣はあつたのだが、それは言葉の使ひざまとは違ふ。

當時、坪内先生は少し美文素を取り込めといはれたが、自分はそれが嫌ひであつた。否寧ろ美文素の入つて來るのを排斥しようと力めたといつた方が適切かも知れぬ。そして自分は、有り觸れた言葉をエラボレートしようとかゝつたのだが、併しこれはとう〳〵不成功に終つた。恐らく誰がやつても不成功に終るであらうと思ふ、仲々困難だからね。自分はかうして詰らぬ無駄骨を折つたものだが……。

思へばそれも或る時期以前のことだ。今かい、今はね、坪内先生の主義に降參して、和文にも漢文にも留學中だよ。

私は懷疑派だ

私は筆を執つても一向氣乘りが爲ぬ。どうもくだらなくて仕方がない。「平凡」なんて、あれは試驗をやつて見たのだね。ところが題材の取り方が不十分だつたから、試驗もとう〳〵達しなくつて了つた。十分に達しなかつたといふのはサタイアになつたからだ。その意ではなかつたのが、どうしても諷刺になつて了つた。

「其面影」の時には生人形を拵へるといふのが自分で付けた註文で、もと〳〵人間を活かさうといふのだから、自然性格に重きを置いたんだが、今度の「平凡」と來ちや、人間其ものの性格なんざ眼中に無いんさ。丸つきり無い譯ではないが、性格はまア第二義に落ちて、それ以外に睨んでゐたものがある。一言すれば、それは色々の人が人生に對する態度だな……人間そのものでなくて、人間が人生に對する態度……といふと何だか言葉を弄するやうな嫌ひがあるが、つまり具體的の一個の人ぢやなくて、ある一種の人が人生に對する態度だ。而してその一種の人とは即ち文學者……必ずしも今の文學

者ばかりぢやなく、凡そ人間在つて以來の文學者といふ意味も幾らか含ませたつもりだ。だから今度の作では那樣關係ばかりを眼に見てゐて、人間を活躍させようなんぞといふ氣もなけりや、從つて活躍もしなかつた。これが「其面影」と「平凡」とを創作した時の、私の態度の違ひさ。

だが、要するに、書いてゐてまことにくだらない。子供が戰爭ごつこをやつたり、飯事をやる、丁度さう云つた心持だ。そりや私の技倆が不足な故もあらうが併しどんなに技倆が優れてゐたからつて、眞實の事は書ける筈がないよ。よし自分の頭には解つてゐても、それを口にし文にする時にはどうしても間違つて來る、眞實の事はなか／＼出ない。髣髴として解るのは、各自の一生涯を見たらばその上に幾らか現はれて來るので、小說の上ぢや到底僞つぱちより外書けん。と斯う頭から極めに掛つてゐる所があるから、私にや彌々眞劍にやなれない。

併しながら、斯う云ふと、私一人を以て凡ての人を律するやうに取られるかも知らんが、さう云ふ心持でもないんだ。私一人がいけないんだね。たゞ自分がさういふ心持で、筆を持つちやどうして、眞劍になれんから、なれるといふ人の心持が想像されない。眞の文學者の心持が解らん。だから眞劍になれるといふ人があれば私は疑ふ。が、單に疑ふだけで、決してその心持にやなれぬと斷定するまでの信念を持つてゐる譯でもない。雖然どう考へても、例へば此間盜賊に白刃を持つて追掛けられて怖かつたと云ふ時にや、其人は眞實に怖くはないのだ、怖いのは眞實に追掛けられてゐる最中なので、追想して話す時にや既に怖さは餘程失せてゐる。こりや誰でもさうなきやならんやうに思ふ。私も同じ事で、直接の實感でなけりや眞劍になるわけには行かん。ところが小說を書いたり何かする時にや、この直接の實感といふ奴が起つて來ない。人生に對するのが盜賊に追はれた時の心持になつて了ふ。議論から考へて見ると、人生といふものが何も具體的にそこに轉がつてゐる譯ぢやない。斯うやつて御互に坐つてゐるのも亦人生に漬つてゐるのだから、人生に對する感じを持たれぬといふ筈もない。だから追想とか空想とかで作の出來る人ならば兎も角、私にやどうしても書きながら實感が起らぬから眞劍になれない。古い說かも知らんが私の知つてる限りぢや、今迄の美學者も實感を藝術の眞髓とはせず、空想が即ち本體であるとしてゐる。この空想とは、例の賊に追はれたことを後から追懷する奴なんだ。さうすると小說は第二義のもので、第一義のものぢやなくなつて來る。否、小說ばかりぢやない、一體の人生觀といふ奴が私にや然う思へるんだよ……思へると云ふと語弊があるが、那樣氣がするのだ。どうも莫迦々々しくてね。だから作をする時にや、精神は非常に緊張させるけれども、心には遊びがある。丁度、擊劍で丁々と擊合つては居るが、つまり眞劍勝負ぢやない、その心持と同じ事だ。こんな風だから、他人は作をしてゐねば生活が無意味だといふが、私は作をしてゐれば無意味だ、して居らんと大に有意味になる。この相違を來すにや何か相當の原因が無くばなるまい。

私は二十世紀の文明は皆な無意義になるんぢやないかと思ふ。何と云つても今はまだレフレクションの影響を免がれてゐない。十九世紀で暴威を逞くした思索の奴隸になつてゐたんで、それを彌々脫却する機會に近づいてゐるらしく見える。新理想とか何とか云ひ出すな、まだレフレクションに捉はれてる證據さ。併しさすがに以前の理想では滿足出來ん所から、新

理想主義になつて來たんだ。文學の方で最近の傾向はシンボリズムとか、ミスチシズムとか云ふのだが、イズムの中に彷徨いてる間は未だ駄目だね。象徵主義で云ふ靈肉一致も思想だけで、眞實一致はして居らんぢやないか。で、私は露語の所謂、ストリヤツフヌスト(身震ひする)と云つたやうな時代……つまりこびり着いて居る思想の血を拂つて、新な淸い生活に入らうとする過渡の時代のやうに今を思ふ。思想ぢや人生の意義は解らんといふ結論までにや疾くに達してゐるくせに、まだ〳〵思想に未練を殘して、やはり其から蟬脫することが出來ずに居るのが今の有樣だ。文學が精神的の人物の活動だといふが、その「精神」が何となく難有く見えるのは、その餘弊を受けて居るんで、靈肉一致どころぢやない、よほど靈が勝つてる證據だ。だからシムボリストでも、思想では靈肉一致だらうが自分の存在では未だ其處までは行つて居らんよ。そんなら行き着いた先きは何うなるかと云ふに、そりや想像は一寸付かん。第二義から第一義に行つて靈も肉も無い……文學が高尙でも何でも無くなる境涯に入れば、偖てどうなるかと云ふに、それは私だけにや大概の見當は付いてゐるやうにも思はれるが、まア、殆ど想像が出來んと云つて可いな。――たゞ何だか遠方の地平線に薄ぼんやりとあかるく夜が明けかゝつてゐるやうな所が見えるばかりだ。

未知の神、未知の幸福――これは象徵派のよく口にする所だが、あすこいらは私と同じ傾向に來て居るんぢやないかと思ふね。併し彼等はまるで今迄とは性質の變つた思ひもつかぬ神樣や幸福が先きにあるやうに考へてるらしいが、私はさうは思はん。我々が斯うして生きてるのは卽ち「アンノーン、ハッピネス」ぢやないか、たゞ氣が付かずに迷つてるだけだ。聖人は赤兒の如しといふ言葉が、其に幾らか似た事情で、かねて成り度いと望んでた聖人に彌々成つて見れば、やはり子供の心持に還る。これ變つたと云へば大に變り、變らんと云へば大に變らん所ぢやないか。だから先きへばかり眼を向けるのが抑の迷ひ、偶には足許を見ては何うか。すると「いや、此儘で幸福だ」といふやうな事がありはせんか、と、まア思ふんだな。

私は何も佛を信じてる譯ぢやないが、禪で悟を開くとか、見性成佛とかいつた趣きが心の中には有る。そんなら今が幸福だと滿足して、此上に社會改良も何も不必要かと云ふに然らでもない。大變パラドキシカルになつて了つて……ある意味ぢや此儘幸福だが他の意味ぢや不幸福だ。一見矛盾してゐるやうだが、私の心では爲つて居らん。こゝが象徵派と同じ所へ來てゐる證據ぢやないかと思ふ。だから人が文學や哲學を難有がるのは餘程後れてゐやせんかと考へられる。第一其等が難有いと云ふな、僞の難有いんだ。何となれば、文學哲學の價値を一旦根柢から疑つて掛らんけりや、眞の價値は解らんぢやないか。ところが日本の文學の發達を考へて見るに果してさう云ふモーメントが有つたか、有るまい。今の文學者なざ、殊に西洋の影響を受けていきなり文學は難有いものとして擔ぎ廻つて居る。これぢや未だ〳〵途中だ。何にしても、文學を尊ぶ氣風を一旦壞して見るんだね。すると其敗滅の上に築かれて來る文學に對する態度は「文學も惡くはないな!」ぐらゐな處になる。心持は第一義に居ても、人間の行爲は第二義になつて現はれるんだから、ま、文學でも仕方がないと云ふやうに、價値が定まつて來るんぢやないかと思ふ。

一寸親子の愛情に譬へて見れば、自分の兒け餘所の兒より賢くて行儀が可いと云ふ心持は、濁つて垢拔けのしない心持である。然るに

垢抜けのした精美された心持で考へると、自分の兒は可愛いには違ひないが、缺點も仲々ある、どうしても他所の兒の方が可い、併し可愛いとなる。これと同じ事で、文學にしがみ付いて、其でなきや夜も日も明けぬと云ふな、眞に文學を愛するもんぢやないね。今の文學者が文學に對する態度は眞面目になつたと云ふが、眞面目ぢやなくて熱心になつただけだらう。法華信者が偏頗心で法華に執着する熱心、碁客が碁に對する凝り方、那樣のと同樣で、自分の存在は九分九厘は進んでゐるのさ。眞面目と云ふならば、今迄の文學を破壞する心が、一度はどうしても出來なくちやならん。

だから私の態度は……私は到底文學者ぢやない。併し文學が兒戲に類すると云ふ話と、今の話は別だよ。たゞ批評として見ると、一寸そんな事を云つて見度くなるのだね。

私は、まア、懷疑派だ。第一論理といふ事が馬鹿々々しい。思想之法則は人間の頭に上る思想を整理するだけで、其が人間の眞生活とどれだけの關係があるか、心理學上人間は思想だけぢやない。精神活動力の現はれ方には情もあれば知もあり意もある。それを思想だけ整理しても駄目ぢやないか。成程、相等しき物は同一なりは尤もの次第で、他に考へやうもないが、併し「何故」といふ觀念が出て來ると、私はそれに依賴されなくなる。心理學上の識覺について云つて見ても、識覺に上らぬ働き（アンダー、コンシアス、ウォーク）が幾らあるか知れぬ。反射的動作なぞは其卑近の一例で、斯んな心持がする……云々と云ふ事も亦其働きだ。だから識覺の上にのぼつて來る思想だけぢや、到底人間全體の型は付けられない。ぢや、何うすりや好いかと云ふに、矢張そりや解らんよ。たゞ手探りでやつて見るんだ。要するに人間生きてる以上は思想を使ふけれども、それは便宜の爲に使ふばかり、と云ふ考へだから、私の主義は思想の爲の思想でもなければ藝術の爲の藝術でもなく、また科學の爲の科學でもない。人生の爲の思想、人生の爲の藝術、將た人生の爲の科學なのだ。

人生人生といふが、人生とは一體何だ。一個の想念ぢやないか、今の文學者連中に聞き度いのは、よく人生に觸れなきや不可と云ふ其人生だ。作物を讀んで、こりや何となく身に沁みるとか、こりや何となく急所に當らぬとかの區別はある。併しそれが直ちに人生に觸れる觸れぬの標準となるんなら、大變輕卒のわけぢやないか。引緊つた感を起させる起させぬの別と、人生に觸れる觸れぬとの間にや、大なるギャップが有りやせんか。私はどうも那樣氣がするね。哲學上の見解から小說と人生との接觸を見たんでは觸れる云々は形容詞に過ぎんやうに思ふ。にも係らず其無意味のことに意味をつけて、やれ觸れたの、やれ人生の眞髓は斯うだのと云ふ、一片の形容詞が何時の間にか人生觀と早變りをするのは、これ何とも以て不思議の至りさ。

予が半生の懺悔

私の文學上の經歷――なんていつても、別に光彩のあることもないから、話すんなら、寧そ私の昔からの思想の變遷とでもいふことにしよう。いはゞ、半生の懺悔談だね……いや、この方が罪滅しになつて結句いゝかも知れん。

そこでと、第一になぜ私が文學好きなぞになつたかといふ問題だが、それには先づロシア語を學んだいはれから話さねばならぬ。それはからだ――何でも露國との間に、かの樺太千島交換事件といふ奴が起つて、だいぶ世間からや

かましくなつてから後、内外交際雜誌なんにつでは、盛んに敵愾心を鼓吹する。從つて世間の輿論は沸騰するといふ時代があつた。するとヽ私がずつと子供の時分からもつてゐた思想の傾向――維新の志士肌ともいふべき傾向が、頭を擡げ出して來て、即ち、慷慨愛國といふやうな輿論と、私のそんな思想とがぶつかり合つて、其結果、將來日本の深憂大患となるのはロシアに極つてる。こいつ今の間にどうにか禦いで置かなきやいかんわい――それにはロシア語が一番に必要だ、と、まあ、こんな考へからして外國語學校の露語科に入學することとなつた。

で、文學物を見るやうになつたのは、語學校へ入つて、右のやうな一種の帝國主義に浮かされて、語學を研究してゐる内に自らその必要が起つて來たので。といふのは、當時の語學校はロシアの中學校同樣の課目で、物理、化學、數學などの普通學を露語で教へる傍、修辭學や露文學史などもやる。所が、この文學史の教授が露國の代表的作家の代表的作物を讀まねばならぬやうな組織であつたからである。

する中に、知らず識らず文學の影響を受けて來た。尤もそれには無論下地があつたので、いはど、子供の時からある一種の藝術上の趣味が、露文學に依つて油をさゝれて自然に發展して來たので、それと一方、志士肌の齎した慷慨熱――この二つの傾向が、當初のうちはどちらに傾くともなく、殆ど平行して進んでゐた。が、漸く帝國主義の熱が醒めて、文學熱のみ獨り熾んになつて來た。

併し、これは少しく說明を要する。

私のは、普通の文學者的に文學を愛好したといふんぢやない。寧ろロシアの文學者が取扱ふ問題、即ち社會現象――これに對しては、東洋豪傑流の肌ではまるで頭に無かつたことなんだが――を文學上から觀察し、解剖し、豫見したりするのが非常に趣味のあることとなつたのである。で、面白いといふことは唯だ趣味の話に止まるが、その趣味が思想となつて來たのが即ち社會主義である。

だから、早く云つて見れば、文學と接觸して摩れ摩れになつて來るけれども、それが初めは文學に入らないで、先づ社會主義に入つて來た。つまり文學趣味に激成されて社會主義になつたのだ。で、社會主義といふことは、實社會に對する態度をいふのだが、同時にまた、一方において、人生に對する態度、乃至は人間の運命とか何とか彼とかいふ哲學的趣味を帶つて來た。が、最初の頃は純粹に哲學的では無かつた――寧ろ文明批評とでもいふやうなもので、それが一方に在る。そして、現世の組織、制度に對しては社會主義が他方に在る。と、まあ、源は一つだけれども、こんな風に別れて來てゐたんだ。

社會主義を抱かせるに關係のあつた露國の作家は、それは幾つもあつた。ツルゲーネフの作物、就中「ファーザース・エンド・チルドレン」中のバザーロフなんて男の性格は、今でも頭に染み込んでゐる。その他チェルヌイシェフスキー、ヘルツェン、それから露國の作家ぢやないがラッサール、これらはよく讀んだもんだ。

勿論、社會主義といつたところで、當時は大眞面目であつたのだが、今考へると、頗る幼稚なものだつたのだ。例へば、政府の施政が氣に喰はなんだり、親達の干渉をうるさがつたり、無暗に自由々々と絶叫したり――まアすべての調子がこんな風であつたから、無論官立の學校も蟲が好かん。處へ、語學校が廢されて商業學校の語學部になる。それに僅かの間で、語學部もなくなつて、その生徒は全然商業學校の生徒

にされて了ふ。と、私はぷいと飛出して了つた。その時、親達は大學に入れと頻りに勸めたが、官立の商業學校に止まらなかつたと同様に、官立の大學にも入らなかつた。で、終には、親の世話になるのも自由を拘束されるんだといふので、全く其手を離れて獨立獨行で勉強しようといふつもりになつた。

が、かうなると、自分で働いて金を取らなきやならん。そこであの「浮雲」も書いたんだ。尤も「浮雲」以前にも飜譯などはある。今もいつたツルゲーネフの「ファーザース・エンド・チルドレン」の冒頭を、少々ばかり譯したことなどもあるが、坪内さんに見せたばかりで物にはならなかつた。「浮雲」にはモデルがあつたかといふのか？　それは無いぢやないが、モデルはほんの參考で、引寫しにはせん。いきなりモデルを見附けてこいつは面白いといふやうなのでは勿論無い。さうぢやなくて、自分の頭に、當時の日本の青年男女の傾向をぼんやりと抽象的に有つてゐて、それを具體化して行くには、どういふ風の形を取つたらよからうか。といろ〳〵工夫をする場合に、誰か餘所で會つた人とか、自分の豫て知つてる者とかの中で、稍々自分の有つてる抽象的觀念に脈の通ふやうな人があるものだ。するとその人を先づ土臺にしてタイプに仕上げる。勿論、その人の個性はあるが、それを捨てて了つて、その人を純化してタイプにして行くと、タイプはノーションぢやなくて、具體的のものだから、それ、最初の目的が達せられるといふ譯だ。この意味からだと「浮雲」にもモデルが無いぢやないが、私のいふモデルと、世間のそれとは或は意味が違つてるかも知れん。

兎に角、作の上の思想に、露文學の影響を受けた事は拒まれん。ベーリンスキーの批評文などを愛讀してゐた時代だから、日本文明の裏面を描き出してやらうと云ふ樣な意氣込みもあつたので、あの作が、議論が土臺になつてるのも、つまりそんな譯からである。文章は、上卷の方は、三馬、風來、全交、饗庭さんなぞがごちや混ぜになつてる。中卷は最早日本人を離れて、西洋文を取つて來た。つまり西洋文を輸入しようといふ考へからで、先づドストエフスキー、ガンチャロフ等を學び、主にドストエフスキーの書方に傾いた。それから下卷になると、矢張多少はそれ等の人々の影響もあるが、一番多く眞似たのはガンチャロフの文章であつた。

さて「浮雲」の話の序だが、前に金を取りたい爲にあれを作つたと云つた。然う云つて了へば生優しい事だが、實はあれに就いては人の知らない苦悶をした事がある。

私は當時「正直」の二字を理想として、俯仰天地に愧ぢざる生活をしたいといふ考へを有つてゐた。この「正直」なる思想は露文學から養はれた點もあるが、もつと大關係のあるのは、私が受けた儒教の感化である。話は少し以前に遡るが、私は帝國主義の感化を受けたと同時に、儒教の感化をも餘程蒙つた。だから一方に於ては、孔子の實踐躬行といふ思想がなか〳〵深く頭に入つてる。……いはゞまあ、上つ面の浮かれに過ぎないのだけれど、兎に角上つ面で熱心になつてゐた。一寸、一例を擧げれば、先生の講義を聽く時に私は兩手を突かないぢや聽かなんだものだ。これは先生の人格よりか「道」その物に對して敬意を拂つたので。かういふ宗教的傾向、哲學的傾向は私には早くからあつた。つまり東洋の儒教的感化と、露文學や西洋哲學やらの感化とが結合つて、それに社會主義の影響もあつて、こゝに、私の道德的の中心觀念、即ち俯仰天地に愧ぢざる「正直」が形づくられたのだ。

併しこれは思想上の事だ。これが文學的勞作と關係のある點はどうか、第一「浮雲」から御話するが、あの作は公平に見て多少好評であつたに係らず、私は非常に卑下してゐた。今でも無い如く、其當時も自信といふものが少しも無かつた。然るに一方には正直といふ理想がある。藝術に對する尊敬心もある。この卑下、正直、藝術尊敬の三つのエレメントが飽和した結果はどうかと云ふに、まあ、こんな事を考へる樣になつたんだ——將來は知らず、當時の自分が文壇に立つなどは僭越至極、藝術を辱しむる所以である。正直の理想にも叶つて居らん……と思ふものの、また一方では、同じく「正直」から出立して、親の脛を噛つてゐるのは不可、獨立獨行、誰の恩をも被ては不可、となる。すると勢ひ金が欲しくなる。欲しくなると小說でも書かなければならんがそいつは藝術に對して濟まない。剩へ、最初は自分の名では出版さへ出來ずに、坪內さんの名を借りて、漸と本屋を納得させるやうな有樣であつたから、是れ取りも直さず利のために坪內さんをして心にもない不正な事を爲せるんだ。卽ち私が利用するも同然である。のみならず、讀者に對してはどうかと云ふに、これまた相濟まぬ譯である——所謂羊頭を揭げて狗肉を賣るに類する所業、嚴しくいへば詐欺である。

之は甚しい進退維谷だ。實際的と理想的との衝突だ。で、そのデレンマを頭で解く事は出來ぬが、併し一方生活上の必要は益々迫つて來るので、よんどころなくも「浮雲」を作へて金を取らなきやならんこととなつた。で、自分の理想からいへば、不埒な〳〵人間となつて、錢を取りは取つたが、どうも自分ながら情ない、愛想の盡きた下らない人間だと熟々自覺する。そこで苦悶の極、自ら放つた聲が、くたばつて仕舞へ（二葉亭四迷）！

世間では私の號に就ていろんな臆說を傳へてゐるが、實際は今云つた通りなんだ。いや、「仕舞へ！」と云つて命令した時には、全く仕舞ふ時節が有るだらうと思つたね。——その際決が付けば、まづそのライフだけは收まりが付くんだから。で、私の身にとると「くたばつて仕舞へ！」といふ事は、今でも有意味に響く。そこでこの心持が作の上にはどう現れてゐるかと云ふと、實に骨に彫り、肉を刻むといふ有樣で、非常な苦勞で殆ど油汗をしぼる。が、油汗を搾るのは責めては自分の罪を贖め度いといふ考へからで、羊頭を揭げて狗肉を賣る所たら、まア、豚の肉ぐらゐに——、人間の口に入れられるものを作へ度い、といふ極く小心な「正直」から刻苦するやうになつたんだ。翻譯になると、もう一倍輪をかけて斯ういふ苦勞がある。——その時はツルゲーネフに非常な尊敬をもつてた時だから、あゝいふ大家の苦心の作を、私共の手にかけて滅茶々々にして了ふのは相濟まん譯だ、だから、とても精神は傳へる事が出來んとしても、せめて形なと、原文のまま日本へ移したら、露語を讀めぬ人も幾分は原文の妙を想像する事が出來やせんか、と斯う思つて、コンマも、ピリオドも、果ては字數まで原文の通りにしようといふ苦心までした。併し考へると隨分馬鹿げた話さ。併し斯う云つて來ると、一途に「正直」に忠實だつたやうだが、一方には實は大矛盾があつたんだ。卽ち大名譽心さ。……文壇の覇權手に唾して取るべしなぞと意氣込んでね……いやはや、陋態を極めて居たんだ。

その中に、人生問題に就て大苦悶に陷つた事がある。それは例の「正直」が段々崩されてゆくから起つたので、先づ小說を書くことで「正直」が崩される、その他種々のことで崩される。つまり生活が次第に崩してゆくんだ。そして、

こんな心持で文學上の製作に從事するから捗のゆかんこと夥しい。とても原稿料なぞぢや私一身すら持耐へられん。況や家道は日に傾いて、心細い位置に落ちてゆく。老人共は始終愁眉を開いた例が無い。其他種々の苦痛がある。苦痛と云ふのは畢竟金のない事だ。冗い樣だが金が欲しい。併し金を取るとすれば僕の不德をやらなければならん。やつた所で、どうせ足りつこは無い。

ヂレンマ！　ヂレンマ！　こいつでまた幾ら苦められたか知れん。これが人生觀についての苦悶を呼起した大動機になつてるんだ。卽ちこんな苦痛の中に住んでて、人生はどうなるだらう、人生の目的は何だらうなぞといふ問題に、思想上から自然に走つてゆく。實に苦しい。從つてゆつくりと其問題を研究する餘裕がなく、たゞ斷腸の思ばかりしてゐた。腹に據る所がない、たゞ苦痛を免れん爲の人生問題研究であるのだ。だから隙があつて道樂に人生を研究するんでなくて、苦悶しながら遣つてゐたんだ。

私が盛に哲學書を獵つたのも此時で、基督敎を覗き、佛典を調べ、神學までも手を出したのも、また此時だ。

全く厭世と極つて了へば寧そ樂だらうが、其時は矛盾だつたから苦しんだ。世の中が何となく面白くない。と云つた所で、捨てる譯にはゆかん。何となく懷しい所もある。理論から云つても、人生は生活の價値あるものやら無いものやら解らん。感情上から云つても同じく解らん——つまる所、こんな煮え切らぬ感情があるから、苦しい境涯に居たのは事實だ。が、これは「厭世」と名くべきものぢや無からうと思ふ。

其時の苦悶の一端を話さうか。——當時、最も博く讀まれた基督敎の一雜誌があつた。この雜誌では例の基督敎的に何でも斷言して了ふ。たとへば、此世は神樣が作つたのだとか、やれ何だとか、平氣で「斷言」して憚らない。その態度が私の癪に觸る。……よくも考へないで生意氣が云へたもんだ。儚い自分、はかない制限された頭腦で、よくも己惚れて、あんな斷言が出來たものだ、と斯う思ふと、賤しいとも淺猿しいとも云ひやうなく腹が立つ。で、ある時小川町を散歩したと思ひ給へ。すると一軒の繪双紙屋の店前で、ひよつと眼に付いたのは、今の雜誌のビラだ。さア、其奴の垂れてるのを一寸瞥見しただけなんだが、私は胸がむかついて來た。形容詞ぢやなく、眞實に何か吐出しさうになつた。だから急いで顏を背けて、足早に通り拔け、漸と小間物屋の開店だけは免れたが、このくらゐにも神經的になつてゐた。思想が狂つてると同時に、神經までが變調になつたので、そして其擧句が……無茶さ！

で、非常な亂暴をやッ了つた。かうなると人間は獸的嗜慾だけだから、喰ふか、飲むか、女でも弄ぶか、そんな事よりしかしない。——一滴もいけなかつた私が酒を飲み出す。子供の時には輕薄な江戸ッ子風に染まつて、近所の女のおとなんか追廻したが、中年になつて眞面目になつたその私が再び女に手を出す——全く獸的生活に落ちて、終には盜賊だつて關はないとまで思つた。いや、眞實なんだ。が、そこまでは豈夫に思ひ切れなかつた。人生は無意味だとは感じながらも、俺のやつてる事は僞だ、何か光明の來る時期がありさうだとも思ふ。要するに無茶さ。だから惡い事をしては苦悶する。……爲は爲ても極端にまでやる事も出來ずに迷つてる。

そこでかれこれする間に、ごく下等な女に出會つた事がある。私とは正反對に、非常な快活な奴で、鼻唄で世の中を渡つてるやうな女だつた。無論淺薄ぢやあるけれども、其處にまた

活々とした處がある。私の樣に死んぢや居ない。で、其女が大口開いてアハヽヽヽと笑ふやうな態度が、實に不思議な一種の引力を起させる。あながち惚れたといふ譯でも無い。が、何だか自分に缺乏してる生命の泉といふものが、彼女には沸々と湧いてる樣な感じがする。

そこはまア、自然かも知れんね――日陰の冷たい、死といふものに摑まれさうになつてる人間が、日向の明るい、生氣潑剌たる陽氣な所を求めて、得られんで煩悶してゐる。すると、議論ぢや一向始末におへない奴が、淺墓ぢやあるが、具體的に一寸眼前に現れて來てゐる。――私の心といふものは、その女に惹き付けられた。

これが併し動機になつたんだ。窮ひ極まつて其處まで行つたんだが、……これが畢竟一轉する動機となつたんだ。

で、私はこんな事を考へた。――斯ういふ風に實例を眼前に見て、苦しいとか、樂しいとか云ふ事は、人によつて大變違ふ。例へば私が苦しいと思ふ事も、其女は何とも思はんかも知らん。それはまア淺薄で何とも思はないんだが、淺薄でなくてしかも何にも思はん人もある。それは誰かと云ふに、孔子さんだらうと思ふ。悠々として天命を樂むのは實に豪い。例へば「死」なる問題は、今の所到底理論の解決以外だ。が、解決が出來たとした所で、死は矢張可厭だらう。たゞ解決が出來れば幾分か諦めが付き易い所はあるが、「元來死」が可厭といふ理由があるんぢや無いから――たゞ可厭だから可厭なんだ――意味が解つた所で、矢張何時迄も可厭なんだ。すると知識で死の恐怖を去る事は出來ん。死を怖れるのも怖れぬのも共に理由のない事だ。換言すれば其人の心持にある。即ち孔子の如き仁者の氣象にある。あゝ云ふ聖人の樣な心持で居たらば、死を怖れて取亂す事もあるまい。人生の苦痛に對しても然り、聖人だつて苦痛は有る。が、その間に一分の餘裕があつて取亂さん。悠々として迫らぬ氣象、即ち、仁がある。だから思想上で人生問題の解決が付くか否か解らんが、一方で人間に「仁」の氣象を養つたら、何となく人生を超絶して、一段上に出る臆病で、苦痛にも何にも捉へられん、佛者の所謂自在天に入りはすまいかと考へた。

そこで、心理學の研究に入つた。古人は精神的に「仁」を養つたが、我々新時代の人は物理的に養ふべきではなからうかといふ考へになつた。

心理學、醫學に次いで、生理心理學を研究し始めた。是等に關する英書は隨分讀めたもので、殆ど十何年間、三十歳を越すまで研究した。呉博士と往復したのも、參考書類を讀破しようといふ熱心から、獨逸語を獨修したのも此時だ。けれども其結果、どうも個人の力では到底やり切れんと悟つた。ヴントの實驗室、ヂェームスの實驗室、其等が無ければ、何時迄經つても眞の研究は覺束ないと思ひ出した。そんなら錢の費らん研究法をしなくてはならんが、其には自分を犧牲にして解剖壇上に乘つて、解剖學を研究するより外仕方がない。當時は、醫學上の大發見の爲に毒藥を仰いだりした人の話が頭にあつたから、そんな犧牲心も起したんだ。即ち私の心的要素を種々の事情の下に置いて、揉み散らし、苦め散らし、散々な實驗を加へてやらう。そしたら、學術的に心持を培養する學理は解らんでも、その技術を獲ることは出來やせんか、と云ふので、最初は方面を選んで、實業が最も良からうと見當を付けた。それで、實業家と成らうと大分焦つた。が併し私の露語を離れぐにしては實業に入れぬから、露國貿易と云ふやうな所から段々入らうと思つ

た。そして國際的關係に首を突込んで、志士肌と商賣肌を混ぜてそれにまた道德的のことも加へたり何かして見ると、かのセシルローヅなぞが面白い人物と思はれるやうになつた。單に金持が羨しいんぢやない。形は違ふが、一つあゝいふ風の事業をやらうと云ふのを見當としてそんな方面にも走つた事がある。で、私の職業の變遷を述べれば、官報局の飜譯係、陸軍大學の語學教師、海軍省の編輯書記、外國語學校の露語教師なぞといふ順序だが、今云つた國際問題等に興味を有つに至つて浦鹽から滿洲に入り、更に蒙古に入らうとして、暫時警務學堂に奉職してゐた事なんぞがある。

　が、これは外面に現れた事實上の事だ。その心的方面を云ふと、この無益な心的要素が何れ程まで修練を加へたらものになるか、人生に捉はれずに、其を超絕する樣な所まで行くか、一つやつて見よう、といふ心持で、幾多の活動上の方面に接觸してゐると、自然に、人生問題なぞは苦にせずに濟む。で、この方面の活動だと、ピタッと人生にはまつて了つて、苦痛は苦痛だが、それに堪へられんことは無い。一層奮闘する事が出來るやうになるので、私は、奮闘さへすれば何となく生き甲斐があるやうな心持がするんだ。

　明治三十六年の七月、日露戰爭が始まると云ふので私は日本に歸つて、今の朝日新聞社に入社した。そして奉公として「其面影」や「平凡」なぞを書いて、大分また文壇に近付いては來たが、さりとて文學者に成り濟ました氣ではない。矢張例の大活動、大奮闘の野心はある――今でもある。

俳諧日録（断片）

北京滞在中及び歸朝後の隨時隨感の筆のすさみ

一夜孤燈の下にうつくまり二風外兄と語る談盡きて茶も亦冷めたり大きなる欠一つして

君か耳の浮世にうとき話かな

春浣

濡縁や猫うつくまる薄日和

霰

霰ちるや小笹さや〳〵いさゝ川

神苑

あなたふと神垣つくるその白梅は

雪

ふれ小雪々々のふれやこやたふ子供

小雪さら〳〵降こむや小提燈

霰

手枕の夢にふりこむ霰かな

夜座

うつくまるや圍爐裏のふちのかけ硯

霰

獨居の湯漬つめたく霰降る

鈴の音

家鳩の足に鳴る音ありや鈴の音イヤ風の音

さてもおもしろからころ〳〵と風の鳴る音鈴の音さてもおもしろ

求女塚

俤のそゝろにこひし求女塚

清曆十二月二十三日夜八時ころより竈祭はしまる家々爆竹の音盛なり

爆竹一聲こりやこれなんとかまと祭

懷亡父

いまそかるそのいにしへをたまきのくりかへしてもしぬびけるかな

○

おもふことなくて世に經ることをこそつくれんとしてむなしき空をながめけり

をかしき人

むさうさにあぐらかきたる人

つくねんとうつくまりたる人

我事をわすれたる人

をさな兒と無心にあそふ人

妻めつる人

おもふことなくしゐたる一時こゝにめでたし。我上はかり物語りに人の話を耳にも入れぬ人うるさし。

よろづの事を打忘れて我妻とさしむかひて罪のなき事をむつまじく物語りゐる、はたよりみても美しきものなり。

心に浮ひ出つるまゝよしなしことを書付けて今宵もいつしか更けたり。いでねまらんとて筆を捨てぬ。

凩やふしくれたちし松一本

此ころの風の寒さよ戰死塚

　　馬も乘りなるれは可愛ゆきものなり

凩や馬に物云ふ戻り道

手綱取る手に水はなをのこひけり

日本の新聞ふるし冬籠

蕎麥よすしよ噂はかりに冬籠

藪蕎麥の蕎麥の噂よ冬籠

梨子顆菓我に二人の子供あり

　　友と語る

梨子一顆二つに割て食はうよ

偶々此下十二文字を得たれども上五文字をおきわづらふ。しばらく下の句ばかりを書付けおきて後の句案を待つ。

供待の／遠乘の／回禮の／こからしの ｝馬にものいふ寒さかな

冬の道いてつきて門前を過ぐる車の音轣轆として響高し。獨り空房に坐して靜にこれを聽けば冬の氣色歴然と心に浮びてさびしく興あり。筆を援りて句を書付けんとすれば筆尖凍りて用ゆべからず。乃ち爐火に翳すこと半時ばかりするほど湯氣たちしづく垂りて白き灰舞ひあがる。無心にこれをながめたる我も詩中の人ならんか。

立春　鶯もなかで年立つあした哉

机　まづ以て去年の埃を吹く机

昨日から訪ふ人なくて冬籠

　　友に柬す

置火燵我はいぢけてをり候ふ

　　友に喜んで人の品性の高下をいふものあり

高いの低いのと山買ふやうな話かな

　　日本の婦人支那人のボーイと羽根突きゐるを見て即吟

めでたいな日本と支那と羽根ついて

　　師走

賃餅の鄰は松のかこひかな

　　羽子板

羽子板の裏見ることにあさましの

人のこゝろのおもはるゝかな

三十三才

三十三才の生涯をゝる師走かな

木啄

木啄は木をつき／＼て師走哉

年の暮

そゝくさと來る人のあり年のくれ

北京の寒氣は骨に徹したり

底冷のわするな手袋北京の春

朝茶を樂しむ

食籠は日差をよけて朝茶喫る

師走

出つ入つ晦日に近き餅の音

煤掃の一しきりして隙哉

師走

春はそこに師走の門の七五三

年の内に春立つたらし七五三

秋や深き籬の菊のかさね縁

柳家小さんの身上話を讀みて

落語家の一代聞けば嚏かな

料房のあるじ清語を習ふ、聲もたゆげに夜は更けたり

冬の夜の鄰はひとり話かな

向鄰の細君一夜浮れて琴を彈す、戯れに贈る

奥樣の爪音ゆかし梅の花

爪音に紅梅ほしとおもひけり

琴の音の鄰は梅のさかり哉

琴の音のあるしもゆかし梅の花

探梅

いさ殿原梅見に參り候はんつ

鞍揃なつる葉吉の馬

はてしなき砂原育ち色黒く

人身御供の夢に泣く秋

松明を消さしとすれど山颪

身の成果をかこつ有明

おもひ出つる昔を今の泪にて

洟かみ給ふ御手の細さよ

うるさしとかなくりすつる綿帽子

戀にはうときこのころの空

霜枯の大根かつく頰被り

橋の袂へかよふ細道

一本の柳も風にやせにけり
秋は家中に昔敵小屋建
先祖から住慣れし村見倦たり
五郎の住まふ都なつかし
狩衣のほころびも縫ふわびしさに
明け行く空をなかめては泣
小ゆるぎの磯打つ浪の音さえて
千鳥啼くなり大磯の里
子供等のはしり過ぎたる村端
すゝひた草鞋風にゆらつく

　母の文を讀む

このころの風身にしみておぼえけり

なかき夜や子の事なんとおもひつゝ
日傍の文藏ゆかし冬籠

　小兒に似す

紅いのもありてうれしいか鉢の梅

　衙門の巡捕を懲む

木枯に劍光寒し星の影
梅か香や御宴にもつるゝ猫の戀
阿彌陀佛れかひある身の手向草
四十路越えたる夢の世の秋
ふりにたる檜一笠をすてかねて
武士に紛れのないうしろ付
振袖のはつとちらけて花の山

とりどりの花見衣裳のゆきかひて
都大路を春風そふく
桃咲いて壁の穴から馬の顔

　無常

いつの間にこけし案山子そ枯尾花

　戀

御秘藏の玉のやつれもあはれ戀

　釋教

おぼけなくも釋尊これて糸瓜の皮

　戀

やつるゝよ男日照もせぬ秋を
やつるゝよ戀にはもろき女郎花

花十句まづ海棠を筆はしめ
そのころ咲ける一本さくら
しのゝめの明星ほそき山かつら
茶屋の軒端に雀啼なり
桔槹たか汲みすてし夕まくれ
茶粥の烟ほそう立つ秋

鶯

鶯の身を知る雨や花吹雪

蝶

菜の花に蝶々消えゆく春のくれ
菜の花に蝶居士もしのひ給ひける
大學の講義の間をひるねかな
花の春講義の間を晝ねかな

先生の講義ねむたし花の春
おつとまかせ瓢かたけゆく花の春
御前には竝大名春の風
筒井筒その振分のかみかくし
花よ〳〵と呼ぶ人はたれ
絹張の行燈くらし花の陰
あなうらめしや殿の振舞
御手打のをりしもころは彌生の春
絹傘に花ちりかゝれ押小路
蝶も醉うてや狂ふ振袖

可内の謦付をかしひげをかし
ない〳〵内證裕福の春

夢

鶯や茶の間にくらき煤窓

春雨

朱の華表彌赤し春の雨

永日

なかき日を酢賣休むや村界

田家

行手には花に埋るゝ村見えて
畔道傳ふ僧一人あり
道伴の蝶跡になり先になり
いつしか來たり葛飾の里
うらめしき我世なるかな思ふ事

成らて今年の春もくれ行

劍賣りて田畑を買うて故里に
我かへらんか思ふ事成らす

世のさまは末になりたり劍賣りて
我故里に歸らんとそ思ふ

小書院に人無し春を散櫻

戸をさした茶屋の軒端を散櫻

花散るや裏町通る豆腐賣

小鼓の拍子に散るか稚兒櫻

さひしさに花も散るらし春のくれ

ものうさは琴押やりつ花の前

劍を賣て斗酒買來れ落花

井の端の櫻散りけりかしや札

膝抱て我に花なき恨みあり

行春を花なき家にかこちけり

春來れは花なき里も春の風

芭蕉

野分してあらそひかねし芭蕉かな

蜘蛛の圍の破目あふなきはせをかな

窻外の芭蕉終日風に煽ら
れてはた〳〵としてしば
らくも鳴やまず

永き日や許由のしらぬあふり音

芭蕉やれて我世さひしき眺かな

題破芭蕉

我に似てやれたきまゝの浮世かな

うき我もやれたきまゝの芭蕉かな

柿もみち　合歡木紅葉

われもかも翁さひたり柿紅葉

青き葉もまじりて淋し柿紅葉

かきもみぢ合歡木紅葉もあひ鄰

なかめたりぬ合歡木紅葉や柿紅葉

時雨

しくるゝや打あはせたる衣の袖

町内のうはさもつきて初時雨

山門の人無きゆふへ初しくれ

友無くてしくれくる夜や茶三杯

しくるゝや窻さしてみる物の本

しくるゝや土橋をもとる在郷馬

秋風

秋風のはためかしよく鳴子かな

以上十一月十九日夜

同じく十九日夜枕頭にして得たる句

古塚のふるきも見えす落葉かな

落葉掃く箒にからむ落葉かな

かさとはかり落葉かうへに落葉哉

何とは知らず意味ありてなるべしとて

落葉かく僧の眉毛そ白かりし

かゝひたる僧にも似たる落葉かな

落葉して庄屋か池は古にけり

阿伽桶の中にさひしき落葉かな

とく〳〵の雫も盡て落葉かな

ぢいさまの髪についたる落葉かな

秋のくれ我世もくるゝおもひ有

三十七年二月吟

凩や目白からすのなくれ鳴

まづあけまして御慶申入

まつあけまして松の緑をみよの春

凩や菴主の留守を茶に待ちて

こからしや二軒つゝきの貸長屋

木からしや貸家の前の一反田

鍋焼のつんほを恨む夜寒かな

いろ人の鼻汁たれたまふ夜寒哉

凩やほし菜わひしき軒のつま

[illegible]そこらに在らん冬野かな

人妻のそゝろにこひし冬籠

おほけなき望みも今や枯尾花

かけろくを子等に負たる夜永かな

凩や都を過きて三十里

ほとゝきす後の一聲なれときかせよ

あかつきの星に問はゞや杜鵑

木枯や柿の木はしる薄日和

鳶の羽も刷ひぬはつしくれ　去来

（鳶も羽をといはでは聞こす，）

一吹風の木の葉しつまる　芭蕉

（書註に日發句の前をいへたるなりとまもあるへし）一吹風、一陣風、發句の景氣の補遺とも見るべくや

股引の朝からぬるゝ川こえて　凡兆
（其人は前句の景氣に對する人をたづねて股引穿きたる人を定めたるなり其人朝まだき所用ありて川越するをりしもあれ一陣の風颯と吹き來て木の葉さわ立ち鳶も羽を刷ひしが瞬く間に木の葉もしづまりて四邊寂然たる時はら〳〵と時雨きたるなり）

たぬきをおどす篠張の弓　史邦
（其人の所用を定めたる也、其人は近きあたりの百姓にて猪を威す篠弓を持ちて畠へ行く時しぐれにあひたる也）

まひら戸に蔦這かゝる宵の月　芭蕉
（月の定座、まひら戸は言海に表面に細き棧の横に密にある戸、玄關の戸などに多く用ゐるものと見ゆ　○其人の住居振を想像したる也、まひら戸などありてそれに蔦など這懸りたる此村草分けの舊家と見ゆるものから、主人殊の外の豆人にて奉公人にいひつけず自ら篠弓を持ちて立てにゆかるゝよと也）

人にもくれず名物の梨　去來
（いや豆人にあらず大の吝嗇家にて奉公人任せにては安心なりがたきゆゑ自身と立てに行かるゝの也その證據には其處の後園には名物の梨の見事なるが生れど曾て人にくれたることなきはと也）

かきなぐる墨繪をかしく秋暮て　史邦
（いや吝嗇家にあらず畸人也さればこそ墨繪など上手にかゝるゝはと也、梨は元來秋の物なれば秋くれてと添へたるならん）

はき心よきメリヤスの足袋　凡兆
（秋のくれならばそろ〳〵足袋も穿くべし）

何事も無言の内はしづかなり　去來
（繪を差しメリヤスの足袋など穿ゐるはさては隱者にして富めるものか、さらば無言の業などもせんとて附けたるなるべし、長頭丸なんどの俤あるべくや）

里みえそめて午の貝ふく　芭蕉
（前句を修驗者の山下りなどと見て此句を附けたるならん）

ほつれたる去年のねござのしたゝるゝ　邦
（修驗者ならば寢莫蓙なんども背負ひたるべしとて）

芙蓉の花のはら〳〵と散る　邦
（ねござに芙蓉の花とつけたる意解しかたし、若くは古池の面影にや）

吸物はまつ出來されしすゐぜんじ　芭蕉
（すゐぜんじは肥後の水善寺か、さらば水の清きを以て名あり、此古池を水善寺の池と見て、何は兎もあれまづ名物の清水をもて調じたる吸物を出したるさまなるべし）

三里あまりの道かゝへける　來
（さて其饗膳にむかへる人は三里あまり隔てたる處の田舍人と見たり）

この頃も盧同か男居なりにて　邦
(其人を茶人と見て、その噂に移りたる也)

さし木つきたる月の朧夜　兆
(茶人の召使ふ男ならばさし木などは器用にすべしとて)

苔ながら花に並ぶる手水鉢　蕉
(召使のすさびとすれば稍上品めきたり)

ひとり直りし今朝の腹立　來
(さればこそ口やかましき隱居の俤にて受付たり)

一ときに二日の物を喰て置　兆
(それを一轉して變物にいひ做せり)

雪解にさむき島の北風　邦
(其場を定めて忽ち孤島の住人に轉じたり)

火ともしに暮れは登る峯の寺　來
(其島に峯あり峯の上に寺ありさて其寺を無住とし、無住なれど舟來の便りにとて火ともしに里の老夫などの登るといふの意か、何やらん故事ありげなれど今思ひ當らず)

ほとゝきす皆啼仕舞ひたり　蕉
(一時分附か、前句は冬季の沙汰なるを一轉して夏季と爲せり、暮れはとあるよりほとゝぎすを聯想したるなるべし)

疲勞のまた起直る力なき　邦
(ほとゝぎす皆啼仕舞ひたりとは誰かいひしぞと其人を訪ねて病人と定めたり、病人ならば閑あり、蜀公の啼終りたるをしかと聞定めて、さて初夏もはや過ぎぬれど我病未だ癒えず打歎ちたる氣味もあるべし)

鄰をかりて車引こむ　兆
(古註に夕顏の宿の俤なりとあり、此說然るべし、打越蜀公の沙汰なるゆゑ、其病人の宿の垣には定めて卯の花もあるべしと想像して、さて夕顏を聯想したるものか)

うき人を枳殻垣よりくゝらせん　蕉
(されど案外にも業平の噂なりし)

今やわかれの刀さしたす　來
(此刀は太刀なるべし)

せはしげに櫛で頭をかきならし　兆
(出陣前の姿に轉ぜり)

おもひ切たる死くるひ見よ　邦
(其人の意氣を添へたるまで)

青天に有明月の朝ぼらけ　來
(時分也)

湖水の秋の比良のはつ霜　蕉
(時節を秋と定めたり)

柴の戸や蕎麥ぬすまれて歌をよむ　邦
(澄惠僧都の故事也、僧都の歌に「盜人は長袴をやきたるらんそはをとりてこそ走りさりける」晩秋曉起始驚　○蕎麥爲盜所偸、聯想絶妙)

衣の子着習ふ風の夕くれ　兆
（只晩秋といふより趣向をつけたるならん）

押合うて寝ては又たつ假枕　蕉
（旅の體と見て附けたり、されど前句にいつこに旅を聯想すべき所あるやいふかし）

たゝらの峯のまた赤き空　來
（たゝらの峯は多々良山の雲なりといふ説あり如何ならん未だ考へ得ず、兎も角も曉起の景色なり）

一構鍬つくる園の花　兆
（田家の豪家のさまにて曉起所見なり）

枇杷の古葉に木の芽もえたつ　邦
（その園のさまなり）

右明治三十八年六月十四日註釋卒ぬ

留別

ますらをの望みたかひてくたら野に
今そわれゆくななきそわきも

述懐

吾はしもかくても朽ちむわか兒等は
はやもおひたて世は亂れむとす

石にたつ矢も有てふを思ふこと
とけてやむべき我ならなくに

ますらをそわは大丈夫そめゝしくも
泣いてあらむやわが世拙くも

寄懐遠征之友

命あらは又もあひみむしかはあれと
いのちしおしむ君にあらなくに

續猿蓑

八九間空で雨ふる柳かな

柳の八九間の空に枝垂れたるを雨の降るに見立てたるまで、形容の句也

春のからすの畠ほる聲

其場を定めたる也　○前句は無季にあらず柳の打けふりて雨の如く見ゆるは春季に限れど前句には只其趣をのべて明白に季を告げざりしを、脇には其かくれたるをあらはにし明かに春と名告り出でたるなり、鳥の啼聲は句を潤色する爲に打添へたる景氣にして眼目は春の畠に在るべし

初荷とる馬子もこのみの羽織着て

發句脇二句に春の田家の景色を描き出したれば此第三にて此景色に人を添へて一幅の畫圖に仕立てたる作家のはたらきを見るべし

内はとさつく晩の振舞

初荷を引きたる晩なれば惣盤振舞などあるべしとて　○前句の意を補ひたる打添の句也

きのふから日和かたまる月の色

月の定座也　○昨日から日和も定まりて今宵はよき月夜なりとぞ　○春秋二季

は三句乃至五句迄くを例とす此月は定まり
十三夜の月なるべし

猶存かれこ肌寒うなる

猶存は陰曆二月の物なれど其情え、は秋に
なるべし肌寒は勿論秋季也 ○前句は春の月の沙汰なれどそれを秋の月に轉じて秋の景氣に取做したり ○春季五句にわたりたれど此句に轉じて秋季と爲したり
二百十日二十日の厄日も過ぎて日和定まりたるにや

澁柿もことしは風に吹れたり

柿も秋季の物也 ○此風は二百十日二十日などの暴風なるべく、ぞ、柿の熟するは秋の末なれど二百十日二十日の厄日には尙青うて枝に在りたるべくや
今年明治三十八年の曆にては
九月一日(舊曆八月三日) 二百十日
九月十一日(舊曆八月十三日) 二百廿日
九月十三日(舊曆八月十五日) 十五夜
九月十八日(舊曆八月二十日) 庭中
九月廿一日(舊曆八月廿三日) 彼岸の人
九月廿二日(舊曆八月廿四日) 甲子

さる雜誌にこの月(九月)葡萄柿初て店頭にあらはるると見えたれど柿は尙ほ小さし、まづは新十月の物とすべきか
されば此句も澁柿は今年は早く生りて厄日ごろには既に枝頭に在りて矢張暴風に吹なやまされたりといふ意に解すべきかと思はるれど柿の生る時節明かならざれば尙ほ疑ひあり追つて考ふべし
或は今年は風年にて風多く吹きたれば風に吹かれたることかなといふ意にて必ずしも厄日の暴風のみいふにはあらぬにやから解されぬにてもあらぬやうなり

孫が跡とる祖父の借錢

前句は兎に角風の吹荒らしたる跡の景なれば荒涼の趣あるべし其天然の荒涼の趣に人事の荒涼の趣と對し祖父歿して孫が其跡を取りたれどかたの如き貧乏にて借錢の外は何も遺されし物なく偶々あれば背戶の柿の木なれどそれも澁くて食ふに堪へず加之も今年は痛く風に吹荒されたりとて澁柿の生る柿の木の主の身の上をうはさせしにや

脇指に替てほしかる旅刀

祖父七十ならば三十の孫もあるべけれどたゞ孫といへば何となくをさなきやうに思はるゝも人情なるべし、されば此句も前句の孫といふを幼き人と見做し未だ物の心を能くもえ辨まへざる程の年なればわが持てる小脇指に替へても旅人の指す旅刀の手丈夫に出來たるを珍らしがりほしがることよと也、旅刀は常指すべきものにあらねば旅をすることもなき身には用の無き筈なれど只珍らしさに見る物ほしと思ふ頑是なき心なり貧乏所帶を讓られたる孫のかばかりをさなくて如何にしてか此からき世を渡るらんと覺束なくもあはれなり

煤をしまへばはや餅の段

孫は用もなき旅刀なんどを欲しがりて夢

かやうに日を送りゐる中月日は白駒の隙を過ぐる如く早くたちて煤拂を仕舞ひたりと思へばもはや餅搗の用意せねばならぬ段になりて今年もはやかぞへ日になりたるにかやうの有様にては如何にして此大晦日をこすやらんいと覺束なしといふ意にや

勝ねはいやぢやあの旅刀が欲しいなどいひてすねる陽氣なる心と煤拂よ餅搗よとあたふたする忙がはしき世様とを對照したるところに趣あるべし

約束の小鳥一さけ賣に來て

正月の用意に註文したる小鳥を一提賣りに來たるなるべし

十里ばかりの餘所へ出かゝり

金の才覺などに十里ばかりの田舍へ行かんとて今草鞋など穿きて出かゝりたる所たりなか〳〵小鳥などに取合うてはゐられぬと買主の上の噂也

笹の葉に小路埋れておもしろき

前句は忙がしき浮世の人の噂なれども之をは閑人の風流沙汰に取做し十里はかりの餘所へ旅せらるゝは俳諧の運座などありて招かれて行かるゝや笹の葉に埋れておもしろき趣ある小路に草庵を構へてゐられる身分なれば用というても其樣の事ならんといひ紛らしたり

あたまうつなと門の書付

その草庵の門にかやうの書付あり

ふるされし女の髪か枯柳

たのみある中の酒宴や花の蔭

むかしおもほゆる紋所とて

ねび人の白髪かぞへむ年のくれ

年寄りたる人

鐘氷る夜や小按摩の下駄の音

鶯や隣の娘こち向いた

春の夜や物に狂へる女あり

春の夜の風なきに散る櫻花
かつきてこそは歌よませ君

春の夜のともしひ細うなりゆくを
怨みてともになかむ人もかな

なつかしき文に包みてたひし花の
うつろふ色のうらめしきかも

おもひほそる小指を玉の環の
ひとりとぬけて春老いにけり

三十九年八月中

夏の夜を豆腐ないかと問うてみる

みしか夜を乳呑兒の獨り起居たる

日盛や蟻のもてゆく蟻の屍

落あへぬ病葉一つ桐畠

いかめしき冠木門あり百日紅

月暗しそこらに團扇鳴らす人

物干に白き浴衣や芥子の花

干あへぬ浴衣の月や芥子の花

暗き方に艶なる聲す夕涼

かへりみればそよや夏帯のたよやかに

夏帯絽縮緬を顧みて目に暑きかな

かや／＼と門通行くや夏の月

五六人通り過けり夏の月

象なんど酸漿ほどの汗すべし

山寺の和尚戀しと打砧

春三日おらか女房はよい女房

蟬鳴くや鄰の謠きるゝ時

きり／＼す妻蛼と書付けてん

篠笛や暗にまきるゝ夏帽子

丙午元旦日占

對古畫

水しよろ／＼小松許多の初日出

對水彩畫

むらさきの雲の匂や初日出

初日出白き頭をつきならべ

行年の厨のらめく灯かな

物の具をかなぐり棄てて清水汲む

君を松に時雨そさむき此夕

庭深く寄こそりけり菊の花

白菊の葉裏そよふき露たから

白菊や何の蟲とも知らぬ蟲

垣添をくれのこりける白菊や

白菊やうしろは暗き建仁寺

菊の香や黄昏時の冷心

落日の浪打際や散椿

つく／＼と棚をさかりし瓢かな

菊の下藥府なんと二三本

菊の香やむかし思へは不知同志

添竹に何をかをらん菊の花

君か代や十日は菊のかれ始

菊の香やむかし偲ふは花の撚

つるされて案じ顏なる瓢かな

物思ふ身をつるされし瓢かた

いとはしな露と散るとも蛼の
音をのみなきて幾夜ふる身は

述懷　露もちれ萩もしをれようき秋は
白露に蛼咽しめすらん

蛼　草の露蛼咽を濕すらん

蟲　蟲啼くや草庵の灯のもるゝ時

芒　幽靈の裾模樣なら絲薄

秋蚊　秋の蚊や日ことに細る老の腕

冬　うとん召すや涕すゝりかけ〳〵

秋夜　秋の夜を新内語る男かな

水仙　水仙や白衣の比丘のうしろつき

冬月　頭巾着た人に逢ひけり冬の月

秋野　秋の野や片足切れたる藁草履

今朝の秋隣の庭ののそかゝる

インキして何と書くやら壺菫

鶯の從妹なるらん杜鵑

默然として門を出れは秋の月

鶯にかそか物干竿の倚

不眠の秀才終宵獨蛼を憐む

蟋蟀啼くやその狹莚の片ほつれ

夕顏の花散る宿や小酒宴

立秋

秋立つと人のいへはや秋のたつ

秋立つやこれから此方の柿膾

ひよつこりと門を出つれは秋の風

燈下讀書

蟲鳴くや短檠二尺離騷經

眼鏡して何と書付秋のくれ

年譜

元治元年

二月三日、江戸市ケ谷尾州上屋敷内に生る。父、長谷川吉數、母、靜子。辰之助と命名さる。嫡子なり。

明治元年

十一月、母に伴はれて尾州名古屋に赴く。

明治四年

八月二日、名古屋學校に入學、林正十郎および、佛人ユウリエーに就きて佛語學を修む。

明治五年

九月二十九日、名古屋學校を退學す。

十月十六日、歸京。麹町飯田町舊消防屋敷跡に住す。

明治八年

五月六日、島根縣吏に任ぜられたる父に伴はれて其任地松江に赴く。

六月十日、松江相長舍に入舍、內村友輔に就きて漢學を學ぶ、又、松江變則中學校に於て普通學を受く。

明治十一年

二月二十六日、相長舍及び中學校を退く。

三月三十日、歸京。祖母と共に四谷左門町に住む。

五月二日、森川塾に入塾、代數學を學ぶ。

十月三十日、森川塾を退く。

明治十二年

二月二日、芝愛宕下濟美黌に入學。高谷龍洲に就き漢學を學び、傍ら鏡光照に就き數學を學ぶ。

明治十三年

十月三十日、退學。

明治十一年よりこの年まで三度陸軍士官學校に入學を志願せしも、視力に缺くるところありて志を得ず。

明治十四年

五月二十五日、舊外國語學校露語科に入學。

明治十八年

五月、父母歸京。

九月、神田猿樂町に移る。

九月二十一日、舊外國語學校、東京商業學校に合併せられしため、改めて其露語科第五年に轉ず。

明治十九年

一月十九日、東京商業學校露語科を退學。

一月二十四日、初めて坪內逍遙氏と會す。

此年よりゴーゴリ・ツルゲーネフ等の作品の飜譯を試む。又、ダンバー、イーストレーキ等に就きて英語學を學ぶ。

明治二十年

七月、二葉亭四迷の名を以て『浮雲』第一篇を出版、名義假に借る。

明治二十一年

二月、『浮雲』第二篇を出版。

四月、『學術と美術との差別』を『國民の友』に發表。

七月、八月、『あひびき』を『國民の友』に譯載。

十月、『めぐりあひ』を二十一日創刊の『都の花』第一號に譯載、引續き第六號に及ぶ。

此年、櫻井女學校に聘せられて文學を講じ、僅々二三ケ月にして罷む。

明治二十二年

四月、『文學の本色及び平民と文學との關

「國民の友」に發表。

八月十九日、内閣官報局出仕。初め英字新聞の飜譯を擔任し、後露字新聞の飜譯を兼掌す。

十月、「浮雲」第三篇を「都の花」第十八號に發表、引續き第二十一號に及ぶ。

此年、公務の傍ら、「出版月評」を編輯す。

明治二十六年

十一月、内閣屬に任命さる。

明治二十九年

十月、飜譯集「片戀」を出版。

明治三十年

一月より三月まで「肖像畫」を「太陽」に譯載。

四月、「一夢かたり」を「文藝倶樂部」臨時增刊「小說八家選」に譯載。

四月より十二月まで「うき草」を「太陽」に譯載。

十二月二十七日、官を罷む。

明治三十一年

一月、「猶太人」を「國民の友」に譯載。

七月、「親ごゝろ」を「文藝倶樂部」に譯載。

十一月、「くされ緣」を「文藝倶樂部」臨時增刊「花すゝき」に譯載。

十一月二十一日、海軍編修書記に任ぜらる。

明治三十二年

一月、「酒袋」を「文藝倶樂部」に譯載。

九月二十七日、東京外國語學校教授に任ぜらる。これより先き、一時、囑託となりて陸軍大學校に露語を教授す。

明治三十五年

五月二日、東京外國語學校教授を辭す。

五月三日、東京出發、ウラジホストックに赴く。

十月七日、ハルピン、旅順等各地を歷遊して北京に着し、十六日、舊友川島浪速氏の推輓により京師警務學堂提調となる。

此年、「わからずや」を「文藝界」に發表。

明治三十六年

七月十八日、提調を罷む。

七月二十一日、北京出發歸朝。

九月、腦貧血症を病み、此冬より翌春にかけて市外田端の閑居に靜養す。

明治三十七年

一月、「黑龍江畔の勇婦」を「女學世界」に發表す。北京より歸朝後初めての作なり。

二月、「四人共產團」を「文藝界」に譯載。

三月、「露西亞の婦人界」を「女學世界」に發表す。

三月四日、大阪朝日新聞社に聘せられて、東京出張員の任に當る。

七月、飜譯集「つゝを枕」を出版。

此月、「四日間」を「新小說」に譯載。

明治三十八年

一月、「露助の妻」を「新小說」に譯載。

二月、三月、「猶太人の浮世」を「太陽」に譯載。

此年、「昨今のウヰッテ」「其後のウヰッテ」を「東京朝日新聞」に載す。

明治三十九年

一月より三月まで「ふさぎの蟲」を「新小說」に譯載。

二月、「小按摩」「根無草」を「東京朝日新聞」に發表。

四月、「灰色人」を「東京朝日新聞」に譯載。

五月、「むかしの人」を「早稻田文學」に譯載、又、「予が言文一致の由來」を「文章世界」に發表す。

七月、「エスペラント」を出版。

九月、「エスペラント讀本」を出版。上揭二書は日本に於けるエスペラント語學書の權輿なり。

十月、「エスペラントの話」を「女學世界」に、

「そゞろ言」を「歌舞音曲」に、「余が飜譯の標準」を「成功」に發表す。
十月十日より創作「其の面影」を「東京朝日新聞」に連載、十二月三十一日、第七十八回をもつて完結。
此年、「老の繰言」「某政治家の「かぐや姫」評」「ひとり言」を「東京朝日新聞」に載す。

明治四十年

三月、「二狂人」を「新小說」に譯載。
又、此月より五月まで「狂人日記」を「趣味」に譯載す。
四月、「出產」を「東京朝日新聞」に載す。
又、「其面影」を出版。
七月、「乞食」を「趣味」に譯載。
十月、「文談五則」を「文章世界」に、「ゴリキーとアンドレーフの近業」を「趣味」に載す。
十月三十日より創作「平凡」を「東京朝日新聞」に連載、十二月三十一日、第六十回を以て完結。
十二月、飜譯集「カルコ集」を出版。

明治四十一年

二月、「志士の末期」を「婦人世界」に、「私は懷疑派だ」を「文章世界」に載す。
三月、「平凡」を出版。
五月、「椋のミハイロ」を「趣味」に譯載。
六月、「愛」を「趣味」に譯載、又、「予が半生の懺悔」を「文章世界」に發表。
六月十二日、露西亞より歸朝したる後藤男爵を敦賀に迎へて米原まで同行、十七日、神戸出發、大連を經て、露ヘテルブルグに向ふ。この途上、新任駐日露西亞大使マレーウヰチ、及び、倫敦より歸朝し來れる小村外相に會す。
七月、「血笑記」出版さる。
七月八日より十四日まで「入露記」を「東京朝日新聞」に連載。
七月十五日、露都着。幾何もなく宿痾の神經衰弱症を發す。
九月、「うき草」出版さる。
歲暮、神經衰弱癒ゆ。

明治四十二年

二月十四日、ウラヂーミル大公の葬儀に列し、疾を得。
三月、「露都雜記」を十七、十八兩日の「東京朝日新聞」に載す。是絕筆なり。
四月五日、疾の爲歸朝を決し露都を發す。
四月九日、伯林、アントワープを經て倫敦着。即日賀茂丸に搭乘。
四月二十二日、ポートセイド着。病漸く革る。
五月六日、コロンボ着、病危篤。"Worse, very weak"の飛電故山の友を驚痛せしむ。
五月十日、午後五時十五分、ベンガル灣(北緯六度三分、東經九十二度三四分洋上に逝く。
五月十三日、賀茂丸シンガポール着。訃音の東京に送らるゝと共に、遺骸は、午後五時五十分、埠頭を距る三哩なるパセパンシャン丘巓にて荼毘に附さる。
五月二十九日、賀茂丸神戸入港。
五月三十日、午前九時、遺骨新橋着。
六月二日、午後一時、染井墓地なる信照庵に於て神葬式を以て埋葬。行年四十又六。

嵯峨の屋御室集

序詞

嵯峨の屋主人

私は小説を樂しみながら書きたいと思つて居て其が出来ず、いつも生活の為めにのみ書て居ました、其故私の小説は自分にさへどれも氣に入らないのでした、然し此篇に載せられるものは比較的自分に氣に入つて居るものでした

久しく文壇と縁を絶して居た私が、四年振で昔の自作に相對するは、古人に邂逅した樣な氣もするのでした、

野末の菊

夏休み！　嗚呼何んと好いた語ではありませぬか、此夏休みといふ語は、小さい學生諸君の愛らしい胸は唯此語の響を聞いても早小波を立てるであらう。夏休み、と口で言へば僅一言、なれど内に呼吸して居る無量の情は汲めども容易には盡きますまい。世の學生諸君が一年の間螢雪の窓に居て、身を書物の中に埋めて居た後、向う六十日の間は骨休めの爲め、鋭氣を養ふ爲め、將來は更に一層健かな精神を以て學藝を勵む爲め、新鮮の空氣を呼吸して來る樣にと、許された時の心持、まあ如何樣であらう？　都に家のある人の事は姑く言はず、寂しい片田舍に兩親が居て而して一年の間其慕はしい貌も見ず、其懷かしい聲も聞かず、唯一片の信書に折々愛度氣ない愛情を寄せて、流波行雲を羨んで居た者が、今此六十日の間朝夕父母の膝下に居られる身となッては、其喜びは如何樣であらう？　林に歸る籠の鳥、山に入る檻の獸、實に譬ふるも愚、其に付けても此夏休みは少年の爲めには誠に限のない愉快な時です。此處に小さな行李を携へた一個の少年が高崎行の汽車へ乘ッて都をあとに旅立ッて往くが、是は此少年が東京へ出てから初めての夏休みで而して其休暇中を我家で送らうと、今故郷へ歸るのであります。嗚呼故郷！　此故郷といふ言葉も實に懷かしい言葉で。越鳥が南枝に巣をくひ胡馬が北風に嘶くのは思へば實に愛らしいです。我々の心は唯故郷といふ響を聞いても直に波立つ、我々の心は磁石の北を指す如く常に故郷に向いて居る。月夜のかくれんぼ、冬の日の竿投、向う山の木實採、裏川の魚釣、總て是等我々の幼時の記憶では、常に故郷の山河を纏ッて居る。嗚呼思へば愛らしい故郷、其處には又懷かしい父も、慕はしい母も、床しい祖母も、親しい兄弟も、愛らしい姉妹も居ると思へば一層愛らしい故郷：：少年は折々汽車の窓から顏を出して東北の空を眺めて居るが故山の雲はまだ見えぬ。然し汽車の一轉する毎に少年の故郷は近付いて來る、而して近付いて來ると思ふ毎に少年の胸は波立ッて來る、嬉しさと待遠しさが胸を一杯に閉込めて居る。矢よりも早い汽車の走りも牛の歩みより遲く見える。なれど其實汽車は唯もう一轉瞬の間に、そら電信柱、そら藁小屋、そら叢雲、そら樵夫、そら田舍娘：：山も、河も、森も、堤も、田も、畑も、村も、宿場も、見る見る通り過して早故郷へ近付いて來ました。少年は窓から貌を出します。頰を撫でて往く涼しい風、其は故郷の方から吹く風。目に入る向うの白い雲、其は故郷の山の雲、此子の魂はもう自分の家に飛んで居ます。

其内に汽車は少年の居村近いある停車場で止まりました。其處で少年はかばんを提げると急いで汽車を下りて、直に人力車を傭ひ我居村へと走らせる。かばんの内には眞心を籠めて求めた東京の土產、祖母が目を細くして嬉し涙を溢しさうな、弟が嬉しがッて飛びはねさうな、種々な土產が這入ッて居る、而して此土產を貰ふべき人達は其內に少年が歸るであらうと、每日心待に待ッて居ます。

間もなく車は村へ這入りました。と見れば向うから一個の農夫が煙管を腰下りに街へ鍬を肩にして來た、近付くまゝに善く視れば、是は少年の家の作男で。貌を見合せるや否やさも嬉しさうに。「やあ戻らしッたか、此間中から皆樣

が待ッてゞござるだ。私先へ、あえッて注進すべえ。」と何時も變らぬ老實者、早先へ驅拔けて往きます。

車が門前で止まッた時、「兄ちやん〳〵、」と愛らしい聲を先に立てゝ、六七歳の小兒、此頃の日に燒付けられ色は一層黑くなッて居るが、目の涼しい利口さうな、善く肉付いて健かさうな小兒が門内から走けて來ました。株切にした頭髮が風に逆ッて飜いて居る愛らしさ、まだ兄の少年は車から下立ッた許りの所、其處へもう甘える樣な調子で「兄ちやん！」と、言ひながら嬉しさうに取りすがッて……小さい手で兄の腰をかゝへる樣に……取りすがッて貌をすりつけ、下から貌を覗く可憐な風。兄は其儘に抱き寄せて、「如何したえ、」と言ッて弟の額へ自分の額を押當てたが、此時兄の右の手は弟の柔かい、美しい綠色の髮毛を撫でゝ居る。此兄弟の貌と貌、見れば實に瓜を二つです。其中に玄關口へちらりと姉の姿、駒下駄の音高く、此方へ來る、少年も姉の方へ近付く。「姉さん！」「匡さん！」一言葉は是ッ切、なれど二人の貌を見れば、莞爾とした其中に無量の喜びの情が見えて居る、實に顏ばかりではない、いそ〳〵とした其體全體も……

「毎日待ッてたよ。」と言ッて姉が手を出すと、匡といふ少年は無言でかばんを渡します。

「兄ちやんが〳〵！」弟が先へ走込むと、祖母と母とは早玄關へ出て來ます。

「只今……」

「お歸りかいまあ……」

と僅一言……實に門に倚り閭に倚ッて我子を待つのは母の情、まして是は一年の間別れて居た親と子……母は嬉しさに胸一杯で口もきかれません、漲る許りの愛情が母の心には蔓ッて突出る許りの有樣です、「おゝ我愛らしい者よ！」と西洋なら互に相抱いて接吻を與へる所です。然し日本の風俗は許しません、其代り内に籠ッて居る愛情は却ッて強いです。母の目は早涙をたゝへて居る、祖母も喜びには洩れはせぬ、嬉涙をこすり〳〵莞爾々々とした顏で、孫の樣子を見廻しながら、

「大層大きくなッてまあ。如何樣に毎日待ッて居たらう。よく其でも一人で、凶事でもなければ宜いが、と案じて居たが。まあ早く奥へお出で、さぞ足勞れたらう。」

「父上は？」

實は、來たが父が見えぬ故、匡はもう母に問ねます。

「父上は用があッて深谷まで入らしッたが、もう今にお歸りなさらう。」

匡は少し拍子拔かした樣であッたが、然し嬉しさは少しも減じはせぬ。懷かしい人達に其身を圍まれ、愛らしい弟を抱いて居る、其に又弟が後から頭へすがり付いて見たり頭の毛を引張ッて見たり、少しも凝としては居ず、種々と戯をして居るが、其が匡の心の樂しい原因となッて居る。母は匡と弟の顏を等分に見ながら、

「如何だね金坊、嬉しいかね、兄さんが歸ッて。嬉しい？ 如何も此間うちから、兄さんは何時歸るんだ何時歸るんだッて人許り責めてるのさ。其にお絹はお絹で(姉の名)お前の室を二三日前から悉皆掃除して待ッて居るのさ。今に往ッて御覽、綺麗になッて居るから。」

匡は答の代りに自分の頸に取りすがッて居る弟の手を、情を籠めて、締め付けて居る。

「それはさうと、渡邊でも誰もかはりは無いかね。」と匡の事に就いて萬事監督を任してある家の事などを二つ三つ話して居る間に、下女下男も小旦那の歸宅を聞付けて皆歡びに來る。祖母は年寄の氣の弱き、斯る時にも何かによく氣が

謝きます。

「作藏や、まだ風呂は沸かないかね？　あゝさうかい、では早く沸かしておくれよ、匡も足勞れて居ようから。お鳥や、お前少し待ツとくれ。ねえ匡、お前何が宜いね、何か御馳走をしてお貰ひ、好なものを。え、何んでも？　おや、大層おとなしくおなりだね、其様な事を言はないで何が宜いね？

是から何が宜からう、彼がよからう、此子は彼が好であツた、是が好であツたと、母親と祖母とは評議とり〴〵。匡は姉の方へ向いて、

「どら、室へ往ツて見て來ようや。

立上れば弟の金次郎は早くももう先へ立つ、姉も後から續いて往く。

嗚呼室！　此室も匡が生れてからや去年の間、去年の春まで起臥を共にして居た馴染の室で、一目見ると懷かしい。其飾付も去年の儘です。壁にかゝツて居るわしんとん、ぴようとる、なぽれおんの寫眞も、南窓の下の一脚の机も、机上の文房具も、向うに竝んで居る二三の本箱も皆去年の春出立した時の如く、少しも變りなく飾付けてある。

「姉さん。悉皆元のまんまだね。

「あゝ、お前が好きな様に飾付けたの。

匡は感謝の情を目元に籠め、姉の貌をちツと見たのみ、別に言葉はなかツたが、然し無言の滿足です。

「姉さん。桃の木は如何したらう、去年植ゑた？

突然思ひ出した樣に問ひかけた。

「桃の木？　あゝ大きくなツてよ、大變に。往ツて見よう。

姉が先へ立てば、予が先だと弟は袖下を潛ツて走拔けます。

「あら、危いねえ金ちゃん。靜にお出でよ。周章てて。

母親は臺所に出て、斯うして彼してと下婢に指圖をして、父自らも手を下して匡の爲めに饗應の珍膳を調理して居る。一個取殘された祖母は。

「おや、匡は何處へ往ツたらう。眞に小兒といふ者は活潑な者だこと、もう居なくなツてさ、遠い處を歩いて來ても足勞もしないと見える。湯が沸いたといふに這入れば宜い。

と家内中を探して居ると出遇がしらに下女のお鳥、貌を見ると、

「お前、匡を知らないかね？　さうかえ、お湯が沸いたからお這入りと、さう言ツて來ておくれ。

匡姉弟三人は裏庭の前へ立ツて頻りと何か話して居ます。

「やあ、非常に大きくなツたなあ。先には僕の膝あたりまでしきやア無かツたが……如何も生長つものだねえ。

「さうねえ、お前の丈より餘程大きくなツてねえ。

「兄ちゃん。私よりも大きい、私よりも。

と言ツて居る所へ下女のお鳥が來て、湯に這入る様にといふので三人は父家へ這入りました。

祖母の指圖で姉の出した浴衣、其を抱へて匡は風呂へ這入ツたが。其中に父も歸ツて來て親子久しぶりでの對面。此一家族の今日の晩餐は定めて樂しい事であツたらう。

夜に入ツてから親子姉弟六人の者は風入の好い南向の座敷へ集まツて話を始めました。時に十六日の月は小柴垣を這ツて居る朝顏の葉の繁みを分けて、なよ竹の影を緣側に止めながら座敷の半までさし込む。其に庭の築山も、泉水も、立樹も、小柴垣も、外庭の生垣も半面一杯に月光をあびて而して蔭の方を此方へ向けて、すねたといふ樣子。然し南の方から吹いて來る涼しさうな微風がなよ竹の葉をそよがせる時、葉越の月が晃々として竹の葉に亂れた其姿、實に

僕等と[illegible]言葉はありませぬ。
殊に今宵は[illegible]の親子が[illegible]久しぶりで一つに寄り打くつろいで話をし□無量の樂しみを感じて居る、其心を以て見る月故、一層常より□清しく見える、而して清しく見える丈心も又爽かになッて、樂しさうな微笑が顔中に行渡ッて來る、而して其又微笑がほのめいて居る脣頭に上ッて來る話はと言へば、明けて言へば、匡が話す東京の噂と、祖母などが代る〴〵にする田舎の噂、なれど一言で其情を言へば、實は心中の愉快を分けて居るので、快樂の分子を取替はして居るので。
然し父親は縣會議員でもして居る丈あッて、中々感心なものです、斯る時でも我子の教育に注意して居る、匡の話に耳を傾て、我子の尊ぶ所は如何なるものか、其好む所は如何なる事か、又如何なる物に始終目を注けるか、而して其目の注方は如何様か、即ち此一年の間に於て其知識道德が如何變じたか、其を伺はうと注意して居る、而して時々なんでもない様に必要の問をかけて居る。
「其では何か、時々運動會などをやるのか?
「えゝ、やります。
「むゝ、朋友も出來たらうの? なに大勢、其は宜い、然し何様な人と最も近しくするかの?
「何様な人ッて? 三人許りあります。
「三人? 其は宜かッた。何様な人だの、其人等は皆よく出來るかの?
「えゝ、出來ますとも、一個は大河といふので、一個は石山、一個は宇津木といふんだが皆出來ます。其で皆深切です。
言ひかけて片頰に微笑を含み、少し臂を張ッて儼然となり、叔父を睥睨するといふ其風、朋友には、えらい奴があると言はぬ許り、實にあどけない傲貌をして、
「大河ッてのは今年十八だが非常な才子です。其で謀略があッて大變に辯が宜いんです、だから大河が演説でもしようものなら學校中動く位です。其で始終喝采して、なんです、日本の書生は輕躁で不可ッて、其で奴は代言人になるッて言ッてるんです。
「代言人、其は宜からう、辯が宜ければ。
「いゝえ。辯が宜いからぢやアないんです。米國なんぞの政治家は大概代言人が多いから、だから、あの、大河も代言人になッて、其から今に代議士になるッて、其から又猶一歩進んで内閣に入るッて。入ッては内閣の大臣となり、出では在野黨の首領となるッて。だから何んでも今でも隱然[illegible]を以て任じて居るんです。
「むゝ其は感心だ。石山といふのは?
「石山は活潑な奴です。だから武官になるッて言ッて居ますさア、武官が彈丸雨注の間に立ッて自若として馬上に劍を揮ッて、兵士を指揮して居る所を見ると、實に[illegible]に立つッて。僕は干城の武官になるッて言ッて居ますさア。
と言ッて愉快さうに笑ひながら、
「實に活潑な奴ですぜ、其は辱しめでも受けようものなら怒りますぜ、先きが[illegible]ない間は其は亂暴です、硯でも何でも叩き付けるんです。運動會なんといふと、何時でも[illegible]か先立です。其で妙ですぜ、其様な亂暴で居て其で算術は非常によく出來るんです、だから時々威張ッてます、歐洲全[illegible]を驚かしたなぽれおんは非凡の數學家であッたが、又千古の豪傑であッた。僕も數學家だから又千古の豪傑であるッて。
と言ひかけて急に頭を少しかしけ、張臂をゆるめて微笑しながら、
「溫[illegible]なのは宇津木だ、[illegible]はまだ十六だが學才があるんです、文も上手だが詩に至ッては實に巧です。[illegible]は言ッてますさア、僕はまだ何になるか分らないッて、まだ目的は定めないんです。

然し普通學を修めてから目的を定めるッて言ッて居まさア。だから四人寄ると實に面白いんです、何か企てるなア大河なんです、大河が企てては僕に、私に相談するんです、其から實行となると何時でも石山が先鋒なんです、宇津木は只其あとへ付いてやッてるんです。

「むゝ、其は良い朋友だ。仲よくするが宜い、目的のある者は何時か達すると言ふから皆今にえらくならう。時にお前は如何だの、目的を變じはせないか、政治家が好になりはせないか？

父が笑ひながら問ひかけました。

「いゝえ。僕は政治家なんざア厭です、人間の仕事はまだ外にあるんですもの。

と言ひかけて突然思ひ出した樣に、

「父上、僕は來年の春は愈農學校へ這入りますよ。其から農學校を卒業すると僕は‥‥

又突然、

「父上。あの日本の長子相續法ね、彼は僕は、私は不公平だと思ふんです、だから私は地面でも何んでも家の財産は悉皆二分して、一を金坊に一を私に下さい。其でなけれやア不公平だ。

父は微笑ひながら、

「さうか。其方が宜いかの。

―宜いかのッて、其でなければ不道理ぢやアありませんか。何も兄だからッて、弟だからッて社會上の視點から見る時は、一個人として見る時は、權利に差違はありませんもの、だから、あの同じ子でありながら一人に與へて、一人に與へないッていふ理はありますまい。私に半分下さい、さうすりやア僕は今までの樣な耕作法は悉皆廢しちまッて、どん／＼器械を利用します、今まで十人も二十人も掛ッてやッてた事なんざア馬一疋、人一個位でやらせッちまふわ、而して其領地の眞中へ自分の家を作ッて、其周圍へ小作人の家を作ッて、其周圍へ杉か何かを圍ひに植ゑて、一村を成立てて而して何事も其村の者は助け合ッて、成る可く利益を平均する樣にして、なんでも共和政の樣な村を一つ拵へようと思ふんです。

「あは／＼／＼、其ではお前は共和黨か。

父は輾然として笑ッたが、是我子が極めて實際に疎い、唯自己の想像で描いて居る世界を將來は直に實際に作らうといふ、其事が可笑しいから笑ッたのではない。實際に疎い、少年血氣の空想の中に氣象の面白い所もある故に驥子鳳雛とは我子であらうと子には目のない親心、滿足から出た笑であります。祖母と母には匡のいふ事は十分其上は分りませぬ、が其分らぬ所は此子の學問が上達した故でと偏に喜んで、嬉しさうに微笑ッて居る。姉は最前から笑を含んで匡の話を聞いて居たが、此處に至ッて又聲を上げて笑ひ出した。一人弟の金次郎は母親の膝を假臥の床、蝶となッてたわいはありませぬ。

是が夏休みで歸宅した晩の有樣。其から二三日といふものは竹馬の友、親類の家を往來して居たのみ別に話も無かッたが、四日目の朝、匡は熊ケ谷在の乳母の家へ往ッて來ると言うて家を出た。其處までは道程一里半餘り、二里近くあるです。

此乳母といふのは元匡の村内の者で、匡が二歲の時まで乳母となッて居たが、世話をする人があッて熊ケ谷在の百姓太郎作方へ嫁入しました。嫁入してからは夫婦とも匡の家へ出入して居たが、二人とも至ッて老實な質で、匡が五つ六つになッてからも、時々匡を貸してくれと言ッては我家へ連れて往き、三日も四日も止めて歸さず、我子の樣に愛して居た、其故匡も二人には又親しんで居た。二人の間に小兒が四人あるが、其中の初子のお糸と云ふのは當年齡が十六歲匡とは僅の差違の事故、最も親しい朋

友で。匡は今此乳母の家へ往く所です。

家は熊ヶ谷宿から横へ田圃道を凡そ十町餘も這入つた銀杏樹と云ふ村にあるので匡は今此家の杉垣に添うて行くと日蔭に二三人の女の子が、小兒の守をして居たが、其中の一人、髮の後れ毛を背中の子の目へ這入らぬ様と、汚い手拭で後の方の髮を包む様に向う鉢巻をした十歳許りの女の子が箒を片手にしながら立つて居たが、是は乳母の三女でお竹と云ふのです。

「竹公！

と匡が呼びかけると、其處は田舍の子です、喫驚して此方をふり向いたが、赤面して物は言ひ得ません、匡に日にやけた顏を見せながら錢車を一寸廻して見て、鼻で音を立てて笑つて居るのみ。然し匡が其儘家の方へ往きかけると、自分も後から續いて來た。

手拭を被ッた二十八九の女が向う向きになッて、物を乾さうといふ積りでもあるか、收納場へ蓆を擴げて居たが、足音に此方をふり向いた、是は乳母で。

「おや、匡様。

といふと兩手を擴げて立迎へました。匡を抱きかゝへようとしたらしく見えたが其でも匡の大きくなつた姿を見て、又慌てたッと手をおろして、例の田舍者のゆる〳〵とした調子で、

「よくまあござらッしやッたなア！

と感歎の聲、頰は微笑で彈まッて居ます。

「まらア大きくなッて。もう毎日旦様と噂べえして居申した、もう匡様が歸らッしやらう、歸らッしやらうッて。

と言ッたが喜悦の情に心を支配されて上れといふ術も知らず、唯直立したまゝ匡の體に見とれて居ます。

「雙親はなかッたかえ、爺も丈夫かえ？

「はあい、丈夫でございまアすよう。まあ上らッしやりませ。さあ、匡様、さぞ足勞れさしッたらう、さあ此處が宜いだ、此處が、此處が一番風入が宜いだ、まあ、待ちなさろ、えら汚ねえから蓆ら敷くから。

急がはしく蓆を敷延べ、其處へ匡を坐らせて、

「さぞまあ暑かッたんべえ、裸體になんなされ、裸體に。

言ひかけて土間に居るお竹を見、

「こら、竹ようッ、予畑へ往ッてなう爺にさう言ッて來うッ、高谷の匡様がござッたから歸らッせえッて。早く往ッて來う。」匡に向ひ、「何時ござらッしやッただ？　十二日にはッてなあ。其やまあ定めし御隱居様や、御新造様が喜はしやッたらうなあ。此間[illegible]上ッたときも來月は匡様が歸るからッて言はしッたから、歸ッたら[illegible]來さッしやらうッて、予がでも待ッてだ。よくまあ、御座らッしやッたッけ。一人でござらッしやッたか？　あに？　一補で東京から？　はッてまあ、えらくなんなすッたなよ。[illegible]に小さかッたッけが、[illegible]を一[illegible]なさる様になッたあす。

と言ッてもう涙ぐんで居ます。

間もなく夫の太郎作も歸ッて來る、種々とまあやかな挨拶もある、太郎作は[illegible]に[illegible]を掛けた儘でまだ上りもしません。[illegible]しさに[illegible]の[illegible]子も高く、

「其に此正月は手がみを下すッて有難うござえました。私らあ、はあ、盲で皆むく讀めましねえから、お糸のあまに讀ませましただ、其から又返事も彼がに書かせましただ。よくまあ彼様に種々なことに心付いて書かれて下さッりました、彼當座は毎日人さあ來ると彼話のうして自慢さあ。はあい引女ッ子でござあすか、如何いたしてえ、雌の子は雌でござあすから、ろくなことは出來ますめえが、其でも、はあ、今度は學校も卒業とかをしました。なに、彼も如何せ私らが子だから、讀書は出來ねえでも宜いから、學

校も下げべえと言うたんだんけんど、學校のお先生樣が今下げるなあ惜しいこんだ、もう少とべえ上げて置くがえい、と言ッてくだッしやるから、其で上げて置きました。はい〳〵左樣でございますよ。其でもはあ有難い事には彼が此處等での學者さ、隣近所で手紙を來たとか父あ出すとかと言ふと、何時も家へ持ッて來て彼がに讀むでがあさあ。はい〳〵。

少年を捕へてまで、莞爾々々として我子の自慢、其も律義者の憎氣なさ。乳母は丈の方に向ひ、

「如何しただね、お糸は、何故來ねえだね?

「來うと言ふけれど、唖無言ッて笑ッてべえ居るだ、年い一つとッたあから匡樣に遇ふのが恥しいんだんべえ。

「馬鹿あ! あにが恥しい事があるう、初めての人だぢやあんめえし、お失禮樣な。此間中から今に匡樣が來るだんべえ〳〵ッて自分でも待ッてたくせに。こら、竹よう、予往ッて呼んで來う、あん姉を。早く來うッて。

匡はお糸とは幼馴染の事故、懷かしくなくもない、其故父遇ひたくなくもない。太郎作夫婦と話をしながらも、竊に其歸るのを待ッて居ると、稍あッてお竹はかど口からかんばしッた聲で、

「母あ! あん姉は厭だッて、歸るなア。

「厭だッて! 馬鹿野郎、おいねえ奴だ。

匡は此時野心を起した、靜とお糸の後へ往ッて突然に驚かせて、其喫驚した貌を見てやらうといふ、愛度氣ない野心を起した。其故乳母が口小言を言ふのを、宜いよ僕が往ッて見てくるから、と言ッて裏へ出かけて往けば、後からお竹が物珍らしさうに付いて往ッた。お竹が心なく足音を立てるのを、靜におしと途中に止めて匡は一個で近付いて往ッた。お糸は其樣な事とは少しも知らず、衣服の褄を高く褰げて、手拭を頭に被ッて、向ふ向きになッて頻りと草をむしッて居るが。燒付ける樣な太陽の光線は一直線に其背中を單衣の上から照付け而して頸と兩の腕を直にまともに焦して居ます。

匡は抜足をしてお糸の後へ近付いたが、直には聲を立てず、竊と後をふり向いてお竹と目注をして居る。見れば、お竹は小さな手を口へ當てて首をすぼめて忍笑ッて居ます。

お糸は草取をしながらも、考へて居る事があるので、匡の來たのには、少しも氣が附きません。

「糸公!

と突然に聞えた其聲、其言葉、糸公、と呼ぶ者は誰もない、此聲の持主の他は、而して其聲は兼て耳に覺えの聲。お糸は屆んだなり喫驚して此方をふり向いた。ふり向いた其顏、實に野末の菊、藪の中の椿、少しも裝ッてはありませぬ、然し野生の草花は野生の草花で復一種の愛らしい自然の美を持ッて居る。莞爾して手拭をとりながら、「御機嫌よう。」丁寧に頭を下げて、竊と衣服の裾をおろして差俯向いた。見れば其顏は耳まで赤くなッて居ります、けれども匡は氣も附かず。

「お前學校を卒業したッてねえ、えらいねえ。感心だ、此春の爺の手紙眞成はお前が書いたんだッてねえ、大變字も上ッたね。

お糸は少し臆面した樣子で、

「いゝえ、あの、父上が書けッて言ひましたから、其で、あの、書きましたの。

「でも文章はよく出來てたよ。

此處へ、「姉やん、お前らッたまげたらう?」と言ッて妹の竹も來ました、然しお糸は唯笑ッたのみで。

「暑いから家へ往からではないか?

匡の後へ附いて姉妹二人は歸りました。

家ではお糸の父母は匡が來たので大喜び、何を馳走しようかなどと相談して居たが、お糸を

幸ひ話の序ですから此處で一言、お糸に就いて話して置きませう。

お糸は年こそ僅十六歳だが、其擧動は常體の少女とは異ツて居ます。近處合壁の娘達は夜にでもなると、若い者などと一つになツて戯狂ひ、山茶も出花といふ花、其花に人をも浮かせ、又我と我身も浮れて、苦勞心配の味も知らず、空然と日を送ツて居るが、獨り此娘は此樣な少女の仲間へも這入らず、却て其仲間を見ると貌を反むけて、寧ろ卑しむ樣な風をする、而して大抵は家に居て父母の手助をして居る、而して其心も半は成人した人で種々の望みを持ツて居る、而して其望みも世間の娘とは異ツて少しは根が据ッて居る。何故でありませう、森で圍まれた此一村、浮世の風の當の弱い賤ツて居る樣な此田舍、其處で生長ツた此少女が何故他人と異ツた氣象を持ツて居るのでせう？

お糸は學校では何時も第一の椅子を占めて居ました、其故教師も自然お糸をば贔屓する、其がお糸の不幸の種、羨みからか、妬みからか、小さい學校仲間がお糸に向ツて反對の黨派を組織した。此大同團結派は何れも富家のやんちや者で、――田舍で十三四の娘子供を學校に通はせて置くのは多くは富家に限るのです――此あどけない仲間はお糸の風俗の汚いのを嫌ひな傍へは寄らぬ、竝んで机へ坐ツても成るべく離れて坐る、背を突くにも仲間へは入れぬ、若し入れてくれと頼むと、中でも意地のわるい女兒は、寄を顰して拒みます、其他目注、耳語は常の事、譯もない事を種におこも、水呑、虱たかりなどと嘲ります。然し元より根も葉もない兒女の事、お糸が負けて居れば濟むのです、が生來の負けぬ氣の情强者、頭を下げては遊ばぬ、遊歩の時間にも運動場へは出ない。けれど其處は小兒です、時々は窓から顏を出して羨ましさうに人の遊ぶのを見て居る事もあッたが若し仲間の一人と顏でも見合せると直輕蔑した樣な笑をして顏を背むけて仕舞ふ、而して其顏は寂寞として居ます。

ある大試驗前の事でした、親の愛情は深いもので、娘の衣服が汚い故新に一つ拵へてやらうと、貧苦の中で調へた衣服、品は綿南部といふのでした、加之も武州出來の安物。是なら人のにも負けやあしないわと、お糸は嬉し喜んで學校へ出た。が其が又一つの血の騷ぐ種、綿南部！ 兎角此衣服は新しい中は厭はしい惡臭のするもので、此惡臭、其が忽ち小さい仲間の鼻神經に觸れて、少女は恐しい嘲弄を受けた、小さい心はもう堪へられぬ、口惜しさ悲しさ胸に迫ッて、人の居らぬ處で泣き出した、而して夢中で涙を拭きました、衣服の袖で。所が不幸、其拭いた所には藍の痕、是が母親の血を騷がせました、「買ッた許りの衣服、此樣にして、馬鹿！」吠える樣な母親の小言、其も無理はない、其も是も皆彼奴等からだとお糸は血の道を亂しました。斯る譯故お糸は金持厭ひで貧家の仲間を愛した。

此樣に公平を失ッた心、其は年を取るに從ッて愈々横道へそれ込んで行く、お糸はもう其頃あたりから金持の娘と見る時は誰彼の區別なく平氣で話す事もならぬ樣になッた。而して今に見ろ、私が學問をして立派な人になッて、皆を見返してやるからと思ッて居たが其處が妙な譯で、お糸は一方では富貴の人を厭ひながら、他の一方では貧しい人達に免れない卑しい點を爪彈して居る。而して小學校丈の學問を、無鳥郷に生長ツて居るから、餘程のもの樣に思ツて、父母を初め目に一丁字のない近隣の叔父叔母と自分との間には、何處か異ツた所があると思はぬ譯にはならなかツた。其故百姓家から百姓家に嫁入して、田の草を採ッたり、豆を蒔いたり、此樣な事で一生を送るのは厭だ、如

何か學問をして立派な人になりたい、是がお糸の望みです、然し如何して斯う學問を好む樣になりましたらう？ 人から受ける侮辱、是が其心を刺激して立身の途を求めさせたが、隣村の誰彼も我村の誰其も東京へ出ては學問をし、學問しては、立身するのを見て、お糸も學問の內に立身の階子を見附けたので、而してお糸の心には東京が殆んど學問の畑、唯其畑にさへ往けば自然に學問も出來ると思はれた。其故何樣かして東京へ往き、――假令如何樣に浮身をやつしても是非出來る丈學問をして、立派な女になツて、秀才の士に添ひたいと思ツて居る。然るにお糸の心の中へ、秀才となツて現はれる人が、もう何時の間にか出來て居るのです、その秀才の雛形は誰でもない匡、學成り業脩まツた今から幾年か後の匡でした。即ち一言で言ツて見ると、此情の強い少女は自身の勉強で成るべく自身を完全にして、而して其身を愛らしい人に任せ、併せて自分を嘲ツて居た人達に、嗚呼わるかツたと、後悔させようと思ツて居るのです。然し是は野望といふよりは寧ろ好む所の空想です。けれどお糸にとツては甘やかしきツた空想で、是がお糸の命です、是が空想なら隨分眞面目な空想で、而して其空想中匡が悲喜哀歡の源となツて居ます。是がお糸の胸の中、概略此通りであります。

翌日も匡は歸りもせず何話込んで居たが、夕方清涼の風が吹いて來た頃其處等を徘徊して來ようと、お糸を誘ひ出して出掛けました。外へ出ると二人の間にはやがて談話が始まツた。

「匡樣、貴君、今に何をなさる積り、學問してしまツたら？

「私かい？ 私は矢張農業をやる積りさ。

と言ツて是より前四五日、父に話した通り我家の小作人や作男から成立つ一箇の村落を組織して、其一般の風儀を正し其利益を平等に分ち、緩急相救ふ約束を定め、村民の幸福を計る望みであると話し其から又言葉をついで、

「私の朋友には政治家になるといふ者もあるが然し私は政治家はだめだ、政治家になる性質ではない、またならうとも思はない。然し今に國會でも開けて選擧騷ぎが始まツたら、代議士になる望みはないが、選擧者中の有力者にはなる積りだ、一言一行全黨を動す程の勢力者になりたいのだ。英國の地主なんざあ大變勢力のある者だからねえ。私は彼樣な風になりたいのだ、若い代議士なんぞは態々私の意見を聞きに來る、と言ツた樣な人にならうと思ふのだ。代議士になるよりは、代議士を働かせる人の方が一寸上だからねえ。

匡は胸中の空想を愉快さうに竝べ立てて、他人に話すといふよりは自分の心に媚びて居たが、ふと思ひ出した樣に、

「それはさうとお前は如何する積り？ 矢張何時か中言ツてた樣に教師になるの、其とも何處かへ嫁入くの？

「かたづく？

目を見張ツて問ひかけた、不平らしい顏で。

元來此少女の語は田舍語が其性質です、然し東京を慕ツて居る心は其語をも慕ひます、ですから東京の人に對すると自然東京語で語らうとします。但しお糸の心の中で東京語の雛形となるものは教師某の語です、其故此少女の語は田舍娘と自然に違ツて餘り聞きよくはありません、然し匡の耳は其點に對すると聾です。

「結婚くツてえ、厭な事だ、私結婚くなあ大厭ひ、死んでも結婚くたあ厭でえす。今でさへお朋友や何かに皆に馬鹿にされてるだもの、貧乏な百姓が所へでも嫁入からものなら、其こそ一生馬鹿にされるだ。

「では教師になるの？

「はい。ならうと思ッてるですよ。是非勉強して。
「勉強ッて田舎で勉強が出來るかえ？
「出來ませねえ！　とても出來ませねえ！　此様な處でやッたあて高が知れてるですよ。だから、私東京さあ往きたいと思ッて、往きさへかしたら如何かなるから是非往からと思ッて、やッてくれえと言ッたんだけんど、不可ないのです、許さないのです、私一人はやれないッて、我々は我々相應な所へ片附くが宜えだから、左様な馬鹿な事いふなッて叱るですもの。だから仕方がないから斯うして居るだが時々は何如何なるものか家の飛出して、如何な苦惱しにも宜えから、東京さあへ往からかと思ふ事があるのです。けんど……如何も、左様もまさか……
匡は少し考へて居たが、
「如何だらう一策を考へたが、承知なら必然出來ようと思ふが？
「出來るとは何がです？
「家の嚴父を一つ說いて見ようと思ふんだ、お前の爲めに學資を出せッて。
お糸は不思議さうに匡を見て居たが、
「其有難うござりまするが、私厭ですよ。出して戴く譯がないですもの、郎君の親父から。其に郎君の親父は私お厭ひですもの。御新造様やお姉さまは私可愛がッて下さいまするが、尊大人は私お厭ひです、私御覽なさると何時も苦い貌をなさるだ。だから私も厭ひです。厭ひな人の世話になるなあ私出來ませんから。
自分が嫌ふ人の父、其を其人の前でわるくいふ、實は言ひたくない、が隱すのは心に恥づる。此心と心との戰ひ、お糸は我と我身に腹が立つ、氣は亂脈、其から起る理非無差別、が斯うなると意地、言はずには置かれぬ。斷然斷ッてぢッと匡を見て居る、其容貌、眉毛の濃い、目の清しい、眥のきりゝとした、口元のしまッた其容貌、思ひきッたといふ其體、何處となく凜とした所があッて威がある樣に見える。匡は覺えず見とれました、とんと疑ッてでも居る樣に、是が乳母の娘のお糸かと。而して匡の目にはお糸が非常に美しく又尊く思はれました、お糸の爲なら、此少女を救ふ爲なら、如何な事でも……とまで思ひ込み暫く茫然として居た。此お坊樣育ちの少年は自分の父を厭ひだと言はれて、何故と問ひかへす事も知りません、稍あッて俄に何事にか感じた如く、少年は斯う言ひました。
「では斯うしたら如何だい？　私は十二圓貰ッてるんだ、毎月學資を、だが其様には要らないのだ、實は五六圓もあれば澤山なんだ。だからお前さへ管はんければ私は助けたいのだ。半分はお前にあげられるから。唯金は證人が預ッてるんだから、奴を說付ける必要があるんだ、然し其は容易なんだ、私のいふ事ならなんでも聞くから。
お糸は喜ばしく思ッた樣でした、匡の愛情を。然し剛情がお糸の性質、匡の助でも受けたくはないので、其故是をも斷りました。すると匡は諭す樣な又何處か賴む樣な調子で、
「お使ひな、其様な事を言はずに、何もお前にあげるといふんではなし、あげると言ッたら失敬だらうが、貸してあげるんだから、お使ひな、宜いではないか、成業の後返せば。
「其様な事を言はしッても、若し私死んだら如何します？　いゝえ、其いけません、何んと言はしッても不可ません。
少年の容貌は少し變りました、不平らしい體に、
「さう、其樣なら仕方がない、お前は今厭ひな人の世話にはなれないと言ッたが、畢竟私がきらひなのだ。
「あら！　さうぢやねえですよ。」胸を突いて出

たおおおお[illegible]けんど……けんど……胸に閉[illegible]といふ[illegible]を方、如何にも心[illegible]さうな、如何にも悲しさうな顔をして、ちッと匡の顔を見て居たが、見る／＼目はうるんで來ました、然し[illegible]、涙は落しません、只俯向いた儘ふるへ[illegible]な息をして居ます。

「まあ考へて御覧。

此一言、お糸の爲めには救ひの言葉匡の爲めには縁を斷つまいと言ふ野心の言葉。

二人は互に氣をとられて、此處まで來たのは殆んど夢中なのです、今匡は氣なしに四方を見ましたが、何時の間にか、土俗岩山といふ小山の下に來て居ました。此小山は頗る眺望に富む山で、匡は是までも乳母の家へ滯留中は屢々來た事のある馴染の山です。今其山を見て急に懐舊の情を起し、莞爾してお糸の方を見て、

「上ッて見よう。

「はい。

山上は畑です。上ッてから小徑を百歩許り、やがて東南の崖際へ出ました。匡は目指で傍の切株を教へた、お糸は其處へ默ッて坐ッた、匡は其傍の草原へ兩足を投出して腰を据ゑた。

時に日は西山の[illegible]に入ッて僅に名殘の光を其蔭からすべらして居る許り、東の半天はもう餘程薄暗くなッて來て星さへ一つ二つ瞬きをして居ます。山下に流れて居る一條の小川、小川の邊の一本の柳、釣する翁の居ないのは[illegible]、歸ッたのでもあらう、川向うには[illegible]となく續いて居る田や畑、其處には夕靄が地を一面にはひ這ッて朦朧として居る。而して此夕靄を潜ッて、何處で謡ふのか、睡くなる樣な田舍娘の歌が如何にも物哀に、物寂しく聞える。而して其歌を此方の森が打返す時、東流の水に從ッて遙の空に消えて往く樣子。嗚呼四方に瀰漫るのは夢と幻！ さわがしい[illegible]象も此哀な聲に誘し付けられ煙霧の夢路へとかくれて往く、血氣の少年、行末の經營で暇のない少年も、此景と此聲に對して造化の懐裡に眠るといふ顔付。然し少女は物憂はしさうな顔をして遙の遠くを眺めて居る、嗚呼其心を何處を徘徊ッて居るのでせう！ 見れば小さな胸は高く波立ッて居る樣です。

「まだ考へてるの？

匡は突然尋ねかけた、其言葉の調子、其中には諭す樣な、怨む樣な、頼む樣な、一種言ひ難い無量の友愛の情が籠ッて居ます。お糸は身を震はせたが、息が塞ッて口がきけない、何より先きに太い溜息をつきました。

一情が[illegible]いれます。

また一言、やさしい調子でした。

甚だ突然、お糸は匡の膝にとりすがり身を投伏しました。込上げて來る[illegible]、悲しさ、胸も張り切れたのか、身を震はせ胸を波立たせ、聲を上げて泣出した。

匡は[illegible]いて傍により、

「なんだえ、馬鹿な、如何したのだえ。

匡は泣伏して居るお糸の背中を撫めながら思案の體であッたが、

「さあ歸らう、さあお立ち。

お糸は啜り上げて泣いて居る許り、悲しいのだか、嬉しいのだか、或は氣がいれて居るのだか、人のいふ事も殆んど耳へは入らぬ位。

「立たんかえ。

是は鋭く言ッたのでした、而して袖に手を掛けて引起さうとした、すると、實に突然お糸はいきなり其手をつかみました、而して其手に顔を當てて又さめ／＼と泣いて居ました。涙は匡の手を傳はッて草の根方を濕して居ます。嗚呼涙！ 心の底から出る涙、愛の泉から迸る涙、涙程女の好装飾はありますまい、是こそ人工の加はらぬ天上界の至寶で、誰か是に感ぜぬ者がありませう。

此處で二人の間に助ける受けるといふ約束が成

立ちました。

此處は不忍の池の邊で上野の森と向き合つた小さな家です、表口は一間の格子、其から二三間は黒板塀、上には忍返が切先を揃へて邪見らしく構へて居ると、内からは一本の見越の松が世にすねたといふ恰好で、二階の欄干に脊を張ッて、さも傲然さうに見下ろして居る、松と同じ樣に欄干に右の手を預けて、一人の男が前面の景色を眺めて居ます。

年は凡そ三十四五であらうか、身の丈も高く肩の幅も廣い至ッて健かさうな人であります。ふさふさとした眞黒な頭髪が首で波形を造ッて居る工合と、白玉の樣な白い額に緑を染めて居る濃い眉と、紅梅の蕾を忍ばせさうな唇と、黒目勝の清しい目とは何處となく美しく此人を見せます。

時に一輛の人力車が二十四五の美人を乗せて池の端の方から轔々として馳けて来る。美人の目は此男の横貌に向いて居る。車は此家の表で止まる。物音に心付いて男は覺えず下を見る。見合せる貌と貌。目禮をして男は座敷の中へ、女は格子を開けて這入りました。男は前回に出た匡で、女は其体の果、丸髷に因ッて判定を下すと町家へでも縁付いた者と見えます。

我々は話に取掛る前、匡とお糸の兩人が如何なる日を送ッて居たか、其を第一に話して置かう。

匡は初めお糸を同道して東京へ来ると、兼て貰ッて來た母の添手紙、其を出して自分の識人にお糸の身の上を託しました、識人も異議なく承知してやがてお糸をある女學校へ入れました。此學校は遠く世間と懸離れて居るので、濁世の風も高い寄宿舎の窓を吹かねば、校内の樹木は鬱蒼として清く、温雅和樂の空氣の滿渡ッた別天地です。不負魂、其からして生ずる片意地、其からして往々温和の婦徳を缺いて居たお糸も、入校以來次第に其氣質も變ッて往き、四五年の星霜を經る間、何時となく柔和温順の婦人となッた。然し生來の勝氣は決して消えたのではない、唯此氣象が道理と伴ッて働く樣になつた許り、柔和温順を女の徳と思つて、平常は嫋々として柳の如く、風に堪へさうもない樣であるが、若し誰でもお糸の信ずる所、操として守る所を奪はうとして御覧なさい、其こそは千曳の巖、決して動すことは出來ません、秋霜の節ありとは此少女の事でありませう。

匡は半年と過ぎて望み通り農學校へ入校しました。匡が父母の家に居た頃は彼を取捲いて、居る者とては彼を可愛がる人許り、是等の人は匡の友人でもあり又師匠でもあッて、匡は是等の人の言ふ事なら何事をも信じ、何事をも聽いて居たので、當時の匡の天地と言ッては此田舎の一小家族、匡は其内に温められ其内に人となッたのです。然し一度故郷を離れて他人の中へ出るや否や、其周圍の人は前とは盡く變りました、變ッたと言ッても皆學生の事、深く世の塵に染まッた者はないが然し其中には自ら各種の人物のあるのは免れません、種々の出來事から種々の失望を生じ、種々の經驗から人間の中に善不善のある事を見て友を選ぶ樣になりました、是と同時に匡は學校の小さな窓から此廣い世界を見て、幾度か心を波立たせた事もあッた、幾度か歎息をした事もあッた。

此の如く知識も進み、目も開き、社會の何たるも薄々は分ッて來た、斯く途上の困難を思ふに付け夏期休業の時などには故郷に歸ッて、地質地味を調査したり、處の習慣風俗に心を付けたり、農夫の氣質及生活租税の割合收納の高・勞力の報酬、耕作の方法、是等の事を研究して・農事改良の参考にと油斷をしなくなッた。

お糸との愛情は初のうちは無論、膠漆と言ッた様な深い譯ではなかッたので、然し互に別れ別れに住んで居て雨宵月夕思ひ出すごとに其愛情は深くなる、然し二人とも結婚前の若い男女、交際の禮儀を思ッて、心ならずも疎遠にして居る、が疎遠にすればする程、思ひは愈深くなる、如何かすると日曜日などに證人の家でばッたり出遇ふ事があるが、其時の二人は牽牛織女、非常の幸の人となります。其微笑する目元、口元、御宅からお便りはありませんか、皆様は御丈夫でいらッしゃいますか？　貴孃の家からも便りはあるか、誰も變りは有りませんか？　此位の話であるが、目元に運ぶ一掬の秋波は却て時能韻のもの、無量の衷情を語つて居ます。お糸は其花の様な美しい微笑も、其星の様な清しい目も、其心も、其命も、自分一人の者とは思ッて居ない、匡も其愛情に答へて居ます。

お糸が學校を卒業したのは匡より早いこと一月許り、匡は十日許前に業を卒へ其後此家へ下宿したので後の事は以下の話で分ります。

匡は今這入つて來た姉を迎へて、坐る間もまだ與へぬ内。

「何時歸んなすッた？

言ッて姉の貌を見つめる、流石は骨肉で、挨拶は後になります、姉は微笑して、

「何時ッて、今歸りがけなの。あゝ寒かッた、眞成に峠の上の寒いこと、頬が切れさうになるのだもの。

姉は坐ッて兩手で貌を埋めて撫でて居ます。

「其では一番汽車？

「あゝ、一番汽車。もッと泊ッてお有でと祖母様も、母上様も、さう言ッたけれども、家の方の都合もわるいし。其に彼事もあるから歸ッて來たの。

此時匡も座に就いて挨拶をします。

「家では變りはなかッたかえ、誰も？

「あゝ皆丈夫。祖母様も誠にお達者で、目鏡を掛けて草双紙を御覧になッたり、苧などをおうみなさるの。今度もお前の歸るのを大變待ッてお有でなさるよ。

「父上は如何しなすッた、大變議論沸騰ではないか、縣會は？

「あゝ、さうの様だよ。何んでもね御仲間の家へ往ッたり、向うからも來たりしてね、何か打合せでもなさるか、ひそ〳〵話してなんぞいらッしゃるの。其に夜も大層遲くまで調物などをしてお有でなさるよ。私にはよく分らないが、人の噂では何んでも縣會が兩派に分れて居るとかで。

「さう。新聞に出て居る、畢竟黨派の爭ひだから其であゝ騒ぐのさ。其はさうと彼事は如何であッたえ？

「彼事はね、往ッた晩に母上様にお話申して見たの。私の心から出た様にして。唯何となく。匡も今度歸れば、もう嫁を貰はなければなりますまいが、外から貰ふとすると長し短しで良いのもありますまいから、如何でありませう、お糸さんを貰ッたら、彼方は中々しッかりしても居るし、誠に物靜で、行儀作法なども正しく、其に學問も出來、縹緻も氣立もいゝからと言ッたらね、祖母様も、母上もお喜びで、お糸なら宜からうとも、彼子なら、小さい時から氣心も知つて居るし、其に去年來た時見たら全く昔とは人柄も違ッて、實に落着いた立派な娘になッたから、彼なら嫁にしても恥しくはない、と實は私共もさう思ッて居た所さ、と、斯うお言ひなさるの。其からね、是は好都合だと思つて、私は又斯う言ッたのだよ。實は東京を出る時二人の氣も聞いて見ましたら、二人とも大變喜んで是非さう願ひたいと言ひましたから、さうなッたら大變喜びませうと言ッて

居たの。
「では私が頼んだと言はずに？
「まあ、お聞きよ。すると其處へ丁度父上がお出でになッたから、お話をしたの、すると父上は御不承知なの、其はお糸が東京へ出て如何程學問をしたか、如何程立派な淑女になッたか知らないが、迚も家の嫁には出來まい、彼樣な貧家の娘は、と斯う被仰るのさ。其から私も色々とお糸さんの性質を話して見たの、けれども中々お聽きなさらないのだよ。其はお前達が幾ら理窟を竝べたとて、世間の事が理窟通りに行はるべき者ではない、家では人も多く使ッて居るからお糸の樣な貧家の娘では言ふに言はれぬ所に不都合が起ッて內政が治まるまい、假令此方で我慢しても第一お糸の爲めに不幸であらう。斯う被仰るの。
「さう、」言ッて少し考へて居たが、「さうしたら父上は何んと言ッたえ？
「さうしたらね、大變笑つて、若い者だから實際の事を考へないのだと、言ッて笑ッていらしやッるのだよ。私も色々言ッて見たけれど、てんで私の言ふ事などはお聞きなさらないの。宜い宜い、予の方が年をとッて居る、經驗がある其樣な事を言ふより早く匡に歸れと言ひな、予が言ッて聞かせるから。とお取合ひなさらないのさ、仕方がないから後で祖母樣や、母上樣とも御相談申して見たが、まあ、何しろ、匡に早く歸る樣にさう言ッて見ておくれ、歸りさへすれば私共からも其々又父上にさう言ふから、とお言ひなさるのさ、仕方がないから彼話はまあ其丈にして歸ッて來たがね。誠に屆かない樣だが……
「いゝえ、如何して、其所ではない、色々有難う、後は私から云ふから宜い。其からお糸さんの家では、同意？ 矢張不承知？
「いゝえ、喜んだ事は喜んだがね、唯不安心がッて釣合はぬは不緣の元だからのなんのと言ッて居るのさ。其から段々事情を話したらやッと安心した樣さ。だからまあ、此方は安心しておいで、唯困るのは父上さ。言出すと剛情でいらッしやるから。
「さう。だが父上だッてまさか自分の嫁を貰ふのではなし、無理に自分の意を主張するのでも無からう？ 私から委しく話したら承知なさるだらう。
是から二人は晝飯の膳に坐ッたが、食事を終ると、匡は姉に向つて、
「時に金坊は如何だえ。
「勉強して居るよ。何だか東京へ往きたい、東京へ往きたいと言ッて居るとさ。
「東京へ？ 東京へ出すのはまだ早い、まだ十三だもの、今出すのは芥溜の中へ投出すやうなものだ。
と少年は言ひました。
「おや、何故？
「何故と言ッて東京には腐敗した人間許りだもの、うッかり此樣な處へ出すと飛んだものに爲てしまふよ、
「左樣かねえ、左樣に東京には惡い人が多いかね？
「いえ、わるい人は少いさ、今の世だッて惡人は少數だよ、惡人になれる程の人なら善人にもなれるから宜いが、今の世の人はさうではないのだ、上根の者が少くて、下根の人許りなのだ。だから輕薄なのさ、輕薄俗を爲して居る、其が今の社會だもの、其處へうッかり金坊の樣な小兒を出して御覽、其こそ朱に交はれば赤くなるで、身をあやまるかも知れないから、出すには慥な監督者を置いて家庭敎育に注意しなくてはならない。
可憐の少年です、匡は。
此時此家の下女が上つて來て、唐紙の外へ一寸

む靴を穿き、縱にひだの取ッてある胸掛を背で結へ、草の樣な細かい美しい、髪の毛を愛度氣なけに長く後へ垂れ、而して衣服の袖を、さも活溌らしく臂の上までたくし上げて、肉付いた手を見はして、六七歳の女の兒、ぼちや／＼として見るから愛らしい女の兒が遊んで居ます。一つの机、其三方に三つの椅子を据ゑ、其上に厚いハンヤ入りの蒲團を敷き、其上に三つの愛らしい人形を飾り、其を招待して、客と見て、銘々の前に小さな翫弄の茶碗を置き、小さな豆茶入から一個の人形にこひいを注いでやッて居る。一個に注いでやりながらも女の兒は他の二つの人形の事は忘れては居ない。待ッておいでよ、此子に注いであげるとお前にもあげるからね、と言ひ貌に女兒は微笑して居ます。此幼い姉樣事の畫、其が如何程お糸の心を樂しませましたらう？ 少し前の方へ屈み加減になり、其が爲め左の手を机に突き、而して微笑みながら右の手でこひいを注いでやッて居る風、如何程愛らしいでありましたらう！ 此兒の兩親は如何なる人か分らないが、然し、畫に據ッて判斷すると、無論中等以下の人ではなく、相應の生活をして居る人で、又此兒は兩親から可愛がられて居ると知れます。實に餘念なく人形を愛して、小家政を整理して居る風、如何樣に無心で愛度氣ないでせう？ 此下界の金錢とか名譽とかいふ者の上には其心は向いて居ません、此小さな人形が彼の友達で此小さな一室が彼の天地であります。

お糸は此女の兒に見とれて、其心を我心として見て、其境界に這入ッて見て、母親が姉樣事をして遊ぶ我子の樣子をさも樂しさうに見て居る如く、餘念なく見とれて居た。而して見とれて居る中に其身も何時か六七歳の昔に返ッた單純な氣になッて、自身は今何處に居るのだか、今何處へ向ッて往くのだか、自分の周圍には如何なる人が居るのだか、何も彼も忘れて見て居たが然し其でも忘れぬ人は傍から貌を出して、餘念なく此畫を見て居る人です。お糸は莞爾として匡を見る。其は今記者が書立てた丈の感情を、其微笑の中に語ッたのです。嗚呼精神の交際！ 實に一言の言葉も用ゐずして此込入ッた話が目から目へ傳はります、匡も默して微笑する、其からして愈幸になります。お糸は畫から目を放さずに、

「眞成に可愛らしうござりますねえ。」

「さうですね。」

「如何して斯う西洋人の兒は可愛らしいのでせう？ ぼッちやりとして健康さうだからのでせうか？ 私は、ね小兒には西洋風の教育を與へようと思ッて居ますよ。着物も皆洋服を着せようと思ッて居ますよ。

「私も其積りです。

「私は短いずぼんや短い袴を穿いて居る小兒を見ると可愛らしくて、可愛らしくてならないのですよ 眞成に如何な心持なのでせう、こひいを注いでやつて？ とんと人形とは思つて居ない樣ですねえ。

言ッて貌をあげてふと前を見ました。三十五六の洋服の紳士、官員でなければ新聞記者、其でなければ代言人か、其でなければ學校教員か、鼻下の髭丈は三世なぼれおんといふ紳士が、二人を新夫婦の旅行とでも見たてた者か、羨ましさうに見て居ました。お糸は貌を見合せて吾身に返り、覺えず差俯向いたが、然し喜びは少しも減じません、訝しさうに見られたのが、結句喜びを增した樣でした、見榮は女の病ですから。

匡は微笑して、

「女の兒の遊では無心でして居る事でも、多くは家政上に傾いて居る。まゝ事などは無心で樂しみにして居るのであるが、其で居て家政上

の事に關して居る。是を以て見ても男女の仕事は違はなければなりませんね。

程なく汽車は熊ヶ谷の停車場へ着きました。二人は此處で車を下り先づお糸の家へ行きます。

時は三月の上旬、此處彼處に開いて居る野梅は馥郁とした清香を放ッて、二人を迎へて居ます。鳴呼家族……家族は如何なる情を以て彼等を迎へるでありませう。而して又彼等は如何なる情を以て其迎を受けるでせう？ 匡は喜びの外に斯ういふ事をも心の中に持ッて居ます。

如何なる障碍があつても、お糸とは婚姻する。然し世は塞翁が馬です、匡はお糸を愛するが爲めに父と不和になり、其が爲め相續の權をも失はれ、又自分でも棄てて仕舞ひます、お糸と夫婦になるが爲め愛する家族をも棄て、愛する故郷にも離れ、曾て心の中に畫いて居た田舍の生活をも一夢にして仕舞ッてお糸と共に東京へ來るのです。

匡の許から明日は歸るといふ知せの一通、受取ッた森一家の喜び、實に譬へるに言葉はありません。祖母と母との心には學校卒業の一事が難中の難に思はれて居て、而して此關門を越えるには、餘程の知慧、餘程の學問、餘程の見識がなくては越えられぬ者と思ッて居ます、然るに今其子や孫が此關門を越えて首尾好く歸省する事故、喜ぶのも無理はない。母は祖母に向ッて、

「母上樣、明日は匡が歸るさうでございますが、私ももう是で大安心致しました、新聞なぞで他の息子さん達が東京へ修行に出て居て放埒になんぞなんなさるのを見ると、匡も此樣にならなければ宜い、如何ぞ首尾好く卒業するまでは、他へ心を外さない樣にと、朝夕願に掛けて觀音樣を念じて居ましたが、其御蔭ですか、まあ卒業して明日は歸るさうでございます。もうもう私は肩に背負ッて居る重荷を一時に下した樣な氣が致します。

「ほんにさうだらうとも。私もさうだよ。如何ぞ彼子が早く卒業して家へ歸ッて來る樣になれば宜いと思ッて居たが。さうかい、明日は……やれやれお有難い。

田舍者の祖母と母、神佛交りなるは未開の證據、けれども其内に籠るは愛の露、一滴ではあるが其雫を手に掬んで飲ませたきは不孝の子であります、父は此方の一間にて吉兵衛といふ手代に向ひ、一つの帳面交際仲間の住所姓名を書留めた帳面を示して。

「此記してある名前丈へ招待狀を出してくれ、愚息の卒業祝ひに酒を献ずるからッて、文は此通りで宜いから。

其から書齋の入口に立ッて、主人の顏を尊さうに見て、命令の下るのを待ッて居た書生に向ひ、

「杉山、お前藏へ往ッてな、牧溪の山水と探幽の龍虎の幅、一對宛の奴を出して來てくれ。其から後で、氣の毒だが熊ヶ谷の魚清へ往ッて、若い方の上樣に、此間一寸話して置いた事は愈明後日になッたから、料理番をよこしてくれ、其から魚は大概見積ッて東京から取寄せる樣にと言ッて來てくれ。

其から又忙しなく手を叩く。前垂で手を拭き拭き、急がはしく走ッて來た下女のお鳥、襷をはづしながら一寸入口で片手を突く。

「おゝ、御新造樣は居らんか？ なに、御隱居樣の部屋？ 呼んで來てくれ、早く。

間もなく母は入ッて來る、父は急がはしく聲をかける。

「道具はよいかい？ 揃ッて居ますかい？ さう、其なら宜しい。私は是から分家の彌左衛門まで往ッてくるから、衣服を出して下さい、何かに手抜のない樣に氣を附けてお置きよ、明日

は父忙がしからうから。

祖母と母との喜びに增して喜んだのは父でした。先づ卒業證書、目方に掛ければ死んだ蝿一疋の重さ程の、其貴い卒業證書を我子が受取ッて、大日本の農學士となッて歸省した事、郷黨に對しての父の名譽、が然し其にもまして、父の喜びの原因となッた事がある、其事はといふと。

父は原より素封家の事、性質は柔弱の方であるが、幼少の時から他人を命令しつゝ育ち。壯年の頃には村の若い者に押されて其中のお山の大將。一度は郡長にも任ぜられた事があッて、近村には其名も高く、此頃では亦選ばれて縣會議員、田舍では幅のきく立役者。此の如き境界を經て來た故、自然我慢も強く、目下に對すると何事にも我意を張る質、而して若し事が爭にでも互ッた時、自分が失敗でもすると相手を我慢者として恨み惡む事甚しいです、其代り相手が自分に一歩を讓ッて、殊勝らしく屈伏でもすると喜ぶ事限なく、其者を稱して柔和溫順の才子と賞め、其人を愛する事甚しいです、君子を避けて小人と親しみ、媚びる者を諾とし諫める者を惡とする質の人です、斯ういふ氣隨の性質故、家人の身の上などは自分の好むまゝに取極めるのが常、君子は其人を賤しむが、造化は其人を憐みます。此の如き性質故、匡の身の上をも自分の好むまゝに定めて居ます。丁度其頃は憲法發布祭のあッた翌月、政治思想の沸騰は此處等邊にまで……寄せては返す波の海か、縣會議員の仲間、松風の颯々か、人々の騷ぎ、余こそ第一の國會には縣下より選ばれんものと拳を撫しての奮發、何處も彼處も波、其波にもまれて、匡の父も奮ひ起す勇氣と冀望、冀望を我子の上に屬しました、而して斯う思ひました。

人生の・・大快事は野にあッては代議士となッて政治界に馳騁し、其名は一世を震蕩し、百萬の人其人の一擧手・投足を見んことを望み、百萬の人其人の口を開かんことを望む、喜ぶ時は天下も喜び怒る時は天下も恐る、此の如くなッてこそ眞の大丈夫だ。余は取る年、迚も此の如き望みはないが然し匡は年も若く、才力も人に俊れて居り、且つは農學士ではあるし、殖產だとか、農事改良だとか言ッて居るが、此の如き一小瑣事に五十年の生涯を終るのは遺憾だ、是から匡を導いて、學問の點に於ては及ぶまいが、實際の才と經驗の識とを與へて、事務的の眼光を開けてやらう。少年の事だから志も上り氣も滿ちて居ようから、名譽心も盛んであらう……さう〱、是非誘導して大政治家にしよう、人間が英雄になるのは英雄にならうと思ひさへすれば何時かはなれる者だ。或は今日の如く政治思想の盛んな世だから、政治家になれと言ッたら喜んでなるかも知れない。

年を取ッても子故には若やいだ想像をするのが父の常、而して此樣な空想を抱きながら、匡をさうなる者と自分で極めて、亦さうなッた時の匡を想像して喜んで居ました。然るにお糸を妻に持つといふ匡の望み、父の氣には入りません。

お糸? 第一に浮ぶのが貧家の娘。貧と賤?

如何も連絡がある樣に思はれる、我子の妻が賤しい水呑百姓の娘、我子! 大政治家! 其妻が水呑百姓の……外部の體丈が僅に西洋風、感情は依然たる舊日本の父の氣には入りません、而して排斥して見れば見る程、釣合はぬ事、不都合の事のみが目に現はれる、是は止めさせるのが匡の利益、斯う斷定しました。是が此心が父の胸、ですから匡の歸省を喜びました。

此處は父の書齋であります。匡は今朝東京から歸ッて來て喜びの聲に迎へられ、喜びの聲で取捲かれて居たが、話があるからといふ父の言葉に、今書齋へ來た所です、父は年齡五十二

三、貌は大貌で額に八の字が寄ッて居ます、じろりと横目で人を見る癖があるが、其時の目附と、其額の皺とは如何にも我慢、我儘の素封家の風采を備へて居る、髪の毛は餘程薄くなッて居て、中央には殆んど毛がない故、清正公の紋所を措いて居ます、其故議員中でも蔭では其名を謂ふ者はなく、蛇の目蛇の目といふさうで、中には酒宴の席などでも懇意といふのを傘にして、蛇の目と言ッて笑ふ者さへあるが、流石は議員でもする丈あッて、斯る時には、圓滑に、「慶長の鬼將軍が宿ッて居るからだ、笑ふな、老いても若い者に負けんぞよ、」などと言ッて笑ッて居るとか。

父は今入れた紅茶を呑干しながら、樂しさうな笑を含みて、匡の貌を眺めながら、

「お前にはまだ言はなかッたがな、明日は、なんだ、お前の卒業を祝ふ爲め、客を招く積りだ、其中には議員も居るし、新聞記者も、其他舊知己の人は勿論、種々の新人物が居るから、まあ、さういふ人達とも交際して置くが宜い、將來の爲めにもならうから、成る丈圓滑にして、氣を損ぜぬ樣にするが宜いぜ」

匡は眉を顰めました、急に沈着いた調子になり、而して父の貌をぢッと見詰めて。

「何んですッて、私の卒業の祝ひを？ 其が爲め客を招きますッて？」

父は匡の樣子を見て居たが、莞爾して、

「さうさ、其が爲めにさ、何故、何か不都合か？」

匡は父をながしめに見て。

「困りますなあ、其樣な事をしては。」

喜ばうと思ひの外、困るとは父の爲めに意外の一言、頤を突き出して不審さうに匡を眺め。

「何が、何が困るのだ？ 何か差支でもあるのか？」

「否、さうではありませんが、卒業の祝ひなんと、實に恥づべき事です、此樣な事に祝ッては。」

「何故、何故」父は口の先き鋭くして、「恥づべき理はないではないか？ 何年かの間若干の學資を出し、若干の苦心を以て得た學問ではないか？ 其で首尾好く卒業して農學士となッて歸省したのだから、無論喜ぶべき事ではないか？ 其を祝ふのに何の恥づべき理由があるのだ。」

匡は蔑む樣に打笑ッて、父の貌を冷淡に見る。

父は少し貌色を變へる。

「理由がないと被仰るが私の目的は農事を改良して養蠶事業を起すにあるのです、其故此事が盛大になッて、天下に養蠶事業農業改良法の模本とでも言はれるまで整頓でもしたら、其時こそ宴會でも何んでも、開いて大に祝する積りです。其を何もまだ一事業もなさず、唯學校を卒業したといふ一事で、其で客を呼んで宴を開く、人の思はくも如何です。第一學問は貴いが、證書を貰ッたとて、學士になッたとて、其が人に價値を與へますものか。」

是を聞くと父は反返ッて大笑した。

「そゝ、其だから書生論だといふのだ。成程其は立派な議論だ。若い者には氣に入る論だ、然し議論通りに行かぬのが社會だ、世を渡るには矢張看板が必要、看板がなければ人が信用をしない、譬へばお前が何處へか往ッて、名刺を出して、何の某だと言ッても人が何とも思ひはしない、然し農學士何の某と言ッて見ろ、人は忽ち頭を下げるわ、又お前が如何なる議論を吐いても人が信用をしないが、農學士といふ肩書があると拙論でも人が耳を傾けるわ、今の内は經驗がないから其樣な事を言ッて居るが、今に見ろ、予の言ッた事を成程と思ふから。」

「看板で利益するといふ、其樣な卑屈の事がある者ですか、まあ何しろ客を招く事丈は止めて下さい、其も親戚の者でもあれば兎に角、知りもせぬ新聞記者だとか、縣會議員だとか、其樣な奴に遇ッたッて何が面白い者ですか。」

父は貌色を變じて、

「そ丶、其樣な奴とは何だ？　苟も人民の總代として一縣の財政をも議さうといふ者を、其樣な奴とはなんだ。

父も議員の一人、其を賤しめた匡の一言、父を辱しめたも同じ事です、其故憤然として父は怒り、笠に掛ッて譴責します。

「成程、其樣な者とか言ッたのは惡うございました、然し‥‥

「わるかッたらう？　手前がわるかッたらう？

「わるうございました、」匡の貌色も變ッて來ました、「わるうございましたが、然し私には其樣な人に遇ふ必要がありませんもの。

父は匡の貌をぢッと睨んで、

「手前は殖産々々云ふが、此樣な田舍で土ッぼじりをして、生涯を暮らしたッて、何の面白い事がある、予の心では手前を誘導して、如何か大政治家にしようと思ッて居るのだ、其だから此處等の志士に近付にして置いたら將來の爲めにもならうと思ふからだ、如何せ親のする事だ、手前のわるい樣にするものか。まあ予に任して置け。

父の一個承知が始まッたなと匡はをかしさに、覺えず笑ひ出せば、父は、何がをかしい、父まで嘲弄して、少し學問をやると直斯うだと言ひさうな貌で見詰めて居る。

「あ丶、さうですか、其では私を政治家に‥‥其なら無益です、私は政治家は好まんのです、厭ひなのです、畢竟政治家々々と騷ぎ立てるのは、東洋思想が拔けんからです、男子の事業は天下に澤山あります、政治家許りが立派の事業といふ譯でもありますまい。畢竟政治家は人形芝居の木偶です、我々の望み通りに踊るのです、我々は彼等を踊らせて、又見物するのです、木偶となるのは三尺の童子でも甘んじません、況て堂々たる大丈夫、誰が彼樣な者になる者ですか？

言ッて匡は政治家の攻撃を始めました、父は經綸濟世の事業は政治家の外には出來ん事だ、一國の重任を負ふ者は彼政治家だ、其人の一擧一動が天下の動靜に關する者は唯一の政治家だと政治家の事業は廣大にして他に比すべき者がないとまで‥‥好んで讀む新聞の議論を根據に‥‥憤然となッて子と爭ッた、然し負けました、匡は極めて淺薄、又極めて偏僻ではあるが、一種の信仰を持ッて居ます、其說に因ると人生の目的は幸福を得るにある、安心を得るにあると言ふ事で、而して如何なる所に幸福があると聞くと其は衣食住に事を缺かぬ中等社會其處に安住してよく働きよく樂む、是が文明的の生活だと斷定し、其を標準にして政治家の位置を攻撃しました。然るに父は標準とすべき道理を持ちません、と言ッて匡の道理を破る力も有りません、其故に負けました。負けた故に怒りました、父は匡を罵ッて、怯夫だ、懦夫だ、穀潰だ、親をやり込めて喜ぶ不孝者だ、明日の宴席へも出んで宜しい、意氣地なしだ、と叫びました、匡は父の怒りをなだめようと思ひ、

「さう御立腹では恐入ります。何も私は父上を遣り込めて喜ぶなんて其樣な馬鹿な考へを持つべき理はありません、唯思ふ丈の事を言ッた許りです、お氣に障ッたらお詫をします。

相手に破られて、然も相手に謝された時は、人に因ると愈自分を卑しめられ、先方の度量に包まれたとして怒る人がありますが、匡の父も其種類の一人です、其故益怒りました。

「詫びるに及ばん、だまれ〳〵、親が是程に思ッてやるのに自分の言ひたい事許り言ッて‥‥不孝者め。

是が匡と父との爭ひの初です。

翌日の夕方になりました、招待の客は續々として來ります、自分の爲めに招いた客、座敷へ出

なければ父の迷惑、そして父を苦める道理と匡は不精々々に宴席に出て居ます、新知己の人には初對面の儀式口上、舊知己の人には一別以来の挨拶、然し散會まで新知己の人には碌々、口もきかず、只古馴染の五六人に取りまかれて話をして居た許りであッた、其故来客一同は主人の懇切には満足てきッたが、若主人には不満足の様であッた。

人間世界に於て、悪い點許りを見出す人は、何だか妙に傲慢の氣に喰はない奴だ。

又人間世界に於て善い點許りを見出す人は、おとなしさうな男だ、少し無愛想だが、

然し普通は、餘り若主人に用はない、言はぬ許り、碌に目を注ぐ者もなかッた、其故是等の人が歸ッた時、落穂を拾ふ村雀、噂好の細君が、若主人は如何なる人でしたと、問ねたら其答は。

「さう、書生だ、まだ交際になれない。

宴會の有様此の如くなれば、折角ものをかけてして遣ッた者をと父の怒りは一倍強く、其夜は殆んど口もきゝません、怒りを含んで凄じさうな目附をして睨んで許り居りました。

其夜は其でも何事もなく治まったが、治まらぬは父の怒り、父の考へに因ると、一家の主權を子の爲めに踏付けられた、是をしも忍んで居ては何をか忍んで居られよう、父の權力は如何程恐ろしい者か、思ひ知らしてやらうと、怒りました、而して翌日の朝直に匡を書齋へ呼び付けました、匡は前夜は面白からず臥床へ入ッたか目が覺めるや否や、父の怒りは如何であらうかと、胸を傷めて居ると下女が來て、父の書齋へ來れとの事、呼はれる程ならさうでもないかと、喜懼半する心を以て父の書齋へ入ッた。

父は匡をじろりと睨み、まだ坐る間も與へぬうち、

「おい匡、手前はお糸を妻に持つと言ッたが、彼は持つ事はならんぞ、決してならんぞ。

霹靂の様な一聲、匡も驚いた様でした、正可此事とは思ひもしません、餘りの意外に暫くは返答も得しません、唯父の貌をぢッと見て居た許りでした。

「何故ですか？

暫くして僅に一言、凄じさうな貌をして。

「そゝ、何んだ、無禮な。手前は予を誰だと思ッて居るのだ？ 何故ですかとは何んだ。其語氣は、不埒奴め、親を親とも思はんのだらう？

と喰ひ込む様に匡を睨んで怒りました。匡は恐ろしく沈着いた調子で、

「父上は昔のお糸さんを御存じで今のお糸さんを知らないから、其ですら彼仰るが、彼人は中々學問も出來、才もあり、女の道も知ッて居るし、祖母樣で、母上にも氣に入ッて居ますから、彼人なら一生を共にしても宜しいと思ッて、其で……

「否、手前がなんと言ッても彼を嫁にする事は許さぬ、能く考へて見ろ、彼は貧乏人の娘で、家とは釣合はぬわ、家では多くの奉公人も使ッて居れば、其等の使方も自らある、又交際する家と言ッても皆相應の者許りだ、大家には大家の風があるから、お糸の様な育ちの者には來たッて居られる理がないわ、お糸なんぞには自然小兒の時の習慣が附いて居て言ふに言はれぬ所に不都合が起るわ。其だからならんと言ふのだ。

匡はさも怪訝した樣な風で父を見て、

「さう彼仰いますが、人の最も貴ぶべき所は何んです、育ちの如何ですか、性質の如何ですか？ 無論性質でありませう。彼人は極めて柔順貞淑の婦人です、今の婦人中の粹を拔いた者と言ッて宜い程です、又交際仲間と彼仰るが、随分東京では貴族も西洋人とも交際して居ました、又家政を調理する事だと云ッて家禰に依る

べき理はありますまい、爲人の如何に因るべきです。

言ツて是から縷々お糸の爲人を賞揚した。父は語が塞ツたが生來負惜しみの強き性故、

「さう、其から。其から。其から、如何したの…何其だから、むう、お前の望みは畢竟お糸を妻にするといふのだらう？」父は激しく首をふツて、「ならん。ならんと言ツたらならんわ。幾ら手前が理窟を荷廻ツても、世間の事は理窟通りには往かんわ、馬鹿奴、お糸の様な乞食女、何處がよくツて其様に惚込んだ。

匡も今は憤然となツて。

「乞食女？　其様な失敬な。父上は一個人の權利の重んずべき所以を知りませんか？　何も父上がお貰ひなさる妻ではあるまいし、私が貰はうと言ふ妻です、父上がお貰ひなさるのならお氣に入ツたのをお娶ひなさい、私の娶る妻は私の意に任せたら宜いではありませんか？

「なんだ、不屆きな事を、だまれ〳〵、だまれと言へば。私の意に任せろ？　手前の勝手にさせろと言ふのか？　馬鹿め……家へ貰ふ嫁ではないか、家へ貰ふ嫁なら手前一個の氣に入ツたとて、家中の者の氣に入らなければ、如何する積りだ。世間の事を知りもせんで。ならんならん、若し達てお糸を妻にしたくば、するが宜い、其代り家の財産は手前に讓らんから、金を相續人にするからさう思へ。手前が立派に獨立して生活を立てられたら乞食を貰はうと、何を貰はうと、手前の勝手にしろ、此處の家に居る間は許す事はならん。

匡は嘲る様に微笑して、

「其では何ですか、相續の權を奪ふといふ事を以て私を劫さうといふのですか？　威してごらんなさい、黄金や、地所と、靈魂のある人間と、何れが貴重なるか、何人の權も違ひますまい、私は全世界を汝に與へるからお糸を渡せと言ふ者があッたら、全世界を叩き棄てて……宜うございます、私が此家に居なければ、お糸さんを妻に持つ事は御不同意はないのですね、即ち私は今日只今より父上の許しに因ツて彼人を妻にします。其代り此家には居りません、只今直ぐ立去ります。

此一言に父は覺えず立上りました、而して足で疊を踏付け〳〵。

「立去れ、さあ立去れ、立去らんか、えゝ告別も……何を愚圖々々……忘れるな、今の言葉を。罰當り奴。

匡もづか〳〵と部屋を出て襖を手荒くぴッしやり。遙か彼方で母の聲。

「まあ、何んだねえ匡、其ではお前がわるいよ。

お糸はまだ花の東京へ出ず草深い田舍に居た頃は、天日に照付けられ野風に吹きさらされて居た野の花でしたが、一年東京へ出て都會の空氣に養はれ、水道の水で磨かれる中に、何時か都ぶりの風流も染付いて來て、一層優美の花となりました。而して今故郷へ歸りました。

歸來家の樣子を見ると、是も亦甚しく變りました。第一目に付くは父母の關係です。昔は二人の間には温々たる和氣が通じて居て、其話とては笑の中から洩れて居たのです。其が今は母は父を卑み又憎む樣に見え、父は母に對して何か罪でもあるかの如く懼れ憚る樣子に見えます。梅の咲く時節とは言ひながら、まだ冴えかへる寒さに、妹も弟も身に纒ツて居る者とては古袍子一つ、父の如きはてんつるてんの袷襤褸許り。家財道具の在る物は昔の十分一、中に哀を止めたのは八歳になる妹の衣服、裾は盡くちぎ裂れて綿は引ずる、其を引裂ツては棄て、ちぎツては棄てた者でもあるか、下の方は眞の袷衣、

實にみじめな風俗をさせて置く、是には何か仔細があらう と斯うお糸は思ひました。
其晩の事で、お糸は母親や妹と相對して、種々なる東京の話をして居ると、表口に草履の音、がらりと何人か戸を開けました。振返ッてお糸は驚いた。汚らしい豆絞りの手拭で額に庇を拵へた、憎てい野郎が野藏を胸に作ッて、あゝ寒と、寒さを人に訴ふる如く、首をすぼめて立ッて居ます。是を見ると母親は忽ち面色を變へました。男は其でも、しをらしい、手拭を取ッて。
「やあ、阿母！ 今晩は。吉さん一寸貌を貸してくんねえ。
言ッて腮でしやくッて、目で電光をさせました。するとお糸の父の吉藏は、ちらりと女房の方を見て、
「おい、」と言ッて立上りました。
「一寸此處へ來てくれ。
と男は表へ出る、吉藏も續いて出る、何か二人でひそ〳〵と話して居ます。二三分經ッて吉藏は家へ這入ッて來ました。すると女房は。
「お前様、今夜はお糸も居るだから何處へも出さッしやりはしめえな。私も種々話があるだから。

吉藏はもぢ〳〵して默ッて居たが、やがて一つの小包を懷へ突込み默ッて表へ出ようとします。是を見ると女房は見相を變へづッと立ッて夫の傍、しッかり袖をつかみ、
「よさッせえ！ 眞成に。彼様な事は人間のする事ではねえ。馬鹿々々しい。
もうお糸も見ては居ません、立ッて來て母を窘め。
「如何したのです？ 何です？ まあ靜になさいよ。靜にしても分りますから。
「靜にッて、お前眞成に〳〵父上には此頃では毎晩家にッては居ねえだよ。
と泣聲になッてわめきます。吉藏は口を尖らして。
「今夜は少し用か出來て、新田の虎が處まで是非往ッて來ねえけりやなんねえから往くだよ、なにお前其様な處へ往くもんか。
「うそをぬけ〳〵と。見さッせえ、此家の様を。皆お前様の心一つからだ。今夜はもう如何な事しても、予が出さねえ。お糸が久しぶりで歸ッて來たものを、其に出るッて、餘りだ、眞成に。
吉藏は嘲る様に女房の貌を見て居ます。お糸は理由てを知らぬ故、唯驚いて彼方へ廻り此方へ廻り。
「如何ぞまあ靜にして。母上様、母上様、如何したのです、全體？
「吾はお前にも、今にとッくり話しして、父上にも意見の言ッて貰ふ積りだが……
此時吉藏は掴まれて居た袖をふり放さうとします。お糸は其を見て、
「まあ、母様此處をお放しなさい。いゝえ、私が受合ひますから。其では惡うございます、此處を放して靜にお話しなさいよ。
あれ、脱兎！ 袖を放したら表へ飛出して仕舞ひました。お糸は呆れて後を見送ッて居る、女房は口惜しさうに舌鼓をして、妹と弟に向ひ。
「お前らあ何んだッて其處に坐ッてべえ居るだ？ 早く止めでもすれば宜いに……
「まあ、何處へ、而して父上は往くのです？
「何處ッて？ 打ちに行くだよ。
「打ちに？ 打ちにとは、其は誰を打ちに？
「えゝ分らねえ、博奕を打ちにさ。年中負けて許り居るだ。其だからお前、此通り裸體にされて仕舞ッただ。
案外なる父の不品行、餘りの事にお糸は何とも言ひ得ません、暫時呆れて母の貌を見守ッて居

る許り。稍あッて。
「何時頃からです？」
「去年の十月頃から始ッただ。予がもう如何樣に意見したか知んねえけんど、馬の耳に念佛さ。家の道具でも何でも皆賣飛ばして打賽本にするだ。予がのでも小兒のでも着替なんざあ非道いものだ、一枚も有りはしねえだ、今に是もう袷え着ねえけりやなんねえが、如何したら宜からうと思ふ位さ。其に彼を始めてからは畑へも碌に出ねえから、手に合はねえだ。去年の暮だツてさうで、お前がの所から金送ツてくんなからう者なら、家では正月が來たツて着た切り雀の所さ。其でもまだお前がの孝心で正月丈子供にも着改へさせたが、十六日が濟むと直もう質屋だ。腹が立ツて、腹が立ツて腸がにえくる返る樣になるだ。
と腹立しさと悲しさに母親は袂をしぼツて泣きます、お糸も共に打萎れて。
「何故又此樣な事なら早く私に知らせて下さいませんでした？　是程にならぬ中、如何樣か御意見の爲樣も有りましたらうに……如何して又此樣な人になツたのでせう？
「如何してなツただか、彼樣な人では無かツたが、魔でも射して居るのだらうよ。
「まあ然し、お歎きなさいますな、明日また私からよく御意見して見ますから。私が斯うして歸ツて來たからは、是からはもう御心配なさいますな、佶度私が安心させますから。
頼母しさうな娘の言葉に、母親は喜しさうに落涙して。
「眞成にまあ、家へ歸るか早々此樣な厭な話を聽かして、定めし心持も惡からうが堪忍してくれよ。何たる因果の事だか。
其夜は其で床に入る。翌朝になツた。吉藏はまだ歸りません。女房は、―まだ歸らねえ、困りものだ―などと呟きながら、朝飯を濟すと、留守をお糸に託し、二人の子供を連れて野良へ出て往きました。お糸は緣側へ出て、末の妹が採ツて來た草花で、花束を作ツて妹にやり、而して妹を相手に遊びながら、編物をして居ると、暫くして父は歸ツて來ました、すご〳〵とした風で。が直には家へ入りません、暫時立止ツて家の樣子を伺ツて居たが、母も妹も居らずお糸一人の樣子を見て、少し安心した者か、入ツて來ました、五尺の體も四尺にでもなれかしといふ風情で、肩をすぼめ、足を拔く樣にして、怖々と入ツて來ました。お糸は編物をしながら、父の姿をちらりと見て。「おや父上お歸んなさい、」と何氣ない體で言ツた。此體を見て父は愈安心した樣子、然し其でも猶持つ足、定めし女房からも聽いたらうと思ふので、何となく薄氣味わるく、もう言譯を始めます。
「昨夜はな、新田の虎右衛門まで用があツて往ツただ、すると若衆達がえらく集まツて居て、やあ丁度宜え所へ來た、今夜は遊山講だ、一杯呑めえてだ。何よすべい今夜は嬶が來て居るからと言ツたんだけど、まあ宜えわ、手間は取らせねえのなんのと、皆が出て來てわい〳〵言ふだ。其から予も上込んで一杯引掛けると、だめよ。二杯三杯とやる中につい醉ツて、其なり其處へ打倒れて仕舞ツただ、其で今朝まで何も知らずさ、心配しただツぺい昨夜は？
有丈の智慧を絞ツて考へた僞、お糸は碌に聽きもせぬ樣子。
「あゝ、さうでしたか。御膳はまだでせう？　御上んなさいまし、御膳を出して上げますから。
言ツて膳を出す、其中に父は古井の水を汲み上げて貌を洗ひ、遙に日輪を拜して、自家信仰の神佛に向ツて、家內安全、息災延命、博奕に勝たせたびたまへと無理な願望を一心に念じ、念じ終ツて家へ這入ります。妹は姉に作ツて貰ツた花束を、さも大事さうに手の中で丸めたり、

さも珍らしさうに眺めたりしながら、此珍らしい姊の細工物を、小さな遊友達に吹聴の爲め表の方へ出て往きました。
父は食事を終ると、やがて又何處へか出て往かうとする、お糸は急に呼び止めて、
「少し父上、申上げたい事が有りますから。
父はぎくりとした體でお糸の貌を見詰めながら。
「何か用かい？
「はい少し。まあ其處へお坐んなすツて。
父が其處へ坐るのを見ると、お糸は胸に張詰めて居た感情の爲めに泣き出さぬ許り、聲を曇らして、
「父上！ 私は昨夜母様から悉皆聽きましたが、餘り其では非道うございますよ。博奕をなさるツて、まあ眞成に何としたお心なのです？
言ツて恨しさうに、然し眞心の、誠實なる愛情の籠る目元で父の貌を見詰めます、父は赤面して言葉なく唯俯向いて居る許り。
「凡そ世の中に不正直な事があると言ツて、博奕程、不正直な事が有りますか？ 人は正直でなければなりません、正直でなければ人ではありません、働いて今日を送るのが世の道理です。博奕は勝てば多くの金を得るとお思ひでせうか、働いて得たのでないから不正の金です、人から盜むのではないが、天から盜むのです、負けるのは不正だから負けるのです。不正の事だからこそ政府でも禁じてあるのです、お上からも法度なのです。其を其樣な事をなすツて、萬一知れでもしたら如何遊ばします？ 其こそ懲役です。萬一其樣な事にでもなツたら如何して村の者へ貌向が出來ます、實に恥づべき事ではありませんか？ 如何ぞお願ひですから、是許はお廢しなすツて下さい、私が一生の願ですから。
潸然と涙を溢し、兩手を父の前へ突き、疊へひれ伏して諫めました、父も流石に悄然とした風で、
「嗚呼、予が惡かツた。もう今日ぎりで止めるから勘辨してくれ、久しぶりで歸ツて來たお前がにまで、此苦勞をかけては濟まねえ、もう佶度廢めるから勘辨してくれ。
お糸はぢツと父の貌を見て居たが、
「其では廢めて下さいますか、私の言ふ事を聽いて下さいますか？ 嬉しい！……父上が惡戲を始めてから此方、母様の心配苦勞は……家財衣類は賣ツてお仕舞ひはなさる、畑へはお出なさらず……眞當に可哀さうではありませんか、皆が着る物もない樣な始末にして、可哀相ではありませんか？ 如何ぞ私の言ふ事をお用ひなさツて、必ずお廢めなすツて下さい。
「お糸！ 勘辨してくれよ。予も疾から惡い事だ廢めべえ〳〵と思ツて居るが是まで取られた金も少くねえだから、如何かして丁目の丁度、十兩か十五兩まとまツて金が取れたら、せめて其を汐に廢めべえと思ツて居るだけんど運惡く缺目々々と出て此しだらくよ。如何ぞ惡く思ツてくれるなよ。
言ツて悄然とさし俯向きました。お糸は涙をしばたゝきながら、父の貌色を見詰めて居たが、ふと立上ツて自分の衣服を三四枚持ち出し、其を父の前に並べ、
「其では父上、父上の念晴しに此衣服を持ツて往ツて、勝負をしてお出でなさい、質に入れたら五圓や六圓は貸しませうから、其が無くなるまでお張んなさい。其代り私に願があります。萬一父上がお勝ちなすツたら、其を汐に廢めて下さい、若し又お負けなすツたら、成程博奕といふ者は不正の者だ、決してすべき者でないのだと思ツて、以來は必ず止めて下さい、見向きもしないで、下さい。さあ如何ぞ是はお使ひ下さい。

父は涙ぐむ目をしばたゝき、
―否、予廢める、借度廢めるだから安心のして
くれ。此は不用ねえよ、あに何として、此を使
ッて濟むものか。
迷と悟、其半途を迷ッて居る父の様子を見て、
寧そ使へと種々にお糸は勸めました、其で父も
承諾して、例の衣服を持ッて、何處へか出掛け
て往きました。後でお糸は眞實行を改めれば
宜いがと、尚も心を傷めて居ると、凡そ一時間
も過ぎてから父は歸ッて來ました、見れば最前
の衣服を持ッて、歸ッて來ると直にお糸の前に
坐り、さめ〲と涙を溢して、今までは予が惡
かッた、今日からは切ッぱりと廢める、まとま
ッた金を得たらと思ッて居たのも過りだ、お前
の意見で目が覺めた、如何ぞ今までの事は勘辨
してくれ、予が心を妻にもよく話してくれと、
眞實面に現はれて語りました。此時のお糸の
心持、父是を聽いた時のお糸の母の心の中、
思ひやるさへ餘りあります。此事は是で濟みま
した。お糸は匡の安否に心を忍ばせながら、
其日も、其翌日も、便を待貌に送ッて居たが、
中一日を置いて翌々日の午後、匡の許から一人
の使が來て、お手紙をと差出しました。何事で
あるかと封を切ッて見ると。

至急御面會致度儀有之候間、使の者同
道にて御來臨被下度候早々不悉。
但し處は、熊ヶ谷‥驛‥‥町、‥‥
番地佐野屋善兵衛方。

と書いてありました。吉か、凶か、訝しい此
手紙、然し至急とあれば猶豫もならずと、直に
身支度をして出て往きました。嗚呼然し前途に
横はる者は何物でせう？　幸か、不幸か？　不
幸は來り易く、幸は破れ易い物、寸善尺魔の俚
諺もある世の中、急用とは如何なる事でありま
せう？　殊に熊ヶ谷驛の佐野屋に居るとは？

……今日は七月の十三日、此處等は田舎の事な
れば、昔の風俗に存して何處の家でも魂祭、
迎火の煙がしめやかに藁屋根をかすめて立つ
有様など如何にも物寂しい盆の夕暮です。
小さな農家から四五間を隔てて、新に建てられ
た、一軒の家、住む人とては二十許りの一佳人。
思ふ人に先立たれて世を住みわびた者でもある
か？　如何なる悲しい事があるか？　浮世の秋
を我身一つの秋とかこち貌に縁側に腰を掛けて
這昇る下絃の月を見て居ます。淋しさの事始な
り盆の月。と穿ち貌に述べた此一句、何人の句
でありましたか、實に趣きの深い句であります、
然し其は近い悲しみを持たぬ人の身の上、お糸
の如きは匡に死別れてから僅に三月、其三月
は斷腸悲歎の涙の三月、其故月の清光、其が
爲めには森羅萬象も無邊の風月影裡の影と優美
の景色になる其清光も、却て胸を射るの一矢
です。此不朽無盡の清光が身に染みて苦痛の種
となります、微笑を含む樣な萬象の姿は心の
悲しみを破ります。照り渡る月の光は少女の
神經を狂はせます、哀是が爲めに愛する月を
も憎む樣になる、何處へ身を措いて宜いのでせ
う？

お糸は家へ入ッて、いま〱しさうに雨戸をし
め切りました。家の内には細かに立つ香の煙
が一條の道を作りながら東の方の窓から小蛇の
這出る如く簷を嘗めて立昇り、吹來る風に遇ッ
てはぱッと一時に消えて仕舞ふ。其窓の鴨居に
は寂しさうな秋草の描かれた盆燈籠が幽な光を
放ッて室の内を照らして居るが其燈籠の光も、
お糸の目には我胸の中を見すかして共に悲む樣
に見えます。嗚呼迷！　此の如き想像が愈胸
を苦しめ、心を痛めます。お糸は其處へ坐ッて
ぢッと燈籠を見詰めます。亡人の來る夜といふ
今宵、愚かな其樣な事が、と判然智慧では知ッ

て啼て其で啼て情では、其とも來る事が、他の人の日には見えずと、思ひ詰めて居る人の日には、此世、彼世、幽と明、道を異にして居ても、精靈は無形の物、精靈の相感……必ずしも無いと定める事は……迷ッて見れば迷が却て頼母しく、亦誠らしくも思はれる。若し來るなら何處から？　彼燈籠の影？……彼草花の蔭からか？……　果敢ない事を頼みに草の戰ぐ度にも、燈籠の揺れる度にも胸を躍かして待ッて居たが、無慘！　待つ甲斐もなく徒らに時は過ぎました。ふと又思ひ直したか、立上ッて摩る早附木、洋燈に火を點し其から机の上に皮文庫を取出し、文など繰廣げて讀み始めました。

如何なる文？　片見に遺る亡人の筆の痕か？　墨も黒々としてまだ乾かぬと思はれる許りの遺文を見ては一層思ひ慕はれるは其人、思ひ出されては源氏幻の巻、「たゞ今の樣なるすみつぎ實に千歳のかたみにしつべかりけるを見ずなりぬべきよ」云々とは過ぎし人を傷む言の葉。然し彼は浮いた雲井の戀、是は沈んだ伏屋の戀、無情の一燈も情ある如く、しく〳〵として紅涙袖を絞る憂思ひ、過去ッた事を思ひ出して父今更の樣に歎いて居ます、胸で高波を立てて泣いて居ます。泣伏した貌袖の上より上げ得ません、暫くは其儘でした。物音もしない、身動きもしない。

然し物には度があります。神經も次第に靜り、斷腸の悲みも薄くなります、すると既往の記憶はそれから其と目の前に浮んで來ます。

東京から歸ッて來た四日目の午後、匡の許から使が來た、其身は熊ヶ谷の旅宿屋佐野屋に居る、逢はねばならぬ事がある、使と共に來る樣との事、何か仔細のある事と、尋ねて聽けば父との爭論、祖母や、母や、親類の者の諫も聽かず、親子全く不和となッたといふ其時の事。祖母の許から一萬圓の金を送られた時の事。匡と共に東京へ出て新に家を持ッた時の事。其から新生活を導かうと、匡を諫め、勵まし、慰めた甲斐もなく骨肉と別居の苦痛に堪へず、柔弱にも、腑甲斐なくも、憂苦を忘れんとして、竊に花がるたを始めた時の事。僅に二十日か二十一日の間に九千圓餘の金を失ッた事。其を慚愧してか、骨肉との不和に堪へずにか、自殺の罪人となッた事。斯く打續く不幸に力を落し、行末如何になりゆく事かと疑懼心痛の中に、野邊の送りやら、故郷への移住やら、總て是等小說にでもありさうな、種々樣々の事が目前に現はれ、走馬燈の如く、次第々々に變轉して、やがて其が一つになッて幻の如く、朦朧となります。

折からどッと吹入る風、襟元の冷かなるに、宛然夢から覺めた人の如く、お糸は後をふり返ッた。もう燈籠の火も消えて居ます、半夜を知らせる山寺の鐘が鏘々として窓の底に聞えるも哀です。お糸は殆んど夢の心地で立上り、燈籠を下したが、其なり窓の下に坐ッて天を眺め出しました。今までは天や月が神經を亂す媒介であッたが、今は却て神經を鎭める媒となります。先には涙の前、今は涙の後、如何なる心理上の關係があるか、實に人情は斯うした物です。而して其想像は、過去の記憶や、現在の悲歎や、未來の想像の如き、下界の迷想ではありません。お糸の心は夢幻の樣な闇に遠い雲井の天、月の照る處星の晃く處其處には愛らしい人が居ると思はれる、雲井の天に通ッて居ます。

嗚呼天！　限りなく高遠の、限りなく廣大の、限りなく圓明の、然し神祕幽冥にして見透す事の出來ぬ天は、手にも採られず、目にも見えぬ我々の心と如何なる關係を持ッて居るのでせう？　今幽邃明潔の天はお糸の心鏡に映じて、其心鏡の中には天來の感情が寫ッて居ます。天

與の靈智は實に大有力の者ではあるが、感情も亦神祕の一寶です。照々として下土を照らす無量海の神の心は、何人をも救はずに居ませうか？　今まで悲歎の爲めに閉ぢられて居たお糸の心は、哀感情の絲一飛、天漢を探ッて歡喜の冀望を起しました。

此世に生を受け、辛苦艱難に身を苦しめて居たお糸の心は、此地球上の憂苦の絆や、悲歎の覊を離れて、何處ともなく、天に向ッて旅立ちます。嗚呼憂苦の多き其生涯、其生涯をお糸は深く侮り深く賤んで居たが、其もう疲れた彼の身に宿る力もない樣です。お糸には其身の靈魂……神祕の造化、無量の愛、最高の靈智、無窮の光の所作である……其靈魂が此身を離れて、戀しい人の居る彼方、此一月以來寧そ此身をもと願ッた、其彼方に飄々として昇る樣に思はれます。而してお糸は若し全く彼方へ昇りきッたなら、此無窮不變の愛の精靈は、僅一瞬間の下界の契りで消えるものではなく、暫時の離別で滅する者ではなく、天に於て蘇生し、天に於て盡未來際一蓮託生の無窮の幸福を得るであらうと、其許りを冀望に何處ともなく飛行して居ます、而してさう思ふと不思議です、突然目前に戀しい人の姿が現はれました。匡様！

僅一言、瞬間に二人は一つに寄る、女は男の肩へすがり付く、男は其儘に抱へる、無窮の契り、花の樣な頰が他の頰と重りました……時に天の使が微笑を含みながら出現して、羽衣を廣げて二人を擁護する如く見守ッて居ます。

夢ではないか？

お糸は喜びの餘り夢心地で、さう思ひました。

然し現在二人は手と手を組みながら、羽化蟬脫の神仙の如く逍遙として雲井の天を飛び行きます。暫くして目前に大な墓場が現はれました、見れば谷中の天王寺、二人は森匡と書いた墓石の前に降立ちました。無數の烏が墓頭の大樹を繞ッて、頻りと啼立てゝ居ます。はッと思ッてお糸は貌を上げた……嗚呼是南柯の一夢、唯眞なのは西に沈む月影にばかされて頭上の椎木で啼いて居る烏許り。お糸は茫然として遙の天を慕しさうに、又恨しさうに見詰めて居ました。

＊　＊　＊　＊　＊

是から一月程過ぎて、お糸はある學校の女敎師となッて往きました。思ふに此娘は、恰も野末の菊の開きもせず、散りもせず、幹の枯れると共に凋れる如く命を終るでありませう？　野末の菊、其が此娘の生涯でありませう。

くされたまご

上

一輛の鐵道馬車京橋の際にて止まりぬ、見れば狭き昇降口に乘る人下りる人入りまじりて鬧ぎ着せり、最少しお詰めなされてと罵るは御者の聲。しばしは込合ふ様子なりしが、やう〜にして静まりしは一同よき程に居並びしなるべし。最後に入來るは若き女、黒縮緬のおこそ頭巾に顏は半かくれて見えねど、色の白さうつくしさ、頭巾の際よりさし覗くしめりを帯びし目の清しさ、何れか見る人の心を惹かざらん。何處に坐るべきかと躊躇ふ様にてすツきりとして佇立む姿、朝日に背く女郎花の一もとならで立てる風情あり。誠に心の鏡こそ人の目に止まらざらめ、姿の花の引力の强さ、車上の人の幾多の目は只此花に集りぬ。彼方の一隅に腰を掛けて、只外の方を見詰め居たる、十六七の少年ありしが、其だに傍のけはひに誘はれ覺えず此方を見かへりし、其顏だちの愛らしさ。目を見合せし件の女はつか〜と歩み寄り、其傍に腰を掛けぬ。腰を掛けつゝ小聲にて、「あゝ窮屈な、」と呟きながら眉を顰めて、うッとしさうに被れる頭巾を脱ぎ棄てて、初て見する其顏は十人並より美しかるべし。しだらなく合せたる其襟附は兎もすれば滾らすべし胸の羽二重、みだらがはしき下前は歩かば蹴出さん白き脛、いきなりの束髪結に、見得を棄てたる羽織の着こなし、玄人にしては不粋に過ぎ、娘にしてはみだらな粧姿。そも如何なる身分の女か、世なれて見ゆるも不思議なり。少年はまがひなき書生風、ごむ靴に朱塗の利足袋、短き小倉の袴を穿き、洒落らしき扮裝なり。まだをさなけの失せかねし無心の風も憎からず。清しき目、朱き唇、翠の眉は桃色の頬に映じ、一層見まさる愛らしさ、飾らぬ粧はなかなかに包める玉の光をますべし。女は脱いだる頭巾をいぢり、折々其目に情を含み、少年の方を見かへれど彼方はとんと氣がつかず、只ぼんやり繪の廣告に目を注ぎつゝ餘念なし。其中に日本橋、と叫ぶは馬車のすたこえしよん、又此處にても幾人歟、或は下り、或は乘り、以前に増りて込合ひたり。此時香と諸共に女はやをら腰を移し、少年の方へすり寄りたり、然れば二人の間には唯衣一重の垣あるのみ。車の動に打搖れて時々傍に、此女の懐にせる香水は馥郁たる其香を少年の鼻に送るなるべく、又少年のつく息は女の息と和するなるべし。兎角する間に車は進みて、萬世橋に着くと其儘、少年は急がはしく眞先に飛び下りる、女も周章てて飛び下りる、少年は心着なく草坡の郷に引添うて彼方の高き坂に向ひつか〜と往く程に、女も同じ方へと歩び往來まばらになりし時、

「もし〜、」と後より女は小聲で呼びかけぬ。されど彼方の耳には入らず、女はきざみ足にて前へ進み、

「もし〜。」

少年はふり向いて立止まり、

「私ですか。」

「少々伺ひますが。」

ト言ひて見る目に流す秋の波、情を籠めたる口元の少し大き過ぎるは玉に瑕、其をかくすしめ笑ひ、

「西紺屋町と申すは何の邊でござんせう。」

「西紺屋町？」

少年は不審さうに女の貌を見て。

「西紅梅町は上ッて左の方へ往くのです。

つぎ穩なく言ひ捨てて往かんとすれば、女は周章てて呼び止め、

「あの、何んですか。また餘程有りますか。

「いゝえ、二三町です。

少年はきまり惡さうに横を向き、正面の板塀に返答三昧、額にかゝる緑の髮、怜悧さうな其まなざし、愛らしい二重瞼、美しい頬の薄桃色、男が見ても見返るべし。女はつくゞゝと少年の貌を見つめ、にッこりと笑みて笑門を現はし、

「十八番地といふと何の邊になりませう。

「知りません。

問ふべき事も盡果てぬ、引止めん術もたければ別れんとせり。其時しも、「松村さん、」と呼ぶは後へ來る人なり、見返れば一個の紳士。二人は同時に、

「おゝ宮川君。

「おや宮川さん、何處へ。

「貴君の處へ、(少年に向ひ)お前、松村さんを知ッてるか、

「いゝえ。

と膨れた聲、女は口をさしはさみ、

「知ッてる方ではないんですが、今搜す人がありますので、番地を伺ッて居たんですよ、宮川さん、よく貴君御存じですねえ、此方を。

「知ッてますとも、親類です、而して妙だ、貴君と同姓だ、松村と言ひます。

「おやさう、貴君の御親類、私と同姓、おや嬉しい、何處に知ッてる人があるか知れない者ですねえ、如何かこれからお心易く、貴君。

「往來に立ッて居ても仕方がないが、お前全體何處へ往くのだ、なに我輩の家、さうか。

言葉をゆるめて、

「ふゝと其では歸らうか。

と言ひながら女の方を向いて怪しい目附。相談をかける様な目附。女も意味の深い一瞥。甘える様な一瞥、ぢッと男を見詰めながら、いと打解けしいと優しき調子にて、宮川の傍へすり寄りながら、

「來て下さらないの、少しお願があるのですよ、貴君の力が借りたいの、來て下さいな。

舌たるき言葉、又少年の方へ向ひ、

「ねえ、貴君、御用がないのならいらッしやいな、宮川さんと一所に、私の處へ、直ぐ其處ですから。いゝえ御遠慮には及びませんよ、誰も居ないのですから。

女は宮川には勿論の事、今過ッた許りの少年にさへ、恰も十年の知己の如くいと打解けし話ぶり。此談判の結果として、少年は宮川と共に女の住居へ趣きぬ。

「さ何卒ぞ此方へ。お敷きなすッて。

女は少年に蒲團を勸めて、火鉢に炭を積み居たり。宮川は遠慮もなく蒲團の上へ箕坐をかき、机に臂をもたせかけ、くの字形に體をゆがめ、其あたりに散ッて居る二三枚の紙をかきよせ、見れば、女主人が筆をふるひし鉛筆畫。

「や、大分御上達だ、滅法に上りましたね。

「上りましてせう、ほゝゝゝ、私は今に美術共進會へ出さうと思ッて、はゝゝゝ、お、あつ、火の中へ目が這入ッて、

「え、火の中へ目が？　其奴は大變だ、目玉の黒燒だ。あはゝゝゝ。

「何んですねえ、口の惡い、貴君吹いて下さいよ、私はお茶を入れますから。さ、松村さん、此方へ寄ッておあたんなさい、私は此通りながさつ者ですからね、かしこまッて居ちやア厭ですよ。さ、袴をお取んなさいよ、そんな、窮屈袋だわ。ほゝゝゝ。

譯もなき愛敬笑ひ、立上りて階子段の傍に寄り下を覗いて大きな聲、

「叔母さん、お湯を、叔母さん、叔母さあアん……つんぼだねえ……いゝえお湯、お湯だッて

貴君、あ、早くよ。

舌打をしながら元の席へ立戾り、坐る恰好のしたらなさ。

「耳が遠いから、一寸言ひつけるのも大變なこと。口がすッぱくなッちまふの。

是より松村の通ふ學校の在處、其下宿の模樣、山口と宮川との間柄、山口の故鄕、其兩親の事、扨又此婦人は宮川の父の立てたる女學校の教師といふ事、熱心なる耶蘇教信者といふ事、耶蘇教の宗旨の事、是等の事が話の種にて、談笑凡そ一時間。女主人は始終打解けた樣な、やさしい樣な、磊落の樣な、氣取ッた樣な、一種不思議の言語取なし。十七の少年にあらぬ者も聞く耳をたつる辯舌なり。

此時宮川は俄に思ひ出した樣に、

「風教雜誌を讀みましたか、昨日の。

「あ、讀みました。

「上村の道德論は如何でした。

「さうさ、感心する程でもないのねえ、知ッてる事ばかりです。如何も博士の議論だとは思へません。如何して貴君。一體人間は汚れた罪のある心を以て、世の中に生れたんですものを、神の惠でなけりやア、幸になれますものか。

何時まで經ッても話のきれる樣子なければ、少年はやう〳〵倦み、遲くなるから。と立ちかゝるを女主人は周章てゝおしとゞめ、

「おや、何故、よいぢやありませんか、もッと遊んでらッしやいよ、あの御膳をあげますから。

いゝえ、御膳を喫べない中は歸しません、ほゝ、貴君と一所に喫べたいの、いゝえ眞成に、さうなの、ほゝゝゝ、まアお坐んなさいよ、お神輿をお据ゑなさいよ。

少年は苦笑ひ、坐り直すのを見て、

「ほゝゝゝ、あんまり亂暴だから喫驚しましたか、私は新主義なの、ざッくばらん主義なの。

言ひ終ッて俄に靜になり、ぢッと少年の貌を見る情を含みし目元の愛敬、頻に見えたる笑凹の力、少年は引止められ、立掛けし膝に面目なく、態と小用に立つなるべし。跡を見送り宮川は女の傍へすり寄りつゝ、最も低き聲音にて囁きつぐる二言三言、人差指にて女主人の頰をちよいと突く……扨も無禮な……女主人は此無禮を何とかする。見れば目元に運ぶ萬斛の情、體を少し搖ぶッて舌ッたるい甘えた調子。

「人を……憎らしい。

中

爽かに涼しき月は欄干の邊までもさし入りぬ。年まだ若き一個の手弱女背を緣側の柱にもたせ、しどけなき立膝して、只獨りかなづるは月に緣ある四絃の琴。柔かき月光は朧に肩より下を照し、くつろげたる襟の間より著しく見えわたる乳のあたり白き肌膚もなまめかし。裳裾の端は風になびきてひら〳〵と打ひらめき、其度に覗く爪はづれの尋常さ。嗚呼是何等の多情の妖物。忍音に唱ふ俗曲は清樂に飜したれど、さすがに調子色めきて鶯宿梅のゆかしさを風に語らふ風情あり。

折しも階子段に人の足音。

「松村さん。

「おや竹さん、如何したの、大變遲いねえ。

二階口へ顏を出すはまたうら若き少年。

「眞暗ですネ、點けないの、燈火を？

「不風流なことを。まア此月を御覽なさいよ、あ、一寸一寸、坐らないで憚り、らんぷを取ッて頂戴、床の間の。

「おや何んだ、やッぱり點けるの。

「實は面倒だから點けなかッたのさ。

「おや〳〵、來ると早々使ふんだもの。

「だッて長者の爲には枝を折れと、東洋の道でも言ひまさアね、況て立ッてる者は親でも使へと、ちやんと聖書の中に書いてあるもの。ほ

「ほゝゝゝ。
「馬鹿氣きツてら。
「おや膨れて、それでも取ツてくれるから嬉しい。眞個に君は柔順だよ、はい是は憚りさま、お手を戴きたてまつります。ほゝゝゝ。
笑ひながら火を點ける、其顏を見れば前囘の婦人なり。父晉といふは其時の少年。
「おや何處へ往くの。
「一寸火敬、いひ付ける事があるんだから。
流し目に少年を一寸見返り、しどけなき裳裾を蹴返しつゝ、とツかツぱと階子段を下りて往く、萬事當世好み活潑なるものなり。少年は手持なさ月琴を引よせて搔きならす獨得の器用彈、かけ撥澤山の素人おどかし、技前は婦人と伯仲の間なり。何時の間にかは戻りし婦人、おやと言ツて立ツたる儘、目を細くしてつく〴〵と眺め、
「甘いこと、大層上手になりましたねえ、きツと何處かで習ツたんだよ、それだから學問が厭になるんだ。
言ひかけて急に眞面目、
「眞成に冗談ぢやア有りませんよ、そんなに月琴ばかり上手になツて、如何なさるの、不可ませんねえ、此頃は貴君はなまけるツて、專ら評判ですよ、
「なまけるツて？　馬鹿な、迂詐ですよみんな。
「まア迂詐なら迂詐として、晉さん、私は貴君に遇ツたら聞いて見ようと思ツて居た事があるの、私が此間、さう、何時だツけ、あれは、さう、慥十九日、一寸貴君の下宿へ寄ツたら、貴君は昨夜出た切まだ歸らないツて、言ツて居ましたが、何處へ往ツたんです彼時は、え、何處へ往ツたんですよ。
「何處へツて？　彼時は……彼時は朋友の處へ往ツたのさ、それで、その遲くなツたから泊ツたのさ。
「うそを、知ツてますよ、そんな空をつかツて小野田さんと一所に往ツたのでせう。さうでせう。あら、さうだもんだから笑ツて居て、眞成に憎らしいよ此人は。
言ひかけて又眞面目、
「不可ませんねえ今から其樣な處へ往く樣では、もウお廢しなさいよ、彼樣な處へ往くものは如何せ碌な者にはなりませんよ、田舍で如何樣に心配なさツてだか知れやアしません。
折から皺がれた咳拂ひ、暫くしてやツとこさ、階子段の上へ現はるゝは此家の老婆、婦人はふり返ツて莞爾打笑み、
「あ、有難う、如何ぞ其處へ置いて、晉さん今日はめづらしく御馳走しますよ、君の好物を。
「なに酒、酒は、
「おや、不思議さうな顏して、厭ひ？　え、私の處では飮まないの。何ですと私にすまないツて。何故、宗敎家だから？　宗敎家だツても私は飮むのさ、無論管はないのさ、お酒を禁ずるのは儀式上の事ですもの、儀式も無學の者には入要ですけれど、道理を知ツてる者には要りやアしません。私はお酒を飮むと氣が淸々として來て、罪も報も忘れて仕舞ツて、眞個に淸淨潔白になるやうですよ。而して惡い氣なんざア少しもなくなツて、世の中が面白くなるんですから、私は却て飮む方が宜いと思ひますわ。
此說敎の最中に下座敷の方にて男の聲、是前囘の宮川なり。
「居ますか。
「ちよツ　うるさい、またやツて來たよ。
西施ぶりといふ眉の皺、然れど流石は女の持前、宮川の顏を見ては急に莞爾、
「お出でなさい、丁度宜い所、今晉さんが來たから御馳走しようと思ツた所。
机の引出よりころツぷ抜を取出し、
「晉さん失敬、一寸拔いて頂戴。

「宜しい、感いたなア、せん抜きまで揃ッてるなア。

山海の珍産とはまゐらぬも、肴屋鮓屋を覆したる色々品々、二人前の註文を三分して内心悵しき婦人の顏、餘儀なく櫻色にほのめいたり。

宮川は婦人に向ひ、

「貴君は昨日の協會へ出ましたかえ、

「なんで出ますものか、人を面白くもない、町口大人の演說なんざア聞いたッて有難くは有りませんもの、人を……父兄に對する女子の心得ッ。女子の心得もないものだ、自分は如何でせう、彼樣な行ひでよくあれで平氣で演說が出來ますねえ。

「皆あんなのさ、今の奴は。

「而成ですねえ、愛するッても日本の者は人柄を見ずに愛するんですもの、だから溺愛すると云ふのは問題ですねえ、無闇愛するのは惡くはないさ、丁度嫌ひな人を愛し事が出來ないと同じ樣に愛らしい人に愛さない譯にはいきません、神は敵をも愛せと申しましたもの、だから愛、其自身は高尙ですが。

又暫くは愛の說教。聞へはさまるは宮川のまぜかへしと昔の心理學、否變理學、婦人はさがて言葉をつぎ、

「然し同じ愛するのでも、命をかけて愛する程なら、實に、まだ賴みがありますが、日本の男女の樣に眞實といふものは、藥にしたくも少ともなく、顏ならおよし他にあるからといふ樣な浮氣一三昧の戀で、寄ると觸ると一所になりッこでは、實に困りますねエ、其といふが畢竟無宗教だからですよ。神の教なんといふと、頭からかッけなして相手にしないんですもの、道德が地を拂ッてないからですよ、其も宜いが、自分たちが左樣たものですから、世を標準にして人の事を兎や角と云ふンですもの、失敬ちやありませんか。私の事などは妙な事を言ッてますとさ、貴君と怪しいッて、眞成に人を馬鹿にした、私は此樣な主義ですが、是でも神の教は奉じてますからねエ、いやに外部を飾ッて內々醜行を極めてる利口な人とは違ひますからね、其を其樣な事を言ッてますとさ、失敬な面が憎いぢやアありませんか。

宮川は口をはさみ、

「何とでも言ふなら言はせて置くさ、人は何と言はうと自分さへ正しければ良心に恥ずる事はないさ、良心に恥づる事さへなければ其で宜いさ、さア飲まう飲まう、注いでくれたまへ一杯、もう其樣な話はやめいやめい。

是よりは互の歡酣なりて二人は殆どとろんけん。婦人は流し目に宮川を見て、君はもう醉ッてか意氣地のない、何故ぐた〳〵して居たまふ、妾はぐにやつく人きつい嫌ひ とたしなめられて、笑止にも宮川は俄に元氣を裝ひ、大きな聲にて歌を唱ふ、婦人は圖に乘ッて宮川に向ひ、「貴君は拍子をとりたまへ とかの命令かしこみ 奉りて手を打つ宮川、暫しは大騷ぎにてありたるが、酒も大方盡きたる頃、女は机に片手を突き、反身になッて大きな聲、

「諸君！ 神は月を造ッて我々に此清夜を與へて居ます、斯の如き清夜を家の中で費しますのは實に惜しむべき事ではありませんか。

此までは眞面目で言ひ、終に大聲で笑ひ出し、

「さアぶらつきませうよ、街を、街をさ、よう、ぶらつかうてばねえ。

婦人は宮川に手を引かれ、宮は其うしろに附添ひつゝ何處へか出で往きぬ。後にはさし入る眞如の月、室内の涼氣も立ちかはれり。

下

ふけゆく夜半の鐘、數ふれば早十一時、一輛の人力車、轆々と鳴り渡りて突然表口に止りぬ。車上より轉ぶ如くよろめき〳〵現はれしは洋服

を着たる一個の男、酒氣紛々として鼻を突くばかり、足元の定まらぬは十二分に醉うたるものなるべし、何事かうめきながら格子戸口に立寄りしが、醉漢の常とて荒々しく戸を開くべきに、左はなくて靜に開け、醉うても本性たがはぬか、右左を見廻りつゝ中へ這入りて靜に閉め、「婆ア〳〵」と小聲で呼べど、誰入りしか留守か答なし。

醉漢は蹌々と其儘二階へ昇りたり。

二階の一間には六枚折の古屏風を立廻したれば、內の模樣は見えざれど內より射す燈火の光は屏とともに彼方の壁にうつりて更に又障子隙の方へ反射せり。男は呂律のまはらぬ舌にて、ぶつ〳〵と獨り呟きながら、屏風の內へよろめき入りぬ、內には一個の若き女背向になりて熟睡せり。女のしたる枕の外にならびたる括枕、知らず何人の枕か、床上には盃盤狼藉たり。

「おゝ、おい、文子孃、おい起きたまへ、來たよ宮川が、おい、こら松村女史、おい親愛なる人よ、一寸起きよ、おい、おい神だッて賦よと言やアしまい、おい、よく睡ッてるなア。」

とたんに目に入る一個の德利、生醉の意地のきたなさ、な、なんだ酒……失敬な失敬……試酒なんぞ、どッかり枕上へあぐらをかき右手に德利を振り得意顏に打覗きみ、德利の口より我口へ、扨も無作法な口うつし。有はなきかとうろ〳〵眼、端なく目につきし括枕。

「何んだ枕……二つたアなんだ……二つ並べる枕、繭、へん人を……畜生。」

兩手を擴げし儘、ぐた〳〵と頭をふり、

「いや、有ッた〳〵、たまたま、有難し好下物。」

此時階子段のきしる音して二階へ昇り來るは、少年あやしき香のする絹の襟付きたる袷を着て、其裾を長く引きずり、女の細帶を腰に搭付け、其結目をゆるませたれば、今にも下へずり落けさうな亂らな姿。前も現はにならぬばかり、はんけちにて手を拭き〳〵漸々階子を上り終る。小用にでも往きしなるべし。屏風の內の醉漢は酒に心を奪はれたれば、人來る人の有りとも知らず、右手に鷄卵を取りあげて、頻りに小皿を求むる樣子。少年は斯くとも知らず、是も酒に醉ひたるか、よろめきながらうッかりと屏風の中へすべり入る、思はず躓く蒲團の端、臥したる上へどッさりと倒れかゝれば女は喫驚、

「おゝ痛い、痛いッてばねえ。」

ればれ聲にて叫ぶ婦人、驚き見かへる以前の醉漢、目をするてきッとなり、

「だゝ誰だ……や貴女か……

見る〳〵顏色かはりて「畜生」と言ふや否や持ッたる鷄卵を、貴女の顏へ打付くれば、黃み汁べッたり顏は狼藉、鷄卵は腐ッてありし者歟、鼻持ならぬ惡臭汚穢、貴女は其處へ打倒れる。宮川は立上ッて、

「へゝへゝ、ざまアみろア、腐敗鷄卵め。」

嗚呼腐敗玉子、然り實に之れ玉子なり。臥したる者も倒れたる者も、將亦罵る者も共に腐れり。彼等は皮相より見る時は頗る美しきものにして腐れざる鷄卵と異ならねど、一たび其皮を破り其內を覗へば、身體是腐敗の一塊……悲しい哉墮落者の遺教さへ、輕薄者流の玩具となる今の世の中、嗚呼案じらるゝ世の行末……扨も此場の結局は……扨も文子は如何せしぞ。

＊　＊　＊　＊

松村文子は、宮川よりは白眼、學校よりは背中に鹽、知人からは爪はじき、身には宿す父なし子、途方に暮れて居るも風の便。

婿えらび

第一回

「お嬢樣！　豐田の奧樣が入らッしやいましたよ。」
と胼だらけの指を揉手しながら、走けて來たのは、赤ら貌の下女のお時。「おや、さう」と讀みかけの小說を手に持ッた儘、ばた〳〵と絹布に踵を打たせて、室を走出したのは十六七の娘、玄關の次の間まで入ッて來た二十一二の婦人を見て。
「姉樣よく來ておくんなすッた、待ッて居ましたの。」
言ッて莞爾笑ッた顏、殊れて美しいといふ方ではないが、愛敬は溢れる許りでした。くッきりとして色の白い、廣い額に三日月形を造ッて居る細そりとした眉と、象牙細工にでも有りさうな小さな愛らしい鼻と、口元の尋常さとは、造化も一層念を入れて造ッたものらしい。露を含む細い雙の目の二重目緣は如何にも花やかであるが、眦の下ッて居るのと幼稚じみた頰のぼちや〳〵とした工合とは、どうも鷲神社の絵馬に現はれる某の命に似て居ります。が其が亦第一の愛敬の源。如何にも快闊らしい貌立、薔薇の花簪もよく似合ッて居ます。
客の婦人といふのは目の清やかな怜悧さうな人で、まだ年は若いが何處かに世帶染みた所のあるのは、もう何れへか嫁入りして、家政の采拂をもする人でせう。是は少女の姉であります。
姉はさも親しさうに妹の傍へ倚り。
「兄さんは？
「居ませんの。相變らず姉さん、此方へお出でなさいよ、兄さんの書齋へ、此處が一番涼だから。」
妹が先へ立てば姉は洋服の袴の下から赤毛絲の靴足袋の爪先を見せながら、後から是に續きます。而して廻椽を廻ッて新に建てられたらしい南向の書齋へ入りました。此室は右手の方に一間の床の間と、一間の地袋があッて、上には桐の本箱が列を僞して竝べてあり、左の方の一隅に大きな机があッて、前には腕付の樂椅子があります。
「おや、善い普請だことねえ、南向きで。是は温さうだ。夏も此室は涼しからう。
「さうでせうよ。私は此室が大好。兄さんが居なくなると始終此室へ來てね、
言ひながら樂椅子へ腰を掛け、兩手を投げる樣に机の上へ置き、
「此椅子へ斯う坐ッて本を讀むの。御覽なさい！ほら、ね、手を延ぼすと本箱でせう、此本箱のは和本よ、此方のには小說も有ッてよ。私は中から好きなのを出して讀むの、兄さんが無闇に讀んでは不可、年齡に合はして種類を選ばなければ不可と被仰るが、ほゝ管やあしない、兄さんが居なくなると面白さうなのを中から出して讀むの、而して疲れるとつい知らずにうと〳〵と睡ッて仕舞ふの、日が當ッて宜い心持になるものだから、ほゝゝお婆さん見たやうね。
面白さうに話す妹、姉は身に染みて聞く樣子もなく、立ッた儘室の内を見廻して居たが、
「大層よく片附いて居るねえ、今日は。
「はあ、私が片附けたの。兄さんはね、散らかすのは散らかすが、片附けるといふ事はないの、其で憎らしいのよ、私が片附けて置くと、峯さんが片附けるから本が無茶苦茶になッて仕舞ふッて小言を言ふのだもの。

「さう。克巳はまたね、兄さんと違ツて變な癖があるのだよ。何でも室が綺麗になツて居ないと、何にも出來ないといふの。其に一人で居るのは寂しいツて、だから講義の下書なぞをする時はね、何時でも綺麗に周圍を掃除して、私が傍に坐ツて本を讀んで居るか、其でなければ編物でもして居るの。私が傍に居るのが一番氣が安くツて何かが出來るツて。

妹は莞爾して。

「おや、さう。眞成に妙な癖ねえ、」心の中でまた始まツた克巳さんの噂か、姉さんは餘程なんなのだよ、克巳さんに。

姉は新調の机を見廻しながら。

「峯さん此机は此處へ拵へさせたの？　さう。好い机だことねえ、私も斯ういふのを克巳のに拵へて貰ひませう。

妹は心の中で、「また克巳さんの」と思ひながら姉に向ツて。

「姉さん、私少し姉さんに相談があるの。まあ此處へ腰を掛けて聞いて下さいな。

「あゝ今。相談といツて何？

と言ツたが妹の方へ來ようともせず、机の上にあツた白と紫と赤とで手際よく編まれた綺麗な臂突を見て。

「おや／＼大層綺麗なのだ。如何したの是は？　峯さん、お前が拵へたの。

「はあ、私、綺麗でせう？

「眞成にねえ、大層綺麗だこと、是は好いねえ。私も家へ歸ツたら克巳に拵へてやりませう。

言ツて手に取ツて見とれて居る、妹は「また克巳さんか」と眉を顰め、少し調子を高めて。

「姉さん、餘りね、人が相談があるといふのに。

「あいよ。相談なんて、何んだね、少女のくせに。さあ、なに？

言ツて意味ありさうに笑ひながら、椅子に腰を掛けてまともに妹の貌を見る、妹は姉の風を見て一寸睨み、手を上げて姉の膝を打ち。

「否、姉さんはをかしく笑ツて居るんだもの、人の貌を見て。其では言はうと思ツたツて言へやあしないわ。

「何故」姉も笑ひながら「をかしな子だねえ、お言ひな、其樣な我儘を言はずと。

「だツて言はうと思ツたとて、姉さんは眞身に聞いてくれないのだもの、笑ツて居て。私を何時までも少女の積りで居るのだもの、餘りだわ、私だツてさう何時までも少女ではないわ。

姉はまた意味ありさうに莞爾して妹の貌を覗き込みながら。

「お前、今日は如何かして居るね、眞成によく中ツた、克巳の言ツたのが、昨夜のお前の手紙を見せたら、是は唯ではない屹度彼だと言ツたが、さうなのだよ、お前は如何かして居るのだよ。

「あら！」妹は是を聞くと目を瞠して、「姉さん、私の手紙を克巳さんに見せたの。

と言ツた切り、暫く姉の貌を見詰めて居たが、怨ずる樣な調子で。

「まあ、餘り失敬ねえ、他の手紙を他人に見せるツて、其では他の秘密を他人に話す樣なものだわ。屹度私が上げた今までの手紙も、皆克巳さんに見せたのだよ。誰にも話さない、家の兄さんにも話さない内證の事を姉さんに許り話すのを、其を克巳さんに言ふツて、餘りだわ。心の秘密は文庫の中の寶だわ、其寶を無闇に人に見せるツて……宜うございます、是からはもう姉さんにも何も言はないから、餘り卑劣だわ、人の手紙を他人に見せるツて。

と膨れました、姉は笑ひながら。

「堪忍しておくれ、氣に障ツたら。けれども私と克巳とは夫婦だから兩身同體で、私の心は克巳の心で、克巳の心は私の心で、一人の間には秘密といふものはないのだから、其故お

前の手紙も見せたのに、其にお前、お前の今まで言ッた事や、書いてよこしなすッた事に秘密の事は一つもないのだから他人に話したとて管はない事だよ。まして夫に話したのだもの、何もわるい事は有りはしないやね。

「だッて昨夜あげた手紙は私の秘密なの、其を克巳さんに見せるッて……屹度克巳さんと二人で手紙を見ながら私の事を笑ッたに違ひないよ。いゝえ笑ひましたよ、笑ッたに違ひありません。いゝえ見なくッても私はよらく知ッて居ますよ。

姉は微笑ひながら、

「其は笑ッたには笑ッたけれども、何もわるく思ッて笑ッたのではないわ。お前の事をよく思ッて、お前があんまり未通女だから、唯少し許り一寸お前を愛して笑ッたのだわ。

「そら、御覧なさい！　笑ッたのだから。失敬な餘り卑劣だわ、もう是から姉さんには何も言はないから宜い。姉さんはね、克巳克巳ッて其は御亭主だからさう被仰るのは當然ですけれども私は克巳さんは大きらひ、髭を捻ッて威張ッて許り居るんだもの。峯さん、何故此頃は泊りに來ないッて。誰が泊りになんぞ往くものか、人を。

姉は夫の事をわるく言はれて、流石に不快に思ッたと見え、少し氣色を損じて見えました。けれども妹は少しも管はず、

「私は兄さんにさへ言はない内證の事を姉さんには言ふのだわ、其を克巳さんに言ふッて眞成に……」言ひかけて悲しさうな顔をして、「私、其は父上も母上もなく、兄妹二人だけれど兄さんは男だから、何も彼も言へない事があるわ。其に女は女の姉妹の方が頼母しいものだから、だから私は姉さん許りを頼りにして居るのに、其だのに私の手紙を人に見せる樣な其樣な不道理な……あゝ、もう是から私は何があッても相談しないから宜い、……あゝ眞成にもう情ない、

言ッて萎れました、然も涙ぐんで。姉は是を見ると可哀さうになり、

「何故？　其樣な事が悲しいの？　馬鹿な子だねえ。

「だッて私の事を兄さんも、わるいと言ふのだもの、私は悲しくッて。

「お前の事を？　わるいと？　なんだねえ、其樣なとりとまらない事を言ッて。お前は言憎いものだから種々な事を言ッて居るのだが、お前は戀人が出來たのだらう？　さうだらう？　え、さあ、顔をお擧けよ、何だねえ、左樣なに顔を埋めて。

妹は顔を赤くしました、が其は突臥して居るから知れません。然し顔を姉の膝へ押付けて、とみに其中へ埋めようとでもする如く、而して身を縮めて小さくなり、聞えるか、聞えぬか、と言ふ聲で

「戀人なんて、其樣な譯ではないわ

姉は笑ひながら答を掘出す樣な調子で。

「え、何、左樣な譯ではない、其では如何したの？　まあ、顔をお擧けよ、なんだねえ恥しがッて、あら耳まで赤くしてさ」少し聲を勵まして、「お前夫定めは大事な事だよ、耻しがッて居る場合ではないではないか、

是を聞くと妹は、つッと顔を擧けて、ふッと姉の顔を見たが、直ぐ俯向いて、目で膝の上へ食び込みました。姉は眞身の情合の籠る調子で。

「峯さん、お前の相談といふのは此事だらう？　え、さうだらう？　此事ならお言ひよ、膝とも談合といふ事があるから、私にお話し。お前に如何したら宜いか分らない事でも、私には亦分るかも知れないから。全體お前の親しく交はる人といふのは誰だい、え、なに兄さんの知ッて居る人で、あゝ私も知ッて居る人で、誰だらう？

お言ひな。え、當ッて見ろ？　困るねえ、左様な事を言ッて。左様さねえ、櫻田さんかい？　其でさうではない。其では桃井さん？　え？　其では枝吉さん？　え、さうでもない！？　其では誰だい？　誰だか私には分りはしないやれ、其様なに恥しがらずとお言ひな、其人の名を。

妹は姉に問はれて仕方なく、思ひ切ッたといふ體、投出す様な調子で。

「あの、蒔田さんなの。

「え！　蒔田さん…？

言ッて姉は覺えず立上りました、目をまるくして。

「あの、蒔田數馬さんかい？　まあ！

と言ッた切り棒の様に立ッて下目を使ひながら、妹の貌を見詰めて居ます。妹は姉の驚きに呆氣に取られて、暫く姉の貌を見て居たが急に亦恥しさに誘はれて俯向いて仕舞ッた、暫くして姉は歎息する様な調子で。

「まあ、米さん、お前あんな人の處へお嫁に往きたいの？

妹は貌を擧げて、不思議さうに姉の貌を見ながら。

「何故？　蒔田さんは善い人だわ。

「さうさ、誰もわるい人とは言はないが、然し彼人はお前、克己も左様言ッて居るが、餘り賢い人ではないよ。

此言葉が妹の氣には障ッたものと見え、少しつんとして。

「左様ですね、賢い人ではありますまいよ、然し彼人は愚な人でもありませんわ。

言ッて傍を見詰めながら心の中で。

「皆が蒔田さんの事をわるく言ふよ、失敬な、彼様な善い人を姉さんまでが……姉さんは何だよ、佶度自分の御亭主程えらい人は世界中にたいと思ッて居るのだよ。何だ、彼様な猜むしやなんぞ。私の數馬さんの方が餘程美い男だわ。彼でも自分にはよく見えるのかしら。

姉は聲を低めて、然し力を入れて諭す様な調子で。

「米さん！　其ではお前、蒔田さんの性質がよく分ッたのかい、お嫁に往ッてから後悔しない程によく分ッたのかい？

「いゝえ。分らないの、其だから姉さんに相談するの。兄さんもね婚姻は大事の事だから善く先の性質を見拔かなくては不可と被仰るのですの、ですから私も蒔田さんの性質をもッと能く知らうと思ふけれど、少しも分らないの。何時でも日曜には、佶度彼人と二人で外へ往くから其度に性質を知らうと思ッて話を仕掛けるけれども分らないの。私が何かいふとね、碌に其答はしないで、あれ、向うから馬車が來る、彼中のは大臣であらうか？　いゝや巡査が附いて居ないから左様ではなからうの。やれ向うから來る娘の組は彼は高等女學校の生徒だらうの。やれ、彼處へ來る書生を御覽、頭に夏冬の所帶を載せて居るのといふから、何かと思ッて見ると夏冬の帽子を被ッて往く書生の下宿替であッたり。やれ彼處へ來る職人の風はいなせだのと。其様な事計り言ッて居るのですもの。さうしてね、簪屋だの小間物屋の前なんぞへ立ッて、ほゝゝゝをかしいの、何か買ッてあげようの是が宜からうの、彼が宜からうのと其様な事計り言ッて居るのだから、性質がよく分らないから、私はじれッたくッて仕様がないの。如何したら分るでせう？　ねえ姉さん。

姉は少しをかしくなり、覺えずほゝゝゝと笑ひながら。

「さう、其では分るまい、却て外へ出ない方が宜いのだよ、無闇に話をしたッて分る理がないから。」少し考へて、「其では斯うすると宜いよ、今度彼人が來たらお前は仕事をして居るのだよ。編物か何か手に持ッた儘座敷へ出てお出

で、而して彼人が遊びに往かうと言ッても決して往くのではないよ、今日は用があるから出られません、家で話して居て下さいたと言ッて、彼人を引付けて置いて聞くのだよ。彼人が母上を大事にするか？彼人の將來の目的が如何なる事か？彼人の生活の風は如何なる樣子か？如何なる人を朋友にして居るか？本などを讀むか？讀めば如何なる種類のを好むか？世間の出來事の評判なぞもさせる樣に仕向けて御覽、さうすると彼人の性質が分ッて來るから。

「さうね、なる程。さういふ事を聞けば分りますね。なる程さうだわ。今度來たら外へ往かずに……さうね。

是から姉妹二人は倘斯うして彼してと相談して居ると其處へ最前の下女のお時が、どたばたと走ッて來て、笑ひながら頓興な聲で。

「お孃樣、蒔田さんがお出でになりましたよ。

「おやさう。今往くからお座敷へ。

はいと下女は立ッて往く、後姿を見送ッて姉は微笑しながら

「噂をすれば影だこと。

「さうですね ほゝゝ。姉さんもッと遊んで居て下さいな、もう今に兄さんもお歸んなさいませうから。

あゝ、私は晩まで居る積りだから、私に管はずに彼方へお出でなさい、戀人が待ッて居ませうから、ほゝゝ。

妹は、姉を一寸睨む眞似をして、「厭な姉さんだ、人をなぶッて」と言ひながら立上ッて往きにかゝるを姉は聲をかけて呼び止めて

「其では宜いかい、編物をお忘れでないよ。

「はあ、有難う。

妹は周章しく此室を出で、自分の室へ入り、本箱の上の文庫を開けて、中から編みかけの襪足袋を取出し其から机の引出から、小さな懷中鏡を取出し暫く顏を寫して前髪の亂を直して見て「はんけち」で額際から頰の上あたりを撫でて見て、其から白い綺麗な歯を合せて出して見て、其をかち／＼と言はせて見て、而して暫く自分の顏に見とれて居たが、急に其鏡を放り出すと、編物を手に持ッて又周章しく室を飛出しました。而して客座敷の此方で足を止めて其からは靜に歩いて、そッと隔の襖を開けて、そッと座敷の内へすべり入りました。

第二回

彼方の室では娘の姉が娘が出て往ッて仕舞ふと兄の本箱から四五冊の本を引出し其中から「えりおッと」女史の小說を選んで讀始めました。讀んで十餘「ぺえじ」にならぬ內に主人の兄、即ち此家の主人が歸宅しました、此兄といふは久しく歐洲大陸へ公使館付の書記生となッて洋行して居たが去年の秋歸京して、今は外務省の交際官試補、性質極めて快濶で、然も怜悧で、隨分役にも立つ人故、長官の覺えも目出度く、今の望み行末に嘱いて居る人であります。今もいきなり書齋へ入ッて來たが、妹の來て居るのを見て、忽ち喜ばしさうに笑ひながら、活潑で大きな聲で。

「おや、お絹さんよくお出でだね、今夜はお前の處へ往かうと思ッて居た所だ、はいお歸りもなく。

挨拶が濟むとどたりと椅子の上へ腰を掛け、洋服の扣鈕を外しながら長々と足を延ばして。

「あゝ、くたびれた／＼。

「何處へお出でなすッたの？

「えゝ、なあに長官の處まで少し用があッて往ッたのだが、面倒くさい／＼。」葉卷煙草を取出して香氣を室內に放ちながら、「あ、昨日文部で克巳さんに遇ッたよ、相變らず論客だね、何ちやか次官と頻りに教育上の議論が出て居ッた

「おや、さうでしたか。」と何氣なく言ッて居る

が、夫の善き噂で滿足の體、莞爾とした儘默ッて居たが、

「私は兄さんに遇ッたら何はうと思ッて居ましたが、此間の鹿鳴館の夜會へお出でなすッて。

「あゝ往ッたよ。

「何だか變な噂が新聞に出て居ますが、本當でせうか？　若し眞成なら實に失敬な、なんとも言ひやうは有りませんね、人の事でも、如何も……私は彼晩眠られませんでした、如何に婦人を輕蔑すると言ッて餘りと言へば失敬な、……實に犬の樣な……

少し涙ぐんで、憤りの體でした。が兄は平氣で、

「さう、若し眞成なら殘酷な事だね。然し事實は曖昧だから、まさか彼樣な事が有ッたのでは有るまい、新聞屋の蛙でぎやあ〳〵鳴立てるのだから、迂詐を。彼等は始終物の影法師を追ッかけて居る商賣だからね、然し、其は兎も角、彼樣な噂が立つ所以が、社會の道德の晴雨計だらうよ、ハヽヽヽ。

笑ひながら手を叩いて下女を呼び。

「おい、時や！　紅茶を、其から何かないか？　羊羹があるだらう、え、彼を出してお出で時に絹さん何か今日は御馳走しよう、今に。ゆツくり遊んでおいで、すてきに甘いものを御馳走するから。え、なあに峯が學校で習ッた料理法さ、其を家で實行して居るのだ、餘程妙なものが出來るからまあ今にたべて御覽、あは〳〵あは、お、時にお前はお目出たいのだッてね、此間峯が歸ッて來て話したが、何しろ結構だ。實は其に就いて今夜は如何な樣子だか見に往かうと思ッて居た所さ。左か右かい？

「ほゝゝ、なんですね、兄さん、左か右か今から分るものですかね。

「左樣か、分らんかい。

「分りませんとも、帶でもする頃にならなければ。

「さうか、其奴はしまッた、私は亦直分る事かと思ッて居た。男だと宜いねえ、如何か男にしたいものだ。

「はい、克巳も左樣言ッて居るのですよ、だが是許りは自由になりませんもので。

「さうさね、まあ然し何でも體を大事にしなくては不可よ、」言ひながら急に聲を低くして諭す樣な調子で。「お前の家なぞも老人なしだから、よく其慣れた人に聞いて、體に注意しなくては不可よ。まあ何しろ目出たい〳〵、其はさうと峯の所へは客かい。

「はい、蒔田さんが。

「なに、蒔田？」少し反り返ッて、蒔田のべらぼうか、仕樣のねえ奴だ。此間彼奴め峯を娶にくれと言ひ込んで來た、其から當人の意を聞いてからと斷ッて仕舞ッた、其から後で峯に其話をしたら、峯も峯だ、兄さんさへ宜ければといふから。馬鹿を言ひなさい、お前が嫁に往くのだから、お前が肝腎だ、婚姻をするなら先の性質を見拔かなければ不可と言うたら、其では彼人の性質を見拔きませうだとさ、あは〳〵。

「兄さん、笑ひ事では有りませんよ、」と妹が兄の言葉の腰を折ッて。「峯さんはね、何だか往きたさうな風ですよ。

「馬鹿な事を、何でお前誰が彼樣な男の處へ。

「いゝえ。さうでありません、眞成ですよ、」と眞面目な面に兄も疑ッて。

「さうかい、尤も小袋と小娘は油斷がならぬからの。どれ、其では彼方へ往ッて樣子を見て來ようか。蒔田の馬鹿奴め、彼いふ奴が男女交際の實行者なのだ、男女交際論者は、盛んに口で唱へる奴は賢いから其實中々交際を爲ないて。彼等は世評を恐れるから口で唱へて實際は是を避けて居るて、實行するのは蒔田の樣な馬鹿者

許りだ、智慧のあるのは黙ッて居て唱へ、馬鹿な奴が其に乗ッて動くと、古來相場は一定して居るて、あはゝゝ。男女の交際も智慧のある奴や貴族の有力者が實行する様にならなければ、一時の流行で立消えだ。どれ往ッて見て來よう、細君、お前もお出でなさい、なに宜いやね知らない人ではなし、お出で。

亂暴の様で左様でない、打解けた様で油斷のない、淡白の様で媚びて居る、總て優しさうに持掛ける、一種特別の狡猾々々した、見るから不快の外交家的の調子に慣れた故で、骨肉の姉妹にまで自然其調子で話しながら、妹を勸めたてて、蒔田の居る客間の方へ出掛けました。

三回

此處は八疊敷の客座敷で、正面一間半の床の間に掛けられたのは家重代の重寶、狩野法眼元信の龍虎の二幅對、其前の古木の備臺には大きな二重備が有ッて、其上には源平色どりの菱餅、又其上には金色の橙、綠の葉の烏帽子を載いて乗ッて居ると、最も高い頂きには飾海老が眞赤になッて髭を怒らし、座敷を睨んで扣へて居ます。障子が左右に開けられてある故、居ながら見える庭の景色、黒板塀の折廻らし、僅其内には四つ目垣の假山は植木屋の自慢、岩組を見せた二子山で、其下には瓢を割ッた様な大きな泉水で、其向うには赤松一本、其は一抱へもあらうか、垣の外へ痩せた手を出して居ます。下に御影の春日燈籠、椿の植込み、下草の模様、暮に植木屋が手を入れたものか、掃除の節綺麗新しく、垣根の外には追羽子をする女の兒のかんばしッた聲、しッからめッこ爲ようかやいといふ、紙鳶に夢中の男の兒の聲などが聞えて、正月松の内の模様であります。

座敷の眞中を避けて、少し片隅の方に相對して、坐ッて居る男女の二人、是は言はずと知れた峯といふ娘と、其朋友の蒔田數馬であります。蒔田といふ男を見ると、色の白い鼻筋の通ッた、黒目勝の美男子で、風姿はといふと八丈の下着に、糸織の上着、茶獻上の帶に金鎖を卷付けて時計を懐に忍ばせ、黒龍門の三紋の羽織を着て、つんと澄ました様子、如何見ても立派な男であります。が、よく見ると、惜い事には頬と同じ様に眦が下ッて居て而して其黒目勝の目は如何いふものか霞立つ天の色、どんよりとした薄曇りがあッて、何處となく清やかでありません。而して其口付と言ひ、目付といひ何處となくしまりがなく、所謂間のある貌であります。

娘は蒔田に茶を侑めると下を向いて編物を始めました。

「おや、忙しぶりに仕事ですか？　人が來たと思ッて、もうおやめなさいよ、今日は天氣が好いから貴孃と何處かへ往ッて見ようと思ッて來たのですよ。

「あら、さうですか。」下を向いた儘で、「不可ませんねえ、生憎今日はね出られないのですの。兄さんに頼まれて、是を編まなければなりませんから。

「兄さんにッ。宜いではありませんか、其様なものは今日でなくとも。ようお出なさいよ、此様な好い天氣に家の中に蟄ッて居る者ではありませんよ、さあお出掛なさいよ、さあ、さあ。

言ッて火鉢を兩方の掌で押す様に叩く、娘は其でも貌を擧げもせず、微笑ひながら、

「いゝえ、眞個に今日は出られないのですよ、今夜中に是を拵へる約束なんですもの、約束を違へる譯には往きませんわ、まあ、此處で話していらッしゃいよ、色々伺ひたい事もあるのですから。

言ッて貌を擧げて莞爾笑ッたが、其口元の愛らしさ、弱よく剛を制す、まして蒔田のこと、彼は澁々ながらあきらめた様子であッた。が暫く

して、「あ、さうだッけ」と言ッて、急に何をか思ひ出した樣に袂へ手をやッて、小さな張拔きの箱を取出し、

「すッかり忘れて居た。米さん好い物をあげませう。

「おや、有難う。何です簪？　開けて見て「あ、さうだ。おや〳〵綺麗な、好いつやですねえ、此花は。

菓子を貰ッた小兒の樣に嬉しさうな貌をして、其を手に取ッて見て居る娘、其貌に見とれる蒔田、嬉しさうな貌をして、

「其簪はね、新發明のです、晴雨計の代用を爲ますよ、天氣に因ッて花の色が變るのです。

「おや、まあ、不思議なのですねえ、では化學作用ので、器用なものを拵へますね、此樣なものにまで學理を應用して。眞成にまあ、好いのだ、どら一寸插して見ようや。

言ひながら今まで插して居たのを非職にして、新しいのと插しかへ、一寸頭をかしげて莞爾笑ひながら、

「如何です、似合ッて？

蒔田は見て居たが、

「否、不可、其樣な插し樣をしては。私が插してあげませう。どうお出しなさい。

娘は其[illegible]簪を渡し、俯向いて首を前へ出すと、蒔田氏は延び上ッて如何たる大事の、如何なる名譽ある職務でも務めるか、女帝に冠でも捧げるが如く、一心にお土産の簪を束髪の結び目に插込まうと狙ひました、が此時娘の眞白な頸とつや〳〵とした綠の黑髮がさ〳〵と蒔田の目の中へ入ッて來ました、すると蒔田は簪を插す事を忘れて仕舞ひ、とんと氣拔した如く見惚れて居ました。するとぽたりと冷たいものが何やら娘の頸へ落ちました。娘はおやと言ッて手をやッたが、是は蒔田の口から腮を傳はッて落ちた涎といふものであります。一なんであらう？と娘に不審打たれて、氣の附いた蒔田、急に簪を插さうとしたが、感のわるい故でもあるか、さう急には插さりません、目を細くして、腮を突き出して、口端を尖らしてとんと其で插すのを助けようとでもする如く、屢試みてやッと插さりました。が插方が壺でないと見え、娘は起直ッて、一寸眉を皺め、頭をふッて見て居ました。蒔田は此體を眺めて微笑ひながら、崩れた調子で。よく似合ひますよ、貴孃には、倚ほ美しく見える。總て是等の二人の擧動に因ッて見ると、二人の間に高尚な精神上の交際があるとは思へない。尤も其も其筈で、蒔田は良心とか、戀とか神靈とか、愛とか眞理とか、義とか、情とか、道といふ樣な、無形が世の中にあるといふ事も、殆んど知らぬかと思ふ程の人物、娘はまだ少女の事、是等の無形を味ひ得る程に發達しても居ない、其故二人の交際は極めて淺いた、最も淺はかの交際で、若し二人の間に何物からごめく物があるから、其何物を名付けて愛と言へるかも知れない、が其愛は極めて微弱のもので、迚も哀歡共喜を感ずる程のものではなからう。

扨娘は姉から聞いた通り、そろ〳〵問を措繪めた。

「蒔田さん、貴君の母上はお幾歳？

蒔田は煙管を膝の上で廻しながら、扨は自分の所へ嫁入する氣で姑の齡の穿鑿かなと、少しく喜ばしく思ひながら。

「母ですか？　母はさうですね、慥か五十六か七でせうよ。

「其ではもう善いお年ですね、貴君は母上を大事になさいますか？

是を聞く蒔田は心の中、何故今日は此樣な事を尋ねるのであらう？　是は定めし過日母と喧嘩ッた事、其を誰かから聽いたかなと思ひ、

「左樣さ、別に大事にも爲ませんが、邪見には爲

ません、然し老者といふ者は口やかましい者で默ッて居れば宜いのに、出しやばッて世話を燒くが、何故彼世話が燒きたいのだか、因果のものさ。私は彼だから老者は嫌ひ、だから私は妻でも持つ時は母とは別居する積りです

娘は心の中で、扨は此男孝心の者でない、親に孝でない者なら、妻に對しても誠はあるまいと思ッておッと蒔田の貌を見詰めながら、

「蒔田さん、貴君の銀行は、歸は何時頃? え? 四時? 左樣、貴君歸ッてから何をしてお暮しなさる?

「何をしてと言ッて私は何も爲はしません、唯遊んで計り居るのです、怠惰者だから。

「おや、まだ、其では貴君の將來の目的は何んです、目的はお持ちでせう?

小間しやくれた問を掛出して來た、蒔田は吃驚した貌で、

「目的? 目的なんどを持ッて居るものか。然しまあ、其麼なむづかしい話は止めて何か面白い話をしませう、左樣眞面目くさッた話をしたッて面白くないではありませんか。

娘はこれを聞くと少し乾とした風で、

「いゝえ、人間も稀には眞面目な話もするものですよ、私は貴君の目的を聞きたいのですもの。

ないといふのに。私は彼やッて銀行へ勤めて居るから、是から先きは唯少し宛上りさへすれば夫で宜いので、其に叔父さんが支配人をして居て、勉強さへすれば上げてやるから、勉強しろと言ふから、だから私は銀行の方へは出勤して居ますよ、偶り休みは爲ません。其外は何もう遊ぶ許りです、自慢ではないがえへ〳〵〳〵えへ。

と間の拔けた笑ひ。娘はほッと溜息を吐いて何と馬鹿らしい人なのだらうと思ひながら男の貌を見詰めて、

「而して何をしてお遊びなさるの? 如何な遊びがお好き?

「斯うと言つて別に目立ッた遊びもありませんが、まあ寄席へ往く、とか、楊……(弓と云ひかけて止め)玉突へ往くとか朋友の所を遊ッて歩くとか其樣な事ですなあ、寄席も好きで種々のものへ、講釋、落語、義太夫、浪花節、何でも好きで往きましたが、此頃はもう皆聽きて何も彼も面白くなくなッて仕舞ひました。唯浪花節許りは面白い、其に面白いのは玉突ですね、尤も麥酒をかけたり、西洋料理を掛けたり、又は今度は鰻魚に爲ようとか、いや天ぷらに爲ようとか、なに牛鍋と下落しろ、よし持ッて來いなんといふ、其樣な事が割合で一つは面白いのだらうが、彼は實に面白い。如何も上手の奴が有りますぜ、如何な六かしい玉でも結構突くといふ奴が有るからね、驚きますよ、彼位面白い遊びは有りませんなあ。

「其では貴君は本などをお讀みなさることは有りませんの?

「なんに、其は有りますさ。

「おや、案外と貴君は本許りの讀手、如何な本をお讀みなさる?

「人情本。

と眞面目に對へた。

「梅ごよみとか、八幡鐘とか、八笑人とか、其でなければ圓朝もの、雜誌では百花園、花がたみ、まあ讀めば此麼なもの、馬琴だの京傳の小說は讀んでもさッぱり面白くないから讀みません。あ、さう言へば此頃出て居る百花園に面白い話がありますよ、えゝと何とかいふ下題たッけな? えゝと何とか言ッたけな、忘れて仕舞ッた、えゝと、

眉を顰めて、考へて居る風を見て、娘はをかしさを堪へるといふ風で、唇を嚙んで居ましたが、暫くして、

「其では貴君は銀行から歸ると寄席へ往くか玉

突へ往くか、其でなければ其樣な本を讀んで日をお暮しなさるの？　貴君お友達はお有りですか？

「有りますとも、二三十人あります。

「へえ、其は大層ですね、其では其中にはいゝ人も有りませうね？

「えゝ皆善い人です。

「否、何かの出來る人が有りますか？

「有りますとも。野口なんといふのは大變の通人で、清元も出來れば、常磐津も出來る、新内も一寸は誤魔化すし、其に踊と來たら名人です、眞に貴孃に見せたい樣だ、夕暮だの棚の達摩などゝ來ると餘程得意で、

言ひながら左の手を疊に突き其突いた手の方へ體を曲げて、右の人指ゆびで頰の邊をあしらひながら。

「何時か野口と私と外に二人、四人連で八百松へ往ツた時、藝者を呼んで遊んだが、其時も野口は踊ツたが流行の藝者さへ手を明けて見て居た位ですものなあ、餘程巧いのです。

言ツて右の指で白い綺麗な齒をころころんと一つ彈いて、直又頰の邊をあしらツて居るが是は此人の癖らしいです。

娘は是等の蒔田の言葉に因ツて其平生を察し、其平生に因ツて其心を察し、其人を知ツた……而して今其目が覺めた時、過去の蒔田の言行を考へると、一つとして取とまツた事がなく、而して今其人の風を見て卑まぬ譯にも行かず、きらはぬ譯にもならぬ、而して姉が居なかツたなら如何して此人の性質が知れようと思へば姉の御蔭も身に染みる……が見れば蒔田……其人の言葉に耳をかして居るつらさ、つらいと思ふと其人の顏を見るも厭になツて來た。而して唯もう一も二もなく、此室を飛出したい、飛出して姉の居る座敷へ往きたい、が正可に其も……嗚呼愚か！　少女は唯一人小鳥の羽ばたき、蒔田は話の途切れたので心面白くないと見え、又運動の事を考へ出したか、

「峯さん運動をしませう、え、もう退屈した、斯うぢツとして坐ツて居るのは、さあ、其樣な足袋は、何も今日に限ツた事は有りますまい、

娘はきツぱりとした言葉で、

「今日は往けないのですと、先きも言ツたでは有りませんか、貴君も餘程分らない人ですね。

言ツてさも苦々しさうな貌をして蒔田を見た。蒔田は少ししよげ返ツたが感の薄い質故左のみにも思はず、少し訴へる樣な調子で、

何故、今日は貴孃は左樣なに腹をお立ちなさる、え、え？

言ツて少し前へ乘出しました、丁度此時隔の襖が靜と開いて、姉の姿がちらりと見えました、が二人は是に氣が着きません。

「其樣なに怒らずとお出でなさいよう。

あゝ誰か來てくれゝば宜い……と娘は心の中。

「さあ、峯さん、さあ、」言ツて手を採りにかゝりました。

「何んですね、失敬な、往きませんと言ツたら、あゝうるさい！

と臂をきりゝとさせ、體をゆすぶツて大きな聲、此時姉の姿を見て、編みかけの靴足袋を疊に投付け。

「姉さん！　眞成に……

投付けられた編物の針ははねかへツた、而して如何いふ拍子であツたか、生憎とまた、否其が丁度蒔田の貌へ當ツた、が蒔田は其には氣が着かず、唯娘の風に驚いて口を開いたぎりでありました。

初戀

嗚呼思ひ出せばもウ五十年の昔となッた。見たさる通り今こそ頭に雪を戴き、額に此様な波を寄せ、貌の光澤も失せ、肉も落ち、力も拔け、聲もしわがれた海千老爺であるが。是でも一度は若い時もあッたので、人生行路の蹈始若盛の時分には種々面白い事もあッたので。其中で初めて慕はしいと思ふ人の出來たのは、左様さ、丁度十四の春であッたが、あれが多分初戀とでも謂ふのであらうか、まア其事を話すとしよう。

丁度時は四月の半。ある夜母が自分と姉に向ッて言ふには。今度清水の叔父様がお雪さんを連れて宅へ泊りに入らッしやるが、お雪さんは江戸育で、此處等邊の田舍者とは違ひ、起居もしとやかで、挨拶も沈着いた様子の宜い子だから、其方たちも無作法な事をして不束者、田舍者と笑はれぬ様によく氣を着けるがよいと言はれた、其から又其お雪といふ娘が如何様に心立がやさしく、氣立がすなほで、如何様に姿が風流で眉目容が美しからうと賞めちぎッて話された。幼少のうちは何事も物珍らしく思はれるが、殊に草深い田舍に住んで居ると、見る物も聞く者も少ない故一寸した事も大層面白く思はれる者で。母が彼様に賞めちぎる娘、たをやかな江戸の人、其人と話をする時には言葉使ひに氣を着けねばならぬといふ、其大した江戸の人はまア如何な人なのであらうか？早く遇ひたい者、見たい者、定めし面白い話もあらうと自分の小さな胸の中に先づ物珍らしい心が起ッて毎日此事をつみ姉と言ひかはし—、珍客の來る日を待ッて居た。其中に愈前の日となると數ならぬ下女はしたまでが、「江戸のお客さま、お客さま。」と何となく浮立ッて居た。況して祖母や姉なぞは、まして自分は一日を千秋と思ッて居た。

當日は自分は手習が濟むと八つ半から槍の稽古に往ッたが、妙な者で、氣も魂も身には入らず唯心の中で。「もウ來たらうか？」を繰返して居た。稽古が濟むと、脫兎何のそのといふ勢ひでいきなり稽古場を飛び出したが、途中で父の組下の鳥山勘左衞門に出遇ッた。勘左衞門は至ッてひやうきんな男故、自分は甚だ好きであッて、何時も途中などで出遇ふ時には好い同行者だと喜んで、冗談を言ひながら一所に歩くのが常であッた。今日も勘左衞門は自分を見ると何時もの傳で「お坊様今お歸りですか？」と挨拶したが、自分は「うむ」と言ッた許り、ふり向きもせず突ッこくる様に通り拔けたが、勘左衞門は定めし驚いて目を開いて、自分の背を見送ッて居たかと思ふと、今でも其貌が見えるやうで。

自分は中の口から奥へ這入ッて四邊の様子に氣を着けて見たが客來の様子はまだなかッた。扨はまだなのかと稽古着の儘で姉の室へ往ッて、如何したのだらうと噂をして居た。暫くするとばた〳〵といふ足音がして部屋の外から下女の聲で「お孃さま、お孃さま！お客さまが、江戸の。」

自分はいきなり飛び出さうとした。「靜に！」—姉に言はれて左様だッけと、靜に玄關の方へ往ッて而してお雪といふ娘を見た。

此時娘は、叔父の後に續いて伴の女中をつれてしとやかに玄關を上ッて來た娘は、成程、母の賞めた通り誠に美しい娘だ。脊はすらりと

高く、色はくッきりと白く、目はぱッちりと淸しく、眞當の美人だ。黛を施し、紅粉を用ひ、盛んに粧を凝らして後、始めて美人と見られるのは其は眞成の美人ではない、飾らず裝はず天眞の儘で、其で美しいのが眞の美人だ。此時の娘の身裝は旅姿の儘で、淸楚とした裝で飾氣の氣もなかッたが、天然の麗質は四邊を拂ッて自然と人を照す許りであッた。其に如何樣に容貌が美しくても、氣象が無下に卑しい時は、如何も風采のない者であるが、娘は見るからが其風采の中に温良貞淑の風を存して居て、何處となく氣高く、如何なる高貴の姫君といふとも恥かしからぬ風であッた。

其に田舍者は如何程容貌が美しくても、如何程身裝が立派であッても、彼一種言ひ難き意氣といふか、しなやかといふか、風流といふか？彼一種たをやかな風を缺くものであるが、娘は其風をも備へて居た。淸水の叔父は自分の父の弟で、祖母には第二番目の子だ、其故娘は自分と同じやうに祖母の孫で、加之も最愛の孫であッたさうな。其夜一同客座敷へ集まッて四方山の話を始めたが、何れも肉身の寄合であるから誰に遠慮といふ事もなく其話と言ッては道中の有樣、江戸の話、親類知己の身の上話、又は今自分の小兒の事などで、左のみ面白い話でもないが、然し其中には肉身の情と骨肉の愛とが籠はれて居て、歎息する事もあれば、口を開いて大笑をする事もあッて近頃珍らしい樂しみであッた。祖母はお雪や此處へといふ樣な風に、目附で娘を傍へ招いて、種々な事を尋ねたり語ッたりして居たが、其聲の中には最愛可愛といふ意味の聲が絶えず響いて居た樣に思はれた。而して祖母は娘が少さかッた時の樣に今も尚抱いたり、撫でたり、さすッたりしたいといふ風で、始終娘の貌を莞爾々々とさも樂しさうに見て居たが、娘も今は十八の立派な娘故、流石にさうもなり兼ねたか、唯肩に手を掛けて、「ほんに立派な娘におなりだの、」と言ッたのみであッた。自分は祖母が自分を愛する樣に此娘を愛して居る樣子、と自分が祖母を慕ふ樣に娘が祖母を慕ッて居る樣子、とを見て何となく心嬉しく思ッた

其翌日の事で自分は手習から歸るや否や、「娘は如何したかな？」と見ると姉の室で召伴れて來た女中と姉と三人で何やら本を見て居たが、自分を見て莞爾したので自分も其笑ひ貌に誘出されて何故ともなく莞爾した。自分は是から劍術の稽古があるから、直に稽古着を着て、稽古袴を穿いて、竹刀の先へ面小手を挾んで、肩に擔いで部屋を出たが、心で思ッた、此勇しい姿、活潑といはうか雄壯といはうか、其活潑な雄壯な風と自分が稽古に精を出すのとを娘に見せてやらうと思ッた。其から武者修行に出る宮本無三四の事を思ひ出しながら姉の部屋へ這入ッたが、此小さな無三四は狡猾にも姉に向ッて、何食はぬ貌で、「叔父さんは？」と問ねた。姉は何とか對へて居たが自分は其樣な事は聞きもせず、見ぬふりで娘の方をちらりと見て、其なり室を出て仕舞ふと後から笑ひ聲が聞えた。自分の噂だなと嬉しく思ッたが、今更考へると、なんの左樣でもなかッたのであらう、晩方から親類、醫者、叔父の朋友、大勢集まッて來たが、中には女客もあッた故母を初め娘も、姉も自分も其席に連ッた。其中に燭臺の花を飾ッて酒宴が始まると、客の求めで娘は筑紫琴を調べたが如何して、中々絲竹の道にもすぐれた者で、其爪音の面白さ。自分は無論能くは分らなかッたが、調が濟むと並居る人達が口を極めて賞めそやした。娘は賞められて恥かしがり、此席に連ッて居るのを寧ろ憂い事と思ッて居るらしく、話もせず、人から物を言ひかけられると、言葉少に答をする許り、始終下を向い

て居た、お其頃は如何にも柔和でしとやかで、微塵華美をする廉もなく、何となく奥床しいので、自分は餘念もなく其風に見とれて居た。
自分の父は武道にも長じ又至ッて嚴格な人で、夏冬共に朝はお城の六つの鐘がボーンと一つ響くと、其音一つ目を聞かぬ間にもウ起上ッて朝飯までは、兵書に眼をさらすと謂ふ人であッた。其故自分にも晝寐はさせず、常に武藝を勵む様にと教訓された。
自分は有難い事には父のお蔭で弓馬槍劍は勿論、武士の表道具といふ武道は何一つ稽古に往かぬ者はなかッたが、其中で自分の最も好いた者はといふと弓で、百歩を隔てて、柳葉を射たといふ養由基、又大炊殿の夜合戰に兄の兜の星を射削ッて、平軍の膽を冷させたといふ鎭西八郎の技倆、其技倆に達しようと、自分は毎日朝飯までは裏庭へ出て捲藁を射て勵んで居た。今日も今日とて裏庭へ出て、目指す的と捲藁を狙ッて矢數幾十本かを試したので、少し疲れを覺えて來た故、暫時一息を入れて居ると、冷々として心地よい朝風が汗ばんで來た顏や、體や、力の張ッて來た右の腕へひやり〳〵と當るのが實に心持のよい事であッた。誰でも飢ゑた時渇いた時には食物や水が甘い者であらうが、其時の其風は實に其食物や水よりも遙に心持よく、自分は氣が清々として來た。自分は弓杖を突いて……といふのも凄じいが所謂弓杖を突いて、四邊に敵も居ないのに、立木を屹と見廻して儼然として睨張ッて居た。突然二つの影法師が自分の頭上を越えて目の前に現はれた。自分はふり返ッて娘と姉とを見た。
娘は足を止めて、感心に御精が出ますこと、と賞めさうな風で莞爾して清しい目を自分に注いで居た。自分は目禮をして、弓を投棄てて姉の傍へ往ッた。
「大層御精が出ますことねエ。」果して娘が賞めた。
「どうしてあなた。叱られて許り居ます、精を出しませんから。
娘が折角賞めたものを、姉が餘計な口をさし入れた、自分は不平に思ッた。然し姉は流石に姉で、情のあッた者で、弟の賞められたのが嬉しかッたと見えて、莞爾して。「それでもあなた、出來ない癖に大變に好きで。」といふのを枕に置いて自分を賞め始めた、前の言葉とは矛盾したが、其處が女の癖で、頓着は無かッた。自分が幾歳の時四書をあげて、幾歳の時五經をあげて、馬を能く乘ッて、劍術が好きで、槍が如何で、弓が斯うでと、姉が自分の事を賞めたてるのを、娘は笑ひながら自分の方を見詰めて、其話を聽いて居たが、聽終ッてから。
「眞成に感心ですねエ、お少さいのに。」
此一言は心から出たので、自分は賞められて嬉しく思ッた。的の黒星を射拔いて、えらいと人に賞められたよりは、此人に賞められたのを嬉しいと思ッた。
「庭の方へ往ッて見ませう。秀さんもお出で。」
姉と娘との間に立ッて、自分は外庭の方へ廻ッて往ッたが、見附けた、向うの垣根の下に露を含んで、さも美しく、旭光に映じて咲いて居た卯の花を見附けた。
「お姉さま、お姉さま、江戸のお姉さま！ 御覧なさい。此花はね私が植ゑたのですぜ、植ゑたてには枯れかゝッたけれど、やッと骨折ッて育てたのです、綺麗でせう？
「おやまア綺麗！ 花もお好きなの？ 武藝もお好き？」ト言ッて白い手を輕く自分の肩へ掛けて、一寸默ッてそして頭を撫でたが、不思議にも、其手が觸ると自分の胸はときめき出した、が其を見られまいと急いで。
「花は白い方が綺麗ですねエ、赤ッぽいのよりか。

」さうですね、淡白して居て。赤いのは何故おきらひ？

「何故ッて？　赤いなア平家の旗色で、白いなア源氏ですもの。源氏の方が強いから、だから……

愚にも附かぬ事を言ひながら、內庭と外庭の間の枝折戸の邊まで近附いた。と見ると花壇に五六本の白牡丹が今を盛りと咲いて居た。其花の下に飼猫の「コロ」が朝日を一杯背中に受けて、つくねんとうづくまッて居た、日向ぼこりをして居るのか、居睡をして居るのか？「牡丹花下の睡猫は心舞蝶に在、」といふ油斷のならぬ猫の空睡。此處へ花の露を慕ッて翩々と蝶が飛んで來たが、やがて翼を花に休めて、露に心を奪はれて餘念もない樣子であッた。油斷を見すました大敵、然し憎氣のないひやうきん者め、前足を縮めて身構をしたが、そら、飛びかゝッた。蝶は飛退いたが、周章てて、狼狽いて、地下をひら〳〵と飛び廻ッて居た。が、あはや「コロ」の爪にかゝりさうになッた。

「あらまア！　彼樣ないたづらを。」と娘は走せよッて。

「およし可哀さうに。

娘はしなやかに身を屈めて、「コロ」を抑へながら蝶を逃がした。其から「コロ」を抱きあげてそしてやさしい手でくる〳〵と「コロ」の頭を撫でまはした。「コロ」は叱られたと思ッたか、目を閉ぢ、身を縮め、首をすぼめて小さくなッた其風の可愛らしさ。娘は其身の貌を「コロ」の貌から二三寸離して、しげ〳〵と見て居たが、其清しい目の中には如何樣に優しい情が籠ッて居たらう「もう蟲なんかを捕るのではないよ、」と言ッて、其美しい薔薇色の頰を猫の額へ押當て、眞珠の樣な美しい齒を現してゆッたりと微笑ッたが、其莞爾した風は如何樣にあどけなく、如何樣に可愛らしい風であッたらう！　自分は猫を羨しく思ッて餘念なく見とれて居た。娘は頰の邊にまだ微笑のほのめいて居る貌を一寸ふり上げて自分の貌を見たが其笑貌の中には、「何故其樣に人の貌を見て」と尋ぬる樣な風が有ッたので、あるひはなかッたかも知れぬが、自分はあッた樣に思ッたので、はッと貌を赤らめて、周章てて裏庭へ逃出して仕舞ッた。が恥しい樣な、嬉しい樣な、妙な感情が心に起ッて何となく胸が騷がれた。

其日の七つ下りに自分は馬の稽古から歸ッて來て、又何時もの樣に娘の居る座敷へ往ッて見ようと思ッたが、はてまア不思議！　恥しい樣な怖い樣な氣がして、往きたくもあるが往きたくもなく、如何した者かと迷ひ出して、男らしくないと癇癪を起して、其處で往くまいと決心して誓まで立てたが。扨人情は妙な者で、とんと誰か來て引張る樣で、自然と自分の體が動き出して、知らぬ間に娘の居る座敷の前まで來た。唐紙は開いて居た。自分は座敷の方を向きもしなかッたが、其で居て、もウ娘が自分を見たなと知ッて居たので。態と用ありさうに早足で前を通り過ぎ、其擗隣座敷の緣側で立止まッて、柱へつかまッて庭を見て居た。すると娘の居る座敷で誰か立上る樣な音がしたが、直其音が近附いて來た、自分の胸はときめいた。注意はもウ其音一つに集ッて仕舞ッて心は目の前に其人の像を描いて居た。其人の像はあり〳〵と目の前に見えるのに、其人は自分の背へ立ッて、いたづらな、自分の頸毛を引張ッて。

「秀さん、好い物をあげるから入らッしやい。

「好い物？　好い物とは嬉しい、」と思ひながら、嬉しさに殆んど夢中になり、後に續いて座敷へ這入ると紙へくるんだ物をくれた。開けて見るとあたり前の菓子が嬉しい人から貰ッた物、馬鹿な事さ、何となく貴く思はれた。破さない樣に、丁寧に、靜と撫でる樣に紙へくるんで袂へ

仕舞ふのを、娘はぢッと見て居たが莞爾して、
「秀さん好い物を拵へて上げませう。
「どうぞ。
娘は幾枚となく半紙をとり出して、
「そら宜うございますか、是が何になるとお思ひなさる、是がね、」ゆッたりした調子で話し始めた。「――是は、そらね、是を斯う折ッて、此處を斯うすると、そうら、一つの鶴が出來ますよ、そら今出來ますよ、そら出來た。
娘は鶴を折ると其から舟、香箱、菊皿、三方などを折ッてくれた。自分は娘が下を向いて折物に氣を取られて居る間、其雪の様な白い頸、其艶々とした綠の黒髪、其細い、愛らしい、綺麗な指、其美しい花の様な姿に見とれて、其袖のうつり香に撲たれて、何も彼も忘れて仕舞ひ、唯もウツとりとして、嬉しさの餘り手を叩きたい程であッた。
「お姉さま、折方を教へて下さいな。
其から自分は折方を習ッて、二三度試して見たが出來なかッたので、娘は「眞當に此子は不器用な人だ」と笑ひながら、いやといふ程自分の手を打ッた。痛かッた、痛さが手の筋へ染み渡ッた。が痛さと一所に嬉しさも身に染み渡ッた。嬉しいから痛いのか、痛いから嬉しいのか？
恐らく痛いから嬉しいので……まア如何でも宜いとして、痛さが消えぬ様に打たれた處を靜と撫でた。
此處へ姉が這入ッて來て、
「秀さん何をしてお在でだ。
娘は莞爾して姉に向ひ、
「如何も此子は不器用で不可ません。
「此樣な者は出來なくッてもいゝや。
「出來なくッてよければ、何故教へてくれと言ひました？　我儘子め！
娘は口元で笑ひながら額越に睨む眞似をした。自分は我儘子と言はれるのよりは、何とか外の名を附けて貰ひたかッた。
其夜の事で、まだ暮れてから間もない頃自分は何の氣もなしに、祖母の室へ遊びに往ッた、すると祖母を初めとして兩親も居れば叔父も娘も居て何か話して居たが、自分を見ると父が眉に皺を寄せて、「彼方へ往ッてお在で。子供の聞く様な話ではない。」と儼然として言ッた、が自分は此場の様子を怪んで、物珍らしい心から出るのを少し躊躇して居ると、娘が貌をふり上げて清しい目で自分を見た、其目の中には、「早く出て往ッて……」といふ様な風があッた。一寸見た娘の一目は儼然として言はれた父の嚴命より剛勢だ、自分は娘の意に從ひ直に室を出たが、其でも今室へ這入ッた時ちらりと皆の風が目に止ッた。父は叔父に向ッて、「左様さ、若年にしては中々感心な人で。」などと話して居た。又娘は下を向いて膝を撫でて居ると、祖母と母とが左右から其貌を覗き込んで、何をか小聲でたづねて居た。自分は室を出てから、何を皆は話して居るのか、何故又自分が居てはわるいのか？　と思ッたが、なアに、思込んだのではない、ほんの目の前を横ぎる煙草の煙、瞬を一つしたら直ぐ消えて仕舞ッた。
元來此日は自分は何となく嬉しくいそ〳〵として居た、然し何故嬉しかッたのか其理は知らなかッた、が何がなしに嬉しかッたので臥床へ這入ッてからも何となく眠るのが厭で、何となく待たるゝ者がある様な氣がするので、其癖其待たるゝ者はと質されるとなに、何もないので、何も無いと知ッて居るが、其處が妙な譯で、夢現の間で慥有る様に思ッて居るので、如何も臥るのが厭であッた。其故床の上へ坐ッて居ると、そら、娘の姿がちら〳〵目の前に現はれて來た。莞爾と笑ひながら自分の手を打ッた時の貌、其目元、口元で笑ひながら額越に睨んだ貌、其りきんだ目付、まア何よりも其美しい姿

容が目の前にちら〳〵し始めた。自分は思ひ出し笑ひをしながら、息も靜にして、其姿が逃げて往かぬ様と、荒く身動きもせず、そろ〳〵夜具の中へもぐり込んで、晝間打たれた手の處を静と頬の下へ當がツて、其儘横になツたが、何時眠ツたか其も知らず心地よく眠入ツて仕舞ツた。

自分は此時からといふ者は娘の貌を見て居る間、其聲を聞いて居る間誠に嬉しく又樂しく、ついうからうからと夢の間に時を過して居た。斯うは謂ふものの娘が居ないとて、夢聊ふさぐなぞと謂ふ事はなかツた。何を言ツても自分はまだ十四の少年。自分と娘とは年が如何程違ツて居て、娘は自分より幾歳の姉で、自分は娘の前では小兒であるといふ事。又娘は只一時の逗留客で日ならず此土地を去る人といふ事。自分は娘を愛して居るのか、将亦娘は自分を愛して居ないのかといふ事。總て是等の事は露程も考へず、唯現在の喜びに氣を取られて、其を樂しい事に思ツて居た。が其喜びは煙の如く、霧の如く、霞の如くに思はれたので、如何かすると悲しくなツて來て、時々泣出した事もあツたが、なに、其だとて暫時の間で、直又飛んだり躍ねたりして、夜も相變らずよく眠ツた。

叔父は僅に一週の休暇を賜はツて來たので、一週の時日はほんの夢の間の様であツた、もウ明日一日となツて。自分は娘にも別れなければならぬかと、何となく名殘惜しく思ツたが、幸ひ叔父が三日の追願ひをしたので、尚三日は此方に滯留して居る事となツた。然るに其夜の事で母と祖母との間に誠に嬉しい話が始まツた。其を何かといふと斯うで。もウ二三日過ぎると叔父も江戸へ歸るに因り、何か江戸土産になりさうな、珍らしい面白い遊戯を娘にさせて歸したい。が何が宜からうと二人が相談を始めた。然し面白い遊と言ツた所が此草深い田舎では、五節句、七夕、天王祭でなくば茸狩、蕨採、まア此様な者で。其を除いては別段是ぞといふ遊もない。けれども今は四月二十日、節句でもなければ祭でもない、遊戯と言ツては蕨採のみだ、蕨採と言ツた所が左のみ面白い遊戯でもない。が摺鉢の様な小天地で育ツて居る見聞の狭い田舎の小兒には、其が大した遊戯なので。又江戸の様な繁華な都に住んで居て野山を珍らしく思ふ人には矢張面白い遊戯なので。其故愈〳〵蕨採に往くことと極まり、其事を知せた時には一同歡喜の聲を上げた。

扨其夜は明日を樂みに各々臥床に這入ツたが、夏の初とて夜の短さ、間もなく東が白んで夜が明けた。

其日の四つ頃やう〳〵に支度が出來て、城下を去ること半里許りの長井戸の森をさして出掛けた。同勢は母と、姉と、娘と、自分と、女中二人に下部一人、都合七人であツた所へ、例の勘左衞門が來合せて私もお伴をと加はツたので、合せて八人となり、賑やかになツて出掛けた。

家敷の郭を出て城下の町を離れると、俗に千間土堤といふ堤へ出たが、此堤は夏刀根川の水が溢れ出る時、其をくひ止めて幾頃の田圃の防ぎとなり、幾千軒の農家の命と頼む堤であるから、隨分大きな者である。堤の上許りでも廣い處は其幅十間から有る、上から下へ下りるには一町餘も歩かねば平地にはならぬ、まア隨分大きな堤だ。堤の兩側は平一面の草原で、其草の青々とした間からすみれ、蒲公英、蓮華草などの花が春風にほら〳〵首をふツて居ると、其を面白がツてや、蝶が翩々と飛んで居る、右手は唯もウ田畑許り。此方の方には小豆の葉の青い間から白い花が、ちら〳〵人を招いて居ると。彼方には麥畑の蒼海が風に波立ツて居る處で、鳴子を馬鹿にした群雀が案山子の周圍を飛び廻ツて、辛苦の粒々を拂つて居る。遠くに

は森がちらほら散ッて見えるが、其藪から農家の屋根が闊に野良を眺めて居る。蛇の様なる畑中の小徑、里人の往來、小車のつゞくの、田草を採る村の娘稗を蒔く男、釣をする老翁、犬を打つ童、左に流れる刀根川の水、前に聳える筑波山、北に盆石の如く見える妙義山、隣に重ッて見える榛名、日光是等は總て畫中の景色だ。鄙の珍らしい娘の目には流石に此景色が面白いと見えて、度々あゝ好い景色と賞めた。

途中では出遇ッた人も稀であッた。初め出遇ッたのが百姓で、重さうな荷をえッちらおッちら背負ッて居たが、態々頰冠を取ッて會釋して往過ぎた。次に出遇ッたのが村の娘で、土堤の桑の葉を摘みに來たのか、桑の葉の充滿ッた目籠を各自小脇に抱へて居たが、我々を見るとこそこそ土堤の端の方へ寄ッて、立止まッて。「彼は何處樣の嬢樣だが、何處さア往かッせるか。」などと噂をして居た、其次に見掛けたのが農家の小兒で、土堤で餘念なく何やら摘んで居たが、其中一人が何か一言言ッたのを合圖に、眞暗三寶驅出した。其から土手の半腹まで往き遙に此方をふり向いたが、上から勘左衞門が手招をしたら、又わイ〳〵と言ッて一目散に驅下りて仕舞ッた。

勘左衞門の來たのは我々の興を増す種であッた。此男が歩きながら始終滑稽を言ッて居たので、途中は少しも退屈せず、何時の間にか境驛の此方の渡場まで來た。渡守は我々の姿を見るといきなり小屋から飛び出して、二つ三つ叩頭をしてそして舟を出した。

此處は川幅は六七町もあらうか、是から上になると十四五町もあらう、大刀根、小刀根と分れる處で其幅最も廣い處だ。娘は姉に向ッて言ふには、「此頃江戸で名の高い馬琴といふ作者の書いた八犬傳といふ本を讀みましたが、其本に出る人で……」と彼犬飼犬塚の兩犬士が芳流閣上より轉び落ちて、つい行徳へ流れついた事を話して、其犬士の流された處も此處等であらうかなどと話して居る中、船は向うの岸へ着いた。其から上陸して境驛の入際から直横へ切れると、森の中の小徑へ掛ッた、兩側には杉、檜、楢などの類が行列を作ッて生えて居るが、上から枝が蓋さッて居て下に木下闇が出來て居る、其小徑へ掛ッた。

「もウ直其處から這入るのです。さア皆さん採りッこをしませう」と勘左衞門が勇み立ッた、尤も態と。

「秀さん宜うございますか、」娘は笑ひながら――」まけませんよ。

「えゝ、宜うございますとも。負けるもンか女なんぞに、」長井戸の森は何里位續いて居たか、自分はよく覺えて居らぬが、隨分大きな森であッた、扨森の中の小徑を凡そ二三町も這入ッて往くと、葉守の神だか山の神だかえたいの分らぬ小さな神の祠の前へ出た、是が森の入口なので森の中へ這入ッて見ると、小草の二三寸延びた蔭又は蚊帳草の間などから、たをやめの書いた假名文字のしといふ恰好で、蕨が半身を現はして居た。我々は是を見ると、そら其處にも！　おゝ大層に！　ほら此處にも！　なんとまア！　などと頻りに叫びながら小躍りをして採始めた。初の中は皆一處で採ッて居たが、忽ち四五間七八間と離れ〳〵になッて採始めた、而して一本の蕨を二人が一度に見附けた時などは、騒ぎであッた、

「あれ私が見附けたのだワ！

「あらまア！　お嬢樣・おずるい。是は私が見附けました。

「お雪さま、清にお負けなさいますな。

左樣かと思ふと彼方の方では、「おや何處へ往ッたらう？」「此方、此方！」などと手を叩いて居た。又蕨に氣をとられて夢中で居ると、突然

足下から雉子が飛出したのに驚かされたり、其驚かされたのが興となッて、一同笑壺に入ッたりして時のうつッたのも知らず、愈奥深く這入ッて往ッた。不意に人聲が聞え出した。何處から聞えるのだか？　方々を見廻すと、遙か向うの木の間から煙が細く、とんと蛇の樣に立昇ッて居た。

我々は行くともなく、進むともなく、煙の立つ方へ近づいた。すると木の間から三人の人影が見えた。二人の男は紺の脚絆に切緒の草鞋といふ嚴重な足ごしらへで、白襟花色地の法被を着て居た。向う向きの男は後からでよく分らなかッたが、打割羽織を着て居て、加之其下から大刀の鞘と小刀の小尻とが見えて居た樣子といひ、一壇高き切株へどッかと腰を打掛けて、屋臺店の蟹と跋扈かッて居た爲體といひ、如何樣此中の頭領と見えた。

我々の近づくのに氣が着いたか、件の男は此方をふり向いた。見覺えの貌だ。よく見れば山奉行の森といふ人で、殘の二人は山方中間であッた。

山奉行といふのは、年中腰辨當で山林へ出張して、山林一切の事を管督する役で、身柄のよい人の勤むる役ではない。其故自分等に對しても、自然丁寧なので。

森は自分を見ると、滿面に笑頽けて而して立上ッて。

「おや、秀さん、蕨採ですかな？　大層大勢で。採れますかな？　どら〳〵お見せなさい。

其中に一同も近づいて來た。森は二歩三歩前へ進み、母を初め姉や娘に向ッて、慇懃に挨拶をして、其から平蜘蛛の如く叩頭をして居る勘左衞門に向ひ。

「今日はお伴かな、御苦勞だの、」と言ッて、其から又下女の方へ向いた、が物は言はず、唯挨拶に笑貌を見せて、直又母の方へ向き。

「如何でござりまする、ちと小屋へ入らしッて御休息をなすッては。はい〳〵いや誠に汚穢くるしい處で：：が：：澁茶でも獻じませう。こりや八助、何かを取揃へて持ッて參れ、身共は小屋へ參るから。さ御案内致しませう。

時刻は八つ頃でもあッたか、此邊は一面の杉林で、梢の枝は繁りに繁ッて日の目を蔽す許り。時々氣まぐれな鳩が膨聲で啼いて居るが、其聲が木精に響いて、と言ふのも凄じいが、四邊の樹木に響き渡る樣子、とんと山奥へでも往ッた樣で、なんとなく物寂しい。林中の立木を柱に取ッて、板屋根をさしかけたほッたて小屋。是は山方の人達が俄雨に出遇ッた時、身をかくす遁場所で、正面には疊が四五疊、但したゝといふもみのない程の汚らしい者、其から前が土間になッて居て、眞中に爐が切ッてあらうといふ書割。

母と、森と、勘左衞門の三人が三鐵輪に座を構へて、浮世雜談の序を開くと、其向うでは類は友の中間同志が一塊となッて話を始めた。其處で自分は少し離れて、女中達の中へ這入込み、此方の一方へ陣取ッた。

「秀さん。」娘は笑ひながら、「和子如何位採りました、お見せなさい。おや僅其切、少ないことねエ。私の方が多うございますよ。そウら御覽なさい、勝ちましたよ私の方が。

自分は此時姉が其身の採ッたのを娘のと一所にした所を見た。

「あゝ、ずるい〳〵、家の姉さんのを混ぜたのだもの。

「あら、あんなこと。ほゝゝゝ、混ぜはしませんよ。

「いゝえ、混ぜました、混ぜましたよ。見て居ましたからね。

「あら。まア、卑怯な、男らしくもない、負けたものだから其樣な事を。

其中に澁茶が這入ると、兼て中間に持たせて來た餅を今日の晝食として、尙四方山の話をして居た。

其時勘左衞門の話に、此ひやらきん者が撿見の伴をして、村々を廻ッて、或村で休んだ時、脚絆の紐を締直すとて、馬鹿な事と、緣臺の足ぐるみ其紐を結び付けて、而して知らずにすましきッて、茶を飲んで居たが、其中上役の者が、いざ、お立ちとなッたので、勘左衞門も急いで立上ッて足を擧げると、不可、擧げる拍子に緣臺が傾いたので、盆を轉覆して茶碗を破したが、未だに其が一つ話でと、自身を物語ッたのを我々一同話を止めて、可笑しな話と聞いて居たが、實に此男は滑稽家でもあッたが、又そそくさした男でも有ッた。

扨暫く此處に休んで居たが、自分達の組が大人を催促して、山伏行に別れて、再び蕨採に出掛けた。今度は出掛けるや否や、直ちり〳〵になッて採始めた。自分は娘の傍を離れず、娘が採る度に自分の採ッたのと比較して見て、負けまいと思ッて勵んで居たが、此時はもウ蕨に氣を採られて、娘の事は思ッては居なかッた。ト言ッて忘れても居なかッたので、娘の傍に居るといふ事は、暗に知ッて居たので、所謂蟲が知ッて居たので。――其飄るふりの袂、其蹴返す衣の褄、其たをやかな姿、其美しい貌、其やさしい聲が、目に入り耳に聞えるので。――其人の傍に居ると何處か嬉に感じて居たので。其故一層樂しかッた。不意に自分は向ふの薄暗い木の下に非常に生えて居る處を見つけた、嬉しさの餘り、聲を上げながら驅け寄ッて、手ばしこく採らうとすると、娘も走けて來て採らうとするから、採ッては不可と娘をさゝへて、自分一人で採らうとした。が不可かッた。自分は今まで採溜めたのを、風呂敷へ入れて提げて居たが、其を今すッかり忘れて、其風呂敷を手離して、娘と手柄を爭ッたので、風呂敷の中から採ッたのが溢れて、四方に散るといふ大失敗、周章てて拾集める中に、娘は笑ひながら、一つも殘さず採ッて仕舞ッた。自分が見附けたのを横取するのは非道い、返して下さい、と爭ッて見たが、娘は情強く笑ッて居て、返しさうな樣子もないから、自分は口惜くなり、やッきとなり、目を皿の樣にして、澤山ある處を、と、見廻した、運よく又見つけた、向うの叢蔭に、が運わるく娘も見つけた。や負けた、娘が先へ走り寄ッた。唐突に娘があれエと叫んだ、自分は思はず吃驚した。見れば、もウ自分の傍に居た、眞青になッて、胸を波立たせて、向うの叢を一心に見て。自分は娘の見て居る處其叢を見ると、草がざわ〳〵と波立ッて、大きな青大將がのそ〳〵と這ッて往ッた。暫くして娘はほッと溜息を吐いて、あゝ怖かッた、と莞爾して而して四邊を見廻して、又おやと言ッた。先の驚きがまだ貌から消えぬ中に新しい驚きが其心を騷がしたので。以心傳心娘の驚きが直自分の胸にも移ッた。見れば四方に誰も居ない。母を呼び又姊を呼んで見たが、答ふる者は木精の響き、梢の鳥、唯寂然として音もしない。

「何處へ皆さんは往きましたらう。」心配さうな聲で、「ついうッかりして居て。

「さうですねエ……

「立ッて居ても仕方がありませんから、まア向うの方を尋ねて見ませう。

蕨はもウ其方除、自分は娘の先へ立ッて驅けながら、幾度も人を呼んで見たが、何の答へもなかッた。

「此方の方では無かッたかしらん。娘は少し考へて居て、「彼方かも知れません、秀さん、彼方へ往ッて見ませう。

走出して見た、が見當らぬ。向うかも知れぬ、

と又其方へ走出して見たが見當らぬ、困ッた。
娘はさも心配さうに頻りと何か考へて居たが、心細さうな小さな聲で。
「秀さん、貴君、道を知ツて居ますか？
自分とて此邊はめッたに來た事のない處、道を知らう筈はない、が方角丈は漸々と考へついた。
「い〻え、よくは知らない。けれど此方の方が境だから右の方へずん〳〵往きやア、あの、乾度境へ出るから、さうすりやア、もう譯はない。若しか見つからなきやア、なんの、先へ歸ッてしまひませう。
娘は暫く考へて居たが、少しは安心した樣子であッた。
「若し先へ歸ッたら、きッと皆さんが心配しませう。其に折角一所に參ッたものを……少し考へて居たが、「まア此方の方へ往ッて見ませう、もう一度、今度は何處までも往ッて見ましせう。よウ、何を茫然して……秀さん。
又歩き出した。
少年の頃は人里離れた森へなど往くのは、兎角淒い樣に思ふものだが、まして不知案内の森の中で、加之も大勢で騷いで居た後、急に一人か二人になッて、道に迷ひでもすると、何となく心細くなる者で。自分も今日の樣な事に若し平常の日に出遇ッたならば、定めて心細く思ッたのであらう。が然し愛といふ者は奇異な者で、（縱ひ此時自分は娘を慕ツて居たと知ツて居なかッたにしろ、）隱然と愛が存して居たので心細いとは思はなかッた。寧ろ此娘と僅二人、人里を立離れた深林の中に手を携へて居ると思ふと、何となく嬉しい心持がして、寧ろ連の者に見附からなければ宜いといふ樣な、不思議な心持が何處にかあッて、而して二人して扶けあッて、木の根を踏こえて走けて往くのを、實に嬉しいと思ッて居た。自分は一町程といふ者は、何の餘念もなく唯うか〳〵と、殆んど夢中で走ッて往ッた。すると突然目の前に大きな湖水が現はれた。
遙に向うを見渡すと、森や林が幾里ともなく續いて居るが、霞に籠ッて限りもなく遠さうだ、近い處の木は梢を水鏡に寫して、倒に水底から生えて居るが、其水の青さ、如何にも深さうだ。薪を積上げた船や筏が湖上を彼地此地と往來して居るが、如何樣林から切出したのを、諸方に運送する者らしい。日はもう七つ下り、斜に水を照らし森を照らして、寔に佳い景色である。がもウ見る氣はない。娘が貌に失望の意を現はして、物をも言はず、悄然として景色を眺めつめて居るのを見ては。
「おや、此樣な大きな沼がある樣では……此方でもなかッたと見えますねェ、爲方がない、後へ戻りませう。娘は歎息したが如何も仕方がない、再び踵を廻らして、林の中へ這入り、凡そ二町餘も往ッたらうか、向うに小さな道があッて、其突當りに小さな白屋があッた。娘は此家を見ると、少し歩くのを遲くして、考へて居る樣子であッたが、
「秀さん、丁度宜い。彼處の家へ往ッて賴んで、皆さんを尋ねて貰ひませう。其に皆さんも私達を尋ねて、萬一彼家へでも尋ねて往ッて、若し私達が來たら止めて置く樣にと賴んであるかも知れません。まア彼家へ往ッて見ませう。
自分は異議なく同意して、いきなり其家へ飛込んだ。家では老夫婦が絲を取り、草鞋を作ッて居たが、我々を見て吃驚した樣子、自分は老婆に向ひ。
「おイ婆やア、誰か尋ねて來なかッたかい、予達を。
「はアい、誰もござらッさらねェでしたよ。」老婆は不審さうに答へた「誰か尋ねさッしやるかな、お坊樣。

「嬢様探に来たのだが、はぐれて仕舞ッたの、連の者に。おイ、老爺や、探して来てくれないか、一寸往ッて。

自分か唐突に前後不揃の言葉で頼んだのを、娘が繼足して、始終を話して、「お氣の毒だが見て来て、」と丁寧に頼んだ。

「それエ定めし心配して居さッしやらう、これエ爺様よう、ちよツくら往ッて見て来て上げさッせいな。」最前から手を休めて、老父は不審さうに見て居たが、

「むゝ見て来て上げべい。」一走り往ッて。

ト言ッたが、中々おちついた者で、其から悠然と、ダロク張の煙管へ煙草を詰込み、二三吹といふ者は吸ッては吹き出し、吸ッては吹き出し、其から徐々立上ッて、どツかと上端へ腰を掛けて、ゆツくりと草鞋を穿き出した、穿いて仕舞ふと丁寧に尻を端折ッて、扨其處で漸自分に向ッて、

「坊様、何地等の方でさア はぐれさしッただアの？

自分は方角を指示した。老婆は老爺の出て往くのを見送り、其から花莚を引出して来て、

「さア嬢様。お掛けなせいまし、其處はえらく汚ねエだから。さお坊様掛けさッさろ。

「婆やア湯をおくれ、氣の毒だが。

「湯かなら？ 今上げますで、少し待たッせい。

一ッくべ吹ッたけるから。

老婆が罐子の下を吹ッたける間、自分は家の内を見廻した。此家は煤だらけに薫ぶり返ッて、見る影もないアバラス堂で、稗史などによく出て居る山中の一軒家といふ書割であッた。其中に罐子の湯は沸返ッたが、老婆は、ヒヾだらけな汚い茶碗へ湯を汲んで、其を縁の缺けた丸盆へ載せて出した。自分は喉が渇いて居たから、器のきたないのも何も知らず、ぐッと一息に飲み、續三四杯立付に飲んだ。娘は口の傍へ持ッて往ッて見て少し躊躇ッて居たが、其でも半飲干した。此時自分は、「扨も罐子の湯は甘い者だ、と思ッた。

此老婆は誠に人のよささうな老婆で、いろ／＼な事を話掛けるので、娘は其相手をして居た。

自分は又斯る山家へ娘と二人で来て、世話になるといふのは、餘程不思議な事、何かの縁であらうと思ッた。其が考への緒で、種々の事を思ひ出した。即ち、斯様な山中で、竹の柱に萱の屋根といふ、此様な家でも宜いに因ッて、娘と二人して居たいと思ッた。すると其連感で、自分は娘と二人で此家の隣家に住んで居る者が、今一寸遊びにでも来た者の様な氣がした。

すると父娘の姿が自分の目には、洗曝の[illegible]目衣を着て、茜木綿の襷を掛けて、絲を採ッたり機を織ッたり、濯洗濯、きぬた打、機の手業に暇のない、書にある様な山家の娘に見え出した、いや何となく其様に思はれたので。其故自分は連にはぐれて、今此處へ来て居る者だなどといふ事は、殆んど忘れた様になッて居た。

不意に表の方が騒がしくなッた。

自分は覺えず貌を上げて而して姉を見た。

「おゝ秀坊が！

第一に姉が叫んだ。

誰しも苦痛心配は厭ひであるが樂になッてから後、過去ッた苦痛を顧みて心に思ひ出した程、又樂の事はない。其と大小の差はあるが、心持は一つだ。暫間自分達のはぐれたのは、一時は一同の苦痛であッたが、其夜家へ歸ッてから、何かに付けて其事を言ひ出しては、其が笑ひの種となり話の種となッた時には、却て一同の樂となッた。自分は娘が嬉しさうな貌をして、此話をして居る様子を見て、何となく喜ばしく、而して娘も苦痛を分けた人が自分であると思ふと、一層喜ばしく其日の蕨採は自分が十四歳になるまでに絶えて覺えない程の樂

であツた、と思ツた。然し悲喜哀歡は實に此手の裏表も同じ事、歡喜の後には必ず悲が控へて居るが世の中の習はし。平常は自分は何時も稽古に往ツて居て、夜でなくては、家には居ない、其故何事も知らずに居たが、今宵初めて聞いた。娘は今度逗留中兼て世話をする人があツて、其頃我郷里に滯在して居た當國古河の城主土井大炊頭の藩士某と年頃といひ、家柄といひ、丁度似つこらしい夫婦故互に滯留して居るこそ幸ひ、見合をしてはと申込まれたので、元より嫁入前の娘の事故、叔父も忽ち承諾して見合をさせた所、當人同志の意にも叶ひ、殊に婿になる人が大層叔父の氣に叶ツたとやらで、江戸へ歸ツたらば、更に支度をさせて、娘を嫁入らせるといふ事を聞いた。

之を聞いた自分の驚きは如何樣で有ツたらう、五分も經たぬ中、自分はもウ我部屋で貌を兩手へ埋めて、意氣地もなく泣いて居た。

其夜臥てから奇妙な夢を見た、但見れば、自分は娘と二人で何處かの山路を、道を失ツて、迷ツて居る。すると突然傍の熊笹の中から、立派な武士が現はれて、物をも言はず娘を引さらツて往かうとした。娘は叫ぶ、自分は夢中、刀へ手を掛ける、夢中で男へ切付ける、肩口へ極深に、彼へ倒れながら拔打に胴を……自分は四五寸切込まれる、ばツたり倒れる、息は絶える。娘はベツたり其處へ坐ツて、自分の領をかゝへ抱き起して一聲自分の名を呼ぶ。はツと氣がついて目を覺す……覺めて見ると南柯の夢　靜と目を開いて室を見廻して、夢だなと確信はしたが、然し其愛らしい優しい手が自分の領を抱へて、自分が血に汚れるのも厭はず、血みどりの體を抱き起して、蕾の樣た口元を耳の傍へ付けて自分の名を呼んだ時の貌、其貌はあり〳〵と目に見える。其に領は、如何しても、僅今まで抱へられて居た樣な氣がする、靜と領へ手をやツて見ると、溫い。靜々室の內を見廻して見たが、如何も娘が居た樣で、移香がして居る樣な氣がする、さアさら思ふと、氣が休まらぬ。床の上へ起直ツて耳を清して見ると、家內は寂然として居て、鼠の音が聞える許り……自分は暫く身動しもせず、默然として居たが、ふと甲夜に聞いた事を思ひ出して、又何となく悲しくなツて來た。

此翌日となツた。明日の晩は叔父も娘も船路で江戸へ歸るから、今宵一夜が名殘であると、僅十里か十五里の江戸へ往くのを天の一方へでも別れる樣に思ツて、名殘を惜む、同が夜と共に今宵を話し明さうと、客座敷へ寄集まツた。自分は悲しさやる方なく、席へ連るのも氣が進まぬ故、心持がわるいと名を付けて、孤燈の下に吾影を友として、一人室の中ですねて居た。が暫時は斯うして居た樣な者の其中に、娘は如何したか、といふ考へが心の中でむづついた。もウ棄てては置かれぬ、そツと隣座敷まで往ツて這入らうか、這入るまいか、と躊躇ひながら客座敷の樣子を伺ふと、娘は面白さうに頻りに何か話して居た。自分の事などは夢にも思ツて居ない樣で。斯う思ふと氣がもしやくしやとして來た、直に踵を廻らして室へ戾り、机の上へ突伏して只譯もなく泣いて居た。暫く經つと、唐紙の開く樣な音がして、誰だか室へ這入ツて來た、見れば姉で、祖母さまが彼方へ來いと言ふからお出で、と言ツて種々勸めた。自分の本心は往きたかツたので渡に舟といふ姉の言葉、直往けば宜かツたが、其處が我儘子の癖で。――お泣きでないよ、と優しく言はれると、愈泣出したがる樣な者で――勸められる程愈すねて。

「厭だと言ツたら厭だい。馬鹿め。

姉はあきれて往ツて仕舞ツた。もウ往く機會は絶えた、一層我身を悔んで吾と吾身に怒ツて居

ると、次の間へ人の足音がして隔の襖が開いた。姉だなと思ッてふり向きもせず、知らぬ貌をして居ると、近付いた人は叱る様な調子で、

「何をしてお在でなさるの、」と言ッて自分の手を押さへて、「其様な惡戲をする者ではありませんよ。」

自分は此時癇癪を起して、小刀で札を削ッて居たので……又削らうとした。

「よすものですよ。」と言ッて自分の泣貌を見て、

「おや、如何なすッたの。何を泣いて居なさるの。え。え。」

自分は是を聞くと、譯も道理もなく悲しくなッて來て、唯さめ〴〵と泣出した。すると娘は自分の肩へ手を掛けて、机に身を寄せかけて、清しい目を一杯に開いて、横から自分の貌を覗き込んで。

「何故お泣きなさるの、何か悲しい事があるの。え。お腹でも痛いの。え、え、氣分でもわるいの。」

自分は首をふッた。

「左様ではないの。其では如何しなすッたの、泣く者ではありませんよ。よ。よ。」

自分は袖でいきなり泣貌をこすッて。

「お姉さま……貴孃は……あの明日もウ歸るんですか……如何しても。」

娘はしげ〳〵と自分の貌を見て居たが、やがて物和かに、

「秀さん、其で和子泣いて居たの。」

首をかしげて問ねたが、自分が默ッて居たのを見て、自分の頭を撫でようとした、自分は其手をふり拂ひ、何か言ッてやらうと思ッたが、思想がまとまらなかッた。

「お姉さま、貴孃は……、あの、あの悲しくも何ともないの……皆に別れるのが。」

娘は眉を顰めて、不審さうに自分の貌を見て居たが、

「おや何故？ 悲しくない事はありませんが、もウ父上も歸らなければなりませんし……其に種々……」言はうとして止め、少し考へて居て。

「秀さん、私ももウ今夜ぎりで歸るのですから、仲よく遊びませう。ね。さア。もウ泣く者ではありません、さア泣き止んで。」

あゝ何として泣かれよう。自分の耳には娘のいふ一言一言が、小草の上を柔かに撫でて往く春風の如く、聞ゆるものを。其優しい姿が前に坐ッて、其美しい目が自分を見て、而して自分を慰めて居るものを。あゝ何として泣かれよう。

五分も過たぬ内、自分はもウ客座敷で、姉や娘と一所になッて笑ひ興じて遊んで居た。

翌日の晩方自分は父と諸共に、叔父と娘とを舟へ乘込むまで見送ッたが、別の際に娘は自分に細々と告別をして再會を約した。自分は父と竝んで岸邊に立ッて、二人が船へ乘込むのを見て居たが、其時の心持は如何樣であッたらう、親兄弟にでも別れる樣に思ッた。而して其別れる人の心は何人の事を思ッて居るのかと思ふと、尚悲しさも深かッた。娘が棧橋を渡ッて、愈船へ乘込まうとして、此方をふり向いて、

「叔父樣、御機嫌よろしう。左樣なら秀さん。」

ト言ッた聲、名殘に殘した其聲がまだ四方に消えぬ内、姿は船の中へ隠れてしまッた。

無情の船頭、船のもやひを解いて棹を岸の石に突立てる、船は岸を離れる、もう是が別。父も悄然として次第に遠くなる船を見詰めて居る樣子……すると船の窓から貌を出した、誰であらうか、此方を眺めて居る、娘ではないか。情を知らぬ夕霧め、川面一面に立籠めて其人の姿をよく見せない、彼が貌かといふ程に、只ぼんやりと白い者が、ほんの闇に見える許り。あゝ其さへ瞬をする間、娘の姿も、娘の影も、それを乘せて往く大きな船も櫓拍子のする處に狹霧の中に藏はれて仕舞ふ、あゝ船は遠ざかる

か、櫓の音ももウ消え〳〵、もウ影も形も……櫓の音も聞えない、目に入る者は刀根川の水が只洋々と流れるばかり……

* * * * *

娘は江戸へ歸ッてから、程なく古河へ嫁入したが、間もなく身重になり、其翌年の秋蟲氣附いて、玉の樣な男子を産落したが、無殘や、産後の日だちが惡く、十九歳を一期として、自分に向ッて別れる時に再會を約した其言葉を、意味もない者にして仕舞ッた。然し曾て娘が折ッてくれた鶴、香箱、三方の類は、いまだに遺身として秘藏して居る。

嗚呼皆さん、自分は老年の今日までも其美しい容貌、其優美な清しい目、其光澤のある綠の鬢、就中おとなしやかな、奥ゆかしい、其たをやかな花の姿を、あり〳〵と心に覺えて居る……が……悲しいかな其月と眺められ、花も及ばずと眺められた、其人は今何處にあるか。其なつかしい名を刻んだ苔蒸す石は依然として、寂寞たる處に立ッて居るが其下に眠る彼人の聲は、また此世では聞かれない。然し斯くいふ白頭の翁が同じく石の下に眠るのも、あゝもウ間のない事であらう。寔に人間の一生は春の花、秋の楓葉、朝露、夕電、古人已にいッたが、今になッて益々さとる。初めて人をなつかしいと思ッた、其蕾の頃は勿論、やう〳〵成人して、男になッて、初めて世の中へ出た時分は、扨々無心なもの氣樂なもの、見るもの聞く物皆賴母しい。腕はうなる、肉はふるへる、英氣勃々として我ながら禁ずる事が出來ない。何處へ如何此氣力を試さうか、如何して勇氣を漏さうかと、腕を摩ッて、放歌する、高吟する、眼中に恐ろしいものもない、出來なささうな物もない、何か事あれかし、腕を見せようと、若い時が千萬年も續く樣に思ッて、是もする、あれもしたいと、行末の註文が山の樣であッたが、嗚呼其若い時といふは、實に、夏の夜の夢も同然、光陰矢の如く空しく過ぎ、秋風浙々として落葉の時節となり、半死の老翁となッた今日、遙に昔日を思ひ出せば恥づべき事、悲しむべき事、殆んど數ふるに暇がない。嗚呼少年の時に期望した事の中で、まア、何を一つ仕出かしたか、少壯の頃にさへ何一つ成遂げなかッた者が、今老の坂に杖突く身となッて、果して何事が出來ようぞ、最早無益だ。最早光澤も消え、色も衰へ、只風を待つ凋れた花、其風が吹く時は……

年譜

文久三年

一月十三日、江戸日本橋箱崎新堀の久世家邸內に生る。舊下總關宿城主久世大和守の家士矢崎鎭八郎勝則の次男。母は慶子。鎭四郎と命名さる。

當時幕末期にて世情騷然、爲に家士の家族を藩地に還すこととなり、母に伴はれて江戸を去る。以後關宿城下下屋敷にありて平穩なる幼年期を送る。

慶應四年（**明治元年**）

五月、上野戰爭に、父鎭八郎卍字隊に加盟して官軍に抗す。戰ひ敗れて脱走、後藩に自首し次いで入牢す。惹いて家族一同親類預けとなり、母の實家なる叔父平野章七郎宅に移る。是より先、父鎭八郎、異父兄常三郎等につきて四書の素讀を受けたりしが、引續き叔父より素讀を受け孟子二卷を上ぐ。傍ら寺小屋に通ひ千字文を習ふ。

明治二年

父鎭八郎出牢し、自宅謹愼を命ぜらる。同時に家族一同親類預けを許さる。

明治三年

五月、父、謹愼を許され、新運命開拓の爲出京。四谷坂町に荒物店を開く。

十一月、祖母に伴はれて父の許に至る。この頃家運頓に逼迫す。

十二月、父の緣故により田端の忠臺寺に引取らる。

明治四年

一月、忠臺寺より小石川一行院に移る。

四月、一行院より父の許に歸る。

五月、四谷の自宅と筋向ひなる刀鞘師の許に丁稚奉公をなす。

十一月、同じ町內なる煙草屋に奉公す。

明治五年

夏、丁稚奉公をやめ四谷仲町の小學校に入る。間もなく父、開拓使の役所に勤務することとなり、荒物店を人手に讓り、芝口三丁目に移る。ために芝櫻川小學校に轉校。當時下級に山田美妙、秀才の名を馳せつゝあり。

明治九年

夏、父歿し、九月、家督の異父兄常三郎歿す。殘れるは祖母、母及び弟七人、餘財なければ再び丁稚奉公を志す。

某日、舊外國語學校露語科給費生募集の掲示をみ、試驗に應募し及第す。

明治十年

この頃より學業の餘暇盛んに文學書を讀み、落語、講釋等を好む。小說にては特に馬琴、三馬、ツルゲーネフに傾倒し、心ひそかに小說家たらんことを思ふ。

明治十四年

春、長谷川辰之助（二葉亭四迷）と相知る。骨肉の愛を受けし叔父平野章七郎の死に逢ふ。英學者尺振八氏の知遇を得。

明治十六年

七月、外國語學校卒業。

十月、不本意ながら統計院に務め、統計年鑑の編纂に從事し月給十二圓を得。小說家志望は依然として棄てず。

明治十八年

歲暮、統計院廢止のため休職となる。

明治十九年

大藏省の收稅吏、又は海軍主計を志し受驗

準備に意を注ぐ。傍ら「日本運輸論」の著に取掛る。經濟學者たらんとも思へるなり。
夏、二葉亭四迷に、「廢したまへ、君の長所は小説だ、此樣な事に骨を折つたとて經濟學者では世に立てない、其より小説を書き給へ。」と忠告さる。次で四迷に伴はれて坪内逍遙氏を訪ふ。長谷川、坪内の兩氏のすゝめにより愈文壇への志動く。後、坪内氏宅の玄關番子となる。
十月、坪内氏より、氏の雅號春の舍おぼろに擬し、その弟分たるの意味にて嵯峨の屋御室の號を與へらる。
老師尺振八氏、母慶子等、小説家志望に手強く反對しその不興容易にとけず。
十一月、處女作「守錢奴の肚」坪内氏の助力にて發表の運びとなる。(二十年一月出版)

明治二十年

二月より「百人百感美人の面影」を「大阪浪花新聞」に寄す。
十二月、「ひとよ切」を金港堂より上梓。坪内氏宅を去り神田裏神保町の自宅にかへる。

明治二十一年

四月、「無味氣」を上梓。
十二月、「薄命の鈴子」を「大和錦」に寄稿す。

明治二十二年

一月、金港堂客員となる。『初戀』を「都の花」に發表す。
二月、『くされたまご』を「都の花」に發表す。
三月、「苦樂の鏡」「美人の面影」を上梓。
七月、『野末の菊』を「都の花」に發表。
八月、『流轉』を「國民の友」に發表。
十二月、『婿えらび』を「都の花」に發表。「小説家責任論」を「しがらみ草紙」にのせ、識者の傾聽するところとなる。金港堂客員を辭し、國民新聞社員となる。

明治二十三年

十月、『旅人』を「都の花」に發表。

明治二十四年

一月、『夢現境』を「國民の友」に發表。
三月、『空蟬』を「國民の友」に發表。
四月、『姉の弟』を發表す。
五月、「坂東武者」を「東京朝日新聞」に發表。
六月、『翁の昔語』『朧夜の夢』を「東京朝日新聞」に發表す。
九月、「花に嵐」を「東京朝日新聞」に發表。
十月、第一創作集「千草」を金港堂より上梓。
此年、一時職を朝日新聞社に轉ぜしことあり。初め赤坂丹後町に、後本郷動坂に住す。

明治二十五年

二月、「あぶないもの」を「都の花」に發表。
七月、「此夏」を「都の花」に發表。
九月、「黄八幡」を「都の花」に發表。
十月、「けふ此の頃」を「都の花」に發表。

明治二十六年

六月、「世相觀」「母の心」を「毎日新聞」に發表。
七月、『世の中』を「婦女雜誌」に發表。
十一月、「庭の教子」を「明治文庫」第四編に發表。

明治二十七年

二月、「國民大帝」を「明治文庫」に發表。
四月、「何處に」を「國民小説」に發表。
五月、「母心」を「明治文庫」に發表。
九月、「此かすがひ」を「早稻田文學」に發表。
十一月、「鐵道旅行」を「明治文庫」に發表。

明治二十八年

一月、「此馬鹿」を「家庭雜誌」に發表。
四月、「嫁形氣」を「家庭雜誌」に發表。
八月、「荒野の泊合」を「家庭雜誌」に發表。
九月、『奧の花嵐』を「國民新聞」に發表。
十一月、「浮世新聞」を「太陽」に發表。「その曙に」を「國民小説」に載す。

明治二十九年

四月、露西亜に赴く。某商會の漁業調査通譯としてなり。

九月かへる。

十月、第一創作集『文庫』を刊行す。その中に、「私の幼時」「いはぬ思」「去歳や今年」「彼誰歟」「西條山」「寂滅」「うはき者」『流毒花合』を收む。

又、『輪廻』を「文藝倶樂部」に發表。

十二月、『睡美人』を「文藝倶樂部」に發表す。

歳暮、國民新聞社を辭す。爾後諸方に下宿しつゝ著作にて糊口す。

明治三十年

二月、「一劍有響落花村」を「新小説」に、散文詩「中世武士」を「文藝倶樂部」に發表。

三月、文集『古反古』を上梓。

七月、「通例人の一生」を「新小説」に發表。

九月、新體詩『關東男兒』を「文藝倶樂部」に發表。

明治三十一年

三月、『歌劇走馬燈』を「文藝倶樂部」に發表。

四月、「海賊」を「太陽」に發表。

八月、「劍俠傳」を「文藝倶樂部」に發表。

九月、『樹寶山』(劍俠傳續篇)を「文藝倶樂部」に發表。

此年より翌年にかけ故山闗宿に寓すること約半歳、英語を獨學し、且つ内村鑑三氏の書を讀む。二回見神の實驗あり、熱烈なるキリスト教信者となり、年來の佛教的厭世思想をすつ。生涯の轉機也。

明治三十二年

八月、『罪の果』を「文藝倶樂部」に發表。

十一月、「心のみぞれ」を「太陽」に連載す。

十二月、「我家」を「文藝倶樂部」に發表。半自敍傳小説也。

明治三十三年

三月、『涙の谷』を「文藝倶樂部」に發表。

六月、『つまらぬ人』を「文藝倶樂部」に發表。

八月、「悔恨」を「新小説」に發表。

十一月、『美人と壯士』を「文藝倶樂部」に連載。

明治三十四年

五月、『浮世の潮』を「文藝倶樂部」に發表。

十一月、『轉業』を「文藝倶樂部」に發表。

明治三十五年

十二月、『浮世の嵐』を「新小説」に發表。

明治三十七年

一月、下總境の人小林とせ子と結婚。

日露開戰と共に大本營幕僚事務擔となる。露語の練達與りて力ありしなり。

七月、「律義者」を「文藝倶樂部」に發表。

十一月、「末の望」を「女學世界」に發表。

明治三十九年

一月、陸軍士官學校露西亜語教官となる。

三月、長男善吉生る。

明治四十一年

一月、『その正月に』を「新小説」に發表。

明治四十二年

九月、「くてん岩」を「帝國文學」に發表。

明治四十三年

三月、「妻の親切」を「新小説」に發表。以後創作の筆をとらず。

十二月、母慶子歿す。

大正十二年

九月、陸軍士官學校教官をやむ。

大正十三年

七月、代々木に十邑堂書店を經營、子女の教養につとめつゝあり。

昭和三年九月二十五日印刷
昭和三年十月　一　日發行

現代日本文學全集　第十篇

著者　長谷川辰之助
著者　矢崎鎭四郎

發行者　山本實彦
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番
一一二二番
一一二三番
一一二四番

株式會社秀英舍印刷